

神宮司廳藏版

古事類苑

法律部二

古事類苑刊行會

神宮司廳藏版

古事類苑

法律部二

古事類苑刊行會


LIBRARY
MAR 23 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

古事類苑

法律部第二冊目錄

法律部四十七

下編上

犯姦

古事類苑

法律部三十一

下編上

法律總載

古事類苑

法律部三十一

下編上

法律總載

德川幕府ノ時、違勅ノ例ハ甚ダ尠シ、此ニ其一例ヲ掲グルニ過キズト雖モ、是レ亦直ニ勅命ニ背キシニアラズ、

僧尼ノ犯罪ハ、其職務ニ照シテ別ニ常律ヲ以テ論ゼザルモノアリ、女犯竊盜、謀書、謀判、博弈等ノ如キハ、其戒律上ニ於テ必ズ犯スベカラザルモノナレバ、特ニ其刑ヲ重クシ、慈善ハ其本分ナレバ、慈善ノ意ヨリ出デヽ刑網ニ觸ルヽガ如キハ、多クハ寛宥ニ從フノ類是ナリ、

盲人ハ、重罪ノ外ハ大抵座元、長吏、總錄等ノ輩ニ付シ、其慣例ニ由リテ處分セシム、

穢多非人ノ犯罪者ヲ處分スルモ亦重罪ノ外ハ、大抵穢多頭ニ付ス、

狂疾愚昧者ハ、其犯罪ヲ論ゼザル例ナレドモ、甚シキ重罪ヲ犯スモノハ處刑セシ例モ往々アリ、

婦人ノ犯罪ハ、男子ニ比スレバ其罪ヲ輕クスル例ニテ、幼者モ亦之ニ准ゼリ、

緣坐ハ、其近親ノ罪ニ坐スルヲ云フ、卽チ士分ハ、切腹獄門等ニ處セラレタルモノヽ子ハ追放ニ、死罪ニ行ハレタルモノヽ子ハ遠島ニ處セラレ、庶人ハ主殺親殺ヲ犯セル等ノ者ノ子ハ罪セラルヽノ類是ナリ、

連坐ハ、當時其管轄地ノ町村内ニ於テ犯罪者アルトキハ、其家主、五人組、及ビ名主、組頭等、皆

其罪ニ坐ス、但シ其罪輕キハ連及セズ、

此他共犯者ノ處分、重犯者ノ處分等、率ネ上世ト其旨ヲ同ジクス、

舊惡十二ケ月ヲ經タルモノハ、之ヲ問ハズ、但シ弑逆、殺人、放火、強盜等ハ必シモ然ラズ、

違勅

〔百一錄〕享保六年二月十五日、賀茂社司召于二條、森飛騨、神主職　鳥居大路右京、梅辻備後守、松下民部、口野森右京男追放、右之輩、去年違背于勅命、依之去年六月十三日閉門被仰付、今被流罪追放、依恣肆忘其分限矣、吐雅意、累代社職被召放、解却官職、滅亡其家、可謂自造禍不可遁、

武士犯罪

〔享保令典永鑑四十三〕寛永十八巳年四月十九日

渡部彌之助歩行同心屋敷之前ニ、竹柴等立置商買仕體、昨日酒井讃岐守下屋敷之邊御成之節、上覽樣子被遂御穿鑿之處、彌之助歩行同心也、不寄何事商買仕候儀、前廉御法度被仰出之處、如此之體、曲事被思召之間、雖可被行死罪、爲步行之者之儀之間、御追拂也、右之趣御弓御鐵砲之頭中、殿中江招之、何茂常々不念ニ依申付之、

右之趣也、向後能々可申付之旨上意之通、朽木民部少輔、三浦志摩守被傳之、

〔三餘雜錄二〕明和四亥年十一月十三日

右近將監殿　　大炊頭、大隅守江御渡、

三奉行江

御家人押込に相成候科之もの、數日揚り屋へ入候に付、咎可申付候得共、令宥免咎之沙汰に不及旨申渡候も有之、無其差別咎可申付候も有之、區々ニ而候、向後御家人之分は、數日揚り屋へ入り候共、無其差別咎申付候方ニ可被心得候、尤以來不紛樣に可被致候、

十一月

僧尼犯罪

〔科條類典下四〕破戒之僧御仕置之儀ニ付申上候書付

大岡越前守

破戒女犯之僧御仕置、先例逆罪同前、前々ゟ江戸中引廻し磔罷成候、破戒一通り之者は、脱衣追放、又は遠島被仰付候而も、差而御仕置のゆるみに相成候筋も無御座候、女犯之儀ニ付、人殺候歟、或は女犯ニ而格別重科巧事等致し候類は引廻し磔被仰付可然奉存候、今度万隆寺破戒仕、不届には候得共、法中之掟を背候科計ニ而、公儀江對し候儀無御座候間、脱衣追放歟、又は遠島可被仰付候哉、存寄候儀故奉伺候、

右之通被仰付候、於向後御仕置之定例ニ仕候、評定所一座江も評議仕候處、何れも右之通可然旨申候、

十二月 ○元文三年

〔政談秘書 一〕天明四辰年二月十日、小笠原佐渡守様御留守居十河郷右衛門、堀田相模守様江差出候處、同十九日以御附札被仰越候、

一御朱印無之寺院吟味之節、鋪居外江差置候て不苦哉、

御附札

御朱印有無ニ不拘、吟味之筋に依て、敷居外ニ差置不苦候、

一寺院謀書謀判致候御咎之儀、承知仕度候、

寺院謀書謀判致候者、俗人同様御取計不苦候得共、其品ニ寄可申候間、兼て難及御挨拶候、

一寺院咎之筋ニ寄、脱衣申付候ても不苦哉、

一寺院咎之筋ニ寄、脱衣可申付候得共、本寺觸頭江相斷候上取計可申哉、

寺院咎之筋に寄、本寺觸頭江御斷之上、脱衣申付不苦候、

一寺院吟味之節者、重キ仕置申付候節、日切時脱衣之上、縄掛入牢申付、追而本寺觸頭江相斷可申

哉、

重咎筋及白狀入牢申付候節は、袈裟を取、入牢爲致候儀にて、脫衣とは不申、脫衣と申者、咎之名目ニて脫衣申付候上、其法用公用不相成候事ニ候間、脫衣御申付候節は、本寺觸所江御斷之上、御申付候方と被存候、

一寺院繩目ニ申付候上は寺院同道不及、白洲ニて吟味可仕候哉、

入牢御申付候は、咎寺院不及同道、未咎不相決候は、白洲にて吟味不相成候、

一寺院重咎申付候節、脫衣入牢申付候上にて、死罪申付可然候哉、

死罪御申付不苦候得共、其咎に寄可申候間、兼て難及御挨拶候、

一寺院身分之働き、御咎申付候節は、本寺地頭、又は遠方御座候はゞ、觸頭江相斷可然哉、本寺江相斷候得共、觸頭江斷ニ及申間敷候哉

寺院身分働候程之咎は、本寺觸頭江御斷候方と被存候、

一寺院吟味之節、同道之僧、同末寺無之候はゞ、同宗之寺院同道、申付可然候哉、

寺院吟味之節、同道之僧末寺無之候はゞ、同宗之寺院同道不苦候、

一同宗之寺院領分ニ無之節は、他宗寺院江同道申付候ても不苦候哉、

同宗之寺院最寄無之候はゞ、組合は格別、他宗同道は難申付筋ニ候之間、其時之村役人等差添申付候方と存候、

〔政談秘書〕一天明五巳年十二月五日、井上河內守様江左之通伺差出、領分寺院にて、博弈之沙汰御座候はゞ、承糺候上、役人差遣、不埒之者集居候はゞ、召捕吟味仕候心得ニ御座候、且又御朱印地之寺院にて、右體之儀御座候はゞ、慥に承糺候上、無案內役人差遣、不埒之者、召捕候ても不苦儀に候哉、御朱印地之儀にも御座候間、此段御問合申上候、以上、

石川若狭守家來

松本武右衛門

十二月五日

御附札

御領分寺院にて、博弈之沙汰有ㇾ之候は、、御朱印地にても、並地にても、先住持御呼出し之上、御糺有ㇾ之、申口次第にて、咎輕重有ㇾ之義にて、尤博弈打候者は勿論宿致候者も、重キ御仕置候間、宿致候寺院、御糺有ㇾ之方と存候、博弈沙汰而已にて、無ㇾ案內ㇾ寺院江踏込候て召捕候儀は、時宜に寄可ㇾ申候間、兼て難ㇾ及ㇾ御挨拶ㇾ候、

〔御書付留〕寛政六寅年、京都町奉行伺、笹屋町足打源四郎事、彌兵衛博弈宿取いたし候一件、御仕置評議之內、樂人御仕置之儀に付、同七卯年八月十八日、對馬守殿、秋山松之丞を以、一座江御渡被ㇾ成候御書付、

樂人多豐後外貳人御仕置之儀、御朱印配當米等有ㇾ之故を以、遠島と被ㇾ申聞ㇾ候得共、御朱印寺領有ㇾ之僧侶も、都而御仕置無ㇾ差ㇾ別例に候上者、博弈ニ限り、重く可ㇾ申筋無ㇾ之候間、多豐後外貳人中追放申付候、向後寺院茂御朱印地之有無ニ不ㇾ拘、相當之御仕置可ㇾ被ㇾ申付ㇾ事、

〔諸家糺明問答〕寺院取扱

寛政十二申年、御勘定奉行石川左近將監江問合、〇中略

一右揚屋入申付候節者、三衣を爲ㇾ脫役所江取揚置、仕置申付候後、綸旨同樣取計候筋ニ御座候哉、

御附札

御書面、揚屋入御申付候節者、三衣を爲ㇾ脫被ㇾ取置、仕置之次第ニ寄り、其節後遣候歟、又者取揚切ニいたし候事も可ㇾ有ㇾ之候間、右者其度々御問合可ㇾ然哉ニ存候、

〔御仕置例類集二ノ四〕文化四卯年御渡

大久保安藝守伺

一所化僧博弈御仕置之儀ニ付評議○中略

此儀評議仕候處、女犯又は人殺之御仕置は、寺持之僧と所化僧之差別有レ之候儀ニ付、博弈御仕置も差別無レ之候而は、相當仕間敷間、寺社奉行申上候外、先例は差當相見不レ申候得共、御定書に、同宿體之僧、人を殺、或は疵付候科、俗人ニ替り無レ之、但寺持は一等重可二相伺一と有レ之に見合、所化僧之分は、寺持僧博弈致し候御仕置之例、脫衣中追放ゟ一等輕く、伺之通、脫衣江戶十里四方追放ニ而相當可レ仕、尤廻り筒博弈三度以上いたし候節は、三度以上廻り筒致し候もの中追放之御定にて、寺持所化僧之無二差別一脫衣中追放ニ而相當可レ仕哉ニ奉レ存候、

卯十一月

〔政談秘書　一〕文化八未年十月、寺社奉行阿部備中守樣江御問合御附札、本文略

御附札

書面幷別紙書付令二一覽一候、領分寺社共、不埒之儀有レ之、吟味之上仕置被二申付一候儀は、御朱印地、宮門跡方直參之差別は無レ之候間、兼て本山江不レ及二掛合一、仕置御濟候科之次第、御通達有レ之可レ然存候、且寺法ニ拘候義は、領分限糺にて事濟候儀も有レ之間、其時ニ當り委細御申聞無レ之候ては、難レ及二御挨拶一候、

大村上總介樣

〔諸家紀明問答〕文化十年九月七日、町與力中嶋三郎右衞門へ面會、口上ニ而承合、口上ニ而答之趣、

○中略

一出家○中略

一衣を取、袈裟をば爲レ懸候之ケ條、無レ之事ニ候由、

一出家社人等、御吟味中、揚屋江遣候節は、白洲へおろし、法衣を取、縄懸ケ、途中は駕ニ而遣候、又々呼出之節、同斷、白洲江出し、御吟味之節は、椽側江上候事之由、

一六十六部、何茂子細無之、雑人之取扱ニ御座候由、

一虚無僧は、矢張出家之取扱之由、

〔御仕置例類集一ノ一〕文政元寅年御渡

火附盗賊改渡邊孫左衛門伺

一所化盗致し候を、自分にて相濟せ候住持御咎有無之儀評議、

去月三日、評議仕申上候、渡邊孫左衛門相伺候、當時無宿活道儀、盗可致と長安寺一箭江疵爲負候一件之内、右一箭、盗物を内證にて取戻候後、活道江暇遣し候事ニ候間、盗もの内證ニて取戻候御咎附候て可然哉之旨、御尋御座候、此儀御定書ニ、盗人を召捕、雑物取返し、内證にて逃し遣候もの、當人名主叱り、但死罪に可成盗人を内證にて逃遣し候はゞ、名主當人輕キ過料と有之候に付、活道盗いたし候儀を不訴出段、如何に御座候間、先例を以相糺候處、寛政七卯年、曲淵先甲斐守、御勘定奉行勤役之節相伺候、無宿海雲盗致し候一件之内、甲州草鹽村曹洞宗宗傳寺海禪義、居間ニさし置候金子衣類等、弟子海雲盗取候處、不便ニ存、其儘致し、勘辨致し候段、如何には候得共、幼年ゟ育候弟子之悪事、申立候も不便ニ存候は、出家之儀、無餘儀相聞、不埒とも難申候間、御咎之儀は、相伺不申段、朱書ニ申上候例有之、尤例之海禪は、幼年ゟ育候弟子之儀、殊盗物も取戻し不申、今般之活道は、一箭之弟子には無之、其上盗物も取戻し候得ば、所化に差置候ものの之儀に付、幼年之弟子に無之候とも、其者の悪事申立候段、不便に存候は、出家之儀、無餘儀筋に可有御座、寶暦十二午年、松平先々和泉守、寺社奉行勤役之節、伺之上御仕置申付候、元赤羽根圓明院方ニ罷在候、其後高野學侶在番親王院方居候所化教遍儀、親王院留守ニ長持之鍵を竊

筒より取出し錠を明ヶ金百貳拾兩盜取欠落いたし、馴遊女を買上候段、出家の身分にて、重々不屆至極に付、晒之上、死罪可申付處、親王院圓明院、助命之儀相願候に付、脫衣重追放に相成、右之通弟子に無之所化取迯いたし候而も、助命の願相立候に見競候得ば、弟子に無之所化之惡事を不訴出候共、出家之儀に付、御咎附候にも及び申間敷哉に奉存候、

寅六月

〔吟味伺進達留二ノ百八十七〕谷中常在寺日仁儀、不如法之趣相聞、風聞爲相糺候處、相違無之候ニ付、呼出吟味仕候趣、左之通御座候、

谷中　日蓮宗常在寺

日仁

此常在寺日仁儀、寺院取締之儀に付て者、兼て嚴重之申渡茂有之候處、淸僧殊一寺住職之身分にて、新吉原町、又者淺草花川戶邊に假宅罷在候遊女屋江罷越、遊女買揚、猶新吉原江戶町貳丁目勇次郎地借總助方江茂立越、同人抱遊女紅梅を買揚、遊興之上、度々及女犯候始末不屆に付、御定之通遠島可申付哉之段、相伺可申處、病死仕候、

未三月（安政六年）七日揚屋入
同月廿五日病死

右之もの吟味仕候處、能州一ノ宮村礒右衛門次男にて、幼名次郎と申、拾歲之節、同國瀧谷村妙成寺日海弟子に相成、出家いたし當名に相改、追々修學之上、貳拾六歲之節、武州彌五郎新田淸亮寺住職ニ相成、追々轉住之上、去ル亥年○嘉永四年七月中、當寺江住職致し罷在候、去ル辰年○安政三年七月頃と覺、用事有之立出候途中、酒飲醉與ニ乘じ、淺草花川戶邊に假宅罷在候、名前不存遊女屋江立寄、又者月日不覺新吉原町遊女屋江立越、遊女買揚及遊興、猶又去午○安政五年三月以來、同前江戶町貳丁目勇次郎地借總助方江茂罷越、同人抱遊女紅梅を買揚、遊興之上度々及女犯候儀ニて、尤醫師體ニ仕成、僧侶之段者、深押包罷在候儀之旨申立候ニ付、右始末不屆之段、吟味詰候處、無申披誤入

候由申立候、然ル處病死仕候、

朱書 本文遊女紅梅、并同人抱主總助をも呼出相糺候處、日仁申口と符合仕、同人者淸僧にて、女犯不相成身分之段者、今般吟味ニ付承候儀之旨申立、不埒之筋相聞不申候、

右吟味仕候趣、書面之通御座候、御仕置之儀、黄紙附札を以、相伺申候、

未三月　　水野左近將監掛

谷中日蓮宗常在寺

日仁

存命ニ候得ば遠島　病死

〔科條類典下四〕淺草万隆寺現住光圓御仕置相伺候書付

大岡越前守

國府臺 總寧寺

越生 龍穩寺

富田 大中寺

右三ヶ寺訴出候は、淺草万隆寺現住光圓儀、不埒者ニ而、從本寺加州大乘寺退休出寺申付候得共、違背仕候、光圓住職不埒故、堂及大破候、關三ヶ寺ニ而吟味願候旨、從本寺使僧差越候ニ付、於三ヶ寺遂吟味候處、光圓不埒不行跡之儀共有之候得共、畢竟一宗之外聞如何ニ付、法中之仕置ニも可申付處、光圓以巧言三ヶ寺申付をも違背仕候に付、於奉行所詮議願候旨申ニ付、大乘寺役僧崇法と申者をも呼寄相尋候處、万隆寺旦方之内拾三人ゟ、光圓住職不埒之旨書付差出候、右拾三人之内、南茅場町野間屋甚四郎手代傳七と申もの方に光圓逢候新吉原町遊女之方より之文有之、惡所江參候證據爲見候間、致詮議候處、左之通御座候、〇下略

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

寛保三年極追加
一盲人御仕置
遠島追放等可成科は、親類江預ケ、居村外、猥に徘徊致間敷旨可申付事、
從前々之例
一座頭御仕置
惣録江科之次第申付、座法に可申付旨申渡、

〔評定所格例〕座頭、御仕置之事

安永八亥年十一月

座頭共御仕置之儀ニ付一座評議書上

當八月七日御渡被成候、座頭御仕置之儀ニ付、曲淵甲斐守、幷惣録江御尋之上、差上候書付之通、死罪以上ハ、公儀御仕置ニ相成、振候儀も無之哉、且又死罪以下之科ニ而、惣録江引渡候節、咎之當り惣録出し候書付之趣ニ而、不相當之儀も無之哉、評議仕候趣、左之通ニ御座候、

一座頭御仕置之御定ハ、惣録江科之次第申聞、座法ニ可申付旨申渡と有之、死罪以上以下之差別者無御座候得共、惣録申立候趣ニ而ハ、死罪以上ハ、盲人之力に及不申候ニ付、公儀御仕置相願候由ニ付、死刑以上之者ハ、於公儀御仕置申付候方ニ可有御座候、尤非人御仕置之儀も、御定書ニ、穢多彈左衛門江渡し、相當之仕置可致旨申渡と有之候得共、遠島以上ハ、公儀ニ而御仕置被仰付、遠島以下ハ、彈左衛門江渡し、相當之仕置申付候様申渡、引渡遣し候間、旁座頭ども、御仕置之儀も、死罪以上ハ、公儀ニ而御仕置被仰付、振候儀ハ有御座間敷哉ニ奉存候、尤右之趣ニ而ハ、座頭共も、遠島以上ハ、公儀御仕置ニ被仰付候而も可然哉ニ候得共、盲人之儀故、島江遣し候而ハ、一向渡世相成申間敷候間、前書之通、死罪以上、公儀御仕置被仰付候方可然哉ニ奉存候、

一死罪以下ニ而も、公儀御仕置ニ相成候例も御座候得共、時宜ニもより可申候間、死罪以下ハ、御定之通、座法ニ可申付旨申渡、惣録江引渡可遣儀ニ御座候處、今般惣録差出候書付之趣ニ而ハ、座法之仕置極り候儀無御座、其時々職十老等之評議ニ而、申付候事と相聞、區々ニ相成候間、惣録差上候、座法仕置はケ條之趣評議仕候處、一體盲人之儀故、追放構場所等、武家出家等之構國

ニ而ハ、住所相定候儀も相成兼可申哉檢挍勾當ニ而も、闕官申付候得ハ、無官之座頭ニ御座候間、百姓町人之構國ニ而、闕所之品を以、重中輕相分可然哉、併町人百姓と違、琴三味線針治導引を以渡世仕候故、御當地ハ、勿論、京大坂等徘徊いたし候而ハ、高位之者江之交り、咎請候身分ニ而不相當之儀も可有御座哉ニ付、武藏一國之外、山城大和攝津抔ハ、輕重ニより徘徊差留可然哉ニ奉存候、依之惣錄差出候書付江、朱書ニ而評議之趣左ニ申上候、

惣錄差出候書付

一遠島之儀ハ、舊例近例ニ隨、告文裝束取上、闕官不座申付、三ヶ津相構、追放仕度候品ニ寄、生國或ハ貳ヶ國三ヶ國外ニ相構候儀に可有御座哉之段申上候、

朱 此儀遠島ニ當り候刑ハ、親類江永く預ケ、押込置可然候得共、御當地抔江ハ國々より修行ニ罷出、段々出世仕、身上持罷在候檢挍勾當座頭共多、勿論多分ハ親元輕キ者共ニ可有御座候間、右之通ニ而は惣錄之取計ニハ行屆申間敷哉ニ付、告文裝束取上、闕官不座申付、江戸拾里四方、武藏一國、幷山城大和和泉攝津、且生國惡事いたし候國を構、追放申付可然哉、

但當人名前之田畑家屋敷家財闕所

右同斷

一重追放ニ相當り候者ハ、檢挍ニ御座候ハヽ、座を引下ゲ、今日檢挍ニ申付、其上江戸拾里四方、幷生國京大坂構可申付奉存候、

一勾當以下之者ハ、今日ニ申付候而も、闕官仕候得バ、咎之詮も無御座候間、座ニ拘り不申、江戸拾里四方、京大坂、幷生國相構、追放仕度奉存候、

朱 此儀檢挍勾當以下共、告文裝束取上、闕官不座申付、江戸拾里四方、武藏一國、幷山城攝津、且生國惡事之國を構、追放申付可然哉、

但闕所同斷

右同斷

一中追放ニ相當候者、江戸拾里四方、京大坂相構、追放仕度奉存候、

朱 此儀告文裝束取上、闕官不座申付、江戸拾里四方、武藏一國、并生國惡事之國を構、追放申付可然哉、

朱 但當人名前、田畑家屋敷闕所家財無構、

右同斷

一輕追放之者ハ、江戸拾里四方相構、追放仕度奉存候、

朱 此儀告文裝束取上、闕官不座申付、江戸拾里四方、并生國惡事之國を構、追放申付可然哉、

但田畑計闕所

一江戸拾里四方追放ニ當り候刑ハ、日本橋より四方江五里宛、并生國之居村を構、追放可申付候、

一江戸拂ニ當り候刑ハ、品川、板橋、千住、本所、深川、四谷、大木戸より內、并出生之村、惡事之村を構、追放、

一所拂ニ當り候刑ハ、在方之者ハ居村、江戸之ものハ居町を拂可申候、

右ハ奉行所ニ而吟味之上、仕置之儀、座法ニ可申付旨申渡、引渡候節ハ書面之通相心得、右之外公儀江不拘、仲ヶ間仕置之儀ハ、夫々先例等を以可申付候、勿論書面之通極置候而も、其科之品ニより、遠島以下之刑ニ而も、公儀御仕置ニ申付候儀も可有之候、右之趣、職十老江早々申遣、以來之規矩ニ可致旨、總錄江被仰渡可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通ニ御座候、御渡被成候書付六通返上仕候、以上、

亥十一月

右書面松平右京大夫殿江致進達候處、申上候趣惣録江被仰渡、三奉行も、右之通相心得可申旨被仰聞、

〔憲教類典借金四ノ二十五〕去戌十二月廿五日町奉行所より御引渡ニ相成候者共

松浦檢校

鳥山檢校

神山檢校

川西檢校

梅浦檢校

相馬檢校

松岡檢校

栗澤勾當

志田都

千代野都

本所惣録

三澤檢校

申渡

右拾人之者共、高利金貸、并不法之致催促候ニ付、官金闕所被仰渡候、且又鳥山儀ハ、身分不相應之奢致し候ニ付、三ヶ津、并生國遠江迄御構ニ候、〇中略

右申渡相濟、手代共罷出候而、官職之許狀取上、衣脫せ、壹人前編笠壹かい、竹杖壹本、鳥目貳百文ツヽ相渡、手代役兩人宛付添、日本橋ゟ北之方淺草邊ニ住居罷在候座頭共ハ、品川鈴之森ニお

ゐて杖取上ゲ、ぐる〳〵廻し致し、つき放し申候、日本橋ゟ南之方芝邊ニ罷在候座頭共は、千住におゐて杖取上、ぐる〳〵廻し致し、つき放し申候、

亥二月〇安永八年九日　町奉行池田筑後守掛

長谷川町次兵衛店　廣都

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政六寅年五月

松平伊豆守殿御差圖

一長谷川町廣都及ニ不法ㇾ候一件

右之もの儀、西崎右膳口入ニ而、水野壹岐守家來田嶋武左衛門江用立候金子ハ平助ゟ預り置候金子ニ有ㇾ之處、官金證文ニ致、其上武左衛門不埒有ㇾ之、主人方ニ而蟄居申付、其後永之暇出候儀承、右貸金取立相成間敷、屋敷役人江懸り難澁申掛、可ㇾ爲ニ取扱ㇾ旨、右膳申聞候ニ馴合、不法之儀とハ乍ㇾ存、品々事六ヶ敷申懸、剩留守居役之者相手取、屆書又ハ箇條書ヲ以、屋敷之家風承り度抔、不埒之書面等差出、難澁申募、巧成いたし方、對ニ武家江ㇾ及ニ法外ㇾ候段、不屆ニ付、重追放と可ㇾ相伺ㇾ處、座頭之儀ニ付、座法之通可ㇾ申付ㇾ旨申渡、捻錄江引渡、

〔御仕置例類集二ノ二十五〕享和二戌年御渡

駿府町奉行伺

一駿州江尻入江町太兵衛宅ニ而、博弈致し候一件、

酒井大内記知行駿州有渡郡長崎村

初音都

右之もの儀、去酉十一月中、江尻入江町佐兵衛方、無盡會有ㇾ之罷越候處、仙吉任ㇾ申、相應之骨折、錢可ㇾ申請ㇾ心組ニ而、孫兵衛同道致し、太兵衛方江集、御法度相背、賭高凡貳三百文位ゟ貳貫四五百文迄之廻り筒ニ而、ちよぼ一と唱候、博弈致し、凡拾貫文程之取引致し、尤惡鑒用候儀ハ不ㇾ存、爲ニ骨折ㇾ祝

般より三百文貫請候段不屆ニ付、重敲可申付處、盲人之儀ニ付、座法可申付旨、座元江引渡
此儀惡鑒用候儀ハ、不存、骨折錢貫請候不埒も御座候得共、廻り筒ニ而博弈致し候段、重々不屆
ニ付、去ル寅年之御書付ニ見合、祖般ゟ貫請候錢取上ゲ、重敲可申付處、座頭之儀ニ付、科之次第
を申聞、座法ニ可申付旨、惣錄江引渡、

〔科條類典下七〕御仕置仕形之事

寛保三亥年九月

加藤太郎左衞門知行武州多摩郡矢之口村百姓藤兵衞次男

盲人　意伯

亥六月六日入牢相煩同七月廿一日溜預ヶ申付候

此意伯儀、重キ申掛いたし、無跡形僞之儀を兩度迄御箱訴仕、不屆至極ニ付、重キ追放可被仰付候
哉、盲人之儀ニ御座候間、親類呼出相渡、御構場所ニ差置申間敷旨可申渡候、

亥九月

御下知書

木下伊賀守江

加藤太郎左衞門知行武州多摩郡矢ノ口村百姓藤兵衞次男

盲人　意伯

右之者親藤兵衞江引渡、居村之外、猥ニ徘徊不仕候之樣ニ申付、重而僞事いたし候はゞ、重科可申
付旨可被申渡候、

〔新張紙留〕一無宿盲人御咎は檢挍勾當抔江引渡、座法之通爲取計候得共、無宿瞽女之儀は、御咎申
付追拂候事、

朱書
但酉九月青山九八郎より、無宿瞽女御咎之儀相伺候節、寺社奉行江懸合之上極ル、

深谷遠江守殿　　戸田日向守
牧野備前守殿　　深谷遠江守

文化十酉年、一座江御下ゲ被成候、堺奉行相伺候、無宿盲人次兵衛、僞之往來手形を以、村送ニ相成候一件、御仕置評議之節、非人乞食之類は無之無宿盲人、不屆有之候もの、諸奉行所幷遠國城下陳屋等ニ而、糺之上座法之通可申付旨申渡、其所若檢挍勾當不罷在候ハヽ、最寄在名以上座元抔之類江引渡、差支之筋無之哉之段、御先役方より捴錄吉川檢挍江尋有之、京都十老江も申遣候上、無差支旨申立候ニ付、次兵衛儀、堺兩鄕拂可申付處、盲人之儀ニ付、座法之通可申付旨申渡、其所之檢挍勾當江引渡、若檢挍勾當不罷在候ハヽ、最寄在名以上座元抔江引渡可申旨被仰渡可然哉と申上、其通相濟候後、手限吟味物之內、無宿盲人ニ而、不屆有之候ものは、科之次第申聞、座法之通可申付旨申渡、捴錄等江引渡遣申候、無宿瞽女之儀も、右次兵衛評議之趣を以取計、差支之儀有之間敷哉否承知いたし度、此段御問合仕候、以上、

亥七月

御書面之趣令承知、無宿瞽女引渡之儀、捴錄相糺候處、御府內幷在方住居之瞽女ども、檢挍座頭等之弟子ニ成、琴三味線稽古いたし候分、其師匠より藝能之免狀ハ差遣候得共、右ハ座法ニ拘リ候儀ニ無之、前々仕來ニ而、配當錢差遣候分も有之候處、右等之無差別、都而瞽女は支配ニ無之候ニ付、たとへ不埒有之候とも、差構不申候間引請兼候由、尤文化十酉年より無宿盲人を引請候得共、右ハ安永文化之度御觸以來、琴三味線針治導引等之藝業ニ携リ候盲人共、檢挍之支配ニ相成候故、無宿ニ而も座法ニ申付候旨申立候、尤瞽女之儀ハ、盲人之御定も有之候間、追放ニハ申付兼候哉ニ候得共、座法ニ而ハ、矢張追放刑も申付候事故、追拂候迄、右御定ニ差響候儀

も有之間敷、右體今般之瞽女ハ、總録難引請旨申立候上ハ、通例無宿之取扱ニ而、直ニ咎被申付候方ニ可有之哉、猶御勘辨之樣存候、右ハ牧野備前守御役替ニ付、拙者より御挨拶および候、

子十一月　　戶田日向守

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政五午年御渡

町奉行筒井和泉守伺

一神田九軒町代地忠兵衞初筆、高利金貸附候一件、

麴町壹丁目彌八店 盲人 久都
外 貳人

右之もの共儀、高利之金子貸申間敷旨、前々ゟ御觸有之處、證文面ハ拾五兩又ハ貳拾兩壹分之積ニ認、返濟方ハ三四ヶ月限ニ取極、所々江貸附、久都儀、內實ハ壹兩貸渡候ものより、貳百文宛禮錢貰受、毎日百拾六文ツヽ、六十三日ニ成崩し、都合七貫三百四拾八文受取、城吉、城春儀も、內實ハ拾兩ニ付壹分之積ニ而、壹ヶ月前利引落、禮銀拾兩ニ付五匁受取、右禮銀錢を利分江差加候得バ、久都ハ七兩貳分、城吉、城春ハ、九兩ニ付壹分之利足ニ相當、右體高利之金子貸附、德用取候段、三人とも不屆ニ付、重追放可申付處、盲人之儀ニ付、座法之通可申付旨申渡、總録江引渡、

〔御仕置例類集二ノ二十五〕文化十酉年御渡

堺奉行伺

一無宿次兵衞、僞之往來手形を以、村送り相成候一件、

無宿 次兵衞

右之もの儀、旅行中病氣差發、行倒候節之ため、往來手形所持致し候はゞ可然旨、勘太郎申聞候迚、同人相賴、宇兵衞認候往來手形ニ勘太郎所持之印形を押、相渡候を持參、西國四國順拜之上、肥後國ニ而行倒候節、僞之居所申聞、長承寺村迄、村送ニ相成罷越候段、不屆ニ付、泉州拂可申付哉之旨可相伺ものと奉存候得共、盲人之儀、其上親類等も無御座候間、長吏共江引渡、猥ニ徘徊爲致間敷、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一非人御仕置

但遠國非人は、其所穢多頭江仕置申付候樣申渡、　穢多彈左衛門江渡、仕置に可致旨申付る

〔御定書例書〕非人虛無僧を打殺候御仕置の事

延享三寅年十月御仕置の例

下總國下高井村　非人　三助

同　五兵衛

此三助儀、同國臺宿村へ物貰に參候所、虛無僧霞隨修行に參掛、名主五郎兵衛方にて及口論、霞隨儀、尺八を以、三助頭を敲疵付候處、五郎兵衛留守故、父文右衛門罷出、霞隨不埒の旨申、三助をも叱り候處、傍輩非人五兵衛參り、霞隨宿、下高井村へ參、譯可立旨申之、霞隨を連行候迚、臺宿村はづれにて、三助五兵衛兩人、木刀を以霞隨を打殺、死骸川へ捨候段、非人の身として別て不屆に付、三助は口論の相手ゆへ死罪、五兵衛儀は、手傳の儀に付遠島可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔御仕置例類集二ノ三十〕文化元子年御渡

火附盗賊改間宮友三郎伺

一芝新網町源次郎方ニ居候平吉初筆、非人之身分を紛し、構場所江立入、又は博奕いたし候一件、

穢多頭彈左衛門支配所、武州豐嶋郡赤塚村長吏小頭源左衛門手下、
同所非人小屋頭藤八抱非人ニ而、欠落いたし候、當時芝新網町金七
店、源次郎方ニ居候、　平助事　平吉

右之もの儀、敲之上、江戸拂相當、穢多頭彈左衛門江引渡相成候後も、惡事不相止、彈左衛門方ニ而、申渡候構場所江立入、其上非人之儀押隱し、自分は身を紛し、知人之方、世話ニ成罷在、千住在本所東郡村名不覺、畑中野田等ニ而、百姓又は商人體之もの五六人、或は七八人手合ニ加り、廻り筒ニ

而五拾錢百錢賭之籤博奕數度いたし候段、不屆ニ付、中追放可申付處、非人之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、穢多頭彈左衛門江引渡、

〔御仕置例類集二ノ三十〕享和三亥年御渡

御勘定奉行石川左近將監伺

一讃州小豆島之內、池田村瀧水村外壹ヶ所江盜賊押込候一件、

柘植又左衛門元御代官所讃州小豆島之內子位庄村　穢多　利平次

吉五郎

右のもの共儀、善助盜いたし候依科入牢致シ、其外之もの共、一同牢拔いたし候段乍相辨、善助は弟、又は隣家ニて懇意ニ候迚、夫々相談之上、同類共一同隱し置、其上食物持運遣し、利平次は、路用無之故、衣類質入いたし、代錢持參り呉る樣、善助任申、其段同人女房さん江申談候節、御代官手代罷越、廻村いたし、善助其外之もの共行衛相尋候を不存段申紛、吉五郎は、仙助任賴、牢拔之もの共行衛、領主ゟ御探尋之趣、善助江爲告知候始末、一同不屆ニ付、兩人とも重追放可被仰付哉之段可奉伺處、穢多之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、其所之穢多頭江引渡、

此儀善助其外同類共を隱置候段は、前書彌五郎同樣ニ候得共、此もの共は、兄又は隣家之儀ニ付、御仕置可弛筋有之間敷候間、伺之通重追放可申付處、穢多之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、其所之穢多頭江引渡可申、

朱書
評議之通濟

〔御定書例書〕當坐口論の上百姓を打殺候穢多御仕置の事

延享三寅年十一月御仕置の例

備中國吉田村　穢多三郎兵衛悴　龜太郎

此龜太郎儀、同國關戸村百姓吉右衛門と、米代幷質物取引の儀に付及口論庭に有之候石を吉右

衞門に打付候處、當り所あしく相果、不屆に候間、下手人可相伺者に候得共、穢多の儀候間、死罪申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政七卯年四月

安藤對馬守殿御差圖

町奉行 根岸肥前守掛

一作州大久保村ニ而捕候無宿清藏盜致し候一件

土井大炊頭領分作州久米南條郡小原南村

穢多 喜左衞門

右之もの儀、無宿清藏を差押、盜賊之段申候を、其筋江可訴出心付も無之盜物取戻、被盜主相尋可引渡と存、逗留爲致置、相糺候得共、賣先等も不相知候ニ付、追拂遣、其後同人儀、右爲禮衣類持參候處、一旦相返候得共、庭ニ差置歸候迚、其儘着用ニ致候始末不屆ニ付、所拂可申付處、穢多之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、其所之穢多頭江引渡、

右御仕置附

右天明八申年、評定所一座江評議ニ御下被成候、山田奉行相伺候、勢州度會郡小俣村番人新平儀、去ル未年十月八日、吉太郎を捕候節、所役人江不相屆連歸、四五日留置、身分幷盜先等相糺候上、同人任相頼、盜物取上置、被盜主江可差戻旨を掛合遣候處、内々ニ而取戻難キ間、如何樣ニも取計呉候樣申越候ニ付、右盜物衣類三品之内、壹品吉太郎江呉、貳品ハ被盜主江懸合ニ遣し候非人江差遣、米ハ右非人幷吉太郎留置候内之飯米ニ遣、剩右吉太郎儀を内證ニ而追放遣候段、不埒ニ付、所拂と相伺、一座評議之上、伺之通りと申上候例ニ見合、所拂と可相伺處、穢多之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、其所之穢多頭江引渡、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政七卯年十月

安藤對馬守殿御差圖

御勘定奉行 根岸肥前守掛

狂疾愚昧者犯罪

一豐前國柿山村傳藏盜物預候儀ニ付、非人無宿文藏を召捕候一件、

松平主殿頭領分豐前國宇佐郡下市村　穢多　吉藏

右之もの儀、無宿文藏江、內々承糺候儀有之間、暫留置吳候樣卯平相賴候節、卯平儀ハ、傳作方ゟ盜もの質ニ取由之風聞有之候はゝ、得と相糺可訴出處無其儀、卯平任賴、文藏を久々留置、殊森村半左衞門方江這入候盜賊文藏を差置候段、承および候間、相渡候樣、柿山村非人共申聞候節、渡遣候而ハ、卯平江對し申譯無之迚、逃去候段申僞、右之趣卯平方江致通達、同人方ゟ差越候路用銀相渡、一旦文藏を爲逃去候始末、不屆ニ候得共、領主役所ゟ申渡有之故、所々相尋、文藏を召捕差出候儀ニ付、輕追放可申付處、穢多之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、其所之穢多頭江引渡、

〔御定書例書〕亂心にて火を附候女咎の事

寬保三亥年十二月御仕置の例

甲州藏田村　金右衞門娘　はつ

此はつ儀、五年以前亂心いたし候處、本性に成、甲府勤番佐々井仁右衞門方に勤候處、火事有之候得ば、人々騷ぎ候事、與風面白存、夜中木綿切に火を包、仁右衞門居宅庇、幷葭垣等へ、四度迄押置、烟臭く、度々主人幷傍輩共へ爲知候、然共燃付候程の事には無之、盜色欲の筋、又は家內へ遺恨を含候儀にも無之、狂氣に無紛旨、甲府勤番支配相伺、

御差圖

當分牢內に差置、親金右衞門咎差免候上、金右衞門幷金右衞門弟彥兵衞へ相渡し、押込置候樣可申付旨被仰渡候事、

〔御定書例書〕亂心にて兩人切殺候ものゝ事

延享元子年十二月御仕置の例

羽州相森村　利右衞門養子　彌五郎

此彌五郎儀、亂心いたし、同國竹森村外記召仕三助儀、同國中里村善兵衞兩人を切殺候處、善兵衞

親類共は、下手人相願不申、三助親類は、下手人相願候付、亂心無紛候得共、彌五郎下手人可申付哉と相伺、

右伺の儀に付御書付

亂心いたし、卽時に人を殺候節は、其相手下手人被仰付候、是は喧嘩にて人を殺候上、下手人可通ため、亂心の體に成候者も可有之哉、實否難分故に候、亂心無紛、殺され候もの、親類相手、下手人御免の儀願候得ば、願の通可被仰付候、今度民部大輔御預所百姓亂心致し、二人致殺害候處、一人の親類共、相手下手人御免願出候、今一人の親類は其儀無之候、口論の上、人を殺、亂心にいたし成候證據有之候はゞ、其段は可申出事に候、殺され候ものゝ親類共、相手亂心と乍存、殘念存候と申儀、一向無謂事に候間、能々了簡いたし、重て可申出旨可被申聞事、

右御書付の趣を以、三助親類共を尙又相尋候處、再吟味にて得心仕、全亂心無紛候上は下手人相願候所存無之旨申候間、彌五郎儀、親類へ預け、押込置候樣可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔御定書例書〕亂心の上、親へ疵付候者、御仕置の事、

延享二丑年六月御仕置の例　神田同朋町　又右衛門

此又右衛門儀、兩親の顏、馬に相見へ、恐敷存、疵付候旨申之、亂心無紛候得共、兩親へ切付候段、不屆に付、死罪可申付哉、然共兩親幷親類、其外所の者共も、又右衛門亂心無相違、兩親手疵も輕、平愈仕候に付、又右衛門助命の儀、度々相願候故、押込置候樣可申付哉と相伺、

御差圖

死罪

〔御仕置例類集二ノ二十五〕文化五辰年御渡

火附盜賊改大林彌左衛門伺

一常陸無宿太兵衛取逃致し候一件

本郷三丁目八兵衛店　清吉女房　ます

右之もの儀、何之趣意も無之、不斗出來心ニ而、同店内湯屋吉右衛門居宅、勝手板屋根引窓枠之内江投火致し候段、燃立不申候とは乍申、重々不届至極には御座候得共平生持病之血之道差起候節は、正氣を失ひ候儀も有之由、夫幷姉聟、其外町役人同店之もの共等も願出、勿論投火幷火拵等致し候始末、申口符合仕候上は、全亂氣とも難取用候得共、一體愚昧之樣子ニ相見、其上巧候儀も無之候ニ付、遠島、

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文化十三子年御渡

京都町奉行伺

一巣鴨町平七店忠兵衛倅常藏、亂心ニ而、中宮御所江入込候一件、

江戸巣鴨町平七店　忠兵衛倅　常藏

右之もの儀、持病逆上強再發いたし、頻に内裏江罷越候樣耳元江相聞候由ニ而、中宮御所とは不存、内裏と心得、當四月廿四日夜、中宮御所御門之扉江登、透シ彫物を帶居候脇差ニ而切破候上、高塀を貳ヶ所乘越、御場所柄江這入、翌朝迄倒居候段、亂心とは乍申、不屆候得共、全病氣再發いたし、强取昇、右及始末候儀ニ御座候間、父忠兵衛江引渡遣、他行等爲致間敷、

此儀吟味書、幷別紙之趣ニ而は、羽州八ッ沼村江罷越候由ニ而、親元立出候後、途中ニおゐて持病之逆上再發いたし、頻ニ内裏江罷越度、右之心得ニ而上京致し、中宮御所江入込候ものニ而、盗可致所存は勿論、巧成儀も無之、全亂心之所業ニ候得共、紛入候には無之、帶居候脇差を拔、御門之扉、透し之彫物を切破り這入、高塀貳ヶ所程乘越、重キ御場所迄入込候と有之、伊勢守差上候例、天明五巳年、山村信濃守、町奉行勤役之節、伺之上申渡候、八丁堀北紺屋町清右衛門店嘉七同樣之趣意ニ有之、尤右之外ニも先例可有之哉と相糺候處、嘉七之外、相當之例相見不申候間、

同人同樣伺之通、親忠兵衞江引渡遣、他行等爲致間敷、
文政元寅年御渡

京都町奉行伺

一非藏人松室陸奥、癇症ニ而、拔身を持、御所江立入候一件、

非藏人松室駿河悴　非藏人　松室陸奥

右之もの儀、癇症相煩、引籠中、明暮身分之儀を相考、無跡形判斷を附ケ、何事も此もの立身之吉瑞と相心得或何方ともなく罷越候樣、誰レ申となく相聞候樣相覺候故、宮中江參可申事と不斗心ニ相浮ミ、當正月十一日、宿元を出、暮時後、御所江向罷越、宮中江入込、若相支候もの有之候ば、振廻し可申と刀を拔、奥之方江向テ參候樣ニは幽ニ相覺、其後之儀は彌取昇、一向不相覺段、申口不取留儀ニ候得共、御場所柄江拔身を持入込、宮中を爲騷、其上捕押ニ懸り候もの江手疵爲負、狼藉およひ候段、亂心とは乍申、右始末重々不屆至極ニ付、死罪、〇中略

例

享保四亥年六月　江州栗太郡黑津村　百姓市郎兵衞事

一死罪　法行

此もの儀、禁裏御所之御門江參、澁紙包持參仕、差上度旨を申、刀を拔、あばれ候付、召捕候而、中立賣御門番所江留置候由、小宮山丹後守ゟ申聞候ニ付、早速組之もの差遣、受取之、遂吟味候處、切疵打疵所々ニ有之、正氣不慥、相尋候儀、返答も不仕候處、懷中之反古之內、江州栗太郡田之上黑澤村市郎兵衞と申書付有之、亂心ニ無紛候得共、右之仕方不屆ニ付、

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政五午年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺

一房州無宿ろく、附火いたし候一件、 房州無宿ろく

右之もの儀、正禪方世話ニ成罷在候砌、何之趣意も無之、不斗出來心ニ而、附火可致と存付、勝手竈ニ埋火を投出し、座敷ニ有之蒲團之中江附火いたし候段、重々不届至極ニ御座候得共、平日不揃之儀も有之由、宿役人等も申立、勿論附火いたし候始末、申口符合仕候上は、全亂氣とも難取用候得共、一體愚昧之様子ニ相見、其上巧候儀も無之候ニ付、遠嶋、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

寛保三年極追加
一科有之女之義、中追放には御關所内、相模國は御構之外に付、中追放迄は可申付、重追放には申付間敷事、

寶暦三年極追加
一町人百姓之女は、重追放にも可申付事、

〔御書付留〕寶暦三酉年十一月廿三日

右近將監殿（伊勢守 和泉守 豊後守）江御渡

三奉行江

女御仕置ニ、重追放は不申付、御定付只今迄重追放ニ者不申付候、町人百姓之女者、重追放ニ申付候而も相障儀も無之事ニ候間、向後町人百姓之女は重追放ニ茂申付候様可致候、

右之通被得其意、御定書にも可被書入候、

〔御書付留〕寛政二戌年四月五日

越中守殿（周防守 河内守 肥前守）江御渡

三奉行江

懷妊之女、死罪御仕置申付候儀、只今迄之例區々ニ候、死刑ニ相成候もの、子ニ而茂依父母之科死刑ニは及ばず候、懷妊之女を殺候而者、胎内之子科なくして命を絶ニ當り候間、以來出產

之後死罪ニ可被申付候、

〔御仕置例類集〕一ノ三十文政二卯年御渡

日光奉行伺

一野州大澤宿百姓仲右衛門後家りよ娘いく江、無宿庄次郎手疵爲負候一件、

日光御領野州河内郡大澤宿百姓仲右衛門後家　りよ

右之もの儀、庄次郎を吉兵衛親元ニ而、藤吉致世話候ニ付、無宿ものとは不存、悴成ものと存、聟貰受候はゞ、得と親元をも相糺、庄次郎引取可申處無其儀、女之儀とは乍申、不念ニ付、急度叱り、

此儀天明二寅年、山村信濃守、御勘定奉行勤役之節、伺之上御答申付候、下總國尾崎村之内下尾崎組百姓三右衛門儀、彌兵衛村平八儀、藤介事仙助は、親元欠落ものに候處、同村仙右衛門親分ニ成候迚、平八江掛合も不致、聟養子ニいたし候段、不念ニ付、急度叱り置候例に見合、伺之通急度叱り、

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集〕一ノ三十文政九戌年御渡

火附盗賊改齋藤越中守伺

一當時無宿彥太郎、盗いたし候一件、

内藤新宿林藏店次兵衛召仕女　いね

右之もの儀、致質入遣候品は、盗ものニ有之處、其儀は不存候共、彥太郎任申旨、得と出所も不相糺、右體之品致質入遣候儀、不埒ニ付、三十日押込可申付處、訴出候ニ付、咎之不及沙汰、

此儀盗ものとは不存候得共、出所不相糺、質に置遣候もの、過料と有之御定見合、女之儀ニ付、三十日押込ニ相當候處、吟味ニ相成候趣承り、訴出候ものニ付、盗ものと不存、質置主證人等ニ相成候もの自訴之儀ニ付、寛政十二申年、一座評議仕申上、其通可仕旨被仰聞候ニ見合、伺之通咎

之不ㇾ及ニ沙汰ㇾ、

評議之通濟

〔御定書百箇條〕拾五歲以下之もの御仕置之事

寬保元年極 一子心にて無ㇾ弁人を殺候もの、　拾五歲迄親類江預置　遠島

同 一子心にて無ㇾ弁火を附候もの、　右同斷　遠島

同 一盗いたし候もの　大人之御仕置ゟ一等輕く可ニ申付ㇾ

寬保二年極 一拾五歲以下之無宿は、途中其外にて於ㇾ致ニ小盗ㇾは、　非人手下

〔舊記拾要集〔一〕〕享保八年卯七月三日御用覺帳書拔

一附火いたし候もの、十五歲より内は遠嶋、十六歲以上は可ㇾ爲ニ火罪ㇾ候旨相極候間、向後其趣可ㇾ被ニ心得ㇾ候、

卯七月

右御書付、卯七月三日、水和泉守殿、安部式部江御渡候由にて、式部殿ゟ來るに付、寫記之、

〔類典〕一十歲迄を幼少といふ、依ㇾ之十歲迄御用召之節、名代差出候樣奉書參ル、拾壹歲ゟ拾七歲迄若年與云、右之趣享和二戌年奥御右筆田中吉藏ゟ承ル、

〔天明集成絲綸錄四十八〕安永元辰年十二月

三奉行江

一十五歲以下之者御仕置之儀、仕來之通、十四歲ゟ内之者を幼年御仕置申付、十五歲ゟ大人之御仕置可ニ申付ㇾ候事、

一幼年之者敲之儀、十五歲以下ニ而茂、敲可ニ申付ㇾ事、

但御定書に、幼年ニ而致ㇾ盗候者、大人之御仕置ゟ一等輕可ニ申付ㇾと有ㇾ之候間、敲に當り候者を

敲候而は、右御定ニ相當不致候、無宿ニ而無之、幼年之もの、敲に當候者は、向後過怠牢可申付事、

右之通、一統相心得、區々不相成樣可被致候、

十二月

〔科條類典下六〕十五歲以下之無宿小盜いたし候もの例

戊〇寛保二年　十月十日入牢　無宿　加七

右加七儀、龜戶町源右衛門悴ニ而有之候處、當八月出水ニ付、助船ニ乘り、江戶江參候得共、源右衛門儀は繼父にて常々當り惡敷御座候に付、宿江は不相歸、巾著切仲ケ間江入、兩國橋邊ニ而腰錢等盜取申候、右之通當り惡敷とて、親源右衛門方江は不相歸、無宿ニ成、盜仕候段、不屆ニ御座候ニ付、敲キ御仕置ニも可相成候得共、幼年者ニ付、非人手下申付ル、

〔評定所格例〕幼年に而附火いたし遠島申付候もの出家願之事

寛政四子年十二月、幼年にて附火いたし候もの遠島御免出家爲仕度段願出候義に付、寺社奉行板倉周防守伺

兩國藥研堀埋立地義八店清七召仕粂藏子十四歲上右粂藏義附火いたし候依科、當三月中遠島申附、十五歲迄請人藤藏江預置候段、池田筑後守方に而申渡候處、此節深川七軒寺町陽岳寺義、粂藏遠島御免、出家爲仕度段願出候に付、相糺候處、寶曆十三年之頃より、願之通御免有之趣に候得共、父之科によつて、御仕置相成候類とは品も違、全く其身之科に御座候間、願之趣難成段申渡候方可然哉に奉存候、乍然近來追々御免之例も御座候に付、右願書幷例書相添、此段相伺申候、

十二月

御差圖

伺之通難成段可申渡尤以來共此度御差圖之趣を以不及伺取計可申旨戸田釆女正殿被仰渡

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政八辰年十二月

町奉行
小田切土佐守掛

松平伊豆守殿御差圖

當時無宿
平助

一當時無宿平助幼年ものゝ衣類剝取候一件

右之もの儀母貯置候錢度々持出遣捨嚴敷折檻致候迚致欠落無宿ニ相成四五才ニ相成候子供江一枚給可呉遣旨申欺往來人無之處江連參兩度迄衣類剝取賣拂都合代錢四百文食物ニ遣捨尚又同樣手段ニ而源兵衛伜長兵衛衣類剝取候處番人久助ニ被補候始末不屆至極ニ付死罪

御差圖

遠島

右御仕置附

右寛政元酉年五月一座評議ニ御下被成候私大坂町奉行勤役之節相伺候無宿彌吉儀町家表又ハ御靈宮座摩宮社内等ニ遊居候幼年之もの往來人無之處江連行衣類剝取候段不屆至極ニ付獄門可申付哉之段可奉伺もの二御座候得共惡事仕候段ハ未拾五歳以下之儀ニ付死罪可申付哉之段相伺一座評議之上伺之通と申上其通り御差圖相濟候例ニ見合死罪

右御尋ニ付御答

此儀御定書ニ子心ニ無辨致附火候もの拾五歳迄親類江預ケ置遠島と有之右ハ多分火消人足集り候を面白存致附火候類ニ而全子心ニ而無辨致方ニ御座候平助儀ハ剝取候衣類賣拂代錢食物等ニ遣捨欲心ニ拘候上ハ無辨共難申例も有之候ニ付死罪と相伺候得共猶又勘辨仕候處御定書ニ拾五歳以下ニ而致盜勘辨仕候處御仕置より一等輕く可申付と有之一等輕キ御仕置死罪ハ遠島重追放遠島ハ中追放と有之御定ニ見合假令本罪獄門相當之者ニ有之候共幼年之

もの之儀ニ御座候間、遠島ニ相成候而も振候儀ハ有御座間敷哉ニ奉存候、

〔御仕置例類集二ノ二十五〕文化十酉年御渡

火附盜賊改松浦大膳伺

一木挽町七丁目入墨孫七初筆盗致し候一件

當時無宿　辰藏

右之もの儀、武家方中間奉公致し候砌、孫七申勧に同意致し、玄關脇小部屋襖建寄有之處明ケ置、孫七立入、刀、脇差、袴、帶、孫七盗取、右品賣拂代錢之内配分貰請、不残遣捨候段、不屆ニ付、入墨之上、重敲可申付處、十五歲以下ニ付、入墨、

但喜三郎江引渡

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政七申年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺

一當時無宿總太郎盗いたし候一件

當時無宿　總太郎

右之もの儀、町家入口戸口江錠をおろし建、中窻之内柱江掛置候を、兼而存居候ニ付、風と惡心出、盗可致と右中窻〆り無之候間、外より明、手を入、鍵を盗出、右入口戸を明、這入、明樽桝之内、財布ニ入有之金銀錢、又は紺屋物干に有之木綿、或は井戸蓋之錠鍵盗取、右之内所持いたし賣拂候代錢、盗取候金銀錢とも、不残遣捨候段、不屆ニ付、入墨之上、重敲可申付處、十五歲以下ニ付、入墨、

但祖父總兵衞江引渡

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政八酉年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺

一北嶋町傳次郎店政五郎方ニ居候、同人甥丑之助外壹人、途中之盗いたし候一件、

北嶋町傳次郎店政五郎方ニ居候同人甥　丑之助

右之もの儀、先達而三十日過怠牢ニ相成候後も、盗不相止、三之助と申合、新材木町ニ而、町人體之もの、腰ニ提居候、巾着之銀子抜取、右之内配分差遣し、或は壹人立、通三丁目ニ而、中間體之もの、提籠之錢盗取、其外所々人立場ニ而、腰錢袂錢抜取候分とも、都合南鐐銀六片、錢四貫三百六拾四文程、途中之盗いたし候段、不屆ニ付、敲可申付所、十五歳以下ニ付、三十日過怠牢、

但伯父政五郎江引渡

〔吟味伺書進達留二ノ百八十〕御仕置附之儀

御先手内藤源藏組同心　大村鐵太郎屋敷守

歌之助

右俗人之身分にて、祈禱いたし候ものに付、文政七申年、評定公事一座伺之上、御仕置申付候、武州駒崎村瀧三郎儀、御嶽講と唱候講中江加り、又は夜分人集等いたし候儀は無之候とも、神事佛事等之儀に付ては、御觸茂有之候處、忘却いたし、病身ニ相成、農業茂怠り勝ニ候迚、居屋敷内江小堂ニ紛敷家作新規ニ取建、持畑際ニ有之候、庚申之石像を引入、石裂山權現之畫像、一同尊敬いたし、本宅江取附、別間補理候後は、右兩像とも、同所江引移し、壇を構、品々備物等いたし、祈禱相賴候もの有之候砌は祈禱いたし、護符相望候もの江は、幣束之古紙を刻み相與へ、初穗禮物等乞受候樣は無之候とも、燈明料之由にて、聊宛差出候賽物を受納いたし、其上地頭江も不申立、土御門家江入門、職札申受、陰陽道修行をもいたし罷在候始末、旁不屆ニ付、江戸拂申付候例に見合、此ものは、一己之發意を以、仕成候ものには無之、品輕く候間、所拂にて相當可仕、然る處幼年もの之儀ニ付、御定書ニ、拾五歳以下之もの御仕置箇條之内、盗いたし候もの、大人之御仕置より一等輕可申付と有之候ニ見合、所拂より一等輕く、三十日手鎖と御咎附仕候、

○按ズルニ、僧尼犯罪ヨリ以下、幼者犯罪マデノ例、此外各條ニ散出セリ、參照スベシ、

緣坐

〔經濟錄八刑罰〕罪人不孥ト云ハ、文王ノ政也、父子兄弟罪不相及トモ云ヘリ、犯人ノ罪ハ輕キコトナリトモ、父子兄弟謀ヲ合シテ犯シタル罪ハ父子兄弟同罪也、重罪ナリトモ、父一人ノ罪ハ子是ヲ不知、兄一人ノ罪ハ弟是ヲ不知、父兄ノ罪ヲ子弟ニカクルコトナシ、是先王ノ道也、參夷トテ、父母妻ノ三族ヲ滅ス罪ハ、戎狄ノ俗ヨリ起テ後世ノ刑也、日本ニ昔ヨリ三族ヲ夷スル刑ハナケレドモ、今ノ世ニモ重罪ハ子弟ニ及テ、幼稚ナル者ヲモ誅スルコトアリ、是又慘刻也、仁政ニハ決シテ此事有ベカラズ、父兄犯罪ナリトモ、子弟罪ナキハ刑ヲ族スマジキナリ、又父死刑ニ當タレバ子流サル、若シ幼稚ナレバ十五歲ヲ待ツ、其間ニ僧家ヨリ請ヘバ僧トナルコトヲ許スナリ、此法ハ子ノ刑ヲ父ヨリ一等輕クセラルレドモ、是モ父子相及ノ類也、反逆ノ類ハ至テ重キ姦惡ナレバ、子孫ヲ絕サルヽコトモ有ベシ、反逆不軌ノ類ニ非ズシテ、國家ニ拘ラヌ犯罪ニテハ、父死ストモ子ヲ問ザルベシ、況ヤ幼稚ナル者ハ、知ルコトナケレバ殊ニ罪ナシ、先王ノ法ニモ、後世ノ律ニモ、老人小兒ハ罪ヲ犯シテモ、ツミニ處セズ、賞ハ子孫ニ及ボシ、ツミハ其身ニ止ル、是古ヘ聖人ノ道也、

〔御定書百箇條〕重き御役人之家來、御仕置に成候節、其主人差扣伺之事、

延享四年極

一御老中
一所司代
一大坂御城代
一若年寄
一御側
一寺社奉行
一大目付

一町奉行
一御勘定奉行
一御目付
一大坂御定番
一駿府御城代
一遠國奉行

右家來徒士足輕中間等致二不屆一公儀御仕置に成共、其主人不レ及二差扣一候、侍以上、又は輕者にても、徒黨致二惡事一、御仕置に成候はゞ、差扣可二相伺一候事、

一遠國御役人は、於二其所一家來致二惡事一、御仕置に成候はゞ、右之通可二相心得一候事、

但表向之御役人に候共、家來徒黨致二惡事一、御仕置に成候はゞ、其節之樣子次第、差扣可二相伺一事、

〔憲教類典 五ノ十四 町奉行〕年號月日不レ知

一犯科人、或火罪、或磔ニ被レ行者妻子之事、男子は斬罪、妻子幷女子は奴たるべし、但御代官所は、囚獄江渡レ之、給所は其地頭江被レ下、

〔舊記拾要集 一〕享保九年辰三月八日御用覺帳書拔

一主殺親殺、又は格別重き科のもの之子供は、可レ伺候、親類は構無レ之候得共、右體の重科に候はゞ、所江預ヶ置、追而差免可レ申候、若乍レ存不二申出一ものは同罪、又は御仕置之品可レ伺候、死罪一通之もの丶子供は構無レ之候、此外獄門磔に成候もの丶子供にても、構無レ之候、右は町人百姓其外輕きもの共之事に候、向後此通可レ然相心得候事、

辰三月

右御書付、辰三月八日、松平左近將監殿御渡候由、美濃守殿ゟ寫來ル、

〔科條類典上二〕元文二巳年

重科人之忰親類等、御仕置之儀ニ付御書付、

主殺親殺之科人之子共ハ、伺之上可申付、親類ハ構無之候得共、所江預置、本人落着之上、右惡事之企、不存ニ相決候はゞ可差免之、此外火罪磔ニ成候ものゝ子ども、構無之事、

右ハ町人百姓、其外輕キもの共之事ニ候、

〔官中秘策二十八〕武家之かゝり

一輕き御扶持人、獄門になり候得バ、忰は追放、

〔政談秘書一〕寛政五丑年八月四日、寺社奉行立花出雲守樣江伺、即日御附札、

親死罪之者、其子供咎申付候節、十五歳ニ不相成候得ば、好身預申置候、十五歳ニ相成候砌、親之咎輕重ニ寄、夫々咎申付、年數相立差免候後、右子供出家仕、九八郎目見申付候寺格江、住職仕義不相成筋ニ可有御座哉、又は目見無之寺之住職は、不苦儀御座候哉、此段奉伺候以上、

奥平九八郎家來

淺田才兵衞

御附札

書面公儀御家人、重科相成候者之忰、出家願相叶候節、御禮等罷出候寺格江住職不申付御規定も候得共、書面之通之趣、右之者難引當、右者御存寄次第之筋ニ付、極候ては難及挨拶候、

〔游藝園隨筆抄〕石川左近將監の物語に付、今存出せし事あり、そは某（〇川路聖謨）が先年評定所留役たりし時、御當家の御法として、父死罪の者の忰は、遠島たるべし、又遠島の者の忰は中追放に相成候事、亂世の餘風にもあるべきや、御當家が天下の政權を取られ、御仁政の事共、遠く三代にも卓越すべけれど、只父の罪子に及びぬると申候罪科の道理あるべきや如何と、常に疑念ありしに、

或日御仕置例類集を看たる處、松平越中守殿より、父の科によりて、子の御仕置の事、いかゞあるべしとて、其當否を評定所一座の面々へ下問ありたりしが、其評議の決終らずして、其まゝ沈み居候事を見出せり、依て某は其趣を左近將監へ物語りしに、左近將監被申候は、夫は予より越中守殿へ申せし事ある故に、評定所へも尋られしなるべし、其頃は予が御目附たりし時なれば、寛政五年頃歟と覺へたり、然るに右評定所一座の趣は、同三年の事とあるは、恐らく記錄の年曆書損か、又は予が覺違ひあらん歟、就ては其類集の內より、其處を抄錄して見せ候へと被申しに依り、某は其記錄の內を寫して、左近へ遣しおき、其翌日、某左近を訪しに、左近被申るには、偖々白河侯越中守の言路を開き賜ひしはいともすぐれたる事なり、予が御目附たりしは寛政五年にて、予が其事を越中殿へ申立候時、よくも心附候とて、越中殿より特に賞されければ、斯る賢相も未だ此事に心附ざりしやと、予は此頃まで心に誇りおりたり、然るに今足下が送られたる評定所の書物抄錄と、予が掌記とを合せ考るに、予が此事を申立たる前、既に二ヶ年に越中殿よりはや此事の當否を評定所の議に下されたる事、正に瞭然たり、偖も賢相の所爲、凡夫の及びも不申事々、實に恐入りけりと云々、其後兩三日を經て、左近は評定所に出坐して、一同へ右の趣を演せられ、尙評議あらん事を求めしに付、一應評議の上其事を執政に申立ありしが、先只今迄の通りとの事にて、其儘沈みけり、然るを又脇坂中務大輔殿寺社奉行へ再勤ありて、尙右の事再應評議ありて、執政之衆中へ申立の趣ありけるが、其時も亦不容易事なればとて、其儘にやみたり、誠におしき事なり、

〔游藝園隨筆抄〕久須美六郎左衛門が、某〇川路聖謨と同じ寺社奉行吟味物調役たりし頃、〇中略或時同人と彼父の科、子に及ぶ御仕置のこと色々討論せしに、同人の說は、父の科に依りて、御旗本の家も潰れ、又一方には御取立者の御加增を賜ふ事あり、夫にて丁度經濟の平均に至るものと云べ

し、あまり有がたき世祿の御代なれば、斯る增減なくては、人材を登用するの途なしと云り、是又一論なれば茲に記しぬ、

〔諸家礼明問答〕文化十年九月七日、町與力中島三郎右衞門へ面會、口上ニ而承合、口上ニ而答之趣、

〇中略

一出家重罪、俗縁之兄弟江懸り候哉之ヶ條、

俗縁之者惡事に拘り候事無之候得ば、故なくして科之懸り候事は無之候、古來は、逆罪之もの御仕置之節、三族江懸り候と申事有之候得共、當時は先づ左樣の事、平人ニ而も無之由、

〔當代記〕慶長十八年正月八日、山口但馬、於江戸自將軍改易也、故ハ古石川長門守女、但馬男ニ嫁、自二三ヶ年以前長門存生ノ時、無行儀ノ由ノ玉フ、長門男被押籠處、依婆之如斯、

〔享保令典永鑑四十三〕元祿九子年二月

覺〇中略

一大岡五左衞門養子願之儀ニ付、番頭高力伊豫守を討果候、組之儀ニ而候得ば、何分ニも頭と了簡之段可申聞事ニ候、遺趣ニ茂存間敷儀を以、頭江對し、非義之仕形、重々不屆に被思召、悴兄弟茂有之候はゞ、急度可被仰付候得共、無其儀候、五左衞門忌懸り候親類共閉門被仰付候事、以上、

二月

大岡五左衞門遠類

又伯父　又甥　從弟違　又從弟　聟　舅　小舅　姉婿　妹婿

〔科條類典下五〕貞享二丑年十月十二日

一神田旅籠町檜物屋甚五兵衞弟子召抱候下人傳助儀、甚五兵衞寐所江忍入、甚五兵衞數ヶ所手を負せ候、甚五兵衞雖不相果、主人を切候得ば、主殺依爲同事、傳助儀、於日本橋三日さらし磔に掛ル、傳助母、幷兄傳兵衞、姉壹人、次弟利兵衞江此四人は、不及晒、於獄屋令斬罪、首は獄門に掛ル、傳助

伯父利右衞門儀は令牢死ニ付、不及梟首、

〔兼山麗澤秘策 四〕頃日主人殺し申者兩人、日本橋ニ而さらされ、其後品川口ニ而磔ニ被仰付候、一族之義ハ御構不被遊候由、早速被仰出候、御前代〇德川家宣ニ、主人殺し申者有之候へば、父母兄弟も刎首被仰付候、是ハ不易之法之樣ニ一統ニ意得罷在候處ニ、此度御獨斷より被仰出と奉存候、聖人之殺人不好と被仰ニ御叶被成義ニ奉存候、〇中略

後七月〇享保六年四日贈書

〔御書付留〕寶曆四戌年六月廿四日

隱岐守殿、伊賀守、豐後守江御渡し、

父之科ニ而、其子遠島被仰付、拾五歲以下ニ付、親類江御預之內、遠島御免、出家願、只今迄御遠忌御法事之赦ニ者難相成旨被申聞候得共、向後御遠忌之赦にも、御免可被成候間、可被得其意候、

〔近世政秘錄 天〕未〇天明七年二月廿三日申渡之覺〇中略

御書院番頭
酒井紀伊守

西丸書院番頭
水上美濃守
內藤安藝守
能勢筑前守
三枝土佐守
小笠原播磨守

御役柄不相應に心得違有之趣相聞江、不束成事に候、依之差扣被仰付候、

右松平玄蕃頭殿於御宅、若年寄衆御出座、玄蕃頭殿御書付ヲ以被仰渡之、御目付牧野織部出席

未　二月廿三日

右書付、御役御免之當人江、父子兄弟祖父孫迄に續差扣へ被仰付候、當人江父子之續合御吟味被
仰渡候、

未　二月廿四日

〔御書付留〕天明八申年九月十二日

牧野備後守殿（右近將監　信濃守　伊豫守）江御渡し

評定所一座江

元御代官青木楠五郎忰龜之助儀、中追放被仰付、幼年ニ付、拾五歳迄親類江預ケニ相成候處、此度遠島之父楠五郎ニ付添罷越、介抱致度願候ニ付而、何茂江評議申達候處、遠島は死刑ニ續キ重キ儀ゆへ、父子之情愛も難立次第、則御仕置ニ而、願之通ニ者難成筋ニ可有之やとの儀、實ニ不等閑評議之趣意ニ有之候、且又既ニ先例も有之事ニ候得ば、孝心之故を以、願之通可被仰付哉との儀も、是又無餘儀趣ニ有之候、一體子之咎者、其身之罪にも無之候間、孝心ニ被免、願之通相濟候儀、子之方ニ取候而者、子細茂無之儀、孝心之所は被免度筋ニ候得共、其身之罪ニ而流罪遠島之父ニ取候而は、介抱を差添ニ相當、如何敷筋ニ有之候、扨又子之願ニさへ候得者、相濟候定例之樣相心得候而は、往々者孝子之實否も却而不相分樣ニ成行、或は罪父之心底、最初より同居成產之儀をはかり候はゞ、自然事之ゆるみに相成間敷ニ茂無之ニ付、不容易儀ニ候間、向後願候迚も、定例相濟候とニ者無之、其時々得と糺之上、始末次第可爲事ニ候、尤願之通、附添と申付候而者、罪父之爲、介抱を添候ニ相當り、又遠島と申付候而者、孝子之爲、重刑之名目を加候ニ似寄、いづれ不正ニ候間、右兩樣之名目は、以來不相唱樣と可被致候、依て此度龜之助親類共

江申渡趣、左之通、
遠島流罪之父ニ附添罷越度旨相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右之島江相越候儀者
御構無之候、尤父と同船同居勝手次第可致候、追而出島之儀、是又勝手次第可致候、
一配之助儀、島住居之內、彌孝心ニ候者、追而出島之上は中追放之咎は品ニより被宥候儀も可有
之哉、其次第ニより、其節尙評議可被在事ニ候、出島之儀勝手次第たるべきとの趣は島支配之
向江も兼而達置候樣可被致候、
但以來百姓町人も、是又其始末次第、糺之上申渡方等前書之通たるべく候、
右之趣可被相心得候
九月
〔御仕置例類集三ノ四〕寛政元酉年七月
松平越中守殿御差圖　町奉行 初鹿野河內守掛
一下谷町壹丁目家主藤三郎親吉右衞門博弈致し候一件　下谷町壹丁目 家主 藤三郎
右之もの儀、親吉右衞門、御法度相背き、年來めくり致博弈、又者惠比須講之節、圓次筒取ニ而、簺博弈爲致、其時ニ座料取候ニ付、致異見候旨者申候得共、取用不申候迚、親之儀と者乍申、其分ニ致置候段、不埒ニ付、急度叱り、
右御咎附
右寶曆三酉年八月、依田和泉守伺之上御咎申付候、御留守居番島崎市郎右衞門組與力住江久八弟住江巳之五郎儀、兄久八博弈致し候儀、異見仕候得共、不相用候はゞ何ヶ度も異見可仕候處、其分ニ致置候儀共、不行屆致方、不埒ニ付、急度叱り置候例ニ見合、此もの儀も、不行屆始末者、同樣ニ御座候間、急度叱り、

〔赦手續錄〕幼年御預之者、拾五歳に相成候ニ付、申上候書付、

清水小普請伊藤河内守支配
近藤新十郎家來

朱書
松平伊豆守殿御差圖

一遠島　　高田三五郎 申十二歳

右之者、寬政十二申年三月十三日、依父之科御仕置被仰渡、幼年ニ付、親類ども江御預ニ相成居、當亥年〇享和三年十五歳ニ相成候、依之申上候、以上、

正月十八日　　荻野政七
中村八郎左衛門
生田祐九郎

朱書
右者幼年もの依父之科御仕置被仰付、拾五歳迄御預ニ相成居候もの、拾五歳ニ至候得ば、右之趣可申上事、

〔御仕置例類集二ノ四〕文化二丑年御渡

町奉行根岸肥前守伺

一榊原太郎右衛門嫡孫承祖榊原八十之丞外壹人、依父之科御仕置之儀ニ付評議、

二丸御留守居
榊原太郎右衛門嫡孫承祖　榊原八十之丞
右八十之丞弟　榊原圓次郎

右之もの共儀、實父榊原彦大夫儀、不居有之、存命候得ば死罪可被仰付もの之旨、被仰渡候ニ付、兩人とも、依父之科御仕置可被仰付ものニ御座候、然ル處、右八十之丞儀ハ、父彦大夫總領除ニ相成候後、太郎右衛門嫡孫承祖相成候ものニ而、右體之もの、父之科御仕置之儀、再應取調候處、先例相

見不申、寛政五丑年、西國郡代揖斐造酒助、元手附、御普請役元〆並島村紋右衛門、不屆有之、遠島被仰付候處、同人悴島村喜太郎儀、中川修理大夫家來ニ被抱、宛行申請、同人在所豊後國岡表ニ相勤罷在候、然ル處、御抱之もの之悴、父之苗字を名乘、陪臣ニ而罷在候もの之父、御仕置被仰付候節之例無御座、陪臣ニ相成罷在候ものニ付、御仕置之不及御沙汰儀ニ可有御座候哉、併他名相續之養子ニ相成候と者違ひ、養子之差別も無御座上ハ、定例之通、依父之科中追放可被仰付候哉之旨、御勘定奉行ゟ相伺候處、喜太郎儀ハ、御仕置之儀ハ、不被及御沙汰旨被仰渡候、此度之八十之丞儀ハ、右例とも譯違、其上寶暦五亥年之御書付ニ、嫡孫承祖相願候節、嫡孫養子と相願候類も間々有之候、以來者都而嫡孫承祖と相願可申と有之候御趣意をも相考候處、他家之相續いたし候ものにも無之候間、兩人とも定例之通、父之科ニよつて御仕置可被仰付候哉、依之此段奉伺候、

此儀評議仕候處、嫡孫承祖ハ、養子とは譯違ひ候得共、祖父之跡式ハ、右嫡孫江被下置候儀ニ而、惣領除ニ成候もの之父之科有之候而ハ、右祖父身分ニ取、相當とも難申、養子ニ罷越し候もの、實父重科ニ被仰付候とも、父之科ハ無之候間、嫡孫承祖も養子之方ニ准じ父之科ハ不被及御沙汰方可然哉ニ奉存候、尤榊原八十之丞、弟圓次郎儀ハ、子細無之儀ニ付、定例之通、父之科御仕置ニ被仰付可然候哉と奉存候、

丑五月

（朱書）評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ四〕文化十四丑年御渡

町奉行永田備後守伺

一御先手與力鶴田左源次悴鶴田八郎外三人儀

御先手大野又三郎組與力鶴田左源次悴同人組與力　鶴田八郎

外三人

右之もの共儀、父鶴田左源次、爲三郎、金次郎儀は父山下八郎左衛門、仁之丞儀は、父藤田忠兵衛、三人共遠島可被仰付哉之段奉伺候間、伺之通御仕置被仰付候はゞ、依父之科四人共中追放可被仰付哉、左候はゞ金次郎儀は右之段申渡、拾五歳迄、親類共江預置候樣可仕候哉、此段奉伺候、

此儀文化元子年、中川飛騨守御勘定奉行鈴木門三郎御勘定吟味役之節、伺之上御仕置申付候、御藏番杉山甚九郎悴杉山庄五郎儀、父甚九郎儀、死罪被仰付候ニ付、依父之科遠島申付候例ニ見合、今般之鶴田八郎外三人儀は、父共遠島被仰付候儀ニ候はゞ、伺之通依父之科四人共中追放申渡、金次郎は拾五歳迄、親類ども江預置、

評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ四〕文政八酉年御渡

町奉行筒井伊賀守伺

一依父之科御仕置ニ可相成もの、嫡孫承祖之故を以、御仕置差別之儀評議、

小普請組彥坂近江守組本目安次郎養父隱居　本目清藏

右之もの儀、父隱居盛兵衛、町人に相成店持不屆致候儀は不存候とも、去卯年十月中、甲州身延山其外神社江參詣いたし候由申、立出候節、願も不致數日相立不立歸候得共、國々相廻り候儀と存、致其儘置、其後病氣ニ付、弟安次郎を養子ニ相願、翌辰年六月中、同人家督、此者隱居ニ相成候後も、盛兵衛行衛不相知、出奔致候儀と存、代も替り、其儘難差置候迚安次郎江申聞、去午十月中致出奔候趣、相違之屆爲差出候始末、不埒ニ候、其上盛兵衛儀、獄門被仰付候はゞ、依父之科遠島、

此儀不埒有之候上、父之科ニ依而可被仰付ものゝ儀ニ付、先例相糺候處、文化二丑年、久田縫殿頭、根岸肥前守、佐野肥後守掛ニ而御仕置申渡候、小普請組酒井但馬守支配鈴木清三郎儀、父万右

衛門事、村上三十郎家來より、呉服物口入被相頼候迚、同人家來と名乘、呉服屋ゟ反物取寄、三十郎方江遣候處、不用之由ニ而、差返候儀を其儘質入、代金遣捨、呉服屋ゟ嚴敷催促受候ニ付、右始末三十郎家來江打明し相咄、金子借受事を濟し候節、右不埒之趣書顯候借用證文江奥印致、其上万右衛門儀、榊原彥大夫、駒井甚兵衛申合、町人共ゟ呉服物藥種類等を取寄、右品質入、又は賣拂代金配分候をも不心付、不束之至ニ候、万右衛門存命ニ候得ば、死罪可被仰付ものニ付、旁遠島被仰付候例有之、尤今般之本目淸藏儀は、御仕置附ニ、伊賀守申上候通、本罪五十日押込ニ相當可仕處、父盛兵衛獄門被仰付候上は、本罪を込、伺之通依父之科遠島被仰付可然哉ニ奉存候、

評議之通濟

〔新張紙留〕（朱書）文政九戌年八月廿五日相談之通濟

御相談書

石川主水正
曾我豐後守

死罪遠島もの、悴、依父之科御仕置之儀、寛政之度、松平越中守殿御勤役中、御沙汰有之、評定所一座ゟ存寄之趣申上候處、評議之趣、相當共難思召ニ付、後々御評議之上、御沙汰可有之由ニ而、其儘ニ相成居候間、去酉年中ゟ寄々御相談之上、當二月十二日、御仕置御改革之儀申上候、然ル處右ハ容易ならざる事故、此上御下知相濟候迄、問合可有之も難計候間、其内追々諸懸りニ而、死罪遠島之御仕置ニ相成候もの出來候節、悴共御仕置之儀、只今迄之振合を以相伺候而ハ、一體之趣意不致相當候間、以來御下知相濟候迄ハ、依父之科御仕置之儀相伺候もの有之候はゞ、別紙之通申上候積、申合置候而ハ如何可有之候哉、及相談候、以上、

戌八月

伺書御仕置附案

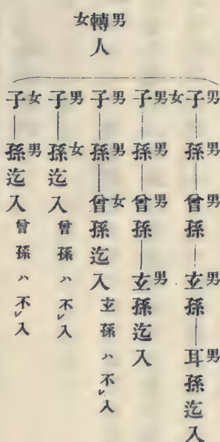
肩書

姓名
右之もの儀、父誰不屆有之、何被仰付候ニ付、依父之科何可被仰付哉之段奉伺候得共、右御仕置之儀ハ、當二月評定所一座ゟ御改革之儀申上候儀も御座候間、此段尙又申上置候以上、

戌八月

〔憲敎類典四ノ十六切支丹〕元祿八乙亥年六月

切支丹類族一件



一父母不轉以前之子幼少ニて、父母ニはなれりとも本人同前に立事は、出生其まゝ、其父ニても母にても、功德の水といふ物をかけ、わが宗門になしかたむるによりて、本人同前に相立候由申傳候事、

一父母不轉以前之子は、男女共ニ本人同前也、孫ゟ男、段々續候時は、耳孫迄類族ニ可入、

一轉候以後之子男、段々續之時ハ、玄孫迄類族ニ可入、

一轉候以後之子男孫も男ニて、曾孫女之時は、曾孫迄類族ニ可入、其玄孫は不入、

一轉候以後之子男ニても、孫女之時は、孫迄類族ニ可入、曾孫は不入、

一轉候以後之子女ニて、孫男之時は類族ニ入、孫も女之時は類族ニ不入、

一本人幷本人同前之者ゟ忌掛り候親族、其外舅姑聟娘は類族ニ不入、

一此方ニ本人有之、其類族他所ニ致住居候時、生死之儀、先ゟ訴有之節、其趣其所ゟ書付取置之、二季之届ヶたるべし、生は無判、死は兩判ニて切支丹奉行衆江可相達事、

〔御定書百箇條番外〕罪科人之親類遠慮之次第○中略

一死罪士

忌掛之親類御番遠慮

聟 舅 小舅は　　御目見遠慮

一遠島士 改易 御預ヶ

父子、兄弟、伯叔父、甥、御番遠慮

從弟、聟、舅、小舅は　　御目見遠慮

一改易 御預ヶ 閉門

父子、兄弟御番遠慮、

伯父、甥、　　御目見遠慮

一逼塞

父子　　御目見遠慮

右之外不及遠慮者也

天和三亥歳三月十四日

〔土津靈神言行錄下〕平生

一日賀州大守綱利前田○問曰、父罪當死刑、則其子男亦被戮、是予領內之法也、然不知其當否也、願聞貴國之法矣、公正之○保科曰、吾未聞諸國之法也、獨擧我家之刑法而語而已、父當磔罪、則其子被斬矣、父當斬罪、則其子免死刑也、雖有其子復讎之虞、我不管之、萬一有不意之事、則是亦命也、豈懼之耶、綱利

連坐

君嘆之、

〔三奉行取計書〕文化五辰年二月八日

吟味物引合之內、評定所一座領分之者、輕キ御咎之儀ニ付相伺候書付、

書面伺之通相心得、尤見合之例も無之分は、輕キ咎ニ而も、御定之通相伺可申旨被仰聞、承知仕候、

辰三月廿三日　評定所一座

松平兵庫頭伺之上、私領のもの引合有之候得共、御代官山田常右衞門江吟味之儀申渡候一件、吟味相決、常右衞門申聞、取調候處、重科之ものハ逃去、引合之もの共ハ、可相伺程之御仕置ニ無之、右之內、脇坂中務大輔領分之もの有之、先例ニ見合、急度叱りニ相當り申候、然處御定書ニ、御老中、所司代、大坂御城代、若年寄、御側衆、評定所一座、領知出入訴出候節、不及伺取計、裁許之趣相伺可申事、但質地并借金銀出入者、定法有之儀ニ付、不及伺事と有之候ニ準じ、出入之裁許ニ無之、右領分知行之者加り候一件ニ而、御仕置并御咎附候節ハ、中追放以下ニ而も、相伺來り候儀ニ御座候、此度中務大輔領分之ものハ、無宿と不存、請合人取置候とも、村役人江不相屆、彌吉と申無宿非人を藪番ニ久々抱置、庄屋年寄も右を不存、段々不束ニ而、重キ御咎ニ無御座、定例之御咎ニ相當候處、中務大輔領分之者加り候故を以、右一件引合、大勢之吟味書取調、進達仕候も如何可有之哉と兵庫頭相談仕候間、評議仕候處、前書御定者、出入裁許之儀、此度之一件引合之內にも、中務大輔領分之者ハ、至而輕キ御咎附候儀ニ有之、其上盜賊一件吟味伺書ニ、墨書ニ而伺來候引合之內、定例御咎之分ハ、以來朱書ニ而申上候樣仕度段、去ル未年一座より相伺候處、伺之通可仕旨被仰聞候儀も御座候間、旁定例之輕キ御咎ニ付、不及伺夫々御咎之趣、兵庫頭より常右衞門江差圖致し候方、取調之手數も不相掛、落着も早く相濟可然奉存候、併右之段、私共評議迄ニ而、取極候筋ニも無御座

候間、以來前書領分知行之者、吟味之上伺濟、的當之先例有之分ハ、手鎖、過料、急度叱り、叱り者不レ及伺、三奉行銘々手限吟味物ニ而申付候樣仕度、此段相伺申候、以上、

辰二月

〔折たく柴の記下〕五月(○正德四年)十三日に、銀座の者ども四人流罪せられ、一人は追放せらる、此事を承りし勘定衆保木小宮山等二人召籠られけり、初め此等の輩の罪を論せられて、銀座の輩、初に低銀ども造るべき事を議し申て、御代々の大法に違ひ、重秀(○荻原)一人が下知によりて、其低銀ども造出し、終に天下の大患を致せし事ども、其罪最大なり、悉く皆首を刎らるべしと申されし人人あり、是は昔より銀造られし事は、老中の人々連署の狀を下されしに、元祿の時よりして、勘定奉行連署して下知しき、寶永七年の三月、正德元年の八月の事は、前に記せし事のごとくに、重秀が計らひにて、保木小宮山等連署させて、下知して改め造らせけり、又寶永より此かた、多くの低銀造りし事、深江といふ者、重秀が旨をうけて、座中の者ども語らひて、連署の狀をさゝげて、議し申たりし事どもなり、某(○新井君美)此事を論じて、彼等が罪誠に大なり、されど元祿に金銀改め造られし時、祖宗の御法に違はれて、老中連署の狀をも下されず、勘定奉行して下知せしめらる、是によりて、寶永正德の時には、重秀一人の狀を下せしなり、當時重秀勘定奉行の上首として、特に其事を仰蒙りし者の下さん狀、銀座の輩、其下知に隨ひしこと、深く咎むべきにもあらず、もし重秀一人が狀を下せし時、其法に違ひし事をもて、申さるゝよしをもて罪せられんには、元祿の時、勘定奉行連署の狀を下せし時、祖宗の御法に違ひし事をもて申さるゝ事、是も又其罪なしと申すべからず、官は法を出す所なり、民は法を奉ずるものなり、官已に自ら法に違ひて、民其法の違ひしことを申さゞるをもて、民を罪せんことといかゞ候べき、凡犯罪に、首罪あり、同罪あり、縁坐あり、輕重もと同じからず、重秀此事の首罪なれば、前代の御時、職奪はれ召籠られしかど、隱れさせ給

ふ時に及びて、御勘氣の者ども、一切に御免の仰あるによりて、其罪を正さるゝにも及ばずして、其後病ひして死し畢りぬ、首罪既に其誅をまぬかれたり、然るに同謀縁坐の者のみ、こと〳〵く皆誅せられん事も、またいかゞ有べき、同謀縁坐の者ども、必死を以て其罪を決せられんには、重秀が棺を發し、屍を戮せられて、後に其事に及ばるべきか、たとひ死せし者、ものしる事有て、其冷かなる肉を寸斬せらるゝとも、重秀が頑鬼の如き何の痛苦か知べき、さらばいたづらに殘酷を世に示さるゝにて、君子仁厚の政にはあらず、某重秀が事を用ひし時、其罪を論申せし事は知給ひし所なり、又同謀縁坐の者ども、某一人も其面を見しものもあらず、されば某かく申所は、彼等が爲に其刑を緩くせんとにはあらず、只いかにも當時の御爲に、其刑の當らん所を思ふが故なりと申たりければ、其罪みな〳〵輕きに從はれしとぞ聞えたる、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政七卯年七月

安藤對馬守殿御差圖　　御勘定奉行 根岸肥前守掛

一御代官野田文藏役所ニ而取拵候村方御貸附金、地頭家來名前を僞、致拜借候一件、○中略

小石川御掃除町平八店　浪人 原田一郎

右之もの儀、御代官役所御貸附金、村方拜借之儀地頭ニ而聞濟無之、致難儀候間、地頭家來と申立罷出呉候樣、出澤郡司右衞門、幷村方之もの一同、强而相賴候迚、鈴木忠右衞門と名前を僞、御代官役所江罷出、名寄帳書拔ニ奧印いたし、右名前之下江仙藏所持之印形を押、村方之もの江御貸附金爲致拜借、貳分貰請、又者借受候始末、不屆ニ付、輕追放、

右御仕置附

右御定ニ添候、例書之內、麴町久右衞門寄子林金七儀、關口水神別當祥鱗ニ被賴、御鷹匠和田源吾ニ相成、牛込松三郎方江罷越、巧之儀申込仕方、不屆ニ候得共、似役人之儀、致辭退候處、祥鱗無體ニ

相頼候故、致同心候得共、物取之筋無之、似役人ニ成候迄ニ付、重追放可申付哉と相伺、其通被仰付
候類例ニ見合、此もの儀、一旦及斷候得共、郡司右衛門幷仙藏、達而相頼ニ任、鈴木忠右衛門ニ成、御
代官役所江罷出始末者、同様ニ有之候得者、右例より者、一體品輕御座候間、一等輕く輕追放、

松平權之丞知行下總國豐田郡鯨村　組頭　仙藏

右之もの儀、御代官役所御貸附金、村方拜借之儀、地頭ニ而開濟無之處、出澤郡司右衛門任申、世話
人酒井伊兵衛江者不申聞、原田一郎を頼、地頭家來と僞申立、御貸附金拜借致、右之內、世話人江貸
遣又ハ謝禮金等差出、追而歸村之上、村役人江申聞候始末、不屆ニ付、中追放、

右御仕置附

右御定ニ添候、例書之內、武州栗原村名主伊兵衛儀、同村金藏方ゟ、熊次郎方江書入候筈之地面悴
半吾望候而、熊次郎方江書入、假證文已前之年月ニ質地證文半吾拵候儀を乍存、役印致候段、不似
合不屆ニ付、輕追放可申付哉と相伺、役儀取放之御差圖有之候ニ見合、仙藏者、郡司右衛門任申、俱
俱一郎をも頼、僞之儀取拵候ものニ御座候間、右例ゟ者、格別品不宜、一件見渡ニも原田一郎ゟ者
重く、中追放、

同村　組頭　市右衛門

右之もの儀、昨今ハ村役人ニ而、諸事仙藏任申旨取計候共、不正之取拵を、御貸附金致拜借儀と乍
存、右證文江致連印候段、不屆ニ付、役儀取放、

右御答書

右仙藏例ニ見合、此もの儀ハ新役ニ而、諸事仙藏ニ任せ置候ものニ付、右例書之內、伊兵衛ニ見合、
役儀取放、

山下權左衛門知行同郡新字道村　又兵衛

右之もの儀、出澤郡司右衞門外壹人申合、地頭家來名前を僞、御貸附金幷借金致候を乍存、倶々携致世話、右之內郡司右衞門金壹兩、村方ゟも金貳兩借受候始末、不屆ニ付、輕追放、

右御仕置附

右之もの、仙藏ニ見合、品輕御座候間、輕追放、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政七卯年十一月

安藤對馬守殿御差圖　御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

一武州大野新田庄右衞門變死致候一件

野田文藏御代官所武州足立郡浦和宿〇中略

問屋名主兼　秀司

年寄　三左衞門

同　新助

百姓代　次右衞門

右之もの共儀、去寅十二月十八日朝、同宿堀內倒死人有之、前夜同宿ニ而、口論も有之候間、其節變死いたし候ものニも可有之哉ニ候得共、相手も不捕置、誰仕業共不相分、事故有體申立候而者、所之もの共、吟味可有之旨、三右衞門任申、宿方之もの共一同申口を合、同十九日朝、見付候由、喧嘩口論、其外怪敷儀無之趣申立、万五郎外三人ゟ撿使之もの江差出候口書江、無相違旨奥印致候始末、名主年寄共者、勿論之儀、百姓ども一同不埒ニ付、名主年寄共者過料錢拾貫文宛、百姓代次右衞門者、同三貫文、

右御咎附

右差當相當之例無御座、變死幷手負候ものを隱置、不訴出もの之御定ニ見合、一體之品不宜、其上

共犯

年寄三右衞門重立、同內々之取計いたし候ものニ御座候間、所拂と御仕置附仕、秀司者、名主役相勤候得共、若輩ものニ而、外宿役人共、諸事取計候儀ニ付、秀司、三左衞門、新助共、同樣役儀取上候上、過料五貫文申付方ニも可レ有二御座一候處、一同役儀取放候而者、宿方用向も差支可レ申、其上三左衞門ニ致二隨意一候もの共ニ付、三人共、過料錢拾貫文ツヽ、百姓代者、右五人組之御定ニ見合、同三貫文、

〔御定書例書〕人を殺、盜いたし、其居宅を燒候者、幷手傳いたし候もの御仕置の事、

元文四未年四月御仕置の例　　豆州大津里村百姓

九左衞門　甚四郎　彌七　源兵衞

此九左衞門儀、近在山へ泊り稼に罷越候處、追々甚四郎、彌七、源兵衞に出會候故、同村十左衞門、勝手宜候間、金子借候樣可レ致候、貸不レ申候はゞ縛り置借り可レ申段申合、右十左衞門方へ罷越候處、留守にて、親五左衞門へ金子無心申掛候得ば、難レ成由申募候上惡口致すに付、九左衞門杖に突參候棒にて、五左衞門を打殺、家內の男女共も、甚四郎彌七と申合、是又打殺、圍爐裏に有レ之燃殘りの薪を持、搜候處、金子皮籠に入有レ之に付取出、有合候衣類等品々盜取、稼山へ持歸相改候處、金拾六兩有レ之間、九左衞門、幷甚四郎、彌七、源兵衞配分いたし候、右燃殘の火、取散候雜物に火移、居宅燒失いたし候、右之通人を殺、金子衣類盜取候段、重々不屆至極に付、九左衞門義は、於二其所一磔、甚四郎、彌七は、於二其所一獄門可レ申付哉と相伺、其通被二仰渡一、源兵衞儀は、金子配分取候迄にて、人殺の手傳不レ致に付、重追放可レ申付哉と相伺、

御差圖　死罪

〔德川禁令考後聚二十三行刑條例〕享保十三申年八月

松平伊豆守殿御差圖　　大岡越前守掛

巽名天一坊

重犯

當時無宿
寶澤 申二十四歳

此もの儀、生國紀州和歌山平澤村ニおいて人殺いたし、其上所々ニ而盗賊を致し、其後江戸江出、公儀を偽、多之金銀を欺取候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、於品川獄門ニ行ふもの也、

無宿浪人
赤川大膳

此もの儀、先年不屆之儀有之候ニ付、主人方にて門前拂に相成、夫より所々ニ而、人殺之上盗賊いたし、其上當時無宿寶澤と申合、江戸江出、公儀を偽リ、多ク之金銀を欺取候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、於品川獄門ニ行ふもの也、

無宿浪人
本多權大夫
渡邊治大夫

此もの共儀、親元欠落致し、浪々之身故、致方なく盗賊を致し、剰當時無宿寶澤、并赤川大膳と申合、江戸江出、公儀を偽リ、多ク之金銀を欺取候段、不屆至極ニ付、町中引廻之上、死罪ニ行ふもの也、

重敲

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事
延享二年極
一奉公人ニ馴合、欠落いたさせ候請人、

但二度以上に候はゞ、請人死罪、

〔享保集成絲綸錄四十三〕享保六丑年三月
一入墨いたし追放申付候者、立歸致惡事候者有之ニ付、死罪ニ罷成候、向後は右之族致惡事候はゞ、死罪ニ可申付候間、此旨町中可觸知候、以上、

三月

〔諸例類纂五〕一天保二辛卯年八月九日大目付石谷備後守殿江差出、同十二日御附札、〇中略
一何郡何村何右衞門と申者、人家ニ而、手元ニ有之衣類雜物品々盗取候付而、右之品々取調仕候

處、金子八九兩之品ニ付、入墨敲申付候處、又其後人家留守を付込、戸前之鍵鐵をはづし這入候得共、可盗取品無之ニ付、又外人家へ罷越、壁をおとし忍入、古き小兒之衣類一ッ盗取候、右ハ再犯、殊ニ巧之義ニ付而ハ、雜物之不限多少、死罪可申付筋ニ御座候哉、

盗いたし候依科、入墨敲ニ相成候後、又候盗ミいたし候ニおいてハ、死罪難逃筋ニ有之、總而再犯ニ無之候而も、家内へ忍入、或は土藏など破候類、金高雜物之多少ニよらず、死罪相當之義ニ候得共、右ハ其時ニ臨、三奉行衆之内へ御問合有之候方と奉存候、

〔新張紙留〕嘉永四亥年

押込盗、又ハ追剝いたし候御仕置評議、

伊奈遠江守、御勘定奉行勤役之節相伺候、

目白臺町無宿直吉、人家江押込盗、又ハ追剝いたし候一件御仕置之儀、再應評議仕候趣、申上候書付、

書面向後之儀、再應評議いたし候通、可相心得旨被仰聞、承知仕候、

亥四月七日　　評定所一座

去戌口一月七日、評議仕申上候、伊奈遠江守、御勘定奉行勤役之節相伺候、目白臺町無宿直吉、人家江押込盗、又ハ追剝いたし候御仕置之儀、伺之通、引廻之上、獄門と申上候處、忍入之盗いたし候ものハ、死罪ニ而、死骸を晒し候刑ニハ無之候間、五度以上之分ハ、見懲之ため、引廻附候儀ニも可有之哉、押込之頭取、或ハ追剝之類ハ、死罪より重く、獄門と御定被置、御定書ニも度數之差別無之上ハ、五度以上、右及所業候ものニ而も、引廻ニ不及、獄門申付候方、相當之筋ニハ無之哉、武州栗坪村龜五郎御仕置當、御差圖之趣ニ拘泥不致、事實之處、今一應得と評議いたし、可申上旨被仰聞候、

此儀五度以上、忍入之盗いたし候もの之御定起立、科條類典相糺候處、寛保二戌年、大岡越前守、

町奉行勤役之節、同人掛增上寺地中所化亭弁召仕欠落權助儀、取逃いたし、其以後度々古主方江忍入、品々盗取候段、重々不屆ニ候間、町中引廻之上、死罪と相伺候處、幾度以上忍入之盗いたし候もの引廻と極置可然哉、可申上旨一座江被仰聞、其節評議之上、物之多少ニよらず、舊惡とも五度以上忍入之盗いたし候もの引廻之上、死罪と相極可然旨申上、其通可相極旨被仰聞、右例を以、御定書江被差加候儀と相聞、且引廻、晒、其外死骸を晒候御仕置ハ、見懲之御趣意之段、文化七午年、評議ニ御下ゲ被成候、松平兵庫頭、御勘定奉行勤役之節相伺候、飛州坊方村喜兵衛御仕置之儀ニ付、御書取之趣も有之、專見懲之御趣意ハ勿論ニ候得共、御定書之趣、犯科之次第ニ寄、又ハ輕重見渡ニも拘り、引廻之上、獄門、磔ニも被處候趣ニ而、死罪ハ死骸を晒候刑ニ無之候間、忍入五度以上之分ハ、見懲之ため、引廻附候儀とも強而難申哉に候得共、栗坪村龜五郎、御仕置御差圖之趣ニ拘泥不致、評議いたし可申上旨御沙汰之趣も御座候ニ付、先例等ニ不拘、先評之趣意相離、再應勘辨評議仕候處、押込追剝とも、御定には度數之差別無之候間、是又科條類典相糺候處、押込頭取ハ、元文五申年、信州西條村吉六儀、頭取いたし、同類相催、同國下岡田村自樂院方江押込、雜物品々盗取、自分宅ニ而致配分、其上詮議之及沙汰致欠落、旁不屆ニ付、頭取獄門、同類死罪ニ相成、追剝いたし候ものハ、元祿十五午年、下高輪町兵三郎儀、山王町吉兵衛と申ものを川崎まで駕籠ニ乘セ參り候節、鈴ヶ森ニ而駕籠をおろし、相肩申合、賃錢をねだり、其上吉兵衛衣類脇差金子盗取候ニ付、江戸中引廻獄門、吉兵衛儀ハ、其節行衛不知、寶永二酉年召捕、獄門ニ被行候例ニ而、尤兵三郎ハ引廻候得共、右類引廻ニ不及、御定相成候辨別ハ不相分候得共、人を殺、盗いたし候もの引廻之上、獄門之御定ニ見競候而ハ、追剝いたし候ものハ、手強之所業とハ乍申、人を殺、盗いたし候よりハ品輕候間、同等ニ而ハ相當不致譯を以、引廻ニ不及、獄門と定り候儀ニも可有之哉、且片輪ものを殺候而、所持之品盗取候ものを、人を殺盗いたし候もの

同樣引廻之上、獄門ニ御定有之候趣等合考仕候得ハ、盗人御仕置之儀ハ、猥ニ磔罪ニハ不被行方と相聞、既盗人御仕置御定ヶ條之內、引廻之上、獄門より重キハ無之候處、此上右科を犯候もの五度以上ニおよび候迚、磔ニ相成候樣ニ而ハ、御定之御趣意ニ相振可申、尤今般之直吉ハ、先例も有之、引廻附候も差支ハ無之候得共、一體之主意、前書之次第ニ付、忍入之御定ニ准じ候ハ相當いたす間敷、往々都而之罪科度數ニ應じ、差別附候事ニ成行候はゞ、混雜之基、自餘之廉々も自然御定江差響、差支之儀出來致間敷とも難申、且ハ數度之廉を以、本罪より爲重候はゞ、遠島以上之類、自本罪一等重キ御仕置ハ、爲遠島以下とも、御定ニ相悖リ候意味も有之、其上累年御仕置筋、巨細多端ニ相成、御府內ハ勿論、遠國奉行所等ニ至迄、取調手間取、其內ニハ主謀之もの病死いたし、却而御仕置之詮無之、引合之もの共も及迷惑候筋も有之、旁以御沙汰之通、押込之頭取、或ハ追剝之類、御定書ニ度數之差別無之上ハ、以來ハ押込頭取追剝共、度數ニ不拘、御定之通、引廻ニ不及、獄門其外押込同類ニ而、五度以上ニおよび候もの、引廻附候先例も有之候得共、頭取之もの重リ不申上ハ、是又引廻ニ不及、勿論右之內ニも、格別非道之及所業強盜之類ハ、其時々始末次第見込之趣取調、御仕置相伺候積、御極被置候方、往々混雜も仕間敷候間、今般之直吉も、押込追剝之犯科を束、五度以上ニおよび候迄之ものニ付、引廻ニ不及、獄門可被仰付處、病死いたし候段、追而申上候ニ付、其旨可存段、一件之もの共江申渡候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

右再應評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候帳面壹冊、書付二通、御書取共、返上仕候、以上、

亥三月

亥四月十七日

伊賀守殿御直一座江御渡、丹後守受取、

覺

向後之儀、再應評議いたし、被申聞候迄可心得候事、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政十午年十二月

太田備中守殿御差圖

一淺草茅町忠兵衞致盗候一件

町奉行 小田切土佐守掛

淺草茅町壹丁目代地吉兵衞店 忠兵衞

右之者儀、困窮ニ而、暮兼候迚、盗心懸ケ、竹之先江折釘を仕付、町方拾六ケ所ニ而、右竹を窓格子等ゟ差入、内ニ有之衣類、釘ニ而引寄盗取、右之外ケ所も不覺、所々ニ而同樣之致盗、又者格子之簾を上ゲ手を入、衣類道具等盗取、其上町家前河岸に積有之候炭四俵、或者〆り無之入口之戸を明ケ這入、杉板貫等盗取、又ハ湯屋ニ而、入湯之もの脱置候衣類盗取、剩川内ニ繫置候茶船之内ニ有之小形之金屛風、唐銅火鉢貳ツ、往所不知喜助儀、主出候はゝ、此もの方江可差越旨申ニ付、右貳品持歸り、尋來候もの無之候迚賣拂、右所々ニ而盗取候衣類等六拾壹品之内、質入又ハ賣候分、都合代金三兩壹分貳朱、錢拾六貫三百文餘ハ雜用ニ遣捨、衣類道具六品、幷板貫等所持いたし罷在、右體ケ所も不覺、所々ニ而折釘付候竹を窓格子等ゟ差入致盗候段、不屆至極ニ付死罪、

右御仕置附

右御定書ニ、晝夜ニ不限、戸明有之處、又者家内ニ人無之故、手元ニ有之輕キ品を盗取候類、入墨之上、重敲と有之候處、此もの盗致候ケ所、致白狀候分拾六ケ所ニ而、右之外ケ所も不覺、所々ニ而致盗、殊ニ竹之先江折釘を打付持歩行、窓ゟ右竹を差入盗取候段、兼而巧候致方ニ而、當座之出來心ニ而、手元之品致盗候ものとは譯違候間、去ル丑年御渡被成候御書付をも見合、死罪、

〔御仕置例類集二ノ十一〕文化九申年御渡

火附盗賊改松浦大膳伺

一武州中荒井村新兵衛初筆、御修復所に而盗いたし候一件、

武州豊島郡中荒井村　百姓　新兵衛

右之もの儀、知人之方江罷越、立歸り候砌、臺所手元ニ懸ヶ有之鐵槌、盗取質入いたし、其後請戻、內分ニ而相返し、又は同類馴合、水道橋內、土手ゟ傳ひ下り、竹垣を押分ヶ立入、丸太矢來を數度乘越入、神田上水懸樋屋根銅瓦剝し取、被見咎候節は捨置、或は不得取逃去、右銅瓦之內配分取、賣拂代錢不殘遣捨、度々盗ニ入候段、不屆至極ニ付、引廻シ之上、死罪、

此儀、手元之盗も有之候得共、水道橋外、神田上水掛樋屋根瓦可盗取旨、同類申合、水道橋內、土手ゟ傳下り、竹垣を押分け這入、丸太矢來を乘越懸樋屋根銅瓦剝盗取、或は被見咎候節は、捨置不得取候得共、都合五ヶ度、立入候趣ニ有之、天明四辰年、評議ニ御下ゲ被成候、横田大和守火附盗賊改之節相伺候、越ヶ谷無宿平五郎儀、增上寺地中、所々門ゟ這入、又は板塀朽損、離懸り有之所押離這入、屋根江樹木或は板塀より傳ひ上り、度々銅瓦盗取、追々往來之古鐵買ニ賣拂、代錢都合一貫五百文遣ひ捨候段、不屆ニ付、入墨之上、重敲、門前拂と相伺、評議之上、死罪と申上其通相濟候例ニ見合、此ものは、五ヶ度、丸太矢來乘越這入候ものニ付、家藏江忍入舊惡ニ候共、五度以上之度數盗致し候もの、物不得取候共、引廻之上、死罪之御定ニ准じ、伺之通引廻之上、死罪、

〔鼠賊白狀記〕五月十日牢屋敷へ、異名鼠小僧事御預ケ、

六月十六日入牢　　無宿入墨　次郎吉　辰ノ三拾六歲

一私儀怪敷由、當御組廻り同心衆ニ被召捕、牢屋敷へ御預ケ、其後入牢被仰付、御吟味御座候、此段私儀、新和泉町嘉兵衞店へ歌舞妓芝居出方稼致シ候貞次郎悴ニテ、同人は四年以前丑年病死イタシ、私儀幼年ノ節ヨリ、木具職ノ者方へ弟子奉公ニ參リ居リ、拾六歲ノ節、親元へ立歸リ、夫ヨリ同職ノ者方へ被雇、又ハ所々御武家方、鳶ノ者部屋等へ入込、鳶ノ者代リ等イタシ歩行候

處、身持不宜、小遣等ニ差支惡心出、盜ミ可ㇾ致ト存付候處、町家ノ儀ハ、盜難ヲ恐レ、金錢等モ嚴重ニ仕舞置、〆リ等モ右ニ准ジ、身元手厚ノ者ハ、殊更用心致シ候間、容易ニ難二忍入一、用心薄キ人家ハ、忍入候テモハカ〲敷儀モ有ㇾ之間敷、御武家方ノ儀ハ、外圍〆リハ嚴重ニ候得共、私儀幼年ノ節ヨリ、高キ場所ヲ歩行候事ニ馴レ、聊ノ手掛リ等有ㇾ之候得バ、何樣ノ危キ場所モ傳ハリ上リ候儀、イタシ覺ヘ罷在候ニ付、外圍ヲ乘越シ候得バ、盜モ致シ能ク、殊ニ長局向ハ女中而已ニテ、萬一被二見咎一候テモ、奥〆リ等ニテ、役人中モ容易ニ難二立入一候間、逃去候儀モ自由ニ可二相成一ト存付、○中略御武家屋敷七拾壹ヶ所、度數九拾度、右同樣ノ手續ニ而、長局奥向等ヘ忍入、金貳千三百三拾四兩貳分、錢三百七拾貳文、銀四匁三分盜取リ、右體御仕置相成候前後ノ盜數百貳拾貳度ノ內、御屋敷名前失念、又ハ不ㇾ覺、金錢不二盜得一モ有ㇾ之、凡金高三千八拾六兩壹分、錢八貫貳百六拾文、銀四匁三分ノ內、古金五兩、錢七百文、其場又者途中ヘ取捨、餘ハ不ㇾ殘酒食遊興、又ハ名住所不ㇾ存モノ手合ニ而、博弈ヲ渡世同樣ニイタシ、在方等ヘ持參、遣ヒ捨候段、不屆至極ノ旨御吟味請、無二申披一奉二誤入一候、

右之通相違不二申上一候、以上、

辰月　　次郎吉

異名鼠小僧事
無宿　次郎吉 辰三拾六歲

其方儀、十年以前未年以來、武家屋敷貳拾八ヶ所、度數三拾貳度、塀ヲ乘越、又ハ通用門ヨリ忍入候而、金七百五拾六兩壹分盜取、遣捨ル後、武家屋敷ヘ這入トモ盜不ㇾ得被二召捕一、入墨ノ上、中追放ニ相成處、入墨ヲ消紛シ、尙惡事不二相止一、猶又武家屋敷七拾壹ヶ所、度數九拾度、右同樣手續ニ而、長局奥向等ヘ忍入、金貳千三百三拾四兩貳分、錢三百七拾貳文、銀四匁三分盜取、右體御仕置ニ

相成候前後ノ盜ケ所、都合九拾九ケ所、度數百貳拾度ノ內、屋敷失念、又者不覺、金錢不得盜モ有之、凡金高三千百貳拾壹兩貳分、錢九貫貳百六拾文、銀四匁三分ノ內、古金五兩、錢七百文ハ取捨、其餘ハ不殘酒食遊興ニ遣捨、又ハ博弈ヲ渡世同樣イタシ、在方所々ヘ持參、遣捨始末、不屆ニ付、引廻シノ上、獄門申付

榊原主計頭申渡之

八月十九日

二罪俱發

〔御仕置例類集一ノ一〕文政八酉年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺

一盜賊兩人より定法を背、質物別廉ニ取候質屋共、不正一時ニ相顯候節、御咎之儀評議、

書面評議仕申上候通、長井五右衞門江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

評定所一座

酉

二月十一日

去申九月朔日、評議ニ御下ゲ被成候、長井五右衞門相伺候、南小田原町無宿豐次郎初筆、盜致候一件之內、中富村文七外壹人、御咎當之儀、再應評議之上、先例も有之候間、二重ニ御咎附不申方可然、且盜賊兩人より質ニ取候質屋、主謀之盜賊、別廉ニ候上は、一時ニ相顯候とも、銘々御仕置別帳ニ相伺引合之質屋等は、最初之伺江は、墨書を以、御咎之儀相伺、別帳之方江は、朱書を以、別紙ニ御咎之儀相伺候段認入候方可然旨をも申上候處、猶又榊原主計頭江、右之趣御尋有之、別紙之通、同人申上候ニ付、猶一座ニ而評議いたし、可申上旨被仰聞候、

此儀御書取幷主計頭申上候書付之趣をも一覽、再應評議仕候處、主計頭申上候通、一時ニ顯候迚、一廉之御咎ニ相成候而は、御取締も薄く可有之、畢竟不念は全一時不行屆迄之儀ニ而、御觸之趣、度々等閑ニ相心得候を、一時ニ顯候故を以、壹人之盜賊ニ引合候質屋と同樣ニ御咎申付

舊惡

候而は、下々ニ取、自ら懲戒ニ不相成樣成行可申哉、其上猶又先例相糺候處、寛政元酉年、評議ニ御下ゲ被成候、大坂町奉行相伺候、天滿十壹丁目平野屋小兵衞支配借家、合羽屋三右衞門外壹人儀、公事出入筋之儀、內分役人江賴込候儀は、勘兵衞如何樣ニ相賴候とも、決而得心いたす間敷處、無其儀容易ニ受込、三右衞門儀、勇藏ニ相賴、勇藏は萬助江賴遣候段、不埒ニ付、勇藏は所拂申付、三右衞門儀も同樣可申付哉之段可奉伺ものニ御座候得共、先達而、名目銀貸附方之儀ニ付、不屆之取計仕候もの一件之內ニ而、銀子調達之間期を延し可申ため、名目銀借受居候妾ニ取拵、返濟相滯旨、支配人江爲相願、先出入引上ニ相成候ニ付、謝禮金差遣候段、公儀を不恐仕方、不屆ニ付、中追放可申付哉之旨奉伺置候ニ付、右一件御下知も有之候はゝ、此度之不埒も相込、重キ御仕置之方江引付、御仕置申渡候樣可仕哉と相伺、評議之上、勇藏は過料錢五貫文、三右衞門は右名目銀一件之御咎は過料錢拾貫文申付、今般之不埒は、勇藏同樣別段過料錢五貫文と申上、其通り相濟候例も有之候間、旁今般之中、富村文七外壹人儀も、別紙主計頭申上候通り、五右衞門ゟ差上候伺書も別冊に引分ケ、御咎も兩度ニ御下知御座候方可然哉ニ奉存候、

酉二月〇中略

御書取

盜賊貳人被召捕候處、盜賊同士は、引合無之別件ニ有之、右盜賊貳人共、盜物質ニ置候質屋は、壹人ニ有之候、右質屋は、二重ニ咎附候哉、別件ニ而も、一時之儀故、一ト通りニ咎附候哉之事、

〔御定書百箇條〕舊惡御仕置之事

追加延享元年極
一逆罪の者

寛保三年極
一邪曲にて人を殺候者

同二年極
一火附

一（同）徒黨致、人家江押込候者、

一（延享元年極）追剝幷人家江忍入候盜賊

一（同追加）都て公儀之御法度を背き、死罪以上之科に可被行者、

但役儀に付て、私欲致押領候者ハ、輕候共、相應之咎可有之事、

一（追加寬保三年極）惡事有之、永尋申付置候者、

（延享元年）右者舊惡に候共、御仕置相伺可申候、此外之科、一旦惡事いたし候共、其後相止候由申之、尤外沙汰も於無之は、十二ヶ月以上之舊惡は不及咎事、

但十二ヶ月內より吟味取懸り、十二ヶ月以後吟味濟候共、舊惡には不相立候事、

〔御定書百箇條〕（追加）吟味事之內、外之惡事相聞候共、舊惡御定之外は不及相糺事、

一（延享二年極）總て吟味事之內ゟ、外にも惡事有之趣相聞候とも舊惡をも不被免品々は格別、其餘之惡事は不及相糺、最前ゟ取掛候吟味を詰、相應に御仕置可申付事、

〔科條類典 下一〕寬保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

十八（伺）舊惡御仕置之事

一火附

一致徒黨、人家江押込候類

一追剝之類、幷重キ盜人、

一人殺

右之類ハ、舊惡ニ候共、御仕置相伺可申候、此外一旦渡世之ため惡事いたし、其後不宜事と存付、相止候儀、證據分明ニおゐてハ咎に不及事、

此所懸紙

朱書
是ハ享保四亥年、深川森下町藤兵衛、本所永倉町吉兵衛、下谷金杉市兵衛、此三人、以前似せ銀いたし、其後惡事と存相止候段分明ニ付、輕過料、

懸紙

朱書
是ハ享保四亥年、井上河内守殿、爲ニ心得一御見せ被レ成候御書付之趣を以、先達而、過料又ハ相當之咎可ニ申付一旨書載候得共、猶又評議仕、火附之儀書加、且又惡事と存、相止候證據分明之上ハ、咎ニ及間敷奉ニ存候ニ付、書改奉ニ伺候、

〔科條類典下一〕寛保三亥年二月、御好御書付之内、

　舊惡御仕置之内

一人殺

朱書
如レ此有レ之候得共、左之通可ニ相改一哉、

朱書
一邪曲ニ而、人を殺候もの、

寛保三亥年二月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守、伺之内、

　舊惡御仕置之内

△一人殺

朱書
如レ此有レ之候得共、左之通可ニ相改一哉、

朱書
一邪曲ニ而、人を殺候もの、

此所懸紙

朱書
但人を殺候もの之由、親類ニ而ハ無レ之、横合より訴人有レ之候共、數年を經候はゞ無ニ取上一、尋申付置候ものニ候はゞ、取上可ニ致ニ吟味一事、

朱書
右御好之趣、奉ニ承知一評議仕候處、人を殺候ものは、年經候而も、其科相顯候ニおゐて

ハ、下手人、又ハ死罪にても只今迄之通可然哉、其上享保四亥年、被仰出候別紙御書付之通、相止候と申境も無之事ニ候、邪曲と有之候而ハ、喧嘩口論ニ而、人を殺候ものハ、其科無之様ニ相聞、御仕置ゆるみ候様ニ可罷成候、右但書之趣、書加可然奉存候ニ付、今一應奉伺候、

御下札

此朱書之趣、尤相聞候、但書左之通ニ而可然哉、

但邪曲之品にて無之候共、永尋申付置候ものハ、可致吟味事、

懸紙

但邪曲之品にて無之候共、永尋申付置候ものハ、可致吟味事、

朱書 此但書御下札御下知之趣、御尤奉存候懸紙を以、相改申候、

御下札

此永尋之もの之儀、但書ニ認候様ニと最前被仰出候得共、左之通壹ヶ條加江、舊惡御仕置都合五ヶ條致し可然哉、

一邪曲ニ而、人を殺候もの、

一惡事有之、永尋申付置候もの、

懸紙

一邪曲にて、人を殺候もの、

一惡事有之、永尋申付置候もの、

朱書 是ハ猶又御下ゲ札御下知之趣承知仕、御尤ニ奉存候、則懸紙を以、相改申候、舊惡御仕置之儀、都合五ヶ條ニ相認申候、

延享元子年六月、大岡越前守、島長門守、水野對馬守伺之内、

舊惡御仕置之奥書

右之類ハ、舊惡ニ候とも、御仕置相伺可ㇾ申候、

此舊惡と計有ㇾ之而、年月限り無ㇾ之候而ハ如何ニ候、月限り評議いたし可ㇾ申上候、十二ヶ月以上を舊惡と定可ㇾ然哉、如何、

朱書 右御尋之趣、御尤奉ㇾ存候、夫付猶又評議仕候處、舊惡御仕置之儀、本文之外ニも、御定書之内、舊惡ニ而も、御仕置ニ可ㇾ成品、數多有ㇾ之候ニ付、相改可ㇾ然哉、尤舊惡月數之儀も、左之懸紙之通書入可ㇾ申候、

舊惡御仕置之事

一火附　　一致ㇾ徒黨、人家江押込候類、

一追剝之類、幷重キ盜人、　　一邪曲に而、人を殺候もの、

○一惡事有ㇾ之、永尋申付置候もの、

右之類ハ、舊惡ニ候とも御仕置相伺可ㇾ申候、此外一旦渡世之ため惡事いたし、其後不ㇾ宜事と存附、相止候儀、證據分明におゐてハ咎ニ不ㇾ及事、

懸紙

○

舊惡御仕置之事

一都而舊惡之儀、十二ヶ月以上を舊惡と可ㇾ相定、尤十二ヶ月内ゟ吟味取懸り、十二ヶ月以後吟味濟候とも、舊惡ニハ不ㇾ相立事、

一舊惡ニ候共、總而御仕置相伺可ㇾ申事、

但一旦渡世之ため惡事いたし、其後不ㇾ宜事と存附、相止候儀、證據分明ニおゐてハ咎

ニ不ㇾ及事、

御下ヶ札

此懸紙之文言ニ而ハ、火附以下、此五ヶ條ニ書出シ候、重キ惡事いたし候ものも、又ハ輕キ惡事之ものも、今程相止メ候と申候ハヽ、一同咎ニ不ㇾ及ニ可ㇾ相成哉、爰ハ今迄之通舊惡ニ而も不ㇾ免科五ヶ條、猶又外ニも書加へ可ㇾ申品有ㇾ之候ハヽ書加へ、ヶ條書ニ出し置、此外之輕キ科、十二ヶ月以上之舊惡ハ、咎ニ不ㇾ及と相極可ㇾ然事、

懸紙

一火付

一追剝之類、幷重キ盜人、

一惡事有ㇾ之、永尋申付置候者、

一同案內いたし候もの

一隱鐵砲

一人勾引

一重キかたり事

一重キ御役人之家來と僞、かたりいたし候もの、

一毒藥商賣いたし候もの

一人殺

一致ㇾ徒黨、人家江押込候類、

一邪曲にて、人を殺候もの、

一關所を除、山越いたし候もの、

一同忍び通り候もの

一打荷或ハ破船と僞、荷物致ㇾ押領候もの、

一謀書謀判

一逆罪之もの

一科人爲ㇾ立退住所を隱候もの、

右之類ハ、舊惡ニ候共、御仕置相伺可ㇾ申候、此外輕キ科、幷一旦渡世之ため惡事いたし、其後不ㇾ宜儀と存付、相止候證據分明においてハ、十二ヶ月以上之舊惡ハ不ㇾ及ㇾ咎事、

但十二ヶ月內ゟ吟味取懸り十二ヶ月以後吟味濟候共、舊惡ニハ不ㇾ相立事、

（朱書）右御下札之趣を以、猶又評議仕、科付箇條書入、懸紙いたし奉伺候、

懸紙

極　一逆罪之もの　　　一邪曲ニ而、人を殺候もの、

一火附　　　一致徒黨、人家江押込候もの、

一追剝幷人家江忍入盜人

一都而公儀之御法度を背き、死罪以上之科ニ可被行もの、

但役儀ニ付、私欲押領いたし候ものハ、輕ク候共、相應之咎可有之事、

一惡事有之、永尋申付置候もの、

右ハ舊惡ニ候共、御仕置相伺可申候、此外之科、一旦惡事いたし候共、其後相止候由申之、尤外之沙汰も無之においてハ、十二ヶ月以上之舊惡ハ不及咎事、

但十二ヶ月ゟ內吟味取懸り、十二ヶ月以後吟味濟候とも、舊惡ニハ不相立事、

（朱書）右御書付之趣奉承知、御尤ニ奉存候、御下知之通懸紙仕、猶又奉伺候、

右延享元子年八月二日、伺之通御下知、本文極ル、

〔公裁秘錄〕舊惡御仕置之事

舊惡之儀、御法度を背候事候間御仕置ニ可成候得ども、重キ盜致、或人を殺候品など、假令相止候と申候而も、さかひも無之事候、渡世の爲に、一旦惡事致候へども、其後不宜事と存、相止候段、分明ニ付ては、其品を被立、過料又相當ニ咎可有之事、

〔勘要記〕寶曆十三未年九月廿七日

舊惡ニ不立質屋之事

評定所一座江

芝山小兵衞、盜賊改勤役之節相伺候、上總國刑部村百姓七平咎之儀、一座評議之上、舊惡ニ付、咎及間敷旨、先達而申聞候得共、七平質物取方之不念ハ舊惡ニ候得共、其品其砌賣拂候歟、形殘シ不申候ハヽ、舊惡ニ可相立候得共、今以所持致シ罷在候上ハ、不念之筋不消方ニ付、舊惡ニ不相立質物取上、過料錢三貫文申付候間、可被得其意候、

九月

〔張紙留〕舊惡幷六十日以上入牢之もの、不及御咎段申渡之儀、前々ハ御仕置之當リハ不申聞候處、近來御下知書、委申渡候樣ニ相成候、以來ハ前々之通、所拂以上ニ相當候ものハ、御仕置可申付處と申渡、役儀取放、手鎖過料以下之ものは、急度可申付處と申渡ス、

右明和八卯十月十一日、一座評議極ル、

〔御仕置例類集 一〕明和八卯年御渡

御勘定奉行安藤彈正少弼伺

一吟味事之內、密通之舊惡有之趣相聞候もの、取計方之儀ニ付評議、

一小林孫四郎御代官所野州那須郡東沓掛村百姓三左衞門甥次兵衞儀、不行跡ものニ而、品々不埒有之、其上伯父三左衞門を致打擲、母を突倒、刃物を振廻し、惡口致し候段、三左衞門幷五人組一同、孫四郎方江訴出候由ニ而、差出候ニ付、一件吟味仕候處、訴之趣無相違相聞申候、親を致打擲候もの磔、同切懸り候もの死罪、伯父を致打擲候もの之御定ハ無之候得共、遠島にも相當可申哉、孰にも死刑ハ難遁ものニ御座候、然ル處、寶暦十辰年二月、同郡遲澤村百姓定右衞門女房つると次兵衞密通之上、誘引出候處、取扱人有之、金貳兩、定右衞門江遣、內濟いたし、定右衞門ハ去ル亥年病死仕、つるは、當時も次兵衞女房ニ而罷在候由ニ相聞申候、此儀御定書ニ、總而吟味事之內ゟ外ニも惡事有之趣ニ相聞候共、舊惡をも不被差免品々ハ格別、其餘之惡事ハ不及相

糺、最前より取懸り候吟味を詰、相應之御仕置ニ可申付と有之、右御定之最初ハ、全密通之儀ニ御座候、然ル處舊惡御仕置之ヶ條ニ、舊惡ニ候共、御仕置相伺可申內、都而公儀之御法度を背、死罪以上之科ニ可被行ものと有之、夫有之女之密通ハ、死罪ニ御座候間、舊惡ニ候共、不差免內ニ可有御座候處、舊惡御仕置之御定ハ、度々御尋有之、舊惡ニ不相立分、ヶ條多申上候儀ニ御座候處、右ヶ條之內ニ、密通之科ハ相見不申候、左候得バ密夫逃去候ハヾ、妻ハ夫之心次第ニ可申付旨之御定故、公儀之御法度を背候ヶ條江ハ、入不申儀にも可有御座候哉、然ル上ハ、前書今般之一件ニ不限、都而出訴外ニ、密通之儀を申出候而も、相糺候ニ不及、吟味之引合ニ而、難捨置吟味詰候而も、舊惡ニ相立候筋ニ可有御座候哉、又ハ御仕置相伺候筋ニ可有御座候哉、決定難仕御座候間、評定所一座ニおゐて、評議有之候樣仕度旨申上候、

此儀御定書、舊惡ニ候共、御仕置相伺可申ヶ條之內、

一都而公儀之御法度を背キ、死罪以上之科ニ可被行もの、

右之通有之、都而御仕置ニ相成候科ハ、公儀之御法度を背キ候ニ而可有御座處、夫有之女之密通ハ、死罪之御定ニ御座候間、舊惡ニ相立申間敷候處、御定書之內、惣而吟味事之內ゟ、外ニも惡事有之趣相聞候共、舊惡をも不被差免品々ハ格別、其餘之惡事ハ不及相糺、最前ゟ取懸り候吟味を詰、相應之御仕置可申付と有之、延享二丑年、御內意之御趣意も御座候得共、夫無之女之密通之儀ニ而も可有御座候哉と評議仕候處、都而御仕置ニ相成候科、公儀之御法度を背候趣意ニ御座候ハヾ、前書舊惡ニ不相立ヶ條も、死罪以上之科と計可有之處公儀之御法度を背候と有之候間、死罪御仕置之內ニも、差別可有御座候哉、然處夫有之女、密通之科、舊惡ニ相立候ニ極り候而ハ、御仕置ゆるみニ相成、如何ニ御座候間、延享二丑年、御內意之通ニ相心得可申旨被仰渡、可然哉ニ奉存候、

巳十一月

〔科條類典下一〕享保四亥年御書付

深川森下町伊兵衞店紺屋太兵衞事　藤兵衞

本所永倉町喜兵衞店　吉兵衞

下谷金杉五丁目裏通新兵衞店　市兵衞

右三人事、以前似せ銀いたし、其後惡事ニ存、相止候由申候得共、當人申分計ニ而は、證據も無之儀ニ候、然共彼是遂吟味候之處、相止候段無紛相聞候、其上差ロいだし候長兵衞も、右三人之もの申通、追而は相止候旨申候、當時似せ銀不致候迚も、以前御法度を背候事ニ候間、御仕置ニ可成候得共、重キ盜致、或は人を殺候品抔は、たとひ相止候と申候而もさかひも無之事ニ候、似せ銀は渡世之儀ニ而、一旦仕候得共、其後不宜と存止候段、其譯分明ニ付而其品を立られ、今度三人之もの出牢之上、少々過料可申付候、

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶曆十一巳年五月

小幡山城守

野州都賀郡富張村箱訴一件吟味之內、同國大塚村藤七女房せん儀、惣左衞門忍入候儀を盜賊之趣ニ申立候處、今般吟味之上、度々不義申懸候由申之、同國原宿村孫七、幸七、喜曾八、平左衞門、任申旨、惣左衞門死骸を村境江捨候由、是又今般吟味之上、孫七、幸七は惣左衞門を組伏、新藏、平左衞門兩人ニ而、〆殺候ニ付、喜曾八倶々手傳、死骸を俵へ入、村境江捨候由申之、最初之吟味不行屆、且舊惡ニ付、咎ニ及間敷旨被相伺候處、人殺之當人、相果候者、舊惡ニ相立候例無之候ニ付、今般御仕置被相伺候、右之趣ニ候はゞ、最初ニ心附可被相伺處、不心付之儀、旁不行屆事候、

〔公案比事三十〕寬政三亥十一月十二日、松平和泉守殿御書取相添、曲淵甲斐守上ル、

去月廿四日御渡被レ成候

死罪以下ニ可レ成盗致候者、舊惡之儀、評議仕候趣申上候書付、　評定所一座

去月廿四日御渡被レ成候御書取、一覽仕候處、死罪以下ニ相成候盗賊舊惡之儀、御定之趣にては、死罪以下は、舊惡に相立候樣相見候得共、右は吟味之節、申口人體等にて、心底相改候樣子見定候上、舊惡ニ相立、當時之商體、暮し之樣子、近邊之風聞等も承候上、相伺候事ニ候哉、又は十二月以上ニ候得ば、都而舊惡ニ相立、相伺候事ニ候哉之段被二仰聞一候、

此儀死罪以下ニ可二相成一盗賊、十二ヶ月以前之盗之分、都而舊惡ニ相立、相伺候儀ニ者無二御座一、御定書ニ茂一旦惡事致候共、其後相止候由申レ之、尤外之沙汰も無レ之ニおゐては、十二月以上之舊惡は不レ及レ咎事と有レ之候間、一旦盗致候得共、右盗死罪以下ニ可二相成一品ニ而、其後相止候由申レ之、御書取之通、當時之商賣體、暮之樣子等、怪敷儀も相聞不レ申、或は村役人、町役人抔、其外近邊之者共、決而怪敷儀無レ之段申立、吟味之上、其後相止候儀分明ニ而、十二ヶ月以上之惡事ニ候得ば、舊惡ニ可二相立一哉ニ御座候得共、盗致候者、たとへ相止候と申候ても、多分は其境も無レ之儀ニ付、分明ニ無二御座一候得ば、舊惡には難二相立一儀と奉レ存候、

右評議仕候趣、書面之通ニ御座候、御渡被レ成候御書取壹通、返上仕候、以上、

亥十一月

〔公裁筆記附錄五〕一盗賊舊惡ニ相立候事○中略

盗賊舊惡之儀伺書　享和元酉六月、菅沼下野守伺

書面伺之通可レ仕旨被二仰渡一奉二承知一候

菅沼下野守

去ル亥年、松平和泉守殿御書取を以、死罪以下に相成候盗賊舊惡之義、御定之趣にては、死罪已

下は、舊惡に相立候樣相見候得共、右者吟味之上申口人體等ニて、心底相伺候事に候哉之段、評定所一座江御尋有之候に付、評議之上、死罪以下に可相成盜賊、十二ヶ月已前盜之分都て舊惡に相立伺候義には無御座、御定書にも、一旦盜いたし候得共、其後相止候由申之、外之沙汰も無之ニおゐては、十二ヶ月以上之舊惡は不及咎事と有之候間、一旦盜いたし候得共、右盜死罪以下に可相成品にて、其後相止候由申之、御書取之通、當時之商體暮之樣子等、怪敷義も不相聞、或は村役人抔、其外近邊之もの共、決て怪敷義無之段申上、吟味之上、其後相止候義分明にて、十二ヶ月以上之惡事に候得ば、舊惡に可相成哉に御座候得共、致盜候もの、假令相止候と申候共、多分は其境も無之義に付、分明に無御座候得ば、舊惡には難相立趣、一座ゟ申上置候、然ル處、此度菅沼安十郎御代官所村々爲取締手代差遣候節、武州橘樹郡小杉村百姓儀右衞門悴清八郎、先年致盜候ものゝ段相聞、召捕候處、安十郎申聞候に付、爲差出吟味仕候處、去ル亥年、河原に積有之麤朶盜取、其後去ル丑年、村內百姓平藏軒下に積有之炭盜取賣拂、殘積置候を、平藏見付、所持之品に付、可訴出旨申聞候故、兼て知人同村甚兵衞相賴賣拂候代錢內證にて被盜主江差戾候段、白狀仕候に付、右者手元に有之品を、與風盜取候類に見合、入墨之上敲相當り候處、其後致盜候義決て無之旨申之候に付、村役人共近邊のもの共をも呼出相糺候處、近年農業出精いたし、怪敷風聞等曾て無之旨申之、一體之樣子無相違相聞候ものは、假令相止候由申之候共、當人申口計にて、舊惡には難相立候得共、此度之清八郎義は、怪敷風聞も無之、惡事之年數も相立候義故、舊惡に相立候方に可有御座旨評議仕候處、去ル亥年和泉守殿御尋有之候後、右體之例も無御座候間、此段奉伺候、以上、

酉六月

〔御仕置例類集二ノ二十六〕文化元子年御渡

火附盜賊改戸川大學伺

一無宿政之助初筆博弈いたし候一件

飯倉町四丁目忠兵衛店　新右衛門
外三人

右之もの共儀、政之助宅ニ而一同手合ニ而加り、廻り筒ニ而五六拾錢賭之籤博弈両度いたし候段、不屆ニ付、銘々重敲可申付處、舊惡之儀ニ付差免、

此儀博弈いたし候者、去々亥年之儀ニ付、舊惡之故を以、御仕置差免可申旨相伺候間、取調候處、御定書舊惡御仕置ヶ條之内、逆罪、人殺、火附、押込、追剝幷忍入之盜人、又ハ御法度を背、死罪以上之科ニ可被行もの、惡事有之、永尋申付置候もの之外者、一旦惡事いたし候とも、其後相止候由申之、尤外之沙汰も無之ニおゐてハ、十二ヶ月以上之舊惡ハ不及咎事と有之、此もの共一件之內、政之助宅ニ而、五六拾錢賭之廻り筒籤博弈両度いたし候者、去々亥年六月七月両月之儀ニ而、其後相慎、博弈いたし候儀は無之段、吟味詰ニ申上候儀ニ付、前書之御定ニ見合伺之通、重敲可申付處、舊惡之儀ニ付差免、

朱書 評議之通濟

芝森元町彌五郎店十太郎親　安右衛門

石之もの儀、政之助宅ニ而、一同手合ニ加り、廻り筒ニ而五六拾錢賭之籤博弈両度いたし候段、不屆ニ付、重敲可申付處、訴出、殊ニ舊惡之儀ニ付差免、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、戸川大學方ニ而、一件之内無宿政之助吟味之上、同人依申口、去子八月中、此もの呼出し申遣候處、家業用ニ而罷出、不相歸由、家主彌五郎訴出、其節より同人江日限尋申付置候處、此もの信州邊江罷越、立歸候途中、大學方ゟ尋之趣及承候由ニ而、同人方江欠込訴いたし候趣ニ有之、左候得バ、此ものハ何故之呼出ニ候哉、吟味之始末も不相辨、驅込訴いたし

候ものニ付、博弈之同類被召捕、吟味ニ相成候を承り、自訴いたし候とは趣意も違候得ハ、科書之内、訴出候と申文言は不相當ニ相聞、尤博弈いたし候始末は、前書新右衛門外三人同様之ものニ付、伺之通、重敲可申付處、舊惡之儀ニ付差免、

朱書
評議之通濟

同町元政之助家主　喜四郎

右之もの儀、政之助を店ニ差置候砌、同人儀、宅ニ而人集メいたし、兩度迄鑾博弈宿いたし候處、曾而不存候由申之候得共、右體人集メいたし候ハヽ、心附方も可有之處、無其儀、畢竟常々申付方不行屆、見廻り等、等閑故之儀、不埒ニハ候得共、去亥年秋中以前之儀ニ而、舊惡ニ付、咎之不及沙汰、

此儀御定書ニ、博弈宿并筒取いたし候もの之家主、身上ニ應じ過料之上、百日手鎖と有之ニ見合、身上ニ應じ、過料之上百日手鎖可申付處、去々亥年之儀ニ而、舊惡ニ付、伺之通咎之不及沙汰、

但本文之不埒ニ付、急度も可申付處と申文言、科書江認入可申渡、

朱書
評議之通濟

右　喜四郎店元政之助北隣同店　金六

外三人

右之もの共儀、政之助宅ニ而、人集メいたし、兩度迄鑾博弈宿いたし候處、右體之儀、曾而不存候由申之候得共、隣家并向側ニ罷在候ハヽ、心付方も可有之處、無其儀、不存罷在候段、不埒ニは候得共、去亥年秋中以前之儀ニ而、舊惡ニ付、咎之沙汰不及、

此儀御定書ニ、三笠附博弈、取退無盡宿、兩隣并五人組、身上ニ應じ過料、同町內家並、過料三貫文宛、向側小間ニ應じ過料と有之ニ見合、金六は身上ニ應じ過料、傳藏外貳人ハ、小間ニ應じ過料可申付ものニ御座候處、一件之內、善四郎同樣舊惡之儀ニ付、伺之通、咎之不及沙汰、

但本文之不埒ニ付、一同急度も可ㇾ申付處と申文言、科書江認入可ㇾ申渡、

朱書 評議之通濟

同町名主　與右衛門

右之もの儀、支配いたし候、町內政之助宅ニ而人集メ、兩度迄鑒博弈宿いたし候處、曾而不ㇾ存候由申ㇾ之候得共、右體之始末、不ㇾ存罷在候段、不埒ニハ候得共、去亥年秋中之儀ニ而、舊惡ニ付、咎之不ㇾ及ㇾ沙汰、

此儀御定書ニ博弈ヶ條之內、名主町方在方とも、過料五貫文と有ㇾ之ニ見合、過料錢五貫文可ㇾ申付處、一件之內、金六外三人同樣舊惡之儀ニ付、伺之通、咎之不ㇾ及ㇾ沙汰、

但本文之不埒ニ付、急度も可ㇾ申付處と申文言、科書江認入可ㇾ申渡、

朱書 評議之通濟

同町喜四郎店元政之助地主
小普請組彥坂九兵衛組
伊藤砂之助

右之もの儀、拜領町屋敷ニ元住居いたし罷在候、政之助儀、宅ニ而兩度迄人集メいたし、鑒博弈宿いたし候處、右體之始末、曾而不ㇾ存候由申ㇾ之候得共、常々心付方不行屆、不念ニハ候得共、去亥年秋中之儀ニ而舊惡ニ付、咎之不ㇾ及ㇾ沙汰、

此儀寬政四子年、評議ニ御下被ㇾ成候、松平左金吾火附盗賊改之節相伺候、御鐵炮玉藥奉行近藤六右衛門、中西彌右衛門組小島又右衛門儀、拜領町屋敷四ツ谷坂町貸屋を建、佐次右衛門江家守爲ㇾ致置候處、店ニ差置候辰次郎儀、御法度相背、長半鑒博弈之宿いたし候儀、不ㇾ存罷在候段、常常申付方等閑故、右體之儀不埒ニ付、右地面、五ヶ年之內取上と相伺、評議之上、伺之通と申上、其

加減罪

通相濟候例ニ見合、五ヶ年之內、地面取上可ㇾ申處、舊惡之儀ニ付、伺之通咎之不ㇾ及二沙汰一、

但本文之不埒ニ付、急度も可二申付一處と申文言、科書江認入可二申渡一、

朱書
評議之通濟

○按ズルニ、此伺書中、去々亥年、或ハ去子八月中ナドアリテ、前後錯亂シ、首標ノ年代ト合ハザルハ、蓋シ子年評議ニ下付シテ、其評決ハ丑年ニアリシ故ナラン、

〔御仕置例類集一ノ三十二〕文政元寅年御渡

甲府勤番支配伺

一無宿清助、博奕いたし候一件、

御代官鈴木傳市郎支配所甲州山梨郡下鍜冶屋村　次郎左衛門

右之もの儀、去々子年四月、背二御法度一、自分宅ニ而、無宿清助、其外之ものどもと、廻り筒簺博奕壹度いたし候段、不屆ニ付、重敲可二申付一處、舊惡之儀ニ付、咎之不ㇾ及二沙汰一、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、催促候儀無ㇾ之、宿錢等取候儀も不二相聞一候間、寛政六寅年之御書付ニ見合、伺之通、重敲相當之ものニ御座候處、去々子年之儀に而、舊惡之儀ニ付咎之不ㇾ及二沙汰一、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

延享二年極追加
一自二本罪一一等重キ御仕置は、可ㇾ爲二遠島以下一之事、

重追放ハ　入墨又ハ敲候上 重追放
中追放ハ　重追放
輕追放ハ　中追放
所拂ハ　江戶拂

但都て右之輕重に可二心得一事

一同
一自本罪一等輕キ御仕置之事

死罪ハ　遠島 重追放

遠島ハ　中追放

但都て右之輕重ニ可心得事

享保二年極
延享元年極 追加

一田畑持高之内半分或ハ三分二、三分一取上候ものは、

持高三分二可取上分 過料一反歩ニ付　五貫文ツヽ

同半分可取上分 同過料一反歩ニ付　三貫文ツヽ

同三分一可取上分 同一反歩ニ付　貳貫文ツヽ

附加刑

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

享保八年極
一二重御仕置

役儀取上　過料

過料之上　戸〆 手鎖

敲之上　追放 所拂

入墨之上　追放 敲 所拂

除刑日

〔評定所格例〕[illegible] 崩御之砌、公事吟味物之事、

附

御法事中申付候咎之事

享保十七子年八月

一法皇崩御ニ付、初御月忌迄は、死罪は無用ニ可仕候、初御月忌は、來月六日ニ候、御法事來月六日過迄有之儀ニ可有之候間、六日以後死罪之もの初メ候はゞ、一應伺候上、初候樣ニ可仕候、尤來月六日前、又々伺候樣、松平左近將監殿と、月番三奉行江被仰聞、且無急度御演說有之候ハ、追拂等ハ、格別ニ候、遠島ものは、死罪ニ而無之候得共、心得も可有之事、

但右ニ付、六日過、死罪御仕置彌可申付哉之旨、九月三日左近將監殿江三奉行伺候處、御法事於京都來ル十六日迄御執行之事ニ候間、於當地死罪之義、十六日迄は、可延引旨御書取を以被仰聞、

寬延三午年四月

一仙洞崩御ニ付、先格御仕置有之日數之內、御吟味被成候得ば、三四十日過候而申付候事も有之、六十日程之義も有之、於京都は重き御事故、此度も三四十日程も相立候而、死罪之もの伺等出候筋ニ可有之哉、日數五十日も過候而と有之儀ニ而、其例ニも相成候事故、其間ニ而可然哉、急度被仰渡候事ニハ無之旨、同五月三日、堀田相模守殿、町奉行能勢肥後守江心得のため被仰聞候、

但右日數之內、死罪以上之御仕置は、不申付筈ニ候、勿論伺書差出候義は、重御仕置ニ而も無構上候積り、同四日一座評議極、

寶曆十二午年七月

一先帝崩御ニ付、評定所幷手限吟味物、死罪遠島御仕置は、三十日程見合、追放敲等之御仕置ハ、此節ゟ無構申渡候樣可仕哉之旨、酒井左衛門尉殿江、月番三奉行相伺候處、於京都御法事相濟候

以後、死罪以上御仕置は申渡、其外伺之通相心得可申旨、同八月三日被仰聞候、

安永八亥年十一月

一主上崩御ニ付、評定所幷手限吟味物御仕置申渡之義、寶暦十二午年之通相心得可申哉之段、田沼主殿頭殿江月番三奉行相伺候處、追放敲等之御仕置ハ、此節より申渡、遠島御仕置は三十日過候はゞ申渡、死罪御仕置之儀は、三十日過相伺可申旨、同月十七日被仰聞、

安永九子年二月一座評議極

一御仕置もの等申付候儀、差扣可申旨之御書付出候節は、叱リニ而も不申付、拷問、手鎖、或牢舍、或縄懸之類、可為無用旨之御書付出候節は、無益ニ長逗留為致候ハ、難義之儀、却而御憐愍之筋ニも不當候間、過料急度叱候類は、申渡、平日御精進日御仕置除日ニも、過料急度叱は申渡候積り、

〔御書付留〕元治元子年六月廿四日

朝廷御誕辰及御忌日除刑日御書付

三奉行江

朝廷御忌日ニ、重罪者勿論、輕罪之もの仕置申付間敷旨被仰出候ニ付、右御日柄、左之通可被相心得候、

光格天皇　御忌日　十一月廿九日

新清和院〇光格后欣子内親王　御忌日　六月廿日

新待賢門院〇仁孝后正親町雅子　御忌日　七月六日

右御日限御仕置申付間敷候、尤右者御忌月計相憚可申候、

一仁孝天皇、新朔平門院〇仁孝后鷹司祺子御忌日之儀者、兼而被仰出候通、例月相憚可申候、

一今上御誕辰之儀も、被仰出之通相心得可申候、

右之通相觸候間、可被得其意候、

三奉行江

〔御書付留〕慶應三卯年三月

朝廷御忌日除刑日御書付

朝廷御忌日、向後除刑日左之通、

仁孝天皇　御忌日　二月六日

新朔平門院　御忌日　十月十三日

右御穪忌日而已、御仕置申付間敷候、

孝明天皇　御忌日　十二月廿九日

右御日限、例月相憚可申候、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保三戊戌年十一月八日

御仕置除日月日之事、向後無御構、但重キ御祝日、且又御祥月之御忌日、前日、除可申候、

右之通何も相心得罷在候、依之申上置候、以上、

享保三戌年十一月八日　評定一座

〔聞訟秘鑑〕一口書詰文言之事

是者御叱リ、急度御叱リ、手鎖、過料等ニ可成と見込之分は、不束或は不埒と認、所拂、追放等ニも可成者は、不届之旨と認、死罪ニも可及ものは、不届之旨御吟味奉請候而者無申披奉誤入候と認候由、其餘重キ御仕置ニ可成者は、其節詰方可承合候事、

但不埒詰は勿論、不届と認候者も、重々抔とは容易に不詰事、

〔御仕置例類集一ノ七〕文化十二亥年御渡

大坂町奉行伺

一攝州鷹合村常次郎、取拵之證文を以出訴いたし候一件、

重田又兵衞御代官所攝州鷹合村　常次郎

右之もの儀、〇中略重々公儀を不恐致方、不屆至極ニ御座候得共、右巧之儀は吟味之上相顯、不遂事を、賄賂之金子茂、受納不致差戻候儀ニ付、重追放、

此儀、〇中略雇主伊助庄七ニ隨居候身分とは乍申、公儀を不恐仕方、重々不屆ニ付、遠島と相伺、評議之上伺之通と申上、其通り相濟候例ニ見合、遠島、

但科書之内末之文言、不恐公儀を仕方不屆ニ付と直、其餘は相省可申渡、

朱書 評議之通り濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文化十三子年御渡

御勘定奉行曲淵甲斐守伺

一伊豆國附八丈島之内三ッ根村孫兵衞悴本次郎、親を打殺候一件、

杉庄兵衞支配所伊豆國附八丈島之内三ッ根村百姓孫兵衞悴　本次郎

右之もの儀、親孫兵衞并弟次郎、一同焚火いたし居候處、薪持參候樣、次郎江申付遣候を、孫兵衞儀憤り、此もの取ニ可參處、召仕には無之弟江申付候段、不埒之旨叱りを請、親の機嫌を損じ候儀、殘念ニ存候迄は覺罷在、逆昇いたし、其後之始末不辨と之申分難立、有合候薪燃さしを以、孫兵衞を打擲いたし、同人即死爲致候始末、重々不屆至極ニ付、於島死罪、

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政七申年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一甲州上條北割村權五郎儀、祖母まけ江對し、不屆之取計いたし、まけ及死候一件、

林金五郎當分御預り所甲州巨摩郡上條北割村百姓　權五郎
右之もの儀、○中略始末不屆至極ニ付、引廻之上、獄門、
〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政四巳年御渡

町奉行榊原主計頭伺
音羽町林藏店　重次郎
一音羽町八丁目林藏店重次郎儀、先江對及ニ不法ニ候一件、
右之もの儀、○中略右戸を打破木戸を押明、三平方江罷越、同人病氣をも不ㇾ顧、合力申懸、被ㇾ斷候を憤り、悪口申罵、家財投散し、建具等打壞、不ㇾ立去ㇾ罷在候始末、不屆ニ付輕追放、
〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政八酉年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺
武州多摩郡小山村百姓　重右衞門
一相州田名村庄左衞門孫龜吉女房てる、附火いたし候一件、
右之もの儀、○中略てる申聞候砌、兼而離縁および度存候迚、何之挨拶も不ㇾ致、同人家出いたし候を幸に存、離縁致し、其上持參り候品賣拂、代金錢はてる尋候入用ニ遣捨、其餘は所持いたし候始末、不埒ニ付、百日手鎖、
〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政六未年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺
相州高座郡小田村百姓　文五郎
一相州下九澤村醫師隆泉娘いわ、附火いたし候一件、
右之もの儀、○中略娘たよ江異見等可ㇾ差加を、却而いわ江對し欺候取計致し候ゟ事起、同人附火いたし候次第ニ至り、例ゟ格別品不ㇾ宜候間伺之通五十日手鎖、

朱書評議之通濟

〔評定所留役覺書〕一年貢村入用相滯難澀申掛候出入

長田阿波守知行　武州幡羅郡玉井村名主半兵衞煩ニ付代同人悴

訴訟方　小右衞門〇中略

右之通、下野守方江初判願出候處、是迄檢校を相手取候出訴之例無之候間、裏判之義、若於不參者曲事と可認哉、越度と可認哉之段、於一座評議いたし候處、檢校之儀ニ付、越度ト認候方ニ決ス、

寛政十二申年四月五日

〔武家嚴制錄〕一一家光公御代武家諸法度〇中略

一万事如江戶之法度、於國々所々可遵行事、

右之條々、准當家先制之旨、今度潤色而定之畢、堅可相守者也、

寛永十二年六月廿一日　御朱印

〔評定所格例〕諸向問合挨拶之義に付心得方之事

寛政四子年五月

一秋元但馬守領分人殺之義に付仕置之當、寛政三亥年、脇坂淡路守江問合有之、助命に可成者と相見候間、相伺候樣及挨拶候に付、但馬守ゟ伺候處、松平伊豆守殿、寺社奉行江左之通御書取を以被仰聞、

諸向より問合有之節、評義難決歟、又不容易筋は挨拶にも難被及間、伺候樣にと申達候趣、先例とも書付被爲見候、右例共は、左も可有義に見え候得共、今度秋元但馬守申聞候下手人助命之事、奉行に而も伺候義に候間、直に伺候樣にとの趣意を以被及挨拶趣、右書立之例とは品異成樣に相見え候、其上可伺事と有之は、全く御定御內規矩之事、尤奉行之心得に有之候、其取計を

押移し伺候樣にと可被及挨拶筋は有間敷事に候、自分仕置は、國法、家法、領主之存寄を以申付候得共、江戸之御仕置に准じ有之所々、格別に不相違樣に取計度趣意に而、各江問合も有之事に候間、先例助命申付候も有之上は、吟味詰之上、領主之了簡次第、助命申付候而も不苦筋之旨挨拶に而可事濟義に候、右挨拶衆評難決をば、各より可被伺は格別、可伺と有之儀を、直に領主々之趣に被心得、爲相伺、其上段々被申聞、書面之趣は、意味相違之事候間、猶又以後之義ともに能申談可被置候、全體右一件、奉行所江問合有之以前、自分共江伺有之時は、三奉行之内江承合候樣にと可令差圖候、其後問合有之時は、如何挨拶に可被及哉、右之所を被相考候而も被申聞、次第は無異論事候、

〔寛政刑典〕目安裏判之事

一壹万石以上、一領一家中迄にて、外江障無之候はゞ、領主にて遂吟味、仕置之儀可相伺候、

〔政談秘書一〕天保六未年六月四日、寺社奉行脇坂中務大輔樣江差出、御差圖相濟、

主人領分之者、惡事有之候節、吟味之上、他之引合等無之、全く一領内限之儀ニ候得バ、元祿之度被仰出候通、逆罪幷附火いたし候者ニ而も、手限ニ而、仕置申付候心得御座候、然ル處、信濃守儀○備前岡山新田領主ハ、本家松平伊豫守國許、備前國岡山ニ居處仕候ニ付、先年御屆等仕、別段陣屋等も取建不申、差定候仕置場無之候ニ付、重科人有之候節、本家家來江懸合、對談之上、本家領分仕置場ニおゐて、火罪其外死罪共仕置申付候而も不苦義御座候哉、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

池田信濃守家來
松原唯七

御附札

書面別段陣屋等も無之、本家城下江被致住居、差定候仕置場無之ハ、本家仕置場ニ於テ仕置
被申付不苦儀ニ存候、
未六月

古事類苑

法律部三十二

下編上

政書

古事類苑

法律部三十二

下編上

政書

徳川幕府ガ始メテ令ヲ天下ニ布クニ當リ、首トシテ三法令ヲ定メタリ、謂ユル公家諸法度、僧家諸法度、武家諸法度是ナリ、皆家康ノ創意ニ出デ、金地院崇傳、儒士林信勝等、ソノ制定ニ與レリ、

公家諸法度、亦禁裏向御法式トモ云フ、條目凡テ十七條アリ、慶長二十年七月、京師二條城ニ於テ定ムル所ニシテ、前將軍家康、將軍秀忠、關白二條昭實ソノ尾ニ連署ス、此法令啻ニ朝紳ノ行爲ヲ箝制シタルニ止ラズ、親王以上尙ホソノ拘束ヲ受ク、武家ノ法令トシテ制ヲ皇室ニ加ヘタルモノ、實ニコレヲ以テ首トス、是ヨリ先、公家衆御條目ト稱スル五箇條ノ法令アリシカドモ、公家諸法度ニ比スレバ甚ダ峻嚴ナラズ、而シテ僧家諸法度ハ釋敎部ニ出ヅルヲ以テ、此ニハ收載セズ、

武家諸法度ハ、徳川十五代中、初代家康、七代家繼、十五代慶喜ノ三代ヲ除キ、代々此法度アラザルハナク、皆慶長二十年七月、二代將軍秀忠ノ時制定スル所ヲ以テ本ト爲シ、將軍襲職ノ始ニ於テ、每ニ時勢ヲ察シテ之ヲ增減修飾スルヲ例トセリ、蓋シ八代將軍吉宗ノ時、天和令ノ文ヲ用キ、加損ヲ加ヘザリシカバ、爾後咸クコレニ傚ヒ、嘉永七年ノ諸法度ニ、大船製造云云トアル一條ノ外、皆天和令ヲ襲用セリ、又諸士御條目ト稱スルモノアリ、專ラ麾下ノ士ヲ

戒飭スル爲ニ定メシモノニシテ、初ハ武家諸法度ト同ジク、將軍襲職ノ始ニ於テコレヲ增減修飾シタリシガ、六代將軍家宣以後ハ全タコレヲ廢セリ、抑〻武家諸法度ト云ヒ、諸士御條目ト云ヒ、皆士分以上ニ限レルモノニシテ、一般人民ニ及ブモノニアラズ、蓋シ一般人民ニ對シテハ、觸書アリ、高札アリ、而シテコレヲ類聚シタルモノニハ、集成絲綸錄ノ如キアリ、

公事方御定書ハ、寛保二年四月ノ撰ニシテ、八代將軍吉宗ノ英明ヲ以テ、鋭意自ラソノ衝ニ當リ、三奉行等ト共ニ制定セシ所ナリ、今八十一條コレヲ上卷トシ、律百三條コレヲ下卷トス、實ニ德川氏ノ律令ハ、コノ二卷ニ於テ完備大成シタルモノトス、故ニ寛保以後ノ裁斷ハ、皆コノ刑典ヲ遵守シ、漫ニ變改スルヲ許サズ、以テ永ク法庭ノ準則ト爲シタリ、世ニ御仕置百箇條、又ハ御定書百箇條ト稱スルモノアルハ、コノ御定書ノ下卷、卽チ律百三條ニ名ケタル別稱ナリ、又寛政年中ノ撰ニシテ、コノ律條ノ全文ニ就キ增損更革セシモノアリ、コレヲ寛政刑典トイフ、此書亦百箇條ノ名アリ、サレド御定書ニ代リテ法庭ノ典則トナリタリヤ否ヤハ、未ダ詳ナラズ、

例書ト稱スルモノアリ、コハ御定書制定ノ後、臨時評決シタル斷罪處刑ノ新例ヲ輯錄シタルモノニシテ、常ニ御定書ニ添ヘテソノ補闕ニ資シタリ、

公事方御定書ノ遺稿ニ基キ、御定書制定ノ時ニ採用セシ舊例、及ビ享保年中ノ令條等ヲ類別シ、コレヲ御定書每條ノ下ニ註錄シ、以テ後徵ニ供ヘタルモノ、コレヲ科條類典ト云フ、

赦律ハ、嘉永四年ニ編制ノ命アリテ、文久二年ニ至テ成ル、凡ソ德川氏ノ慣例トシテ、將軍宣下、官位昇進、日光社參、誕生、元服、葬儀、法事等、吉凶ノ大事アル每ニ、必ズ罪人ノ赦免、罪科ノ減等ヲ行ヘリ、此書ハ、卽チ是等ノ赦免減等ニ關スル先例ヲ撰集シタルモノナリ、

〔駿府政事錄〕慶長十九年四月五日、群書治要、貞觀政要、續日本紀、延喜式、自二御前一出二五山衆一、可レ令二拔書

○公家武家可ㇾ爲二法度一之處之旨被二仰出一、金地院崇傳、道春承ㇾ之、十三日、今日群書治要、續日本紀、延喜式等之抜書進二上于御前一、金地院、道春、於二御前一讀ㇾ之、

〔右文故事九〕御代々文事表一

慶長十九年四月廿日　按ニ光記六月廿四日ノ書帖ニ、三條殿ニ三代實錄、廣橋殿ニ文德實錄有ㇾ之由、先度於二御前一御兩人直ニ被二仰上一候ト見ユ、守重云、翌年五月大一統ノ後、七月七日伏見ニ於テ武家諸法度十三箇條、同十七日二條ニ於テ公家諸法度十七箇條仰出サル、其源蓋シ此ニ基スル也、謹テ記錄ノ文ヲ詳ニスルニ、神君モト厚ク學問ヲ好マセラレ、將ニ大一統ノ洪業ヲ開カレムトスルニ當テ、首トシテ公家中ノ法式ヲ糺定セラルヽニ意アリ、然ルニ公家衆ハ、多クハ家傳ヲ秘シテ輙ク其書ヲ出スコトヲ許サズ、時ニ舊記ヲ援引シテ、常ニ異論アリト聞ユ、神君是ニ大觀セラルヽコト有テ、慨然トシテ遂ニ日本ノ記錄諸家ノ傳記マデ悉ク蒐羅傳寫セシメラレ、遂ニ萬世ノ龜鑑トナル、其深謀遠圖貴ムベシ、見ル者熟讀玩索スベシ、

〔泰平年表東照宮〕元和元年三月廿一日、諸家勅答の書物披露有、重て御上洛の時、諸家へ御直談の上、御法度仰定らるべき由也、

〔國師日記〕慶長廿年〇元和元年三月廿一日

一書令二啓上一候、十九日著府仕候、則直御城へ罷出御機嫌能、仕合無二殘所一候、可二御心安一候、昨廿日今度諸家勅答之御書物何も不ㇾ殘令二披露一候、逐一被ㇾ成二御覽一御機嫌不ㇾ斜候、御兩人被ㇾ入二御念一候樣子具申上候、重而被ㇾ成二御上洛一刻、諸家各御直談ニ御法度以下可ㇾ被二仰定一旨御内證候、拙老參内仕候樣子申上候諸家記錄共も可ㇾ被ㇾ成二御進上一候旨、是又御内證に候、不二大方一御機嫌にて御座候間、御心安可ㇾ被二思召一候、此樣子御次而の刻御披露所ㇾ仰候、諸家各江も能々被二仰達一可ㇾ被ㇾ下候、猶期二後音一候、恐惶謹言、

三月廿一日　金地院

廣橋亞相樣〈〇兼勝〉

三條亞相樣〈〇公廣〉

人々御中

此狀從伊賀守〈〇京都所司代板倉勝重〉被相達候樣にと申候間、急度可相屆と存候、

〔駿府政事錄〕慶長二十年〈〇元和元年〉七月十七日、將軍家〈〇秀忠〉渡御二條城、垸飯以後出御於泉水御座敷、召兩傳奏被仰出公家法度之儀、則二條殿〈〇昭實〉菊亭〈〇晴季〉於御前令聞右法度給、有十七條、廣橋大納言讀進之、傳長老三條大納言其外諸公卿伺候、二條殿菊亭被仰出之法度尤神妙無殘所之由、被感申云々、

〔公家諸法度〕禁中幷公家中諸法度

一天子諸藝能之事、第一御學問也、不學則不明古道、而能致太平者未之有也、貞觀政要明文也、寛平遺誡雖不窮經史、可誦習群書治要云々、和歌者自光孝天皇未絕、雖爲綺語我國習俗也、不可棄置云々、所載禁秘鈔御習學專要候事、

一三公之下親王、其故者、右大臣不比等、着舍人親王之上、殊舍人親王、仲野親王、贈太政大臣穗積親王、准右大臣、是皆一品親王以後、被贈大臣時者、三公之下可爲勿論歟、親王之次、前官之大臣、三公、在官之內者、雖爲親王之上、辭表之後者、可爲次座、其次者諸親王、但儲君者格別、前官大臣、關白職再任之時者、攝家之內可爲位次事、〈〇中略〉

右可被相守此旨者也

慶長二十乙卯年七月日

二條關白昭實在判

秀忠御判

家康御判

禁裏仙洞及公家衆への御條目被二仰出一、當代年錄

〔泰平年表台德院〕元和元年七月七日、二條城に於て禁裏仙洞及公家衆への御條目被二仰出一、當代年錄に二條殿被二仰合一禁中院中之御法度十七ヶ條を被二仰出一と云、○殿政錄を按ずるに、御條目の末に、二條關白昭實公、台廟、東照宮御○○連署なり、

〔台德院殿御實紀附錄三〕朝家の御事、あがりての世はいふに及ばず、室町殿の中葉より騷亂打つゞき、典章制度もみな廢墮し、九重の內もたゞ形の如くのみなりしを、慶長十一年の春の頃、禁裏仙洞狹隘にして朝儀行ひがたければ、先づ月卿雲客の第を他所に引移し、その地境を恢弘し玉ふこと一町にあまりぬ、されど朝章制度いまだ創建せざるにより、その頃有職の人々はじめ、崇傳長老等にも參議せしめて、元和元年兩御所御在洛の折から、二條の城に攝家華族はじめ、公卿殿上人をめして饗せられ、兩傳奏して公家の法令十七條を授玉ふ、廣橋大納言兼勝卿にこれをよましむ、關白昭實公はじめ、月卿雲客みな拜聽し畢て、關白及び菊亭右大臣晴季公、今日仰出されし所の條約、誠に詳悉明亮にしていさゝか遺憾なしとて、しきりに感歎ありしとぞ、その令條の末には、兩御所ならびに昭實公の御署をすゑられしとなり、

〔公家諸法度奥書〕此十七箇條、家康、秀忠、昭實先制之趣也、萬治四年正月十四日、內裏炎上之節就二令燒失一、今度以二副本一如二舊文一寫調之、爲二後鑑一加二判形一者也、

寬文四甲辰年六月三日

光平在判 二條攝政

家綱在判

禁中方御條目、以二吉良若狹守一被レ進之候、上意之趣委細若狹守可レ爲二演說一候、右之趣禁裏法皇江被レ達二叡聞一尤存候、恐惶謹言、

六月　日

久世大和守廣之

稻葉美濃守正則

阿部豐後守忠秋
酒井雅樂頭忠清
勸修寺前大納言殿〇經廣
飛鳥井前大納言殿〇雅章

〔家忠日記增補〕元和元年七月七日、禁裏仙洞ノ法式十七ヶ條、武家ノ法式十三ヶ條、淨土、眞言、五山、濟家、洞家等之浮屠ノ法式ヲ定メ玉フ、

〔御日記五十五〕慶長二十年〇元和元年七月七日、二條殿ニ被仰合、禁中院中ノ御法度十七ヶ條、武家ノ御法度十三ヶ條、其外出家諸宗ノ法度被仰定、

〔萬年記〕元和元年七月七日、定禁裏院中之法式、十七箇條定武家諸法度、十三ヶ條定浮屠之法式、淨土、眞言、濟家、洞家

〔東府外紀三〕元和元年七月十三日、神祖與二條公昭實時爲關白議、斟天朝舊式、撰定法制、奏請頒之、其略曰、天皇之要在學古道矣、國風雖綺靡、而風習一定、其來尙矣、亦不可廢也、曰唯見任三公、位次在親王上、曰江戶及列侯爵位、僉在員外、曰朝紳繼嗣、必取同姓、曰朝紳有賢行及才學優長者、妙選超擢不可拘以門望資格、曰僧徒賜紫、議考褒毋有猥授、若此者十有七條、

〇按ズルニ、台德院殿御實紀ニハ、七月七日武家法令ヲ發シ、十七日公家法令ヲ出ストアリ、本書十三日ニ作ルハ誤レリ、

〔續史愚抄後水尾〕慶長二十年〇元和元年七月十七日辛卯、前右大臣家康前將軍定十七條法於二條城、執筆日野宰相光廣實條公記　三十日甲辰、前將軍家康前右大臣獻十七條法於公家、此日關白昭實已下、公卿、殿上人、親王、諸門跡等參內、廣橋大納言兼勝讀之云、泰重卿記條日與書

〔鹽尻二十一〕一慶長二十年七月、東照神君二條關白昭實と議して、親王の座を定めさせ給ふ、〇中略賢按、右者公家諸法度十七ヶ條之內ニ、委敷有之、

〔和歌の浦鶴 四〕朝廷の行列、親王諸王、次に諸臣と位次を守る、○中略無品親王はなほ人臣一位の上にあり、さるを當家御治世のはじめ、林家にとひて御條目を定め給へる時に、林家儒見にて皇國の古制にくらく、親王より太政大臣にもなるを昇進と心得て、是を證として、太政大臣攝關は親王の上なりと定めたるは口惜しき事なり、前にいふ令義解の文に心付ざりしなる心し、○中略されど誤は誤ながら、ついに權道とほりて今は此の如くの定となる、是その比堂上家にも、古に懵くてその差別をわきまへず、誰一人是はさやうには非ずと辨ずる人もなかりしかば、せん方もなき事なり、返す〳〵も無學ほど世に口惜き者はなし、

〔反汗秘錄〕當時の傳奏正親町前大納言公明公、其ころはいまだ院の傳奏にておはしけるが、和漢の學才いみじければ、折々參内有之、異國本朝古今の公事ども聞召し、さま〳〵の御尋も有けるに、細かに勅答被申上ければ、天子も他に異なる者と思召て、毎々召れて勅問あり、或時彼卿參内ありて、御嘶の席に被申上けるは、近ごろ恐多御ことに候へども、帥宮○典仁は正敷聖主○光格の御實父君にしておはしまし候へども、御所中尊敬も厚く一品の位に上らせ給ひながら、臣下同前の御事にて關白左右の大臣より次座におはしますは、餘り恐入し御事也、關東十七ヶ條の御定より以來は、大臣より次座に相成候へど、去ながら時の當職なれば、外々親王方は夫にても可然、典仁親王はかく別天子の御父宮にてまし〳〵候へば、太上天皇の尊號を參らせられ候御ことと御座あらまほしくやと申上ければ、主上御歎かぎりなく、朕常々此ことを思ふといへども、當時關東の權威つよく時宜を計ていまだ仰も出されずと宣ひければ、是はあまり御遠慮すぎたる思召なりと謹て勅答申上られける時、○下略

〔家忠日記增補〕慶長十八年六月十六日、制法五ヶ條ヲ公家ニ賜ル、

〔公家法式〕諸公家法式條々○中略

右之條々所相定也、從五攝家幷傳奏其屆有之時、從武家可行沙汰者也、

慶長十八年六月十六日　秀忠　判

板倉伊賀守どのへ

〔天寛日記〕慶長十八年六月、諸公家法式五箇條ヲ定メラル、板倉勝重奏聞ス、

〔泰平年表東照宮〕慶長十八年六月十六日、公家衆の法度を定めらる、其第一條に、公家衆家々學問晝夜無油斷可被仰付と載らる、

〔公家法式〕定

一拜賀、元服、婚嫁等之儀、衣服、調度、家作等之制、一切に華侈を事とせず、每年節儉に從ひ、其禮を改めらるべき由、被仰付可然事、〇中略

右之趣攝政殿〇九條輔實江も可被相達之旨、兩傳奏可被申談候、以上、

正德四年十月廿八日

戶田山城守〇老中、以下同、

松平紀伊守

久世大和守

阿部豐後守

井上河內守

土屋相模守

水野和泉守殿〇忠之、京都所司代、

慶長二十年武家諸法度

〔駿府政事錄〕慶長二十年〇元和元年閏六月廿四日、將軍家召傳長老、武家之御法度條々可被仰出之御內證被仰談云々、七月二日、傳長老以法度之草案出御前、卽赴伏見可言上由被仰出云々、

〔右文故事九〕御代々文事表一

守重○近藤按ニ、此歳○慶長十六年四月十六日、京師ニ於テ三條ノ御條目ヲ出サレ、天下ノ牧伯ニ盟書ヲ捧ゲシム、其第一條ニ、如右大將家以後代々公方之法式可奉仰之ト載ラル、是貞永式目ノ文ニ據ラレシナリ、爾來建武式目、及ビ延喜式、幷ニ群書治要、貞觀政要、續日本紀ノ類、常ニ御講究アリ、是二十年御法令ヲ頒布セラルヽガ爲ノ張本ナルベシ、神君ノ能ク古訓ヲ稽ヘ給ヒシ御事ミルベシ、

〔御代々武家諸法度考〕

一背法度輩不可隱置於國々制之事

　一慶長十六年四月ニ始ル○中略

一叛逆殺害人之制之事

　一慶長十六年四月ニ始ル

〔家忠日記增補〕慶長十七年正月五日、東國及ビ北國ノ諸大名、書ヲ獻ジテ盟、

○按ズルニ、コハ慶長十六年四月ノ御條目ニ對シ、當日ノ盟約ニ洩レタル諸侯ヲ召シ、誓書ヲ獻ゼシメタルナリ、

〔駿府政事錄〕慶長二十年○元和元年七月七日、於伏見御能、○中略諸大名群參、御能以前、武家御法度十三條被仰渡諸大名、其草案傳長老讀進之由云々、

〔東府外紀〕三元和元年閏月○六月、神祖命學士林信勝、据貞永建武二式、作新式、頒庶官暨侯國、其略曰、文武之術不可不兼修、曰擧賢擇能、獎勸良善、曰諸侯會同以時、騶從有節、上下有服、曰去奢尚儉、曰諸士陪臣騎而毋輿、但老疾醫卜不在此限、曰毋私昏、曰毋私城、曰毋荒酒色事賭博、曰毋庇姦宄、曰毋萃逋逃、曰毋見知亘罪而不告、曰使國人士著毋移易出入、

〔御代々武家諸法度考〕

一他國之者入交り住居いたし候儀御制禁之事

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

一新規之城郭停止之事

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

新規之城郭停止之儀は、今以此法不相變

一企新儀結徒黨制之事

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

今以此法不相變

一結婚姻制之事

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

私不可結婚姻儀者、今以此法不相變

一諸大名參勤從者之制

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

從者之員數不可及繁多之儀者、今以此法不相變

一衣裳之制之事

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

今以此法不相變

一乘輿之制

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

御免之次第ハ、段々違雖有之、恣不可乘輿儀者、今以此法不相變

一可㆑用㆓儉約㆒之事

一慶長廿年七月ニ始ル○中略

今以此法不㆓相變㆒

〔折たく柴の記中〕元和令を頒下されし時は、金地院の傳長老して草そ奉らしめらる、其書法貞永建武等の式目に倣ひたり、當時は合戰ののち、世の人武事をのみ習ひて、いまだ文字を識れる人多からねば、書法猶しかり、これは此のち文をもて治を興さるべき事をしめされし所とぞ聞えたる、しかるをそののちの代々に頒下されし所は、皆々かな文字を以てしるさる、これ又本朝の文學日々に衰ふる事の一端なり、

〔蘐園談餘二〕今更尊ク覺ユル中ニモ、有ガタキハ大坂ノ役御上洛ノ時、サシモ干戈騷劇ノ中ナルニ、朝家秘府ノ御記錄ヲウケ下シ、又廷臣故家ノ典籍ナド多ク召シテ、夜モスガラ故實ヲ沙汰シ法令ヲ定メ玉ヘリ、ゲニモ天下ヲ保チ玉フベキ王者ノ御器量ニテマシマス、其御効シニヤ、天下ノ大法悉ク圖ニ中リ、今百年ニ越レドモ國體ノツリ合ヨク磐石ノ固メアリ、

〔台德院殿御實紀附錄三〕當家創業このかた、いまだ一代の法制を定め玉ひ、天下一統に令せらるゝほどの暇ましまさず、かくては四海の人その遵守する所に疑惑すべきなりとおぼしはからせ玉ひ、元和元年御在洛の折から、金地院崇傳長老をめされてその事を議せしめ、遠くは和漢古今律令の舊文に據り、近くは鎌倉室町このかた武家の式目を斟酌せられ、新に條件十三條を草せしめ、神祖ともつぱらに御商訂ありて、その年七月七日諸大名を伏見城にめしあつめられ、本多佐渡守正信して、新令仰出さるゝの旨を傳へしめ、崇傳長老してこれをよましめらる、かくてぞ天下の大小名みな金科玉條に欽遵し、國務を謹愼にして、敢てその法令に違背する者なく、いよ／＼國家無窮の洪業をして、磐石よりもおもく、泰山よりも安からしめ玉

ひしは、いともかしこき御事なり、

〔梧窓漫筆拾遺〕御當家の初に、武家諸法度を出だされて、第一に新築城の深溝高壘を禁せられたるは、當時數百年の兵亂を太平になし給へり、至極の良策なり、

寛永六年武家諸法度

〔東武實錄二十八〕寛永六年九月六日、武家諸法度仰出サル、○中略

一自今以後、國人之外不可交置他國者事、

一諸大名參勤作法之事

此二ケ條ハ、元和元年七月御制法ニ相載ラルヽト云ドモ、此度損益ヲ御評儀有テ、右ノ二ケ條ヲ除カル、如此治定セラル者也、

〔武家嚴制錄二〕一秀忠公御代武家諸法度○中略

右可相守此旨者也

寛永六年己巳九月六日

私曰、慶長廿年乙卯七月、武家之別法を定られ、其後兩度有損益而當年如斯也、

○按ズルニ、秀忠公御代トアルハ、家光公御代ノ誤ナリ、

〔御代々武家諸法度考〕

一他國之者入交り住居いたし候儀御制禁之事

一寛永六年之武家諸法度、此ケ條無之候、然者他國之者入交り住居之儀は、此節よりの事にて候哉、是より以前御免にて候哉、其品不相知候、

一諸大名參勤從者之制之事

一寛永六年之武家諸法度、右之ケ條無之、

寛永十二年武家諸法度

〔元寛日記〕寛永十二年六月廿二日、將軍家○家光准當家先例而武家被書出御掟、

〔羅山文集 五十八 雜著〕武家諸法度

一文武弓馬之道專可相嗜事

左文右武古之法也、不可不兼備矣、弓馬是武家之要樞也、號兵爲凶器不得已而用之、治不忘亂、何不勵修錬乎、○中略

寛永十二年六月二十一日

御朱印

右十九條、奉台命撰之、執政胥議之後、於御前有取捨而後定焉、闔國施行無不守焉、其文平易、兼用俗語、爲使人易解也、嘗引考倭漢舊式、作此十九條註、罹丁酉之災、先生歷仕幕府四葉、凡每出印章法式、無不預聞焉、今不悉載之、

〔林氏家系〕信勝

同〔○寛永十二年〕四月、撰武家律令拾九箇條、及幕府之諸士法制貳拾三箇條、永喜〔○信澄〕亦預之、

〔國朝舊章錄 二〕法條之事

弘文院學士林春齋述

抑東照宮御治世の始、武家の法度定め置る、台德院殿增益し給ふ、御兩代條目文言は、金地院傳長老草しけるとなん、大猷院殿彌潤色し給ふ、掃部頭、讃岐守、大炊頭、評議し、伊豆守、豐後守、末座に在り、道春永喜舊文を改め正す、金地院良長老も被召加、建部傳右衞門久保吉右衞門祐筆たり、各評議の上、於御前決定せらる、淸書認て後、諸大名を大廣間に召集て上意の旨有之、道春高聲に讀誦しけるとなん、今玆に至て既に三十年、闔國其旨を守らずと云事なし、

〔御代々武家諸法度考〕

一背法度輩不可隱置於國々制之事

但寛永十二年より之武家諸法度ニハ、右之ヶ條無之、

（朱書）前々被仰出候御定法ニ而押通リ候儀故、右之ヶ條無之歟と相見江候、

一叛逆殺害人之制之事

一寛永十二年之武家諸法度ニハ、本主之障有之者不可相抱、若有叛逆殺害人之告者可返之向背之族或返之、或可追出と有之、

一新規之城郭停止之事

但修補之儀、櫓塀門等は、如先規可修補旨、寛永十二年之武家諸法度より御文段有之、

一企新儀結徒黨制之事

但寛永十二年之武家諸法度より、於隣國と有之御文段無之候、

寛永十二年之比は國々一統之事故、於隣國との御文段無之と相見江候、

一異變有之時之事

一寛永十二年六月廿一日ニ始ル○中略

今以此法不相變

一行刑罰時之事

一寛永十二年之武家諸法度○中略

今以此法不相變

一諸國主領主私之諍論之制之事

一寛永十二年六月廿一日ニ始ル○中略

（朱書）此御條目之趣、私之諍論ハ、此時節迄ハ、不歴上裁して其國主領主一分之取計たるに依て、其事に望ては所をも騒がし、且不憚公儀之筋も有之故に、諍論遲滞之儀あらば、達奉行所可受其旨との事、初て被仰出候と相見江候、○中略

寛文三年武家諸法度

今以此法不二相變一

一道路驛馬舟梁等之事

一寛永十二年六月廿一日ニ始ル〇中略

今以此法不二相變一

一私之關所新法之津留制禁之事

但是より以役寶永七年迄、御代々之武家諸法度同斷、

(朱書)關所津留之儀は重き事に候得者、是より以前御定法も可レ有レ之儀ニ候へ共、寛永八年以前之留書無レ之候故、不二相知一候、

一五百石以上之船制之事

一寛永十二年六月廿一日ニ始ル〇中略

寛永十五年五月御書出に、此儀此以前被二仰出一候、今以其通候と有レ之候得ば、此御條目始たるべく候、

今以此法不二相變一

一諸國散在寺社領之制之事

一寛永十二年六月廿一日始ル〇中略

今以此法不二相變一

一萬事如二江戸之法度一於二國々所々一可レ遵二行事一

寛永十二年より、御代々之武家諸法度奥書ニ有レ之、

〔御日記 百三十六〕寛文三年五月廿三日ニ、武家諸法度ヲ被二仰出一、條々ハ略レ之、

〔泰平年表 嚴有院〕寛文三年五月廿三日、武家諸法度被二仰付一、此日殉死御制禁被二仰出一、同八月五日御

法令廿四條を頒布せらる、其第一條に常に文道武藝を心掛、義理を專にし、風俗を亂るべからざる事と載られたり、

〔國朝舊章錄二〕法條之事　弘文院學士林春齋述

寛文三年五月上旬ゟ、保科肥後守、○正之松平式部大輔、○忠次酒井雅樂頭、○忠清阿部豐後守、○忠秋稻葉美濃守、○正則黑書院の傍に會合し、大猷院殿寛永十二年定らるゝ武家法度十九箇條を拔き、相談の事有、○中略將軍家御治世の始、御幼少故法令不被仰出、今既に御盛長ましませば、御三代の御吉例に任せ、御法度被仰出可然とて此沙汰に及べり、同月九日ゟ春齋も其席に加て文言の相談に及ぶ、右筆久保吉右衞門、飯高七郎兵衞右筆者たり、肥後守式部大輔は新條に被加可然とて被申旨有といへ共、豐後守舊文を改めん事を不好よし是春齋申所、或は用られ或は被捨、肥後守申さるゝ新條の內、公家と武家と婚嫁私に結べからず一條耶蘇宗門禁制一條不孝之者處罪一條新條に加て諸國の寺社を減じ、妄に僧尼と成事を許さゞるの事は捨て不用之、殉死停止の事、肥後式部三老共に條數に載せ度とさま〳〵評議す、され共一決せず、十一日には肥後守式部は出仕せず、大和守但馬守を呼て三老相談有、十二日には紀伊宰相、尾張黃門、水戶參議を召て、法條內見存寄らるゝ趣可被申由被仰出、依之黑書院にて三卿幷肥式豐雅濃州列坐して、春齋吉右衞門舊文と新文とを對讀す、又殉死の相談に及ぶ、三卿重て思慮の趣言上すべしとて退出せらる、十五日に紀伊殿へ尾張水戶の兩卿會合し相談有けるとぞ、十八日三卿登城五輩相談の事あり、廿日五輩列坐、春齋も其席に在て草案改修て上覽に備ふ、殉死停止の事は口上にて示諭すべきに定りて條數に入らず、乘輿御免の內、醫陰兩道を儒醫兩道と改め度と春齋發語しければ、肥式尤と同せらる、豐後守は御殿中出入の儒士は既に乘輿す、諸家中町中讀書のもの大半醫を兼たれば、儒者と許さん者は稀なるべし、左かれば舊文を改て無詮と申さる、肥後守書を講ずる程の者は

乘輿御免苦しかるまじきと被申、春齋申けるは五十已上は無能無才にても乘輿御免有、當時陰陽師乘輿の者、京都の外他には不可有、武家法度の條數に陰陽師なくても妨なし、儒の字を加へられば志學の者の勵成べしと申に、豐後守猶案じ煩へる體也、肥後守重て醫陰と云へば醫者上に有といへども陰と並ぶ事を耻、儒醫と改まれば、儒の外に在ても並べ被稱事醫も榮なりとして喜ぶべしと被申、雅濃別條もなければ儒醫に極る所に、水戸參議卿、〇光圀儒は讀書のものに限るべからず、我輩のごときも儒者也、何ぞ醫と雙べて兩道と云べき、若儒醫兩道と有ては末代の嘲たるべきと宣ふよし、三老へ聞へければ、今日の評議亦々醫陰に定る、肥後守春齋を顧て、儒を崇敬にて醫と並べられず、殘念たるべからずと完爾とす、廿日の夕、飯高七郎兵衞清書して、廿一日上覽に備、廿二日紀伊尾張水戸の三卿、幷甲府館林兩宰相江、三老相分れて持參し內見に入る、肥後守式部大輔登城し再覽す、廿三日諸大名以下一万石以上悉く登城す、巳の刻三老幷大和守但馬守等御座之間の次座にて春齋を呼びて清書を讀しむ、次に肥後式部三老御前江出大和但馬仰を奉りて春齋を携出て和但は退く、三老の指圖に仍て上段の正面近く出て、春齋讀誦す、追加の三條尤に被思召の由仰有、春齋退く、其後甲府館林の兩宰相御前江出らる、暫有て退出、紀尾水三卿御前へ被出、御法度被仰出事を賀して退かる、爰に於、將軍家大廣間に出御、中壇御茵の上に著座し給ふ、肥後守式都大輔雅樂頭下段に伺公す、松平讚岐守、井伊玄蕃頭下段の傍の椽頬に伺公、豐後守、美濃守、仰奉りて、諸大名を壇江呼集め、越後中將、加賀中將、備前少將、越前少將、薩摩少將、因幡少將、松平左京大夫、秋田侍從、安藝侍從、伊賀侍從、阿波侍從、美作侍從、丹後侍從、米澤侍從、長門侍從、肥後侍從、對馬侍從、土佐侍從、柳川侍從、二本松侍從、松平淡路守、同但馬守、松平刑部大輔、其外四品之諸大夫、一万石以上の大名の息の四品以上二百人計り、大廣間の下段に列座す、出雲侍從、京方未歸、筑前侍從、肥前侍從在國、仙臺龜千代幼少に仍て登城無之、旗元の一万石以上は椽上に伺公、其外一万石以下と云へども列

參、群居凡五六百人に及べり、仰に依て諸大名中段近く進て頭を垂、仰に曰、當家代々の吉例に任せ條目を出す、先製に替らずといへども追加有、聽聞有べしと、各稽首伏拜、肥後守式部大輔雅樂頭挨拶申す、於是入御、讃岐守、玄蕃頭、豐後守、美濃守も下段へ昇る、春齋を呼びて御茵傍の下段に居しめて、豐後守條目の淸書を春齋へ相渡す、春齋披之高く捧て讀之、其聲殿中に響く、各敬て聞之、讀了て御朱印と高く唱る時各平伏す、頭を擧る時、越前少將被申旨有、春齋御條目を豐後守に渡して退く、雅樂頭仰の旨を述て、殉死停止の事を口諭す、各畏りて退出す、三老御前へ參て始末を言上す、伺公の輩賀して退出す、

〔御代々武家諸法度考〕
一耶蘇宗門御制禁之事
一武家諸法度ニハ寛文三年より御文段有之、今以此法不相變、
一人馬兵具等之事
一寛文三年武家諸法度と同時被仰出候〇中略
一殉死御制禁之事
寛文三年五月廿三日、武家諸法度與同時被仰出候、〇中略
今以此法不相變、

天和三年武家諸法度

〔御日記二百三〕天和三年七月廿五日、諸大名登城、〇中略
一巳下剋大廣間へ出御、〇綱吉將軍中段ニ御著坐、諸大名一同ニ被召出之、當御代被仰出之御法度書彌堅可相守之旨被仰出、則入御、
一入御以後、中段ニテ老中列坐、御法度書林春常讀聞之、終テ各退去、〇中略
一同日ニ於御前

御刀代備前直長金廿五枚　阿部豊後守

右ノ通拜領之、是ハ被仰出之御條目御用被仰付ニ付テ、　林春常

時服四　御祐筆　人見友元

同　三　蜷川彦左衛門

同　三　同断　杉浦源右衛門

同　二

右之通被下之、是御條目被仰出之付、

一同廿六日巳后剋、大廣間へ出御、中段御著坐、高家衆、諸番頭、諸物頭、諸奉行、諸役人、一同ニ御前へ被召出之、御法度御條目被仰出之間、彌堅可相守之旨被仰出之、則入御、其以後於同所下段老中列坐有之ホノ面々へ昨日被仰出之御法度御條目、林春常讀聞之、終テ各退去、

〔國朝會典五〕御代々武家諸法度

享保之時、天和之御法令を御用被遊候而より以後は、御代々皆天和之御條目を御用ひ被遊候也、

〔御代々武家諸法度考〕

一叛逆殺害人之制之事

一天和三年之武家諸法度より、叛逆殺害人之御文段無之候得共、本主之障有之者不可相拘との趣有之候得者此法今以不相變、

但天和之御條目ニ叛逆殺害人之御文段無之候は、此時節は最早被仰出にも不及事故不被載候と相見江候、

一人馬兵具等之事

天和三年之武家諸法度より、御文段ニ有之候は、畢竟御静謐ニ付而之儀と相見江候、

寶永七年武家諸法度

〔御日記二百九十八〕寶永七年四月十五日、御三家登城、於二御座間一御對顏、大廣間ニ四品以上、幷ニ一万石以上ノ面々同並居、一同ニ御目見、入御以後ニ御代替ニ付被二仰出一條目、林七三郎讀二聞之一、畢テ何モ退出、

同日御條目御用相勤候ニ付、於二御前一御腰物備前元重、代金廿五枚拜領之、

小笠原佐渡守

右同斷ニ付拜領

時服四　林大學頭

時服三宛　同七三郎

同百介

井出源左衞門

十六日、大廣間へ出御、高家、次ニ駿府御城代御留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上ノ御役人、御目見以上ノ布衣以下ノ御役人寄合、三千石以上ノ小普請、法印、法眼、並居一同御目見、入御以後林百助罷出、御條目讀聞之、畢テ退出、

〔萬年記九〕寶永七年四月十五日、牧伯等於二大廣間一拜謁、被レ示二武家諸法度一、林七三郎讀レ之　十六日、諸役人拜謁、被レ示二武家諸法度一、林百助讀レ之

〔月堂見聞集四〕當將軍家宣公御條目十七箇條、世ニ寶永式目ト云、

〔折たく柴の記中〕四月〇寶永七年十五日には新令を頒下さる、前にしるせし事のごとくに、去年大喪の後正月十九日に、元和令の事間はせ給ひし御事ありき、そのゝち代々の御例によられて令條を頒下さるべきよし人々議し申されしかば、相模守政直朝臣其事を奉る、また前代の御例也とて大學頭信篤も此事を仰蒙れり、今年二月十八日に至て某が草をもめされしに、同き二十四日

にめし問はせ給ふ御事ありて、別の仰によりて同き廿六日新令句解を草して奉る、四月十五日に某が草せし所の新令を頒下され、政直朝臣信篤等に物を賜り、新令解し難からんものにはうつしあたふべき由にて、新令句解を大學頭等にも下し賜はる、（中略）今頒下さんところの元和令のごとくならんには、世の人かならず申す事ありぬべし、其字を用ふる事は元和令のごとくにして、助語のごときはかな文字をまじへて用ひ、これより後に世の人これらの文字をも解すべき時に至りて、そのかな文字削除て、なほ其文をなすべき所を心得て草すべしと仰下されて、某が草をばめされし也、其草をもて致直朝臣にしめされしに、果してこの書法のごとくなら人には當時に行はるべからずと申さる、さらば句解作りてならび行はるべしとて、かさねて某が草をめされて、句解をも草したりき、此令頒下されし後に、致直朝臣の家につかふる醫師吉田と云ふものゝ、某がもとに來りて、新令に見へ候なる上裁の字は、いかなる事にて、いづれの書にや出侍ると問、某わらひて、新令に用ひられし所の文字は、本朝の律令格式等の字なも猶用ひられじとは見へず、式目庭訓など云ふものゝ類よりや出候ひぬらん、上裁の字のごときも、某がいとけなき時によみならひしことを覺へ候に、庭訓往來の七月の狀にか見へ候らひき、いかにかくは聞ひ給ふにやといへば、此ほど大學頭の、我主にて候者に、新令に見へし上裁の字こそ心得られず、上とは天子の御事を申す也、其餘新令に見へしこと共、すべて心得ぬ事どもなりと申されしと承りぬと云ふ、上の字天子の御事に用ひ侍るよし勿論也、されど武家の御事を上様といひし事は、鎌倉の代よりも聞え侍り、公方と申す事、京の鹿苑院殿より始りしとこそ承はれ、そこの主にておはします人々の奉書にも、上聽上聞などいふ事も見へ侍るものをといひて笑ひたりき、

〔萬年記〕享保二年三月十一日、諸大名於大廣間拜謁、被示武家諸法度、無異常憲院殿之御條目、御奥書云、用天和ノ政法御ト、

十二日、諸役人拜謁、被示武家諸法度、

〔柳營秘鑑七〕御當代御式目大概

一御當代之御式目は、享保二酉年三月十一日被仰出之、天和之御條目を御用ひ一字之御添削無之、奥書は新に被加之、所謂

右之條々堅可相守之、當家代々潤色之故、無所改正、仍用天和之法制者也、但條數御繁多故略之

〔國朝會典五〕御代々武家諸法度、此時〇享保二年仰出有之、今度武家諸法度御改茂可被遊哉ニ御吟味被仰出候處、御代々被仰付候は、以前之御法度年月經候得ば、御用ひ被遊がたき品も有之、或は新規被仰出候はでは不叶事共候故、毎度御改被遊たる上に候得共、今程何之儀を增減可被成事無

之候、就は前々之御法令之内、此節御相應にて、事短なるを御用被遊べきとの御事にて、天和の御制法之通に被仰出候也、

〔享保通鑑〕一享保二丁酉年三月

一十一日巳刻、大廣間江出御、万石以上御目見有之候、御條目被仰出候、交代寄合表向ゟ御禮申上候面々、又は御勝手ゟ御禮申上候面々も、一統万石之末席に出座、但交代寄合之面々悴は不罷出、出仕之面々熨斗目著用、

今度御條目御用相務候に付、御褒美被下、

御腰物　御座之間　戸田山城守
時服四　御祐筆部屋緣頰　林大學頭
同　三　同　七三郎
同　三　同　百助
同　三　奥御祐筆組頭　本目權左衛門
同　二　同御祐筆　下田幸大夫

一十二日巳ノ刻、大廣間江出御、諸役人万石以下之輩御目見、上意有之候、御條目被仰出、

右御條目御ヶ條御文言等、常憲院樣御代、天和三年被仰出候通同、

但御奥書左之通

右條々堅可相守之、當家代々潤色之、故無改正、仍用天和之法制者也、

享保二年三月十一日

〔有德院殿御實紀四〕享保二年三月十一日、御法令仰出さるゝにより、熨斗目の御小袖半袴めして、阿部豐後守正喬先導し、岩本能登守正房御刀とりて、黑木書院に出たまひ、上段につかせた

まへば、松平加賀守綱紀、次に溜詰、次に松平右京大夫輝貞拜謁し、やがて大廣間に出給ふ、御左のかたに宿老、御右の方に溜詰侍座し、西の方に鴈間詰奏者番、菊の間緣詰父子、おなじ緣に少老、下段より御次をかけ四位、其下に万石に列る輩、拜謁して奥に入らせ給ふ、儒役林七三郎信充すゝみ出て法令をよむ、○中略 おはつて群臣ふたゝび宿老に謁して退く、三家出仕せられ、宿老に謁見して法令仰出されしを賀せらる、　十二日、先導御刀上におなじくして大廣間に出たまふ、高家はじめ万石以下の群臣見え奉りはてゝ、奥に入たまふ、儒役林百助信智法令をよみ、群臣拜聽することまた昨日におなじ、

延享三年武家諸法度

〔寶暦集成綠綸錄 一〕延享三寅年五月

今度被仰出候御法令は、天和之御例を御用之御事故、人々能存罷在儀ニ候得共、何もに者又候此度書改候而、壁に張附置拜見之事候、尤外々に而も前以其通に者可有之候得ども、尚又改候而右之通にいたし置、拜見可有之事候、此旨寄々可有通達候、

右之趣、万石以下老中支配江寄々可被相達候、

寶暦十一年武家諸法度

〔泰平年表浚明院〕寶暦十一年二月廿二日、武家諸法度被仰出、

〔寶暦日錄〕寶暦十一年二月廿一日、御法令被仰出候ニ付、老中若年寄五時登城、

一殿中熨斗目半袴

御座之間

尾張中納言
紀伊中納言
水戸宰相殿
尾張宰相殿
紀伊中將殿

天明七年武家諸法度

右御登城御對顏在レ之、○中略

一大廣間江被レ遊二渡御一、万石以上之諸大名一同御目見在レ之、入御、

一御三家始其外諸大名大廣間並居、於二御中段一御條目林大學頭讀レ之、右畢而爲二御祝儀一右之面々西丸江出仕、西丸大廣間おいて御奏者番出座謁レ之、

一二丸江被レ爲レ入候

廿二日御法令被二仰出一候に付、先達而御觸書之通高家以下御目見以上之諸役人、三千石以上幷布衣以上之寄合、法印法眼之醫師、大廣間江相詰ル、

一巳ノ刻大廣間江出御、御目見入御相濟、於二御中段一御條目林内記讀レ之、○中略

廿三日　御座之間

御刀幸光　代金廿枚　秋元但馬守

右御法令御用相勤候に付、於レ奥被レ下レ之、

御右筆部屋縁頰

時服四　林大學頭

同三　同内記

右御法令御用相勤候に付被レ下レ之、左衛門尉申二渡之一、

土圭之間

時服三　奥御右筆組頭　向井藤右衛門

同二　奥御右筆　長坂忠七郎

右同斷に付被レ下レ之、同人申二渡之一、○下略

〔泰平年表大御所〕天明七年九月廿一日、武家諸法度被二仰出一、

〔續泰平年表〕天保九年二月廿一日、廿二日、御代替ニ付、御法令被仰出、

〔武家嚴秘錄八〕武家諸法度

一文武忠孝を勵み可正禮義事○中略

右之條々堅相守べき者也

天保九年二月廿一日 前編の諸法度は文廟御代にて、ケ條巨細故ニ出ス、今度出候處御當代法度也、

〔憲法類集續編一〕御法令

天保九戌年二月、太田備後守殿御渡、

御法令被仰出候に付

廿一日 廿二日

右兩日共、登城之面々、御本丸相濟西丸江出仕、御祝儀可申上候、

一病氣幼少にて出仕無之面々は、掃部頭、老中伯耆守、備中守宅江使者可被差越候、在國在邑之面面は、承り次第使札可被差越候、

但隱居之面々は不及其儀候

右之趣可被相觸候

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年九月廿五日、將軍家定公襲職ノ法令、

此日御代替御法令被仰出、御用掛り名前略す、

〔温恭院實紀七〕安政元年九月廿九日、大船製造言上之令、

今度御法令ニ、大船製造可言上之旨被仰出候、然ル處荷船者前々御許有之事ニ付、有來通製造之儀者、是迄之通可相心得候、尤荷船たりとも、製造方其外有來ニ相違いたし候はゞ、此度被仰出候通、相心得可申事、

安政六年武家諸法度

右之通万石以上之面々江相達候間、万石以下之向江も可被達候、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年九月廿三日、御法令御用ヲ、閣老間部下總守ニ命ゼラル、

御法令御用掛御老中間部下總守に命せらる〇中略

同月廿七日に至り、御法令御用相勤候に付、御刀美濃國兼長、代金二十五枚被下之、

武家諸法度雜載

〔家康公御遺狀百箇條〕一武家諸法度の條々は古例に準ずと雖も、時の宜きに從て損益すべき事、

〔武家諸法度之奥書〕家法之條數堅可相守之、但公義御法度之趣品々雖有之、第一忠孝をはげまし、禮法を正し、常に文道武藝を心がけ、義理を專にし、風俗をみだるべからざる事と被仰出候、御文言つゞまやかなれども、聖賢の書籍の大むね備候得ば、文才有之ものはさとしやすかるべく候、文學無之ものは心得がたく候はんかと、愚なる心得なるべけれど、他家へ見すべきにあらねば、有增書付候、〇中略次に兵具の外不入道具を好み、私の奢いたすべからず、萬儉約を用べしと被仰出、儉約は古人の風に長久の御政なれば、下々別て精を出して奉用事也、〇中略次に嫁娶の儀式不及美麗と被仰出、女子は夫の家にやしなはるゝものなれば、財寶をもたす事は禮義にあらず、妻によつて身をうるほさんは男子の耻べき所也、〇中略次に結徒黨、致荷擔、或妨をなし、落書、張文、博弈、不行義の好色、其外侍に不似事業不可仕事と被仰出、是は別て下々常に吟味をとげ、相嗜べき事也、〇中略

寛文四年十月七日

〇按ズルニ、右ハ久世大和守廣之ノ家訓ニシテ、每年正月十一日コレヲ讀ミ、家士ニ聽カシメタリトイフ、

〔御代々武家諸法度考〕御代々武家諸法度御文段之內

御代々武家諸法度ニ御文段有之

一文武之事
慶長廿年、寛永六年、寶永七年之武家諸法度ニ御文段有之、
一群飲佚遊之制之事
慶長廿年、寛永六年之武家諸法度ニ御文段有之、
一政務器用之事
寛永十二年より之武家諸法度ニ、不殘御文段有之、
一知行之所務淸廉之事
寛文三年之武家諸法度ニ御文段有之
一不孝之輩於有之者可處罪科事
寶永七年之武家諸法度ニ御文段有之
一大小の諸役、諸番之頭人等、權勢に依て人を凌ぎ、公義を假りて私を營むべからざる之儀、
一貨賄を納れて權勢の力を假り、秘計を廻らして內緣之助を求むる之儀、
同斷
右七ヶ條、武家諸法度に被載候といへども、古來通法之儀にて、御法度筋とは品違ひ候によつて、今度之吟味には不被及候事、
享保九年七月

〔兼山麗澤秘策五〕葛西邊島根村と申處江被成御座候處、先より鶴居懸り候間、暫く御待被遊候樣申來候、依之百姓之家江御入被遊御覽候處、座敷に机多く相見、其上ニ卷物相見申候、百姓之家ながら樣子宜ニ付、家主御尋被成候處、百姓ながら醫者を仕、吉田順庵と申者之由申上候、右卷物御覽被成候處、御。。。。。。代々之御法度書集申候間、如何樣之樣子ニ候哉と御尋之處、順庵申上候者、近所之

子供罷越手習仕候ニ付、今川抔敎可ㇾ申よりは、御條目を敎申候へば、手習ニも、又は讀習申ニも可ㇾ宜義と奉ㇾ存、子供ニ敎申候、今日は御成ニ付子供參不ㇾ申旨申上候、翌日御勘定頭不ㇾ殘被ㇾ爲ㇾ召、昨日島根村ニ而、ケ樣之義御座候、御法度書讀習候樣ニ奉行中ゟ申渡置候義ニ候哉之旨御尋之處、申渡候筋ニ而ハ無ㇾ御座候、右順庵樣子も上意ニ而始而承候旨御請ニ御座候處、左候ヘバ彌奇特なる義思召、〇中略扨四五日以前、右村々御代官伊奈半左衞門被ㇾ爲ㇾ召、右順庵奇特成仕樣ニ付、爲ㇾ御褒美白銀拾枚被ㇾ下ㇾ之、且又六諭衍義大意一帖拜領被ㇾ仰付ㇾ候、〇中略

十一月〇享保七年廿五日　　青地藤大夫

藏人樣

〔柳營秘鑑〕一原始敍例

抑御當家關ヶ原御利運の後、早速に永井右近大夫直勝を以、細川玄旨幽齋に、室町家の禮法を問せ給ひ、猶も曾我又左衞門を召出され、將軍家の書札以下を認させ給ひて、德川御代々の御敎法を潤色なされける、

〔武家嚴秘錄〕二武家諸法度〇中略

右武家諸法度之始は、台德院樣御代、慶長二十年卯七月、御條目十三ヶ條被ㇾ仰出、或云、於ㇾ伏見城ㇾ本多正信傳ㇾ之と云、此日於ㇾ二條城、禁裏仙洞及公家衆江之御條目十七ヶ條被ㇾ仰出ㇾ之、其後大猷院樣寛永六年巳九月六日、武家諸法度十一ヶ條被ㇾ仰出ㇾ之、先君之御法令之御文言大同小異あり、外に雜事御條目九ヶ條寛永九年九月廿九日被ㇾ仰出ㇾ之、同御代寛永十二年六月廿一日再被ㇾ仰出ㇾ之、御法令十九ヶ條、外に雜事御條目廿三ヶ條同年十二月十二日被ㇾ仰出ㇾ之、嚴有院樣寛文三年五月廿三日武家諸法度廿一ヶ條、外ニ雜事御條目廿三ヶ條、同年八月五日被ㇾ仰出ㇾ之、先君之御法令之御文言と大同小異あり、常憲院樣天和三年七月廿五日武家諸法度十五ヶ條被ㇾ仰出ㇾ之、外に雜事御

條目七ヶ條、天和二年五月被仰出之、先君之御法令御文言と大同小異あり、文昭院様寶永七年寅四月十五日武家諸法度十七ヶ條被仰出之、雜事御條目無之、尤御法令御文言大同小異あり、其後、

有徳院様　享保二年三月十一日　御法令

惇信院様　延享三年三月廿一日　御法令

浚明院様　寶暦十一年二月廿一日　御法令

大御所様〇徳川家齊　天明七年九月廿一日　御法令

當御代〇徳川家慶　天保九年二月廿一日　御法令は右に出す處の御法令同前也、いよいよ堅く可相守事にこそ、

〔武家嚴秘錄二〕一天明七未年六月十八日、御書付備後守殿御渡、〇中略

一文武忠孝は、前々より御條目第一之事に候得共、別而心掛可申儀に候、〇下略

〔天保集成絲綸錄一〕御觸書取調の趣

抑武家諸法度、及び御條目或は御長屋御門の懸札、此三ヶ條は其要とするの魁たるを以、都て卷頭に置例格なれば、是は夫に從ひ、〇下略

諸士御條目

〔武家嚴制錄二〕一秀忠公御代雜事御條目

條々

一侍之道無油斷、軍役等可相嗜事、〇中略

右條々可相守此旨者也

寛永九年九月廿九日

〇按ズルニ、本書ニ秀忠公御代トアルハ、家光公御代ノ誤ナリ、

公事方御定書

〔泰平年表有徳院〕寛保二年、是年御定書を裁定せらる、

〔科條類典取調牒〕寶暦二申年四月

公事方御定書出來仕候節之書物取調之儀伺書○中略

公事方御定書之儀は、有德院樣思召ニ而、最初杉岡佐渡守江被仰付、當時之例帳之樣ニ出來仕候處、其後牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守江被仰付、御定書二冊ニ全備仕候、右御定書、向後增減之儀、御手を被爲附間敷間、其餘之儀ハ別帳ニ仕立置可然由ニ而、例帳出來仕候、○下略

〔靑標紙後輯〕寛保二年四月御定書を被爲裁御役人賞賜

時服七　寺社奉行　水野越中守

時服閑　町奉行　石河土佐守

時服四　御勘定奉行　水野對馬守

右於御座之間御目見拜領物、此外同斷賞賜、同年四月六日於躑躅之間左近將監殿被申渡面々、

御勘定評定所留役

金一枚ツヽ　淺野伴左衞門

鵜飼左十郎

銀拾枚ツヽ　岩佐郷藏

倉橋武右衞門

〔科條類典下七奥書〕寛保二戌年四月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺、

御定書帳面奥書之案

書面之通、奥書相認可申旨被仰聞、承知仕候、

戌四月十二日

右御定書之條々、元文五庚申年五月、松平左近將監を以被仰出之、前々被仰出之趣、并先例其外評

議之上追々伺之、今般相定之者也、

寛保二壬戌年三月廿七日

牧野越中守

石河土佐守

水野對馬守〇中略

御定書奥書名前書付

丸印之所江越前守名前相認、御書伺之通可仕旨被仰聞、承知仕候、

亥六月晦日

右御定書之條々、元文五庚申年五月、松平左近將監を以被仰出之、前々被仰出之趣、幷先例其外評議之上追々伺之、今般相定之者也、

寛保二壬戌年三月廿七日

牧野越中守

石河土佐守

水野對馬守

越中守御役替ニ付、寛保二戌年六月代リ被仰付、

大岡越前守

寶暦四戌年、青山因幡守、依田和泉守、曲淵豊後守伺、

御定書御帳跋江名前書加之儀申上候書付

書面伺之通、御定書跋江名前可書加旨被仰聞、承知仕候、

戌四月廿四日

越前守加役御免ニ付、寶暦二申年正月代リ被仰付、

青山因幡守〇寺社奉行

石河土佐守

土佐守御役替ニ付、延享元子年六月代リ被仰付、

島長門守

長門守病死ニ付、延享三寅年七月代リ被仰付、

能勢肥後守

肥後守御役替ニ付、寶暦三酉年六月代リ被仰付、

依田和泉守

水野對馬守

對馬守御役替ニ付、延享元子年十二月代リ被仰付、

木下伊賀守

伊賀守御役替ニ付、延享三寅年三月代リ被仰付、

神谷志摩守

志摩守病死ニ付、寛延二巳年八月代リ被仰付、

遠藤伊勢守

伊勢守御役替ニ付、寶暦二申年二月代リ被仰付、

松浦河内守

河内守御勝手方被仰付候ニ付、寶暦二申年三月代リ被仰付、

曲淵豐後守

右之通御定書御帳跋江書加可申候哉、奉伺候、以上、

戊四月

右之趣達上聞相極候、奉行中之外不可有他見者也、

寛保二壬戌年四月　　松平左近將監

〔有德院殿御實紀附錄三〕東照宮よりこのかた、世々の法令の類久しくゆるみすたれて、さだかならざる事のみ多かりければ、宿老松平左近將監乘邑に命を下され、三奉行等會聚してつばらにこれをたゞし、歷世の御黑印御下知狀の類をも合集して、十五冊となして奉りしかば、法度書と名づけ玉ふ、又刑典の事を御みづからあつめさせ玉ひ、礒野丹波守政武小性に淨寫せしめられ、宿老少老三奉行等に示して集議を加へられ、三四年をへてなりければ、公事方定書と名づけらる、是につぎて、出家社人の法令をも撰ばしめられ、〇中略法令故事の書ども悉く落成しければ、いまは政もなしやすくなりたりと、御悅び斜ならざりしが、いくほどなく、御隱退の事思召立れしと也、

〔享保集成絲綸錄四十九〕寛保二戌年四月　　三奉行江

此度御定書相極、御仕置之定ニ而、大切成事ニ候間、奉行中心得ニいたし、猥ニ他見無之樣ニ可被相心得候、

四月

〔續泰平年表〕天保十二年六月十日、小十人本多左京組大野權之丞御仕置、其方儀、御政務筋に拘り候不容易事共、彫刻致し、本屋伊助へ相渡遣候段、不屆之至、依之九鬼式部少輔江御預被仰付之、此一件は、泰平年表、及殿居囊、青標紙等著述之罪科と云、同十八日權之丞總領大野鐐之助、改易被仰付、

〔科條類典附錄下〕延享二丑年九月、大岡越前守、島長門守、木下伊賀守江、加納遠江守口上之趣覺書、

一御定書之事、追々加入候而は限りも無之事候間、御定書ハ只今迄之通差置可申候、

一此以後之御仕置付は、向々より伺出候黃紙之文言を相認、其内にもあまり短くば書入も仕、評

相聞江候樣可仕候、短長も相改書入可申候、依之右之帳面は、例書と認可申候、勿論段々加入候樣ニ仕、御定書ニ添置可申候、

寛政刑典

〔御定書百箇條典書〕右御定書之條々、元文五庚申年五月、松平左近將監を以被仰出候趣、先例其外評議之上、追々奉伺之、猶又此度相定之もの也、

寛政二庚戌年三月廿七日

寺社奉行　松平右京亮

牧野備前守

町奉行　初鹿野河內守

池田筑後守

御勘定奉行　根岸肥前守

曲淵甲斐守

右之趣達上聞相極候、其掛御役人之外、不可有他見者也、

寛政二戌年四月

松平越中守

科條類典

〔科條類典下書七〕右科條類典者、寛保二年仰三奉行被定置律令之節被取用舊例、并享保年中之令條、及其時奉伺書物等、是迄元例と唱來者、今般松平右近將監承仰差圖之分、部類以輯錄之者也、

明和四丁亥年五月

土井大炊頭利里

依田豐前守政次

安藤彈正少弼性要

右之趣達上聞集之候、奉行中之外不可有他見、尤雖一條抜書等永禁之者也、

明和四丁亥年五月

松平右近將監武元

〔科條類典取調牒〕寶曆二申年四月

公事方
御定書出來仕候節之書物取調之儀伺書

御定書御用掛

土山藤右衞門

佐久間忠兵衞

各務傳五郎

清水彌八郎

中根喜四郎

公事方御定書之儀ハ、有德院樣思召ニ而、最初杉岡佐渡守江被仰付、當時之例帳之樣ニ出來仕候處、其後牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守江被仰付、御定書二冊ニ仝備仕候、右御定書、向後增減之儀、御手を被爲附間敷間、其餘之儀ハ別帳ニ仕立置可然由ニ而、例帳出來仕候、

朱書
此例帳之儀ハ、御伺ニ而御仕置相濟候分、御一座ハ勿論、遠國奉行衆よりも、評定所江寫帳御差出候間、只今迄無之御仕置、御下知ニ而相濟候分、私共書拔御寄合之節、御評議之上例帳江御組入ニ相成候儀ニ而、右御組入之儀御伺者無御座候、尤今般私共伺候分、御評議之上御組入ニ極候得ば、無仰上候而例帳下り綴入候而、御差上候儀ニ御座候、右被仰上候節之御書上認方例御座候、

右御定書之內、御取計方之御帳は、有德院樣御好之上、箇條名目ニ而事少手短ニ出來仕候、其譯は、御先代より御仕置被仰付候內、御定ニ可相成分御評議之上、御伺有之、御尋も有之候上、御下知ニ而定り候も有之、又御伺之通り極り候も御座候、最初御組入ニ成候も、追而思召ニ而御除被遊候も有之、又追々御組入も有之、右箇條每之意味、當時之御定書ニ而ハ相見不申候、御定書之儀ハ、誠有德院樣悉御心力を御用被遊候御事、右一件書物合印シ抔を附、帳面數拾冊有之、張り紙下ゲ札

等ニ而認置候間、年數相立糊ばなれ仕候得ば、數々之張紙附札之儀故、取集も難仕樣ニ相成、御下知書も通口之儘ニ而有之候故、万一取紛可申哉、御大切之御事恐入奉存候、有德院樣思召は、悉右帳面數々書付等ニ記有之候間、今般取集御定書之箇條限ニ御伺之先例を認、被仰上候書付、御尋之御書付、御答書御下知書等、次第を譯相認候はゞ、箇條每ニ意味相知、有德院樣之思召大成仕候御事奉存候、只今迄之通ニ而は、混雜仕有之候間、取調被仰付可然哉ニ奉存候、此儀倉橋武右衛門存付候內、御役替被仰付候、右一件之儀容易ニ出來可仕事ニは無御座候間、漸々と組立候樣可仕候哉奉伺候、以上、

申　四月

寶曆三酉年十二月上ル、同四戌年四月伺濟、

御定書出來仕候節之書物取調之儀ニ付伺書

書面伺之通御定書之儀ニ付、取調可仕旨被仰聞、承知仕候、

戌四月廿三日

青山因幡守
依田和泉守
曲淵豐後守

公事方御定書之儀は、御尋之上御下知ニ而相定り、伺之通極り候も御座候、最初組入候を追而相除又は追々御下知ニ而組入候も御座候、右箇條每之意味之儀、書物合印抔を附ケ候帳面共、數拾冊評定所ニ有之、張紙下ゲ札等ニ認置候間、年數相立糊ばなれ仕候得ば、數々之張紙附札之事故、取集も難仕樣ニ相成、万一取紛れ可申哉之旨懸ケ置候評定所留役幷支配勘定申聞候間、相糺候處、前書之通ニ御座候、尤箇條每之意味、御尋等有之候節は、右之書物共相糺申上候儀ニ付、取調置可然奉存候、右取調之儀、容易ニハ出來難仕奉存候間、寄々可取調旨申渡候樣可仕候哉奉伺候、以

上、

寳暦十四未年六月伺

御定書出來候節之書物取調之儀ニ付伺書

書面伺之通、別紙名前之者江重モニ取調させ可ㇾ仕旨被ㇾ仰聞、承知仕候、

未八月十五日

毛利讃岐守

依田豐前守

安藤彈正少弼

御定書出來仕候節之書物取調之儀ニ付、別紙之通堀田相模守殿江相伺候處、伺之通取調可ㇾ仕旨、去ル四月御同人被ㇾ仰聞候、然ル處御定書ニ懸ヶ置候留役、幷支配勘定評定所公事、幷御勘定奉行懸公事吟味もの等之定式、御用手懸候故、只今ニ取調不ㇾ仕候間、別紙名前之のもの共、右定書出來仕候節之書物、重もに取調させ候様仕度奉ㇾ存候、依ㇾ之相模守殿江相伺候書付幷懸ヶ置候もの、名前相添奉ㇾ伺候、以上、

未六月

明和三戌年伺濟

御定書出來候節之書物淸書出來仕候ニ付、題號等之儀申上候書付、

題號幷跋御別紙之通相調可ㇾ申候、尤追而御奥書も可ㇾ被ㇾ成旨被ㇾ仰聞、承知仕候、

戌五月十二日

土井大炊頭

依田豐前守

安藤彈正少弼

御定書出來仕候節之書物取調、淸書出來仕候、然處是迄右書物を元例と唱來候得共、今般取調候

御帳は、御定書本文之伺前々被仰出候御書付類も有之、元例計ニ而は無御座候、后後江相殘候御帳之儀ニ御座候間、題號何と相認可申候哉、
右御帳之跋江私共奥書仕、其上御奥書も可被成候、依之御定書奥書寫相添奉伺候、
右之段奉伺候、以上、

戌三月

〔德川禁令考後聚首提要〕御定書出來候節之書物取調候趣

御定書上卷は、元文三午年三月十四日、彌此通定置、追而被仰出等、此帳ニ可記儀は書記可申候、其節々其趣書付可差出旨被仰渡、承知仕候由、評定所一座承附有之御帳之內、
朱書此御帳は、御仕置附モ有之候得共、多分は御書付御觸書等書載、御勘定奉行杉岡佐渡守江被仰付出來之御帳と相見、其頃佐渡守一名ニ而一座江之相談書扣有之候、〇中略
御仕置相定り候分は、下卷ニ書載、評定所始之事卷頭ニ而都而被仰出候御書付御觸書等上卷ニ認、同四未年三月廿二日、御褪案差上御好有之、同五申年五月十日御下ゲ被成、
朱書此未年之御帳者、一座掛りニ而出來と相見へ、申五月十日、寺社奉行牧野越中守、町行奉石河土佐守、御勘定奉行水野對馬守、掛り被仰付候趣書留有之候、
其外加入之御書付、寛保二戌年認差上候上御定書上卷出來、依之今般御本文を相認、一箇條限元文三午同四未寛保二戌、三ヶ度上り候御帳之御文段を細字ニ認、題號之上ニ(元)と記し、右御文段之內、出所有之分は(先)と記し、其以前之御書付、又は御仕置之例抔相認ル、
一同下卷者、前書元文三年御帳之內、幷前々より之例、或は評議之趣、元文五申年より寛保二戌年迄、度々ニ伺有之、右戌年御定書下卷出來、其後延享年中追加書載候依之今般御本文を相認、一箇條限、又は箇條多は二三段にも仕譯、度々之伺を細字ニ認、題號ニ(伺)と記し、右御本文一打之

上之年號幷伺書之朱書掛紙等を見合㊄と記し、元例幷其以前之御書付等を相認ル、

一御定書ニ添候例書ハ、延享二丑年追加伺之節、御定書之事追々加入候而は限りも無之間、御定書ハ只今迄之通ニテ差置、此以後之御仕置付ハ、向々より伺出候黄紙之文段を相認、其内にもあまり短くは書入も仕譯相聞候樣可仕、長短も相改書入可申候、依之右之帳面は例書と認、勿論段々加入候樣仕、御定書ニ添置可申旨被仰出、其砌御定書追加ニ相成候も有之、殘分例書モ出來、其後御加入有之、以來も追々御加入可有之御帳ニ候、依之今般例書出來候節之書物取集、御定書追加ニ成候分は×緑印此印、例書ニ出來候分は■朱印此印を付相認ル、

右は御定書出來候節之扣、幷下書等を取集、順を立致淸書、箇條限はいろは之合印、其外御附紙下ゲ札等は、○朱印●緑印×朱印是等之合印を以取調者也、

明和四丁亥年五月

土井大炊頭

依田豐前守

安藤彈正少弼

〔採要秘史九〕寬政五丑年松平伊豆守殿御書取御渡

一武士家敷ニ而召仕博弈致候節之儀ニ付評議○中略

去ル廿日御渡被成候御書取一覽仕候所、武士屋敷ニ而召仕、博弈いたし候もの遠島と有之御定書は、科條類典之趣幷其頃之舊例ヲ以見合候得ば、主人屋敷ニ而、博弈いたし候者、都而遠島とは不相聞候所、此度一統遠島と評議仕申上候は如何之趣意ニ而哉、今一應得と相糺可申上旨被仰聞候、

〔採要秘史九〕寬政元酉年松平越中守殿御書付御渡

一父之科ニ而悴御仕置之儀ニ付評議○中略

集成絲綸錄

死刑之悴は遠島、遠島之悴は中追放と相成候との元極は相知不レ申、科。條。類。典にも相見不レ申、依レ之品々勘辨仕候處、何れ江引當可レ申品無二御座一候間、前例も相當不相當之所決著難レ仕、〇下略

〔天保集成絲綸錄 一〕御觸書取調の趣

御觸書の義は、寛保年中有德院樣上意をうけ奉り、慶長廿年より寛保三年まで、百廿九年の間觸示さる、御書付の類、御右筆所奥留日記、町方の諸觸、御勘定所及び御目付方留記等を校合訂正し、凡三千五百五十通をば十部に分ち、全して五十卷となり、浚明院樣御代のはじめ編集する御觸書は、延享元年より寶曆十年に至、十七年の間の御書付にして、凡二千六十通、六十五に部を分ち、是は册をなすに三十三卷にいたり、題を寶曆編集といふ、文恭院樣御代のはじめ書集むる所は、寶曆十一年より天明七年迄廿七年の御觸にして、凡三千二十通を六十部に分ち、五十一卷となれり、天明集成と名づく、依て當御代また其事を興し、かき集むる御觸書は、天保八年より天明八年迄に逆のぼり、五十年の間の諸御觸事等六千六百七通、其部を分つに九十なり、是を目錄とも百八卷となして、天保集成と名づく、〇中略

天保十二年七月

赦律

〔赦律 奥書〕右赦律之條々、嘉永四辛亥年五月、阿部伊勢守を以被二仰出一之、前々被二仰出一之趣幷先例其外評議之上、追々伺レ之、今般相二定之一、奉行中之外不レ可レ有二他見一者也、

文久二壬戌年三月

松平伊豆守
石谷因幡守
酒井但馬守
脇坂淡路守

〔德川禁令考後聚 三十九 赦律〕赦律取調之趣申上候書付

遠山左衛門尉
池田播磨守

赦律之儀は、元來御定書ニ可對品ニ可有之處、凡之條目聊計ニ而、其餘者時々之評議を調足し、又者申合等を追々書繼ニ相成居、一部連續之品ニ無之、自然區之儀も出來可申哉ニ付、今般御定書掛ニ而、起立より得と取調規定を立直し、總而首尾致貫通候樣改革いたし可相伺旨、御書取を以被仰聞、其外御口達之趣承知仕、追々取調候處一體御赦取調方之儀は、明和九辰年二月中評定所類燒之節、諸留帳類多分燒失いたし、其以來可見合書物等も少く、差支候に付、其頃評定所留役相勤候永田與左衛門儀、前々赦免相成候もの共、何之科ニ而御仕置之節より何ヶ年目ニ而、何之御赦ニ御免相成候趣相分候樣、科書幷赦免年數取調編集いたし、其後評定所留役太田作兵衛、右先例幷前々赦免難成趣ニ申上來年來、赦免難成もの共、幷追々之評議濟、其外書留類を取集、右を元ニいたし、赦免有無箇條限に取調、留役共下調いたし候節、右を見合取調、一座評議之上評決之趣を以、右箇條を取直し又者認加、追々に增補いたし、大赦律と唱、兩樣之書面を當時專ら見合、赦免有無取調候儀ニ而、元來凡例大赦律とも、留役共心附を以取調方便利之爲、取調候書面ニ付、御定幷御仕置例類集同樣抔と申品ニハ素より無之候得共、凡例之儀ハ、前々之例を取集其儘編集いたし候ニ付、別ニ子細も無之、大赦律之儀者、箇條書ニ取綴候儀ニ付、最初者留役共了簡を以取捨いたし候儀も可有之候得共、右迚も前々之評議濟等に見合取計候儀、殊に其以來一座評議之上取置、又者追加等いたし候儀に付、當時に至候而ハ、全く一座評議濟之書面ニ付、左而已不相當之箇條も無之候得共、專ら先例而已に基キ候儀ニ付、先例無之分は箇條無之、箇條出來之分も先例に泥ミ候故、餘事ニ流用難致も有之候處、惡事之品定り無之候間、是迄之取調、多分凡例幷其後追追放免相成候もの共之內似寄之罪狀年數等を見合、赦免有無評議いたし候儀に有之候、然ル處、

御赦之儀、縦三笠附、博奕、取退無盡之類、五ヶ年過候はゞ、御赦有之節、御免之儀可相伺旨之御定有之候とも、御赦無之候得バ、赦免ニハ難相成候間、先例年數之儀ハ、一概ニ見合ニハ難相成、品ニ寄區之儀も出來いたし、御沙汰之趣御尤之儀ニ付、得と勘辨評議仕候處、一體大赦之儀ハ、罪狀ニ年數之極メ有之、右年數相立候上ハ必可差免と申筋ニハ無之、一旦不屆およひ候とも、夫々御仕置ニ相成候得バ、以後を可愼ハ勿論之儀ニ付、右體之もの彌改心いたし候樣、勵之ため御慶事等ニ被託、御仕置被赦候儀ニ付、罪科ニ被處候節とは、筋柄格別之相違ニ而、且全臨時之儀ニ付、年數不同無之樣にハ迚も難相成、乍然不屆もの容易ニ赦免世上之害ニ相成候而ハ、御赦之詮無之候間、赦免難成罪狀と、被赦可然品と之差別を不紛樣取極、猶評議之節々、右之所を專一ニ評論いたし、赦免有無取調候ハゞ、年數之儀ハ御仕置之輕重ニ應じ、取調方ニ不平無之樣大凡ニ段階を立置、規則さへ相立候ハゞ可然哉ニ付、赦免有無心得方之儀ハ、右之心得を以取調、其餘御赦一體之取計方、幷兩山赦帳取調方をも勘辨之上、御書付類、伺濟、幷律先例をも見合、別冊取調例書、幷律寫相添相伺申候、伺之通ニ而可然御座候ハゞ、本文幷但書計を清書仕差上候樣可仕候、尤別紙御赦取計方箇條之內、兩山赦帳取計方之儀、再應談判仕候得共評議一決不仕、然ル處今般取調之趣ハ、一時之取計而已ニハ無之、永世之御規則ニ而、別而不輕儀ニ付、脇坂淡路守存寄之趣ハ、右廉江懸紙幷下ケ札等ニ仕、兩樣ニ取調差上候間、厚御評議之上、いづれニ成共御差圖御座候樣仕度奉存候、依之御渡被成候御書取壹通返上仕候、以上、

亥十一月

古事類苑

法律部三十三

下編上

死罪 下手人附

斬罪

切腹

古事類苑

法律部三十三

下編上

死罪 下手人附

德川幕府ノ極刑ニハ、鋸挽、磔、獄門、火罪、斬罪、死罪、下手人等アリ、死罪トハ庶人ヲ斬ニ處スル法ニシテ、或ハ其死屍ヲ樣斬ノ用ニ供ス、樣斬トハ、刀劍ノ利鈍ヲ驗スルモノニテ、之ヲ既ニ刑セラレシ屍ニ施スナリ、但シ士分、社人、僧徒、婦女、剃髮ノモノ、及ビ惡瘡ヲ患フル者、非人ノ類ノ如キハ、其用ニ供セズ、

死罪ニ除日アリ、刑ヲ行ハザル日ヲ謂フ、除日ハ時ニ隨ヒテ沿革アレドモ、重キ祭日、及ビ代代將軍ノ忌日等ハ、大抵之ヲ除ケリ、

引廻トハ、道路ニ徇フルヲ云フ、罪ノ重キ者ニハ此屬刑ヲ加フ、往昔ニ大路ヲ渡スト云フニ同ジ、

死罪方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一死罪 従二前々一之例

首を刎、死骸取捨、樣(タメ)しものに申付る、

但欠所右同斷○田畑、家屋敷、家財共欠所、

〔刑罪大秘錄〕死罪御仕置之事

一鞘役打役不殘牢庭江罷越、打役者牢鞘出口ニ立居、鞘内江者、牢番同心貳三人、無腰下男八人入、

（刑罪大秘録）死罪圖

牢屋番所

カケシバ

土マ

ヒサシ

西詰入口

東詰入口

湯ミ所

ネリヘイ

囚人

同下男

鎰役筆頭

同

同

同

打役

ヒサシ

検使

當番

鎰役

同

同

同

改番所

石出帯刀

牢屋見廻

與力

同心

同

同

非人

人足

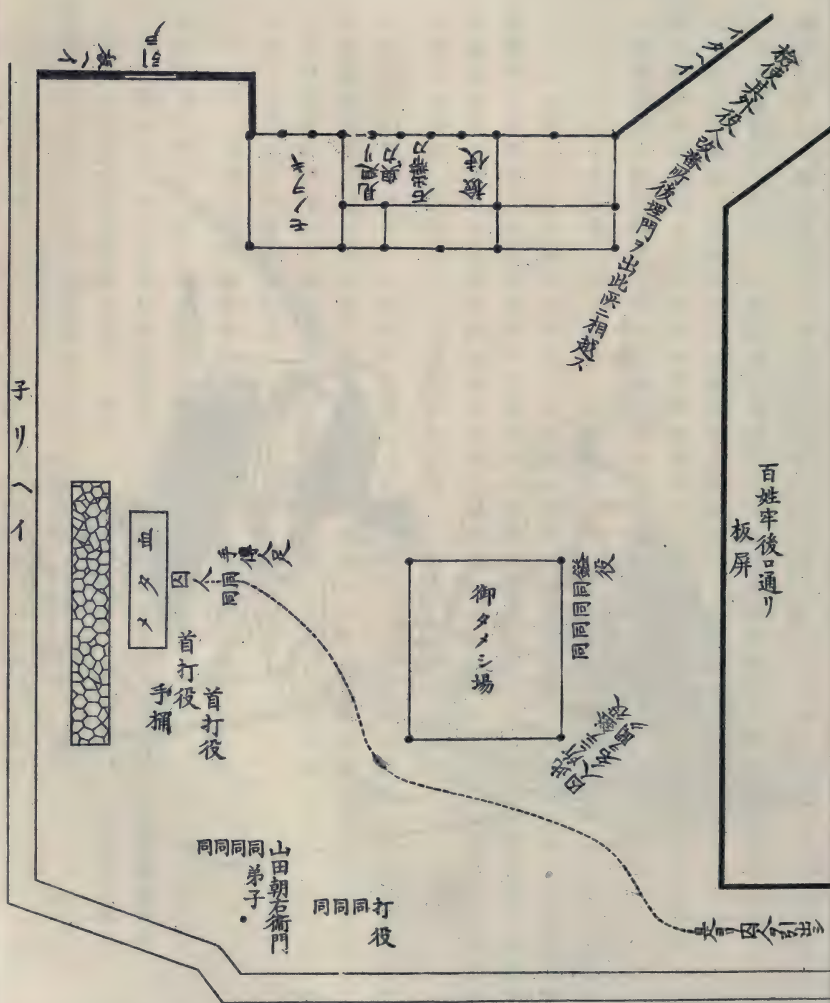
井戸

死罪埋門ヨリ出ス

ネリヘイ

埋門

埋門


子リヘイ
血タメ
囚人
手傳人足
首打役
首打役
手捕
御タメシ場
百姓牢後口通り
板屏
山田朝右衛門弟子
同同同同
打役
同同同


首討落ト直ニ刀ヘ水ヲ懸ケ此半紙ニテ血ヲ拭フ
首打役
手傳人足三人
此所ヲ血溜ト云平常ハ蓋ヲスルナリ
ノトワ切捨ル

鎰役ハ鞘外へ廻リ、御仕置ニ可成囚人大牢ニ居候得バ、鞘外より大牢戸前口江向、此時鞘內ニ而者、牢番同心鎰をはづし扉を開く、當番鎰役云、大牢何所無宿誰ハ居るか、牢屋名主答て居ります、何所無宿誰と大聲ニ呼、其名差之囚人を左右より相牢役人兩人ニ而手を取、戸前より正面之羽目江押付、夫より牢內役人之分立取かこみ、牢根太板を踏みならし、戸前口江押出し、外ニ死刑之もの無之候得バ、鎰役云 揚屋貳間牢御沙汰はない、牢內名主幷役人之分同音ニ而アヽと答ふ、囚人ハ鞘內ニ而、切繩をかけ、鞘外ゟ鎰役出、出牢證文を以、名前肩書歳入り日、掛り附相改、鞘口より打役繰出し、下男繩取、改番所江引居、猶又鎰役再應名前肩書、其外共得と相改、打役壹人牢屋見廻り、詰所前江罷越、御仕置もの差出候ニ付案內いたす、夫より撿使一同改番所江罷越、當番鎰役改出牢證文を以申渡、直ニ側ニ扣居候非人大勢ニ而取圍み、打役附添、牢前通りゟ死罪切場入口江廻し目隱しいたす、撿使其外之役人ハ埋門を出撿使場江廻ル、

一撿使其外相揃、切場口より打役四人先ニ立、囚人ハ非人三人ニ而、繩取引出ス、當番鎰役、囚人之名を問、答候得バ直に場所囘之前、俵こもの上、草履をぬがせ据ゑ、手傳人足之腰之小刀をもつて、切繩之脊結び目より襟の下江上げ、咽喉繩切捨、着もの引下ゲ、肩を出させ、手を添へ首を延させ、手を引、首討役町同心討之、

但相對ニ而、御樣御用相勤候山田朝右衞門江遣之、爲討候事も有之、

一死骸之儀ハ、牢屋見廻り鎰役江致差圖、鎰役ゟ打役江申繼、

但死骸ハいづれも取捨候得共、樣物ニ難成分ハ、回向院千住之寮江遣し爲埋候事、

揚屋もの幷女下手人等ハ、御樣ニ難成、

〔記事條例十一〕文化五辰年七月十八日、書送帳書拔、

一明十九日、此方掛於評定所御詮議落着者有之候御沙汰ニ付、彌有之候はゞ、右出役各江觸遣可

申、依之致內觸候旨、谷村猪十郎、秋山深右衞門、三村吉次郎江相觸、出役同心拾貳人、定觸役江內觸遣、南御番所江　人數同樣內觸可被致旨相觸候、

一右落着一件之內、斬罪、獄門、死罪、御仕置者有之、御沙汰ニ付、左之通觸ル、

一明十九日、此方掛、於評定所御詮議落着者之內、獄門御仕置ニ相成候者可有之哉ニ付、彌有之候はゝ、右撿使年寄同心壹人觸遣可申間、致內觸置可申旨、四番組月番年寄同心江觸、南御番所江も同樣觸遣ス、

一右首討役、明日當番若同心三人名前差出し可申旨、御番方世話役早川斧三郎江申渡、名前歲附共相認差出し候ニ付、御詮議掛江達候事、

〔公事方類例集〕拾札案

上村田村無宿　倉次　子二十八才

此もの儀、無宿之身分にて長脇差を帶、博弈を渡世同樣ニいたし歩行、剩奧州本內村ニおゐて、仙臺獻上荷物宰領佐藤昌之助江、和藏幷同國長倉村嘉藏、其外之もの共及狼藉候之節、手向ひは不致候共、獻上荷物宰領之もの江對し、及惡口候之段不恐公儀いたし方、其上同國南牛田村權之丞、幷成田村與五左衞門明家ニ罷在候無宿權吉和藏捕方之手引いたし候を、同人遣恨に含、兩人を殺害いたし吳候樣任賴、和藏重立、無宿國八外三人、又は無宿傳作外九人、一同長脇差を帶罷越、權之丞家內江踏込、同人不居合候迚、和藏差圖を請、國八辰之助倶々權之丞女房ゑつを切殺、或は無宿傳作外三人一同、權吉を及殺害、其上無宿竹次江無宿民治ゟ貸置候、衣類脇差等催促いたし候ゟ事起り、竹次と口論之上、同人をも及殺害候始末、不屆ニ付、死罪ニ行ふもの也、

子〇文政十一年八月

朱書
別紙之通南牛田村江相建候事

〔憲教類典四ノ五〕享保元丙申年十一月廿九日
評定

死罪日

二日　十二月計除可ㇾ申
三日
四日
五日　八月計除可ㇾ申
六日　二月計除可ㇾ申
七日
十一日
十二日　四月計除可ㇾ申
十三日
十八日
十九日
廿一日　十一月十二月計除可ㇾ申
廿二日　六月計除可ㇾ申
廿三日
廿五日
廿六日
廿七日

右之通死罪御構無ㇾ之

申十一月廿九日

〔憲教類典四ノ五評定〕享保三戊戌年十一月

死罪日可限心得之書付

正月　九日　廿三日

四月　十六日　十九日　廿八日

但大之月ハ廿九日可除

五月　七日　廿三日

八月　七日

十月　十三日　廿一日

戌十一月

〔國治令公事方〕御仕置除日之儀、文化元子年相達置候處、今般猶又令改正候間、向後別帳之通相心得、御仕置被申付、御法事等にて除日難決儀も有之候節は、其時々可被申聞候、依之申達候、以上、

文政九戌七月二日

曾　豐後守

石　主水正

御仕置除日書付

正月　元日ゟ十二日迄

十四日　十五日　十七日　廿日　廿三日　廿四日　廿八日　晦日但小ノ月ハ廿九日

二月

朔日　八日　十日　十二日　十四日　十五日　十七日　廿日　廿三日　廿四日　廿五日

廿六日　廿八日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

三月

朔日　三日　四日　八日　十日　十二日　十四日　十五日　十七日　十八日　十九日
廿日　廿四日　廿八日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

四月

朔日　三日　八日　十日　十二日　十四日　十五日　十六日　十七日　十九日　廿日
廿四日　廿八日　廿九日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

五月

朔日　五日　七日　八日　九日　十日　十二日　十四日　十五日　十七日　廿日　廿四
日　廿七日　廿九日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

六月

朔日　二日　四日　八日　十日　十一日　十二日　十四日　十五日　十六日　十七日
十九日　廿日　廿三日　廿四日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

七月

朔日　七日　八日　十日　十二日　十三日ゟ十五日迄盆中裁許落着無之　十七日　廿日　廿四日
廿八日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

八月

朔日　八日　十日　十二日　十四日　十五日　十七日　十九日　廿日　廿二日　廿四日
廿五日　廿六日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

九月

朔日　七日　八日　九日　十日　十二日　十四日　十五日　十六日　十七日　廿日　廿
四日　晦日但シ小ノ月ハ廿九日

十月 但亥猪夕七時ゟ
朔日　二日　三日　五日　八日　十日　十二日　十三日　十四日　十五日　十七日　廿日　廿三日　廿四日　晦日 但小ノ月ハ廿九日

十一月
朔日　八日　十日　十二日　十四日　十五日　十七日　廿日　廿四日　晦日 但シ小ノ月ハ廿九日

十二月
朔日　八日　十日　十二日　十三日　十四日　十五日　十七日　廿日　廿二日　廿四日
廿八日　晦日 但小ノ月ハ廿九日

右日限相除御仕置可ㇾ被ㇾ申付ㇾ事

〔家忠日記増補〕慶長十八年三月、條々、〇中略
一ホウカラゲ、其外何ニテモ面ヲフカクツヽミ、又者夜中アミガサヲ着ル族アラバ、見合ニ可ㇾ斬罪事、

〔御當家令條〕一條々〇中略
右條於ㇾ違犯之輩者、忽可ㇾ處ㇾ嚴科ㇾ者也、
一死罪におこなはるゝ者有ㇾ之時、被ㇾ仰付ㇾ者之外、一切其場江かけ集べからず、違背之輩者可ㇾ爲ㇾ曲事事、〇中略
寛永九年申九月廿九日

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事
享保五年極
寛保元年極

一手元に有ㇾ之品、風と盗取候類、　金子は拾兩方以上、雜物は代金に積拾兩位方以上は　死罪

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重ねだり事致候もの御仕置之事、

享保八年　延享二年　極

一　かたり事之品對ニ公儀江候事歟、又は謀て巧候事歟、或は人を誘引申合候もの、　贓物一兩以上は　死罪

延享二年極　但當座之かたりは、手元に有ㇾ之品を盗取もの御仕置同斷、

○按ズルニ、死罪制度ハ、盗犯以下ノ犯罪諸篇ニ散見セルヲ以テ、此ニハ省略セリ、

〔御定書百箇條〕舊惡御仕置之事

追加延享元年極

一都て公儀之御法度を背き、死罪以上之科に可ㇾ被ㇾ行者、○中略

右者舊惡に候共、御仕置相伺可ㇾ申候、

〔公裁秘錄〕遠島死罪之者窺之事

死罪、遠島、追放可ㇾ申付ㇾ者之義ハ、前々之通可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、右之外之御仕置之分は不ㇾ及ㇾ伺候、然共死罪遠島ニ成候者之一件之內ニ候バ、輕キ御仕置ニ而も相伺可ㇾ申候、

但シ輕キ御仕置ニ而も、奉行中ニ而、難ㇾ決義ハ可ㇾ相伺ㇾ候、以上、

享保九辰閏四月

〔明良洪範 一〕寬文年中、上州高崎ノ城主安藤重博ノ納戸ニテ、差料ノ腰ノ物紛失ス、此事吟味ノ爲トテ、銘々ノ器物ヲ互ニ立會改シ所ニ、納戸役ノ器物ノ中ヨリ見出シケル、其器物ノ主ハ知ザル事ナレドモ、其中ヨリ出シ事ナレバ、是非ナク死ヲ極ム、其者利直ノ身ニ惡名ヲ殘サン事口惜敷事ナリ、武士ノ冥利ニ盡タリト歎キナガラ、死セン用意ヲナス、同役マヅ待レヨ、下々迄詮議スベシトテ、悉ク糺明セシ所ニ、草履取リニ甚恐レタル樣子ノ者コレ有故、コレヲ吟味シケルニ、私盗取候ヘ共、御詮義餘リ急ナル故隱シ所ナク、據ナク主人ノ器物ノ中ヘ入置タリト申ケレバ、主人

ノ咎ハ消ヘテ、其草履取リ一人罪セラレケル、其後亦同ジ場所ニテ刀一腰紛失セリ、此度ハ吟味猶火急ナル故、早速知レ、奥坊主ノ中ヨリ盜賊出タリ、下屋敷ニテ死罪ニ行ルベシトテ、掛リノ役人召連行ク所ニ、坊主頻ニクドキ立テ歎ケル故、撿使ヲ始皆笑テ、サテ〳〵オクレタル奴哉、今ニ至テ歎タリトテ赦サルベキヤ、覺悟ヲ極メヨト云ケルニ、坊主頭ヲ振テ、イヤ我命ヲ惜テ歎クニ非ズ、最初御刀紛失ノ時、無二ノ忠臣ヲ殺セシハ、我殺シタル也、其時ノ盜賊モ我ナリシガ、御咎ヲ恐レ、納戸役ニ罪ヲスリ付ケ、納戸役ノ器物ノ中ヘ入置タル也、サレバカノ主從ノ者ハ、一向知ル事ニ非ズ、吟味ニ及ビ、思ノ外主人ノ咎ニ落タルヲ見テ、小者、主ノ命ニ代リテ、盜人ト名乘テ罪ニ落シ時、我名乘テ出ント思シカド、賤キ根生故、夫ナリニシ、カノ忠臣ヲ斬ラセテ、ヲメ〳〵ト存命シテ居リ、惡キ手僻ノ止ズシテ、今度叉斯ノ如シ、今死ヌ命ヲ其時ニ捨ナバ、カノ忠臣ヲ殺ス間敷ニト存ジテ、夫ヲ歎キ候也ト云、爰ニ於テカノ小者ノ忠誠顯レタリ、士ハ主ノ危キヲ見テ命ヲ盡スハ古ヘヨリ申傳ヘシ由、カレハ士ニ非ズ、賤民ナリ、事顯レテ主ノ命ニ代ルハ、人臣ノ常也、カレガ科ナクシテ科ニ落入リ、主ノ命ニ代リテ主ヲ助ケシハ、誠ニ有難キ心也、此小者ハ仁義忠節ヲ學バズシテ行ヒタルハ、誠ノ忠臣、惜ムベシ、此者ノ姓名ノ知レザル事ヲ、安藤家ニテ尋ヌベシト、先哲申殘サレタリ、

〔御仕置例類集三ノ十八〕天明八申年七月

牧野備後守殿御差圖　　　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一相州津久井縣村々百姓共騷立候一件

江川太郎左衞門御代官所相州津久井縣牧野村　組頭　專藏

右之もの儀、酒造屋共、支配役所之申渡不相用樣相聞候はゞ、其段申立、吟味可相願處、家作打毀候而も不苦旨、村役人ども噂いたし候由風聞有之迚、酒造屋共之家作等打毀、難儀可相掛と存、渡守

吉右衛門江及相談、同意いたす處、正月ニ至リ候而ハ、人數大勢集兼可申と見込、日蓮村惣兵衛宅を可打毀旨、去未十二月廿七日夜、村内所々江落文致、百姓共を爲騷立、其上田代村惣兵衛居宅を可打毀旨百姓共評議區候處、大勢ニ而打毀候ニ何之子細可有之哉と高聲ニ呼リ、大勢之先江立、一同引連、惣右衛門方江罷越、家作諸道具等打毀、或ハ俵物を切解打散、質ニ取置候衣類を引裂、徒黨之頭取いたし候段、不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右去未年手限伺之上、御仕置申付候、下總國海上郡新生村、獵師善五郎儀、諸色高直ニ而、貧窮之もの共難義いたし候は、穀屋共〆賣いたし候故之儀と心得、相毀可申と存付、飯沼村市三郎江最初申談、村々之もの共江申勸候ゆゑ、多人數相集り、荒野村平五郎宅を打毀、穀物其外諸道具等紛失いたし、及騷動候始末ニ相成候段、徒黨之頭取ニ相決、不屆ニ付死罪申付候例ニ見合死罪、

同人御代官所同縣青野原村 百姓 十郎兵衛

右之もの儀、日蓮村惣兵衛方を打毀候もの共、被押寄候而は心外ニ候迚、近村々酒造屋共可打毀旨俄ニ存付、村内者勿論、隣村之年若之もの共名前も不覺申勸、同意いたすニ付、山江登り、竹筒を吹立、大勢爲騷立、青山村酒造屋惣兵衛外貳人方江押寄、家作諸道具打毀候段徒黨之頭取ニ相決、不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右前書專藏同樣死罪

同村 百姓 利左衛門

右之もの儀、專藏十郎兵衛頭取いたし、縣内酒造屋共家作等打毀候儀を承り同樣頭取いたし、半原村傳十郎宅を可打毀と存付、其旨認、落文いたし、百姓共を爲騷立、殊ニ場所江も罷出、傳十郎家

作諸道具打毀、俵物切解、衣類反物切裂候段、徒黨之頭取相決、不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右前書專藏同樣死罪

〔撰述格例初篇二ノ九十二〕寛政三亥年十二月

町奉行 池田筑後守懸

戸田采女正殿御差圖

一無宿喜兵衞盜致し候一件

無宿 喜兵衞

右之者儀、知人忠太郎同道、善兵衞方に止宿致し、相宿旅人臥り居候蚊屋之內を覗見候處、吉右衞門腰に卷居候胴卷之內、金子有之趣にて、熟睡之樣子に付、蚊屋之內江手を入探り見候處、彌金子有之候間、有合候剃刀にて、着し候單物之上ゟ胴卷を切裂、金五兩三分盜取、剃刀者、二階疊之下江隱置、右盜取候儀、改有之候ても顯不申ため、右之內壹兩壹分者、二階窓ゟ投捨、殘金四兩貳分所持致し候得共、巧成仕形不屆に付死罪、

右御仕置附

右御定書に、手元に有之品を與風盜取候類、金子拾兩ゟ以上、雜物は代金ニ積り拾兩以上死罪、金子拾兩ゟ以下、雜物は代金ニ積り拾兩位ゟ以下、入墨敲と有之候得共、此もの儀は、最初旅人體にて止宿致し、相宿吉右衞門、腰に卷付臥り居候胴卷の金子、單物之上ゟ切取候、右金子者、拾兩以下に御座候得共、右之仕形、重々不屆に御座候、尤吉右衞門油斷も御座候得共、手元之品を盜取、又者往來之巾着腰錢等、途中にて切取候類とは譯違、全相宿致し、熟睡を見込切取候段は、格別品不宜ⷯんさしをはづし、或者入口戸錠前捻切、こち明候も同樣にて、右類は、多分死罪と御仕置附仕相濟候例も御座候間、旁死罪、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政二戌年十一月

鳥居丹波守殿御差圖　町奉行 初鹿野河内守掛

一小普請千本吉之丞家來ニ而致出奔候、松本要助盗いたし候一件、

小普請組阿部越前守支配千本吉之丞家來ニ而出奔いたし候　松本要助

右之もの儀、武家致奉公罷在候處、平日酒を好、給金等遣切、勤向難儀體ニ相成、不斗惡心出、主人致他行候跡ニ而、居間ニ有之刀脇差盗取逃去、知人共を賴、代金貳兩三分ニ賣拂、名前も不存旅籠屋ニ而、飯賣女を相手ニいたし、酒食等ニ遣捨候段、重々不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右安永六酉年二月、曲淵甲斐守伺之上、御仕置申付候、細川越中守家來、三宅藤兵衛若黨ニ而欠落致し候、安藤伊作儀、給金遣込、主人之衣類等度々盗取、傍輩を賴致質入、又候大小衣類、或ハ金子入候鼻紙袋等取逃いたし、武州足立郡上尾宿捴八方ニ罷在候旨僞申聞、同所髮結文七弟子ニ相成、髮結之手傳いたし、文七を賴、取逃之衣類質入致貰、刀脇差ハ取崩、小道具ハ追々賣拂、緣錺ハ望人有之候はゝ世話いたし呉候樣、池之端仲町家主喜兵衛江賴遣、其後喜兵衛儀、此者を文七江賴候ニ付、取逃露顯いたし候儀と相察、文七方逃去、右金錢都合六兩三分貳朱四貫五百文、追々酒食ニ遣捨候段不屆ニ付、死罪可申付例ニ見合死罪、

○按ズルニ、御定書ニ、金高拾兩以上ハ死刑ニ處ストアレドモ、是ハ武家ノ奉公人ナルニ依リ、其罪ヲ重クセシナラン、

〔撰述格例初篇二ノ九十三〕寛政四子年三月

戸田采女正殿御差圖　町奉行 池田筑後守懸

一四谷天龍寺門前源助召仕次郎八外壹人、追剝に似寄候儀致し候一件、

四谷天龍寺門前家主源助召仕　次郎八

野田文藏御代官所四谷内藤新宿德右衛門店　源　藏

右之者共儀、新家市藏、石川八十郎四人申合、知人にも無之出家快徹を申勸、旅籠屋龜太郎方江罷越、飯盛女を酒之相手致し、一同持合錢無之迚、快徹衣類を押借致し、同人不承知に候處無體に爲脱裸に致し、右衣類を旅籠代に預け置候段、不屆之至に付、兩人共死罪、

右御仕置附

右御定書に、追剝致し候者、獄門と有之候處、快徹不承知に候を、無體に衣類爲脱候段、追剝に似寄候得共、同人儀、最初一旦相斷、猶又申勸候迚、旅籠屋江罷越候上之儀に付、全之追剝とも難申候間、右御定を見おろし死罪、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政八辰年十二月　御勘定奉行　根岸肥前守掛り

太田備中守殿御差圖

一下總國猿島郡村々ニ而捕候無宿又次郎外貳人、盜いたし候一件、　無宿　又次郎

右之もの儀、下總國長井戸村酒屋ニ而、猿山村兵助ニ出會候處、亂心ものニ付如何樣共心儘ニ可相成と存、同人肩江懸ヶ居候單物を奪取、賣拂可申心底ニ而、亂心を呪遣候禮ニ、右單物を可相渡旨、聲高ニ申威、兵助單物を投捨駈出候を盜取候始末、不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右兵助ハ亂心之ものニ付、如何樣ニも相成候を見込、同人肩ニ懸居候單物を可奪取と存申威、右單物投出逃去候を盜取候始末ハ、片輪もの所持之品を盜取候者も同樣ニ付、右御定ニ准じ死罪、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政十午年六月　御勘定奉行　根岸肥前守掛

戶田釆女正殿御差圖

一上總望陀郡貳拾壹ヶ村之もの共、惡黨もの捕方之儀申立候一件、　無宿　次郎兵衛

右之もの儀、市場村松原ニ而、往來人之目合を見合セ、知人ニも無之今井村金七通懸り候節、酒代之無心申掛、錢三百文受取候始末、追落同樣之儀、其外野田村甚五左衞門、玉野村市次郎共、知ル人ニも無之處、押而金子無心申掛不立去、市次郎方ニ而は金三分押借いたし候段、不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右御定書ニ追落致し候もの死罪と有之、往來之もの目合見合セ、知ル人ニも無之今井村金七通懸り候節、酒代之無心申掛、錢三百文請取候始末ハ、右御定ニも相當り、其外野田村甚五左衞門外壹人方江罷越、押而金子無心申懸候不屆も有之候得共、右を束前書御定ニ而死罪、

〔撰述格例初篇二ノ九十二〕寬政十午年十二月

太田備中守殿御差圖　町奉行　小田切土佐守懸

一淺草茅町忠兵衞盜致候一件　淺草茅町壹丁目代地吉兵衞店　忠兵衞〇中略

死罪〇中略

右御仕置附

右御定書に、不限晝夜に戸明有之處、又は家內に人無之故、手元に有之輕き品を盜取候類、入墨之上重敲と有之候處、此もの盜致候ヶ所、白狀致候分拾六ヶ所にて、右之外ヶ所も不覺所々にて盜致、殊に竹之先江打釘を打付持步行、窓ゟ右竹を差入盜取候段、兼て巧候致方にて、當座之出來心にて、手元之品盜致候ものとは譯違候間、去ル丑年御渡し相成候御書付をも見合死罪、

〔科條類典下六〕

本所横川町十兵衞地守くされ平八寄子欠落　づら治兵衞

此もの儀、六年以前、人殺出入に付追放に成、其後伯父方江參り、金子ねだりあばれ候儀に付、又々入墨之上追放に成り、重て立歸り候はゞ、死罪に成り候段申渡も承ながら、所江立歸剩入墨を拔、

僭徒處刑

奉公に出、尋之砌は影を隱し、其上常之所にて、武士町人に不限口論を仕かけ、あばれ候段、重々不屆ニ付、享保八年卯六月廿二日、水野和泉守殿依御差圖死罪、

〔舊幕府時代屆申渡抄錄〕仙石一件御仕置申渡

御請書

一宇野甚助儀、同家來元年寄生駒主計外三人より、家老仙石左京幷甚助取計方等、品々隱居播磨守へ申立候節、甚助左京內談の上、主計外三人率爾の事共、主人へ申聞候故を以、減高の上、蟄居等申付候方に可有之旨、左京より年寄共へ爲申達、其上元同家來河野瀨兵衞より、甚助は左京股肱の者にて、極大切の事共內談致し、徒士格より用人に取立、家中一統心外の由、其外左京惡事の品品、同姓共へ申立候由を以、瀨兵衞を及吟味候節、同人申立無相違廉も有之、有體吟味致し候ては、左京幷甚助身分におよび可申旨、其砌不快にて吟味席へ罷出兼候に付、勘定奉行山本耕兵衞を以、左京へ內々示談致し置、年寄靑木彈右衞門、郡奉行岩田丹大夫を以、吟味取計方相談有之候節等、讒訴の趣に吟味詰候儀及挨拶、其外主計外三人、右次第再吟味に相成、瀨兵衞と申合候儀無之旨、申立候口上書差出候を、瀨兵衞俱々取巧、讒訴致し候儀、手續書取調、主計等咎相濟候儀を、現在罪科の體に書加候、事實相違の書面を以、主人をも欺、重御役人樣の御內慮迄相伺、瀨兵衞は死罪、主計外三人は切腹より一等輕き仕置の心得にて、剃髮の上圍入申付候儀、內實左京申談取計候始末、不忠の左京へ相組し、主人爲筋申立候者を重科に陷いれ候に無紛、不屆に付、死罪被仰付候、

〔公案比事三十二〕天明八申年

桑原伊豫守掛

一武州源左衞門新田にて捕候、了順僞之儀申掛候一件、

牧野備後守殿御下知

伊奈半左衛門知行武州足立郡源左衛門新田にて捕候　了順

右之者儀、去ル卯年、上州下中森村萬福寺江罷越候節、先觸文段に重き御靈屋役僧と有之候處、其儘にて受取、其上京都江登り候砌、重キ御別當所之會符似せ共不㆓心付㆒借受、其後罷下り候ても不㆓相返㆒所持致罷在、殊に岩槻淨安寺江罷越候途中、重キ御靈屋御用と僞、村々にて人足爲㆓差出㆒剩武州道合村人足、會符を損候迚、過料錢廿五〆文、并誤之一札可㆓差出㆒旨申掛候段、かたりに相當、不屆ニ付死罪、

〔御定書例書〕白狀候に付出家御仕置の事

寛保二戌年十二月御仕置の例　武州下濱田村古義眞言宗　吉祥寺

此吉祥寺儀、同國小金井村六右衛門兄五右衛門儀、當春金子無心申候故、貸遣候處、其以後も罷越、押て借受度旨申あばれ候間、不屆者故、追出し候得共、生死の儀不㆑存旨、吉祥寺雖㆑申、同村源藏店酒屋平六方に、五右衛門酒に醉臥居候を、吉祥寺繩をかけ、寺へ連來、脇差のむねにて打殺候を、召仕門兵衛見留、其上盗賊入候由爲㆑呼、村中集候節、平六源藏へは、兼て五右衛門心易參候間、親類尋に參候共、沙汰仕間敷旨申聞、組頭善市右衛門、百姓與右衛門へも、詮議の節、强き拷問に逢候共、殺候儀は相隱し、追拂候由可㆓申張㆒候間、村中の者共へも、右之通心得罷在候様に、吉祥寺相賴候旨、右兩人も申之、死骸召仕共に申付、俵に石を入くゝり付、利根川へ捨させ候段、召仕并村方の者共も見留、無㆑紛由申に付、再應詮議の上、嚴敷拷問申付候得共不㆑及㆓白狀㆒候、然共右之通、吉祥寺打殺候に無㆑紛相見候間、死罪可㆓申付㆒哉と相伺、其通被㆓仰渡㆒候事、

〔御定書例書〕借金銀口入の者金子の右へ有合の判を押、返金横取いたし候者御仕置の事、

延享二丑年六月御仕置の例　勢州山田町大蓮寺住持　彰譽

早川半五郎と申者、金子町内へ借候節、彰譽致㆓口入㆒、宇田三郎兵衛と申者を、彰譽賴證文に三郎

兵衛加印被致置、町内より半五郎方へ遣候金子、彰譽受取候處、三郎兵衛へ相渡候と僞申し、且自分印形を半五郎印形の由申之、喜兵衛と申者へ渡置、利銀是又受取掠取候段、出家ニ不似合謀計不屆ニ付死罪可申付哉と山田奉行伺の處、

御差圖

大連寺事、金子償遣候樣に可申付候、償候はヾ重き追放可申付候、償候事成不申候はヾ可爲死罪、不殘償濟切不申候共、相手相詫候はヾ、重き追放可申付事、

大連寺所持の金子幷寺附の外、自分所持の品を以償せ、餘金有之候はヾ、欠所可申付事、

〔吟味伺進達留三ノ六〕淺草玉蓮院誡忍盜致し候一件吟味伺書

御仕置附之儀　　淺草玉蓮院　誡忍

右文化四卯年、評定所一座江評議ニ御下被成候、荒尾但馬守火附盜賊改之節相伺候、小谷津林村無宿信全儀、清光寺住職致し罷在候砌、同宗梅松院明王院等江罷越候處、留守又者人居合不申候ニ付、盜可致と建寄有之戸を明け這入、衣類、反物、帶、衣、打敷、佛具、雜物盜取、右品々者、質入賣拂、右代金銀錢不殘遣捨候段、一寺住職をも致し候身分にて、旁不屆ニ付、死罪と相伺、評議之上、伺之通と申上、其通相濟候例有之、右例之信全は無宿にて、戸明之盜ニ付、一ト通りに候得ば、入墨之上重敲相當ニ候得共、一寺住職中之盜故、右を以死罪相成候儀ニ付、右ニ見合、死罪と御仕置附仕候、

丑十月

三奉行江

〔天保集成絲綸錄百〕寛政二戌年四月

懷胎之女、死罪御仕置申付候儀、只今迄之例、區ニ候、死刑ニ相成候もの之子ニ而も、依父母之科死刑ニハ及ばず候、懷妊之女を殺し候ては、胎內之子、科なくして命を絕ニ當り候間、以來出產之後、

死罪ニ可被申付候、

非人處刑

〔歎歳餘錄十〕寛政七年霜月、淺草たんぼにて本屋を殺し、金子奪取たる非人同十二月廿六日引廻し被仰付、淺草穢多團左衛門江さげ置れ、死罪に處せられたり、その節非人の盜賊四人同所にて死罪ありしに、本屋親類をはじめ、盜賊に殺されたる者の親類、御刑罪の次第見物致すべきよし被仰付、團左衛門方へ行て見たりしに、先罪人を板の上へ縛し、あふのけに臥さに、扨穢多牛馬の皮を剝庖丁を持出て、先罪人の兩脚を斬去、そののち兩臂を斬去て、又右の庖丁にて頰の皮を剝去、其後首を切捨ける、輕罪の者より刑して、段々重罪の者に及事とぞ、かく刑戮せられて、そこら血まぶれに成て苦痛に堪ざる體をみて、敢て一人も頭を擧てみる者なかりしとぞ、非人の人を殺したるは重罪の事にして、穢多の家の法に處して刑する時は如斯事也とぞ、

引廻之上死罪

〔刑罪大秘錄〕引廻御仕置之事

一牢を出し候迄ハ、死罪之もの前書手續同樣、改番所前ニ而、三寸廻り程之藁太繩を腰繩に致し、苧細引を增繩ニ掛、夫ゟ牢屋見廻江案內致、前ヶ條同樣撿使申渡相濟（寺社方 御勤役迄カ 加役方）囚人ニ候得バ、撿使より出役之引廻し撿使町方與力請取之、前ヶ條同樣非人足取圍ミ、裏門より出、非人共囚人を抱へ馬ニ乘せ候事、

一馬ニ乘せ方ハ、鞍之上江菰壹枚打掛ケ、囚人乘候得バ、右三筋之繩を乘る菰江引通し、馬添之非人、左右より兩人ニ而、右繩を取リ、動かざる樣ニ致し、別ニ馬に縛リ付候儀ハ無之、重病之者ハ、曲錄と唱候木江結付、鞍も縛り付候、

一引廻し撿使ハ、町方與力雙方貳人、馬上ニ而附添、下役之同心ハ、囚人之人數ニ寄不同、

但撿使與力ハ御仕置前日、月番又ハ懸り町奉行申渡、

一引廻歸之節ハ、牢屋敷より出候見ほし之もの爲知、

（刑罪大秘録）引廻圖

引廻死罪ハ捨札無之
獄門以上ハ有之

捨札　木品樅
長六尺幅一尺三寸
札串長九尺二寸角

幟　西ノ内三十六枚繼立
竪九枚横四枚乳子共
都合紙數四十枚



一同死罪場江罷越、囚人裏門前ニ而、馬より下し引入、撿使與力同心一同引續這入、撿使場江罷越夫より前ヶ條之通リ、

一町奉行所一方ゟ朱鎗壹本捕道具壹本宛、谷之もの請取、如斯警固致、御用相濟、谷之もの持參、元々江納ル、

引廻し行列

先拂非人五人　幟持、手代リ共非人三人、捨札持、手代リ共非人三人、　鑓貳本、手代リ共谷之もの四人、　捕道具二本、手代リ共谷之者四人、　四人ニ附添非人四人　宰領谷之者貳人　宰領小屋頭非人貳人

一引廻御仕置もの有之候節、道筋吉原町之內當リ有之候共、道筋書付ニハ吉原町之儀相除、日本堤通りと認可申候、前々より吉原町江ハ、引廻し御仕置もの引入候儀も無之候得バ、旁道筋書付、吉原町と有之候儀、後々ニ至リ紛敷候、以來とも右場所之儀は除キ可申候、

安永三午年十一月極

○按ズルニ、本書ニ谷之者、或ハ矢之者トアルハ、穢多頭彈左衞門ノ配下ノ者ヲ云フナリ、

〔板倉政要一〕掟書

一從往古至于近代、京都法式之由ニテ、成敗者、大路渡時、雜色以下之役者、町中店屋之賣物酒食餅以下、囚人所望之由申掠、盜取散、其上雖狼藉仕來由候、當御代御政道正鋪被仰付候上ハ、萬端以科之輕重及成敗、何モ諸商人可懸苦惱哉、雖爲先例、無道第一也、所詮囚人一人ニ付、鳥目二百文宛、雜色ニ渡、囚人之好ミ物、此料足ニテ如相當賣買相調候而可與之、於相背此旨は雜色以下之役者可處嚴科、囚人撿使之侍、可令改易其身事、

〔幕府時代屆申渡抄錄〕寶曆六子年十二月七日

新材木町庄三郎養子又四郎妻

其方儀、手代忠八と致密通候段、不屆至極に付、町中引廻し之上死罪

此もの共は、俗に白子屋お駒、又は歌舞伎狂言に有之候お駒才三郎の事に御座候、　くま 廿三

右　庄三郎召仕　ひさ

其方儀、主人聟養子又四郎へ、疵付候程たゝき候樣に、傍輩きくへ申勸、其上又四郎妻くまへ、手代忠八密通の取持致し、旁不屆ニ付、町中引廻し之上死罪、

右　庄三郎手代　忠八 三十八

其方儀、主人庄三郎養子、又四郎妻くまと密通致し候段、不屆至極に付、町中引廻し之上、於淺草獄門、

右　庄三郎召仕　きく 十七

其方儀、主人庄三郎妻つね、何分に申付候共、主人之事に候得ば、致し形も可有之處、又四郎に疵付候段、不屆至極に付死罪、

〔記事條例十一〕穢文言

非人頭善七手下、溜淺小屋頭才兵衛元抱非人當時無宿
彈左衛門ノ入墨　寶眞 辰二十二

此者儀、○中略不屆至極ニ付、引廻之上、死罪ニ行ふもの也、

辰 十二月○寛政八年

引廻道筋

一牢屋裏門より、小傳馬町、小船町、荒和布橋、江戸橋ヲ渡、元四日市町、本材木町壹町目、海賊橋ヲ渡、坂本町河岸通リ、八町堀、北紺屋町、岡崎町、松屋橋ヲ渡リ、因幡町通、南傳馬町、京橋ヲ渡、芝車町迄、夫より引返し、同所通新町、同所三田、赤羽根橋ヲ渡リ、森本町、飯倉町、溜池端通、赤坂田町、四ッ谷御門外、市ヶ谷御門外、御堀端通、左江牛込御箪笥町、同所通寺町、夫より牛込御門外、小石川御門外御堀

樣斬

端通り、水戸殿屋敷脇より右江壹岐坂ヲ上リ、本郷御弓町、同所春木町、湯島切通町、上野山下より、下谷廣德寺前通、淺草寺雷神門前、淺草今戸町、夫ゟ引返し、御藏前、淺草御門、馬喰町、牢屋鋪裏門迄、

〔公裁秘錄〕死罪人在之節町奉行へ相達候事　享保十二午年

死罪人在之節、二三日以前ニ町奉行ゟ爲知可申候、是ハ樣ため町奉行ゟ若年寄衆へ被申上候由、大久保佐渡守殿被仰聞候旨、未三月（〇享保十一年）廿九日大岡越前守被申聞候事、

〔刑罪大秘錄〕御樣之事

一侍、出家、社人、山伏、女、都而剃髮穢多非人、濕瘡強く相煩候もの、下手人、

右之分御樣しニ不相成、

一入墨者

右は前々より相除候處、近年御樣しニ相成ル、

一御樣しハ、前廣御腰物奉行より町奉行江懸合有之、御仕置もの日限取極候上、及挨拶、

一當日御樣し場江土壇貳ヶ所築、撿使場江薄縁敷、撿使場より御樣場迄砂を敷、撿使場脇物置、山田朝右衛門幷手代弟子共居所にいたし、例刻前揃ニ而、御仕置相濟、一同詰所々々江來ル、右之内死骸御樣場内江入、首を添置、

一御腰物方本阿彌、其外手附之向、追々來ル、立合御徒目付も出ル、

一御腰物奉行跡より來ル、立合御徒目付、穿鑿所入口之所ニ而、立ながら出向ふ、

一著座之上、場所支度宜旨、牢屋見廻より申達ル、

一一同場所江罷出撿使場江御腰物奉行、御腰物方、其外手附幷御道具箱も上江上ル、

一御樣物場横正面幷立合御徒目付、牢屋見廻り、石出帶刀腰懸江並、御小人目付、鑰役、打役等出、山田朝右衛門幷手代り弟子熨斗目麻上下着、其外弟子共麻上下着、つくばひ居、

一山田朝右衞門差圖いたし、非人兩人ニ而、胴を釣り土壇江置、御道具刃合せ致し、朝右衞門江相渡、朝右衞門押戴、切柄をかけ、肩衣共兩肌を脱ぎ、土壇ニ向ひ、胴江御道具之むねを當、右之手ニ而柄を持、身を開き、左手を砂ニつき、見分之方江會釋致、夫より一足ニ立、御道具を脊ニ負候程ニ振上ゲ構へ居鋪、再び立氣を滿たしめ、聲と倶ニ打込ミ、非人胴と手足を引去、此時御腰物奉行、其外段を下り見居ル、又元之所江着座、朝右衞門より切所幷切方之善惡書付、御腰物方江差出ス、大概一ノ胴土壇拂也、

一場所入口ハ町方年寄同心、雙方貳人、牢屋打役同心貳人ニ而固メ、供其外不ㇾ拘ものを不ㇾ入、裏門ハ牢屋同心貳人ニ而固メル、

一御鎗ハ朝右衞門柄をスゲ、御様し場外、砂之内江少しくぼく堀、首を置、手傳非人、鍬之頭を首之上江當ル、柄を持押へ居ル、朝右衞門肩衣計肌脱、多くは首横小鬢を突通し、通り共宜候得バ、其段書付差出ス、

但手傳人足五人程出ス、切柄鎺柄ハ、朝右衞門持參致ス、

〔稽德編下〕一御他界〈○德川家康〉之節、御病症之義ハ、御直參陪臣の中に、其御時代之義、能覺へ罷在候面面數多有ㇾ之候ニ付、左様之衆中之直物語りを前々承りたるに、御鷹野にならせられける御先にて御病氣ニ付、御藥抔被ㇾ召上、早速御快還御、以後少々御不食なれ共、差て御容體に御替りも無ㇾ之ニ付、追付御快全と外目ニハ奉ㇾ存處ニ、御自身ニハ、今度ハ御全快有間敷との上意なり、〈○中略〉扨御他界前日、十六日の晩方、其頃御納戸衆ニ而も有ㇾ之哉、都築久左衞門と申人を召呼れ、此已前御指被ㇾ遊候、三池の御腰物可ㇾ有ㇾ之間、取出し持參申様ニとの被ㇾ仰付、則持て參る所に、此刀を其方牢舍へ持參致し、科人共の中にて、本明〈○明恐胴誤、下同、〉をためさせ、持來候様ニとの上意ニ付、畏り候とて御前を立、御次の間迄罷出けるに、又召させられ、御前へ出ければ、科人共の中に、是は必死之罪と極

りたる者壹人も無之樣ニためし候ニは及ざる旨仰付られけると也、然る處幸ひ懸命之者有之ニ付、御ためしの義相濟、御前江持參、本明心よく落し申由申上ければ、御枕元ニ差置れける御腰物と取替差置可申旨被仰付候也、此節は御樣體も殊之外重く被爲成ける折からの義ニも候處ニ、懸命之者無之ニおいては、ためしの義無用ニ仕れとの上意之段は、曾子の末期ニ、床をかへしに、ひとしき御事と、其砌諸人取沙汰仕けるとなり、

〔關使日本紀行十一〕血刑ニハ、必シモ劊卒ヲ要セズ、貴人自ラ之ヲ行フコトアリ、凡ソ新ニ一刀ヲ購求スルコトアレバ、其利鈍ヲ試ムル爲ニ、小兒或ハ婦人、或ハ男子犯罪ノ者ヲ斬斷スルナリ、此類屢之アリ、

〔金澤藩刑法者拔書〕引張切之者共

淺野川橋下ニ而引張切　射水郡大白石村　清左衛門

才川橋下ニ而引張切　同郡戸破村　清三郎

此者共之儀、寬文元年、御寄合所ゟ申渡牢舍申付置候處、右之通被仰付候、公事場ニおゐて穿鑿不仕故、委細扣無御座候事、

才川橋爪ニ三日さらし、其上才川於河原引張切、　今枝牛之助若黨　田中半丞

右之者、寬文七年、主人牛之助江手を爲負立退、其身旦那寺圓入寺ニ隱レ罷在候處、圓入寺ゟ及斷召捕候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕

於高岡胴切　越中高岡能登屋　仁助

同斷　同町　孫右衛門

此者共、萬治二年、弟之跡職を爭、非分之公事を仕候事、

於公事場穿鑿不仕故、委細之扣無御座候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕

淺野川於河原生つり胴　丹羽織部草履取　彦助

同刑　御馬捕市郎右衛門妻　みつ

右市郎右衛門儀、寛文五年、江戸詰之內、みつ義彦助と致密通罷在、市郎右衛門、江戸ゟ罷歸り候之上、みつ儀欠落仕、大乘免町ニ罷在候渡部半兵衛小もの久助方ニ隱レ居申候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕

生けさ　能州七尾日蓮宗本行寺持僧　自圓

此者不屆之儀有之、師匠ゟ追出置候處、寛文元年、本行寺留守之內江忍入、刀壹腰、幷銀子六百目、錢三貫文、小袖五ッ、帷子貳ッ、布壹卷盜取、夫以前ニ茂本行寺江忍入、錢三貫文餘、小袖打敷抔盜取候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕生胴之者共

生胴　定番足輕　澤田仁兵衛

右之者、延寶八年、奧御納戶御土藏江拾七八度合鍵を以鎖を明、忍入品々盜取候處、品數者相知不申事、

生胴　藏人橋番人小間物屋　平丞

右之者、元祿元年以來、兩度御城中江忍入、御土藏戶前合鍵を以鎖を明、銀子三貫九百目、金子者員數相知不申盜取、京都等江罷越、女色幷商物等ニ遣、殘之金銀小判貳百七拾兩、銀子三百目有之取揚候事、

一せがれ兩人有之、死罪被仰付候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕縛首。。之者共

ゑばり首　　御馬廻組加藤彥左衛門せがれ　加藤次郎右衛門

右之者、天和元年、定番御馬廻組津田太郎九郎申合、兩替商賣人田上屋又兵衛、并同人下人を切殺、金銀を奪取、死骸を屋敷之內に埋置候段相知、遂吟味候處、太郎九郎并父彥左衛門若黨笹村彌八郎と兩人及白狀置候得共、次郎右衛門茂不法ニ不存由申張候事、

同刑　　御大小將組　淺野總五郎

右之者、寶永七年、町家ニ而侍ニ不似合不屆之趣有之、其上於江戸御使先ニ而銀子掠取候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕縛首之者共○中略

繩懸ニ而。。。。。
刎首　但縛首同樣之事　　御馬廻組　分部源左衛門

右之者、正德四年、御番所ノ御定書ヲ燒捨、其上御門之鍵ヲ隱シ、其外御厩飼料所并其身自宅之近邊江茂投火仕候事、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例追加
一勢州山田於御神領ハ、磔、火罪、獄門等之死骸を晒し候御仕置無之事、

〔公案比事五十八〕寛政四子年三月

野一色兵庫頭相伺候

一勢州神領ニて召捕候、無宿太次郎贋銀札之一件、

御仕置之儀評議、

子閏二月烏居丹波守殿御渡、同三月五日評議書上ル、同月九日御同人御下ケ、承付致返上、　　無宿　太次郎

右之者儀、朝吏清兵衛申合、贋銀札拵、正銀錢等ニ引替、又ハ調物等ニ遣候段、重々不屆至極ニ付、引廻し之上、磔ニも可相成者ニ御座候得共、神領は、前々より死骸曝候儀不仕候故、宇治山田引廻し之

上、死罪と相伺候處、一座評議之上、本罪は獄門ニ相當り候處、山田於御神領は、死骸を晒候御仕置無之御定御座候間、伺之通引廻し之上、死罪と申上、其通濟、

〔御仕置例類集二ノ二〕文政五年御渡

加藤遠江守申上候

一抱屋敷ニおゐて死刑之仕置申付候儀評議

去月十二日御渡被成候、加藤遠江守家來差出候書面一覽仕候處、遠江守手限ニ而、右家來之内、打首等申付候節、中屋敷下屋敷共、手狹ニ而差支候ニ付、御鷹場内ニは候へ共、本所龜戸村抱屋敷内ニ而、打首仕候而も不苦哉之段相伺申候、

此儀差當、相當之例相見不申候得共、都而御料所内ニ而、其所ニおゐて御仕置申付候もの有之候節ハ、御年貢地高請之場所を相除、見捨地或は最寄空地ニおゐて申付候儀、前々ゟ之仕來ニ付、遠江守抱屋敷内に見捨地等有之候哉之段、龜戸村支配御代官大貫次右衛門相糺候處、畑反別七町三畝歩餘有之、不殘高請之地所ニ而、別段見捨地空地等無之旨申聞候、右之通全御年貢地ニ有之候上ハ、抱屋敷ニて死刑以上之仕置は不相成筋と奉存候、

午十二月

朱書評議之通濟

〔古老物語〕また云、むかしは、侍、徒士、中間を其主人〳〵にて、成敗するもの度々なり、凡その科人は、

一侍、その外、少しも盗みしたるもの、　一主人に隠して供歸りの馬に乘たるもの

一欠落もの　一供はづしたるもの

一慮外したるもの、侍、中間とも、主人の手討多し、

一またしばり首はねるもあり

右は誰さだむるとなく、江戸中一同の風儀なり、此成敗ものをさし料の刀脇差のためしものにす、然るに段々にかやうの事、世上にすくなくなりしは武氣の衰へなり、

〔伊豫國順廻記 二〕極樂寺

一家の內六人同日に刑せられし事幷牢を不出して死をまぬかれし事　また過去帳に、新月道淸、中奥庄屋猿松、冬散宗壽、右同斷林之助、常眞、右同斷文四郎とゑるし、此三人、皆寬文四年巳十一月廿八日の死なり、帳末に、中奥庄屋息男老若六人、一日依死刑而死矣とありて、殘り三人の者の名は不錄、然共六人一日に刑せられしは隱れなき事と覺へて、中奥山故（モト）の庄屋忠右衞門が屋敷外に石塔ありて、正面には前の如く法名三をゑるし、右の横に工藤次兵衞、利左衞門、猿松、左の横に文太郎、文四郎、林藏と六人の俗名をゑるし、皆寬文四辰十一月廿八日とありて、寺の過去帳と月日符合す、只林之助と林藏、少の異同あるのみ、一日依死刑而死矣とある、其故を尋れば、租稅の事に付、此庄屋より願事あり、君上（一柳侯）これを惡みて、皆殺す、六人の內四五歲の小兒あり、執刀の者、蜜柑を與ふ、小兒喜びて是を食居たるを後より斬れば、蜜柑きり口より出と云、聞も鼻を酸する程なり、又當村庄屋の隱居高橋榮藏話には、一柳侯の時、榮藏の先祖五左衞門と云ものも、事によりて禁牢せらる、一日未明に、牢中の者三十人とか四十人とかを呼出す、五左衞門の名も其內にあり、因て出んとするに、戶外に山伏姿の者立居て、五左衞門に勿出と低語、五左衞門跡に殘りたるに、呼出せしもの幾十人の數に充たりと誤り認て、此日此幾十人を皆死刑に行ふ、五左衞門ハ不出を以まぬかれ、其後赦サれて家に歸る、入牢中、横峯の神に深く祈念を籠たりしが、其冥護によりて呼ども不出、此日の死を遁れたるならんと默悟し、此大保木山の內にて、めぐみと云る横峯寺に近き所の持分の畑を寄附し、永く神供に充しといふ事、榮藏の養父五左衞門傳聞たるを榮藏に話たりと云、刑は最も愼むべき事なるに、此時代斯く濫に有たる事いかんぞや、

〔翁草百五十〕源氏坊天一等の事
慶安の由井正雪等が事蹟、〇中略大將分の內、加藤市右衛門ハ京都を窺ひて洛の邊りに住す、究て大膽不敵の者成しとかや、〇中略果は召捕れて鈴森に於て磔罪の其獨(ヒトリ)也、幼兒も兩人歟、同所にて提斬(サンギリ)になる、

〔金澤藩刑法者拔書〕首代銀、過怠銀出候者共、
首代銀三度ニ貳貫七百目出ル事　能州所口清水屋與三右衛門せがれ　少三郎
右之者、寬永貳拾年、田鶴濱村山崎屋與右衛門、古淸水屋與三右衛門、同弟三郎右衛門之三人申合、針かね致商候處、少三郎下代相勤、銀子引負候段、山崎屋與右衛門ゟ及斷、少三郎禁牢申付置候處、父與三右衛門おぢ三郎右衛門申談、遂決算相濟し、少三郎命御助被成下候ハヾ爲過銀二貫目可指出旨與三右衛門三郎右衛門訴出、則致言上候處、少三郎死罪ニ可被仰付候得共、台德院樣御年忌ニ付、命御助、以來之見せしめに可罷成樣可取計旨被仰出、依少三郎如來寺江引渡、其後鼻をそぎ、在所へ遣、右之通首代銀爲指出候事、

附下手人

名稱

下手人ハ、原來手ヲ下シテ人ヲ殺スノ謂ヒナレドモ、德川時代ニハ、一箇ノ刑名トナリテ、人ヲ殺スニ由リ、死ヲ以テ抵償スルヲ謂フ、但シ庶人ヲ處刑スル法ナレドモ、其屍ハ様斬ノ用ニ供セズ、凡ソ斬罪死罪ニ處セラレシ者ハ、田畑、家屋敷、家財トモ沒收スルコトナレドモ、下手人ニハ此屬刑ナシ、故ニ單ニ死罪ト云フヨリハ一等輕キモノトス、

〔下學集下態藝〕下手人(ゲシユニン)
〔易林本節用集上人倫〕解死人(ゲシニン)
〔書言字考節用集四人倫〕解死人(ゲシニン)東鑑、太平記、並作下手人、

〔律疏賊盜〕凡殺人應死、會赦免者移鄕、略○疏 若群黨共殺、止移下手者及頭首之人、（謂、以下手重者、爲重罪合絞、故云、止移下手、及頭首之人、其以威力使人殺者、亦合移鄕、）（群黨共殺、謂謀殺遣意合斬、同謀共）

〔花園院御記〕元亨二年正月廿三日辛卯、國房語云、有定殺害人下手二人、基成卿召出之被禁獄云云、通例如青侍、只召出使廳也、而門前狼藉不可然之間殊禁獄也、且有例也、但下手一人逐電云々、基成緩怠之沙汰太不可然之由仰了、於今小路殿嚴密被仰下云々、無所逃恐入之由申之云々、

六月一日丁卯、成繼殺害人爲有定父之條勿論也、保藤卿靑侍等同謀之由風聞、仍以國房可召出下手人之由被仰保藤卿之處、雖逐電公卿可召進之由申之、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

従前々之例

一手下人

首を刎、死骸取捨、

但様しものには不申付

〔刑罪大秘錄〕下手人御仕置之事

一死罪御仕置と同様、別儀無之、

但死骸ハ取捨候得共、様し物ニハ不申付候ニ付、小塚原回向院寮江遣し爲埋候、

〔諸例類纂五〕一文政十一子年四月廿日、町奉行榊原主計頭殿組吟味與力三村吉兵衞江問合、下ヶ札を以申來ル、

一死罪と下死人とハ、おなじ打首ニ而も前後取扱向差別有之候哉、

一晝之死罪、夜之死罪ニ而、時剋ニより罪之輕重有之候哉、

下ヶ札

御書面死罪ハ死骸様之者ニ相成候上、田畑家屋敷家財共ニ欠所ニ相成申候、下手人ハ、欠所ニ不相成、死骸も様ものニハ相成不申候、

右之趣、在所役人共心得罷在度御問合申候、以上、

四月

加藤遠江守家來
兵藤源右衛門

下手人制度

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從二前々一之例
一人を殺候もの　下手人

寛保二年極
一人殺之手引いたし候もの　遠島

但殺候當人致二欠落一、不レ出ニおゐては下手人、

元文五年極
一差圖いたし、人を爲レ殺候もの、　下手人

從二前々一之例
一大勢にて人を打殺候時、初發に打かけ候もの、　下手人

〔御定書百箇條〕酒狂人御仕置之事

享保十六年極
一酒狂にて人を殺候もの　下手人

但被レ殺候者之主人幷親類等、下手人御免願申出候共、取上間敷事、

〔公裁秘錄〕疵付候者外之病に而相果、疵付候者御仕置之事、

手疵負せ候者、吟味之内、其疵段々愈寄、又は愈不レ申内にても、其者餘病にて相果、疵故相果候に而は無レ之段分明ニ候ハヾ、尤疵負せ候相手、解死人に不レ及候得共、元來疵故餘病發り、或は相手理不盡之仕方、其外譯在レ之候而之事に候者、其者相當之御仕置可レ申候事、

口論ニ而摑合候上、相手相果候得共、頓死と相見へ、疵無レ之に付、不レ及二解死人一事、〇中略

下手人例

侍討果候仕方宜候に付、解死人不レ成例、

大御番菅沼攝津守組田澤七郎左衞門召仕候侍大塚左五左衞門、平野定右衞門、右兩人意趣在レ之、元祿三年午正月廿九日、於二高田馬場一打果候、左五左衞門相果、定右衞門手負立退候所、辻番出會留置候段、主人七郎左衞門方、番頭攝津守江申達候に付、御目付中江申達、御徒目付參致二見分一、口書取

申候、其口書に、大坂在番之節、意趣在之候得共、御城中之儀、主人七郎左衞門在番中、相嗜候旨、誓詞申聞候に付、致堪忍、此度討果候由書載、右討果候場所、寺社方支配に付、寺社奉行ゟも撿使遣相改候、番頭ゟ右之趣御用番阿部豐後守殿江申立、寺社奉行ゟも申達候處、手負、解死人とも、主人方江相渡、手負候者は、主人心次第に可致之由被仰渡、定右衞門致方神妙に思召候、大坂在番中誓詞相守り、致堪忍候段、無殘所仕方に而候、御差圖は難被成候得共、其段主人了簡も可有之由、御老中被仰渡候、詰番水野周防守江、寺社奉行申聞候、依之右定右衞門解死人等不申付、請人方江相渡之、

〔御定書例書〕當座の口論の上取合候節、胸に強く當り、無間も相果候者、相手御仕置の事、

延享二丑年五月御仕置の例　　萬町　茂兵衞召仕　七助

此七助、主人茂兵衞儀、水野日向守知行米受取候筈の約束にて、金子用立、先達て米受取、殘米有之候處、其以後靈岸橋へ二百俵餘着船いたし候由、金子口入いたし候もの、茂兵衞方へ爲知候に付、手代摠七を米受取に遣し候得ば、日向守役人よりの書付無之候ては、難相渡旨船頭申に付、茂兵衞儀、七助を供に連參り、早く米可受取旨申聞候に付、摠七、七助船へ參、四俵はしけ船へ積移候處、理不盡に米爲積移候儀成旨、船頭共より及口論候、其節七助、餘程酒にも給醉、互に摑合打合申候、右着米の船宿、靈岸島濱町伊兵衞も、其節船へ參居候處、伊兵衞船にて胸を痛、宿へ歸り、間も無く相果候由に御座候得共、相手は七助にて御座候得共、打合候ものは伊兵衞にて候哉、船頭に候哉存不申、勿論伊兵衞不存もの故、意趣も無之、可殺所存にて打合候にては無御座、不斗當り所あしく相果候儀と存候旨申し候、主人差圖とは乍申、理不盡に米積移候より及口論、摑合候節、伊兵衞胸に強く當り、間もなく相果候に付、下手人可申付哉と相伺、

御差圖

此もの、船道具等持參の事無之候、重く打擲の事に候はゞ、船頭共も船宿の事ゆへ、捨置候事は有

之間敷儀に候、畢竟輕き掴合打合と相聞、勿論伊兵衛ニ打合疵も無之事ゆへ追放、
朱書
此當り中追放

〔御定書例書〕女房法外有之ニ付切殺候者の事

寛延二巳年六月御仕置の例　　下總國西親野井村　藤兵衛

此藤兵衛儀、女房いら、短慮者にて、藤兵衛へ對し、度々惡口いたし候事有之候、藤兵衛儀、稻刈に出中食給に歸候處、早く歸候段不埒の由、いら惡口致候に付、藤兵衛叱り候處、口惜候はゞ切候樣、いら申之居直り候間、殘念に存、脇差取出し、いらを切殺、藤兵衛は自害仕損候、然る處いら母幷親類共、藤兵衛助命の儀相願候得共、いら口答いたし候共、致方も可有之處、切殺候段不屆に付、下手人可申付哉と相伺、

御差圖

いら儀、夫へ對し法外の事共にて被切殺候儀に候間、下手人不及、構無之旨被仰渡候事、

〔刑罪大秘録〕文化元子年九月廿五日

民部卿殿郡奉行　西村左太郎妻　いち 五十

右之者儀、亂心とは乍申、古屋右源次父紹雲江手疵負セ相果候、依之下手人被仰付候もの也、

右之通土屋大炊頭殿依御差圖、於評定所大目付久田縫殿頭、御目付土屋長三郎立合之上、申渡候間、可相心得もの也、

子九月廿五日　肥前印　囚獄

右首討場所ハ、御樣場之方江貳間程下ゲ、薄縁貳枚敷、前江新ニ穴を堀、大挑灯を四ッ建、小丸挑灯三張爲持、羽がひゞ之儘目隱無之、入口ハ打役相圖、

斬罪

斬罪ハ死罪、下手人ト均シク、罪人ヲ斬ニ處スルコトナレドモ、斬罪ハ、士以上ノ者ヲ處スル法ニシテ、其死屍ヲ様斬(タメシギリ)ノ用ニ供スルコトナシ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一斬罪

於淺草品川兩所之內、町奉行組同心斬之、撿視御徒目付、町與力、

但欠所右同斷〇田畑、家屋敷、家財共欠所、

〔刑罪大秘錄〕斬罪御仕置之事

一於評定所申渡、上下之儘羽がひ〆に致し、駕籠ニ乘せ、直ニ淺草御仕置場所江召連れ、目隱無之、染縄ニ而縛り候、羽がひ〆の儘、町方同心、首を討、

但撿使御徒目付、町方、與力、幷ニ同心御小人目付も罷越候事、

一御家人死罪被仰付候節、是迄御目付立合無之節ハ、於牢屋敷撿使申渡來候得共、御家人ハ御目付立合無之候共、御役所江呼出し、直ニ御仕置申渡相濟候後、牢屋敷江遣、立合有之節之振合ニ而、首を刎可申事、

朱書 右ハ寛政十午年三月廿八日〇一本作十八日小田切土佐守於内寄合極ル、

〔公事方見合書物〕一斬罪之事

是者、或者私領ゟ、斬罪ハ御目見以上以下共、御直參之死罪を申候哉、死骸ためし者に不相成哉、斬罪ハ百姓町人には無事に候哉之段、其筋へ問合有之候節、挨拶書左之通、

御目見以上以下共、斬罪之御仕置度々有之候、陪身の例いまだ相見不申候間、追而可得御意候、

斬罪例

〔天保集成絲綸錄〕百天明八申年六月

町奉行衆

御勘定奉行衆

評定所ニ而、御仕置申渡候儀、御目見以上ニ而も、死罪遠島ハ評席にて申渡、重中輕追放、改易ハ、本間ニ而、前々ゟ拙者共申渡候、自今共、右之通無間違樣可心得旨申合候、依之得御意置候、

申六月　戸川山城守

○按ズルニ、本文死罪トアレドモ、目見以上ノ者ヲ死罪ニ處スル法ナケレバ、是亦斬罪ヲ云フナリ、

〔記事條例〕八天明八申年

町奉行衆　菅沼新三郎

一御目見以上之もの、斬罪死罪御仕置之節立合追放之節、爲見送御徒目付罷越候、

一躑躅之間燒火之間ニて役儀被仰付候者、斬罪死罪追放等被仰付候節立合御徒目付罷越候、

一平生上下着相勤候者ニても、右之席江不能出場所役上下等之類、幷御徒與力其外とも斬罪死罪追放被仰付候節、前々ゟ御小人目付立合罷越候、〇中略

右之通前々取極來候處、近頃陪臣等御仕置之節も、御徒目付立合等罷出候儀も有之、區々に相成候間、以來は前書之通相心得候樣致度存候、此段及御懸合候、以上、

六月　菅沼新三郎

〔享保集成絲綸錄〕四十八元祿七戌年三月

浪人　筑紫園右衛門

此者之儀、去年夏中、馬物を申由虛說申出シ、其上はやり煩之除之札、幷藥之法組ヲ作リ、實なき事

を書付流布致シ、重々不屆ニ付而、斬罪ニ申付者也、

三月

〔憲敎類典御告四ノ二十一〕明和四丁亥年八月廿一日

永澤町安兵衞店　浪人　山縣大貳 亥四拾二歳

其方儀、常々弟子共江、渡世又ハ藝術之勵ミも候間、門弟其外入魂いたし候得バ、兵亂或ハ變事有之節、何れ之用ニも相立事ニ寄、立身等可致旨申聞候段、兵亂を好ミ候道理相當リ、且又甲府御城附御武器員數之儀、覺候ニ任、申散候、熒惑星心宿江懸り、右ハ兵亂之萌之旨古書ニ有之候處、其後上州邊百姓共騷立候間、少しハ其驗し有之よし相咄し、當時ハ禁裏行幸も無之、とらわれ同前之由致雜談、堂上方之古實ニ背ケ候趣を草紙ニ相認メ、或ハ兵學之講釋ニ付、地利江不引當候而難相分品ハ、甲州其外及見聞候、國々之地利地名城々江引當テ、御要害之場所、譬ニ取用ヒ講釋致候儀、旁恐多不敬之至り、不屆至極ニ付死罪申付候、

八月廿一日

〔波山記事十一〕武田伊賀等斬首被仰付候罪狀書寫

元水戸殿書院番頭彥右衞門父隱居　武田伊賀

武田彥右衞門

伊賀次男大番頭　武田魁助

其方共儀、元同藩市川三左衞門ヨリ申立候趣、主家ニ於テ採用相成候テハ、故同藩結城寅治之存意貫キ、家政取亂ル、樣可相成ト存過シ、致愁訴候段ハ、主家之爲筋ト存込仕成ス心得ニ候トモ、愼中之身分、下總國小金井宿等へ出張、追々同志之者共多人數集屯、又ハ鎭靜トシテ出張致シ候松平大炊ヲ申欺キ致隨從、城内へ可立入ト仕成シ、其上常州那珂港其外所々ヲ暴行シ、

御討手幷ニ主家へ敵對剩へ主家縁邊へ相便リ可申旨、軍裝ヲ以所々横行、國々爲致動亂、惱農民候段、御大法ヲ犯シ、不容易及所業始末、不恐公儀之仕方、重々不屆至極ニ付、嚴科ニモ可被處之處、追々右之次第恐入候儀ト心附、加州勢へ致降伏候ニ付、格別之御宥免ヲ以、斬首申付者也、

一脱走之浪士共義ハ、越前敦賀表濱手ニ於テ、追々不殘斬首相成候趣、末田沼侯歸府無之候、

一敦賀賊徒、正月〇慶應元年廿八日引渡、當月四日ヨリ於最寄松原誅戮之事

引廻之上斬罪

〔御仕置裁許帳十二〕主人之書物を質物ニ置、可顯と存、巧に無意趣者を切殺者、

元祿十一年丑八月十日

壹人木本新七　是ハ水野美作守家來、此者去子五月廿九日、麴町天神前、富士見御番大竹源八郎地借、町醫師久保玄仙と申者を、千駄ヶ谷村櫻井正休屋敷前ニ而切殺立退候處、美作守方より京都ニ而捕、御支配方江被相達候處、大久保加賀守殿御差圖ニ而、則美作守家來松田加右衛門召連來ル付、牢舍、

右之者御老中江相伺、丑八月十五日、江戶中引廻シ、於淺草ニ斬罪、

小旗文言

此者儀、主人之書物を質物ニ置、可顯と存、喧嘩之可致沙汰ため、無意趣いしやを切殺立退仕形、重科たるによつて、江戶中引廻シ、於淺草に斬罪に行者也、

八月十五日

切腹

切腹ハ、士以上ノ者ヲ處刑スル法ナリ、徳川氏ノ時ニ至リテハ、正副介錯人アリテ、獄舍內ニ於テ之ヲ處刑スルアリ、又ハ罪人ヲ預リ置ク大名ノ邸中ニ於テ處刑スルアリ、其ニ撿使ヲ發シテ之ヲ監視ス、其儀庭中ヲ畫シテ砂ヲ敷キ、其上ニ疊二疊ヲ敷キテ、處刑ノ場ト爲シ、正介錯人、囚人ニ對シ、自ラ姓名ヲ陳ベテ一禮シ、刀ヲ拔キテ其背後ニ居ル、副介錯人、囚人ヲ扶ケテ衣ヲ袒セシメ、相圖ノ咳ヲ發スルヤ否ヤ、牢屋同心木刀ヲ載セタル三方ヲ持チ來リテ、囚人ノ席ヲ距ルコト三尺許ニ置ク、副介錯人、囚人ニ令シテ三方ヲ戴カシム、囚人手ヲ伸ベテ之ヲ執ラントスル時、正介錯人背後ヨリ首ヲ刎ヌルナリ、

〔刑罪書〕切腹人取計左之通

一揚座敷三四之部屋之間、番所掃除爲致、左右羽目、雜巾ニ而爲拭、叮嚀ニ掃除申付、新敷疊六疊敷替、其上江薄縁六枚敷詰、御目付被居候所江ハ、近江表紺縁付之薄縁貳枚敷、不殘銅鋲ニ而留打、兩面唐紙張屛風一雙、合左右二枚、後ロ三枚、薄縁形ヲ建、上之方江開キ不申候樣、四ケ所木ニ而留打申候、

一切腹之場所、右番所向煉塀際江、七尺五寸程明ケ、壹丈四方程砂ヲ敷、其上江無縁疊貳疊敷申候、委細ハ繪圖面之通、○圖略

但夜ニ入、爲用意手桶ニ一ツ砂ヲ入、水溜桶際へ差置申候、

一夜ニ入候ニ付、用意致置候挑灯立四ツ、右場所四所江差置、煉塀際江高張挑灯二張、番所前庇柱江懸、挑灯左右ニ貳張、都合八ケ所燈申候、尤御目付衆被居候所江、手燭二ツ、ぼんぼりを懸差出ス、其外一二之揚座敷之間、番所前庇柱左右ニ挑灯二張、埋門內江壹張宛、藥部屋前水溜桶際江

壹張、中門内江壹張、玄關前江貳張、都合拾六ヶ所、高張挑灯燈申候、

〔官中秘策二十四〕御預ヶ人遠島或ハ御赦免之事

一切腹ハ、御目付衆より少々先達而案内有之（案内無之もあり）大目付壹人、御目付貳人、御徒目付貳人、御小人目付預り主之宅江罷出、主人出會、當人被召出、御科ニ依而切腹被仰付候旨被仰渡、大目付衆其儘御歸被成、引込、支度場所ハ、定ニ隨ひ疊二三疊敷、上皮蒲團等敷、其場江家老用人、幷介錯人計、外ハ不出、切腹相濟、御用番御老中江爲屆使者遣候、死骸ハ寺江遣候事、大目付衆江伺之、死骸寺江遣候前、寺社奉行江御屆遣候、一門中江も爲知申事、法事料金子遣之、

〔憲教類典四ノ五評定〕天和二壬戌年十一月廿一日

中川八郎左衞門切腹之次第

天和二年十一月廿一日、中川八郎左衞門儀、青山泉州江御預、同日八時、彥坂壹岐守、日根長左衞門、能勢惣十郎、御徒目付貳人、御小人四人、不意に泉州宅江入來、泉州對話之後、八郎左衞門を書院江呼出し、御科之次第被仰渡之、八郎左衞門切腹也、壹岐守ハ被仰渡之後歸宅也、

一書院と使者之間之白砂に、疊三疊敷、其廻に緣取を敷、

一八郎左衞門裝束下に白小袖、上黑小袖、麻上下を着す、被仰渡相濟、八郎左衞門をば小座敷に入置、介借人ハ留守居駒澤加左衞門、麻上下を着し、返し股立也、

一口々詰々に給人歩行士、足輕羽織袴にて有之守也、

一八郎左衞門事、留守居加左衞門白砂疊之上江同道致し、御目付衆江注進申候得バ、惣十郎、長左衞門右之場所江出候而、泉州も列座也、御徒目付ハ、緣頰之敷際に居らる、御小人ハ白洲伺公也、

一禮有之而、三方に小脇差をのせ、中小性上下を着し、八郎左衞門右之方三尺計置て直す、そのとき引寄膝之上に置候所を打也、

一件之時、足輕之小頭兩人にて、三疊敷計之ふとんを持出、死骸之上にかける、

一死骸之事、御目付衆江伺之所に、旦那寺江可遣旨差圖候ニ付、依之留守居壹人、物頭壹人、足輕少少差添、吉祥寺江送之、尤先達而吉祥寺江案內ス、泉州より金子五兩吉祥寺江送之、且御預之內、衣類、諸道具、刀、脇差、吉祥寺江遣ス、(其後寺江付屆無之)

〔刑罪大秘錄〕切腹之事

一佐野善左衞門切腹之節手續ハ、當日揚やしきより呼出し、評定所於御屋敷、大目付、町奉行、御目付立合、切腹之儀申渡、駕籠ニ乘セ、出役町方同心雙方四人、牢屋同心貳人附添、牢屋敷江召連、裏門(○裏門一本作表門)より入、大牢庭江駕籠之儘差置、出役町方與力雙方貳人引續罷越、持參之出牢證文、石出帶刀江相渡ス、撿使御徒目付貳人、評定所江參ル、

一暫く間有之、撿使場江撿使御目付、是又評定所より罷越、一同出向ひ、直ニ撿使場江着座、

一切腹人差出之儀、出役與力御徒目付及會釋、御徒目付より御目付江相伺、御目付ゟ出役與力江差圖有之、牢屋見廻り江申達し、駕籠之儘入口際江入、鑰役、出牢證文を以引合相改、駕籠ゟ出す、

一添介錯町方同心雙方貳人、左右ニ附添、當人之袂を押へ、(右ハ掛り、左ハ非番、)疊之上江連參り、疊一はいに跡之方江足をひらかせ、撿使之方を向ケ居ゑ置、本介錯町方同心、(掛之方計一人)當人江對し名乘一禮を成し、當人之後江通り、左之方江參り、後ロ向ニつくばひ、刀を拔扣居、添介錯兩人ニ而手傳、當人之肩衣を刎、肌を脫せ、兩脇少し下り、後之方ニ扣居、相圖之咳を致し候と牢屋同心壹人、三寶ニ九寸五分を乘セ(木刀之九寸五分、紙ニ而包、二タ所結び、)持出、三尺餘明ケ(當人十分に手を延し候樣に隔て)前に置て退く、掛り添介錯見計、三方を被戴候樣申達す、當人手を懸候處を介錯致し、添介錯(掛り之方)首を揚ゲ、右之手ニ而たぶさを取り、左之手を下江添、右之膝をつき、撿使之方江首之横面を向る、撿使何之守見屆候旨、御徒目付申之、首を死體江添置、卽時ニ下男、薄縁貳枚持出死骸ニ懸ケ、四人ニテ疊之儘、南

〔刑罪大秘録〕

佐野善左衛門切腹圖

之方堺際江寄る、畢而撿使御目付退散、評定所江罷越、御徒目付町方與力も右同樣評定所江罷越、御用濟之旨を筋々江相達す、

一撿使之節、御目付麻上下着替候ニ付、町方與力着替之儀相伺候處、御目付之外ハ、撿使ニ無之候間、着替ニ不及旨、懸り町奉行より差圖ニ付、平服ニ而罷越候旨、書付ニ寫之、

一本介錯、添介錯、三寶持共、刀帶袴計着、股立取候よし、

一或人云、麻上下着候ハ、切腹之定式也、其式を不知して伺し故に、奉行も不決して速なる方に差圖す、是は伺しもの之誤也と云、何れか是ならん、猶可糺、

〔甲子夜話四十一〕寛政ノ度ニハ、キハ立タル御取ハカラヒモ有ケリ、其頃封廻狀ト云ルノ文、

御小姓組仙石伯耆守組　朝比奈彌次郎

御預ヶ先本多伊豫守於宅切腹

右松浦越前守申渡、爲撿使中川勘三郎相越、越州ハ大目付、中川ハ御目付、三月二日ナリ、

又封廻狀ノ文　松浦越前守江

朝比奈彌次郎

右彌次郎儀、切腹被仰付候間、別紙書付之通、本多伊豫守宅江相越可被申渡候、尤右之趣、伊豫守江も可被達候、

申渡之覺

朝比奈彌次郎

其方儀、亂心とは申ながら、御徒水野藤三郎を令切害候ニ付、切腹被仰付者也、

右ノ事、其頃予が留守居役、本多氏ノ勢州神戸城主一萬石同役ニ問テ、ソノ一件ノ一冊ヲ借寫セリ、曰、

寛政三辛亥年三月、本多伊豫守樣江御預人朝比奈彌次郎樣、御切腹取計一件、

三月二日（中略）

一彌次郎樣、御切腹にも可相成と、少々宛兼て調置候通、御場所御入用之道具等心掛、夫々エ申付候、

一介借人之事　　一白木三方之事

一短刀之事　　木刀八寸

一首桶之事　　さし渡し八寸丈八寸

一木燭臺之事　　貳尺五寸貳歩

一白木綿袷大風呂敷之事　　五布四方

一白布幕之事　　五布五間一封

一白張屏風之事　　障子兩面張、蝶番付、三枚折一雙

一幕串之事　　竹ニテ拾貳本

但此幕串ハ、庭上ニテ御差圖可有之哉ト用意候、心得申付ル、

一疊八疊之事　　近江表ニテ新規床共ニ申付ル

一棺　　一首繼之木

一糠一斗　　一白張挑燈之事

一紋付心得申付候事　　一香爐

一伽羅　　一墨物粘筆共江心得申付候事

一毛氈之事　　一無紋淺黃小袖同上下之事

一菓子用意之事但此菓子ハ御兩所樣御出ニ付テノ事也

一夜六ッ半時、御徒士目付金子孫三郎、工藤八右衞門、御小人目付四人罷越、鈴木五助對談、別席エ

通置候て、茶たばこ盆差出候處、書上認候由ニテ、硯箱紙類持參之由ニテ、火鉢差出、其外役付之名前等差出候樣被申聞候ニ付、兼テ用意之通、三通ヅヽ二通リ差出候、

一萬事支度も宜候はゞ、評定所エ御徒士目付衆より案內可被遣旨取調宜哉之旨にて、御徒士目付衆被相尋候付、手前支度出來致候段申達候處、五ッ半時頃、右使御小人目付被罷越候付、此方よりも見分使竹內三大夫、評定所迄差遣之、

一御玄關前臺挑燈、宵ゟ差出置、御門外えは四ッ時ゟ差出す、

一場所繪圖面、幷御役人名前、掛合候人數役付等、書出候樣被申聞候付、兼て用意之書付三通ヅヽ二通差出之、

一四ッ過、御徒士目付栗田喜兵衞、小笠原鎌次郎被罷越、五助罷出及挨拶候、

一殿樣御服紗小袖麻上下御着用、被成御待候處、見分使之者罷歸、追付御兩所樣御出之由、御家老御用人御留守居御取次、何も服紗小袖麻上下着用、御白洲罷出、殿樣には御刀御提げ被遊候て、下座薄緣まで御出迎、御徒士目付四人共、御使者之間エ立迎居候付、此節四人之者エ、大儀之段、御意有之、無程大御目付松浦越前守樣、御目付中川勘三郎樣御出に付、下座薄緣にて御會釋有之、御先立被成、御書院エ被成御通、御刀は御側被差置、御挨拶有之候處、御進み被成候樣にとの儀に付、被成御進候處、朝比奈彌次郎、切腹に被仰付候之旨被仰達候付、卽於其席御承知之趣被仰述候上、右被仰渡幷切腹之節者、其場エ罷出可申哉と被成御尋候處、兩度共御出席、死骸親類より貰度旨申聞候はゞ、如何可致哉と被成御尋候處、可被遣旨被仰聞、支度能候はゞ、御案內有之候樣御挨拶有之、御承知之旨御答有之、御勝手え御引取、御茶御たばこ盆差出之、且御場所可被成御覽由付、御徒目付衆鈴木五助罷出、御案內申上候て御見分相濟、本御席エ御着坐有之候、此節御菓子差出候處、御用先に付御斷有之、卽引取、御徒目付衆、御小人目付衆エも差出候處、是亦同樣斷に付引取之、

一彌次郎樣エ、鈴木五助罷出、只今大御目付松浦越前守樣、御目付中川勘三郎樣御出、御用之儀御座候間、書院エ被ㇾ成㆓御越㆒候樣申述候て御召替、黑御小袖、花色小紋麻御上下差上、右御召替相濟候て、廊下通前後左右にいづれも附添、御書院脇小座鋪に御中座候樣申上、御支度能候旨、御目付衆エ五助より申述候處、差出候樣被㆓申聞㆒御書院二之間繪圖面之通着座、松浦越前守樣被㆓仰渡㆒有ㇾ之候上、一ト先最初中座之所エ引取、被㆓仰渡㆒左之通、

鳥居丹波守殿被㆓仰渡㆒朝比奈彌次郎、亂心とは乍ㇾ申、御徒水野藤三郎を切殺致、依ㇾ之切腹申付者也、

右被㆓仰渡㆒並御切腹之節共、殿樣大小共に御帶被ㇾ成候事、

一御召替、無紋御小袖、御上下之事、○圖略

右被㆓仰渡㆒相濟、松浦越前守樣には被ㇾ成㆓御歸㆒候、此節御送無ㇾ之、御役人共御白洲エ出る、

一切腹場所、用意宜御座候段申述候處、差出候樣御徒目付被㆓申聞㆒繪圖面之通着座、附添人最初之通、

一彌次郎樣、毛氈之上エ御着座、三方差出し、御肩衣御はづし、三方御戴之節、介借山田覺右衛門相㆓勤之㆒、

一添介借人、首桶差出す、

一御首介借人入㆓實撿㆒候節、御徒目付より、中川勘三郎殿被㆓見屆㆒ましたと挨拶有ㇾ之、勘三郎樣には、首尾一段と御挨拶有ㇾ之、御首直に首桶エ入、三人共平伏、此時白張屛風引廻し、香爐役の者、香を薫、香爐持出る、

一御目付中川勘三郎樣、卽刻御歸、此節殿樣、下座薄緣迄御提刀にて被ㇾ成㆓御送㆒御役人共、御白洲エ不ㇾ殘罷出る、

一御徒目付御小人目付引取候節、御玄關にて五助致挨拶候、〇下略

〔凶禮式〕切腹之法

一寺院又は組頭の所にても、沐浴する時は、たらいを直し、先下へ水を入、其上へ湯を入て、沐浴させ、髮を洗ときは、逆に湯を掛る法なり、

一髮結樣引さきもとゆひ四まき左卷にすべし、常よりたかくゆひ、逆に曲るなり、

一装束は白衣、左前にあわせ、柿色の上下を着す、口傳有之、帶も白きなり、

一疊の事、土色を用、長サ六尺、白縁に二疊用べし、敷樣口傳あり、

一死衣の事、四口長六尺、白地也、疊の上に敷樣口傳、

一切手、死衣の上に著座する時、三方又は足打のきりめの縁をはなし、笹の葉先を切人へ向、改敷にして、盃二つ組、上は土器、下は塗盃也、扨肴は大根の香物三切、鹽味噌を組付、逆箸にして据る、撿使へ三方に改敷せず、盃壹つ、肴は大根香物一切、組之居る也、

一酒呑飲之事、酌切手へ銚子を持行、逆手酌にして上の盃へ二酌、其銚子を撿使の前へ持行、順に一獻つぎたる時、撿使切手へ挨拶して、其盃を萬臺へ居て指置、切手夫にて又二獻呑時に、御肴といふべし、此とき腹切刀を揃出し、以上四獻のませ、以後は切手獻請るといふとも、加ふべからず、是酌の古實也、酌人は腰さしせぬもの也、口傳、

一酒終、刀出すと、通ひ出て、雙方の膳を取、大刀とり後へ廻る也、此時切腹人畏り樣口傳、

一大刀とりの人の振廻面影見する作法秘傳、

一頸を打て、死衣をうけ、屏風を引廻し、死骸人に見せぬやうに仕廻すべし、此時の屏風は、表裏白張白縁なるべし、一雙上下の文字を書て、立樣口傳、〇中略

伊勢貞丈述

〔屠龍工随筆〕切腹の人の膳に、鯉を燒物にして付るは、血をおさむる物なるよしなり、又下部を切るには、必このしろといふ魚を喰はするなり、此魚又血をよくおさむるより、世にこのしろ酒といふ、血の道の藥の酒ありと人の語しに付て、麁末なる料理に、このしろを細く作りて、鯉の指身に似せて喰はするをおもへば、このしろの、鯉に性の似たる所あるならん、

切腹制度

〔評議書〕寛政元年十一月七日

伊豆守殿（江　紀伊守　河内守　肥前守）立會、例書相添、秋山松之丞を以上ル、

口論又ハ酒狂ニ而及刃傷、相手相果候節、侍以上之もの御仕置之義、評議仕候趣申上候書付、

評定所一座

口論又ハ酒狂之上及刃傷、相手果候節、侍以上之ものニ而も、多分下手人ニ申付來候趣ニ候、下。手。人。ハ。輕。キ。も。の。ゝ。法。ニ。而。侍。以。上。之。も。の。は。切。腹。申。付。可。然。儀ニ付、元より下手人ハ刑名ニハ無之候得共、切腹可申付ものを、下手人ニ申付候而ハ、何と歟品も有之口候方ニ付可申候哉、切腹下手人ハ申付方ニ而、名目替り候事ニも候哉、相糺可申上旨、御書取を以被仰聞候、

此儀口論、又ハ酒狂ニ而及刃傷、相手相果候節、侍以下之ものニ而も、下手人申付候儀、先例ニ寄、御仕置附仕來候義と相聞、切腹下手人之境、是迄御書付等も無御座、御定書酒狂人之内、武家之家來御仕置之ヶ條も有之、御仕置仕形之ヶ條之内、重中輕追放御構場所、侍與町人百姓之品相分有之、又ハ改易之儀も御座候間、侍以上之刑ニ而も、御定を見合候儀ハ御座候得共、右御定、多分ハ町人百姓之御仕置重ニ而、切腹之儀ハ、御仕置仕形之ヶ條ニも無御座、依之評議仕候處、御書取之通、下手人申付候ハ、輕キものゝ儀ニ可有御座間、侍以上ニ候はゞ、切腹被仰付候方相當可仕哉、年古キ例ニハ別紙之通、切腹被仰付候も御座候間、以來侍以上之者、口論又ハ酒狂ニ而及刃傷、相手相果候節ハ切腹被仰付可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被レ成候御書取一通、返上仕候、以上、

酉十一月　　評定所一座

例

享保十一午年、大岡越前守町奉行之節、手限伺之上申渡候、

二丸御廣敷磯貝宇右衛門組　伊賀者　重地喜八郎

右之者宅江、傍輩德田甚兵衛罷越、切付候ニ付、亂心と見請、取すくめ可レ申と存、數ヶ所乍ニ手負、脇差もぎ取候處、又候甚兵衛脇差を取、切懸ヶ候ニ付、喜八郎刀を拔、甚兵衛江手を爲レ負、雙方倒レ候處江、聟押野理右衛門欠付、甚兵衛を討留候、亂心と見請候はゝ、切殺候樣ニハ致間敷、尤聟理右衛門江も、聲を懸差留可レ申處無二其儀一候、甚兵衛を亂心と申立候得共、喜八郎宅ニ而之儀、證據も無レ之、畢竟甚兵衛相果候上ハ、喜八郎相手之儀ニ付切腹申付候、

〔營中刃傷記〕御法事之節其外刃傷記

正保三丙戌四月八日、御小性高島左近、高五百石、壽林比丘尼之孫、小十人赤井彌兵衛、於二途中丸之内一喧嘩、左近彌兵衛を十文字之鎗を以刺殺す、左近は松平伊豆守江御預ヶ、同十日伊豆守於レ宅切腹被二仰付一、一說西久保於二天德寺一切腹共云、此五百石、又壽林拜領し、大久保平四郎忠仲之三男、大久保藤大夫後改二藤兵衛一爲二養子一五百石を拜領し、御書院番ニ入、今高崎彥三郎家是也、○中略

〔翁草二〕高島左近切腹附島田幽彌評判之事

同十日、阿部豐後守、阿部對馬守に御目付喜多見久太郎指添、伊豆守宅に向ひ、高島左近へ切腹之儀を申渡す、左近謹て鈞命を蒙る、○中略其後兩阿部は歸られ、久太郎は撿使として殘り留る、扨左近は行水をして伊豆守書院の庭に席を設け、爰に於て潔く自刃す、介錯は御徒目付某也、左近于時十九歲、見聞の人、嘆惜せずといふ事なし、則死骸を乘物に入れ寺に葬す、

〔營中刃傷記〕御法事之節其外刃傷記

延寶八年庚申六月廿六日、於芝增上寺嚴有院樣御法事、摠奉行永井信濃守尙長、（高七万三千石）內藤和泉守忠勝、（高三万五千三十石余）和泉守、信濃守を及殺害、翌廿七日未剋、愛宕下青松寺後、蟠屈山青龍寺において、和泉守切腹被仰付、家斷絕す、段々御吟味之上、信濃守領地七万石被召上、信濃守弟万之丞直圓、（後改靫負）同年八月七日被召出、新地一万石被下、當時永井信濃守直溫之家是也、

〔淺野內匠頭殿御預之節扣〕覺（○中略）

一七半時少前、庄田下總守、大久保權左衞門、多門傳八郎被參、我等（○田村邦顯）ニモ御用有之由被申聞候付、居間へ通申候、內匠事、所柄時節柄旁以不屆至極成儀共故、切腹被仰付、此段右京へも爲申聞候樣ニト相模守殿被仰聞候、下總守被申聞候、右之外小役人中左之通、（○中略）

一切腹之場所、出會之間、庭ニ筵ヲ廣ク敷其上ニ疊ヲ敷セ、毛氈構置申候、

一右用意相調候而、內匠へ上意有之間、上下着候樣ニト申遣ス、上下出シ着サセ候、小袖ハ晝ヨリ着致候儘ニテ、上下着サセ申候、若御紋付之熨斗目ニ而候ハヾ、爲着替可申ト存候得共、自分之定紋故如此、

一六時過出會之間、庄田下總守、大久保權左衞門、多門傳八郎出席、上之間方ニ着座、我等ハ東之方角ニ着座、扨內匠ヲ呼出ス、此節御步行目付三人、左右後ニ、手前者モ敷居際迄付出、上意之趣、庄田下總守申渡、

其方儀、意趣有之由ニ而、吉良上野介ヲ理不盡ニ切付、殿中ヲモ不憚、時節柄ト申、重疊不屆至極候、依之切腹被仰付候由、內匠御請、今日不調法成仕形、如何樣ニモ被仰付義ヲ、切腹ト被仰出、難有奉存候、

一右畢而、則御步行目付左右後付添、障子ヲ明、庭へオロシ、毛氈ノ上ニ着座、小脇差三方ニ載之、中

小性愛澤惣右衛門持出前ニ指置之、介錯ハ御徒目付之内礒田武大夫、即相仕舞、首ヲ差揚、撿使へ見之、

〔一話一言二十二〕田村右京大夫書狀

御手紙之寫 寺坂吉右衞門書

淺野內匠、唯今於私宅、庄田下總守、大久保權左衞門、多門傳八郎被參、切腹被仰付候、死骸近キ親類中へ、無遠慮引取候樣ニ可申遣由、右三人被申候、尤御老中江も被申上候由ニ候間、御勝手次第早御引取可被成候、以上、

三月十四日 元祿十四年

田村右京大夫

淺野大學樣

〔半日閑話三〕一淺野內匠頭殿家來浪人、四拾六人申合、吉良上野介殿を討取、細川越中守殿、松平隱岐守殿、水野監物殿、毛利甲斐守殿江御預ケ被仰付置、御仕置之儀、御老中若年寄抔江入札之御意有ける時、多分忠臣之者共故、御助け置、夫々望之者江爲拖度之趣也、綱吉公と松平美濃守殿と、切腹被仰付可申之趣也、上意之趣に、右浪人共義、主人の讎を報とは申ながら、天下之膝元を不憚、高家之屋敷に押込討取段、狼藉之至也、寬宥之御沙汰於有之者、已後諸家之者共、鬱憤を發候抔申立、忠臣之振を以、狼藉も出來可致義、必定也、依之天下一統の掟に任、死罪をも可行候へ共、流石私之徒黨を企にも不在、此所を以て切腹之御仕置に可被仰付と也、渠等忠義を存候者共、兼而存命之心底には有之間敷、切腹申付之方、却而本懷、假助命申付、夫々江有付候ても、末々迄誰々と名は不通物なれば、結句殘念の至也、如此定法通りを以切腹申付候迚、夫を恨ミ存程之者に候へば、ケ樣之大望は存立間敷、猶已來迚も、後日に切腹被申付と心得、可差止樣之者に而は、忠臣は難立候條、忠臣の名目を永違失不致樣、速ニ死を爲遂、世上の者に爲惜候義、渠等共に可爲大幸也と上意有

之候よし、皆々其理、的然之御器量を奉賞翫者也、助命爲致候は一旦之情ニ而、其當座社名をも譽らるれ、行末は夫々江有付、家を立れば何れも同じ武士道の人にして、末代迄に秀名は殘るべからず、か丶る忠臣の武士四拾六人、一同に死失ぬるにより、天下に万代不易の佳名には至りける、既に切腹被仰付候を承、内藏助初、何樣之科にも可被行を、切腹被仰付候段難有旨領御請申上けると也

〔一話一言二十一〕義士切腹被仰付候事

一右同日〔〇元祿十六年二月四日〕淺野内匠頭家來共、去年十二月十五日之朝七時、本所二ツ目吉良上野介屋敷へ押込、上野介を討捕、卽日芝泉岳寺へ立退候ニ付、彼者共、四ヶ所へ御預ヶ之處、不殘切腹被仰付候由、細川越中守方へ御預十六人之撿使御目付荒木十右衞門、御使番久永内記、毛利甲斐守方へ御預ヶ十人、撿使御目付久留十左衞門、御使番齋藤次左衞門、松平隱岐守方へ御預ヶ十人、撿使御目付杉田五左衞門、御使番駒木根長三郎、水野監物方へ御預ヶ十人、撿使御目付鈴木次郎左衞門、御使番赤井平右衞門、右之通承り候間、爲覺書記置申候、〇中略

右件々ハ、南町奉行所古文書より抄出せし由、烏亭焉馬ニ得て寫置、〔己巳六月廿四日〕

〔久松家赤穗御預人始末〕一未刻過〔〇元祿十六年二月四日〕御撿使之御衆中御中屋敷御越有之、〇中略大守樣〔〇定直〕御出座御挨拶有之、卽刻御引退、御番頭奥平次郞大夫、但九兵衞、御目付列座ニ而、御預之拾人江、御目付衆御越被成被仰渡旨之由ニ候、麻上下着用座敷江可被罷出旨申達、奉畏候旨御請有之、兼而拵置候麻上下幷小袖一重充、足袋等與之、何茂早速着替、御玄關溜座敷迄駕ニ而遣之、相揃置、大書院江番頭同道ニ而、何茂一同罷出、御家老御用人御目付相詰ル、于時一同ニ被呼出、五左衞門樣御書出之趣、左之通口上ニ而被申渡之、

淺野内匠儀、勅使御馳走之御用被仰付置、其上時節柄殿中を茂不憚、不屆之仕形付而、切腹被仰

付、吉良上野介儀無御構被差置候處、主人之仇を報候と申立、内匠家來四十六人致徒黨、上野介宅江押込、飛道具迄持參、上野を討候始末、不恐公儀候段、重々不届ニ被思召候、因玆切腹申付者也、

右之通被申渡候處、切腹被仰付候段、難有奉存候由及御請、相濟而、大守樣於小座敷御會釋有之、

一申刻過支度相整候ハヾ差出候樣、御撿使衆ゟ被申聞候得共、大法故、少々ヅヽ時刻延候、然共再三被申聞候故、申中刻支度相整、○中略

一於大書院庭切腹可爲仕旨撿使衆依御差圖、花色無地幕ニ而庭を圍、御玄關ゟ右場所迄筵薄緣敷之、切腹場所御書院南築山前、幕張リ、筵敷之上ニ疊二枚、淺黃木綿ニ入蒲團敷之、脇之方江血隱砂桶ニ入隱置、切腹人之後、持筒壹人、足輕壹人ヅヽ白衣ニ而蹲居ス、幕之圍之後江人可來哉之ため、又ハ死骸取込候之砌、蒲團ニ而包候節手傳之、

一御預之面々、御玄關ゟ壹人ヅヽ庭江罷出案內、御留守居御目付交々同道、座敷江並居、番頭兩人ニ而順々呼出案內致、切腹順、介錯如左、

大石主稅、十六歲　朱書圓寂刃上樹劍信士
右介錯　波賀清大夫

堀部安兵衛　三十四歲　朱書圓寂刃雲輝劍信士
右介錯　荒川十大夫○中略

右之通、一番ニ主稅罷出、三方ニ小脇差居出之、主稅蒲團之上ニ着と否、御撿使衆之方江謹而御禮仕、諸肌ぬぎ、介錯人江致時宜、小脇差取上候所、首ヲ打、介錯清大夫、左之手ニ而主稅タブサヲ取上、左之足ヲ敷右ヲ跪而、御撿使衆江入實見、引退、其儘中間四人出、首體共ニ三方一所ニ蒲團ニ引包、勝手江引之、

但血少々庭江見へ申候ニ付、桶ニ入置候砂を以て早速かくし、疊筵共血付不申候得バ、其儘用之、蒲團計敷替ル、○下略

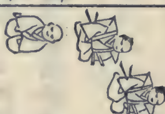
〔續視聽草三集八〕

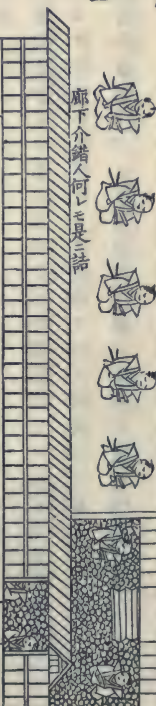
赤穗義士切腹圖

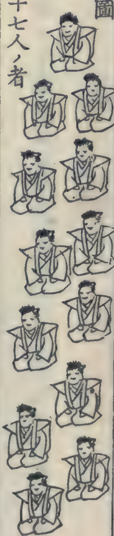
元祿十六年二月四日御預リ被成候十七人之者何モ切腹被仰付四ツ過ヨリ七半過ニスキト仕廻申候



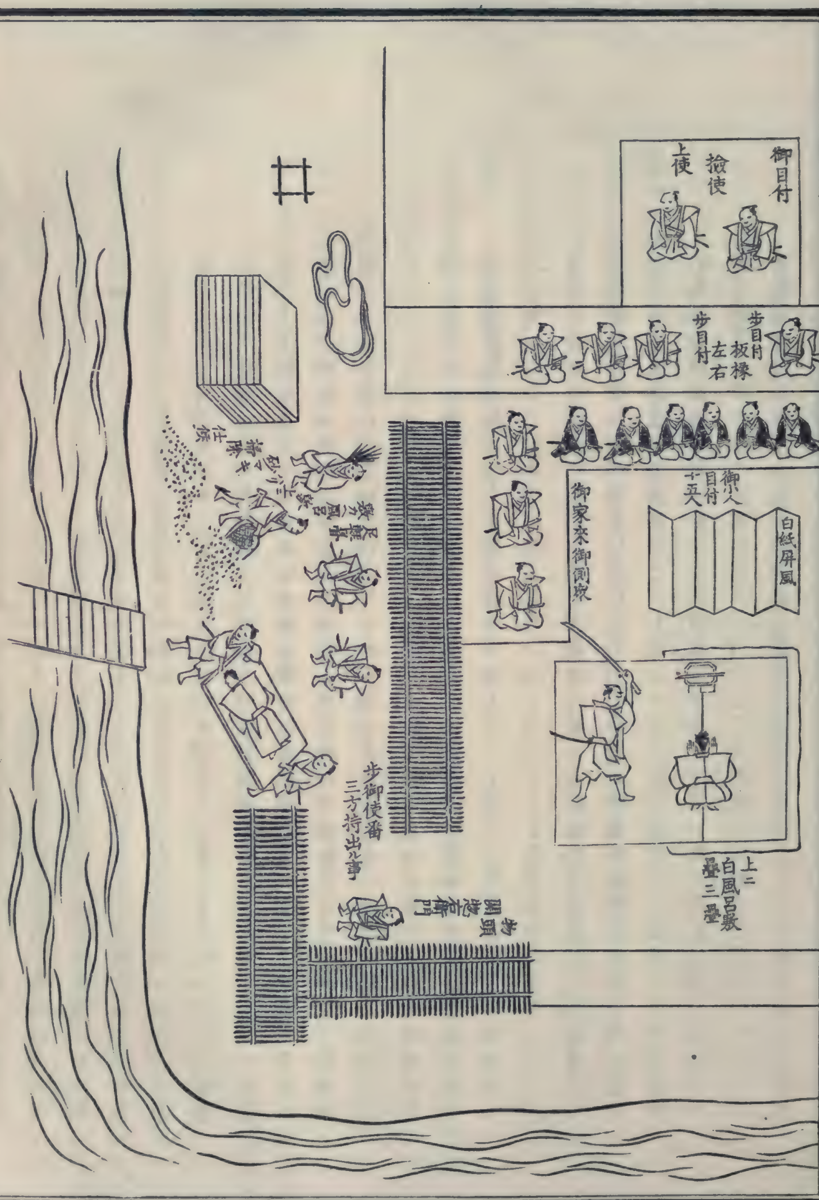











御目付
撿使
上使
歩目付 板椽
歩目付 左右
御小人目付 十五人
白紙屏風
御家來御側衆
上ニ白風呂敷疊三疊
歩御使番 三方持出ル事
物頭
掃除仕候

此圖は元祿十六年二月四日、赤穂の義士賜劒の時、右田才助（御奉行所物書）竊に其場の全體を視上、撿使より下卒徒の吏に至るまで、排列階級を混ぜず、審に警衛諸士の多少を辨別し、凡目に觸る、所の者は、悉く是を諳じ、事終るに及て惆悵嘆息して、終に慷慨の志を發し、直に眞を寫し、秘して以て家笈に藏め、永く子孫に傳ふる事爰に百年、然るに此畫圖は堀部氏眞（金丸六代藤馬）が請に因て、右田才助（當代の才助ハ七方上御番）前人摸する所の古圖を臨摹し、以て贈る所といふ、予曾て氏眞に相親む事年有り、曏昔の夜、雜話頃刻にして殆ど義士の事に及べり、氏眞禁錮して予に示すに此一小圖を以てす、愕然として覆を發ひて是を察るに、其態情意氣の全き事眞に感ずるに堪たり、嗟呼忠心義氣の摸する所に非んば、いかんぞ如此眞を得べけんや、反復往返して是を覽れば、涕泗更に止むべからず、一度是を見るに及や、忽然として所思ありといへども、深く氏眞が秘する所以を以て、輙く是を庶幾する事を得ず、心中頻に思慕し、言ふ事を肯せずといへ共、素より氏眞予が信心の切なるを知て寫を許諾す、於是心欣々として宛も珠玉を得るごとく、默して是を稽ふるに、如何なる天祥歟、かくのごとき幸に遇ふ、夫天の議るべからざる、今百年の後再拜して予が手裏に落る事、可怡して可恐、嗚呼天哉命哉、彼の右田氏の子、忠心貫日、義氣凌雲と、夫此謂歟、今我れ百年の後に生れて、かの右田子と同志、遠き事古今世を異にするといへども、其近き事比鄰のごとし古より今に至る迄、其志を通徹する事、是其忠心義氣の傑然たる者に非ずや、此時右田子無んば、誰か敢て眞を遺さん、今亦才助頗る前人の志を續て、氏眞に傳ふと、予をして氏眞微せば、惡んぞ亦得べけんや、即其臨摹するに及ては、忠七毫を採り、信以て筆端に及ぼし、永く子孫に傳へて赤心

報國の模範とせんと、顧ず卑言を綴て後世虚疑の誹謗を拒んと欲する者、また唯是のみ、

文化十三年丙子冬十一月十五日　飯岡義章謹誌

〔營中刃傷記〕御法事之節其外刃傷記

寶永六年己丑二月十六日、於上野東叡山常憲院樣御法事之節、御用掛織田監物（一万石 秀親）前田采女正（一万石 利昌）監物を殺害す、石川主殿頭（江）采女正御預ヶ、同十九日主殿頭於宅采女切腹被仰付、介錯御徒目付野田甚五兵衞、

〔翁草十一〕板倉修理細川越中守を刃傷之事

延享四卯年八月十五日、殿中大廣間、四之間北縁に手負有之由詈る、仍之詰合の御徒士目附數輩、早速彼處へ馳行見之、摠身朱に染て、誰とも見分難ニ付、姓名を問へば、細川越中守と被答、相手を尋るに、不見知者成が、上ミ下モ着し居候由を被申、因茲方々搜し求るに、大廣間小便所の廊下に、拔身の脇差捨有之故、其邊無隈尋る處に、小便所之奧、雪隱に人陰見えける儘、御徒士目附、御小人目付立蒐て捉之、姓名を問へバ、御旗本板倉修理（五千石）と答、其意趣を尋るに、先刻誰とハ不知、小便處へ參候者、脇差を拔候樣ニ見請候故、拔合せ切申候、其後の事ハ一向覺え不申候、乍去人を切候へバ遁れ難く存じ、懷中の鏫にて髮を切、脇差ハ捨候旨申之、仍て先ッ雪隱より引出し、蘇鐵の間之脇、小部屋へ入れ置、御徒目付附添罷在、大目付石河土佐守、水野對馬守、御目付中山五郎左衞門、神尾市左衞門、土屋長三郎、横田十郎兵衞、橋本阿波守、菅沼新三郎、八木十三郎、西之丸御目付神尾伊兵衞、中島彥右衞門、安藤喜右衞門等立會、吟味之處、右口上之通、全く亂心と相見え候付、即水野監物へ御預ヶ、越中守ハ殿中御間の內より駕にて歸宅、早速御醫師武田叔安、外科西其哲を御附、上使永井伊賀守を以御尋、尙又爲上使堀田相模守被相越、御懇之上意ニて、板倉修理儀、亂心ニ而

如此、仍御預被仰付候、追而御仕置之御沙汰可有之候、上より御差圖之趣有之間、家中相騷申間敷之旨也、○中略同廿三日、水野監物方江爲撿使大目付水野對馬守、御目付橋本阿波守、八木十三郎、御徒目付、御小人目付差添罷越、板倉修理へ被仰渡趣、板倉修理義、去ル十五日、於殿中細川越中守へ手疵負セ候始末、雖亂心、越中守右手疵にて相果候上ハ、切腹被仰付者也、一說、修理事、相馬彈正ニ意趣有之、九曜之紋を見損し、人違ニ而如此と、不知實否、

〔營中刄傷記〕淳信院樣御代

延享四年丁卯八月十五日、細川越中守宗孝、從四位下侍從肥後國熊本城主五十四萬石寄合板倉修理、高六千石於殿中致亂心、大廣間小便所にて、越中守手疵爲負、小便所に隱居候を捕、水野監物忠之江御預ケ、右手疵に而越中守卒去、依之八月廿三日、於水野監物宅修理切腹被仰付候一件、

寄合　板倉修理

右は於殿中致亂心、細川越中守ニ手負せ候に付、當時水野監物江御預ヶ被仰付候、

上使永井伊賀守　細川越中守

右は於殿中手疵負候ニ付爲御尋被遣之、○中略

同廿三日

寄合　板倉修理

右修理儀、去十五日、於殿中致亂心、細川越中守江手疵負せ候に付、當時水野監物江御預ヶ被仰付候、亂心とは乍申、越中守、右手疵養生不叶相果候ニ付、於監物宅切腹被仰付候、大目付水野對馬守罷越申渡ス、御目付橋本阿波守、八木十三郎爲撿使罷越ス、

〔刑罪書〕御證文寫

天明四年辰三月廿四日入

壹人　佐野善左衛門　歲廿八是者新御番蜷川相模守組

此者儀、田沼山城守殿江爲手負候ニ付、揚座敷ニ入、

右佐野善左衛門儀、去月廿四日、於殿中田沼山城守江手疵爲負候、亂心といへども、山城守右手疵ニ而依相果候、切腹被仰付旨、松平周防守殿依御差圖、於評定所大目付大屋遠江守、町奉行曲淵甲斐守、御目付山川下總守立合申渡候間、撿使江可相渡者也、

辰四月三日

右善左衛門死骸、古法之通、出役藤由介十郎、由比忠五郎ヲ以相伺候、尤帶刀組同心差添、評定所江差遣候處、左之通之紙面持來ル、

服部仁左衛門様　　藤田介十郎
佐野五郎左衛門様　　由比忠五郎

佐野善左衛門死骸之儀、貰人も有候はゞ可遣哉之旨、御頭江相伺候處、勝手次第可仕旨被仰渡候、依之御達申候、以上、

四月三日

〔憲教類典二ノ三國替所替〕年號月日不知

松平石見守領知被召上候時被仰渡覺○中略

一伊木伊織、家老之身として、國輩に對し遺恨を申、主人を輕しめ、家來之者大勢立退候樣、常々仕來候ニ付、父子共に切腹被仰付候事、

一大原久右衛門、田邊庄左衛門、宇津孫右衛門、山脇久左衛門、鈴木平右衛門、名倉喜左衛門、黒川恒左衛門、丸山忠兵衛、杉屋太左衛門、寺西忠左衛門、山木喜左衛門、小寺八郎兵衛、以上拾貳人之者共、物頭役人目付以下之身として、主人を輕しめ、日切いたし暇を申、其上大勢令徒黨立退候樣に仕候義、別而曲事被思召候、父子共切腹被仰付候事、

獄舎切腹例

年號月日不知

生駒壹岐守領國被召上候付被仰渡之覺〇中略

一石崎若狹、前野治大夫事、家老之身として、主人之爲無沙汰にいたし、家中之者、常々令一身立退候樣に仕成、曲事ニ被思召候ニ付、父子共切腹被仰付候事、

〔維新史料唱義聞見錄〕安島帶刀

名は信立、始め彌次郎と稱す、爲人沈實、慷慨氣節あり、烈公に信用せられ、東湖に繼で事に關り、忠誠の士なり、〇中略安政六未年四月二十六日、終に評定所にて尋の上、九鬼長門守へ預け、同年八月二十七日、牢屋敷にて切腹被申渡たり、

申渡

水戸殿家老　安島帶刀

其方儀、御館より一橋家御相續有之、當刑部卿殿御養君に被仰出、西丸へ御直り可被遊候哉との儀、兼々及風聞等候處、近年專右世評等有之、此上自然天運に被爲叶、右之通御治定相成候ならば、無此上恐悅の儀と一藩難有儀に存居り、右風聞の趣、折に觸れ前中納言殿へ御聽入候處、右樣の儀申唱候者有之候とも、程能申消し、猥りに口外等致間敷、藩內の者へも心得違無之樣申聞可置旨、無急度御沙汰有之處、右申上候節、御氣色御不興と申にも無之、右は紀伊殿も被爲在候儀ニ付、右樣御沙汰は有之なれども、自然世評の通り成ならば、御滿悅可思召と、普通の人情を以御內意推量、兼て口外をも致す間敷と被命候趣申立ながら、假令外用向申遣候も、文通端書に候へども、同家來在京役鵜飼吉左衞門幷同人忰鵜飼幸吉へ、右世評の趣、大慶同意の旨書き加へ申遣、同藩茅根伊豫之助より、同樣の儀に付、尙勘辨可致旨、右吉左衞門父子へ申遣し候趣、追々伊豫之助より噂聞及ぶとも其儘に致し置、且去年七月中元家來、其頃松平薩摩守家來日下部伊三治上京の

砌、市中酒店に於て出合候て、餞別迄の事と申立なれども、既に同人上京の上、吉左衛門父子申合、不容易儀、堂上方へ致入說、傳奏衆より同人へ勅諚御渡に相成候次第に至る上は、全餞別迄と申分紛敷、其上去午年九月十八日附にて、鵜飼父子へ、此者宛の書狀二通、幷日下部伊三治宛、此者方迄差出す、都合三通の文言にも、是迄專彼者と同意相働の的證相見え、御養君の儀は、御大切之御儀と、假令御主君御內命有之儀に有之候ば御諫言をも可申職掌の處、却て御內意を推察致し、右體鵜飼父子へ及文通、猶右の者ども京地にて種々奸計を廻らし、公武御確執にも可及場合に至り候段、對公儀不輕儀、右始末不屆ニ付、切腹申付る、

未八月

斯切腹と申付られたるは名目にて、實は牢屋敷にて、非人の手にかけ打首にせし由なり、此時帶刀四十八歲なり、

帶刀、牢屋敷において切腹被申付候節、幕府目付始撿使役人立合、介錯の人等嚴重なり、勿論中古以來、自分に屠腹と申事は無之、扇子を三寶に載せ、夫を戴く相圖に首を落す例なり、此日帶刀其席に臨み、介錯人に向て曰く、聊か申度儀有之候得ども、二三日以來、口中氣にて言舌通じ兼候間、水を一盃飲度旨申に因て、撿使より水を與候處、帶刀一口二口呑み終り、外の儀には無之、今般御預相成候中、殊の外丁寧に取扱呉、千萬忝次第、此段君侯え厚く禮を申述候旨、其役人え御申通被下度、且又介錯の御役御苦勞に存候、宜敷相賴み申とて、首を延したり、此時撿使の役人初め、其從容死に就きたる樣子を見て、暗淚を流さぬものなかりしとぞ、

此は牢屋同心より、大山某なるもの承りたる話、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年八月廿七日、常州水戶ノ臣安島帶刀ヲ殺ス、

安島帶刀は水戶の臣、去年戊午、幕府に罪を得て京都に捕へられ、尋て江戶の獄に下り、今歲己

未八月廿七日を以て刑せらる、

古事類苑

法律部三十四

下編上

獄門

磔 倒磔 牛割 水磔 併入

古事類苑

法律部三十四

下編上

獄門

獄門方法

獄門ハ、卽チ梟首ナリ、德川氏ノ時ニハ、獄舍ノ門前ニ懸クルコトナクシテ、大抵淺草小塚原ト、品川鈴ケ森トノ刑場ニ於テ之ヲ行ヘリ、其法ハ、獄內ニテ斬首シ、其首ヲ水ニテ洗ヒ、苞ニ入レ、非人ハ科書ノ捨札ヲ將チテ前行シ、其場ニ送リテ之ヲ梟シ、又非人ヲ以テ番人トシ、二夜三日ノ間之ヲ徇シテ、然ル後ニ其首ヲ棄ツルナリ、而シテ其捨札ハ三十日間刑場ニ建テ置クモノトス、其罪ノ重キハ引廻等ノ屬刑アリテ、罪狀ヲ錄シタル紙幟ヲ前ニ建ツルナリ、又其犯罪地ニ於テ梟首スルコトモアリキ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一獄門 従前々之例

於淺草品川に獄門に掛る、在方ハ惡事致候所江差遣候儀も有之、引廻捨札番人右同斷、○三日之內非人番附置

但牢內におゐて首を刎、欠所右同斷、○田畑家屋敷、家財共欠所、

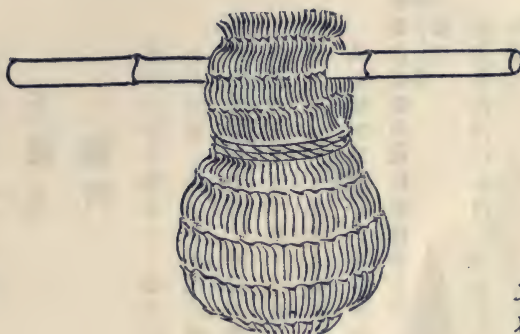
〔事蹟合考〕一〕梟首場之事

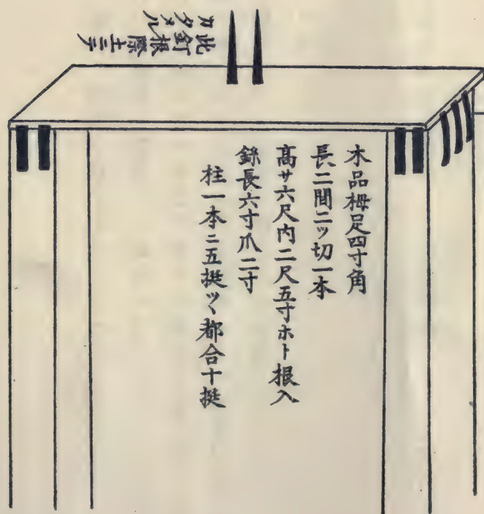
一御入國以前までは、本町四丁目梟首場にてありしよし、これによつて、山王、明神の兩祭禮ともに、神輿ならびに練り物等まで、今にいたり渡らざるなりといふ、

〔刑罪大秘録〕

獄門臺木一人掛ケノ圖

二人掛ハ長六尺
但三人カケハ長八尺
又々別々ニモ掛ル





獄門圖

兩町奉行所より出る朱鎗并捕道具
晒中圖の如く餝置晒相濟候得ハ元々へ
納る
但谷のもの持參



〔刑罪大秘錄〕獄門御仕置之事

一死罪御仕置之通、首打役首討候得バ、非人直ニ首引揚、手桶之水ニ而洗ひ、兼而手當致置候俵ニ入、獄門撿使、町方年寄同心雙方貳人出居、右首請取、先江穢捨札持道具、其跡首入候俵を非人兩人ニ而差荷ひ、右撿使同心差添、淺草品川御仕置場江罷越、獄門ニ掛之、

但引廻し無之候得バ、穢無之、

一獄門臺壹ツ江、二人三人一所ニ掛ケ候儀も有之候由之處、文化三卯年四月廿五日、兩町奉行懸ニ而、於淺草獄門二人有之、臺も二ツに掛、其後同六巳年十月廿七日、獄門二人臺二ツに掛ケ候由、右ハ人數ニ寄、差略も有之候事歟、なを糺すべし、

一獄門首晒日數三日二夜、上番人、谷のもの六人 下番人、非人六人、

但三日目掛リ町奉行所江彈左衞門伺之上取捨、

一右晒中、近邊御成、其外障之儀有之候得バ、町奉行より申付取捨、

一捨札ハ三十日建、取捨、

右同斷之節ハ取除ケ置、殘日數建之、

〔刑罪書〕獄門壹人分御入用

一椴六尺札壹枚 但打釘添抗共　代銀七匁五分貳厘

一獄門釘貳本　同壹匁四分三厘

一同大鎹拾挺　同八匁四分五厘

一番小屋壹ケ所　同四拾三匁貳分五厘

一篠薪七拾把 但二夜分　同拾九匁六分

〆銀八拾匁貳分五厘

此金壹兩壹分ト五匁貳分五厘

但引廻之上、獄門ニ候得バ、幟壹本、代六匁八分相增、都合金壹兩壹分貳朱ト四匁五分五厘、

右之外獄門首臺木は、御役ニて谷大工拵申候、

但右同斷候○前文云、前日牢屋鋪江呼寄申附候

一蠟燭　拾貳挺　代壹匁八分

一醬油樽壹ツ　代壹匁

〆貳匁八分　是は彈左衛門自分入用にて差出申候

右獄門之節、彈左衛門より差出候非人人足は、不殘御役にて差出申候、

獄門制度

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從前々之例

一盜可致と徒黨いたし、人家江押込候者、　頭取　獄門

〔御定書百箇條〕人相書を以、御尋に可成者之事、

寛保二年極

一公儀江對し候重き謀計

同

一主殺

同

一親殺

同

一關所破

同

一人相書を以、御尋之者を乍存囲置、又は召仕等にいたし、不訴出者、　獄門

但乍存請に立候もの同罪、吟味之上不存に決候共、主人請人共に過料、

獄門例

〔翁草四十五〕嶋原一揆の次第

一三會村之百姓共、餘多味方可申由にて城江籠リ申候處に、いか樣ニ存候や、鐵炮長柄六十程取、樓門の脇塀裏より逃、敵方へ參候、夫ニ付三會村之者、吟味被致、二百人之餘、城中ニ獄門ニ掛られ

申候、

〔御仕置裁許帳 九〕寛文九年 酉 十一月廿四日

三人　孫右衛門　善太郎　三十郎　是ハ上總國青木村保科越前守知行所之百姓、此者共芝浦ニ而流し黐をいたし鴨を取候處を、所之名主八郎兵衛、小左衛門、幷獵師共見出し捕へ、御鳥見佐山角左衛門、山本市右衛門、岡田半左衛門、加藤伊兵衛、右之四人ゟ斷ニ而、穿鑿之內牢舍、

右三人之者共、戌二月三日、牢屋ニ而首を刎、於佃島獄門、

〔御仕置裁許帳 九〕貞享五年 辰 正月廿八日

壹人　清兵衛　是ハ磐井町三丁目津輕宜春店之者、此者品川表と中川尻ニ而、鳥を取候由牢舍、作右衛門、八兵衛訴人申ニ付、今日召寄遂僉議候處、前方鳥取候由白狀申ニ付牢舍、

右之者、同辰五月廿九日、於牢屋首を刎、本所三ツ目橫堀ニ而獄門、

〔御仕置裁許帳 九〕元祿二年 巳 四月十二日

壹人　安左衛門　是ハ櫻田鍛冶町源左衛門店之者〇中略

貳人
仁左衛門　是ハ木挽町七丁目清左衛門店之者
久兵衛　是ハ彌左衛門町與兵衛店之者

右兩人之者頭取ニ而、御堀之鯉鮒を取候者、

右之者共、中根主稅方江捕、爲致牢舍候、加藤平八郎方ゟ相渡候ニ付、遂僉議候處、右之通ニ候故、同巳五月十一日、於牢屋死罪、品川獄門、

札文言

此安左衛門、仁左衛門、久兵衛、四年以前十一月、大手之方之石垣出先ゟ、平川口之方御堀江さしあみをはり、魚を取申候、其前夜仁左衛門、久兵衛つれ立參り、內櫻田御門きわ御堀御馬屋之方

江、魚を取り可申とさしあみをはり候科によつて、三人之者共、ごくもんにおこなふ者也、

五月

〔瀨田問答〕一天一坊ガ事、實說御座候哉、

答、天一坊ガ事、實說ニ御座候、

享保十四己酉年四月廿二〇二、一本作八、日　天一坊　改行 酉三十一 右ハ於評定所ニ

右ハ僞之儀共ヲ申觸シ、浪人共ヲ集メ、公儀ヲ不憚、不屆ニ付、死罪之上、獄門ニ行者也、

右之通、御日記ニ相見エ申候、

〔舊記拾要集四〕元文五年申七月廿三日御用覺帳書拔

一元文五年申七月廿三日於評定所御詮議もの落著の覺

獄門　小普請組土屋平三郎支配 山田豐之助家來　穗高助之進 歲四拾七

右助之進、揚り屋ゟ落緣江被召出、被仰渡候は、其方儀、山田主膳相果候以後、家督豐之助を蔑ニいたし、苗字を山田と名乘り、其身主人之樣ニ仕なし、其上主人存生之內ゟ、傍輩女りかと密通之上、致妻、出生之娘を山田直次郎と名付ケ、豐之助弟ニ仕、親類書ニ書載差出候、其後出生之次男を直次郎と付ケ置、剩豐之助儀、万一之儀有之節、跡式相續爲致候積リニ相巧候段、重々不屆ニ付、獄門ニ被行候旨被仰渡、御徒目付室庄左衞門、幷御小人目付、此方三好新助、土佐守殿方都筑重左衞門、牢屋敷江罷越、死罪申付、首は年寄同心ニ相渡シ、品川江遣し獄門ニ爲懸候、首は當番同心永澤彌七討申候、

〔憲敎類典四ノ二十一御咎〕明和四丁亥年八月廿一日

永澤町安兵衞店浪人山縣大貳方ニ居候、京都正親町三條中將家來之由申立候者、　藤井右門 亥四拾歲

其方儀、浪人山縣大貳多能之儀を、本町三町目町醫師宮澤準曹、神田小柳町三丁目、浪人桃井久馬江致吹聽候得共、申消シ候趣ニ付、大貳儀、甲州之御城御要害等江引當テ兵學致論談、道理相分リ候よし之儀相語仕候、且又四年以前、熒惑星天之心宿江掛リ候よし、右ハ古書之通リ、兵亂之萌シニ候處、其後上州邊百姓騷立、少しハ其驗し有之旨、大貳申聞候處、猶又慥ニ相聞江候ため、土御門其外にても同樣之沙汰之よし取扱申聞候上、何方ニ兵亂之萌可有之哉難計由申、甲州ハ御要害宜敷候得共、武田勝賴破られ候節之通リニ攻候はゞ、甲州之御城落可申よし、都而火矢之儀ハ、風上より射懸ヶ候ニ付、南風ニ候得バ、品川邊より射懸ヶ宜候由、或ハ甲府之繪圖ニ引當テ軍立論じ候はゞ、可相分旨之儀共、當時之地利地方江引當雜談仕、江戶之御城、西之方御手薄之よしニ付、譬バ其方を攻候ば、東之かた御要害堅固成場所より攻可申事之由申之候、勿論其方儀、反逆等之儀ハ無之事に候得共、一體大貳を致信仰、兵學論談、又ハ合戰之致かたを申募リ候より、致合戰者之所存ニ相成リ、自前と前書之通、上も無之恐レ多き義を致雜談候段、不敬之儀、不屆至極ニ付、獄門申付候、

八月廿一日

〔撰述格例初篇二ノ九十二〕寬政五丑年十一月

戶田采女正殿御差圖　町奉行　小田切土佐守懸

一新兩替町六右衛門似役井盜致候一件　新兩替町四町目半藏店　六右衛門

右之もの儀、致盜候依科、先達而敲御仕置に相成候後、又候惡心出、在所江出立致候途中、足痛步行或兼、駕籠雇候得共高直に候迚、町人之身分にて致帶刀、其上重御役人之家來にて陶六右衛門と申隱密役之旨僞、東海道筋宿々之問屋場にて駕籠相雇、剩伊勢參宮致候若年之者共を欺、道連に相成、路銀を預り、且腹懸之內に縫入置候金子、或者胴卷之內之金子等可盜取と、川越致候節、衣類

を爲脱、又者濡候をほし遣、透を見合盗取候分共、都合壹兩三歩と錢貳貫貳百文之內、貳分壹貫百文は、右之者共旅用幷調物代に遣拂、貳朱と七百文は差戾、相殘候金壹兩貳朱四百文は、店持候入用に遣捨候段、彼是巧成仕方、重々不屆至極に付獄門、

右御仕置附

右巧成儀を申懸、度々金子等かたり取候もの、金高雜物之多少によらず獄門、重御役人之家來と僞かたり致候もの死罪と有之、兩樣之御定を見合、御仕置重き方へ引付、獄門、

〔一話一言 三十七〕長崎二人罪狀告示

長崎村船津浦源太郎子　伊之助 年二十一歲

此犯原有債錢、逼于窮苦、糾合福次郎、隨雇善次郎、丑之助、宇十等三名、爲作水手、卽時相約云、果得贓物、改日分配等語、于亥十二月十四日夜、潛往河下唐船、不惟偷盜棕索磁器等許多各宗、甚至、將赶來之唐人、拋入海中、等情、那善次郎指揮、及至丑之助、將唐人、拋入海裏之際、應該阻當、而並無此舉、以致唐人溺水〇水字原無、據下文補、身死、此等事端、全係此犯、造起意端、潛往偷盜、以至于此、罪惡難容、今奉部論、准此、押送各街、卽刻梟首示衆、

丙子三月〇文化十三年、下同、

長崎村船津浦福次郎弟　善次郎 年三十二歲

此犯肯從伊之助及兄福次郎之言、約定改日得贓分配等語、仝丑之助、宇十、一起受雇水手、于乙亥十二月十四日夜、潛往河下唐船、況恐有後患、將赶來之唐人、投入海中等語、指點丑之助、以致唐人溺水身死、至于此狀、罪惡難容、今奉部論、准此、押送各街、卽刻梟首示衆、

丙子三月

〔幕府時代屆申渡抄錄〕仙石一件御仕置申渡〇天保六年

御請書

仙石道之助家老仙石左京、不届之取計致し候一件、引合の者共一同被召出、再應御吟味之上、左之通被仰渡候、

一仙石左京儀、主人先代美濃守病氣差重、跡相續の男子無之、火急に出府の節、其砌纔十歳の小太郎を愛子の由にて召連、既に右故隱居播磨守、其外一家中在町迄の疑惑受候段、主家へ對し不顧憚筋に有之、年寄生駒主計、勝手掛手餘り候由にて、相掛度々申聞を、同人壹人にて差支有、右掛り差免の儀相願候は格別、増人有之候ては、區々可相成抔申答、其儘に承置ながら、差支候場に臨み、以後取締の由にて、年寄役取放の上、減知申付有之候後、左京外三人にて勝手方取扱候段、隱居播磨守差圖に候共、幼年主人家政向、專取扱候身分、右次第不都合の儀にて、巧の存念に相聞、其上百姓共、小鳥作物を荒候趣を以、投飼相願候に付、飼置候由は難立申譯にて、勝手向省略中、宅に鷹差置、野合において投飼致し、又は悴緣女引移の次第等、超過の儀共、其外品々如何の取計有之候故、右主計外三人より、隱居播磨守へ上書致し、尋受候節、更に無跡形趣に相陳、却て宇野甚助へ相談の上、年寄共に申談、不束の上書致し候旨、播磨守へ申聞、減高蟄居等爲申付、右體不届有之候故、元同家來河野瀨兵衛儀、主人同姓へ左京等取計、品々申立候を讒訴の趣に申成し、御料所地内迄、足輕差遣召捕、右に引合候旨を以、主計其外の者共咎の儀は、一旦事濟候を、病氣にて精神虛耗におよび候播磨守に陰聞爲致、再吟味におよび、剩瀨兵衛申立の儀は、御奉行所において御吟味の上、左京申譯無之、恐入候旨申立候廉、多端に候處、讒訴の趣に吟味爲詰、其以前播磨守室常眞院等、瀨兵衛より承り傳、左京如何の取計など、播磨守より心添申遣候を、不行屆の由にて、侘の書付年寄杉原官兵衛より申談爲差出、右體事實反覆の儀を、却て瀨兵衛は死罪難逃由抔物語、外年寄共より、右の趣を以了簡爲申立、瀨兵衛仕置相決、然而已ならず、主計外三人は、同姓共より、瀨兵衛書付差出

候に申合候儀無之旨申立候を、倶々相巧み、讒訴致し候體に書綴、主人を欺、重役人樣の御內慮迄相伺、瀨兵衞は死罪、主計外二人切腹より一等輕き心得にて、剃髮の上、穢多町續明屋へ圍を敷入置候始末、主家へ對、深望は無之由は申立候共、其身不忠の露顯をいとひ、主人爲筋等申立候ものを重科に陷入候に無紛、不屆至極に付、獄門被仰付候、

〔維新史料 唱義聞見錄〕鵜飼幸吉

十二月〇安政五年五日父と倶に東行し、榊原式部大輔へ預けとなり、終に翌未八月二十七日夜、獄門の刑に處せられたり、年十九歲なり、

水戶殿家來吉左衞門悴京都留主居役見習 鵜飼幸吉

其方儀、外夷御取扱の儀に付、前中納言殿思召の段、御認有之御直書等、度々同藩茅根伊豫之助より差越、右御直書は、烏丸下長者町上る町芳兵衞借家儒醫池內大學を以、靑蓮院宮、三條家へ差出候樣、前中納言殿御內命の由を以、伊豫之助より申越、右は國家の御爲筋と相心得候共、御政事向に拘り重大の御儀に付、一概に宮堂上方へ書面差出候儀は、對公儀御斟酌可有之筋に付、取計方も可有之處、其度々大學を以、右向々へ入內覽、殊ニ去午年正月頃、御養君の儀に付、世上區々の風聞有之折柄、一橋刑部卿殿、年長賢明の御方に付、御同人へ御治定に相成ならば、天下の御爲、且水府の御爲にも可相成、勸辨可致旨等、猶伊豫之助より書狀を以申越、又は其比同藩側用人安島帶刀より刑部卿殿御養君に可被爲成候哉との儀、路傍の風聞も有之、難有旨等申越候も有之、右の御運びにも相成ならば、前中納言殿御滿足にも可被思召と存居候段は、一藩同意に付、密に御意內を推量、父吉左衞門申合、是又池內大學を以、靑蓮院宮、三條家へ右書狀差出、又は前中納言殿御愼被仰付候に付、御愼解相成候樣、其外御同人御罪狀、御所向より關東へ御尋有之度旨等、是又大學を以、三條家へ致內願、或は松平薩摩守家來日下部伊三治同樣、內願として致上京、同人儀は前

外國人處刑

中納言殿御内命を受、御所向手入致候事の由申聞候儀も有之、一同彌決心、猶伊三治申合、頻に周旋いたし候故、水戸殿へ重き勅諚御差出、吉左衛門へ御渡相成候次第に至り、殊に右勅諚、伊三次一同守護致出府候節、小瀬傳左衛門と變名相名乘罷下り、其上重き御品柄に付、着の上は直樣御館へ可差出處、小石川春日町旅人宿長左衛門方へ一旦着、追て安島帶刀宅へ密に推參、同人へ相渡候段、御品柄に對し不敬の至り、剩へ水戸殿に於て、勅定諸家へ御達は勿論遵奉にも無之由を以、御所向より右御催促有之樣、又は綸旨御差下相成樣周旋方之儀、伊三治より申越、或は紀伊殿用達世古恪太郎よりの書狀の趣も、先達て御差出有之勅諚は僞書に有之抔申越、右書面を持ち、鷹司殿家來小林民部權大輔方へ罷越、綸旨御差下方の儀、頻りに相望候節、只管願意を可遂ため、世上の浮説等取交、重き御役人の身分等の儀不輕たとへを以、同人と品々論談いたし、至て恐多き事ども、民部權大輔へ申聞相願、剩右體不容易綸旨の儀相望むは、主命歟、自己の周旋に有之歟との旨、同人より尋請候節、主命に有之旨、取繕及答段、假令綸旨の儀は事を不遂共、不恐公儀致方、右始末不屆至極ニ付、獄門申付る、

未八月

〔憲教類典〕二ノ二十二長崎 日本國欽差使井上筑後守政重告諭大明國諸舟主狀

一頃年阿媽港蠻舶、託于商賈來於長崎、竊張耶蘇道、勾引蚩々之民、我大君聰明英武、早察之、制禁嚴肅、而闔國畏服、若有信彼邪法者、發覺則罪夷三族、然彼船中、匿載號伴天連者、來誑民擄人、故去年降欽命、絕阿媽港、曰無再趣于本朝、若有重到、則破其舶、誅其人、無噍類、今玆彼蠻賊、不順嚴旨、佯爲乞和者來款、大君震怒、遣使節到長崎、縛其徒七十人、悉皆梟首、燒其舶幷器財、沈于海、是汝曹之所親見也、自今以往守我法、買船往來多交易、則彼此利也、〇中略

寛永十七年仲秋日

〔御定書百箇條〕廻船荷物出賣、出買、幷船荷物致二押領一候者御仕置之事、

寛保三年追加
一 逢二難風一打荷致、殘荷物を盜取候船頭と馴合、浦證文差出、配分取候名主、　於二其所一　獄門

〔公事方類例集〕御證文先觸寫○中略

一首桶　壹ツ

右者奥州信夫郡本内村迄、明十一日朝五ツ時御差立、御代官寺西藏太様御手附渡邊領右衛門様御差添、江戸御出立ニ付、如レ是、水野出羽守様宿継御證文御寫、御先觸綴合壹通箱ニ入、外ニ右渡邊領右衛門様ゟ御先觸壹通、別箱ニ入被二遣一候間、則差越申候、先々無二滯相觸一、人馬急度令二用意一相待可レ被レ申候、以上、

子 八月十一日　　御傳馬役　馬込勘ヶ由印

從二千住一奥州桑折迄
問屋名主中○中略

男首壹ツ、桶ニ入、從二江戸一奥州信夫郡本内村迄、房川渡、中田關所無二相違一可レ被レ通候、同州伊達郡長倉村無宿和藏と申もの、御地にて不屆之儀有レ之、於二江戸表一死罪申付、右之首、本内村ニて獄門に掛候由、堀大和守殿斷付如レ此候、以上、

文政十一子年七月廿三日　　佐渡印　信濃印　日向印　主計印　甲斐印

堀大和守殿斷
男首手形壹枚

房川渡中田
人改中○中略

一札之事

牢屋敷にて差出
一獄門首壹ッ

奥州長倉村無宿
和藏
子三十一歳

右者奥州本内村ニおゐて獄門ニ罷成候付、右首私共江被成御渡慥請取、其所迄爲持罷越申候、依如件、

文政十一子年八月十一日

寺西藏太手代
横山勝五郎

渡邊領右衛門

〔公事方類例集〕無宿和藏所獄門被仰付晒相濟候御屆書

子八月(文政十一年)十八日ゟ同月廿日迄

一獄門首

長倉村無宿
和藏

右者奥州長倉村無宿和藏、不屆之儀有之、江戸表にて死罪、奥州本内村ニおゐて獄門被仰付候間、斃馬捨場等見計、獄門ニ掛、三日之內、晝夜貳三人宛穢多番申付、三日過候はゝ、番人爲引取可申旨、先達而被仰渡、當八月十一日、牢屋敷にて首御渡有之候間、直ニ手附番人差添、彼地江差立、兼て本內村領主木下宮内少輔家來江爲掛合、同村地內、往還端芝間江場所取建置候付、當八月十八日ゟ同廿日迄、三日晒相濟、番人爲引取申候、且又右和藏幷無宿倉次御科之次第、當半田村地內江も捨札可建置旨、堀大和守殿ゟ御達有之、捨札案御渡御座候ニ付、捨札爲建置申候、依之此段御屆申上候、以上、

子八月

寺西藏太印

〔舊幕府時代屆申渡抄錄〕一延享四卯年三月十一日、堀田相模守殿御差圖、德山五兵衛掛、

異名日本左衛門無宿十左衛門事

濱島庄兵衛
二十九才

死後處刑

其方儀、同類大勢申合、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、近江、伊勢、右八ヶ國にて、押込金銀多く強盗致し候段、重々不屆に付、町中引廻し之上、遠州於見付宿獄門、

浪人平四郎事　中村右膳

其方儀、身持惡敷、親勘當を受、無宿にて濱島庄兵衛弟分に成、同類申合、押込強盗致し、其上巧成繪符を拵、道中往來致し候段、重々不屆至極に付、町中引廻し之上、遠州於見付宿獄門、

〔的例黄紙之寫〕獄門

安永八亥十月主殿頭殿御下知　手限　桑原伊豫守掛り

一常州浮島村百姓共、地頭申付致混雜候、吟味一件之内、

猪子左大夫知行常州信太郡浮島村百姓平左衛門忰　喜兵衛

此喜兵衛儀、御代官之節、權威を以、村役人江可引渡諸書付帳面取上、深く取隱置、或ハ庄大夫、年貢未進引負有之を見込、地頭江取立候由申僞、庄大夫ゟ金子三兩差出させ、不足之分ハ庄大夫所持之地所爲書入、弟源八方ニ而、金十兩才覺いたし、是又地頭江ハ不差出、横取いたし、其後庄大夫江金子催促ニおよび、返濟不致故、右地所取放し、其上吟味筋有之地頭ゟ、度々差紙を以呼出候得共、難澁ニおよび、剩地頭家來捕方ニ罷越候節手疵爲負、其身之惡事を可遁ため、盜賊押込候故、疵付候旨相違を申立、奉行所江欠込訴いたし候段、旁不屆ニ付、所ニおゐて獄門可被仰付哉、

〔翁草四十六〕由井正雪事

一正雪座敷ニ立歸り、由井三左衛門、熊谷六郎左衛門、糟谷九郎左衛門、同吉兵衛、同清兵衛、同作右衛門、僧廓然、其外下人迄、車座に並て、最後の酒宴を始、其中にて、一通の書捨を認、是を硯の蓋に差置、扨某が介錯は、廓然に頼む也、各には是を手本に跡より追付れよと押肌脱、短刀を腹へ突立引廻し、聲をかくれば、廓然透さず是を□く、殘る者共、追々に自滅の音洩聞へて、すは搦捕れとて、四

方より踏込ければども、戸口々々には、跡付物の道具を積上げ、其上千筋の縄を張たれば、急に入事を不得、刀を抜て切拂ひ〳〵して亂入る、其間に徒黨の者共は心靜に自殺しけるが、廓然は介錯に時移りけるや、または後れしにや、敢なく搦とらる、〇中略

一駿府阿部川河原ニ於、由井正雪、同三左衛門、熊谷六郎左衛門、佐原十兵衛、長山兵左衛門、此兩人は、五人の大將分の中なれば、梟罪たるべきに、梟首に被處は、是も自殺しける歟、粕野九郎右衛門、同吉兵衛、同作右衛門等梟首せらる、

引廻之上獄門

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

從二前々一之例
一人を殺、盗いたし候者、　引廻之上獄門

寛保二年極追加
一片輪者を殺候て、所持之品を盗取候もの、　引廻之上獄門

〔御定書百箇條〕毒藥幷似セ藥種賣御仕置之事

寛保七年極
一毒藥賣候もの　引廻之上獄門

〔御定書百箇條〕似秤似升似朱墨拵候もの御仕置之事

寛保二年極
一似秤拵候もの　引廻之上獄門

但掛目違無之においては中追放

同
一似升拵候もの　引廻之上獄門

但入目違無之においては中追放

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寛保二年極
一地主を殺候家守　引廻之上獄門

寛保元年極
一主人之親類を殺候もの　引廻之上獄門

寛保元年極
延享元年極
一舅伯父伯母兄姉を殺候もの　引廻之上獄門

引廻之上獄門

寛保二年極
一支配を請候名主を殺候もの
　但可ㇾ殺所存にて手疵爲ㇾ負候もの死罪

〔梵舜日記〕慶長五年十月一日、豐國越次今度謀叛衆三人、石田治部少輔、安國寺、小西津守、洛中之大路ニ趣、於二六條河原一首刎、三條橋ニ被ㇾ梟了、次大藏頭梟、

〔武德大成記十八〕慶長五年十月朔日、神君、奧平美作守信昌ニ命ジテ、石田治部少輔三成安國寺惠瓊長老、小西攝津守行長ヲ車ニ乘セ、一條ヨリ三條室町ニ至テ引渡シ、四條河原ニ於テ悉ク其首ヲ斬リ、三條河原ニ梟シ、傍ニ札ヲ立テヽ、各其姓名ヲ書ス、且長束兄弟三人、福原左馬助、原隱岐守等ガ首ヲ斬ル、

〔關原合戰誌記二十二〕內府公御上京幷大坂御和睦附逆徒等被ㇾ囚事
其后福島、池田、井伊、本多ニ命ジテ、三人ヲ大坂中引渡シテ、又京都ヘ被ㇾ遣、十月朔日、車ニノセ、紙旗ヲサヽセテ洛中ヲ引廻シ、於二六條河原一各首ヲ被ㇾ刎、則獄門ノ木ニゾ被ㇾ掛ケル、

〔撰述格例初篇二ノ九十二〕寛政四子年六月
戶田采女正殿御差圖　　町奉行　小田切土佐守懸
一田安小性當見新次郎中間六助所々御門之銅物盜取候一件、
　田安小性頭取見習當見新次郎中間　六助
　同家來中小性　荒井金藏
　同中間　與助
右之者共儀、困窮ニ付、與風惡心發り、六助發言にて、外兩人も致二同意一、六助金藏申合、田安御門外三ヶ所御門、幷御橋銅物、其外武士方門銅物盜取候節者、金藏儀、人見致し罷在、六助與助申合、半藏御門銅物盜取候節、與助儀人見致し罷在、又は六助壹人にて、牛込御門御橋銅物盜取、右追々に盜取

候銅物品々賣拂代金錢六助は壹歩と三百文金藏は貳朱と三百文餘與助は八百文配分致し酒食雜用に遣候始末御場所柄をも不恐致方別而不屆至極に付三人共引廻し之上獄門

右御仕置附

右寶曆九卯年十一月土屋越前守伺之上御仕置申付候神田關口町吉左衞門店大工七兵衞弟子勘四郎儀同所永留町武右衞門店大工權右衞門弟子甚九郎申合去々丑年四月十七日夜御作事方定小屋にて檜木五本同木切七ッ盗取候由候得ども御作事方にては檜木紛失之儀無之由に候上者此もの甚九郎兩人共親方之もの小普請方定小屋懸りに付主人之難儀を察兩人申合御作事方定小屋にて盗候段被掛申聞候儀に可有之旨數度嚴敷遂吟味候處御作事小屋にて盜取候儀無相違旨申之御場所柄をも不恐不屆至極に付町中引廻し之上於淺草獄門申付候例に見合右同樣三人共引廻之上獄門

〔一話一言三十五〕南市令罪案抄

文化六巳年

大岡久之丞御代官所攝州西成郡曾根崎村
播磨屋次兵衞借家住吉屋もさ代判
南豐事
永助
巳四十九歲

右之もの儀兼て身分之世話致し遣候秀弘より講釋之手續にも致し候樣差越候書面は近來異國人渡來之異說を認有之講釋等には致がたく候得共珍說に付讀本に綴候はゞ品に寄俵屋五兵衞方にて貸本に可致旨申聞候迚利欲に泥み兼て承りおよび候風說又は住所不知ものより借受寫取候書面へ作意を加へ秀弘より差越候書面之趣をも實事と聞候樣增補致し剩至て恐多儀又は重き御役人之名前を顯し別而右之内には無跡形儀を以對公儀恐入候儀共實事之樣書顯し合卷拾冊に綴立北海異談と表題を記五兵衞へ賣渡其上大坂町奉行吟味之節右體讀本

に綴候儀は押隠し、秀弘より差越候書本之儀、五兵衛へ賣渡候旨申僞候始末、不恐公儀仕方、不屆至極に付、引廻し之上獄門、

〔御仕置例類集一ノ二十九〕文政三辰年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一武州清戸下宿當山修驗常福院女房まつ密通之上、夫逢殺害候を押隠し候一件、

大岡源右衛門御代官所武州多摩郡清戸下宿當山修驗常福院女房　まつ

右之もの義、夫常福院法類之由ニ而罷越候道仙と致密通、同人儀、常福院を可及殺害由申聞候節は、差留同意不致候共、同人を道仙打殺候砌、右始末不押隠候而ハ倶々重キ御仕置難遁由道仙申含候迚、常福院頓死致し候趣ニ申僞、葬式等執行其後も尙道仙と密通致居候始末、不屆至極ニ付、引廻之上獄門、

此儀、吟味書之趣ニ而ハ、道仙と致密通居、同人義、甲州邊江可逃去旨度々申勸候得共、同意不致打過候内、竊ニ夫常福院を可及殺害由道仙申聞、驚入差留候處、相止候心底ニ相成、安心致居り候内、同人儀、棒を以、常福院を打殺候物音ニ而目覺、打驚致介抱候得共、卽時ニ息絶、右始末、他江洩候而は、倶々重キ御仕置難遁間、頓死之趣可申成旨道仙申含候に隨、右之趣ニ申僞、死骸取片付候者ニ而、致密夫、實之夫を殺候女之御定ニ見合、品輕候間、猶先例相糺候處、寬政十午年評議ニ御下被成候堺奉行相伺候泉州磯上村年寄仁右衛門御仕置之儀評議之趣、追々申上候處、同人義、淨心女房けんと致密通候上、風聞有之、夫淨心憤候由及承、淨心夫婦、幷きんを呼寄、覺無之義を申掛候由申爭、且又けん淨心を殺候ニ、最初ゟ馴合候事とハ不相聞候得共、淨心首縊候由、けんゟ乍承、任賴、內證ニ而取片付させ候始末、馴合ニも相當、不屆ニ付、獄門と御差圖相濟候例有之、密夫道仙ニ同意は不致候共、夫常福院を打殺候後も、猶道仙と致密通候ものニ付、爲見懲

ニも御座候間、御仕置附ニ、主水正申上候例をも見合、伺之通引廻之上獄門、
朱書
評議之通濟

僧徒處刑

〔御仕置例類集三ノ十四〕天明八申年九月
牧野備後守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛
一武州品川宿ニ而流言いたし候無宿知龍一件
伊奈攝津守支配所武州橘樹郡市場村眞言宗金剛寺　圓淨
右之もの儀、二子塚村寶生寺住職之節、同村元吉女房とくと密通いたし候上、とくを〆殺、椽之下之穴江隱し置、右風聞有之候故、欠落いたし、右始末は押隱し、金剛寺ニ住職いたし罷在候始末、重重不屆至極ニ付、引廻之上獄門、
右御仕置附
右御定書ニ、密夫之僧、寺持所化僧之無差別獄門、同宿體之僧、人を殺、或疵付候科、俗人ニ替リ無之、但寺持ハ一等重く可相伺旨有之、右兩樣之御定を見合、引廻之上獄門、

婦人處刑

〔的例黃紙之寫〕獄門
安永六酉七月佐渡守殿御下知　手限　太田播磨守掛
一酒井左衞門尉御預所役人申聞候、羽州木川村七左衞門女房かねを同國門田村嘉兵衞女房きん及殺害候吟味一件、
酒井左衞門尉御預所羽州田川郡門田村百姓嘉兵衞女房　きん
此きん儀、盜可致と七左衞門方江罷越、同人女房江口論仕懸ケ、鎌ニ而切付、倒候を〆殺候段、不屆至極ニ付、引廻之上獄門可申付哉、
但懷妊ニ而罷在候間、出産後、御仕置申渡候樣可仕候哉、

右御仕置附

右盗可致と存罷越、人を殺候ものニ御座候、人を殺、盗致候もの、引廻之上獄門之御定ニ准じ、引廻之上獄門と御仕置付仕候、然ル處きん者、懐妊九月ニ而、最早人體ニ相成候間、右懐妊之內、御仕置申付候而ハ、助命可仕其子迄、助命不仕候間、出産後御仕置可申渡哉と申上候、

磔 倒磔 水磔〔併入〕 牛割

磔ハ、徳川氏ノ時ニハ、大抵淺草小塚原ト、品川鈴ケ森トニ於テ之ヲ行ヒ、又犯罪地ニ於テモ之ヲ行フコトアリ、其法ハ、罪人刑場ニ至レバ、非人數人ニテ馬上ヨリ下シ、直ニ罪木ノ上ニ仰臥セシメテ、手足ヲ結ヒ付ケ、罪人ノ衣服ヲ左右ノ脇ヨリ腰間ニ至ルマデ裂キ破リテ之ヲ左右ヨリ胸間ニ卷キテ、イボ結ビニ爲スコト三ケ所、胴繩、襷繩ヲ掛ケテ罪木ニ縛シ、手傳非人數人ニテ罪木ヲ起シテ地上ニ建ツ、撿使乃チ同心ニ命ジテ罪人ノ名籍ヲ撿査シ、彈左衞門ノ手代ニ指揮ス、彈左衞門卽チ突手非人ニ指揮スレバ、非人數人、槍ヲ執リテ左右ニ分レ、其中ノ一人大ニ叫ビ、槍鋒ヲ罪人ノ面前ニ突キ出ス、之ヲ見セ槍ト云フ、其槍ヲ引キ了テ右側ノ一人、罪人ノ脇腹ヨリ肩ヲ貫キ、其鋒ノ出ヅルコト尺餘ニ及ビ、其槍ヲ捻リテ引拔キ、其後ハ左右ヨリ代ル代ル突キテ、二十度ヨリ三十度ニ至リ、然ル後ニ止槍トテ、左右ヨリ刺スト云フ、此刑ニモ、其罪ノ重キハ、晒并ニ鋸挽及ビ引廻等ノ屬刑アリ、

倒磔、牛割等ハ中編ニ言ヘルト大差ナシ、

磔方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一磔　從前々之例

於淺草品川に磔に申付、在方ハ惡事いたし候所江差遣候義も有之、尤科書之捨札建之、三日之內、非人番附置、

但引廻し、又ハ科により不及引廻に、欠所右同斷、〇田畑、家屋敷、家財共欠所、

〔刑罪書〕磔御仕置仕法

一御仕置ニ相成候囚人、場所江引來候得者場所之內江引込、下働非人人足六人ニて、馬より下シ、

罪木之上江乗せ置、足首を横木江結付、其上兩人ヅヽ、左右江廻り、高腕をも腰木江結付候、着類ヲ左之之脇之下之所ヲ、腰之程迄切破り、胸板之所江、左右より巻き、三所程縄にていぼ結ニ仕、其上たすき縄を懸、胴縄と申、腰之所ニて縄二重にて、屹と結付候上ニて、手傳人足、共ニ拾人餘ニて罪木を起し、罪木之根ヲ、穴之内江三尺餘埋込み、土にて随分と堅メ候上ニて、御撿使様江御伺申上、下働非人、鑓を持、左右へ分れ候内、壹人囚人之面より貳尺程向之方江見せ鎗と申候て、聲を掛、空鑓ニ突出し候と、殘り壹人脇腹より肩先江、鑓穂先壹尺余突出し、一ッ捻り候上、鑓を引拔、其後は左右より代ル〳〵突申候、鑓數は大數三拾筋程突申候上にて、御撿使様江、御伺申上、御下知有之候上、囚人之咽喉肮ヲ、左右より止メ鑓仕候儀ニ御座候、

〔享保由緒書上〕長吏彈左衛門由緒書

覺

一御仕置者御役は、磔、火罪、獄門、鋸挽、文字彫、耳鼻割、切支丹釣し問等に御座候、六拾五年以前、石谷將監様、神尾備前守様御代、武州鴻巣村江磔三人被遣候ニ付、御評定所ニ而被仰付候、御奉書被下置候御撿使共、私先祖江被爲仰付候間、御傳馬申請、長道具爲持相勤申候、此外在々支配之内、代々相廻り改候節も、長道具爲持相廻り申候、

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

従前々之例
延享元年極

一主人親、重き悪事有之由偽を申懸、訴人に出候もの、　磔

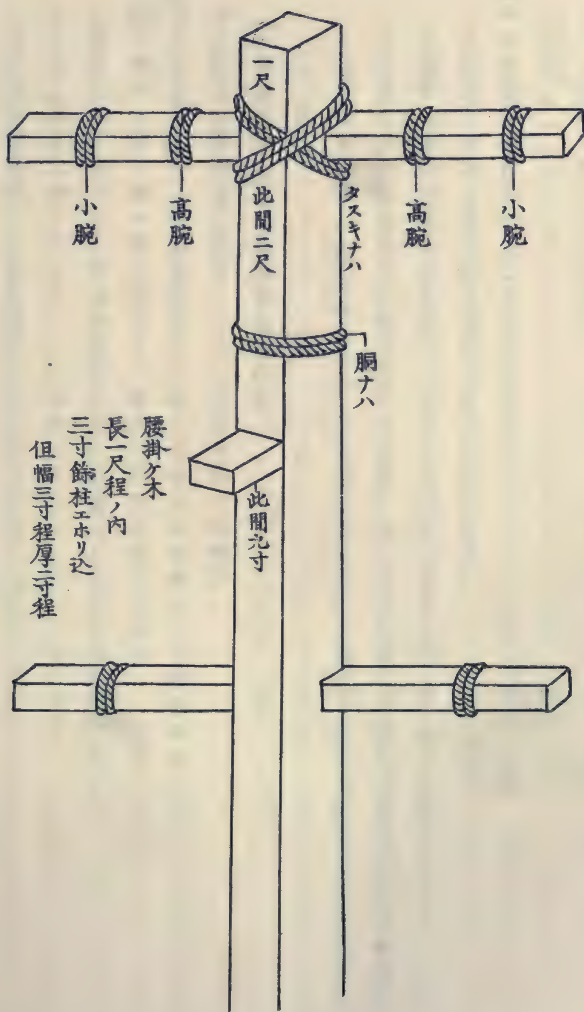
〔御定書百箇條〕人殺并疵付御仕置之事

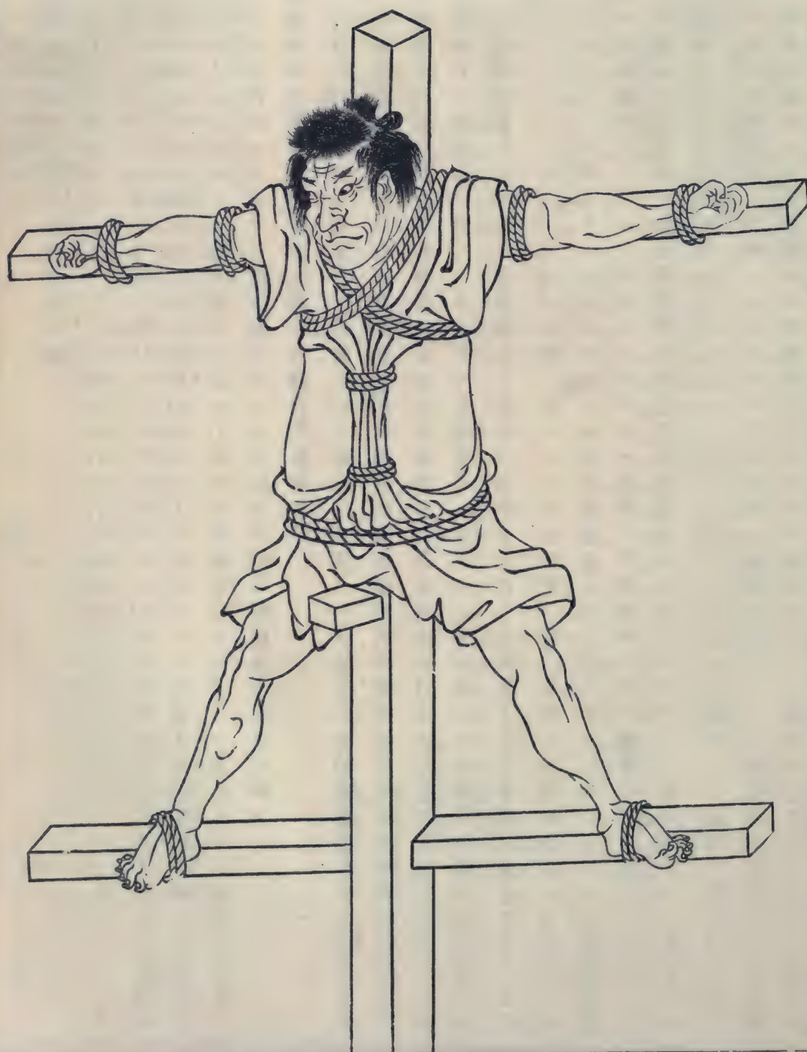
従前々之例

一親殺　引廻之上磔

一同爲手負候者并打擲いたし候者　磔

〔刑罪大秘録〕磔柱圖


一尺
小腕
高腕
此間二尺
タスキナハ
高腕
小腕
胴ナハ
腰掛ケ木
長一尺程ノ内
三寸餘柱エホリ込
但幅三寸程厚サ二寸程
此間九寸



磔圖

磔例

一師匠を殺候もの〈從二前々一之例〉　磔

〔慶長見聞集七〕關八州盜人狩の事

見しは、昔關東に盜人多く有て、諸國に横行し、人の財產をうばひとり、民をなやまし、旅人のいたやうをはぎとる、かれを在々所々にてとらへ、首をきり、はたもの、火あぶりになし給へども、つきず、然る處に、下總の國向崎といふ在所のかたはらに、甚内といふ大盜人有しが、〈〇中略〉御奉行衆聞召、とかくにきやつわ大盜人、諸人のみせしめとて、向崎をとらへ、首につなさし、馬にのせ、はたをささせ、江戸町を引めぐり、淺草原にはりつけにかけ給ふ事、慶長十八丑の年なり、

〔油井根元記〕鈴森御成罰之事附忠彌辭世落書之事

八月〈〇慶安四年〉十日ニ、關東ニモ刑罰ヲ行ル、鈴森ハ寸地モナク、哀ナリシ事共也、柴原又左衞門、平味次郎左衞門、櫻井彥兵衞、柴原太左衞門、廓然坊、岡彌右衞門、久兵衞、彌五兵衞、權十郎、加藤市左衞門、倅龜之助、辰之助、岡野彌兵衞、材木屋又五郎、岡村次左衞門、櫻井三太夫、三七猪右衞門、忠彌ガ母、同妻、何レモ品川表ニ引スヘタリ、中ニ忠彌妻、母ニ申ケルハ、皆々罪フカク候、只念佛ニ如ク事ヤ候ハン、極重惡人无他方便唯稱彌陀ト聞時ハ、我等ガ念佛モ念佛也トテ、十遍計ニ及時、左右ノ鎗肝ニコタヘテヤ有ケン、引取タル體ノ見ヘケリ、市左衞門ガ倅二人、兄十五歲、弟五歲ニ成ケル、父ガ方ヲ見ヤリテ、極樂トヤラヘ參ル由、ツレモ大勢也、道ニ迷フ事モ有ルマジト云シカバ、貴賤群集ノ見物、袖ヲヌラサヌハナカリケリ、カヽル惡事ハ有間敷事ナガラ、金銀財寶ニ闇マサレ斯耻ヲサラシケリ、其外與惣右衞門、權十郎、兄武兵衞、弟吉十郎、彌五兵衞養子大藏、忠彌下人八藏、是等ハ斬罪ニ行ハル、此後四十餘人、追日淺草ノ露トゾ消ニケル、然ルニ、丸橋ハ人體他ニ越、年モ未四十ニ越ズ、惣髮ヲ好ミ、朱鞘ノ大小ヲスキケリ、今度ハ最期ノ門出ナレバ、衣類等ニ付是ヲヱラビ、隨分美ヲ盡シタリ、此間樣々ノ拷問ニ逢トイヘドモ、其痛モ見ヘズ、品川ニ向、ツキ〳〵ヘ一禮ヲ伸、

其後ハ物ヲモイワデ居タリシガ、辭世トヲボシクシテ、雲水ノ行衞ト云言葉ノ下ヨリ、血煙ヲ立テ、見ヘケル、見物ノ諸人、アハヤ云ツルハト云テ、其後雲水ノ下ノ句ヲ、色々付テ流布シケリ、

雲水ノ行衞モ西ノ山ナレバタノム甲斐アリ道シルベセヨ〇又見ニ翁草

〔幕府時代屆申渡抄錄〕平井權八御仕置一件

一延寶七未年十一月三日、町奉行島田出雲守掛、引廻し之上、於品川磔御仕置相成候科書寫、

此平井權八と申もの、宿次の證文をたばかり、おいはぎの本人、其上てちやうをはづし、かけおち仕候に付、如此おこなふもの也、

平井權八

此もの義、追はぎの本人、其上宿次の證文謀判、剩手鎖を外、欠落仕候に付、如斯行ふもの也、

撿使與力

安藤小右衞門

備田作兵衞

双方同心

六人

〔的例黃紙之寫〕磔

安永八亥年十一月右京大夫殿御下知

手限　桑原伊豫守掛り

一加納遠江守相渡候、御徒頭神尾伊兵衞申上候、知行武州東別府村百姓金左衞門、親江手疵爲負一件、

神尾伊兵衞知行武州幡羅郡東別府村　百姓　金左衞門

此金左衞門儀、酒狂之山者雖立、親芳窓と口論之上、脇差を拔、手疵爲負候段、不屆至極ニ付、御定之通磔可被仰付哉、

〔御定書例書〕懷胎女磔に不被行事
寬保二戌年十二月御仕置の例　駿州竹原村七右衞門妹　なつ
此なつ儀、前方同國中土狩村伴七方勤居候節、伴七悴七郞兵衞と密通の上、懷胎いたし候　其後暇被出候以後、懷胎の儀、七郞兵衞可申聞と存詰、伴七方へ參、同人甥仁平次へ右の趣咄候得共、壹人相果候はゞ犬死に候間、七郞兵衞を一太刀恨、相果候樣、仁平次申敎に任せ、七郞兵衞へ疵付候儀、元主人の儀に御座候處、重々不屆に付、引廻の上、其所ニおいて磔に可申付哉と相伺、
御差圖
重罪の者に候得共、懷胎の事に候間、其所ニおいて獄門、
寬政二戌年四月五日三奉行への御書付
懷胎の女、死罪御仕置申付候儀、只今迄の例區々に候、死刑に相成候ものゝ子にても、依父母の科に、死刑には不及候、懷胎の女を殺候ては、胎內の子、科なくして命を絕に當り候間、以來出產後、死罪に可被申付候、
右之通被仰出、出產後死刑に申付候上は、磔に當候女も、出產後本罪磔たるべき事、
是は寬政八辰年正月伺の上、同四月廿九日伺の通御差圖相濟認入、
〔御仕置例類集一ノ一〕文政元寅年御渡
町奉行永田備後守伺
一緣組願無之御家人之妻、御仕置引廻之儀ニ付評議、
當月九日御渡被成候、永田備後守相伺候、西丸切手御門番同心加嶋平吉、變死いたし候一件之內、右平吉妻之由申立候、ゑん儀、御家人之妻と心得候もの之儀ニ付、引廻之儀、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀、ゑんは勿論、加嶋平吉親類共も、一同ゑんヲ平吉妻と心得罷在、平吉ゟ緣組願は不致候得共、事實は妻に付、右體之もの引廻し可附程之惡事いたし候先例相糺候處、相當之例相見不申、享和元酉年評議に御下ゲ被成候、根岸肥前守町奉行勤役之節相伺候、御數寄屋坊主齋藤良安儀、養父を及殺害候ものニ候處、御家人之故を以、斬罪と相伺、一座評議一決不仕、引廻し之上礫、御家人之故を以不及引廻し礫と、兩端に評議之趣申上、礫と御差圖有之候例に見合候得ば、今般之ゑんも、不及引廻段勿論之儀ニ御座候得共、良安は全之御家人ニ有之、ゑんは平吉と之間柄、夫婦之事情に相當り、夫を殺候、不屆之趣意は難通候得ば、名目ニおゐて妻とは難唱儀ニ付、御家人御仕置之例ニ不拘、永田備後守相伺候儀ニて、寛政八辰年評議に御下ゲ被成候、小田切土佐守町奉行勤役之節相伺候、百人組渡邊平十郎組同心竹内七右衞門甥にて、出奔いたし候竹内政右衞門儀、伯父七右衞門方ニ罷在、酒を好み、困窮に相成、風と欲心差發、錫ニ而贋南鐐銀、追々七拾片程拵、所々商人家ニ而夜分込合候紛、贋銀を以調物いたし、釣錢共に凡金八兩程請取、雜用に遣捨、其上致出奔候段、不屆至極ニ付、獄門と相伺、評議之上、伯父竹内七右衞門厄介に成罷在候迄ニ而、浪人之身分ニ付、贋金銀拵候もの御定之通、引廻し之上礫と申上、其通相濟候例ニ有之、ゑん儀、緣組願無之ものに候上は、厄介人も同樣之身分に可有之哉、全く御家人同樣に相成候も不容易儀ニ付、再應勘辨評議仕候處、罪狀と違ひ、身分之差別は、專緣組願有無ニ可拘とは乍申、平吉を殺候科、夫を殺し候ニ相當り候ニ付而は、妻之唱無之ものニ候迚、引廻附候茂如何ニ付、前書良安ニ見合、不及引廻方可然哉ニ奉存候、

寅十二月〇中略

卯五月

朱書 評議之通濟

犯罪地行刑

〔御定書百箇條〕關所を除、山越致候者、幷關所を忍通候もの御仕置之事、

從二前々一之例
一關所難レ通類、山越等致候者、　於二其所一磔

但男に被二誘引一山越致候女は奴

一同
一同致二案内一候者　於二其所一磔

〔御仕置裁許帳九〕金銀錢之爲似仕者之類

万治元年戌閏十二月廿四日

五郎左衞門　是ハ水戸御領分青柳村之者

貳人

權三郎　是ハ右之五郎左衞門悴

右之者、似セ錢仕候同類之由、訴人有レ之旨、中納言殿ゟ捕來ルニ付籠舍、

右兩人之者、五郎左衞門儀ハ、亥七月廿五日所江遣磔、權三郎儀ハ、亥十月朔日、堀丹後守方江渡り死罪、

〔新張紙留〕書面長井五右衞門申上候趣、寛政元酉年九月被二仰渡一候通、都而五右衞門方ニ而取計、御代官手代ハ、牢屋敷江罷出、囚人請取、持送人足、幷於二場所一拵候、罪木番小屋ハ、御代官ニ而取計候樣被二仰渡一奉二承知一候、

申十月六日　曾我豐後守

長井五右衞門

武州江古田村孫右衞門作地内ニ罷在候、非人勝五郎、御代官江相渡候儀申上候書付、

朱書
此一件、文政七申閏八月、江古田村評議留ニ委しく有レ之、

代々木非人頭久兵衞手下　武州多摩郡江古田村

百姓孫右衞門作地内ニ罷在候非人小屋頭　勝五郎

右之もの、養祖母を〆殺、入口際江持出、着居候衣類之裾を火鉢之中江入、火移候樣入置、燒死之體

ニいたし成、貯置候金錢取出候ニ付、引廻之上、於二其所一磔可二申付一旨、御下知御座候間、町奉行江相渡、右之方ゟ支配御代官中村八大夫江相渡、御仕置申付候間、御勘定奉行江被二仰渡一御座候樣仕度、此段申上候、以上、

申十月　　　長井五右衞門

武州江古田村非人小屋頭勝五郎、於二在方一磔御仕置之節、撿使之儀ニ付、申上候書付、

書面伺之通、於二在方一御仕置申付候節、撿使之儀、掛長井五右衞門方ニ而相心得、取計候樣可レ及二挨拶一旨被二仰渡、奉二承知一候、

申十月十一日　　曾我豐後守

當月六日、承付候樣被二仰渡、御渡被レ成候、長井五右衞門申上候、武州江古田村非人小屋頭勝五郎儀、於二在方一磔御仕置之儀、牢屋敷ニ而、町奉行組之もの江引渡、同人ゟ御代官手代江引渡候由ニ付、五右衞門方ニ而ハ、爲二見屆一右場所江組同心兩人差遣候心得之由、且文化六巳年、根岸肥前守町奉行勤役之節、大坂北堀江御池通二丁目久兵衞外壹人、於二在方一御仕置申付候節之振合、筒井伊賀守江五右衞門ゟ問合候處、私共先役江引渡候ニ付、撿使ハ不二差遣一、御仕置爲二見屆一組之もの差遣候段、伊賀守ゟ及二挨拶一候付、右文化六巳年之取計心得方等致二承知一度段、五右衞門ゟ懸合申越候、依レ之取調候處、文化六巳年之儀ハ、肥前守申上候書付御下ヶ有レ之、其節之支配御代官伊奈助右衞門方江引渡、撿使等之儀も、同人方ニ而取計候趣ニ御座候得共、右ハ町奉行掛之儀ニ而、火附盜賊改掛之儀ハ、寛政元酉年、長谷川平藏火附盜賊改勤役之節、無宿眞刀德次郎義、武州於二大宮宿一ニ御仕置ニ相成候後、先役共ゟ伺濟之趣を以、今般五右衞門申上候書面ニも、同樣承付仕申立候通、手代牢屋敷江差出、囚人受取、持送人足、幷於二場所一拵候、罪木番小屋之儀ハ、御代官ニ而取計、尤五右衞門組同心兩人爲二見屆一場所江差遣候旨申聞候間、撿使之儀も、同人方ニ被二取計一可レ然筋ニ可レ有二御座一、御代官手

代ニ而、撿使相勤候樣ニ而ハ、一體之伺濟ニも振候哉ニ付、旁撿使之儀、五右衛門方ニ而相心得可ㇾ
取計旨可ㇾ及ニ挨拶一と奉ㇾ存候、依ㇾ之此段申上候、

申十月

〔科條類典下五〕親を可ㇾ殺所存ニて致ニ打擲一候者

元文二年巳十一月、御仕置之儀、御預所牧野民部少輔方江申渡、

一越後國古志郡種苧原村半左衛門、父兄を致ニ打擲一候、御仕置一件、

半左衛門儀、兼而不ㇾ宜者に付、致ニ勘當一度旨、親半兵衛、庄屋と同道にて、御領地役所江願書出候旨、半左衛門承ㇾ之、親宅江踏込、及ニ狼藉一剩致ニ勘當一候譯承屆、親半兵衛を打殺、自分も相果可ㇾ申旨申候由、半兵衛を致ニ打擲一に付、兄德左衛門飛掛り組付候得共、強勢成者にて、父兄共に組伏候處、德左衛門忰手太郎、荷繩を半左衛門首江懸、引起候に付、德左衛門、庄屋方江參可ㇾ知旨手太郎に申付爲ㇾ知候故、早速庄屋組頭始村中之者翔集り捕置、御預地役所江訴ㇾ之、兼て不行跡至極之者にて、庄屋組頭申聞を少も不ㇾ用、他所之者に對し、度々理不盡之仕形有ㇾ之、役人も及ニ迷惑一旨、吟味之上申上、御仕置左之通申付、

於ニ其所一磔

越後國古志郡種苧原村半兵衛次男　半左衛門

川崎平右衛門

〔記事條例十一〕磔御仕置者之儀ニ付取計方伺書

松平右近將監殿掛、無宿加兵衛事、五兵衛、越後國高田寺町妙照寺祖海儀、上州碓氷、越後國關川、兩御關所ヲ除、女を連致ニ山越一候ニ付、此度碓氷御關所於ニ近邊一磔被ニ仰付一候間、五兵衛は鹽詰之死骸、祖海一同私方江受取、右御仕置可ㇾ申付旨被ニ仰渡一右近將監殿ゟも心得方御達御座候ニ付、取計方之儀、左ニ奉ㇾ伺候、

死後鹽詰之上磔

一御仕置場所之儀は、松平右近將監殿より、領主板倉百助家來案内可致旨被仰渡候由、御達御座候間、爲撿使差遣候手代二人之內、壹人は二三日以前差立遣、領主役人江及掛合、場所見分、仕置幷御仕置當日之手都合、夫々爲取計、殘壹人は、囚人受取直に出立、道中附添罷越、御仕置行ひ候節は、兩人立合撿使仕、相濟候はゞ卽日場所爲引拂、右御仕置相濟候御屆之儀は、歸着之上差出候樣可仕候哉、

書面伺之通可被相心得候

〔御定書百箇條〕重科人死骸鹽詰之事

享保二年極
一主殺

同
一親殺

寛保二年極
一關所破

同
一重謀計

享保六年極
右之分、死骸鹽詰之上御仕置、此外ハ不及鹽詰ニ事、

〔記事條例十一〕磔御仕置被仰付候もの、御牢屋敷にて病死いたし、死骸鹽詰に相成、同日溜江御預に相成、御仕置ニ出候始末就御尋、奉申上候、

一前日歸牢被仰付、引廻し有之候者は、存命之通り當にて、瓶之儘御仕置場所江持送り、存命之通取扱申候、尤鎗數拾本程突申候、

一日本橋より三日晒之間、穴晒被仰付候節は、瓶之儘、右穴江入、首計爲出晒置、三日目歸牢被仰付、同日御仕置通手當いたし、罪木江手足を結付、左右より鎗數拾本程突、御撿使樣江御伺之上、止メ指、右死體二夜三日晒置、御掛御番所樣江御伺之上、番人共引拂申候、以上、

但、晒之節は、瓶より首を爲出差置申候、

右之趣就御尋乍恐以書付奉申上候、以上、

丑九月十三日　　淺草　彈左衞門代　文八印

〔的例黄紙之寫〕磔

安永五申年五月右京大夫殿御下知

一甲州眞木村枝鄉間明野百姓文藏、親休心を打殺、其身も自滅仕候、吟味一件、　手限　太田播磨守掛リ

久保平三郎御代官所甲州都留郡眞木村枝鄉間明野

舌を喰自滅仕候　　百姓　文藏

此文藏儀、親休心を手杵ニ而打殺候段、不屆至極ニ御座候處、自滅仕候間、御定之通、死骸鹽詰之上、磔可申付哉、

〔公案比事三十七〕天明五巳年三月廿五日町奉行手限申渡　　曲淵甲斐守掛

牧野越中守殿御下知

横山町壹丁目清兵衞店藤兵衞召仕　文藏

右之者儀、主人妻きそ江執心ニ付、不義申懸候得共、有無之答も不致候間、猶又翌日不義可申懸ときそを呼懸候節も、きそ二階より逃下り、迚も得心不致樣子ニ付、心外ニ相成、其上右始末藤兵衞江可申聞體故、左候ては身分難相立存、きそを致殺害憤を晴逃去可申と、庖丁を以きそ顔江貳ケ所疵付候段、不屆至極ニ付、存命ニ候得バ、晒之上磔可申付處、令病死ニ付、鹽詰之死骸、於淺草磔、

〔御仕置例類集二ノ二十九〕享和三亥年御渡

御勘定奉行松平兵庫頭伺

一甲州八澤村用左衞門、繼母そめを及殺害候一件、

川崎平右衞門御代官所甲州都留郡八澤村　百姓　用左衞門

右之もの儀、居宅臺所口より盜賊逃去候樣ニ相見候迚、眞木と心得、鉈を以打殺候ハ繼母そめニ

而、全亂心いたし候由申之候得共、其後本心ニ而、不揃之儀も無之上ハ、亂心と之申分難立、繼母を及殺害候段、重々不屆至極ニ付、鹽詰之死骸引廻之上礫、

此儀御定書ニ、親殺引廻之上礫、且亂心ニ而人殺之事と有之ヶ條之內、亂心ニ而人を殺候とも可爲下手人歟、然共亂心之證據慥ニ有之上、被殺候もの之主人幷親類等、下手人御免之願申ニおゐては、遂詮議可相伺事、但主殺親殺たりといふとも、亂氣無紛におゐては死罪、自滅いたし候はゝ、死骸取捨ニ可申付事と有之、此もの繼母そめ弟幷娘、其外親類、組合、村役人等、朱書ニ申上候趣ニ而ハ、亂心いたし候儀ニも可有之哉之段、申口符合いたし候次第ハ、右但書ニ引當可然哉に候得共、臺所口ゟ逃候ものを追駈、村內新左衞門宅江逃入候を附入及打擲漸打臥候と覺候節、同人母りよ、親殺と申聲ニ而、氣分慥ニ成候と吟味書ニ有之、右之通、始終之儀辨罷在、勿論逃去候もの之儀ハ不相分、そめハ其以前より新左衞門方江罷越居候處、逃入候ものと心得、一旦取昇、そめを打殺候迄之違ニ而、即時ニ本心ニ成、其以前不揃之儀も無之上ハ、亂心とハ難申、母と稱候ものを殺候ニ至リ候而ハ、差別有御座間敷、いづれ重科人難遁ものニ御座候間、親殺幷重科人死骸鹽詰之事と有之、兩樣之御定ニ見合、伺之通鹽詰之死骸引廻之上礫、

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政三辰年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一岡崎町忠兵衞店文藏召仕万藏、主人之妹を及殺害候一件、

岡崎町忠兵衞店文藏召仕　万藏

右之もの儀、當主人文藏妹ニ候とも、親病死文藏代より被召仕候身分ニ而、同人娘きんを及殺害、此ものも自殺いたし、得と子細ハ不相分候得共、兼而きん江不義申懸候儀も有之、同人を及殺害

候段、重々不屆至極ニ付、鹽詰之死骸晒之上磔、

此儀きんを及殺害、其身も自害致し候ゆへ、得と子細ハ難相分候得共、文藏幷いね吟味書之趣ニ而ハ、きん儀、與之二階ニ而、召仕いねに灸治爲致居候處、同人を文藏母ます呼候旨、此もの申僞、表二階江遣し候跡ニ而、きんを殺害および候始末、素ゟ亂心之所業とハ相聞不申、主人を殺し、直ニ相果、子細不相分候ものニ候而も、亂心ニ無之分ハ死骸御仕置申付候段、度々之先例有之、且きん儀、先文藏之娘ニ而、當文藏之ためニハ妹ニ有之候間、主殺之御定ゟ輕、晒之上磔と榊原主計頭相伺候儀ニ御座候得共、得と勘辨評議仕候處、此ものハ、先文藏存生中、年季奉公ニ被抱、引續當文藏方ニ相勤居候ものにて、古主之趣意ニハ無之、きんハ全く主人之娘ニ付、寶暦四戌年之御書付ニ、向後主人妻、或ハ主人忰江爲手負候もの有之候はゞ、主人江爲手負候もの御仕置之御定同樣可申付と有之候ニ准じ、今般之儀ハ、主殺之御定ニ引當、鹽詰之死骸、二日晒、一日引廻し、鋸引之上磔、

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政六未年御渡

松平伯耆守伺

一備中國矢掛村安兵衛、人を殺、銀子奪取候一件、

板倉越中守領分備中國小田郡矢掛村　百姓　安兵衛

右之もの儀、同國矢掛村仁兵衛江被雇供いたし、藝州廣島江罷越、立歸候途中、食物其外之手當不宜、其上、竹原船宿大勢之中にて、面皮難立樣及惡口候を不快ニ存、同國七日市宿重助方江立寄、右體仁兵衛手當不宜心外ニ付、同人を打殺、所持之銀子可奪取旨申聞候處、重助も仁兵衛江鑄懸錢滞有之、度々催促致し候得共不相拂、平日仁兵衛仕方不快由に而、重助方ニ居合候無宿小太郎一

同申合、重助宅を出立、同所河原ニ而、仁兵衛追付、此もの頭取、三人一同挙ニ而仁兵衛を打倒候上、此もの小太郎兩人ニ而、所持之手拭を以〆殺、懐中之丁銀九枚奪取、配分いたし候始末、不屆至極ニ付、死骸鹽詰之上磔、

此儀松平伯耆守より先達而相談申聞候節、御仕置附にも申上候通、安兵衛儀は仁兵衛老年に付、旅中介抱旁被雇供致し罷越候ものに付、雇馬士船乘車引町駕籠舁抔とは譯違ひ、主從之筋に候得共、請狀等取極候にも無之候間、主殺之御定は難引當、鹽詰之死骸磔相當之ものに可有御座哉と見込、其通伯耆守より相伺候儀に候得共、猶又再應評議仕候處、前書之通事實おゐて主從之筋は難通、請狀等不取極迄之儀に候得共、主人に等敷仁兵衛を殺候ものに有之、古主を殺候ものより只輕とも難申候間、猶先例相糺候處、寛政七卯年小田切土佐守町奉行勤役之節、伺之上御仕置申付候、靈岸島長崎町貳丁目家主平七方に、月雇ひに差置候仁兵衛儀、被雇主平七妻ゆり、幷平七弟子福松を殺害いたし候上、此ものも自害仕損じ候處、無間も相果候に付、子細は不相分候得共、兼而ゆり江不義申懸候儀も有之、主人同樣之平七妻ゆり、幷福松を殺害およひ候段、重々不屆至極に付、鹽詰之死骸晒之上磔申付候例も有之候間、古主を殺候もの之御定、幷右例に見合、鹽詰之死骸晒之上磔、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政九戌年御渡

火附盗賊改齋藤越中守伺

一遠州無宿清右衛門儀、元主人字八祖母ほのを〆殺、衣類反物金銭等奪取候一件、

遠州無宿 清右衛門

右之もの儀、奉公先欠落致し、其後非人甚藏と馴合、元主人字八祖母ほの隱宅入口、建寄有之戸を

死後不磔

明ケ、這入、金子等相尋候砌、ほの儀、目覺し候ニ付、此もの被見知居候間、可〆殺旨甚藏江申聞候處同意致し、着し居候蒲團を同人引退ケ、胸ゟ腹江掛ケ強ク踏、此ものハ咽を〆候得ハ、ほの口より血出相果候ニ付、息不吹返樣、手元ニ有之紙を口江突込置、〆り無之押入之内ニ長持錠おろし有之、寐床脇に有之鍵ニ而甚藏明ケ、衣類反物金銀等奪取、右之内衣類金子配分取、衣類ハ着いたし、切損候ニ付取捨、金子ハ不殘遣ひ捨候段、重々不屆至極ニ付、晒之上磔、

此儀寶曆四戌年、向後主人之妻、或ハ主人之忰江爲手負候もの有之候はゝ、主人江爲手負候ものの御仕置之御定同樣、晒之上磔可申付と有之御書付ニ見合、此ものハ古主之祖母を殺候ものニ付、古主を殺候もの之御仕置と差別ハ有之間敷候間、古主を殺候もの之御定ニ而伺之通晒之上磔可申付處、病死いたし候間、死骸鹽詰ニいたし置候段、追而申上候ニ付、鹽詰之死骸、晒之上磔、

〔公案比事三十七〕安永七戌年七月

太田播磨守掛

一武州上谷本村平右衛門方ニてあばれ候、無宿淸太郎一件、

松平右京大夫殿御下知　　武州上谷本村平六元養子　無宿　淸太郎

右之者儀、親平六病中、聢と看病も不致、醫師方に持參り候療治代金壹分、途中ニ而遣捨、欠落致候段、親之生死ニ不拘、所存不孝之至、既平六致病死、祖母幷親類村役人相談之上、地頭江申立、舊離帳外ニ致、平右衛門を聟養子ニ貰、妹なよに娶合相續爲致候處、平右衛門方江踏込、押而相續可致旨不法ヲ申、佛具等投散、なよをも打擲致、あばれ候始末、重々不屆至極ニ付、引廻し之上、磔可申付處、致病死候ニ付、死骸磔ニ不及、例は相見不申候得共、下賤のもの相辨候ため、上谷本村江、科書捨札爲建可申哉と申上、其通御下知濟、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從二前々一之例
一主人に爲二手負一候もの　　晒之上磔

寛保元年極
一古主を殺候もの　　晒之上磔

〔御仕置例類集二ノ二十九〕文化三寅年御渡

日光奉行伺

一日光一坊観徳坊下人金次郎、主人之隱居江疵附、盜いたし候一件、

日光一坊
観徳坊召仕
金次郎

右之もの儀、主人隱居本秀を殺害致し候存念ニハ無レ之候とも、金子可二盜取一と存、不レ聲立樣、小刀を以同人襟元江突込候處、可二起上一といたし候を取押、左之耳際より口中江突込、齒莖を割、猶又耳之後江突立候處、氣絶いたし候樣子ニ付、蒲團を懸置、納戸江立入、長持之錠前を有合候釘拔を以捻切、鼻紙袋ニ入有レ之候、金貳拾七兩貳分盜取、右之内金四兩ハ拂方、其外酒食ニ遣捨、殘貳拾三兩貳分ハ、幸七宅江隱し置候始末、重々不屆至極ニ付、晒之上磔、

此儀當主江疵爲レ負候ニハ無レ之候得とも、本秀儀、古主と申筋ニハ無レ之、全主人同樣之儀ニ付、主人江爲二手負一候もの晒之上磔、盜ニ入、刃物ニ而人ニ疵付候もの、盜物持主江取返候とも獄門之御定をも見合、重キ方江附、伺之通晒之上磔、

朱書
評議之通濟

〔御定書百箇條〕捨子之儀ニ付御仕置之事

從二前々一之例
一金子を添、捨子を貰、其子を捨候もの、　　引廻之上獄門

但切殺、〆殺候におゐて、引廻し之上磔、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寛保元年極
一古主を殺候もの　晒之上磔

同
一同爲手負候もの　引廻之上磔〇中略

從前々之例
一親殺　引廻之上磔

〔科條類典上三〕享保十年巳十月申渡　大岡越前守掛リ

護國寺門前清兵衞店　八兵衞

右之もの、當月廿三日、聖堂前堀際に、六拾歳餘之女倒居候故、近所辻番請負人方ゟ、御目付松波甚兵衞方江訴、水野壹岐守差圖にて、右請負人共召連來ニ付、召出樣子相尋候處、右行倒ものハ、護國寺門前清兵衞店八兵衞養母いぬと申ものにて候處、養子八兵衞、當月廿日晩召連參、御茶之水御堀江突落し候由申ニ付、いぬをば溜江遣し置、右八兵衞家主清兵衞、幷八兵衞店請人、同町權左衞門地借リ金兵衞、幷元大坂町長三郎召仕いぬ妹聟小兵衞呼出し、令吟味候處、八兵衞儀、右小兵衞方江參り、いぬ病死致し候由申、香奠三百文取、欠落致候由申ニ付、右三人之もの共江、八兵衞を十日切に尋出申候樣申付候處、見當候由ニ而、今日連來候ニ付、召出し令吟味候處、八兵衞申候者、其節いぬ儀、右小兵衞方江可參由申ニ付連參候迚、御堀端ニ而取外し落候由申候得共、仕形不屆ニ付、水野和泉守依差圖、町中引廻し磔、

〔玉露叢五〕慶長二十年〇元和元年閏六月廿九日、今晩古田織部正家來宗喜事、生磔ニシテ車ノ上ニ載セ、大道ヲ渡シ、其後久ク籠ニ入、是ハ今度大御所御出馬ニ於テハ、其夜島津ガ從者ト共ニ大坂ヘ一味シテ一揆ヲナシ、亦京中ヲ燒ベキ企ヲ致ス所ニ、去四月廿八日ノ御出馬延引有テ、五月五日ニ相定ル、其間ニ件ノ宗喜ガ企共露顯セシメ候テ、板倉伊賀守生捕ル、數度拷問ニ及ビ白狀ニ付

倒礫
牛割

水礫

テ、右ノ通リト云々、

○

〔切支丹宗門來朝實記〕切支丹宗門ハ、永祿十一年より天正十三年迄、十八年の間繁昌しけるが、秀吉の天下と成り、終に此宗旨を破滅し給ふ、○中略其後寛永三年の比、近江丹波などにて、六十六部のやうに出立て、鏡を見せ物をあたへなどして、此宗旨を勸め歩行、もの有り、依之又此宗旨の者多く成けり、其比京都にて、板倉伊賀守勝重、吟味を懸らる、といへども、命を捨ておもひ入たる愚人共多し、然に關東より大久保相模守、切支丹吟味役として上洛有、彼宗門の者共を悉く捕へ、俵に入れ繩にて結び、首計り出し、四條五條の河原に出し、改宗するものは助くる也と役人共申聞せよと申付らる、○中略其後改宗のものは御助被成、かやうにしても轉ばぬ者三人有、内一人は富田にて飾屋七兵衞逆はりつけ、八右衞門同罪、○中略京都にて轉ばぬ者四人、内二人ははりつけ、二人は火あぶり、泉州堺にて轉ばぬもの三人、内一人は礫、二人は牛ざき、○下略

〔南蠻寺興廢記〕寛永三年、○中略大坂ニテコロバヌ者三人、内一人ハ飾屋七兵衞逆磔、百姓八右衞門同罪、青物屋總吉ハ水責ニテ死ス、京都ニテコロバヌ者四人、内二人ハ磔罪、二人ハ火焙、泉州堺ニテコロバヌ者三人、内二人ハ磔罪、一人ハ牛割、此時宗門不殘斷絶ス、

〔南蠻寺興廢記〕南破天連曰ク、汝達纔ニ七日眞言ヲ唱ルト雖ドモ、心既ニ改テ、天帝ヲ尊敬スルガ故ニ、其精誠今世ニテ天上ニ通達シテ、天帝ノ惠ヲ得タリ、○中略縱令今世ハ火水礫罪、牛割、車割ノ苦ヲ受ルトモ、ソレヲ以テ、未來永劫ノ苦ニ替ヘ、今拜シ奉ル所ノ天上ニ至ラント思フベシ、

〔耶蘇天誅記〕下一寛永年中、吉利支丹宗門ノ男女ヲ國々ヨリ搦メ捕テ、江戸ヘ引來リ、品川表鈴ケ森ノ浪打際ヘ、活ナガラ逆サマニ釣リ置テ、潮ノ滿來ル時ハ、自ラ頭ヲ波ニ浸シテ暫時息絶ヘ、又汐ノ干去ル時ハ、自ラ甦ルガゴトクス、是佛經ニ所謂救倒懸ニ均シ、

〔武門諸説拾遺〕寛永十七年、品川ニ於テ、商人其外諸浪人共、切支丹宗門ノ族七十餘人召トリ、品川沖ニテ、サカサマニツルシテ、水磔ニカケヽル、汐ノ滿ル時ハ首ヨリ下肩ヲ越シ、汐水ニヒタシ、息モツキ得ズ苦シミ、又汐引トキハ、顏ハレテ人相替リ、此世ノ人トモ思ハレズ、八日間ニ死ニテケリ、

鋸挽方法

鋸挽

鋸挽ノ事ハ、既ニ中編ニ於テ之ヲ云ヘリ、德川氏ニ至リテハ、先ヅ罪人ヲ引廻スコト一日ノ後、方三尺、深二尺五寸ノ箱ヲ作リ、之ヲ地中ニ埋ミ、罪人ヲ其中ニ納レ、箱ノ裏ナル杭ニ繋ギ、枷ヲ其首ニ加ヘ、僅ニ其首ノミヲ露シテ、衆ニ示ス、而シテ罪人ノ兩肩ニ刀ニテ傷ケ、其血ヲ竹鋸ニ塗リテ之ヲ其側ニ置キ、若シ之ヲ挽カント望ム者アレバ、之ヲ聽ス、故ニ又之ヲ鋸挽晒トモ云フ、此ノ如クシテ晒スコト三日、而シテ後刑場ニ將キテ之ヲ磔セリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一鋸挽（從二前々一之例）

（享保六年極）一日引廻、兩之肩に刀目を入、竹鋸に血を附、側に立置、二日晒、挽可申と申もの有之時ハ、爲挽候事

但田畑、家屋敷、家財共欠所、（從二前々一之例）

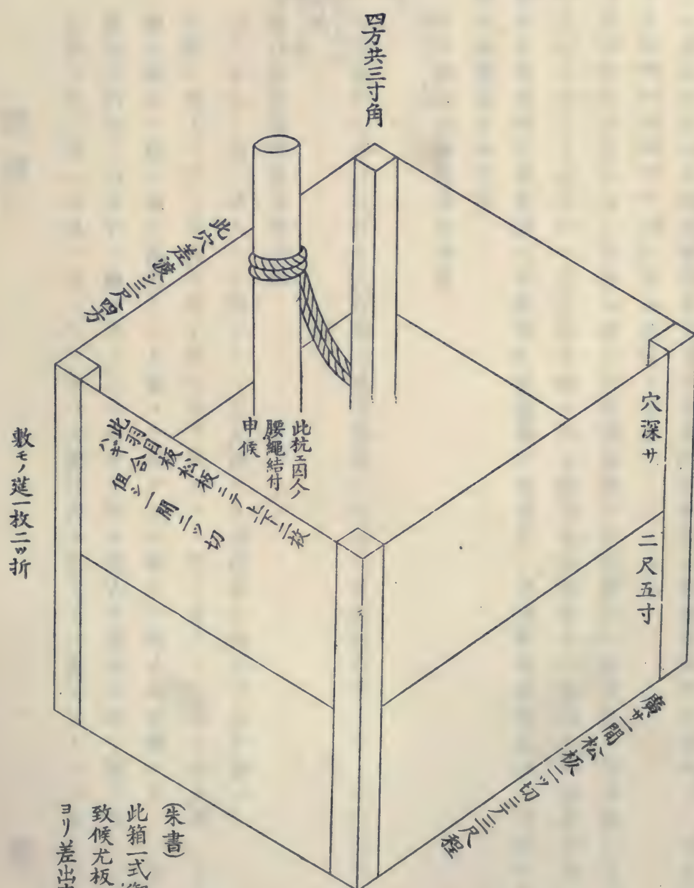
〔刑罪大秘錄〕鋸引晒之事

一晒初日、出役與力雙方貳人、牢屋敷江罷越、囚人差出方ハ、外死刑御仕置之如く、牢内江呼込無之、平生囚人呼出之通、鞘内ニ而、青縄本縄ニ致、片鋂打差出、改番所ニ而改メ、出役與力晒之儀申渡、出役年寄同心雙方貳人、若同心四人、牢屋同心貳人差添、場所江差出、歸牢致候得バ、夜中手鎖懸ケ置、但（晒囚人在牢中は、高張提燈差出し置、）夜中鞘内ニ高張、

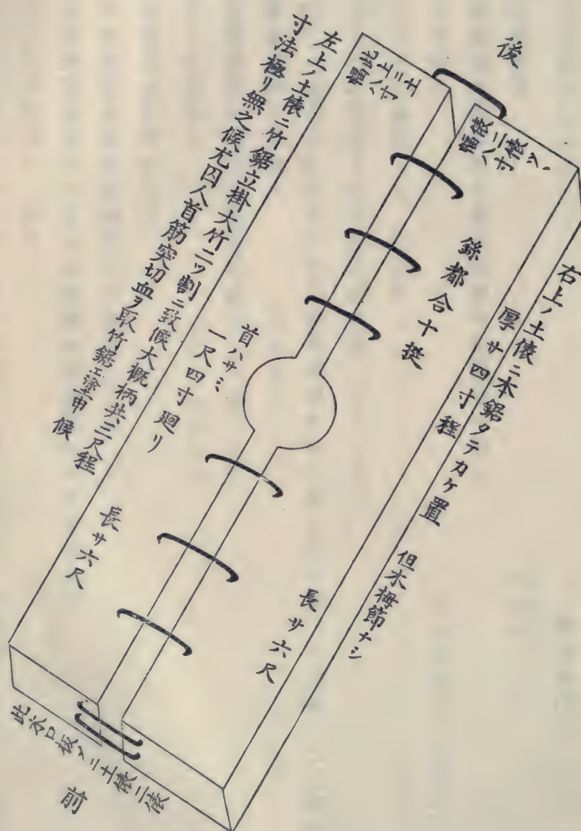
一二日目、出役同心人數同斷、朝五ツ時牢屋敷江罷越、囚人召連、場所江罷越、夕七ツ時歸牢、

一三日目、出役同斷、明六ツ時晒場江差出、四ツ時引返し、鞘内江入荒縄懸替候而、改番所江差出、名前肩書歲付入日等論役相改、撿使與力、晒之上磔之儀申渡、夫より前ケ條引廻し、幷磔御仕置之

〔刑罪書〕穴晒


四方共三寸角
此穴差渡シ三尺四方
此杭ヱ囚人ノ腰繩結付申候
此羽目板杉板ニテ上下二枚ハギ合但シ一間ニツ切
穴深サ二尺五寸
廣サ一間松板三ツ切ニテ三尺程
敷モノ莚一枚二ツ折
（朱書）此箱一式御役ニテ致候尤板ハ材木町ヨリ差出申候

（朱書）
穴晒ノ節竹鋸ニ相用候竹ハ京橋竹町ヨリ差出非人頭善七手下ノ者鋸ノ形ニ拵
四人ノ脇エ建置申候仕來ニ御座候



通別儀無之、

一一通之晒ハ、囚人青縄本縄ニ懸ケ、持籠ニ乗セ候而、牢屋敷より晒場所江召連、右本縄之儘ニ手を免し、柱江縛付、莚之上ニ差置、

一小屋懸ケ縄張等、谷之もの非人人数等ハ、穴晒陸晒同様別儀無之、

一晒場内外番人、穢多頭弾左衛門手代貳人、

一谷之もの拾貳人、内牢領貳人、

一非人頭善七手代貳人

一非人人足四拾貳人、〇貳一本作五横目六人、

一囚人を始末致候もの貳人

〔記事條例十一〕一文化五辰年十二月、此方掛加役方囚人壹人、二日晒、一日引廻し之上、鋸挽之上、於淺草礫御仕置ニ相成候もの有之、右晒日割、

十二月十四日

十八日　十九日　廿三日

一番小屋取建、其外例之通手當可致旨申渡、受書申付ル、

但穴晒之旨申渡

弾左衛門代　丹助

一札串　壹本

是は御番所江差出候様

一首挾候完料

一穴之内江入候拔

一三寸角

是は日本橋江差出候樣申付　本材木町月行事　與兵衛

一完料打候大鉐

是は塲所江差出候樣申付　鍛冶町月行事　惣兵衛

一捨札壹枚申付　四ヶ市非人　新四郎

〔刑罪書〕穴晒磔壹人分御入用

日本橋御入用
一晒番小屋　壹ヶ所　代銀八拾六匁五分

同断
一大鋸　壹枚　同八匁

同断
一完料鉐　同貳拾匁

是は定直段無御座、鐵中行燈之類、流用ニ書出申候、

一椴六尺札　壹枚　同七匁五分貳厘

但打釘添杭共

一幟　壹本　同六匁八分

一箯薪　七拾把　同拾九匁六分

但二夜分

一番小屋　壹ヶ所　同四拾三匁二分五厘

〆銀百九拾壹匁六分七厘

此金三両貳朱ト四匁壹分七厘

右之外　礫柱は御役所ニて谷大工拵申候

但右同断〇前文云、前日牢屋鋪江呼寄申付候、

一右穴晒之節、幷礫之節、彈左衛門方より差出候非人人足共、不殘御役ニて差出申候、

一蠟燭　拾貳挺　代銀壹匁八分

是者彈左衛門自分入用ニて差出申候

晒無之礫壹人分御入用

一幟　壹本　代銀六匁八分

一榜六尺札　壹枚　同七匁五分貳厘

但打釘添杭共

一番小屋　壹ヶ所　同四拾三匁貳分五厘

一篝薪　七拾把　同拾九匁六分

但二夜分

〆銀七拾七匁壹分二厘

此金壹両壹分ト貳匁壹分貳厘

右之外　礫柱者御役にて谷大工拵申候

但右同断〇前文云、前日牢屋鋪江呼寄申付候、

一蠟燭　拾貳挺　代銀壹匁八分

是者彈左衛門自分入用ニて差出申候

一右礫之節、彈左衛門方より差出候非人人足共、不殘御役ニて差出申候、

〔科條類典下五〕(元)逆罪之者行ひ樣書上之事

一逆罪之者行之品、古來は主人殺候者、二日晝夜さらし、四人其場所江埋、首桔をいたし、左右に鋸を差置、往來之もの、右鋸にて首挽候眞似爲仕候、然處慶安年中、石谷將監懸りにて、妙仙と申者、日本橋にてさらし候節、往來の者、鋸にて實に挽申候間、向後は其儀止メ、少宛襟へ疵付、其血を取、鋸に付さらし申候、其以後北條安房守勤役之時分より、襟江疵付候義も相止、鋸計側に差置申候、尤竹鋸も古來より今以差置申候、以上、

享保六年丑七月

右者丑七月十日上ル

右者御香具屋田中近江召仕權兵衛儀、近江父子を致殺害候、權兵衛御仕置之儀に付御尋有之、書上候權兵衛御仕置、左之通に有之候事、

但爲見合記置

鋸引磔　　田中近江召仕　權兵衛

右一日引廻し、二日さらし、兩之肩、刀目を入、鋸血を付、たて置可申候、引可申旨申者有之候はゞ、引せ可被申候、翌日はりつけに可被行候、

右書面之通、戸田山城守御下知有之、札文言之內江、諸人勝手次第鋸引可致との儀、認申候、

一日本橋にさらし候內、役人差出候儀無之候得共、右權兵衛御仕置以來、都てさらし候者有之時は、立合にて爲見廻同心附置候事、

〔律令纂要三〕鋸挽磔者之事

寛政二戌年十二月　　長谷川平藏

武州兒玉郡中村新里百姓勝之丞、晒之上鋸挽磔御下知相濟申候、右ニ付、晒之趣例之場所ニ而申

渡、牢屋敷ゟ出入之節牢屋同心付添候もの、拙者方ゟも組同心可差出哉、引廻し候節、當日是又御仕置之趣、例之場所ニ而爲申渡可申哉、右之通取計可申哉、御問合申候、以上、

戌十二月十四日

書面勝之丞引廻し之上鋸挽磔御下知相濟候ニ付、右之段牢屋敷例之場所ニ而、御申渡相濟候得バ、直ニ拙者方江請取可申候間、御引渡有之候樣存候、尤別紙振合之趣、出牢御證文被爲遣候儀有之候、右請取相濟、直ニ引廻し候而歸牢申付候、翌日ゟ於日本橋二日晒、三日目、牢屋敷ゟ直ニ御仕置場江差遣候儀ニ有之候、引廻し幷御仕置之節も、見屆之者御差出有之儀ハ、御勝手次第之儀ニ存候、引廻し當日、御仕置之趣、例之場所ニ而御申渡、別紙之通ニ而相濟、引廻し之節ゟ拙者方へ請取後ハ、最早御仕置迄、拙者方之囚人ニ相成候儀ニ有之候、

戌十二月　　初鹿野河内守

鋸挽制度

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從前々之例

一主殺　二日晒、一日引廻、鋸挽之上磔

鋸挽例

〔東武實錄十〕元和九年十月十日、夜ニ入テ、大原源次郎(昔年三州ニ於テ忠義アル大原左近右衛門ガ孫ナリ)ガ家ニ盜賊忍ビ入テ、源次郎(時ニ拾四才)弟三十郎(十二才)母妹四人共ニ殺害シ、家人等ヲモ悉ク殺シ、家財ヲ盜ミ取テ出奔ス、○中略盜賊忽ニ露顯ス、凡ソ同類十人ニ及ブ、殘ラズ是ヲ捕ヘテ路頭ニサラシ、竹鋸ヲ以テ首ヲ引ク事七日ニシテ是ヲ殺ス、

〔耶蘇天誅記下〕一寛永五戊辰年、肥前ノ國高來郡有家村ノ百姓、二百七人一黨シテ、領主松倉豐後守重政ガ城下ヘ來リ、宗門奉行ガ宅地ニ往テ申スヤウ、以前御制止強ユヘ、是非ナク宗門ヲ故路(コロ)ビ備判形仕リタルコト、後悔千萬ニ候、彼判形我々ノ分ハ御戻シ下サレ候ヘト申ケル、宗門奉行恍惚ケルガ、少時ノ間嫌シ置キテ、其隙ニ捕手ノ者ヲ呼寄セテ、悉ク召捕ヘ糺明シケレバ、大形ハ故

路備テ本宗ニ立復ル、其内ニ權左衛門、作右衛門、又右衛門、吉兵衛、休意、休意ガ女房盥物ガ娘、以上七人、其頭領タリ、此故ニ一往二往ノ譴責ニテハ改宗セズ、島原城外堀内田面ノ名也ニ其身ヲ埋メ、竹鋸ヲ以テ頭ヲ挽落サント爲ケレバ、各堪兼テ故路備タリ、然レドモ吉兵衛ト云者一人ハ、終ニ竹鋸ニテ頭ヲ挽落サレタリ、殘ル六人ノ内、四人ハ助命アリ、權左衛門、作右衛門ハ死罪ニセラル、是ハ頭領ノ隨一ナル故ナリ、

〔御仕置裁許帳　一〕主人之子を殺者之類

延寶二年寅三月十一日

壹人五兵衛　是ハ神田佐久間町新町藤兵衛召仕之者、此者之主人悴次郎吉儀、當月八日之夜、佐久間町三町目裏ニ而被切殺候出入ニ付、穿鑿之內、揚リ屋ニ入、

右之者、穿鑿之上、次郎吉を切殺候儀無紛付、江戸中引廻シ、竹鋸ニ而首挽、同四月四日、於淺草磔ニ行、

〔百一錄〕延寶九年〇天和元年十一月十五日、甲子也、高倉大納言殿、家來瀧勘左衛門ト申者ニ被弑、幷侍一人被斬殺、二年正月九日、高倉亞相弑却之惡人、被引渡大路、被修竹鋸刑、

〔御仕置裁許帳　一〕主人弑者幷從類

元祿七年戌十二月五日

壹人六平　是ハ湯島六丁目次左衛門店牢人木村仁左衛門下人、此者儀、昨晩主人使ニ遣シ罷歸候而、又々外江罷出候付、其儀を主人仁左衛門ゑかり候へば、主人仁左衛門を切殺候處、傍輩ひさと申女、幷勘右衛門と申下人組留候付、町人訴來、檢使遣召寄逐僉議候處、右之段無紛由申候、主人を切殺、重々仕形不屆ニ付牢舍、

右之者、主人切殺、重科之者故日本橋ニ而三日晒、鋸挽之上、亥三月廿七日、於淺草磔ニ行、

火罪方法

火罪 投熱湯 坑殺 [併入]

臥濆

火罪ハ卽チ火焙(ヒアブリ)ナリ、德川氏ノ時ハ大抵放火犯ニノミ此刑ヲ科セリ、是亦淺草及ビ品川ノ刑場ニ於テ施行ス、其法ハ、大抵先ヅ罪人ヲ馬ニ乘セテ、道路ヲ引廻シ、已ニ刑場ニ至レバ、非人數人ニテ、馬ヨリ下シ、縛ヲ解カズシテ、罪木ノ輪竹ノ內ニ入レ、兩臂ヲ輪竹ニ縛シ、腰及ビ兩足モ亦罪木ニ縛シ、束子タル茅及ビ薪ヲ四面ニ積ミ上ゲ、其上ニ束子ザル茅ヲ散ズ、用意全ク畢リテ、彈左衞門ノ手代、撿使ニ告グレバ、撿使之ヲ撿シ、下役同心ニ命ジテ、罪人ノ名籍ヲ調ベ、茅薪ヲ以テ出入口ヲ塞ギ、彈左衞門、手代ニ命ジテ火ヲ點ゼシム、非人卽チ茅二三把ヅヽヲ持チ來リテ、風上ヨリ火ヲ點ジ、席ニテ煽リテ之ヲ焚ク、或ハ所々ヨリ點火スルコトモアリ、罪人既ニ焚死スト認ムル時ハ、燃殘リノ茅薪ヲ引去リ、更ニ茅四五把ヅヽニ火ヲ點ジテ持チ來リ、罪人ノ左右ニ分レテ、一方ハ鼻ヲ焚キ、一方ハ陰囊ヲ焚ク、但シ女ハ乳ヲ焚ク、焚骸ハ其マヽニシテ、三日二夜晒シ置ク、罪人若シ牢死セシ時ハ、科書捨札ノミヲ建テ置クナリ、

德川氏ノ時、罪人ヲ熱湯ニ投ジ、或ハ水ニ投ジ、或ハ坑殺スル等ノ事ハ、稀ニ行ヒシ所ニシテ、多クハ一時耶蘇敎徒等ノ處刑ニ用キタル臨時ノ刑ニ外ナラザルモノヽ如シ、姑ク火罪ノ下ニ附載シテ之ヲ示ス

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

(同從二前々一之例)
一火罪

引廻之上、於二淺草品川ニ一火罪申付、在方ハ火を附候所江差遣候儀も有之、捨札番人右同斷、〇三日之內非人番附置

但物取にて無之分ハ不及捨札に、欠所右同斷、○田畑、家屋敷、家財共欠所、

〔御定書百箇條〕火附御仕置之事

享保八年極
一物取にて火附候者引廻之義、

日本橋　兩國橋　四ッ谷御門外　赤坂御門外　昌平橋外

右之分引廻し通候節、人數不依多少、科書之捨札建置可申候、尤火を附候所、居所町中引廻之上、
火罪可申付事、

但、捨札ハ三十日建置可申候

享保五年極
一物取にて無之火附は不及捨札、火を附候所、居所町中引廻し之上、火罪可申付事、

享保八年極
右火罪御仕置、都て不及晒に事、

〔憲教類典四ノ五評定〕享保八癸卯年三月廿八日

和泉守殿江上ル

此度之火罪之もの御仕置之儀御尋ニ付、如此書上候、

一此度之火罪之者七人一同ニ江戸町中三日牽廻し、日本橋に一日、兩國橋に一日、四ッ谷御門外
に一日、

右之通三日さらし、其上にて火罪可申付哉、奉伺候、以上、

卯四月朔日　　評定所一座

安部式部

山川安左衛門

右之通り書付候所、御好有、如此書上ル、

火罪之ものゝ儀、さらし所之儀、先達而三ヶ所と申上候得ども、外貳ヶ所相増、五ヶ所にいたし、

壹ヶ所に一日宛さらし引廻し候にハ不及右所々に科書之札をさらし候以後までも建置可申候、火罪場所之儀、品川に而も淺草に而も、七人一同に壹ヶ所にて御仕置可申付候、

右之通被仰聞、何も相談仕候所、晒所相増候て引廻し候よりハ、猶又人に多存可然、御尤奉存候、

一相増候場所ハ、昌平橋外、赤坂御門外可然奉存候、

一火罪之もの、御仕置場まで牢屋より指越節者、前々之通、道筋に旗をもたせ、差遣可申候以上、

四月

右之通書上候處、四月三日、伺之通可仕旨、和泉守殿被仰渡候、

〔刑罪大秘錄〕火罪御仕置之事

一五ヶ所捨札ハ日本橋兩國橋　筋違橋四ッ谷御門　赤坂御門御仕置場

都合捨札六枚

一五ヶ所ニ無之分ハ、御仕置場計壹枚、

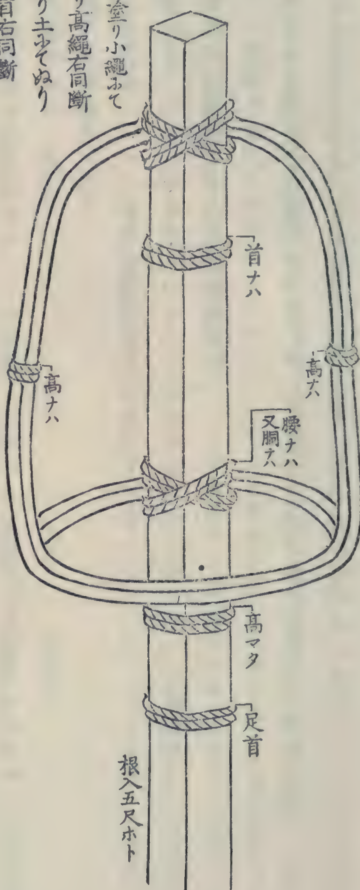
一右牢屋敷ゟ差出候節ハ、前ヶ條同斷引廻し御仕置之手續にて別儀無之、

一四人場所江引來候得バ、下働非人六人に而馬ゟ下し、繩の儘に而罪木ニ有之輪竹の中江入て、兩高腕を釣竹ニ結付、細腰を柱ニ結付、高股を同結付、足首を一足ニ寄同結付、いづれも太繩二重ニ掛ケ、碇と結付、土ニ而塗込、其上を小繩ニ而猶又卷、所々塗仕舞、下地ニ懸有之首繩を切り、其跡を太繩ニ而二重ニ致し、隨分ゆる〳〵柱ニ結ひ付、是又結目土ニ而塗、

一茅薪仕懸ケ方之儀ハ、寵と唱ひ候て、竹ニ而輪を拵へ、下江竹を打込、一廻り大きく丸く繩を張、薪三把ヅヽ結、右繩張之内江立並べ、其外薪を四人ニ爲踏、小男ハ猶又高く薪を仕懸ケ踏セ、夫ゟ茅壹把ヅヽ結候儘、二重又ハ三重ニも積上ケ、猶又中程ゟ上江茅をちらし懸ケ、撿使町方與力ニ、支度宜敷旨彈左衛門手代申立、下役同心江致差圖、同心罷越、四人之名前相調候上、出入口

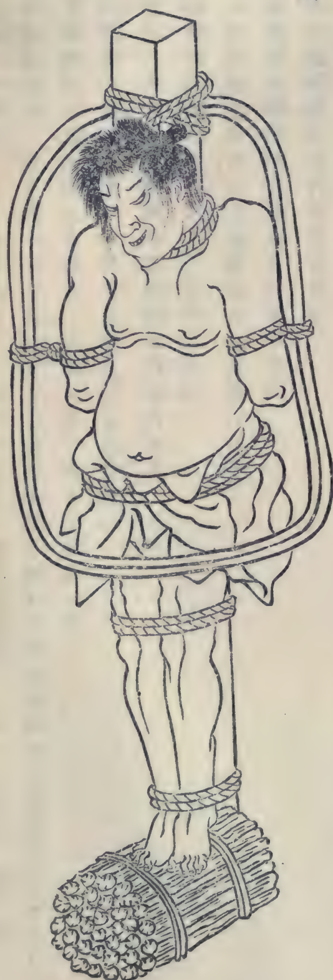
〔刑罪大秘録〕火罪木

柱栂長二間五寸角
釣竹七尺の内五寸ハ輪曲け折廻し縄ニてまく



首縄の上土ニて塗り小縄ニて
巻又々土ニて塗り高縄右同断
胴縄太縄二重廻り土ニてぬり
高股右同断足首右同断

火罪之圖



を薪茅ニ而ふさぐ、茅貳三把一手ニ持、火を付參リ、風上ゟ積候茅之中程ゟ火をうつし、筵ニ而あふる、時宜ニ寄り所々ゟも火をうつす、四人相果候樣子を見計、燃殘等引拂、茅四五把ヅヽ一手ニ持、火を附、左右より參り、一方ゟハ鼻、一方ゟハ陰嚢をやく、

但女ハ乳を燒、皆とゞめなり、

一當日御仕置場警固、穢多頭彈左衞門手代貳人、

一同斷棒突矢のもの六人

一非人頭善七手代二人罷出、非人共差配いたす、

一四人取扱候下働非人六人

一晒中番人等ハ、獄門御仕置同樣、

一五ヶ所引廻、火罪御仕置ニ決し候もの致牢死、科書捨札計リ五ヶ所江相達候節ハ、出役町方年寄同心、若同心、雙方ゟ貳人ヅヽ、牢屋敷江罷越、牢屋見廻ゟ捨札請取、附添場所江罷越爲建候事、

一矢之者貳人

一非人人足八人

○矢之者ノコトハ、死罪篇引廻之上死罪條下ニ解セリ、

〔政談秘書三〕天保六未年十一月廿二日、寺社奉行間部下總守樣江、左之通伺書差出候處、十二月十六日御呼出、御付札を以御差圖有之、○中略

火罪仕形

一六七寸廻リ之大竹、貳ツ割ニシテひしき、五寸廻リ之輪ニ致、同四ツ割竹長サ七尺折返し、右之輪を釣り、火罪木江結付、此輪ハ四人入候爲計に無之、仕掛之ため拵合之、輪竹不殘木舞繩に而ひしき卷、その上を大すきを入疾と塗込、其上を細繩に而土留まき塗候、

一四人あぶり候眞木輪、三尺程退、輪之形ニ竪ニ積重而、輪江四人入候而仕掛候節、働ニものを入候ため、貳尺程も道を明ケ、右之眞木積候、

一同茅眞木廻積重、尤仕掛相仕廻候得バ、右働之もの出入道を眞木ニ而ふさぎ候、

一四人場所江引來り候節、馬よりおろしいましめの儘ニ而、右の輪之内江入、兩高腕を釣り竹ニ結付、次細繩柱ニ結付、何れも大繩貳ツヽ、重掛、玄かと結付、土ニ而塗込、其上小繩ニ而巻、又候塗、小男ニハ槇を踏せ候、

一塗仕廻、いましめし首繩を切、大繩二重ニ随分ゆる〱柱に結付同右之通、土ニ而結目を疾と塗仕廻、働之者立去ル、

一眞木　貳百把　　一茅　七百把

一大繩　貳把　　一中繩　貳把

一簾槇　七拾把

紙幟仕方

一厚キ紙 横三枚 竪四枚　文言案之通認

但乳見積り

一板 幅一枚 長三尺　文言案之通認

〔刑罪書〕火罪壹人分御入用

一佐野薪貳百拾把　代銀八拾五匁五厘

但壹把ニ付、四分五毛ツヽ

一茅七百把　代銀貳拾三匁八分

壹把ニ付、三厘四毛ツヽ

一大縄貳把　四尋もの　代銀九分七厘
　壹把ニ付、四分八厘五毛ツヽ
一中縄拾把　十尋もの　代銀貳匁貳分五厘
一篠佐野薪七十把　代銀拾九匁六分
　壹把ニ付、貳分八厘ツヽ、但二夜分、
一番小屋壹ヶ所　代銀四拾三匁貳分五厘
一樫六尺札板壹枚（長六尺 巾壹尺三寸 厚寸六分）　代銀六匁七分
一札打釘拾本　足四寸　代銀壹分九厘
一札建添杭　半本　代銀三分壹厘五毛
一のほり　壹本　代銀六匁八分
〆銀百八拾八匁九分貳厘五毛
　此金三両貳朱ト壹匁四分二厘五毛
　但五ヶ所ニ候得共拾札五ヶ所分
　代金貳分と六匁貳厘五毛相増
　都合金三両貳分貳朱ト七匁四分五厘
（朱書）谷大工ト申ハ、元大工町、南大工町、竪大工町、横大工町、右四町より町役に而差出候ニ付、大工町四丁目分惣代神田九軒町道有屋鋪源兵衛店新兵衛方より差出申候、
右之外　火罪木は、御役に而谷大工拵申候、
　但前日牢屋鋪江呼寄申付候
一右火罪ニ懸リ候非人足共、不残御役に而弾左衛門方より差出申候、

火罪制度

右火罪御仕置之節、彈左衞門自分入用ニ而差出候品、左之通、

一ねば土壹樽、代八分、　一銕熊手一本、代貳匁五分、　一四斗樽二ッ、代三匁五分、　一醬油樽二ッ、代貳匁、　一蠟燭拾二挺、代壹匁八分、

〆銀拾匁六分

〔御定書百箇條〕火附御仕置之事

從前々之例
一火を附候者　火罪

但もえ立不申候はゞ、引廻之上死罪、

寬保二年極
一人に被頼、火を附候もの、　死罪

從前々之例
但頼候もの火罪

〔憲教類典 四ノ六 評定〕寬延二己巳年二月

御定書之內、火附御仕置、燃立不申候もの、引廻之上死罪と有之候得ども、向後燃立不申候共、一同可爲火罪候、

火罪例

〔慶長日記 五〕慶長十四年六月朔日辛亥、駿府本丸女房局に火をつくる間、燒上ル處ニ、され共もみ消ける、是女人の災成とて、下女を二人あぶり被殺、局女房衆二人遠流、

〔當代記〕慶長十七年三月廿三日、岡本大八ト云者有、親ハ在江戶ス、彼大八、九州長崎ノ有馬修理儀ヲ於駿府取持者也、自修理方金銀ヲ於指越ハ、各年寄衆幷女房衆ヘ遣之、彼取成ヲ以、九州鍋島知行中ヲ三郡申請可出ノ由、僞テ申條、眞ト心得、金銀ヲ大八方ヘ渡ス、素爲謀計間、不及何沙汰、金銀ヲ大八令領、此旨修理令言上間、廿三日、於阿部川原火炙ニ被成、

〔耶蘇天誅記 中〕一慶長十七壬子年三月廿一日、駿河國府中ニ於テ、岡本大八、田中修理兩人、吉利支丹宗門ナルガ故ニ、兼テ入牢シテ有リケルガ、今日獄屋ヨリ引出シ、府中ノ市町ヲ引渡シテ、

阿部川河原ニ於テ、火罪ニ行ハルト云々、

○按ズルニ、是說當代記ト異ナリ、附シテ參考ニ供ス、

〔梵舜日記〕元和五年八月廿九日、デイウス門徒、七條河原ニテ火アブリ、六十五六人御成敗也、男女子共以下如此、見物群集、不及是非儀也、

〔羅山文集五十六雜著〕誅耶蘇邪徒諭阿媽港代ニ加加爪忠澄

夫施政安民者、國家之本也、修文懷遠者、主將之德也、及本朝慶長之初源大君之治世、文武兼備、寬嚴相濟、四夷來款、而立市舶司于肥前長崎浦、商賈交易者、往來絡繹、阿媽港之蠢蠻、平素尊天主之教、欲弘其邪法于本朝、比年所來之船中、或匿唐船、以載耶蘇之徒號伴天連者、到于此、蓋是以此教而唆我里民、竊有覬覦本朝之志、故大君震怒、捕伴天連及其徒、悉斬之磔之、下令禁之、有信其法者、罪及三族、爾來先君大相國、今大君幕下、三葉之間、最惡徒斯(デウス)之術、制禁益甚、然阿媽港猶寄事于商賈、匿伴天連于所雇唐船底、來而微服潛行于群國、以此邪術誑惑庸人、且蠻船密養其衆、是以其徒連年逢囚繫、或陷大辟、或被焚死者多矣、

〔耶蘇天誅記下〕一寬永年中、大坂ニ於テ、町御奉行久貝因幡守、島田越中守、大坂町中穿鑿ノ處ニ、深ク彼宗門ニ泥ミテ、公禁ヲ恐ザル輩數多アルニ付テ、糺明ノ上、悉ク火罪ニ行ハル、然ル處ニ、火罪見物群集ノ中ヨリ、翁嫗二人、杖ニ携リ刑場ノ正中ニ出ケルガ、天主教ノ御惠ミ有難シト言ナガラ、手ト手ヲ取リ組テ、火罪ノ焰ノ中ヘ飛ビ入テ自滅ス、

〔御仕置裁許帳六〕火を付る者之類、并投火仕者之類、

萬治三年子三月廿六日

壹人長兵衞　是ハ駒形町、家主ハ不知、庄兵衞出居衆ごろぼう之由、放シ目明シ鳥井庄兵衞湯島ニ而捕ヘ來ル付入、

右之者火付成故、江戸中引廻シ、端々ニ晒、同子三月五日火罪、

〔御仕置裁許帳六〕火を付る者之類幷投火仕者之類

延寶五年巳二月十二日

壹人傳藏　是ハ松平長三郎組同心、森作左衞門小者、此者今月四日之夜、傍輩松澤九郎兵衞家江火を付候由ニ而捕へ、久世大和守殿、土井能登守殿ゟ斷ニ付籠舍、

右之者、同巳三月廿一日、大塚之末、巢鴨村ニ而火罪、

○按ズルニ、擂聚雜談ニ、寛文中ニ、駿府ノ番頭稻葉伊勢守正吉、ソノ家士安藤甚左衞門、松永喜內ノ爲ニ殺サレタルコトアリ、同姓稻葉美濃守正則、糾問シテ其實ヲ得シカバ、コレヲ火罪ニ行ハントテ、其下屋敷へ廣ク穴ヲ堀リ、內ニハ炭火ヲ起シテ、大ナル丸竹ヲ架シ、其上へ兩人ヲ渡シ、鯛ノ濱ヤキヲ燒クガ如クニシテ焙リ殺シキトアリ、是ハ私刑ニシテ、固ヨリ百箇條ノ制トハ異ナリ、其後猿子燒ト云フアリ、刑場ニ柱ヲ立テ、鎻ヲ以テ罪人ヲ繫ギ、薪柴ノ上ヲ狂ヒ廻ルヤウニシテ燒キ殺セリト云フ、是亦百箇條ノ制ト異ナリ、

〔百一錄〕元祿十五年十一月廿一日、似銀罪人被引渡於大路、於丹波放火者、被行火罪、

〔百一錄〕享保四年十一月廿六日、市中引渡者有之、於丹州殺沙門者闔座主、成謀判者、田中村五左衞門於水落十五歲男、投火於屋上者、被行火罪、

〔的例黃紙之寫〕火罪

安永元辰年八月主殿頭殿御下知　手限　安藤彈正少弼懸リ

一上州古屋村ニ而召捕候無宿猪八吟味一件　無宿　猪八

此猪八儀、盜爲可致、上州古屋村久七方、雪隱之軒下ニ積有之候藁江致附火、右騷ニ紛レ、股引壹足盜取、幷夜著壹ッ肩ニ懸ケ、可逃去といたし候段、不屆至極ニ付、存命ニ候得者、御定之通、

町中引廻之上火罪可ㇾ申付哉之段、可ㇾ奉ㇾ伺處病死、

〔的例黄紙之寫〕火罪　手限　安藤彈正少弼懸リ

安永元辰年九月佐渡守殿御下知

一常州土浦城下ニ而召捕候庄兵衛事庄七、附火致候吟味一件之內、

遠山兵右衛門御代官所常州信太郡江戸崎村百姓庄右衛門悴　庄兵衛事　庄七

此庄兵衛事庄七儀、土浦城下中條町出火之節、櫻川橋之下ニ、富田屋千藏方ニ而取除置候錢箱を明ケ、錢貳貫九百文盜取、其上爲ㇾ可ㇾ致ㇾ盜、右町藤兵衛居宅裏、木部屋之內ニ有ㇾ之明キ俵江附火いたし候段、不屆至極ニ付、御定之通、町中引廻之上火罪可ㇾ被ㇾ仰付哉、

〔御仕置例類集二ノ七〕文化八未年御渡

火附盜賊改松浦大膳伺

一無宿桝五郎盜井遺恨を以附火いたし候一件、　常陸無宿　廣岡小僧　桝五郎

右之もの儀、所々寺百姓家〆り有ㇾ之處、押外し、建寄（テセ）有ㇾ之戸障子を明ケ、明キ有ㇾ之處這入（リ）、衣類金銀錢其外品々盜取、右品之內所持いたし、預ケ置金銀借受、質入賣拂、又は同類馴合、寺窓を押外し、脇差を拔持頭取押込、住持を縛、聲立候ハヾ可ㇾ切殺旨申威、衣類反物脇差等奪取右品賣拂代金錢配分いたし、前書之代金銀錢盜取候分不ㇾ殘遣捨、剩淨心方江止宿相賴候處、斷申聞候を心惜存候迚、同人方江附火いたし、居宅燒拂候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻之上火罪、

此儀、品々惡事いたし候內、遺恨を以附火いたし候段、重々不屆ニ御座候間、御定書ニ物取ニ而無ㇾ之、火附不ㇾ及ㇾ捨札ニ、火を附候處、居所町中引廻之上火罪と有ㇾ之、尤此ものは、寺院江押込、其外所々ニ而盜いたし候上、右體附火いたし候ものニ付、差別も可ㇾ有ㇾ御座ㇾ候哉と先例相糺候處、去ル未年、石川左近將監御勘定奉行之節伺之上御仕置申付候無宿粂八儀、所々百姓家入口其外

土藏等之〆りを押外し、又は〆り無之處江も這入、衣類錢等盗取、其上相州平塚宿外レ松林ニ而、住所不存もの共と手合ニ加り、博弈いたし、剰同國下飯田村儀八ニ遺恨有之候迚、盗可致心底ニ無之候とも、同人宅江附火いたし候始末、不屆至極ニ付、五ヶ所不及捨札、町中引廻し之上、火罪申付候例も御座候間、伺之通町中引廻しの上火罪、

〔我衣〕八百屋お七ガ本説

一加賀宰相殿ノ足輕ニ、山瀨三郎兵衞ト云者有、浪人シテ太郎兵衞ト改、丸山本妙寺門前ニ八百屋店ヲ出シ、青物商賣ヲイタシケル、子ナキ事ヲ愁ヒ、且那寺駒込吉祥寺(元法花宗)ノ七面大明神江深ク祈願シテ歩ミヲ運ブ、佛力ノ誓ヒムナシカラズ、妻妊娠シテ女子ヲモウク、是偏ニ七面ノ加護也トテ、名ヲお七ト付タリ、生付サカシク、手跡ナドモヨシ、(お七ハ一體フトリ肉ニテ、少シ疱瘡ノアトモアリシトイヘリ、色ハ白カリケレドモ、ヨキ女ニヤハナカリシト云リ、○中略)依之七面ヘ御禮ノタメ、お七ニ額ヲ書セ、天和二年ニ奉納シタリ、常在靈鷲山法花最第一ノ文字ニ、十一歳ト書タリ、是ヲ狂言ニハ湯島ニカケシ松竹梅ト直シタリ、然ルニ丸山ヨリ出火有之、太郎兵衞宅類燒ニ及ブ、依之太郎兵衞弟小石川南緣山圓乘寺ヘ參リ、類燒急火ユヱ、諸道具不殘燒失ニ及タルヨシ物語ケレバ、圓乘寺申樣、幸地內ニ明寮モアレバ、三人トモ住ハレヨ、來春ニナリ普請ニ取カヽラルベシト言テ、彼空寮ニ住セケル、扨亦圓乘寺ニ、御旗本山田十大夫殿悴佐兵衞トテ、若キ人カヽリ人ト成テキラレケルガ、お七ト密通シテ、太郎兵衞ガ住ケル寮ヘ晝夜行テ遊ビケル、其後來春ニ成、普請成就シテ、太郎兵衞夫婦お七三人共引移ケル、お七ハ兎角佐兵衞ガ事忘ガタク、圓乘寺計ナツカシク煩出シ、人ノ言事モ耳ニ入ラズ、忙然トシテ暮シケル、爰ニ吉祥寺ノ門番吉兵衞悴吉三郎トテ、大酒ノ博弈打、ヤヽモスレバ喧嘩コノミ、親ノ手ニアマリ、終ニ勘當シテケリ、町所ヲユスリ、少々ヅヽノ小遣錢ヲモラヒ暮シケル者有、八百屋太郎兵衞方ヘ心易ク出入シケル、お七ガ煩フヲ見テイフ樣、ソナタノ病氣、我ナラデハシル人

ナシ、極テ圓乘寺ヘ行テ佐兵衞ニ逢度キ煩ヒナルベシ、夫ホドナツカシキハ、アマリ不便ノ事也、我等中立シテ參ラスベシ、一日々々ノ小遣ヲ給ハラバ、毎日モ使セント申ケル、お七嬉シク、文シタヽメ佐兵衞方ヘ遣シケル、度々カクノゴトク使シテ、お七方ヨリ心付ヲ取リ、後々ハお七モ心付成ガタク、文計賴ミケレドモ吉三中々取次ズ、後々ハ惡心增長シ、お七ニ申ケルハ、何ホド文ヲヤリテモ佐兵衞ニ逢ガタカルベシ、逢ヒタクバ火事ヲ願フベシ、火事故ニコソ圓乘寺ヘハ引越タリ、結ブノ神ハ火事ナレバ、是ヨリ外ニ賴ミナシ、コナタノ家ヲヤクナラバ、又圓乘寺ヘ立退ベシ、其時佐兵衞ト逢給ヘト言ケレバ、お七女子ノ事ナレバ、夫ヲ誠ト心得テ、成ホド左樣思ヒテモ、火ノ付ヤウヲシラヌ也、吉三聞テ、シラズハ敎ヘテ參セン、カヤウ〳〵トヲシヘケルコソウタテケレ、或時風ノ烈シキニ物干ニ出、吉三ガヲシヘニマカセツヽ火ヲ放テバ、何カハタマルベキ、猛火盛ンニモエ上リ、消ベキヤウゾナカリケル、吉三郎、時分ハヨシト欠付テ、家財衣類ヲ引包ミ立退ケル、其時盜賊奉行中山勘解由、吉三ヲ見付、心得ヌ人柄也トテ、組ノ者ニ申付召捕ラセ、雜物ヲセンギシ、屋敷ヘ引カヘル、夫ヨリ吉三拷問有ケレバ、成程盜取タル也、併火ハ付不申、火附ハ娘お七也ト申上ル、依之お七召捕レ、吉三ト對決ニ及ケル、お七申上ルハ、ワタクシ火ヲ付候事、存知不申、アノ吉三ヲシヘノゴトク、軒ヘ火ヲサシ候ト申上ル、奉行大ニ立腹アリテ、吉三オノレ火付ヌト申セドモ、致方ヲお七ニヲシヘ、其紛ニ盜イタシタル條、火罪ヨリモ重シ、先詮義大方ニ極リタリトテ、兩人トモ獄屋ヘ入る、扨右ノ譯、御老中ヘ御披露アル、土井大炊頭殿被申ケルハ、お七事、十五歲ナラバ科モ一段引下ケテ申付ベキ間、今一應お七ガ年ヲ吟味アルベシトノ事也、勘解由畏テ退出アリ、お七親名主家主共召寄ラレ、イカニお七ガ年ハ十五歲ナルカ、トクト吟味可致トノ事也、依之名主五人組、口ヲ揃ヘ、成程お七ハ十五歲ニ候ト申上ル、奉行悅ビ給ヒ、カッコウ成程其年來ニミユル也、罷立トテ、其翌日吉三ヲ召出サレ、イカニ吉三、お七當年十五歲也、何トテ十七歲

トハ申上タル、不埒成ト御叱リ有リ、其時吉三申樣、十七歲ニ紛無之候、お七元來戀故ノ事ニテ、カヤウナル事仕出シ候、十五歲ニテハ戀ハ致シ申間敷候、其上慥成證據ハ七面堂ニお七、十一歲ノ筆ニテ額カケ置候也、是ヲ御覽可被下ト申ケル、奉行聞テ額ヲ取ヨセ御覽アレバ、天和二年十一歲書トアリ、夫ゟ貞享二年迄算ユレバ十七歲ニ當ル、奉行モ悅ビ給ハザレドモ、是非ニ及バズシテ、右之段御披露アリケレバ、御老中方ニモ不便ニ思召ケレドモ是非ニ及バズ、御法ノ通リ千住ニオイテ、吉三諸トモ同罪罪○火ニゾ及ビケル、

〔御仕置裁許帳十〕在所江遣被行者之類

元祿四年未四月六日

壹人女はつ　是ハ出羽國上北山村彌兵衞女房、此者同國中江村六兵衞と申者と、三年以前ゟ致密通、當正月廿七日之夜、相談之上、本夫彌兵衞を鉈ニ而切殺、其上居宅江火を付候由、彌兵衞兄弟彌藏彌十郎訴訟申ニ付、今日召寄遂穿鑿候處に、右之段無紛ニ付、評定所ゟ牢舍、

右之者、同未七月廿五日、其所江遣火罪、

壹人六兵衞　是ハ右同國中江村之者、此者彌兵衞女房はつと致密通、其上彌兵衞を切殺、居宅江火を付候由、はつ申懸候得共、此者曾而覺無之由爭申ニ付、今日召寄遂僉議候處、申口不分明候ニ付、穿鑿之內評定所ゟ牢舍、

右之者、同未七月廿五日、其所江遣シ火罪、

〔的例黃紙之寫〕死罪

安永元辰年三月右近將監殿御下知　　手限　松平對馬守懸

一備中國西山村久兵衞悴政七、火を附致盜候吟味一件之內、

野村彥右衞門御代官所備中國川上郡西山村百姓久兵衞悴　政七

此政七儀爲可致盗、主人伊平次方水車小屋江火を附、右騷ニ紛、錢八貫文盗取候段、不屆至極ニ付、
西山平川兩村引廻之上於平川村火罪可申付哉、

〔新張紙留〕江戸町抱之中間ニ而附火いたし候もの自分仕置申付方之事

御相談書　　榊原主計頭

酒井雅樂頭中間安五郎儀、盗を心懸、附火いたし候ニ付相伺候處、自分仕置申付候樣、御差圖相濟候旨を以、仕置申付方問合候間、取調候處、万石以上領分ニおいて、附火いたし候もの、其領分ニ而仕置申付候儀ハ、子細も無之儀ニ候得共、今般之安五郎ハ、江戸抱之者ニ而、雅樂頭屋敷内ニ而之附火ニ付、一體ハ江戸表ニ而仕置ニ相成候方、相當之ものに有之、遠路在所迄差遣、仕置申付候ハ、差跨候儀ニ候得共、江戸屋敷ニ而火罪ハ難申付、左候迚、自分之仕置之ものを、御仕置場ニおいて、爲取計候筋ニも有之間敷、殊ニ右場所ニ而仕置取計候ニ付ハ、五ヶ所捨札等ニも差響候間、矢張於在所申付候樣可及挨拶候哉、先例相糺候得とも、右體之例不相見候間、御相談および候、以上、

巳三月

右文政四巳年三月二日、主計頭持參、其通一座評決、

〔御仕置例類集一ノ六〕文政五午年御渡

奈良奉行伺

一和州御所町新七借屋留吉致附火候一件

植村駿河守御領所和州葛上郡御所町新七借屋　留吉

右之もの儀、弟音藏江、附火之儀ハ不申聞、盗ニ罷越候間、盗物持運ニ參リ呉候樣申聞、音藏同道罷越、同人儀ハ、附火之儀心付不申樣、途中ニ爲待置、留吉壹人、人家五ヶ所江火を附爲及燒失、出火場所ニ取出有之候、錢貳貫文著類其外物數とも六拾三品盗取、途中迄持退、夫より音藏と兩人ニ而

投熱湯

持歸り、内壹品ハ落、拾壹品ハ用ひ仕舞、四品ハ所持、其餘質入、又ハ賣拂候代、南鐐銀札錢且盗錢共、都合南鐐壹片、銀札三匁、錢三拾貫五百文を仕廻候始末、重々不屆至極ニ付、奈良町引廻し之上火罪、

此儀、火を附候もの火罪之御定ニ見合、物取ニ而之火附ニ候間、江戸表ニ候得バ引廻之上五ケ所科書捨札建、火罪可申付ものニ候得共、井上丹波守申上候趣ニ而ハ、於彼地捨札無之儀と相聞候間、伺之通、奈良町引廻之上火罪、

朱書 評議之通り濟

○

〔耶蘇天誅記 中〕一元和二丙辰年六月、大和國五條ノ領主松倉豐後守重政、本知三万三千石ノ上、一万石ノ御加増ヲ下シ置レ、肥前高來郡有馬ノ城へ所替仰付ラル、然シテ仰渡サレケルハ、今度所替仰付ラレ候高來郡ハ、往昔ヨリ吉利支丹宗門ノ輩、數多在住ノ地ナルノ由、聞召及バレタル所ナリ、其方彼地ニ到ラバ、郡中微細ニ相改メ、不日ニ邪宗門退治仕ルベシ、其ニ就キ江戸表ノ公役一切ニ御免成セラルヽノ間、隨分精ヲ入、領内靜謐セシムベキノ由也、豐後守上意ノ趣有リ難ク承知奉リテ、入部ノ後万事ヲ閣キテ邪宗門ノ輩ヲ穿鑿シケル程ニ、日々ニ五人十人、此所彼所ノ村々ヨリ召囚リ來リテ糺明シ、或ハ斬罪、或ハ火罪、或ハ熱湯ニ沈メ、或ハ鋸挽ニシ、罪ノ輕重ニ隨テ刑ヲ行セケル、

〔耶蘇天誅記 下〕一寛永二乙丑年、肥前ノ國高來郡島原ノ城主松倉豐後守重政、私領高來ノ村々、吉利支丹宗門稠シク詮議セシメ、糺明ノ上ニテ、本宗ニ立復ル輩ヲバ赦宥シ、邪宗ヲ故路備ザル族ヲバ種々重刑ニ行フ、其節刑伐ヲ蒙ル徒ハ、西古賀村百姓三人、河原平村百姓一人、深江本場村百姓一人、島原町作右衞門、口之津村助大夫女房、深江村庄屋甚平母、以上八人、是等ハ温泉山ノ熱湯

ニ打込ミ煎殺サル、作右衛門ガ子共三人ハ、島原表ノ海ニ臥漬ニス、深江村庄屋甚平、是モ温泉ノ熱湯ニ沈メラルベキニ究リタル處ニ、此程炙籠ニ載セテ強ク責ラレ、先達テ死タリトゾ、

一寛永三丙寅年、松倉豊後守重政ガ領內、肥前高來郡ノ村々、吉利支丹穿鑿アリケル處ニ、口之津村百姓助大夫、島原古町休巴、同所中町彥右衛門ガ女房、同所水頭町庄三郎等、其外高來郡一郡ニテ都合十人、堅ク邪宗門ニ泥ミテ、本宗ニ立復ラザルニ付テ、温泉山ノ熱湯ニ沈メラル、トナリ、」

一寛永四丁卯年、長崎御奉行水野河內守、長崎表ニテ吉利支丹宗門詮議アル處ニ、彼宗門ニ拘泥シ、本宗ニ立復ルマジキ由申ス奴曹三百四十二人アリ、○中略其中ニ紙子屋淨淋ト云シ六十有餘歲ノ老人一人、兎角改宗セズシテ、温泉山ノ熱湯ニ沈メラル、

一寛永年中、長崎御奉行曾我又左衛門、長崎町中ニ於テ、邪宗ノ類族數多召捕テ糺明ノ上、遁ル、所ナキ輩百十餘人長崎ヨリ引來テ、高來郡温泉山ノ熱湯ニ沈メラルト云、

〔金澤藩刑法者拔書〕

才○川於二河原一　釜○煎○　石川郡番匠垣內村太郎左衛門娘　ぬい

右之者、寛文六年、侍方等ニ致二奉公一罷在候內、主人等家六ケ所江致二付火一、過分ニ金銀等盜取候付、金澤中引渡、其後兩橋ニさらし候上、釜煎ニ申付候而、死骸於二上口一磔ニ掛置候事、

〔耶蘇天誅記〕下一寛永二乙丑年、肥前ノ國高來郡島原ノ城主松倉豊後守重政、私領高來ノ村々吉利支丹宗門稠シク詮議セシメ、糺明ノ上ニテ本宗ニ立復ル輩ヲバ赦宥シ、邪宗ヲ故路備ザル族ヲバ種々重刑ニ行フ、○中略作右衛門ガ子共三人ハ、島原表ノ海ニ臥漬ニス、

〔近世見聞錄〕一今の世は上代に替ること多に成ぬ、是によてあながちに古法をのみ用ば誤りも有らん、田中法印社務の節、延寶の比、八幡の放生川に網引もの有り、殺生禁斷の處なるを、淀の者密に網を入る事度重り、被二生捕一て簀にせられ沈みに掛けるを、理もなく科に行ふことゝこ

そ意恨なれとて、淀ゟ江府に訴之、〇下略

〔御仕置裁許帳 四〕座等、人之女房と致密通、本夫を殺候者、幷嫉妬にて人を切殺者、

手鎖帳

天和三亥年五月廿九日

壹人 座等 意津一　是ハ本八町堀壹町目善兵衞店座等靜一出居衆、此者宿靜一相店、金左衞門悴仁兵衞と申者、同店次郎兵衞所江夜前參泊リ、次郎兵衞出居衆金兵衞と申者と兩人二階ニ臥リ罷在候處、夜前七ツ前ニ、金兵衞何者ニ歟數ケ所ニ而被切殺、屋根ゟ落、次郎兵衞表ニ倒罷在候、仁兵衞儀モ二階ニ而被切付候由、下江おり、其身親金左衞門方江欠込候由ニ而、家主善兵衞、五人組名主申來ル付、雙方召出シ遂僉議候處、此者申候ハ、兩人共ニ切申候段無紛候、其段右之仁兵衞儀、私女房と致密通候付、證據を取申度心懸候得共、盲目之儀ニ候得バ、證據を取不申候故、當月八日女房ニ暇を遣シ申候、仁兵衞を切殺可申と存切候由申ニ付、穿鑿之内手鎖を懸ケ、家主五人組ニ預ケ遣ス、

右之手負仁兵衞ハ、親金左衞門ニ養生仕候得、死人金兵衞ハ、宿次郎兵衞ニ取置候得と、翌廿九日申付之、切人之儀、遂僉議候處、座等意津一、切候段無紛白狀申ニ付、穿鑿之內、手鎖を懸、家主善兵衞ニ預ケ遣シ、段々遂穿鑿候之處、重々不屆ニ付、岩船檢挍方ニ而、座等仲ケ間之任法ニ、簀卷ニ行申度旨檢挍願、兩番所ゟ年寄同心相添、同亥閏五月三日岩船檢挍方江渡之、

右之座等意津一を岩船ニ而簀卷ニいたし、於佃島之沖ニ沈之、

〔耶蘇天誅記 下〕一寬永年中、江戶ニ於テ乞丐(或說ニ癩病人ト云ルハ全クノ非ナリ)百人餘リ、吉利支丹宗門タルニ依テ、淺草鳥越ノ邊ニ、虎落ヲ結ビテ其中ニ追込ミ置、食事ヲ與ヘズ飢殺シニシテ、直ニ其土地ヲ堀リテ埋レシトナリ、

〔羅山文集五十六雜著〕山伏

古之刑、墨劓剕宮大辟、後世易以笞杖徒流絞、皆是所謂五刑也、至於太甚、則有轘(クルマザキ)、磔(ハリツケ)、梟首、腰斬、棄市、鋸項之刻薄暴酷也、何足數哉、今浮屠中之一徒、著頭巾、挂露衣、帶錫杖、佩大螺貝、有事乃吹貝而呼衆、世之所號山伏者是也、其徒有犯法當罪者、衆胥議穿深坑而活埋之、然後下石以封樹焉、表曰、某之山伏有罪矣、官之所不能禁也、〇下略

〇按ズルニ、是ハ私刑ナレドモ、又罪人ヲ坑スルナレバ、姑ク記シテ參照トス、

〔明良洪範十九〕稻葉淡路守殘忍の事

稻葉淡路守紀通ハ、丹州福知山の城主なりしが、生得無道殘忍にして惡行超過しけり、代官の中に私曲の者有とて、召捕て禁獄せしが、其事の吟味もきはめずして、それが夫婦子共、すべて忌懸りの者をば悉くからめて、居間の庭に穴をほらせ、首ぎはまで埋みならべて、小さき桶を頭に打かぶせ置て、朝夕の慰みに一々見廻られし、段々死亡しけるに、代官計は命つれなく、七日までぞ生延ける、毎朝桶を取て見られしに、いまだ死なざれば、妻子親族皆死たるに、己一人殘りしは、業因ふかき男よと嘲哢せられしかば、彼代官眼を開き申けるは、今迄は何とぞ命だにあらば此恨を報はんと思ひしに、妻子皆死亡びし上は、最早是まで也、士の仕樣こそ有べきに、終に聞も及ばざる刑罰也、今に思ひ知らせんと忿りながら、舌をかみ切死したり、それより淡路守亂心して、色々に狂はれしが、鐵砲に藥を込、自ら火をさして打拔れてぞ死せられし、

古事類苑

法律部三十五

下編上

遠島

古事類苑

法律部三十五

下編上

遠島

遠島ハ即チ流罪ノコトナリ、德川氏ノ時ニ至リ、京、大坂、及ビ四國、中國ヨリ配スル者ハ、薩摩、及ビ五島ノ諸島、隱岐、壹岐、肥後天草郡ニ遣ハシ、江戸ヨリ配スル者ハ、伊豆ノ七島(大島、八丈、三宅、新島、神津、御藏、利島、)ニ遣ハス、其他甲斐、信濃、陸奥、出羽、蝦夷等ニ配セシ事モ亦尠カラズ、而シテ流人其島ニ到レバ、島守ニ請ヒテ數十步ノ地ヲ借リ、茅舍ヲ造リテ以テ雨露ヲ避ク、而シテ身體强壯ノ者ハ、島民漁捕ノ助ヲ爲シテ、僅ニ飢渴ヲ救ヘドモ、軟弱ノ者ニ至リテハ、之ヲ爲スコトヲ得ザレバ、飢餓シテ命ヲ失フコト往々コレアリト云フ、

流人脱島シ、又ハ死罪以上ノ罪ヲ犯ス時ハ、其罪ノ輕重ニ據リテ、死罪若シクハ磔刑ニ處シ、遠島以下ノ罪ヲ犯ス時ハ島替ニ處ス、

配流地

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一遠島 從二前々一之例

江戸ゟ流罪之者ハ、大島、八丈島、三宅島、新島、神津島、御藏島、利島、右七島之內江遣す、京、大坂、西國、中國より流罪之分は、薩摩、五島之島々、隱岐國、壹岐國、天草郡江遣す、

但田畑家屋敷家財共欠所

〔公裁秘錄〕島々善惡之覺

遠島方法

一大島　是は流人暮能島ニ而、少々場廣候、
一三宅島　是は大島ゟ狹候へども、外島ゟ能候、
一八丈島　是は江戸道法遠く候へども、流人暮能、流人親類ゟ見屆物早速屆申候、

惡敷分

一利島　家貳百十八軒、人數五百八人、廣サ壹里四方、流人三人、
一神津島
一御藏島　家廿九軒、人數百八人、東西廿四五町、南北一里程、此島中ニ惡敷候、

右之通島々善惡如此御座候

正德四年午三月十四日

〔政談〕四古ハ遠流、中流、近流ノ三品有、當時ハ八丈島ヲ遠島ト云、古ハ其罪人之故鄕ヨリ遠近ヲ分ケテ遠流、中流、近流ト云タル事ニテ、或ハ備後、出雲、土佐、伊勢、尾張、上總、伊豆、常陸、上野、陸奧、出羽等ヘ流サレタルコト有、大島、八丈島ハ江戸ヨリハ遠流ニテハ有間敷也、大島ヨリ船ニテ蛤等賣ニ來ルト云、商人入込テ、島ト云樣成コトニテハ無ト也、八丈島モ殊之外近ケレドモ、近ト云コトハ島代官ノ秘スルコトナリト云、殊ニ安樂ナル所成由ナレバ、遠流ト云フコトニハ當ル間敷也、當時近流、中流ト云コトノ無モ、戸籍ノ法不立、人ノ心儘ニ日本國中ヲ何方ヘモ、先ヨリ先ヘ歩行キ居住スルコト成世界成故、近流中流ト云コトハ、自ヅカラ絶失タルナリ、〇中略七八十年以前迄ハ、庄内最上ヘ流サレタル類有、是ハ流罪ト名ヲ付タル迄ニテ、大形ハ當時之御預ケ也、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例追加
一八丈島、御藏島、兩島江之流人ハ、三宅島迄差遣、島守江相渡、夫ゟ順風次第右兩島江遣候事、

〔科條類典下 七〕覺

一島々江之御證文は、拙者共方江請取、島支配之御代官江相渡申候、

一大島流人御座候節は、御證文拙者共方江請取、向井伊織方江相渡申候、

一浦賀御關所江之御證文は、拙者共方江請取、流人警固同心共爲持、浦賀御關所江差越申候、

一御目見以上之流人、幷女流人ハ船中別圍に而差遣申候、

一流人出船之節、重病に而相殘り候者有之節は、町奉行ゟ斷證文、拙者共方江請取、浦賀御關所幷流人遣候島之役人迄人數減候斷證文、拙者共方より差越申候、

一八丈島御藏島此兩島江之流人は、三宅島迄差遣、三宅島之島守より請取證文取之相渡、三宅島ニ而順風次第其所出船仕候、

一若破船仕候節は、其所流人揚置、名主年寄共江申付、番人附置、警固同心之内壹人御當地江罷登、注進次第伺之上、代り之島船仕立差越申候、

一伺書之趣、何年以前被仰渡相濟候哉、書面等も無御座、相知不申、先役共方より段々申傳ニ而伺書差出申候、

右之通、流人有之節は取計仕候、以上、

十二月　　櫻井七右衛門

〔御仕置例類集ニ 一〕文化元子年御渡

所司代伺

一流人差遣候島之儀ニ付評議

下野守殿所司代御勤役中御差圖之通、舊臘廿二日、遠島申付候、十郎兵衛、和助、新助儀、來ル三四月頃、薩州島江便船ニ差遣可申處、十郎兵衛外貳人儀ハ、拔荷賣買致し候もの共、吟味一件之内

遠島制度

重立候もの共ニ付、外島江差遣候方可然哉ニも御座候ニ付、此後流人差遣候島順之儀、大坂町奉行江懸合候處、薩州之次順之儀ハ、五島ニ有之、來丑年ハ、五島江差遣候積申越候間、便船ニ不拘、右三人之もの共一同、來春五島江差遣候樣可仕候哉、舊臘遠島申付候もの共ニ付、來丑春ニ相成候而ハ、出帆餘り延々ニも相成候儀ニ付、矢張薩州江差遣候筋ニも可有御座哉、又ハ京都町奉行より申越候、伺之通可申渡樣ニも可仕候哉、乍去餘り延引ニも相成、其趣旨難相決奉存候ニ付、則町奉行共差出候書付寫壹通入御披見相伺之申候、

此儀十郎兵衞和助ハ、薩州江罷下り、出所不正之唐物買取候ものニ而、新助ハ同國ゟ持登候同樣之唐物買取爲賣捌候ものニ付、三人共薩州之島江可被差遣筋ニ有之間敷候間、京都町奉行伺之通、來春五島江可差遣旨被仰達可然哉ニ奉存候、

子三月

朱書
評議之通濟

〔寬政刑典〕目安裏判之事

一壹万石以上、一領一家中迄にて、外江障無之候はゝ、領主にて遂吟味、仕置之儀可相伺候、

但遠島可申付科は、其領內ニ島無之候はゝ、永牢或は親類緣者等江、急度預置べき事、

〔武家嚴制錄一〕禁裏院中并公家中御條目

一公家衆御條目

公家衆法度○中略

一公宴之外、私而不似合勝負、并於不行儀之靑侍已下拘置輩者、流罪同先條事、

右之條々所相定也、從五攝家并傳奏、如其屆有之時、可行武家之沙汰者也、

慶長十八年六月十六日

〔禁裏向御法式〕禁中并公家中衆諸法度〇中略

一關白傳奏并奉行職事等申渡儀、堂上地下輩於相背者、可為流罪事、〇中略

慶長廿乙卯年七月日

昭實在判二條關白

秀忠在判

家康在判

〔御定書百箇條〕廻船荷物出賣出買并船荷物致押領候者御仕置之事

寛保三年追加

一同船頭〔逢難風打荷致、殘荷物を盜取候船頭〕之宿いたし馴合、村中之者江申勸、配分取候者、　遠島

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保三年極追加

一幼女江不義いたし怪我為致候もの　遠島

〔憲教類典〕四ノ六評定 寶暦四甲戌年四月

遠島者申渡相濟、牢内ニ差置、人數十人程ニ相成、島々江差遣候に付、唯今迄致永牢候者も有之候、向後遠島申渡相濟、六七ヶ月程ニ而、人數何人有之候共、出船為仕候樣可被致候、勿論七ヶ月に限候儀ニも無之候、七ヶ月越候儀有之候而も不苦候、然共七ヶ月越候上、致延引候儀ハ如何ニ候、其節之時宜にも可寄事ニ候間、其節々可有作略候、

四月

〔牢獄秘錄〕遠島に成候者の事

一遠島に成候者ハ、前日に遠島部屋東の揚り屋を、遠島部屋といふなり、に入置、翌日出す事也、遠島に成り候ものは、今迄牢内に揚り屋に而も、大牢弐間牢に而も、有之處之蒲團を、其者へ遣し候事也、牢内蒲團持行ものは、遠島ものに限ると云、

〔后赦錄流罪〕朱書安藤對馬守殿御差圖

遠島者發遣

一三宅島江流罪　寛政十二申年閏四月廿三日遠島申渡　同年十月十三日　御留守居番成瀨吉藏組元同心　石川傳七〇中略

朱書右は根岸肥前守病氣ニ付、小田切土佐守殿於御役宅、御目付寛助兵衛立合、御仕置申渡、出船迄之内歸牢、

〔公事手留〕遠島申渡、出帆迄在牢之もの病死いたし候儀ニ付申上候書付、

御屆　石川主水正

下壘村無宿　太吉

右之もの儀、博奕貸元いたし候趣吟味伺之上、當六月十八日、遠島申渡、出帆迄在牢申付候處、病死いたし候趣、牢屋敷ゟ訴出候ニ付、見分之もの差遣候處、病死ニ無相違候間、死骸取捨申付候、依之申上候、〇年月闕

〔官中秘策二十四〕御預ヶ人遠島或者御赦免之事

遠島於評定所被仰渡候以後、船出來不申候得者預りて船出來候時、船場迄送り、御船手江相渡候、前日舟手衆御目付衆、御出入に御逢、御見知り候て翌日御請取なり、

一衣類道具金銀米等一門中遣候樣差圖も有之、預り主ゟ遣候も有之、何も預り主ゟ於船場遣候、先達而御老中ゟ書付を以、御船手へも申談遣候、

〔刑罪大秘錄〕遠島御仕置之事

一掛りく〳〵ニ而遠島申渡、出帆迄在牢、出帆以前、囚人身寄ゟ屆物書付を以、掛りく〳〵江願出、右書付計、出帆世話役町奉行江達、町奉行ゟ牢屋敷江差遣、身寄ゟ屆錢無之ものは掛りく〳〵ゟ手當錢遣す、雜人ハ壹人江金貳分、揚屋者ハ金壹兩、揚座敷者ハ金貳兩、何れも錢ニ而渡ス、屆物員數ハ、壹人江、

米貳拾俵迄　　錢貳拾貫文迄　　金貳拾兩迄　但錢ニ直ス

右員數ゟ上之届不ニ相成、外ニ麥五俵位迄ハ届願相濟、

刃物　　書物　　火道具

右品々ハ届願、前々ゟ不ニ取上、

一出帆日限定り候得者、先達而願書差出置候届物之品々、右出帆前日世話番之町奉行所江持參候樣、兼而願置候身寄之向々江、牢屋敷又者掛り〱ゟ申達ル、

一出帆前日御船手江引渡出役與力雙方貳人牢屋敷見廻り與力雙方立合、石出帶刀江世話番之町奉行申渡、人別島割帳面相渡ス、

一右申渡相濟、牢屋見廻り江居殘、當番所前ニ而届物品々相改、帳面ニ引合、品之分ハ届願人町役人共懸り御船手當番所江持參候樣申渡、年寄同心江品書帳相渡、差添御船手江引渡候樣申談、

一右錢之分ハ、届錢手當錢共前日御船手江者不遣、牢屋敷江遣ス、右調相濟、牢屋見廻り牢屋鋪江罷越詰所前江筵を敷、遠島之囚人一同呼出し、手鎖腰繩ニ而下男引來、鎰役、醫師椽側ニ坐ス、明日出帆、幷島割帳、身寄ゟ之届之品掛々ゟ之手當錢等牢屋見廻申渡、牢屋内ニ而用ひ來り候藥膏藥等醫師ゟ相渡、右届錢手當錢之内ニ而買物等當人共相願候得者、壹人四百文位者買物爲致候事、

一當朝引渡出役一同相揃候上、囚人ハ牢前江差出、侍出家等ハ駕籠、雜人ハ持籠ニ乗せ、何れも青細引ニ而縛り、揚屋ものハ羽がひ〆ニ致ス、錢ハかますニ入、木札を附、銘々前ニ並居、出役與力、其外一同罷越、鎰役出牢證文を以、囚人銘々名前肩書年付入日懸り附等相改、出役與力江相渡、牢屋裏門ゟ差出引渡、下役同心ハ、囚人高ニ應じ、増減有之、囚人ニ附添御船手番所江罷越、出役之與力、御船手頭江應對、囚人錢幷牢内ゟ爲持參り候雜物共引渡ス、

但揚座敷幷女ハ、船中別ニ圍、

〔刑罪書〕遠島者御入用

一赤椀折敷　壹人前ニ付　壹匁九分壹厘宛

是は出船の節相渡申候

但御世話番御番所より、町年寄江被申付、直ニ牢屋敷江室町駿河屋儀兵衛方より爲相納申候、

一二把入叺　壹ツニ付　壹匁六分宛

是は遠島被下錢、幷屆錢入遣申候、

但牢屋敷ニ而申付候

一町人足　壹人ニ付　貳匁貳分五厘宛

是は遠島者錢持運人足、幷揚座敷格遠島出船之節、駕籠舁幷雜物持參之人足、

右御入用不殘、牢屋御入用帳江書出申候、

一遠島者出船之節、差出候非人人足之分は、不殘御役ニ而彈左衞門方より差出申候、

但前々日牢屋敷ニ而、彈左衞門江申付候、

〔諸事留〕追放もの欠所之儀ニ付相談書

書面追放もの欠所之儀は、其時宜ニより取計候方可然、此上極置候而は、差支も出來可申間、是之通ニ致置、可然旨談差戻ス、

小田切土佐守殿　松平兵庫頭

根岸肥前守殿　水野若狹守〇中略

一遠島者之儀、親類より見繼金等差遣候もの無之段、各樣より御通達有之候得ば、闕所金之內ニ

而、金貳分之錢、大貫次右衛門より爲差出相渡來候、然處親類より見繼金貳分ニ不滿節は、各樣御役所ニ而は、右送り錢へ足し、都合貳分爲目ニ而御渡被成候趣ニ付、拙者共掛之分も、見繼金貳分ニ不滿節は、右不足分之錢は、次右衛門より爲差出、相渡心得ニ御座候、

右之通取極可然哉、此段及御相談候、以上、

辰四月（○文化五年）

〔御仕置例類集二ノ三〕文化十酉年御渡

御船手石野傳兵衛伺

一御出產有之候節、遠島もの出船之儀に付評議、

先達而伺相濟候、私承ニ而差遣候遠島者、出船日限之儀、來廿五日之積申上置候處、其比御簾中樣御出產被爲在候節者、御七夜相濟候迄、右出船相延し、其後町奉行江申談、出船爲仕可申ト奉存候、依之此段奉伺候、

此儀遠島もの出船之儀、御仕置申渡候ト者譯違候間、御七夜過候はゞ、御三七夜內ニ而も手鎖過料、其外輕キ御咎者可申渡哉之段、今般申上候通被仰聞候ニ准じ、御七夜相立候上、町奉行江申談、出船爲仕候樣、被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉十月

朱書
評議之通濟

〔遠島者一件〕戌（○嘉永三年）九月五日

石出帶刀江

明六日遠島もの出船ニ付、御船手江相渡候間、別紙帳面之通、四人拾貳人別圍のもの壹人、都合拾參人出役江相渡、諸事先格之通可被致候、

九月五日

〔遠島者一件〕遠島もの之儀ニ付申上候書付

池田播磨守

遠島御下知相濟候もの、當時拾壹人程御座候間、島々江遣申度奉ㇾ存候、御船手江被ㇾ仰渡ㇾ可ㇾ被ㇾ下候、以上、

池田播磨守

巳〇安政四年　二月

〔翁草百十七〕流人之話

流人を大坂へ渡さるゝに、高瀬より舟にて町奉行の同心之を守護して下る事なり、凡そ流人は前にも記す如く賊の類は希にして、多くは親妻子もてる平人の辜に過へるなり罪科決して島へ遣はさるゝ節、牢屋敷に於て、親戚の者を呼出し引合せて暇乞をさせらるゝ、定法なり、故に親戚長別して、舊里を出る首途なれば、己がどち船中にて夜と倶に越方行末の事を悔みて、愁涙悲歎してかきくどくを、守護の同心終夜聞くにつけ、哀傷起り、心をいたましむる事成に、或る時一人の流人公命を承ると否、世に嬉しげに、舟へ乗てもいさゝか愁ふる色不ㇾ見、守護の同心是を見て、卑賤の者ながらよく覺悟せりと感心して、船中にて彼者に對して稱嘆するに、彼云く、常に僅の營に渴て、粥を啜りて露命をつなぎしに、此御吟味に逢ひてより、久々在牢の內、結構なる御養ひを戴き、いたづらに遊びくらし、冥加なき上に剩へ此度島目貳百文を下され（流人に島目貳百銅ツヽ賜事、古來ヨリ定例ナリ）、て島へ遣はさるゝ事、如何なる果報にて如斯成りや、是まで貳百文の錢をかため持たる事、生涯に覺え申さず、か程過分の元手有之候得ば、たとへ鬼有る島なりとも、一ツ身の凌ぎはいか樣にも出來可ㇾ申候、素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候得ば、都に名殘は更になく候とて、悅ぶ事限りなし、此者西陣高機の空引に傭はれありきし者なるが、其罪蹟は、兄弟の

者同く其日を過ぎ兼貧困に迫りて、自害を志か丶り、死兼居けるを、此者見付けて、迚も助かるまじき體なれば、苦痛をさせんよりはと、手傳ひて殺しぬる、其科に仍て島へ遣はさる丶なりけらし、其所行もと〳〵惡心なく、下愚の者の辨へなき仕業なる事、吟味の上にて明白なりしま丶、死罪一等を宥められし物なり、彼守護の同心の物がたりなり、

〔井上正鐵翁在島記上〕御用船の出船

斯て此月〇天保十四年五月の末つ方には、遠島の御用船出帆すべしと定まりぬ、偖此頃は、靈岸島川口、永代橋川口、濱御殿川口の三ヶ所に御番所と稱へて、海上諸般の事を監察し、尙又靈岸島、深川萬年橋、永代橋北新堀、深川新田島、濱御殿大手向の五ヶ所に、御船手組屋敷ありて、遠島用船等の事を掌り、毎年交代にて勤めしとぞ、此年は濱御殿組屋敷の當番にて、同屋敷の頭たる夏目勇次郎其掛たり、されば遠島の用船には、小頭一人、書役一人、鍵役一人、外に船頭數名乘込み、罪人を乘せて出船なし、鐵砲洲沖に三日間滯船し、此間に流人の家族親族等より、飮食物を差送ると稱し願ひ出る者には、役人の適宜にて逢はしめ、亦流人より書狀を送る事抔も差免し、此所に滯船三日間を經ぬれば、船を進めて品川沖に風待し、夫より相州浦賀の御番所に船を留め、同所にて流人の改めを爲し、及び流人の始末書、卽ち評定所よりの公證を納め、寫しに引換、之を以て豫定の島へ、廻船するなりとぞ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

寛保四年極追加

一遠島もの、船中にて遭難風、破船之後助命候はゞ、又流罪たるべし、若助命候て行衞不相知候はば、人相書を以浦觸いたし、身寄之もの江も相尋可申付事、

從前々之例

但遭難風浦々江被吹流候時、其浦ゟ警固之船爲差出置、順風次第出船いたし候、若破船候はば、流人は其島江揚置、所之もの共に警固爲致置、注進次第替之島舟仕立差越候事、

従二前々一之例追加
一遠島者船中にて病死いたし候時、御關所前に候はゞ死骸番人江爲ㇾ致二見分一、其所江死骸片付候事、

但御關所を越、相果候はゞ、其所に死骸片付、名主幷寺院ゟ證文取ㇾ之、御證文に引合せ、島守江相渡し候、島近所にて相果候節は、其島守江死骸相渡候事、

同追加
一御目見以上之流人幷女流人ハ、船中別囲にて差遣候事、

〔科條類典下七〕寛保三亥年十月御好御書付之内

御仕置仕形之事

一遠島者船中に而遭二難風一破船難ㇾ遁節は、警固之者、流人を指殺、死骸取捨候事、

破船難ㇾ遁節、流人を差殺候と申掟如何に候、破船之後流人不慮ニ助命候はゞ、又流罪たるべく候、若助命候而行末不二相知一候共、くるしからざる事に候、存命ニ而國中に難二差置一と申者に候はゞ、元より遠島は不二申付一、死罪可二申付一儀候、此掟相止可ㇾ然哉、

〔御仕置例類集二ノ二十七〕文化十酉年御渡

在路逃亡

大坂町奉行伺

一大坂御船手組水主共儀、渡海中流人取逃候一件、

無宿竹松事　三藏
同　伊丹の丑松

右之もの共儀、遠島申付候身分を不ㇾ顧、船中圍之内致二氣鬱一候迚、請負人勘五郎宰領水主江内々申立、度々上陸いたし、入湯之上酒等給馴、千吉願行の丑松申爭混雜之内逃去、於二途中一申合、三藏頭取人家江押入、家内之ものを追散、銀札盜取、或は丑松頭取往來人所持之品奪取候段不屆至極に付、兩人共大坂三鄕町中引廻之上獄門、

此儀遠島申渡候を受、渡海中逃去候上之惡事に候得共、一等重き御仕置は遠島可ㇾ爲二以下一旨之

御定も有之、今般之犯科死罪以上に相當り候上は、再犯之所を以御仕置重り候筋は有御座間敷、且惡事品々之內、此もの共申合人家江押込候段、重々不屆に有之、其節三藏頭取に付、盜可致と徒黨いたし人家江押込候者、頭取獄門、同類死罪之御定に而、三藏は獄門、丑松は死罪、

朱書
評議之通濟

〔公案比事四十七〕流人を船圍ひに而取逃候得共、手配等宜、早速捕其外品有之、御咎ゆるみ候水主同心幷船頭等之類、

安永九子年二月

大坂町奉行相伺候

一無宿樽屋之彌助、長柄の十右衛門船圍を拔出、幷牢內ニ而女を殺候一件、御仕置之儀評議、

亥十月十九日
板倉佐渡守殿御渡

菅沼左京組水主　菰淵彌七

今市六左衛門

右之者共儀、流人宰領仕候上は、諸事入念可申處、船圍錠前かけがねのつぼ開き有之儀ニ不心付、彌助十右衛門拔出候を不存罷在候段、不埒之至御座候得共、早速手配仕、茂八頭〇船江篤と申含め連歸らせ、其段注進仕、其外手當等之儀ニ付而は、無手拔も取計候儀ニ御座候間、百日押込と相伺候處、一座評議之上、三十日押込と申上其通濟、

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化十酉年御渡

大坂町奉行伺

一大坂御船手組水主共儀、渡海中之流人を取逃し候一件、

松平勘助組水主　福田入之助　外一人

同斷　平野逸平

遠島者到配所

右之もの共儀、流人致宰領候上者、不取締之儀無之樣、致警固候儀者勿論之儀ニ候處、出船前勘助より申渡候儀をも等閑ニ相心得、勘五郎申聞候趣に迷、船頭又兵衞さへ如何之旨、再應申聞候程之儀ニ候處、千吉、願行の丑松、三藏、伊丹の丑松、平六を入湯之ため、度々湊江揚遣候より事起、既に三藏、伊丹の丑松逃去候處、內分ニ而尋出度存、早速注進も不致、殊ニ召仕候もの無之迚、流人之内千吉、喜助を逸平召連、尋ニ出候處、又々右兩人逃去、千吉者加左衞門捕候得共、喜助者取逃、猶又流人蘇惠を逸平召連尋ニ差出、於地家室、嘉兵衞を蘇惠不法之打擲致候をも、其儘差置、殊逸平儀者、嘉兵衞より差贈候金子受納致し立歸候上、入之助、嘉左衞門江も不申聞、罷在、剩蘇惠、寬凌、願行の丑松申任せ、逸平附添、又候上之關江相越、料理屋ニ而及遊興候條、一々流人宰領之主意を取失ひ候次第、其上逃去候もの共を捕度存候迚、流人共を召仕候段、不所存之至、輕も御扶持致頂戴候身分ニ而は、別而不屆ニ付、逸平者遠島、入之助嘉左衞門者重追放、

此儀相當之例相見不申、○中略遠物もの船中宰領之身分ニ而、流人共を度々上陸爲致、又者逃去候もの共相尋候迚、流人共召連上陸いたし、猶又喜助を取逃候段、流人ニ馴合候ニも相當、其上平野逸平者、嘉兵衞を蘇惠無體ニ及打擲候節、差留も不致、剩同人相贈候不正之金子を以、流人一同及遊興候段、囚人を警固致し候役儀之詮更ニ無之、御扶持被下候身分、旁重キ不屆ニ付、逸平者、例同樣死罪、福田入之助、菰淵嘉左衞門者例より輕遠島、

朱書評議之之通濟

〔伊豆海島志上〕凡ソ流人ハ罪定リテ、官庭ヨリ徑ニ往テ船ニ就ク、己ガ家ニ回テ、父母妻子ニ辭訣スルヲ得ズ、衣服貨財齎ユクヲ不得、已ニ島エ赴ケバ、故鄕ヨリ見屆ケノコトハ赦免ナレドモ、ソノ贈リ物全クハ達セズ、是以流人島ニ在テ、艱難言モ疎也、其始メ至ル時、何レ村ニテモ地ヲ借、小茅屋ヲ造リ住ム、儻モ赦ニ遇テ鄕ニ還ルコトヲ得ル時ハ、ソノ茅屋ヲ地主エヤル法也、島人ニ親

ミナジムコトハ制禁也、タマ〳〵妻ナド迎ルモ私コトニテ、公邊ノ聞ヲ憚ル、島人亦流人ヲバ甚ダ輕侮スト云、但素ヨリ卑賤ノ業ニ習ヒ、筋骨强キ者ハ漁獵ヲ助、亦山ニ入テ木ヲ伐リ、凍餓ノ患ヒヲ免ルレドモ、富貴人、又農商ニテモ、アラキハタラキノナラザル者、春ハ鹹草、虎杖、槖吾、藍等ヲ摘ミ食トシ、夏秋ハエモナレヌ引綱ヲ少シヅヽ手傳テ、少シノ魚ヲ乞ヒ、直ニ海水ヲ以テ煮テ飢ニ充ツ、故ニ歷々ホド困憊憔悴シテ其天年ヲ終ルコトヲ得ズシテ斃ルト云、ソレ流刑ハ斬罪ヨリ輕キコト一等ト雖、死ニマサル哀ミ有リ、古人云、生別離於死別、在家ノ父母妻子ヲ棄テ、生涯相見ルノ期ナク、遙カノ風濤ヲ凌ギ、カノ海島ニ赴ク、難忘故鄕ヲバ浮雲ノ空ニ望メヤリ夫ノ徹書記ガ、中々ニナキ魂ナラバトヨミシモコトワリ也、世ニ識ル處ノ、俊寛ガ足ズリシテ泣キ倒レ、近ハ秀家、〇浮田官位ハ從三位權中納言、祿ハ四十七萬四千四百三十石ナリシモ、八丈ニ在リテ、島人嘲哢シナブリニクム、餘リノ艱苦ノ堪ガタサニ曰、存生ノ內、今一度花房志摩ガ所エ行テ米ノ飯クロフテ死シナバ、生前ノ思ヒデナラント、朝暮悲シミ哀レニ覺エ侍ル、苟讀是志者、島民ノ寒儉苦楚ヲ知リ、流寓人ノ辛苦、欲生シテ生モヤラレズ、欲死シテ死モヤラレヌ境界ヲ想像シテ可也、知之則カリニモ上ノ憲法ヲ不犯制禁ニ觸ズ、愼身完行ノ心付キノ一助トモナランカ、

〔伊豆七島日記〕中十九日〇寛政八年七月けふはこのしま〇小島の流人みなよびいだすことあるを見るに、おほかたはやせ衰へ、色青ざめて、此世のひとゝも覺えぬばかりにて、其さまいみじくあはれなり、されども下ざまのものはいはじ、其中には尋常ならぬ人も有、又世のおぼえめでたく時めきたりし人も有、又一山一寺をしりたる法師も有、又富有にひとゝ成て、世の憂めしらぬひともありときくに、今は島の人にいやしめられ鹹草に露の命をつなぎて、かなしき星霜をおくるも、若御免の有て一度國に歸る事もやと、それのみを賴て明し暮すなるべし、かゝる憂はづかしめを受る事、是誰があやまちぞや、皆自もとむること有てしかり、さりとも其身のはぢはしのばゞ

云のびても有なん、先祖親族の名をけがす、其罪は島の海よりもふかゝるべし、

〔井上正鐵翁在島記中〕御在島第一年記

抑三宅島は伊豆七島の一にして、豆海の東南に在る一孤島なり、〇中略幕府政を執に及んで、專ら罪人を配流せしむる處となり、流人の中にも一軒の世帶を持つ者は、水汲女と云ふ者を抱へ、之を妻とし定むる例なれども、別住の資力に乏き者は、小屋と稱て、上代に所謂穴居の如き有狀なる所を住居と爲し、晝は山に登り、海に投じて、纔に一日を送り、鎖少の事にも鬪爭毆打を爲し、夜に入れば飮酗賭博暴婬など、常に珍らしからぬ程にて、別世界の趣を爲り、

偖も大人には、同船流人數名の者共と、住馴し都を後に出船なし、其夜は神奈川沖に船繫し玉ひ、〇中略二日〇天保十四年六月大島波布港に著き、同所に五日迄風待し、六日の夜順風に帆を揚げ、海路の障碍もなく七日の夕暮、配所なる三宅島伊賀谷村の荷取場に著玉ひき、

偖も此伊賀谷村には御陣屋と唱る御船手役所ありて、流人出入の事を監察する所なるが、此日御用船の著しければ、直に右の御陣屋より、掛の人々濱邊へ出張し、其夜は高松與惣兵衞と呼ぶ人、引取人となりて、流人一同同村內の大林寺と云ふ寺に誘ひたり、されば大人にも此寺に一泊なし玉ひ、翌日は御陣屋へ出頭なし玉ひ、豫て設け有る流人罪名張に、前夜掛の役員が、記載し置たる御名前の下へ、書判を爲し玉ふ、其寫し左に、

天保十四卯年六月流罪

三宅島割流人　夏目勇次郎樣御掛

關保右衞門御代官所武州足立郡梅田村　神明神主　井上式部華押 卯五十四歲

御科御疑ヒニテ

彌大人には、島人の一人と成玉ひしも、未だ御住居とては定らざりしが、是より先牢內にて、大人

の御敎を受け、信仰最も篤かりし、修驗者の惠敎流竄せられて此島にあり、御陣屋の留守居を勤めたりしが、役人の計ひにて、大人の御住居を假に此所と定めたりき。○中略初便に細々と示し玉ひき。

初便

出船の節段々厚き御世話、御禮申盡し難く存候、小子事、御別れ申上候後、船中無事にて、六月七日、三宅島伊賀谷村へ著船致し、流人頭世話にて其夜は寺へ參り一宿致し、其上流人頭八次郎と申者かたへ參り、三日の內村內に罷在候、流人五十一人と申候者江振舞致し、夫より二三日村流人家持の分へ、世話人同道にて參り、諸入用向勘定致し、家持流人へ遣ひ物致し、又家持ず、・小屋と申候處へ集り居申候者へ米を遣はし、其上御船手御役人御世話にて、御船手役所留守居致し申候惠敎方へ、十四日に同居仕り、尙又昨日神著村と申候處、伊賀谷村より三里大難所を通り參り、世話人同道にて、右村方役人流人頭等へ遣者致、振舞に迴ひ罷り歸り申候、是にて先一通り相濟申候事に御座候へ共、當年冬に新流人參り候迄は、なんのかのと申、流人又は其外の人々より、無心致し候事に御座候、右の振舞等出來不申候者は、持參致し申候諸道具衣類まで、流人頭取上諸勘定致し、其上流人小屋へ下申候事に御座候、右遣ひ物等致し、振舞諸勘定相濟候者へは、借宅又は家等調ひ住居いたさせ候事御座候、其上水汲女と申者を付置申候事御座候、小子事は惠敎方へ同居致し居申候間、借宅も不仕候へ共、當秋御船手御役人參り候節は、外へ引越申候事故借宅にても致し不申候はでは相成不申候、然る處當村先年燒失にて、借宅無之困り申候、其節に相成候はゞ、又々致し方も有之可申と存候、先當時の處惠敎方へ同居故安心に御座候。○中略

卯六月廿日　　井上式部

正鐵　華押

御門中御方へ

流人給與

〔武野燭談五〕いつの事に歟、遠島の者の事人々もの語するに、竹千代君被仰けるは、當座にころさるまじき人の後に召返して、科を許さるべき輩を遠き島へ遣はさるゝとならば、彼島に食物なくては定而餓死すべし、不便成事かな、いかなれば扶持せられぬと仰られしを、家光公聞召いと感思召、今迄たれも心付ざる事を家綱が奉公始にせよ、向後遠島の輩はいかにも扶持宛行るべしとて、夫々島々代官に下知せられしとか承りし、されば寛文延寶の間、遠島の者共に農具種物等を賜、死刑に極りたる重科の者をも、多く薩摩がたへ遣されける、

〔明良洪範一〕寛文七年大火、傳馬町牢屋敷類燒ノ時、石出帶刀罪人共ヲ悉ク召出シ申渡シケルハ、今急ニシテ此所遁ル可ラズ、汝等ヲ燒殺サンモ不便也、牢ヨリ出ス間、心ノ儘ニ立退ベシ、火鎭リテ三日ノ中ニ歸ルベシ、其者共ハ申立テ命ヲ助クベシ、若亦逃隱レ歸ラザル者共、從類ニモ罪ヲ懸ケ、其身ハ何レニ忍ビ居ル共、日本中ヲ尋ネ出シテ、重科ニ行フベシ、十一年以前丁酉ノ歳ノ大火ニ、淺草橋ニテ大勢命ヲ失ヒシハ、汝等ガ類ノ牢舍人也今度ハ帶刀ガ了簡ヲ承リテ、命惜クバ立歸ルベシト申渡シ、追放シケル、牢ノ燒シハ二月六日也、七日ニハ殘ラズ立歸リシ内、三人見エザリシ、是ハ腰ノ立ザル者ナリシ故、燒死タルニヤ、其後其事申立テ、其歸リシ者共皆赦サレ、其中必死ニ當ル者共ハ、薩摩ノ島ヘ流サル、其者島ニテ農業ヲナシ、飢ニ及バザル樣、農具幷ニ種物迄與エラレケル、渾テ流人ニハ扶持ヲ給ハルガ公儀ノ掟也、其掟モ破ラズ、又己ガ詞ヲモ違ヘザリケル、

聽送物流人

〔德川禁令考三十四代官〕正德四午年

八丈島青ヶ島支配之御代官江被仰渡候御書付、

條々

一公儀御用之事、八丈島并靑ヶ島百姓共大切奉ㇾ存、不作法無ㇾ之樣堅可㆓申付㆒事、

附流人之輩江彼親類緣者より書狀、幷音物等遣す儀於ㇾ有ㇾ之は、御勘定所江相達之書狀披見之上可ㇾ任㆓差圖㆒、又流人之者共より諸親類等江書狀於ㇾ遣ㇾ之は、彼地に附置候手代遂㆓披見㆒、其趣此方江申越候上、其段々御勘定所江達、是又可ㇾ爲㆓差圖次第㆒事、

（朱書）手代之儀、享保八卯年河原淸兵衞支配之節相止申候、

〔地方落穗集八〕島々善惡の事

一八丈島（中略）

八丈島流人由緒の者より、見屆物幷に書狀等送る節は、先達て支配代官役所へ、右の品々書付願書を出し、其上役所よりの差圖を受、右の品尙又役所へ持參す、島掛り役人銘々之を改め、餘情の品は相返す、狀は開き狀にて口紙を付、折掛にする也、右の書狀は役所の帳面に寫し留、幷に見屆の品も殘らず書留、送物に封印をし、切手書付を添へ、見屆物願人へ相渡す、願人之を受取、八丁堀船頭の旅宿へ持參し相渡す、船頭右切手を合せ之を受取、無㆓相違㆒旨書付を出す、之を又役所へ差出し相屆る也、島より來る狀も開狀なり、是又役所にて寫し留、其狀を所々へ相屆るなり、

〔駿臺雜話三〕澤橋が母

加賀の前田家より、每年八丈島浮田家子孫のもとへ、資用のために、小金幾星、丹藥幾包、其外瑣細の物件、定數ありて、目錄のごとく、公けの官吏に付して、八丈が島へ達せしむ、翁（〇室鳩巢）加賀にありし時、其いはれを故老に問に、澤橋兵大夫といふ者より起りたる事なり、豐臣太閤の時、前田家の先祖、大納言利家の女を、太閤養女とし、浮田秀家に嫁す、是秀家の夫人なり、然るに慶長年中、關原師散じて後、秀家は石田方の渠魁たれば、死罪に處せらるべかりしを、島津家の乞哀によりて、死

一等を減じて、秀家幷に其子八郎、八丈が島へ竄逐せらる、八郎に乳母ありけるに、是はとくに逃去ぬ、其介の女房、俗にさしといふ八郎が幼少にして、乳母に離れて、遙々島に赴くを、ふかく泣悲しみ、徒跣にて官廳に詣り、しきりに八郎につれて島に到らんと願ひけれども、制禁ありし程に、是をゆるさず、女房此上はなにの爲にいきてあらむとて、すでに自殺せんとするを、官吏おさへて、さて議しけるは、此女房を目前にて見ごろしなば、後に上にきこゑん時、不便におぼしめして、など窺ざりしと、もし御とがめもありなんか、只窺ひ奉りて、御旨にまかするにしくはなしとて、窺ひければ、女なればくるしかるまじ、島へつかはし候へと、命下りしかば、女房限なくよろこびて、秀家父子につれて島へ赴きけり、其時三歳になりし子を抱き浮田家の夫人のもとへ來て、自は八郎御曹子の御事、餘りいたはしく候へば、御供申候て島へ參り候、此御奉公を忘れおはしまさずは、此子を御側の人へ仰付られ御そだてさせ、人になして給り候へといひすてゝ、さりぬ、○中略其子の父はいかなる者にかありけんしらず、氏は澤橋にてありける、○中略夫人在世の時、澤橋氏が子成長して、仕べき程になりしかば、前田家へ召仕はるゝやうにふかく付託せられしかば、彼家にて所領給り、澤橋兵大夫何がしと名乘けるが、たゞ明暮母の事をのみ思ひて涙をおとしけり、いく程なく遁世の願あるよしにて國をさり、形をかへて僧となり、いづかたにありとも行しられざりけるに、元和のころにかありけん、將軍家御上洛ありて、二條の御城へ入せらるゝ時、ひとりの僧御駕輿ちかく訴狀を捧げけるを、御供の中より抑へけれども、きかざりける程に、討てすてんとしけるを、御輿の內より御覽ありて、沙門を聊爾なる事いたし候な、訴狀うけ取候て御跡より召連て參り候へと、御直に上意あり、さてもと前田肥前守家來のよし申によりて前田大和守、御上洛の御供にてありしに御預ありて、後程なく江戸へ還御ありしかば、大和守召具して江戸へ下りぬ、其訴狀の趣は、某三歳の時、母にて候もの、主家の爲に、八丈が島へ罷越て候、母を島にさ

し置、其子として跡に殘り居候ては、いきてあるべうも覺へず候、御慈悲に母と一所に島へつかはされ下され候へとの事になんありける、官吏上の御旨を奉りて、思ひとまるやうに再三寛喩ありけれども、御うけ合申さず、所詮思ひ切たる容色なり、上にも其志を不便におぼしめさるゝにや、かさねて仰出さるゝは、島へつかはさるゝ事は、御大法におゐてならせられぬ事なり、島より母をめし返さるべし、島より歸候やうに、文にて申こし候へとありければ、兵大夫申やう、ありがたき御事に候、たとひ申こし候ても、母中々承引仕まじく候、されども仰出されにて候まゝ、申こし候はんとて、文かきてつかはしけるが、兵大夫申ごとく、母島にて其ふみを見て、大きに腹だち、我汝が三歳の時、御主の先途を見とゞけんとて、上へ奉願て、一度こゝへ來りしものが、今汝を見んとて、御主をすてふたゝび歸るべきやうやある、いと口惜き事を聞ものかな、かさねて申こし候はゞ返答にも及まじとぞいひこしける、官吏兵大夫を公廳へめしよせ、是程に仰出されてかなはねば、上にもなさるべきやうなし、其かはりには、外に願ひ奉りたき事あらば、御かなへ下さるべきよしいひ渡しければ、兵大夫かしこまりて、卑賤の身として、上をはゞかり奉らず所存を申上候に、重々御取あげありて、是程にまで仰出され候に、此上に私の所存をたて申べきにも候はず、たゞしひとつ願ひ奉り度事こそ候へ、前田家は、浮田と由緒ある事にて候へば、彼家より、毎歲助成の金幷に入用のもの承り候て、永代島へさしこし候やうに公命下り候はゞ、限なき御恩澤にて候べし、しからば母もよろこび申すにてあるべく候、某母への孝行このひとつにて候、外に願ひ奉るべき事はなく候よし申上ければ、其事下りて朝議ありけるに、是はくるしかるまじき事なり、されど金も員數多くはなりがたし、其外の物も、品によりてならぬものもあるべし、所詮僉議して、其員數其物品をきはめて、前田家へ申渡し候やうにとの事にて、今に至るまで、毎歲加賀の家より、定めのごとくしたゝめて官へ付し、官にて其物件を點撿し、島へ送り屆くる事

になりたり、

〔一話一言十〕松平加賀守家より八丈島浮田一類へ差遣候書付

寛政四子年閏二月、御老中鳥居丹波守殿へ出候、松平加賀守より書付之覺、

八丈島浮田一類共へ差遣候覺書寫

覺

宇喜田孫助養子
孫九郎方へ

一貳拾四　金壹歩

一貳匹　絹染物

一五ッ　染帷子〇中略

但小袖表裏貳ッ分

以上

閏二月

右書付鳥居丹州家來より借寫し候由、村岡孫右衛門より傳寫、且今年寛政四子年より左之通、合力米遣し候由願書、並附札寫、

覺

一七拾俵　白米　但四斗入

右於八丈島浮田一類共より、合力米之儀甲越候に付、前々遣來候通、彼島御代官江川太郎左衛門殿賴差遣申度存候、以上、

閏二月　松平加賀守

附札

聽流人子到配所

可爲勝手次第候

〔有德院殿御實紀附錄八〕享保の頃、○註略小十人組伊奈友之助忠眞といへるあり、その父兵右衛門忠易代官たりしとき、贓罪にて元祿十年十一月、三宅島に流されしに、友之助も父が罪に坐して、追放たるべかりしに、父に從ひ彼島に赴き、膝下にありて養はん事を願ひしかば、御ゆるしあり、配所にあることおよそ三年、父うせしにより、かへり來りしに、その孝心の深きを賞せられて、新に百五十俵を賜り、御家人に召加へられ、ほどなく小十人組にいれられ、そののち組頭にのぼり、七十まで怠らず勤仕せり、

○按ズルニ、流人ノ子ノ配所ニ到ルヲ聽シヽ外ニ、家人ノ配所ニ到ルヲ聽シヽ事アリ、聽從物流人ノ條ニ引ケル浮田秀家ノ家人ノ事是ナリ、今ハ煩シク分載セズ、

〔天保集成絲綸錄百〕天明八申年九月

評定所一座江

元御代官青木楠五郎忰龜之助儀、中追放被仰付、幼年ニ付十五歲迄親類江預ケニ相成候處、今度遠島之父楠五郎ニ附添罷越、介抱いたし度旨願候ニ付而、何も江評議之儀申達候處、遠島ハ死刑ニ續キ重キ儀故、父子之情愛も難立次第、則御仕置ニ而願之通ニハ難成筋ニ可有之哉との儀、實ニ不等閑評議之趣意ニ有之候、且又既ニ先例も有之事ニ候得バ、孝心之故ヲ以、願之通可被仰付哉との儀も、是又無餘義趣ニ有之候、一體子之咎ハ、其身之罪ニも無之候間、孝心ニ被免、願之通相濟候儀、子之方ニ取候而ハ子細も無之儀、孝心之所ハ被免度筋ニ候得共、其身之罪に而流罪遠島之父ニ取候而ハ、介抱を差添ニ相當、如何敷筋ニ有之候、扨又子之願ニさへ候得ば、相濟候定例之樣ニ相心得候而者、往々ハ孝子之實否も却而不相分樣ニ成行、或ハ罪父之心底、最初より同居成產之儀をはかり候はゞ、自然事之ゆるみに相成間敷にも無之ニ付、不容易儀ニ候間、向後願候迚

も、定例相濟候とには無之、其時々得と糺之上、始末次第たるべき事ニ候、尤願之通、附添と申付候而者、罪父之爲介抱を添候ニ相當り、又遠島と申付候而者、孝子之爲、重刑の名目を加へ候ニ似寄、いづれ不正候間、右兩樣之名目は、以來不相唱樣ニ可被致候、依之今度龜之助親類共江申渡趣、左之通ニ候、

遠島流罪之父ニ附添罷越度旨相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右之島江相越候儀ハ御構無之候、尤父と同船同居勝手次第可致候、追而出島之儀、是又勝手次第可致候、

一龜之助儀島住居之內、彌孝心ニ有之候はゞ、追而出島之上ハ、中追放之咎ハ、品ニより被宥候儀も可有之哉、其次第ニより、其節猶評議可被在之事ニ候、出島之儀、勝手次第たるべきとの趣ハ、島支配之向江も、兼而達置候樣、可被致候、

但以來百姓町人も、是又其始末次第糺之上、申渡方ハ前書之通たるべく候、

右之趣可被相心得候

九月

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政四子年九月

松平伊豆守殿御差圖　町奉行 池田筑後守掛

一無宿藤次郎遠島之父ニ附添度旨、駈込願致し候一件、　無宿 藤次郎

右之もの儀、中追放ニ相成候以後、惡事は無御座候得共、御構場所江立入候ニ付、一等重く可申哉と相考候處、遠島之父江附添度存込、讃岐國ゟ立歸り、直ニ御役所江駈込候樣ニ御座候間、御構場所を徘徊致し、又者止宿等仕候と者譯茂違、其上御構場所立去候而者、相願呉候好身之ものも有御座間敷、旁以無餘儀筋と奉存候、勿論先達而輕キ盜仕候得ども、是以御仕置も相濟、左候得者全無罪之ものに御座候間、遠島之父に附添度旨、相願候儀ニ付、去ル申年〇天明八年御書付之趣、幷申年

以後御差圖相濟候例も御座候間、右藤次郎儀も、父に附添罷越度旨相願候得共、願之通ニ者難成、右之島江相越候儀者、御構無之、尤父ト同船同居勝手次第、追而出島之儀も、是又勝手次第可仕旨申渡、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化九申年御渡

御先手 能勢市十郎申上候

一根岸九郎兵衛元組同心、中山勇藏忰銀之助儀、父之生涯爲見屆、島江被遣候樣相願候儀ニ付評議、

書面評議仕申上候通、能勢市十郎江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

申四月廿二日　　評定所一座

去ル十日御渡被成候、能勢市十郎申上候、根岸九郎兵衛元組同心中山勇藏遠島被仰付候處、同人忰銀之助儀、父相越候島江罷越、生涯見屆度旨相願候儀評議仕候趣、左之通ニ御座候、

能勢市十郎組同心　谷　鄉助

根岸九郎兵衛元組同心弟中山勇藏忰　甥 中山銀之助

右銀之助父勇藏儀、當二月遠島被仰付、依父之科、銀之助儀中追放被仰付、幼年ニ付、十五歲迄谷鄉助江御預被仰付候、然ル處、銀之助儀父罷越候島江罷越、生涯見屆度旨申聞候ニ付、何卒當人願之通被仰付被下候樣仕度段、鄉助奉願候旨申上候、

此儀享和二戌年評議ニ御下被成候、本多兵庫小普請支配勤役之節申上候、元飛驒郡代大原龜五郎忰大原陶太郎儀、依父之科中追放被仰付、幼年ニ付親類共江御預之旨被仰渡、本多兵庫支配世話取扱、松野長十郎方江引取置候處、父龜五郎遠島被仰付候八丈島江罷越、父之先途見屆申度旨相願候間、陶太郎願之通被仰付被下候樣仕度段、長十郎奉願候旨申上、評議之上陶太郎

儀、父之先途爲見屆、父龜五郎遠島被仰付候八丈島江被遣候樣相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右島江罷越候儀ハ、御構無之候、尤父と同居勝手次第可致、追而出島之儀、是又勝手次第可致旨被仰渡可然哉ニ申上、其通本多兵庫江被仰渡候例ニ見合、今般之銀之助も、願之趣意ハ同樣ニ付、父相越し候島江罷越、父之生涯見屆度旨相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右島江罷越候儀ハ、御構無之候、尤父と同船同居勝手次第可致、追而出島之儀、是又勝手次第可致旨申渡候樣、能勢市十郎江被仰渡可然哉ニ奉存候、

申四月

〔御仕置例類集一ノ一〕文政五午年御渡

向井將監
梶助右衞門　伺

一遠島之女江當歲之小兒附添被差遣候儀ニ付評議

去ル二日御渡被成候向井將監、梶助右衞門申上候書付一覽仕候處、此度島々江被差遣候遠島ものの之內、女壹人有之、右女江當歲之男子附添被差遣候旨、筒井伊賀守申聞、右小子船中ニ而病死いたし候節之儀御關所前ニ候はゝ死骸御關所之ものニ爲致見分取置、御番所相越相果候はゝ、其所之名主寺院より證文取之候上取置、右證文を御證文ニ引合、島守江相渡、近島ニ而相果候はゝ、死骸島守江相渡、且右女相果候節御關所前ニ候はゝ、男子ハ召連罷歸、御關所相越候後ニ候はゝ、島方江引渡可申哉、又ハ召連可罷歸哉、其外船中ニ而女之乳上り候歟、前書之通女相果候節ハ乳之手當無御座養育も出來兼候趣を以取計方相伺申候、

此儀船中ニ而女相果候歟、又ハ乳上り候節、小兒之養育差支候段ハ、無餘儀次第ニ候得共右之故を以、別段乳母等附添被差遣候儀も是又差支候儀ニ付、御關所內外ニ不拘、若女重體ニも有之、船中ニ而相果候儀難計候歟、又ハ病死いたし候はゝ、小兒ハ其所江預ヶ置、其旨申上、島近ニ

而國地最寄ニ無之候はゝ、島方江着船之上引渡、其段も申上、尤小兒養育之儀ハ、勘辨之上如何樣ニも手當いたし取計、其外之儀ハ、都而伺之通取計可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

午九月

書面之男子母江附島方江差遣ニ不及段、向井將監、梶助右衛門江被仰渡候間、其段長井五右衛門江ハ私共ゟ可相達、其外之儀ハ評議仕申上候通可取計旨被仰聞承知仕候、

午十月八日　評定所一座

向井將監、梶助右衛門相伺候、遠島之女江附添被差遣候當歲之男子、船中ニ而病死致候節、并女相果候歟、又ハ乳上り候節之取計方、評議仕申上候處、評議之趣啶と不致候間、今一應勘辨いたし可申上旨被仰聞候、

此儀再應先例相糺候處、寛政二戌年、町奉行池田筑後守懸り御書院番駒木根大内記組、一柳勘兵衛妻みち儀、妊娠ニ而同六月揚屋敷江入、同八月出產、女子出生致し、右女子ハ同姓一柳兵部少輔家來、田村藤七江引渡、同十一月遠島申渡、翌亥四月、八丈島江被差遣候儀ハ有之候得共、右之外遠島被仰付候女江、出生之小兒等附添島方江被差遣候儀ハ勿論、妊娠之內遠島被仰付候先例無之、乍併今般之女ハ、無宿ニ而出生之小兒可引渡身寄無之故を以、乳有之候母之手を引離候も如何に付、右女ニ養育爲致候方可然、既ニ附添被差遣候積御差圖も相濟候儀ニ付、旁國地を出帆いたし候後、女相果候節ハ、勘辨之上、小兒ハ如何樣ニも手當いたし、島方江召連候樣可取計旨、被仰渡可然哉之段申上候得共、猶又再應評議仕候處、國地を離候後、女相果候はゝ、小兒養育方ニ差支可申間、捨子之取計ニ准じ、望人有之候はゝ、糺之上差遣し、若望人無之候はゝ、溜預ヶ之格を以、非人共江養育申付置候樣、町奉行江被仰渡、右小兒母江附添島方江被差遣候儀ハ、不被及御沙汰方可然哉ニ奉存候、

午十月

御書取

書面之男子母江附島方江差遣ニ不レ及段、向井將監、梶助右衞門江申渡候間、其段長井五右衞門江ハ何もより相達、其外之儀ハ評議いたし被二申聞一候通可レ被二取計一候事、

遠島代人

〔歎歳餘錄八〕寛政四年九月、松平豐後守殿家老某みやけ島へ遠流仰付られぬ、此人三千石知行してありしが、此度その子供一倍の加増あり、元知行ともに六千石に成けるとぞ、是は當五月中、豐後守殿草苅にて鷹狩ありける、御裁許此節相濟、豐後守殿御代りに遠流仰付られける故也、是によりて公儀御鳥見兩人は死刑に仰付られぬるほどの事ゆゑ、さつまの家老も遠流に配せられたる也、此度右家老遠島に赴しに付、召仕の侍も十五人供致し候由、島へ送り候荷物もおびたゞしき事之由、めづらしき遠流人也といへり、

○按ズルニ、遠島ニ處セラレタル者、代人ヲ遣ハシ、且ツ其代人ニ從者ヲ付シ、多クノ物品ヲ送ル等ハ是皆法外ノ事ナリ、

朝廷遠島例

〔武德大成記二十二〕慶長十三年、花山少將忠長、飛鳥井少將雅賢、猪熊侍從、及兼保備前守〇備前守、一本作二備後守一、下同、等、弱輩ニテ容貌ウルハシカリケルニ、ヒソカニ後宮ノ宮女ヲ伴ヒ出テ、遊會姪飮シケルニ、事アラハレテ、備前守ヲ捕ヘ拷問シケルニ、〇ケルニ、一本作二ケレバ一、白狀ス、帝〇後陽成怒リ給テ、所司代板倉伊賀守勝重ニ勅アリテ、刑ヲ加ヘシム、勝重此事ヲ駿府ヘ申上ケレバ、神君聞召、勝重ヲ以テ諫シメ給ケルハ、朝家ノ內亂古ヨリ多ク記シオケル、然所ニ君仁愛ノ德ヲ以テユルシ宥メ玉ハヾ、後ノ人マデモ恥ル心アルベシト仰遣サル、勝重卽奏聞シケレバ、帝聞召納玉ヒ、罪一等ヲ減ジテ、三宮女ヲ伊豆ノ大島幷ニ八丈島ヘ流シ、忠長ヲ津輕ヘザンシ、雅賢ヲ隱岐ノ島ヘ謫シ、松木大炊兩侍從ヲ硫黃ガ島ヘ流サル、猪熊ハ濫行ノ最ナリ、兼保ハ宮門ヲ掌ル者ナレバ、罪コトニ重ク、帝甚ダ悄

ミ玉ク聾ナリケレバ、死罪ニ處セラル、

〔創業記〕慶長十四年八月、去年ヨリ内裏御近習之女房衆(廣橋局、唐橋局、)以上五人、公家ニハ猪熊、烏丸、飛鳥井兄弟、大炊御門、花山院、徳大寺、松木、幷齒醫師兼安ガ男備後ト云者等、不形儀ニ付、主上逆鱗不ㇾ斜、駿府ヘ以二勅使一右ノ公家衆局衆ヲ可ㇾ被二斬罪一由被二仰下一、依ㇾ之板倉伊賀守ヲ駿府ヘ召下、子細ヲ聞給、猪熊罪科ニ恐レ、被二闕落一、九月、公家衆亂行隨一ノ猪熊、於二九州一押取、籠輿ニ乘被ㇾ爲ㇾ上、九月十八日京着、十月十日、禁中五人局、伊豆ノ島ヘ被ㇾ流、去二日出ㇾ京、其體何モ髮ヲ剃、下女二人相添、五人一所ニ流罪也、公家衆流罪之事、花山院ハ夷ガ島、飛鳥井少將ハ隱岐島、松木ト大炊侍從ハ、薩摩硫黃島、飛鳥井難波ハ、先駿河ヘ被二召寄一、烏丸、徳大寺ハ、御赦免也、猪熊幷兼安備後ハ、京都ニテ殺戮也、十一月八日、公家流罪衆今日出ㇾ京、烏丸ト飛鳥井二番目ノ息難波侍從ハ、伊豆國ヘ被ㇾ流、其外ハ前ノ書付ノ如シ、(○又見二慶長年錄一)

○按ズルニ、此時ノ謫地諸書異同アレバ、併記シテ參照トス、

〔辛庵夜話〕八宮樣(良純、陽光院第八皇子、知恩院門主後落墮、)不行跡故、甲州江流させ給ふ、是は遊女町江毎々御かよひ、遊女も一人も不ㇾ殘逢給ひ、御氣ニ入たるものニハ御傳授候、大切成古筆の歌書等不ㇾ殘御とらせ候故、古筆の歌書于ㇾ今遊女町ニ有ㇾ之由ニ候、毎ニ御越候而も御長坐被ㇾ成事なく、宵ニ御越、五ツ過ニ御皈被ㇾ成候由、此段凡人とは事替り申よし、

〔皇胤紹運錄〕後陽成院――――知恩院　良純法親王(○中略)
慶長九年三月廿九日誕生、稱二八宮一、(○中略)寬永廿年十一月十一日、遷二於甲州天目山一、(四十)萬治二年六月廿二日、歸洛、

〔基量卿記〕延寶九年五月一日、傳聞大覺寺宮(○性眞法親王)御弟子之義、一宮(今第一宮、(靈元皇子寬清親王)中納言典侍局腹也、小倉大納言實起卿息女也、)可ㇾ被ㇾ進由被二仰出一、彼門主長存候由去二十六日參内被ㇾ申二御禮一處、一宮御出家之義非御本

意、勿論繼體之義雖無御所存、法中之義御難義之由達而被辭申云々、依之主上逆鱗以外云々、一宮御十一歲也、此御願望之義、定而小倉大納言被申上歟之由風聞也、未落居如何云々、　九月十七日、入夜傳聞、昨日今日兩三度、於阿野黃門(○季信)被遣小倉亭、一宮可有御參內由、度々雖被仰出無御參之間、人々參入取出奉了云々、近比之騷動也、菊亭右大將(○公規)三條亞相(○實通)甘露寺黃門(○方長)等參、其外取次三人鳥飼侍二十人、仕丁二十人、以上人數六十人餘、石川信乃守騎馬ニ而爲御迎手者五十人計參云々、則飛鳥井中將(○雅豐)舟橋屋敷ヘ被奉入、警固武士警衞云々、如何、此後之義恐入事也、　十八日、今日阿野黃門父子被仰出閉門、(昨夜義依御使不調法也)小倉父子(○實起、公連)藪父子(○嗣孝、嗣章)中園父子(○季定、季親)竹淵柳津、高岡(○季起)等、一宮依外戚各蟄居云々、　十月二十三日、御隨身藤原元信來談曰、今朝之間、武邊騷動、是小倉亞相同相公、竹淵刑部大輔等流罪之義云々、誠不便之義也、日比依一宮事時宜不快、勅勘之間令及此義云々、猶委細之義可尋知事也、後聞小倉父子三人、遠流於佐渡國、三人一所云々、

〔基量卿記〕貞享四年正月十四日、仰(○靈元帝)云、中院前大納言(○通茂)義、先年(七年以前○延寶九年)小倉實起卿左遷之刻、中院大納言參御前、直ニ言上之趣、今度小倉左遷之義甚以不可然、惣而上ニハ御年弱諸事御短慮ニ御物荒、傳奏(花山院大納言○定誠)も氣短物荒、諸司代戶田山城守も氣短物荒、大樹(○綱吉)も氣短ニ物荒候故如此義出來候、以後かやうニ候ては如何樣之義出來可申哉、宜敷義ハ有間敷、諸事無覺束候由言上以外腹立也、右之所存春宮御爲不忠候者之間、追付御讓位其儘被指置、件亞相切々出仕も如何可有之哉、各所存可言上之旨仰也、右之節愛宕相公(○通福)庭田黃門(○重條)等、中院由緒有之間彌以可被存其旨事也、申分雖不甘心不及他事也、各所存中院申分以外之義也、とかく急度被憚御沙汰可然由言上了、先此分ニ而各退出了、

〔百一錄〕天和三年三月廿七日、相樂治部大輔、被處流刑配隱岐島、當春竹內武兵衞等依博弈殺害人、

其張本之聞有之、

〔西行雜錄〕關原ノ後、宇喜多殿島津家ヲ賴、薩摩之牛根〈櫻島ノ隣〉ト云所ニ僑居アリ、剃髮シテ休復ト云、後神君之仰ニテ、宇喜多殿駿州ヘ被出候トノ事ニテ、右之柱神祇、休復ヲツレテ上リ候也、其後八丈ヘ流罪、

〔卜齋記下〕慶長七年に、島津中將〈○忠恒、後改名家久、時爲少將〉伏見へ被致參上候、合戰御勝翌年に可致參上候へ共、中將は龍伯〈○義久〉の爲には甥にて、兵庫頭〈○義弘〉實子なり、龍伯に無實子して養子也、兵庫頭關ケ原合戰御敵成ゆへに、申分被仕に付て遲參也、御暇被下候時、御訴訟御座候、叶候樣にと、一向奉賴と老中へ懇望被申候、子細を被尋候時、備前中納言殿〈○浮田秀家〉吾等國へ拘置申候、命を御助被下候へと御侘言被申上候、達上聞被爲上候へとの御意にて、無程中納言殿御上り、本多上野介に被仰付、駿河國久能へ遣候、久能には山本帶刀と申て、古老の者被爲置候、翌年に中納言殿を伊豆國下田近き所へ被遣候、便次第八丈島へ可被遣爲なり、〈○中略〉中納言殿一人は、進藤三右衛門計ひて、薩摩へ下し申事に候へ共、御息二人は何として御下り候哉、子細を承り候はゞ慥に知可申候、但家康公御仕置は、大ひに御座候て、せわしなく細成事はなし、中納言殿は正保年中迄は存命の由嫡子は死去と八丈より來候者の語り候、

〔前田文書〕態呈一翰候、備前前之中納言、不意此國へ被走入候間、不及了簡抱置候而、公儀へ致披露、種々御侘雖申候、於手前者事不濟候間、拋一命爲御侘被罷上候、一旦之罪者雖無遁候、哀以廣大之御慈悲、遠島遼國之端へ成共、命計被助置候樣に、御前之御償偏所仰候、去春此旨爲可賴存、用愚書候處、彼使不慮に令遠行候故、相違候とも不存候、彼方へ連々何之子細も無御座候間、爲拙者雖非所氣遣申候、一度被相賴候條、於御許容者　爲面目候、本多上州、山口勘兵衛尉殿へも申入候間、被仰談、御入魂此時候、恐惶謹言、

八月〇慶長八年廿日　　薩摩少將
忠恒花押

兌長老寺〇豐光承兌

衣鉢閣下

〔奥羽永慶軍記三十六〕小野寺遠江守義道流罪并先祖事

羽陽山北ノ領主小野寺遠江守義道ハ、會津攻ノ加勢トシテ、名代ニ人數ヲ差添、最上山形ニ遣ストイヘドモ、イカナル思慮ヤ有ケン、山北ニ引返シ、其後ハ最上ヘモ關ケ原ヘモ曾テ參ル事ナシ、此事最上義光言上ス、次ニ關ケ原ヘ馳着、忠ヲ盡セシ戸澤治部大輔ガ妻ヲ誅セントセシ事、其子戸澤右京言上、次ニ秋田城介實季モ關ケ原ニ馳參ラント催ス處ニ、山北義道此由ヲ聞テ、秋田參陣ニ於テハ、留守ノ間ヲ攻トラント在國セシト、秋田ヘ聞ヘケレバ、城介關ケ原ヘ上ル事ヲ得ズ、名代トシテ湊源内ヲ上セ、右ノ次第ヲ申上ル、内府公〇德川家康聞シ召サレ、扨ハ山北遠江守モ、石田ニ一味セシカト御疑心ヲ蒙リヌ、カヽル事ハ皆虚説ナリシト、後日ニ諸人沙汰シ侍レドモ、小野寺ガ運ノ盡ル所ニヤ、事實ニ極リテ、義道兄弟五人石見國ニ流罪、其國ノ住人坂崎出羽守ニゾ預ラル、

〔家忠日記増補〕慶長十五年閏二月二日、堀越後守忠俊ガ家臣堀丹後守直寄ト、同姓監物兄弟權ヲ爭テ訴論ニ及テ、江戸ニ來テ是ヲ訟ル、〇中略大神君此訴ヲ聞召給フ、〇中略是忠俊ガ咎ナル由ヲ命有テ、忠俊ハ岩城ニ配流セラレ、監物ハ最上ニ謫セラル、〇又見慶元記

〔藩翰譜四大久保〕同〇慶長十九年正月廿四日、佐渡守正信父子等、忠隣に配流の奉書を下す、兼てより板倉内膳正重昌、父に久しく對面に及ねば、身の暇賜て上洛すと披露して、忠隣に先だつて都に上り、去年十二月十四日に江戸を立つ父伊賀守勝重に仰を傳ふ、勝重旣に其期に及びしかば、相模守〇忠隣が旅館に行向

ふ、忠隣折ふし象戯に對し居たりしが、勝重を坐に請じ、忠隣配流の御使たるよし、さきに承り訖んぬ、流人の身となつて後、かゝも戯あるべしとも覺えず、待ち玉へ、事終て仰せ承るべしとて、靜に事を終て後、さらばとて謹て仰を承り、○下略

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年七月廿六日、讃岐國高松城主、生駒壹岐守高俊、封地十七万千八百石餘を收公せられ、長子右衞門高法と共に、出羽の國由利矢島に配流せられ、かしこにて賄料一万石を賜はる、これも家政みだりにして藩士爭論するによりてなり、

〔憲教類典二ノ三國替所替〕年號月日不知

生駒壹岐守領國被召上候付、被仰渡之覺、

一生駒壹岐守事、是又御穿鑿被成候處に、家中仕置惡敷仕候ニ付、讃岐國被召上、爲堪忍分、羽州由利に於て、一万石被下候事、○下略

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年七月廿六日、播磨國山崎領主、松平石見守輝澄、封地六万八千石收公せられ、松平相模守光仲にあづけられ、因幡國鹿野に配流せられ、賄料として一万石を給ふ、こはその家司伊木伊織が、新任の家司小河四郎右衞門が權を妬み、あまさへ其藩を立退き、藩士等騷擾せしかば、輝澄が國政撿束なきをとがめられてなり、

〔御仕置裁許帳八〕似セ狀を以語仕者之類、幷主人之名を語、道中ゟ自分之狀を時付にて遣す者、

寛文九年酉五月十日

壹人市郎兵衞　是は無宿新石町彥右衞門店釘屋七兵衞と申者、水野對馬守用所承候處、此者當四日ゟ四五度、右之七兵衞方江對馬守殿家來田口吉右衞門謀書を致持參、代銀百六十目餘之釘を語り取候由、捕江來り七兵衞訴訟申ニ付籠舍、

右之者、酉七月廿三日五島江流罪、

〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類

寛文九年酉五月廿一日

壹人五郎兵衛　是は四ヶ市町七兵衛店佐次兵衛手代、此者主人之金銀横取仕候由訴訟申候間、當正月廿五日手鎖に而預ヶ置候處、手代仕候時分、主人之謀判仕候而、金銀を語り取候由承出し、訴訟申に付籠舍、

右之者、戌四月朔日薩摩江流罪、

〔御仕置裁許帳 十〕道中上下之飛脚方々ゟ誂之金子を紛失仕者

寛文十二年子九月四日

壹人四郎兵衛　是は上下之者南傳馬町三丁目彌市出居衆大坂江遣候金子、方々ゟ取集、百三拾兩餘、宿彌市方ゟ此者共に、當月五日大坂江荷物に入爲登申候處、金子紛失仕候由、彌市訴申にニ付、穿鑿之内、評定所ゟ籠舍、

右之者、天和二年戌十二月廿八日、籠屋類燒に付預ヶ、天和三年亥十二月、隱岐島江流罪、

〔近世江都著聞集 十〕多賀長湖、百人女﨟を畫きし御咎にて遠流、并後年英一蝶となるの話、

天和、貞享、元祿の比、狩野永眞が弟子多賀長湖と云者有て、畫の道に執心あつて、能精心を込て、上手の名を得たり、○中略此者元祿の始、公廳の御咎有て、一度遠流せられたり、此事の眞實を聞に、元祿の比の大君は、常憲院殿御治世、東照宮五代の君にまし〱て、好色にふけらし玉ひ、あまたの美女を寵愛し玉ひけり、○中略其比おでんさまと云は、御寵愛第一の女﨟たり、○中略おでんの方は、小鼓の上手にて、平生御側にて鼓の一手を打玉へば、公は御謡うたはせ玉ひ、又或時は吹上御庭泉水に御舟を浮め、公自棹し給へば、おでんの方は舟の中に坐し、綾羅の袂をひるがへし、小鼓取て打玉ふは、峨眉の山の端に三ヶ月の出る有樣、ふやうのまなじり丹花の唇、ひとへに西施もは

じらひ、楊貴妃の吹笛も、數ならぬ氣色におもはれけり、されば江口の君の川逍遙と云を諷せ玉へば、一挺の鼓の音、迦陵びんがの聲よりもうるはしく、天人もあまくだるかとうたがはれたり、此御遊度々なりけるゆへ、貴賤ともにしらぬ人もなかりけり、されば繪師多賀長湖は、百人女﨟と云繪を畫て、世に流布しけり、其繪は貴人高位の女﨟より賤の女迄、其比名高き麗しき女の姿を寫しけり、其中におでんの方、船中に鼓打てまします姿繪、公の棹さし玉ふありさまゝで、さもうつくしく畫きたりけり、此事誰有て公儀へ訴へしか、奉行頭人の御耳へ入て、渠を忽ち召捕れ牢舍被仰付、終に遠島に被仰付けり、されども此事にて御咎は、表向いかゞとや思召けん、多賀長湖此御代の御制禁に、殺生を好、小島を取、魚をつり候科あつて如斯との御書付、其外町方へ被仰渡けり、さて長湖は、配所へ繪の具持參仕度と願ければ、則御免被下けり、斯て配所の月に詠め、八十島かけてこぎ出んと云し有樣も、自然に目にさへぎり、眼前を繪本として積年の功有て、誠に畫工の妙を得たり、○中略後年章廟の御代、歸朝免許被仰付けり、

〔幕府時代屆申渡抄錄〕元祿十六未年四月廿七日

一淺野内匠頭家來

村松喜兵衛次男 村松政右衛門 廿三歲
間瀨久大夫次男 間瀨定八 廿歲
吉田忠左衛門次男 吉田傳内 廿五歲
中村勘助悴 中村傳三郎 十五歲

右四人之もの共大島へ

小笠原彦大夫殿へ御口上

流人四人書付之通差越申候、御請取可被成候趣、幷手鎖二ツ遣申候以上、

出役中番　植竹傳大夫

三好平兵衛
双方同心四人

〔翁草 四〕繪島遠流之事

月光院殿之御年寄繪島と申女中は、小普請組白井平右衛門妹にて、若年ゟ御奉公に罷出、段々御取立にて重き役儀仰付られ、時めきけるが、其行ひ正しからず、御使又は宿下りの折からは、芝居遊所等へ立寄、亂行擧てかぞへがたし、正徳四甲午年正月十二日、上野增上寺へ參詣の先ゟ、直ぐに木挽町の狂言芝居へ行候事相聞え、御吟味之處、段々不行跡露顯し、其懸り合者一々御穿儀之上、同三月五日、御仕置被仰付所左の如し、

但世說には、芝居役者を櫃之類へ入レ、忍々に御城へ呼たる抔色々の說も有れども、御吟味之表如此なれば、其餘の說は捨之べし、

遠流　　繪島

一繪島事段々御取立にて、重き御奉公をも相勤、多くの女中の上に立られ候身にて、內々ニ而者其行ひ正しからず、御使に出候折々、又ハ宿下り候度々、人の貴賤を撰ばず、能からぬ者共に相近付、さしたる所緣も無き家々に泊り明し、中にも狂言の座の者共と年頃馴親み、其身の行ひ如此なる而巳に非、傍輩の女中迄勸め道びき遊びあるき候事ども、其罪重々ニ候と雖、猶も御慈悲を以、命を助け置れ、永く遠流に行れ候者也、

但遠流の格を以、信州高遠三万三千石之領主、內藤駿河守清長へ御預ケ、木綿衣類、一汁一菜にて可差置段被仰渡、

〔御仕置例類集 三ノ六〕寛政五丑年八月

松平伊豆守殿御差圖　　町奉行 池田筑後守掛

一表御臺所人清水龜之助、追放者差置候一件、

御臺所頭支配表御臺所人　清水龜之助

右之もの儀、去子七月、元知人鐵五郎罷越身分之義相賴、先達而追放ニ相成候儀承候得共、手前ニ差置、其上怪敷品と乍存世話致、盜物之衣類賣拂遣、既此もの方ニ罷在候內も、鐵五郎儀所々江盜ニ入候儀をも不存罷在候段、輕くも御扶持被下候身分ニ有之間敷不屆ニ付遠島、

右御仕置附

右重追放ニ相成候ものを乍存差置候はゞ、町人百姓ニ候はゞ中追放相當可申處、此ものハ御扶持人ニ而、殊ニ右之不埒而已ニ無之、盜物と乍存致世話候不埒も御座候處、差當相當之例も相見不申、安永七戊年八月、牧野大隅守伺之上申付候、百人組內藤十次郎組同心、山下惣左衛門祖父團七義、無宿初次郎先達而知ル人ニ相成致中絕暫不出合候處、內藤新宿旅籠屋仁兵衛抱飯賣女りんを誘引出候由、當正月廿九日召連參、店持候迄差置吳候樣相賴候處、右體知ル人迄ニ而身元も得と不糺、任相賴ニ、初次郎りんとも差置遣、其上初次郎怪敷由ニ而組廻り之もの尋候砌、右之もの吟味ニ相成候而者、團七身分難義可相掛と存じ、與五右衛門屋敷裏之方生垣之破ゟ初次郎逃遣、同夜又候參り候節、りんを相渡遣し、其外無宿庄七、幷右初次郎手合ニ而盜取候衣類品々、新家與五右衛門、中間佐助持參候を請取手前ニ差置候儀共、不埒之至ニ付、中追放之例ニ見合、盜物を取捌候義者似寄可申處、是以龜之助者身分も違、例ゟ格別品不宜候間遠島、

〔一話一言二十七〕千家滿鯖彥

遠島　神職　千家滿鯖彥

其方儀神道盛に被行候樣致度候得共、神職共學問未熟に候間、諸國巡行いたし、諸人へ神道之次第說聞せ、其上江戶表へ罷出、神道學校取建可申旨志し、雲州大社神職を隱居之上、諸國徧歷いたし神道之講釋いたし、○中略又は神服と唱候狩衣に紛敷品を著し、烏帽子をかむり、他行等致し候

故、諸人を迷し候致し方、其上雜談に候共、容易に申出間敷義共を、講釋之席にて申聞せ候段、不屆之至に付、遠島被仰付もの也、

九月〔○年代未詳〕十八日落著

右は小田切土佐守申渡す

○按ズルニ、小田切土佐守ハ、江戸町奉行小田切直平ノコトナルベシ、直平ハ寛政四年正月十八日任ゼラレ、文化八年四月廿一日免ゼラル、

〔嘉永明治年間錄〕八安政六年十月七日、飯泉喜内等三十七人、死罪流罪等處刑、各差アリ、〔○中略〕

大覺寺門跡御家來療病院六物空萬、遠島、〔○中略〕

松前伊豆守領分奥州伊達郡今原田村百姓八郎遠島、

廿七日、吉田寅次郎等二十三人、死罪流罪追放等各差アリ、〔○中略〕

松平修理大夫家來伊三次悴日下部裕(ヤス)之丞、遠島、〔○中略〕

小普請組阿倍十次郎家來、豐作悴勝野森之助、遠島、〔○中略〕

右於評定所五手立合申渡之、

〔遠島者一件〕戌〔○朱書文久二年〕九月三日差出ス、伺之通申渡、卽日取附之上返上、

蝦夷地江被遣候者共、取計方之儀奉伺候書付、

書面伺之通取計可申

旨被仰渡、奉承知候

戌九月三日

谷村官太郎

德岡政左衞門

石出帶刀

諸御掛ニ而遠島被仰渡在牢之もの貳拾人、此度蝦夷地江被差遣候段、箱館奉行衆御掛合濟之處、

右は遠島もの取計之心得を以、先例之通御世話番御用人中より、近々遠島者出帆之旨、御達有之

候、〇下略

〔武家嚴制錄 一〕一禁中并公家衆御條目

禁中并公家中衆諸法度〇中略

一上人號之事、碩學之輩者、爲本寺撰正權之差別於申上者、可被成勅許、但其仁體佛法修行及二十ケ年者、可爲正年序、未滿者可爲權、猥競望之儀於有之者可被行流罪事、右可被相守此旨者也、

慶長廿乙卯年七月日　二條關白殿 昭實公在判

秀忠公御判

家康公御判

〔御定書百箇條〕女犯之僧御仕置之事

元文四年極

一寺持之僧　遠島

〔家忠日記增補〕慶長四年十月八日、日蓮宗門ノ僧、去々年大佛供養ノ時、出座シテ法事ヲ相勤ムルノ僧ト、亦其供養ニ出座セザルノ僧等、相別レテ宗論ニ及ビ、大坂ノ城西ノ丸ニ登テ是ヲ訟ル、大神君〇德川家康大廣間ニ出御有テ、此宗論ヲ聞セ玉フ、〇中略國主秀吉ノ追善ニ出ザルノ儀、曲事タルノ由、其罪ヲ決セラレ、一方ノ僧ヲ遠流セラル、

〔駿河土產 三〕權現樣御代醍醐定行院科之儀有之遠島被仰付候事

一權現樣御在世の內、醍醐の定行院科之儀有之、遠島被仰付候節、伊豆の大島御預ケ被置候并出志摩守へ、板倉伊賀守書狀を被相添たる迄にて事濟候となり、

〔續視聽草 八集四〕澤庵配流

一洛陽大德寺の住侶澤庵、玉室兩僧左遷の事を尋るに、寛永六己巳七月廿五日、澤庵へ被仰渡趣は、先年東照宮於京都大德寺の寺法に付、天叔、松岳、玉室、此三僧を被召出、樣子御尋之上、數月御

吟味にて、御定の節は違背不仕、今度卒爾之詫出御條目之旨を違背仕、剩祐筆を以裁答書候、公儀を輕しめ、恣なる義共、併澤庵一人の覺悟之由、世こぞつて風聞ニ付、先々三使を以御尋の處、無相違之旨及言上、依て被所遠流之旨にて、則羽州上ノ山城主土岐山城守頼行へ御預け也、又玉室への台命には、先年東照宮大德寺の法令を改被置べきにて、天叔、松岳、其方一同に宮中へ被召出、御尋の處、慶長廿年五月十九日に裁出し、法令今度改被下候間、自今已後堅可相守御下知文、御案文被見之、六月加潤百日に及び、御吟味之上、三僧を一人宛被召出、詰則等被聞召、彌寺法相續之義定被下、同七月廿五日、於二條御屋形、三僧一同に御下知文頂戴、辱旨再三及御請ながら、今度又違犯致、近年猥に出世を執行のみならず、裁答書加判仕候條、甚不屆被思召候、萬一可追訴旨趣於有之は、權現樣御在世の時分、可指出候處、其節は無異儀及御請、今又是非するの條、重科に被思召候間、流刑に處せらるゝ由ニ而則奥州棚倉の城主內藤豐後守信照へ御預ケなり、依之棚倉城下赤館と云處に配所すと云々、

〔高野山事略〕行人の僧徒流刑幷高野山東照宮神法樂御法事の儀闕如の事

元祿四年の夏、來迎院某、興山寺住持職となされ、其後追箇條と稱せられて、先に下されし二十一箇條の外に仰出さるゝ事どもあり、こゝにおいて行人の僧徒愁訴の旨出來り、同五年七月つひに來迎院を始として、行人の僧六百八十人餘遠流に處せられ、興山寺の事、在山行人上首（組頭六人の事）なり輪番交替して執務させらるゝ、されば東照宮每月每日の神法樂、天下御祈禱の法事、供養等の儀、本導師といふものもなく、わづかに其儀の存する事、すでに二十餘年に及べり、

〔御仕置例類集三ノ十四〕寛政元酉年閏六月

松平伊豆守殿御差圖　　牧野備前守掛

一上總國求名村高福寺如善儀、觸頭幷本寺之申渡違背いたし候一件、

晒之上遠島

三宅久三郎知行上總國武射郡求名村

日蓮宗東漸寺末高福寺　如善

右之もの儀、本寺東漸寺申付違背致し候ニ付、觸頭本光寺ゟ退寺可致旨申渡候處、品々難澁いたし、其上奉行所江差出相成候節、早速退寺可致旨、觸頭迄書付差出置ながら、村内治兵衛娘そのと、五六年以前より密會いたし居、右之もの打捨置退キ候段、不便ニ存候迚、退寺不致我意申張、寺持之僧之身分ニ而、女犯等いたし候段、旁不屆ニ付遠島、

右御仕置附

右觸頭本寺之申付違背いたし不屆も御座候得共、女犯いたし候段、重々不屆ニ御座候間、御定書女犯之僧御仕置ヶ條ニ、寺持之僧遠島と有之ニ見合遠島、

〔歡歲餘錄八〕寛政四年、當春みやけ島へ流れたる、金杉安樂寺住持揚り屋江入牢の砌、みやけ島の名主その國にては神職なりしが、罪ありて同じく揚り屋に住持と同居せしに、住持の敎化にて念佛に歸し、其後名主は御免ありて、みやけへ歸鄕せしが、安樂寺和尙もまたみやけ島へ流罪に處せられ、彼島へ和尙わたりたりしに、名主親子ことの外信仰致し、則和尙へ一庵を造てあたへ移居せられしとぞ、和尙に隨ひ配所へ赴し弟子の僧一人ありしが、是又ことの外深切に仕へ、島中水不自由なる所を、此弟子遠き所より每日水をくみ日々湯を焚、和尙を入浴せしむる事おこたらずとぞ、其比和尙の詠に、

露の身をむすぶばかりの庵とよまれしよし、彼地より來る船頭の物語なり、

〔視聽草六集三〕明和四亥年八月山縣大貳御仕置被仰付候書付〇中略

宮澤蒲曹 亥四十七

桃井久馬 四十九

佐藤源大夫 五十三
禪僧靈宗 五十一

此者共儀、永澤町浪人山縣大貳物語の由にて、同人方に居候、堂上方家來と僞り候、藤井右門不取留不敬之儀を申出候に付、難心得存じ、出會之度々可糺と尋問候處、公儀江對し恐多事共、雜談致し候に付、大貳右門不屆之企致候儀と存、推量を以不憚成儀を、治定之趣に相認め、大貳弟子之内親鋪隨身と承り候得ば、何之儀をも不相糺、徒黨之事と相察、右名前荒增承候儀を取合認置、其内には大貳右門一向知人にも無之者之儀、其外御家人幷堂上方にも、一味之者有之由、重き事共を相認、此者共之儀は、蔭に相成、手寄を以可訴と彼是取拵、一途に御爲訴出處、上も無之恐多き儀を厚く相聞候樣申立候段、却而不憚公儀致方、不屆之至、殊に此者共訴にて、大勢無罪之者共迄、致入牢、御詮義に相成、其上無名之捨訴狀、捨文等有之、右認方全く此者共之仕業と相聞候、重々不屆之至、重科之者に付、死罪可申付者に候處、大貳右門儀企等之儀は、毛頭無之事に候得共兵書雜談或は堂上方等之儀、其外恐入候不敬之雜談申散候段は、此者共申立より相知れ、大貳儀は死罪、右門儀は獄門に相成候仕置相立候、乍不屆訴人之事故、此所を以此者共儀は助命申付、三日晒之上遠島申付者也、

遠島者犯罪島替

〔御定書百箇條〕遠島もの再犯御仕置之事

從前々之例
一 遠島もの、島にて死罪以上之致惡事候においては、　於其島死罪

但同類、亦は於其島にねだり事いたし、或ハあばれ候類は島替、

〔公案比事 四十一〕流人致惡事、於島御仕置申付候類、

明和三戌年十二月

御勘定奉行總掛

一三宅島流人之内、不屆致候者一件、

朱書
松平右近將監殿御下知　　三宅島流人　了昌

右之者儀、流人松角金三郎と酒給候上ニ而及口論、一旦引別、翌日ニ至り誤らせ可申とて金三郎寐込江庖丁を持踏込、金三郎江取掛、其上流人行信方江罷越、衣類無心申掛ヶ、庖丁を持おどし、木綿袷壹ツ貰請、其外數度酒狂之上、百姓又ハ流人江對シ喧嘩致候段、旁不屆ニ付島替、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政三亥年四月　　御勘定奉行 根岸肥前守掛

松平和泉守殿御差圖

一隱州代村ニ罷在候流人伊助外壹人盜いたし候一件

隱岐國周吉郡中村　流人　新兵衛

右之もの儀、盜物と乍存、喜兵衛持參候衣類、其外反物等代錢七貫文ニ買取候始末不屆ニ付敲、

右御仕置附

右盜物と乍存、下直ニ買取候もの所拂ニ相當候處、流人之義ニ付所拂ニ者難相成候間、盜物と乍存預り候もの敲之御定をも見合敲、

〔后赦錄流罪〕戶田采女正殿御差圖

寛政十二申年閏四月廿一日遠島申渡
同年十月十三日　　元數寄屋町三町目重次郎店平兵衛悴

一三宅島江流罪　　半兵衛〇中略

朱書
右半兵衛儀、島拔企候依科、死罪申付候旨、享和二戌年十一月十一日、御勘定奉行石川左近將監方より達有之候ニ付、爲見合記之、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文化十二亥年御渡

長崎奉行伺

脫島

一肥後國天草郡ニ罷在候流人甚吉盜致候一件

高木作右衛門當分御預所肥後國天草郡小宮地村罷在候

元無宿　大坂の　甚吉

右之もの儀、先年惡事有之、於大坂遠島申付候身分不愼、無宿直八、天草郡宮田村虎市江盜之手段申勸、虎市者山中より往來之樣子爲見張置、直八江外見爲致、夜中同郡碇石村豐之丞方裏戶引寄有之を明ヶ這入、錠前無之竹葛籠ニ入候木綿四拾七反盜取、右品直八可賣拂旨申之ニ付、同人江相渡、右之內壹反賣拂、代錢八百文直八此もの兩人ニ而分ヶ取遣捨、其上右始末內分ニ而相濟せ度、無宿嘉門江相渡候儀共、不屆ニ付島替、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、盜之品代金積拾兩以下ニ付、晝夜不限戶明有之處、又ハ家內ニ人無之故、手元ニ有之輕キ品を盜取候類之御定ニ而、入墨之上重敲と相當り、死罪以上ニ可申付惡事ニ無之候間、遠島もの島ニ而死罪以上之惡事いたし候ニおいては其島において死罪、但同類又ハ於其島ねだり事いたし、或ハあばれ候類之もの島替と有之、御定之但書ニ准じ同之通島替、

〔御定書百箇條〕遠島もの再犯御仕置之事

寬保二年極
一島を逃候もの　於其島死罪

〔御仕置裁許帳十〕流人島を逃歸る者之類

寬文八年申三月十四日

壹人五郎　是は下總國馬立村之者同所するを村彥五郎下人喜助と申者を、七年以前切殺シ候由、彥五郎訴訟申ニ付、佐渡江流罪申付候へば、去年七月佐渡より、當地江逃參候由、馬立村之者、當十二日捕來ルニ付、評定所より入、〇中略

右之者、申四月十八日、佐渡江流罪、

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政七卯年十一月

御勘定奉行　根岸肥前守掛

戸田釆女正殿御差圖

一伊豆國附新島流人藤助外壹人、島抜致し候一件、

元江川太郎左衛門
當時三河口太忠御代官所

伊豆國附新島流人　藤助

右之もの儀、不屆有之、新島流罪ニ相成候處、織藏申合、船を盗、島を逃去、江之島浦江漂着之節も、名前國所を僞候段、不屆ニ付死罪、

但科之次第相認、右島江札爲建、

同島流人榮藏事　入墨織藏

右之もの儀、死罪御仕置にも可相成悪事致し候得共、十五歳以下ニ付、入墨重敲、又ハ遠島ニ相成候處、猶又島抜いたし、殊江之島浦ニ而浦役人共相糺候後も、一旦逃去候始末、右浦役人江僞之儀申立候儀可相顯と逃去候ニ相當、不屆ニ付死罪、

但科之次第相認、右島江札爲建、

右御仕置附

右御定書ニ、島を逃候もの、其島において死罪と有之候處、島方之儀ハ、渡海差支も有之、先達而伺之上島江差遣候ニ不及、死罪申付候、科之次第相認、右島江札爲建置候例も御座候間死罪、

〔后赦錄流罪〕朱書松平伊豆守殿御差圖

享和二戌年九月三日遠島申渡
同年九月十九日

一三宅島江流罪　本郷六町目横町績和助元店

麹屋職事　源助　〇中略

候、

一伊豆國附新島流人、元下總國中妻村百姓三左衛門聟養子榮次郎外壹人島拔いたし候一件、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文化十三子年御渡

町奉行永田備後守伺

伊豆國附新島流人ニ而島拔いたし候

元下總國豐田郡中妻村　百姓　三左衛門聟養子　榮次

右之もの儀、不屆有之新島江流罪ニ相成候處、島拔可致旨流人瀧藏外四人申合、當六月十一日、たぶし浦岸ニ繋有之候漁船江乘移り、漕出し候得共、難風ニ而乘戻し村方江立歸り候途中ニ而、又候島拔可致旨同類之内吉右衛門と申合候處、右島拔之始末相顯、翌十二日瀧藏外三人ハ被捕押、後日手鎖足ほたを懸ケ、銘々五人組頭江預ニ相成候故、右申合之趣同類源彌江相咄候處、同意いたし、同人儀脇差斧を持參候間、右脇差を此もの帶、同夜村内長榮寺地中善立坊江兩人ニ而附火致し、燃上り追々人出合候故、右吉右衛門預ニ相成候五人組頭九郎兵衛方江參候途中、百姓幷流人共出合、此もの共を可捕押樣子ニ付、兩人ニ而出合候もの九人江手疵爲負、即死之ものも有之、夫ゟ九郎兵衛方江踏込、同人を及殺害、吉右衛門江懸ケ置候手鎖足ほたを打碎、同人一同猶又五人組頭市左衛門方江踏込、番人共江手疵爲負、右瀧藏江懸ケ置候手鎖足ほたを打碎、都合四人ニ而同島續若郷村海岸ニ繋有之候艀船江乘移り、島逃去、房州小湊江漂着上陸いたし、銘々相別れ、此もの者奥州邊迄逃去候始末、重々不屆至極ニ付引廻し其上磔、

朱書
右源助儀、享和三亥年四月七日、島逃去行衛不知旨、同十三子年八月、御代官杉庄兵衛より達有之

但科之次第相認、右島江捨札爲建可申、

田口五郎左衛門出

〔類例秘錄五〕内藤隼人正掛り　天保二卯年

伊豆國附三宅島流人嘉兵衛外貳人島逃去候一件伺

書面三宅島流人、其外之者共義、流人嘉兵衛外貳人、神著村市郎兵衛所持之用達船盗取島拔いたし候を不ㇾ存罷在候段、平日心得方等閑故之義不埒ニ付、笹や平兵衛壬生式部は押込申付、名主、年寄共は急度叱り、其外之もの共は叱り置、證文取ㇾ之差出、且平兵衛外一人押込日數相立三十日相立候はゞ、不ㇾ及ㇾ伺可ㇾ被ㇾ差免ㇾ候、以上、

卯二月

追而此觸書浦繼刻限附を以、早々相廻し、尤別紙請取いたし浦々之分追々繼添、此觸書一同留候宿、村繼を以、田口五郎左衛門役所へ可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、

先達而三宅島江差遣候、流人無宿入墨嘉兵衛、鴻巣宿無宿勘左衛門、淺草無宿入墨千吉事、吉五郎申合、同島之内神著村又藏所持之衣類、幷ニ同島大久保湊ニ繋置候、同村市郎兵衛用達船盗取乘組、當二月六日逃去候旨、注進申出候間、右體怪敷もの著岸ニおゐては、其所へ捕置、早々田口市左衛門役所江可ㇾ申出ㇾもの也、

卯二月

〔市尹要覽四〕御仕置者一件之事

一御仕置ものゝ內、遠島ニ成り候ものゝ子供、向後構無ㇾ之候間、其旨可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、以上、

享保五子年十二月三日、戸田山城守殿三奉行江御渡被ㇾ成候、

〔憲敎類典四ノ五評定〕享保十六辛亥年

遠島者減方之事

一大勢遠島之者有ㇾ之候而ハ如何候間、向後死罪歟と存候はゞ、猥に追放申付候事ニ而ハ無ㇾ之候、只今まで江戸拂所拂申付候者ハ、只今之通に可ㇾ相心得ㇾ候、

右之通被仰出候間、此趣を以、御仕置可被伺候、

亥三月

古事類苑

法律部三十六

下編上

追放

追院　退院　一宗構　一派構　武家奉公構
御料所地方奉公構〔併入〕

古事類苑

法律部三十六

下編上

追放

追院　退院　一宗構　一派構　武家奉公構
御料所地方奉公構〔併入〕

追放ハ罪惡ノ者ノ害ヲ良民ニ播サンコトヲ懼レテ、之ヲ領内ヨリ驅逐シテ他ノ領地ニ放ツナリ、但シ其罪ノ輕重ニ由リ、重、中、輕ノ三等アリテ、住居スルヲ得ザル國數ノ多少ヲ以テ差トス、

重追放ハ江戸ヨリ放ツ者ハ、武藏、相模、上野、下野、安房、上總、下總、常陸、山城、攝津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、甲斐、駿河ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、京都ヨリ放ツ者ハ、此外ニ河内、近江、丹波三國ヲ加フ、

中追放ハ、武藏、山城、攝津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、下野、日光道中、甲斐、駿河ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、

輕追放ハ、江戸十里四方、京、大坂、東海道筋、日光、日光道中ニ入ルコトヲ禁ズ、而シテ現住所ノ地及ビ犯罪ノ地ニ入ルコトヲ得ズシテ、田畑、家屋敷ヲ沒收セラルヽハ、三追放同一ナレド、家財マデ沒收セラルヽハ、重追放ニ限ル、其逐ヒ遣ルニ方リテハ、右ノ地名ヲ書キ列ネタル書狀ヲ授ケ、江戸ニテハ常盤橋及ビ呉服橋外ニ於テ之ヲ放ツ、然ルニ延享二年ニ至リ、其追放ノ地ノ廣クシテ、平民ノ農、生計ニ便ナラザルヲ以テ、改メテ三追放共ニ犯罪ノ地、所生ノ地、江戸十里四方ノ地ニ入ルコトヲ禁ジ、田畑、家屋敷、家財取上ニ就キテ、輕中重ノ三等ヲ分

チタリ、

江戸十里四方追放ハ、日本橋ヨリ五里四方ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、但シ江戸ヨリ外ノ者ハ、兼テ其住所ノ地ニモ入ルコトヲ得ズ、此刑ニ處セラレタル者ノ、田畑家屋敷等ハ沒收セザルヲ以テ例トス、然レドモ利欲ニ出デタル者、又ハ貢納未進ノ者ノ如キハ此限ニ在ラズ、江戸二十里四方、七里四方、五里四方、三里四方、並ニ之ニ準ズ、

江戸拂ハ、品川、板橋、千住、本所、深川、四ッ谷ヨリ以內ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、是ハ町奉行ノ支配ニ係ル地ナリ、

所拂ハ住居ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、但シ此二刑ノ田畑家屋敷、家財等ハ、江戸十里四方追放ト同ジ、

門前拂ハ奉行所ノ門前ヨリ追ヒ放ツナリ、此刑ハ大抵無籍者ニ科ス、

洛中拂、洛中洛外拂等ハ、京都ニ於テ處分スル刑名ナリ、卽チ江戸拂江戸十里四方追放ノ如シ、

耶蘇教徒ヲ處刑スルニ方リ、亞馬港(アマカワ)、及ビ咬𠺕吧(ジャガタラ)ノ地ニ追ヒ遣リタルコトアリ、是亦追放ノ類ナリ、

追院以下ハ僧侶ニ科スル刑ナリ、而シテ追院ト退院トハ、相似タルモノニテ、俱ニ居住ノ寺院ヲ放逐セラルレドモ、追院ハ命ヲ受クル後ニハ、再ビ其寺ニ還ルヲ得ズシテ、徑ニ去ルヲ謂ヒ、退院ハ寺ニ還リテ後ニ退クヲ得ルヲ謂フナリ、一宗構ハ、其宗旨ノ籍ヲ除クヲ云ヒ、一派構ハ、宗旨中ノ一派ノ籍ヲ除クヲ云フ、

武家奉公構ハ、武家ニ仕フル者ノ刑ニテ、再ビ武家ニ仕フルヲ聽サズ、

御構場所

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從二前々一之例
一重追放　御構場所

寛保二年極
武藏　相模　上野　下野　安房　上總　下總　常陸　山城　攝津　和泉　大和　肥前

東海道筋　木曾路筋　甲斐　駿河

從二前々一之例
但欠所、右同斷、○田畑家屋敷家財共欠所

同
一中追放　御構場所

寛保二年極
武藏　山城　攝津　和泉　大和　肥前　東海道筋　木曾路筋　下野　日光道中　甲斐

駿河

從二前々一之例
但田畑家屋敷欠所、家財無構、

同
一輕追放　御構場所

寛保二年極
江戸十里四方　京大坂東海道筋　日光　日光道中

從二前々一之例
但欠所、右同斷、

寛保二年極追加
右重、中、輕共、何方にても住所之國を書加相構、住居之國を離、於他國惡事仕出し候者、住所之國惡事仕出し候國共、貳ヶ國を書加、御構場所書付相渡候事、

從二前々一之例
一右追放もの御郭外にて放遣、侍ハ其場所にて大小渡遣候事、

寛保二年極
一於京都重追放申付候ものハ、右御構場所之外に、河内、近江、丹波三ヶ國を加相構、中輕追放ハ別義無之事、

〔官中秘策二十六〕訴訟御定之事

一追放構、國々之重き追放は關八ヶ國、山城、攝津、駿河、甲斐、尾張、伊勢、奈良、長崎、東海道筋、木曾路筋、

一中追放、江戸十里四方、京、大坂、奈良伏見、長さき、東海道筋、木曾路筋、日光道中、甲斐、なご屋、和歌山、水戸、

〔科條類典下 七〕享保二十卯年七月伺

追放者御構場之内、甲斐國入候儀、相伺候書付、　評定所一座

覺

一追放者御構場之内、甲斐國前々入候處、松平美濃守江被下候以後、只今以入不申候、自今甲斐國入可然奉存候、依之奉伺候、則追放御構場所書付入御覽申候、以上、

七月

追放御構場之内、前々之通甲斐國入可申旨、被仰渡承知仕候、

卯七月十四日　評定所一座

〔科條類典下 七〕寛保二戌年十月廿日

追放御構場所之儀ニ付、御尋之趣申上候書付、書面之通可相極旨、被仰聞承知仕候、

戌十月廿二日　評定所一座

去ル廿八日被仰聞候、追放御構之場所書付之内、名護屋和歌山水戸相載有之候、右三ヶ所ハ相除候而も、苦ヶ間敷哉之儀被仰聞候、

此儀右三ヶ所ハ御三家御城下故、前々ゟ相加り候物と相見申候故、其通可被差置哉之旨、申上候得共、三ヶ所除候而も、外に差障り候儀ハ、無御座候間、向後相除申候哉、

一住居之國中におゐて、悪事仕出候ハヽ、何方江も右一國を構可申事、

住居之國を離レ、他國におゐて悪事仕出候はヽ、其一國を構、尤住居之國共に構可申事、

右は評議仕候趣、書面之通御座候、此通相極可然奉存候、以上、

戌十月

〔科條類典下 七〕寛保二戌年十月廿六日

追放御構場所之儀ニ付書付

評定所一座○中略

右追放御構場所之儀評議仕候處、書面之通相極差障候儀、無御座候、中輕追放ニ甲府加ヘ候儀、近年之儀ニ御座候間、相除可申哉、書加候ハ甲斐と相認可申候、甲斐を書加候に付而は、前々無之候得共、駿河も書加可然哉、依之甲斐駿河書加奉伺候、以上、

戌十月

〔科條類典下七〕延享二丑年八月廿六日、大岡越前守、島長門守、木下伊賀守上、去ル廿日御渡被成候御書付之儀ニ付、申上候書付、

一追放者御構之處々之事、是は專御扶持人其外侍以上に掛り候儀ニ而、町人百姓末々日雇體之者、御構場所多ク候而ハ、渡世可致便も無之、忍而致住居、若相知候時は、猶又罪科重ク罷成候事、

向後左之通可相改哉、評議可有之事、

一町人百姓追放○中略共に、御構場所江戸十里四方住居之國、幷惡事仕出候國構之、欠所ハ重キハ田畑家屋敷家財取上、中ハ田畑家屋敷取上、輕キハ田畑計取上、

右之通欠所にて重、中、輕三段品を附候事、但田畑家屋敷無之者ハ、家財取上可申歟、田畑家屋敷家財無之者ハ、輕重不分樣ニ候得共、左樣之者は構之場所差別も不覺程之族多ク候、輕重程よく全備候樣ハ難成候事、

一御扶持人幷陪臣浪人侍以上ハ、唯今迄之通御構場所替無之事、○中略

丑八月

〔張紙留〕寛延三午年十月十一日、相模守殿能勢肥後守江被仰渡候御口上、

御仕置伺黃紙下ケ札ニ、何之國を構追放と申儀、幷江戸拂、江戸十里四方追放ニ居村構と申儀、向

後相止、重中輕追放、江戶拂、江戶十里四方追放と計認上候樣被仰聞候、

〔德川禁令考後聚三十六〕天保十五辰年二月

追放もの御構場所之儀ニ付、相談并挨拶書、

鳥居甲斐守〇南町奉行
鍋島内匠頭〇北町奉行

重、中、輕追放御構場所之儀ハ、武士雜人之無差別、住居之國、惡事仕候國共構之、江戶拾里四方追放江戶拂ハ、在方之ものは居村共構候御定ニ有之候處、拙者共御役所ニ而ハ、重、中、輕追放、生國、江戶十里四方追放、江戶拂ハ、出生之土地を構候仕來ニ而、寺社奉行衆、御勘定奉行衆取計と、區々ニ有之、依之致勘辨候處、評定所張紙ニ江戶十里四方追放、江戶拂ハ、惡事之村を構可申との儀者無之候得共、重、中、輕追放ニ准じ、右村をも構可申と有之、江戶十里四方、江戶拂等之刑者、御城廓を被遠候而已ニ無之、口論疵付等之類、都而惡事仕出候土地を立廻り候而は、再び害を生じ可申哉、右は至當之儀に付、御定には無之候共、其儘居置、以來武士雜人之無差別、一般に惡事仕出し候村國、住居之村國は構之、出生之村國は構不申積仕來可相改と存候、然る處追放ものヶ所書認振之儀に付、寬政十一未年書留ニ、出生之國を構候趣ニ評定所仕來之旨、別紙之通書留も有之候間、旁及御相談候事、

別紙

何之誰家來
何之誰
何國何村
誰

重追放

御構場所

江戸十里四方　日本橋より四方江五里ツヽ
朱書 住居之國　下總國
朱書 惡事仕出候國　武藏國
朱書 出生之國　相模國、
右之場所、徘徊すべからざるもの也、
寛政十一年六月廿一日

追放もの ヶ所書振合、兩御役所區々ニ付、内寄合ニ而、昨六日御評議極、以來右之通被心得候樣被仰渡候由、大塚鑫之進より通達有之候事、

但評定所書振、右之通ニ候由、且文言文字假名共、書面之通認候儀、評定所仕來ニ候間、右ニ不違樣認候樣、鑫之進被申聞候、勿論右國々を顯候ハ、振合見合計ニ、何國と認候事之由、是又被申聞候、

未七月

御書面追放もの御構場所之儀、寛政十二申年迄者評定所おゐても出生之地を構候處、右者御定ニ振候趣を以、同年十一月中出生之地は構不申積取極、其以來住居幷惡事之國而已相構、尤無宿は住居之國無之故、惡事之國計構之、且十里四方追放、江戸拂之儀も、御定書ニ惡事之町村を構候儀者無之候得共、重、中、輕之追放ニ准じ、右町村を構、出生之地を構不申仕來に付、御仕置筋之儀、區相成候は不可然候間、其役所仕來御改有之候方と存候、以上、

辰二月　寺社奉行
御勘定奉行

〔公事手留〕御構場所書付

中追放

御構場所

江戸拾里四方　日本橋ヨリ四方江戸五里ヅヽ

下總國

文政六年月日

右之場所徘徊すべからざるもの也、　大野村無宿坊主　勘藏

追放方法

〔官中秘策 二十六〕訴訟御定之事

一評定所ニ而追放申渡時ハ、御小人目付、町同心立會、常盤橋御門迄連行追放、屋敷ニ而者徒士、足輕召連、

〔刑罪大秘錄〕追放江戸拂等之事

一評定所、又ハ掛々ニ而落著申渡、御曲輪外迄役人附添見送リ、御曲輪外ニ而侍ハ大小渡放遣ス、

但身分ニ寄御徒目付、町方與力見送之、

〔憲教類典 四ノ五 評定〕正德元辛卯年四月十四日

但馬守殿御渡町奉行江

遠慮日數幷出奔之定○中略

一追放之者大小、近年ハ不相渡候由前々之通大小追放之場所にて相渡可遣事、

右之通、向後可被心得候事、

卯四月

〔憲教類典 四ノ五 評定〕正德元辛卯年四月

左之書付、當御代被仰出候留帳有之、

一重キ追放〇中略
一中ノ追放〇中略
一輕キ追放〇中略
一江戸追放〇中略
右之通六年以前戌八月廿四日被仰渡、四段に分御座候、江戸五里四方追放申付候儀御座候、
一改易
右改易ハ申渡候得バ罷歸早速屋敷引拂申候、先々罷在候場御構無御座候、追放ハ宿江不罷歸、直ニ常盤橋、呉服橋外にて追放、御構之場所輕重御座候ニ付、改易にハ違申候、
一追放之者ハ、常盤橋呉服橋外にて追放シ候、其所にて刀脇差相渡申候、然ル所木工右衞門追候之節より刀脇差相渡不申、右木工右衞門追放ハ、二十二年以前、元祿三年二月五日若藤木工右衞門追放之節也、
一追拂、追放とは譯違申候、追放ハ右之通、御構場所輕重相定申候、追拂ハ其所を追拂申候迄ニて御座候、刀脇差も渡シ遣申候、
四月
丹羽遠江守
松平壹岐守
坪內能登守
右者正德元卯年四月、御尋ニ付町奉行ゟ但馬守殿江上ル、
〔公裁秘錄 一〕所拂以上追放御仕置申渡方之事
落著之節、科之次第讀聞、不屆ニ付、中追放申付ルと被申渡候節、傍ニ出席之手代、御構場所書付不殘讀畢而、御構場所徘徊いたす間敷旨、申渡候事、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保六辛丑年二月九日
追放申付候者之儀、畢竟所々江も立歸、又候惡事いたし候得ハ、咎も重々成候、尤追放不致候而ハ不叶者ハ格別、其外ハ過料ニ而も爲出、追放之者數少き樣にと被思召候間、只今迄追放ニ成候咎之次第致吟味、何も相談仕、追放不申付候而ハ難成もの、又ハ過料等ニ申付可然者、書付差出候樣ニと丑二月九日、於羽目之間三奉行江水野和泉守殿被仰聞候事、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保六辛丑年二月十二日

覺

唯今迄追放ニ申付候科之者之內、向後過料爲出候儀被仰渡候趣、何も奉承知致相談存寄左ニ申上候、

一追放之重科、并入墨追放ニ申付候程之者之義ハ、此以後只今迄之通可申付候、

一中追放、并輕キ追放ニ申付候程之分ハ、自今ハ過料、又ハ戶〆ニ可申付候、其科之輕重ニ隨ひ、過料ニも致、多少爲出可申候、且又此類ニ申付候內、無宿并無宿同前之者之義ハ、追放ニいたし候てハ、其以後又惡事をも仕出し申族も御座候間、ヶ樣之類ハ非人之手下に相渡可申候哉、

右之通可然奉存候

二月　評定所一座

右丑二月十七日、水野和泉殿江上ル、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保六辛丑年二月十七日
同十六日、和泉守殿三奉行江被仰聞候は、先日書付差上候、追放者非人手下江遣候義、非人方にて致欠落候得ば同樣之義ニ有之候、向後追放者之義相伺可申之旨、御口上ニ而被仰聞候事、

〔公裁秘錄〕遠島者減方之事

一大勢遠島者在之候而は如何ニ候間、向後死罪か遠島かと存候程之者は、吟味之上重追放可申付候、

右之類追放ニ成候而も、猥りに追放申付候事ニ而は無之候、唯今迄江戸拂申付候等之者ハ、唯今迄之通可被相心得候、

右之通被仰出候間、自今此趣を以、御仕置可被相伺候、以上、

丑三月　〇享保六年

〔牧民金鑑二十〕享保七寅年二月廿二日御書付

科人放之事

右科之品ニ依而、扶持を召放し候歟、或ハ家財闕所、又は其品輕くは過料等それ〳〵に可被申付儀ハ勿論ニ候、件之惡事有之候もの、領內ニ差置候を嫌ひ、他所江放遣候儀ハ有之間敷事ニ候、近年於公儀は、追放もの先は無之樣ニ被仰付候間、於國々所々、其旨を存、猥ニ追放有之間敷候、然共喧嘩などニ而、雙方疵付候もの歟、又ハ侍など品により追放被申付、却而可然趣も可有之候間、其段ハ格別之事ニ候、

右之通可被相心得候、以上、

寅二月　〇又見撰要永久錄

〔憲敎類典四ノ五評定〕享保七壬寅年三月十五日

水野和泉守殿御渡

追放者之儀ニ付御書付　　御勘定奉行江

今度追放御仕置無之樣に被仰出候に付前々追放に成候もの、追放御免之儀願出候はゞ、右願取

上、吟味之上差免可レ申候、以上、

寅三月

六月十四日

和泉守殿江上ル

追放もの、儀ニ付伺書

私領にて追放申付候もの、赦免之儀、奉行所江願出候ものハ、地頭江願候様にと申渡、私共方ゟ地頭江申通候儀御座候得ども、不レ埒明レ候由を申、度々罷出候様之類、自今ハ頭有レ之面々は、其頭ニ申通じ、頭無レ之面々ハ、其地頭江直に相通じ、其以後罷出候はゞ、此分に而者取上ケ不レ申候様にと奉レ存候、以上、

寅六月十四日

右之通可レ相心得レ旨、寅六月廿日和泉守殿被レ仰聞レ候、〇下略

〔評議書〕寛政元年七月廿六日

伊豆守殿江 備前守 河内守 但馬守 立會下り物相添御直ニ上ル、酉九月三日、御同人一座評議之通相濟候旨被レ仰聞レ候、

但右一件評議之内、此別紙計寫置伺書ハ略ス、

別紙

別紙評議仕申上候、大坂町奉行相伺候、名目銀貸付方之儀ニ付、不届之取計仕候者之儀、先訴之出入濟方ニ差詰、調達手當之間、期を延申度存、名目銀借請居候妾ニ取拵、返濟相滯候旨、支配人共ゟ爲レ相願レ候もの共、大坂町奉行重、中輕追放與相伺申候處、右科之者一件之內、九十人餘有レ之、多人數追放申付候も如何ニ可レ有レ御座、御定上卷追放之儀ニ付、御書付ニも科之品ニ依而扶持を召放候

歟、或ハ家財欠所、又は其品輕くハ過料等、夫々ニ可被申付儀ハ勿論ニ候、件之惡事有之候者、領内ニ差置候を嫌ひ、他所江放遣候儀ハ有之間敷事ニ候、近年於公儀ハ追放もの先ハ無之樣被仰付候間、於國々所々其旨を存、猥ニ追放有之間敷、然レ共喧嘩などニ而雙方疵付候もの歟、又ハ侍など品ニ寄追放被申付、却而可然趣も可有之候間、其段ハ格別之事與有之候を見合候而も、多人數追放申付候事は有之間敷筋與奉存候、依之別紙評議仕申上候通、類例相糺候處、右類例居町拂申付候もの丶、科ニ似寄、右より品輕く御座候間、過料錢拾貫文與評議仕申上候儀ニ御座候、以上、

酉七月

〔御定書百箇條〕關所を除、山越致候者幷關所を忍通候もの御仕置之事、

從前々之例

一關所難通類、山越等致候者、　於其所 磔 ○中略

同

一同忍通り候者　重追放

〔御定書百箇條〕地頭江對し強訴其上致徒黨逃散之百姓御仕置之事

寛保元年極

一頭取　死罪

同

一名主　重追放

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從前々之例

一御林之竹木申合盜賊致候もの　頭取 重追放

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

寛保元年極

一人を殺候旨申掛いたし候もの　一通之申懸に候は　重追放

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

寛保三年極追加

一遺恨等を以、拾人以上結徒黨を狼藉之上、人を殺候においては、　頭取 獄門 ○中略

同追加

一同狼藉いたし、諸道具等於爲損候には、　頭取 重追放

〔官中秘策二十〕諸浪人村々江參り、無謂合力ヲ請、旅籠錢等不拂、村次人足を乞召連通ニおいては

重追放、

〔兼胤公記〕寶暦九年五月七日、竹内式部仕置申渡之趣、爲心得差越之由、

申渡

徳大寺家家來数屋町丸太町下ル町植地屋六之助借屋ニ罷在候　竹内式部

其方儀、堂上方江神書相傳候、堂上方ニは神道其家々も有之事ニ候得者、被相望候トモ、相斷可申處、無其儀、殊經學計指南いたし候由申候得共、靖獻遺言等、堂上方江致講釋、其上三本木江堂上方被參候節、罷越酒宴いたし、都而教方不宜ニ付、堂上方弟子之分御咎被仰付候、殊ニ色々軍書武器等之風聞等有之候付、武藏、相模、上野、下野、安房、上總、下總、常陸、山城、攝津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、甲斐、駿河、河内、近江、丹波、越後、

右國々追放被仰付候〇中略

卯五月

〔的例黄紙之寫〕重追放

安永三午二月右京大夫殿御下知　松平對馬守懸

一伊豫國南神崎村外四ヶ村と、同國上下麻生村用水論之上打合、南神崎村百姓庄兵衛外壹人變死一件之内、

加藤覺十郎領分豫州浮穴郡下麻生村　庄屋清右衛門

此清右衛門儀、南神崎村下四ヶ村ゟ筧江小土手堀崩、又は筧取除、大勢場所ニ相詰罷在、難捨置候ハ者、領主役所江訴、差圖を可請處、無其儀、爲用心棒鍬持出可然旨、兵右衛門申聞候を差留も不致故、猶又兵右衛門より百姓共江申觸、太鼓を爲打、人數を集雙方百姓共矢取河原ニ

而石を投合、又は棒鍬ニ而打合、互ニ疵負候內、南神崎村庄兵衛、矢倉村作右衛門右疵ニ而相果候始末ニいたし成し候段、庄屋役乍勤、旁不屆ニ付重追放、

御仕置附

右御定之但書ニ、荷擔人中追放と有之候得共、此者は庄屋之儀ニ御座候、地頭江對し强訴、其上徒黨いたし逃散之百姓御仕置之ヶ條ニ、頭取死罪、名主追放、組頭田畑取上所拂、惣百姓村高ニ應じ過料與有之、右名主之御定を見合、重追放と御仕置附仕候、

松平隱岐守御預り所同國伊豫郡南神崎村

水才許人 佐野七

善兵衛

此佐野七、善兵衛儀、寬江小土手差障ニ成候趣、麻生村江懸合不致、承引候はゞ御預り役所江訴差圖可請處、麻生村ニ而取繕置候小土手を私ニ堀下ゲ、殊ニ瀨淩ニ出取除候を取請誰仕業ニ候哉不相知候はゞ、猶又麻生村江對談之上取鎮可申處、却而夜中大勢右場所江詰居り候故、上下麻生村々も大勢罷出、雙方石を投合、又は棒鍬ニ而打合、互ニ疵負候內、庄兵衛、佐右衛門右疵ニ而相果候始末、此ものども最初之いたし方卒忽より事起り、不屆ニ付重追放、

御仕置附

右南神崎村外四ヶ村大勢罷出候も拾人以上ニ而罷出候百姓共者、前書上麻生村百姓與同樣之趣意與御座候處、一體此もの共最初之取計ひ々事起り候間、强訴徒黨之頭取死罪之御定ニ一等輕く、兩人とも重追放と御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永七戊十二月佐渡守殿御下知　桑原能登守懸

入墨之上重追放

一上州穴原村佐左衛門、同國薗原村叔父伊兵衛方ニ而及狼藉候一件之內、

布施彌市郎御代官所上州利根郡穴原村　組頭佐左衛門悴　すわ

此すわ儀、佐左衛門酒ニ給醉、叔父伊兵衛方江參、金子無心申懸及口論、脇差を拔切懸ケ、品々及狼藉候ニ付捕押、番人附置候處逃去候段無相違、殊ニ江戶表江罷出候節、佐左衛門同道いたし罷出存命之段存乍罷在、伊兵衛方ニ而打殺、卽品川江流候旨、僞之儀取拵、人殺之申懸いたし候段不屆ニ付重追放、

御仕置附

右弟江對し人殺之申懸致候ものニ御座候間、人を殺候旨申懸いたし候もの、一通り之申懸之御定ニ而重追放與御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永八亥七月右京大夫殿御下知　山村信濃守懸り

一備中國乙島村傳藏外貳人、御材木伐採候一件之內、

守屋彌惣右衛門御代官所備中國淺口郡乙島村百姓　傳藏

此傳藏儀、薪ニ差支候迚、御林江立入、桐六本盜伐いたし候段不屆ニ付重追放、

御仕置附

右御定書ニ、御林之竹木申合盜伐致候者頭取重追放、頭取ニ准じ候もの中追放、同類過料、右之通有之、此ものは壹人ニ而御林木伐採候間、頭取之御定ニ而重追放與御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永元辰七月右近將監殿御下知　朱書手限　安藤彈正少弼懸り

一下總國市川村百姓小兵衛悴無宿河右衛門御構之地江立入候吟味

伊奈半左衛門御代官所下總國葛飾郡市川村百姓小兵衛悴

當時無宿　河右衛門

此河右衛門儀、敲之上中追放御仕置相成候身分ニ而、御構之地江立入、其上村役人を可致殺害抔及雜言、叔母聟佐平次方江踏込あばれ候段不屆ニ付、入墨之上重追放可申付哉、

御仕置附

此者は度々あばれ所を爲騷候ものニ付、當四月廿七日、敲之上中追放御仕置申付候處、同五月十六日、居村江立歸り、あばれ候儀、直ニ居村江立歸り候儀ニは無御座候得共、御構之地江立入候計ニは無之、村役人を可致殺害抔雜言申、殊ニ叔母聟佐平次方江踏込、又候あばれ候段御仕置を不相用ニ相當り可申哉ニ付、右御定之但書ニ准じ、最前之御仕置より一等重く、入墨之上重追放と御仕置附仕候、

〔的例黄紙之寫〕重追放

安永二巳八月、右近將監殿御下知　安藤彈正少弼懸

一武州上瓦葺村懸渡井御普請御材木之儀ニ付、同國向山村外三ヶ村一件之内、

宮村孫左衛門當分御預り所武州足達郡向山村名主　政右衛門

大岡伊織知行同國同郡宮下村名主　小平次

此政右衛門、小平次儀、御材木車與乍存、喜平次同意いたし、百姓ども大勢差出右車差留、御普請役ゟ兩度迄呼出候節も不罷出始末、一同不屆ニ付、兩人とも敲之上重追放、

右御仕置附

右差當例相見不申、遺恨を以十人以上結徒黨致狼藉、諸道具損さし候もの、頭取は重追放、荷擔人所拂之御定ニ見合、遺恨を以徒黨致候ニは無御座候得共、欲心ニ拘リ、其上對公儀候儀ニ付、右御

中追放

定々は格別不屆ニ御座候間、右頭取之御仕置ゟ重、遠島、政右衞門小平次は荷擔人ニは無之、同意いたし候ものニ御座候間、敲之上重追放と御仕置附仕候、

〔御定書百箇條〕裁許幷裏書判不請者御仕置之事

從前々之例
一裁許不請者　中追放〇中略

同追加
一裁許相濟候儀を内證にて不用破候者　中追放

〔御定書百箇條〕關所を除山越致候者、幷關所を忍通候もの御仕置之事

從前々之例
一口留番所を女を連忍通り候者　中追放

但女ハ、領主江可引渡、

〔聽訴秘錄 二〕貞享二年三月十八日

一女中山崎事、不屆ニ付而御追放被仰付之、〇中略

仰渡之次第

申渡之覺　　山さき

一今度山崎儀、中性院事ニ付而、不謂義を取持仕候段、不屆千萬ニ被思召候、依之追放被仰付もの也、

右之段、山﨑勘解由宅江、御留守居内藤出羽守、酒井能登守相越申渡之、

御追放之所々　江戸十里四方　京都　大坂　堺　奈良　伏見　大津　東海道　日光街道
甲府　房州　紀州　水戸

〇按ズルニ、是ハ卽チ中追放ノ構地ナリ、蓋シ百箇條ノ制定以前ノ定ナラン、

〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類

元祿十二年卯四月廿六日
壹人源六　是ハ富澤町甚兵衞旅人、江州大津寺町源左衞門養子、此者養父源左衞門、同國膳所ニ罷在候甚兵衞、茂兵衞、幷手代利左衞門と申者方江、米代金爲ニ手付、金貳百五拾兩相渡候由之出入ニ付、證文幷通帳ニ押候源左衞門判形致ニ相違ニ候ニ付、於ニ評定所ニ僉議之上、不屆之仕形ニ付、當二月十四日、評定所ゟ源左衞門牢舍申付候、依ニ之此者儀養子故父一所ニ罷在候上ハ、養父之仕形存候哉と度々召寄遂ニ僉議ニ候處、四年以前子八月、源左衞門方へ養子ニ罷越候處、曾而樣子不ニ存候由申候得共、源左衞門不屆ニ付、此者儀も今日牢舍、
右之者於ニ評定所ニ　江戸十里四方　山城國　大坂　堺　奈良　大津　東海道　日光海道　甲府　名護屋　和歌山　水戸　同卯五月六日追放

〔御仕置例類集一ノ二十九〕文政元寅年御渡
町奉行永田備後守伺
一上總國寄瀨村百姓久五郎悴茂兵衞後家不仁之取計いたし候一件
松平織部正領分上總國夷隅郡寄瀨村百姓久五郎悴茂兵衞後家　すて
右之もの義、當二月晦日、江戸表江出元主人小船町三丁目四郎右衞門店、死失藤兵衞母うの方江七歲ニ相成候娘きくを連、無給金ニ而相勤度旨申込候處、承知ニ而折節うの持病之積氣差發、此ものは介抱之致方兼而相辨居候ニ付、兩三日介抱致候內、きく儀一體病身ニ而步行も陸々不ニ相成、其上癇症差發候節ハ强泣、此もの手を不ニ放、同三月三日夕方、うの癪氣强く差發、介抱致候處、其節きく泣出、外江連出、相宥候得共不ニ泣止、人手を賴候事も不ニ相成、右體病身之小兒有ニ之候而ハ召仕申間敷、殊ニうの介抱も不ニ行屆、其上國元江歸リ候而も、舅幷實父共貧窮ニ而、長々厄介ニ相成居候も難儀ニ存、右之義を存迫り、娘きく無ニ之候はゝ、うの病氣介抱も存寄通りニ行屆可ニ申與、一

途ニ存詰、きくを江戸橋上ゟ川中江投込候始末、元主人之病氣介抱致方存、右始末および候とハ乍申、人情ニ有之間敷、不仁之仕方不屆ニ付中追放、

此義娘きく罷在候而ハ、外江奉公住も不相成、國元江歸り厄介ニ相成候も難儀ニ存候由之申立も有之候得共、うの介抱難行屆故而已之心底ゟ差詰、きくを殺候儀共難申、併きく不罷在候はゞ、うの介抱も存寄通可行屆与之心取も有之、旁右始末および候ものニ付、非分無之實子養子を殺候親、短慮ニ而不斗殺候はゞ遠島与有之候御定江ハ難引當、先例相糺候處、此度備後守申上候例之外、差當相見不申、依之再應評議仕候處、右例之平次郎ハ死罪ニ可相成、致盜候ものニ候處、全く養父之困窮を可救心底ゟ仕成候故を以、御仕置弛ミ中追放ニ相成候儀ニ而、右段取ニ見合、非分無之子を殺候もの遠島之御定ゟ見おろし候得バ、今般之すて儀、輕追放ニ相當、尤一途ニ主人之介抱難行屆故与之心底ゟきくを殺候儀ニ候はゞ、親子之愛情をも打絕候程、主恩之厚を存候事ニ付、於義理ニ盜いたし候共譯違、前々段取等見合、御仕置附候筋ニも有之間敷候得共、主人之介抱不行屆与之存意而已ニ差迫候ニも無之候ニ付、例之段取同樣格別ニ弛ミ候も相當仕間敷候間、前書御定ゟ一等輕く伺之通中追放、

朱書評議之通濟

〔類例秘錄三〕一甲州上大野村入墨織兵衛、博弈一件、吟味中牢屋敷出火に付引出候節逃去候始末吟味伺、

書面織兵衛先達而不屆有之依科、入墨之上敲御仕置に相成候後も不相愼、甲州駒飼宿外貳ヶ宿野田山中におゐて、名住所不存もの共手合に加り、廻り筒賽博弈度々致し、其上牢屋出火之節、番人引出候處、其儘不立歸、始末不屆に付、中追放申付、御構場所徘徊致間敷旨申渡、證文取之可被差出候、則別紙御構場所書付、左之通相達候、以上、

入墨之上中追放

戊六月
中追放　御構場所
江戸拾里四方　日本橋ゟ四方に五里宛
甲斐國
右之場所徘徊すべからざるもの也
文政九年六月

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年十月七日、飯泉喜内等三十七人、死罪流罪等處刑各差アリ、〇中略
御同人〇鷹司殿御家來三國大學、中追放、〇中略
三條殿御家來因幡守悴森寺若狹守、中追放、〇中略
青蓮院宮御家來伊丹藏人、中追放、〇中略
三條殿御家來森寺因幡守、中追放、〇中略
三條殿御家來丹波豐後守、中追放、〇中略
同町〇信州松本町大名主茂左衞門、中追放、
廿七日、吉田寅次郎等二十三人、死罪流追放等各差アリ、〇中略
常州茨城郡、鈴高野村、手跡指南、黑澤季恭事とき、中追放、〇中略
二九御留守居古賀謹一郎家來藤森恭助、中追放、

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重キねだり事致候もの御仕置之事、
從前々之例
一賣人買人を拵似セ物商ひ候もの　入墨之上中追放

〔御仕置例類集 一ノ八〕文政八酉年御渡
火附盜賊改長井五右衞門伺

敲之上中追放

一南品川宿三丁目金次郎悴鐵五郎、博弈又はねだり事いたし候一件、

南品川宿三丁目佐兵衛店金次郎悴　鐵五郎

右之もの儀、ゆすり事可致と、所々町家見世江罷越、博弈相催候由及承候間、手合之もの同道致可参問、宅貸呉候様跡形も無之儀を申、或は致口論候砌、中江立入呉候得共、見廻にも參不申候迚、難題申掛、見世之邪魔に相成候様、彼是申募、銀子ゆすり取、右銀子不殘遣捨、又は品川邊地名不存海邊汐之干潟に而、船乘體之もの五六人手合に加り、廻り筒に而五拾錢百錢賭之簺博弈致兩度候段、不屆に付入墨之上敲、

但親金次郎江引渡

此儀致博弈候科は、寛政六寅年之御書付に而重敲に相當、ねだり致候方重々不屆に御座候、右ねだり致し候段、吟味書之趣に而は、都合三度に而、金三分ねだり取候由に有之、御定書巧成儀申懸、度々金子等かたり取候もの、金高雜物之不依多少、獄門と有之候處、巧候と申程之儀にも無之、殊全くかたりには無御座、ねだり致候ものに付、寛政五丑年小田切土佐守、町奉行勤役之節、伺之上御仕置申付候、長五郎屋敷佐助店吉五郎事、こなみ源藏儀、六之助其外之もの共と連立、嶋田正甫家前相通候節、錢之音致候を承、博弈可有之と申、一同正甫方江立入、彼是六ヶ敷申掛、金貳分貳朱ゆすり取、貳朱宛致配分、又は壹人立町屋四ヶ所江罷越、金子無心申掛、及斷候迚彼是六ヶ敷申罵、金錢ねだり取、都合三分三百文は追々酒食雜用等に遣捨候段、不屆に付入墨之上重追放申付候例有之、右は申合罷越候儀等も有之、一體之始末右例ゟ品輕く御座候間、入墨之上中追放、

朱書　評議之通濟

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

前々ゟ之例
一御褒美可ㇾ取巧にて僞之致ㇾ訴人ㇾ候者　敲之上中追放

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

従二前々一之例
一あばれ候て町所をさわがし候もの、　敲之上所拂

寛保二年極
但所々にてあばれ候におゐては敲之上中追放、

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永元年辰十一月右京大夫殿御下知　松平對馬守懸

一武州弁塚村彥右衛門方ニ而及二狼藉一候、無宿勇七一件、　無宿　勇七

此勇七儀、彥右衛門母淨貞名前ゆくと申候節、得心も無ㇾ之處、女房ニいたし度旨欠込訴いたし、殊ニゆく江對し申分無ㇾ之段、伊奈半左衛門江書付差出候後、心外ニ存候迚、彥右衛門方江罷越、理不盡ニゆくを貰懸ヶ不ㇾ立歸、親長兵衛江引渡ニ相成候處、ゆく剃髮いたし候由承り、又々彥右衛門方江罷越、脇差を拔、同人江切懸及二狼藉一候段、旁不屆ニ付、敲之上中追放、

御仕置附

右御定書ニ、あばれ候而町所をさわがせ候もの敲之上所拂、但所々ニ而あばれ候ニおいては敲之上中追放と有之、右勇七ハ所々ニ而あばれ候ニは無ㇾ之候得共、理不盡ニ兩度迄彥右衛門方江罷越、同人母ゆくを貰ひ懸ヶ不ㇾ立歸、剰壹度ハ脇差を拔、彥右衛門江切懸ヶ及二狼藉一候ニ付、右但書之御定ニ准じ、敲之上中追放と御仕置附仕候、

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永三午年四月、右近將監殿御下知、　安藤彈正少弼懸

一野州栃木村ニ而召捕候、湯澤四郎左衛門と名乘候圓八外壹人吟味一件、

戸田長門守領分野州足利郡足利裏町湯澤四郎左衛門と名乘候

鉦町 圓八

此圓八儀、石州衣山大々神樂勸化之儀、御門主ゟ御免有レ之勸化として相廻し候旨、御師共印形致、願主四郎左衞門奧印いたし候書付、栃木町十五郞ゟ請取、勸物取立として、村々相廻り候上は、得與承糺可レ罷出處、無二其儀一其上湯澤四郞左衞門と名乘帶刀致シ、小七を荷持ニ雇、繪符を差、村々相廻り、勸物取立候段、旁不屆ニ付中追放、

右御仕置附

右御定書ニ、自分ニ帶刀いたし罷在候百姓町人刀脇差ともニ取上輕追放與有レ之、此ものは外不埓も御座候間、中追放と御仕置附仕候、

〔御仕置例類集一ノ三〕文政九戌年御渡

御勘定奉行伺

一長脇差を帶候無宿共御仕置、當分改革之儀評議

當月七日致二評議一可二申上一旨被二仰聞一御渡被レ成候、御勘定奉行相伺候書面一覽仕候處、近來惡黨、無宿共次第ニ增長脇差を帶、中ニハ四五尺位之大刀、鎗、鐵炮仕込等致二所持一候もの關東在々徘徊致、時時黨を結び喧嘩を催、刃傷および、農業等ニ罷出候、女子子供を取押、强婬および、或ハ寺院百姓家江相越、品々難題申懸、金銀貪取、又ハ途中ニおいて及二殺害一候故、農業ニ罷出候儀も安心不レ致、夜分も快寢いたし兼、良民悉難澁仕、其上百姓共内ニも若ものどもは心得違ひいたし、右惡風を見眞似、長脇差を帶、惡事致候ものの追々相增候間、御仕置之儀、是迄之通ニ而ハ風儀立直リ候ハ勿論、惡黨共相減候樣ニハ至リ申間敷、畢竟右樣長脇差を帶候惡黨共、召捕吟味之上、平生之强惡格別之聞有レ之候もの等ハ、佐州江水替爲二人足一差遣候得ども、是以當時之姿ニ而ハ、懲惡之筋ニ不二相成一候間、此上格別之嚴科ニも被レ處候はゞ惡黨ども恐怖いたし、百姓ども風儀も自ら惡業ニ不レ移樣罷

成、無宿共之內ニも致改心候ものも出來、良民安堵致候樣可成行哉ニ付、長脇差帶、又ハ帶候儀無之抔申立候共、召捕候節致所持居、惡事ニ携候分ハ、當分之內、一般ニ死刑ニ被仰付候はゞ、取締ニも相成、風儀立直可申哉ニ付、當分之內、前書見込之趣を以、長脇差帶、惡事致候もの御仕置相伺、尤伺之通被仰渡候はゞ、長脇差を帶し步行、惡事致候もの共ハ重刑ニ被行候段、關東在々江觸置、其後召捕候ものゟ、改革之趣を以、相伺候樣可仕哉之段相伺申候、

此儀關東在々取締方、前以御勘定奉行おいて、精々心附候儀ニ御座候得共、追々惡風致增長、既當二月以來ハ、多人數徒黨を結び、鎗、鐵炮等をも致所持、强惡相募候次第ニ候上ハ、所詮一通り之儀ニ而風儀立直り、良民安心致候樣ニハ相成申間敷、尤長脇差を帶、又ハ致所持居候とも、左迄之惡事不相顯もの、一般ニ死刑ニ被處候ハ、不隱樣ニも御座候得共、如何樣强惡有之候而も、其場所ニ而卽座召捕候歟、或ハ面體名前等、兼而相分有之候分ハ格別、先ハ誰々仕業與、聢與取留候儀無之、左候得バ嚴敷吟味可仕手掛無之候ニ付、長脇差致所持候ものニ而も、一通り博奕等白狀之趣を以、敲追放等之御仕置申付候事故、良民之惱不相止、追年惡黨相增候儀に有之、素素身分不相應之長脇差を好候程之ものどもニ候得バ、强惡致間敷樣無之、右樣之もの、嚴科ニ被處候段ハ、万民之害を除キ候而已ならず、無宿共恐怖改心いたし百姓共も惡黨ニ不押移、年月不立內、風儀立直り、一殺多生ニ而、則格別之御仁惠ニ可有御座、只今迄之姿ニ而ハ、關東在々手廣之儀、旁惡黨共滅可申期相見不申候間、長脇差を帶、又ハ致所持步行惡事いたし候もの共ハ、向後死罪、其外重刑ニ被行候旨、關東在々江相觸、其段認村每高札場、幷村役人宅前江、悉張置候樣申渡、其後召捕候ものより、當分死刑之積り、且長脇差を帶、又ハ致所持步行候而已ニ而、外ニ惡事無之分ハ遠島之積取調相伺、死刑ニ相成候分ハ、其場所々江科書捨札をも爲建可申儀與相心得候樣、御勘定奉行江被仰渡可然哉ニ奉存候、

輕追放

戌六月〇再評議書略

〔御定書百箇條〕二重質二重書入二重賣御仕置之事

寛保二年極
一田畑屋敷二重に質入致候者　名主　輕追放

〔御定書百箇條〕縁談極候娘と不義致候者之事

寛保三年極
一縁談極候娘と致不義候男　輕追放

但女ハ髪を剃親元江相渡

〔御定書百箇條〕人殺并疵付御仕置之事

寛保四年極追加
一親被殺候死骸見届候得共、物入を厭ひ、村役人等相談之上、不訴出押隱候儀顯おゐては、　名主　輕追放

〔御定書百箇條〕帶刀いたし候百姓町人御仕置之事

従前々之例
一自分と致帶刀罷在候百姓町人　刀脇差共取上　輕追放

〔御定書百箇條〕御仕置に成候ものゝ欠所田畑を押隱し候もの咎之事

寛保四年極
延享二年極
一欠所に可成田畑地面押隱におゐては　名主　輕追放

〔的例黄紙之寫〕輕追放

安永二巳四月、佐渡守殿御下知、　安藤彈正少弼懸

一下總國新市場村百姓木工右衛門忰木工之丞事、齋宮我儘いたし候吟味一件之內、

中山伊勢守知行下總國香取郡新市場村百姓木工右衛門忰

木工之丞事　齋宮

此齋宮儀、木工右衛門跡株は妹きよ聟養子いたし、相讓り候積りニ而、江戶表江出、侍奉公又は醫業抔いたし候とも、村方江立歸り帶刀いたし間敷處、木工右衛門方江參り逗留いたし、帶刀

ニ而歩行、妹きよ幷妹聟兵助を掠、殊ニ長持之內ニ有之衣類三ッ取出し、却而兵助夫婦盜出候抔申懸、難居遂樣ニ致し成し、其上作德米立木等我儘ニ賣拂、親江對し申爭ひ、村役人之申付をも不相用段、旁不屆ニ付輕追放可被仰付哉、

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政四子年五月　町奉行　池田筑後守掛

松平和泉守殿御差圖

一駒込片町大圓寺天瑞寺內に女を差置候一件　駒込片町大圓寺召仕中間　甚助

右之もの儀、博奕之儀は嚴敷御觸も有之處、御法度相背、貳三錢賭之寶引、又は七八錢賭之簔博奕兩度致し、其上惠忍より貰候餅菓子に中り食傷致し候を、毒をも入候哉と相疑、同人を打擲及び、且大圓寺女を境內に差置、不束成儀を見込、同人申付も不相用、不法我儘之勤方いたし候段、主人江對、不屆之至に付輕追放、

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

寛保二年極
一家藏え忍入候盜人に被賴、盜物持運、配分取候者、　敲之上輕追放

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政元酉年十二月　御勘定奉行　根岸肥前守掛

松平和泉守殿御差圖

一武州鎌形村ニ而捕候無宿吉五郎一件　無宿　文次郎

右之もの儀、盜賊吉五郎外貳人致盜候樣申勸候ニ致同意、其上右之もの共ゟ衣類脇差等貰候始末不屆ニ付敲之上輕追放、

右御仕置附

右盜惡事いたし候儀は無之候得共、吉五郎外二人儀盜可致旨申勸候ニ致同意、右盜賊どもゟ衣類脇差等貰請候始末は、家藏江忍入候盜人ニ被賴、盜物持運配分取候もの、敲之上輕追放之御定

晒之上耳をそぎ追放

晒之上鼻をそぎ追放

ニ引當、同樣之趣意ニ御座候間、敲之上輕追放、

〔御仕置裁許帳 九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類幷請人之方江參あたけ申者、

天和二年戌十月廿五日

壹人與五左衞門　是は喜左衞門町八左衞門店之者、此者請に立、大塚彌助と申者を、植村右衞門佐方江奉公に出し置候處、白壁町彥兵衞と申者彌助元請人に而辨金有之由、彌助主人江彥兵衞斷候に付、主人ゟ金子五兩餘出し埒明候處に、彌助致欠落候由にて判有之候に付、彌助を可尋出旨證文申付候得共、不尋出候間、日切度々相延候、其外二ヶ所江奉公人之請に立候處、其者共致欠落候に付、評定所ゟ籠舍、

右之者、日本橋に三日晒、同戌十月廿八日、耳をそぎ追放、

同日

壹人吉右衞門　是は赤坂裏傳馬町六右衞門店之者、此者新肴町半左衞門方より、人請之出入有之ニ付、手鎖を掛置候處、其外方々より、人請出入有之候、不埒明候ニ付、今日評定所江召出、穿鑿之上手鎖を外シ籠舍、

右之者日本橋ニ三日晒、同戌十月廿八日、耳をそぎ追放、

〔御仕置裁許帳 九〕奉公人之請人に立致不埒者之類幷請人之方江參あたけ申者、

天和二年戌十月廿五日

壹人七兵衞　是は南小田原町貳丁目安兵衞店之者、此者請ニ立、稻葉出羽守方江、笠松傳左衞門と申者を、奉公に出置候處、主人方より暇出シ、返リ金拾貳兩餘有之候ニ付、主人方より斷有之不相濟候內、傳左衞門致欠落候、其後於品川見付預ケ置候由申候得共、樣子不埒ニ付、其外三ヶ所之奉公人之請ニ立、返リ金滯リ不相濟候ニ付、評定所より籠舍、

右之者日本橋ニ三日晒、同月廿八日、鼻をそぎ追放、

同日

壹人角兵衛　是は神田紺屋町市左衛門店之者、此者請ニ立、安兵衛と申者を、麻布市兵衛町德左衛門方江、奉公ニ出シ置候處、致欠落候ニ付、主人訴訟申出、遂穿鑿候處、不屆之義有之、其外六ケ所奉公人之請ニ立候處、其者共致欠落、返リ金滯不相濟候ニ付、評定所より籠舍、

右之者日本橋ニ三日晒、同月廿八日、鼻をそぎ追放、

江戸二十里四方追放

〔御仕置裁許帳五〕博弈を打者之類

寛文八年申八月廿八日

壹人德右衛門、　是ハ稻葉美濃守殿領分、本町甚兵衛門下人、相州小田原筋違橋町庄右衛門後家召仕博弈打穿鑿之儀ニ、美濃守殿ゟ捕來ル付籠舍、

右之者、同申十月十二日、在所幷江戸廿里四方追放、

〔御仕置裁許帳八〕似せ五人組、似せ名主仕者之類幷金子肝煎仕者、

寛文九年酉九月十三日

壹人八左衛門、　是ハ新肴町小八郎屋守、同町宇右衛門似せ五人組を作り、三十間堀四町目權右衛門店吉兵衛方ゟ金子を借リ候節之肝煎成ル故、穿鑿之內、當七月ゟ手鎖を懸、町之者ニ預ケ置候處、出入不埒明候ニ付籠舍、

右之者、戌二月十九日、江戸日本橋ゟ廿里四方追放、

〔御仕置裁許帳三〕武士方辻番人死骸を捨る者、同隱密に埋置者、幷手負を見損じ通す者、或人を討立退者不留置者、

寛文十年戌三月十八日

壹人清右衛門　是は野村彥大夫支配牛込御門外御堀端之辻番之者、今月十三日、辻番近所御堀之內に、死人うば有之候を、御步行目付衆野村伊大夫方江致斷、差圖無之處捨候科により、土井能登守殿より斷ニ付、穿鑿之內牢舍、

右之者、同戌四月十八日、江戶貳拾里四方追放、

入墨之上江戶二十里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

寬文五年巳六月十六日

壹人彌右衛門　是は無宿、此者松浦肥前守家來鷲嶋四五右衛門方江、久助と申中間之請に立出し候處、久助致欠落候、此者も致欠落候處、今日湯嶋天神前に而、主人見出し捕來に付籠舍、

右之者、額に惡之字を彫付、午十一月廿九日、江戶廿里四方追放、

江戶十里四方追放

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例
一江戶拾里四方追放　日本橋ゟ四方江五里ツヽ

延享元年極
但在方之者ハ居村共構欠所無之、然共利欲に拘り候類は、田畑家屋敷欠所、尤年貢未進等有之候はゞ家財とも欠所、

〔御定書百箇條〕質地小作取捌之事

寬保元年極
一御朱印地寺社領屋敷共讓渡質に入候寺社　江戶十里四方追放

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寬保元年
一取逃之儀乍存、奉公人計隱置候請人人主、　江戶十里四方追放〇中略

寬保元年
一自分之名を替、奉公人之請に立候もの、　江戶十里四方追放〇中略

從前々之例
一寄子致欠落、參候儀存候得共、盜人と不存宿致し、雜物質置主に成、世話致遣、配分は不取者、　江戶十里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕捨馬仕者之類、幷馬を打殺者、同怪我にて殺者、附酒狂にて切殺者、

元祿三年午四月十八日

壹人平兵衛　是は內藤上野介組、服部又次郎知行所、常陸作屋村之酒屋、此者馬を打殺候に付、可爲致牢舍之旨、大久保加賀守殿被仰渡、上野介家來在田藤大夫、又次郎家來稻川角左衛門召連來る付牢舍、

右之者、同午五月六日、江戶十里四方幷在所共に、於評定所に追放、

〔御仕置例類集三ノ六〕寬政四子年二月

戶田采女正殿御差圖　　町奉行　池田筑後守掛

一檜物町與三右衛門衒致候一件　通三町目平次郎店　平藏

右之もの儀、與三右衛門江馴合配分取候儀は無之候得共、與三右衛門儀、南嶺荷物を持參候上は、與三右衛門計兩度迄立歸り候はゞ怪敷義ニ有之處、得與樣子も不相糺宿致し、其上半左衛門方江南嶺ゟ預り置候衣類道具等、衒取り候儀與は不存候得共、與三右衛門任申旨立會取戾させ、右品々質入賣拂候、度々致世話、殊ニ與三右衛門江店借受遣し、右請人ニ相立罷在候儀とも、旁不屆ニ付、江戶拾里四方追放、

右仕置附

右南嶺荷物を持參り候與三右衛門義、南嶺を見失ひ候由ニ而、兩度迄立歸り候はゞ怪敷儀ニ有之候間、得與樣子も可相糺處、無其儀宿致し、殊更半左衛門方江、南嶺ゟ預置キ候衣類道具等取戾候間、立會候樣與三右衛門申ニ隨ヒ、衒立候儀與は不存、立會取戾させ、質入又は賣拂候、度々世話いたし候儀ニ而、馴合配分取候儀ニは無御座候間、御定書ニ、寄子欠落いたし參り候儀存候得共、盜人與不存宿致し、雜物質置主ニ成致世話遣、配分不取もの、江戶拾里四方追放與有之候、此もの之寄子ニは無御座候得共、南嶺店請人ニも相立、又は與三右衛門店持候節も、請人ニ相立罷在候

身分ニ御座候間、右御定ニ見合、江戸拾里四方追放、

江戸七里四方追放

〔御仕置裁許帳十〕御法度之新酒を造商賣仕者幷請賣仕者、肝煎仕者、

寛文十二年子十一月二日

壹人、伊兵衛、是ハ南槇町長兵衛手代之者、此者肝煎ニ而、雉子町酒屋小左衛門方ゟ箔屋町養運店小兵衛所江新酒うらせ候ニ付、穿鑿之内籠舍、

右之者、同月十五日、日本橋ゟ七里近邊追放、

江戸五里四方追放

〔御仕置裁許帳五〕博弈を打者之類

寛文十三年丑五月廿一日

壹人、道清、是ハ馬喰町壹町目吉兵衛店願人碩庵弟子、當月七日夜、神田紺屋町三町目六兵衛店きれの清兵衛所ニ而致博弈候處、此者被剝候出入ニ付、穿鑿之内籠舍、

右之者、丑十二月十三日、江戸日本橋ゟ五里近邊追放、

鼻をそぎ江戸五里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

寛文五年巳六月十五日

壹人、半左衛門　是は富澤町新道八右衛門店之者、此者拾ヶ所之請に立、奉公人を出し致欠落候、出入不相濟候に付、家主訴訟申に付籠舍、

右之者、午十月十三日、鼻をそぎ江戸五里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

寛文六年午正月廿八日

壹人、長左衛門、是ハ本郷貳町目平兵衛店之者、此者儀永井外記、加藤市十郎、万年佐左衛門、石川美作守、南鍛冶町長左衛門、湯島三町目喜右衛門、右六人江人請ニ立、不埒明候ニ付籠舍、

右之者同午十一月十五日、鼻をそぎ江戸五里四方追放

江戸三里四方追放

〔御仕置裁許帳八〕犬を殺者之類、同疵付る者之類、幷犬之子を捨る者、損ジ犬を捨る者同失者、

寛文十三年丑五月七日

壹人、權兵衛、是ハ小石川歸雲寺門前次左衛門店之者、此者方々ニ而犬を殺候由訴人有之候ニ付、先月廿九日、家主ニ召連參候樣ニと申付候處同日宿を罷出、行衛不相知候由申出、尋出シ候樣ニと家主ニ申付候へバ、今日糟壁町ニ而見出シ捕來ルニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、同丑六月廿日、日本橋ゟ三里近邊追放、

江戸拂

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例
一江戸拂　品川、板橋、千住、本所、深川、四ッ谷大木戸、より內御構

但町奉行支配場限り

延享元年極
但右同斷○在方之者は、居村共構、欠所無之、然共利欲に拘り候類は、田畑家屋敷欠所、尤年貢未進等有之候は〻、家財さも欠所、

〔寶曆集成絲綸錄三十〕延享四卯年六月

三奉行江

此度高井但馬守家來、盜物出所も不糺質物ニ差置候ニ付、過科ハ相止、江戸拂申付候、惣而武家之家來、右體之科有之候節ハ、右之通ニ候間、向後其趣ニ可被心得候、

延享四卯年十二月

三奉行江

武家之家來人ニ手疵負せ、療治代差出候御仕置相當之者も、向後江戸拂申付候樣可被心得候、

十二月

〔憲教類典四ノ六評定〕寛延元戊辰年二月

江戸拂御仕置之儀、只今迄ハ本所深川罷在候儀ハ、相構不申候得ども、向後江戸拂御仕置相當之ものハ、江戸幷本所深川町奉行支配限リ構之地可申付事、

右之趣御定書可被書入候

〔御定書百箇條〕評定所前箱江度々訴狀入候者之事

寛保元年極追加

一度々箱訴いたし手鎖に成候處、差免候以後、又候訴狀入候もの、　町在共　江戸拂

從前々之例

但宿預亦は手鎖申付候處、願不相止ものも前同斷、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保二年極

一奉公人病氣に付、宿江下候處、致快氣候へ共不相歸、外江奉公に於出は、　給金不相濟候はゞ　請人欠所　江戸拂　奉公人　同罪

寛保元年極

一寄子之內、欠落及七度不尋出請人　江戸拂

寛保四年極追加

一組合人宿には無之好身之者に付、人に印形は有合之判を用、自分請に立出置候、奉公人致欠落候處、主人方江は不相歸、又候請に立外江於奉公出候は、　給金相濟不申候はゞ　請人欠所　江戸拂　奉公人　同罪

但給金相濟候とも請人過料、奉公人手鎖、

〔御定書百箇條〕捨子之儀に付御仕置之事

寛保二年極

一捨子有之を、內證にて隣町等江又候捨候儀於顯には、　名主　江戸拂

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保二年極

一離別狀不遣後妻を呼候もの　所拂

但利欲之筋を以之儀に候はゞ、家財取上江戸拂、

寛保四年極追加

一他之家來、又は町人等、下女と致密通、忍入候もの、　男は　江戸拂

〔御定書百箇條〕盗物質に取、亦ハ買取候者御仕置事、

寛保二年極
一紛失物町觸之節隱置候もの　家財取上 江戸拂

〔御定書百箇條〕酒狂人御仕置之事

享保七年極
一酒狂にて人に爲手負候もの　被疵附候者、平愈次第療治代爲差出可申事、○中略

享保七年極
療治代
一疵之多少によらず　武家之家來 江戸拂

從前々之例
但シ町人百姓ハ銀壹枚輕キ町人百姓ハ右に准じ、療治代爲相渡可申事、

〔御定書百箇條〕牢拔手鎖外し御構之地江立歸候もの御仕置之事

享保元年極
延享二年極
一御構有之候者を隱差置候もの　追放ものを隱置候はゞ 江戸拂

〔御定書百箇條〕辻番人御仕置之事

享保八年極
一廻り場之内、捨子、亦は重病人有之候節、外江捨候番人、　死罪

寛保二年極
但倒死有之を押隱し取捨候においてハ江戸拂

〔御仕置裁許帳 八〕似セ五人組、似セ名主仕者之類幷金子肝煎仕者、

寛文七年未五月十八日

壹人、又兵衞、是は赤坂裏傳馬町貳丁目長七店之者、同町喜左衞門五間口之家を質物に入、金子を借申候時分、爲似五人組に罷成、手形に致判を候に付籠舍、

右之者、未八月十八日町奉行支配を追放、

〔向方御赦例書 四〕

御本丸附女中ふしの御菜之者
下谷廣德寺門前大嶋平左衞門方ニ元居候

享保十一年午十二月廿五日
一江戸徘徊仕間敷旨申渡候者　佐五兵衞

外壹八

右之者共女中宿より之届物幷宿江之文箱、其外品々持罷通候節、平川口御門外腰掛ニ而、佐五兵衞儀、多葉粉給候を、一ッ橋御門番井伊因幡守足輕出會、制候得共不相用及口論番人を敲候仕形、不屆ニ候、甚助儀は譯も不存、棒を持佐五兵衞取合候場江參り、致荷擔候ニ付、足輕敲候得ば、却而手向ひ致し、不屆ニ付兩人共江戸徘徊仕間敷旨申渡、

（御仕置例類集三ノ四）寛政二戌年八月

鳥居丹波守殿御差圖　　町奉行　池田筑後守掛

一池之端仲町丈六隱賣女一件　　池之端仲町忠兵衞店　丈六

右之者儀たかを抱置、去酉十月以來御法度相背、隱賣女之稼爲致、當四月八日、右たか儀家出いたし、捨五郎方江逃參候ニ付、取扱人を以對談および候得共、不相整候を心外ニ存、知ル人長吉、源次郎を相賴、同五月三日朝、捨五郎方江參り、たかを相返候樣申候處、同人儀有合候木切ニ而打掛候ニ付、此もの長吉倶ニ捨五郎を致打擲候上、同人裸之儘八幡門前番屋裏物置江連參、有合候細引ニ而卷置候處、相侘候ニ付、無間も源次郎繩を解遣、右體及口論町內騷動いたし候儀は、不埒之商賣いたし候ゟ事起候ニ付、後難之程を恐れ、又候取扱人共江任置、右出入致內濟、其後外江店替いたし候儀ども、旁不埒ニ付江戸拂○御仕置附略

（御仕置例類集二ノ五）文化四卯年御渡

甲府勤番支配伺

一甲州江草村新左衞門箱訴いたし候一件御仕置評議○中略

野田松三郎御代官所甲州巨摩郡江草村　新左衞門

右度々箱訴いたし手鎖成候處、差免候以後、又候訴狀入候もの、町在とも江戸拂ト有之御定ニ見

敲之上江戸拂

合、甲府を構江戸拂、

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化六巳年御渡

駿府町奉行伺

一駿州沓谷村龍雲寺富突ニ紛敷企致し候一件

駿州安倍郡慈悲尾村曹洞宗增善寺末
曾我伊賀守知行同州有渡郡沓谷村龍雲寺住持　林英

右之もの儀、寺修復助成之ためニ候迚、世話人札賣等相賴、七會講と唱札數四百貳拾番紙札ニいたし、一枚錢四百文宛ニ賣渡し、當り鬮六拾番竹を振鬮ニいたし、錢壹貫文より貳拾五貫文迄員數を定、當り鬮之もの江相渡候始末、富突ニ紛敷いたし方不屆ニ付、駿府幷居村を構江戸拂、

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

元文五年極

一御城内にて口論之上、拾人以上敲合、つかみ合候もの、　同荷擔いたし候もの　敲之上江戸拂

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政元酉年五月

鳥居丹波守殿御差圖

一石川左門中間利兵衛あばれ候一件

町奉行 初鹿野河内守掛

赤坂御門番石川左門中間　利兵衛

右之もの儀、市右衛門方に而蕎麥代滯り有之故、傍輩中間三平蕎麥誂候節、現金に無之候而は差越不申旨、三平立腹之體にて申聞候に付、市右衛門致し方不心能存、遺恨を含、同人召仕權八擔通り候蕎麥之箱を突落逃去、道具を損、其後又候權八金藏江無體之儀申懸候上、權八角立相立候を憤り、市右衛門見せ迄追駈參り、同人方に而被捕被縛候始末、御門番所中間相勤候身分に而、別而不埒に付敲之上江戸拂、○評議書略

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政六寅年六月

所拂

一武州青梅村宇兵衛相手椛町七五郎女房のえ外壹人紛失物出入一件

評定公事　御勘定奉行　根岸肥前守掛

椛町拾三丁目清助店　七五郎

右之もの儀、兼而定宿ニ致候、青梅村宇兵衛より預り候金百八兩貳歩餘懐中致欠落、右之内酒食遊興ニ遣捨、又は幸手宿ニ而木綿反物調、江戸表ニ而賣候はゞ利潤有之べく、左候はゞ右利潤を以宇兵衛江償ひ相詫可申與木綿商人之體ニ致成し同宿平藏方ニ而木綿買請、江戸表江相廻候始末不屆ニ付、死罪ニも可申付候處、遣捨之金子親類共より不殘償、願人宇兵衛儀も年來定宿ニ致シ、度々金子等預ケ候處、是迄不束之儀も無之間、全之心得違與存候付、助命相願候段、再應申立候間、敲之上江戸拂、

右御仕置附

右數年致定宿候、武州青梅村宇兵衛より預り候金子百八兩貳分餘を取出、致欠落遊興ニ遣候處被召捕、遣ひ殘之金子、其外遣ひ先より取上ゲ候金九十六兩壹分貳朱餘之外、遣ひ捨ニ成候拾貳兩餘は、親類共より償ひ、願人宇兵衛より助命相願候儀ニ御座候、手元ニ有之品を不斗盜取候類、拾兩以上死罪、拾兩以下入墨敲之御定も御座候得共、預り候金子を持出候儀ニ付、右御定ニも難引當、諸商物代金受取、其品不渡、外江二重賣致シ、又は取次可遣品質ニ置、幷賣拂、或は金銀橫取致候もの拾兩以上死罪、拾兩以下入墨敲、但先入牢中付、代金又は商物ニ而成共於相濟は、拾兩以上は江戸拂與有之ニ准シ、此もの儀は一旦致欠落候不屆も有之候間、例は不相見候得共、敲之上江戸拂、

〔憲教類典評定四ノ五〕正德元辛卯年四月

左之書付、當御代被仰出候留帳有之、〇中略

一追拂、追放とは譯違申候、追放は右之通御構場所、輕重相定申候、追拂は其所を追拂申候迄にて

御座候、刀脇差も渡シ遣申候、

四月　　　丹羽遠江守〇中略

〔憲教類典四ノ五評定〕享保六辛丑年五月

御仕置者之內、追放之儀、向後所拂と唱可ㇾ申候、

丑五月、

右ハ五月十二日、河內守殿御勘定奉行江御渡被ㇾ成候、

〔公裁秘錄〕

追拂唱之事

一御仕置者之內、追拂之義、向後所拂と唱可ㇾ申候、

丑五月〇享保六年

〇按ズルニ、是ハ重、中、輕追放ヲ總稱シテ所拂ト云フニアラズ、追拂ヲ所拂ト唱フルコトナリ、故ニ本書ハ追放ヲ追拂ニ作レリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從二前々一之例
一所拂　在方ハ居村 江戸町人ハ居町 拂

延享元年極
但欠所無ㇾ之、然共利欲に拘り候類は、田畑家屋敷欠所、尤年貢未進等有ㇾ之候はゞ家財共欠所、

〔御定書百箇條〕隱鐵砲有ㇾ之村方咎之事

寬保元年極
一隱鐵砲致二所持一候者　關八州之外 所拂

同
一隱鐵砲打候もの　右同斷

〔御定書百箇條〕二重質二重書入二重賣御仕置之事

寬保二年極
一田畑屋敷二重ニ質入致候者〇中略　加判人 所拂

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保元年極

一　人之仕業と相見候寄子之變死を不存分に致候もの　所拂

〔御定書百箇條〕捨子之儀に付御仕置之事

寛保二年極

一　捨子有之を內證にて隣町等江又候捨候儀於顯には　當人　所拂

〔御定書百箇條〕似秤、似升、似朱墨拵候もの御仕置之事

寛保二年極

一　似朱墨拵候もの　家財取上　所拂

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從前々之例追加

一　同(邪曲を以)人殺を取扱之もの有之、內證にて事濟候者を爲立退候儀迄乍存不訴出においては、　組頭　所拂

〔御定書百箇條〕酒狂人御仕置之事

享保七年極
延享二年極

一　酒狂にて人を致打擲候もの　療治代雖差出ものは諸道具取上、逢打擲候もの江可爲取、諸道具も無之償不成身上之ものは所拂、

同
同

一　酒狂にて諸道具を損さし候者ハ　損失之道具償可申付、不成償身上之ものは所拂、

〔御定書百箇條〕牢拔手鎖外し御構之地江立歸候もの御仕置之事

享保元年極
延享二年極

一　御構有之候者を隱差置候もの　江戸拂のもの隱置候はゞ　所拂

〔御定書百箇條〕不縁之妻を理不盡に奪取候もの御仕置之事

寛保四年極

一　聟養子不孝不埒有之差戻候以後、外之養子いたし、娵に嫁合候節、先夫荷擔人を催し參、娵を奪取においては、　荷擔人內頭取　田畑家財取上　所拂

〔御定書百箇條〕御仕置に成候もの之欠所田畑を押隱し候もの咎之事

寛保四年極
延享二年極

一欠所に可成田畑地面押隱においては　組頭　所拂

〔御定書例書〕死罪可成盗人を宿いたし候者幷村役人御仕置の事

延享二丑年十二月

一同類は無之死罪に可成盗人を乍存宿致し、配分は不取候得共宿錢貰ひ候もの、　田畑取上　所拂

〔科條類典　下　七〕一堺町加兵衛申上候、私店茂兵衛と申者、吉十郎と申野老抱置賣遣候出入有之、御穿鑿之上、籠舍被仰付、出牢之刻、名主喜兵衛支配之町中幷木挽町御拂被成、野老をば親に被下候由、被仰付奉畏候、若右之町中に罷在候はゞ、承次第急度可申上候、爲後日家主五人組名主判形仕候、

寛文六午年六月九日

家主　加兵衛

忠兵衛

五人組　五兵衛

八右衛門

名主　喜兵衛

右之もの所拂之始りと相見え申候、是より以前所拂無御座候、

〔御仕置例類集　三ノ一〕寛政三亥年十一月

一御鳥見飯田久太郎不埒之致取計候一件

松平伊豆守殿御差圖　町奉行　池田筑後守掛

伊奈右近將監支配所武州葛飾郡西葛西領龜有村名主市五郎親　新四郎

右之もの儀、先達而不埒有之、名主役後見取放ニ相成候身分ニ而、浚御普請願等取持致、其上右人足出方足錢取極等之儀、悴市五郎ニ成代り内談之趣を以、小前百姓共呼寄申談、又者右御普請申

敲之上所拂

渡之序江出、彼是卒忽之存寄等、一存ニ而申立候儀共、旁不屆ニ付村拂、

〔公裁秘錄一〕欠所心得之事○中略

文化十亥年、東海道藤澤宿旅籠屋不屆有之、道中奉行掛ニ而、田畑取上、所拂申渡有之節、右宿者坂戶町大久保町大鋸町と三ヶ町ニ而名主三人有之、町限支配いたし候處、右御仕置ニ成候ものは、大久保町ニ住居いたし候間、居町計ニ候哉、又者一宿不殘拂之事ニ候哉、差添宿役人より心得方相伺、取調之上村方と違ひ、宿場之儀、市中も同樣ニ而一宿拂候者、不相當ニ付、居町計可拂旨申渡候之事、

但道中方取扱ニ者、道中筋を構候儀も有之、一般ニ者難差極候、

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

從前々之例
一あばれ候て町所をさわがし候もの　敲之上所拂

〔御仕置例類集三ノ三〕天明八申年十二月

鳥居丹波守殿御差圖　御勘定奉行 根岸肥前守掛

一能州黒島村沖船頭善兵衛船與僞、不正之取計致し候一件○中略

同國同郡○佐渡國加茂郡 小木町
新五郎
三甫藏
左内

右之もの共儀、善兵衛ゟ買請候諸品、運送荷物與ハ不存候得共、船主善兵衛賣物之由、同人事直次郎與名乘申聞候節、得與糺も不致買請、其上役人改請候而ハ、手間取候間隱買致吳候樣善兵衛申聞候ニ付、掟を相背、內々ニ而諸品貳拾壹箇致隱買、殊ニ難船吟味有之候段承、右之趣及露顯候而

ハ、身分難立候ニ付、役錢相納度旨、淸左衞門江相賴、內々ニ而事濟、浦目付水津番所役之もの早速承屆候迚、禮金差出候始末ハ不屆ニ付、敲之上所拂、

御差圖

入墨之上敲

右御仕置附

右前書淸左衞門同樣之趣意ニ而、當人に御座候處、佐州之掟を背、船荷物隱賣いたし候ものニ御座候、淸左衞門ニ見合、格別品不宜陰物買候もの幷乍存又買致し候もの、入墨敲之御定も御座候間、敲之上所拂、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文政二卯年御渡

御勘定奉行土屋紀伊守伺

一武州薄村寅次郎宅に而及狼藉候無宿四郎兵衞一件、

松平伊勢守知行武州秩父郡小林村　百姓林藏弟　幸七

右之もの儀、武州下鹿野村地內鎭守境內物陰におゐて、名住所不存もの共三四人手合に加り、廻り筒簺博奕いたし、其上無宿四郎兵衞博奕相催候由申聞候迚、同國薄村寅次郎宅江罷越、同人と四郎兵衞口論および立騷候節、同人江荷擔いたし候には無之候とも、寅次郎隣家之もの共駈付、一同差押懸候迚、可逃去と其場に有之候棒を取振廻し立騷ぎ、五左衞門外壹人江乍聊疵爲負候始末、旁不屆に付、敲之上所拂、○評議書略

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一門前拂　奉行所門前ゟ拂遣す

〔憲敎類典五ノ十四町奉行〕享保六辛丑年五月七日

加納遠江守殿

町奉行江

所拂　是ハ只今迄追放と申候を、向後は所拂と可ㇾ申旨、

門前拂　是ハ唯今迄之通門前拂と可ㇾ申旨、

右之通向後唱可ㇾ申旨被ㇾ仰渡ㇾ候、以上、

〔公裁秘錄〕無宿幷敲成候者之事

御當地出所無宿罷成引取人無ㇾ之、又ハ入墨歟敲かニ成候以後、渡方も無ㇾ之者は、門前拂可ㇾ申ㇾ付ㇾ候、若其以後又々惡事仕候はゞ、伺之上死罪可ㇾ申ㇾ付ㇾ事、○中略

右之通伺之上相極候事

享保九辰年

〔御定書百箇條〕無宿かた附之事

享保九年極
一引取人無ㇾ之ものは　門前拂

享保九年極
一遠國もの行倒之類　溜預病氣快氣之上、萬石以上は領主江可二相渡一、御料幷萬石以下は其所之親類呼出可二相渡一事、

從二前々一之例
但在所にて科有ㇾ之、又ハ欠落幷村方親類舊離いたし、好身之もの於ㇾ無ㇾ之ハ門前拂、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文政四巳年御渡

京都町奉行伺

一浪人小田富五郎與申立候、無宿富五郎外貳人儀、攝州藍本庄村藤右衞門外壹人江手疵爲ㇾ負候一件、

江戸市ヶ谷本村町御小人金松忠兵衞勘當悴無宿浪人　金松三次郎

右之もの儀、小田富五郎、三好官次郎同道錢合力乞請徘徊いたし候途中、丹州多紀郡矢代奥村ニ

而酒給、殊之外醉、往還道端に休息、此もの儀ハ、其儘醉臥罷在、往來人藤右衛門、津右衛門同道互ニ咄合申通り候儀嘲哢いたし候事與官次郎儀追駈引留申爭、富五郎儀脇差を以、右藤右衛門、津右衛門江疵爲負候儀與も不存旨申候得共、右始末同道人之詮も無之不埒ニ付、急度叱り可申渡處、數日入牢ニ付令宥免、不及咎之沙汰段申渡、無宿ニ付門前拂、○評議書略

敲之上門前拂

〔比考録〕島長門守御番所掛

寛保三年亥十一月五日追放帳

一敲之上門前拂　　亥九月廿日入牢　品川無宿　長三郞

一右同斷　　上總國千葉無宿　右同斷　坊主　文七

右長三郞儀、腰錢、袂錢、度々ニ壹貫四五百文程盜取候段、不屆ニ付、土岐丹後守殿依御指圖、敲之上門前拂、

右文七儀、腰錢、袂錢、度々ニ五六百文、并きせる抔盜取、近き頃も腰錢五百文盜取候段、不屆ニ付、右御同人依御指圖、敲キ候上門前拂、

洛中拂

〔御仕置例類集三ノ二〕寛政八辰年六月

松平伊豆守殿御差圖　　町奉行　坂部能登守掛

一京都四條通大黑屋武兵衛、御制禁之品賣捌候一件、○中略

東洞院魚店上ル町山城屋かん借屋　佐野屋庄兵衛

外十三人

右之もの共儀、博弈ニ携候儀者無之候得共、本商賣向不景氣に相成候迚、御法度之儀者乍辨、博弈ニ用候讀がるた幷めくりかるた札、銘々內職ニいたし、全賣德に泥み、人之惡事に成候品を數多拵立賣捌候始末不屆ニ付、一同洛中拂、

〔御仕置例類集一ノ一〕文政四巳年御渡

京都町奉行伺

一所拂ニ相當り候もの居宅燒失いたし、右御仕置難申付儀ニ付評議、

二條西洞院東入町　茂七

右之もの儀、困窮ニ付、諸會所銀等口々借受返濟相滯候ニ付、夫々日切濟方申渡貸物會所之口濟方不埒ニ付、手鎖之上町預申付置候處、番之もの透を見合、手鎖外し出奔いたし候儀共不屆之至ニ付、洛中洛外拂、

此儀手鎖を外し候もの之御定但書ニ、手鎖を外し欠落いたし候もの本罪ゟ一等重く可申付與有之、吟味之趣ニ而ハ、質物仲ヶ間之ものゟ著類等借受、返濟相滯候ニ付、取立之儀、右會所ゟ願出、日限濟方申付候處不埒ニ付手鎖之上町預申付置候內、手鎖を外し逃去、追而立歸候後被召捕候由ニ付、右ハ過怠手鎖之趣意ニ而、則本罪手鎖ニ相當候ものニ付、前書御定ニ見合、本罪より一等重く、所拂相當之ものニ候處、欠落中居宅類燒致し、當時居宅無之上ハ所拂申付候而ハ御仕置之趣意相立不申候間、洛中拂、

朱書　評議之通濟

朱書　前書茂七御仕置段取之儀ニ付、左之通伊勢守申上置、

京都御仕置之儀、洛中洛外拂、山城國中拂、輕追放與申順を以、前々より評定所一座評議仕申上來候儀ニ而、江戶十里四方追放ニ相當り候ものを、洛中洛外拂、江戶拂ニ當り候ものを、洛中拂與先年評議之例有之候得共、山城國中拂、洛中洛外拂、洛中拂與三段有之、都而入墨之ものハ、洛中を拂候事ニ付、江戶拂を洛中拂ニ引當候而は相當不申候間、寛政四子年、一座評議之上、江戶拂ニ當り候ものハ、洛中洛外拂、江戶十里四方追放ニ當り候ものハ、山城國中拂與評決仕候趣書留有之、且

去ル卯年、一座江評議ニ御下被成候、佐野肥後守京都町奉行之節相伺候、大坂堂島米相場高下相圖を以、移取候一件之內、當時無宿次兵衛、洛中拂與相伺候ニ付、右ハ所拂相當之見込ニ候哉、又ハ本罪所拂之ものニ候得ども無宿之故を以、洛中拂與相伺候哉之段、肥後守江懸合承候處、次兵衛儀、所拂與可相伺ものニ候得共、無宿之儀ニ付、洛中拂與相伺候儀ニ而、所拂與見込候無宿ハ、洛中拂與相伺候先例之段申聞、江戶表ニ而ハ所拂ニ當り候無宿もの之儀、江戶拂ニ申付候外無之候ニ付、右之通申付候得共、洛中洛外拂ゟ以下ニ、洛中拂與申廉有之候上ハ、所拂ニ當り候ものを、洛中洛外拂ニ可申付筋も無之候間、次兵衛儀伺之通、洛中拂與申上、此度之茂七儀も、右同樣申上候儀ニ有之、併京都御仕置ニ而も、段取ニおいては江戶表段取之通、所拂ゟ直ニ洛中洛外拂與申上來候儀ニ御座候、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月廿八日、九條前關白、久我前內大臣等、咎ヲ被ル各輕重アリ、

洛中住居停止申渡

九條入道前關白
久我入道前內大臣
千種入道前中將
岩倉入道前少將
藤　式　部

〔張紙留〕京都御仕置御當地ニ而、江戶拂ニ當り候ものハ洛中洛外拂、但御家人又ハ其品ニ寄、侍以上ニ候はゞ、江戶を構、洛中洛外拂、

江戶十里四方追放ニ當り候ものハ、山城一國拂、但右同斷、

本文山城一國拂與有之候得共、山城國中拂與可認事、享和元酉十二月、京都町奉行伺、奈良京修地方西側俵屋與三郎初筆一件之內、評議書ニも山城國中拂與認候事、

右寛政四子年五月十三日、一座評議之上極ル、

但江戸十里四方追放ニ相當候ものを、洛中洛外拂江戸拂ニ當り候ものを、洛中拂與申、先達而評議之例有之候得共、京都ニハ山城一國、洛中洛外拂與三段有之、都而入墨之ものは、洛中を拂候事ニ付、江戸拂を洛中拂ニ引當候而ハ、相當不申候間、前書之通評議極、

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政八辰年四月

一博弈いたし候もの敲之事

禁裏御座所之儀故、敲入墨敲之ものハ前々より洛中洛外拂申付候仕來候處、其儘差置候而ハ、仕來ニふれ候付、仕來之通、洛中洛外拂たるべく候得ども、左候而ハ博弈之御仕置、殊之外重く成候間、一同不及敲、定例之通り過料申付候事、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政九巳年六月

松平伊豆守殿御差圖　評定所一座掛

一武州南秋津村醫師運朝醫業之儀ニ付、二條殿家來與申立、不埒之致取計候一件、〇中略

二條殿家來　津幡伊豫

右之もの儀、私欲ハ不致共、運朝願之趣、公邊相濟、二條殿ニ而被引受候得共、勝手向足合ニ可相成與存候得共、醫業之儀ハ不被賴筋ニ付、容易ニ聞濟有之間敷與相察、一卜通立入候儀而已二條殿江申立置、同役隱岐下總守與申合、夫々願之趣聞濟有之候姿ニ致成、得與身元不相糺運朝泰夫を呼出、關東江差下、禮錄金等も追々取立候故、右之もの共彼是不束之致取計候及始末候段不埒之至、其上中庄村忠右衛門儀、奈良奉行江訴出候古銀札引替之儀ハ、同役下總守取扱、得與子細ハ不存由申候得共、下役森甚左衛門相果、取上置候由之銀札何方ニ有之候哉不相知候はゞ、有體可申立を、右銀札無之而は如何與存、外より買入之儀下總守正書、一同談合候始末旁不届ニ付、洛中洛外

拂江戸徘徊差止。〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ二十三〕文政五午年御渡

京都町奉行伺

一江州八幡元玉屋町與吉其外之ものとも、無宿勇幸を打擲および同人相果候一件、

朽木主膳知行江州蒲生郡八幡元玉屋町町中持借屋虚無僧無外事醫師　宮垣泰助

越後國高田浪人藤田林右衛門悴虚無僧辯峯事無宿　八五郎

右之もの儀、當正月十六日夜、八幡社内ニ而口論および打擲ニ逢、疵受相果候、勇幸ハ懲玄より月限之斷書を貰、吹笛往通いたし、本則ハ無之ものニ候處、其儀ハ乍存變死を隱ニ事濟之儀、與吉捴七より相賴候迚、懲玄方本則申立中之ものニ泥ミ、本寺屆不相濟候而ハ、取計方了簡ニも難及抔與申、懲玄倶々出京いたし、屆一ト通ニ而濟候儀を、取計を以品能相濟候趣申成し與吉捴七より禮金貰請候始末、全事を含候取計方不屆ニ付、兩人とも江州八幡を構洛中洛外拂。〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ二十七〕文政五午年御渡

京都町奉行伺

一澤家家來塚本衛守不屆之致取計候一件

御影堂境内平井村新吾借屋

直次郎方ニ居候同人父澤家家來　塚本衛守

右之もの儀、澤家家來之身分ニ而病氣與は乍申無斷も町住之悴直次郎方ニ數日止宿罷在、隣家伊兵衛吟味筋ニ而被召捕家財改ニ可相成間、簞笥壹棹火鉢壹ツハ、未代銀不相拂品ニ而、欠所ニ成候而ハ難澁之旨、同人之妻つる相賴候迚預置、改之節押隱不差出、其上帶候儀ハ無之共、十手所持罷在候儀者不屆ニ付、十手取上洛中洛外拂。〇評議書略

五畿內構追放

〔科條類典下七〕元文五申年十月、京都町奉行伺之内、〇中略

同國同郡同鄕同村〇山城國綴喜郡宇治田原鄕長山村　年寄　彌平次

此もの儀、同所字粽谷上泉籔三ヶ所地所除キ置、三ヶ所之竹松杉賣拂候段、年寄役も乍ㇾ相勤、別而不屆之仕形御座候得共、庄屋太右衞門得心申聞候儀に候得ば、一等輕く、家財田畑山林取上、五畿內、近江、丹波、武藏、下總、長崎、東海道筋、木曾路筋、日光、日光海道、駿州、甲州、尾州、紀州、常陸追放可ㇾ申付旨相伺候處、御下知五畿內構追放、

山城國中拂

〔御仕置例類集二ノ十〕文化元子年御渡

京都町奉行伺

一當時無宿浪人津田郁治儀、兄江對し及ㇾ不法ㇾ候一件、

大坂難波新地壹丁目鹽屋藤七支配かし屋大和屋政吉代判　灘屋源兵衞

右之もの儀、津田十藏不行跡ニ付、國許備前表江連歸候積、親類共より郁治江相賴、同人十藏江引合置候始末も有ㇾ之、且者郁治兄弟之儀、直ニ引合も難ㇾ致候間、此もの罷登、穩ニ連出呉候樣、郁次申聞及斷候處、達而賴候故承知いたし罷登、穩ニ連出可ㇾ申ト、藤七江引合候得共、斷候ニ付、其段郁次江申聞候處、然ル上者權威を以、如何樣ニもいたし連出呉候樣、同人相賴候迚承引いたし、八田四兵衞安兵衞、其外之もの同道、此もの十手を差、其方江罷越、十藏ニ出會、大坂表上意之趣申成、同人儀尋之筋有ㇾ之、近邊宿屋ニ同心扣居候間、同道可ㇾ致旨申僞、捕方之體ニ仕成候義共不ㇾ遂事を儀と者乍ㇾ申、右始末不屆之至ニ付、十手取上、大坂を構、山城國中拂、〇評議書略

〔御仕置例類集二ノ十〕文化六巳年御渡

京都町奉行伺

一丹波國下竹田村總兵衞初筆、巧事いたし候一件、

內藤播磨守領分丹州氷上郡下竹田村　馬持　總兵衛

右之もの儀、駄賃定直段相極候儀、馬肝煎彌三右衛門ト馬持共應對難調候ニ付、彌三右衛門不致雇馬、牛計ニ而荷物付出し、渡世薄く相成、難澁ニ差迫候迚、牛追之もの爲困候はゝ、自然と致雇馬候樣可相成と存付、次八其外之もの共申談、此ものより利平次相頼候ニ付、同人儀牛ニ被突候體ニ取拵候始末、重モ立取計候儀共、不屆之至ニ付、居村を構、山城國中拂。〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ二十一〕文政二卯年御渡

伏見拂

伏見奉行伺

一京町五丁目友次郎女房くま捨子致し候一件

京町五丁目宗吉方同居くま夫　友次郎

右之もの儀、くま申合、彌兵衛世話を以、養育料相添貰請候小兒、くま捨子ニ致し、其後同人ゟ彌兵衛ニ養育料差戻候儀、外方江預有之與而已存、日々働ニ罷出、右樣子一切不存旨申候得共、右始末不屆ニ付伏見拂。〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ五〕文政二卯年御渡

大和國中拂

奈良奉行伺

一和州西谷村又兵衛、其外もの共徒黨致し候一件。〇中略

右西谷村之内細峠　彌兵衛

外四人

右之もの共儀、源八、又兵衛企之段には不加、地頭家來濱島清可爲致歸府威迄と心得、其上斷候而は源八、又兵衛憤可申と存候迚、右兩人任頼、不輕人寄之張札に村々騷立、多人數罷出、地頭陣屋幷同家來乾清左衛門宅、徒黨及狼藉、清相果、供三彌又助疵負候始末に至り候段不屆に付、五人共大

攝河兩國拂

和國中拂、

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政八酉年御渡

大坂町奉行伺

一難船見分之節、御代官手附、其外之もの共不屆之取計いたし候一件、

大岡源右衛門御代官所石州邇摩郡温泉津村　年寄　庄藏

右之もの儀、唐物拔荷賣買御嚴禁之儀、乍レ辨出所不正之品々可レ有レ之與乍レ心付、利右衛門儀破船浦方江之打一諸拂路用ニ差支、其上右藥種不ニ引請一候はゝ、船宿之詮無レ之ニ付、以來薩州船ハ參リ候儀差留候旨申ニ泥ミ、渡世之差支而已ニ拘り、利右衛門ゟ出所不正之唐藥種買受賣拂德用ニ取、殊ニ一旦源右衛門方ニ而糺之節、和藥之旨相違之申立いたし候段、旁不屆ニ付、不正之藥種取上、石州を構、攝河兩國拂、〇評議書略、

大坂三鄕拂

〔評議書〕寬政元年十月十九日

和泉守殿江　紀伊守 河内守 甲斐守　立會下り物相添上ル

去月廿日御渡被レ成候、大坂町奉行相伺候、玉造稻荷社地上ゲ砂持ニ付、祭禮同樣之賑を催、異說等申觸候一件、御仕置之評議仕候趣、左之通ニ御座候、

藤森町鍛冶彌兵衛借家大屋藤兵衛同家忰　善兵衛

右之者儀、酒狂之よしは難ニ取用、往來之女江徒致、態與神罰請、手足すくみ候體ニ相成、人氣を迷せ、親藤兵衛幷同借屋喜右衛門江も酒狂ニ而不ニ相覺一候儀之旨申僞、右之次第稻荷社ニ而高聲ニ酒相止候儀立願いたし候儀ニ仕成し候始末、奇怪申觸候同前之儀、不埒ニ付、所拂可ニ申付一哉之段相伺申候、

此儀御定書ニ、奇怪異說申觸し人集致候ニおいては、人集致候宿江戶拂發起致申觸候頭取、右

堺兩鄕拂

同斷同致世話候もの所拂與有之候間、右發起之ものニ見合、大坂三鄕拂可申付旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

順慶町四町目大和屋幸七支配借屋橘屋　市郎兵衞

右之もの儀、本屋仲ケ間ニ加リ、商賣致候上は猶更心得も可有之處、稻荷社砂持賑ニ乘シ、奇怪成雜說之趣等右板行致增補、最初ニ右草雙紙賣出、德用取、既ニ追々同樣之異說相綴候、草雙紙賣出候ものも致仕來候樣ニ成行候段、異說申觸候同樣ニ而不埒ニ付、賣殘草雙紙板行取上、所拂可申付候哉之段相伺申候、

此儀前書之御定ニ見合、今井屋丈助等申觸候より事起り、草雙紙取綴候ものニ而、發頭ニハ無御座候得ども、申觸候ニハ形チも無之儀、草雙紙を拵、商賣致候は、其品殘り趣意ハ同樣ニ御座候間、賣殘り草雙紙板行取上、大坂三鄕拂可申付旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、

〔張紙留〕大坂三鄕

北　南　天滿

當時北組、南組、天滿組與唱候由、

〔御仕置例類集二ノ八〕文化十酉年御渡

堺奉行伺

一無宿次兵衞僞之往來手形を以、村送り相成候一件、　無宿　勘太郞

右のもの儀、兼而知る人無宿次兵衞盲目相成、袖乞ニも難能出、日々之賄ニも差詰、西國四國巡拜出度旨相噺、往來手形所持いたし候はゞ、病氣差發行倒候節、麁略致間敷、村送り等も不差滯旨申聞候處、勘辨を以、右手形拵呉候樣被相賴、次兵衞儀盲目之身分旅籠拂も難成上者、野宿いたし及飢命候より外ニ仕方無之段、氣之毒ニ存候迚、字兵衞江相賴、僞之往來手形認貰、印形無之候而者、

先々ニ而不憚ニ可ㇾ存と寺號江者、自分所持之印形を押、次兵衛江相渡候故、右手形所持いたし罷出、肥後國ニ而行倒、長承寺村迄村送ニ成、罷越候仕儀ニ相成候段、不屆ニ付界兩鄉拂、〇評議略

駿府拂

〔御仕置例類集二ノ七〕享和二戌年御渡

駿府町奉行伺

一駿州江尻入江町太兵衛宅ニ而、致ニ博奕一候一件、〇中略

肥前無宿　貞次郎

右之もの儀、十四年以前國元出奔いたし、江戸表江罷出、番具商賣いたし、東海道筋所々立廻り、去酉十二月中、彌助方江參り居同人申合、艀般召連博奕取引之金、孫兵衛繁藏方催促いたし、手取候はゞ相應之禮錢可ニ申請一心組ニ而、不正之儀ト爲〇爲恐誤作存、三人一同江尻宿江罷越候始末、不埒ニ付五十日手鎖可ㇾ申付處、數日入牢ニ付不ㇾ及ㇾ咎門前拂、

此儀前書彌助同樣之ものに候得共、無宿之儀ニ付駿府拂、

朱書評議之通濟

佐渡國中拂

〔御仕置例類集二ノ十〕文化六巳年御渡

佐渡奉行伺

一佐州水替人足鐵之助初筆、申懸いたし候一件、

佐州雜太郡相川貳丁目　定助

右之もの儀、道中帶刀いたし候義者無ㇾ之候得共、町人之身分ニ而、於ニ出雲崎一無宿水替人足鐵之助外六人之もの共逃去、騷動いたし候場所江、帶刀人ト見江候樣、いたし成罷越候儀、道中におゐて、帶刀之儀者勿論、苗字等相名乘申間敷旨、兼而相觸置候之處、出雲崎ニおゐて、帶刀人之趣にいたし成候段、不屆ニ付、所持仕候脇差取上輕追放、

此儀吟味書之趣ニ而者、於ニ出雲崎一無宿水替人足鐵之助外六人之もの共逃去、右騷動之場所江罷出候節、脇差斗ニ而者人々取用も不ㇾ宜存候間、所持之脇差ニ、新井宿ニ而相調候脇差を差添、

長崎拂

帶刀人と見江候様いたし、罷越候者有之、全帶刀いたし候ものニ者無之、脇差を以帶刀人之體にいたし成候儀に付、自分と帶刀いたし罷在候、百姓町人刀脇差ともに取上輕追放之御定より輕く、脇差取上越後國出雲崎を構佐州一國拂

朱書評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ十九〕文政五午年御渡

佐渡奉行伺

一越後無宿要藏盜いたし候一件　　佐州雜太郡相川八百屋町善兵衛店借　熊平

右之もの儀、要藏を盜賊与ハ不存候とも、身元も不相知ものを同船いたし來り、國法をも乍存、番所改をも不請、數日船中ニ差置、旅人之金銀借受、返濟遲滯および候段、旁不屆ニ付、廻船取上一國拂、○評議書略

○按ズルニ、是ハ佐渡奉行ノ處刑セシモノニテ、一國トハ卽チ佐渡一國ヲ云フナリ、

〔憲教類典四ノ六評定〕寶曆五乙亥年七月八日

小出信濃守殿御渡

長崎近國ニ而追拂成候者、又ハ致欠落候者共、長崎江入込、惡事等いたし候者有之候、依之近國にて仕置申付候節、長崎を相構追拂可被申付候、欠落者、追拂者、長崎ニ罷在候者召捕候而、其領主領主江長崎奉行より可相渡候間、請取候樣可被致候、

右之趣、筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、周防、長門、國々領地有之、万石以上之面々江可被相達候、

七月

〔御仕置例類集一ノ五〕文政八酉年御渡

箱館市中拂

長崎奉行伺

一肥前國椛嶋村庄藏儀、同國爲名津常十と口論およひ、多人數打合死失之ものも有之候一件、○中略

同所○肥前國高來郡爲名津　卯七

右之もの儀、徒黨ヶ間敷儀は致間敷旨御觸も有之候處、兼而申合候儀には無之候共、漁場に而椛嶋村庄藏、爲名津要八漁事之儀申爭候上、同所常十船江庄藏、幷椛嶋村粂次郎淺右衞門漕付候節爲取支、外漁船之もの共一同乘付、粂次郎、淺右衞門儀、常十ゟ海江被投込、庄藏は爲名津和助と組合、海江落込游上り候上、同所要吉船之船具取之取合およひ候を、外漁船之もの共一同取支候後、常十を椛嶋村之もの共連越、同人身分無心元候間、連歸與候樣、爲名津定七ゟ相賴候はゝ、取計方可有之處、此者頭取同所形右衞門方之助儀、利平江申談多人數庄藏方江罷越、雙方石礫等投懸打合、庄藏宅打荒候始末に至候段不屆に付、居村を構ひ長崎拂、○評議書略

〔御仕置例類集二ノ一〕文化三寅年御渡

箱館奉行伺

一箱館表御仕置刑名之儀ニ付評議

書面申上候通箱館奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

寅十月六日　　評定所一座

箱館表御仕置筋之儀、外遠國並之通、遠島以下御仕置ハ、手限ニ而取計候樣仕度奉伺候處、遠島以下御仕置、入組不申分ハ、伺之通、向後手限ニ而取計候樣、尤遠國奉行之内江申談、爲見合先例借受可申旨被仰渡、奉承知候、然處外遠國御役所ニおいて申付候御仕置ニ、其御役所之場所近邊等構候刑有之候、長崎ニ而ハ、長崎市中拂、幷市中郷中拂、佐渡ニ而ハ、相川拂抔有之候間、箱館ニ而も箱館市中拂、幷市中郷中拂與二刑刑名を附置、外遠國奉行ニ而、其所を構候例ニ相當候分ハ、右を見

合、箱館市中拂、并市中郷中拂等之御仕置申付度奉レ存候、新刑名之儀ニ御座候間、此段奉レ伺候、

下ヶ札

本文箱館市中拂ハ、江戸拂御仕置ニ准じ、市中郷中拂ハ、江戸十里四方追放御仕置ニ准じ候積ニ御座候、

此儀評議仕候處、箱館市中拂ハ、江戸拂、市中郷中拂ハ、江戸十里四方追放ニ准、御仕置申付候儀、外遠國奉行類例も有レ之、構場所不相當之儀も相聞不レ申候間、伺之通極置候樣被二仰渡一可レ然哉ニ奉レ存候、

寅九月

〔御仕置例類集二ノ一〕文化七午年御渡

松前奉行伺

一松前ニ而申渡候追放もの御構場所之儀ニ付評議

緒附

書面評議仕申上候通、松前奉行江被二仰渡一候旨被二仰聞一承知仕候、

未二月十九日　評定所一座

書面伺之通可レ仕旨被二仰渡一奉二承知一候、

未二月十八日　荒尾但馬守

去ル亥年、戸川筑前守、羽太安藝守、箱館奉行勤役中、箱館御仕置筋之儀相伺候、書面之內、追放もの御構場所之儀ニ付被二仰渡一候御書付之趣を以、評定所一座江問合仕候處、陸奥其外他國之もの、箱館松前之內ニ而悪事いたし候節ハ、其住居之國、并箱館松前をも相構、又ハ箱館松前之內ニ而仕成候悪事ニ無レ之候とも、他國之もの共於二箱館一吟味之上他國ニおいて悪事いたし候段相顯、右之科を以追放申付候節ハ、其住居之國其外箱館并同所附村々を構、松前ハ相除候積取計候樣伺之

上挨拶有之候、然ル處松前上地後、同所奉行所ニ相成、江差之儀ハ、唯今ニ而ハ出張御役所も有之候儀ニ付、以來箱館同樣御構之箇所相加、前書評定所一座挨拶之趣を以、他國之もの松前箱館江差之內ニ而惡事いたし候節ハ、其住居之國幷松前箱館江差同所附村々をも相構、又ハ松前、箱館、江差之內ニ而仕成候惡事ニ無之候とも、松前ニおいて吟味之上於他國惡事いたし候段相顯右之科を以、追放申付候節ハ、其住居之國之外松前幷同所附村々迄構箱館江差ハ相除候之積取計候樣可仕候、右之趣猶又評定所一座江問合之上此段奉伺候、

此儀松前表上地ニ不相成以前、箱館奉行より追放もの御構場所之儀ニ付問合候節、伺之上及挨拶候趣ニ准じ、伺之通相心得可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

午十二月

〔御仕置例類集一ノ二〕文政三辰年御渡

松前奉行伺

一松前表刑名之儀評議

緒附

書面申上候通、松前奉行江被仰渡候旨、被仰聞承知仕候、

辰八月廿四日　評定所一座

文化三寅年、戶田筑前守、羽太安藝守箱館奉行勤役之節、箱館市中拂ハ、江戶拂ニ准じ、箱館市中鄉中拂ハ、江戶十里四方追放ニ准じ、御仕置申付度旨奉伺候處、伺之通被仰渡候、然ル處松前上地以後、同所奉行所ニ相成、去ル午年荒尾但馬守松前奉行之節、同所ニ而申渡候追放もの御構場所之儀奉伺候處、伺之通被仰渡候、右伺書之內、松前、箱館、江差之內ニ而仕成候惡事ニ無之候とも、松前ニおいて吟味之上追放申付候節ハ、其住所之國之外、松前幷同所附村々迄相構候段ハ、箱館市中鄉中拂ニ相當り、右より一段輕く、松前市中而已相構候ハ、箱館市中拂ニ相當候筋ニ付、松前市中

伊勢神領拂

拂ハ、江戸拂ニ准じ、松前市中鄕中拂ハ、江戸十里四方追放ニ准じ、以來右二刑刑名を極置御仕置申付度奉存候、新刑名之儀ニ御座候間、此段奉伺候、

此儀評議仕候處、松前市中拂ハ、箱館市中拂ニ見合、江戸拂ニ准じ、松前市中而已相構、松前市中鄕中拂ハ、箱館市中鄕中拂ニ見合、江戸十里四方追放ニ准じ、松前幷同所附村々迄相構候、積極置不相當之儀も相見不申候間、伺之通相心得可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

辰八月

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政三辰年御渡

松前奉行伺

一松前在淸部村忠左衞門外壹人、松前志摩守田地戾之願企候一件、

松前西館町　大工　德兵衞

右之もの儀、淸部村忠左衞門松前地一圓松前志摩守領知ニいたし度旨之企、悴作右衞門與忠左衞門內々咄合候儀乍承、差留も不致、殊ニ作右衞門ゟ忠左衞門江差越候書狀之子細ハ不存候とも、忠左衞門被召捕候ニ付、右書狀殘置候而ハ作右衞門身分ニも可拘哉與爲燒捨、幷暮し方差支候與ハ乍申、忠左衞門儀、右企之一條ニ付、所々ゟ取集候金錢之內、壹兩與錢六百文貰受候段、忠左衞門同樣、人氣をも動し候ニ相當り、不屆ニ付、松前市中拂、〔評議略〕

〔御當家令條三十五〕今度勢州外宮師職三日市帶刀配檀方祓之表ニ、兩太神宮と依書出候、內宮師職輩新規非例之由、奉行桑山丹後守江訴之、委細穿鑿之上、雙方江戸江召下、於評定所遂對決候處、兩之字書來證據不分明、新規無紛、就中外宮師職之內、中西丹波儀、兩之字書加候一帳稱證文雖出之、墨色新敷、不憚成儀申之、掠奉行之條、不屆至極也、右之趣達上聞、丹波儀は神領中追放、帶刀幷一味之輩閉門被仰付之訖、自今以後如此之新規、於申出は速可被處嚴科、仍爲後鑑遣下知、可相守於

日光御領拂

雙方者也、

寛文十一年辛亥十一月廿二日　丹後（桑山〇以下七名略）

両宮師職中

〔御仕置例類集二ノ二十三〕文化二丑年御渡

山田奉行伺

一勢州竹川村乙松盗いたし候一件

勢州多氣郡宮川外神領竹川町　百姓乙松女房　きし

右之もの儀、乙松盗いたし候儀不レ存候得共、同人ゟ品物貰請、右品正次方ニ而被二盗取一候品ニは無レ之哉與心付候はゞ、早速可二訴出一處無二其儀一、同人構杉垣之内江差入置候段、旁不届ニ付神領拂、

〔御仕置例類集二ノ五〕文化八未年御渡

日光奉行伺

一日光御山内に而鹿打殺候一件

日光御領野州都賀郡上草久村　百姓主水悴　新吾

百姓　民藏

右之もの共儀、日光御山内に用事有レ之罷越、歸候途中中山道町表におゐて鹿に行合、殺生禁斷之儀は兼而乍二相辨一、周章候に付忘却いたし候迚、御幸町林平倶々追廻し、御殿地表門江追詰、林平打倒候を、新吾帯居候腰物に而鹿之首を打落、民藏は跡ゟ駈付候とは乍レ申倶々追廻し、其上御場所柄之儀存出し、其儘難二差置一迚、折節人不二居合一を伺、杉之葉を覆隠し置、内證に而取計候積、跡元片村之儀林平江相頼候始末、一同不届に付、新吾儀は江戸を構、日光御料拂、民藏儀は百日手鎖、

〔御仕置例類集一ノ六〕文政九戌年御渡

日光奉行伺

一野州文挾宿傳四郎外六人致₂博弈₁候一件

日光御領野州都賀郡板橋宿　百姓須右衛門弟　忠兵衛

右之もの儀、日光中禪寺、野州久我村地内、石裂山林笹原等において、文挾宿傳四郎筒取ニ而鑑致₂博弈₁候、度々宿内条七、無宿勇七、其外名住所不ㇾ存者共手合ニ加リ、廻筒鑑博弈をも致、其外傳四郎ニ被ㇾ頼、野州加園村、外壹ヶ村地内河原において、名住所不ㇾ存もの共打子ニ致、鑑博弈致候節、傳四郎代ニ相成、筒取致、てら錢取候始末不屆ニ付、江戸ヲ構、日光御領拂、〇評議書略

〔耶蘇天誅記 中〕慶長十六辛亥年、京都ノ所司代板倉伊賀守勝重嚴命ヲ蒙リテ、五畿内ノ吉利支丹宗門伴天連、以留滿ノ族ヲ搜シ求メ、悉ク召捕テ、異國ヘ追ヒ放タル、其時勝重彼宗賊等ニ告テ云ク、此般ハ寛宥ノ儀ヲ以テ、一命ヲ助ケテ本國ヘ歸シ遣スナリ、向來儻又此國ニ來ルニ於テハ、忽ニ死刑ニ行フベキ旨、屹度申渡シ、扨又洛中洛外ヲ始メ、大坂、奈良、堺、伏見等、其外近國近邊ヲ相改メ、彼宗門ノ類屬ヲ召囚リ、坊舍ヲ破却シ、堅ク禁斷セラル、猶彼宗ニ拘泥シテ本宗ニ復セゼル徒ヲバ、各苞ニ捲キテ、四條五條ノ河原ニ積ミ置キ、鐵杖ヲ以テ、故魯邊(コロベ)々々々ト聲ヲ掛テ責メ毆キタル、然レドモ執著深クシテ宗門ヲ改轉セザル奴曹アリシガ、此般ハ助命セラレテ、伴天連ト倶ニ、長崎ノ湊ヨリ船ニ乘セ、南蠻國ヘ追放セラル、

〔耶蘇天誅記 中〕慶長十九甲寅年八月廿四日、南蠻國ノ商舶長崎ノ湊ヘ入津ニ付テ、彼蠻人共ニ吉利支丹ノ輩追放ノ地、何ノ國然ルベキ哉ノ趣キ、公儀ヨリ御尋アリシニ、亞媽港ヘ追放仰付ラレ、然ルベキカノ由申上ルト也、

〔慶長日記 十〕慶長十九年三月七日、加賀家中高山南ノ坊と申者、吉利支丹之伴天連ニ成、宗旨を改可ㇾ申之よし上意ノ間、加賀殿被₂申付₁候へ共、改申まじきと申切、此者元來荒木亂の時、信長へ忠節ノ者也、其時ハ右近と申也、近年加賀に罷在知行二萬石取申候、命ハ御助被ㇾ成南蠻へ御拂被ㇾ成候、

僧徒處刑

南蠻人百餘人肥前長崎迄迎に參同道申候、高山娘は橫山山城守よめに候へ共、乞同道參度由望、つれて南蠻へ渡ル、

〔耶蘇天誅記 中〕慶長十九甲寅年九月廿四日、攝津國高槻ノ城主、高山右近友祥、兼テ吉利支丹宗旨ニ拘泥シ、親類緣者種々ニ異見ヲ加フレドモ、許容セズ、終ニ台命ニ戻リテ、今日南蠻國ノ內咬𠺕吧ヘ追放セラル、內藤飛驒守〇如安モ、彼宗門ヲ信ジ、上意ヲ背クノ間、同罪ニ處セラレ、亞媽港ヘ追ヒ放タル、又長崎近邊ノ伴天連徒黨ノ輩百餘人、一同ニ長崎ノ湊ヨリ船ニ乘セ、今日亞媽港ヘ追放セラルトナリ、

〔長崎志 七〕邪敎ノ主意訴人出ル事〇中略

同年〇慶長十八年大久保相模守ニ被仰付、五畿內、中國、西海諸處ニテ、邪宗門ノ黨類共ヲ搦捕リ、其地領主地頭ニ預ケ置、翌十九年、雨宮權左衞門ヲ長崎ニ被差越、前年以來諸國ニ預ケ置レシ邪宗門ノ者共百餘人、其中ニ高山右近攝州高槻ノ城主、內藤飛驒守志州鳥羽ノ城主兩人武門ノ人々タリト云ヘドモ、深ク邪宗門ヲ信敬有シ故、正法ニ歸スベキ旨數度上意有之ト云ヘドモ、惡執ニ染著シ、忠義ノ道ヲ忘却シ、遂ニ歸正ノ志無之、下賤ノ四人同前ニ阿媽港ニ流刑仰付ラル、

〔駿府政事錄〕慶長十八年五月五日、今日照高院、三寶院、本山當山兩山臥出入有之付、於御前裁許、武藏不動院可有御追放之由被仰出云々、

〔科條類典 下一〕享保六丑年伺

出家追放申付候節、觸頭奥印爲致候伺書、

一追放申付候出家內寄合に而は、其科之趣申渡候節、觸頭等召出一同承知仕候旨、證文に奥印爲仕候、然上は本寺共承事に御座候、

一評定所ニ而追放申付候節は、前々より觸頭等も不罷出候、其人計證文に印形仕候迄ニ而御座

候、向後は評定所江觸頭等召出し、内寄合之通、證文奥印申付可然奉存候、

四月

〔天保集成絲綸錄百〕寛政七卯年八月

樂人多豊後外貳人御仕置之儀、御朱印配當米等有之故を以、遠島與被申聞候得共、御朱印寺領有之僧侶も都而御仕置無差別例ニ候上ハ、博弈ニ限り重ク可申付筋無之候間、多豊後外貳人共中追放申付候、向後寺院も御朱印地之有無ニ不拘相當之御仕置可被申付事、

〔類例秘錄六〕天台宗ニ而も、以來江戸拂追放等御仕置ニ成候ものハ、遠國寺中、又ハ門徒寺ニ而も、都而一寺住職ハ難成候趣、一宗へ觸置、其外諸宗之分も右同樣御仕置ニ成候ものハ、御構場所外、小寺ニ而も、住職不申付儀、違失無之樣末派へ可相達旨、諸宗觸頭共申渡有之、寺社奉行中ゟ達有之ニ付、爲心得申達候、可被得其意候、以上、

酉九月

小　長門守
曲　甲斐守
肥　豊後守
榊　主膳正

捴廻狀

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政元酉年十二月

松平伊豆守殿御差圖　松平右京亮掛

一大覺寺御門跡被仰立候嵯峨清涼寺什物戸帳之儀ニ付一件

嵯峨淨土宗清涼寺　典靈

右之もの儀、清涼寺仁王門再建之入用ニ差支候迚、役僧達地院龍順任申ニ、什寶之嵯峨切戸帳を

一布引解質物ニ入、金子借受、一旦請戻候後、大覺寺御門跡ゟ右切之儀ニ付尋有之節、請戻し候を縫合置候儀與存候得共、右始末可申立處、質入又は賣拂候儀無之旨申答、其後京都町奉行より呼出有之節ニ至り、引解又候賣拂、殘之戸帳不目立樣取繕置候間、尋有之候はゝ類切有之望之もの江讓渡候樣可申立旨、龍順申敎候ニ致同意、町奉行所吟味之節僞之儀申立、寺社奉行所おいても一旦申陳、龍順吟味を恐首縊相果候儀を、有體ニ申立候はゝ、吟味手掛ニ可相成與存、病死之由申立、又は於釋迦堂古來無之常念佛可企與いたし候始末、旁不埒ニ付脫衣重追放、

右御仕置附

右御定書ニ、寺附之品書入、又は賣渡證文ニ而借貸いたし候もの、借主追院とも有之、嵯峨切戸帳を引解致質入、又ハ賣拂候は役僧龍順發起之仕業ニ而、此もの存付ニは無之候得共、右始末を押包罷在、龍順申敎候ニ致同意候而、奉行所吟味之節僞之儀申立候は、此もの賣拂候も同樣之趣意ニ御座候處、龍順變死を押隱、又は僞之儀申紛、古來無之常念佛可企と致成候不屆有之、右御定ニ見合品重御座候間脫衣重追放、

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政三亥年九月

鳥居丹波守殿御差圖　松平右京亮掛

一高野山聖方惣代吉祥院外壹ヶ院、觸頭大德院取計之儀ニ付、品々申立候一件、

高野山聖方觸頭大德院元院代　眞定院　圓道

右之もの儀、元高野山明泉院弟子ニ相成候得共、其後他宗之寺院等ニ致隨身居候儀も有之、旋與明泉院ニ罷在候身分ニ無之處、觸頭大德院本所宿寺江罷越、同院相願候迚、一旦役僧院代ニ相成、其上吟味中預ヶニ相成候處、致欠落候段、旁不屆ニ付江戸拂、

右御仕置附

右寺社方御仕置例書之內、師匠之名を借、僞之儀申出候もの輕追放與有之候ニ見合、品輕所拂程ニも相當り可申處、當時晥與住所無之ものニ付、江戸拂、

〔御仕置例類集三ノ二〕寛政七卯年八月

太田備中守殿御差圖　　脇坂淡路守掛

一麻布淨林寺ニ居候所化門雅外壹人、不法之說法いたし候一件、

麻布本村新町淨土宗淨林寺に居候所化　門雅

右之もの儀、麻布淨林寺幷小石川圓乘寺より被相賴說法致し候節、通例ニ而者參詣薄く、勸物も集兼可申ト存候迚、折ニ振レ歌舞妓役者之音聲を眞似、當時流行之唄淨瑠理之文句抔をも取交、說法いたし候段、不法之至、不屆ニ付脫衣江戸拂、

〔新張紙留〕出家惡事、幷無宿ニ成候而之惡事兩樣を束、相渡候、御構場所書付之事、

津宮村無宿　坊主　唯成

右之もの儀、下總國津宮村、遍照院留守居之砌、所化僧之身分ニ而同村與兵衞娘やへと及密會、一旦誘引出候を被取戻候迚、立腹いたし、手切金可差出抔、與兵衞江彼是事六ヶ敷申懸、金壹分ねだり取、其後も尙殘念ニ存、鐵砲ニ紛敷火道具を持、或ハ脇差を拔、同人宅江踏込あばれ立騷、門前ニ而犬を切、又ハ宅裏井戸江魚油を流し、其上遍照院立去、無宿成候後も、與兵衞家內之留守江立入、諸道具等打損じ、雪隱江打込、或ハ糞汁を井戸江差入候始末、旁不屆ニ付、三日晒之上重追放、

右唯成儀、出家中之惡事、幷無宿ニ成候而之惡事兩樣を束、御仕置ニ相成候儀ニ付、いづれ江附、御構場所書付相渡可然哉之處難決、一座江主水正ゟ相談およひ候處、出家中之處を以、御構場所書付相渡候筈、

文政七申年六月十一日評決

婦人處刑

〔明良洪範十二〕水戸黃門光國卿ハ、文武兩道兼備ノ名將也、御在國ノ節、御領内殺生禁斷ノ場所ニテ、鐵砲ニテ鶴ヲ打取リシモノアリテ、入牢ハ仰付ラレシガ、其年暮レントスレドモ、未ダ刑罰ノ沙汰ナシ、翌年ノ春領内ノ寺院ノ主僧ヲ八人召サレ、例ノ通リ饗應有テ後、四方八方ノ御咄シニ御僧達ハ未ダ人ヲ切殺ス所ハ見シ事アラジ、今幸ヒ一人ノ罪人有ル故、切殺シテ見セ申ベシトテ、昨年中鶴ヲ取リシ罪人ヲ、庭ノ樹木ヘ縛付ケ置キ、ヤガテ御自身長刀ヲ持庭ヘ出、其罪人ノ側ヘ立寄リ、既ニ切ラントシ給フ事再三ニ及ブ、八人ノ僧ハ無言ニテ、恐々見テ居ケル、其時光國卿長刀ヲニハヘ投捨、八人ノ僧ニ向テ、我聞タ僧ハ物ノ命ヲ斷ツ事ヲ禁メ、吾一命ニカヘテ他ノ命ヲ救フトカヤ、今爰ニ八人ノ僧在ナガラ、カノ罪人ノ命ヲ乞フ僧一人モ有ラズ、カヽル破戒ノ僧急度刑罰ニ行フベキナレド、我ハ人命ヲ斷ツコトヲ厭フ、コレニ依テ刑罰ヲ免シテ追放申付ル也ト、八人ナガラ三衣ヲ脱シ、追ヒ拂ハセケル、其後庭ノ罪人ニ向ヒ、法度ヲ犯ス罪尤重シ、然レドモ何ゾ人命ヲ鳥類ニカヘンヤトテ、免シ歸サレケル、誠ニ仁君トハ此君ノ事ナルベシト、見聞セシ人々有難ガリシトゾ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事
寛保三年極追加
一科有之女之義、中追放には御關所内、相模國ハ御構之外に付、中追放迄ハ可申付、重追放には申付間敷事、

〔憲教類典四ノ六評定〕寶曆三癸酉年十一月
女御仕置に重追放ハ不申付御定に付、唯今迄重追放ニハ不被申付候、町人百姓之女ハ、重追放等申付候而も相障儀も無之事候間、向後町人百姓之女ハ、重追放ニも申付候樣ニ可致候、
右之通被得其意、御定書ニも可被書入候、

〔類例秘錄九〕寛政十二年八月、小田切土佐守ゟ土井大炊頭

出家、社人、山伏等之妻子、追放御申付被成候節、御構場所、侍之通ニ候哉、町人百姓同樣ニ候哉、

御書面追放申付方之義、近例ハ無之候得共、當主ニ准シ、御構場所侍之通申付候心得ニ御座候、

○婦人ノ處刑ト雖モ、男子ト異ナル所ナキ者ハ、各條ニ載セタリ、

〔御仕置例類集三ノ九〕天明八申年十二月　　　町奉行　山村信濃守掛

牧野備後守殿御差圖

一横田大和守召仕女たつた致申掛候一件

新御番横田大和守召仕女　たつた

右之もの儀、當九月四日夜、主人大和守屋敷女部屋江盜賊入、衣類紛失いたし候ニ付、主人方ニ而嚴敷尋を可遁與存、傍輩女つね、もみぢ、中間庄次郎、幷大和守元中間ニ而、當時瓦林幸之助中間清五郎申合、盜取候得共、無沙汰ニ致し呉候樣もみぢ相賴、其上つねは庄次郎與密通、もみぢハ清五郎與不義致し居、其夜も清五郎を手引致し、女部屋江引入遣し候旨、無跡形も僞り取拵申掛致し候段、女之儀與は乍申、武家奉公相勤候ニ有之間敷儀不屆ニ付、江戸拂、

御差圖

五十日押込可申付處、數日入牢ニ付令宥免、咎之不及沙汰、

右御仕置附

右明和八卯年、曲淵甲斐守町奉行勤役中伺之上御仕置申付候、淺草御藏前片町代地清右衞門店長助方ニ居候金太郎儀、去年十一月十四日、淺草御藏庭水揚ゲ米紛失致し候節、怪敷相聞候ニ付、召呼入牢申付、遂吟味候處、盜惡事致し候儀ハ曾而無之候得共、吟味之節猶又嚴敷吟味請可申哉與難儀ニ存、不斗存付ニ任セ、長助其外住所不知もの貳人、金太郎共ニ一同、右米盜取候由申立候ニ付、長助儀度々嚴敷吟味請候內、右御米盜取候ものは外ニ有之、長助仕業ニ而は無之處、金太郎

追放者犯法

儀一體愚昧ニ而、前後之辨無之、嚴敷吟味ニ逢可申哉與難儀ニ存、跡形も無之儀を取拵申立、長助江難儀相懸候上は不屆ニ付、江戸拂申付候例ニ見合、たつた八女之儀ニ付、江戸拂申付候例ニ見合候而は緩ミ可申候得共、無跡形儀を申候ニ付、無失之庄次郎、淸五郎迄入牢致し、糺明ニ爲逢候始末、乍女も趣意不宜候ニ付江戸拂、

〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

寬保元年極
延享二年極
從前々之例
一御構之地ニ徘徊致候もの　前之御仕置より一等重く可申付

但追放、或所拂等申付候處、直ニ居町、居村え立歸罷在候者、御仕置不相用者之事ニ候間、入墨之上最前之御仕置より一等重く可申付事、

享保二年極
延享二年極
一入墨を拔、御構之地江立歸候もの、　入墨之上、前之御仕置より一等重く可申付、

但入墨以上に可申付惡事いたし候はゝ、死罪、

〔御仕置裁許帳七〕追放立歸之者之類、幷追放之者請負仕者之類、附追放之出家致還俗、遠國ニ而主人之名を僞通る者、

寬文四年辰三月十六日

壹人傳兵衞　是は野村彥大夫御代官所、千壽小塚原村之百姓與左衞門店之者、人請ニ立候出入ニ付、江戸御拂候處、御法度相背、當地ニ罷在候付籠舍、

右之者同辰閏五月廿七日、三枝平右衞門方江渡り死罪、

〔御仕置裁許帳十二〕追放者御構之外ニ致住宅候得共、御當地江罷出詵廻仕者、

貞享四年卯十二月五日

壹人五兵衞　是は前方、山下町利左衞門店ニ罷在候、此者去年五月八日、江戸追放申付候處、今程新吉原角町久右衞門店六兵衞と申者方江參、細工抔仕立廻り申候由、指口之者有之付、六兵衞ニ尋手形申付候處、今日召連來り候間、遂詮議候は、住宅之儀は、江戸外橋場村にて、伯父七兵衞之所に罷在候由、然共新吉原江參、誹廻仕候段、不屆ニ付、手鎖を懸、右六兵衞に預ヶ遣ス、○中略右之者構之地江罷越、其上細工等仕罷在候段、不屆ニ付、手鎖申付候得共、住宅構之外ニ有之、其上母幷弟六郎兵衞度々訴訟申ニ付、翌辰正月二十九日、手鎖赦免、

〔御仕置裁許帳七〕追放立歸之者之類、幷追放之者請負仕者之類、附追放之出家致還俗、遠國ニ而主人之名を僞通る者、

元祿五年申十二月十八日

壹人安藤小右衞門　是は長谷川町市右衞門店忠兵衞出居衆、此者板垣宗悅と申御坊主ニ而有之候處、十年以前亥十月十九日、御評定所ニ而江戸追放申付候處、今程致還俗、名を改、坪內總兵衞家來大橋安右衞門請ニ立、右之忠兵衞方ニ出居衆差置候付、御老中江相伺召寄籠舍、

右之者酉正月十日、致牢死ニ付、御老中江相伺、首を刎死體捨之、

〔科條類典下六〕寬保三亥年

一旦追放に成、御構之地に罷在候もの、幷店請家主御仕置之例、

亥九月晦日入牢　龜島町十右衞門店　七郎兵衞事　九兵衞

右七郎兵衞事九兵衞儀、三年以前重追放申付候處、御仕置を不相用、御構場所東海道筋に罷有、其上當九月廿七日より、當地に店借り住居仕候段、重々不屆至極に御座候間、御定書之通死罪可申付候哉、

龜島町十右衞門店九兵衞御仕置之儀、御尋に付申上候書付、　島長門守

龜島町十右衞門店　九兵衞

御構場所罷在、當九月御當地に店借仕居仕候段、不屆に付、御定書之通死罪と相伺候、

牢拔手鎖外シ、御構之地江立歸候もの御仕置之內、

一御構之地徘徊いたし候もの　前々御仕置より一等重く可申付、

但追放或所拂等申付候處、直に御構之地江立歸罷在候は、御仕置不相用もの之事に候間死罪、

此御定書之趣に而は、前々御仕置より一等重く可申付と有之候、重キ追放より重ク候得ば、遠島と相見候得共、夫にも及間敷候得ば、重ク敲、又重追放可然候哉、御定書之但書に、追放所拂等申付候處、直に御構之地江立歸りと有之は、追放申付候處、其足に而立歸り候もの之事に而、先年此類之者有之、少も御仕置を不用と申評議有之たる樣に覺、此度之者は直に立歸り候に而無之候間、一等重ク可申付と有之に相當り可申ものに候如何、

御請

右龜島町十右衞門店九兵衞、重追放申付候處、御構場所之內、東海道筋に罷有、一向御構之場所立去り不申候、其上當九月より御當地店借仕居罷在候儀、御仕置を不相用ものに付、御定書但書之內、御仕置を不相用との趣を以、御定書之通死罪と奉伺候、書面之通一向御構之場所立去り不申、剩御當地に店借り住居仕候は、御仕置を不相用道理は同樣に可有御座哉、評議仕候處、死罪被仰付可然奉存候、以上、

亥十二月　島長門守

寬保三亥十二月十九日御下知書　島長門守江

島長門守掛　龜島町十右衞門店七郎兵衞事　九兵衞

此もの直ニ江戸表江立歸きたるニ而無之、其上江戸表ニ而、此節惡事も不致候ニ付、敲候上

重追放、〇中略

右之通御仕置可被申付候

十二月

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永二巳五月右近將監殿御下知

安藤彈正少弼懸

一上總國長柄山邊兩郡村々江差遣候、伊奈半左衛門家來召捕候もの之內、無宿紋三郎吟味、

無宿 紋三郎

此紋三郎儀、敲之上輕追放御仕置ニ相成、上總國は御構場所ニ候處、直ニ立歸り徘徊いたし、無宿善次申合、鍋商人おろし置候荷之內之鍋五ッ盜取、善次江三ッ配分いたし、貳ッは元助を賴、錢五百文ニ賣拂遣捨、其後元助申合、同國東金町太物屋庄兵衛見世先ニ而、島木綿壹反、喜兵衛見世先ニ而島木綿切レ九尺盜取、往來之商人江錢六百五拾文ニ賣拂、右代錢配分いたし遣捨候段不届ニ付、入墨之上中追放、

御仕置附

右御定書ニ、御構之地ニ徘徊いたし候もの之但書ニ、追放、或は所拂等申付候處、直ニ居町、居村江立歸リ罷在候はゞ、御仕置不相用事ニ候間、入墨之上最前之御仕置より一等重ク可申付與有之、立歸り後之盜は敲ニ相當り可申哉ニ付、前書之御定を見合、入墨之上中追放ど御仕置附仕候、

〔德川禁令考後聚三十三行刑條例〕安永六酉年十一月

御構之地徘徊致し候もの增入墨之事

松平右京大夫殿御渡

三奉行江

御構之地致徘徊候もの、入墨有之候はゞ、其入墨を相用、前之御仕置より一等重く可申付旨、先達而相達候得共、以來ハ入墨有之もの、御構之地不立去候はゞ、先達而之入墨之際江、一筋增候而入墨申付、前之御仕置より重く可申付候、尤何ヶ度立歸候共、右之通追々一筋宛入墨を相增し、前之御仕置より一等づゝ重く可被相伺候、

右之趣向後不紛樣可被心得候

十一月

〔評議書〕天明八年十二月廿三日

伊豆守殿江（紀伊守 信濃守 甲斐守）立會御直ニ上ル

去廿日御渡被成候、根岸肥前守相伺候、上總國白升村元百姓木工左衞門儀、所拂御仕置ニ相成候後、右村江度々忍候而立戾、母ゆき老衰致難見放迚、逗留致候始末不屆ニ付、御定之通江戶拂可被仰付哉之旨申上候處、御尋有之、御答書も差上候、右木工左衞門儀、御構之村方江立入候始末、通例之立歸もの共違候樣にも有之候、御仕置を不用處ハ同樣ニ候得共、自分之勝手ニ而立入候ニも無之哉ニ相見候、併御咎附候ニ至候而は、外ニ致方も無之儀ニ候哉、今一應評議致可申上旨被仰聞候、

此儀吟味書之趣ニ而は木工左衞門先達而所拂御仕置ニ相成候後、元宅ニは親喜左衞門夫婦、幷娘つま三人住居致居候處、去々午九月朔日喜左衞門致病死、母ゆき、娘つま兩人ニ相成、母老年、娘は幼少ニ而、農業致渡世兼候趣承り難捨置、折々忍候而罷越見繼、ゆき老衰之上働も難成故、彌難見放、繁々罷越、介抱之ため致逗留候は、無餘儀筋ニも相聞候得共、最初之御仕置を恐候はゞ、孰ニも御構場所江は立入申間敷、母を難見放候はゞ親類等江も申談、御構場所外江母を

引取、介抱難成筋ニも無御座候間、御構場所江立入候は、御仕置を不恐ものニ而、對公儀候而は不屆ニ御座候間、御仕置ゆるみ候筋ニは有御座間敷哉ニ奉存候、

但一件之御咎は、肥前守伺之通、振候儀も無御座候間、木工左衞門御仕置之儀計評議仕申上候、

右評議仕候趣書面之通御座候

〔御仕置例類集二ノ二十七〕寛政六寅年十二月

松平伊豆守殿御差圖　　町奉行　小田切土佐守掛

一無宿入墨淸吉御構場所江立入候一件　　無宿　入墨　淸吉

右之もの儀、先達而盜いたし候依科、敲御仕置相成、其後被捕候節、以前御仕置ニ成候儀押隱、途中之盜申立、又候敲に相成、其後猶又盜いたし、入墨成候處、右入墨を消紛、其後不屆有之、如元入墨之上輕追放相成候處、御構場所江立入候ニ付、中追放相成候處、猶又此度御構場所江立入候段、重々不屆ニ付死罪、

御差圖

重追放〇御仕置附略

〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

享保元年極
延享二年極
一御構之地に致徘徊候上致惡事もの　入墨以上に可申付惡事に候は、　死罪

寛保三年極
一旦追放に成、其後御構場所江立歸、あばれ候もの、　入墨に可申付程之惡事に無之候ば、前之御仕置より一等重く可申付事、　死罪

〔御仕置例類集一ノ三十三〕文政五午年御渡

山田奉行伺

一無宿吉兵衛盗いたし候一件　　無宿　吉兵衛

右之もの儀、先達而不屆有之、重敲之上神領拂に相成候後、御構場所江立入博奕いたし、重敲、輕追放、又は中追放に相成候處、御構場所不立去、無宿豐吉申合、白子宿、又は山田町町家〆り無之戸を、豐吉明ヶ這入、衣類等盗出し候節は、外見いたし罷在、壹人立候而も、山田町所々町家〆り無之明き有之戸、又は戸明ヶ這入衣類品々盗取、其上山田一志久保町文次方に而は、留守に罷在候女を欺、買物相頼外出爲致候跡に而、木綿衣類貳品盗取逃去、又は山田船江町長兵衛後家みよ方江罷越、留守に罷在候小女に、右みよを呼寄具候樣欺き、立出候跡に而、木綿衣類三品盗取逃去、跡方も無之名前を僞、盗物之品々質入いたし、豐吉より配分いたし候錢質入代銀等、酒食に遣捨候段、旁不屆に付死罪。○評議書略

〔御仕置例類集一ノ三十三〕文政九戌年御渡

火附盗賊改齋藤越中守伺

一下總國無宿入墨金次郎博奕、其外惡事いたし候一件、　下總無宿　入墨　金次郎

右之もの儀、先達而敲又は入墨如元入墨之上、江戸拂に相成候後も惡事不相止、御構場所江立入、其上千住在村名不存野田に而、無宿體之もの其外住所不存八五郎手合に加り、廻り筒に而五六拾錢賭之簺博奕數度いたし打勝、貸に相成候金子之代り、右八五郎ゟ盗物と乍存衣類股引受取、右品預ヶ置錢借受、不殘遣捨候段不屆に付、中追放。○評議書略

〔徳川禁令考後聚三十三行刑條例〕天保二卯年、内藤隼人正掛、中村八大夫申聞候、南品川宿無宿鐵五郎外壹人御構之地江立入、博奕其外惡事いたし候一件、　南品川宿無宿　入墨　鐵五郎

右之もの儀、先達而ねだり、又者博奕いたし候依科、入墨之上中追放御仕置ニ相成候後、武藏國者

追放者容止

御構之地と乍辨立入、同國南品川宿地內、外壹ヶ所野田海岸等ニおゐて、同宿七五郎悴富五郎、其外名住所不存もの共手合ニ加り、廻り筒鑿博弈度々いたし、其上右富五郎申合、同宿喜作方江罷越、金子押借申掛居込不立去罷在候始末、不屆ニ付重追放、○御仕置附略

〔御定書百箇條〕牢抜、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

享保元年極
延享二年極

一御構有之候者を隱差置候もの
追放ものを隱置候は江戸拂
江戸拂のもの隱置候は所拂

從前々之例
一追放等に成候義は、曾て不存候得共、身元も不承糺、請人に立候もの、
過料

同追加
一追放等に成候義は、曾て不存、請人有之候故、得と吟味も不致、店に差置候もの、
過料

〔科條類典上三〕追放等ニ成候ものを圍置、或は世話致し候もの御仕置之儀ニ付、町觸可申候哉之儀奉伺候書付、

町奉行

三木彥右衞門儀、去年中之追放申付候處、立歸罷在不屆ニ御座候、依之先達而申上候通、追放等ニ罷成候もの、御構場所ニ罷在候儀ニ付、左ニ申上候、

公儀御仕置江戸拂追放に成候ものは、證文申付、追放は御構場所書記相渡、右町內一類之もの共まで承候儀ニ候處、御當地ニ隱レ罷在候もの共も有之様ニ相聞申候、畢竟圍置候もの有之故、右之通ニ而御仕置も不相立儀ニ御座候間、向後追放もの等御構之場所ニ圍置候はゞ、當人も同様之御仕置ニ申付、家主五人組

朱書
此同様之御仕置と申上候儀は、江戸拂之ものを圍置候はゞ、江戸構、輕追放之ものを圍置候はば、輕追放、中之追放ものを圍置候はゞ、中之追放、重き追放之ものを圍置候はゞ、重追放ニ申付

候心得ニ而御座候、
名主迄右體之もの怪敷乍レ存不レ訴出、其分ニ差置候はゞ、相當咎メ可レ有レ之旨、町觸申付可レ然可レ有二御座一候哉、前々追放もの圍置相顯候得者、追放抔に罷成候得共、唯今迄御觸有レ之候儀は相見不レ申候ニ付、右圍置候ものも咎メ之儀、諸人江爲二知置一可レ然奉レ存候間、奉レ伺候、以上、

寛保元酉年六月

〔享保集成絲綸錄四十三〕寛保元酉年七月

公儀御仕置ニ而江戸拂、又は追放等ニ成候者、御構之場所隱れ罷在候も有レ之樣ニ相聞候、畢竟右體之者と乍レ存圍置或は致二世話一候者有レ之故之儀ニ而、不屆至極ニ候間、於二相顯一は、圍置候者も當人同前之御仕置申付、家主五人組名主迄乍レ存差置候はゞ、相當之咎メ可二申付一候條、此旨可レ被二相觸一候、

七月

〔御仕置例類集一〕明和九辰年御渡

奈良奉行伺

一所拂之もの、又は御仕置ニ成候近き親族、幷夫等を隱置候もの、御咎之儀ニ付評議、

先達而評議仕申上候、小菅備前守相伺候、御構之場所江立入居候もの共御仕置之內、和州伊與戸村助四郎妻小りん、園田村(〇一本作二遠田村一)源次郎妻つたは、三十日手鎖と評議仕申上、安藤彈正少弼手限ニ而相伺候作州河井村甚右衛門盜ニ逢候一件之內、因州智頭宿伊右衛門妻けんは、三十日押込と御咎附仕差上、兩端ニ相見候段御尋ニ御座候、

此儀御定書ニ御構有レ之ものを隱し差置候もの追放ものを隱置候はゞ江戸拂、江戸拂之ものを隱置候はゞ所拂と有レ之、所拂之ものを隱置候もの之御定は無二御座一幷御仕置ニ成候近き親族、夫等御構之地江立入候を穩便にいたし候は難二默止一筋ニ御座候間、前書御定有レ之類も品ニ

寄一二段輕御咎ニ相成、右所拂之ものを隱し置候ハ御仕置ニ成候近き親族夫等を隱し置候ものは、手鎖押込之内申付候例有之、其節々似寄之例を以御咎附仕候間、區々ニ相成候得共、或は逼塞、遠慮ニ當り候科ニ而も、寺持無之出家は御仕置之仕形無之候故押込申付候、又は手鎖、過料も輕き寺院出家武家之家來等は押込申付、百姓町人體之女は手鎖過料ニ相成候も御座候得共、品ニ寄押込申付候も有之手鎖押込過料は、身分相當之御咎ニ而、差而輕重は有御座間敷哉ニ奉存候、然共御咎相成候ものは、押込より手鎖之方難儀仕候間、百姓町人體ニ而は押込之方輕く御座候間、以來所拂之ものを隱置候もの、幷御仕置ニ成候近き親族夫等を隱し置候もの、男は三十日手鎖、女は三十日押込と相極置候はゞ、區々ニは相成申間敷哉ニ奉存候、

卯十二月

朱書
評議之通濟

〔御仕置裁許帳〕七 追放立歸之者之類、幷追放之者請負仕者之類、附追放之出家致還俗、遠國ニ而主人之名を僞通る者、

寛文十年戌二月六日

壹人忠兵衛　是は榑正町三郎兵衛店之者、野村意心、六尺七兵衛と申者、盜物之出入ニ付、意心訴訟申ニ付、去年中籠舍申付置候處、盜物之證據不分明候間、意心江其段申聞、忠兵衛請人成ル故、證人ニ立、命を助、江戶日本橋より五里四方追放申付候處隱置、又候哉此者下請ニ立、牛井牧仙江奉公に出シ置候を、意心見出シ、重而訴訟申ニ付籠舍、

右之者戌三月二日、十里四方追放、

〔御仕置裁許帳〕七 追放立歸之者之類、幷追放之者請負仕者之類、附追放之出家致還俗、遠國ニ而主人之名を僞通る者、

元祿十一年寅二月五日

壹人長兵衞　是は通旅籠町市左衞門店之者、此者請ニ立、何助と申者を、土屋相模守殿江中間奉公ニ出シ置候處、何助儀當四月二十五日、南紺屋町ニ而、池田帶刀中間傳六、幷松平伊賀守中間作右衞門と申者兩人ニ手を負せ候付、其節何助儀、牢舍申付候處、當月六日、於評定所ニ江戸追放いたし候、然處頃日右之何助儀立歸、長兵衞方にかくまひ置候を、家主見付候由ニ而、召連來ニ付、遂僉議候處、右之通無紛不屆ニ付、牢舍申付候、〇中略

右之者同寅二月七日、江戸追放

〔科條類典下六〕寛保三亥年

一旦追放ニ成、御構之地に罷在　もの、幷店請家主御仕置之例

預ケ　水谷町壹丁目三郎兵衞店　市右衞門

右市右衞門儀、七郎兵衞事、九兵衞重追放に相成候者とは、曾而不存旨申候得共、店請に相立候上は、別條無之身分に候哉、得と可相糺處、無其儀重追放もの之店請に立、店借り遣候段不埒に御座候間、過料三貫文可申付候哉、

此御仕置御定書には無御座候

預ケ　龜島町　家主　十右衞門

右十右衞門儀、七郎兵衞事、九兵衞重追放相成候ものとは曾而不存、市右衞門店請に相立候故店借シ候旨申候得共、得と吟味も不致不念に御座候間、過料三貫文申付候、

此御仕置御定書には無御座候〇中略

寛保三亥年十二月十九日御下知書　島長門守江〇中略

過料三貫文　水谷町壹丁目三郎兵衞店　市右衞門

過料三貫文　　亀嶋町　家主　十右衛門

右之通御仕置可被申付候

十二月

〔御仕置例類集 三ノ七〕寛政四子年五月　　御勘定奉行　根岸肥前守掛

松平伊豆守殿御差圖

一武州久下村百姓共と認候無名之御箱訴一件

水野伯耆守知行武州埼玉郡久下村　久作事　忠左衛門

右之もの儀、飯村平作は、重追放ニ相成候ものニ候處、長澤主税、又は松平主水と名前を替、御構場所致徘徊候を此もの方ニ差置、親喜内及老衰候ニ付、役用其外共、平作江致相談、身上不如意ニ候迚、賴母子と名付、金子取集メ、其上權太郎ゟ及出訴候出入之節、長澤主税は、飯村平作弟之由申僞、平作任申旨、地頭役人申付之由申之、平作と主税は別人之段百姓共ゟ印形書付取之、村内平兵衛印形相滯候儀をも地頭江申立、右出入諸雜用茂平兵衛ゟ爲差出致内濟候始末、不屆ニ付江戸拾里四方追放、

右御仕置附

右御定書ニ、御構有之ものを隱差置候もの、追放ものを隱置候はゞ江戸拂と有之ニ見合、此者儀は平作と相談之上、親喜内老衰致候ニ付、役用其外共取計、賴母子と名付、金子取集候始末、其外ニも不埒有之候間、右御定ゟ一等重く、江戸拾里四方追放、

〔御仕置例類集 三ノ七〕寛政五丑年十月　　町奉行　小田切土佐守掛

戸田采女正殿御差圖

一淺草聖天横町辨次御構場所江立入候一件

雜載

淺草聖天横町安五郎店長次郎母　きく

右之もの儀、入墨之上江戸拂ニ相成、御構場江立入候辨次妻ニ相成候ニ付、先達而三十日押込相成、其節辨次は江戸拾里四方追放ニ相成候ニ付、同人ニ相別、悴長次郎を致店主ニ、安五郎店ニ罷在候處、當二月中辨次罷越、在方ニ而荷持稼致候得共、給續兼候間致同居度旨相賴候迚、右御仕置後度々御構場所江立入、輕追放に相成候儀は不存候共、先達而江戸拾里四方追放ニ相成、御構場所江立入候儀は乍存同居爲致、其上家主安五郎相尋候節、在所先ニ而致逗留候旨僞申聞罷在候段、不埒ニ付所拂、

右御仕置附

右寛政元酉年十二月、初鹿野河内守伺之上御仕置申付候、小石川金杉水道町七右衛門店三之助妻かよ儀、夫三之助先達而中追放ニ相成、此ものは親湯島六丁目佐兵衛店長右衛門方ニ罷在候處、去年十一月三之助罷越、御當地店持度由相賴候ニ任致世話、本鄕元町彦右衛門店德兵衛妻たよ江相賴、七右衛門店借受遣、御構場所江住居爲致候段、夫之儀與は乍申、不埒ニ付所拂申付候例ニ見合所拂

〔憲敎類典 二ノ三 國替所替〕寛文八戊申年三月

覺

一日下五郎八義、應進退家來之者不致扶助、小科之輩不寄男女數多殺害之、其上知行仕置惡敷、諸事不作法之段、爲上聞、領知被召上之、御定之國々所々御追放之事、

一福富平左衛門儀、累年知行仕置惡敷、對百姓非分之課役申懸之、困窮之、其上家來之者非分召仕、常々不作法之段及高聽、領知被召上之、御定國々所々御追放之事、

寛文八年申三月日

〔憲教類典 四ノ五 評定〕正德二壬辰年六月廿五日

一追放之親類遠慮之定之事例不相見候に付、御老中方、若年寄衆、御相談之上、御扶持被召放候者之親類之通遠慮仕候、

正德二壬辰年六月廿五日

〔科條類典 上 二〕享保三戌年

類族之者之儀ニ付御書付

一類族之者、唯今迄追放ニハ不罷成候得共、追放申付候而も不苦候事、

一離別又ハ養子之義絶にて、類族をはなれ候ものハ、二季ニ兩判之證文を以可相屆候、變死、病死、死罪、欠落、遁世等ハ、二季ニ無判之書付ヲ以可相屆候事、

右之趣、向後可被心得候、以上、

十一月

〔評定所張紙留〕文化十一戌五月

大津町方刑名之事

大津町方掛御仕置之内、輕追放以下刑名御尋ニ付申上候書付、

石原庄三郎

大津町方掛ニ而所司代江相伺候御仕置之内、輕追放以下之御仕置ニ、大津近江國中拂、又ハ大津を構、洛中洛外拂、山城國中拂抔と申刑名有之候哉、御尋ニ付取調候處、拂〔○拂恐衍〕大津拂、近江國中拂之刑名は、是迄御座候得共、大津を構、洛中洛外拂、山城國中拂と申刑名ハ無御座候、依て此段申上候、以上、

戌五月　石原――

> 天明年中迄ハ京都を構、大津拂山城國中拂等之刑名有之候處、京都之儀、禁裏御座所ニ付、入墨之上洛中洛外拂、或ハ山城國中拂等有之候處、江戸表之御振合と格別相違もいたし候故、大津之儀は場所隔候儀ニ付、敲等ニ相成候もの江構は付不申儀ニ牧備前守殿御沙汰有之、其後ハ右刑名之御仕置無御座候、依て此段下ヶ札を以申上候、

〔東湖隨筆上〕鍋島家ニテハ庶子幾人アリテモ、決シテ他ヘ養子ニ出サヾル家法ナリ、〇中略家臣モ又是ニ准ジ、他國ヘ出スコト嚴禁ナリ、家臣而已ナラズ、庶民ト雖ドモ境ヲ出ルコトヲ不許、犯ス者アレバ理非ニ不拘死刑ナリ、領中十郡ノ内、一郡ヲ配所ト定メ置、四民トモニ罪アル者ハ、此一郡ヘ押込置ナリ、往古ハ他國ヘモ追放シタルガ、天草ノ亂ニ、先侯勝茂軍法ヲ犯スヲ以テ、幕府ヨリ評論アリケルトキ、鍋島家ノ一大事ト世上專ラ評判アリケルニ、兼テ鍋島家ヨリ罪ヲ獲テ追放セラレタル者ドモ聞及ビ、故主ノ一大事見捨ガタシトテ馳參ル者三百餘人ニ及ベリ、其後鍋島家ニ事ユヱナク濟テ安堵シケルガ、勝茂深ク舊臣ノ恩義を忘レズ馳參リタルヲ感ジテ、是ヨリ他領ヘ追放ト云コトヲ被止、今ニ其法ヲ守ルトゾ、

〇

追院

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一追院　從前々之例　住居之寺江不相構申渡候所ゟ直拂遣

〔張紙留〕

右京亮(松平)懸

一追院ハ、袈裟を取、砂利江下し爲引候、袈裟ハ拂場所ニ而相渡候、

一江戸拂、同拾里四方構ハ、袈裟を取、砂利江下し、衣之上江繩を懸、拂場所ニ而袈裟相渡候、

右天明七未年十月二日、羽州風間村高禪院學禪同人弟子智明御仕置之節、右之通取計相濟、

〔諸例類纂六〕天保十一子年正月廿二日、寺社奉行松平伊賀守殿江差出、四月七日御附札濟、〇中略

一脱衣追院と申候ハ役所ニ而袈裟衣を取、我物欠所ニ而追拂可㆑申哉、且爲㆑脱候袈裟衣ハ如何取計候而可㆑然御座候哉、

付札

書面追院之ものへ脱衣申付候義、先ハ無㆑之事ニ候、且御自分仕置ニ而脱衣ハ容易ニ不㆒相成㆓義、欠所ハ罪狀之次第ニも寄候事故其時ニ臨ミ、科之次第被㆒問合㆓候方与存候、

一綸旨頂戴之寺院、脱衣追院申付候節、右綸旨之儀ハ、如何取計可㆑申哉、

但脱衣ニ無㆑之、追院計之節、綸旨之儀ハ如何取計可㆑申哉、

付札

書面追院等御申付候節綸旨之儀ハ、本寺ニ而可㆒取計㆓事ニ付、其役場へ御取上ニも不㆑及義と存候、

一追院と申候ハ役所ニ而申渡、袈裟計取、我物欠所ニ而追放可㆑申哉、且取候袈裟ハ、如何取計候而可㆑然哉、

但追院重ハ領分中構、輕ハ其時其寺計構候而可㆑然御座候哉、

付札

書面追院ハ、袈裟を取、砂利へ下し引せ、右袈裟ハ拂場所ニ而相渡、我物ハ不㆑及㆑欠所候、追院ニ御領分并居村等構候義無㆑之事ニ候、

一退院と申候ハ、役所ニ而申渡住居之寺歸、我物ハ遣爲㆑退可㆑申哉、

書面退院ハ袈裟を不㆑取、扣席へ爲㆑引、住居之寺へ立歸候上、我物ハ持退候而も差構無㆑之候、

子四月

右之通兼而心得罷在度此段奉㆑伺候、以上、

正月廿二日　　　松平主水家来 天野猪惣太

子七月朔日、越前守殿奥御祐筆を以、寺社奉行稲葉丹後守殿へ御問合、八月七日、左之御答書被差出候、

追院被申付候者、御領分中小寺留守居いたし居不苦候哉御問合御座候、右ハ追院相成候出家、一寺之留守居難申付との取極も無之候間、宗法ニ寄、差別も可有之哉と、諸宗觸頭共をも相尋候處、公儀御仕置ニ而追院ニ相成候者ハ、小寺たりとも、留守居ニ差置候儀無之候得共、本寺等ゟ追院申付候者ハ、一宗僧侶之列を不除故、改心見屆候上、小寺之留守居等ニハ、差置候由申立候間、此度御問合之者も、公儀御仕置ニ而、追院ニ相成候義ニ無之上ハ、御領分中小寺之留守居ニ被差置候而不苦筋と奉存候、

子八月

〔御定書百箇條〕家質幷船床髪結床書入證文取捌之事

延享元年極

一寺社付之品、書入又は賣渡證文を以、金子貸借於致候には、　借主　追院

〔的例黄紙之寫〕追院

安永元辰七月、佐渡守殿御下知、　　一座懸り

一播州上鴫川村三郎右衛門外三人相手、高野山谷上寶城院離旦一件之内

紀州高野山谷上古義眞言宗寶城院堯遍病氣ニ付代兼役僧

本光院　學乗

此寶城院堯遍儀、本末論或は錄役座階法系住番世牌等、其外宗門法儀ニ懸り候公事訴訟は、其錄所觸頭本寺等ニ而遂吟味、他宗又は俗人江懸り候出入は、添簡を以可差出旨、寛保年中申渡有之、御代官領主地頭添簡を以、俗人願候とも相手方末寺之寺院江利害可申聞は格別百姓共

を呼出し可致吟味筋ニ無之仕來候迚、差紙を以呼出し、百姓不殘罷出候樣申遣候儀は不法之至、其上下鴨川村百姓共領主ゟ之添簡を以罷出候節、添簡迄も不取上打捨置候段、不埒至極ニ付追院可申付哉、

但此もの再應呼出候處、老衰之上大病ニ而不罷出候間、御仕置之儀高野山學侶在番江可申渡候、

一本光院學乘儀、役僧乍勤同樣不埒ニ付、退院可申付哉、

御仕置附

右寬保年中ニ申渡有之候處、百姓共之願を取上、度々差紙を以呼出候段は申渡を不相用ニ御座候間、中追放ニも可奉伺處、任仕來高野一山ニ而心得違仕罷在候間、此もの共計重クも御仕置附難仕候ニ付、百姓不殘罷出候樣不法之差紙遣、幷領主之添簡迄も不取上、百姓共願出候出入を捨置候段不埒計ニ而も、其儘住職ニ而は難差置御座候間、堯遍ハ追院、學乘も寺持之儀ニ御座候間、追院 典 御仕置附仕候、

〔後見草下〕又其年〇安永元年の事成と覺ゆ、〇中略 凌雲院、覺王院、信解院の三僧正公に召捕れ、極惡人を見るごとく獄屋の內に囚れ給へり、是大乘小乘とやらんいへる法儀の上の事成よし、無程許され給へども、東叡山を追拂はれ、無官の僧と成給ひぬ、

〔的例黃紙之寫〕追院

安永二巳八月、右京大夫殿御下知、 一座懸り

一常州大增村名主組頭正法寺旦中惣代茂右衞門外貳人、相手正法寺隱居慶岸外三ヶ寺引導燒香之儀ニ付出入、

御朱印地常州新治郡大增村曹洞宗正法寺 貫道

此正法寺貫道儀、村役人共江預ケ、小前百姓共江貸附置候金子返濟滯候迚、新藏病死いたし候節、引導燒香相滯、金子返濟可致由を承り取置遣、右金子請取相濟候處、猶亦旦中江引導燒香之儀相斷、殊ニ文平次女房病死いたし取置候樣、本寺ゟ申渡有之候處不相用、寺役第一之引導燒香相滯候段、旁不屆ニ付追院、

御仕置附

右檀家之內相果候を無謂數日不弔、我儘いたし候もの、寺社奉行ニ而退院申付來候之處、此ものは本寺之申渡も不相用、品不宜候間追院與御仕置附仕候、

〔御仕置例類集三ノ十八〕寬政六寅年十二月

太田備中守殿御差圖　　青山下野守掛

一信州上川路村開善寺領主申付難澁致し候一件

堀大和守領分　御朱印地信州伊奈郡上川路村臨濟宗妙心寺派開善寺　唐山

右之もの儀、領主ゟ目見可致段申渡有之候節、禁裏御取扱ニ准じ金紋挾箱を爲持、城中乘輿致度段申立候得共、聞屆無之、取扱方存寄ニ不相叶候迚、病氣之由ニ致成、領主在著以來、一度も不罷出、殊ニ妙心寺ゟも領法を以、目見申付候儀、故障可申立筋ニ無之段、申越候をも不相用、領主申付難澁いたし候段、旁不屆ニ付綸旨取上追院

退院

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一退院　住居之寺を可退旨申渡

〔類例秘錄九〕松平紀伊守　寬政二戌年十月、松平甲斐守ゟ、

本寺退院申付候節、領中徘徊差留候も不苦哉、

書面寺院退院御申付候ハ勿論、追院御申付候共、領中徘徊差留ハ難成、領中差留ニ而ハ、領分拂

ニ相當、追院ゟ重キ科ニ相成候、且退院追院ニ、脱衣ニ附候義ハ無之候、

〔諸例類纂 五〕文化六巳年、寺社奉行へ佐渡奉行ゟ問合幷答、

不埓之筋有之、退院申渡候得ハ、其寺を立退候義興相心得罷在候、且亦一向宗ニ而ハ實子後住ニ相成候得共、差別無御座候哉、右之段爲心得承知仕置度御問合仕候、否被仰聞被下候樣仕度候、

子十二月

御書面之趣令承知候、不埓有之退院申付候上ハ、寺院ハ諸宗とも、其寺を立去候迄ニ而、一向宗ニ候とても、取計方ニ差別無之候、

丑十一月　　松平和泉守

〔的例黄紙之寫〕逼塞

安永五申十一月、佐渡守殿御下知、　　太田播磨守懸り

一羽州新田村西光寺下人藤兵衞を、住持快言切殺候吟味一件、

元上杉彈正少弼御預所當時山中太郎左衞門御代官所

羽州置賜郡新田村　新義眞言宗西光寺　快言

此西光寺快言儀、召仕藤兵衞慮外致候迚切殺候段、出家之身分を忘却いたし不埓ニ付、三十日遠慮可申付哉、

御咎附

右例相見不申候、慮外いたし候下人を主人切殺候段、百姓町人ニ而も主人咎ニハ及申間敷哉ニ候得共、出家之身分ニ有之間敷儀ニ御座候間、評定所一座評議之上、三十日遠慮と御咎附仕候、

朱書
御下知

一宗構

退院之上、寺法之通取計候樣觸頭江可被申渡候、

御勘定奉行　根岸肥前守掛

〔御仕置例類集三ノ十〕寛政二戌年七月

松平和泉守殿御差圖

一武州千葉村道心者光覺變死一件

伊奈右近將監支配所武州葛飾郡下千葉村　御朱印地新義眞言宗正王寺　榮山

右之もの儀、弟子光覺小菅村ニ而作物を盗取候ニ付、同村之もの共差押連參候砌、右村之もの江對申譯之爲ニ候迚、光覺を縛置致打擲既相果候及始末候段、出家之身分を致忘却、手荒成致方不埒ニ付、退院之上、寺法之通可取計旨觸頭江申渡、

御差圖

無構

右御仕置附

右安永五申年、太田播磨守御勘定奉行勤役之節、手限伺之上御仕置申付候羽州置賜郡新田村、新義眞言宗西光寺快言儀、召仕藤兵衛慮外致候迚切殺候段、出家之身分を致忘却、不埒ニ付、三十日遠慮可被仰付哉之段奉伺候處、退院之上寺法之通取計候樣觸頭江可申渡旨被仰渡、其通申渡候類例ニ見合、退院之上、寺法之通取計候樣觸頭江申渡、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例
一一宗構　其宗旨を構

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政五丑年十一月

戸田采女正殿御差圖

御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

一野州東荒村蓮淨院ニ而致隱富候一件

御朱印地戸田因幡守領分野州河内郡駒生村　新義眞言宗能滿寺　春岳

右之もの儀、蓮淨院住職之節、富突興行致し候はゞ同寺普請も可相成旨、五郎平申聞候迚、御觸之趣致忘却、富突興行爲致、奉納金貰請候段不屆ニ付、一宗構江戸拂、

但貰ひ受金取上

右御仕置附

右安永五申年、牧野備後守寺社奉行之節、御仕置申付候、甲州八代郡市川上野村御崎大明神神主市川内膳儀、神樂興行、初穗賽錢餘計を以、社修復之助成ニ致し度旨願請、紛敷儀無之樣可致旨申渡置候處、右申渡を引違、御免代々神樂鬮與認候札を出、札料札數落札等之員數を極、札に當候もの共江拔札ニ金子を添相渡候段、富突ニ無相違、不屆ニ付神職取上、江戸拂申付候例ニ見合、一宗構江戸拂、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政七卯年七月　御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

戸田采女正殿御差圖

一下總國香取郡村々ニ罷在、不受不施派相持候出家共引合之もの一件、

有馬伊織知行下總國香取郡林村　日蓮宗一致派法林寺　泰順

右之もの儀、不受不施相持候儀者無之候共、先住日迅境内ニ致隱居、右宗派相傳罷在、平日經意之議論も仕候身分ニ而、常々之執行ニも不心付居候上は、本寺ゟ嚴敷申渡有之、檀家之もの迄心得候旨之申口難取用、剩日迅不受不施相持候趣相聞、召捕候程之儀ニ而、既ニ日迅も及白狀候處、右宗派相持候ものニ無之段申立、書付差出候始末旁不屆ニ付、一宗を構、江戸拾里四方追放、

右御仕置附

右明和三戌年、寺社奉行掛伺之上御仕置申付候、上總國山邊郡眞亀村淨泰寺憲承儀、不受不施宗

門内信心致候もの有之由之風聞承り候はゞ、別而心懸可相糺處、無其儀故檀家之內、右宗門持候もの有之儀不存段、菩提寺住職致、宗門請合候詮無之、不埒ニ付、退院申付候例見合、格別品不宜候間、一宗を構、江戸拾里四方追放、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一派構

從前々之例
一　一派構　　其一派を構、同宗にても外之派に成候へば無構、

松平和泉守殿御差圖　　町奉行　池田筑後守掛

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政五丑年四月

武家奉公構

一山野邊友三郎中間吉右衛門致博弈候一件

四谷鹽町吉右衛門店九番組人宿七右衛門寄子　庄助

右之もの儀、博弈之儀は御法度ニ而、近來嚴敷御觸も有之處、去子十二月中、武家方中間相勤居候節、町人并傍輩中間申合めくり博弈可致與申合候段不埒ニ付、武家奉公構、

〔御仕置例類集三ノ十五〕寛政二戌年五月

松平越中守殿御差圖　　御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

御料所地方奉公構

一相州座間宿村杢右衛門裁許之儀申立候一件

元野口辰之助手代當時風祭求馬手代評定所定出役
中村雄助

右之もの儀、出入有之地改爲吟味罷越、場所に而相糺候、公事人相州座間宿村杢右衛門儀、此もの宅江罷越候はゞ、直に差歸し、其段可申立處、裁許之趣承度旨申聞候を、及應對手荒に取扱候而は、遺恨可請與、實事には無之候共、此者より裁許之見込申立候書面、爲見可申旨、一旦申聞候始末不屆に付、御料所地方奉公構暇差出、

古事類苑

法律部三十七

下編上

鑛山役夫

寄場人足 奴（併入）

○

奴

四四二

古事類苑

法律部三十七

下編上

鑛山役夫

鑛山役夫ハ、無籍、又ハ入墨、敲ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ、歸スル所ナキカ、又ハ再犯ノ虞アル者ヲ、佐渡鑛山ニ遣ハシテ之ヲ使役スルナリ、而シテ鑛山役夫ガ其地ニ於テ犯罪アル時ハ、鑛穴ニ禁シメ置キテ、出ヅルコトヲ聽サズ、之ヲ敷內追込ト云フ、

鑛山役夫配役法

〔天明集成絲綸錄 四十八〕安永七戌年四月

御勘定奉行江

近來無宿共多、自然と惡事も致候ニ付、此度無罪之無宿共、先四五拾人佐州江差遣、水替人足ニ遣候筈候間、右遣方之儀、最寄御代官ニ而、爲取計候樣可被致候、尤無宿共、町奉行ゟ御代官手代江引渡筈候間、被得其意、町奉行佐渡奉行可被談候、

四月

〔天保集成絲綸錄 百〕天明八申年十一月

三奉行江

手元ニ有之品、幷途中之小盜等致し、其外盜之科ニ而、敲又ハ入墨之上敲、或ハ入墨ニ申付候もの引渡遣すべき方無之無宿ハ、門前拂ニ成候所、御仕置相濟候上ハ、則無罪之無宿ニ候間、門前拂ニ不致、直ニ溜預申付置、佐州江水替人足ニ差遣可申候、

右之通、盗之科ニ而御仕置濟、門前掃ニ可致無宿、向後佐州江遣旨申聞セ、溜預ニいたし置、追々佐州江差越候樣可被致候、尤重而相達儀も可有之候間、夫迄ハ先右之通可被取計候、

十一月

〔甲子夜話 四〕或人曰、佐渡金堀ノ穴ノ水カヒ人足ニ往クハ、皆微罪アル者ドモナリ、

〔天保集成絲綸錄 百〕寛政元酉年八月

先達而書付帳面被差出候、無罪之無宿、在留之分片付方、左之通可被取計候、〇中略

一御料出生之無宿、并万石以下領知、且又寺社領出生之無宿は、まづ溜江差置、追而佐州江爲水替遣候共、又ハ荒地起し返し、主法定り候上、片付候共、享保八年、評定所一座より評議申出候通、御城外御普請之人足ニ遣ひ候とも可致事、

右之通ニ取計候樣可被致候

八月

〔御仕置例類集 一ノ三〕文化五午年御渡

大坂御城代伺

一大坂町奉行支配國ニ而、召捕候惡黨もの、佐州水替人足ニ差遣候儀ニ付評議、

去月廿六日御渡被成候、松平周防守申上候書付、一覽仕候處、大坂表并同所町奉行支配國内、追々惡黨もの致増長候由相聞候ニ付、輕罪之もの共、其罪之品合ニ寄、佐州金銀山水替人足ニ差遣候はゞ、自然と土地之風儀も相改可申哉、右諸雜費ハ、欠所過料錢之内ゟ差出候積、取調罷在候内、佐渡奉行ゟ、右金銀山水替働之もの、近年人數少ニ付、御雇入等いたし、御入用相增候間、大坂表より無宿共差遣候樣致度段、懸合有之、旁相伺候旨、大坂町奉行申聞、右ハ大坂表之取締ニも相成、佐渡奉行ニ而も、辨利も宜可相成儀と存候趣ニ御座候、

此儀文化五辰年、甲府ニ而御仕置申付候もの、佐州江水替人足ニ差遣候樣仕度段、甲府勤番支配相伺候節、評議之上、遠國ゟ佐州江遣候先例ハ無御座候ニ付、不被及御沙汰方可然哉之旨申上、其通被仰渡候儀も御座候得共、今般佐渡奉行ゟ、大坂町奉行江懸合之書面ニハ、長崎表ゟも無宿共差遣候儀有之由、右之通例も有之候上ハ、大坂町奉行伺之通取計、勿論右手續等難決儀も候はゝ、町奉行江問合候樣可申渡旨、御城代江被仰渡可然哉ニ奉存候、

午九月

御書面御附札之通、大坂御城代江被仰渡候旨、承知仕候、

午十月十二日　評定所一座

松平周防守江

扣　備中守

大坂表幷町奉行支配國內ニ而、惡黨者追々増長致候由相聞、土地之風儀不宜相見候ニ付、町奉行勘辨內評議仕候處、江戸表より佐州江金銀山水替人足ニ被遣候振合ニ致、大坂表幷町奉行支配國內輕罪之もの、其罪之品ニ寄、右同樣佐州江差遣候樣取計候はゝ、自然と土地之風義も相改可申哉、其上佐渡奉行ゟ町奉行江懸合之趣も有之候ニ付、別紙之通、松平右京大夫在府中ニ付、同人方江、內藤隼人正、高井山城守ゟ書付差出シ申候間、取調罷在候內、御役御免ニ付、私方江引送申候間、熟覽仕候處、大坂表之取締ニも相成、其上土地之風儀も相改、佐渡奉行ニ而ハ、辨利も宜相成可申儀と奉存候、尤囚人佐州江差遣候、諸雜費之儀ハ、欠所過料錢之內より差出候ハ、別段之御入用も掛申間敷と奉存候、依之隼人正、山城守ゟ差越候書付壹通、佐渡奉行ゟ町奉行江之懸合書寫壹冊入御披見、此段相伺候、宜敷御差圖被成可被下候、

八月

附札

伺之通取計、勿論右手續等、難決儀ニ候はゝ、町奉行江問合候樣可被致候、

〔御仕置例類集一ノ三〕文政八酉年御渡

佐渡奉行伺

一佐州金銀山爲水替差遣候、無宿人數減方之儀評議、

當八月十四日評議いたし可申上旨、出羽守殿御書取を以被仰聞、御渡被成候佐渡奉行相伺候書面、一覽仕候上、無宿水替、佐州江差遣候人數減候而も、差支無之哉否之儀、評議仕候趣、左に申上候、

右佐渡奉行申上候趣ニ而ハ、同所金銀山爲水替差遣候無宿共之儀、寛政八辰年、目當高凡人數貳百人之積を以、御入用高取極候由之處、近來臺稼と唱、手廣ニ相稼、水替人足多入立候ニ付、無宿共貳百人之都合ニ相成候樣、多人數差下之儀可申上儀之處、元來無宿ニ相成程之もの共ニ付、種々惡事相企、又ハ逃去候儀も有之、其度々水汲上方差支、臨時之御入用も相懸り候間、多人數ニ而ハ、猶更取締方難行屆候ニ付、前書貳百人分御入用之內、已來江戸水替御入用ハ、百人分ニ相極、殘百人分ハ、地水替と唱、是迄も無宿共ニ而不足之分ハ、鄉市之内ゟ雇入、爲相働候ものども、業も事馴居候間、右之もの共江組替へ候得バ、取締も行屆、御入用も相減候趣ニ候得共、一體無宿共、佐州江差遣し候起立ハ、江戸表其外近國ニも、無宿ども數多致徘徊、火付盜賊も多、騷敷候ニ付、懲しめ之爲召捕、水替人足ニ可差遣旨、安永七戌年被仰渡、其後も伺濟等ニ而、惡事有之、敲或ハ入墨等之御仕置ニ相成候もの、幷追放申付候而も、手放候而ハ、元居村之ものども致難澁、又ハ顯候惡事ハ、左而已無之候得共、不屆之風聞等有之、强而可遂吟味程之力も無之もの、幷寄場人足之內、職業無情ニ而、申付不相用もの等、爲懲佐州ヘ差遣候儀ニ而、御仕置之一助ニ相成居候儀ニ御座候、右無宿共、差遣候儀相減候而ハ、差支無之とも難申、尤年々四人之多少も有之儀ニ付、是迄小屋内ニ、無宿

共、凡何人程宛罷在候哉之段、佐渡奉行江承糺候處、近來大體人數九拾人有餘ニ而、去ル午年ハ、百三拾人程ニ相成候處、無程多人數逃去、相減候由申聞、目當高之貳百人に滿候儀ハ無之趣ニ相聞申候、畢竟無宿共、惡事相企、又ハ彼地逃去、惡業增長致候ニ付、取締方も難行屆、專ら相伺候意味と相聞、是迄彼地逃去候もの之儀、如元彼地江水替人足ニ差遣候儀も有之、別段御仕置ニ不相成より、無宿共、追々惡業致增長、取締も行屆兼候儀ニ奉存候、右ハ去ル申年、彼地逃去候もの共、御仕置之儀、評議仕申上候通、今般嚴科ニ被行、捨札彼地江爲建候上ハ、相殘候無宿共惡事企候儀も自ら相止、縱令此上人數相增候共、小屋內取締等行屆兼候儀も有之間敷、其上既ニ無宿共貳百人ニ相成候儀無之、百人ニも不滿方、多分ニ付、前々之通、無宿共人數目當高ハ貳百人と居置、右無宿ども人數より不足丈ヶを地水替と唱候、土地之者雇入、右御入用之內ニ而、流用取計候はゞ、別段目當高相減、御入用組替不申候共差支も有之間敷哉ニ付、右之通相心得取計候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉十月

〔公事手留〕佐州江水替人足ニ差遣候左之通

主水正石川〇懸

大野村無宿坊主勘藏一件落着書物〇中略

申渡

大野村無宿坊主
勘藏

其方儀、下總國上矢切村外壹ヶ村、地內野田ニおゐて、名住所不存もの共手合ニ加り、廻り筒簺博奕、度々いたす始末、不屆ニ付、中追放申付、

但御構場所徘徊いたす間敷、追而佐州江水替人足ニ差遣ス、

免鑛山役夫

右申渡趣、證文申付ル、

未月日〔〇年號闕〕

中村八大夫出

〔類例秘錄　六〕〔申年七月　人足正掛〕

一無宿喜之助、博奕又ハ人ニ疵付候一件吟味伺、

書面喜之助儀、武州品川獵師町海岸外二ヶ所、原中野田ニおゐて、名住所不存ものと手合ニ加り、廻り筒篭博奕度々いたし、又ハ同國大井村喜三郎悴龜次郎ニ、金子貸吳候樣申掛、斷請憤、口論仕掛、履居下駄を以、同人を打擲いたし疵付、剩喜三郎方へ罷越、申分有之上ハ、相手可成樣申罵始末、旁不屆ニ付、敲之上、中追放申付、御構場所徘徊致間敷、右之外吟味ニ付、被呼出候もの共ハ、無構旨申渡、一同證文相濟、喜之助ハ自分方へ可被差出、別紙御構場所書付壹通相達候、以上、

申七月〔〇年號闕〕

此御下知ハ、佐州へ水替人足ニ遣ス振合也、

〔新張紙留〕御相談書

石川主水正
松浦伊勢守

先達而出羽守殿、評議ニ御下ゲ被成候、蒔田八郎左衞門相伺候、本鄕春木町壹丁目、文吉方ニ居候長次郎坊主一件、吟味書之趣ニ而ハ、同人儀、文化四卯年九月、小田切土佐守町奉行勤役之節召捕、所拂申付、翌辰年、佐州水替人足ニ差遣候ものニ候處、同十酉年、出精相働候に付、佐渡奉行ニ而、平人他國出、申渡候趣ニ有之、水替ニ差遣候もの之內ニハ、元住居近邊江當分不立戾樣、取計候類も御座候ニ付、凡十ヶ年未滿ニ而、他國出申付候節ハ、元懸江一應懸合之上可取計旨、評定所一座ゟ、兼而佐渡奉行江申達候樣可致哉ニ存候、依之御相談および候、

巳六月〔〇文政四年〕

〔朱書〕巳六月四日、於內座本紙ハ主水正持歸ル
但火附盜賊改江者、此達書、主水正ゟ爲心得爲見置、佐渡奉行江達候積り、

評定所一座

水野藤右衛門殿
田澤政次郎殿

去月中水野出羽守殿評議ニ御下ケ有之候蒔田八郎左衛門加役中相伺候本郷春木町壹丁目文吉方ニ居候長次一郎件吟味書之趣ニ而ハ同人本郷元町平吉次男ニ而欠落いたし文化四卯年小田切土佐守町奉行勤役之節召捕敲之上所拂申付溜預ニ相成翌辰年佐州水替人足ニ差遣候ものニ候處同十酉年出精相働候ニ付平人他國出御申付有之又候惡事致し候趣ニ有之水替ニ遣候ものゝ内ニ者元住居近邊江不立戻樣取計候類も有之儀ニ付凡十ヶ年未滿ニ他國出御申渡有之節ハ前以元懸拙者共方江一應御懸合之上御取計有之儀樣いたし度候尤其品ニ寄更ニ他國出難成程之ものハ以來最初ゟ其段御達候樣可致候以上

巳六月 ○中略

評定所御一座衆

水野藤右衛門
田澤政次郎

佐州銀山爲水替人足御引渡有之ものゝ内ニハ元住居近邊ニ當分不立戻樣御取計も有之儀ニ付凡十ヶ年未滿ニ而他國出申付候節ハ前以元御懸之各樣江一應御懸合之上取計候樣被成度尤更ニ他國出難成程之ものハ以來最初ゟ其段御達有之旨當六月御懸合御座候處水替共平人他國出之儀ニ付伺書當五月土○井大炊頭殿江進達仕置候間御差圖次第尚又及御挨拶候積右伺書寫爲御承知差進置候處當六月廿九日伺之通可仕旨土大炊頭殿御差圖有之候間去ル寅年以來平人申付候もの一同他國出差免前科有之ものハ御構之地江立入申間敷旨申渡一同他國出爲致申候一體水替ニ御引渡有之ものハ何れも無宿惡黨共ニ候得共敷内困苦之働ニ懲候故ニも候哉心底相改其上水替共佐州着當日申渡候掟ニも水替業出精いたし候得ハ他國出可爲致旨前々ゟ申渡候ニ付其儀を一途ニ差含駈荷惡事等をも相愼業致出精候ニ付右等之ものは伺之上佐州平人ニ申付願出次第他國出爲致候儀ニ有之併一旦困苦ニ依而改心之體ニ相成候

而も、元來素性不宜ものニ候得ハ、他國ニおゐて、又候心得違ひ、再無宿ニ相成候類も有之、寛政八辰年、坂部能州、町奉行勤役之節、再無宿ニ成候而ハ、折角歸國爲致候詮無之趣を以、取計方懸合有之候得ども、佐州ニ差置候而ハ、渡世之營方無之、其上惡風之もの、住居爲致候而ハ、國民安心不致、他國之無宿之爲ニ、自國之良民を爲悩候儀、歎敷候間、他國出之上、宿無相成候はゞ、又候召捕、水替ニ差遣候共、於佐州差支無之旨及挨拶、其段太田〇太備中守殿江申上候處、右書面御勘定奉行衆江御下ニ相成、再無宿ニ不相成樣、取計方も可有之哉、當向等御談判之上、御伺有之候樣被仰渡候由ニ而、御懸合有之候間、夫々及御挨拶候處、其趣を以取計罷在候處、四年以前寅年、平人相伺候節、兩三年も相樣候上ニ而、他國出申付候樣被仰渡候間、其後他國出不致候處、追々人數多、市中ニ住居爲致候而ハ、風俗ニも拘候儀故、當五月、他國出之儀相伺候處、伺之通被仰渡候儀ニ有之、然ル處十ケ年未滿ニ而、他國出申付候節、前以元御懸之各樣江及御懸合候儀ハ、差支之筋ハ無之候間、以來右之通取計可申候得共、更ニ他國出難相成ものハ、是迄水替ニ御引渡有之儀とハ存不申候處、文化四申年、御引渡有之候、武州崎玉郡外田ケ谷村百姓只七事、甚兵衛ハ、他國出難相成もの、由、當六月松浦伊勢守御懸合有之、追々右之類、人數相增、何程出精相働候而も、他國出不相成候而ハ、佐州當着之節、申渡候掟ニ齟齬いたし、當人共覺悟も無之儀ニ付、懸リ之もの取計を以、望を失ひ候樣存込、働方不精いたし、或小屋内申合、如何樣之惡事仕出し可申哉も難計、右ニ付、他國出難相成ものハ、以來御引渡無之樣仕度候、右ハ水替共、平人他國出伺、御差圖相濟候ニ付、先達而御挨拶兼、此段御懸合仕候、

巳八月

〔御仕置例類集一ノ三〕文政六未年御渡

佐渡奉行伺

一佐州水替爲人足差遣候、無宿共之内、平人申付候儀評議、

元小田切土佐守掛　無宿万吉改名　入墨　万太郎

元根岸肥前守掛　無宿　市五郎　外三人

元曲淵甲斐守掛　無宿七九郎事　丑之助

元永田備後守掛　寄場人足千太郎事　入墨　定助　外四人

元榊原主計頭掛　水戸無宿　卯之吉

元渡邊孫左衛門掛　寄場人足無宿　入墨　忠次郎　外貳人

右之もの共儀、敷内働方出精仕、心底をも相改候體ニ相見候もの共ニ有之、然處十ヶ年未滿之もの、他國出申渡候節ハ、前以元掛江、一應懸合之上取計候樣、去々巳年、評定所一座ゟ達御座候ニ付、今般懸合之上、差支無之趣ニ付、平人申付候樣仕度候、一體佐州金銀山水替之儀、前々ゟ自國之もの雇入、水汲人足爲致來候處、安永六酉年、御書付ヲ以、江戸表ニ、近來無宿之もの多候ニ付、佐州銀山金穿大工水替穿子等ニ、無罪之無宿共被差遣、心底も直り候もの出來候はゞ、相返候樣ニも仕、佐州ニ而差支も無之哉、殊ニ差支之儀も有之候はゞ、其節申上候心得ニ而、評議仕可申上旨被仰渡、右已前石谷淡路守、牧野大隅守よりも、追々前同樣之趣申聞候處、金穿大工穿子等之業ハ、手馴不申候而ハ難用立候ニ付、無宿共之儀ハ、水替業爲致候樣ゟ外、取計方も無之候處に、無法強勢、宜からぬ仕癖ニ馴來候者共多く有之、自國之もの共江、如何樣に歟惡事を申教候も難計、往々一國之爲不宜儀、勿論働方不宜候而ハ、銀山御稼方差支、御入用ニも拘り候儀ニ付、無宿ども被遣候而

ハ不宜趣、先役共ゟ挨拶および置候處、前書之通、御書付ヲ以被仰渡、差支之儀ハ見越之儀ニ付、先ツ被差遣候樣申上候處、翌戌年ゟ、無宿共御差下有之、元來生質不宜もの共ニ付、毎度致惡事なし、〇なし二字恐衍ニ其上漫り酒食之爲、無法ニもおよび候事共多く自然と百姓町人共、敷內之働致候儀を相厭ヒ候ニ付賃錢相增、雇入不申候而ハ、差支候樣罷成、御入用相增候間、無據年々無宿共引渡之儀、町奉行江及懸合、追々引渡候ニ付、心底改方、幷働方等ニ應、他國出爲致候積申渡、爲相働候得共、一體水替業之儀ハ、敷內數十丈地底ニ罷在、晝夜交ル々々出水汲上、至而艱難之業ニ付、人力堪兼多分ハ逃去、又ハ死失致候處、右之困苦を不厭、不怠致出精、心底も直候樣子相見候ものハ、伺之上平人申渡、他國出爲致來候儀ニ而、右無宿ども受取候儀ハ、前書之手續ニ有之、元來無罪無宿可被遣心得之處、近來ハ犯罪ニ而、不法强勢、容易ニ而ハ取扱方、手ニも餘り候程ニ有之、勿論右故嚴敷仕置仕候得共、一體之處、佐州ニおゐては、水替御入用ヲ省キ候爲而已ニ而、實ハ相好不申、乍然健成もの打揃、水替業致候得バ、御入用も相減候ニ付、年々壯年健成もの引渡之儀、其筋江及懸合候得共、病身ニ而不用立もの多く、致水替業兼、小屋內ニ致扶助置候、御入用全く御費ニ相成、自國之人數雇入候より、却而御入用相增候間、無宿ども之內、健成もの江申含、格別ニ爲勵、前條御費之補ひも罷成候樣爲取計、尤無宿共年數之義ハ、數十年相立候而も、心底相直り候體ニ而無之、水替業及難澁ニ候ものも有之、十年未滿ニ而も、到着之砌ゟ、無怠慢水替業相勵ミ、相談等ニ加り不申、相愼罷在候ものも有之、右體愼方宜相見、致出精候もの、其儘差置候而も、折角骨折候詮無之、柔弱ものの之分、却而幸ニ相當り、一同之勵ニも相成不申、別而近來弊も生、此度猶取締方等相改候儀ニ付、おのづから其褒貶無之候而ハ、勤怠之譯も相立兼候間、先ツ當分之内も年數に不拘、働方吟味之上、前書金五郎外七人之もの共、十ヶ年未滿ニハ御座候得共、到着已來、引續格別出精相勵、心底も相直候體ニ相見候段、懸之もの共申立候ニ付、平人之儀申上、併元來無宿もの之儀ニ付、他國出之

敷内追込

上、又候致惡事候事も難計、其節ハ尚又水替人足ニ引渡有之候而も於佐州ニ差支候儀無之段、評定所一座江懸合之上、此段申上候、

右ハ佐州金銀山爲水替、十三年已前、文化八未年已來、江戸表ゟ被遣候無宿共之内、數年敷内働方、無怠慢出精仕、心底も相改候ニ付、他國出之儀、兼々差配仕候もの共ゟ、掛役人迄申立、其後彌出精相働罷在、殊ニ當時水替人數御入用共減方専ら取計候處、其筋都合宜敷様、格別出精相勵候もの共ニ付、此度當國平人被仰付被下候様、掛役人共申聞候、右之通格別出精之もの平人申付候得ハ、相殘候もの共、彌無油斷出精仕、小屋内取締ニも相成候儀ニ御座候間、書面之もの共、一同平人申付、追而他國出相願候はゝ、是迄之振合ヲ以取計候様可仕奉存候、依之奉伺候、

未七月

佐渡奉行

此儀佐州金銀山爲水替差遣候、無宿共之儀、科之次第ニ寄、一旦御仕置ハ相濟候而も元住居近邊江、當分不立戻様、取計候類も有之候儀ニ付、私共銘々掛之分、凡拾ヶ年未滿ニ而、他國出申渡候節ハ、前以元掛江申聞候積、去々巳年、佐渡奉行江申達置、則今般之無宿共平人ニ申渡候儀も、佐渡奉行ゟ懸合申聞候間、取調之上、差支無之旨及挨拶候儀ニ而、一體水替人足共之勵ニも相成候趣申上候上ハ、旁伺之通被仰渡可然哉ニ奉存候、

未八月

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ二十七〕文化六巳年御渡

佐渡奉行伺

一佐州相川新五郎町幸助初筆博弈致候一件

元江戶水替入墨稻藏事

銀山金穿大工銀山內住居　定七

右之もの儀、於江戶表盜いたし候不屆有之、入墨之上、敲御仕置ニ相成候後、御仕置不相用、入墨消紛候ニ付、如元入墨之上、江戶拂ニ相成候處、御構之地江立入候不屆ニ付、江戶十里四方追放ニ相成、銀山水替人足差下ニ相成候處、去辰正月以來、幸作方ニ而かるた博弈三度いたし、其上兩度銀山內ゟ山越いたし、市中江出、幸作方ニ止宿いたし候段、不屆ニ付、存命ニ候得バ、重敲之上、日數二十日、敷內追込

此儀銀山內ゟ山越いたし、市中江出候段ハ、天明四辰年、評議ニ御下ゲ被成候、佐渡奉行相伺候、佐州金銀山敷內水替御仕置取計方之內、敷內逃去、其外輕キ惡事いたし候ものは、吟味之上、追込水替と唱、十日或ハ二十日程宛、岡江不上、敷內江追込置、水替申付、尙又及數度ニ、不埒之儀御座候はゞ、入墨申付、其內不相用候はゞ、死罪申付候積之旨、入墨之節、其もの江申渡候樣可仕、筋ニ寄、非人手下ニも申付候樣可仕哉之旨相伺、評議之上、伺之通と申上、其通御差圖相濟候ニ見合、敷內追込ニ相當可申、且幸助方ニおゐてかるた博弈致シ候段ハ、前書幸作同樣之趣意ニ付、重敲ニ相當候間、兩樣之內、重キ方江附、重敲相當之ものニ有之候得共、此ものハ當時金穿大工致し居候ども、一體水替人足差下ニ相成、其上銀山內住居之ものニ候間、水替人足御仕置之儀者、前書之通、佐渡奉行伺濟も有之候儀ニ付、彼地奉行見込之通御仕置申付候方、却而相當可致哉ニ付、伺之通存命ニ候はゞ、重敲之上、日數二十日、敷內追込可申付處、病死いたし候ニ付、其旨一件之もの江可申渡、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ二十七〕文化六巳年御渡

鑛山役夫逃亡

佐渡奉行伺

一佐州水替人足平吉初筆銀山内逃去候一件　　無宿江戸水替　庄次

右之もの儀、無罪無宿ニ而、文化三寅年、佐州銀山水替人足差下ニ相成候處、同年九月二日、青盤間歩敷上之節、途中差添之ものを川江突落、水替人足亀之助勘太一同逃去候處、尋ニ出候非人ニ被見付候節、百姓共鳶口長竿を以取巻、疵請候ニ付、亀之助所持致シ居候鎌を以、被捕候節、非人江手疵爲負候間、重敲之上、日數二十日、敷内追込咎申付候節、又候去々卯年五月廿一日水替人足八助吉助申合、青盤間歩敷上之節、途中ゟ逃去候ニ付、入墨之上、敷内追込咎ニ相成候上、又々去辰七月廿五日、青盤間歩敷上之節、逃去候處、非人ども召捕差出候間、小屋頭申付、差籠江入置候處、平吉儀、差籠ゟ出逃去候間、見遁呉候樣相頼候ニ付、平吉壹人逃候儀難相成旨申、同人相頼、差籠錠前抜貫ひ、朝鮮垣竹ヲ抜上ゲ、小屋場軒下江廻り、外圍犬潜りゟ逃出、山中ニ隱罷在候處、容易ニ食物貰ひニ出候儀も相成兼難凌候ニ付、御役所江罷出、慈悲相願候積り、赤玉村名主所江尋參り、松ヶ崎番所迄差出之儀相願候儀ニ者御座候得共、平吉逃去候趣申聞候はゝ、小屋内役目之もの江爲相知可申處無其儀、平吉相頼差籠錠前抜貫締抜出逃去候段者不埒ニ付、平吉ゟ一等輕く、重追放被仰付、如元水替人足と可相伺處、平人とも違候間、重敲之上、日數百日、敷内追込、

〔御仕置例類集二ノ二十七〕文化六巳年御渡

佐渡奉行伺

一佐州水替人足平吉初筆銀山内逃去候一件　　下總無宿寄場入墨江戸水替　平吉

右之もの儀、於江戸表船持三四郎方、目見奉公いたし居候節、盜いたし候不屆ニ付、入墨之上、敲御仕置ニ相成、人足寄場江引渡相成候處、同所丸太矢來を乗越逃去候得共、又候被捕候而は、重キ御仕置ニも可相成と後悔致シ、自訴可致と門外迄立歸候得共、一旦逃去候不屆ニ付、寄場入墨之上、

重敲御仕置ニ相成、如元人足寄場江引渡ニ相成、寛政十午年、佐州銀山水替人足ニ差下ニ相成候處、七年以前亥年八月七日、小屋場逃去候ニ付、日數十日、敷內追込咎申付候處、又候去々卯年三月二日、青盤間歩敷上之節、水替人足吉兵衛佐吉申合逃去候ニ付、入墨之上、日數二十日、敷內追込咎ニ相成候處、猶又去辰七月廿七日、青盤間歩敷內より、文六申合逃去候得共、即日尋ニ出候、小屋頭役目之もの捕候ニ付、小屋內預ケ申付、差籠江入置候處、同夜差籠關貫を動、錠前を拔逃出シ、逃去候邪魔可相成と存、庄次任頼、同人差籠之錠を捻拔遣し、差籠屋根江上、締木戸を乘越逃去、乘逃心掛候始末、重々不屆ニ付、死罪、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政八酉年御渡

町奉行筒井伊賀守伺

一無宿入墨增藏外壹人佐州を逃去候一件　　無宿入墨　增藏

右之もの儀、先達而盗いたし候依科、入墨重敲之上、人足寄場江入、其後知人江引渡ニ成候後、入墨を消紛し候依科、如元入墨、江戸拂之上、佐州江差遣し、水替人足致シ罷在、去未七月三日、此もの幷外十二人、同所中尾山ニ而水替人足ニ罷出候節、吉助平三儀、可逃去旨申ニ同意いたし、夜五半時過、鋪內番人午之助平助を吉助其外之もの共縛り置、青盤山を越、河原田町ニ引上ゲ有之漁船を引下し、一同乘移、沖合江漕出し候處、追人之小船壹艘追付、引返候樣聲懸、舟棹等ニ而、逃去候もの共を打擲およひ候故、銘々被捕押候而は、迚も助命難計候間、一同海江飛入、追人之舟を可沈旨申罵候處、右之內誰ニ候哉、舟板等投付候もの有之、舟板役人江當り、猶又追人之舟を押退逃去候樣右兩人之もの申ニ任せ、銘々船板ニ而押退漕出し、越後國江著いたし、銘々立別レ、御構之地とも乍辨、御當地江忍出被召捕、吟味之節、前書不法之始末は押隱し、一通佐州逃去候趣に申立、江戸十里四方追放ニ成、在牢いたし罷在候處、逃去候もの共追々被召捕、猶又吟味之上、有體申立候始末、不屆

ニ付、死罪、
但彼地ニ江科書捨札建候積り

寄場人足 奴併入

寄場ハ、江戸石川島及ビ佃島、常陸國筑波郡上郷村ニ在リ、寛政二年ニ始メテ置ク所ナリ、其役夫ハ、鑛山役夫ト同ジク、無籍又ハ入墨敲ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ、歸スル所ナキカ、又ハ再犯ノ虞アル者ヲ拘置シテ使役スルナリ、其寄場ニテノ犯罪ハ、寄場ノ制度ヲ以テ處罰ス、後文久元年、函館ニモ之ヲ置ケリ、

奴ハ、重罪者ノ妻、及ビ女子、又ハ人ニ從ヒテ關ヲ私度シ、及ビ越度シタル女ノ如キ、並ニ其本籍ヲ除キテ、獄舍ニ禁シメ置キ、之ヲ乞フ者ニ下付シテ奴婢ト爲サシムルヲ云フ、而シテ乞フ者ナキ間ハ、長ク獄內ニ於テ使役スルナリ、但シ男子ノ爲ニモ希ニハ此刑ヲ施シヽコトアリ、

〔憲教類典四ノ二十八加役人足〕寛政二庚戌年二月十九日

松平越中守殿御渡

寛政二戌年二月、此度鐵炮洲向島、加役方人足寄場所出來ニ付、一件御書付、

長谷川平藏

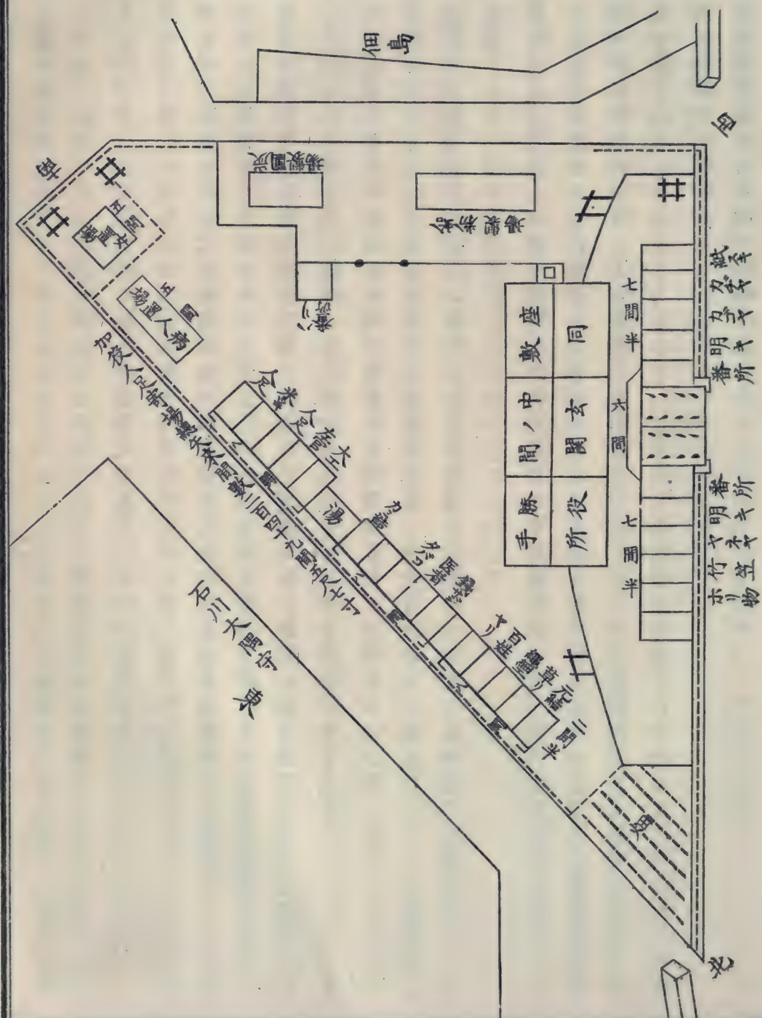
今度無宿共、加役方人足ニ被仰付候間、右御用可相勤場所之義ハ、石川大隅守屋敷裏、葭沼壹万六千三拾坪餘、御用地に成、右之內江取建被仰付候間、御普請奉行江相談、其方江請取、地所築立等之義、追々可被相伺候、

右場所、以來加役方人足寄場と可被相唱候、

〔京兆府尹記事九〕長谷川備州死去子息平藏の辨

明智の府尹なれば、在役久しかれど、市中こぞり思ふの所、人命其數盡る處は、貴となく賤とな

〔一話一言　三十七〕加役人足寄場繪圖



く、老となく若きとなく、いかむともする事あたはず、安永二の春、無常の風に誘はれ、黄泉の客とは成られける、此時子息平藏在京の處、〇中略忌明の後、若年寄衆列坐御右筆部屋椽頰に於て、父の跡式、無相違被下之旨申渡し、小普請入被仰付ける、〇中略其後火付盜賊御改役兼帶、其時一封の書を、輔佐の重臣たる奥州白川の城主松平越中守殿江獻ず、〇中略、其趣意は、御府內の花も葉もしげりたるによつて、諸國々集り來る者多し、其中には理辨の徒は少く、放埒だじやくの族ありて、後は非人と成下るなり、是は己が心柄とは言ながら、非人多きは國の耻なり、若臣に台命を蒙りなば、ケ樣の族を召捕て、兩國の下流、佃島無人島等に於て、身持相應の產業ををしへ、雜費の外は、其者共の德分と爲致、錢財をたもたしめ、店を爲持、渡世を爲致なばよかるべし、國の元は百姓たれば、其中々撰び百姓に仕立、御料私領に不拘、無人の土地へ有付なば、百姓無之のうれひもなかるべしと言上す、越公殆ど感じ、是聖賢の道なり、能心付たりとて、則上聞に達するの所、御感に思召、その奉行を長谷川平藏に被命ければ、已に其御用に取懸りけるにぞ、其美名日本にひゞき、平藏が仁慈を稱せざるものなし、

〔歎歲餘錄　十〕寬政七年五月中、盜賊方御役長谷川平藏殿卒去あり、これは近來稀成老吏にて、よく姦猾の叢を探ぐられ、取えがたき盜人をもあまたとらへえられたれば、官にも町御奉行同樣に萬事御取扱ありし人也、其餘仁慈の聞えも多くあり、八左衛門島に罪人を籠置れたる長屋を建られ、生活せられし人もあまたにて、衆目倚賴せし人成しに可惜事也、右御跡役に森山傳五郎殿といふを仰付られぬ、

〔明良帶錄〕寄場奉行（二百俵高、御扶持二十人扶持、若支、）

三奉行所にて請取ざる罪人を、無人島とて石川島佃島へ送り、水玉會所にて水玉の襏襫（ハッピ）を著せ、夫々の手業を致させ是を支配す、異國の髡鉗隸奴の如く、調役元〆より昇る有り、諸向より至る、

石川島は、石川八左衛門剛武の者なるが、御不審の義有之、此島にて屋敷被下、代々住居之處、年年秋先津浪にて、段々屋敷打込み相成難儀に付、石川直吉屋敷替を願、永田馬場へ引越す、

〔江戶名所圖會二〕鎧島　佃島の北に並べり、今石川島と號、俗に八左衛門殿島ともいへり、昔大猷公の御時、石川氏の先代、此島を拜領するより、かく唱ふるなり、寛政四年石川氏永田町へ屋敷替ありしより、炭置場、人足寄場等になれり、

〔嘉永明治年間錄十〕文久元年三月二十一日、輕罪者ヲ免シテ蝦夷地ニ送ル、

函館奉行へ達　函館表へ寄場取建、輕罪者幷女犯の僧等御仕置赦免申付、人足寄場の者內へ差加へ、且當地徘徊の無宿共捕押へ、蝦夷地へ差遣し、彼地の御用筋人足等に召遣可申、老人婦人たり共、當地人足寄場へ入候者共、端々其外市中にて如何の渡世致し候婦人は、是又同所へ差遣し可申旨、早々取調可被申聞候事、

右之通、三奉行幷火付盜賊改へ相達し候間、可被得其意候、

〔憲敎類典四ノ二十八加役人足〕寛政二庚戌年二月廿六日

松平越中守殿御渡寄場人足御仕置申付候義〇中略

其方共義、無罪之者ニ付、佐州表へ可差遣處、此度厚き御仁惠を以、加役方人足ニ致し、寄場江遣し、銘々仕覺え手業を申付候、舊來之志を相改、實意に立かへり、職業を出精いたし、元手ニも有附候やうに致べく候、身元見屆ケ候はゞ、年月の多少に無構、右場所を差免、百姓素生之ものは、相應之地所を被下、江戶表出生之ものは、出生の場所江店をもたせ、家業可致させ候、尤公儀よりも職業道具被下候歟、又ハその始末により、相應之御手當可有之候、若又御仁惠の旨をも辨へず、申付に背、職業不精にいたし候歟、或ハ惡事等於有之ハ、重き御仕置可申付者也、

二月〇又見憲法類集

〔天保集成絲綸錄百〕寛政二戌年二月

三奉行江

無宿もの召捕候節、悪事有之、入墨敲等、御仕置相濟候者勿論、吟味之上、悪事無之ものも、以來都而加役方人足寄場江可遣事、

〔天保集成絲綸錄百〕寛政三亥年三月

町奉行江〇中略

一不埒致候手廻り之者ハ敲、又ハ手鎖之上、年期を定、人足寄場江可被遣候、

亥三月

〔張紙留〕子八月〇寛政四年十二日、間宮猪左衛門ゟ來、肥前守受取、

三奉行衆

寄場江差遣候無宿共外共、平藏方江受取候上、寄場江被差越來候得共、左候而ハ、無益之手數も相懸り候事ニ候間、以來ハ直ニ寄場江被差遣候樣可申合旨、越中守殿御書付を以被仰渡候、依之御達申候、以上、

八月　長谷川平藏

間宮猪左衛門

〔寄場人足仕置幷心得書〕寛政五丑年四月廿六日

寄場人足無宿共取扱方御書付

御仕置濟候無宿引取人有之候者、糺之上相渡、引取人無之時者、寄場江可差遣事ニ候、近頃寄場江差出候無宿、早速引取人有之もの甚多キ由相聞候、猶又心付、糺方みだりニ不成樣、入念可被申候、

四月

〔新張紙留〕江戸拂以上追放等之もの、人足寄場江差遣候儀奉伺候書付、

書面伺之通可仕旨被仰渡奉承知候

辰十月七日

石川主水正

松浦伊勢守

關東在々取締之ため廻村爲致候御代官手附手代共召捕候惡黨ものゝ内別而手放難置類ハ無宿又ハ宿有之者ニ而も御仕置濟候上佐州江水替人足ニ差遣候儀文化二丑年閏八月牧野備前守殿御勤中伺之上當分伺之通可取計旨被仰渡押借ねだり又はあばれ歩行候若輩之ものは右之通取計候得共及年輩若ものゝ頭分抔申類又ハ公事出入之腰押等いたし村方を爲騷其身ハ陰ニ相成居愚昧之もの共江申勸無謂儀を企終ニ者村方衰微之基と相成候ものも不少右ハ水替勤等いたし候年齡ニ無之佐州難遣候間常州上郷寄場有之節ハ右場所江遣し候ものも有之候處當時ハ上郷寄場相止佐州而已ニ付差支候儀有之且ハ佐州江遣し候程之ものにも無之候得共三五年之内ハ元居村徘徊爲致候而ハ良民之迷惑ニ相成べきもの等も有之候間勘辨仕候處江戸拂以上御仕置追放ニ相成候ものニ而も人足寄場江差遣寄場外之稼不爲致寄場内之手業爲致置候得バ牢内又ハ溜預申付置候も同樣ニ而御構場所徘徊いたし候筋ニハ無御座候ニ付其品ニ寄人足寄場江差遣尤一通寄場江遣し候もの共ハ引請人有之次第引渡し遣し候仕來ニ候得共御構有之ものハ其段寄場奉行江相達凡五ヶ年も相立候上ニ而御構場所外之ものゟ引請相願候はゞ引渡遣候樣仕度此段評定所一座江も相談之上奉伺候以上

辰八月

評定所一座

御目付中

人足寄場江差遣候もの之儀是迄江戸拂以上追放等ニ相成候ものハ不差遣候處以來右體御構有之ものも品ニ寄年限を定寄場江差遣尤右之分ハ江戸拂追放等之名目肩書ニいたし差遣候

間、寄場外之稼ハ不二相成一、寄場内之手業爲レ致候積、一座相談之上、公事方御勘定奉行ゟ阿部備中守殿ヘ伺、相濟候間申達候、右ハ年限相立候後、御構場所外之身寄之ものゟ引受相願候はゝ、其時々元懸り拙者共江問合之上、引渡遣候樣可二相心得一旨、兼而寄場奉行江御達被レ置候樣存候、以上、

辰十月(文政三年)

○按ズルニ、本文常州上郷寄場トアルハ、寄場人足仕置書留牒ニ、寛政二年二月、常陸國筑波郡上郷村ニ、人足寄場ヲ設クトアルモノ、卽チ是ナリ、

〔寄場人足仕置幷心得書〕天保十二丑年九月廿二日

人足寄場ヘ差遣者之儀ニ付、評議仕候趣、申上候書付、

評定所一座

當月十七日、評議仕可二申上一旨被二仰聞一、御渡被レ成候、佐々木三藏寄場奉行申上候、寄場人足引渡方之儀、幷右ニ付御書取之趣一覽仕候處、御府内市中物貰等致し步行候、無宿野非人共差押、寄場江引渡候樣、町奉行江被二仰渡一之儀申上候處、右者去ル戌年、大澤主馬、御目付勤役中、寄場御入用引足兼候ニ付、人足減方相伺候節、文政三辰年以前之姿ニ復し、江戸拂以上追放もの引渡方相止候旨被二仰渡一之趣ニ齟齬致し、且無宿野非人共之素性ニ寄り、寄場江難二引渡一ものも有レ之候由等、御書取を以被二仰渡一候ニ付、猶取調之上、去ル戌年、人足減方之儀申上候者、寄場定式御入用相嵩り候故、相伺候儀之處、此節之儀者、於二同所一人足共永續之手業、水油絞方爲レ致候ニ付、人數多相成候而も遣方有レ之、取賄方も聊差支無レ之候間、去ル戌年以前之通、江戸拂以上追放之もの幷年限中迯之ものニ而も不レ苦、尤心底見屆候上、引受之儀願出候はゝ、其時々元掛江懸合引渡、殊ニ油絞之儀者、於二在方一重モニ相稼候渡世筋故、右職分仕覺候上、引渡ニ相成候はゝ、往々其身之職業も相立、御仁惠之程も相整可レ申との儀申上候趣ニ有レ之、依レ之勘辨仕候處、去ル戌年、江戸拂以上追放もの等引渡相止候

段被仰渡候者、畢竟人足追々相嵩、寄場御入用飯米等ニも差支候趣申上候故之儀ニ候處、此節手數相懸候業相始、人數入用ニ而、取賄方ニおゐても、聊差支無之との儀ニ候はヽ、江戸拂以上追放もの等差遣候段ハ、文政三辰年伺濟以來、去ル戌年迄取計來候儀故、右姿ニ復候とも素より子細無之、其上御府内市中立廻り無宿野非人之内ニも、穢多非人之外者、引渡ニ相成、是又子細無之儀、元來人足寄場之儀者、寛政之度、格別御仁惠之御趣意を以、御取建ニ相成候儀ニ付、同所御入用定高相増候迚、人足引渡方差略等可致筋ニ無之候得共、去ル戌年之儀者、諸國打續凶作ニ而、衆民困窮離散致し、惡事ニ携候ものも不少、臨時ニ召捕寄場江入、一概ニ人數相増事故、更ニ平年と違ひ、一時之取計ニ而、江戸拂以上御仕置濟之もの、不差遣積相成候儀之處、今般寄場奉行申立之趣ニも、取賄等無差支旨申立候上者、猶更右仕置濟之もの引渡方復古致し、聊議論無之儀ニ付、以來江戸拂以上追放もの幷年限申送之もの引渡方、前々之通取計、且御府内市中ニおゐて差押候、無宿野非人之内ニも、寄場江入不苦分者、是又引渡ニ可相成候條、其段可心得旨、三藏幷寄場奉行江被仰渡可然哉ニ奉存候、尤右之段被仰渡候はヽ、私共へも被仰聞候樣仕度、左候はヽ、火附盜賊改江者、私共より申達置候樣可仕候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候書付四通返上仕候、以上、

九月

評定所一座

水野越前守殿出ス承付如左

書面評議仕、申上候通可取計、尤右之趣、佐々木三藏寄場奉行江も被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

十月廿四日

〔憲教類典四ノ二十八加役人足〕寛政二庚戌年二月廿六日

松平越中守殿御渡

寄場人足御仕置申付候義

一盗致し候ものハ、死罪、

一徒黨がましき義いたし候もの、死罪、

一於寄場博弈いたし候もの、死罪、

但手合ニ加り申候もの、其始末に隨ひ、輕罪ニ可申付事、

一職業不精、又ハ申付不相用類、再應咎等申付候ても、不承請超過いたし候は、遠島、

但品輕きものハ佐州、又ハ豆州之島々へ可遣事、

一博弈又ハ惡行等いたし候もの有之義を申出候もの、其品ニ寄、相應之御褒美を與へ可申候事、

二月

〔憲教類典 四ノ二十八 加役人足〕寛政二庚戌年二月廿六日

松平越中守殿御渡

此度加役方人足寄場所取建被仰付候ニ付

一人足之作業之義ハ、勝手次第、得手之義を爲致可申候、

一職業出精いたし、渡世相續可致體に成候ものハ、寄場差免、家業可相成程之手當差遣し、身寄之ものヘ引渡、身寄無之ものは、そのもの出生の所、名主或ハ地役人ヘ引渡、家業爲致候樣に可申渡候、

一職業を怠り、又ハ申付を不用もの等、手鎖入牢、其外咎申付候義ハ、其度々不及伺、存寄次第可被申付候、

一重病又ハ長病之分、溜ヘ預け申付、かろき義ハ寄場にて手當可申付候、

一門出入嚴密にいたし、立入候町人共ハ鑑札相渡し、みだりに無之樣に可被致候、尤番人ども、改

方入念候樣ニ急度可被申付候、

一火之元之義、入念可被申付候、

一寄場諸色入用、當年ハ米五千俵、金五百兩、來年ゟハ壹ヶ年米三千俵、金三百兩之積りヲ以、御勘定奉行江相談し、入用次第可被請取、尤年々仕拂之義ハ、御勘定奉行江可申聞候、

一人足共、追々相增候節、御藏人足、其外御普請場川浚等之場所江ハ差出し候樣いたし、其外も遣方心附候義ハ、追々可被申聞候、

右之通可被得其意候、

二月

〔寄場人足御仕置幷心得書〕寄場御仕置之事

一寄場地所より逃去候もの　死罪

但逃去候節之始末ニ不相構、死罪申付候、

附人足寄場江呼出、科之始末申渡、外人足共ニ爲見置、切繩を懸ケ、牢屋敷江差遣ス、

一寄場使先より逃去候もの　死罪

附右同斷

一寄場逃去盜致し候もの　死罪

但逃去候後、五ヶ所以上夜盜致し候ハヽ、仕來之通、引廻之上死罪、

附右同斷

一寄場逃去可申と地所內ニ隱レ居、幷盜等いたし候もの　死罪

一寄場逃去可申と、地所內ニ隱レ居候もの、　重敲

但一旦入墨ニ相成候ものハ、增入墨申付來候、

附於人足寄場、島入墨之上、

一寄場逃去、自分と罷歸候もの、　重敲

但一旦重敲御仕置ニ相成、又候逃去、自分と罷歸候ニおゐては、於人足寄場入墨之上、重敲、

附於人足寄場

一寄場可逃去と申合候得共、後難を恐、逃去不申候もの、　手鎖

附於人足寄場五日さや

一無斷地所裏手江罷出、夜ニ入候迄罷在候もの、　重敲

附於人足寄場

一無斷寄場圍外江罷出候もの　手鎖

附於人足寄場三十日

一寄場より相願致他出、夜ニ入罷歸、又召捕候もの、　重敲

但一旦入墨ニ相成候もの者、增入墨申付來候、

附於人足寄場、島入墨之上、

一於寄場博弈いたし候もの　死罪

一非人之儀押隱、寄場ニ罷在候もの、　相應之咎申付候樣申渡、穢多頭淺之助ニ引渡、

一寄場より奉公ニ差出置候處、致欠落もの　重敲

附於人足寄場

一同幼年之もの　手鎖

附於人足寄場三十日

一寄場より店爲持遣候處難取續、店致欠落候もの、　敲

但一旦入墨ニ相成候もの、增入墨申付來候、

附於二人足寄場一島入墨之上、

一寄場より引渡ニ相成候後、致二欠落一候もの、重敲、

附右同斷

一同幼年之もの　手鎖

附右同斷三十日

一於二寄場一盗いたし候もの　死罪

一徒黨ヶ間敷儀致し候もの　死罪

一職業不精、又者申付不二相用一類、再應咎申付候而も、不二相用一超過いたし候もの、　遠島

一職業を怠、又者申付を不レ用もの等、手鎖入牢、其外咎申付候儀者、其度々相伺不レ申、相應之咎申付候心得ニ御座候、

一博弈又者悪巧等致し候もの有レ之儀を申出ニおゐては、其品ニ寄、褒美を可二差遣一候、

一片鬢剃落、年限之定有レ之もの、潰方之儀者、年限中ハ、平日片鬢剃落置、赦免之日數、五ヶ月以前より鬢爲レ立可レ申候、

一當分之咎手鎖、或ハ二十敲等之儀ハ、不レ及二伺取計可一レ申候、

一癩病又者瘡毒之類、湯治致し度旨相願候ハヽ、相應之草鞋錢差遣、不レ及レ伺放遣可レ申候、

一寄場人足入墨金藏、同忠藏、寄場逃去、佃島之方江出、同所町家脇ニ隱レ罷在候ニ付、寛政三亥年、元相模無宿、當時寄場人足入墨市五郎、石川大隅守屋敷内江這入、夫より地所藪之內ニ隱レ罷在候御咎之例を以、同四子年十一月廿一日、前書之金藏忠藏御仕置伺江添書致し、相伺候處、左之通被二仰渡一候ニ付、承付致し、同廿四日返上、

右承附
書面伺之通、寄場逃去、添屋敷又ハ佃島ニ而召捕候もの、入墨無之分者、入墨之上、重敲、入墨有之ものハ、死罪御仕置可申付旨被仰渡、奉承知候、

子十一月　　長谷川平藏

右之通、松平越中守殿江書面之御仕置、并御咎之相當之分者、定例之通と相認申候、右之外者、是迄之類例、朱書ニ致し進達いたし候、

〔寄場人足仕置并心得書〕寛政七卯年五月廿一日

寄場見廻并御仕置もの等之儀ニ付御書付

町奉行江

寄場見廻り、并御仕置もの等之儀、以來何れも懸りニ可被致候、尤先只今迄、長谷川平藏取計候趣ニ相心得、存寄も於有之者可被伺候、森川主膳寄場奉行江も申渡候間、可被談候、

五月

〔寄場人足仕置并心得書〕寛政七卯年十月廿七日

人足寄場逃去致惡事候者之儀ニ付奉伺候書付

小田切土佐守
坂部能登守

人足寄場を逃去、又ハ一旦寄場より身寄之もの等江引渡しニ相成候上者、右之所欠落いたし候はゞ、寄場定法之通、重敲可申付もの二御座候、然ル所右體之者共、加役方ニ而召捕、吟味之上、先々ニ而盗惡事有之段及白狀候共、加役方ニ而、相當之御仕置申付候而者寄場御仕置、猶又別段ニ不申付候而者、筋違ニ御座候間、以來前書之通、寄場逃去、又ハ引渡先より欠落いたし候もの、加役方ニ而召捕、吟味之上、惡事無之分者勿論、惡事有之候とも、其趣を以不及伺、私共方江引渡、私共方ニ

而相束、御仕置申付候はゝ、御仕置二段ニ相成不申、簡易ニ相濟候間、以來右之通可被仰付哉奉伺候、被仰渡候はゝ、加役方江も其段被仰渡御座候様仕度奉存候、以上、

卯十月

安藤對馬守殿江出ス承付如左

書面寄場を逃去、又ハ寄場より引渡先を致欠落候もの、加役方ニ而召捕候節、吟味之上、町奉行江掛合、寄場御仕置附候分者、町奉行江引渡、其外ハ、是迄之通、加役方ニ而御仕置可申付旨被仰渡候段、奉承知候、

〔寄場人足仕置幷心得書〕寛政九巳年閏七月七日

寄場御仕置改正之儀奉伺候書付

小田切土佐守
村上肥後守

寄場見廻り、幷御仕置もの等之儀、以來私共掛ニ可仕旨、尤先只今迄、長谷川平藏取計來候趣ニ相心得、猶存寄も有之候はゝ可相伺旨、去々卯年、御書付を以被仰渡候ニ付、取計之趣、追々相伺、人足御仕置之儀ハ、平藏伺之上、取極候帳面御座候ニ付、右帳面通を以、只今迄御仕置仕候得共、不相當之儀も有之候間、一體御定書を元ニ仕、寄場御仕置、組直し候方ニ可有之哉と奉存候、依之先達而平藏より引渡候御仕置帳面寫、幷此度相改候帳面共相添、此段奉伺候、以上、

巳閏七月

戸田采女正殿江出ス承付如左

書面別紙伺之通、寄場御仕置可申付旨被仰渡、奉承知候、

巳閏七月廿四日

小田切土佐守
村上肥後守

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政九巳年閏七月

書面町奉行江被仰渡候趣ニ可相心得旨被仰聞承知仕候、

巳閏七月廿六日　寺社奉行　御勘定奉行

寄場御仕置附

書面之通、以來御仕置可申付旨被仰渡、奉承知候、

巳閏七月廿四日　小田切土佐守　村上肥後守

一寄場圍を破逃去候もの　死罪

一寄場内仕業に出置候處、人之目合見合逃去候もの、　入墨敲之上、如元寄場に差置、

但一旦入墨敲ニ相成候後、又候逃去候もの死罪、附寄場ニ差置候内、心底改候上引取人有之候はゞ引渡遣、

一寄場使先より取逃致候もの　金高雜物とも壹兩以上は　死罪　金高雜物とも壹兩以下は　入墨重敲

但一旦入墨重敲ニ相成候後、又候逃去候はゞ死罪、附右同斷、

一寄場使先より逃去候もの　重敲

但右同斷

一寄場逃去盗いたし候もの　死罪

一寄場ニ而盗致候上、可逃去と地所内ニ隱レ居候もの、　死罪

一寄場ニ而盗致候もの　金高雜物とも拾兩以上は　死罪　金高雜物とも拾兩以下は　入墨敲

但一旦入墨敲ニ相成候後、又候盗致候もの死罪、附寄場ニ差置候内心底改候上引取人有之候はゞ引渡遣、

一寄場逃去可ㇾ申と地所内ニ隱レ居候者、　重敲

但氣詰ニ存、無斷地所裏手江罷出、夜入候迄罷在候者共ハ手鎖、

一寄場逃去候とも、自分と立歸候もの、　逃去候節圍を破候もの　入墨重敲

使先又は仕業に出置逃去候もの　敲

一寄場可ニ逃去ニと申合候得共、後難を恐逃去不ㇾ申候もの、　三十日手鎖

一無ㇾ斷寄場圍外江罷出候もの　二十日手鎖

一願之上他出致、夜ニ入罷歸候者、　二十日手鎖

但右他行先ニ而召捕候共、惡事無ㇾ之候はゞ不ㇾ及ㇾ咎、

一於ニ寄場ニ博奕致候もの　筒取打子之無ニ差別ニ發端之者　遠島　其外　重敲

但五拾文以上以下之賭錢ニ候共、都而かるた博奕ニ候はゞ、重敲、

一非人之儀押隱寄場ニ罷在候者　相當之咎申付候樣申渡、穢多頭彈左衛門江引渡、

一職業無精、又ハ申付不ニ相用ニ者、　三十日、五十日、或百日、手鎖

一徒黨ヶ間敷儀いたし候ものハ、其始末ニより御定書ニ准ジ御仕置可ㇾ申付候、

一拾五歲以下之者ハ、都而大人之御仕置より一等輕可ㇾ申付候、

一癩病又ハ瘡毒相煩候者、湯治致度旨相願候はゞ、相應手當いたし遣放遣可ㇾ申候、

一博奕又ハ惡巧等いたし候者有ㇾ之儀を申出においては、其品ニ寄褒美可ㇾ差遣ㇾ候、

一寄場より引渡候後之惡事ハ、都而御定書之通御仕置可ㇾ申付候、

〔寄場人足仕置幷心得書〕寛政十午年二月晦日

寄場御仕置之儀ニ付御尋之趣申上候書付

小田切土佐守
村上肥後守

去巳閏七月中、寄場御仕置組直之儀伺之通被仰渡候ニ付、其通取計來候處、最初長谷川平藏申上置候ヶ條書有之、是迄寄場ニ而、人足共江申渡來候ニ付、組直之方とは符合不仕、且御仕置弛ミ候而者、素より惡もの共之儀ニ付、此上逃去候ものも多く可相成、取計方差支ニ相成候趣申上候儀ニ付、御尋ニ御座候、

此儀寄場ニ而、人足共江是迄都度々々掟之趣、幷何々惡事致し候ものは、何々申付候旨を巨細ニ申渡來候處、此度改候而ハ、其始末ニ寄、何々申付候と相渡候ニ付、人足共心取弛ミ、逃去候ものも多可相成哉之趣、尤之儀ニ御座候得共、寄場之儀ハ、刑名を顯し、夫を以取締致し候儀ニ付、一ト通者、尤ニ候得共、此度組直ニ而、格別弛ミ候事ニ者無之、元御仁惠之趣を以、御取立有之候場所ニ而、是迄之定ニ而者惡もの共ハ格別、中ニ者無罪ニ而無宿一ト通りのもの等、一旦之心得違ニ而、寄場より之使先抔より逃去候迚、直ニ死刑ニ被行候者、却而御仁惠之處、薄く相成可申哉ニ付、彼是相含、御定書等江引當、改正之儀申立、其通相濟候儀ニ付、以來者掟を背候もの、始末ニ寄、死罪遠島、夫々御仕置可申付旨を爲讀聞置、心底相改、手業等出精仕候もの者、御仁惠之趣を以、寄場奉行方ニ而、是迄之通取計可然儀と奉存候、惡事仕出し候者ハ、尤和共方江相渡候樣仕候はゞ、差而差支之筋有御座間敷哉、奉存候、前書之趣御尋ニ付、此段申上候、以上、

二月

戸田采女正殿江出ス承付、是ニ而寄場奉行申達候樣被仰聞候、

書面申上候通、私共より寄場奉行江申談候樣被仰渡候、猶又口達相添申達候處、書面之趣ニ而、少も差支候筋無御座候旨申聞候、

午三月廿四日

小田切土佐守

村上肥後守

（寄場人足仕置幷心得書）寛政十午年二月

寄場人足共へ申渡條目

其方共儀、無宿之ものニ付、佐州表江可差遣處、此度厚き御仁惠を以、寄場人足ニ致し、銘々仕覺候手業を申付候、舊來之志を相改、實意ニ立歸、職業出精致し、元手ニも有付候之樣可致候、身元見屆候ハヽ、年月之多少ニ無構、右場所を差免、百姓素生之もの江者、相應之地所被下、江戸表出生之もの江者、出生之場所江店を爲持、可爲致家業候、尤公儀よりも、職業道具被下候歟、其始末ニ寄、相應之御手當可有之候、若又御仁惠之旨をも不辨、申付ニ背き、職業不精ニ致し候歟、或ハ惡事等於有之者、重き御仕置可申付もの也、

一此度人足ニ申付候上者、職業出精致し、渡世相續可致體ニ成候もの者、寄場差免、家業可相成程之手當差遣、身寄之もの江引渡、身寄無之もの者、出生之所、名主或ハ地役人ニ引渡、家業相續爲致候事、

一寄場逃去候もの　始末ニ寄、死罪、

一於寄場盜いたし候もの　或死罪、入墨、敲、

一徒黨ケ間敷儀致し候もの　死罪（始末に寄、御定書に准じ、御仕置可申付候、）

一於寄場博弈いたし候もの　死罪、或ハ遠島、重敲、

一職業不精、又者申付不用もの、手鎖入牢、其始末ニ寄、咎申付候而も、不用ニおゐてハ遠島申付候事、

一博弈又ハ惡巧等致し候もの有之趣申出候もの江者、其品ニ寄、相應之褒美を可差遣候事、

一門外江出候儀、堅可爲無用事、

一火之元入念、大切ニ可致候事、

此度御仁惠を以、佐州幷在溜差免候上者、右之條々堅相守、銘々職業可致出精もの也、

二月

○按ズルニ、役夫ヲ寄場ニ遣ハスニ方リ、掟書及ヒ仕置書ヲ讀ミ聽カスルハ定例ナリ、然ルニ右ノ條文中ニ刑名ヲ加ヘシハ、前文ノ如ク、當時町奉行ヨリ上申セシニ依テナリ、

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政十二申年六月

書面町奉行江被仰渡候趣、可相心得旨被仰聞承知仕候、

申六月十三日　寺社奉行　御勘定奉行

寄場御仕置御尋ニ付、猶又評議仕候趣、申上候書付、

書面伺之通可仕旨被仰渡、奉承知候、

申四月十四日　小田切土佐守　根岸肥前守

寄場御仕置之儀、入墨有無を以分候儀、寄場江遣候者ハ、多分入墨有之間、此所ニ而階級を立候而者、十ニ七八も死罪ニ可相成哉、左候而者、御仕置弛ミ候詮薄く可有之哉ニ付、只今迄之通、入墨之有無ニ不拘、圍を破候と、構外江出し置逃去候もの、二色ニ定候方ニ可有之哉、其外委細御書取を以御尋之趣、御尤ニ奉存候間、評議仕候處、御書面之通ニ而差支候儀も有御座間敷、至極可然奉存候、然ル處寄場之儀、當時ハ居り合候儀とハ乍申、一體右人足共ハ、無頼之もの共ニ付、謹候而手業等致し候ものハ少く、先ヅハ逃去候儀を心懸候もの多可有之、依之最初逃去候ものハ、嚴科被仰付候積り、右ケ條書を寄場ニおゐて讀聞せ置、規定ニ而、右之通嚴科ニ可被處趣、讀聞せ置候而さへ、時々逃去候ものも御座候間、此度御仕置寛ミ候儀を讀聞せ候而ハ、逃去候類多く出來仕間敷とも難申、御取締之處、如何可有之哉、依之猶又再應評議仕候處、寄場之儀、長谷川平藏取計候節者、

同人方ニ而仕置申付候故、右之極も有之候儀、當時御仕置申付候分ハ、町奉行ニ而申付候儀故、奉行所にて申付候得バ、御定幷先例等、夫々相糺申付候儀ニ付、向後之儀、目當之所ハ、別紙之趣ニ私共相心得、猶其始末次第、御定幷先例をも見合、申付候樣可仕奉存候、且寄場ニおゐて、平藏取計之砌より讀渡候趣ハ、是迄之通、逃去候ものハ死罪、其外重科ニ申付、其外手業等無精ニいたし候者迄も、夫々咎申付候と計申渡置候はゞ、是又差支も有御座間敷哉、依之御書取之趣を以、組直候書面相添、此段奉伺候、以上、

申三月　小田切土佐守　根岸肥前守

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政十二申年六月

書面町奉行江被仰渡候趣、可相心得旨被仰聞、承知仕候、

申六月十三日　寺社奉行　御勘定奉行

寄場御仕置附

書面伺之通、以來御仕置可申付旨被仰渡、奉承知候、

申四月廿四日　小田切土佐守　根岸肥前守

一圍を破り、又は乘越逃去候はゞ、　遠島

但し後悔致し立歸候はゞ、重敲、

一構外江出罷在、逃去初度者重敲、又は使先ゟ逃去候者、二度目は、入墨重敲、

但し後悔致し立歸候はゞ、三十日手鎖、

一右同斷三度ニ及び候はゞ　遠島

但後悔致し立歸り候はゞ、重敲、

一寄場可逃去段申合、又ハ壹人立可逃去といたし隱レ居、後難を恐れ不逃去ものハ自訴之御定、

幷例ニ准じ、尤可逃去と申合候頭取之類ハ、是又御定先例等見合、且裏手江出、夜ニ入候迄罷候もの、無斷寄場圍外江罷出候もの、或ハ他出致し、夜ニ入立歸り候者、職業無精、又ハ申付不相用もの之類も、其始末次第、手鎖叱り等ニも申付可然、右之外ハ、向後都而御定幷先例を見合、其始末次第申付候積り、

〔新張紙留〕天保十四卯年十二月廿三日

榊原主計頭、御目付之節申上候、寄場人足目印之儀ニ付、評議仕候趣、申上候書付、

承り付
書面伺之通、取計候樣可仕旨被仰聞、承知仕候、

卯十二月廿七日

寺社奉行
鍋島内匠頭
御勘定奉行

當九月廿六日、越前守殿御勤役中、評議いたし可申上旨被仰聞、御渡被成候寄場人足目印之儀ニ付、榊原主計頭御目付之節申上候書付、幷阿部遠江守町奉行之節、鳥居甲斐守江も談判之上、取調申上候書面、夫々一覽仕候處、主計頭見込之趣者、寄場人足共仕着之儀、是迄水玉染出し候を相用來候得共、右者脫捨候得者、更ニ目印無之、逃去候節、召捕方手掛薄く候間、以來男子者、片眉毛剃落し、女者、切禿ニいたし候得者、目印顯然ニ付、自然人心も居合、逃去候もの相減可然旨申上、遠江守見込之趣者、寬政度年限を以、寄場入申付候もの、年限中、片鬢剃落置候儀も有之候得共、一般ニ眉毛等剃落候而者、寄場一體之風俗ニ拘り、不容易儀ニ付、以來罪之輕重ニ随ひ、片鬢或ハ眉毛剃落、女者切禿ニいたし、無罪又ハ至而輕罪之ものニ至り候而者、是迄之通取計候方可然趣ニ御座候、

此儀寄場御仕置箇條之儀者、最初寄場入申付候節、同所おゐて、夫々爲讀聞候儀ニ而、圍を乘越逃去候もの等、重科ニ被處候儀者、兼而辨罷在候、逃去候ものも有之候程之儀ニ付、遠江守申上

候通、此上異形之體等申付候迄ニ而、必定人心居合、逃去候もの相減可申と之見居者無之、勿論主計頭遠江守見込之趣も、寛政之頃、長谷川平藏掛之節、一旦伺濟之准例も有之候得共、一體寄場之儀者、御仁惠之御趣意を以、取建置候儀ニ而、寛政九巳年、戸田采女正殿御渡被成、同所御仕置ヶ條之內、寄場ニ差置候內、心底改候上、引取人有之候はゞ、引渡遣と有之候ニ見合、無罪無宿者、勿論手放し置、良民之害ニ相成候故を以、年限等相定、寄場入申付候ものニも常々敎諭を加へ、改心いたし候上、身分引受等相願候もの有之候得者、年限ニ不拘、引渡遣候程之儀ニ有之、然ルを逃去、又者園內ニ而惡事致し候もの、右體厚御趣意をも不辨もの之儀ニ付、夫々御仕置御定被置、既園を破逃去候ものニ至り候而者、遠島ニも被仰付候程之儀ニ候得共、右等專ら懲惡之御處置、彌御憐愍之御趣意ニ而、尤同所人足共、水玉仕着之起立、寄場奉行江掛合承糺候處、右者平藏掛中、伺濟之由申傳候迄ニ而、文政度、寄場類燒之節、諸書物燒失いたし、書留無之旨申聞、主意難相分候得共、强而召捕方目當等之趣旨ニ者無之、畢竟平人と不立交ため之目印ニも可有之哉、素々右等之譯を以、目印等差定候儀者、寄場人足共ニ限り候儀ニも無之、佐州水替人足迚も同樣之儀、旁前書之御趣意江對し、異體之嚴法相立候者、好候筋ニも有御座間敷候間、右目印之儀ハ、先ツ仕來之通、御居被置候方可然、併是迄ハ寄場逃去候もの、追而御仕置相成候儀、町奉行所之外、他之奉行所等ニ而者、外人足共江右次第不申聞候故、兼而申渡置候、同所掟之趣をも等閑ニ心得、不屆及び候ものも可有之哉も難計候間、佐州逃去、惡事いたし候もの御仕置之次第、彼地江科書捨札爲建候ニ見合、以來之儀者、いづれ之奉行所ニ而御仕置相成候とも、其度々町奉行江科書相達、右御仕置之趣、外人足共江申渡、爲相辨候はゞ、假令何程深山幽谷ニ隱れ忍び候とも、被召捕候上者、寄場逃去候御仕置難遁筋と心得、自然御威光之廣大をも相辨候道理ニ而、右者人足共、改心之一端、寄場內取締ハ勿論、逃去候もの、自ら相減可然儀と奉存候、右申上

寄場人足例

候趣、御取用ニも相成候はゞ、其段遠國奉行、幷火附盜賊改江者、私共より相達置候樣可ㇾ仕候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被ㇾ成候書付貳通、返上仕候、以上、

卯十二月

〔幕朝故事談〕諸侯

間部退出の節、櫻田を出候節、平岡美濃守御預りの御馬徒者に突當り候て、徒者と中間と、御馬の口中間を、打擲いたし候に付、牢舍被ㇾ仰付、〇中略主として打擲いたし候中間は、無宿島にて三年徒となす、是は新政なり、

〔御仕置例類集二ノ一〕文化七午年御渡

火附盜賊改渡邊喜右衞門伺

一無人別之もの御仕置濟之上引渡方之儀ニ付評議　當時無宿　龜吉

右之もの儀、町方日雇いたし候砌、不斗惡心起り、使ひ先ゟ金銀錢取逃いたし、不ㇾ殘遣ひ捨候段、不屆ニ付、入墨之上、敲、

但宿市五郎江引渡

此儀取逃之金錢兩度ニ而も壹兩以下ニ付、使先ニ而取逃いたし候もの之御定に見合伺之通、入墨之上、敲ニ而相當可ㇾ仕、然處此ものを雇候市五郎ハ、身元不ㇾ相糺ㇾ雇置候不埒を以、御咎付候ものニ而、主人又ハ宿と申譯ニ無ㇾ之候間、此ものを引渡遣候而ハ相當仕間敷、口入いたし候半次儀も、小石川春日町拾壹番組人宿吉兵衞方同居いたし、無株之ものニ候得バ、是以難ㇾ引渡遣、右之通可ㇾ引渡方無ㇾ之身分ニ候上ハ、入墨之上、人足寄場江差遣可ㇾ申、

朱書評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政五午年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一相州無宿入墨安五郎再應人足寄場を逃去候一件　相州無宿入墨　安五郎

右之もの儀、先達盗いたし候依科敲又ハ人足寄場江入候處、同所を逃去候依科、重敲之上、猶又人足寄場江差遣候處、同所働太儀ニ存候迚、當正月十九日使先ニ而逃去候始末、旁不届ニ付、最前之入墨之際ゟ猶又入墨いたし、重敲之上、如元人足寄場江差遣、

此儀先達而、榊原主計頭方ニ而召捕、同人手限ニ而御仕置申付候、寄場人足無宿入墨太吉儀、此もの同樣之所業ニ而、其砌先例書拔相添、主計頭より及相談候節、寄場人足御仕置ヶ條之內、構外江出罷在逃去、又ハ使先ゟ逃去候もの、初度ハ重敲、貳度目ハ入墨重敲、及三度候はヽ遠島と有之、此もの一旦入墨ニ相成候得共、盗之科ニ而趣意違ひ候間、寄場逃去候科之入墨、先々之入墨ニ不拘、別段申付可然、既に敲者前科ニ何ヶ度有之候共、又候申付候儀ニ有之、入墨ハ形相殘故を以、重敲而已申付、如元寄場江入置、猶又逃去候はヽ遠島申付候而ハ、前書貳ヶ條自拔ヶ候樣相聞、一體人足寄場之儀、前々ハ無罪之無宿共而已差遣候場所ニ候處、元來人足ども生質不宜不穎之もの共ニ付、愼候而手業等いたし居候ものハ少く、先ヅハ逃去候儀を心懸候もの多御座候故、嚴重之掟ニ無之候而ハ、懲惡之取締も不相立譯を以、格別之嚴科を被示候御趣意ニ可有之、旁入墨ニ相成、寄場江入候もの、兩度逃去候節、前科之入墨を相用、重敲計申付候而者、初度も同樣之御仕置ニ而、重り候譯無之、右御趣意ニも齟齬いたし候間、御仕置附ニ、主計頭申上候例之金藏、幷安永六酉年、入墨有之もの、御構之地を不相去候はヽ、先達而之入墨之際江、一筋增候而入墨申付、前々御仕置より、一等重ク可申付旨之御書付をも見合、主計頭見込之通、最初入墨之際へ、猶又入墨いたし、重敲申付、如元人足寄場江差遣し可然旨及挨拶候儀ニ而、右之通之趣意ニ付、今般之安五郎義、伺之通、最初入墨之際江、猶又入墨いたし、重敲申付、如元人足寄場

江差遣、
朱書評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ二〕享和三亥年御渡

關東郡代中川飛驒守伺

一常州高須賀村文右衛門悴秀藏、上郷村人足寄場江差入候儀ニ付評議、

書面伺之通、中川飛驒守江被仰渡候旨、承知仕候、

亥六月十九日　評定所一座

書面伺之通可仕旨被仰渡、奉承知候、

亥六月十八日　中川飛驒守

竹垣三右衛門御代官所常州筑波郡高須賀村百姓文右衛門悴　秀藏

右之者儀、親文右衛門方ニ同居いたし候處、文右衛門夫婦とも及老年候ニ付、秀藏儀、引請農業相稼可申處、平日大酒を好、喧嘩口論等いたし、身持不埒ニ付、兩親ハ勿論、親類組合、村役人共、度々異見差加、種々教諭いたし候得共不相用、迚も百姓相續爲致難きものニ付、親文右衛門、勘當帳外可致と存候得共、右村方之儀も、入百姓小兒養育等之儀、品々厚御仁惠有之、人別相增候樣御取立有之候時節、却而帳外相願、人別相減候段、何とも歎敷恐入候儀ニ有之、且ハ勘當いたし候はゝ、無宿其外惡黨ものニ出會、彌不埒增長いたし、如何樣之惡事仕出可申も難計、不便之儀ニ付、可相成儀ニ御座候はゝ、上郷村寄場人足之內江被差加、朝暮懸り役人ゟ教諭を請候はゝ、改心いたし候儀も可有之哉、彌改心仕候はゝ、村方江引渡ニ相成候とも、又ハ外人足共同樣別段御取立被下候とも、何れニも寄場江差入之儀相願候之段、文右衛門夫婦幷親類組合、村役人一同願出候ニ付、相糺候處、申立之趣無相違相聞候ニ付、願之通秀藏儀、寄場江差入候樣可仕候哉之段、竹垣三右衛門相

伺申候、然ル處、秀藏儀、右體不埒之ものニ付、寄場江差入候而も改心不仕、若圍を破り逃去候歟、其外惡事仕出し可申も難計、左候節ハ、依願爲懲差入置候ものニ而も、其差別を以罪科を弛候儀ハ難相成、寄場逃去候もの、本罪死刑ニも被行候節ニ至り候而、願候親、後悔可仕哉と奉存候間、其段三右衛門江申渡、文右衛門夫婦、其外親類組合村役人共、存念相尋候處、迚も親文右衛門方ニ罷在候而ハ、心底可相改者ニ無御座候間、若寄場逃去候歟、其外惡事仕出し、死刑ニ被行候とも、毛頭後悔仕候儀無之候間、寄場江差入之儀相願候段、一同申立候旨、猶又三右衛門申聞候、右之通一同相願候上ハ、願之通、上郷村寄場江差入、外人足共同樣可取計旨、三右衛門江申渡候樣可仕哉、勿論以來、右之通寄場江差入之儀相願候もの御座候節ハ、願候もの共之存念相糺候上、寄場江差入候樣可仕候哉、依之此段奉伺候、

此儀秀藏儀、身持不埒ニ付、親文右衛門、勘當帳外可致と存候得共、左候得ハ無宿ニ罷成、彌增惡事も相募可申候ニ付、上郷村寄場人足之內江差加、敎諭をも爲請度段、兩親幷親類村役人一同相願、其上寄場江差入候後、万一圍を破り逃去候歟、其外惡事仕出し、死刑ニ被處候とも、毛頭後悔無之旨申立候上ハ、願之通可申付哉之旨、中川飛驒守相伺申候、然ル處、去ル申年、羽太庄左衛門寄場懸之節、寄場奉行一同、右同樣之筋ニ而、町方之もの之忰共、寄場江可差遣哉之段相伺、堀田攝津守ゟ町奉行江相下ゲ、町奉行限ニ而評議仕、寄場江差遣候儀ハ、不可然旨申立候得共、此度之儀ハ、江戶表とハ譯も違、在方之儀ハ、壹人ニ而も人別相減候得バ、夫丈ケ田畑手餘りニも相成候儀、其上一體右國柄之儀ハ、人別少く、入百姓、又ハ小兒養育等之儀も、精々御世話も有之、其段竹垣三右衛門專承り、取計罷在候場所ニも御座候間、右申上候通取計、壹人ニ而も志を相改、追々農業出精仕候樣罷成候得バ、御仁惠ハ勿論、一體之御趣法ニも相當可仕と奉存候間、伺之通、上郷村寄場江差入、外人足とも同樣可取計旨、竹垣三右衛門江申渡、以來右同樣相願候も

の有之候節ハ、是又同様寄場江差入候様可仕旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、

亥六月　　　岡部内記掛

婦人處刑

〔寄場人足仕置幷心得書〕享和元酉年七月五日

女無宿寄場へ遣候儀ニ付伺書

甲州無宿　かね

右之もの、去ル五日、岡部内記より寄場江引渡候ニ付、別紙居所取糺差置申候、然ル處、女無宿之儀、長谷川平藏御先手加役ニ而、寄場取扱候砌迄ハ、不絶有之候故、女溜抔同様ニ取糺致し、差置候趣ニ御座候得共、近來女無宿寄場江引渡ニ相成候者無之、當時も男無宿共計、罷在候場所、女壹人差置候儀ニ付、萬一不取締等之儀出來仕候而ハ、如何ニ奉存候間、書面之無宿女かね儀、溜内江成とも引渡候様仕度旨、寄場奉行申聞候、此段奉伺候、以上、

七月　　　松平田宮

附札承ヽ書面伺之通被仰渡、以來共、女者寄場江不差遣、萬一不差遣候而不叶節ハ、伺之上取計可申旨、岡部内記江被仰渡候旨被仰渡、承知仕候、

七月九日　　　松平田宮

寄場人足逃亡

〔御仕置例類集二ノ二〕文化十三子年御渡

御勘定奉行服部伊賀守伺

一常州上郷村小屋場ニ差置候人足御仕置之儀ニ付評議

當七月廿六日、致評議可申上旨被仰聞、御渡シ被成候、服部伊賀守申上候、竹垣庄藏御代官所、常州上郷村寄場人足榮藏事、鐵五郎儀、去ル酉年八月、佃島寄場ゟ、外人足一同上郷村寄場江受取荒地起返人足ニ差置候處、去々戌年八月逃去、松下河內守火附盗賊改之節、同人方江被召捕候ニ付、庄

藏方江受取、吟味仕候處、寄場園矢來を乘越シ、逃去候段申上候もの二付、死罪相當之者ニ御座候處、可ㇾ起返荒地も殘少ニ相成、此上佃島ゟ人足受取候ニ不ㇾ及、相殘候人足共は、追々改心、耕作致ㇾ出精、鐵五郎死罪申付候迚、見懲ニ相成候趣意も無ㇾ御座ㇾ候間、御仕置弛メ、佃島寄場江差戻候樣致度旨庄藏申聞、最早懲之趣意も無ㇾ御座ㇾ候上ハ、跡々弛ミにも可ㇾ相成筋不ㇾ相聞ㇾ候間、死刑を宥メ、佃島江差戻候樣可ㇾ仕哉之旨相伺申候、

此儀小屋場人足を以、可ㇾ起返荒地殘少ニ相成、此上佃島ゟ人足受取ニ不ㇾ及、相殘居候人足共ハ、追々改心、農業致ㇾ出精ㇾ候由ニ御座候得共、元來無賴之無宿ニ付、改心之體ニ相見候共、自然此後、逃去間敷共難ㇾ申筋ニ而、見懲之爲ニ無ㇾ之との儀、治定難ㇾ致、素ゟ小屋場園矢來を乘越逃去候得バ、死罪ニ相成候を乍ㇾ存逃去候ものニ付、右不屆も難ㇾ遁、尤上鄕村寄場人足御仕置之儀、素々江戸寄場人足御仕置ニ准、申付候儀之處、寛政十二申年、江戸寄場人足御仕置ハ相弛ミ候得共、上鄕村寄場人足ハ、野田ニ放遣候儀ニ付、御仕置弛ミ候はゞ、逃去候もの多く可ㇾ相成と、其已前同九巳年相改候、江戸寄場人足御仕置之通、居置候樣仕度段、中川飛彈守關東郡代兼役之節相伺、其通被ㇾ仰渡ㇾ候儀ニ付、最早人足受取候ニ不ㇾ及程之時節ニ至リ候上ハ、江戸寄場人足御仕置之通、弛ミ方之儀別段相伺候ハ格別、今般之鐵五郎ハ、是迄之御仕置ヲ以、死罪可ㇾ申付旨被ㇾ仰渡ㇾ可ㇾ然哉ニ奉ㇾ存候、

子八月

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政五午年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一相州無宿入墨安五郎再應人足寄場を逃去候一件

相州無宿入墨 安五郎

右之もの儀、先達盜いたし候依科、敲又は人足寄場江入候處、同所を逃去候依科、重敲之上、猶又人足寄場江差遣候處、同所働、太儀ニ存候迚、當正月十九日、使先ニ而逃去候始末旁不屆ニ付、最前之入墨之際ゟ、猶又入墨いたし、重敲之上、如元人足寄場江差遣、

○

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一奴 従前々之例　望之もの有之候へば遣

但望候もの無之内ハ、牢内ニ差置、

〔公裁秘錄〕奴女片付之事。。享保十三申年御書付

奴女在之節、御目附江申達、御殿詰合之面々江相達候樣可被致候、且又望之者在之候はゞ、可被相渡候、

一町方ハ町年寄江申付、致世話貰候もの在之候はゞ、相渡候樣可被致候、町中へ相觸候ニハ不及候、

以上

奴女牢内ニ差置候義書付 享保十三申年

奴女牢内ニ差置候義、了簡仕候處、晝之内ハ、牢内築地之内江ハ勝手次第罷出、洗濯等用事相達候樣いたし、晩方ニ者、牢内ニ入置候樣可仕候、

右之通伺之上相極候事

三月

〔憲敎類典 五ノ十四 町奉行〕年號月日不知

一犯科人、或火罪、或磔ニ被行者、妻子之事、男子ハ斬罪、妻子幷女子ハ、奴たるべし、

但御代官所ハ、囚獄江渡之、給所ハ其地頭江被下、

〔御定書百箇條〕關所を除、山越致候者、幷關所を忍通候もの御仕置之事、

從前々之例
一關所難通類、山越等致候者、　於其所礫

但男に被誘引、山越致候女ハ奴、○中略

一同忍通り候者　重追放

但女ハ奴

〔御仕置裁許帳六〕兄之娘幷從弟女を遊女奉公ニ出ス者、附姪ニ遊女爲致る者、

元祿二年巳七月廿七日

貳人　乙之助　六之助

右兩人、連雀町文左衞門悴、父文左衞門儀、兄孫兵衞、十一年以前相果候砌、連雀町三間口之家屋敷、先妻腹ふくと申娘に讓り、同町三間半之家屋敷、後妻腹之ふぢきく兩人之娘ニ讓り申候、孫兵衞相果、三年目ニ、孫兵衞弟右之文左衞門と、後家一所ニ致候、ふく儀ハ、緣ニ付申候、右家屋敷文左衞門進退不罷成候由ニ而、三百廿兩ニ賣申候、其上ふぢを新吉原江戸町太左衞門方江、新石町佐兵衞肝煎ニ而、三拾三兩ニ遊女に賣、其金子を遣申候段々非義成仕形、不屆ニ付、牢舍申付候、右之罪科之者悴成ル故、奴ニ致候ニ付、揚り屋ニ入、

右三人之者共、御祐筆飯高七左衞門方江、同巳七月廿七日奴ニ渡ル

〔御仕置裁許帳六〕火を付る者之類幷投火仕者之類

元祿四年未二月廿一日

壹人女かめ　是ハ去午十一月廿五日、入牢仕候牛込原町貳丁目六左衞門女房、此者夫火を付候由、其者之女房之由ニ而、稻葉庄右衞門方ゟ請取牢舍、

右之者、同未六月十六日、渡邊七郎兵衛方江婢ニ渡ル、

同日

壹人はな　是ハ右記有之、牛込原町貳丁目六左衛門娘、右同斷ニ而牢舍、

右之者、同未三月十六日、圖左衛門方江婢ニ渡ル、

〔憲教類典 四ノ五 評定〕享保七壬寅年六月廿八日

有馬内膳ゟ伺候書付、見合に可被成候に付寫置、

有馬内膳支配富永壽次郎知行所上總國夷隅郡石神村
百姓　平兵衛

大多喜町勘當人
髮結市平を殺候者

右之者、髮結市平を殺候得ども、市平事、兼々不屆ものに付、親勘當致候者之儀、其上楚忽成儀いたし、市平一在所之ものども、市平に對し、以後迄も何之申分も無之旨申に付、下手人には不罷成候、家財取上ゲ、住所無構可申付候、若取上候程之家財無之もの候はゞ、地頭壽次郎方ニ而、奴につかひ候樣に可被致候、

一市平死骸は、片付可被申候、

〔后敎錄 四十八〕文化四卯年十二月二日

一奴　無宿りの

右之者、夫越後國古志郡長岡在、脇野町彥右衛門相果候後、無宿浪人明石藏人と密通致し、親共之久離を請、藏人と夫婦に成、所々立廻り、其上越後國ゟ江戸表江出候には、御關所有之、手形無之候而は難通趣乍承、住所不存順禮喜八任申、同人夫婦一同、上州猿ヶ京杢橋御關所を除、山越致し、上州伊香保ニ而、藏人ニ出逢、御當地江忍び出候始末、不屆ニ付、奴、

朱書
右りのを引取、譜代に召仕度旨、一向宗淺草本願寺地中、法融寺卽玄儀願出候ニ付、糺之上、土井大

炊頭殿依御差圖、文化五辰年八月廿日、同人病氣ニ付、名代大龍江引渡に相成候間記之、尤受證文は同年手形帳書拔に有之候事、

古事類苑

法律部三十八

下編上

入墨 剕刵 斷手指 捺火印 剃髮併入

敲

附吡

古事類苑

法律部三十八

下編上

入墨

劓刵　斷手指　捺火印
剃髪〔併入〕

入墨ハ、大抵盜犯ノ者ニ科スル屬刑ニシテ、將軍吉宗ノ時、劓刵二刑ニ代ヘテ汎ク此刑ヲ行フ、其法ハ、獄舍內ニ於テ、方數十步ノ地ヲ占メ、席ヲ敷キテ刑場トシ、撿使鎰役出座シ、牢屋下男四人ヲ將キテ、其場ニ到レバ、詰番非人四人ヲ扶ケテ、左ノ肩ヲ袒セシメ、針ヲ刺シ墨ヲ塗リ、而シテ三日間溜ニ預ケ置キ、墨痕乾キテ後ニ之ヲ出ス、凡ソ入墨ノ形ハ、各地之ヲ異ニシテ一定セズ、此刑ニ處セラレシ者ハ、大抵追放トス、若シ墨痕ヲ燒キ消スカ、或ハ拔キ取リタル者ハ、又元ノ如ク入墨シテ、江戸拂ノ刑ニ處ス、

劓刵二刑ハ、德川氏ノ初世ニ行ハレシガ、寶永六年ニ至リテ之ヲ廢シ、享保三年又之ヲ復シ、同五年入墨ノ刑ヲ創メシヨリ、此刑遂ニ永ク廢スルニ至レリ、

手指ヲ斷チ、火印ヲ捺スハ、德川氏ノ初代ニノミ見エタルモノニシテ、後ニハ行ハズ、

剃髮ハ、犯姦ノ婦人ニ科スル刑ニシテ、其頭髮ヲ剃去シテ、親屬ニ下付スルナリ、

入墨名稱

〔書言字考節用集〕五肢體 黥（イレズミ）又云、墨刑、剠二其面一、以レ墨塗レ之、出二尚書一、

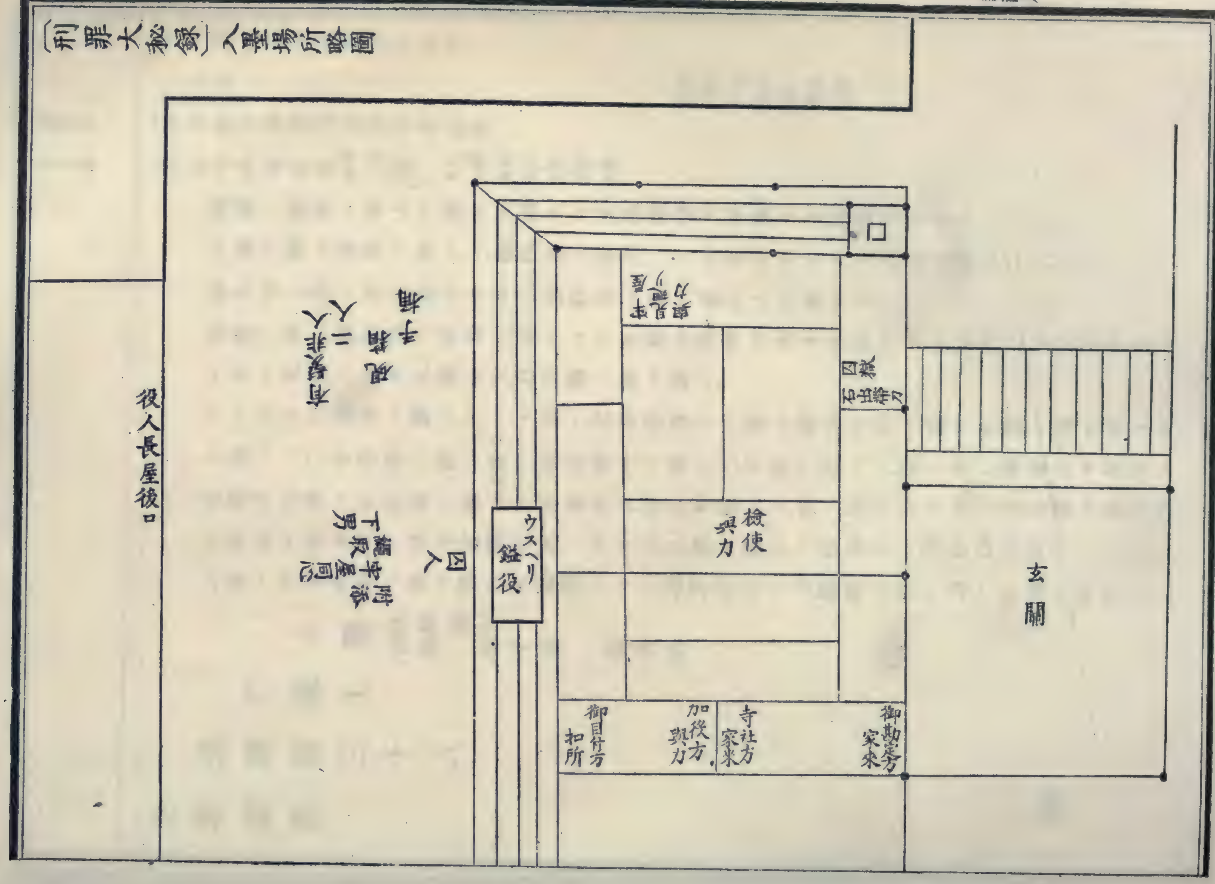
入墨方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

享保五年極
一入墨　於二牢屋鋪一腕廻シ、幅三分ツヽ、貳筋、

但入墨之跡、愈候て出牢、

〔刑罪大秘録〕入墨場所略圖



入墨圖

牢屋附詰番
小傳馬町河岸
小屋頭　非人
同抱
有髮　非人



入墨形

〔刑罪大秘錄〕入墨御仕置之事

一囚人懸り江呼出、入墨申渡、致歸牢候得者、腰縄ニ而下男縄取、牢屋同心壹人附添、牢屋見廻り詰所前砂利上江筵を敷、其上江居ヱ、椽側江薄縁敷、當番之鑰役着座シ、出牢證文ニ引合、名前肩書歳付入日、懸り入墨申渡之儀等相改、非人手傳、左之肌を爲脱、下地腕彫物之有無相改、墨ニ而筋貳ツ引廻し、針ニ而彫之、非人指ニ而墨を付、針跡江塗、兩手ニ而摺込ミ、手桶江腕を渡し、水ニ而墨を洗ひ、得とぬぐひ、針不行屆所ハ、針ニ而墨を附ケ、猶又彫入、前之如く洗ひ拭ひ、牢屋見廻石出帶刀見分之上、筆ニ而墨を濃く二筋引廻し、紙ニ而卷しごき、紙ニ而結ぶ、入墨かわき中、出入三日溜預ケ、乾き候樣子、掛り江呼出見分之上出溜、三奉行ハ同仕方、加役方ハ手續少し違ひ有之、

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類幷請人之方江參、あたけ申者、

寛文五年巳六月十六日

壹人彌右衞門　是ハ無宿、此者松浦肥前守家來鷺島四五右衞門方江、久助と申中間之請ニ立、出シ候處、久助致欠落候、此者も致欠落候處、今日湯島天神前ニ而主人見出シ、捕來ニ付籠舍、

右之者、額ニ惡之字を彫付、午十一月廿九日、江戸廿里四方追放、

〔憲敎類典四ノ五評定〕天和二壬戌年六月

覺

小山田彌市郎事、最前も相觸候得共、當二月十四日坊主になり、其後なで付ニ致し候由相聞候、ひたひをもたて、ちひさく仕候由に候間、入墨も見え兼可申候、右之かひなに、河內といふ字を入墨に致候之由申候、自然こも僧などの中江紛入可有之候、御代官所私領、幷領內に有之寺社領之內、せんさく紛敷者於有之者、早々江戸町奉行所まで可申來者也、

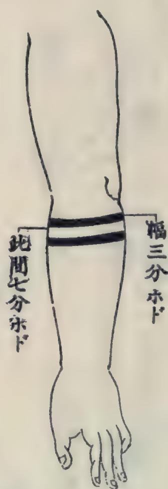
戌六月

件之者、松平陸奥守領分常州龍ヶ崎にて捕之、於江戸御糺明之上磔被行之、同類野村内藏助、天野十左衞門、宅間玄作同罪被仰之、

〔刑罪大秘錄〕入墨御仕置之事

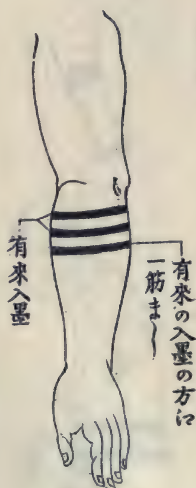
諸國入墨之圖略○中

江戸



一同増入墨ハ、安永六酉年十一月晦日松平右京大夫殿被仰渡、同七戌年六月廿一日牧野大隅守掛りニ而、小金無宿權次郎、初而増入墨ニ成、

増入墨



一人足寄場入墨ハ、寛政五丑年十一月五日、池田筑後守御番所ゟ牢屋敷江圖相渡、寄場内ニ而、入

〔張紙留〕御仕置仕形之事

京都左右



伏見



江戸



大坂



南部



泉州堺



江州彦根



日向



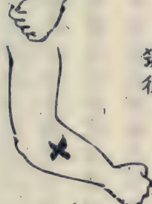
紀州



長崎



筑後



長門



阿波



肥前



筑前



豊後日向御代官



美濃大垣



播州明石



高野山



藝州廣島



同所二度目



同所三度目



墨相當不屆之者ハ、如此入墨申付、人足ニ而も、本罪入墨ニ當り候者ハ、是迄之通入墨申付ル

一寛政七卯年八月ゟ、牢屋敷ニ而入候事ニ極ル、

○按ズルニ、入墨形ハ評定所目安、御裁許御記錄、律令纂等ノ諸書異同アレドモ、今ハ煩シク載セズ、

〔牧民金鑑 二十〕文化元子年三月

入墨敲御仕置仕形之義、前以相達候通心得、被取計候樣下知書被認、入申達候得共、近年右御仕置仕形、相改候義も有之處、其以前之振合ニ被取計候義も可有之哉、左候而者區々ニ相成如何ニ付、別紙之通心得、御仕置可被申付、依之以來ハ、其度々申達間敷候、尤新規同役被仰付候節ハ、組合之內ゟ可被申達候、○中略

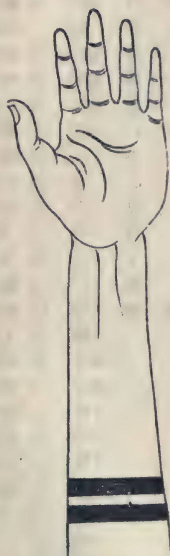
子三月

松 兵庫頭 印

石 左近將監 印

猶以關東御代官陣屋無之分者、入墨御仕置申付候義無之候得共、心得付居可然義ニ付、一同申達置候、且一紙早々順達留ゟ左近將監方江可被相返候、以上、

入墨御仕置仕形



御仕置申渡、右圖のごとく腕ニ間を六七分明ケ、幅三分程ニ墨貳筋引廻し、針を拾本程寄卷候而、

入墨制度

墨之上を突、直ニ又墨を入れ、入牢申付置、乾キ候上、百姓町人ハ其所役人江引渡、無宿ハ追拂候事、

〔御定書百箇條〕一牢抜手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

享保二年極
延享二年極
一入墨を拔、御構之地江立歸候もの、　入墨之上、前之御仕置ゟ一等重く可申付、

但入墨以上に可申付悪事いたし候はゞ死罪

同
一入墨を拔遣候もの　敲

寛保六年極追加
一入墨に成候以後、盗いたし候もの、　死罪

但外之悪事いたし候もの　重敲

〔明律條例上〕無官犯罪條附

若犯竊盜掏摸搶奪、一應情重者、亦擬炒鐵等項發落、不在拘役之限、民匠仍刺字充警、

〔憲教類典四ノ五評定〕享保五庚子年二月十七日

耳鼻をそぎ候科之ものにて、一等軽き品之者ハ、向後腕に廻し、幅三分程二筋入墨致し可申付候、

子二月十七日

右之通御書付、和泉守殿三奉行江御渡被成候、

〔享保集成絲綸錄四十三〕享保六丑年三月

入墨いたし追放申付候者、立歸致悪事候者有之ニ付、死罪ニ罷成候、向後ハ右之族致悪事候はゞ死罪ニ可申付候間、此旨町中可觸知候、以上、

三月

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和元申年十一月

入墨御仕置ニ成候以後、商等致シ候障ニ可相成と存、右之入墨を焼消候者、如元入墨之上、江戸拂

之御仕置申付候儀、向後御定同樣ニ相心得、可被伺事、

〔公案比事三十一〕安永三午年六月三日、松平周防守殿一座江御渡、同十四日御同人江評議書上ル、

一大津宿入墨之儀ニ付、土井大炊頭書面評議、

書面評議仕申上候通、被仰遣候旨被仰聞、承知仕候、

午七月九日　　　　評定所一座

御下知狀

先達而被相伺候、石原清左衞門申聞候、大津宿入墨御仕置之儀、大津宿公事出入諸伺等、所司代江相伺候間、入墨茂京都之通ニ而可然哉ニ候得共、京大坂支配國ニ而も、御代官所之御仕置は、御勘定奉行江相伺候間、入墨も江戸形ニ申付、淸左衞門御代官所村々も、江戸入墨形ニ候處、大津宿之盜賊、京都之入墨形ニ而は、淸左衞門方之取計、兩端ニ相成候間、伺之通大津宿入墨は、江戸入墨之形相用候樣、淸左衞門江可被申渡候、尤濃州垂井村盜賊入墨之儀、左之腕江二筋入墨致し、江戸之形とも不相見由申聞候得共、大坂入墨ニ振候儀は無之候間、可被得其意候、以上、

七月　　　　御連名

土井大炊頭殿

〔天明集成絲綸錄四十八〕安永四未年八月

三奉行江

御定書ニ、御構之地徘徊致候者、前々御仕置ゟ一等重ク可申付、但追放或所拂等申付候處、直ニ居町居村江立歸罷在候ハ、御仕置不相用者之事候間、入墨之上、最前之御仕置ゟ一等重く可申付と有之候、然處右御構之地致徘徊候者、先達而入墨有之候はゞ、其入墨を相用ひ、前々御仕置ゟ一等重ク可被相伺候、右之類、御仕置區ニ無之樣可被心得候、

入墨例

八月

〔天明集成絲綸錄四十八〕安永六酉年十一月

三奉行江

御構之地致徘徊候者、入墨有之候はゞ、其入墨を相用ひ、前々御仕置ゟ一等重く可申付旨、先達而相達候得共、以來入墨有之者、御構之地不立去候はゞ、先達而之入墨之際へ、一筋增候而入墨申付、前々御仕置ゟ一等重く可申付候、尤何ヶ度立歸候とも、右之通、追々一筋ツヽ入墨を相增、前々御仕置より一等ツヽ重く可被伺候、

右之趣、向後不紛樣可被心得候、

十一月

〔刑罪書〕諸國入墨

江戶入墨始りハ、享保五子年二月十七日被仰渡、同年五月十一日中山出雲守懸ニ而、長崎町平兵衞と申者、江戶橋之橋杭之卷鐵物ヲ外シ候依科、入墨之上追放ニ成、

○按ズルニ、入墨ノ刑ハ、是ヨリ先、寬文五年、及ビ天和二年ニモ行ヒシコト、入墨形條ニ引ク所ノ御仕置裁許帳、憲敎類典等ニアリ、參看スベシ、

〔公案比事三十五〕寶曆六子年二月十一日、御仕置申渡、依田豐前守掛、

一町奉行手限之例　山村信濃守持參

朱書　堀田相模守殿御下知　無宿　彌右衞門

右之者儀、四年以前、心安く出會候小平治ニ被相賴、衣類脇差等品々請取、取捌遣候儀、不相應之品品、度々小平治持參候ニ付、盜物とは存候得共、追々質物ニ差置、又は賣拂遣、其上盜物之紙布羽織請取、錢百五拾文遣、幷木綿合羽請取着用ニ致、其外質代金之內、七百文餘致橫取候儀共、馴合候致

方不届至極ニ付、入墨之上、重追放、

〔公案比事二十五〕明和九辰年二月　朱書　本書ニ不見

牛込無宿　伊右衛門事　太郎吉

右之者儀、親類方欠落致シ、無宿ニ成、古木屋仁右衛門名前を偽釘五百文分語リ取、或ハ可致盗心掛ニて、佐七方へ宵より忍居、壁をこぼち懸ケ候處、被見咎逃去候段、重々不届ニ付、入墨之上、重追放と相伺候處、入墨重敲と申上、其通濟、

〔公案比事三十二〕明和九辰年十月

松平對馬守掛

一上州矢場村ニ而召捕候無宿山田八藏外壹人一件、

朱書　田沼主殿頭殿御下知

無宿　山田八藏

右之者儀、及渇命ニ食事可致と存候迚、蔭山外記手代と偽、三右衛門を小者に雇召連、村々を廻り、御年貢取立江戸役所江可相納旨申聞、止宿致罷在り、無賃之馬駕籠迄爲差出候段不届ニ付、入墨之上敲、

〔公案比事三十四〕天明八申年七月

柘植長門守掛

一上總國櫻井村伊助外貳人方江押込及狼藉候市三外壹人一件

朱書　牧野備後守御下知

依田五郎左衛門知行上總國望陀郡櫻井村　百姓　市三

吉田庄十郎知行　同村同　傳右衛門

右之者共儀、穀物屋共、貸渡候約束ヲ致違變候段、心外ニ存候迚、村内伊助外貳人方江大勢押込、家作等打毀候節、銘々所持天秤棒を以、家作等打損、及狼藉候上、穀物盗取、其上平八外六人より貸渡、

甚右衞門預り罷在候金子之内、同人より内分に而借請候段、旁不屆ニ付、兩人共入墨之上所拂、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政五午年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一相州無宿入墨安五郎再應人足寄場を逃去候一件

相州無宿　入墨　安五郎

右之もの儀、先達盜いたし候依科敲又ハ人足寄場江入候處、同所を逃去候依科、重敲之上、猶又人足寄場江差遣候處、同所働、太儀ニ存候迚、當正月十九日、使先ニ而逃去候始末、旁不屆ニ付、最前之入墨之際ゟ、猶又入墨いたし、重敲之上、如元人足寄場江差遣、

此儀先達而榊原主計頭方ニ而召捕、同人手限ニ而御仕置申付候、寄場人足無宿入墨太吉儀、此もの同樣之所業ニ而、其砌先例書拔相添、主計頭より及相談候節、寄場人足御仕置ヶ條之內、構外江出罷在逃去、又ハ使先ゟ逃去候もの初度ハ重敲、貳度目ハ入墨重敲、及三度候はゞ遠島と有之、此もの一旦入墨ニ相成候得共、盜之科ニ而趣意違ひ候間、寄場逃去候科之入墨、先々之入墨ニ不拘、別段申付可然、既に敲ハ前科ニ何ヶ度有之候共、又候申付候儀ニ有之、入墨ハ形相殘故を以、重敲而已申付、如元寄場江入置、猶又逃去候はゞ遠島申付候而ハ、前書貳ヶ條自拔ヶ候樣相聞、一體人足寄場之儀、前々ハ無罪之無宿共而已差遣候場所ニ候處、元來人足とも生質不宜、不賴之もの共ニ付、愼候而手業等いたし居候ものハ少く、先ツハ逃去候儀を心懸候もの多御座候故、嚴重之掟ニ無之候而ハ、懲惡之取締も不相立、譯を以、格別之嚴科を被示候御趣意ニ可有之、旁入墨ニ相成、寄場江入候もの兩度逃去候節、前科之入墨を相用重敲計申付候而者、初度も同樣之御仕置ニ而、重り候譯無之、右御趣意にも齟齬いたし候間、御仕置附ニ、主計頭申上候例之金藏、并安永六酉年、入墨有之もの、御構之地を不相去候はゞ、先達而之入墨之際江一筋

増候而入墨申付、前々御仕置より一等重く可申付旨之御書付をも見合、主計頭見込之通、最初入墨之際へ、猶又入墨いたし、重敲申付、如元人足寄場江差遣し可然旨及挨拶候儀ニ而、右之通之趣意ニ付、今般之安五郎義、伺之通、最初入墨之際江猶又入墨いたし、重敲申付、如元人足寄場江差遣、

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政二戌年四月

町奉行 池田筑後守掛

松平和泉守殿御差圖

一水谷町庄助悴幸藏致盗候一件

水谷町貳町目彦兵衛店庄助悴 幸藏

右之もの儀、去酉五月上旬、不斗惡心出、透を見合、主人方見世ニ有之錠前無之簞笥引出ニ入有之、古柄糸四筋盗取、伊兵衛方江持參、代錢百文ニ賣拂、又は同所ニ有之小柄壹本、緣三ッ、度々盗取、與七を頼、代金壹歩五百文ニ賣拂、右之内、緣貳ッは代錢與七ゟ不相渡、殘代金銀都合壹分六百文は食物ニ遣捨、猶又同閏六月廿七日、錠前無之掛硯之引出ニ入有之、南鐐一片盗取致懐中、傍輩長兵衛儀、衣類を爲脱改候ニ付、難包銀子差出候處、細引ニ而被縛、土藏二階江上置候内、戸障子等蹴散あばれ候間、土藏庇合腕木江縛置候内も、彼是致惡口、宿江引渡候以後、縄目喰入、両手腫上り候迚、被縛氣絶いたし候故覺不申候得共、熱湯ニ而も被懸候儀ニ可有之旨、親庄助江申聞、吟味ニ相成候而も僞罷在候段、幼年とは乍申、不屆之至ニ付、入墨之上敲可申付處、幼年之儀ニ付入墨、

御差圖

重敲

右御仕置附

右御定書ニ、手元ニ有之品、不斗盗取候類、金子は、拾兩位ゟ已下、雜物は代金ニ積拾兩位ゟ已下、入

婦人處刑

墨敲、同拾五歳以下御仕置ヶ條之内、致盗候もの、大人之御仕置より一等輕ク可申付、右之通御座候、
幸藏儀、手元ニ有之品盗取候得共、主人之品盗取候ものに付、御仕置差別も可有之哉相調候處、明
和四亥年七月土屋越前守伺之上、御仕置申付候、無宿藤五郎儀、本材木町八丁目次助方ニ相勤候
節、次助所持之石切鑿一本、金壹歩盗取、請人岡崎町太兵衛江引渡候處、致欠落在所江參度候得共、
路銭無之迚、太兵衛方二階ニ有之候、錠前無之小袖櫃ニ入置候衣類貳品、帶壹筋、金壹分盗取候段
不屆ニ付、入墨之上、敲申付候例ニ見合、幸藏盗之御仕置、御定之通入墨之上、敲ニ相當可仕候得共、
幼年もの之儀ニ付一等輕く、入墨、

〔御仕置例類集二ノ二十五〕文化十酉年御渡

火附盗賊改松浦大膳伺

一木挽町七丁目入墨孫七初筆盗致し候一件　　當時無宿　辰藏

右之もの儀、武家方中間奉公致し候砌、孫七申勸ニ同意致し、玄關脇小部屋襖建寄有之處明ヶ遣、
孫七立入、刀脇差袴帶、孫七盗取、右品賣拂代錢之内、配分貰請、不殘遣捨候段不屆ニ付、入墨之上、重
敲可申付處、十五歳以下ニ付、入墨、

但喜三郎江引渡

〔刑罪書〕女入墨之始者　長谷川平藏懸り

松平和泉守殿依御差圖、　小日向西古川町吉兵衛店八五郎母　つた

寛政元酉年十一月五日、入墨ニ成、

但湯屋ニて衣類前垂盗取候科

〔評議書〕寛政元年九月廿六日

備後守殿江（月番記書役ヲ[illegible]）立會、近藤吉左衛門を以上ル、

酉十月三日

和泉守殿承附候樣、近藤吉左衛門を以御下ケ、承付いたし右京亮 河內守 肥前守 立會上ル、

入墨敲ニ當候、女御仕置之儀ニ付申上候書付、

評定所一座

當八月五日御渡被成候、長谷川平藏相伺候、小日向西古川町八五郎母つた、盜賊一件之內、右つた江戸拂と平藏相伺候處、手元ニ有之輕キ品を盜取候ものニ付、入墨重敲之御定ニ相當候ものと奉存候、然ル處只今迄、女之御仕置ニ、入墨幷敲申付候例も無御座、別紙之通、入墨重敲ニ當候致盜候女を江戸拂申付候例御座候間、右ニ引當評議仕申上候得ば、つた儀も平藏伺之通、江戸拂と可申上候得共、御定書ニ、

一 惡黨ものと乍存宿いたし、又は五七日ツヽ逗留爲仕候もの　重キ追放

一 家藏江忍入候盜人ニ被頼、盜物持運・配分取候もの、　敲之上輕追放

但配分不取候ハヽ、敲之上所拂、

一御林之竹木、申合盜伐いたし候者、　頭取 重追放

頭取ニ准じ候もの 中追放

右三ヶ條之外、全く盜賊ニ追放之刑無御座、江戸拂も同樣之趣意ニ御座候間、女ニ候共別紙江戸拂之例可然共治定不仕、以來之例にも相成候儀ニ付、右之御仕置不相決候而ハ、一件之御仕置評議仕難申上候間、入墨敲ニ當候女之御仕置、以來之極方先評議仕候處、女之御仕置、都而男ゟ輕く可申付との儀ハ勿論、入墨敲ニ難成旨之御定も無御座、然レ共敲之儀ハ、御定書御仕置仕形之ヶ條ニ有之候通、牢屋門前ニ而、科人之肩脊尻をかけ、背骨を除、絕入不仕樣、撿使役人遣し、牢屋同心ニ爲敲候儀ニ而、尤衣類爲脫縛、うつ臥ニ致置敲候間、女を右體ニ致候も如何ニ付、是迄敲之御仕

劓刵

置不仕儀にも可有之儀と相聞候間、いづれ女を敲ニハ相成間敷哉、當七月、道中筋宿々飯賣女、盜物と乍存、任頼質入遣、禮物ハ不取もの御咎之儀、評議致可申上旨被仰聞候節、右は敲之御定ニ相當候處、女ニ而敲被仰付候例も無御座候間、五十日押込被仰付可然哉と申上候儀も御座候處、右ハ盜人之當人にも無御座候間、類例ニ見合申上候得共、以來之儀ハ據を以極置候方と奉存候、再應評議仕候處、安永元辰年、十五歲以下之もの御仕置之儀ニ付御書付之內、幼年之もの敲之儀、十五歲以下ニ而も敲可申付、但御定書ニ、幼年ニ而盜致候もの、大人之御仕置ゟ一等輕ク可申付と有之候間、敲ニ當候ものを敲候而ハ、右御定ニ相當不致候、無宿ニ而無之幼年之者、敲ニ當候ものハ、向後過怠牢可申付事と有之候ニ准じ、敲ニ當候女之御仕置ハ、大人幼年ニ不限、百敲ハ百日、五十敲は五十日、過怠牢ニ而も可有之哉ニ御座候處、入墨重敲ニ當候女を過怠牢ニ而ハ、全敲而已之御仕置ニ相當リ相當仕間敷、女之御仕置ニ入墨難成との御定も無御座候間、入墨重敲ニ相當候ものは、入墨之上、百日過怠牢申付、敲計ニ當候ものハ、前書之通、大人幼年之無差引、百敲ハ百日、五十敲は五十日、過怠牢申付候積、以來極置候樣可仕候哉奉伺候、以上、

酉九月

酉十月十二日

和泉守殿江御直（周防守備後守甲斐守）立會、下リ物相添進達、

當八月五日御渡被成候、長谷川平藏相伺候、小日向西古川町吉兵衛店八五郎母つた評議、所々湯屋ニ而盜致候ニ付、江戶拂と伺之處、先達而評議伺濟之趣を以、入墨之上、百日過怠牢と申上、其通相濟候、依之平藏伺評議書、爰ニ略ス、

○

〔憲教類典四ノ五評定〕寶永六己丑年十二月廿六日

覺

科人御仕置之儀ニ付而、耳鼻をそぎ、又ハ指抔を切候樣なる事、向後無用可被仕候、以上、

丑十二月

右之御書付、永井伊豆守殿御渡、大目付衆江遣し候事故、何れも爲心得被遣候、相觸候義にて無之旨被仰候、以上、

寶永六丑年十二月廿六日

〔憲敎類典 二ノ二十二 長崎〕享保三戊戌年八月廿八日

一本人ハ耳鼻をそぎ、家財之内、過怠之積り相應ニ取上之、追放可申付候、

一身上之能き者、本人ニ而ハ無之、抜荷抔取持、本人ニ差添、抜荷商買手傳致し候者ハ、耳鼻をそぎ不申、過怠之積り、家財之内、相應取上申、追放可申付候、

一輕き者ハ、耳鼻をそぎ候上ニ而、過怠無之積り候、本人と申ニ而無之、手傳候迄之義ニ候ゆゑ、過怠不及、追放可申付候、

一右抜荷仕候者之義ニ付被仰聞候、三段之御仕置之趣奉承知候、最前ハ追放幷一口欠所仕候義ニ相心得、書付差上申候、右之通ニ候得バ、段々差引有之、御尤至極奉存候、外ニ存寄無御座候、以上、

享保三戌年八月廿八日

〔公裁秘錄〕入墨之部

耳鼻をそぎ候科之者ゟ、一等輕き品之者ハ、向後腕ニ廻輪、幅三分程二筋、入墨致可申候、

子二月〇享保五年

〔慶長日記 五〕慶長十四年二月廿日、常樂院日經、道中引渡、一昨十八日京着、今日洛中被引渡、悪口

不止候て、祖師日蓮も被流被召捕候、我等も同前也、宗旨の手柄也と高言申、猶諸宗を誹申間、雑色に被仰付、耳鼻をそぎ被申、上總連深、〇深一本作源堺玄聽、同玉雄、上總琳碩、同可圓、此五人ハ鼻計そがるる、琳碩、餘悪口申候をにくみ雑色共ふかく鼻をかき、痛則相果申候、其後追放、丹波へ逃行、五人一所に罷在候を、其所ノ代官ヨリ申付、寺を打破追出候へば、ちり／＼に罷成、猶悪心やまず、書を作、旦那共へおくる、

〔御仕置裁許帳 九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、并請人之方江参、あたけ申者、

寛文五年巳六月十五日

壹人半左衞門　是ハ富澤町新道八右衞門店之者、此者拾ヶ所之請ニ立、奉公人を出シ、致欠落候出入不相濟候ニ付、家主訴訟申ニ付籠舍、

右之者、午十月十三日、鼻をそぎ、江戸五里四方追放、

九月十日

壹人市郎兵衞　是ハ靈岸島鹽町新左衞門店之者、此者牧野因幡守家來、中江伊兵衞方江、勘兵衞と申者之人主ニ成、奉公ニ出シ置候處、致欠落候出入不埒明候間、手鎖を懸ヶ預ヶ置候得共、増山兵部少輔方江も人請ニ立、日切之通を相背候、其外方々江人請ニ立、不埒明候ニ付籠舍、

右之者、午十月十三日、鼻をそぎ、江戸五里四方追放、

〔御仕置裁許帳 九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、并請人之方江参あたけ申者、

寛文七年未七月十五日

壹人加左衞門　是ハ宇多川町喜左衞門店之者、此者儀、高林又兵衞方ゟ致欠落候、島藏と申者を、出居衆新五兵衞と申者賴候由ニ而、松平日向守家中江奉公ニ出シ置、主人國元江参候處、島藏を勧候而、道中ゟ爲致欠落、元赤坂町勘右衞門店助之允ニ預ヶ置、其上人主無之者を、方々江奉

公ニ出シ致欠落候ゆゑ、届數多有之迷惑之由家主訴訟申ニ付牢舍、
右之者、同未八月七日、鼻をそぎ、江戸町中追放、
〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類并請人之方江參あたけ申者、
天和二年戌十月廿五日
壹人七兵衛　是ハ南小田原町貳町目安兵衛店之者、此者請ニ立、稲葉出羽守方江、笠松傳左衛門と申者を奉公ニ出置候處、主人方ゟ暇出シ、返リ金拾貳兩餘有之候ニ付、主人方ゟ斷有之、不相濟候內、傳左衛門致欠落候、其後於品川ニ見付、預ヶ置候由申候得共、樣子不埒ニ付、其外三ヶ所之奉公人之請ニ立、返リ金滯リ不相濟候ニ付、評定所ゟ籠舍、
右之者、日本橋ニ三日晒、同月廿八日、鼻をそぎ追放、
〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類并請人之方江參あたけ申者、
天和二年戌十月廿五日
壹人與五左衛門　是ハ喜左衛門町八左衛門店之者、此者請ニ立、大塚彌助と申者を植村右衛門佐方江奉公ニ出シ置候處、白壁町彥兵衛と申者彌助元請人ニ而、辨金有之由、彌助主人江彥兵衛斷候ニ付、主人ゟ金子五兩餘出シ、埒明候處ニ、彌助致欠落候由ニ而、斷有之候ニ付、彌助を可尋出旨證文申付候得共、不尋出候間、日切度々相延候、其外二ヶ所江奉公人之請ニ立候處、其者共致欠落候ニ付、評定所ゟ籠舍、
右之者、日本橋ニ三日晒、同戌十月廿八日、耳をそぎ追放、
同日
壹人吉右衛門　是ハ赤坂裏傳馬町六右衛門店之者、此者新肴町半左衛門方ゟ人請之出入有之ニ付、手鎖を懸置候處、其外方々ゟ人請出入有之候、不埒明候ニ付、今日評定所江召出穿鑿之上、

手鎖を外シ籠舍、

右之者、日本橋ニ三日晒、同戌十月廿八日、耳をそぎ追放、

〔金澤藩刑法者抜書〕耳鼻そぎ刑之者共

耳鼻そぎ追放　礪波郡松尾村頭振　仁兵衛

此者、寛文元年、侍方長屋江忍入、木綿着物帷子盗取候事、

耳鼻そぎ御國追放　松住町坊丸屋　七兵衛

右之者、寛文十二年、他國米を買置、米見共見付、預可申と申候處、封附させ不申由及断候事、

同刑　瀬人小者　覺內

右之者、寛文十年、御横目之由仮言を申、在々ニ而爲致賄候事、

〔金澤藩刑法者抜書〕耳そぎ刑之者共

刵、御國追放、　福島武左衛門草履取　左之助

右之者、寛文八年、才川祇園縁日之時分、かぶきたる女之妻ニ成、傍輩小者兩人同道ニ而、社參之者ニ立交有之候事、

〔金澤藩刑法者抜書〕耳そぎ刑之者共○中略

耳そぎ、其所ニ可差置旨、　春日町たばこや　勘四郎

右之者、寛文十年、盗人又兵衛と申者被捕候節、其場江出合候得者、又兵衛茂、去年之はたご代幷小豆代可遣與申、錢相渡候をうかと心得、盗人ゟ勘四郎錢請取候事、

〔金澤藩刑法者抜書〕耳そぎ刑之者共○中略

片耳切、追放、　非人　六

此者、元祿四年、在家江忍入、米八升、小豆貳升、其外味噌等少々盗取候事、

斷手指
捺火印

兩耳切、追放、　礪波郡中保村百姓彦四郎せがれ　又兵衛

此者、元祿六年、在家二ヶ所ニ而、苧ガせ百五十がな、古帷子壹、盜取候事、

〔金澤藩刑法者拔書〕劓刑之者共

茶屋町桶屋　長右衛門

劓追放、

右之者、寬文十年、誰彼を集、博弈宿仕候事、

越中氷見地藏町　八兵衛

劓御國追放、

右之者、寬文十一年、ながしもちに而雜鴨四ツ取候事、

〔耶蘇天誅記中〕一慶長十九甲寅年、山口但馬守重弘ヲ吉利支丹宗門御詮議ノタメニ、西國筋へ差下サル、但馬守、先ヅ肥前長崎へ立趣キ、彼地ニ於テ邪宗門ノ輩悉ク改易アリ、次ニ同國高來郡〇中略口之津ト云フ村ニテ穿鑿アリシ處ニ、一村ノ土民ドモ、悉ク宗門改ノ判形、堅ク致スマジキト申ス故、卽召捕テ譴責シケレバ、大形ハ本宗ニ立復リケレドモ、其張本人廿五人改宗セザルニ依テ、躬ノ筋ヲ拔キ、手ノ指ヲ切テ、稠シク嘖シカドモ、猶モ故路(コロビ)備ザル間、止コトヲ不得シテ、禁獄中付ケ、〇下略

〔當代記〕慶長十九年九月廿九日、去比被押籠シ女房衆、今日被切棄、原主水ハ、手指十ヲ被切、此後又足指十ヲ被切、其後可被刎首、

〔耶蘇天誅記中〕慶長十九甲寅年九月十三日、駿河國府中ニ於テ、原主水ト云者ヲ關東ヨリ搦メ來ル、此者吉利支丹宗門ノ類屬ナルガ、數年ノ間關東筋ニ隱レ居タルヲ搜リ出シ召囚リテ、今日當地へ引來リシ也トカヤ、卽兩手ノ大指ヲ切リ、額ニ火印ヲ捺テ追放セラル、何方ニテモ、若此者ヲ扶助セシムル輩アルニ於テハ、曲事タルベキノ由添札ヲ彼主水ガ背中ニ負セテ、相放タレシト云、九月二十九日、武江ニ於テ吉利支丹宗門ノ類族清安ト云シモノ、兼テ牢舍シテ在リケルガ、

剃髮

牢内ノ科人二人ヲ同宗ニ勸メ入ル、是ニ因テ兩手ノ十指ヲ切リ、額ニ火印ヲ捺テ追放セラルト云、

〔東武實錄 一〕元和二年五月十一日、鳥目ノ制法ヲ諸國ニ相觸ラル、

定

一大かけ　一われ錢　一かたなし　一ころ錢　一新惡錢　一なまり錢

右六錢之外ハ御藏へも納候間、えらぶべからず、金子一分ニ一貫文之賣買たるべし、若彼六錢之外撰もの幷押而つかふもの有之バ、糺明之上、其面に火印をおすべき者也、仍所定如件、

元和二年五月十一日

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

從前々之例　一離別狀不取、他江嫁候女、　髮を剃、親元江相返す、

〔記事條例 一〕安永三午年八月廿四日

一今日御勘定奉行太田播磨守より、明廿五日髮剃、親元江引渡候女壹人有之、於評定所申渡候間、剃人之儀申付候樣申來候に付、元數寄屋町月行事呼出、髮結壹人、明廿五日明六時、評定所江召連可申候、尤罷出候節、御番所江相屆罷出候樣請書取置、翌廿五日朝六時、月行事壹人差添髮結召連候間、同心附候而、評定所江差遣、出役荻野仁右衛門、原兵左衛門江爲引渡候、尤出役兩人江茂、爲心得前日申遣置候事、

〔評議書〕寛政元年九月五日

和泉守殿江　備前守 河内守 肥前守　立會御直ニ上ル、　評定所一座

去月五日御渡被成候、松平石見守相伺候、女兩人申合入水仕、壹人存命ニ罷在候一件、御仕置之儀評議仕候趣、左之通御座候、

南堀江町貳丁目大和屋六右衞門借屋鹽屋藤兵衞女房　くま

右之者儀、藤兵衞方江嫁付、無間も懷胎之樣子ニ而、全以前不身持之儀在之故、其節ゟ妊身致候事ニも可有之哉と心付、右體之儀、夫藤兵衞承候而者、是迄情弱之儀相顯、其儀申立離別致候仕儀ニも可相成哉と屈佗存罷在候處、まさ儀も、同樣之趣意有之、兩人共身分難立行存詰、捨身可致旨同人申聞候共、外ニ致方可有之處、無其儀申合入水いたし、まさは相果、不量も其身存命ニ罷在候及仕儀候段、不屈之至ニ付、重キ御仕置ニも可相伺ものとも奉存候得共、全女之無辨仕方と相聞、殊ニまさ親類共も、兼而身持不慥ゟ、右體及仕儀、自滅ニ無相違上者、くまへ對し恨之筋聊無御座、宥恕相願候旨申立、外ニ趣意有之儀と者相聞不申候間、尼ニ可致旨申渡、髮を剃、親元江引渡遣可申哉之旨相伺申候、

此儀緣談極候娘と不儀いたし候もの、御定書ニ、女者髮を剃、親元江相渡スと有之候處、此者吟味書之趣ニ而ハ、緣談極候而之密通ニハ無之、奉公先ニ而之儀と相聞、今以密通之男有之、通路致候ニも無之旨之申口ニ而、夫婦之約束等致候儀ハ勿論、定メ而之男と申も難致治定哉ニ相見申候之間、御定書下女下男之密通、主人江引渡遣ス、并夫無之女と密通致誘出候もの、女ハ爲相歸、男者手錠と有之候、貳ケ條ニ見合、夫藤兵衞江引渡遣し、離緣致候共、又ハ熟緣可致とも、心次第之旨可申渡段被仰渡可然哉ニ奉存候、

右評議仕候處、書面之通御座候、

敲

敲ハ庶人ニ科スル刑ニシテ、八代將軍吉宗ノ時、始メテ此法ヲ設ク、是乃チ上世笞杖刑ノ遺法ナリ、敲ニ輕敲重敲ノ二種アリ、其罪ノ輕重ニ由リテ、其笞數ヲ異ニス、單ニ敲ト云フハ、笞五十ヲ加ヘ、重敲ハ、笞一百ヲ加フ、サテ其方法ハ、獄舍ノ表門前ニ於テ、筵數枚ヲ敷キテ刑場トシ、撿使以下役人出席シ、詰番非人罪人ヲ將キテ其場ニ到リ、之ヲ裸體ニシ、其衣服ヲ、筵ノ上ニ敷キ、罪人ヲ其上ニ偃臥セシメ、顏ヲ往還ノ方ヘ向ケ、下男四人ニテ手足ヲ抑ヘ、打役杖ヲ以テ之ヲ敲キ、別ニ打役一人其側ニ立チテ笞數ヲ唱フ、其敲キ方ハ、脊骨ヲ除キ、肩背及ビ臀ヲ迭ニ敲キ、重敲ハ、五十ニシテ一旦中止シ、醫師罪人ニ藥ヲ與ヘ、打役交替シテ又之ヲ敲クナリ、サテ罪人町人ナレバ、其家主又ハ名主ヲ呼ビ、若シ百姓ナレバ、其村ノ名主組頭ヲ呼ビテ刑場ニ列セシメ、敲キ了リテ之ヲ下付ス、若シ又溜預ノ者ナレバ、直ニ縛シテ溜ヘ遣ハシ、人足寄場ヘ遣ハス者ハ、其役員ニ下付シ、無籍者ハ、獄舍門前ニ於テ追ヒ放ツナリ、牢庭敲トハ、獄内ニ在ル四人ノ中ニテ、逃亡ヲ謀ル等ノ惡事アル時ハ、他ノ四人ヲ懲サン爲メニ、獄舍ノ前庭ニ於テ、特ニ此刑ヲ科スルヲ云フ、

始設敲刑

〔刑罪大秘錄〕敲御仕置之事

一敲御仕置之始リハ、享保五子年四月十二日、戸田山城守殿被仰渡、山川安左衞門掛リニ而、數寄屋町平兵衞店勘右衞門と申者、三笠付致ながら、其場所江罷越色々之儀申依科、牢屋鋪於表門前、等尻ニ而、五拾敲、追放申付ル、

〔有德院殿御實紀附錄三〕刑罰は人の命にかゝる事なればとて、殊に御心を用ひられ、〇中略鞭刑をもはじめ玉へり、とりぐ罪の疑はしき、輕きに志たがはせ玉ふ御旨なるべし、

敲方法

〔我衣〕其比○享保卑キモノハ、身上クラシニクルシメラレ、法外ノタクミヲ致スユヘ、罪科者モ多シ、是ニ依テ元文刑罪ノ義、一段輕ク成、大罪ハ小科ニ轉ジ、小科ハ死ヲユルサル、此時ヨリ敲放シトテ、刑鞭ノコト始ル、夫故ニ死罪ノ者、刑鞭ニテ免サルヽト心得、盗賊ノ類多シ、是其元ヲキビシク苦シメ、末ヲユルカセニスル故也、

〔寶曆集成綵綸錄三十〕延享四卯年二月

三奉行へ

敲之分は相止、科之輕重ニ而、入墨亦者追拂ニ、其節相伺可申候、

右之通相心得、御仕置可被相伺候、

〔刑罪大秘錄〕敲御仕置之事

一延享四卯年三月十一日、馬場讃岐守掛リニ而、右御仕置有之、其後中絶、

一寛延二巳年十一月廿六日、前々之通、敲御仕置初候旨、能勢肥後守申渡、囚人掛リニ而、同年十二月四日、敲之者四人有之、以後相續之、○中略

一敲之節、御徒目付御小人目付立合之始者、享保五子年より始り、延享二丑年相止、寛政六寅年ゟ再び始ル、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

享保五年極

一敲　數五十たゝき、重きは百敲、

牢屋門前にて、科人之肩脊尻を掛、脊骨を除、絶入不仕樣、撿使役人遣し、牢屋同心に爲敲候事、

但町人に候はゞ、其家主名主、在方ハ名主組頭呼寄、敲候を爲見候て引渡遣す、無宿ものは、牢屋敷門前にて拂遣す、

〔憲教類典四ノ六評定〕延享二乙丑年八月十九日

雅樂頭殿御渡

御目付へ

只今迄、敲御仕置之節、御徒目付立合候得ども、向後立合不ㇾ及候、

右之通三奉行、幷小濱平右衛門へ相達候間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候、○又見二寳曆集成絲綸錄一

〔天保集成絲綸錄百〕寛政六寅年十月

町奉行江

敲御仕置申付候節、支配之者差遣、爲二見置一候樣可ㇾ被ㇾ致候、尤其度々相越候ニハ不ㇾ及候、町奉行ゟ申越候はゞ、見計可ㇾ被二差越一候、

右之通御目付江相達候間、得二其意一、敲御仕置申付候節、御目付江可ㇾ被二申達一候、尤其度々ニハ不二相越一筈ニ候間、參リ掛都合次第可ㇾ被ㇾ致候、

〔刑罪大秘錄〕敲御仕置之事

一牢屋鋪表門江、筵三枚敷、門扉開き、地覆内ニ、牢屋見廻リ與力、囚獄石出帶刀、撿使立合、御徒目付、御小人目付等立並び居、地覆外右之方、鎰役不ㇾ殘、左之方打役不ㇾ殘、次に當番之本道醫師壹人、下男部屋頭等一同並居、詰番非人小屋頭、手下召連出居リ、囚人ハ往還を後江、門前筵敷、表之方を前と致し、腰繩ニ而、下男繩を取、囚人後通ハ、牢屋附辻番人棒突固ㇾ之、三奉行掛リ之牢屋同心貳人固附添居、加役掛リハ、右組同心附添居ル、

一當番鎰役、出牢證文ニ引合、銘々名前肩書歲付入日等相改、加役ニ而ハ撿使之與力、門地覆外江出、科之次第申渡、三奉行ハ、掛リ〳〵ニ而申渡相濟、牢屋鋪江引來ルニ付、掛リ奉行名前、幷申渡之輕重、是亦證文ニ引合、鎰役相改、直ニ囚人壹人ヅヽ、筵之上江下男連レ來リ、裸ニ致し、着物を筵之上江敷、其上江はらばひに致し、往來之方江顔を向ケ下男手足を押へ、打役等尻ニ而打ㇾ之、

打役之内壹人、側ニ立居、數を取、略圖左ニ寫、

一百敲ハ五拾打、醫師氣付を爲呑、下男部屋頭水を爲呑、打役代り合打之、打方ハ脊骨を除き、不絶入樣打之、御仕置相濟、宿江引渡候者ハ、宿幷町役人江も見せ置、溜預ヶ之ものハ、溜之者直ニ木縄ニ懸ル、人足寄場江遣し候ものハ、縄取附添、懸り〱ゟ出候ニ付相渡、在牢之ものハ、其儘牢内江引入ル、

〔牧民金鑑二十〕文化元子年三月

敲御仕置仕形

敲帯者、すぐり藁を觀世よりにて卷、長サ壹尺九寸、太サ四寸五分廻しいたし、肩脊尻を互ひ違ひニ、背骨を除、絶入不致樣（重敲者、數百、敲者、同五十、）敲、尤百姓町人者、其所役人共江爲見置、敲相濟、其役人共江引渡、無宿ニ候はゞ、追拂候事、

一入墨重敲、或ハ入墨敲申付候者、入墨を入候上、敲候而入牢申付、入墨乾キ次第、前書之通引渡、又ハ追拂候事、

〔御定書百箇條〕欠落奉公人御仕置之事

一（從前々之例）巧候儀も無之輕キ致取逃候者　敲

一（同）給金請取主人方江不引越者　敲

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

一（享保五年極）輕き盗いたし候もの　敲

一（從前々之例）途中にて小盗いたし候もの　敲

一（同）湯屋江參り衣類着替候者　敲

一（寛保元年極）盗物と乍存世話いたし、配分は不取もの、　敲

〔刑罪大秘録〕敲御仕置略圖

寺社御勘定加役方掛リ敲御仕置有之節ハ検使ノ所江出ル

敲圖



入墨之上敲

一盜物ものと存、預り候もの、　敲

〔御定書百箇條〕巧事かたり事重ねだり事致候もの御仕置之事

一從前々之例家主幷五人組を拵、訴訟に出候者、　敲

寛保二年極
但似せ家主五人組に成候もの同罪

〔御定書百箇條〕牢抜手鎖外し御構之地江立歸候もの御仕置之事

享保二年極
延享二年極

一入墨を拔遣候もの　敲

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政元酉年八月

鳥居丹波守殿御差圖

一野州須左木村ニ而捕候盜賊一件　御勘定奉行　根岸肥前守掛

無宿　彌吉

右之もの儀、無宿八兵衞を盜賊と乍辨、給物等致世話遣、度々錢貫受候段、不屆ニ付敲、

右御仕置附

右御定書ニ、盜物と乍存世話致、配分ハ不取者、敲と有之候處、右者盜物之致世話候もの之御定ニ而、此もの者、給物之致世話候者ニ御座候得共、八兵衞を盜賊と乍辨、錢貫請候不屆者、右御定ニも准可申儀ニ付、差當例ハ相見え不申候得共敲、

〔御定書百箇條〕二重質二重書入二重賣御仕置之事

寛保四年極
一諸賣物代金請取、其品不渡、外江二重賣いたし、亦は取次可遣品、質に置、幷賣拂金銀様取致候者、　金子は拾兩位以下、雜物は代金に積、拾兩位以下は　入墨敲

〔御定書百箇條〕欠落奉公人御仕置之事

享保五年極
寛保元年極
一手元に有之候品を、風と取逃いたし候もの、　金子は拾兩位以下、雜物は代金に積、拾兩位以下は　入墨敲

寛保三年極
延享元年極

一　使に爲ㇾ持遣候品、取逃いたし候者、　金子は壹兩以下、雜物は代金に積、壹兩位ゟ以下は、　入墨敲

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

享保五年極
寛保元年極

一　手元に有ㇾ之品風と盗取候類　金子は拾兩ゟ以下、雜物は代金に積、拾兩位ゟ以下は、　入墨敲

寛保元年極

一　陰物買　入墨之上敲

從二前々一之例

一　陰物と乍ㇾ存又買いたし候者　入墨之上敲

〔御定書百箇條〕辻番人御仕置之事

從二前々一之例
延享元年極

一　廻り場之内にて、金銀又は、雜物等を拾ひ、隱居候番人、　金子は一兩以下、雜物は代金に積、一兩位ゟ以下は、　入墨敲、

〔比考錄〕松波筑後守御番所掛

元文二年巳閏十一月廿日入牢　壹人助七 歳廿三　是は無宿 ○中略

右之者、錢を盗取、其上難波町彦兵衞店源助方江忍入候段、不屆ニ付、入墨之上、於二牢屋門前一、五十敲キ放し申付ル、

巳十二月十八日

〔御仕置例類集 三ノ五〕寛政元酉年三月

牧野備後守殿御差圖　町奉行 初鹿野河內守掛

一　寶生座御役者當時病死高安彌兵衞方ニ居候同人弟岡良雲、致ㇾ盗候一件、

寶生座御役者當時病死高安彌兵衞方ニ居候
同人弟　岡　良雲

重敲

右之もの儀、知ル人紀伊殿醫師宇留野玄門ニ被頼、同人方ニ而屏風襖等張替いたし候節、下地を剝候紙屑賣拂、酒調給可申と存、取集候得共、酒代ニ引足不申候ニ付、不斗惡心出、手元ニ有之候股引盜取、紙屑江取交持出、代錢百五拾文ニ賣拂、酒食ニ遣捨、其上玄門方ニ而、致紛失候藥箱、此もの仕業之旨、疑受候處、右品有所知れ候得共、内分ニ而相濟候樣取計可遣旨、本念寺申ニ付、表立候而ハ、股引盜取候儀も露顯可致と存、藥箱盜取候儀者無之候得共、尋出内分ニ而可相濟と、本念寺幷玄門江盜取候趣一旦申僞候上、盜取候趣致書付差遣候段、旁不屆ニ付、入墨之上、敲、

右御仕置附

右御定書、手元ニ有之品を不斗盜取候類、金子者拾兩ゟ以上、雜物者代金ニ積拾兩位ゟ以上者、死罪、金子拾兩ゟ以下、雜物者代金ニ積、拾兩位ゟ以下者、入墨敲、右之通有之候、此もの儀者、手元ニ有之、股引盜取賣拂、其上右之儀露顯可致哉と内分ニ而相濟度、藥箱盜取候旨僞書付差出候儀共、不屆ニ御座候得共、盜之科、重ニ御座候間、右御定書ニ見合、入墨之上敲、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

延享二年極
一奉公人と馴合、欠落いたさせ候請人、　重敲

〔御定書百箇條〕欠落奉公人御仕置之事

從前々之例
一度々欠落いたし候もの　重敲

同
一主人之金子持出、博奕打候もの、　重敲

享保六年極
一引負致候者、一向辨金於無之ハ、　金高に應じ、五十敲百敲、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政七卯年三月

松平伊豆守殿御差圖

一當時無宿茂兵衞致盜候一件

町奉行
池田筑後守掛

三河町貳丁目源兵衞店　小兵衞

同人召仕 勇助

右之もの共儀、住所不存茂兵衛、追々持參候唐銅盤銅三ッ、其外銅物類、怪敷品と乍存、德用取可申と存、出所も不相糺、買上書付も不取買取候段、番組古鐵屋渡世乍致、別而不屆ニ付、入墨之上、敲可申付處、訴出候間、兩人共重敲、

右御仕置附

右去ル亥年伺之上、御仕置申付候、麻布北日ヶ窪町十左衛門店牛次郎儀、番組古着買乍致、彌右衛門ゟ絹はつひ、兩度ニ都合貳拾三、怪敷品と乍存、德用取可申と買取、又者賣拂遣、右代金之內、貳分錢八十文德用取、剰爲世話料、錢貳百文貰請候始末、不屆ニ付、入墨之上敲可申付處、町觸似寄ニ付訴出候間、重敲申付候例ニ見合、重敲、

(御定書百箇條)廻船荷物出賣出買幷船荷物致押領候者御仕置之事

寛保二年極
一打荷或は破船と僞、荷物を押領致候者、 水主入墨之上 重敲

(御定書百箇條)三笠附博弈打取退無盡御仕置之事

從前々之例
一惡鑿拵候者 入墨之上 重敲

(御定書百箇條)盜人御仕置之事

享保五年極
一家內江忍入、或ハ土藏抔破候類、 金高雜物不依多少 死罪

延享元年極
但晝夜に限らず戶明有之所、亦は家內に人無之故、手元に有之輕品を盜取候類、入墨之上、重敲、

(御定書例書)他の金子盜取候得共、右主之難儀を察、右金子可返作略有之者の事、

延享元子年十月御仕置の例 岩附町 喜兵衛

此喜兵衛儀、元主人喜右衛門宅へ忍入、旅人の金子盜取候、御定の通、死罪可奉伺候得ば、喜右衛門

難儀いたし候儀を氣の毒に存、本心に立歸、右の金子相返度所存にて、伊藤若狹方の神前へ金子投込候段、不埒に付、入墨の上、重き敲可申付哉と相伺、其通御仕置被仰渡候事、

幼者處刑

〔天明集成絲綸錄四十八〕安永元辰年十二月

三奉行江

一十五歳以下之者、御仕置之儀、仕來之通、十四歳ゟ内之者を幼年御仕置申付、十五歳ゟ大人之御仕置可申付候事、

一幼年之者、敲之儀、十五歳以下ニ而も敲可申付事、

但御定書ニ、幼年ニ而致盗候者、大人之御仕置ゟ一等輕可申付と有之候間、敲ニ當リ候者を敲候而ハ、右御定ニ相當不致候、無宿ニ而無之幼年之もの、敲ニ當候者ハ、向後過怠牢可申付事、

右之通一統相心得、區々不相成樣可被致候、

十二月

牢庭敲

〔刑罪大秘錄〕敲御仕置之事

牢屋前庭ニ而、敲御仕置之例、享和二戌年、小田切土佐守掛リニ而、遠島申渡、出帆迄揚屋ニ差置候、濱御殿奉行支配元物書役小泉伊八外貳人、相牢之もの屆者之儀、幷着類取替、又ハ貰請候儀ニ付、根岸肥前守方江請取、吟味之上、壹人ハ重敲、貳人ハ敲御仕置ニ成、御仕置濟、元掛り江引渡シ、常例敲之通、懸リゟ撿使、與力、御徒目付立合も有之、

但場所は東牢と埋門際、堀井戸之中程、西を頭に致、此節西は明牢に而、東牢之内之者、見能樣に場所撰び候事と相見え候、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政五午年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一松田町吉五郎店亀吉、其外之もの共、牢内に而不屆之取計いたし候一件、

松田町吉五郎店　亀吉

右之もの儀、牢内名主之身分に而、同所之掟を背、相牢安五郎元藏江申含、入牢もの隱持參り候金子取上候處、凡四拾七八兩程、幷元名主に而遠島に相成候、四郎兵衛ゟ五兩貰受候分とも、牢内改之節は隱置、右之内九兩貳分と申僞、兩度に差出し、拾三兩は安太郎元藏、其外御赦、又は御仕置に相成候もの共江呉遣、五兩は申僞、牢番同心近藤忠三郎江預け置、其外當時行衛不知下男源助江差遣、鞘外格子ゟ竊に酒買入貰候代金に相拂、木綿單物壹、絹貳反は、同人幷木村榮三郎を頼、買入貰候代金に相渡し、其餘は給もの等に遣ひ捨、殘金幷筆墨其外、牢内法度之品々隱所持いたし罷在、剩牢敷板透間取繕候節、手傳可致と、與風存付とは乍申、鋸手元に有之候迚、囚人之身分をも不顧、貫挽割候節、被見咎、相止候とも、牢内をも不恐致方、淸藏申合、牢拔企候儀は、全同人申懸ケいたし候とも、右始末、名主之身分、別而不屆に付、於牢庭重敲申付、元懸り江引渡、

此儀御仕置附に、榊原主計頭申上候、去ル寅年岩瀬伊豫守町奉行之節、伺濟之趣に見合、伺之通於牢庭重敲申付、元掛江引渡、

朱書
評議之通濟

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政八辰年四月

先達而評議いたし被申聞候、京都町奉行掛り笹屋町五町目、菱屋源七父、足打源四郎事、源兵衛一件御仕置之内、博弈宿いたし候もの之地主地面取上之事、彼地仕來之趣、猶又相尋候處、地主、家主、別々に御咎申付候先例無之、地面建家とも一人之所持ニ付、家主之咎計申付候儀、前々より仕來之由ニ付、地面取上ニ不及候事、

一博弈いたし候もの敲之事

禁裏御座所之儀故、敲、入墨敲之ものは、前々より洛中洛外拂申付候仕來候處、其儘差置候而は、仕來にふれ候付、仕來之通、洛中洛外拂たるべく候得ども、左候而は博弈之御仕置、殊之外重く成候間、一同不ㇾ及ㇾ敲、定例之通り過料申付候事、

右之外者京師町奉行伺之通申渡候、此以後も京都ニ而、博弈御仕置之儀者、前書之趣ニ可ㇾ被ㇾ相心得候事、

〔德川禁令考後聚二十四行刑條例〕文化五辰年御渡

火附盜賊改大林彌左衞門伺

野州無宿なを初筆博奕いたし候一件　　野州無宿　なを

右之もの儀、重追放に相成候後も惡事不ㇾ相止、御構場所江立入、其上堀之内在村名不ㇾ存野田に而、百姓體之もの五六人手合に加り、廻り筒に而拾錢貳拾錢賭之鑿博弈數度いたし候段不屆に付、

五十日過怠牢舍之上重追放、

此儀御定書に、御構之地徘徊いたし候上惡事いたし候もの、入墨以上に可ㇾ申付惡事に候はゞ死罪、入墨に可ㇾ申付程之惡事無ㇾ之ば、前之御仕置より一等重く可ㇾ申付と有ㇾ之、此ものは御構之地江立入、廻り筒鑿博弈度々いたし候、御構之地江徘徊いたし、中追放に可ㇾ相成惡事いたし候ものに而、入墨之刑は無ㇾ之候間、自ㇾ本罪ㇾ一等重き御仕置、重追放は入墨又は敲候上重追放と之御定に見合、女は敲之御仕置先例無ㇾ御座、入墨は申付候例有ㇾ之候間、入墨之上重追放、

評議之通濟

晒 非人手下 叱 附

晒トハ、道路ニ露坐セシムルヲ云フ、磔、鋸挽等ニ處スル罪人ニ附加スル刑ニシテ、單ニ此刑ノミヲ科スルハ、僧侶ニ限ル、而シテ其刑場ハ、日本橋高札場ノ正面、東方ノ空地ニ於テ、方數十歩ノ地ヲ占メ、其周圍ニ杭ヲ樹テ繩ヲ張リ、其中ニ苫ヲ以テ小屋ヲ作リ、小屋內ニ筵ヲ敷キテ罪人ヲ坐セシメ、其背後ニ扣杭ヲ打チテ之ヲ繋ギ置クナリ、而シテ小屋ノ側ニ罪狀ヲ書キタル捨札ヲ建テ、非人ヲシテ之ヲ監セシメ、晒スコト凡テ三日ニシテ止ム、

又別ニ吉原町中ニ於テ犯罪人アル時、之ヲ其大門口ニ晒スコトアリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從二前々一之例

一晒　於二日本橋に一三日晒

元文五年極

但新吉原之者、所之義に付、晒に可レ成惡事致候はゞ、新吉原大門口にて晒、

〔舊記拾要集 六〕天和二年戌八月十一日、御用覺帳書拔、

一小山田彌市郎、野村內藏之助、天野十左衞門、江戸中引廻シ、日本橋ニ三日さらし、其上彌市郎、十左衞門は獄門、內藏之助ハはり付、氏家宗トハ牢屋ゟ直ニ日本橋江遣しさらし、其以後獄門ニ掛候ニ付、引廻候撿使此方與力薄田三左衞門、足立三郎兵衞、安房守殿與力大里貞右衞門、佐久間傳右衞門同心雙方貳拾四人罷出、如レ例引廻、日本橋ニさらし置罷歸、

札之文言

一此小山田彌市郎と申者、御尋之儀乍レ存早速不二罷出一、其上常々不作法者成故、如レ此引廻日本橋ニさらし、ごくもんニ掛ルもの也、〇中略

一朱鑓　十貳本 但雙方番所ゟ出ル

一もじり　四本　右ニ同断
一さすまた　四本　右ニ同断
一つくほう　四本　右ニ同断

〔憲教類典四ノ五評定〕享保八癸卯年二月

大岡越前守より承置晒しもの、儀ニ付書付

附紙

一晒者有之節ハ日本橋御高札場之向、東之方明キ地ニ、苫小屋を懸ケ、内に筵を敷、囚人並置、後に扣抗打しばり付晒置申候、尤前之方に繩をはり申候、
一捨札ハ囚人之前江建置申候
一番人ハ谷之もの罷出候、尤囚人之人數に應じ罷出右小屋之内に罷在候、
一囚人給物之儀、朝ハ牢屋にて給、夕飯ハ場所江牢屋より運び給させ申候、
一突棒、指俣、朱鐺、當番所ゟ出申候、
一囚人を再度五ツ時分出し候節、兩番所當番之年寄同心壹人、同同心壹人宛、都合四人牢屋江罷越、囚人を出させ、場所に差添參、晒候を見屆、番所江罷歸候、毎晩七ツ時囚人牢屋歸し候節も、右之通雙方同心罷出召連歸牢致させ候事、

〔舊記拾要集六〕享保八年卯七月日不知、御用覺帳書拔、

一此度之火附七人之もの、さらし場所之儀、先達而伺之通、
　日本橋、兩國橋、四ツ谷御門之外、赤坂御門外、昌平橋、
右五ヶ所ニ一日宛さらし可申候、科書札ハさらし候以後迄モ建置可申候、右之通ニ候得バ、町中引廻シ候ニハ不及候儀、七人之ものども御仕置場迄、牢屋より差越候節は、前々之通小旗を

も爲揃遣可申候、七人之もの火罪ニ申付候儀、品川歟、千住歟、右之內壹ヶ所ニ而、七人共ニ一同ニ火罪可申付候、

卯四月

〔德川禁令考後聚三十六 司利曹遣則〕磔ニ相成候もの、晒日數之事、享和二戌年

一晒之上、磔ニ相成候もの、晒日數之儀、先例區ニ候得共、以來ハ三日晒之積相心得、三日目ハ半日程も晒候上、直ニ御仕置之積リ、

一引廻し、晒、鋸挽之上、磔ニ相成候ものも、初日ニ引廻し、其翌日より二日晒、其翌日御仕置之積リ、」一

右之通、享和二戌年八月十八日、內寄合ニ而評議相決、

〔御仕置例類集三ノ十四〕寛政六寅年十一月

戸田釆女正殿御差圖　　板倉周防守掛

一伯州中山庄退休寺山內西來院儀退休寺取計之儀申立候一件

松平隱岐守領分豫州伊豫郡永田村華藏庵　看主　笑宗

右之もの儀、伯州中山庄退休寺白麟江末寺西來院より相懸り候出入、觸頭吟味ニ成候ニ付、承合等いたし度候間、龍穩寺役僧壽林江白麟面會之儀申込呉候樣微聞任相賴、壽林江申談、品川宿旅籠屋ニ而壽林白麟面會いたし、度々倶々罷越、飯盛女を酒之相手ニ致し、遊興之上及女犯、酒肴代等白麟ニ爲相賄候始末、旁不届ニ付、晒之上、觸頭江引渡、寺法之通可取計旨申渡、

○按ズルニ、附加刑ノ晒例ハ、鋸引磔等ノ各篇ニ併出セリ、

〔附〕非人手下

非人手下ハ、非人頭ニ下付シテ其籍ニ編入スルヲ謂フ、此種ノ罪ノ中ニテ、特ニ重キモノハ遠國ニ遣ハシテ、遠國非人手下トス、此刑ハ庶人ニ科スル附加刑ナリ、

非人手下方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例
一非人手下　穢多彈左衛門立合セ、非人頭江相渡、

非人手下制度

〔御定書百箇條〕男女申合相果候もの之事

享保七年極
一主人と下女と相對死いたし、仕損、主人存命に候はゞ、　非人手下

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

享保十一年極
一三笠附句拾ひ

寛保元年極
一取退無盡札買　家財取上　非人手下

〔天保集成絲綸錄〕百寛政元酉年八月

先達而書付帳面被差出候、無罪之無宿在留之分片付方、左之通可被取計候、〇中略

一非人手下ニ申付候儀、別紙之通可心得事、

一万石以上領分出生之無宿ハ、町奉行所ゟ先例之如く家來江相渡可遣候、尤帳外之もの候共、渡可遣事、〇中略

非人手下ニ相成候者江申聞べき旨

親又ハ可使者相果、俄ニ渡世を失ひ候者ニ候得バ、無據無宿ニ成候儀ニ付、非人手下ニ申付候間、以來少したりとも惡事など致間敷候、此上少したりとも惡事致し候はゞ、死罪ニ可申付候、心を改實體ニ精出し農業など心掛べし、最早無罪之者ニ候間、よく心得候得バ、よくもなる事ニ而候旨申聞べし、

彈左衛門江可為心得覺

非人手下ニ申付候者可成丈生業ニ取付候心だても直候樣ニ、精々可申敎候、農業ニ而も願候もの候はゞ可申出候、彌農業致し候もの出來候得バ、致世話候もの之手柄ニ而、御褒美之事も

非人手下例

可有之候、扨又此上少々ニ而も悪事有之歟、申付などそむき候はゞ、厳敷咎メ可申付候、盗體之儀少しニても有之候はゞ、其旨糺し、早速奉行所江可出候、右之通差出候はゞ、糺ニ不及申立候所を以、死刑ニも可申付候、廻之もの等召捕及吟味、盗悪事等猶又有之候はゞ、右之者御仕置申付候上、非人頭江も其咎可有之候、

右之趣ヲ以申合可有之候

八月

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政元酉年十一月

鳥居丹波守殿御差圖　　板倉周防守掛

一深川黒船稲荷社地ニテ三笠附ニ似寄候義興行致し候一件

深川永代寺門前東仲町嘉右衛門店卯兵衛親　惣右衛門

同所久右衛門町貮丁目治助店　半六

同所東平野町忠兵衛店柳榮母　くに

同所万年町三丁目徳兵衛母　たつ

右之もの共儀、惣右衛門、半六、くに、たつ、源六、乙次郎申勧候ニ任セ、棒引之紋紙賣歩行、銘々賣高ニ随ひ賃銭貰受候段不届ニ付、半六ハ家財取上四人共非人手下、

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政八辰年十二月

戸田采女正殿御差圖　　御勘定奉行 曲淵甲斐守掛

一無宿倉藏儀、同類申合盗致し候段申立候一件、　　無宿 倉藏

右之もの儀、容道方ニ罷在候節、手元ニ有之銭、五銭、拾銭、度々盗取欠落仕、上州上山上村名前不存酒屋ニ而も同様之始末ニ而、銭四百文餘盗取、又ハ盗賊ニ可有之と村役人共相咎候を遺恨ニ存、

其邊立廻リ、盗取候髮剃ニ而、鎮守祭禮之大鼓を疵付、被召捕候節、同村次郎助方江盗ニ入候も、此もの仕業ニ可有之と相尋候ニ付、夫々名差候はゞ、其もの共ゟ相分嚴敷吟味も受間敷と、無跡形儀共申立候段、幼年ものとハ乍申、不輕申掛ニ相當、旁不屆ニ付、五十日過怠牢之上、非人手下、

幼者處刑

〔御定書百箇條〕拾五歳以下之もの御仕置之事

寛保二年極
一拾五歳以下之無宿は、途中其外にて於致小盗候は、　非人手下

〔科條類典 下 六〕十五歳以下之無宿小盗いたし候もの例

戊○寛保二年　十月十日入牢　無宿　加七

右加七儀、龜戸町源右衛門悴ニ而有之候處、當八月出水ニ付助船ニ乘り、江戸江參候得共、源右衛門儀は繼父ニ而、常々當り惡敷御座候ニ付、宿江は不相歸、巾着切仲ケ間江入、兩國橋邊ニ而腰錢等盗取申候、右之通當り惡敷とて、親源右衛門方江は不相歸、無宿ニ成り盗仕候段、不屆ニ御座候ニ付、敲キ御仕置ニも可罷成候得共、幼年者ニ付、非人手下申付ル、

〔御仕置例類集 三ノ五〕寛政四子年五月

入墨之上非人手下

松平伊豆守殿御差圖　　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一武州不動岡村百姓甚助悴甚藏致盗候一件

遠山彥太郎知行武州埼玉郡不動岡村百姓甚助悴　甚藏

右之もの儀、親甚助方ニ居候節、賣溜錢取出遣捨、甚助叱り候迚致家出、其後百姓家入口戸明キ、又ハ建寄有之候處ゟ這入、木綿古袷壹ツ、錢壹貫文餘、其外食物等盗取候段不屆ニ付、入墨之上非人手下、

右御仕置附

右御定書ニ、拾五歳以下之もの御仕置ケ條之內、致盗候もの、大人之御仕置ゟ一等輕ク可申付と

晒之上非人手下

有之、此もの盗之始末大人ニ候得バ、入墨重敲ニ相當候間、一等輕入墨ニ而相當可仕處、親甚助ゟ勘當帳外之儀村役人江相願、地頭江も其段申達、未聞濟ハ無之候得共、迚も不見屆ものニ付、村方江不立入樣致度旨、今般吟味之上、甚助申立候儀も御座候間、拾五歳以下之無宿もの、途中其外ニ而致小盜候ハヾ、非人手下と有之御定をも見合、此ものハ戸明キ有之場所江這入候盜ニ而、途中之小盜ニも無御座候間、入墨之上非人手下、

三日晒　非人手下

〔御定書百箇條〕男女申合相果候もの之事

享保七年極
一雙方存命に候はゞ

〔御仕置例類集三ノ十〕寛政三亥年九月

町奉行　池田筑後守掛

松平伊豆守殿御差圖

一遊女その梅相對死申合候一件　新吉原町家持まよ後見清吉抱遊女　その梅

右之もの儀、當正月以來吉平ニ被買揚、相馴染候處、同七月九日夜、同人罷越追々金子遣拾、身分難相立、迚も存命可致所存無之自滅致候旨申ニ付、左候はゞ明十日夜一所ニ相果可申と相對死申合、書置致候迄ニ候得共、右仕形不埒ニ付、三日晒之上非人手下、

右御仕置附

右寶曆八寅年土屋越前守町方勤役中伺之上御仕置申付候、新吉原京町壹丁目甚右衛門店次郎右衛門抱遊女花の井儀、本材木町三丁目源助店清七方ニ居候傳十郎と相對死致候處仕損、傳十郎義ハ右疵ニ而相果、花の井儀ハ疵平愈致シ、傳十郎儀、花の井吭を突候後自害および、即死ハ不致、右疵ニ而相果候得共、傳十郎江花の井疵付候儀ニ無之候間、於日本橋三日晒之上非人手下申付候、その梅儀、吉平致自害候場所ニ不能在上ハ、縱令右疵ニ而相果候共疵平愈候病ニ而相果候共、於其所ニ品替候筋無御座、相對死申合候ハ無相違御座候間、右例ニ見合、三日晒之上非人手下、

遠國非人手下

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事
一遠國非人手下（享保十七年極）　遠國江可遣旨、穢多彈左衛門江申渡相渡、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事
一姉妹、伯母姪と密通いたし候もの（寛保二年極）　男女共遠國非人手下

〔御仕置例類集二ノ二十四〕文化三寅年御渡
大坂町奉行伺
一攝州天王寺村長七兄長左衛門を及殺害候一件、
　四天王寺領攝州東成郡天王寺村土堵町丸屋長左衛門同居娘　みつ
右之もの儀、長左衛門養娘ニ而、町人別ニ加り、長七ハ伯父ニ相當り候儀乍相辨同人と一旦密通いたし候段、別而不行狀之至不屆ニ付、遠國非人手下、
此儀長七ハ、養父長左衛門弟ニ而、此もの伯父之續ニ相成候段乍辨、右長七と密通いたし候ものニ付、姉妹伯母姪と密通いたし候もの、男女とも遠國非人手下と有之御定ニ而伺之通遠國非人手下、
　朱書
　評議之通濟

入墨之上遠國非人手下

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事
一離別之妻に疵付候もの（從前々之例）　入墨之上遠國非人手下に成候者、

〔科條類典下五〕かたわに成候程人に疵付、入墨之上遠國非人手下
　神田小泉町治郎兵衛店喜平次方に居候道心者　いきいわし善入
右之もの柳原松下町仁三郎と、致兄弟契約罷在候處、仁三郎儀、神田紺屋町代地久三郎と致懇候樣に見請候に付、遺恨に存、仁三郎久三郎を突殺シ、善入も相果可申と存、堺出刃庖丁に而、兩人江

叱制度

疵付候段、理不盡成仕形、其上久三郎手疵致ニ平愈ニ候上、指叶不ㇾ申、かたわに罷成候、善入儀御當地に差置候而は、仇をも可ㇾ仕ものに候間、享保十七子七月伺之上、入墨之上、遠國非人手下に申付候、

右之通御座候、以上、

八月　　大岡越前守

〔御仕置例類集一ノ十七〕文政二卯年御渡

日光奉行伺

一野州大澤宿百姓仲右衛門後家りよ、娘いく江無宿庄次郎手疵爲ㇾ負候一件、

日光御領野州河內郡大澤宿百姓吉兵衛方ニ居候無宿　庄次郎

右之もの儀、無宿之段ハ押隱、吉兵衛を賴、作日雇等いたし、藤吾世話を以、仲右衛門後家りよ聟養子相成候處、心底ニ不ㇾ應候哉、宿內江弘メも不ㇾ致、りよ幷妻いく仕向不ㇾ宜候ニ付、吉兵衛方江立戻り、いく江離緣狀差遣し候得共、蔑ニ被ニ取扱ニ候段心外ニ存候迚、吉兵衛方ニ有ㇾ之候鉈を持參り、りよ居宅裏口之戸窘ニ明ケ這入、人交りも難ニ相成ニ姿ニ可ㇾ致と、臥り居候いく面體江持參り候鉈を以、貳ヶ所疵爲ㇾ負、剩齒二枚迄打碎き候始末、素ゟ片輪ニ可ㇾ致心體ニ而剛勢成いたし方、いく疵所ハ平愈ニ相成候得共、上唇齒莖江付候故、口明キ候儀自由ニ不ニ相成ニ故、人並ニ應對難ニ相成、片輪ニいたし候始末不屆ニ付、入墨之上遠國非人手下、

附　叱

叱ハ、其罪ヲ叱責スルニ止ル、急度叱ハ、叱責ノ重キモノナリ此刑ハ庶人ノミニ科スルモノナリ、

〔御定書百箇條〕御留場之內にて鳥殺生致候者御仕置之事

從ニ前々ニ之例

一鳥殺生いたし候村方、幷居村、　　組頭　叱

叱例

〔御定書百箇條〕田畑永代賣買、并隱地致候者御仕置之事、

從二前々一之例　延享元年極

一田畑永代賣いたし候者　證人　叱り

貞享四年極　延享元年極

一質に取候もの、作取にして質置主、年貢諸役勤候分、　證人　叱り

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保元年極

一人之仕業と相見候寄子之變死を、不レ存分に致候もの、　所拂

但人之仕業と不二相見一致二變死一候を、不二訴出一分ハ、叱り、

〔御定書百箇條〕隱賣女御仕置之事

寛保三年極追加

一踊子呼寄、賣女爲レ致候料理茶屋等、　所拂○中略

同追加

一地主ハ　重過料

但地主其所に不二罷在一、他に罷在候はゞ、叱り、

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

享保四年極追加

一盜人を召捕、雜物取返し、内證にて逃し遣候もの、　當人名主　叱り

〔科條類典下　一〕元文二巳年十二月廿八日申渡

一武州埼玉郡羽生領今泉村定右衛門、鳥殺生吟味一件、

右村御捉飼場ニ而定右衛門鳥取候旨、同國騎西領外四ヶ谷村野廻り之もの、古澤鹿右衛門見出旨、御鷹匠頭ゟ申上候ニ付、吟味之上左之通申付ル、○中略

同村定右衛門親　彥右衛門

叱置

右は定右衛門鳥取候儀、強而差留不レ申ニ付叱置、

急度叱

〔御仕置例類集二ノ二十四〕文化二丑年御渡
佐渡奉行伺
佐州雑太郡鹿伏村　はま
一當時無宿吉五郎盗いたし候一件
右之もの儀、紛失物有之候はゞ、早速可訴出處、無其儀段不念に付叱、

〔御仕置例類集二ノ二十二〕文化八未年御渡
甲府勤番支配伺
一無宿榮藏盗いたし候一件
御代官野田松三郎支配所甲州巨摩郡中下條村淨土宗生蓮寺　智全
同矢橋松次郎支配所同州八代郡藤井村　藤右衛門
右之もの共儀、榮藏無宿とは不存候得共、藤右衛門任申、身元も得と不相糺止宿爲致候段、不行届不念ニ付叱、
此儀榮藏を止宿爲致候段は、同人身分請合候もの有之候故、右に不埒は無之候得共、村役人江も不相届迄之不念ニ付、伺之通兩人とも叱、
朱書
評議之通濟

〔御定書百箇條〕隱鐵砲有之村方咎之事
寛保元年極
右(江戸十里四方幷御留場)之外關八州
一隱鐵砲所持之村方、他所ゟ参り打候村方名主、組頭、　急度叱

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、
從前々之例追加
一三笠附、博弈打、取退無盡之儀、町内名主、五人組等訴出候はゞ、當人幷家主ハ御仕置に申付、地主ハ地面不及取上、急度叱、宿之兩隣、五人組、名主、一町内之もの不及咎、
但在方も左同斷

〔御定書百箇條〕科人爲立退幷住所を隱候者之事、

一元文五年極喧嘩口論當座之儀にて人を殺候もの

右科人之同類にハ無之、義理を以被頼住所を隱し、或ハ爲立退候分ハ急度叱リ可申事、

〔德川禁令考後聚十九行刑條例〕寬政十二申年

奉公人請人二重咎之事

身元も不紏請人ニ成、奉公ニ差出候奉公人、惡事致し候上欠落致し、右請人江尋申付、未尋出中、一件落着之節、右請人ハ身元不紏之咎等ニ而、過料三貫文申付候而ハ、同樣之一件ニ而、兩度過料ニ相成如何ニ付、以來右體之もの最初ハ過料三貫文申付、其後不尋出段之咎ハ急度叱置候積、都而最初之不埒と、不尋出段之不埒ニ而、二重之咎ニ可相成もの、右之通二度目急度叱り置可申事、

右四月十八日、於內寄合申合候事、

〔御仕置例類集一ノ二十〕文化十三子年御渡、

奈良奉行伺

一和州庵治村龜之助儀、同國高田村伊右衛門を及打擲、右疵ニ而同人相果候一件、

柳生但馬守領分和州山邊郡庵治村　庄屋　儀兵衛

外一人

右之もの共儀、伊右衛門江龜之助疵爲負候節之儀ハ不存候とも、跡ニ而右次第及承り候はゞ、其段早速其筋江可訴出處、吟味ニ相成候迄等閑ニ罷在候段、役儀も乍勤不束ニ付、儀兵衛儀ハ急度叱、利兵衛儀ハ叱、

此儀可訴出儀を不訴出不念迄ニ付、伺之通、儀兵衛ハ急度叱、利兵衛ハ叱り、

朱書評議之通濟

〔類例秘録 二〕榊原主計頭掛 文政元年寅四月

一攝州伊予著村六左衛門鐵炮被盗候一件、幷與三五郎欠落取計伺、　島田帯刀出

書面與三五郎義、今以行衛不相知上ハ、尋申付被置候もの共、度々日延之上不尋出段不埒ニ付、重立候ものへ、過料錢三貫文申付、其外之もの共ハ一同急度叱り置、與三五郎行衛ハ永尋申付、勘左衛門義貸渡置候鐵炮、一旦與三五郎ニ被盗取候段、畢竟心付方等閑故之義、不埒ニ付急度叱り置、一同證文取之被差出、且過料錢ハ、三日之内、其方役所江取立、御勘定所江可被相伺候、以上、

寅四月

〔類例秘録 一〕石川主水正掛 文政七申年七月

一甲州十日市場村出火見分吟味伺　吉川榮左衛門出

書面久八儀、兄久右衛門同居罷在候上ハ、火之元之儀精々可入念處、灰小屋ゟ及出火多分之類燒有之段、平日心付方不行届等閑故之儀、不埒ニ付、手鎖申付、久右衛門も村用ニ罷出居、留守之儀とは乍申、兼而申付方不行届段不埒ニ付、急度叱り、且村役人幷火之元之五人組之もの共ハ、平日心付方不行届不埒ニ付、村役人共ハ一同急度叱り置、五人組之もの共ハ押込申付、以來火之元可入念旨申渡、證文取之差出、久八ハ日數五十日、五人組之ものハ、二十日相立候はゞ、不及伺可被差免候、以上、

申七月

古事類苑

法律部三十九

下編上

預

手鎖

古事類苑

法律部三十九

下編上

預

預ニ種々ノ別アリ、大名預ハ、卽チ武士預ノコトニテ、旣ニ之ヲ言ヘリ、德川氏ノ時ニ至リ、囚人ヲ大名ニ預クル時ハ、月番老中豫メ其意ヲ大名ニ告ゲ、大名ヨリ其家僕數人ヲ評定所ニ遣ハシテ之ヲ受ケ、肩輿ニ載セ、警固シテ其邸ニ至ル、評定所ニ於テ訊問スル時ハ、又數人ニテ之ヲ警固シ、評定所ニ至リテ御徒目付ニ付ス、其警固ノ人數、及ビ待遇等ハ、貴賤ニ由リテ差異アルナリ、永預ハ、終身他家ニ禁シメ置キテ赦サズ、

町預ハ名主月行事ニ下付シ、村預ハ村役人ニ下付シテ禁シメ置クナリ、

親類預ハ、犯罪人ノ幼者、癈疾者等ニテ、本刑ニ處スルコトヲ得ザル時、其親族ニ下付シテ禁シメ置キ、生長及ビ平愈ヲ待チテ本刑ニ處スルナリ、

宿預ハ訴訟ノ爲ニ江戶ニ出タル者ノ私曲アルニ由リ、徑チニ其旅人宿ニ保管セシメ、逃脫セシメザルヲ謂フ、

非人小屋預ハ、非人ノ小屋ニ預ケテ、非人ト群居セシムルモノナリ、

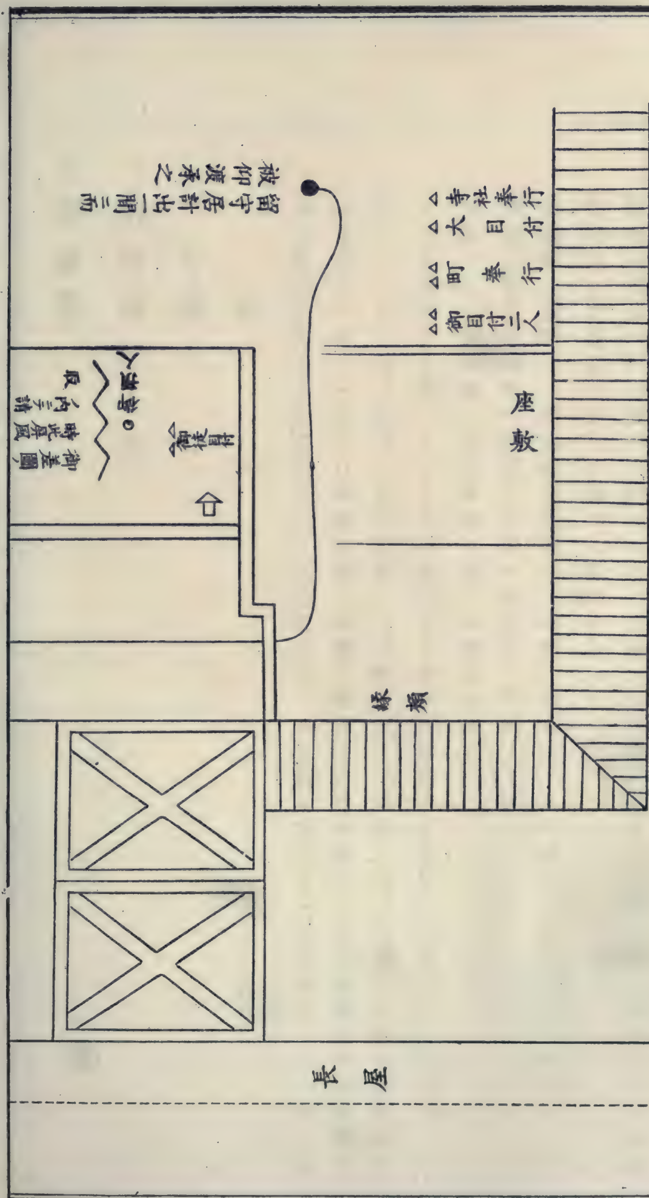
罪人ヲ預カリシ者、其罪人法ヲ犯ス時ハ、爲ニ處罰セラル、

大名預

〔官中秘策〕八御預ケ人有之時、評定所式法之事、

一御預ケ人有之時ハ、前日、月番之御老中江御預リ人之留守居一人被召呼、御內意有之候事、

〔憲教類典　四ノ五　評定〕　御預人有之時評定所式法之圖



請取ノ時大事ノ
御預人ノ時ハ衣裝
ヲキセカヘル

跡ニ殘此所ニテ御徒
目付差圖御小人方
ヨリ刀脇差受取金
具計改ル

廣間

其外宗ノ徒士物頭目
付足輕呼ニ來ル杉門
居此所ニ相待其ヨリ
人數ヲ呼入ル并乘物

御預人

此所迄相伴之此戸ヲ明ケ下ニ居ル
物頭目付ヲ呼上ル三人ニテ乘物ニ入ル
此時懷中ヲ改ル

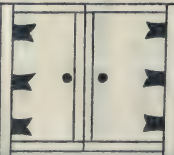
式臺

白洲

徒士一人

表門

留主居 草履取
刀持 一人



一當日御差圖之場所江人數差出し、評定所より之左右を相待、留守居之輩ハ若黨壹人草履取壹人被召連、評定所玄關迄罷越御徒目付衆江相達候事、

一右之節及斷、徒士三人評定所之內江入置、御預ヶ人請取之節、少し前ニ及斷、乘物幷陸尺數人、物頭壹人、目付壹人、馬廻り侍壹人、步行士三人、足輕五人、玄關際迄入置之、外ニ仲間貳人、足輕壹人跡ニ殘し置、是は刀箱持なり、

一万事御徒目付衆江伺之、則御徒目付衆より差圖有之、廣門ゟ四間奧迄罷越、寺社奉行衆を始、其外御役人列座ニ而被仰渡、長口上なる故書付、ことの樣子一々懷中硯ニ而書付、懸御目時、委細之儀御加筆有之候事、

一其後御徒目付同道ニ而、御預ヶ人居候處迄參リ候得バ、御徒目付被引合、召連同道可仕旨申渡候ニ付、其時椽頰通リ北之方へ行當り、式臺際二枚戶之處迄同道致、（大事の御預人之時は、脇ざしをぬき置、）此處ニ而式臺有之、目付呼出し、三人にて乘物へのする、此時御徒目付差圖無之候得バ伺之、御預ヶ人の衣類、其外懷中鼻紙等迄改之、乘物ニは錠をおろし繩をかけ、留守居は相殘、刀脇差改之請取候而、乘物之跡ニ爲持候事、

一御預人有之旨御內談之時、人數積リ人數置所之儀伺之事、

一御預人之家來、途中ニ而逢申度旨を申、又ハ金銀など遣し申度由申事有、其時惡敷答ズ、何某の御預りたる故、屋敷江追而參べき旨申斷、近邊江寄附申間鋪候事、

一御門杯通リ候節ハ、先達而斷可申事、

一路次之人は拂ニ不及、但御三家杯御通リ之節ハ、留守居之輩先達而御斷ニ可及事、

一請取相濟、御月番御老中江相屆候事、

一御預ヶ人屋鋪江着候得バ、其儘行水致させ、衣類帶等迄著替させ可申事、

一大切之御預ヶ人之節ハ、小路々々等にて見隱しに夫々に人を差置可レ申事、

一朝夕馳走ハ其人體ニよるべし、相伴人は無レ之事、

一御尋之儀有レ之、御預ヶ人評定所江被二召呼一時は、請取候時之人數ニ而、評定所玄關迄圍ひ參り、御徒士目付江相渡可レ申事、〇中略、

御預ヶ人有レ之時、大體請取人數之覺、

一物頭羽織騎馬貳人　一大目付同壹人　馬廻り士同三人　留守居麻上下騎馬壹人　一馬廻り士七八人、

是ハ馬を爲レ牽、羽織計ニて乘物を取廻し供をする、

一歩行士五六人　一足輕六拾人

對之羽織、棒ハ不レ殘、但壹ツにかいげて、跡に持すべし、

一刀箱、乘物之跡ニ持すべし、　一鎗、騎馬の外へ拾二三本、　一牽馬、九疋、或ハ拾疋計、

右揔而御預ヶ人ハ當人之身上、又ハ罪之輕重にて預り人之身上も高下有レ之事故、支度等ハ豫メ定メがたしといへども、此規格を以樣子を先知すべし、〇又見二憲敎類典一

〔御當家令條三十〕大目付衆口上之覺〇中略

一御預り人有レ之衆、御預人を結構に會釋之儀相聞候、御科メ有レ之付而、御預之處、却而馳走ヶ間敷儀、其身爲にも不レ罷成、飢寒さへ凌候得ば能候條、向後輕會釋可レ被レ申事、

右二ヶ條は急度仕たる儀無レ之候得共、より〳〵可二相達一旨、御老中被二仰渡一候ニ付、乍レ序申渡候由、

八月

右は高木伊勢守宅江、諸留守居招レ之傳二達之一、

〔當代記〕慶長十七年三月廿九日、大八〇岡本被レ行二罪科一仰、大八ガ云、自二大御所一〇徳川家康長崎唐船ノ糸、彼

是ノ使被遣、長谷川左兵衛ヲ有馬修理闇打ニ可仕由、大八へ申合候ツル由ヲ白狀致候間、修理爲四人則被預大久保石見、其後甲斐國被遣、郡内息左衛門ハ不可懸此科ノ由ノ玉フ、本領令安堵如前ニ長崎居住、

〔慶長記〕村越茂助に御あづけ、大津のやぐらに、小西〇行長と安國寺〇惠瓊を置申候、小西ハ座敷の眞中に、くびがねをはめられ、番の者と咄、安國寺ハつぎに障子をたて、其内に置申候、

〔藩翰譜大久保四中〕忠隣十一歳にて初て仕へしより、奉公の勞つもりて、六十二歳に及び、忽に罪蒙れる身となりぬ、〇中略抑去年〇慶長十八年忠隣が養女を以て、山口伊豆守重信が妻とす、かねて兩御所〇德川家康、秀忠、の御聽にも達せず、執事の身として、始に憲法を犯す、其罪殊に輕からず、先づ忠隣が身は、其所領を收め、近江の地に移され、井伊兵部少輔直勝に預られ訖んぬ、子息右京亮、同主膳正二人、酒井備後守忠利を預人として、武州河越の城に召禁らる、

〔翁草四十六〕由井正雪事

一八月〇慶安四年二日、於評定所左之通被仰渡、加藤長左衛門、齋藤九郎右衛門を京極主膳正へ御預、小川六左衛門を三浦志摩守へ、金丸權左衛門、岩切兵左衛門を土屋民部へ、畫師彥兵衛を堀大學へ御預也、

〔一話一言六〕由井正雪事

慶安四辛卯年八月十二日

一今度油井正雪構虛言、於江戶浪人共進退可相濟之旨申ニ付而、令同心之者六人、於評定所御預、所謂

土屋民部へ　金丸權左衛門
三浦志摩守へ　河内山八郎兵衛
戶田主膳へ　小川六左衛門
京極主膳へ　齋藤九右衛門
建部内匠へ　加藤長右衛門
堀大學へ　繪師彥兵衛

一右之外、正雪雖相催不同心浪人十五人ハ、可為其身心次第之旨也、

〔憲教類典二ノ三國替所替〕寛文六丙午年

御預之覺

一高國〇京極次男　京極万吉、七歳　右ハ松平新太郎光政

一同三男　京極杢之助、五歳、　右ハ松平相模守光仲

一同四男　京極松之助、三歳、　右ハ伊達遠江守宗利

一同女子　二人十九歳十六歳　右ハ松平龜千代

〔憲教類典二ノ三國替所替〕寛文十庚戌年五月十五日

甲府殿家老兩人御預申渡覺

太田壹岐守、島田淡路守義、甲府殿江為家老役被為附、万端御為宜敷樣ニ守立可申旨被成御意候處、其身共之威勢を存、甲府殿最早年たけられ候に、我儘成仕形共、不屆千万被思召候、急度死罪にも雖可被仰付、甲府殿達而用捨ニ付而、左之通被成御預之旨、上意之趣、高木伊勢守、森川小左衛門申渡之、

立花左近少監江　太田壹岐大夫　同次男次郎大夫

松平淡路守江　太田十左衛門壹岐三男　同惣大夫

松平大膳大夫江　島田淡路　同孫助

寛文十年庚戌五月十五日

〔憲教類典二ノ三國替所替〕寛文十二壬子年四月三日

伊達兵部少輔、田村隱岐守、評定所江被召之、被仰渡覺、

先松平陸奥守儀、一門中幷家老共願隱居被仰付之、常陸奥守依為幼少、兵部、隱岐守後見仕、家中仕

置等家老共遂₂相談₁、陸奥守可₂守立₁之旨被₂仰付₁候處、兵部、隱岐守不和、畢竟原田甲斐不義仕合故、家中仕置不₂宜、每年刑罪之族數多有₂之、家中不₂成₂安堵之思₁儀、兵部事ハ、前代之樣₂子乍₂存知₁、不屆之仕合被₂思召₁、松平土佐守江御預被₂成候₁、○中略御詮之趣戶田伊賀守申₂渡之₁、大岡佐渡守渡邊大隅守宮崎助左衞門列座、

一伊達市正事、父兵部御預ニ付、小笠原遠江守江被₂召預₁之旨、大岡佐渡守申₂渡之₁、

〔鳩巢小說上〕一山鹿甚五左衞門ト申浪人、淺野內匠頭殿ヘ御預、甚五左衞門父母妻子モ、內匠頭ドノヘ御アヅケナサレ候、甚五左衞門ト父母妻子一所ニ置候事、無用ト仰渡サレ候、內匠頭ドノ知行所ノ內、三所ニ禁籠ノヨシニ御座候、右ノ樣子爰元トリサタ御座候、爾トシレ不₂申候樣子、前田帶刀ドノ屋敷ヘ御出、御物語ニ御座候、肥後守殿、幷御老中仰立ラレ候ハ、今度聖敎要錄トヤラン申候、甚五左衞門作ノ書物板行仕、弟子中ヘツカハシ候、其書ニ曾子ヨリ朱子マデ誹謗仕、千載不傳ノ道ハ、我有ト書申候、其上殊ノ外ナル勝手貯御座候、弟子二百人バカリ不斷出入仕候、右體ノモノニ候ラヘバ、イカヤウナル義可₂仕モ不₂知、曲モノニ付、御預ノ由ニ御座候、恐惶謹言、

十月三日　脇田九兵衞

齋藤中務

前田對馬サマ

奥田因幡サマ

今枝民部サマ

〔常憲院殿御實紀四十六〕元祿十五年十二月十五日、去年營中にて、吉良上野介義央を刄傷したるにより、死をたまひし淺野內匠頭長矩が家臣、大石內藏助をはじめ四十六人の輩、上野介義央を主の讐なればとて、昨夜吉良が本所の宅に夜討し、義央が首をとり、其子左兵衞義周に手負せ、吉

良が家人十六人切殺し、二十人に手負せ、のこりなく引取、亡主の菩提所芝泉岳寺にいたり、義央が首を亡主の墳墓に手向、さて後その黨中吉田忠左衞門、富森助右衞門兩人を、大目付仙石伯耆守久尙がもとに使し、我等亡主の遺恨を散ぜんがため、此年月心身を苦しめ、其志をば達しき、今にいたりては、たゞおほやけの御刑法に身をまかせ奉るよしを申出ぬ、よて伯耆守久尙が宅に、內藏助をはじめ、かの輩を呼よせ、目付鈴木源五右衞門利雄、水野小左衞門守美會し、內藏助はじめ十七人は、細川越中守綱利に、その長子主稅をはじめ十人は、松平隱岐守定直に、岡嶋八十右衞門はじめ十人は、毛利甲斐守綱元に、間十次郎はじめ九人は、水野監物忠元にあづけらる、

〔一話一言 二十一〕吉良左兵衞御預の事

一元祿十六年未二月四日、九時、評定所俄御用ニ而罷出候所、吉良左兵衞年十八、荒川丹波守、猪子左京大夫同道ニ而被出候、父上野介義、淺野內匠頭家來共ニ被討候ニ付、左兵衞義領知被召上、諏訪安藝守へ御預ヶ被成候由被仰渡、安藝守家來澤市左衞門、茅野忠右衞門、加藤平四郎に渡被遣候、尤左兵衞大小鼻紙袋共ニ安藝守家來三人へ御徒目付相渡申候、

〔嘉永雜錄 二上〕近藤重藏

近藤重藏、猛勇傳と云寫本有、此人元ハ御先手與力也、蝦夷松前の働にて、小普請江御取立、永々御目見と成、其後御書物奉行、大阪破損奉行被仰付、勤役中三ヶ條之御不審申披なくて差扣也、其三ヶ條と云へ、御役宅二階作りにして、御城之方ニ當りたる生垣、又は樹木之茂りをすかし御城より高樓見通しになりたる事、他國泉州堺町家へ參り、夜泊り之事、また高官の息女を妾にいたしたる事、又目黑白金抱屋敷にて、富士山を拵へ、地續之百姓半之助夫婦伜林太郎夫婦次男忠兵衞五人を、伜富藏殺害し、仍富藏ハ遠島、重藏ハ差圖ニ而分部左京亮へ御預ヶ、江州大溝にて死す、屋敷之內ノ洞穴ニ甲冑着たる自身之石像を造る、寺社奉行方尋之書付にて申達す、夫成ニ而御沙汰なし、是文政五午年也、文政九戌年十月六日、於評定所、大目附、町奉行立合ニ而申渡、文政十二年丑、大溝ニ而死、著述數多、金銀圖錄も同作也、

〔續泰平年表 二〕天保十二年六月十日、小十人本多左兵衞組 大野權之丞御仕置、其方儀、御政務筋に拘り不容易事共彫刻いたし、本屋伊助

江、相渡遣候段、不屆之至、依之九鬼式部少輔江御預被仰付候、此一件は泰平年表、及殿居嚢、青標紙等著述之罪科と云、(中略)同年九月に至り、於丹後綾部病死、卽撿使御徒目付生駒藤藏、満田作内彼地江相越、

〔嘉永明治年間錄 七〕安政五年十二月廿日、京都ヨリ囚人鵜飼吉左衞門等十一人江戸ニ著ス、

水戸殿家老民部事鵜飼吉左衞門、同人悴幸吉、鷹司殿家來小林民部權大輔、同家來兼田伊織、同家來三國大學、　右五人網乘物　京都木屋町三條上る大坂町、米屋久助借家宇喜田一蕙、同人悴松菴、松平丹波守領分、信州松本町三丁目、堤屋茂左衞門、同人宰領源右衞門、三河町三丁目爲次郎店伊三郎寄子淸七、烏丸通下長者町上る、小松屋半兵衞借家儒者池內大學、　右六人丸駕籠、都合十一人ハ榊原式部大輔、松平出雲守、毛利安房守等へ御預けに相成候、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年正月九日、京師ヨリ囚人藤井但馬、賴三樹三郎等八人江戸ニ著ス、

京都町奉行より江戸町奉行石谷因幡守御役宅へ囚人八人今九日着す、西園寺殿御家來藤井但馬、有栖川宮御家來飯田左馬、三條殿御家來因幡守悴森寺美濃守、烏丸御池上る町借家浪人梅田源次郎、　右四人小笠原左近將監へ御預け、

靑蓮院宮御家來伊丹藏人、同山田勘解由、鷹司殿御家來高橋兵部大輔、河原町三條上る夷町、丹波屋てる借家儒者賴三樹三郎、　右四人阿部伊勢守へ御預け、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年三月十日、京都ヨリ囚人御倉小舍人等十三人江戸ニ著ス、

京都より囚人十三人江戸着地下衆御藏小舍人山科出雲守、久我殿御家來春日讃岐守、一條殿御家來入江雅樂頭、若松木工頭、京都東山淸水寺地中成就院信海、三條殿御家來森寺因幡守、丹羽豐前守、富田織部、常州水戸領岩城郡入野村長谷寺弟子知順、同村鄉士横須賀次郎左衞門事、奧田隼人、同村百姓峯十、療病院空萬、近衞殿老女村岡七十二歲　右十三人の者、松平丹波守、岡部內膳正、加藤出羽守、伊東修理大夫の四家へ御預け、

〔翁草五十四〕濃州郡上噪動、幷金森家邑除大略、

金森家の苛政數々令露顯ニ仍、寅九月、〇寶曆八年金森兵部少輔賴錦指扣仰付られ、〇中略同十月廿九日、於評定所左之通被仰渡、〇中略

本多長門

其方儀、金森兵部少輔領分之儀、大橋近江守へ賴候儀無之候得共、右領分之儀、兵部少輔物語ニ而承候趣を最初近江守へ申達候儀、具ニ尋之度々、右體之義決而無之旨相陳、於評定所御尋有之、今更存出候旨申之、兵部少輔ゟ近江守を以、青木次郎九郎江賴遣、爲取計候儀、最初ゟ其方存罷在、右噂幷近江守へ兵部少輔致面談度旨申候節之義迄申通と上聞、駕籠訴訟吟味伺書、幷答書、役儀之節、評定一座へ右存居候譯可申談處無其儀、剩先達而兩度迄御尋之節、勤柄之儀も思召、格段之御尋方有之處、近江守へ賴候儀無之、噂等申候儀も無之旨相違之儀共申之、再應相尋之節ニ至、存出候旨申候段、御後闇儀、重き御役をも相勤候身分ニ有之間敷儀、重々不屆之至候、依之領地被召上松平越後守へ永御預被仰付候、

〔翁草百三十六〕小堀和泉守亂行邑除

申五月〇天明八年六日、於評定所申渡、寄合出席、夕七半時揃

評定所一座

立會

大目付　松浦和泉守

御目付　桑原善兵衞

被仰渡、左之通、

小堀和泉　申四十九才

其方儀、伏見奉行勤役中、彼地町人共出訴之儀有之ニ付而、右訴狀之答書被仰付候處、彼是不取締

町預

成趣ニ付、先達而御役御免被成、追々被遂御吟味處、借用金返濟之手段ニ、支配之町方の者へ、賴母子無盡之儀家來共相企候を承屆、其分ニ致置、且又金子借受候儀、組與力同心等へ爲取計、幷濱地子銀取立之儀ニ付、不束成取計致、與力同心且家來共右謝禮金受納致候內、勝手入用ニも差加候由、右體不埒成儀を、家來取計ニ打任セ置、其上町人共へ無故苗字差免、又ハ年來立入候ものニ候迚、支配之町人方へ度々相越饗應を請候儀共、奉行職之第一有之間敷義、不行跡之至ニ候、殊更伏見御役屋敷惣圍之內、北西之門、番人差出、夜分ハ出入を改來候處、御役間も無之、明放ニ致し、番人相止候段、取〆リニも拘候儀ヲ、一己之存寄ニ而取計候儀共重々不埒之次第ニ思召候、依之領知被召上、大久保加賀守へ永ク御預被仰付之、

小堀和泉

其方家來共無罪之もの路頭に迷ひ候儀、可爲難儀ニ付三ヶ年之間身分片付候迄ハ飢渴凌候爲扶助之義、御手當有之事ニ候、

和泉嫡子
小堀主水　申十九才

父和泉不屆之品有之ニ付領知被召上、大久保加賀守へ永く御預被成候、依之改易被仰付之、

大久保加賀守家來
成見彌右衛門
吉田清馬
小川左一右衛門

小堀和泉儀、加賀守へ永く御預被成候、

〔御仕置裁許帳〕主人殺者幷從類

貞享四年卯六月十九日

壹人八左衛門　是ハ麻生櫻田町四丁目佐兵衛店之者、此者僉儀之儀有之、今日召寄、手鎖を懸家主五人組預ヶ遣ス、

壹人小兵衛　是ハ右八左衛門弟麻生櫻田町貳丁目太兵衛店市兵衛下人、此者僉儀之儀有之ニ付、今日召寄、手鎖を懸、家主五人組ニ預ヶ遣ス、

右之八左衛門、小兵衛兩人共ニ、主殺市兵衛從弟ニ而有之候間、遂僉議候處、同姓之從弟ニ而ハ無之、母方之從弟成ル故、同年八月十三日、死罪を免シ、手鎖赦免、

〔憲教類典四ノ六評定〕元文四己未年正月

勝浦太郎兵衛〇中略

去月廿二日ゟ安治川に三日さらし、廿五日死罪獄門被仰付旨被仰渡候、

太郎兵衛妻

同人養子長太郎〇中略

十六歲

右六人増江橋道三丁目表家に罷在候處、太郎兵衛牢舍被仰付候節ゟ町預ニ成、番人附居申候處、〇下略

〔科條類典下七〕新吉原ニ而、自害仕損じ候者を打擲致し、又は殺候樣ニ致差圖候者之事、〇中略

申閏七月十九日　新吉原町京町壹丁目名主　庄左衛門

同斷　同町佐左衛門五人組　三右衛門

同斷　右同斷　五兵衛

同斷　右同斷　七兵衛

同斷　同町惣七店喜平次悴　惣七

同斷　江戸町二丁目自身番所脇住居之もの　權左衛門

同斷　京町壹丁目佐左衛門下女　まつ

同斷　同町遊女屋　佐左衛門

右之者共、先達而入牢申付置候、通三町目三四郎召仕源助吟味一件之者、右之内三右衛門、五兵衛、七兵衛、〇此間恐脱ニ惣七二字、權左衛門、まつ、佐左衛門儀、一通り吟味相濟候ニ付、名主月行事共江預ヶ遣し候間、可出牢者也、

申八月三日

〔科條類典下四〕寛保元酉年六月

御代官長谷川庄五郎伺

飛州高山町山崎十郎右衛門、幷同町傳七、下岡本村宇右衛門方江忍入候、盗賊吟味一件之内、

酉三月十八日村預申付置候　飛州大野郡下岡本村百姓　宇右衛門

右同斷　同村名主　吉四郎

同同斷　同村百姓　長八

右宇右衛門、吉四郎、長八儀、去申十月廿七日夜、宇右衛門土藏之内江、盗人忍入候を聞屆、三人迄戸を立込置、吉右衛門名乘候上は、外貳人も承屆可申出儀に候處、盗人三人之者達而用捨致呉候樣申ニ付相談仕、紛失之品無之故、逃し遣候旨申之候得共、吉四郎儀、役儀も相勤候處、其段不申出、宇右衛門、長八任相談、内證に而取計候段、不埒に相聞申候、依之右之者共村置に申付置候、

〔御仕置例類集三ノ十〕寛政三亥年三月

鳥居丹波守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一野州高橋村ニ而右村番非人權七江爲手負候同國中福良村元百姓多次郎一件

中西主水知行野州都賀郡中福良村　元百姓　多次郎

右之もの儀、一旦村方を立退、其上立戻り罷在候內、酒狂之上、帶し候脇差ニ而番非人權七江疵付候段不埒ニ付、脇差取上急度叱置、村役人江引渡遣し、此上地頭江相願、村方人別ニ入、農業出精、百姓相續可致旨申渡、

但取上候脇差ハ、村役人江相渡、爲賣拂、代銀權七江爲療治代差遣候樣申渡、

右御仕置附

右帳外之身分ニ而、內々村方江立戻罷在候ハ村役人共承屆差置候間、此者ニ强而不埒も有御座間敷、酒狂之上當非人權七江疵付候科、重々御座候處、御定書ニ酒狂ニ而人ニ爲手負候もの、疵被付候もの手負次等療治代爲出可申ト有之候得共、此ものハ一旦村方を立退、未人別ニも不加、去ル申年ゟ組頭久右衞門預り居候、潰百姓屋敷明家ニ罷在、村方農業之手傳致、其日を送候ものニ付、可賣拂諸道具も無之、療治代難差出身分ニ御座候間、酒狂ニ而人を致打擲候もの療治代難差出ものハ、諸道具取上、打擲ニ逢候もの江可爲取、諸道具無之身上之ものハ所拂と有之、御定に准し、所拂ニも可有御座哉ニ候得共、左候得バ如元之無宿ニ成、村役人歸住之儀相願候詮も無御座、一體野州之儀ハ、人少之場所ニ而、先達而被仰渡候御書付ニ相當候國柄ニも御座候間、再應勘辨仕候處、權七江疵付候脇差ハ此もの所持ニ相違無御座候間、右品取上、村役方ニ而賣拂、右代銀療治代として權七江爲相渡、一旦村方を立退候儀も御座候處、急度叱置、村役人江引渡遣し、此上地頭江相願、村方人別ニ入、農業出精、百姓相續可致旨申渡、

御勘定奉行　根岸肥前守掛

（御仕置例類集三ノ六）寛政五丑年九月

太田備中守殿御差圖

一越後國三條町ニ而、無宿藤藏致盜候一件、

川崎平右衞門御代官所越後國蒲原郡笹岡町百姓　津右衞門娘　のぶ

右之もの儀、盗賊とは不存由ニ候得ども、無宿三平と密通之上、同人江附添所々立廻リ、殊ニ三平申旨ニ任セ、盗物とハ不存候得共、出所不知品度々致質入候段不埒ニ付、笹岡町村役人江引渡、三十日押込、

右御咎附

右去ル戌年、手限伺之上御咎申付候、作州久世村和三郎女房その義、夫和三郎盗賊ニ相加リ配分貰ひ請候儀と乍心付、風呂敷壹、丁銀四枚、多助方江持參、同人女房りん江預、取隱候段、夫之儀とは乍申、不埒ニ付三十日押込申付候例ニ見合、村役人江引渡三十日押込、

〔公裁秘錄 二〕

親類預

一村預之もの病死取計方之事

公事方奉行所ニ而吟味中、村預歸村申付置候もの、致病死候時、支配御代官、又は領主地頭ニ而、致撿使候段、申立候はゞ、奉行所ゟ別段撿使は不致、且御代官、領主、地頭之撿使は不請、村方ゟ心得違ニ而、早速葬候段申立候得ば、察度申聞、心得違之取計いたし候旨之書付計爲差出、聞届遣、奉行所ゟ撿使は不致事之由、石川左近將監從來之取計振ニ有之候、

〔享保集成絲綸錄 四十三〕寶永六丑年二月

覺

一御預者有之面々ハ、かろき者之儀をも、其預り主ゟ書付可被出候、

一父親類等江御預差扣させ置候類、是又其向々より書付可被出候、

一親類之儀付、又ハ元奥向相勤候面々、自分遠慮と申ニ而無之差扣相愼罷在候者をも、其向々より書付可被出候、

右之通可被相達候

〔御仕置例類集 三ノ七〕寛政二戌年六月

松平和泉守殿御差圖

御勘定奉行 曲淵甲斐守掛

一武州騎西町善能寺門前ニ罷在候旨申立候勘太郎駕籠訴致候一件

秋元但馬守領分武州埼玉郡騎西町善能寺門前組頭安兵衛店ニ罷在候旨申立候

當時無宿盲人 勘太郎

右之もの儀、先達而女房もよ再縁之儀ニ付、元仲人伊兵衛差障候迚、脇差を拔伊兵衛江疵爲負、舅孫八取押候節、同人江も疵爲負逃去、其後西ノ谷村長五郎店ニ罷在候砌、左膳夫婦を差置、左膳修行ニ出不立歸ニ付、尋呉候樣いせ任申所々承合候內、左膳を尋出連歸候處、いせを離緣いたし候旨申聞、離緣狀相渡賴候迚、懷姙ニ而罷在候いせを引受致出產候後、出生之悴を召連逃去候處、實珠花村權六方ニ罷在候由を承、妻子ニ無相違段申聞、權六江證文相渡、兩人を請取連出、左膳ゟ離緣狀請取置候間、女房ニ可相成旨申聞候處、得心不致、右門を連れいせ逃去候を、又候權六方ニ囲置候儀ト相疑、いせを女房ニ致度心底ゟ事起、無宿之儀ハ押隱、住所等迄ハ取拵、權六不法之取計有之趣、品々跡形も無之僞之訴狀を以、駕籠訴いたし候段不屆ニ付、弟次郎助江預ヶ居村外猥ニ徘徊致間敷旨申渡、

右御咎附

右孫八江疵付候得共、元舅江疵付候者之御定ハ無御座、殊疵所平愈致シ農業渡世之障ニ無之間、孫八幷伊兵衛江疵爲負候不屆は療治代ニ相當、權六江僞之證文相渡候段ハ手鎖程ニも可有御座候處、權六不屆之取計有之趣、跡形も無之僞之訴狀差出候段、重々之不屆ニ御座候得共、是以遠島已上之科ニは無之一體之科を束、輕追放ニ而も可有御座候處、盲人御仕置之儀、遠島追放等ニ可成科ハ親類江預ヶ居村之外猥ニ徘徊致間敷旨可申付と有之候御定ニ而、弟次郎助江預ヶ居村外猥ニ徘徊致間敷旨申渡、

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政四子年五月

松平伊豆守殿御差圖　　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一武州釣上新田ニ倒居候、同國太田新井村佐五右衞門弟三八一件、

一橋領知武州埼玉郡太田新井村　百姓佐五右衞門弟　三八

右之もの儀、身持不埒ニ而村方致〓欠落、病氣にて足首腐落候處、又右衞門申付、非人ニ打擲爲〓致候義ニ可〓有〓之と疑を以、又右衞門江博弈宿、幷此もの足を熱湯江ひたし候抔無〓跡形〓申掛致し候段不屆ニ付、中追放可〓申付〓處、歩行も不〓相成〓片輪ニ付、兄佐五右衞門江引渡押込置、

右御仕置附

右御定書ニ博弈之宿致し候もの、遠島渡世も難儀程之片輪ニ致し候もの、遠島と有〓之、此もの申立候通無〓相違〓候得バ、又右衞門ハ遠島ニ相成候ものニ付、遠島之致〓申掛〓候者ニ御座候、人を殺候段申懸致し候もの、一と通之申掛ニ候はゞ、重キ追放之御定を見合、死刑之申掛二段落ニ而、重追放ニ候間、此ものハ中追放ニ相當可〓申處、歩行難〓叶片輪ニ付、追放ニハ難〓申付〓、盲人御仕置ニ、遠島追放ニ可〓致科ハ、親類江預居村之外猥ニ徘徊致間敷と有〓之御定之趣をも見合、兄佐五右衞門江引渡押込置、

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政十二亥年御渡

京都町奉行伺

一丹波國三熊村醫師立敬愼中逃去候一件

青山下野守殿領分丹州多紀郡三熊村幸左衞門同居弟　醫師　立敬

右之者儀、持病之疳積再發いたし、人ニ疵付候付、先達而父淸兵衞江引渡遣、猥ニ他行等爲〓致間敷旨申付置候處、當八月不揃ニ而、文字も分兼候書付を、願書之由申立、御役所江駈込訴いたし、右吟

味中村預申付置候身分不愼、番人共眠居候内、出奔いたし候儀共、不揃とは乍申、不埒候得共、全持病之癎積差發、右及始末候儀と相聞候間、兄幸左衛門江引渡遣、猥ニ他行等爲致間敷旨可申付、此儀全之亂心ものには無之、吟味書之趣に而者、正氣之節も有之由に候得共、人々疵付、猥に他行等爲致間敷旨申付置候身分之處、猶又此度文字も分兼候書付を願書之由申立、駈込訴いたし候仕儀に付、全く亂心に無之候迚、先達而同樣猥に他行等爲致間敷旨申付候而已に而者、此上氣分不揃之節、如何樣之儀可仕出も難計候間、兄幸左衛門江引渡、全快致候迄押込、

評議之通濟

〔御定書百箇條〕拾五歳以下之もの御仕置之事

寛保元年極
一子心にて無弁人を殺候もの　拾五歳迄親類江預置　遠島

同
一子心にて無弁火を附候もの　右同斷　遠島

〔政談秘書二〕安永四未年三月

一座掛

久世出雲守書面評議

大坂元九郎右衛門町、尼崎屋孫七借家、當時同町播磨屋佐七家守、播磨屋勘兵衛支配借家、紀伊國屋善藏忰、
拾松

板倉佐渡守殿御下知

右之者儀、拾三歳、道頓堀立慶町狂言芝居江、見物ニ罷越、側ニ罷在候者之膝元ニ差置候紙入内ニ、金三拾壹兩有之を盗取候處、幼少ニ付、親善藏江預ケ置、拾五歳ニ相成候と遠島可申付處、此度生國中寺町法音寺出家願いたし候、親仕置ニ相成、其子遠島可相成者、幼少故預置、寺院之願ニ而出家仕候例ハ御座候得共、其身之惡事ニ而、親類江預置候内、出家願申出候例不相見候付相伺申候、此度土岐美濃守江願出、去午年願之通遠島御免出家仕候樣可申渡旨被仰聞候、下谷金杉上町、

小左衛門店喜六悴嘉助儀、同所龍泉寺町家主治郎左衛門方江奉公ニ差出置候處、付火可致所存ニ而、火ヲ袂江入、持出寺候依科、牧野大隅守掛リニ而、遠島申付、拾五歳迄親善六江預ケ置、十四歳ニ相成候處、御免出家爲仕度旨、武州足立郡彌五郎新田村清亮寺願出候趣ヲ以、相伺候處、伺之通被仰渡例ヲ以、拾松遠島御免と申上、其之通相濟、

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政十午年閏二月

戸田釆女正殿御差圖

町奉行 池田筑後守掛

一三浦志摩守家來渡邊忠大夫召仕下女ゑげ、附火いたし候一件、

三浦志摩守家來渡邊忠大夫下女　ゑげ

右之者儀、當主人方江下女奉公ニ相濟、小遣錢ニ差支、惡心出、勝手ニ出有之小遣錢度々ニ三百文程、其外縮緬綿入羽織、銀簪盗取、右羽織ハ主人紋付故相知可申と、同家中加川專助長屋椽下江入隱置、簪ハ小間物屋持參候弁と取替置、又ハ主人隣家服部左大夫方錠前無之簞笥ニ入置候琥珀、女帯盗取、人類致質入雑用ニ遣捨、尙又盗可致と三度主人勝手江致附火、右惡事可遁と中間長八ニ被相賴候旨同人江重キ申掛致候始末重々不屆ニ付、遠島申渡、拾五歳迄繼父厚見伊兵衛江預ケ置、

右御仕置附

右致盗、又ハ自分之惡事を可遁と長八江重キ申掛いたし候不屆も有之候得共、附火之方科重候間、子心ニ無弁火を附候もの遠島、拾五歳迄親類江預ケ置と有之御定に見合、遠島申付、拾五歳迄繼父厚見伊兵衛江預ケ、

〔御定書百箇條〕御仕置に成候者之悴、親類江預ケ置候内、出家願いたし候もの之事、

一（從前々之例）御仕置に成候者之悴、遠島追放等に申付候もの、幼少故十五歳迄親類江預置候處、出家にいた

し度旨寺院ゟ相願候はゞ、伺之上出家に可申付事、

〔科條類典下七〕親御仕置ニ成、其子遠島追放ニ被仰付候處、拾五歳以下ニ付、親類江預ケ置候處、出家願之儀申出、願之通申付、當人幷師匠江證文申付ル、

元文三午年九月　當人より差出證文

差上申一札之事

一拙僧親佐野新藏儀、不屆有之、拾ケ年以前、遠島被仰付、其節拙僧儀何之御構も無御座候處、新藏儀於配所又候不愼之儀有之、御仕置被仰付候、依之拙僧儀遠島被仰付、幼年ニ付、拾五歳迄、姉聟佐橋左門江御預ケニ罷成候處、今度從日光御門跡遠島御免出家御願之儀被仰立、幷拙僧親類共も同樣奉願候、願之通被仰付候旨、碑文谷法華寺弟子出家仕度旨、是又奉願候處、遠島御赦免願之通被仰付難有奉存候、則碑文谷法華寺鑑古弟子ニ罷成剃髪仕、法名智觀と相改申候、今年拾貳歳ニ罷成候ニ付、江戸表徘徊不仕、住所定置、他所江罷越候時分ハ、御奉行所江御屆可申上候、勿論遍參仕候共、御朱印地又ハ御由緒有之、且御目見仕候程之寺院江ハ住職仕間敷候、若住持不仕候而不叶譯も御座候歟、公儀向江罷出候儀御座候ハゞ、其段上野執當中江申達、可奉伺候、爲後證仍如件、

元文三戊午年九月十八日　東叡山碑文谷法華寺弟子佐野万助事　智觀

寺社御奉行所

○按ズルニ、此次ニ、智觀ノ師匠鑑古ノ奥印ノ文、幷ニ證書及ビ上野執當覺王院ノ證書ノ奥印ノ文アリ、略ス、

〔評議書〕寛政元年閏六月十四日

伊豆守殿江（右京亮 信濃守 甲斐守）立會、尾島鍋三郎を以進達、同廿日承付候樣、同人を以御渡致承付、同廿二日御

同人江備前守河内守甲斐守立會、秋山松之丞を以鍋三郎江遣返上、
去月廿八日被仰渡候
父之科ニ而御仕置被仰付、幼年ニ付親類江御預之者、親類身寄無之節之取計方、評議仕候趣申
上候書付、
書面評議仕申上候通相濟候間、其旨相心得可申旨被仰聞、承知仕候、
酉閏六月廿日　評定所一座
父死罪遠島ニ相成候者之悴、父之科ニ依而遠島、或ハ中追放等ニ相成候者、十五歳以下ニ而親類
共江預遣可申處、預可申付親類身寄之者等無之時、取計方之儀評議仕可申上旨被仰聞候、
此儀父之依科遠島、中追放等被仰付、幼年ニ付十五歳迄親類江御預可被仰付もの、親類身寄之
もの無之節之例、相見不申候得共、父江戸拂御仕置被仰付、家斷絶仕、幼少之娘一人有之候處、引
取養育可仕親類無之、父之元組世話役江預扶助米被下候、別紙類例も御座候間、可預遣親類身
寄之ものも無之節ハ、父之元仲ヶ間相組等之内江御預被仰付、右預り候もの江御手當被下候
方ニ可有御座哉ニ奉存候、
右評議仕候趣、書面之通ニ御座候、以上、
酉閏六月　評定所一座
別紙
高拾俵壹人半扶持　小普請坪内式部組　竹澤紋次郎
右之者儀、去申年不届有之、江戸拂被仰付、家斷絶仕、幼少之娘一人有之候處、引取養育可仕親類、幷
續之もの無御座候ニ付、同組世話役之もの江預遣、養育爲仕候得共、末々養育可仕もの無御座、難
儀仕候ニ付、紋次郎娘江扶助米被下候様仕度段、坪内式部相願、右娘片付候迄之内、爲取續二人扶

親類永預

持被下之候、

〔御仕置例類集二ノ二十五〕享和三亥年御渡

大坂町奉行伺

一當時無宿直吉儀、河州諸福村佐七娘くのを打殺候一件、

堂島彌左衛門町大丸屋正一郎元下人　當時無宿　直吉

右之もの儀、與藏農業ニ用ひ居候鐵さらへを奪取、幼少之くのを敲殺候始末、吟味之上亂心ニ無相違、くの諸親類、幷村方庄屋、年寄共も、此もの御仕置宥恕之儀相願候間、存命ニ候はゞ親類共江永預、

宿預

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和八卯年十月

三奉行江

入牢、溜預之者、手間取不申樣、隨分手廻致シ、吟味相分候はゞ出牢可成たけハ宿預ニ而吟味相分、入牢、溜預多無之樣可被取計候、

十月

〔地方落穗集十四〕病氣にて出牢の上、宿預け申付られし節、牢屋敷掛り役人へ差上候、請書認方、

差上申御請書の事

一何の誰領分、何國何郡何村誰儀、何之誰樣御掛りにて、入牢仰せ付置れ候處、右誰儀病氣に付、私方へ宿御預け仰せ付られ、慥に預り奉り候、之に依て御請印形差上申處如件、

月日　何町何丁目　江戸宿誰店　誰印

何之誰樣御組

何之誰樣

非人小屋預

〔金澤藩刑法者拔書〕里子刑之者共

五ヶ年里子　　小松定番御馬廻脇田喜八郞小者　覺助

同刑　　同斷橫地治兵衛小者　與四兵衛

四ヶ年里子　　神戸内右衛門若黨　吉村六平

右之者共、元祿五年、小松定番御馬廻御番頭神子田五兵衛御貸屋後、藪之竹三本盜伐候事、

右之者、正德五年、主人致供、江戸江罷越居申内、御門外江罷出候節、暮ニおよび、御門入おくれ無是非致欠落、他國ニ五六年罷在、其後御當地江立歸候事、

〔寶曆集成綵綸錄三十〕寶曆九卯年八月

火附盜賊改江 ○中略

一四人共之内、急病抔ニ而養生致候節、或ハ無據譯ニ而品寄候節、近所之非人小屋江預來候由、向後牢溜之外小屋預ニ致候義可爲無用候、○下略

〔類例秘錄八〕太田播磨守掛り 安永六酉年三月

一御預所ニ而致吟味候、百姓嘉兵衛女房きん懷胎取計伺、

書面懷胎之女ハ、醫師子取婆とも相掛置、臨產之樣子ニ候はゞ出牢之上、門田村役人江急度預置、晝夜百姓共ニ番爲致、出產之上、肥立候ハゞ歸牢申付、出生之子ハ、近き親類ノ村役人江引渡爲養育可被申候、

但御當地ニ而ハ溜預と唱へ、非人頭江預ケ、彼者共に取計爲致出產候、若領分ニ右之仕來リ有之候はゞ、其通りニいたし候而も不苦候間、無取逃樣、御仕置相濟候樣之取計專要ニ候、

酉三月

〔當世武野俗談〕冬瓜仁右衛門

本所吉田町に御小性組御番衆兼松又四郎と申、御旗本衆の地を借りて、立派に普請をして住居し、大勢家來召仕、子分方多く有て、其土地は云ふに不ㇾ及、吉原境町すべて慰所にて悉く人に用ひられ、名を得たる所の仁右衞門といふもの有、○中略此もの博奕の場へ出て、段々利を得大に出世し、此十六七年以前ゟ本所三ッ目通り島杢十郎といふ御直參の屋敷地をかり、土場といふを立、長半博奕をして己棟梁となりて、借元とやらんをいたし、大に富貴となり、古へ辻番の有樣は夢にもなく、吉原芝居に入込、大盡の體なりけり、此五六年以前、松平帶刀殿盜賊奉行の節、いかゞ差口や有けん、途中にて此仁右衞門帶刀殿與力同心の手にとらはれ、其節宿を尋給へ共、仁右衞門答て、拙者なぐさみしと申て、世を渡ることを商賣に致すものなり、然ば極りたる宿と申ては無ㇾ御座候とて、更に宿所をいはず、地主兼松又四郎を圍ての事なるよし、後人々是を譽けり、夫故又四郎何の障もなかりし、仁右衞門は、其節牢舍いたしけるを、渠が子分のものとて、何を家業とするやら知れざる者、皆なぐさみ師とやらん數百人、奉行所へ願ひ、仁右衞門出牢被ㇾ仰付ㇾ候樣にと、色々佗ける故、帶刀殿後に仁右衞門を牢ゟ出され、無宿なれば預所なしとて、本所回向院非人小屋庄八へ預け給ふ、爰におゐて仁右衞門徒弟の者ども集り、彼非人小屋へ色々珍敷物を持はこび、見廻として日夜其結構目を驚かす計なり、扨其後間もなく御免を蒙り、今隨分と繁昌して、其道の者に親方と尊敬せらる、

〔御定書百箇條〕牢抜手鎖外し御構之地江立歸候もの御仕置之事、

寛保二年極
一宿預之もの致ㇾ欠落ㇾ候はゞ　本罪相當之御仕置より、一等重く可ㇾ申付ㇾ、

〔御仕置例類集二ノ二十七〕文化六巳年御渡

大坂町奉行伺

一御廻米船乘組之もの共難風ニ逢、猥ニ乘捨候一件、

九七　播州八部郡兵庫西出町、長蔵事長太夫、船楫取、大岡久之丞御代官所、讃州小豆島池田村之内神之浦

右之もの儀、江戸御廻米積廻船ニ乗組罷在、紀州比井岬沖ニおゐて、西風少々吹出候砌、大風ニも及間敷趣ニ、船頭藤助ゟ申聞候迚、任其意致楫取候身分ニ而、同州和歌山江飄戻可致船掛と之儀も不心付、既難風ニ成、楫折取失候付、乗廻不相成沈船ニ成候外無之仕義とハ乍申、御廻米積入候船乗捨、御廻米行衛不知候様相成候儀、幷十兵衛周蔵より船宿預申付置候身分不相愼、內證ニ而松前表江船働ニ被雇罷下居候內、難船一件幷右他國致居候儀とも私共於御役所吟味ニ相成有之儀、當表江立歸候上承知致シ、早速廻船御用達新五兵衛江此もの立歸候段爲相知、右之もの同道いたし、十兵衛方江有體訴出候事とハ乍申、預中不愼之仕方、旁不埒ニ付、五十日手鎖、

此儀御廻米積船乗捨候不埒も有之候得共、十兵衛役所吟味中宿預ケニ成候身分、內證ニ而他國いたし候段、重々之不埒ニ而、奉行所吟味ニ成候段承リ、右次第訴出候ものニ付、自訴ニハ難立、去ル戌年、菅沼越前守御勘定奉行之節、手限伺之上御咎申付候、常州戸崎村平兵衛儀奉行所江駈込訴致シ取上無之地頭ニ而吟味中宿預之身分ニ、而難用ニ差支候迚、平助と名前を替、本所筋川浚御普請小屋江小遣人足ニ出候段不埒ニ付、五十日手鎖申付候例ニ見合、伺之通、五十日手鎖、

朱書　評議之通濟

失囚處分

〔御定書百箇條〕牢抜、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事

延享元年極
一手鎖預候家主　過料

延享二年極
但手鎖外し候者、致欠落候ハヽ、尋申付、不尋出候ニおゐてハ、重過料、

尋申付不尋出候はゞ過料

從前々之例
一預ケ置候ものを取逃候もの

〔御仕置裁許帳 七〕手鎖を抜者之類幷手鎖之儘致欠落者之類、同請ニ立者、

天和二年戌八月十九日

壹人市郎兵衛　是ハ八官町市兵衛店之者、此者人請之出入有之付、伊丹大隅守方ゟ斷ニ而尋手形申付候處、不尋出、其上屋敷之出入も不埒明候故、當月十三日、此者手鎖懸置候、然處手鎖之封印を切放シ、錠なしに鎖之明キ候樣ニ仕置候を、今日封改に參候處改見出シ、遂穿鑿候處、昨日封印切はがし候由申候、家主市兵衛儀も油斷仕、手鎖外シ罷在候を不存候由申に付、爲過失、市兵衛ニ手鎖を懸、五人組ニ預ケ遣、此者儀ハ籠舍、

右之者、日本橋ニ三日晒、戌十月廿八日於淺草磔、

〔御仕置例類集 三ノ十六〕寛政十午年五月

太田備中守殿御差圖

一武州太田間々田兩村之もの共、鐵砲持居候ものを預り取逃し候一件、

御勘定奉行　根岸肥前守掛

長山彌三郎
三枝友佐
松崎鐵右衛門　知行武州幡羅郡太田村

名主
組頭
共

元堀谷文右衛門御代官所當時野口辰之助御代官所間々田村

組頭
名主
利八

右之もの共儀、捉飼場内ニ而、鐵砲持居候もの、野廻り高山粂吉外壹人召捕、村方に預り罷在候上は、不取逃樣可心附處、重右衛門宅におゐて名主利八、其外百姓共一同番いたし、囚人を雪隱江連參り候處、戸を建吳候樣申候とて、繩取共持居候繩を手放し、便所之戸を建、外に罷在候故、囚人逃

去候始末、心附方不行届段、不埒に付、利八は過料錢五貫文、太田村名主共は同三貫文宛、組頭共は一同急度叱、

〔御仕置例類集一ノ十九〕文化十二亥年御渡

京都町奉行伺

一丹後國三熊村、醫師立敬、愼中逃去候一件、

青山下野守殿領分丹州多紀郡三熊村　勘七
外壹人

右之もの共儀、立敬村預中番人ニ罷越候儀ニ候得ば、入念番可致處、立敬能く臥居候樣子ニ付、氣分弛み眠候とは作申、出奔いたし候をも不存罷在候段、全等閑より事起、右及始末儀ども、番人之詮無之、不埒之至ニ付、兩人共日數三十日宛手鎖、

此儀寬政十二申年石川左近將監御勘定奉行之節、伺之上御答申付候、上州本宿村百姓新兵衛外壹人儀、同村小平次村預ニ相成番いたし候はゞ、不取逃樣可入念處、兩人とも眠、小平次を取逃候段、番人之詮無之、不埒ニ付、過料錢三貫文宛申付候例ニ見合、過料錢三貫文宛、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ十九〕文政四巳年御渡

京都町奉行伺

一二條西洞院東江入町茂七、吟味中手鎖を外し逃去候一件、

二條西洞院東江入町　平兵衛
外壹人

右之もの共儀、茂七手鎖之上、町預申付置候ニ付、入念番いたし可申處、茂七儀手鎖はづし、出奔いたし候をも不存罷在候段、全等閑より事起、番いたし候詮も無之、不埒之至ニ付、兩人とも過料錢

三貫文ヅヽ、

此儀天明四辰年評議ニ御下ゲ被成候、大坂町奉行相伺候、攝州札之辻町綿屋嘉兵衛同居兄庄兵衛儀、手鎖預之もの番人に被雇、附添乍罷去、取逃シ候段、不埒ニ御座候間、過料錢三貫文と相伺、評議之上伺之通と申上、其通相濟候例ニ見合、伺之通過料三貫文宛、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ十九〕文政四巳年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一上野御本坊法談所役僧ニ而出奔いたし候、敎明房義迎、品々不屆有之候一件、

上野仁王門前家來屋敷家主德兵衛方ニ居候　市郎右衛門

右之もの儀、養玉院藏空より被相雇、藥王寺江預ヶ相成候、敎明房義迎を番致し候はゞ、入念附添可罷在候處、無其儀、別條も有之間敷と存、手放差置、食事に罷越候跡ニ而、心哲罷越義迎と面談致し、時計質入之儀申談候をも不存罷在、既同人出奔致し候仕儀ニ相成候段、不埒ニ付、過料錢三貫文、

此儀御咎附ニ主計頭申上候例ニ見合、品不宜候間、伺之通過料錢三貫文、

朱書
評議之通濟

〔類例秘錄三〕石川主水正掛　文政十亥年

一上州草津村ニおゐて、囚人取逃候一件吟味伺、

書面勘助外貳人儀、村預ニ相成候周藏を番いたし候はゞ、無油斷可心付處、同人小用ニ罷越候節、腰繩振放シ逃去候段、番人之詮無之、草津村役人共儀も、心付方不行屆故、周藏逃去候次第ニ相成候段不埒ニ付、勘助外貳人は手鎖申付、村役人は急度叱り置、周藏行衛尋被申付置候もの

共儀、度々日延之上、不ㇾ尋ㇾ出段一同不埒ニ付、重立候村役人江過料錢三貫文申付、其外之もの共は一同急度叱り置、周藏行衛は永尋申付、證文取ㇾ之差出、且過料錢は三日之內、其方役所江取立、御勘定所江相伺、手鎖日數三十日相立候はゞ、不ㇾ及ㇾ伺可ㇾ被ㇾ差免ㇾ候、以上、

亥四月

〔類例秘錄　六〕隼人正掛　申二月〇[illegible]

一信州瀨山村勇次郎預中逃去候一件吟味伺

書面金三郎、清左衛門、岩右衛門、七之助、善九郎、七郎儀、御預所ゟ村內勇次郎を預申付有ㇾ之上ハ、精々可ㇾ念入候處、金三郎、清左衛門、岩右衛門、七之助ハ、番致し乍ㇾ罷在、銘々居眠り、勇次郎手鎖之儘逃去を不ㇾ存罷在候上、金三郎外五人一同、勇次郎行衛日限尋申付置候處、度々日延之上不ㇾ尋ㇾ出段不埒ニ付、金三郎、清左衛門、岩右衛門、七之助、善九郎ハ過料錢三貫文ヅヽ申付、七郎ハ急度叱り置、勇次郎行衛永尋申付、一同證文取ㇾ之差出、且過料錢ハ三日之內、其方役所江取立、御勘定所江可ㇾ被ㇾ相伺候、以上、

申二月

手鎖

手鎖ハ、庶人ニノミ科スル刑ニシテ、罪人ノ兩手ニ杻シテ之ヲ鈐封スルナリ、但シ其罪ノ輕重ニ由リテ、三十日、五十日、一百日ノ差アリ、一百日處刑ノ者ハ、隔日其封ヲ撿シ、五十日以下ハ、五日每ニ之ヲ撿ス、而シテ此刑ハ附加刑トシテ科スルコトアリ、

手鎖ニハ吟味中手鎖ト、過怠手鎖トアリ、吟味中手鎖ハ、裁判中手鎖ヲ施スナリ、過怠手鎖ハ、過料ノ刑ニ處セラレタル者ノ、貧窶ニシテ其錢ヲ出スコトヲ得ザル時、此刑ニ處スルヲ謂フ、溜ニ於テ處刑スルアリ、是ハ囚人ニ限ル、又旅人宿ニ於テ處刑スルアリ、是ハ大抵訴訟ノ爲メ江戶ニ出テ、宿預トナリタル者ノ、受理シ難キ訴ヲ爲シタル時、徑チニ其旅宿ニ於テ之ヲ施スナリ、又單ニ此刑ニ處シテ、宿預或ハ町預ト爲スアリ、或ハ私宅ニ於テ處刑スルアリ、是ハ大抵過怠手鎖ナリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從二前々一之例
一手鎖

其掛にて手鎖かけ、封印附、五日目切に封印改、百日手鎖之分ハ、隔日封印改、

〔張紙留〕天明三卯年

先年相模守殿被仰渡以來ハ、三十日手鎖ハ、三十一日目差免ニ見合、六十日以上入牢ニ而御咎赦免之儀も、六十日目ゟ赦免之積り評議極、

安永二巳年二月四日

〔舊記拾要集 二〕元祿七年戌七月十日御用覺帳書拔

覺

手錠之もの改之儀、七月十三日より十五日迄、盆中御免被成候、月額剃申度ものハ、心次第可仕旨、今朝被仰出候間、今日より改ニ参候者ニ可申渡事、

七月十日

〔張紙留〕岸本彌三郎御代官所、奥州桑折村伊六外十六人、地所出入之義ニ付、差越願いたし候一件、巳七月二日、御書付之通、御仕置申渡、翌三日、其段御届申上、伊六儀は、五十日手鎖申付置候ものニ候處、重病ニ付、全快まで手鎖差免之儀、伊六差添之もの願書差出候間、同月四日、一座評議之上伺并御届ニも不及、手鎖差免し、快氣之上、殘ル日數手鎖申付候積リ、

右寛政九巳年七月四日、評議極ル、

〔公裁秘錄 二〕一手鎖押込之御咎御下知有之節之心得之事

手鎖帳

何國何郡何村
百姓　誰

手鎖押込日數書付

三十日手鎖 辰二月二日ゟ同三月朔日迄
翌二日差免候事

押込右同斷

右之通認居間江張出置可心付事

〔御仕置裁許帳 十〕弟之跡式之出入ニ而、下人を弟之由僞セ申、手鎖帳に判形仕一巻之者、并預ケ金之出入ニ而、似セ家主同五人組ニ成、手鎖帳ニ判形仕者、

延寶五年巳二月九日

壹人喜兵衛　是ハ南鞘町清左衛門店六左衛門出居衆、此者弟源兵衛と申者、南鍋町小兵衛店ニ罷在候處、右之源兵衛儀、當正月十一日致病死候處、源兵衛跡之出入ニ付、此者并養母之由ニ而

手鎖制度

訴訟申出候間、今日內寄合雙方召出シ、遂穿鑿候處、源兵衞儀三年以前、母幷兄弟諸親類致久離、兩番所之帳ニ付罷在候處、此者幷源兵衞養母之由ニ而召連、無筋目訴訟ニ罷出候不屆成ル故、爲過失手鎖を掛、宿幷家主ニ預ヶ遣候處、此者弟尾張町一町目長兵衞店吉兵衞宿之由僞、其上弟吉兵衞召仕權三郎を吉兵衞之由僞、手鎖帳ニ判形爲致候ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、巳四月廿日赦免、

同日

壹人四郎兵衞　是ハ三河町二町目之者、此者儀南鞘町清左衞門店六左衞門出居衆、喜兵衞と申者、其身南鍋町小兵衞店ニ罷在候源兵衞、正月十一日ニ致病死候處、源兵衞跡式之儀ニ付、右之喜兵衞幷源兵衞養母之由ニ而召連、無筋目訴訟ニ、今日罷出候ニ付、爲過失喜兵衞手鎖申付候處、右之喜兵衞儀、其身弟尾張町一町目長兵衞店吉兵衞と申者之所宿之由僞、手鎖帳ニ付申候處、此者右之尾張町長兵衞幷五人組之由僞致判形候ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、巳二月廿四日赦免、

同日

壹人權三郎　是ハ尾張町一町目長兵衞店吉兵衞召仕、主人兄、右之喜兵衞、此者を弟吉兵衞之由僞申させ、手鎖帳に判形仕候ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、巳二月廿四日赦免、

〔御定書百箇條〕無取上願再訴、幷筋違願之事、

享保六年極
一總て願之儀、筋違江申出候ハヽ、其筋之奉行所江願出候樣申付候上、再應申出候はゝ、其筋江遂對談難立願にて無取上旨に候はゝ、其筋之奉行所にて相應之咎可申付事、

從前々之例
但難立願奉行所にて無取上旨申渡候處、同役江右之願申出におゐてハ、寺院侍ハ押込、百姓

過怠手鎖

町人ハ手鎖可申付事、

〔御定書百箇條〕家質幷船床髮結床、書入證文取捌之事、
延享元年極
一寺社付之品書入、又賣渡證文を以、金子貸借於致候には、　俗人に候はゞ　手鎖

但金主ハ不埒之貸方に候間、濟方之不及沙汰、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事
寛保二年極
一奉公人病氣に付、宿江下候處、致快氣候へ共不相歸、外江奉公に於出は、　給金不相濟候はゞ請人欠所　江戸拂
奉公人　同罪

追加
但給金相濟候共請人過料、奉公人手鎖、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事
從前々之例
一夫無之女と致密通、誘引出候もの、　女は爲相歸、男は手鎖、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事
享保三年極
一過料　三貫文　五貫文

但重きは拾貫文、亦は貳拾兩、三拾兩、其者之身上に隨ひ、或は村高に應じ員數相定、三日之內爲納候、尤至て輕身上にて過料難差出者は手鎖、

〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、
寛保二年極
延享元年極
一手鎖はづし候者　過怠手鎖に候はゞ一倍之日數手鎖、吟味之內掛置者に候はゞ百日手鎖、
寛保二年極
但手鎖はづし致欠落候はゞ、本罪之相當ゟ一等重く可申付、

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和九辰年十月
評定所一座江

都而過料申付候者之內、身上無之者ハ手鎖ニ相伺候も有之、過料ニ相伺候も有之、區々候、以來忰下人等之類、身上無之者ニ而も、過料ニ當リ候者ハ、過料ニ申付、過料難差出者ハ、御定之通手鎖ニ可申付候、

右之通一統相心得、區々不相成樣可被致候、

十月

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年九月十八日、佐久間修理、吉田寅次郎等、咎ヲ被ル、○中略

御代官齋藤嘉兵衞支配所武州橘樹郡神奈川宿廻船問屋三郎兵衞　其方儀、異國船渡來、神奈川沖碇泊中、海陸とも、都て見物が間敷儀は無用可致、御備場御用相心得候向より見留、船差出置候得ども、猶又異船には乘寄申間敷候御趣意乍相辨、吉田寅次郎外一人と、吉村一郎知己の由にて罷越し、異船に近寄見留度旨申聞候處、船便りも有之候間、何れ取計可申旨、及挨拶候段、不埒に付、手錠申付る、　右於井戸對馬守御役宅、御目付鵜殿民部少輔立會、對馬守申渡之、

〔御定書百箇條〕隱賣女御仕置之事

享保七年 延享二年極 一隱賣女いたし候もの　身上に應、過料之上、百日手鎖にて所江預、隔日封印改、

元文五年 同 一踊子を抱置、爲致賣女候もの、○中略

延享七年 享保七年極 一家主　身上に應、過料之上、百日手鎖、隔日封印改、

但家主建置候家藏有之候はゞ、五年之內店賃爲相納可申候、

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

享保二年
延享二年極

一三笠附點者金元幷宿之家主

同

一博弈宿幷筒取いたし候者之家主

身體に應じ過料之上
百日手鎖

寛保十年
同

一取退無盡宿幷頭取之家主

〔御定書百箇條〕婚禮之節石を打候者御仕置之事

寛保二年極
延享元年極

一婚禮之砌、石を打狼藉いたし候もの、

頭取
百日手鎖

〔御仕置例類集二ノ一〕文化九申年、松平伊豆守殿御書取御渡、

一五十日手鎖之一等重キ御咎當之儀ニ付評議

御仕置段取、先達而申上候內、百日手鎖之御咎無之、五十日手鎖之一等重キハ百日手鎖ニ相當候哉之儀、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀去ル寅年文化三年申上候ハ、盜賊御仕置段取以來取極候儀を申上候儀ニ而、五十日手鎖之一等重キハ、百日手鎖ニも可相當候得共、百日手鎖之儀ハ、御定書ニも、隱賣女致候もの、隔日封印改ニ而、百日手鎖ニ有之、博弈宿之家主之類、身上ニ應過料之上、百日手鎖、其外婚禮之節、石を打候頭取、且吟味中掛置候手鎖を外し候ものニ而、外御咎とハ趣意聊違ひ、盜賊御仕置之段取ニハ難載故、相除候儀ニ有之、且前々五十日手鎖之一等重キハ、所拂申付、又ハ五十日手鎖ゟ一等重く、百日手鎖申付候も有之候得共、右ハ其始末ニ寄申上候儀と奉存候、依之五十日手鎖之一等重キハ、百日手鎖ニ不限、其始末次第、所拂、又ハ敲等ニも可申付儀と相心得罷在候、

酉正月

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政六寅年二月

戸田釆女正殿御差圖　　御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

一上州、野州、武州村々隱賣女、三笠附、富博弈之儀、幷武州深谷宿專右衞門外五人儀を申立候無名御箱訴一件、　吉川榮左衞門 近藤和四郎 支配所上州新田郡大原村　旅人宿扇子屋　儀兵衞

右之もの儀、歌舞伎役者之紋紙江鳥目爲附、當り候もの江帶地遣候段、賣引ニ無相違、其上旅人宿渡世相始、飯賣女を雇置、內々相對ニ而貳百文ヅヽ請取身賣爲致候段、不埒ニ候得ども、村役人申付を相守、雇置候女を相返候儀ニ付、百日手鎖、

右御咎附

右歌舞伎役者之紋紙ニ而賭之取遣いたし候者、賭之賣引、よみがるた致し候もの之御定ニ准、三十日手鎖ニ相當申候得共、隱賣女致渡世候段、重々不屆ニ御座候、然ル處村役人共申付を相用相止候ものニ付、隱賣女渡世致し候もの之御定を見合、品輕御座候間、百日手鎖、

〔御仕置例類集一ノ二十八〕文政三辰年御渡

京都町奉行伺

一西洞院家家來糺井左京、ねだり事いたし候一件、

新町今出川上ル町與兵衞借家千藏同居みや親　りえ

外三人

右之もの共儀、銘々宅江客引請身賣爲致候儀ハ無之共、隱賣女御法度之儀と乍存、困窮ニ而暮兼候迚、娘わさ、其外之もの共を金藏方江差遣身賣爲致、賣代口錢之內取之候段不埒ニ付、四人共身上ニ應じ、過料之上、百日手鎖、所江預ケ、隔日封印改、

此儀賣女抱置候ものには無御座候得共、娘妹等を他所江遣、身賣爲致候もの共ニ付、隱賣女致

候もの御咎之儀ニ付、寛政五丑年御書付ニ、隱賣女抱主、身上不ㇾ殘建家共取上、百日手鎖ニ而、所江預、隔日封印改と有ㇾ之候ニ相當可ㇾ申、尤此ものは借家又ハ同居ニ而可ㇾ取上建家無ㇾ之候ニ付、身上不ㇾ殘取上、百日手鎖、所江預ケ隔日封印改、

朱書 評議之通濟

〔游藝園隨筆抄〕奢侈を極めたるため御咎を蒙りたる札差共、左之通、　天保七申年五月

申渡書　御懸大久保加賀守殿

淺草猿屋町家持札差佐吉父隱居　定吉

佐吉

同人弟 長之助

文之助

同所天王町家持札差　加兵衛

同人忰 加十郎

其方共之內、定吉始め佐吉、長之助、文之助とも、能を好み、召仕迄も謠稽古いたし、南本所番場町、佐吉所持地面江借添いたし、座敷續出、能舞臺補理、定吉は小鼓を打、長之助は大鼓、佐吉、文之助者仕手脇いたし、裝束之石帶江は自分紋所を附、每月能を相催し、能いたし候もの、又は素人にても、業の宜ものは差加へ、又見物に參候もの江挨拶に出候節、定吉佐吉とも繼上下を著、常に能にのみ打懸り罷在、加兵衛義渡世向は支配人江万事相任せ、能狂言を好み、別莊座敷之疊を上候得者、舞臺に相成候樣補理、折々狂言相催、佐吉方に能有ㇾ之節は相加り、名裝束に候とて錦繡を纏ひ、加十郎は放蕩ものにて、多分之金銀游興に捨、妻呼迎候節は、待受出迎等多人數寄集、料理向祝義差出候義夥敷、其當座日々客を招き、大行成いたし方、其上御鷹匠に紛敷姿に相成、野邊等遊步行候段、

先年町觸之趣も、近年一統に花美之風義に成行、自から無用費多く、困窮に至り、其外町人男女衣類之義に付、度々御觸、又者婚禮之節、不相應に美麗成道具相用、金銀之金具、蒔繪等之道具、堅令停止、相背候もの有之候得者、急度被仰附候との町觸相背、町人之身分を不顧、身分不相應之至、不屆に付、此上及吟味、又は御仕置可申附處、格別之宥免を以、佐吉、加兵衞は札差取放、百日手鎖、定吉、加十郎も同斷、長之助、文之助は三十日手鎖申付之、尤能裝束類幷別莊江補理有之候能舞臺取上、加兵衞義も、別莊之內、舞臺體に補理いたし候分、是亦取上、

〔御定書百箇條〕出火に付ての咎之事

享保四年極
火元　五十日手鎖

〔御定書百箇條〕婚禮之節、石を打候者御仕置之事、

寛保二年極
延享元年極
一婚禮之砌、石を打狼藉いたし候もの、　同類　五十日手鎖

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政九巳年六月

戶田釆女正殿御差圖　御勘定奉行　間宮筑前守掛

一信州下戶倉村ニ而捕候、無宿岩太郎外壹人盗致し候一件、

蓑笠之助御代官所信州埴科郡坂木村　百姓源兵衞女房　なみ

右之もの義、夫之儀とハ乍申、源兵衞悪黨もの宿いたし、同人取捌候品々ハ盗物ニ可有之と乍心付、其儘致し罷在候段不埒ニ付、五十日手鎖、

右御咎附

右明和三戌年、評定所一座江評議ニ御下被成候、甲府勤番支配相伺候、甲府和田平村家持菊川屋文藏女房さの義、夫文藏甲府下一條町山形屋吉左衞門申合、盗人坊主與兵衞ゟ盗物買取候儀存

三十日手鎖

候ニ付、文藏吉左衞門江異見迄差加候而も不相用候とて致方も可有之處、無其儀同心仕、盜物縫直候儀も有之、殊ニ坊主與兵衞持參候品預り置候段、旁不念ニ付、急度叱リ置可申哉之段相伺、一座評議之上、五十日手鎖と申上、其通相濟候例ニ見合、五十日手鎖、

〔近世物之本江戸作者部類〕式亭三馬

寛政十一年己未の春、新板に前年の一番組二番組の火消人足等が鬪爭の趣を、俠太平記向鉢卷と云臭草紙に作り設けしを、三馬が舊主西宮新六が刊行したれば、よ組の人足等怒りて、己未の春正月五日、板元及三馬が宅を破却しけり、この一件にて、よ組の人足幾名か入牢す、裁許の日、西宮新六は過料、人足は出牢赦免せらる、作者三馬も罪を蒙り、咎め手鎖五十日にして赦免せられけり、

〔近世物之本江戸作者部類〕一十遍舍一九

文化の初め、繪本太閤記に擬して、化物太閤記と云臭草紙を作りたる御咎めによりて罪あり、手鎖五十日にして赦されけり、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

享保十六年極
一輕き賭之寶引よみがるた打候者　三十日手鎖

〔御仕置例類集〕三ノ四天明八申年十一月

御勘定奉行
桑原伊豫守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一武州富田村嘉吉儀を認候御箱訴一件

內藤金十郎知行武州男衾郡富田村　名主　嘉吉

右之もの儀、兼而知ル人ニも無之太右衞門四郎助を爲致止宿、其上名主之身分ニ而御法度を背、壹貳錢賭之かるた博弈致し候段不埒ニ付、役儀取放之上三十日手鎖、

右御咎附

右御定書ニ、輕キ賭之實引よみがるた打候もの三十日手鎖と有之、此者名主之身分ニ而、かるた致博奕、殊ニ住所も不相知もの兩人迄止宿爲致候不埒も有之、名主之詮無之、差當例ハ相見不申候得共、役儀取放之上三十日手鎖、

〔御仕置例類集二ノ二十〕文化元子年御渡

町奉行根岸肥前守伺

一麴町隼町彌右衞門寄子安藏儀盜いたし候一件

麴町貳丁目淸右衞門店 太吉忰 辰五郎

右之もの儀、當三月十九日、安藏一同、朝比奈彌太郎徒士ニ被雇、菅谷八十八方ニ而供待之內、玄關江上り居候節、安藏儀、同所續杉戶際ニ有之、拵付脇差壹腰密ニ可持歸旨申聞候を、差留候旨申候得共、追而安藏儀申聞候者、右脇差盜取致質入候旨相咄候はゞ、早速其段可申立處無其儀、右體不屆いたし候儀、乍承其分にいたし罷在候儀ども、不埒に付三十日手鎖、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文政三辰年御渡

日光奉行伺

一野州日向村金十郎次男紋右衞門儀、同村市郎兵衞を及殺害候一件、 無宿 宇右衞門

右之もの儀、紋右衞門ゟ市郎兵衞江貸金返濟之儀、世話いたし可遣旨申聞、等閑にいたし置、且平內方に而出會、紋右衞門催促いたし候砌、市郎兵衞儀、不法申募候節、兼而之約を變じ、相對にいたし候樣、不實之儀申之、其上紋右衞門憤り、市郎兵衞江爲手負候を見請、逃去候始末不埒ニ付、於溜三十日手鎖、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政六未年御渡

敲之上溜內手鎖

町奉行榊原主計頭伺

一間々田宿無宿源太郎外三人、溜おゐて不屆之取計いたし候一件、

石川主水正掛

凡連村無宿　捴助

右之もの儀、溜內世話役いたし、相溜四人源太郎外三人溜拔出候哉、其儀ハ不存、當正月十九日夜、五ッ半時頃臥り熟睡いたし、曉七時頃目覺候處、源太郎、仲八儀臥り候側ニ附添罷在、溜格子之邊ニ而物音いたし、怪敷儀とハ存候得共、聲立候はゞ如何樣之儀可有之も難計、怖敷相成候迚、其儘臥り居、既ニ石山外壹人儀、溜格子を燒切、溜鞘內迄立出候仕儀ニ相成候段、世話役いたし候詮無之、旁不埒ニ付、於溜五十日手鎖、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年十月七日、飯泉喜內等三十七人、死罪流罪等處刑各差アリ、〇中略

細川復藏と申立候、小網町名主にて欠落致し候伊十郎於溜手鎖、

〔三奉行取計書〕文化十四丑年八月

敲之上所拂之一等輕キ御仕置之儀ニ付申上候書付

評定所一座

武州高尾新田留五郎女房きく、相手同國大串村角之丞外五人、理不盡出入、當五月中、曲淵甲斐守方江訴出候ニ付、裏判差出、對決申付、吟味之上、雙方并引合之もの共、御仕置當り評議仕候處、引合之內、無宿周吉儀、武州瀧馬室村地內萱場ニおゐて、留五郎角之丞ハ、其外之もの共手合ニ加り、廻筒簺博奕致シ、留五郎打負候錢催促として、無宿林藏外三人申合、夜分留五郎宅江踏込、戶障子を損し、罷越候もの共之內、きく髮を切候次第ニ至、所を爲騷候段不屆ニ付、あばれ候而町を騷し候もの之御定に見合、敲之上所拂ニ相當り、無宿之儀ニ付敲之上江戶拂可申付處、一件吟味中自訴

致し候故、早速吟味も相分り候儀ニ付、一等輕可申付ものニ有之、依之先例相糺候處、去ル寅年石川左近將監御勘定奉行之節、伺之上御仕置申付候無宿幸藏岩次儀酒狂之由ハ難立、常州下泉村ニ而、幸藏ハ傳内ニ突當、却而同人を咎、可切殺由申、長脇差を拔、兩人ニ而傳内を打擲致し、又ハ踏付惡口及び、或ハ鬪打可致旨申、且幸藏ハ先達而欠落致し候後、元居村江立歸り右村領主より夫食農具代迄買受、歸住致し候處、農業を難儀ニ存、兩三日過、又候欠落致し候始末共、一同不屆ニ付、兩人共敲之上江戸拂可申付旨、伺之通御差圖有之、未御仕置不申付候内、牢屋類燒之節、放遣し立歸候間、一等輕く、敲之上五十日手鎖可被仰付哉之段可奉伺處、兩人共本罪ハ敲之上所拂ニ相當、無宿之儀ニ付、敲之上江戸拂と奉伺、其通御差圖御座候儀ニ付、本罪敲之上所拂より一等輕く、敲之上於溜三十日手鎖申付候例、幷右同樣、同年伺之上、御仕置申付候、無宿吉五郎外四人儀、平方湊之旅籠屋共ハ、止宿を乞候而も、止宿不致候間、金銀押借可致旨、無宿宇右衛門申ニ同意致し、同人幷無宿儀助外八人一同、旅籠屋平左衛門方江罷越、飮食致し、代銀不相拂上、錢三百文押借致し、旅籠屋武次右衛門方ニ而も酒給候、以來止宿不爲致候はゞ、切捨ニ可致旨申、長脇差を拔、挑灯を切落し、其外廻筒簺博奕致し候始末共、一同不屆ニ付、孫右衛門外一人ハ、入墨之上所拂、淸次郎外二人ハ、無宿之儀ニ付、入墨之上江戸拂可被仰付哉之段可奉伺處、牢屋類燒之節、放遣し立歸り候ニ付、入墨之上、五人共於溜三十日手鎖申付候類例有之、然ル處入墨と手鎖ハ御仕置之品違ひ候間、入墨之方ハ苦ル間敷候得共、敲と手鎖ハ筋合同樣之御仕置ニ候を、二重ニ敲之上手鎖申付候而ハ、刑名穩成間敷哉、天明六午年、山村信濃守町奉行勤役之節不及伺、手限ニ而申付候御仕置之内、敲之上所拂可申付候得共、牢屋類燒之節放遣候處、申渡を相守、立歸候ニ付、一等輕く、敲申付候例有之、敲之方刑名穩ニ付、此度之周吉儀、敲之上所拂之一等輕く敲申付、以來共右之通相極置可申候哉、伺相濟候近例ハ有之候得共、山村信濃守掛り例之方、御仕置相當ニ可有御座候ニ付評議仕、

旅宿手鎖

此段相伺申候、以上、

酉八月

評議之上

敲之上於溜三十日手鎖、

〔御定書百箇條〕評定所前箱江度々訴狀入候者之事

寛保元年極
一評定所前箱江難立願訴狀入候もの手鎖懸預置宿仕候もの、免許之願再應申出候ハヽ、宿幷當人江重て訴狀入候ハヽ可ㇾ相咎旨申聞、尤當人にハ右之趣證文申付、日數無ㇾ構手鎖可ㇾ差免、

但寺院は本寺觸頭等、浪人ハ地主家主等江預置、免許之願申出候節、是又前書之通申聞、證文取ㇾ之可ㇾ差免事、

〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

寛保三年追加
一宿預に成候上、難ㇾ立義箱訴、亦ハ越訴等爲ㇾ可ㇾ致立退、外江宿を替候もの、　元宿江引返し手鎖可ㇾ申付、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文化十四丑年御渡

火附盗賊改渡邊孫左衛門伺

一本鄕元町金藏方ニ居候松五郎儀、吟味中逃去、猶又賭事いたし候一件、

淺草寺地中修善院地借惣八店香具渡世いたし候伊三郎方欠落いたし、當時本鄕元町勘助店金藏方ニ居候

松五郎

右之もの儀、下總國船橋在村名不ㇾ存、堤之陰ニ而捻次郎傳藏手合ニ加り五六錢賭之めくり博弈一度いたし候ニ付、一同召捕、手鎖宿預ケ申付置候處、小用ニ出候砌、轉び石ニ打當、手鎖外レ候を幸と存、欠落いたし、右之始末ハ押隱し、知ル人金藏方世話ニ成猶又惡心發、本鄕御弓町往來ニ而、町人體之もの四五人手合ニ而、五六錢賭之十二月を圖ニ認候賭事之圖元一度いたし候段、不届

ニ付、重敲之上江戸拂、

〔地方落穗集十四〕御預け手鎖人有之節、請書認方、

私宅手鎖

差上申御請書の事

何國何郡何村　誰

右の者儀、御吟味中私方へ宿御預け仰せ付られ承知奉畏候、然る上は屹度相愼せ置、御用の節は早速召連罷出べく候、之に依て御請書差上申候處如件、

右宿何町何丁目　誰印

月日

宛所

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保元年極
一主人之娘と密通いたし候者　中追放

但娘は手鎖懸、親元江相渡す、

吟味中手鎖

〔御仕置例類集二ノ三〕文化七午年、土井大炊頭殿御口達、

一評定所前箱江手鎖相添入有之候訴狀之義に付評議、

書面評議仕申上候通可取計旨被仰聞、承知仕候、

午閏二月朔日　評定所一座

去ル八日、御取扱振評議いたし申上候樣被仰聞御渡被成候、松平主計頭知行、信州鹽崎村、嘉平次名前之箱訴狀、幷手鎖之義、先格相糺候處、是迄右樣之振合相見不申、何れニも箱訴狀ニ手鎖を添入候段ハ、不束ニ御座候得共、手鎖を入候次第、別ニ御咎にも及申間敷哉、然ル上ハ、訴狀ハ燒捨ニ可相成品ニ有之、尤松平加賀守、松平主計頭家來、町奉行所江呼出し、嘉平次儀、手鎖を懸置候ものニ相違無之哉之段相尋候處、吟味筋有之手鎖掛、村預ケ申付置候を、當九月二日、手鎖之儘、欠落い

たし候ニ付、尋方申付置、今以行衞相知不レ申候旨、申聞候間、右訴狀燒捨ニ御渡被レ成候ハヽ、評定所前腰掛ニ而爲レ呼、罷出候ハヽ、訴狀ハ燒捨、且地頭吟味中之もの故、嘉平次幷手鎖共、地頭江引渡、若四五ヶ月も爲レ呼不二罷出一候ハヽ、訴狀ハ返上仕、手鎖ハ主計頭家來、尙又町奉行所江呼出渡遣し可レ然哉ニ奉レ存候、

午十一月

去々午十一月廿六日、御取扱振評議仕申上候、松平主計頭知行、信州鹽崎村、嘉平次名前之箱訴狀之義、評議仕申上候通ゝ可二取計一旨、去未閏二月朔日被二仰聞一、右訴狀燒捨之積御渡被レ成、嘉平次ハ地頭吟味中、手鎖之儘欠落いたし、行衞不二相知一由、主計頭家來申立候間、式日每評定所前腰掛ニ而爲レ呼候得共、居合不レ申候ニ付、同七月十二日、右訴狀返上仕、手鎖之義ハ、町奉行所江主計頭家來呼出渡遣し申候、然ル處、嘉平次義、此度先非後悔いたし歸村致度段、主計頭方江願出候ニ付、直ニ捕置候間、差圖有レ之候樣致度旨、町奉行所江申聞候、右嘉平次箱訴狀ハ、素燒捨ニ御渡被レ成候義ニ付、其節同人行衞相知候共、手鎖一同地頭江可二引渡一筋ニ而、奉行所ニおゐて、吟味可レ及次第も無二御座一候間、地頭吟味中手鎖之儘欠落いたし候始末ハ、地頭ニ而吟味之上、相應之咎申付、歸住申付候儀も、地頭存寄次第之旨、町奉行ゟ挨拶可レ仕と奉レ存候、

閏二月

私脫手鎖

〔御定書百箇條〕牢扱、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

寬保二年極
延享元年極

一手鎖はづし候者　過怠手鎖に候はゞ定之日數ゟ一倍之日數手鎖、吟味之内掛置者に候はゞ百日手鎖、

寬保二年極
但手鎖はづし致二欠落一候ハヽ、本罪之相當ゟ一等重く可二申付一、

〔科條類典下六〕寬保元酉年七月、町奉行所ゟ書拔來候例書之內、

寛保元酉年十一月三日御渡

手鎖外し欠落之節、御仕置定之御書付、

一手鎖はづし致欠落候はゞ、死罪ニ而候得共、其儘居候者は、格別輕候間、定之日數より一倍之日數手鎖かけ置候歟、重き過料歟之内に而可然、手鎖はづし遣候も同斷、

一右之通申付候はゞ、此度之家主は重き過料たるべし、

〔御仕置裁許帳五〕貞享三年寅九月廿一日

壹人六兵衞　是は鮫河橋杢右衞門店之者、此者六年以前、酉霜月六日店請人之出入ニ而、於評定所手鎖を懸け、家主ニ預ケ置候處、手鎖を外し、博弈を打罷在候由、牢舍びんづる三平申出候間、今日召寄、遂穿鑿候處、久々之手鎖ニ而、渡世送りがたく、手鎖を外シ五六人ヅヽ人數を催、博弈仕候由白狀申ニ付籠舍、

右之者手鎖を外シ候依科ニ、同寅十二月三日斬罪、

〔科條類典下六〕宿預ケに成致欠落候もの、尋出し御仕置に成候例、

元祿十三辰年五月六日　南八町堀五丁目喜兵衞店助七召仕　治郎助

此もの儀、主人質物に付置候衣類六拾五品、并金子拾兩貳分、銀七拾匁餘、錢三貫文餘致取逃候に付、七年以前戌閏五月廿一日、牢舍申付候處、牢内に而相煩候に付、當二月元大坂町小右衞門店孫助に預ケ置候處、孫助儀致亂心、當三月七日自害仕相果候處、此もの同日致欠落候に付、爲尋候得ども、行衞不相知候、然處今晩南鍋町狂言役者宮崎傳吉方江致參宮、罷歸候由に而參候を捕置、傳吉訴來に付、同心遣し召寄、詮議之上重々不屆に付、保田越前守方より牢舍、

右は於品川辰六月晦日獄門

〔科條類典下六〕享保十五戌年三月

黒田豊前守掛り

神田松下町代地小兵衛店　十郎右衛門

右十郎右衛門儀、山王御旅所門前甚兵衛と賣綿出入に付、吟味之内於評定所手鎖をかけ家主江預ケ置候處、手鎖をはづし致欠落候科に依而、死罪可申付ものに候得共、去酉十月廿四日池上御法事之御赦遠島、

〔的例黄紙之寫〕輕追放

太田播磨守掛り

安永六酉五月、右京大夫殿御下知、

一武州小平村万右衛門悴當時無宿仙次郎及理不盡候一件之内、

安藤彥四郎知行武州那賀郡小平村百姓　安右衛門

此安右衛門儀、仙次郎手錠堅く致難儀候段申候迚、封印を押下ケ、錠を拔明ケ、はねをひらき遣候ゟ、同人逃去り手錠を外し候始末ニ相成候段、不屆ニ付輕追放、

御仕置附

右御定書ニ手錠を外し遣候もの過料、但手錠外し遣候もの、欠落致候はゞ輕追放と有之、此者ハ手錠をはづし遣候ニハ無之候得共、外し遣し候も同様之始末ニ而、一旦其者欠落致候間、右御定之但書ニ引當、輕追放と御仕置附仕候、

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政四子年五月

戸田采女正殿御差圖

町奉行　池田筑後守掛

一本郷元町佐兵衛手鎖外し候一件

本郷元町五人組持店　佐兵衛

右之もの儀、先達而不屆有之、入宿家業取放之上、手鎖申付候處、他行等致し、右御咎難儀ニ候迚、自分と手鎖を外し罷在、其上同居致し候重五郎儀、人集博弈いたし候を乍見請、其分ニ差置候儀共

不屆ニ付、百日手鎖、

右御咎附

右御定ニ、手鎖外し候もの、過怠手鎖候はゞ、定日數ゟ一倍之日數手鎖吟味之內懸置候ものニ候はゞ、百日手鎖と有之、此もの儀ハ、三十日咎手鎖之ものニ御座候間、定日數ゟ一倍之手鎖申付べく處、手鎖之儘他行致し、其上留守ニ差置候重五郎致人集博奕致し候をも相制爲止候迄ニ而、其分ニ差置候不埒も有之候間、吟味中手鎖之ものにハ無御座候得共、百日手鎖、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政四巳年御渡

京都町奉行伺

一二條西洞院東江入町茂七、吟味中手鎖を外し逃去候一件、

二條西洞院東へ入町　茂七

右之もの儀、困窮ニ付、諸會所銀等口々借受、返濟相滯候ニ付、夫々日切濟方申渡、貸物會所之口濟方不埒ニ付、手鎖之上、町預申付置候處、番之もの透を見合セ、手鎖外し、出奔いたし候儀共、不屆之至ニ付、洛中洛外拂、

此儀手鎖を外し候もの之御定書ニ、手鎖を外し、欠落いたし候もの、本罪ゟ一等重く可申付と有之、吟味書之趣ニ而ハ、貸物仲ケ間之ものゟ着類等借受、返濟相滯候ニ付、取立之儀、右會所ゟ願出、日限濟方申付候處、不埒ニ付手鎖之上、町預申付置候內、手鎖を外し逃去、追而立歸候後被召捕候由ニ付、右ハ過怠手鎖之趣意ニ而、則本罪手鎖ニ相當リ候ものニ付、前書御定ニ見合、本罪ゟ一等重く、所拂相當之ものニ候處、欠落中居宅類燒いたし、當時居宅無之上ハ、所拂申付候而ハ御仕置趣意相立不申候間、洛中拂、

朱書　評議之通濟

私脱他人手鎖

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政九戌年御渡

火附盗賊改齋藤越中守伺

一久右衛門町貳丁目代地家持九番組人宿次三郎寄子市五郎、博弈其外惡事いたし候一件、

神田久右衛門町貳丁目代地家持九番組人宿次三郎寄子　市五郎

右之もの儀、目黒不動江参詣いたし立歸り候砌、同所在村名不存、野田ニ而、馬士、又ハ非人體之もの五六人手合ニ加リ、廻り筒ニ而貳三拾錢賭之篷博弈壹度いたし、吟味中手鎖預ケ申付置候處、宿次三郎儀便用ニ參リ候跡ニ而、手鎖を外し所持いたし立出候途中、同寄子寅藏ニ出會、手鎖預ケニ相成候身分ハ押隱、酒給合候上、同道いたし、町宿見世ニ而調物いたし、數不足之由、又ハ代錢引候樣申之、酒狂之上、あばれ不立去罷在候處、寅藏儀申宥候ニ付、立出候折節居宅前ニ立居候七之助を、後ロより理不盡ニ拳ニ而打擲いたし掛候處、一同町役人に被捕押候砌、手鎖外レ候由申僞候段旁不屆ニ付、重敲之上江戸拂、

〔御定書百箇條〕牢抜、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

寛保二年極
一手鎖はづし遣候者　過料

延享元年極
但手鎖はづし候者、致欠落候はゞ輕追放、

〔科條類典下六〕手鎖を抜遣し候もの

元祿九子六月六日

芝金杉中通三丁目甚左衛門店
德兵衛

右德兵衛寄子
甚五大夫

甚五大夫儀、下谷坂本町四丁目角大夫店十兵衛手鎖懸罷在候處、子細は不存、右甚五大夫方江參

候而、手鎖抜貫申候由申に付、右十兵衛儀、先月廿五日牢舍申付候、今日此もの共召出、詮議之上申
分不分明に付而、德兵衛、甚五大夫於評定所牢舍、

右甚五大夫　子六月廿六日死罪

右德兵衛　子六月十四日赦免

古事類苑

法律部四十

下編上

閉門

逼塞

遠慮

古事類苑
法律部四十
下編上
閉門

閉門名稱

閉門ハ士分僧侶等ニ科スル刑ニシテ、其法門扉ヲ鎖シ、窻ヲ閉ヂテ、晝夜トモ出入スルコトヲ聽サズ、此刑ハ附加刑トシテ科スルコトアリ、卽チ小普請入閉門ノ如キハ、小普請入ニ附加スルニ、此刑ヲ以テシタルナリ、

〔易林本節用集言語邊〕閉門(ヘイモン)

閉門方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從二前々一之例

一閉門 寛永元年極　門を閉、窻を塞、釘〆に不レ及、

但病氣之節、夜中醫師を招候儀、幷自火は不レ及レ申、近所ゟ出火之節は、屋敷內火防候儀不レ苦、總て火事之節、屋敷危き體に候はゞ、立退、其段頭支配江可二申達一、

〔憲教類典御觸四ノ二十一〕元祿元戊辰年六月

覺

閉門遠慮之面々、家來に死人在レ之節、屋敷之內ニ被二埋置一候樣相聞候、向後左樣之節ハ、夜レ更、密々寺江遣、輕葬レ之苦間敷候、且又病人在レ之、大切におよび候はゞ、夜に入他醫を招、養生苦間敷旨、諸番頭、諸物頭江被二仰渡一之、

元祿元戊辰年六月

閉門例

〔政談秘書 三〕閉門愼之覺

一閉門通路有レ之間敷事

一門之外ゟぬき打候、無用ニ候窻をも釘〆ニいたし候ニ不レ及事、

　但し窻戸可レ有レ之候、懸戸無レ之候はヾ内塞可レ申候、

一不レ叶用事之者、夜中ひそかに可二相通一事、

一病氣之節、醫師を招候儀、夜中不レ苦候事、

一火事之節、屋敷危キ體ニ候はヾ立退、其段支配方まで可二申達一候、

自火ハ不レ及レ申、近所ゟ出火之節、屋敷内火防不レ苦候事、〇中略

　寶永元申年七月六日

〔的例問答 五〕享保五庚子年

一四月五日、井上河内守殿〇老中正岑大目付江御渡候書付、

閉門ニ而罷在候面々、御切米御扶持方之義、向後ハ親類手形ニ而可レ被レ下候、

右之趣、頭取支配々々江爲二心得一可レ達候、

　四月

〔御仕置之書 五〕閉門赦免ニ付而之一件

一閉門、赦免可二申付一と呼出候處、月代を剃於レ出者、又閉門申付候事、

〔慶長見聞記〕内府様〇徳川家康へハ信長御討死ノ後、義昌〇木曾参ラルニ依テ、上總ノ内ニテ二万石下サレ、千三郎其遺跡ヲ繼ゲルガ、伯父木曾内藏助ト申、内府公へ召出サレテ、三百石下サレテアリケリ、日比スリキリユヱ、千三郎方ヨリモ二百石合力ス、然ルニ内藏助天下一ノ轡ヲ持、名ヲバ鈴虫ト云、〇中略千三郎是ヲ傳聞テ所望シケレバ、色々惜ミ返ス、千三郎惡テ伯父内藏助ヲ呼、右ノ段

申、則手打ニ成敗ス、二人ノ家老是ヲ見テ、內府公御家人ヲ御斷モ申サズ、成敗ハ如何ナルコト、申、千三郎申ハ、伯父ナガラ我モ知行合力スレバ、家人同意也、盜人也、旁苦シカラズト申間先々亂意ノ樣ニ申上テヘイモンニ聞及ブ、

〔百一錄〕享保五年六月十二日、於賀茂傳奏萬里小路第、七家之內五家、被停官職、閉門被仰付、岡本林兩家別條無之、林家神主職被仰付、　十三日、賀茂輩於傳奏不被仰付、二條町奉行へ五家之族召寄、其留守中役人數輩馳向于賀茂、雜具以下逐一書記シ、宅邊以竹爲鹿垣、歸來之節、令籠居閉門戶云云、　六年二月十五日、賀茂社司召于二條、森飛驒(神主職)鳥居大路右京、梅辻備後守、松下民部、富野(森右京男)追放、右之輩、去年違背于勅命、依之去年六月十三日、閉門被仰付、今般流罪追放、依肆忘其分限矣、吐雅意、累代社職被召放、解却官職、滅亡其家、可謂自造禍不可逭、

〔憲敎類典(二ノ三國替所替)〕寛文十二壬子年四月三日

伊達兵部少輔、田村隱岐守、評定所(江)被召之、被仰渡覺、

先松平陸奧守儀、一門中幷家老共願隱居被仰付之、當陸奧守依爲幼少、兵部、隱岐守後見仕、家中仕置等家老共遂相談、陸奧守可守立之旨被仰付候處、兵部隱岐守不和、畢竟原田甲斐不義仕合故、家中仕置不宜、每年刑罪之族數多有之、家中不成安堵之思儀、(中略)隱岐守義ハ、就爲病者久々在所(江)も不參、家中仕置等之義、隨兵部申付閉門被仰付旨、御諚之趣、戶田伊賀守申渡之、大岡佐渡守、渡邊大隅守、宮崎助左衛門列座、

〔翁草四〕繪嶋遠流之事

月光院殿之御年寄繪嶋と申女中、(中略)段々不行跡露顯し、其懸り合ノ者ども御穿儀之上、同(正德四年)三月五日、御仕置被仰付處、左の如し、(中略)

閉門　　呉服師後藤縫殿

一縫殿事、代々御用を承り、殊ニ御奥方御用をも承候事ハ、大切之儀ニ候上ハ、御廣敷へ差出し手代ハ、其人品若年齡をも撰ミ、其制禁を立候て、女中の用事ハ、呉服物ゟ外之事ハ、不依何事隱密の事承るべからざる樣ニ、常々嚴重ニ可申付事ニ候、然るニ其年僅ニ廿歲計の若輩者を申付、數年以來御廣敷へ差出シ、彼手代之者、繪嶋申ス旨ニ隨ひ、或ハ船遊、或ハ狂言之芝居等の事相催候事、度々ニ及び候、唯今ニ至てハ、縫殿其由を不存由申披と雖、其怠慢の罪遁るべからず候、雖然御代代御用をも被仰付候者の事ニ候故、寛宥の御沙汰を以閉門せしめ候者也、

右於評諚所、大御目付仙石丹波守、町奉行坪內能登守、御目付丸茂五郎兵衞、稻生次郎左衞門、立花丹波守申渡之、〇中略

正德四年甲午年三月日

〔舊記拾要集 四〕享保八年卯九月廿五日、御用覺帳書拔、

一享保八年卯九月廿五日、於評定所御立合跡ニ而、美濃守殿御掛、俄御詮議、八ッ時過觸來、四ッ時相濟出者之覺、

能勢出雲守支配小普請
御藏米貳百俵 屋敷小石川富坂下ニ而四百坪　原　八彌 卯二十九歲 〇中略

右八彌被召出、去ル廿一日、雜司谷邊御成之節、自分屋鋪前ニ而直訴仕候、一應頭江も相達、取上ケ不申候はゞ、御目付中江成共差出候歟、致形も可有之處、上を不憚無調法仕候、依之閉門被仰付候、〇下略

〔憲教類典 四ノ二十一 御告〕寶曆五乙亥年二月

申渡之覺

安藤丹波守

幕府使搢紳閉門

安藤對馬守身持不ㇾ宜候ニ付、異見加候得共、不ㇾ相用ㇾ候處、去々年右之儀ニ付可ㇾ爲ㇾ愼置ㇾ旨、家老ども申ニ付、尤之由及ㇾ挨拶、愼せ置、其以後面談も不ㇾ致、家老共任ㇾ申旨、家事之儀、世話候得共、等閑に取計、物頭柴田又兵衞始五人之者、家老坂田齋宮不身持之儀、幷對馬守出勤致させ度由、騷々敷申出候事ニ付、委細吟味不ㇾ及、重き咎申付之由、原淸左衞門出奔之後、親類を以、身分之儀願出候節、早速吟味をも不ㇾ遂、有無之挨拶相延候ニ付、此度淸左衞門公訴、其旨を以相尋候節、相違之答申儀共、前後不行屆仕方、不念之至ニ候、依ㇾ之閉門被ㇾ仰付ㇾ候、

右松平宮內少輔殿〇若年寄於ㇾ宅、御同人御壹人ニ而被ㇾ仰ㇾ渡之、

二月

〔十三朝紀聞六光格〕寬政五年正月二十七日、議奏前大納言藤原愛親、前大納言藤原公明、以ㇾ幕府召ㇾ發ㇾ京、二月十日、至ㇾ江戶、　三月七日、幕府杜ㇾ愛親館門、禁ㇾ公明出行、　十日、二卿發ㇾ江戶、既歸ㇾ京師、

〔續視聽草八集一〕反汗秘錄追加

丑〇寬政五年　三月公家衆被ㇾ仰渡

中山前大納言〇愛親

尊號御內意一件、取計不行屆、此度下向之上御尋共有ㇾ之所、不束之御答共輕卒成取計、其外失體段候儀、不埒ニ思召候、依ㇾ之閉門被ㇾ仰付ㇾ、〇中略

右戶田采女正殿〇氏敎宅にて、老中列座、越中守申ㇾ渡之、三奉行幷大目付御目付罷越、

〔歡歲餘錄八〕寬政五年正月二十六日、傳奏議奏の公家衆關東へ召呼れ、京都出立、二月初旬着之所、同、〇同下恐脫ニ三月二字七日御叱り有ㇾ之、傳奏屋敷を直ニ所替、芝靑松寺へ引移り候樣ニ仰付られ、早々歸京あり、右御書付寫、

閉門　議奏　中山大納言

逼塞　傳奏　正親町前大納言

右ハ去ル七日於戸田釆女正〇老中、氏敎、宅大目付出席、越中守申渡、卽日青松寺ヘ引拂、早々歸京候樣ニ被仰出、愼ミ中ニ而御朱書返上、人馬證文ニ而御徒目付貳人、御小人目付貳人指添、來ル十日出立之積、〇中略、右一件ハ閑院宮、當今皇帝〇光格、の御實父にわたらせ給ふゆゑ、後花園院の父君の例にまかせ、太上天皇の尊號あらせらるべきよし内々御沙汰ありて、其後右之次第關東へ御問合に及たる所、取計不行屆、體段を志らざるよしの事にて、右傳奏議奏衆御呼下し、御叱ありける事とぞ、

逼塞

逼塞名稱

逼塞モ亦士分僧侶ニ科スル刑名ニシテ、其法門扉ヲ鎖シ、白晝ハ出入スルコトヲ得ザレドモ、夜中ハ陰ニ潛門ヨリ出入スルコトヲ得、此刑モ亦附加刑トシテ科スルコトアリ、卽チ小普請入逼塞ノ如キ是ナリ、

〔書言字考節用集 九言辭〕逼塞(ヒツソク)

逼塞方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一逼塞　門をたて、夜中くゞりゟ不目立様通路不苦、

寛永元年極

但右同斷○病氣之節、夜中醫師招候儀、并自火は不及申、近所ゟ出火之節は、屋敷內火防候儀不苦、總て火事之節、屋敷危き體に候はゞ立退、其段頭支配江可申達、

〔憲教類典 四ノ六 評定〕元文三戊午年五月十六日○中略

逼塞

一父兄弟祖父御番遠慮、只今迄之御定之通、子共父之逼塞御免之節、可有御免候、并父方之續も准之、

但他江養子ニ罷越候子孫ハ、御番遠慮只今迄之通、

右伺之上極ル

元文三午年五月十六日　月番　左近將監

〔張紙留〕天明八申年六月廿五日、山村信濃守ゟ來ル、

三十日逼塞遠慮、或ハ押込等、是迄大小之違ニ而、御用日ニ當り候得バ、三十日目赦免ニ候得共、以來ハ三十一日目、小之月ハ懸り宅ニ而赦免之積、五十日も右同様取計候積評議極ル

明和元申年十一月十一日

逼塞制度

〔御定書百箇條〕家質幷船床髮結床書入證文取捌之事、

延享元年極
一寺社付之品書入、又は賣渡證文を以、金子貸借於致候には、　證人寺院に候はゞ　逼塞

〔御定書百箇條〕新規之神事、佛事、幷奇怪異說御仕置之事、

寬保二年極
一新規之神事佛事致候もの　出家社人に候はゞ其品重キハ　所拂　其品輕きは　逼塞

五十日逼塞

〔御定書百箇條〕一變死之者を內證にて葬候寺院御仕置之事

從前々之例
一變死之者を內證にて葬候寺院　五十日逼塞

〔科條類典下四〕元文三午年二月伺書

一越後國溝尾村由兵衞悴勘助被切殺候儀ニ付、吟味一件、

越後國溝尾村由兵衞悴勘助被切殺候ニ付、弟馬之助儀訴出趣、右勘助と馬之助儀、稗畑致夜番居候處、盜人兩人來間可捕と存、兄弟雙方江引分追欠、馬之助ハ不行逢宿江歸、勘助ハ不罷歸に付、所所相尋處、隣鄕槇村地內ニ手負相果罷在候、其砌由兵衞幷親類共申合、慶顏寺江證文遣、密ニ葬置處、馬之助儀兄ヲ被殺候事、追日殘念ニ存、此度相願旨申出間、遂詮議處、其節之盜人ハ槇村杢右衞門彌助に似寄候由、馬之助申ニ付、右兩人召捕相尋處、稗盜ニ參候處、勘助追欠來ニ付、兩人ニ而殺候旨、及白狀間、伺之上左之通御仕置申渡、○中略

五十日逼塞　慶顏寺

右者疵有之死體、父幷村役人共相賴候迚、役所江も不斷、密に取仕廻候段、不埒ニ付、右之通申付、

〔兼胤公記〕寶曆六年六月十三日、越中守申、去年九月例幣之節、山田奉行之家來狼藉之儀、於町奉行所夫々召寄遂吟味候處、不調法ニ相極リ候、仍夫々仕置申付候、此段可申達由、右京大夫より申越之由、仕置之書付、爲心得爲見之由也、承知之段、右京大夫江可達之由示了、○中略

内宮神宮總代
五十日遠慮　河井圖書
三十日遠慮　薗田志摩
水野甲斐守組同心
三十日宛遠慮　濱口繁右衛門
樫坂運平
松平對馬守懸リ

右之趣兼胤詣關白殿申入了

〔的例黄紙之寫〕逼塞

安永二巳八月主殿頭殿御下知

一常州小牧村普門寺年貢地之儀ニ付、吟味一件、

土井七郎右衛門知行常州行方郡小牧村天台宗普門寺　惠潤

此普門寺惠潤儀、善左衛門參リ小作ニ入候哉、手作いたし候哉と相尋候節、取計吳候樣賴候由者、無證據申爭ひ迄ニ而難取用、高二十石餘田地荒し置、殊ニ地頭所ゟ呼出之節不罷出、鐵砲改之砌書付致難澁候段、旁不埒ニ付、五十日逼塞可被仰付哉、

右仕置附

右者去々卯十二月、安藤彈正少弼手限伺之上御咎申付候、宇都野彌十郎知行外貳給常州鹿嶋郡安坊村安祥寺洞隆儀所持いたし候地所ニ付難心得儀有之候はゝ、年貢ハ納置、別段可申立處、代代之仕持納來候年貢諸役、去ル子年以來相滯、宇都野彌十郎ゟ呼出有之候處、無年貢地ニ罷在、地頭之支配ニ無之儀を申不罷出、同人家來村方江罷越相尋候節、口上書致難澁候段、旁不埒ニ付、五十日逼塞申付候例ニ見合、五十日逼塞と御咎附仕候、

〔的例黄紙之寫〕逼塞

安永二巳四月佐渡守殿御下知　　一座懸リ

一相州相原村惣代幸助外三人と、橋本村新八外三人風祭之儀ニ付、出入一件之內、

新義眞言宗花藏院　永覺

此花藏院永覺儀、相原橋本兩村之もの共任ニ申旨ニ、兩村役人江對談も不ㇾ致、境內を貸、爲ㇾ致ㇾ操候段、卒忽之至、且相原村之內御前社地續ニ寺地有ㇾ之外物帳ニも相原村花藏院と記、兩村役人本寺役僧組合寺院連印有ㇾ之、相原村分ニ候處、橋本村分と相心得違罷在、殊ニ橋本村宗門人別帳ニ、右村花藏院と認印形致候段、仕來ニ者候得共、不束之至不埒ニ付、三十日逼塞可ㇾ被ㇾ仰ㇾ付哉、

御仕置附

右差當リ例者不ㇾ相見ㇾ候得共、一體不取〆之致方ニ候間、三十日逼塞と御咎附仕候、

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化八未年御渡

松平和泉守伺

一丹後國等樂寺村佐代次郎儀、親多左衞門を及ㇾ殺害ㇾ候一件、

松平伯耆守領分丹後國竹野郡等樂寺村曹洞宗等閑寺　祖秀

右之もの儀、村內檀家多左衞門病死に付、葬式之儀、同人女房はな、幷多左衞門弟忠右衞門賴越候由、曾左衞門、伊右衞門罷越申聞、變死之ものとは曾而不ㇾ存候得共、葬候節死骸改方不行屆不念に付、三十日逼塞、

此儀寛政六寅年、脇坂中務大輔手限伺之上、御咎申付候遠州上野郡村天龍院盆山儀、檀家比丘尼林慶弟子つきは、下保村地內字寺ヶ谷溜池にて水死致し候段は不ㇾ存候共、林慶幷村役人ゟ病死之趣に申聞、東林庵よりも疑敷儀無ㇾ之旨申聞候迚、變死之ものを得と糺も不ㇾ致、引導燒香

いたし火葬に取置候段、不埒に付、五十日逼塞可申付哉と相伺候處、三十日逼塞と御差圖相濟候例に見合、伺之通三十日逼塞、

朱書
評議之通濟

〔憲教類典四ノ二十一御告〕天和元辛酉年四月十三日

酒井雅樂頭忠清、逼塞被仰付上意之趣、

一東照權現爲上意、任家老職者、天下之先手侍大將、城主之大名致緣組儀、堅停止被仰付之處、藤堂和泉守、榊原式部大輔致聟孫聟、黑田右衞門佐ト緣組、末之娘迄撰大名取事、非上意之趣、水戶宰相殿息女被致遠慮、末之息女家中江遣之、然ニ雅樂頭背上意、窮而奢ニ被思召事、

一先年松平陸奥守家賴共諍論、雅樂頭宅對決爲上意加賀爪甲斐守被仰付之、陸奥守家賴共及狼藉、雅樂頭可有遠慮處、翌日致登城、不憚上心底、不屆ニ被思召事、

一先年甲府宰相殿勝手逼迫ニ付、爲連枝儀、故恩借訴訟有之處、不達上聞、依其恨及生害段、前代未聞也、勝手逼迫之儀ハ、雅樂頭才覺ニ寄成儀心外被思召事、

一板倉筑後守本多土佐守儀ハ、嚴有院殿從御若年之時御奉公相勤、可致立身之所ニ、外樣之樣に申成、酒井日向守、國替加增拜領之段、雅樂頭心底依怙有之樣に被思召事、

一東照權現爲上意、前一國一城加增何程、先掛又ハ鑓合分捕高名之侍ハ、何程之加增式目有之處、嚴有院殿御老中何ノ有分、雅樂頭二万石之加增、其身計イカヾト存、殘る老中江も少宛加增、下心不審ニ被思召事、

一稻葉美濃守、松平陸奥守ト緣組、美濃守儀ハ、一代之家老、子孫ハ大名並、併當職可有遠慮處、雅樂頭儀ハ、代々家老職也、其身大名之緣組イカヾ存、嚴有院殿達上聞、爲上意美濃守緣組申付候段、雅樂頭越度被思召事、

一嚴有院殿御養君京都より親王家申下之旨、雅樂頭內談難心得、當家之內御養君被遊方歷々有之、併天下ハ天下之天下、從當家之內於相續ハ、雅樂頭我儘成間敷と存、當家之內天下可相續器量無之樣ニ申成、古之北條家執權之例可任我意之所存、不忠ニ被思召候事、

一嚴有院殿御病中被爲重、大切ニ有之處、御茶差上之よし、結構成珍膳見物迄御城中江入雅樂頭自分之慰之樣ニ有之、無其間御他界被遊程之御不例、醫師之相談、三家兩典江モ一言之儀不申上、旁以難計、御臨終之節有城外ニ掛馬令登城、絕言語不屆ニ被思召候事、

一雅樂頭諸大名江饗應ニ罷越、飽珍膳、內證江致對面儀、天下之家老職不似合禮儀成親望有之樣被思召候事、

一松平越後守家頼共、國之仕置ニ付、互ニ爭威任我意、騷動達上聞之處、雅樂頭不詮議候故、一旦難申付、於今不落着之趣、依達上聞、遂糺明可申付之、雅樂頭申樣ニ爲不分明、先年堀田上野介訴訟有之節、是非不聞屆、身上被滅、於配所生害、一入不便ニ被思召事、

右之條々雅樂頭不屆不可揚計、依其領內被召上之、流罪可仰付處、家筋目先祖の忠勤依有之、今度赦免被遊、雅樂頭儀於江戶屋敷逼塞、嫡子河內守ハ於厩橋十三万石被下之、向後重上意、忠義可仕者也、仍上意之趣如件、

天和元辛酉年四月十三日

幕府使搢紳逼塞

〔續泰平年表〕天保十三年十一月十五日、小普請支配堀金十郎御咎、家事不取締、且行跡不宜、其上支配向取締方等閑之趣相聞、不束之至、依之逼塞被仰付之、同日寄合小濱米次郞御咎、兼々不行跡之趣相聞不束之至、依之知行之內二千石被召上、逼塞被仰付之、

〔續視聽草八集一〕反汗秘錄追加

丑〇寛政五年三月公家衆被仰渡〇中略

正親町前大納言〇公明

尊號御內意一件、取計不行屆、并下向之上御尋も有之處、失體段候儀、不束之取計、御役柄別而不行屆儀思召候、依之逼塞被仰付、

右戶田采女正殿宅にて、老中列座、越中守申渡之、三奉行并大目付御目付罷越、

遠慮名稱
遠慮方法

遠慮

遠慮ハ、門ヲ鎖シ、潜門ハ掩ヒテ鎖サズ、亦夜中潜門ヨリ出入スルヲ得ルナリ、此刑モ亦士分僧侶ニ科スルモノナリ、而シテ遠慮ニハ、親屬ノ處刑セラレタル時、出勤若シクハ謁見ヲ憚リ、又忌服ノ爲ニ出仕セザル等ノコトアリ、此等ハ刑名ニアラズ、

〔易林本節用集言辭〕遠慮エンリヨ

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

従前々之例
一遠慮　門をたて、くゞりは引寄置、夜中不目立様通路不苦、

寛永元年極
但右同斷○病氣之節、夜中醫師を招候儀、并自火は不及申、近所ゟ出火之節は、屋敷内火防候儀不苦、總て火事之節、屋敷危き體に候はゞ立退、其段頭支配江可申達、

〔政談秘書三〕遠慮
一門をたて、くゞり引寄可置事、
一不叶用事、又ハ病氣之節、不目立様ニ通路可有之事、
一親類、緣者、醫師、右之分不苦事、
一火事之節、屋敷危體ニ候ハヾ立退、其段支配方まで可申達候、尤遠慮なく火防可申事、

〔憲教類典四ノ二十一御告〕貞享元甲子年八月
寶永元申年七月六日
切腹　流罪　追放　御預
右者御仕置被仰付輩之親類、忌掛候分、并舅、小舅、聟、此外ハ不遠慮事、
貞享元子年八月○又見御當家令條

〔官中秘策二十〕

一武士死罪ニ成候時ハ、忌懸リ之親類ハ御番遠慮、聟舅小舅ハ御目見遠慮、
一遠島ニなり候時ハ、父子兄弟伯叔父又甥御番遠慮、聟舅小舅ハ、御目見遠慮、
一改易ニなり、或ハ御預ケ閉門、右之分ハ、父子兄弟御番遠慮、伯叔父甥ハ御目見遠慮也、
一逼塞之時ハ、父子御目見遠慮、〇又見二憲教類典一

〔憲教類典四ノ六評定〕元文三戊午年五月十六日

閉門

一父兄弟御番遠慮、只今迄之御定之通、子共父之閉門御免之節可レ有二御免一候、并父方之續も准レ之、
但他江養子ニ罷越候子孫ハ、只今迄之御定之通、〇中略

右伺之上極ル

元文三午年五月十六日　月番　左近將監

〔御定書百箇條〕隱賣女御仕置之事

延享元年極
一寺社門前町屋　右同斷〇重過料

享保十四年極
但寺院神主ハ寺社奉行にて叱置、自分にて遠慮いたし候様可二申付一候、

〔御定書百箇條〕出火に付て之咎之事

一平日出火之節
小間拾間ゟ以上燒失に候はゝ　類燒之多少に寄、三十日、二十日、十日、
享保六年極
火元　押込

寛保三年極
但小間拾間以下燒失に候はゝ不レ及レ咎、尤寺社ゟ出火にて類燒有レ之候はゝ、其寺社ハ七日遠慮

寛保二年極
一寺社門前ゟ出火之節、平日小間拾間以上燒失に候はゝ、其寺社ハ不レ及レ咎、
御成日、朝ゟ還御迄之間、且小普御殿御成還御之日、并御逗留中、小間拾間以上燒失、平日三町ゟ

遠慮例

以上之燒失に候はゞ、其寺社十日遠慮、門前之もの共咎ハ町方同段、

〔御定書百箇條〕怪我にて相果候もの、相手御仕置之事、

寛保元年極 延享二年極

一定たる矢場鐵砲場にて、外ゟ不慮に人參り掛、若矢玉に當り、縱令其人死候とも咎不ㇾ及、三十日遠慮可ㇾ申付事、

〔百一錄〕天和四年正月二十二日、葉室〈當官被ㇾ辭之〉大納言閉門被ㇾ仰付、万里小路黃門、下冷泉、裏辻御三人遠慮可ㇾ有之旨被ㇾ仰付云々、但白馬內辨之事、奉行ゟ舊冬繼內辨之事、可ㇾ被ㇾ勤之旨被ㇾ申入之處、未ㇾ傳受之間、被ㇾ勤間敷旨御斷、仍之第二大納言甘露寺亞相勤仕可ㇾ有之處、臨期可ㇾ被ㇾ勤之旨、奉行迄被ㇾ申入被ㇾ勤ㇾ之、未ㇾ傳受之上用捨之條、甚輕忽之至不屆之旨云々、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化九年十二月二日辛丑、堂上不行跡之面々、自ㇾ先達段々取調有ㇾ之、去月廿七日頃、被ㇾ仰渡有ㇾ之由、其書付今日於ㇾ藤島家ㇾ一覽如ㇾ左、

耽ㇾ遊興ㇾ不法之亂行有ㇾ之、不ㇾ恐ㇾ朝憲ㇾ其罪不ㇾ輕、依ㇾ之遠慮被ㇾ仰付候事、落飾可ㇾ願候事、

西洞院三位〇信順

〔翁草四〕繪嶋遠流之事

月光院殿之御年寄繪嶋と申女中は、〇中略段々不行跡露顯し、其懸り合ノ者ども、御穿儀之上、同〇正德四年三月五日、御仕置被ㇾ仰付處、左の如し、〇中略

遠慮　疋田吉十郎

吉十郎事、實父豐嶋平八郎、其姉繪嶋事ニ就て、罪科被ㇾ行候と雖、吉十郎事ハ他家養子と成、其上平八郎事も繪嶋に諫言之儀有ㇾ之ニ仍、其罪をも減せられ候上ハ、旁以吉十郎ニ於、兎角之沙汰ニ不ㇾ及候間、例式之如く、遠慮仕可ㇾ罷在ㇾ者也、

押込

押込ハ、戸ヲ掩ヒテ鎖サズ、然レドモ他行スルコトヲ得ズ、此刑ハ、士分庶人ノ別ナク之ヲ科ス、

押込名稱

〔易林本節用集〕言語押籠(オシコメ)

押込方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例
一押込　他出不爲仕、戸を建寄置、

〔諸例類纂五〕押込ハ戸をメ、内外共往來差留候事ニ御座候哉、

但遠慮戸メと申唱候義も、其身々々ニ而之唱改候迄之義ニ而、いづれも門を立出入差留候事御座候哉、

町方之者、おし込等ニ相成候もの、別段愼方申付候義無之候、

但遠慮之義ハ、武家寺社等ニ有之候義ニ而、門を立、潛りハ引寄せ置、夜中不目立樣通路ハ不苦義ニ候〇下略

〔幕朝故事談〕諸侯

押込隱居、池田左門、後藤庄三郎の類は、七年の内は、諸願頭にて取上げ不申候、是は思召不知故なり、七年過候て被思召出、年限も相立候に付、御免被成候と有之候得ば、其後願書取次なり、若七年過て、御沙汰無之候得ば、終身御免なし、願もならず、〇中略御目見以上は勿論、並御用達町人にても、押込御免の節は、月代をそり出る事なり、たとへ奉行所にても、緣側に上るほどの人は、そりて出る事なり、喪中にても被召候節は、そりて出る事なり、

百日押込

〔御定書百箇條〕家質并船床、髮結床、書入證文取捌之事

寛保二年極
一拜領屋敷、家質入於及出入ハ、

屋敷取上　屋敷主百日押込

但書入に致、金子借候も家質金同然之事、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政六寅年八月

戸田采女正殿御差圖

町奉行　小田切土佐守掛

一有馬中務大輔徒士中澤幸七紛失物取扱候一件

有馬中務大輔徒士　中澤幸七

右之もの儀、當時欠落錢三郎、先達而金子貸置返濟滯有之處、たばこ盆六ツ持參、金子返濟致候迄預ヶ置候間、金子入用ニ候はゞ、賣拂候而も不苦旨申聞、かたり取候品とは不存、勿論馴合候儀ニ者無之候得共、出所も不相糺預り置、其上右多葉粉盆之内貳ツ、幷此もの所持之膳椀五人前、清左衛門江代金壹兩四分ニ賣拂候處、右多葉粉盆所持主仁兵衛見咎、清左衛門江預ヶ候由、同人罷越、右之趣申聞、賣主證人判致呉候樣申聞候はゞ、其段主人江可相立處、無其儀、錢三郎行衛不相知候清左衛門任申旨ニ此者賣主判致し、茂左衛門を證人ニ相賴、同人印形不有合候迚、此もの印形之迚裏印茂左衛門名前江押用押切帳渡遣候始末不埒ニ付、預り置候多葉粉盆取上、百日押込、

〔御仕置例類集一ノ二十六〕文政九戌年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一酒井彌門家來木村藤右衛門、其外之もの共、不埒之致取計候一件、

雉子橋御門番酒井彌門家來　重役　木村藤右衛門

右之もの儀、當六月十五日、山王祭禮之節、主人爲名代雉子橋御門江相詰メ罷在候處、同家來關野傳藏妻ゑげ、其外女子共十三四人、張番取次之間、武器飾り有之候邊、又は椽頰等ニ而、右祭禮致見物居候を見請候ニ付、如何之儀と心付候得共、嚴敷相糺候はゞ、其儘ニは相濟間敷、殊ニ一同騷立致混雜、且は迷惑にも可及と存候迚、女子共致見物居候儀は不申聞、勝手向混雜致候間、心付候樣、

五十日押込

人見甚五右衛門外壹人江申聞、右兩人ゟ其段傳藏江爲相尋候處、致心配候程之儀は無之旨申聞候由、相答候ニ付、平日共違祭禮之儀、殊ニ傳藏は年來右御門番所相勤、萬事事馴候もの故、右體申聞候ニは、外ニ仔細も有之間敷、無滯相濟候之上は、夫迄之儀と等閑ニ相心得、其儘ニ致置候段、爲取締相詰候詮無之、右始末不埒ニ付、役儀取放之上、百日押込、

町奉行　小田切土佐守掛

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政四子年七月

鳥居丹波守殿御差圖

一當時無宿三郎兵衛致衒候一件

御小性組石川大隅守組窪田勘右衛門家來　小林保左衛門

右之もの儀三郎兵衛と不馴合段者相分り候得共、主人方江積送候米者、三郎兵衛儀長次郎を欺衒取候米之由、半七ゟ承候はゞ、猥ニ可引受筋無之、其上半七義、右米可積戻旨申聞候節、俵數通帳江記置、三郎兵衛名印迄も有之候迚、三郎兵衛罷出候上、不相糺候而者容易ニ積戻させ候儀取計難キ旨申之、其段主人江も不申聞、尋を請候迄其分ニいたし罷在候段不埒ニ付、引受候米取上、五十日押込、

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化十一戌年御渡

京都町奉行伺

一建仁寺門前東河原町小八儀、江州武佐宿役人に疵爲負候一件、

九條殿家來　村上隼人

右之もの儀、九條殿江館入いたし、正林寺役僧文都上京之道中、九條殿祈願所と認候人足駄賃帳を用、江州武佐宿に而人足差滯候付、跡ゟ可及沙汰と駄賃帳宿場に差置候段申立候はゞ、得と始末を承糺、重役にも申聞可取計處、唱號有之品其儘に難差置存候迚、筋違之儀とは無辨、加藤嘉藏、

三十日押込

岩槻理一郎に申付、武佐宿役人尋之儀有之旨申、再應呼登之儀爲取計、殊に使に仕立遣し候小八儀、申爭宿役人に疵附候樣相成候始末不埒に付、日數五十日押込、

〔御定書百箇條〕出火に付て之咎之事

一平日出火之節小間拾間ゟ以上燒失に候はゞ　類燒之多少に寄、三十日、二十日、十日、
享保六年極
火元　押込

一御成日朝ゟ還御迄之間、幷小菅御殿御成還御之日、幷御逗留中、小間拾間以上燒失、且平日三町ゟ以上燒失之節、○中略
寬保二年極
火元之
地主　三十日押込
同
火元之
家主　三十日押込
同
火元之
月行事　三十日押込
同
火元之
五人組　二十日押込
同
風上貳町、風脇左右貳町ツヽ、
六町之月行事　三十日押込

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化九申年御渡
日光奉行伺
一無宿仁助御用作人參盜取、又は隱鐵炮を以、小鳥打候一件、

戸田日向守足輕

野州河内郡宇都宮宿本石町住居　阿久津榮助

右之もの儀、仁助者篠井村之ものにて、以前も鐵炮修復いたし遣し、無宿に相成候儀者不存候共、古筒持參いたし修復之儀、相賴候はヾ、村役人に掛合出所等承糺可申處、既に山中に而堀出し候古筒に候を、任賴修復致し遣候段、不埒に付三十日押込、

〔大江俊矩公私雜日記〕文政元年七月十九日乙卯、俊迪晩方參小番所、是今日松室駿河夫婦土左等、町奉行役所呼出し有之、必定可爲裁許、其樣子乍聞合爲見廻參由也、歸來告云、未裁許、駿河者自今日押籠被申付、內室土佐兩人者叱リ也、猶近日可有裁許由也、　八月十九日乙酉、傳聞今朝松室駿河武邊呼出有之、押籠差免由申渡有之云々、昨日ニ而日數三十日也、

〔御仕置例類集一ノ二十二〕文政四巳年御渡

松前奉行伺

一津輕領三厩町彌兵衛方ニ請取置候、御用狀御用物等燒失およひ候一件、

三厩町　火元　嘉兵衛

外壹人

右之もの共儀、火之元之儀ハ、精々可念入處、普請小屋より出火および家數類燒致し、殊ニ名主彌兵衛方ニ預リ罷在候御用狀御用物等燒失および候始末ニ至リ候段不埒ニ付、兩人共三十日押込、

此儀吟味書之趣ニ而者、小間九十五軒半、町數壹町半餘、燒失と有之候間、平日出火之節、小間拾間ゟ以上燒失ニ候はヾ火元類燒之多少ニ寄リ、三十日、二十日、十日押込と有之御定ニ見合、彌兵衛方ニ預リ置候御用狀、御用物等、燒失および候次第ニ至リ候儀も御座候得共、右ハ持退人

無之場所ニ差置候品にも無之、既ニ彌兵衞儀御咎附候上ハ、右ニ付別段此もの御咎重り候筋御座なく間、伺之通兩人共三十日押込、

朱書評議之通濟

永押込

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年十月七日、飯泉喜內等三十七人、死罪、流罪等處刑各差アリ、〇中略

久我殿御家來春日讃岐守永押込、〇中略

一條殿御家來入江雅樂頭永押込、

御藏小舍人山科出雲守永押込、

二十七日、吉田寅次郞等二十三人、死罪、流罪、追放等各差アリ、〇中略

松平修理大夫家來大山公阿彌　如何趣相聞候ニ付永押込、國元へ差遣し、卒爾無之樣可致候、

酒井雅樂頭家來菅野狷介、右同斷、

土屋采女正家來大久保要人、右同斷、

松平豐前守家來奧平小太郞、右同斷、

御勘定奉行家來岡田新五右衞門、右同斷、

御先手本多左京組假御抱入與力小普請方假役芳賀英之助、永押込、〇中略

右於評定所五手立合申渡之、

〔一話一言 三十八〕谷中延命院御仕置一件 享和三亥年

亥七月廿九日

立花左近將監家來平田久太郞伯母尾張殿若年寄相勤候

初瀨事

なを

其方儀、屋形向奥奉公相勤候節、延命院日道申に任せ艶書通じ、其後延命院へ罷越、通夜いたし候旨申なし、日道と密會に及び、殊に書付を以相尋候節、一旦申陳じ候段、不埒之至に候、依之永之押込申付もの也、

〔兼胤公記〕寶暦九年五月七日、竹内式部仕置申渡之趣、爲心得差越之由、

申渡○中略

丸太町通富小路東江入町　河内屋八兵衛

悴　半兵衛

其方共儀、西洞院家家來專藏任頼、三本木貸座敷借リ遣候由申候得共、堂上方被相越間敷場所之儀ニ候得者、世話等決而致間敷處無其儀、不念ニ付押込申付候、

新三本木中之町藥屋茂兵衛家代　八幡屋總七

妻　みき

其方共儀、河内屋八兵衛任申旨、座敷貸し候由申候得共、堂上方被相越間敷場所之儀ニ候得者、斷可申處無其儀、不念ニ付押込申付候、○中略

卯五月

〔無人島一件申渡〕

坪内久四郎知行所常州鹿島郡鳥栖村　一向宗無量壽寺　順宣

其方儀、悴順道無人島漂流記を一覽致以來、金二郎、秀三郎申談、無人島江渡海目論見候旨承、右島開發致候はゞ、御爲にも相成、且德分も可有之と存付候得ども、花井虎一ゟ繪圖書もの等貸呉不申候に付、何れ一覽之上、同知之者へ篤と可申談と存罷在候儀にて、願濟之上渡海可致心得之由者、其方ゟ虎一へ返書之趣にて相分候得共、出家之身分にて欲情に拘り、携間敷儀へ引合候故、金

四郎始渡海一條企候者共、深く談合候仕儀に相成候段、右始末不埒に付押込申付候、○中略

右之通申渡間、其旨可ニ心得一、

亥十二月十八日

右天保十年亥十二月十八日落着、大草安房守掛リ、

但し同人病氣に付、筒井紀伊守御役所にて申渡、

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年九月十八日、佐久間修理吉田寅次郎等咎ヲ被ル、○中略

交代寄合溝口又十郎家來鳥山新三郎　其方儀、澁木松太郎事重之助は欠落者に有レ之處、其儀は不レ存候共、篤と身元も不ニ相糺一門下へ差加へ寄宿致させ置、既に寅次郎○吉田へ申合せ、御國禁を犯し候仕義に至候段、右始末不埒に付押込申付、

浦賀奉行組同心吉村一郎　其方儀、當春中異國船渡來に付、神奈川宿へ番船乘組出役致し居候處、旅宿へ佐久間修理訪候に付面會致候處、異船へ近寄見留候手段賴受、嚴重に相斷候も氣の毒に存じ、同人は總髮異體に付ては難ニ出來一旨斷に及び、其後寅次郎外一人儀修理への手紙持越、同樣相賴候節、浦賀表へ立戾懸に付、其方知己の由申し、三郎兵衞○神奈川廻船問屋へ參り可ニ承合一旨申聞候段、其場の體を程能く申繕ひ申立とは乍レ申、右始末不埒に付押込申付、○中略

右於ニ井戶對馬守御役宅一、御目付鵜殿民部少輔立會、對馬守申ニ渡之一、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年十月七日、飯泉喜內等三十七人、死罪、流罪等處刑各差アリ、○中略

有栖川殿御家來飯田左馬押込、○中略

鷹司殿御家來高橋兵部大輔押込、○中略

青蓮院宮御家來山田勘解由押込、○中略

小普請組支配小笠原彌八郎組、下田奉行手附出役大沼又三郎押込、

押込中犯法

二十七日、吉田寅次郎等二十三人、死罪、流罪、追放等各差アリ、
松平修理大夫家來長谷川惣右衛門、同人忰同速水押込、
御鎗奉行岡部土佐守家來覓承三押込、〇中略
右同人〇勝野森之助次男保次郎、同人妻ちか、同人娘ゆう、右押込、〇中略
御鐵砲方井上左大夫組與力藤田忠藏押込、〇中略
藤村權左衛門組御掃除の者岩本常助押込、〇中略
右於評定所五手立合申渡之、

〔御仕置例類集四〕天明八申年御渡
堺奉行伺
一押込中外出いたし候一件　一ツ橋領知泉州泉郡太村　百姓　平兵衛
右之者儀、三十日押込申付候內、相愼罷在候處、所持之苗代小兒共踏荒候旨承候ニ付、愼之儀も不相辨罷出、其節村役人共より嚴敷申付置、其後右苗代ニ水無之旨、隣家之もの爲相知候ニ付當惑いたし、水堰入、早速罷歸候旨申之候得共、村役人共申付候儀不相用、押込中兩度迄外出仕候段不埒ニ付、最初申付候押込之日數一倍之積六十日手鎖、
此儀手鎖外シ候もの、過怠手鎖ニ候はゞ、定之日數より一倍之日數手鎖と有之御定ニ見合、押込定之日數より一倍六十日押込、
朱書評議之通濟

戸〆方法

戸〆

戸〆ハ、庶人ニノミ科スル刑ニシテ、釘ヲ打チテ門戸ヲ鎖スナリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例
一戸〆　門戸を貫を以釘〆

〔諸例類纂五〕遠慮戸〆と申唱候義も、其身々々ニ而之唱改候迄之義ニ而、いづれも門を立、出入差留候事御座候哉、○中略

戸〆と申は、門戸を貫を以釘〆ニいたし候事之由ニ候得共、町方ニおいて右體之御咎ハ無之候、

〔公裁秘錄〕二重ニ御仕置申付候事 享保九辰年九月被仰渡

一唯今迄過料之上、戸〆と二重ニハ咎不申候由ニ候得共、重科之時ハ、過料之上戸〆申付候樣可仕候事、

〔科條類典下二〕(元)元文五申年伺

在方戸〆相止、向後御仕置之儀ニ付伺書、

只今迄在方之もの共、科之品に寄、戸〆申付候處、在方之儀は、家も間ばらにて目立不申、恥候儀も無之、御仕置相當仕間敷哉、依之向後戸〆之儀相止、過料又ハ所拂等に申付可然哉之旨被仰聞奉承知候、

右只今迄在方戸〆之儀、御料は御代官、私領は地頭江戸〆之儀申達、戸を詰候樣申付候得共、家作等取〆り不申、其上町並と違、目立不申候得ば、當人之恥辱に存候處は、町方之樣には有御座間敷哉、此段は御尋之趣、御尤奉存候、向後在方は、戸〆御仕置相止、過料、所拂、又は過料不相當所

拂にては、御仕置重過候ものは、御代官手代、私領は役人江申渡、其所におゐて手鎖可申付哉、勿論町場宿場は、只今迄之通戸〆御仕置も仕、江戸端々町屋之內在方ニ准候程之場所は、是又右之通向後相心得候之樣可仕哉、奉伺候、以上、

申三月

〔憲敎類典四ノ六評定〕元文五庚申年四月廿六日

松平左近將監殿、三奉行江御渡、

一村方名主以下之者、只今迄戸〆申付候得共、自今以後、戸〆相止、輕儀ハ叱可申、重キハ過料、又ハ名主組頭等ハ役儀取上、尙其上ニも咎可然者ハ、過料可申付事、

在中ニ而も、侍體之ものハ、戸〆をも可申付事、

右之通可被相心得候、但町續在方町奉行支配之町之分ハ唯今迄之通戸〆をも可申付候、江戸町續寺社門前之儀も右ニ准、中略

申四月廿六日

戸〆制度

〔憲敎類典五ノ十四町奉行〕享保六辛丑年五月十四日

加納遠江守殿御渡

町奉行江中略

一喧嘩口論、當座之義ニ而人殺候もの、

右之類之科人、同類ニ者無之候共、其者ニ被賴住所を隱し、或ハ立退せ候もの之事、

一戸〆に可申付事

戸〆例

〔憲敎類典四ノ五評定〕享保八癸卯年九月七日

左近將監殿御渡

寺社奉行江

水戸殿供を制候事ニ付而之御書付○中略

東叡山領池ノ端仲町
月行事
五人組
町番人

過料之上戸〆
可被申付候

右之通左近將監殿申渡之、御口上にて左之ごとく土井伊豫守、諏訪美濃守、久世大和守江被仰聞候、

享保八癸卯年九月九日

覺

只今まで者過料之上に戸〆と、二重者咎不申付候得ども、重き科之時ハ、過料之上にて戸〆申付候様可仕事に被思召候間、向後右之通可相心得旨、卯九月九日、御口上にて被仰聞候事、

〔科條類典下 二〕享保十四酉年閏九月廿一日、於評定所申渡、

一奥州信夫伊達兩郡村々致强訴候百姓御仕置

一岡田庄大夫御代官所、信夫伊達兩郡之内五拾四ヶ村、百姓夫食貸、其外御取箇免合等之儀ニ付、難立願を大勢致徒黨、御代官陣屋江押込、私領城下迄相詰致强訴、公儀を不憚重科ニ付、伺之上左之通申付、○中略

信夫郡鮫岡村名主
善八

寄合江不出村々江は押込、金錢等可ニ集取もの風聞及承候由に而、强訴寄合江百姓共差出、役儀ニ不似合不屆仕形に付役儀取上七十日戸〆

同村組頭
庄右衞門

市右衞門

身上宜ものに候處、夫食貸願之人数に入不届に付、過料之上七十日戸〆

寄合廻状、并願書印形致に付、七十日戸〆

證立願申合、廻状取次、二本松江相詰不届に付、五十日戸〆

伊達郡小神村百姓　八右衛門〇中略

三右衛門

同郡飯野村百姓　十右衛門

同村　六左衛門〇中略

同郡大窪村百姓　太次兵衛〇下略

隱居 籠居 謹愼併入 蟄居 差扣

隱居ハ、戸主ノ權ヲ去リテ、之ヲ子孫等ニ讓與スルヲ云フ、然ルニ刑法ニ在リテハ、政府ヨリ其身ヲ廢黜シテ、其食邑等ヲ子孫ニ給スルヲ云フ、但シ罪狀ニ由リテ食邑ヲ削ル等ノ事アリ、又蟄居隱居、隱居差扣等ノ稱アリ、

籠居ハ、自宅ニ籠リテ謹愼スルヲ云フ、

蟄居ハ、一室ニ蟄伏シテ愼ミ居ルヲ謂フ、而シテ永蟄居ハ終身蟄居スルモノナリ、

差扣ハ、自家ニ屛居シテ、官衙ニ出ヅルコトヲ得ズ、謹愼モ亦同ジ、蓋シ差扣ハ親屬、或ハ家來等ノ處刑セラレシ時、此罰ニ遇フコトアリ、此五種ノ刑ハ、搢紳若シクハ士分ニ科スルモノナリ、

〔憲教類典 四ノ二十一 御咎〕寶曆五乙亥年二月

安藤對馬守
名代
大久保山城守

其方事不行跡、其上家中仕置等不宜旨被聞召、不埒ニ被思召候、急度可被仰付候得共、御宥免ヲ以、隱居被仰付候、急度愼可罷在候、

安藤勝藏
名代
酒井下野守

對馬事不行跡、其上家中仕置等不宜旨被聞召、不埒ニ被思召候、急度可被仰付候得ども、御宥免を以、隱居被仰付候、急度愼可罷在旨被仰出候、家筋被思召候ニ付、高六万五千石之内、壹万五千石被召上候、五万石ハ其方江被下、嘱之間詰被仰付之、〇中略

右西尾隱岐守殿、於御宅被仰渡之、

〔憲教類典 四ノ二十一 御告〕明和六己丑年十月晦日

松平阿波守

政事之儀不宜ニ付、家中國民共及難儀候取沙汰、養子之事ニも候得バ、養方江對、旁不愼成儀思召候、依之隱居被仰付候、○中略

右於御白書院緣頰、秋元攝津守、小笠原彈正少弼江、右近將監申渡、書付兩通渡之、老中主殿頭列座、

〔憲教類典 四ノ二十一 御告〕天明七丁未年十月三日

田沼主殿頭
名代 田沼能登守

其方儀、勤役中不正之取計共有之段、追々達御聽、重々不埒之至思召候、御先代御病氣中達御聽、御沙汰之趣有之候ニ付、此度貳万七千石御取上、隱居被仰付、下屋敷江罷越蟄居いたし、急度相愼可罷在候、

〔續視聽草 八集 七〕松外刑罰

申渡之覺

間部源十郎 ○西丸御書院番 酒井山城守組

其方儀、當四月○文政六年廿二日請取當番之節、部屋二階に眠り罷在候處、松平外記其方頭へ切付、疊懸ケ右之手首へも疵受、眼中へ血流入、其儘倒罷在候段、不意之儀とは乍申、油斷之次第、不心懸之至ニ候、依之御番被召放、隱居被仰、愼み可罷在もの也、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年十月廿七日、本鄕丹後守等三人咎ヲ被ル、

本鄕丹後守

蟄居隱居

其方儀、勤役中勤方不宜段達御聽、急度も可被仰付處、出格の思召を以て、御加增高の內千石被召上、隱居被仰付、愼可罷在候、

同人總領石見守

其方父丹後守勤役中、勤方不宜段達御聽、急度も可被仰付處、出格の思召を以て、御加增高の內五千石被召上、隱居急度愼被仰付、家督其方へ五千石被下寄合被仰付候、

右脇坂中務大輔宅に於て、掃部頭老中・列座中務大輔申渡之、

寄合　石河土佐守

其方儀、勤役中勤方不宜段達御聽候、依之急度も可被仰付處、出格の思召を以て、知行の內七百石被召上、隱居被仰付候、

同人總領豐後守

其方父土佐守勤役中、勤方不宜段達御聽、急度も可被仰付處、出格の思召を以て、知行高の內七百石被召上、隱居被仰付候、爲家督其方へ二千石被下、中奥御小性御免寄合被仰付候、〇中略

右安藤對馬守宅に於て、若年寄中列座對馬守申渡之、御目付大草主膳、溝口八十五郎相渡す、

〔憲敎類典四ノ二十御告〕明和四丁亥年

織田美濃守
名代 織田主馬

其方儀、家來吉田玄蕃權高ニ而、役柄不相應之儀共有之候ニ付、先達而咎申付置候處、玄蕃山縣大貳と申者と出會、甲府、碓氷、箱根等之御要害之儀抔致物語、御場所柄之儀を申散し候もの之儀ニ付、吟味申付置候內、御吟味ニ相成候由、假ニも公儀江拘リ候儀ニ候間、其所を第一と取計、縱役人少ク候とも、可成たけハ役人江申付、早速玄蕃に相尋、其事之虛實淺深之差別に不及、不取〆事候

ども何れにも公儀江可申立處無其儀右玄蕃咎メ申付候儀ハ其方一分に對候儀ニ候處其所專ニ取計公儀江對し候儀を吟味申付置候迄ニ而等閑に相心得役人少ク候迚吟味及延引候段不埒之至ニ候依之隱居被仰付蟄居仕可罷在候〇中略

右於阿部伊豫守殿御宅御老中御列座伊豫守殿被仰渡候筒井大和守内藤主稅立合

亥八月

隱居差扣

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年八月廿七日川路左衞門尉ニ隱居差扣ヲ命ズ其孫太郎ヲシテ家ヲ續シム

西丸御留守居川路左衞門尉へ申渡　思召有之候に付御役御免仰付られ差扣可罷在候

〇

籠居

〔大江俊矩公私雜日記〕文化九年十二月二日辛丑堂上不行跡之面々自先達段々取調有之去月廿七日頃被仰渡有之由其書付今日於藪島家一覽如左〇中略

西大路三位

遊興有之加之有誘引傍輩之聞不愼之至候依之被止小番奉行稱所勞籠居被仰下候事〇中略

吉田侍從

遊興又往反卑俗之地身分不相應之儀不愼之至候依之稱所勞籠居被仰下候事

〔大江俊矩公私雜日記〕文政元年八月十九日乙酉於宮中番頭被召放兩役人以奉行有申渡由其書面後日令一覽仍注左〇中略

松室土佐

松室故陸奧出奔自宅亂行於其夜者雖爲當番平日同居身分雖若年如此家內不締之儀豫可有撿察之處不行屆之至ニ候依之稱所勞可籠居事

蟄居

〔百一錄〕寛文十三年十月五日、極﨟慈光寺源冬仲、差次中原師廉押小路大外記、可令蟄居之由、中院殿亭ニシテ被仰渡、是者去月廿一日改元夜、脂燭宣命筥等之事、仍令違背奉行命也、

〔基量卿記〕貞享二年五月六日、一昨日於東宮御所大納言典侍局、勾當局、伊與局等參會、退出之刻、鳥飼違與之次第、以勾當爲第一、次大納言典侍、次伊與ト云々、此事以外之事也、典侍掌侍爲格別、且又大納言典侍東宮御母儀、貴重事異他、鳥飼如何樣之覺悟亂次第候哉、過分之不調法也、依之爲長橋局沙汰、以佐野修理、件鳥飼令蟄居之旨達叡聞、誠過法之振舞、急度可令蟄居由、修理へ可申付仰也、六月八日、今日、先則四人於男居申渡、〇中略　蟄居鳥飼、峯平太、山本市兵衞、德岡權右衞門、白川市進、日以來籠居四人鳥飼親二人、峯内匠、白川勘之丞、爲自分之遠慮、今日より可罷出哉旨從修理大夫勾當迄被窺、可然由密々仰之間、愛宕予心得之分ニ修理へ申渡了、且主上〇靈元仰有之故也、

〔大江俊迪公私雜日記〕天保四年八月二日庚子、勸修寺前中納言〇經則依有不行跡之聞、蟄居被仰出、父子同居停止被仰出旨、昨夜自議奏口被觸旨、一﨟廻文自二﨟傳來、即四﨟江傳了、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月廿八日、九條前關白、久我前内大臣等咎ヲ被ル、各輕重アリ、〇中略

思召御旨有之辭官蟄居

岩倉大夫

岩倉中將

千種中將

姉小路中務少輔〇中略

差扣辭官蟄居

久我内大臣

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政四子年五月

松平越中守殿御差圖

町奉行

小田切土佐守掛

一松平陸奥守家來林子平奇怪異說等著述致し候一件

松平陸奥守家來林嘉膳同居弟　林子平

右之もの儀、縱令利欲ニ不致候共、一己之名聞ニ拘り、取留候儀ニも無之風聞、又ハ推量を以、從異國日本を襲候事可有之趣、奇怪異說等取交著述致し、右之內ニハ御要害之儀等も相認、其外地理相違之繪圖相添、書本又ハ致板行ニ、市兵衞方江送り遣候始末、公儀不憚仕方、不屆ニ付重追放、

御差圖

兄嘉膳方江引渡、於在所蟄居、

右御仕置附

右明和四亥年八月、依田豐前守伺之上御仕置申付候、永澤町安兵衞店浪人山縣大貳儀、常々弟子共江渡世又ハ藝術之勵ニも候間、門弟其外入魂候得バ、兵亂或ハ變事有之節、何レ之用ニも立、事ニ寄立身等可致旨申聞候段、兵亂を好候道理相當、且又甲府御城附御武器員數之儀覺候ニ任セ申散、熒惑星心宿江懸り候、右ハ兵亂之萠ニ候由、古書ニ有之候處、其後上州邊百姓共騷動候間、少シハ其驗有之事之由相咄、當時ハ禁裏行幸無之、とらわれ同前之由雜談致し、堂上方之古實ニ背キ候趣、草紙ニ認、或ハ兵學之講釋ニ付、地利江不引當候而難相分品ハ、甲州其外及見聞候國々之地利地名城々江引當、御要害之場所を譬ニ取用、講釋致候儀共、旁恐多不敬之至、不屆至極ニ付、死罪申付候類例ニ見合、此者儀ハ巧候儀も無之、不取留風聞、又ハ推量を以、如何之儀ども書綴候迄ニ而、品輕御座候間重追放、

右御尋ニ付御答

此儀先達而御仕置附ニも申上候通之例有之、右者格別品惡敷、死罪ニ相成候得共、子平儀は巧候儀も無之、併不輕儀を著述仕候段、右例ニ據も無之候間、外ニ相當之例も無之候付、右例ニ貳等引

下ヶ重追放ニ相伺申候、尤巧候筋も有之候はゝ、遠島被仰付候而も、相當可仕哉ニ候得共、前文之手續ニ而、此度御尋之趣ニ付、尙又勘辨仕候處、子平著述仕候者、不取留空談而已ニ御座候得者、御仕置當輕く相成候方可然奉存候、乍然追放等ニ而者、先々ニ而又候同樣之著述等可仕も難計御座候間、相當之例者無御座候得共、兄嘉膳江引渡、在所ニおゐて蟄居被仰付可然奉存候、

【無人島一件申渡】

三宅土佐守家來
渡邊登

其方儀、主人領分三州田原は、遠州洋中江出張候場所にて、其方儀海岸懸相心得罷在候に付、海防手當は勿論、蠻國の事情に通、主人の輔翼に相成心底にて、長英幷小關三英幡崎鼎と厚交り、蘭書を學び、西洋諸國の風俗幷去年參向之甲比丹ティマン說話等、傳聞之儘筆記致置候分書集、缺舌二間日小記〇缺舌以下恐有誤脫を著述いたし、其上追々蘭書之理義相分候に隨ひ、彼國之政敎武備等行屆候樣存候なれば、主人領分海岸手當等之儀、深心配いたし罷在候所、イギリス人モリハンと申者、日本漂流者を自國之船に乘せ、江戶近海江送來候旨、甲比丹ゟ內々申立候由之風聞及承、右モリハンは、暫唐土に留學いたし、學力も有之、當時官祿重く被用候人物之旨、傳聞の說を實事と心得、彼國表に信義を唱、漂民を送り來り候所、近年被仰出候通、打拂被仰付候ては、後來恨を結び不可然旨存迷、愼機論幷海外事情等を答候趣之書面を綴、右之內には井蛙鷦鷯或は盲瞽摸像等之譬を取、其外恐多事共を相認、御政事を批判致候段、竟畢海岸御手當薄く候ては、不慮の義有之節、國家之御爲不相成儀と、一途に存過し候心底を以、自問自答之心得にて、右之通り認置候得共、はからずも不容易文勢に流れ候に付、恐入候義と相辨、未稿を修不申下書之儘仕舞置、他見被致候義無之由は申立候得共、右始末不憚公儀不敬之至り、重役相勤候身分、別て不屆に付、主人家來江

引渡、於二在所一蟄居申付候、〇中略

右之通申渡間、其旨可レ心得、

亥十二月十八日

但し同人病氣に付、筒井紀伊守御役所にて申渡、

右天保十年亥十二月十八日、落着、大草安房守掛り、

〔嘉永明治年間錄 三〕安政元年九月十八日、佐久間修理、吉田寅次郎等咎ヲ被ル、

眞田信濃守家來佐久間修理、當寅四十四　松平大膳大夫家來杉百合之助厄介吉田寅次郎、二十五

中略　右申渡　吉田寅次郎へ、其方儀近年異國船所々渡來致し候處、元主人方勤中、養家ハ兵學師範の家筋にて、別て長州、海防の儀も致二苦心一、佐久間修理方へ入門、西洋學砲術をも、執行致し、其後浪人の身分に相成候得共、兼て御爲筋存量、且ハ舊主の恩義も有レ之、旁非常の功を可レ立心懸の處、去夏以來、異國軍艦近海へ渡來致し候趣承り及び、深く痛心いたし、西洋へ渡海、風敎軍備等委敷研究可レ致と、修理へも及二議論一候處、當今の形勢、彼を知る事急務にて、間諜細作用ひ候外良策無レ之候得共、重き御國禁ニ付、官許ハ有レ之間敷哉、自然漂流の體に成し、事情探索の上立歸、且專御國の御爲に可二相成一旨申聞、兼て內存に符合致し、頻に西洋周旋の念差發り、去秋長崎表にて魯西亞船渡來に付自分に托し候歟、又ハ漁船を雇ひ渡海可レ致と修理方暇乞に相越候處、其方胸間を察し、送別の詩を贈り、志を通し候ニ付、彌奮發いたし長崎表へ罷越候得ども、一旦歸帆の後にて便を不レ得、空敷歸府いたし候後、浦賀表へアメリカ船渡來、神奈川沖に碇泊罷在退帆可レ致趣及レ承、宿願を遂べくと存極め、澁木松太郎事、重之助も同志に付、同人と連立、橫濱村へ罷越候處、修理主人眞田信濃守、應接の警衞被二仰付一修理も人數に加り出張致し居候に付、通辨の爲、漢文にて認置候書簡草稿添削を乞ひ、重之助俱々周旋いたし候得共、夷船に近寄べき

手段無之、其内下田港へ相廻候に付、同所へ罷越、夷人上陸を見受、右書翰並別啓の策を投じ置、夜中竊に傳馬船を以て、重之助一同異船に乘込、外國同伴相賴候得共、不致承引、送戻され候儀、一途に御國の御爲を存立仕成し候旨申立候得共、右體重き御國禁を犯候段不屆に付、兄百合之助へ引渡し、在所にて蟄居申付○中略　眞田信濃守家來、佐久間修理へ、　其方儀、和漢兵學西洋學砲術等師範致し罷在、近年西洋の風敎國中に漸盛に相成候、旁蒸氣を以て走り候迅速の舶出來の趣、先年書籍の上にて發明致し、自然西洋へ隣り候道理にて、殊に近年異國船度々渡來いたし候に付、萬一本國を窺窬いたし、近海へ軍艦を進め候儀も可有之候、業體に對し、實用の場合專ら御爲筋を存じ、海岸防禦ハ勿論、必勝の籌策を考へ、日夜苦心し肺肝を摧き候處、戰ハ彼を知り、己を知と申す內、當今の形勢ハ、彼を知るに止り候と研究致候折柄、門人吉田寅次郎儀も、其方同樣海防策等の儀常に痛心致し、外國に渡り、間諜細作を用ひ度と存じ致詳論、元來同志の申分にて、其器に當り候者に候得共、異國へ渡り候儀ハ、重き御國禁に付、官許も有之間敷、自然漂流の體に致候手段を以て、西洋に渡り事情探索致し候はゞ、歸來の功も可相立と申聞、其後同人ハ九州筋遊歷として可致發足由にて暇乞に罷越、右は渡洋の企と同人胸中を察し、其意を含み、送別の詩を送候得共、右手段不被行立歸候後、當春アメリカ船、浦賀表へ渡來致し、主人信濃守儀横濱表應接所警衞被仰付候ニ付、其方儀軍儀役として同所と出張致候砌、猥に異船へ近寄間敷旨別段被仰出も有之候處、水夫に紛れ、異船に可近寄と吉村一郎へ相賴、或ハ吉田寅次郎重之助倶々宿陣へ尋參り、異船へ可乘込と通辨の爲投じ候漢文の書翰草稿を差出候迚添删致遣し、殊に寅次郎異船へ近寄候策を求め候節、是又吉村一郎へ賴み、文通認遣し、終に寅次郎外一人儀、下田表へ相廻り、同所にて上陸の夷人右書翰を投じ置、夜中竊に乘込、外國へ同伴相賴み候得共、承引不致、送戻され候次第に至候段、專ら御國の御爲を存量仕成し

永蟄居

候旨申立候得共、元來同志にて、重き御國禁を犯し候段不屆に付、眞田信濃守家來へ引渡し、在所にて蟄居申付、○中略 右於二井戸對馬守御役宅一、御目付鵜殿民部少輔立會、對馬守申二渡之一、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十一月廿五日、酒井右京大夫ニ蟄居ヲ命ズ、

酒井若狹守名代神田若狹守　其方養子右京大夫、所司代勤役中、如何の取計ひ有レ之、先達而隱居被二仰付一、御加增召上られ候處、一體公武の御間柄に付、實直に可二取扱一の處、權謀詐術の行も有レ之趣達二御聽一、御疎隔の場合にも相當り、如何の事に被二思召一、急度も可レ被二仰付一處、格別の以二御宥免一、右京大夫儀蟄居被二仰付一之、

〔翁草五〕奧州白川騷動之事

奧州白川領主松平大和守基知ハ、先祖越前秀康卿の第五男にて結城の家を相續し給ひ、十五万石の侯家也、○中略 寵臣土岐半之丞が爲に其操を蕩かされ、享保四己亥の冬より、領內の百姓共一統して、翌春三月の始め、百姓壹万人計徒黨し、白川の大手へ詰懸ケ、郡奉行杉浦德左衞門を渡し玉へ、寸々に斬て、我々一ッ宛其肉を喰て本望を達せん、其上にて呶訴の科を受、死罪に遇ん事素より覺悟なりと罵る事夥し、家老以下當惑して、色々宥るといへども、少しも得心せず、○中略 此上百姓ども如何樣の企や成べき第一江府の聞え憚有とて、先杉浦德左衞門を禁獄し、扨其濫觴ハ土岐半之丞が奸惡より出たれば、其罪死刑に當ると雖、基知尙も惜み給ひ、役儀を召放し、高繩猿町の下屋邸へ遣し蟄居せしめ、拾人扶持を附られ百姓共も是にて得心やしたりけん、漸に靜りぬ、

〔大江俊章記〕寶曆十年五月一日、口傳聞、

正親町三條前大納言○公積
烏丸前大納言○光胤
德大寺前大納言○公城

坊城前中納言〇俊逸
高野四位
西洞院四位
中院四位

右各落飾被仰付、一家之輩へ被預、彌以永蟄居之事、

但實子無之輩、家督相續之義、自一家輩可相願候、

〔公卿補任 桃園〕寶暦十庚辰年

前權大納言從二位藤公積 四十、五月廿二日落飾、法名杯水、安永六年六月二日薨、五十七才、同七年六月廿五日勅免永蟄居稱、

藤光胤 四十、五月十日落飾、法名卜山、安永七年六月廿五日勅免、

藤公城 三十一、六月八日落飾、法名樹溪、安永七年六月廿五日勅免、

前權中納言正三位藤俊逸 卅四、五月十二日落飾、法名常散、安永二年正月廿日薨、四十七才、同七年六月廿五日勅免永蟄居稱、

〔翁草 百五十〕源氏坊天一等の事

寶暦の頃、京師に於て竹内式部と云もの、堂上衆へ立入り、講席を構て、諸卿度々會せらるゝ事有、是を世に元弘の無禮講の樣に取沙汰せしが、程なく勅命下りて、出座の諸卿悉蟄居仰付られ、關東へも御沙汰ニ及ばれ、式部事御尋有けれども逐電せしとやらむにて、此事止ぬ、〇中略蟄居の人々ハ、德大寺〇公城、烏丸〇光胤、其外數多有り、其中に町尻家も有し、此卿には〇予、神澤貞幹も圍碁にて會せし事有、蟄居の後途中にてちらと見請し事も有レ共、空見して過行ぬ、頭巾にて顏を掩ひ、白衣無僕にて世を深く忍ばるゝ體なりし、德大寺家ハ、蟄居の始より申されけるは、勅勘を蒙る身が、其國の土を踏は恐れ有とて、永く禁足して終に終はられぬとぞ、痛ましき御事也、〇中略都て此蟄居の面々ハ、才覺有て、堂上にて皆稱したる人々なり、

〔耳嚢上〕烏丸光榮入道卜山之事

光榮ハ、和歌の聖とも云傳りけるが、寶暦の比にや、親鸞上人大師號願之事にて勅勘を蒙り蟄居有りしが、其明年帝〇光格御即位の御祝ひに勅免ありければ、

思はずよ惠の露の玉くしげふたゝび身にもかゝるべしとは

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月廿八日、九條前關白、久我前內大臣等咎ヲ被ル、各輕重アリ、〇中略

永蟄居　　堀川侍從女　權典侍局

〔御仕置例類集一ノ二十七〕文政六未年御渡

御勘定奉行松浦伊勢守伺

一上州德川鄉正田隼人家來今井勘助、其外之もの共隱富興行いたし候一件、

上州德川鄉　正田隼人

右之もの儀、屋敷內稻荷幷八幡社修復之爲メ富興行之儀家來今井勘助外壹人申聞候砌、先達而同樣之筋永德寺相催、同寺御咎請候儀存出、不容易儀と乍心付、右兩人强而申勸候ニ任セ、私欲ニ者不致候共、賴母子講之名目ニ而隱富興行爲致、壹番圖當之ものより差出候奉納金、都合拾四兩貳分、勘助九左衞門ゟ請取置、其後右一件吟味中、預置候勘助を取逃候間、尋申付候處、同人被召捕候迄不尋出、始末不埒ニ付、奉納金取上永蟄居、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年八月廿七日、前中納言德川齊昭ニ蟄居ヲ命ズ、

水戶前中納言殿へ、國家の御爲筋の儀仰立られ候ハ、御當然の儀ニ候へ共、御建白の次第御取用無之迚、御家來の者を以て御見込の筋品々京都へ仰遣され、加之御養君の儀に付ても輕き者ど

も宮堂上方を取繕候始末、關東御暴政の筋申成し、人心惑亂致させ、譏奏がましき事より、終に重き勅諚を輕輩の手に取扱かはせ、且綸旨を懇願等に及び候段、公武御確執國家の大事を釀候筋にて不容易儀、假令御家來の者共御內存を察し、私に周旋致し候儀に候共、御心得方宜しからざるより、右體の次第に至り、公儀へ對せられ御後闇き御處置に候、依之急度も可被仰出之處、今度重き御法會も被爲濟候に付、格別の思召を以て、水戶表へ永蟄居被仰出候、

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年八月廿六日、水戶齊昭重病ニ就テ、永蟄居ヲ免ゼラル、

此日御使御老中を以て、水戶中納言殿御病氣被及危篤候趣入御聞、出格の以思召、永蟄居御免被仰出候、內實は當月十九日、逝去と云、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十一月廿五日、久世鎌吉ノ封地一万石ヲ褫フ、並隱居大和守ニ永蟄居ヲ命ズ、

久世鎌吉名代福田甲斐守　其方父大和守儀、勤役中不束の筋有之、先達て御咎仰付られ候處、猶又追々達御聽候、故井伊掃部頭横死の節の儀ニ付、奉欺上聽候段、御後闇キ取計、御政道も不相立次第、京都より被仰進候儀も有之候間、因循遲緩の取計ひいたし、朝廷を不重、其上重き御役をも乍相勤賄賂に汚れ、家來不取締の段、不埒に被思召候、依之其方高の內一万石被召上、大和守儀ハ永蟄居被仰付之、

差扣

〔御定書百箇條追加〕重キ御役人之家來御仕置に成候節、其主人差扣伺之事、

延享四年極
一御老中　一所司代　一大坂御城代　一若年寄
一御側　一寺社奉行　一大目付　一町奉行
一御勘定奉行　一御目付　一大坂御定番　一駿府御城代
一遠國奉行

右家來徒士足輕中間等致不屆公儀御仕置に成共、其主人不及差扣候、侍以上、又ハ輕者にても徒黨致惡事御仕置に成候はゞ、差扣可相伺候事、

一遠國御役人は於其所家來致惡事御仕置に成候はゞ、右之通可相心得候事、

但表向之御役人に候共、家來徒黨致惡事御仕置に成候はゞ、其節之樣子次第差扣可相伺事、

〔科條類典下一〕延享四卯年六月、大岡越前守、能勢肥後守、神谷志摩守伺、

重キ御役人之家來御仕置ニ成候節、其主人差扣之儀ニ付申上候書付、

書面御附札之通相心得可申候、御定書江も書加可申旨被仰聞、承知仕候、

卯六月廿六日

大岡越前守
能勢肥後守
神谷志摩守

重キ御役人之家來、徒、足輕、中間等致不屆、公儀御仕置被仰付候節、其主人差扣相伺候儀ニ付被仰聞、奉承知候、

此段徒、足輕、中間等致不屆、公儀御仕置ニ成候共、其主人差扣ニ者及申間敷候、但侍分以上、且又輕きものにても徒黨いたし惡事仕、御仕置ニ罷成候節ハ、伺之上、其主人差扣可被仰付哉ニ奉存候、

六月

青紙御附札〇御定書百箇條同文故略

〔憲教類典四ノ二十二御告〕寶暦四甲戌年閏二月廿四日

宮内少輔殿御渡　御目付江

總而御咎被仰付候者、一類共ゟ差扣伺差出候覺、
御役被召放候者、父子、兄弟、祖父、孫、　同斷
閉門　同斷
逼塞
遠島被仰付候者忰
右之通相心得、此外之一類共ゟは伺差出に不及候、尤養子などに相成續遠成候歟、又ハ續無之候共、實書面之通之續有之候者ハ、伺書可差出候、
一重き御仕置等被仰付候節ハ、唯今迄之通可相心得候、
右之通、寄々可被達候、
閏二月
〔法曹後鑑〕明和二年七月二十三日
三奉行家來御仕置ニ成候節、主人差扣之儀ニ付御尋御答書、
評定所一座
三奉行家來、且足輕等御仕置ニ相成候節、其主人差扣伺之儀御尋ニ御座候、
此儀別紙ニ認差上候、御定御座候、併主人之御役筋ニ拘リ候儀ニ御座候ハヾ徒士、足輕、中間等之御仕置ニ候而も、其主人差扣可奉伺儀ニ奉存候、其外徒黨惡事之御仕置ニ無之候得者、徒士、足輕、中間等御仕置ニ相成候儀者、主人差扣伺ニ者及不申儀と相心得罷在候、
右御尋ニ付申上候趣、書面之通御座候、以上
酉七月
○按ズルニ、別紙ハ前ニ載スル延享四年六月二十六日ノ書ト同ジ、故ニ載セズ、

〔憲教類典四ノ二十一御告〕寛政三辛亥年十一月廿三日、

鳥居丹波守殿御渡　大目付江

惣而御咎被仰付候一類共ゟ、差扣伺差出候覺、

御役被召放候者

父子　兄弟　祖父孫

閉門

同斷

逼塞

同斷

遠慮被仰付候者悴

右之通相心得、此外之一類共ゟハ伺差出不及候、尤養子などに相成、續遠ク成候歟、又ハ續無之候共、實書面之通之續有之者ハ、伺書可差出候、

一重き御仕置等被仰付候節者、只今迄之通可相心得候、

右之通、寶暦四戌年相觸候之處、近來心得違候向々在之哉ニ付、猶又向々江寄々可被相觸候、

〔兼胤公記〕寶暦九年五月八日、關白殿内前○藤原被命、去年五月廿九日、鴨河洪水之節、稱水見物、新三本木貨座敷ヱ東久世前中納言、町尻三位、高倉三位、高野四位、西洞院四位、勘解由小路四位、冷泉少將、三室戸中務權大輔等行向、酒宴遊興有之、場所柄不宜所、殊右之節縣合候町人共、於武邊押込可申付事ニ候ヘバ、右之輩も相應之御咎可被仰付儀ニ候、乍然町尻、高倉、高野、西洞院、勘解由等ハ、當時御咎モ有之事ニ候間、更其沙汰ニ及間敷候、東久世ハ其節議奏御役中ニ候ヘバ、別テ不相應ニ候、差扣可被仰付、冷泉、三室戸ハ急度叱リニテ可相濟候、右之趣自殿下被言上候テハ、事重ク可相成、

殊武邊より申來候事之間、兩人參二御前一、右之段可レ伺二定一候、此外町口大判事、藤野井遠江等叱り可レ申
渡一候、併是等ハ言上ニ及間敷之由被レ命了、○中略

一久世三位、久我侍從召寄、左之趣東久世前中納言へ傳達あるべく申渡、(兩人諸奏列坐、兼胤申渡、)
去年五月廿九日、鴨河洪水之節稱二水見物一、新三本木貸座敷江行向、酒宴遊興有レ之候、場所柄不レ宜
所、殊其節議奏御役中、別而不相應之事ニ付、差扣被二仰付一候、

〔歡歳餘錄八〕寛政五年正月廿六日、傳奏議奏の公家衆關東江召呼れ、京都出立二月初旬着之所、同(○同下恐脫二三月二字一)七日御叱り有レ之、傳奏屋敷を直ニ所替、芝靑松寺へ引移り候樣ニ仰付られ、早々歸京
あり、右御書付寫、○中略

指扣　万里小路大納言
指扣　廣橋前大納言
御叱り　勸修寺前大納言
同　甘露寺前大納言
同　千種前大納言

右御叱り之譯は、尊號之儀共不行屆取計ニ付、以來急度心得可レ申旨、

右五人ハ、歸京之上、二條所司代於二役宅一、町奉行御附出席、所司代堀田相模守申渡ス、從二關東一被二仰出一
之趣關白殿幷攝家方へ所司代ゟ御達有レ之、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化九年十二月二日辛丑、堂上不行跡之面々、自二先達一段々取調有レ之、去月廿
七日頃、被二仰渡一有レ之由、其書付今日於二藤島家一一覽如レ左、○中略

花園侍從
武者小路少將

左兵衛權佐

耽遊興、又徘徊卑俗之地、身分不相應之儀、不愼之至候、依之差扣被仰下候事、

宮內卿〇三室戶能光

重服中度々遊興、殊不愼之至候、依之被止小番奉行、差扣被仰下候事、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月廿八日、九條前關白久我前內大臣等咎ヲ被ル、各輕重アリ、〇中略

中務少輔父　姉小路二位〇中略

中山大納言

調之上差扣

正親町三條大納言

差扣、御役辭退ニ不及、

〔法曹後鑑〕本多紀伊守寺社勤役中、寬保三亥年、足輕兩人他行先ニ而酒狂、御役柄を申立、町人をおどし、不屆ニ付、町奉行島長門守番ニ而、同年八月十一日、中追放申渡候、依之紀伊守差扣之儀伺候處、翌十二日御目見差扣被仰付、同十九日御免被成候、

〔翁草百九〕田沼家衰微

閏十月五日〇天明六年　左之通被仰渡、

田沼主殿頭

名代　堀帶刀

先達而御役御免被遊候得共、兼而思召有之ニ付、兩度之御加增二万石被召上、差扣被仰付候、大坂ニ有之藏屋敷も御用ニ付可差上候、尤只今迄之居屋舖も家作とも可差上候、居屋舖引拂之儀、明後七日迄に引拂候樣可致候事、

〔翁草百三十六〕小堀和泉守亂行邑除

同日〇天明八年五月六日

差扣　京元所司代　戶田因幡守

右御用番鳥居丹波守宅ニ於、大目付牧野大隅守立會、丹波守申渡之、

丸毛和泉守

其方儀、京都町奉行勤役中、伏見町人九助九郎兵衛出訴一件御吟味之儀、於彼地久留嶋信濃守、其方兩人被仰付候處、吟味不相決、數年及延引、其上不取調ニ付、於當地御吟味有之、夫々御仕置申付候、右體及遲滯候上、吟味書取調方不行屆不束之事ニ候、依之差扣被仰付候、

右若年寄御用番太田備中守宅ニ於、御目付神保喜内立會、備中守申渡之、

伏見奉行　久留嶋信濃守

右御奉書を以、於伏見差扣、

京町奉行　山崎大隅守

右御目通遠慮　無程御免

〔天保集成絲綸錄　百〕寬政二戌年二月

中奥御小性大久保榮吉、去ル三日手人召連勤ニ罷出歸宅之節、主人も無之、雇人體之もの二十人程、途中ニ待合、惡口申懸、榮吉供之者之内を及打擲候ニ付、相手可召捕と存候所不殘逃去、手合ニ不及旨に候、依之右致狼藉候ものを吟味有之候樣、父下野守申立候ニ付、町奉行江吟味之儀ハ被仰付候、自分供先之儀ニ而候得ハ、右體不法之狼藉もの、雇人體ニ候上ハ、猶更切捨ニも可申付處、可召捕といたし候より逃去候始末ニ至、不甲斐性之儀ニ思召候、依之差扣被仰付候、此旨一同以來之心得ニ申聞置候樣ニとの御沙汰ニ候、

〔憲教類典　四ノ二十一　御告〕寬政

酒井大學頭
名代　水野主膳

其方儀、先年父石見嫡子ニ相成候節之儀、酒井彌市郎申立候趣を以、御尋有之處、於右義ハ不念之筋も無之候得共、彌市郎ハ近親、其上筋目之者に候得バ、常々相親ミ、睦敷可有之處、兄山城守死去以來、取扱不行屆義も有之、疎遠ニ罷在候故、彌一郎義も隔意を生じ、今般養子申談之儀ニ付而も、嫌疑を以品々申立、出訴致候儀と相聞、不束成事ニ候、依之御目通差扣被仰付候、

〔續泰平年表〕天保十三年十一月廿九日、奥御右筆黒澤正助御咎、其方儀、屋代太郎ゟ、文昭院様(徳川家宣)櫻田御殿に被為在之內、御染筆被遊候御短冊之由にて、三枚拂物之趣申聞候處、御諱等も無之、傳來之證據も無之、眞僞難分候へ共、見事之御筆意に付、買取候旨申さいへども、御筆之趣申唱候輩は賣買可致筋に無之處、其後南藏院懇望致候ニて、春の古歌二枚賣遣候段不束之至、依之差扣被仰付候、

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年八月廿七日、水戸中納言○徳川齊昭子慶篤ニ差扣ヲ命ズ、

水戸中納言殿へ　前中納言殿○齊昭京都へ種々御内通被有之候より、御家來の者共御内意相察し、不容易企に及び候次第、公儀へ對せられ、總て御後聞き儀にも有之、御父子の御間柄、無御據儀とは乍申、御取計方も可有之處其儀無之、就ては御家來の者共、嚴重に取締可有之筈の處無其儀、剩へ御家來末々の者共、多人數出張致し、右取締方等も御不行屆の至に付、急度も仰出さるべき處、是迄追々御配慮も被有之候上の事にて、御情實止む事を得ず御場合に相聞候、依之格別の思召を以て、御差扣可被在之旨被仰出候、　九月晦日に至りて、水戸殿家來與津藏人、中山與三右衞門へ御達し、先達て御差扣可被在之旨被仰出候處、最早其儀に不及、明朔日御登城なされ候樣にとの御沙汰に候、此段可申上候、○中略

水府老臣中山備前守ニ差扣ヲ命ズ

中山備前守名代町野左近へ申渡　其方儀、家柄をも辨へ、兼々厚く心得方も可有之處、此度前

謹愼

中納言殿御心得違より、不容易企に及ばれ候段、附置れ候詮も無之、不行屆の至に思召候、依之急度も可被仰付處、若年の儀別段の御憐愍を以て、差扣仰付らる、

右和泉守宅に於て申渡し、大目付伊澤美作守、御目付鳥居權之助相越す、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十一月廿五日、松平伯耆守ニ差扣ヲ命ズ、

松平伯耆守名代小野喜一郎　其方儀、寺社奉行勤役中、飯泉喜內初筆一件、吟味取計方、不宜不束に被思召候、依之急度も可被仰付の處、格別の以御宥免、雁之間席被仰付、差扣罷在べく候、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化九年十二月二日辛丑、堂上不行跡之面々、自先達段々取調有之、去月廿七日頃、被仰渡有之由、其書付今日於藤島家一覽如左、○中略

太宰大貳○高丘永季

先年被仰渡有之處、近來又遊興不愼之聞有之、依之嚴重愼謹相守、公用之外禁足被仰下候事、

〔一話一言十一〕松平乘邑

大給松平

乘長　源次郎　和泉守　右近將監

乘邑○中略　延享二年十月九日、御役○老中免許、同十月十日隱居、加增一万石被召上、同三年、山形へ相越愼可有之旨、延享三寅年四月十五日、卒去、

〔向方御赦例書上〕

寶曆五申年十二月十一日　能勢小十郎養子　能勢源藏

一一生愼罷在候樣申渡

右之者、養父小十郎儀、深川賣女詮議之儀ニ付、町人共々頼之儀ヲ請、禮金等可取約束いたし、其上右禮金不足之由、彼是申候儀共不屆ニ付、死罪にも可被仰付候處、小十郎致病死候、依之此者儀、遠島可被仰付候得共、小十郎不屆之儀は、此者養子ニ不相成以前之儀ニ而、養父之忌服請候迄之事

ニ付、遠島御免、實方ニ而一生愼可レ罷在旨申渡、

〔嘉永明治年間錄 七〕安政五年七月六日、尾張、水戶、越前三家ニ謹愼ヲ命ズ、

尾張中納言殿慶恕　右思召の御旨も被レ爲レ在候に付、外山屋敷へ居住、急度穩便に御愼可レ爲レ成候事、　松平攝津守義比　尾州家相續被二仰出一之、德川と可レ稱旨、攝津守相續人の儀ハ追て可レ然者見立可二相願一旨被二仰出一、

水戶前中納言殿齊昭　思召の御旨被レ爲レ在候に付、駒込屋敷へ居住、急度穩便に御愼可レ被レ成旨被二仰出一、

松平越前守慶永　思召の御旨被レ爲レ在候に付、隱居愼被二仰付一事、　松平日向守直廉　越前守隱居愼被二仰付一候に付、其方へ家督相續無二相違一被レ下、日向守相續人の儀ハ、追て可レ然者を見立可二相願一旨被二仰出一之、〇中略

卷說、尾州、水戶、越前、一橋等、今般の一條種々の風說あれども、皆流言にて、其實は先月廿四日、尾州、水戶、越前三家急登城にて、亞國條約談論、當時執政彥根侯〇井伊直弼と、開鎖齟齬の一條なれ共、種々の流言を發し、今般三家謹愼、一橋卿登城差留に相成と云、

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年八月廿七日、刑部卿一橋慶喜ニ隱居愼ヲ命ズ、

一橋刑部卿殿へ　思召の御旨在せられ候に付、御隱居御愼仰出され、只今迄の御領地其儘、幷に御附人御抱入の者共も、一橋附と仰出され候、

〔嘉永明治年間錄 九〕萬延元年八月廿八日、尾張前中納言、德川刑部卿幷ニ謹愼ヲ免ゼラル、

尾張前中納言殿　右は先達て御隱居急度愼被二仰出一候處、出格の思召を以て、急度御愼御免被レ仰二出之一、

德川刑部卿殿　前同斷

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年十一月十一日、松平容堂ニ謹愼ヲ命ズ、

松平鹿次郎一類山內遠江守差添、大目付平賀駿河守、別紙之趣松平容堂方へ一同罷越可被申渡候、

松平容堂

其方儀、家督中堂上方へ不容易事共申進候趣相聞え、京都へ通路の儀ハ、猥に致間敷筈の處、右體の次第、不憚公儀致し方、依之急度も可被仰付處、當時隱居の身分に付、御宥恕を以て、愼可罷在旨被仰出候、

〔嘉永明治年間錄 十一〕文久二年八月十六日、前閣老安藤對馬守ノ封地一万石ヲ削ル、並隱居謹愼ヲ命ズ、

申渡　安藤對馬守名代小野次郎右衛門

對馬守勤役中、不正の取はからひ有之候段、追々達御聽、急度も可被仰付候處、出格の以思召、先達て被仰付候村替の場所、其儘被召上、替地の儀ハ追て可被下候、且又隱居被仰付、急度愼み可罷在旨被仰付之、〇中略

前閣老久世大和守ノ增祿一万石ヲ削ル、並隱居謹愼ヲ命ズ、

久世大和守名代小野次郎右衛門

大和守勤役中、不束の取計ひ有之候段、追々達御聽、急度も可被仰付處、出格の以思召、先達て御加增一万石召上られ、且又隱居仰付らる、急度愼み可罷在旨、被仰付之、

古事類苑

法律部四十一

下編上

改易

沒領地　削領地併入

關所

地面等取上　家業取放併入

役儀召放

扶持召放　減祿 併入　解官
除籍　停出仕

古事類苑

法律部四十一

下編上

改易 沒領地 削領地 併入

改易ハ、士分以上ノモノ籍ヲ除キテ、其食邑、家屋敷ヲ沒收スルナリ、領地ヲ沒收シ、領地ヲ削減スルハ、士籍ヲ除カザルナリ、而シテ領地ヲ削減スルニ、封ヲ移シテ減ズル者アリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一改易　大小渡、宿江相歸し、夫々爲立退申候、

但家屋敷取上、家財無構、

〔憲教類典〕五ノ十四 町奉行 正德元辛卯年四月

覺

一改易之者之內、御構之所江申渡候も有之候、前々之通、改易ニハ御構之所無之樣可被仕候事、〇中略

右之通向後可被相心得候、以上、

正德元卯年四月

〔諸例類纂〕五 一改易ハ、住居御構等ハ無之、御暇被下、平民ニ相成迄、此名目ハ當主幷嫡子ニ限リ候事、

〔太閤素生記〕一太閤本妻ハ、同國〇尾張津島ニ、淺野又右衞門ト云有德人アリ、又右衞門姪ナリ、淺野

彈正從弟、淺野又右衞門妹ノ娘ナリ、同國朝日村ト云所ヘ緣ニ付被行、其子男子木下肥後守、後木下法印ト號ス、此子勝利立野少將、後若狹少將關ケ原以後改易、東山靈山ニ引込被居、長嘯歌人、普ク人ノ知ル人ナリ、

〔太閤秀吉出生記〕一秀吉ノ本妻政所ノ弟、木下肥後守ノ嫡子勝俊立野少將、後號若狹少將、ト云、關ケ原陣之節、有故而被改易、東山靈山ニ引籠號長嘯、歌人也、

〔紹家錄乾〕慶長十一年

二月改易　彥坂小刑部元成

六月改易　大嶋雲八〇中略

五月廿六日好色に付改易　五左衞門　松平若狹守

〔當代記〕慶長十七年三月十二日、此頃ハ伴天連宗ニ、日本人成事被禁、小笠原權之丞、榊原加兵衞、原主水、此外右之輩被改易、至自今以後ハ、十人組ニ諸奉公人ヲナシテ、若其中ノ者、於成彼派ハ、則可申出トノ義也、

〔當代記〕慶長十九年七月十七日、下野國佐野城主富田修理大夫改易、　廿八日、信州松下ヱ被預間、今日彼地ヱ行、

〔萬天日錄〕寬文五年十一月三日ニ、酒井長門守忠重、有故而御改易、

〔月堂見聞集十一〕一享保四年亥六月十三日、申渡覺〇中略

馬場源兵衞
悴　追放

御代官相勤候處引負仕、年々上納相滯不屆ニ候、依之改易被仰付者也、

〔向方御赦例書下〕延享二丑年八月十六日

竹中周防守支配元小普請
木部庄八郎

改易

右之者聟大御番田中元吉儀、妻子召連出奔いたし候處、此者方ニ元吉妻子共ニ罷在候旨、元吉頭水野河内守組與頭戸田半三郎江申達、其後彼是相違之儀申ニ付遂吟味候處、元吉居所相尋呼返度、虚言申候旨ニ候得共、自分之儀ニ付、僞候儀は無之ニ付改易、

〔翁草五十四〕濃州郡上噪動幷金森家邑除大略

金森家の苛政、數々令露顯ニ仍、寅九月、〇寶暦八年金森兵部少輔賴錦、指扣仰付られ、〇中略同十月廿九日、於評定所左之通被仰渡、

長門守養子
本多兵庫頭

父長門守、不屆之品有之ニ付、松平越前〇前一本作後守へ御預被成候、依之其方改易被仰付候、

近江守惣領
大橋海老之助

父近江守、不屆之品有之ニ付、相馬彈正少弼へ御預被成候、依之其方改易被仰付候、二男大橋主水、三男同主膳、右同斷、

〔續視聽草八集七〕松外刑罰

申渡之覺

神尾五郎三郎〇西丸御書院番酒井山城守組

其方儀、當四月〇文政六年廿二日請取當番之節、部屋二階に轉寢致罷在候處、夕七ッ時過、物音ニ而目覺、松平外記相番共を及刄傷候ヲ乍見請、捕押も不仕、上リ口之方へ開キ後江疵ヲ請、二階ゟ落、白衣無刀之儘、御番所江欠出、蘇鐵之間迄參リ候段、卑怯之次第、剩有體申立がたく存、逃出し候を押隱し罷在候段、旁不埒之至に候、依之改易被仰付候もの也、

没領地

〔幕朝故事談〕西國蟲付の時、豐後代官松田庄兵衛開倉救百姓の褒美被下、夫子在下總中、奥州饑饉の節申立延引に付、百姓多餓死、御代官御改易、御勘定奉行稲生下野御役御免被仰付候、

○

〔憲教類典〕(二ノ三 國替所替) 年號月日不知

松平石見守領知被召上候時被仰渡覺

覺

一今度松平石見守家來之者共立退候ニ付、此間被遂御穿鑿候處に、石見守義、家中之仕置不作法ニ申付により、領地被召上、松平相模守領内に可罷在之旨被仰出候、然ば子どもに、堪忍分として、壹万石被下候事、

〔憲教類典〕(二ノ三 國替所替) 萬治三庚子年十一月十三日、堀田上野介領地被召上候節奉書、

覺

一佐倉城在番、本丸ハ安藤對馬守、二丸ハ新庄越前守被仰付候間、本丸二丸三丸至町中迄、番所見合之可被相渡事、

一家中明屋敷番之義、其所之町人共に見計可被申付事、

一寺社領先規之證文、并新寄附有之ニおゐては、兩樣可致事、

一上野介御役高之内、撿地於有之ハ、兩樣可致事、

一佐倉城付之武具於有之ハ、改之注帳面可差上事、

一給人城下拂之義、上使并御目付之到着ゟ可為三十日事、

附給人佐倉領ニ在之度と申輩は、遂穿鑿心次第可差置之、立退輩於有之相望者、先々ニ而無違亂可借宿旨、兩人之御目付ゟ證文可遣事、

一領地之義ハ、并出重左衞門、守屋茂兵衞ニ可引渡之、改之時人入におゐてハ、安藤對馬守、新庄越前守家來可被指添事、

萬治三年庚子十一月十三日

美濃守
豐後守
伊豆守
雅樂頭

朽木民部少輔殿
安藤一郎兵衞殿
猪飼半左衞門殿

右は御書付ニ而は無之候間、取調之上可相認候、

〔御當家令條三十五〕一柳監物江申渡覺

一禁中御作事初、并御移徙前兩度、上京可仕之旨、御暇被下候節、兼而被仰出候處、御移徙相濟候以後罷上候事、

一今度參勤之砌、煩之由ニ而、遲參之斷之書狀延引、其上參府以後氣色之樣子、何共年寄共方江斷不申候事、

一常々家中并領分百姓等之仕置惡敷、殊更內證好色不作法事、

右條々不屆千萬被思召候間、領知被召上之、松平加賀守江被成御預者也、

寛文五年巳七月廿九日

〔憲敎類典二ノ三 國替所替〕寛文六丙午年五月三日

京極丹後守御預ニ付、諸大名江被仰渡之覺、

覺

京極丹後守家督相續以後、對父安智不孝之由雖被及聞召、御宥免之處、今度安智訴狀從去冬至當春用所之義ニ付、數度書狀差遣候處、兎角令難澁、其上一類中或不和、或不通、幷家中之輩領内百姓共困窮之仕置惡敷、依之領地被召上之、丹後守ハ南部大膳大夫、近江守ハ藤堂大學頭被成御預者也、

午五月三日

〔憲教類典 二ノ三 國替所替〕寛文八戊申年二月廿七日

高力左近大夫江 申渡覺

一高力左近事、領地仕置惡、非分課役申掛、士民令こんきう由、國廻リ幷浦廻リ之面々江、領内之輩數多訴之、非分之通無紛之趣、面々歸參之上及言上、嶋原之義ハ爲亡所處、從方々百姓集之、居住仕候樣ニ父攝津守江被仰付、從公儀御金米被下之、御取立之處、在々所々痛候樣に仕、其上家中仕置不立、下をくるしめ其身奢を極候段、重々不屆被思召、領知被召上之、松平龜千代江御預、嫡子伊豫ハ酒井左衞門尉へ、次男右衞門ハ眞田右衞門江被成御預者也、

寛文八戊申年二月七日

〔廢絶錄 下 常憲院殿御代〕貞享元年

廿六万石餘　越後高田城　松平越後守光長

延寶七年より、光長が重臣等訴論の事ありて、諸家に預けらるゝの所に、是年六月廿一日、小栗美作正矩(光長が叔母婿)、荻田主馬某、永見大藏長良(光長が叔父)を營中に召れ糺明あり、廿二日、正矩が驕恣不忠の罪をもつて、其男大六長治とともに死を賜ふ、○中略 廿六日、光長家中を鎭撫する事あたはず、騷動に及ばしむる罪を以て、領地を沒收し、松平隱岐守定直に預けられ、廩米一万俵を賜

はり、京極備中守高豊伊豫國に護送す、

（廢絕錄　常憲院殿御代下）貞享元年

三万石　上州沼田城　眞田伊賀守信利

十一月廿三日、兩國橋改架あるによつて、領地より材木を出すべき事を命せらるゝに、敎を奉りて、無狀なるがうへ、平生の所行、及び家中領内の政道宜しからざるがゆへに、領地を收め、奥平小次郎昌章に預けられ、○下略

（廢絕錄　常憲院殿御代下）貞享元年

四万石　駿州田中城　酒井日向守忠能

十二月十日、姪河内守忠舉逼塞せしめらるゝによつて、江戸に來て遠慮して在べきやと、御氣色を伺ひ奉るべき事なるに、居城に逼塞せし條、人臣の禮を失ひ、且平生の所行、及び家中領内の政治道に乖ける事多しとて、領知を沒入し、井伊掃部頭直興に預られ、○下略

（廢絕錄　常憲院殿御代下）貞享元年

一万八千石　奥州窪田　外能登國野々市　土方伊賀守雄直

六月十日、舍弟林助之進貞辰なる者、雄直と確執ありて訴狀をさゝげ、東叡山に退くに依て、搜索せしめられ、松平佐渡守忠充に預られ、家臣二人を溝口信濃守重雄に、兄刑部雄信を松平遠江守忠俱に預らる、○中略　七月廿二日、雄直家中を鎭撫する事あたはざる罪に依て、領知を收められ、榊原虎之助政邦に預けられ、○中略

一万石　筑後松崎　有馬伊豫守豊範

七月廿八日、土方雄直が事に坐し、出仕を憚り、晦日、豊範親族の好身を忘れ、雄直が家士の爭論を調和せざるの罪に依て、領知を沒收せられ、男釆女豊胤と同じく中務大輔頼充に預けらる、

削領地

〇下略

〔三王外記 憲王〕王〇德川綱吉於諸侯能用其威、終王之世、大小諸侯、或有罪、或無嗣、或失心、亡國絕世者甚多、宗室則越後侯光長〇松平二十五萬石、其他宮津侯尙長〇永井七萬石、鳥羽侯忠勝〇內藤三萬石、田中侯忠能〇酒井四萬石、沼田侯信利〇眞田三萬石、參政稻葉通秀二萬石、烏山侯資祗〇那須三萬石、侍中北見重政二萬石、高遠侯忠常〇鳥居三萬石、石河侯忠之〇松平八萬石、北松山侯勝賢〇水谷五萬石、圓丘侯重益〇本多四萬石、出石侯吉英〇小出五萬石、福山侯勝峯〇水野十萬石、美作侯長成〇森十八萬石、伊丹勝乘萬石、赤穗侯長矩〇淺野五萬石、此皆國除、其他諸大夫以下、秩不滿萬石者、不可勝數、

〔武德大成記 二十〕毛利輝元八州ヲ除カルヽ事

毛利輝元木津ヨリ安藝國ニ歸ル、〇慶長五年九月神君〇德川家康怒リ解ケ給ハズ、台德公〇德川秀忠ヲシテ是ヲ征伐セシメント欲ス、輝元恐レテ、井伊直政ニ憑テ和ヲ請フテ曰ク、內府公我家ヲ滅サズンバ、周防長門兩國ヲ領シテ足レリ、其餘ノ八州ハ悉ク是ヲ獻ズベシ、直政懇ニ請フ、神君是ヲ許ス、神君誓詞ヲ輝元及ビ長門守秀就ニ賜テ、父子ノ命ヲ許シ、周防長門兩國ヲ授ケ、安藝、備中、備後、因幡、伯耆、出雲、隱岐、石見ノ八州ヲ除ク、井伊直政モ亦誓詞ヲ添テ其證トス、

〔創業記 五〕慶長五年十月、前田能登守〇利長ガ領知能登國ヲモ除カル、

〔武德大成記 二十〕佐竹義宣水戶城ヲ沒收セラルヽ事

五月、〇慶長七年神君佐竹右京大夫義宣ヲ譴責シ、常州水戶城ヲ沒收シ、采地八十万石ヲ減ジテ、秋田砥澤二十万石ヲ賜フ、

〔御當家令條 三十五〕寬文八年八月十五日

諸大名被召之被仰渡覺

今度奥平美作守〇忠昌相果候砌、家來之者、御法度之追腹仕候、因茲跡職御立被成間敷處、大膳亮

先祖、御代々御奉公相勤、其うへ美作守儀、御當代御部屋住之時分、被爲附候筋目有之付、御宥免被成、於羽州山形、九万石大膳亮江被下之、貳万石減地被仰付之旨、酒井雅樂頭申渡之、

十五万石　播州姫路城　松平大和守直矩

〔厳絶錄下常憲院殿御代〕天和二年

二月九日、さきに越後守光長が家臣爭論の事、その計ひあしきが故に、閉門せらるゝといへども、是をゆるされ、姫路の城地十五万石の内、八万石を收められ、豊後國日田に移され、七万石を賜ふ、〇中略

三万石　出雲内　松平上野介近榮

二月九日、さきに光長が家臣爭論の計ひあしきが故、閉門せしむといへ共、免されて領地の半を除かれ、一万五千石を賜ふ、

〔三王外記憲王〕王〇徳川綱吉於諸侯能用其威、〇中略諸侯有罪、削地徙封、若貶爵秩者、宗室則越前侯光通〇松平五十萬石、削其半、姫路侯直矩〇松平十五萬石、削其半、收姫路城、而徙封日田、其他本多忠倘萬石、削三千石、而除侯籍、白川侯忠弘〇奥平十五万石、削五萬石、徙封山形、西郷治員萬石、貶其半秩、而除侯籍、宇多侯信武〇織田三萬石、削萬石、而徙封柏原、中津侯長胤〇小笠原八萬石、削其半、長島侯忠充〇松平萬石、貶其半秩、收長島城、而除侯籍、盤郡侯氏音〇丹羽二萬石、削其半秩、收盤郡城、而徙封頸城、懸河侯直明〇井伊三萬石、削萬石、收懸河城、而徙封與板、此其大略也、

〔幕府時代屆申渡抄錄〕封廻狀

仙石道之助名代
能勢總左衛門
玉虫十左衛門

其方元家來にて出奔致し候、神谷轉事、虛無僧友蔦儀、不屆有之ものに付捕渡の儀、筒井伊賀守へ申越候間召捕候、然る處他の引合も有之に付、寺社奉行にて及吟味候處、其方家政向不正、其外不容易儀ども相聞候、依之於評定所被遂御詮議之處、家老仙石左京儀、其方家政を取亂し、身分不相應奢侈超過致し、殊に其身の非を爲可取隱奸計を以、主人爲筋を申立候家來共を、讒訴の趣に吟味爲詰、死罪其外之仕置申付、且又宇野甚助等、左京に合同、其意不輕不屆の取計致候始末、及白狀候に付、夫々御仕置被仰付、政事向の儀は、第一の儀に候處、家來共家政取亂し候を其心得も無之段、不調法に被思召候、依之急度も可被仰付候得共、若輩の儀に候間、格別の思召を以、高五萬八千八十八石餘の內、城知其儘被差置、二萬八千八十八石餘被召上、三萬石高に被成候、且又閉門被仰付之、

右於伯耆守宅、老中列座同人申渡之、大目付初鹿野河內守、御目付大澤主馬、羽太庄左衛門相越、

十二月

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十一月廿五日、井伊掃部頭ノ封地十万石ヲ削ル、

申渡覺　井伊掃部頭名代小堀大膳

其方父掃部頭、重き御役相勤め、御幼君御補佐に付ては、萬事御委任被遊候處、奉對京都、被爲惱宸襟候樣の取計致し、公武御合體にも差響き、天下の人心不居合の基を開き、且賞罰黜陟共、我意に任せ、賄賂私謁の儀も少からず、上の御明德を汚し、不慮の死を遂候に至りても、奉欺上聽候段、追々御聽ニ達し、重々不屆に被思召、急度も可被仰付處、死後之儀にも有之、出格の御宥免を以て、其方高の內十万石被召上之、

間部下總守ノ封地一万石ヲ褫フ

間部下總守名代間部熊太郎

其方儀、勤役中外夷取扱の儀に付ては、奉對朝廷不正の取計ひ有之、重き方々へ不相當の仕向致し、右ハ故井伊掃部頭の意を受候とは乍申、重大の事件輕易

に心得、公武の御一和を失ひ、天下の人心不居合を開き候段、追々達御聽、御役柄をも不辨次第、不束の至りに付、急度も可被仰付候處、格別の以思召、先達て村替被仰付候一万石被召上、隱居被仰付候、急度愼ミ可罷在候、

下總守嫡子間部安房守、前同文、其方へ家督四万石無相違被下候、

野州宇都宮
戸田越前守忠恕

〔廢絶錄下 愼德院殿御代〕慶應元年

七萬七千八百石之内
減知二万七千八百石

正月廿五日、昨秋野州賊徒暴行及候に付、爲討手公儀御人數被差向、諸家へ追討被仰付候へども、其方も同心被仰付候處、右賊徒へ其方家來共之內、從來關係いたし候ものも有之、其上家來共出張方も彼是不都合に相聞、且心得方迄も等閑いたし候趣、畢竟家督以來、家政向不行屆故、遂に右之次第にいたり、不束之至に被思召、依之領知之内二万七千八百五十石被召上、隱居急度愼可罷在、爲家督之家、土佐守江五万石被下、追て所替被仰付候、

闕所方法

闕所　地面等取上　家業取放 [併入]

闕所ハ、沒官ナリ、其重キモノハ田、畑、家、屋敷、家財ヲ沒收シ、次ハ其中ニテ家財ヲ除キ、又其次ハ田畑ノミヲ沒收ス、是ハ士分庶人ヲ擇バズ、死刑、遠島、追放等ノ罪ニ科スル所ノ附加刑ナリ、

地面等取上ハ、年數ヲ限リテ沒收シ、期滿ノ後ニ本主ニ還付スルナリ、

家業取放ハ、家業ヲ停止セシムルヲ云フ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

町人百姓 重輕中 追放

重追放欠所　田、畑、家、屋敷、家財取上、

中追放欠所　田、畑、家、屋敷取上、

輕追放欠所　田、畑取上、

延享二年極追加

一江戸拾里四方、並住居之國、懸事仕出候國共構之、

但田、畑、家、屋敷無之者は、家財取上、田、畑、家、屋敷、家財も無之ものハ、輕重之沙汰不及候事、

〔御定書百箇條〕御仕置に成候者欠所之事

一磔　一火罪　一獄門　一死罪　一遠島　一重追放

從前々之例 延享二年極 追加

右御仕置に申付候者ハ、田、畑、家、屋敷、家財共欠所可申付、中追放、田、畑、家、屋敷、輕追放ハ田、畑計欠所可申付、家財ハ中輕ともに不及欠所に、吟味之内致病死候共、吟味詰御仕置可申付者に決候上致病死候ハヽ、伺に可成筋、御仕置ものハ伺之上欠所可申付事、

延享元年極

但下手人ハ不及欠所、此外專利欲に拘候類ハ、江戸十里四方追放、幷所拂にても、田、畑、家、屋敷

欠所可申付、貪たる儀於無之ハ、不及欠所候、

同 一御扶持人にても、重追放以上ハ、欠所仕形右同斷、中追放輕追放ハ、家屋敷計欠所、家財不及欠所候、

從前々之例 一妻子之諸道具、其外寺社付之品ハ構無之事、

元文五年極 一私領百姓、公儀御仕置に成、田畑、家屋敷共に欠所之節ハ、地頭へ取上可申旨可申渡事、

寛保三年極 但田畑質地入置候はゞ、證文吟味之上、定法之質地に相違於無之ハ、質入之田畑拂代金之內を以質取候者江元金可相渡、金高不足に候ハヾ、地面にて可相渡、若又年貢滯有之者、右質入地面拂代金を以、先年貢引取、質取主江ハ殘金之內を以元金可相渡、尤金高不足之分ハ、金主可為損失事、

從前々之例 一夫御仕置に成、闕所之節、妻持參金幷持參之田畑、家屋敷も可致欠所事、

但妻之名付にて有之分ハ、不及欠所候事、

寛保元年極追加 一御仕置に成候者、亦ハ欠落者、欠所之節ハ、當人貸置候金子、幷賣拂金手形帳面等有之候共、借主ゟ不及上納に事、

但借主右金子之儀に付、不埒之義も有之候はゞ、取立可為致上納事、

延享二年極追加 一在町共家屋敷家質に入置候者、御仕置に成、右屋敷欠所之節、金子請取度義願出候はゞ、證文吟味之上、於無相違には、是亦質地同樣に可申付事、

〔科條類典下二〕元文四未年三月差上、翌申五月十日、綠色御書入、御好之趣有之帳面之內、

寛永三戌年 (元)妻持參田地之事

覺

一御料私領共、娘幷姉妹等緣付候節、田畑を附遣し、夫惡事有之、仕置ニ成候上、家財田地、右妻之持

參候田畑共闕所ニ成、妻之親、幷兄弟諸親類等に迷惑之由訴出候而も、夫と妻無別儀罷在候得ば、妻之持參候田畑は、夫之田畑ニ而候、金子に而致持參候得ば、當座に遣捨候間、夫仕置に成候上は、可戻樣無之候、是に准じ候得ば、田畑も闕所に可成筋ニ而、妻之方江は戻間敷儀故、向後此類願出候はゞ、月番之奉行所ニ而、無取上段申渡、初判不及出之可相返、

右品之儀、御勘定奉行江、堀七郎右衛門知行、下野國朝倉村次左衛門と申もの訴出、裏判相願候間、今日一座相談之上相伺之、但江戸寺社門前町方ニ而、家屋敷差添縁付候も、右同樣之儀ニ候はゞ可准之事、

但妻之名付ニ而有之分は、可爲格別、

戌三月十二日

〔科條類典 下 二〕㊄寛保元酉年伺

闕所ニ成候者之借金手形賣懸帳等之儀ニ付書付

向後書面之通可仕旨被仰聞承知仕候、

酉八月廿二日　　評定所一座

御仕置ニ成候者、又は欠落仕候者、借り金手形賣懸帳面等を以、借り主に上納爲仕候儀、借り主江御咎等有之者江上納爲仕候もの格別之儀、左も無之者に、金主不埒を以借り金上納爲仕候儀如何に候、右之儀相改候而は、借り方之者、却而巧を以、不屆之筋も出來可申哉、只今迄之仕方可申上旨被仰聞承知仕候、

一總而御仕置に成候者、又は欠落仕候者、家屋敷家財闕所に成候節、所持仕候借金手形、又は賣懸帳有之候得共、借り方之者懸吟味、借り金賣懸之代金等、早速相納候樣に申渡、縦ば金高百兩に而、五六兩も相納候得ば、殘りは五年賦拾五年賦程にも、其ものゝ身上金高に應、取立申候、又は

家質或は家藏等賣渡之證文致所持候類は、借り主江相尋、當分金子に而上納難成旨相決候節は、家藏等拂に申付、右拂代金相納させ、殘金有之候得ば、家持主江餘金爲戾、不足に候得ば、不足之金高、追々相納させ申候、

右之通只今迄仕來候得共、向後相改、障儀有之間敷哉評議仕候處、右借り金、又は家質賣渡之品共大金之借請候ものゟ返濟不仕ため、巧を以金主外之不屆を荷擔之者抔江爲訴、御仕置に成候得ば、金子借り德に成候樣に謀計仕候類も出來可申哉に御座候得共、右體之巧仕候もの有之候はば、其節奉行所に而吟味可仕事に御座候、然ば右手形帳面等之借り金は、奉行所に而不及沙汰、相構不申筋可然奉存候、以上、

八月

〔公裁秘錄〕取上田畑之事

一田畑取上候者之義、科重候はゞ、田畑幷居屋鋪とも取上可申候、

但し居所ハ無構

一屋敷計り、田畑無之候ハゞ、重科過料申付候者共ニ同斷之事、

私領百姓、公義御仕置ニ成候節、田畑闕所之事、

一今度八王寺千人組同心之內、追放罷成候者共、田畑不殘闕所ニ上り候、右田地之內、私領方之地致所持候もの御座候、唯今迄ハ私領之百姓、公義御仕置ニ成候得バ、家財も公義へ闕所ニ成、田畑ハ地頭方ニ而闕所申付候、御仕置之田畑、地頭方ニ而闕所申付候義、兩樣ニ成如何ニ候、向後私領百姓、公儀御仕置成候得バ、田畑も家財同前ニ闕所ニ仕、賣拂代金取上、買來候者方江、有來候通り年貢相納候得バ、地頭方相滯義無御座候、今度八王寺同心闕所地之內、私領之分ハ御代官方にて賣拂、代銀ハ闕所に取上、田畑買候者ゟ地頭江年貢納候樣可仕候、右之通伺之上相極

候、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕年號月日不知○中略

一家財沒收之事、御直參重科之家財雜具等ハ、闕所奉行衆へ相渡之、御闕所藏へ納之、御料所之分ハ、帳面記之、御勘定奉行衆差圖可受之、雖爲寺社領之內、御代官在之所ハ同斷、

〔張紙留〕明和八卯年十一月

一穢多非人御仕置ニ相成候節、欠所之儀、町奉行牧野大隅守江彈正少弼ゟ問合有之候處、左之通挨拶有之候、

御書面穢多非人御仕置ニ相成候節、欠所之儀相調候處、近例相見不申候、右ハ穢多非人ニ候得バいづれニも穢多彈左衞門方江爲取上候筋と存候、

卯十一月

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政八辰年四月

先達而評議いたし被申聞候京都町奉行掛り、笹屋町五町目菱屋源七父足打源四郎事、源兵衞一件、御仕置之內、博弈宿もいたし候の之地主、地面取上之事、彼地仕來之趣、猶又相尋候處、地主家主別々ニ御咎申付候先例無之、地面建家とも一人之所持ニ付、家主之咎計申付候儀、前々より仕來之由ニ付、地面取上ニ不及候事、

松平兵庫頭

〔張紙留〕御相談書

出家社人百姓町人等、都而吟味中、又者吟味ニ不相成以前欠落いたし候共、一件申口ニ而、其罪狀明白ニ相分り、御仕置當りも決候分者、闕所之儀不及伺夫々申付、尤御仕置當り決兼候分ハ、闕所不申付方ニ可有之哉、及御相談候、以上、

丑三月

（朱）是者備中國星田村左兵衛外一人江疵付逃去候、同國山之上村吉五郎持高家作家財取計方之儀、御代官三河口太忠、山田常右衛門与、兵庫頭殿江相伺、右左兵衛外一人共、農業渡世不相成程之片輪ニ相成候ニ付、本文之通評議いたし候處、吉五郎儀ハ、不逃去候へば遠島ニ可相成ものニ付、持高家作、家財共闕所申付候方可然哉候、乍去以來之處、急度取極置候はでハ、品ニ依差支候事も可有之候間、其時々掛り奉行見込を以、取計候積り評議決ス、

文化二丑年三月二日

〔諸事留〕文化五辰年四月

追放もの欠所之儀ニ付相談書

書面追放もの欠所之儀ハ、其時宜ニより取計候方可然、此上極置候而ハ、差支も出來可申間、是迄之通ニ致置可然旨申談、差戻ス、

小田切土佐守殿　　松平兵庫頭

根岸肥前守殿　　水野若狹守

追放もの欠所之御定書ニ

重追放ハ　田畑、家屋敷、家財取上、

中追放ハ　田畑、家屋敷取上、

輕追放ハ　田畑取上

但田畑、家屋敷無之ものハ、家財取上、田畑、家屋敷、家財も無之ものハ、輕重之不及沙汰事、

右之通有之候間、中追放之者、田畑、家屋敷、四品之内、一品ニ而も有之候得バ、家財者取上ニ不及方ニ可有之哉、

一輕追放之もの、田畑之內、一品有之候得バ、家屋敷ハ不取上、一品も無之候ハヾ、家屋敷取上、家屋敷之內、一品も無之候ハヾ、家財取上候方ニ可有之哉、

　但懷中もの、幷着居候衣類之外、雜物、金銀、印判、其外何品ニ不寄、都而家財ニ准じ取計可申哉、

一中追放以下之ものハ、御定之取上物有之候ハヾ、吟味中取上置候品ニ而も、取上ニ不及、如何敷品ニ無之分者、渡遣し候方ニ可有之哉、

一遠島者之儀、親類より見繼金等差遣候もの無之段、各樣より御通達有之候得バ、闕所金之內ニ而金貳分之錢、大貫次右衞門より爲差出相渡來候、然處親類より見繼金貳分ニ不滿節ハ、各樣御役所ニ而ハ右迄り錢へ足し、都合貳分爲目ニ而御渡被成候趣ニ付、拙者共掛之分も、見繼金貳分ニ不滿節ハ、右不足分之錢ハ、次右衞門より爲差出相渡心得ニ御座候、

右之通取極可然哉、此段及御相談候、以上、

　辰四月

〔科條類典下七〕寬保三亥年九月、大岡越前守、石川土佐守、水野對馬守伺之內、

　伺御仕置に成候者、闕所田畑を押隱候者咎之事、

一御仕置に成候もの、雜用宿拂等可償ため、闕所に可成地面押隱置候儀、顯においては、

名主　重追放
年寄　輕追放
組頭　所拂

朱書
是は元文五申年、城州綴喜郡長山村百姓十三郎不屆有之、村拂に成候處、闕所田畑之內、二ヶ所改帳面に相除押隱、其外落札人江可相渡竹松杉賣拂候段及白狀、庄屋太右衞門重追放、年寄彌平次五畿內構追放、頭百姓山城國中追放、

　但所司代より御老中江被仰越、御下知有之例、

〔明良帶錄〕關所物奉行 百俵高 大目支 手代八人

是は町奉行諸事糺方、幷類例取扱心得有る仁、又は組同心廻り方など、都て輕き牢屋同心など、又は六箇所定廻り、都て其向ゟ昇進して奉行下役改方となる、御小人目付寄場元〆よりも昇る、

〔舊記拾要集 二〕元祿九年子四月十日、御用覺帳書拔、

覺

一年々町欠所之儀、拂役人罷出、諸道具拂代金銀を、町年寄方江請取置、拂役人方江ハ淸帳請取、金銀之員數計を前々ハ申上候、向後ハ諸道具拂候而、代金銀を町年寄、幷拂役人立合、金子ヲ包、拂役人幷町年寄封印いたし、金銀ハ年番之町年寄方江預り置可ㇾ申候、淸帳者御番所江納ル時分、拂役人印判を加、與御印は兩御奉行御印判を被ㇾ遊、可ㇾ被ㇾ差置との儀ニ御座候、

一町欠所屋敷、只今迄ハ中番ゟ與力罷出見分をいたし、繪圖證文を以申上候迄ニ而、拂之時分ハ與力構不ㇾ申、町年寄方ニ而入札ヲ以賣拂申候、向後ハ屋敷請取與力罷出候ハヾ、拂候時分も前前役人出候而、町年寄共立合入札いたし吟味、尤金銀請取、金銀を包候而、其役人幷町年寄〇此間有ニ蠹食加月番之町年寄方江、金銀を〇此間有ニ蠹食勿論町家屋敷等幷金銀員數帳面ニいたし、町年寄方より差上可ㇾ申候、それにも中番の與力印判をいたし、兩御奉行與御判被ㇾ遊、御番所ニ可ㇾ被ㇾ差置との儀ニ御座候、

右之通り今朝今付五右衛門、多賀孫兵衛、當番之與力、幷町年寄奈良屋市右衛門、北村彥兵衛被召呼、御直ニ右之趣被ㇾ仰渡候、與力中江も相知せ置、自今以後、右之通ニ可ㇾ致旨御意ニ候間、則相觸候、以上、

子四月十日

〔京都御役所向大概覺書 六〕關所家屋舖買得證文幷金銀請拂之事

一關所家屋舖諸道具等有之候時は、繪圖帳面公事方ゟ請取之、御拂之儀相窺候上、其場所江罷越、繪圖帳面ニ引合相改、望之もの入札可致旨表ニ張札致置、尤望之もの參次第、立會見せ候樣にと、年寄井五人組江申付置、入札を以相拂候事、

關所屋敷御拂證文之文言

釜座通御池上ル町、金屋治郎右衛門關所家屋敷表口貳間中五寸裏行拾參間貳尺壹ヶ所之事、代銀七貫六百目にて、井筒屋善兵衛買得無紛者也、

正德三巳
六月十九日　攝津印
安房印

室町通御池下ル町
買主　善兵衛
〇中略

關所金銀ニ而拂方

一御役屋舖御用場所々、紙墨筆蠟燭有明油炭、其外小道具等代銀、

一御役屋舖所々修覆、井組屋舖外側高塀修覆入用代銀、

一與力同心所々御用ニ罷出候節、上下旅籠代、與力駕籠代、同心空尻代、

但正德貳辰年迄ハ指遣候得共、近年關所金銀拂底ニ付、駕籠旅籠代不相渡候、關所銀有之節ハ、了簡可有之事ニ候、且又片道三里ニ過候はゞ可遣之旨申渡候、

一與力、同心、井雜色、町代、見座、中座、小番之褒美銀、

但與力同心雜色町代江者、寶永七寅年迄は、遣候得共、卯年ゟは不遣候、見座、中座、小番へは、正德三巳年迄は遣シ候得共、正德四午年は不相渡候、

朱書
但享保元申年ゟ旅籠代駕籠代等指遣候、

右二ヶ條之儀は、御金有レ之候節者、可レ指遣レ由申渡ス、
一悲田院年寄毎年褒美錢指遣候
一牢屋御修復入用代銀
一牢屋番所諸事入用代銀
一牢舍人扶持、前々ゟ闕所銀ニ而相渡り候處、近年御用多、拂方金銀不足ニ付、寶永元申八月より
二條御藏米ニ成候、牢賄加十郎手形ニ而裏判を以、毎年請取之候、加十郎八人扶持共ニ牢舍人
扶持米之内江込相渡シ候、
一牢賄方諸入用代銀、幷加十郎方ニ而働候男女給銀等、
一牢舍人衣類無之者江被下候代銀、幷相煩候もの藥代銀等、
一流人有之節者、路銀其外被下物入用代銀、
一御仕置もの有之節、諸事入用代銀、
一支配所高札、幷人馬口付之制止杭、車留メ杭入用代銀、
一賀茂川筋御修復入用、尤御入用銀不足之節、闕所銀相渡シ候、
一洛中諸橋入用代銀
一論所其外急成儀有之節、御代官手代見分扶持方諸入用幷褒美銀等、
一御用ニ付、所々江遣候飛脚賃銀、
一警固辻固メ有之節之入用代銀
一御法事ニ付、假番所幷其外入用代銀、
一所々御修復依時ニ了簡之上、闕所銀ニ而相渡シ候、
一御法事ニ付、赦之者有之節、鳥目差遣候、

一總體御用之節、寄宿取繕入用、并宿江之被下物等之事、

〔公裁秘錄 一〕欠所心得之事○中略

御料所百姓、町奉行掛ニ而、御仕置相濟、欠所有之節、天明度以前者、田畑屋敷等拂代者、御勘定所江建家家財拂代者、町奉行江相納候規矩ニ有之處、天明二寅年、評定所一座評議之上、田畑家屋敷家財共、支配之御代官江取上候積ニ相成候處、其砌達洩ニ相成候哉ニも相聞候間、以來者、天明度相極候通、可被相心得候、尤右之趣場所替之節は、不洩樣御支配御代官江可被申通候、以上、

但、都而私領之もの欠所者、其領主地頭江欠所之達書遣、領主地頭江取上來候、

〔取上建家并家財欠所之部〕欠所金上納方之儀御尋ニ付、申上候書付、

年番

舊多落着致し候、贋金一件ニ付、取上候正金之分、餘程有之樣被思召、右之分總體之欠所金江籠メ、御藏納ニ相成候哉、又者別廉ニ相成候哉、是迄之振合、取調可申上旨被仰渡候、

此儀是迄贋金取上之內、正金有之候得者、總體欠所金上納之內江籠メ、一緒ニ上納仕來申候、勿論四年以前、奧坊主傳有一件取上金者、納證文一紙之內江廉書致シ、一緒ニ御金藏納仕候儀も御座候、

右御尋ニ付、此段申上候、以上、

申

正月　　松浦作十郎

谷村猪十郎

〔七十冊物類集 三十六〕欠所品御拂之義ニ付、奉伺候書付、

書面伺之通可取計旨被仰渡、奉承知候、卯(天保十四年)九月十六日

年番

都而闕所御拂ニ相成候品之義、御吟味筋之分者、吟味方下役ニ而取扱、被盜人江相渡、又者當人江

渡遣等之取計いたし、落着相濟候後、御仕置もの所持品、盗先不二相知一候品、其外共溜置、年番下役江引渡候ニ付、欠所藏江入置、外品御拂之節、口分致し、一緒に御拂いたし來候處、時に寄、欠所之品、口數繁多之砌は、混雜致し候義も御座候間、以來一件落着之內ゟ兩三日之內取調、吟味方ゟ品引渡候樣改革仕、年番下役江受取、每月上旬ニ入札人呼出、前月之分御拂相成候積、

但一件は落着いたし候得共、品御拂に難二相成一分、其段吟味方ゟ相達候得ば、別帳に記、欠所物藏江入置、六ヶ月以上相立候はゞ、吟味方江相達、否次第御拂相成候積、〇中略

右之通、以來取極置候樣可レ仕候哉、尤吟味方江も申談、此段奉レ伺候、以上、

卯九月　谷村源左衞門

東條八大夫

加藤又左衞門

〔法曹後鑑〕川船關所御拂之節、以來代金納方之儀、御勝手方ゟ掛合、

評定所御一座　松平伊豆守　赤井豐前守

先達而及二御掛合一候、欠所物之內、川船改役所極印有レ之候船之儀、以來川船改役所江受取、御拂等吟味いたし、右代金は、關所申渡有レ之筋々江、鶴孫三郎ゟ相納候積り、水野〇水出羽守殿江相伺候處、伺之通可二取計一旨被二仰渡一候、依レ之此段御達申候、

巳八月〇年號未詳

〔地方凡例錄五〕一取上田畑幷欠所物拂代

料所私領とも、公事出入、其外罪科有レ之追放等に成たる者、所持之田畑家屋敷は取上、家財欠所に成り、其品々は入札を申觸し、巨細吟味之上拂になるなり、尤も田畑代金は格別、欠所金の儀は、公儀地頭にても要用に不レ遣、別段にいたし置、道橋入用、又は牢屋普請等に遣ふ事なり、

〔闕所物立合一件〕ニ來ル廿九日、千種鐵十郎所持之品、闕所立合有之候、貴殿名面上申候、此段爲御心得申達候、以上、

六月廿六日

當番
御徒目付

庄左衞門殿〇中略

翌廿九日四時過、壹番町新道江罷越候處、御使金三郎罷出居候、闕所物奉行服部四郎兵衞、赤佐彌四郎、幷同心相揃居、夫ゟ同道ニ而、鐵十郎方へ罷越、玄關江は鐵十郎親類幷家來ト相見へ出向、自分は闕所物奉行ゟ先江立、上座ニ著座致候、鐵十郎親類之由ニ而、宅番ニ罷越候旨挨拶罷出候、

新御番
菊地總五郎
小十人
布施孫三郎

右兩人案內ニ而、家財幷疊等一通り見申候、

一闕所物奉行右兩人江申達候は、家財等少ク候旨、如何致少ク候哉と承り候儀ニは無之候得共、家作之樣子ニ引替候得ば、家財少ク相當不致候、此段爲心得承度由申候處、右之兩人申聞候は、當鐵十郎迄三代美濃ニ罷在、當住宅ニ手代計差置候故、家財少ク候旨申聞候、夫成ニ捨置候間、自分兩人江掛合候は、左候はゞ彼地ニ家財有之候哉さ承り候へば、上納ニ差支少々之道具等も賣拂候付、一向無之旨申聞候間、其通り致置候、

一闕所物奉行內海左內儀は、忌中ニ付不罷出旨申聞候、

一家財入札、町人共五六拾人罷出候、

一入札之內、高札左之通り、

酉六月廿九日

關所物落札　　御勘定奉行支配無役元御代官
　　　　　　　　　　　　　　千種鐵十郎

一十文字鑓但　　壹筋

一｜

一｜

　此代銀四拾三匁

　　　　　　橋町　新兵衛印
　　　　　　同所　八兵衛印

一破疊　　五拾疊

　此代銀四拾五匁

　　　　　　橋町　新兵衛印
　　　　　　同所　八兵衛印

都合代銀八拾八匁

　此金壹兩壹分拾三匁

　　　　　　橋町　新兵衛印
　　　　　　同所　八兵衛印

寛政元酉年六月廿九日

御徒目付　山本庄左衛門殿

關所物奉行　服部四郎兵衛殿

同　赤佐彌四郎殿

同　内海左内殿

右帳面關所物奉行江相賴寫貰

一鐵十郎親類ゟ預リ證文取申候、本紙共關所物奉行方ヘ取置候間、寫候而是又貰申候、但此證文は町人共江、追而品相渡候上相返ス、

一札之事

一

一

右是は御勘定奉行支配無役元御代官千種鐵十郎所持之品、關所物諸色御改之上、御預ケ被成預申所實正也、右御引拂相濟候迄ハ、近邊出火等は不及申、總而紛失無之樣、急度相守可申候、爲其如斯御座候、以上、

小十人間宮猪左衛門組　布施孫三郎

新御番山口勘兵衛組　菊地總五郎

年號月日

御徒目付　山本庄左衛門殿

關所物奉行　服部四郎兵衛殿

同　赤佐彌四郎殿

右證文取申候間罷歸候○中略

翌二日○閏六月四時頃場所ヘ罷越候處、不殘揃居候ニ付、鐵十郎方ヘ此間之通り罷越、橘町新兵衛幷八兵衛方ゟ、金子四郎兵衛方江受取品々相渡、此方ゟ菊地總五郎、布施孫三郎ゟ預り證文相返ス、直ニ罷歸リ申候、御城ヘ左之通手紙認メ、金三郎ヘ持セ差遣ス、

御勘定奉行支配無役元御代官千種鐵十郎所持之品關所引拂立合、相替儀無御座候、明朝爲申上罷出申候、此段組頭衆江被仰達可被下候、以上

閏六月二日

右切封手紙ニ而差遣ス

〔御仕置裁許帳十一〕關所道具之內、御拂具足を買、佩楯ゟ黃金を見出し訴出る者、

元祿十一年寅五月十五日

一橋本町四丁目次兵衞店三郞兵衞、同所壹丁目太兵衞、馬喰町貳丁目伊右衞門店甚兵衞申上候、橘町御關所道具御拂被成候に付、右之三郞兵衞、具足壹領代金五兩貳步に買申候而、先月廿三日、右之具足請取宿江持參仕、同日仲ヶ間之者共集まらせ申候之處、右太兵衞具足見申候而、佩楯重く有之由申候、甚兵衞に相渡し、佩楯ほどき見申候へば、內に大判貳枚縫くるみ有之候に付、其段早速奈良屋市右衞門方迄申達候處、段々御吟味之上、今日私ども三人、攝津守殿江被召出、右之段不隱置有體に申上候に付、右之黃金貳枚、私共三人に被下置候由被仰渡、難有奉存候、尤右之黃金、奈良屋市右衞門方江相納置候間、市右衞門方に而請取、證文仕可申候、爲後日申上候由、右之三郞兵衞家主治兵衞、五人組喜右衞門、源右衞門、喜五郞幷太兵衞、五人組四郞兵衞、五右衞門、其外甚兵衞家主伊右衞門、五人組八兵衞、六兵衞同意に申來候、

〔續視聽草八集七〕崎陽平藏關所

一延寶四辰の二月十八日、肥前國長崎の末次平藏事、年來密々に唐へ日本の武道具を相渡申候義、令露顯に付、彼者所帶を御關所被仰付之、其財寶の覺、

一現銀八千七百貫目餘六十目かへに而拾四万五千兩

一金小判三千兩入三十箱

一黃金千枚入拾箱

一銀子壹万貫目餘、拾六万六千六百六十六兩餘但是は方々へ借し銀なり〇下略

〔京都御役所向大概覺書〕六 銀座元年寄四人闕所金銀之事附銀銅吹分所幷役人付之事

正德四午年、銀座年寄中村内藏助、深江庄左衞門、中村四郞右衞門、關善左衞門、御闕所有金銀、預ケ金銀錢、其外家屋敷、田畑、藪山諸道具御拂代銀大積勘定高、

金八千七百兩程　　有金有黃金共ニ

金千三拾兩程　　預ケ金

銀千六百貳拾貫目程　　有銀

但此外ニ品違之金銀少々有之

銀三百拾五貫目程　　預ケ銀

銀貳千三百七拾貫目程

但是ハ家屋敷田畑藪山幷諸道具御拂代銀高

錢百五拾六貫文程　　有錢

右年寄四人御闕所有金銀幷預ケ金銀

家屋舖田畑藪山諸道具代銀　　共金ニ積リ

凡八万千四百兩程　　但六拾目替之積

此外ニ家屋敷七ヶ所、千とせ硯箱、片輪車手箱、若狹盃等ハ御拂殘有之、此代金大積八千兩程、○下略

〔月堂見聞集〕十一 九月○享保三年廿二日、大坂新町揚屋茨木屋幸齋、幷悴多介、籠舍被爲仰付候、右は幸齋義、平生驕つよく、殊ニ御公儀之地を掠取、はなれ舞臺をかまへ抔仕、諸事不似合おごり候者故、今度御吟味有之、御奉行所へ被召出候處、病氣之由にて不參、其後御召出有之候て、手錠にて御預ケ、今日家内御闕所、○下略

〔一話一言 三十七〕淀屋三郎右衞門闕所道具

一金屛風　五十雙（此外數しらず）
一琉球花毛氈　三百六十枚（○中略）
一黄金長持　二棹（紋、丸の内に丁子紋有、）
一小判　十二万兩
一鑓　一万五千把（但五貫カラゲ）
一元船　二十艘
一銀　八万貫目（是は公家衆へ借置手形あり、）
一材木　二千七十八本（其外所々に有之）
一寶藏　十七
一大豆藏　八十

一殊玉之船　三艘（唐渡繡珍にて帆掛、人形數不知、）
一水精之障子　八十八枚（但九間○中略）
一判金　三千枚
一銀子　八万五千貫目
一船　百五十艘（五百石より千石まで）
一金子　一億餘（是ハ大名方へ借置候手形）
一金　二万兩（是は五代目女房、歷々より被下候處、死去以後埋置、今度掘出す、）
一土藏　七百三十戶前
一米藏　八十
一雜藏　五十

一大坂にて屋敷　廿八ヶ所（内表口一丁餘十八間三十二間迄）
一所々屋敷　六十四軒
淀に三十軒、京に十三軒、伏見三ヶ所、大和十八ヶ所、
一知行　三百三十二石（是は御用立の大名方被下候）
一田地　百五十丁
山城にて百五十丁、淀に五十丁、大和に十二丁、丹波に廿八丁和泉に十八丁、
右ハ檜山のよし
一封金　九億八千貫目
右淀屋三郎右衞門、九代相續如斯、大名弘め代々候、外に印子の鷄七、今度拵立、其外借金御用金と

名付、自由働申候故、闕所被仰付候、

遠島　　三郎右衛門

御叱置　　手代拾人

〔諸事留〕天保二卯年四月五日

深川築出し新地三次郎訴打こわし吟味

右三次郎店定吉方ニ居候

重追放　　亀次郎

所持之品、闕所申付之、

但無之旨、町役人申立之、

同町利兵衛店甚五郎悴　　鐵五郎

兩人共中追放　　同所越中島町留五郎悴　　又五郎

所持品不及闕所

死後處刑

〔御仕置例類集一ノ一〕文政二卯年御渡

奈良奉行伺

一吟味取掛以前病死いたし候處、一件申口ニ而、不屆之次第相聞候もの、闕所之儀評議、

一和州西谷村源八儀、吟味取掛以前病死致し候段、吟味書朱書ニ申上候、

此儀吟味取掛以前病死いたし候とも、又兵衛其外之もの共、吟味書之趣ニ而ハ、源八も頭取ニ無紛相聞、重御仕置ニ可相成ものニ付、享和二戌年、菅沼越前守御勘定奉行勤役之節、伺之上申付候、羽州村々百姓共、及徒黨候一件之内、日限尋申付置、又ハ吟味中病死いたし候もの之内、徒黨發頭、其外重立候段、一件申口符合いたし候分ハ、御仕置之當、相決候ものニ候間、所

持之田畑家屋敷家財共、欠所可申付段、吟味書朱書ニ申上、其通申付候例ニ見合、今般之源八
も田畑家屋敷家財とも闕所、
朱書評議之通濟

〔諸事留〕天保二卯年十二月廿三日
白金臺町四丁目家主萬之助訴口論疵付吟味
芝二本榎承敎寺門前休次郎店久次郎方ニ居候
存命ニ候得バ中追放　小西和助
右之者、所持之品闕所相成候ニ付、宿町役人江申渡候處、無之旨書付差出ス、

身代半減闕所

〔舊記拾要集四〕享保四年亥九月廿二日、御用覺帳書拔、
一享保四年亥九月廿二日、於評定所御用番中山出雲守殿御掛ニ而、山川安左衞門殿四人被仰渡
之覺、
深川森下町　似銀作り　紺屋藤兵衞
右家主伊兵衞、五人組喜右衞門、各主八郎右衞門、
下谷金杉　似銀作り　市兵衞
右家主病死ニ付、後家代勘右衞門、五人組總兵衞、瀧右衞門、六郎右衞門、名主八郎右衞門、
右兩人似銀作り、本所北割下水長兵衞一件ニ候處、兩人共ニ一應ハ長兵衞と心を合せ、一所に作り候得共、不宜事と心付キ相止候ニ付、銘々身代半分ツヽ、過料被仰付、右之科御免被遊候、然共右兩人共に、向後之商賣等家主五人組心を付見留メ、兩人共外江所替不致樣に、被仰渡候事、
但家主五人組名主證文は、山川安左衞門殿方ニ而被仰付候事、○下略
○按ズルニ、身代半分ノ過料ハ、身代半分ヲ闕所スルナリ、

財物取上

〔近世物之本江戸作者部類〕山東京傳

錦の裏といふと、(よし原のしやれ本)仕掛文庫(深川の洒落本)といへる二種の中本、此洒落本は京傳が特によく其の趣を盡したりければ、甚しく行はれて、板元の贏餘多かり、此事官府に聞えけん、此年の夏五六月の頃、町奉行初鹿野河内守殿の御番所へ、彼洒落本にかゝづらいて、出板を許したる地本問屋行事二人(いせ屋某等、行事近江屋某両人也、)幷に錦の裏、仕掛文庫の板元蔦屋重三郎、作者京傳事、京橋銀座町一丁目家主傳左衞門倅傳藏を召出され、去年制止ありける趣に從ひ奉らず、遊里の事をつゞり剩教訓本と錄して印行せし事、不埒なりとて、去ば〳〵吟味を遂られしに、板元幷に作者全く賣徳に迷ひ、御制禁を忘却仕候段、不調法至極、今更後悔恐れ入候よしを、ひとしく陳謝に及びしかば、其罪を定められ、行事二人は輕追放、板元重三郎は身上半減の闕所、作者傳藏は手鎖五十日にして免されけり、

〔近世物之本江戸作者部類〕三馬 一九

寛政八九年の頃、當年洒落本の新板四十二種出たり、(中略)件の新板の小本四十二種はさら也、古板も洒落本と唱ふる小冊は、此時皆町奉行所へ召拿れて、遺り無く絶板せられ、そが板元の貸本屋等は、各過料三貫文にて赦れけり、そが中に馬喰町なる書物問屋若林清兵衞は、貸本屋等と同かるべくもあらず、享保已來の御定紋(紋疑誤字)を辨へ在ながら、制禁の小本を私に印行せし事、尤不埒也とて、身代半減闕所にて、其罪を宥められ、(下略)

〔手限御赦例書〕

享保十巳年八月廿七日
一家財不殘取上所拂　深川六間堀町總兵衞元家守
半兵衞
右半兵衞元店

一雜物半分取上所拂　　伊兵衛

右半兵衛店ニ差置候伊兵衛方ニ居候盤若面源七一件ニ付伊兵衛召出候處相尋候伊兵衛ニ而は無之源七入牢以後引越申候伊兵衛店借り主ニ而伊兵衛妹婿盤若面源七女房壹所ニ引越候伊兵衛儀は不罷在伊兵衛名前計ニ而源七店借り主之儀故其通ニ致置候處源七入牢以後店肝煎本所松井町貳町目仁兵衛方ゟ伊兵衛代り致世話候者之由ニ而遣置候ニ付伊兵衛代りと存源七女房之兄ニ而候由當伊兵衛ニ申含差出候伊兵衛儀も源七女房之兄ニ成り僞申出候段掠公儀候仕方不屆ニ付半兵衛儀者家財不殘取上所拂伊兵衛儀者雜物半分取上所拂

〔向方御赦例書 四〕

寶暦八寅年三月十一日

一船取上所拂　　深川元町長右衛門元店　彦兵衛

右之者所持之船ニ召仕船頭三右衛門乘り通四町目善次郎芝神明町權次郎神田岸町平七住所不知鐵物屋之番頭四人ニ而御法度相背致博弈候段者不存候得共常々三右衛門江申付方未熟ニ付右體之段も有之不埒ニ付右船取上所拂

〔手限御赦例書 一〕

天明七未年三月廿七日

一德用錢板行取上所拂　　八町堀水谷町甚兵衛元店　和助

右之者儀時行事は勿論當座之替たる事一切板行ニ致間敷旨町觸有之處致忘却去秋出水之儀を百人一首之狂歌ニ致し候を岡崎町當時五人組持之店新七ゟ貰請其外戲事を書綴都合三通り自分ニ而板行ニ彫賣ニ差出三百文餘德用致し其上外ニ店持居候節心易致候迚平右衛門万吉を請合人も不取置家主江も不相屆去年八月ゟ差置人別改之節も不申聞無人別之者を差置候段旁不屆ニ付德用錢三百文板行取上所拂

地面等取上

〔御定書百箇條〕讓屋敷取捌之事

享保五年極
一讓請候町屋敷町内江弘無之、町名前不改類、及出入候得ば、屋敷取上ル

〔科條類典 下 三〕元文三午年三月十四日、彌此通定置、追而被仰出等、此帳ニ可記儀は、書記可申候、其節ニ其趣書付可差出旨、評定所一座江被仰聞候帳面之内、

享保五年子正月

讓屋敷名前之儀ニ付町觸

家屋敷、他人ハ勿論、たとひ親類江讓渡候共、早速町内ハ不及申、一類江も弘メいたし、帳面名も改可申候、讓渡候儘にて致無念打捨置、重而及出入僉議之上、證據も於無之ハ、勿論向後奉行所江取上ゲに成候間、右之段、町中江可相觸者也、

〔公裁秘錄 一〕一隱賣女吟味之事

寛政四子年、松平越中守殿被仰渡書之内、御料所村々、賣女體之者有之節、奉行所江差出來候趣に候處、江戸差出にいたし候而は難儀之筋に付、以來支配陣屋に而吟味詰、御代官了簡を以、咎之儀奉行中江可相伺、尤別段之惡事無之候はゞ、抱置候もの共は、田畑屋敷は五ヶ年取上、年限中小作に申付、作徳餘分有之ば、其村方又は最寄村々、身元宜もの江預ケ、小兒養育料、或は困窮御救手當備置、〇下略

〔后赦錄 四十七〕享和三亥年五月四日

一地面取上　　御腰物奉行支配御研師　竹屋伊右衛門

右之者、赤坂田町五町目拜領屋敷、辛七に家守爲致置候處、店子之内七五郎儀、御法度相背、隱賣女之渡世致し候を不存罷在候段、不埒ニ付、右屋敷取上、

朱書
右之通、地面幷建家共取上置候處、年數相立候間、文化五辰年五月八日、右地面建家共、返被下候ニ

付記之、

〔御仕置例類集一ノ十八〕文化十四丑年御渡

町奉行永田備後守伺

一京橋水谷町半兵衛弟附と唱候賭事いたし候一件　南茅場町求次郎店　平八

右之もの義、南茅場町ニ住居いたし、京橋水谷町所持地面ハ、喜三郎家守爲致置候處、同人店子半兵衛義、御法度相背、弟附と唱候、賭事之會元いたし候を不存罷在候段、常々申付方未熟故、右體之義有之、不埒ニ付、三ヶ年之內、地面取上、

〔御仕置例類集一ノ十九〕文政三辰年御渡

京都町奉行伺

一西洞院家家來糀井左京ねだり事致候一件

今出川大宮東江入町加兵衛家主　藤兵衛

外貳人

右之もの共儀、隱賣女ハ御法度之旨、前々觸置候間、家主之儀ニ候得バ、常々心を付可申處無之、其儀、既ニ借家ニ差置候、加兵衛其外之もの共、御法度相背、娘幷妹を金藏方江差遣、身賣爲致候儀有之をも不存罷在候段、心得方不行屆等閑故之儀、不埒ニ付、三人共身上ニ應じ、過料之上、百日手鎖、隔日封印改、借家之家賃、五ヶ年之間取上、

此儀店貸置候もの共、銘々宅ニ於て隱し賣女致し候儀ニ無之、他所ニ而いたし成候を不存罷在候もの共ニ付、隱賣女渡世之ものニ無之、貰置候女相對之上、他所ニ而賣女渡世致し候もの江預置、身賣爲致候を不存罷在候、地主、家主御咎之儀、寛政十一未年、一座評議之上、地主は叱り、家主は急度叱りと極置候ニ見合、三人とも急度叱り、

家業取扱

朱書
評議之通濟

〔取上建家幷家財欠所之部〕　東叡山末天台宗淺草寺地中勝藏院

牧野備前守殿御差圖
一三ヶ年之內地面取上　了純

此もの儀、前書岩次郎、去申二月ゟ同六月晦日迄、喜八幷次郎兵衞方宿ニ致し、御法度相背、三笠附同樣棒引紋付致シ金元候を不存罷在候段、申付方未熟故、右體之儀有之、不埒ニ付、三ヶ年之內、地面取上之、

右之通被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

酉八月十八日　了純印

〔手限御赦例書 七〕　三河町四丁目太郎右衞門元店三番組人宿

寶曆十三未年五月廿九日
一人宿家業取放所拂　源八

右之者請ニ立、所々江奉公人差出候節、人主之儀者、手前ニ居候、幼年之悴源太郎と申者之名前を請狀ニ認、人主入用之節は、幸七儀源太郎と申、先々江罷越、右之通此者儀、手前ニ居候、幼年之悴を人主ニ致置候上は、人主之詮も無之、殊ニ組合人宿之儀、別而右始末不屆ニ付、人宿家業取放所拂、

〔例書 八〕手限　明和三戌年六月十八日　白金神明門前半兵衞元店　組合人宿　庄右衞門

朱書 年數貳拾貳年
一人宿家業取放候上江戶拂

右之者請ニ立、澁谷長谷寺門前喜八店、町醫渡邊長人方江奉公ニ差出候藤助儀、致欠落候處、右給金不相濟、其上奉公人と馴合、欠落爲致候儀者無之旨申候得共、所々江受ニ立、奉公濟爲致候寄子共、人主三右衞門と通り名を拵置、有合之印形を押來候由、長人方江も人主三右衞門と認遣候處、人主所替致し遣候樣申聞候ニ付、麻布古川町七左衞門店三右衞門と、町名幷家主名前取拵認遣候段、組合人宿之之身分ニ而、不屆ニ付、組合人宿取放候上、江戶拂、

〔例書十八〕御差図 安永三午年二月廿七日　　神田山本町平右衛門店
元拾壹番組人宿　助八
一組合人宿家業取放 朱書 年數貳拾四年
右之者、組合人宿定法相背、下請人も不取置、佐五兵衛を寄子ニ致し、神田松枝町喜右衛門店孫市方江奉公ニ差出候處、欠落致し參候はゝ、主人方江召連參、譯可相立處無其儀、無沙汰ニ致し置、殊ニ給金も不相濟、右體欠落致し候者を又候請ニ立、弓町次郎左衛門店仁平次方江奉公濟爲致候段、組合人宿致渡世候身分ニ而、別而不埒ニ付、組合人宿家業取放、

〔后赦錄四十七〕手限 文化元子年九月四日　　久保三田町新兵衛地借
元六番組人宿　長兵衛
一人宿家業取放 朱書 年數十三年
右之者、武家方江中間奉公ニ差出置候吉五郎儀、供方物持ニ出、右持居候品、取逃致し候旨屋敷ゟ爲相知、度々呼ニ差越候得共、吉五郎行衛尋出可罷出と遲參致し、其後も疝積ニ而、歩行難成候迚、下代茂兵衛を代りに差遣候處、同人存付ニ而、吉五郎義、立戻候得共、亂心致し、持居候品、何方江取落候哉不相辨、此もの方にも難差置、國許上州表江差遣候義之旨、僞申立候處、可呼戻旨被申付、尚又其後も茂兵衛を代に差出候節、吉五郎可呼戻と在所江飛脚差立候處、同人儀病死致し候段、又候僞申立、右體兩度迄、無跡形儀取拵申立候義乍承、跡ニ而僞之旨申立候而は、却而憤りも可有之、且は其節病氣ニ候迚、其分に致し罷在候段、不屆ニ付、人宿家業取放、

〔諸事留〕天保十亥年五月六日　　本銀町會所屋敷彌兵衛店　五郎兵衛
中追放
家財闕所申付ル
右五郎兵衛儀、雜菓子渡世致し、先年渡世差留ニ相成候身分ニ而、裁許不相用、又候雜菓子渡世致し、常磐町家主平兵衛より相手取、去ル酉年五月十五日、公事合相成、今六日裁許、

役儀召放

扶持召放　減祿　除籍　停出仕　〔併入〕　解官

役儀召放ハ、所職ヲ免ズルナリ、而シテ、役儀召放ノ上、寄合、又ハ小普請入ヲ命ズル事アリ、寄合ハ、三千石以上、小普請ハ三千石以下ニシテ、共ニ無職ナリ、

扶持召放ハ、卽チ廩米ヲ支給セザルナリ、

減祿ハ、食祿ヲ刪減スルナリ、

解官ノコトハ、上編ノ解免官職篇ニ於テ、除籍停出仕ノコトハ、上中編ノ責罪過篇ニ於テ、既ニ之ヲ解セリ、宜シク參看スベシ、

役儀召放制度

〔御定書百箇條〕隱鐵砲有之村方咎之事

寛保元年極

一野廻り場之內、鐵砲三度以上打候を不存候はゞ、　御留場之內野廻り役　可取放

但野廻り之居村、隱鐵砲所持致候者於有之ハ、役儀可取放、

〔御定書百箇條〕田畑永代賣買幷隱地致候者御仕置之事

從前々之例、延享元年極、

一田畑永代賣いたし候者　加判名主　役儀取上

貞享四年、延享元年極、

一質に取候もの作取にして、質置主年貢諸役勤候分　加判名主　役儀取上

〔御定書百箇條〕三鳥派不受不施御仕置之事

延享元年極

一同〔○三鳥派不受不施〕勸候者、村方に指置候名主組頭、　傳法不受不致歸依候共　役儀取上

役儀召放例

〔近代公實嚴秘錄〕一井上河內守寺社奉行御役御免之事

不敬は甚だ小人の妾なり、假初にも禮なくば有べからず、其頃井上河內守といへるは、御奏者番寺社奉行兼役の人なり、正月六日諸寺諸山の御禮の節に、いつとても御奏者番の、披露にこまられけるは、播州書寫山の社僧總代と唱ふる事有、是十人が九人迄云損じけるとなり、播州より書

寫山の社僧總代、御禮にいつも正月六日に出るなり、去れば六日當番にあたりし御奏者番は、年内よりも不斷口の内にていひふぐし、舌の廻るやうに心掛らる、たとへ申損じたればとて、別て御祟りもなけれども、皆々相嗜む事尤さもあるべし、爰に井上河内守奏者の節、播州の書寫山を云損じけり、然るに迷惑赤面の體もなく、公〇德川吉宗の尊顏をあをぎ見て、河内守につこと笑ひけるとなり、此節事濟けれども、公の尊慮には、此披露致し違ひは苦しからねども、河内守めいわくも不致段は、大膽のいたりなりと被思召、頓て御役御免なり、公の御賢慮、天晴おそれ多くも御尤なる御事と人々申あへり、

〔御赦例書一〕寶暦十辰年八月九日　松平相模守家來 池田平藏

一家老職取放

右之者儀、目付役隱岐善藏、名倉小兵衞申旨ニ任、淺井作左衞門御代官所、備中國東三原村源五郎儀は、御料所之人別ニ入候者ニ而は無之儀と、心得違いたし、何方之者ニ而も、領内ニ而惡事致候者は國法之仕置致度存、國法之仕置ニ相伺候樣、同役池田能登江申越、留守居共ニ爲取計候由申し候、作左衞門より掛合之書狀ニ而、御料所之百姓と申儀明白ニ候處、御代官所より申越候趣、取用不申致方、其上作左衞門より、郡奉行佐野利五郎、井上助左衞門江掛合之書狀、等閑成る取計、旁不埒ニ付家老職取放、

〔泰平年表大御所〕文政二年六月十六日、杉本茂十郎町奉行附御用達十組頭取不正の取計共、多依有之役義取放、

〔御仕置例類集三ノ十八〕寬政元酉年六月　御勘定奉行 曲淵甲斐守掛

松平伊豆守殿御差圖

一野州上板荷村金左衞門外五人朝鮮種人參隱賣いたし候一件

本多求馬知行野州都賀郡村井村　名主　善次

右之もの儀、朝鮮種人參者内々ニ而、賣買ハ難相成段、再應觸有之候儀を辨乍罷在、内々ニ而度々賣買いたし候段、名主役をも相勤候身分、別而不埒ニ付、賣代金取上、役儀取放、

御差圖

賣代金取上五十日手鎖、但右御咎相濟候後、役儀取放、

〔御仕置例類集三ノ十六〕寛政五丑年正月　御勘定奉行　根岸肥前守掛

松平和泉守殿御差圖

一常州鹿嶋郡村々惣代と認、同國串挽村賣女之儀申立候、無名御箱訴一件、

松平播磨守領分常州行方郡串挽村

名主

組頭

十郎兵衛　源七　右兩人

地主

右之もの共儀、領主役所ゟ賣女貳人之外、多人數差置間敷旨、申渡有之候ハヽ、精々心附可申處、無其儀、過人數差置候をも不存罷在候由ハ難立、領主役所之申渡を等閑ニ相心得、不糺之至、不埒ニ付、名主は役儀取放、組頭共幷地主は過料錢拾貫文宛、

〔御仕置例類集三ノ十六〕寛政六寅年九月　御勘定奉行　根岸肥前守掛

戸田釆女正殿御差圖

一上總國海保村七郎左衛門儀、同村嘉左衛門外貳人取計之儀を申立候一件、

筒井左膳知行上總國市原郡海保村　組頭　嘉左衛門

右之もの儀、七郎左衛門取持之地所、小作いたし候はゞ、證文をも取極可置處、其上入付米增減之譯は、帳面ニも記置、請取書等も可取置處、右體之儀も無之、既ニ入付米之內、五拾壹俵餘、七郎左衛門江可相渡分有之處、七郎左衛門年貢滯、吟味之節、右之段をも不申立罷在候段、組頭役相勤候ニ不似合、不埒ニ付役儀取放、

役儀召放之上寄合入

〔翁草百八〕田沼家一變

一同日、〇天明四年四月七日若年寄加納遠江守宅ニ於て、御目付山川下總守侍坐、左之通申渡さる、

御目附
跡部大膳
松平田宮

申渡之覺

去月廿四日、若年寄退去之節、新御番佐野善左衛門致亂心、田沼山城守へ手疵爲負候節、其方共、中之間ニ相詰罷在候處、誰とハ不相知、桔梗之間へ拔身持參候ニ付キ、早速追駈候段申聞候得共、其方共より相離罷在候、松平對馬守遲くも抱留め候へバ、其方共儀ハ間近にも罷在候故、如何樣にも取鎭方可有之處、手間取候ゆへ、山城守稍之儘ニ而會釋致候內、疵も數ケ所に相成、既ニ右疵ニ而相果候、御役柄別して不心掛被思召、依之御役御免、寄合ニ被仰付候、

四月

〔明良帶錄〕寄合御若支の間

寄合も天和の比迄は、御留守居組成りしが、三千石以上、無役不勤之者、若年寄支配寄合仰出さるるは、常憲廟〇德川綱吉之頃之由申傳へたり、小普請金を上納す、百石二兩の割合なり、

〔仕官格義辨〕寄合小普請之事

問云、昔ハ四五千石取之衆ニ小普請有之、小身成衆ニ寄合有之候處、只今ハ三千石已下ハ小普

請ニ入被レ申候處、享保二十一辰年十一月四日、元御小性組被レ勤候、遠藤源五郎ヽ申仁之嫡孫承祖、文次郎跡目被二仰付一候而、寄合ニ入被レ申候、高ハ千石高ニて候、又其已後も元文四未年十二月二日、元御使番柴田七左衞門養子、新三郎跡目被二仰付一、是も高二千石ニ而、寄合ニ入被レ申候、如何之譯ニて候哉、答云、小普請衆之儀、先規ハ御留守居衆之支配ニ候處、享保四亥年六月廿五日、永井宮内、安藤主膳、有馬内膳、石川兵庫、內藤采女、金田周防守、瀧川讃岐守、松平帶刀、伊丹覺左衞門、酒井大學、右十人、小普請支配被二仰付一、二百石已上二千石有餘迄、五組之御留守居衆より小普請組割定、自今小普請組ヽ可レ唱旨被二仰渡一候之由、三千石已上之分ハ不レ殘、若年寄衆御支配ニ入申候、乍レ去御留守居三番頭之子息、代々寄合筋之衆ハ、三千石以下ニても、寄合筋故寄合ニ入被レ申ヽ存候、〇下略

役儀召放之上小普請入

〔憲教類典〕四ノ二十一御告 享保四己亥年十月十一日

大御番松平志摩守組與頭
南條小十郎
岡部八郎左衞門
神谷又五郎
長田傳十郎

常々勤方不レ宜、御役儀不相應ニ付、被レ遂二御吟味一候ハ、急度被二仰付一候得共、御宥免、御役被レ召二放之一、知行半知被レ召二上之一、小普請入被二仰付一之者也、

〔有司勤仕錄〕小普請組支配

一昔は小普請入之面々、御留守居年寄悉ク支配す、近年當御役被二仰付一之、貳百石以上、二千九百石迄支配す、〇下略

〔明良帶錄〕小普請

是より兩番へ出る、享保以前御留守居無役無勤の者、御城幷御番城二三の丸御門の高石垣破損繕、草取人足高に應じて出したり、夫故小普請といふ名目是を守役とす、貞享元祿の頃より金納と成る、是を小普請金といふ、百石二兩の割合なり、

〔幕朝故事談〕諸侯

小普請の名目、此儀は不ㇾ及二御沙汰一、其方義相應に付、小普請入被二仰付一、不相應の小普請は、年始の御禮もならぬ也、

〔泰平年表大御所〕文化二年十二月廿七日、立花出雲守蟄居、大目付久田縫殿頭御役被二召放一、小普請入、御書院番頭秋元隼人正御役御免、差扣、刀鍛冶師嘉治右衞門遠嶋、右は重御役乍ㇾ相勤、隼人殿の町人嘉治右衞門へ懇意に致し、度々面會、其上大奧向、又は重御間柄等の義、虛僞取交猥に申觸、出雲守、縫殿頭、隼人正等、互に嘉治右衞門空言を取用剰、至て恐多儀なぞらへ、甚差出候段、不束の至に候旨、

〔續視聽草六集七〕松外刑罰

申渡之覺

川村清次郎〇西丸御書院番酒井山城守組

其方儀、當四月〇文政六年廿二日請取、當番之節、部屋二階ニ休足致し罷在候處、夕七時過松平外記不意ニ脇差を拔、本多伊織、戸田彥之進江切付候ニ驚キ、外記を捕押候心付も無ㇾ之、白衣無刀之儘駈下リ、外相番共御番所江駈出候節、出後レ左之手を御襖建付へ被ㇾ挾、動候事難ㇾ成、葛籠重ね有ㇾ之側ニ屛風ヲ引寄せ、事濟候迄、其間に隱れ罷在候段、臆候次第ニ候、剩有體難ㇾ申立ㇾ存、池田吉十郎取繕相違之儀共、同樣申張罷在候段、不埒之至ニ候、依ㇾ之御番被二召放一、小普請入被二仰付一もの也、

〔幕朝故事談〕諸侯

御小性の池田丹波守、安藤丹波守と、高家の大澤丹波守と三人にて、勝山などを買ひ、束帶を持

行着して女郎に見せ候て、つゞらに入、中間に爲持歸し候途中にて、藤掛伊織が組の者見咎候を、中間達て御免を相願候故、彌疑て改候處、束帶故直に牢舍被仰付て、吟味の上三人は不敬に付、小普請入被仰付、

役儀召放之上小普請入閉門

〔翁草五十四〕濃州郡上噪動并金森家邑除大略

金森家の苛政數々令露顯ニ仍、寅九月〇寶暦八年金森兵部少輔頼錦指扣仰付られ、〇中略同十月廿九日、於評定所右之通被仰渡、〇中略

曲淵豊後守

去亥秋金森兵部少輔聞合之節、最初近江守を以、青木次郎九郎へ頼遣、兵部少輔領分之儀相濟承罷在候、駕籠訴訟近江守次郎九郎と掛合之訴狀共請取置候處、駕籠訴訟吟味、并伺書答書評議之上、右之趣申出候而者、同役人之心得違相知候と申趣有之、其上駕籠訴訟吟味之儀とは、別段之事と心得違、同役をかこひ候心底ニハ無之候段、其方右之趣申出、心付も無之段不埒之至、依之御役被召放、小普請入閉門被仰付候、

役儀召放之上小普請入逼塞

〔翁草五十四〕濃州郡上噪動并金森家邑除大略

金森家の苛政數々令露顯ニ仍、寅九月〇寶暦八年金森兵部少輔頼錦指扣仰付られ、〇中略同十月廿九日、於評定所左之通被仰渡、〇中略

青木次郎九郎

金森兵部少輔頼錦、最初近江守ゟ申越ス、兵部少輔ゟも書面を以家來差越候ニ付、段々領分之儀承糺、存寄之趣近江守へ申達候處、何れも筋能片付候樣、急度申遣ニ付、御用同前と心得候由申候へども、近江守返答難及差圖と有之上、取計處無其儀、兵部少輔と度々懸合、右領分百姓共を其方陣屋へ呼出吟味、其上百姓共銘々同心印形不申付、庄屋組年寄百姓計請證文爲致印形取候段、押

而印形取候同然之儀、且兵部少輔手紙ニ、本多伯耆守へ致₂內談₁候趣、兵部少輔領分之義、何分取計可₂遣所存ゟ吟味筋之義迄、兵部少輔へ掛合取計候始末不埒之至、依ₗ之御役被₂召放₁、小普請入逼塞被₂仰付₁候、

〔蓊草百九〕田沼家衰微

閏十月〇天明六年五巳左之通被₂仰渡₁、〇中略

松本伊豆守

名代

若林市左衛門

思召有ₗ之ニ付、御役御免、知行貳百五十石被₂召上₁小普請入逼塞被₂仰付₁候、

〔續視聽草八集七〕松外刑罰

申渡之覺

藪庄七郎〇西丸御書院番酒井山城守組

近藤小膳〇同前

其方共儀、當四月〇文政六年廿二日、泊番之節、部屋ニ罷在候處、夕七時過物音致シ、松平外記及₂刃傷₁候旨、二階之相番共馳下り候ニ付驚、外相番とも一同御番所江駈出、外記を捕押候心付も無ₗ之、池田吉十郎部屋內を見屆候迄、御襖達切罷在候段、憶候次第ニ候、剩有體難₂申立₁存、可ₗ然取繕呉候樣、吉十郎へ相任せ、相違之義共、とも〳〵申張罷在候始末、古くも乍₂勤、別而不埒之至ニ候、依ₗ之御番被₂召放、小普請入逼塞被₂仰付₁もの也、

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年七月十三日、外國ニ使スル者三人咎ヲ蒙ル、〇中略

外國奉行河津駿河守　其方儀外國へ爲₂御使₁被₂差遣₁候處、不行屆の事共有ₗ之、不束の至に候、依ₗ之御役被₂召放₁、小普請入逼塞被₂仰付₁候、〇中略

右立花出雲守宅に於て、若年寄中出座同人申渡之、

役儀召放之上遠慮

〔憲教類典四御告二十一〕享保四己亥年十月十一日

大御番　松平志摩守

其方組之者共風俗不宜、其上組頭共不殘勤方不相應ニ付而、組頭共御役被召放、知行半地被仰付候、其方常々申聞油斷なる儀ニ候、依之御役被召放急度遠慮仕可罷在者也、

役儀召放之上押込

〔幕朝故事談〕諸侯間部退出の節、櫻田を出候節、平岡美濃守御預りの御馬徒者に突當り候て、徒者と中間と、御馬の口中間を打擲いたし候に付、牢舍被仰付、○中略徒頭の行届かざる致し方故、役義取上げ押込、

○

扶持召放

〔月堂見聞集十一〕享保四年亥六月十三日申渡覺○中略

守屋助次郎
平岡孫市

兩人儀、前々御代官相勤候内、引負在之、御役被召放候、其以後上納も相滯不屆候、依之御扶持被召放者也、

〔舊記拾要集四〕寶曆十三未年八月、御用覺帳書拔○中略

申渡之覺

竹内勘左衞門○田安郡奉行

其方儀、去々巳年、田安領知武州之內村々致廻村、田方定め、年季內的當も無之、大造成增永新規等申付、百姓銘々得心印形可取處、村役人計之請印取之、右村役人之內不罷出者之印形は、名主押候も有之等閑成仕方故、村々實に致得心候には無之、殊に可申出事有之候はゞ可願出由、杉本平次

郎、小磯三大夫名前ニ而廻狀差出、村々願出候上は、吟味詰リ之口書取レ之、否可二申渡一處、最初願出候節、利害而已申聞、不レ取上一段、兩端成取計故、再應赦免願出、其砌三大夫存寄之書付差出候而は、田安御外聞不レ宜所存ニ候處、家老江も不二差出一、其後村々內四ツ谷屋舖門訴いたし候上、箱訴狀迄差出候始末ニ致成候段、役柄ニ不似合不埒之至候、依レ之御切米被二召放一者也、

八月

町奉行　初鹿野河內守掛

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政二戌年三月

鳥居丹波守殿御差圖

一御賄頭支配新組善次郎盜物致二質入一候一件

御賄頭支配新組頭木村彌太郎組合

新組　善次郎

右之もの、兼而知ル人政右衞門所持之由衣類持參、質入之儀相賴候ニ付、紛失物共不レ存、出所も不二相糺一、殊ニ兄八郎兵衞名前ニ而質入致候ハヽ、同人江可二申聞一處無二其儀一、質通帳ニ結付有レ之印形持參、置主判ニ押用、其上證人孫次右衞門江も不二申聞一、證人ニ爲二記置一、兩度質入致遣候段、不埒ニ付、御扶持召放、

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政九巳年九月

戶田采女正殿御差圖

一神田松枝町金兵衞店捴兵衞博弈一件

町奉行　小田切土佐守掛

囚獄石出帶刀看抱神谷辨之助組同心

須藤平次郎

右之もの儀、捴兵衞方ゟ木櫛を請取、磨キ賃錢を取致二內職一候ニ付、右櫛請取ニ罷越候節、捴兵衞宅

減祿

二階ニ而、博弈有之儀相察、同人江も異見差加候程之儀ニ候はゞ、其後ハ摠兵衛方江ハ罷越間敷處、度々罷越、博弈有之節ニも參り合候儀共、右席江ハ不携、二階下ニ罷在候とも、牢屋同心勤候身分ニ有之間敷儀、不埒ニ付、御扶持召放、

〔幕朝故事談〕刑部卿様〇一橋治國御家老に成候伊丹兵庫頭、監察の爲、刑部卿様へ行、百日の後、御家老平井宮内少輔不禮之段申上、板倉佐渡守様にて被仰渡候は、其方義、刑部卿様御傳被仰付候處、常常刑部卿様仰をも違背いたし、其上去十五日於御城對刑部卿様不禮ニ付、御役御切米被召上、新規二百俵被下、小普請被仰付と有之、

〔百一錄〕延寶五年二月□日、東園亞相基賢〇從關東可有蟄居之旨申來、意趣不分明、　四月三日、東園前亞相、蟄居之事御赦免、則以家領付與於子息中將、而百石之方領被召上了、

〔公卿補任靈元〕延寶五年丁巳

前權大納言正二位藤基賢　三月十七日、依武命止出仕、閉門、

〔泰平年表大御所〕天明七年十二月五日、赤井豐前守元御勘定奉行、當時寄合、本高千四百石、知行半知被召上、小普請入逼塞、松本伊豆守元御勘定奉行、本高五百石、當時小普請の所、先年半知被仰付、又候知行百石被減少、小普請入逼塞被仰付、

〔續太平年表〕天保十三年十一月廿三日、寄合市川播磨守、不行跡、家事不取締ニ付、知行半高被召上、小普請入逼塞被仰付、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十一月廿五日、松平出雲守等十一人咎ヲ被ル、各輕重アリ、〇中略

一中奧御小性久貝相模守　其方養父近江守儀、大目付勤役中、飯泉喜內初筆一件吟味の節、立會被仰付候處、不束の次第有之段達御聽、勤柄別て不似合の事に付、依之其方高の內二千石被召上、近江守儀差扣被仰付之、〇中略

右於板倉周防守宅、老中圖書頭列座、同人申渡す、大目付岡部駿河守、御目付塚原治左衞門相渡す、

解官

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年七月十三日、外國ニ使スル者三人咎ヲ蒙ル、

外國奉行池田筑後守　其方儀外國へ爲御使被差遣候處、不取計の事共、不埒の至に候、依之御役被召放、知行高の内六百石被召上、隱居被仰付、蟄居可罷在候、假養子、中奥御小性攝津守弟池田福之助智養子、家督六千石被下、小普請入被仰付候、〇中略

右立花出雲守宅に於て、若年寄中出座同人申渡之、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化九年十二月二日辛丑、堂上不行跡之面々、自先達段々取調有之、去月廿七日頃、被仰渡有之由、其書付今日於藤島家一覽、如左、〇中略

難波四位〇宗職

耽遊興不法之濫行有之、加之廢弃家業、不恐朝憲、其罪不輕、依之被止官、遠慮被仰付候事、落飾可願候事、

富小路三位〇貞直

爲和歌破門之人體、不悔前非、任人之所望、護詠出之事、蹴鞠爲非門、護集會張行、不憚外聞之事、度度遊興、先年被仰渡有之處、爲年輩不顧其儀、不愼之事、預卑賤之俗事、託憐恕爲不正之擧動之事、

右之條々依有其聞、被止官遠慮被仰付候事、

伏原三位〇宣武

身分不相應之進退有之、且先年被誡遊興之節、殊御憐宥之御沙汰有之處、忘却其儀、今度又遊興不顧朝恩之條、不敬之至候、依之被止官遠慮被仰付候事、

〔實麗卿記〕天保十年五月廿一日乙卯、今日近江權介功康朝臣解官止位記、被除籍云々、去二日三品依遭害事云々、即日武家召捕云々、誡輕朝權之條、言語道斷可謂不忠、

〔十三朝紀聞七仁孝〕天保十三年八月、左兵衛大尉瀧口衞士菅原重武有罪、詔停其官職、

除籍

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月廿八日、九條前關白、久我前内大臣等咎ヲ被ル、各輕重アリ、
永牢、官位取上、　押小路娘大和局

〔實麗卿記〕天保十三年六月十二日、己丑、廣範宿禰、亭向源宰相中將(○六條有言)御咎被仰出之旨、從日野中納言(番頭)以回文被示、

源宰相中將

卑俗之地徘徊耽遊興候由、有其聞、遊興之儀毎々其御沙汰有之、近年御咎之輩(茂)有之候得共、其頃迄者風聞(茂)無之候處、至近日憶ニ相聞候儀有之、但此一兩年之事(與)者不相聞候得共、程遠事ニ(茂)無之、殊ニ昇卿位候身分、過初老之年輩、況院中伺候勤仕之儀、不愼之至候、雖爲既往之事、其儘ニ難被差置候、尤伺候勤仕中之儀ニ付、此度委曲ニ不糺問、以御憐愍差扣被仰下候事、

源宰相中將

依思食有之、被除近習列、本番所參勤被仰出候事、

右被觸了

〔實麗卿記〕弘化三年二月十九日乙巳、今曉從六條亭有使者、前相公(○六條有言)去秋已來所勞(腫物名失墜)之處、不被勝之由告來、直遣使者令尋問、彼卿去天保十三年六月已來勅勘之處、今日被免則薨去、春秋五十六、抑此卿通根卿(○久世)爲次男、而有家卿(○六條)爲養子、彼家被相續、昇進勝實家之條、可謂幸甚、而蒙勅勘剰辭兩官之條、不孝之至也、前車誠可愼可懼、

〔兼胤公記〕寶暦二年十一月十七日、攝政殿(○藤原道香)被命、一昨十五日兩人議奏衆申入、清水谷事被成御思慮之處、先依有思召被除近習蟄居被仰付可然候、尤息侍從も可致遠慮候段、御沙汰可然候、右申渡相濟候後、兩人同向于讃岐守役宅、右被仰出候段申達、思召之子細は、常々浮言亂説等有之、不屆ニ被思召ニ付、右之通被仰付候、清水谷右之行跡ニ候ヘバ、隨自意院宮ハ近キ由緒も有之候間、

停出仕

如何樣之儀可申達哉、難知候間、關東ニも其御心得可有之、勿論讃岐守ニも此旨可致覺悟候、無筋事取上ハ有間敷事ニ候得共、爲心得可申達置之由、攝政殿被命之由可申達候、又近習之輩御前之儀、漏達堅無用之事、急度可加制禁、內々外樣之輩も、對近臣御前之取沙汰尋問致間敷由、急度可相愼候段申渡、可然之由命之、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年八月十八日、京師騷動ス、三條西中納言季知、三條中納言實美等出奔、並ニ長藩咎ヲ被ル、

某氏より書翰の寫〇中略

明六半時頃、關白殿〇藤原輔熙傳奏議奏國事掛りの堂上方、其外參內被止候事、但夕七時前より關白殿兩傳奏衆丈けは、參內被仰出候事、〇中略

三條中納言、廣橋中納言等ノ參內ヲ停ム、

三條中納言、廣橋中納言〇胤保、德大寺中納言〇實則

右十八日朝御參內御差留、且他出、並諸人へ對面共御差留の事、

右之外議奏衆不殘、並に御親兵掛り、國事掛り、御參內御差留の事、

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年七月六日、一橋刑部卿ノ登城ヲ止ム、

德川刑部卿慶喜　思召御旨被爲在候に付、當分御登城御見合被成候樣被仰出、

卷說、尾州、水戶、越前、一橋等、今般の一條、種々の風說あれども皆流言にて、其實は先月廿四日、尾州、水戶、越前三家急登城にて、亞國條約談論、當時執政彥根侯〇井伊直弼と開鎖齟齬の一條なれ共、種々の流言を發し、今般三家謹愼、一橋卿登城差留に相成と云、

古事類苑

法律部四十二

下編上

身代限

過料

連帶過料

古事類苑

法律部四十二

下編上

身代限

身代限ハ、負債者ノ田、畑、家、屋敷、家財等ヲ官ニ沒收シテ、債主ニ下付スルナリ、但シ田畑ヲ沒收スルニ方リ、既ニ典物ト爲リ、其證書ヲ有スル者アルトキハ之ヲ除ク、

小作滯身代限ハ、田、畑、家、屋敷ヲ官ニ沒收シテ債主ニ下付シ、其後負債ヲ辨償スルニ於テハ、其地所ヲバ負債者ニ還付セシムルナリ、

身代限方法

〔御定書百箇條〕身體限申付方之事

從前々之例
一田畑、屋敷、家藏、家財取上、

享保二年同三年極
但他所に家藏有之分も取上、尤金子立會吟味之上、金高不足に候得バ、追て身上取立次第可相掛旨申付、金高ゟ餘分有之者、滯金に應じ爲相渡可申候、小作滯身體限、田畑屋敷ハ金主江渡置候上、年々作德を以、滯金於相濟ハ、地所元地主江可爲相返事、

享保六年極
一店借に候はゞ　家財取上

但地借にて、家作自分に仕置候はゞ、家財、家作共、取上可申事、

〔科條類典下二〕町奉行所ゟ書拔來候例書之內、享保六丑年伺、

覺、

總體身代限りに申付候儀店借りニ候はゞ、諸道具計を不殘取上可申候、

一地借りにて、家作自分に仕罷在候もの、身體限に申付候はゞ、諸道具家作共に取上可ㇾ申候哉、

右之通奉ㇾ伺候、以上、

享保六丑年六月

中山出雲守

大岡越前守

朱書
右丑六月八日、有馬兵庫頭江相伺候處、身體限りと有ㇾ之上は、地借り之もの、家作諸道具共に取上可ㇾ申候、併奉公人請人抔に而候得ば、奉公人壹人之給金分、家作諸道具取上候而は、貳兩歟三兩之給金に而候半間、家作取上にも不ㇾ及、諸道具に而、給金之分は事濟可ㇾ申候、若大勢之寄子欠落仕候はゞ、吟味之上、請人は御仕置に可ㇾ被ㇾ成候、何れに致候而も給金滯候はゞ、御定之通身代限りに申付、取上樣は、右之闕所同前に仕可ㇾ然候、尤店借り之者、身代限之儀は、唯今迄之通に可ㇾ仕由、御意之旨、有馬兵庫頭申聞候、

〔公裁秘錄〕身代限申付方之事

一身代限之事、自分居宅、幷藏家財ともニ、不ㇾ殘取上可ㇾ申候、

但他所ニ家財藏在ㇾ之共、諸財共其者之分ハ取上可ㇾ申候、

寅五月七〇享保七年二日

〔官中秘策二十〕一身代限之事、居宅幷藏家財共ニ不ㇾ殘取ㇾ上之、他所ニ家藏有ㇾ之分ハ、諸道具諸財物ハ取ㇾ上之、家藏ハ無ㇾ構、

〔評定所規鑑〕身代限之事

是ハ切金ニ申付候而も差滯、一向不ㇾ差ㇾ出節ハ、身代限ニ申付候事ニ候得共、何樣困窮之ものニ而も、其者之身上取潰候ハ重キ事ニ付、容易ニ身代限ハ相伺申間敷、然共至而不埒ニ付、無ㇾ據身代限申付候節ハ、田畑家屋敷家財、他所ニ有ㇾ之分共取上代金不ㇾ殘金主へ相渡、不足之分ハ其者身上取立

次第、又々可ㇾ相願旨申渡候筋之由ニ候間、其心得を以可ㇾ取計ㇾ事、

但科有ㇾ之欠所ニ成候ものへ、田畑家財ハ、妻子名前之分ハ相除候得共身代限ニ申付候節ハ、慥成證文有ㇾ之質地ハ格別、其外ハ不ㇾ殘取立候筋之由承候事、

〔御定書百箇條〕借金銀取捌之事

一借金銀　一祠堂金　一官金　一書入金　一立替金　一先納金

一職人手間賃金　一手附金　一持參金　一賣懸金 證文にて金子借り候類　一仕入金

一諸道具預 證文にて金子借り候類　一諸物賣渡 證文にて金子借り候類

一御家人、亦ハ御用達町人等拜領屋敷地代店賃を書入、金子借候類、

延享三年極

右之分ハ、延享元子年以來之滯ハ、毎月四日廿一日呼出し、三十日限に濟方可ㇾ申付候、右日限之節、少々も相濟候ハヽ、一ヶ月兩度ヅヽ切金に爲ㇾ差出、其上にて濟方不埒候ハヽ、身代限可ㇾ申付ㇾ事、

但呼出之節不參候歟、又ハ濟方申付候ても不埒之輩有ㇾ之候ハヽ、武士方ハ御老中江申達、寺社町方ハ急度咎可ㇾ申付、且又不埒貸方之類ハ遂ㇾ吟味、其品に寄、金主之者可ㇾ相咎ㇾ事、

一地代金　三十日限、濟方可ㇾ申付ㇾ事、

一店賃金　右同斷

從二前々一之例

右二ヶ條、日限に不ㇾ相濟候ハヽ、切金爲ㇾ差出、其上濟方不埒候はヽ、身體限可ㇾ申付ㇾ事、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

享保四年極　寛保三年極　從二前々一之例

一奉公人給金滯　十日限、請人江濟方可ㇾ申付、

但日限之節、半金も差出候ハヽ十日之日延、其上にて滯候ハヽ身體限可ㇾ申付候、尤主人ゟ請人人主江相懸候ハヽ、兩人江可ㇾ申付ㇾ事、

享保十一年極
一武士方奉公人を人主に取候分　右同斷

寛保三年極
但右同斷

享保六年極
一奉公人請人店請無之出入家主引請相濟、當人人店立願出おゐては、　當人は門前拂申付、追て住所見屆、家主願出候節、身體限可申付、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保四己亥年八月○中略

一門前拂之義、唯今迄之通可申付候、右門前拂成候當人、重而之住所見屆、元家主出入相掛り候ハバ、尤當人身體限に可申付候、當家主江ハ囹に申付間敷事、○中略

右之趣、急度相心得可申旨、町中江可觸知者也、

享保四亥年八月

小作滯身代限

〔御定書百箇條〕質地小作取捌之事

寛保元年極
一小作滯　質地日限之通申付、其上相滯候はゞ身體限可申付、

從前々之例
一家守小作滯請狀之通於無相違は　當人請人共濟方申付、滯候へば兩人共身體限可申付、

雜載

〔東湖隨筆下〕矢部○定謙曰、大坂幷ニ堺ニハ、借金出入ノ裁判定法アリテ、能ク事情ヲ得タル扱ナリ、タトヘバ甲某、乙某ヨリ借金返濟滯リ、乙ヨリ訴ニナルトキ、奉行所ニテ雙方呼出シ、證文見屆ケ、彌ヨ相違ナケレバ、三十日ノ內返濟スベキ由ヲ申渡ス、三十一日目ノ朝呼出シ、未ダ返濟方叶ヒ難キ時ハ、又三十日ノ日延ヲ許シ、必ズ返濟スベキ由ヲ申渡ス、六十一日目ノ朝呼出シ、イマダ返濟方整ハザルニ於テハ、定法ノ通リ甲ヘ手鎖申付、是非返濟スベキ旨ヲ申渡ス、九十一日目ノ朝呼出シ、未ダ整ハザル時ハ、手鎖ヲバ許シ、扨々追々申渡シ手鎖マデ申付タルニ、返濟方致サヾル段、不屆ニ付、定法ノ通リ家屋敷道具等殘ラズ、乙某ヘ引渡スベキ旨申渡ス、此定法ト云ハ、妻子眷族等、皆立ノマヽニテ、夏冬トモ夫々不斷着用シタル衣服ノミ渡シ、家財ハ勿論、先祖ノ位牌マデ殘ラズ貸方ヘ沒收スル掟ナリ、扨甲某ハ、誠ニ恥辱此上ナケレドモ、千兩ニ笠一蓋ノ譬ノ如ク、乙

ノ方ヘ破レ家ヲ不殘指向ケ、又斯申渡ヲ受ル上ハ、他ノ細々シキ借金ハ、一圓返スニ及バザル事ニナリテアレバ、無借金ノ人トナリ、棄捐モ同様ナリ、サリナガラ父母妻子、其日ヨリ路頭ニ迷ハント思フニ、爰ニ一ツ面白キコトアリ、大坂ニハ、三郷借屋請負人ト云モノアリ、三郷トハ、假令バ天滿郷、其郷々ト三所ニ長屋アリテ、右ノ家ヲ殘ラズ貸方ヘ沒收セラレタル者ノミ住居ス、其世話人ヲ請負人ト云、甲某來レバ、直ニ請負人ノ手ニ付、三郷ノ内ニテ然ルベキ長屋ヲ借リ、其日ヨリ商ヒデモ始メラルヽナリ、親類懇意ナド世話シテ、遂ニ家業ヲ起シ、サキノ貸方ヘ掛合ヲツケ、位牌ハ何程ニテ返シクレヨ、何品ハ重器ユヱ、何程ニテ返シクレヨトテ、追々熟談整ヘバ、貸方ニテ無用ノ位牌等ヲ所持センヨリハ、掛合ニ任セ金ヲ取リ、其上ニテ熟談整ヘバ、家ヲモ丸ニ返スナリ、甲某家ニ歸ルコトヲ得レバ、其日ヨリ又元ノ如ク、何町ノ何屋ト回復ス、奉行所ニテモ、元ヨリ借金ヲ返ス計リノ罪ユヱ、熟談整ヒタル由、乙ヨリ屆レバ、夫ニテ事濟ムナリ、甲モ家產ヲ失フ程ノ愚蒙ナレドモ、三郷借屋ヘ入レバ、會稽ノ耻ヲ雪ント激勵シ、一代ノ内ニ回復スルモアリ、タトヘ父ハ回復スルコトヲ得ズトモ、其子ハ貧窶ノ中ニ生長シ、父ノ業ヲ復スル也、多キ中ニハ、彌ナリ下リテ、三四代モ借屋人ニテ終ルモアリ、江戸ニテハ借金出入リ訴ヘニナレバ、雙方ヘ理解ヲ含メナドスレドモ、其間ニ奸吏因縁シテ、賄賂ヲ貪ルノ弊少ナカラズ、大坂界ハ右ノ如ク故、何事ナク濟ムコト、良法ナリト矢部語ルユヱ、某疑テ問ケルハ、如何ニモ面白キ法ナレドモ、甲某三十日日延ノ中ニ、私ニ家財道具等賣拂ヒ、貸方ヘ引渡スベキ命ヲ蒙リテモ、引渡ス品ナキ樣ニ巧ムノ患ハ無キヤ、矢部手ヲ拍テ曰、ヨクハ問レタリ、某モ語リ落セシユヱ不審尤ナリ、日限ノ中ニ、私ニ家財ヲ外ヘ出ス者ハ、三日晒ノ上、所拂ノ法ナリ、是ハ役人吟味セズトモ、第一ニ乙ノ方ニテ日夜心ヲ付ケ、甲ノ方ニ、若シ鍋一ツタリトモ他ヘ出セバ、直ニ訴ルユヱ、甲モ奸ヲ行フコトヲ得ズ、且ツ三日晒ノ耻ヲ受ルノミナラズ所拂ニナリテハ、三郷借屋ヘ入ルコトモ叶ハズ終身回

復モナラズ、妻子路頭ニ迷フ業ユヱ、甲モ家財ヲ他ヘ出サヽルナリ、唯公事ニナラザル以前、最早
産ヲ失ハント思ヘバ、貸方ヨリ訴ニナラヌ内ニ、家財等漸々賣リ拂ヒ、又ハ親類等ヘ預ルモアリ、
夫故貸方ニテモ、此借主ガ返濟六ケ敷カラント思惟スルトキハ、亦アラカジメ手ヲ廻シ、其動靜
ヲ察シ、聊モ家財等、他ヘ送リ出スノキザシヲ見レバ、忽チニ奉行所ヘ訴出ルコトナリ、此定法ハ、
有德公ヨリ始ルト申傳フナリ、實ニ難有御事也ト語レリ、

過料

過料ハ卽チ過怠ノ事ニテ、既ニ中編ニ於テ之ヲ言ヘリ、德川氏ノ時ニハ、久シク其法ヲ立テザリシガ、吉宗ノ時ニ始テ之ヲ設ケタリ、卽チ輕過料、重過料、應分過料、小間過料、村過料等ノ別アリ、輕過料ハ、錢三貫文、或ハ五貫文ヲ出シ、重過料ハ拾貫文乃至貳拾貫文ヲ出ス、應分過料ハ、其分限ニ應ジ、三分一、或ハ三分二、又ハ四分一等ヲ出サシム、小間過料ト云フハ過料錢ノ高ヲ以テ、其家屋ノ間口ノ間數ニ應ジテ出サシムルヲ謂フ、假令バ五人ノ者ニ各三貫文ヲ科スル時ハ、其高拾五貫文ナリ、此拾五貫文ヲ其家屋ノ間數ニ配當シテ出サシムルヲ謂フ、村過料ハ、其村ノ石高ニ應ジテ出サシムルナリ、但シ百石ニ就キテ貳貫文ヲ出ス、又別ニ連帶過料ト稱スベキモノアリ、而シテ過料ヲ出スニハ、凡テ三日ヲ以テ限トス、但シ貧窮ニシテ出スコトヲ得ザル者ハ手鎖ノ刑ニ處ス、此刑ハ庶人ニノミ科シ、又附加刑トシテ科スルモアリ、

始設過料法

〔科條類典 下七〕㈣御仕置仕形之事

享保三戌年四月

過料初リ候儀ニ付御書付

白紙手形ニ而借し金等仕候もの有之候節、證文ハ破り捨、過料三拾兩、又ハ貳拾兩出させ可申候、右之員數ニ不限、其もの之身上に應じ、多少可有之事、

右御書付より前ニハ、過料之儀相見え不申候、

過料方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一過料 享保三年極　三貫文　五貫文

但重きは拾貫文、又は貳拾兩、參拾兩、其者之身上に隨ひ、或ハ村高に應じ、員數相定、三日之內爲納候、尤至て輕キ身上にて過料難差出者ハ手鎖、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

享保二年極
延享元年極追加
一田畑持高之內半分、或は三分二、三分一取上候ものは、

持高三分二可取上分
過料一反步に付　五貫文ツヽ

同半分可取上分
同過料壹反步に付　三貫文ツヽ

同三分一可取上分
同一反步に付　貳貫文ツヽ

〔科條類典下四〕享保十巳年伺書

附札
諸博奕頭取、金元、宿、句拾等、幷訴人之事、○中略

此流罪死罪之儀、是程ニ不被仰付候而は、諸博奕十ノ物一ツ二ツも滅じ申間敷候、○中略右博奕打之分は、唯今迄御定之通、身代限家藏取上可申候、家藏無之ものは、右ニ准過料可申付候、

〔御仕置例類集三〕寬政八辰年

一家財家藏取上候程之過料、取計方之儀ニ付、所司代江達、

堀田相模守江申遣候趣

其地町奉行菅沼下野守掛、足打源四郎事源兵衞博奕一件御仕置之內、敲ニ可成ものども之儀、定例之通過料ニ被申付候樣、先達而相達候處、家財家藏取上候程之過料取上方之儀、其地にハ例無之由、依之大坂町奉行之取計方相糺候處、彼地ニ而ハ所持之懸ヶ屋敷ハ相除、居宅幷居宅附土藏疊建具諸道具とも入札申付、右代銀之內七步通取上候仕來之旨、向後其地ニ而も、右之通可取計

哉之段、町奉行其御自分江相伺候ニ付、差出候書付寫被越之、被申越候趣令承知候、家財家藏且抱屋敷ニ有之候家藏ニ而も、不殘代金ニ積リ、店借ニテ家藏無之ものハ、家財計直段ニ積リ、右積高之三分二取上可申候、尤以來共此通相心得候樣、町奉行共江可被申渡候、以上、

十月九日　　連名

堀田相模守殿

〔法曹後鑑〕未（寛政十一年）六月五日、伊豆守殿江御直上ル、同月十二日承付ニ御下、

過料取立方之儀ニ付申上候書付

書面申上候趣被御聞置候旨被仰渡承知仕候、

未六月十二日　　評定所一座

過料御咎之義、御定書ニも、過料幷重過料、身上ニ應じ過料、身上三分二取上候程之過料、家財家藏取上候程之過料、小間ニ應じ過料、村高ニ應じ過料と有之、右之內通例之過料ハ五貫文、三貫文申付、重過料ハ、拾貫文、貳拾貫文申付、尤御定書御仕置仕方之ヶ條ニも、其ものゝ身上ニ隨ひ、貳拾兩、三拾兩、或ハ村高ニ應じ員數相定、三日之內爲納候と有之、在方村過料之儀ハ百石貳貫文づゝ之積りを以申付候得共、江戸町人幷田畑無之もの、身上ニ應じ過料之儀、是迄之取立方區之筋も相見、其外身上三分二取上候程之過料之類、御定書之例等も相糺候處、聢と仕候目當無之、町方留帳之內、明和四亥年重過料之取計方書留有之候處、右ハ當人一ヶ年之暮方町役人江申付爲相糺、建家、疊建具、家財、衣類等を除、身上高を四割ニいたし、一ッ分江又一ッ分を二ッニ割、其一ッを加へ候割合を以、四分一餘之割合ニ申付候由、右割合方之譯相分不申候間、猶又相糺、以來之目當取極申度、評議仕候趣、左之通御座候、

一過料

右ハ御定書ニ有之候通、三貫文、五貫文、是迄之通申付可然候、

一身上ニ應じ過料

右ハ前書御定書ニ、重ハ拾貫文、又ハ貳拾兩、三拾兩、其もの之身上ニ隨ひ、或ハ村高ニ應じ、員數相定可申と有之、尤村高ニ應と有之ハ、一村江當り候咎ニ可有之、村過料ハ、是迄之通、百石貳貫文之割合ニ而申付可然奉存候、身上ニ應じ、過料之儀ハ、貳拾兩、三拾兩、其もの之身上ニ隨ひ、員數相定可申處、右身上割合方之儀、取極無之候而ハ、區之儀も出來可仕、依之地主家持之分ハ、一ヶ年之地代、幷家賃上リ高、家内人別之割合を以、其分限四分一餘之積り申付可然奉存候、

朱書 此四分一餘と申ハ、明和四亥年、依田豊前守町方勤役之節之書留、本町三丁目大坂屋文藏、一ヶ年之暮方、分量凡四拾七兩程ニ有之、右之分限四分一餘之割合ニ而過料七拾貫文申付候趣ニ御座候、右ハ御定書ニ、三分二、三分一之過料と申名目有之、身上ニ應じ過料と有之候上ハ、三分二ゟ輕く、四分一餘ニ申付候儀と相聞、於趣意相當之儀ニ奉存候、

且右ハ家持之儀ニ而、延享二丑年島長門守、能勢肥後守江、店借之身上ニ應じ、過料之儀御尋有之候節、家内人別之暮方を積リ立、身上宜ものハ貳拾貫文、中分ハ拾貫文、輕きものハ三貫文之過料申付可然趣申上候書留有之候間、店借之ものハ、右之趣を以過料申付候積リ、

一身上三分二、又ハ三分一取上候程之過料、

右ハ御定書御仕置仕方ヶ條之内、田畑持高之内三分二、又ハ半分、或ハ三分一取上候過料御定有之、三分二之過料ハ、壹反歩ニ付五貫文、三分一可取上分ハ、壹反歩ニ付貳貫文と有之候得共、江戸町方幷田畑無之者之割合ハ無御座、是又前ヶ條之割合を以過料申付候積リ、

一家財家藏取上候程之過料

右ハ見分之もの差遣屋敷地面ハ除キ、家藏家財を入札爲致、右當りを以過料取上ゲ、家藏無之も

のハ、御定之通、身上ニ應じ五貫文、三貫文之過料申付候積り、

一小間ニ應じ過料

右ハ博奕、三笠附いたし候もの之地主、名主、家主、五人組、兩隣ハ、御定之通申付、其外家並之もの共も、御定之通過料三貫文宛申付、右家並家主五人組有之候得バ、過料高合拾五貫文に相成候、此拾五貫文を、小間江割附、小間壹間何程と相成候、其小間壹間分を向側家主銘々之小間江割掛、何程と極、取立候積り、

右之趣ニ相極置候樣可仕候哉、其節々之取計ニ相成候而ハ、區之儀も御座候間、此段奉伺候、以上、

未六月

〔公裁秘録一〕一過料金申付方之事

過料金者、多分隱賣女一件之御咎ニ有之候、右取立方者、譬ば旅籠屋壹ヶ年之作德高并地代店賃等之上り高、且壹ヶ年之暮方諸入用高をも取調、都而身上之助成筋、奉公人之給扶持迄も、身上積いたし爲書出、彌無相違候はゞ、右總高之三分七厘五毛ニ當り候程之割合を以、取立候事、尤右之割合ニ而、過料金高銀ニシテ拾三匁、又者拾六七匁位之過不足者、金壹分之積りを以取立、其餘も右ニ准じ取計候事、

此儀伺濟ニ者、身上之四分一餘と有之、四分一者貳分五厘ニ相成候、其貳分五厘を二ツニいたし候得者、壹分貳厘五毛ニ成、依之四分一と壹分貳厘五毛を合して、三分七厘五毛之取立高ニ相成候、

〔地方落穗集十四〕過料錢上納書認方

御上納仕過料錢之事

一錢何貫文

何誰領分
何國何郡何村
誰

右は石川主水正樣御吟味の上、上州字鼓ヶ嶽と唱へ候山は、峯通り碓氷御關所見通し、遠國にて守護仕候、五料村の外登山相成難く候を相辨へず、旱魃に付用水無之とて、多人數登山致し候段、不埒に付、書面の通過料錢仰せ付られ、三日の內當御役所へ相納むべき旨仰せ渡され候間、御上納仕候、以上、

年號月日　　右何村　誰

何誰樣

御役所

過料制度

〔御定書百箇條〕無取上願再訴、幷筋違願之事

享保五年極
一諸願申出候もの一通吟味之上難成願に候はゞ、難立趣申聞、重て願出候ハヾ、咎可申付旨書付相渡、猶又願出候ハヾ過料可申付事、

享保五年極
但奉行所江願出無取上義に付過料申付候處、遮て箱訴、幷御老中、若年寄中江訴訟に罷出候はゞ、奉行所江呼出、猶又遂吟味、彌於難立願ハ再過料可申付、

〔御定書百箇條〕質地小作取捌之事、

寬保三年極
一質地、名所、並位反別無之、或ハ名主加印無之不埒證文、
　年限之無差別無取上、名主過料、尤名主質入之儀不存證文に、於不致加判ハ不及咎、〇中略

寬保元年延享元年極
一質地之年貢計金主方差出、諸役ハ地主相勤候證文、
　年季之內に候はゞ、定法之通證文仕直させ、質置主、　叱り
　質取主　過料
　加判名主　過料〇中略

同
一質入之地面を半分數ニ直小作ニ、質地之高不殘年貢諸役共地主方相納候證文、
　右同斷

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

享保四年
寛保元年 極

一　欠落奉公人　　請人江三十日限尋申付、三切日延之上、不尋出候はゞ過料、

但取逃いたし候者ハ、六切日延尋可申付事、

寛保三年極

一　欠落奉公人を請人見出、當宿江於預置候ハゞ、　　立替給金、當宿江廿日限濟方可申付候、

但奉公人受人方江引取置候上、致欠落候ハゞ、請人方に罷在候内之雜用共當宿江濟方可申付候、先達て下請人江立替掛り候においてハ、當宿江ハ過料可申付、尤慥成證文取之差置候ハゞ、其下請之者に可申付候、欠落ものハ引返度旨請人相願候ハゞ、爲引返可申事、

寛保元年極

一　人宿之外素人宿之分は　　親類并同國之好身に候はば拾人迄は可爲致請判、

但拾人餘に候ハゞ過料可申付事

〔御定書百箇條〕欠落者之儀に付御仕置之事

從前々之例

一　請合人も無之欠落者圍置候者　　過料

延享元年
同二年 極

一　欠落もの、欠所可成家屋敷を於隱置候には、　　名主役儀取上過料五貫文
家守重過料
五人組過料

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

從前々之例

一　離別状不取他江嫁候女　　髮を剃親元え相返す

但右之取持いたし候もの　　過料

從前々之例

一　離別状無之女、他江縁付候親元、　　過料

但引取候男同斷

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

享保十一年極
一三笠附いたし候者　家財家藏取上候程之過料、家藏無之者ハ五貫文、或ハ三貫文過料

同
一博弈打候者

享保元年極
一取退無盡いたし候者

〔御定書百箇條〕盜物質に取、亦ハ買取候者御仕置之事

從前々之例
一組合之定有之商物、組合不入致商賣候もの、　商物取上　過料

同
一壹人兩判、或ハ證人無之質物を取候もの、　其品取上　過料

〔御定書百箇條〕拾ひもの取計之事

從前々之例
一拾ひ物いたし、不訴出儀於顯にハ、　過料

〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

從前々之例
一預ケ置候ものを取逃候もの　尋申付不尋出候はゞ　過料

從前々之例
一追放等に成候義は、曾て不存候得共、身元も不承糺請人に立候もの、　過料

同追加
一追放等に成候義は曾て不存、請人有之候故、得と吟味も不致店に差置候もの、　過料

〔御定書百箇條〕追加質物出入取捌之事

延享元年極
一利足相濟置候質物可請戻旨申候得共、賣拂候由にて其品不相渡質屋、　質物爲請戻　過料

但質物賣先不相知候はゞ、元金一倍之積り代金爲相渡、過料可申付、

〔御定書百箇條〕追加新田地江無斷家作いたし候もの咎之事

從前々之例
一新田地江無斷家作いたし候もの　家作爲取拂　過料

〔御定書百箇條〕年貢諸役村入用帳面印形不取置村役人咎之事

延享元年極
一年貢諸役村入用帳面等、惣百姓江不爲見、并印形をも不取置においては、　名主役儀取上　過料

但名主組頭私欲有之におゐては名主家財取上所拂、組頭役儀取上過料、　組頭 過料

〔御定書例書〕死罪可成盗人を宿いたし候者、幷村役人御仕置の事、

延享二丑年閏十二月

一右盗人の宿致候を不存村役人　名主 過料　組頭 過料　五人組 過料

〔御定書例書〕隱鐵砲玉藥賣候者御仕置の事

延享二丑年

一隱鐵砲玉藥賣候者　隱鐵砲打候者と乍存賣遣候ハゞ 過料

〔御定書例書〕隱鐵砲打候者と馴合、鳥獸商賣いたし候者御仕置の事、

延享二丑年九月

一可致家業ため、隱鐵砲打候ものと馴合、鳥獸商賣いたし候もの、　過料

〔御定書百箇條〕隱鐵砲有之村方咎之事

寛保元年極

一隱鐵砲所持之村方、他所ゟ參り打候村方、名主、組頭、　江戸十里四方、並御留場之内、 重過料

〔御定書百箇條〕質地小作取捌之事

寛保元年極

一御朱印地寺社領屋敷共讓渡質に入候寺社　江戸十里四方 追放

但讓請質に取候者、地面爲相返、重過料可申付事、

〔御定書百箇條〕廻船荷物出賣出買、幷船荷物致押領候者御仕置之事、

寛保二年極

一廻船荷物出賣出買致候者　買主賣主共 重過料

但荷物代金共取上、荷物は問屋江相渡可申事、

〔御定書百箇條〕隱賣女御仕置之事

享保五年極
一名主　重過料

寛保三年極追加
一踊子呼寄、賣女爲致候料理茶屋等、　所拂〇中略

同追加
一地主ハ　重過料

〔御定書百箇條〕三鳥派不受不施御仕置之事

從前々之例
一同（三鳥派不受不施）勸候者ハ傳法不受、不致歸依候共、名主住居不致候共、大勢村方之者、致歸依候を不存においては、　重過料

〔御定書百箇條〕新規之神事佛事、幷奇怪異說御仕置之事、

寛保二年極
一奇怪異說申觸人集致においてハ人集いたし候宿　江戸拂〇中略

延享元年極
但町方在方共人集いたし候、宿之名主重過料組頭、五人組過料、三十日以上捨置不訴出候ハヽ、町方在方共、名主役儀取上、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

享保十三年極
一車を引掛人を殺候時、殺候方を引候もの、　死罪

享保十三年寛保三年極
但人に不當方を引候者は遠島、車之荷主重過料、車引之家主過料、

享保七年極
一同怪我等爲致候もの　遠島

寛保元年極
但人に不當方を引候者は中追放、車之荷主重過料、車引之家主は過料、

寛保三年極
一當座之口論之上、人殺之荷擔いたし候もの、　重過料

〔科條類典下一〕大岡越前守掛

享保十六亥年十月六日入牢　芝濱松町四町目宇兵衛店　源藏

右之もの儀小鴨持通り候を、御鳥見多田大次郎見出し預置候由斷ニ付、遂吟味候處、自分盜取候鳥ニ而は無之、往還ニ而見知越し之ものより買取候由申し候得共、申分難相立、其上問屋共之外鳥商賣仕間敷旨相觸候處、令違背不屆ニ付、同十二月廿七日、過料七貫文申付ル、

〔科條類典下五〕狂言役者抱之子共兩人ニ爲致怪我候車引并主人家主

稻生下野守掛○中略

元數寄屋町三町目加兵衞店車引治兵衞主人

一過料錢貳拾貫文　新八

同所貳町目車引利右衞門家主

一同拾貫文　總右衞門○中略

右四人之者召仕店之者共江、常々相愼候樣に可申付處、申付不埒ニ付、右之通怪我人も有之不屆ニ付、丑五月十一日召出し、過料錢差出候樣申付之、

〔科條類典下一〕松波筑後守掛

元文二巳年十二月二日入牢　伊奈半左衞門御代官所行德領猫實村　源右衞門

右之もの御停止相背隱鳥調、北本所妙蓮寺屋敷六兵衞店長次郎方江賣渡、其上白雁壹羽打殺候段、重々不屆ニ付、翌午三月十一日、過料拾五貫文申付ル、

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政五丑年五月

松平伊豆守殿御差圖　町奉行池田筑後守掛

一御疊方肝煎柳原岩井町吉兵衞外壹人、取捨いたし候一件、

御疊方中村彌大夫手先肝煎柳原岩井町利兵衞店　吉兵衞

神田松枝町家主　甚右衞門

輕過料

右之もの共儀、郡代屋敷疊一式請負候處、御普請出來上り之寄寸尺ニ〆、自然と疊床薄、貫目減候得ハ、其段有體ニ申立、取計候はゝ子細無之處、御場所急ニ成手廻難成迚、疊床之内江土砂等を入、貫目を合置、見分之節相顯、右疊ハ引替相納、猶又見分も相濟、利欲ニ拘、土砂等を入候儀ニハ無之旨申候得共、年來肝煎仕相勤、右體之致手拔候段不埒ニ付、肝煎取放、過料錢拾貫文、

〔御定書百箇條〕隱鐵砲有之村方咎之事

寬保元年極

一 隱鐵砲打候村方、同致所持候村方地百姓、　江戶十里四方　輕過料

〔御定書百箇條〕三島派不受不施御仕置之事

延享元年極

一 同(三島派不受不施)勸候者は住居不致候共、大勢村方之者致歸依候を不存においては、　組頭　輕過料

〔御定書百箇條〕倒死幷捨物手負病人等有之を不訴出もの御仕置之事、

寬保二年
延享元年
極

一 倒死幷捨物等有之を押隱、不訴出においては、

店借地借家主　過料五貫文

五人組　過料三貫文

名主　過料五貫文

但右地主、家主、名主、五人組於不存候ハ無構、在方も右同斷、

同同

一 變死幷手負候ものを隱置不訴出、其外病人等隣町江於捨遣候には、

店借地借家主　過料五貫文

五人組　過料三貫文

名主、役儀取上　過料五貫文

但右同斷

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重キねだり事致候もの御仕置之事、

延享元年極

一 願不濟儀を叶ひ候體に申成、會所を建、掛札等出候もの、　家財取上　所拂

但當人居町居村において會所を建、於致掛札にハ名主過料五貫文、家主、五人組過料三貫文、
尤他所にて會所建掛札等出候はゞ、居所之名主、五人組、其事を不存においてハ無構、

〔御定書例書〕祈禱の奇瑞にて出候旨可申觸と有體不申社人咎の事

延享元子年十月御仕置の例

大傳馬町平七店　伊藤若狹

岩附町喜右衞門方へ旅人八月廿四日夜、金子被盗候間、金子相知候樣に祈禱の儀、喜右衞門方より右若狹所へ頼候に付、致祈禱候處、九月朔日の夜、何ものに候哉、此品岩附町へ屆候樣にと申投込候由、然る處最初番所へ訴出候節は、何者に候哉紙包神前に差置候に付、散錢と存明ケ見候得ば、金子に候旨、取繕申出候段不埒の至、誤入候由申し候、右巧成儀御座候間、江戸拂可申付哉と相伺、

御差圖

奇怪異説等申觸候者、江戸拂の御定に候得バ、拵事をいたし、或は少しの事を色々取繕申立候者共の事に候、此もの儀は有體を不申迄の儀に候、江戸拂不及、過料可申付事、

〔評議書〕寬政元年閏六月七日

當四月廿六日御渡被成候、大坂町奉行相伺候、人違ニテ池江突はめ候死骸、不訴出致火葬候一件、

角倉與一御代官所
牧野備後守殿領分　入會
河州石川郡山田村庄屋
傳右衞門
嘉右衞門

御仕置之儀評議仕候趣、左之通御座候、〇中略

年寄
彌兵衛

右之者共儀、村內溜池ニ而致溺死候源七死骸、親町兵衛從弟與右衛門見屆、全く狐狸之仕業と存、無申分死骸引取度段申候共、變死之事ニ候得バ何れにも訴出差圖を請可申處、無其儀、町兵衛與右衛門儀死骸早々葬送致度旨申之候迚、存命之姿ニ取繕、內證ニ而死骸引渡遣候段、旁不行屆取計不埒ニ付、過料三貫文ヅヽ可申付哉之段相伺申候、

此儀御定書ニ、倒死幷捨物等有之を押隱し、不訴出ニおいてハ、店借、地借、家主過料五貫文、五人組過料三貫文、名主過料五貫文、但地主、家主、名主、五人組於不存者無構、在方も右同斷と有之候ニ准じ、庄屋ハ過料錢五貫文、年寄ハ同三貫文可申付旨被仰渡可然哉奉存候、〇中略

右評議仕候趣、書面之通御座候、〇下略

〔御仕置例類集三ノ六〕寬政元酉年十一月

牧野備後守殿御差圖　　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一上州高崎城下ニ而捕候無宿定次郎一件

菅沼安十郎御代官所上州群馬郡伊香保村武大夫店　善助

右之もの儀盜物とは不存候得共、定次郎任申旨、出所も不糺衣類賣拂候代金之請取書を認メ、定次郎名前之下江有合之印形を押遣し、又ハ宿賃之代袷羽織壹同人ゟ請取置候始末不埒ニ付、請取置候品取上、右代損失之上過料錢三貫文、

右御咎附

右御定書ニ盜物と不存反物、其外買取候もの、其色品取返し、被盜候もの江相返し、代金ハ買主不念ニ候間、損金可為致と有之候間、宿賃之代として袷羽織壹請取置候上ハ、右御定ニ准じ可申處、

此もの儀ハ、定次郎頼ニ任セ、衣類拂代金之請取書認、有合之印形致遣し候不埒も御座候得共、是以盜物とハ不存候得共、出所不相糺質ニ置遣候もの過料之御定をも見合、宿賃之代預り置候衣類取上、右代損失之上過料錢三貫文、

〔續泰平年表〕天保十四年十一月廿六日、戲繪に携り候者共御咎一件、堀江町二丁目彌助店 久太郎、重藏事貞秀、彙次郎、神田御臺所町五人組 長吉、右過料五貫文ヅヽ、室町三丁目繪雙紙屋 櫻井安兵衛 賣德代錢取上ゲ過料三貫文、右者國芳畫賴光四天王之上に化物有之繪に、種々浮說を書含メ、彫刻繪商人共賣方宜敷候に付、又候右之繪に似寄候、中錦繪仕立候はゝ可宜旨久太郎存付、最初は四天王土蜘計之下繪を以改を請、相濟候後貞秀と申談、四天王之上土蜘を除き、種々妄說を付、化物に仕替、改を不請摺立賣捌候段、不埒之次第に付、右之通過料申付、

戶〆之上過料

〔科條類典上二〕享保十二未年奇怪異說等之儀ニ付御觸書

伊奈半左衛門御代官所武州龜戶村　名主　次郎助

右者享保十二未年夏中、大杉明神賑ひ候節、取持又ハ散錢、名主方江取集メ配分仕候由風說有之ニ付、一件之もの共遂吟味候處、此もの儀、名主役故、度々相廻り申候得共、散錢引請、配分仕候義ハ勿論、總而散錢等曾而不差綺候由申ニ付、手合仕候もの共引分ケ相尋候處、此もの方江散錢等取集遣候事、配分共ニ仕候義無之由申ニ付、神主江も尋候處、日々集リ候散錢、晩々神主方ゟ直ニ兩替屋江遣し、金子ニ致、兩替候、外之者ニ遣候義曾而無之由申候、右之通散錢配分等之事ニハ不携候得ども、大杉大明神はやり出候初發、伊奈半左衛門方より申渡、壓百姓共まで差綺セ間敷旨申付、證文差出置候處ニ當所ニ罷在候元下代喜兵衛其外五人之百姓共、社內幷神主勝手等江相詰致取持候儀、見廻リ候節ハ右之もの共見合不申旨申候得共、此度賑ひニ不携、證文等申付置、只今ニ至リ相廻リ候節ハ見出し不申旨難立段申聞セ候處、申拔き無之旨申之、不念之仕形ニ付、依御差圖、戶〆之上過料五貫文申付之、

壓分過料

〔御定書百箇條〕倍金、白紙手形にて、金銀貸借いたし候もの御仕置之事、

寛保元年極
一倍金幷白紙手形にて、質地借金等取遣仕候もの不埒に付、濟方之不ㇾ及沙汰、雙方幷證人共過料可ㇾ申付事、

但金主借主過料員數之義ハ、例に不ㇾ拘身上に應じ重く可ㇾ申付事、

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

享保十一年
延享二年　極
一三笠附宿

同
一博奕打宿　両隣幷五人組　身上に應じ過料

同
寛保元年極
一取退無盡宿

元文元年極
但在方者、組頭五人組共過料、

〔張紙留〕百姓之身分ニ應じ、過料取立方之事

御相談書

石川左近將監
菅沼下野守

過料取立方之儀ニ付、去ル未年六月一座ゟ申上被ㇾ仰聞置候旨、伊豆守殿被ㇾ仰聞候書面之内、身上ニ應じ過料取立之儀、地主家持之分ハ、一ヶ年分地代、幷家賃上リ高、家内人別之割合を以、其分限四分一餘之積リ以申付可ㇾ然、右ハ家持之義ニ而延享二丑年、島長門守、能勢肥後守江店借之身上ニ應じ、過料之儀御尋有ㇾ之候節、家内人別立暮方を積立、身上宜ものハ貳拾貫文、中分ハ拾貫文、輕ものハ三貫文過料申付可ㇾ然趣申上候書面有ㇾ之候間、店借之ものハ、右之趣を以過料申付候積と有ㇾ之候、百姓之儀右書面ニ無ㇾ之、近例も相見不ㇾ申、決兼申候、依ㇾ之百姓之身上ニ應じ、過料之儀ハ、一ヶ年作徳高、家内人別之割合を以、其分限四分一餘ニ積リ、田畑無ㇾ之百姓ハ、家内人別之暮方を以積立、身上宜ものハ貳拾貫文、中分ハ拾貫文、輕きものハ三貫文と極置可ㇾ申哉、及御相談候、以上、

小間過料

右之通、享和二戌年五月廿一日、一座相談之上、書面之通ニ相決、

戌五月　欠座無之

〔御仕置例類集三ノ十八〕寛政六寅年十二月

町奉行　池田筑後守掛

松平伊豆守殿御差圖

一本所長崎町茂兵衛辻番人減置候一件　本所長崎町　家主　茂兵衛

右之もの儀、武家方組合辻番請負致し、番人差出、右之内青山大膳亮組合辻番所は、晝夜貳人番々減少いたし置候上、右兩人之内壹人病氣ニ付、下宿致し候處、代りも不差出、晝夜壹人番ニ而差置、既御番衆廻聲掛候節、番人不居合、燈も消有之程迄町家ゟ番人壹人立歸、不束之及挨拶候儀とも、畢竟極之人數を相減、給金之内德用いたし候故、右體之儀有之、旁不埒に付、身上ニ應じ重過料、

御差圖

請負取放之上、身上に應じ重過料、

〔採要秘史六〕店借之もの身上に應じ過料取立方之事○中略

三田功運寺門前　家主　半三郎

右之もの儀、博弈宿之五人組ニ付、身上に應じ過料申付候處、同町ニ罷在候親次右衛門方ニ致同居、家財無之候ニ付、右過料申付方之事、

寛政十午年七月十一日、談之上過料三貫文申付候積極ル、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

享保十一年　延享元年　極

一同○取退無盡宿町內　向側小間に應じ過料

〔張紙留〕天保十亥年十二月二日

小間過料取立方之儀ニ付申上候書付

書面伺之通相心得可申付旨被仰聞承知仕候、

亥十二月五日　　評定所一座

過料取立方之儀、寛政十一未年、評定所一座より申上、其通被御聞置候書面之内、小間過料取立方之廉、博弈、三笠附いたし候もの之名主、家主、五人組、兩隣ハ、御定之通申付、其外家並之もの共も、御定之通過料三貫文宛申付、右家主五人有之候得ハ、過料高合拾五貫文に相成候、此拾五貫文を、小間江割附、小間壹軒何程と相成候、其小間壹軒分を、向側家主銘々之小間江割掛、何程と極取立候趣申上、其後右を見合取計來候處、家並家主江而已過料三貫文ツヽ申付、向側も家主江小間壹間之過料申付、又ハ家並向側とも家主店貸之無差別過料申付候も有之、いつとなく先例區ニ相成、右ハ前書寛政度之書面ニ、家並家主、向側家主と有之候ニ泥ミ、區之取計ニ相成候儀ニ而、畢竟認方紛敷相聞候故之儀、素より御定之御趣意を巨細ニ認分候書面ニ付、家並向側とも家主共江而已御咎可申付筋ニ無之候間、今般一座再應相談之上、度々之先例等をも取調、以後博弈打家並向側とも、家主店貸之無差別過料申付、右取立方之儀、御定之通家並壹人江過料三貫文申付、假令ハ五人有之候得ハ、拾五貫文ニ相成、右五人之もの、并主謀、兩隣共、間口合拾五間有之候得ハ、小間壹貫文ニ相成、右壹貫文を向側小間壹間之過料高ニ極、間數ニ應じ取立候樣極置候ハヽ、御定御文言ニも振不申、書面も解安く、以後區之取計も出來申間敷哉、然哉ニ奉存候、右ハ一旦申上置候趣ニ拘り候義ニ付、此段相伺申候、以上、

亥十二月

村過料

〔御定書百箇條〕地頭江對し強訴、其上致徒黨、逃散之百姓御仕置之事、

寛保元年極

一總百姓　村高に應じ過料

〔御定書百箇條〕廻船荷物出賣出買幷船荷物致₂押領₁候者御仕置之事

從₂前々₁之例
一 同〇逢₂難風₁打荷致残荷物を盗取候、船頭と馴合 盗物配分取候總百姓 配分之品取上村高に應じ重過料

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

寛保元年延享元年極
一 同〇取退無盡宿 名主 町方在方共過料 五貫文

享保十一年延享元年極
一 同町内 家並過料三貫文 向側小間に應じ過料

從₂前々₁之例追加
但在方は村高に應じ過料

〔公裁秘錄〔二〕〕一村高に應じ過料之事

是者村高百石ニ付、貳貫文程之當りを以、申付候事ニ候、

〔評定所張紙帳〕享和元酉年十二月十六日

村過料端石之分取立方之事

一村過料之儀百石ニ付、二百貫文之割合ニ候處、端石之分取立方、是迄區々付、以來端石五拾石より以上ハ壹貫文、五拾石以下ハ不₂割懸₁積り、

右享和元酉年十二月十八日、小田切土佐守於₂内寄合₁評議極、

〔地方落穗集〔九〕〕過料之事

一過料村方江懸り候時は、一ヶ村高百石ニ付、大概錢拾五貫文、人數江懸り候時は、貳拾人以下は、壹人ニ付三貫文、尤貳拾人以上は、總人數にて五拾貫文程也、尤其村々品に寄增減あり、右過料錢は都而伊奈家之掛りに而、半左衛門役所江納るなり、

〔御定書例書〕親之代裁許有之儀を、忰共忘却いたし候咎之事、

野州　馬場村
網戸村
同國　間々田村

延享元子年三月御仕置之例

右馬場、網戸兩村江　思川附寄、水下村々圍堤危成候に付、享保四亥年、及出訴吟味之上、間々田町地内古川浚、橫川〆切、水除普請之儀、右兩村幷水下七千石餘之村々ゟ人歩出し仕立候筈、裁許有之處、兩村共川浚怠り、間々田町之儀も、水帳に載り候、古畑川瀨違川敷に成、古川筋は干上り候故、潰地之代り御代官江相願、畑取立御年貢は納候得共、御代官江願候節、裁許之譯は不申立、裁許繪圖村方に所持致シ罷在、雙方共に先裁許背候仕方、不屆候得共、三ヶ村共に裁許之節は、親々共役儀相勤、當時其者共不罷在候に付、三ヶ村共名主輕き追放申付、馬場網戸兩村高千五百石餘に候間、過料錢七拾貫文、間々田町は高九百石餘に候間、過料錢四拾貫文餘、可申付哉と相伺、

右伺之儀に付御書付

裁許不請者之事、最初より一向裁許之品を不用候歟、或は一端は請候而も、後々如元に仕直し候を可申候、此三ヶ村之儀、名主共裁許不請と申に而は無之、最初は裁許之通相勤、其後怠り、於只今は致忘却たると申に而候間、追放之沙汰には及間敷候、殊更先裁許親共名主相勤候節に而候由、彌無相違候はゝ、三名主重く、過料可然候、村中咎之事も不及過料、浚之入用相懸候より重く、相懸候樣に申付可然候、若其通に難申付候品も候はゝ、輕く過料申付可然事、

右之通御書付を以、被仰渡候に付、名主壹人に付過料拾貫文宛申付、浚方入用重く懸候儀は、人夫凡三萬人程懸り候に付、此上猶重く懸候時は、彌人夫相増夥敷き人足數に相成候間、馬場網戸兩村に而過料三拾五貫文、間々田町江貳拾貫文申付、浚之儀は先裁許之通可仕旨、可申渡哉之旨、猶

又申上候處、其通被仰渡候事、
〔公案比事二十七〕捕方之者江手向、或者不法もの、又者差紙呼出等を拒候類、
天明八申年八月
桑原伊豫守掛
一上總國鳥喰村外貳ヶ村百姓共、地頭申付致難澁候一件、
今大路式部大輔領分上總國武射郡上鳥喰村百姓總代
六兵衛
彥兵衛
朱書
牧野備後守殿御下知
右之者共儀、地頭家來村方江罷越候節、村役人共任申、年貢引方之儀、强而申立、其上大勢騷立、階子竹等を持、地頭家來江致手向、地頭家來之內井上角太、酒井八郎治、阿部要助江手疵爲負、及不法候段、旁不埒ニ付、村過料錢拾五貫文、
〔御仕置例類集二ノ十八〕文化三寅年御渡
日光奉行伺
一日光道中、中鉢石町三郞兵衛致博弈宿候一件、
日光東町之內中鉢石町三郞兵衛
東隣　安兵衛
同組合　西隣　八郎次
同組合　喜兵衛
外三人
向側　新吾

連帶過料

右之もの共儀、鉢石宿裏宇天王山におゐて、小來川村年寄善左衞門筒取に而、致博弈候を不存、其上三郎兵衞居宅續、土藏二階におゐて、同樣博弈宿いたし候をも不存罷在候段、常々心附方等閑故之儀、一同不埒に付、身上に應じ過料、

此儀御定書、博弈打宿兩隣并五人組御咎箇條但書に、在方は組頭五人組とも過料と有之、鉢石町は在方之儀に付、兩隣又は向側之故を以、御咎違候儀は無之、然上は東隣安兵衞、向側新吾は組合に無之間相除、組合西隣八郞次、并組合喜兵衞外三人は、過料錢三貫文宛可申付、且右町方之もの共、吟味は無之候得共、在町に而高も有之儀に付、御定書に、在方は村高に應じ過料と有之候間、前書安兵衞新吾は、勿論、其外小前一同村高に應じ過料、

但村高に應じ過料之儀は、高百石に付貳貫文程之積を以可申付、

評議之通濟

〔科條類典 下 四〕享保十九寅年十一月申渡

一備中國阿賀郡土橋村狐ヶ丸横地御材木盜伐候百姓共御仕置一件

小林孫四郎、保木左太郞、元御預所、狐ヶ丸御林江百姓共大勢入込、松木盜伐旨、御林守并庄屋年寄共、作州倉敷陣屋江致注進に付、彼地差置、右兩人手代差遣、遂吟味伺之上、御仕置之儀左之通申渡、〇中略

右同斷〇關三次郎領分
同村〇備中國阿賀郡草間村百姓
三拾七人

過料五拾貫文

右之者共、誰勸候儀も無之、頭取も不存候得共、御林ニ而薪伐取候者有之を、及見聞不苦儀と心得違伐取候由雖申、御林之木盜取不屆ニ付、手鎖村預申付置候處、三拾七人ニ而過料五拾貫文申付、

古事類苑

法律部四十三

下編上

盗犯

古事類苑

法律部四十三

下編上

盜犯

德川幕府ノ制、人ヲ殺シテ盜ヲ爲シタル者ハ引廻ノ上獄門、人ヲ傷ケテ盜ヲ爲シタル者ハ、死罪、黨ヲ結ビ、人家ニ入リテ盜ヲ爲シタル者、其巨魁ハ獄門ニ處スルコトナリシガ、寬政三年ニ至リ、更ニ捕吏ニ令シテ、逮捕ヲ要セズ直チニ斬リ棄テシム、是ニ據リテ爾後屢〻斬棄ノ令ヲ發セシコトアリ、

追剝トハ、人ヲ途上ニ要シテ、其衣服財寶等ヲ剝ギ取ルヲ云ヒ、追落シトハ、人ヲ途上ニ威迫シテ、其取落シタル財寶等ヲ奪ヒ取ルヲ云フナリ、共ニ强盜ノ類ニテ其罪皆重シ、

竊盜犯ニモ亦重キモノアリ、人家ニ忍ビ入リ、或ハ土藏等ヲ破リタル者、及ビ門戶ノ鎖鑰ヲ破リテ入リタル者ハ、贓物ノ多少ヲ論ゼズ、共ニ死罪ニ處ス、晝夜ノ別ナク、門戶ノ開キテアル所、又ハ人ナキ家ニ入リテ、其座ニアル物品ヲ竊取シタルガ如キハ、其罪頗ル輕クシテ、入墨ノ上重敲ニ處シ、橋ノ欄干、或ハ武家屋敷ノ門戶ノ鐵物等ヲ剝ギ取リタル者ハ、更ニ輕クシテ重敲ニ處シ、湯屋ニ於テ人ノ衣類ヲ竊ミ取タル者ハ、尤モ輕クシテ敲ニ處ス、

掏摸ハ、スリトモ巾着切トモ云ヒテ、路上ニテ故ラニ人ニ觸レテ巾着ヲ截リ取リ、懷中ノ物ナドヲ盜ムヲ云フ、其刑ヲ入墨又ハ敲等トス、

取逃ハ、多クハ他人ヨリ依託セラレタル物品ヲ持チ去ルナリ、是亦其贓物ノ多少ニ由リテ、

其罪ノ輕重ヲ論ズ、但シ其罪重キハ死刑ニ處ス、

押借トハ、人ノ承諾ヲ得ズシテ、其財寶ヲ押シ取ルヲ謂フ、德川ノ末、世上ノ騷擾ニ由リ、嚴ニ此制ヲ立テタリ、

贓物ノ事ハ既ニ之ヲ言ヘリ、德川氏ノ制、贓物ハ總テ官ニ收メテ、之ヲ其本主ニ還付ス、贓物ナルコトヲ知ラズシテ之ヲ買ヒ取リ、或ハ質ニ取リタル者ハ、過料ニ處ス、但シ武家ノ家僕ハ、江戸拂ニ處ス、贓物ナルコトヲ知ラズシテ買ヒ取リ轉賣シタル者ハ、其物品ヲ買ヒ戻シテ、本主ニ還付セシム、但シ本主ハ其代金ヲ償フニ及バズ、贓物ナルコトヲ知リテ、故ラニ買ヒ取リタル者ハ、入墨ノ上敲ニ處ス、但シ數年此業ヲ爲シタル者ハ、死罪ニ處ス、贓物ナルコトヲ知リテ寄藏シタル者ハ、敲ニ處ス、但シ其情ヲ知ラザル者ハ叱リ、或ハ過料ニ處ス、

盜犯者ヲ容止スル者ハ、情ヲ知ルト知ラザルトヲ問ハズ皆罪アリ、

强盜

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從二前々一之例
一人を殺、盜いたし候者、　引廻之上 獄門

享保七年極
一盜に入、刃物にて人に疵付候者、　盜物持主取返候とも 獄門

從二前々一之例追加
但忍入にて無レ之候共、盜可レ致と存、人に疵付候もの死罪、

享保七年極
一盜に入、刃物にて無レ之、外之品にて人に疵付候もの、　右同斷 死罪〇中略

寛保二年極追加
一片輪者を殺候て、所持之品を盜取候もの、　引廻之上 獄門

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政三亥年四月

大目付江

比日盜賊所々江入候趣相聞候、右體之儀有之候はゞ、召捕候にも不レ及候間、打捨ニいたし可レ相屆候、

右之趣、向々江可被相觸候、

四月

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政三亥年四月

大目付江

此節盗賊等有之趣相聞候ニ付、廻リ之もの相增相糺候間夜中ハ無據儀ハ格別、成丈使等も不差出様致し可申事、

一盗賊入候はゞ、糺之手懸ニも相成候間、早々頭支配迄可相屆事、

一盗賊召捕方、手懸リニ成候儀幷不審成もの及見聞候はゞ、書付印封ニいたし、頭支配江不及相屆、御目付江可差出事、

一盗賊筋之儀ニ付、猥ニ不取留風說申ふらし候儀、決而仕間敷候、若猥ニ申ふらす者有之候はゞ、糺之上急度可被仰付事、

右之通、万石以下之面々江可被相觸候、

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政三亥年四月

先達而被仰渡候、盗賊入候はゞ、糺之手懸りニも相成候間、早々頭支配迄可相屆旨、被仰渡御座候處、以來御支配方ヘ御屆不及、拙者共江御屆可有之候、尤紛失之品も有之候はゞ、其段も可被申聞候、

右之段、越中守殿被仰渡候、

四月　　神保四郎右衛門

〔徳川禁令考後聚二十五 行刑條例 徳山五兵衛掛〕延享四卯年二月十一日

無宿十右衛門事濱島庄兵衛强盗一件

異名日本左衞門無宿十右衞門事　濱島庄兵衞 二十九歲

此もの儀、同類大勢申合、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、近江、伊勢、右八ヶ國ニ而、所々押込、金銀多く强盜致し候段、重々不屆ニ付、町中引廻し之上、遠州見付宿おいて獄門、

堀田相模守殿御差圖

〔窻の須佐美 三〕一同じ比、○延享三年遠州見付袋井の邊に、濱川庄藏といふ者、或書ニ濱島庄兵衞トアリ、假名日本左衞門とて丈五尺七八寸、强力にて、年齡三十餘、從ふ者五六百人といへり、所々押入て强盜すとて、盜賊改役德山五郎兵衞より組の者を遣はし、黨類數十人を捕しに、庄藏は遁れ出て逐電せしかば、人相書を以て撿斷せられしが、冬の末に至て、京町奉行永井丹波守殿へ出て自訴しけるは、御尋の庄藏にて候、人相書にて御尋に御座候得ば隱れ申べき方もなく、或は自殺溺死にても仕るべく候ども、某を御尋にて、歷々の御辛勢の段承り候ゆゑ罷出候、亦士の禮にて若黨など連、御門迄參るべきを、一人にて參候ては、見咎められ候て捕へられ候ては口惜く候ゆゑ、如斯の樣體に仕立罷出候、此上は重刑に處せられ候事、覺悟の上にて候と申ければ、繩を懸んとしけるに、强て御搦めは御無用に候、いか樣に御搦め被成候ても、遁れんとなれば心に任せ候、亦二十間退候へば、人手にはかゝり申さず候と辨舌爽かに言けり、延享四年丁卯の春、江戸へ下し禁獄して、手下の者共の捕へ置候を引出し見せければ、平伏して高貴の人に事るが如く恐れ敬するとぞ、偖種々推問の上、汝不遁身也とて、京町奉行へ出たるは左も有べし、見付宿にて捕へし時、其所を立退ながら、程經て出ぬるは心底に巧む所有と見ゆ、亦人々の物を盜取たるにてはなく、貧なる故、富有の方へ行、金を借りて、窮困の者へは貸與へつる故、諸人歸服しぬと言、亦某の村の民共より大金を借置、返すべきといへども請ざる事、徒黨の志と見ゆ、此二ヶ條申ひらくべしと有ければ、此儀誤りて候、申ひらき無之候と申せしと巻説に有りし、同年夏の頃、江戸中引廻し、遠州見付にて梟首せられぬ、同類の中六人同罪、奴僕一人遠島せしとかや、

〔一話一言三十七〕長崎二人罪狀告示

長崎村船津浦
源太郎子
伊之助
年二十一歲

此犯原有債錢、逼于窮苦、糾合福次郎、隨雇善次郎、丑之助、宇十等三名、爲作水手、卽時相約云、果得贓物、改日分配等語、于乙亥十二月十四日夜、潛往河下唐船、不惟偸盜棕索磁器等許多各宗、甚至將赶來之唐人、拋入海中等情、那善次郎指揮、及至丑之助將唐人拋入海裏之際、應該阻當、而並無此舉、以致唐人溺身死、此等事端、全係此犯造起意端、潛往偸盜、以至于此、罪惡難容、今奉部諭、准此押送各街、卽刻梟首示衆、

丙子三月

長崎村船津浦
福次郎弟
善次郎
年三十二歲

此犯肯從伊之助及兄福次郎之言、約定改日得贓分配等語、全丑之助、宇十一起受雇水手、于乙亥十二月十四日夜、潛往河下唐船、況恐有後患、將赶來之唐人投入海中等語、指點丑之助、以致唐人溺水身死、至于此狀、罪惡難容、今奉部諭、准此押走各街、卽刻梟首示衆、

丙子三月

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政二戌年四月

松平伊豆守殿御差圖

御勘定奉行
曲淵甲斐守掛

一甲州白須村ニ而召捕候無宿源之助盜いたし候一件

無宿
源之助

右之もの儀、往來ニ而、盲人所持之風呂敷包、持可遣旨申、盜取逃去、幷見世先ニ而錢盜取、其外同類申合、名前不存百姓家〆リ有之戸を固辭明、或者〆リ無之處江も這入、衣類盜取、剩下圓井村法雲

竊盜

寺江押込、貯錢有之候は、可差出、左も無之候は、可切殺旨申威、同村龍珠院江も罷越、表口敷居下を堀懸り候を、穢多長兵衛外壹人捕候節、脇差を拔疵付候始末、不屆至極ニ付獄門、

右御仕置附

右御定書ニ盜ニ入、刃物ニ而人ニ疵付候もの、盜物持主江取返候共獄門、但忍入ニ而無之候共、盜可致と存、人ニ疵付候もの死罪、盜可致と徒黨致、人家江押込候もの、頭取獄門、同類死罪、片輪もの所持之品を盜取候もの死罪と有之、此ものは、押込之同類ニ而、盜ニ可入と敷居下を堀候節、長兵衞捕懸り候處、脇差を拔、同人江疵付、片輪ニいたし候科、重々御座候間、右御定を見合、重き方江附獄門、

〔御仕置例類集三ノ十八〕寛政二戌年六月

鳥居丹波守殿御差圖

御勘定奉行　根岸肥前守掛

一肥後國牛深村岡分百姓共同村助七外五人之居宅打毀候一件、

松平主殿頭御預り所肥後國天草郡牛深村岡分　年寄　市郎兵衛

同人弟　百姓　五郎兵衛

右之もの共儀、助七江質地ニ相渡候地所之御年貢之內、又は諸役錢等同人方まで不相勤、此もの共方ニ而勤來候儀は、相對ニ而濟來候處、右之儀ニ事寄、小前之もの共江申勸メ徒黨を企、助七江難題申掛、同人幷次四郎外四人居宅をも打毀、及狼藉、米錢衣類奪取候段、不屆至極ニ付、兩人共獄門、

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

享保五年極　一家內江忍入、或ハ土藏抔破候類、　金高雜物不依多少　死罪

延享元年極　但晝夜に限らず、戶明有之所、亦は家內に人無之故、手元に有之輕品を盜取候類、入墨之上重

敲、〇中略

元文五年極
一片輪もの所持之品を盜取候者　死罪〇中略

享保五年極
寛保元年極
一手元に有之品、風と盜取候類、
金子は拾兩方以上、雜物は代金に積、拾兩位方以上は、　死罪
金子は拾兩方以下、雜物は代金に積、拾兩方以下は、　入墨敲〇中略

從二前々一之例
一御林之竹木、申合盜伐致候もの、
頭取に准し候もの　中追放
同類　過料

享保五年極
一輕き盜いたし候もの　敲〇中略

從二前々一之例
一途中にて小盜いたし候もの　敲

同
一橋之高欄、又は武士屋敷之鐵物外し候者、　重敲

同
一湯屋江參り、衣類着替候者、　敲

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕延享四卯年二月七日御渡

盜賊御仕置之事幷右ニ付雅樂頭殿口上覺書

三奉行江

一物を盜候はゞ、不レ限二多少一賊徒、
一家之内江入、盜未レ致内ニ召捕候はゞ、忍入之無二差別一賊徒同前、
一僞を申、物を語取候もの、賊徒同前、
一町方江參、ねだり候而、物を取候もの、賊徒同前、
右各盜賊ニ付、可レ爲二死罪一候事、

一巾着切
一腰錢、袂錢を拔取候者、
右何も可㆑爲㆓入墨之刑㆒事
　但入墨之もの、惡事不㆓相止㆒召捕候はゞ死罪、
右之通可㆑被㆑得㆓其意㆒候
御定書ニ有之趣、相改候事ニに無之思召有之ニ付、先書面之通を以、御仕置可㆑被㆓相伺㆒候、
　二月
　同日伯耆守殿雅樂頭殿御列座ニ而、御兩所御口上ニ而、越前守肥前守江被㆓仰聞㆒候趣之書付、
延享四卯年二月七日、本多伯耆守殿、酒井雅樂頭殿御列座ニ而、別紙御書付之通相心得可㆑申、尤初个條之儀者、至而少計之物を盜取候はゞ、其時ニ至り相伺可㆑申候、只今迄之御定書は、其通りニ相守可㆑申候、右者思召有㆑之ニ付、別紙御書付之通之旨被㆓仰聞㆒候、
（朱書）但寬延二巳年十一月廿六日、此御仕置、如㆓前々御定書之通㆒可㆓相伺㆒旨御書付出候ニ付、此御書付不用ニ相成候、
〔張紙留〕輕重之差別御尋御答書
寶暦十二午年八月十日、松平右京大夫殿江、松平伊賀守、土屋越前守、安藤彈正少弼、御直上、
評定所一座
　御仕置御定書之内
一旦敲ニ成候上、輕盜致し候もの、　入墨
右輕盜と有之は、金高之無㆓差別㆒、盜之趣意輕方ニ心得候哉、又は金高之輕重と心得候哉、左候はゞ金高何程位より輕方ニ附候心得ニ候哉、

此儀途中ニ而、腰錢、挾錢、又は家之前抔ニ出し有之品、或は居合候者所持之品等盜取候もの、輕キ盜と相心得罷在候儀ニ而、金高之差別は無之、盜之趣意、輕キ方と相心得罷在候、

右御尋ニ付申上候趣意、書面之通御座候、以上、

〔張紙留〕物不取ず盜人、塀幷垣を破這入候もの、御仕置いたし方の儀、門抔之錠前をねぢ切、或は固辭明這入候類は、御定ニ無之候得共、不輕仕方ニ付、家藏江忍入之御定ニ准じ、死罪ニ可相成は勿論之儀ニ付、塀垣を乘越、破跨ぎ這入、又は出入相成候程之積に有之跡ゟ這入候類は戶明之盜と御定ニ准じ、一樣入墨重敲と被申聞候共、何れニも右之趣兼而定置候而は、却而往々不紀候儀も可有之哉、畢竟其盜之始末にも寄、輕重之咎附候儀ニ而候間、右之類は、其節之始末次第、相當之例を以見合、家藏江忍入之御定之盜ニ可准、又は戶明之御定ニ可准盜と申儀、其度ニ認入伺方等不紛樣ニ可被致事、

寬政九巳年四月十六日　　越中守殿御渡

〔科條類典下四〕盜人御仕置之事

櫻田久保町庄三郎店傳兵衞悴

元文二巳年三月十六日入牢　　文六

元飯田町湯屋喜右衞門訴出候は、昨夜六ッ時過、町內善兵衞店八兵衞出居衆權七差置候、木綿布子壹ッ着逃出候所を、湯番七兵衞と申もの見付、追欠取返し候處、誤候體ニ無之、其上惡口いたし候由ニ而召連來ニ付、召出令詮議候處、酒ニ給醉前後不覺由申之候得共、申口不分明ニ付入牢、

右之もの儀、當月十六日之夜、元飯田町湯屋喜右衞門方ニ而、湯入參候權七と申もの木綿布子着し、逃出候に無紛、不屆ニ付、同月廿三日、五十敲之上、親傳兵衞ニ渡遣ス、

〔御仕置例類集[三]〕寛政二戌年松平伊豆守殿御書取御渡

一盜賊御仕置、年來定有之ニ付、下々輕重之次第、辨候樣にも可相成哉之儀ニ付評議、

盜賊御仕置、年來相定有之間、自然と下々輕重之次第、相辨候樣ニも可相成哉、近來盜賊數多之樣ニも有之候得ば、旁暫之間、延享四卯年被仰出候趣ニ相成候而も可然哉、評議仕可申上旨、御書取を以被仰聞候、

此儀延享四卯年二月、三奉行江御渡被成候御書付ニ、物を盜取候はゞ、不限多少賊徒、家之內江入、盜等未致內ニ召捕候はゞ、忍入之無差別、賊徒同前、僞を申、物を語取候もの賊徒同前、町方江參、ねだり候而、物を取候もの賊徒同前、右各賊徒ニ付可爲死罪、巾着切、腰錢、袂錢を拔取候もの、右何も可爲入墨之刑、但入墨之者、惡事不相止召捕候はゞ死罪、右之通可得其意、御定書ニ有之趣、相改候事ニは無之思召有之候ニ付、先ヅ書面之通、御仕置可相伺との御書面ニ而、且敲之分相止メ、科之輕重ニ而、入墨又は追放と其節相伺可申旨之御書付も御渡被成候處、寛延二巳年十一月、盜人御仕置、敲御仕置、向後如前々御定書之通、御仕置相伺候樣、尙又被仰聞候處、右は何樣之思召御座候儀ニ候哉、相知不申、盜賊之儀、御仕置輕重之次第相辨候共、忍入又は拾兩以上之盜致し候得ば死罪ニ相成戶明候處、其外拾兩以下之輕キ盜致し候者、入墨敲等之御仕置ニ相成候間、死罪を遁候程之盜は、不苦と存候程之儀ニも有之間敷、御仕置之輕重相辨候故、近來盜賊多相成候儀とも治定難仕、尤盜賊減じ、往々御仕置ニ成候もの少く相成候ハ時勢之御取計を以、永續之御仁惠ニも可有之哉ニは候得共、唯今迄輕盜、ねだり、街事抔致し、入墨敲等ニ相成死刑を遁罷在候ものも數多有之候處、暫之內、一統死罪ニ相成候も相當り申間敷哉、一旦之御取計ニ死刑ニ不當ものを、嚴科ニ被仰付候も不穩、其上手元ニ有之品盜取候類、幷當座之ねだりかたり等致し候もの、入墨敲等之御仕置ニ相成候內ニは、心底を改、惡事相止候ものも可

有之處、一統死罪ニ相成候は、無宿ニ候共、人命ニ拘り、不容易儀ニ付、延享之例有之、暫之間ニ候共、盗賊之所行ニ不拘、死罪被仰付候は、不可然哉ニ奉存候、

戌十二月

〔天保集成絲綸錄 百〕寛政五丑年四月

三奉行江

都而御仕置之儀は、事實相當之處を以、被取計候は勿論之儀ニ候得共、盗賊御仕置之儀、錠前を明ケ、又は壁を破り、垣を越、〆り有之所江入候類は死罪、〆り無之場所江入、又は手元ニ有之品を盗取候類は入墨敲と、專〆り之有無ニ拘り、是迄被相伺、勿論〆り無之場所ニ而盗致し候類ニも、事實ニおいては巧成仕方、其外〆りを明ケ入候盗人よりも、不屆之所業有之分は、其譯御仕置附いたし、可被申聞儀ニは候得共、〆り之有無ニ拘り、御仕置附有之樣ニ成行候而は、御定ニもふれ、如何ニ付、以來は專事實相當之處を以、夫々御定之通、御仕置申付候樣ニ可被心得候、據而御定書之御趣意ニ思念不深して、文面ニ引當、手みじかく、事易決斷せしむるを專一とする時は、勞煩なる儀は、薄き方ニ而あるべく候得共、自然と事實を考候方は疎ニ成行、且は御定之御趣意ニたがひ候儀ニいたる間敷とも難申候、右之次第は、肝要之儀ニ而、勿論聊油斷なく可被心得事ニ候得共、既ニ別紙ニ相達候、盗賊忍入御仕置之箇條、〆り之有無ニより候など申に至り候、此箇條ニも不限、品々之內、手限ニ申付候類ニ至迄、仕來ニ不泥、猶更厚く被索候而、事實ニ相當候樣可被申合事、

〔新張紙留〕加役方ニ而召捕候、湯屋盗人引合之內、湯屋共紛失之もの有之を不存罷在、其上右次第、其筋訴も不致もの御咎之儀は、紛失之刻限等ニ不拘、都而急度叱り、兼而訴置候分は、捨品等之有無ニ不拘、急度叱り置可申處、其向江訴出候ニ付、御咎之沙汰不及積り、

但江戸町之湯屋、不訴出分は引分ケ、町奉行所ニ而吟味いたし、本文之通り御咎申付候積り、

右之通、弘化三午年、加役水野釆女伺、本所長岡町貳町目由藏方同居六藏、盜いたし候一件、引合之もの共御咎當り評議之節、山城守殿御書取有之極ル、

〔慶長日記〕慶長十五年三月廿八日、駿府城ニ被召仕、上﨟女房成敗也、是連々金子盜ム事及度々、事既ニ露顯間被及殺害、去未年失タリシ金子茶具、此二月出たりしも、此女房ノ仕事かと人口也、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政三亥年十二月

戸田釆女正殿御差圖　町奉行 池田筑後守掛

一無宿喜兵衞盜いたし候一件　無宿 喜兵衞

右之もの儀、知ル人忠太郎同道、善兵衞方ニ止宿致、相宿旅人臥り居候蚊屋之内を覗見候處、吉右衞門腰ニ卷居候胴卷之内、金子有之趣ニ而、熟睡之樣子ニ付、蚊屋之内江手を入探見候處、彌金子有之候間、有合候剃刀ニ而、著候單物之上ゟ胴卷を切裂、金五兩三分盜取、剃刀は二階疊之下江隱置、右盜取候儀、改有之候而も顯不申爲メ、右之内壹兩壹分は二階窻ゟ投捨、殘金四兩貳歩致所持候得共、巧成仕方不屆ニ付死罪、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化七午年御渡

火附賊盜改大林彌左衞門伺

一寄合小堀次左衞門弟、牛込原町法身寺弟子慈勇、吟味掛り場之儀ニ付評議、

附箋

書面之正選。慈勇儀、大林彌左衞門方ニ而吟味詰、御仕置相伺候樣被仰渡候旨被仰聞承知仕候、

午四月五日　評定所一座

書面之正選、慈勇儀、私方ニ而、吟味詰御仕置相伺候樣被仰渡、奉承知候、

午四月三日

大林彌左衞門

鎌倉五山派濟家宗市ヶ谷月桂寺所化ニ而欠落いたし候

正選

慈勇

右之もの共、私方江召捕、吟味仕候處、正選儀は、月桂寺所化ニ而罷在、慈勇儀は月桂寺末、牛込原町法身寺所化ニ而、當正月廿三日、右正選と申合、月桂寺ニ而、米貳俵盗取賣拂、同二月十二日、慈勇壹人立、法身寺ニ而、鐵物三品盗取賣拂、同月廿四日ゟ月桂寺江罷越、所化致し、同月廿四日、又又正選と申合、佛具五品盗取賣拂、同月廿六日、法具掛物衣類等盗取欠落いたし、右品々所持いたし罷在候旨申立候ニ付、寺々幷買取候もの共相糺候處、相違無御座候、然ル處慈勇儀は、俗姓寄合小堀次左衞門弟ニ而、病身ニ付、相願剃髮いたし罷在候處、今度出奔いたし候儀御屆仕候旨、次左衞門申聞候、當時之身分、月桂寺所化ニ御座候間、私方ニ而吟味詰御仕置相伺可申哉、又は町奉行江引渡候樣可仕哉、奉伺候、

此儀所化僧兩人之內、慈勇儀は、寄合小堀次左衞門弟ニ而、病身ニ付、願之上菩提所牛込原町法身寺弟子ニ而、出家ニ相成、同寺ニ隨身罷在、其後學問爲修行、月桂寺江罷越居候內、欠落いたし候趣、次左衞門ゟ御屆申上候書面ニ而相分、當時次左衞門厄介人ニも無之儀ニ付、俗姓ニ不拘、所化僧ニ而、盜いたし候もの之心得を以、彌左衞門方ニ而吟味詰、可相伺旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

午四月

〔御仕置例類集二ノ一〕文化七午年御渡

火附盜賊改大林彌左衞門伺

一盜賊ニ引合候湯屋幷湯番、御咎有無之儀評議、當八月三日、評議いたし可ニ申上一旨被ニ仰聞一、御渡被レ成候、大林彌左衛門相伺候、牛込水道町傳藏店城吉母くめ、盜いたし候一件、御仕置伺書一覧仕候處、右くめ儀、牛込水道町家主湯屋忠兵衛、同町湯屋長四郎方江罷越、度々盜いたし候趣ニ有レ之、忠兵衛長四郎をも相糺候處、被ニ盜取一候始末、幷品物等、くめ申口と符合仕候段、朱書ニ申上候迄にて、前書兩人幷湯番之もの、心付方不行屆不埒之次第は吟味詰無レ之、既ニ別紙之通例も有レ之、町奉行所ニおゐては、湯屋幷湯番之もの御咎申付來、加役方ニ而は、右御咎不ニ申付一候而は、一事兩様ニ相成不レ可レ然候間、忠兵衛長四郎は勿論、湯番之もの心付方不行屆次第吟味詰、伺書江組込可ニ相伺一旨被ニ仰渡一可レ然哉ニ奉レ存候、

午九月 ○中略

大林彌左衛門相伺候、牛込水道町傳藏店城吉母くめ、盜いたし候一件之內、くめ儀、牛込水道町家主湯屋忠兵衛、同町湯屋長四郎方江罷越、度々盜いたし候趣ニ有レ之、忠兵衛長四郎をも相糺候處、被ニ盜取一候始末、幷品物等、くめ申口と符合仕候段、朱書ニ申上候迄ニ而、前書兩人幷湯番之もの、心付方不行屆不埒之次第は、吟味詰無レ之、町奉行所ニおゐては、湯屋幷湯番之もの御咎申付來候を、加役方ニ而、右御咎不ニ申付一候而は、一事兩様ニ相成不レ可レ然候間、忠兵衛長四郎は勿論、湯番之もの心付方、不行屆次第吟味詰、伺書江組込、可ニ相伺一旨被ニ仰渡一可レ然哉之段、先達而申上候處、加役方ニ而は、前々ゟ湯屋幷湯番之もの御咎は、不ニ伺相濟一候事故、今一應評議いたし可ニ申上一旨被ニ仰聞一候ニ付、先例相糺候處、輕キ引合之儀故、其所江は不ニ心付一、當人之御仕置而已評議仕候儀と相見候得共、在方共違ひ、御府內家續之場所は別而之儀、差別有レ之候而は如何ニ可レ有ニ御座一、殊ニ御咎有レ之候方、取締ニ相成、町奉行取計之趣、相當と奉レ存候間、假令是迄御咎不ニ申付一候共、今般相改、此度之一件は勿論、以來湯屋幷湯番之もの不念之次第、吟味詰伺書江組入、可ニ相伺一旨被ニ

仰渡候方可然哉ニ奉存候、

午十一月

朱書 評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ十二〕文政元寅年御渡

火附盜賊改渡邊孫左衞門伺

一上總國無宿久兵衞初筆盜いたし候一件　上總無宿 久兵衞

右之もの儀、所々濱邊ニ繫有之候、碇又ハ舟中人居合不申候ニ付這入、爐縄鍋等盜取、右之內隱し置、或ハ預ヶ置、金錢借請賣拂候代金銀錢共、不殘遣捨候段、不屆ニ付入墨之上重敲、

〔御仕置例類集一ノ十一〕文政九戌年御渡

火附盜賊改齋藤越中守伺

一當時無宿和助盜いたし候一件　當時無宿 和助

右のもの儀、所々百姓家軒下、又は社前に有之鰐口、鐵、茶釜等盜取、賣拂代錢不殘遣捨、或は上野山內之樣子存居候迚、坊中門潜り建寄有之處明ヶ立入、物影に隱れ居、尙更臺所建寄有之戶を明ヶ這入、寐鎭候樣子を考、茶之間脇諸道具置場ゟり無之長持に有之唐銅御燈籠之火蓋、厳手等盜取、右品賣拂と致、所持候段、不屆に付死罪、

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從前々之例
一一旦敲に成候上、輕き盜いたし候もの、　入墨○中略

寬保二年極追加
一家藏江忍入、舊惡に候共、五度以上之度數盜いたし候者、物不得取候共、引廻之上　死罪

〔科條類典下四〕寬保二戌年十二月廿四日

度々盜ニ忍入候者御仕置之儀ニ付申上候書付

伺之通可相極旨被仰聞承知仕候、

評定所一座

戌十二月廿四日

増上寺地中所化亭辨召仕欠落權助、度々盗ニ忍入候、御仕置之儀、引廻之上死罪と書上候、例書ニ九度盗致候者と、數ヶ所盗ニ忍入候者、二ヶ條、例書差上候、此儀幾度以上引廻シと度數相極可然候、一座評議之書付可差上旨被仰聞奉承知候、右忍入候盜人御仕置之儀、物之多少によらす、舊惡共に五度以上盜ニ忍入候者、引廻之上、死罪に相極可然奉存候、

右之通奉伺候

十二月

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕天明五巳年十月廿二日落著

曲淵甲斐守掛

一武州無宿新助盗いたし候一件

松平周防守殿御差圖

武州無宿

新助

三十四歲

右之もの儀、先達而惡事致し、入墨之上、敲御仕置ニ成、親江引渡ニ相成候處、同人病死後、村方欠落いたし、無宿ニ而、所々人立場立廻り、往來人之腰錢、袂錢盗取、去年三月以來、所々武家、或は寺院、又は町家等、都合廿四个所、度數廿七度、長家之屋根、或は塀を乘越、住居内江入、簞笥錠前等を固辭放シ、金子并腰物、又は小道具類、提物、衣類、反物、其外共色品員數、碇と不覺、凡三百品餘盗取、右盗ニ入度數之内、六度不得盗、腰物三腰は柄取放シ、上野山内穴之内江隱し置、金銀小道具類等潰シ候も有之、其外之品々賣拂候代金盗金共、都合百四拾兩餘、錢七八貫文、遊女飯賣女等買揚、又は在方ニ而辻博奕致し打負、其外雜用ニ遣捨、尚又盗を心懸、一橋殿塀を乘越入候段、重々不屆至極ニ付、淺草おいて獄門申付之、

〔後見草〕下明れば五巳年、〇天明當年は世の中穩にて五穀の價も賤しく、人々もいとなみ安く悅び勇み侍りぬ、然るに春より秋に至り、世に稻葉小僧因幡といへる曲者ありと沙汰したり、此曲者の振舞は、並々の盜賊にあらず、人家の軒に飛上り飛下る事、まことに天をかける鳥の如し、又塀をつたひ屋根を走る事、平地を走る獸より猶はやしと也、然るにより、如何なる堅固の御屋形にても、此曲者忍び入んとおもひし處へは、はいり得ずといふ事なし、先一番に御三卿の御本殿を初として、薩摩中將、肥後少將、安藝侍從、津侍從、小倉殿、郡山殿、其外御老職濱田侍從、相良侍從、此殿原の御屋形、或は御寢殿御座間近く、いつの間にやら忍び入、大刀、刀を先として、御衣服調度、或は千金二千金の御寶、數多く盜取、今日は其所の御屋形、昨日は此御屋形と、毎日毎夜、其沙汰止時なし、是を傳へ聞し人々、人間にてはよもあらじ、必妖術を修行せし惡黨にてぞ侍るべきと申さぬ者はなかりしなり、公にも其沙汰聞召、嚴敷尋ね求め給ふといへども、いづこに隱れ忍び候や、半年餘りも知れざりしが、かゝる希代の曲者も、運命盡る時成か、同年九月十六日の夜、一つ橋の御屋形へ再び忍び入たりしが、名もなき下部に生捕れ、公に渡されたり、則裁斷所へ引出され、樣々拷問されしかど、同類も侍らず、音に聞えしとは事かはり、させる術なき盜賊にて、元來は武藏國入間郡の生れにて、今年三十四歲に成、新助といふ男也、片田舍の生れ故、田舍小僧と申を聞誤り呼ならはし、稻葉小僧と唱へし、其罪已に定れば、程なく首を刎られて獄門にこそは晒されたり、

〔御仕置例類集〕三ノ五寛政十午年十二月　町奉行小田切土佐守掛

太田備中守殿御差圖

一淺草茅町忠兵衞致盜候一件　淺草茅町壹丁目代地吉兵衞店　忠兵衞

右之者儀、困窮ニ而暮兼候迚、盜心懸ケ、竹之先江折釘を仕付、町方拾六ヶ所ニ而、右竹を窓格子等ゟ差入、內ニ有之衣類、釘ニ而引寄盜取、右之外ヶ所も不覺、所々ニ而同樣之致盜、又は格子之離を

上ヶ手を入、衣類道具等盗取、其上町家前河岸に積有之候炭四俵、或はメり無之入口之戸を明ヶ這入、杉板貫等盗取、又は湯屋に而、入湯之もの脱置候衣類盗取、剃川内ニ繋置候茶船之内ニ有之、小形之金屏風、唐銅火鉢貳ッ、住所不知喜助儀、主出候はゞ、此もの方江可差越旨申ニ付、右貳品持歸り、尋來候もの無之候迚賣拂、右所々ニ而盗取候衣類等、六拾壹品之内、質入又は賣候分、都合代金三兩壹分貳朱、錢拾六貫三百文餘は、雜用ニ遣捨、衣類道具六品、幷板貫等所持いたし罷在、右體ヶ所も不覺、所々ニ而、折釘付候竹を窻格子等ゟ差入致盗候段、不届至極ニ付死罪、

〔德川禁令考後聚 二十五 行刑條例〕天保三辰年八月十九日落著

榊原主計頭掛
無宿入墨次郎吉盗いたし候一件

異名鼠小僧事
無宿入墨次郎吉 三十六歲

松平周防守殿御差圖

右之もの儀、十年以前未年以來、所々武家屋敷貳拾八ヶ所、度數三拾貳度、塀を乘越、又は通用門より紛入、長局奥向等江忍入、錠前固辭明ヶ、或は戸を鋸ニ而挽切、金七百五十壹兩壹分、錢七貫五百文盗取遣捨候後、武家屋敷江這入候得共、盗不得候處被召捕、數ヶ所ニ而盗致し候儀は押包、博弈數度致し候旨申立右依科入墨之上、中追放ニ相成候處、入墨を消紛し、猶惡事不相止、猶又武家屋敷七拾壹ヶ所、度數九拾度、右同樣之手續ニ而、長局奥向等江忍入、金貳千三百三拾四兩貳分、錢三百七拾貳文、銀四匁三分盗取、右體御仕置ニ相成候以後、盗ヶ所都合、九十九ヶ所、度數百貳拾貳度之内、屋敷名前失念、又は不覺、金銀盗不得も有之、凡金高三千百貳拾壹兩貳分、錢九貫貳百文之内、銀四匁三分、古金五兩、錢七百文は取捨、其餘は不殘酒食遊興、又は博弈を渡世同樣ニ致し、在方所所江も持參り、不殘遣捨候始末、不屆至極ニ付、引廻し之上、獄門申付之、

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

共盗

一從ニ前々一之例盜可ﾚ致と徒黨いたし、人家江押込候者、　頭取 獄門　同類 死罪

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕延享四卯年二月十一日

德山五兵衞掛 無宿十右衞門事、濱島庄兵衞强盜一件、○中略

濵人平四郎事 中村左膳

此もの儀、身元惡敷親より勘當を受、無宿ニ而濱島庄兵衞弟分ニ成、同類申合、押込强盜いたし、其上巧成繪符を拵、道中往來致し候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、於遠州見付宿獄門、○中略

駿河岩淵宿無宿 彌七

此もの濱島庄兵衞手下ニ成、數ヶ所押込、金銀雜物多く强盜致し候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻之上、遠州於見付宿獄門、

遠州見付宿社人神谷和工右衞門地借赤地法印事 養泰

遠州天龍池田村百姓 金兵衞

同州豐田池田村百姓 利兵衞

此もの共儀、濱島庄兵衞手下ニ成、數ヶ所江押込、金錢雜物多く强盜致し候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、死罪、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政二戌年四月

松平伊豆守殿御差圖 御勘定奉行 根岸肥前守掛

一作州大戶上村ニ而召捕候盜賊一件

森對馬守御預所作州粂南條郡小瀨村 百姓 伊八

右之もの儀、幸藏ゟ借請候、銀子催促を可ﾚ遁爲、村内傳助は、貯金致ﾚ所持候旨、不斗相咄候處、左候は

ば同人方江押込可致盗旨、幸藏ニ致同意、同人外三人申合、押込可致と一同罷越候段、不屆至極ニ付、死罪

右御仕置附

右御定書ニ、可致盗と徒黨致、人家江押込候もの之同類死罪と有之候處、此ものは、幸藏ゟ借受候銀子催促を請、右之儀を爲可相遁、小瀨村傳助は貯金も有之間傳助方江盗賊を引入盗取相返可申段、相應之致挨拶、追而幸藏其外罷越候節、一同傳助方江罷越候段、盗賊之手引ニも准可申、御定書ニ盗人之手引いたし候もの死罪と有之候ニ見合、死罪、

盗犯助力

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

從前々之例
一盗人之手引いたし候もの　死罪○中略

寛保二年極
一家藏江忍入候盗人に被頼、盗物持運、配分取候者、　敲之上輕追放

但配分不取候はゞ、敲之上所拂、

〔御仕置例類集三〕天明八申年御渡

大坂御城代伺

一盗賊外見之儀ニ付評議

去月廿日御渡被成候、堀田相模守書面一覽仕候處、忍入盗致し候もの死罪之御定ニ有之、右盗賊と申合、忍入之外見を致し候者、同類ニ付死罪と相心得罷在候處、大坂町奉行所、先例區々ニ相見總而外見之ものは、内江入候ものより一等輕申付來候由ニ而、先般松平石見守差出候、忍入盗賊伺書、外見之もの御座候ニ付相伺候處、右外見無宿政次郎儀、死罪之御差圖ニ付、以來は戸明有之内江入候盗賊之外見之ものも、一同申合盗致し候事に而、別ニ趣意無之候者、内江入候もの外見之もの共ニ同罪ニ御定書ニ御座候通、入墨之上、重敲可申付哉と奉存候由、尤右之

類之盗物持運等仕候もの科附は振候儀も無御座候得共、右申上候趣は、先例仕來とは乍申、此度之御差圖ニ准じ、相改可申と奉存、猶又彼地町奉行江も相尋候處、前書政次郎御下知之趣ニ准じ、戸明候内江入候盗人之外見致し候もの科附改候而も、外ニ差支候筋も無御座候旨申聞候、依之先例も御座候儀、相改候事ニ付、此段奉伺候段申上候、

此儀先達而無宿政次郎評議書ニ申上候通、盗之儀申合人家江參り、〆り有之所を固辭明這入候節、同類之内、最初より外見致し、又は雜物持運候ものは、たとひ家藏江不忍入候共、無差別死罪ニ而可然奉存、則右政次郎も、其通相濟候上は、右ニ准じ戸明有之内江這入候盗賊は、死刑ニは無御座候得共、是以最初より盗之儀申合候同類之内ニ而、外見致し候ものは、外之趣意無之候はゞ、內江這入候ものと無差別、同罪ニ而可然哉ニ奉存候、

申十二月

朱書
評議之通濟

〔評議書〕天明八年九月廿三日

丹波守殿江（左近將監 備右衞門 理前守）立會下り物相添上ル、同十月十七日、御伺人一座、評議いたし申上候通被仰聞候、〇中略

去月十九日御渡被成候、松平石見守相伺候、無宿伊三郎外二人御仕置之儀、評議仕候趣、左之通御座候、

無宿　伊三郎
同　嘉藏
同　龜松

右三人之者、御仕置伺之趣、一座評議も同樣ニ付、爰ニ略ス、

無宿
政次郎

右之者儀、伊三郎盜仕候節、片陰ニ忍、往來ニ心を付罷在、同人盜取相渡候品々請取持退候段、不屆ニ御座候間、敲之上、輕追放可申付哉之旨相伺申候、

此儀御定書ニ、家藏江忍入候盜人ニ被賴、盜物持運、配分取候者、敲之上、輕追放、但配分不取候はゞ、敲之上、所拂と有之、右は盜之儀は不申合、盜賊家藏江忍入、雜物持出候上ニ而、持運之儀を被相賴候もの江可引當、御定ニ可有御座哉、尤科條類典相糺候處、右之例は無之、評議之上相極候趣ニ御座候、都而人家江參り、〆り有之所を固辭明這入候節、申合參候もの共は、其節之働ニ不拘、同罪と相伺來、去巳年評議ニ御下ゲ被成候、佐渡奉行相伺候、佐州辰巳村ニ而捕候、無宿專次郎一件之內、同國瀧脇村伊七事、伊兵衞儀、專次郎と兩人、靑柳村市十郎方江罷越、門口懸鐵を外し專次郎內江入、品々盜取、此者門口ニ罷在、內江這入不申候得共、申合罷越、盜物配分取候ものニ付、專次郎と趣意は同樣之ものニ御座候間、伺之通死罪可申付旨被仰渡可然哉之旨申上、其通相濟候例も有之、今般之政次郎、盜物配分は不致內被捕候得共、吟味書之趣ニ而は、猶豫有之候得ば、配分も可致趣意と相聞、然ル上は、配分不取候共、差別は有御座間敷、伊三郎申合、盜ニ參片陰ニ忍罷在、往來ニ心を付罷在候上は、忍入之同類ニ無相違、且松平石見守差出候兩例とも相當ニ御座候得共、御定ニ而評議仕候而は前書之通ニ而可有御座哉ニ付、堀田相模守見込之通、伺之通ニ而は相當仕間敷、依之死罪可申付旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

朱書
但伊三郎は死罪、嘉藏、龜松は、入墨之上、重敲、

右評議仕候趣、書面之趣御座候、御渡被成候帳面貳冊、書狀壹通返上仕候、以上、

申九月

〔御仕置例類集三ノ五〕寬政七卯年十月

御勘定奉行 根岸肥前守掛

安藤對馬守殿御差圖

一豐前國柿山村傳作、盜物預候儀ニ付、非人無宿文藏を捕候一件、

羽倉權九郎御代官所豐前國下毛郡柿山村之內宇家籠 百姓 傳作

右之もの儀、無宿道敎、卯平方ニ居候を見請、同人者盜賊之宿致、盜物質入、又者賣拂等致遣候儀と相察、此もの居宅も山中ニ付、盜賊之宿致し候共相知間敷と存、卯平を賴、道敎江引合貰、柿山村栄藏は、身上宜由及承候迚、盜ニ入候樣申勸、尤盜取候品々は預置、卯平方江質入致候積一同申合、無宿文藏を召連、道敎罷越候節、柿山村江之道筋、栄藏住居之樣子等申敎盜之手引致、其上世話料貰受候積ニ而、盜物預り置、卯平方江致質入候付、儀右衛門取ニ參り候節、渡遣候處、森村半左衛門方ニ而被盜取候品之由、右村ゟ度々懸合有之、村役人共相糺難儀ニ付、右之趣訴出候はゞ、卯平ゟ右品差戻可申間、初發卯平方ニ而申合候儀は押隱、盜物とは不存、旅人ゟ一旦預り候段申僞候は格別之咎も有之間敷と訴出候始末、旁不屆ニ付、引廻之上、死罪、

右御仕置附

右盜人之手引致候もの死罪之御定、并惡黨ものと乍存致宿、盜物賣拂遣、又は質に置遣、配分取候もの之御定をも見合、其外品々之不屆も御座候間、引廻之上、死罪、

右御尋ニ付御答

此儀盜人之致手引候御定ニ而、死刑者難通ものニ御座候處、此もの居宅山中故、盜人之宿致候共、相知間敷と道敎江引合貰、世話料申受候積、盜取候品者預置、致質入候筈ニ申合候段茂、惡黨ものと乍存致宿、盜物賣拂遣、又は質ニ置遣、配分取候もの死罪之御定ニ相當可申哉ニ御座候上、卯平ゟ盜物爲差戻候手段ニ最初之申合有押隱、盜物と不存旅人ゟ一旦預候段申僞候はゞ、格別之咎も有之間敷と訴出候段も巧成致方ニ付、一件之內、高瀨村穢多卯平御仕置之釣合をも見合、引廻

盗官物

之上、死罪と申上候、

〔近代公實嚴秘錄二〕大坂御金紛失爲御詮議江戸より御目附能勢甚四郎罷越事

大坂御金藏の金子千兩宮壹ツ紛失したり、表向御藏のやじり等更に切しにもあらず、戸前錠には御金奉行河原清兵衛封印其まゝなり、然ば御金奉行の私曲可成かとて、御金奉行衆へ御吟味かかり、河原清兵衛、同役三人ともに、大坂にて揚りやへ被遣、御詮議有之といへども、更に不存之旨、外に盜賊もあらんやと、江戸へ相伺ひ立けるによつて、上意にて江戸表御目付能勢甚四郎殿被仰付、被罷越、詮議可有との事にて、則御徒目付青山忠兵衛、野間角兵衛兩人を召れ給ひ、彼地にて數日御詮議有之けれども、更に手がゝりなかりき、其時御徒目付青山忠兵衛、大坂中遊山所の茶屋傾城屋へ觸廻し、過分に金子遣ひ候者有之ば、早速注進可申との由兼て申付置候、然るに或時、天滿の大黑屋と云茶屋より訴へけるは、其體は輕き武士方の奉公人と相見へ申候が、此間每日來りて白人を揚候て遊び被申候、其體不審に御座候得共、金子餘りに多蒔ちらし被申候故、遊山所の事なれば客にいたし置候、御觸故訴へ申上候と有之故に、神妙なりと聞屆、さて野間角兵衛、御小人同心等召連、天滿の大こく屋へ來て見れば、其體怪しければ、忽生捕來て、町奉行松浦河內守白洲にて拷問しければ、右大御番衆佐久間某が中間梶助と申者なりと、此者數年大坂在番の下人と成入込、案內よく知りし故、金子千兩はきやつぬすみしに紛れ無之よし、拷問にて落けり、○中略右白狀に付、梶助盜賊に紛れなければ終に獄門に被行けり、

〔御仕置例類集二ノ十一〕文化九申年御渡

日光奉行伺

一無宿十郎左衛門儀御場所柄之御品盜取候一件　無宿清太郎事　十郎左衛門

右之もの儀、日光鉢石大横町ニ罷在候內、大樂院江度々商ひに罷越、御供所下男嘉助と懇意に相

成、御供所江罷越、御道具拜見いたし、其後盜可致と存、御場所柄をも不恐、御供所入口立寄有之戸を明這入、銀御道具三品盜取、鹿沼宿山中ニおゐて打碎、御紋有之分は、賣捌差支可申と相察し、土中江埋置、御紋無之分を同宿權八外貳人江賣拂、或は調物代金之替りに相渡、都合金六兩餘、酒食雜用に遣ひ拂、殘潰銀八百目餘は、土中江埋置、又は所持いたし候始末、不屆至極ニ付、引廻之上獄門、

〔御仕置例類集一ノ十〕文化十四丑年御渡

日光奉行伺

一野州田所村政藏外壹人、朝鮮種人參盜取候一件、

戸田日向守領分野州鹽谷郡田所村百姓　與惣右衛門悴　政藏

右之もの儀、片保村茂左衛門と申合、風見山田村甚平作立候、御用作朝鮮人參畑之柴垣を、茂左衛門押分一同這入、千五拾根餘盜取、右人參賣拂代金致配分候積、茂左衛門江相渡、其上壹人立柴垣を押分、又は建寄有之木戸を明這入、三ヶ所にて人參七百根餘、幷種八百粒程盜取、致所持候始末、不屆に付、入墨之上重敲、

此儀人參畑之柴垣を、茂左衛門押分一同這入候ものに而、錠前等固辭明、手强成所業および候もの共譯違、幷盜物代金に積拾兩以下と相聞候に付、去ル丑年評議に御下被成候、三橋飛驒守日光奉行之節相伺候、野州七里村右源次弟乙八儀、小來川村仙藏所持之御用作、人參百根餘盜取、今市宿太兵衛江代錢四百文に賣拂、又は山窪村長左衛門御用作、人參畑園柴垣を押分ヶ這入、貳百八拾根餘盜取、七里村武兵衛江預け置、金貳歩借請、右金錢不殘酒食に遣ひ捨候始末、不屆に付、入墨之上重敲と相伺、評議之上伺之通と申上、其通相濟候例ニ見合、伺之通、入墨之上重敲、

朱書 評議之通濟

〔嘉永明治年間錄 六〕安政四年閏五月十三日、御金藏ノ盜賊ヲ刑ス、

野州犬塚村無宿入墨富藏當巳三十三　江戶上槇町清兵衞地借藤十郎巳三十九御仕置

右之者ども、困窮に迫り惡心を起し、去々卯年二月以來、八重の御構を乘越、重き御場所御土藏へ忍入、金高四千兩盜取り、兩人配分遣捨候段、公儀を不恐致方、重々不屆に付、兩人とも引廻の上、淺草にて磔に行はる、

巷說、右藤十郎は、野州都賀郡藤岡出生にて、五六年以前出府、牛込邊の裏店を借、每夜おでん濁酒等商ひ致し罷在候處、四ヶ年以前、田安殿小人明株讓請、其後小人目付相勤罷在候處、去辰年養子致し、暇相願候より、御作事方御用達の由申候て、上槇町に住居、玄關へ御用高張提灯等差出し置、宅內へ鑓長刀等飾置、近在山方より材木多買出し、品々疑敷義有之候に付、當二月廿六日、被召捕、取調候處、野州無宿入墨富藏と申合、去々卯年三月六日夜、御城中へ忍入、御金藏に有之御金四千兩盜出し、配分の上、富藏儀は加州表へ罷越候旨申立ると云ふ、右發端は、富藏と藤十郎は、田安殿小人奉公中は、至て貧窮故、內々夜商ひ等致し罷在候處、不計富藏に出會、富藏申聞候は、我等申に隨ひ候はゞ、一生安樂に暮し候手段有之候間、一同相計ひ可申旨申聞、若又承知不致候はゞ、卽座に可及殺害旨、富藏申聞候に付、承服可致相答候處、左候はゞ、先年御本丸炎上の節より、度々御城內へ出入致し、御金藏の樣子、委敷存知居候間、拙者同道、金子運び吳候得ば宜敷旨申含め、相鍵を拵參り合見候處、合兼候に付、又立歸り鍵拵直し、都合五度程忍び入、錠を明け御金箱開き見候得ば、一朱銀計にて、幾箱も開見候處、其內に小判に見當候間、右小判を兩人の襦袢に包み、北桔橋より持出候由、其砌公儀より、小判金五兩以上遣ひ候者有之候はゞ訴出可申旨、國々迄嚴重御觸有之、然る處此度富藏儀、加州にて舟を拵候に付、小判金計にて三百兩餘差出候に付、直に召捕吟味の處、前書之通り白狀、依之直樣加州より飛脚を以て申越、此

海賊

追剝

一件に携り候者、御作事棟梁、並御先手與力同心等、御咎有、略す、

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕寛政元酉年閏六月七日

長谷川平藏掛
無宿眞刀德次郎、所々ニ而强盗、又は御用之趣等を申僞、或は海賊いたし候一件、

松平伊豆守殿御差圖

無宿
眞刀德次郎
酉廿八歳

右之もの儀、奥州、常陸、上總、上野、下野、武州、關東筋、其外近國在々村々數百ヶ所忍入、又は强盗致し、道中筋は御用と申繪符を建、帶刀いたし野袴を着し、從ひ候もの共、又は渡り盗賊を若黨ニ仕立召連、問屋場ニ而は、相應之御用之趣を申僞り、或は御用と書付候挑燈を爲持、又は蠟燭を燈し、寺、修驗宅百姓家土藏町屋、入口戸固辭明ヶ押明ヶ固辭放し、或は火繩ニ而錠前之處燒貫、脇差を拔持、頭取押込、家内之者を縛り置、聲立候はゞ可切殺旨を申、金銀錢、衣類、反物、帶、脇差等、其外品々數不覺盗取、又は奪取、右品々は、常松、伊勢松、文助、山番人藤八、其外從ひ候もの共、市場或は通り懸り古着買江其度々ニ賣拂はせ、又は質入爲致配分遣シ、酒食遊興等ニ遣ひ捨剃出家百姓を切殺、或は所々ニ而手疵を爲負、餘類大勢催し、數百ヶ所夜盗ニ入、又は海賊いたし候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、於武州大宮宿獄門、

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

從前々之例
一追剝いたし候もの　獄門

〔御仕置裁許帳七〕追剝仕者

寛文四年辰十月二十日

壹人加左衛門　是は大久保吉之丞中間、昨十九日之夜、傍輩彌五助と申者と致同道罷出、市谷田町貳丁目半兵衛店、長右衛門所ニ罷在候出居衆女、近所江罷出候處を、町はづれニ而追剝仕、女之吭を搔、右之腕壹ヶ所切付、二人ながら逃申候處、辻番出合捕江申候へば、右之彌五助は、其場

より致欠落候而、此者は召捕江來付而、爲穿鑿之內籠舍、

極月二十一日流人

〔科條類典 下 四〕盜人御仕置之事

元祿十五午年四月

下高輪町之もの　駕籠舁　兵三郎

此もの當三月十六日之夜、山王町彥兵衞店、吉兵衞と申ものを川崎迄駕籠ニ乘セ參候、鈴森ニ而追剝仕候ニ付、入牢之もの、久貝因幡守家來久留島源內立合請取、於品川獄門、〇中略

上柳原町次郎兵衞店伊兵衞寄子　行方　吉兵衞

此もの四年以前、芝高輪ほら村兵三郎と申ものと駕籠之致相肩、町人體之ものを駕籠ニ乘せ、鈴森迄兵三郎參り、駕籠賃錢之儀ニ而致口論、彼町人脇差を拔、兵三郎幷此ものを切付候節、町人之衣類を兩人ニ而剝取候ニ付、四年以前午年、松前伊豆守勤役之節、詮議之上、兵三郎は獄門ニ申付候處、此もの其節行衞相知不申候、然處ニ先月十七日、此もの安藤出雲守表門前ニ居候を、わかの三左衞門見付召捕、同十九日召連來ニ付、令詮議候處、追剝いたし候段無紛ニ付、寶永二酉年十一月廿五日、於品川獄門、

〔的例黃紙之寫〕獄門

安永四未三月右近將監殿御下知　朱書 手限　安藤彈正少弼懸

一武州下練馬村五郎兵衞外三拾壹人相手、同村五郎右衞門外壹人、不法いたし候吟味一件之內、　無宿　六五郎

此無宿六五郎儀、舊離之身分ニ而、兄五郎右衞門方江罷越、殊更文藏より借請候羽織僞を申不

相返、板橋宿江罷越候由申候もの之懐中ニ有之金壹分、幷衣類帶追剝いたし、其上巣鴨邊ニ而、中間體之者ニ出合、奉公稼之世話相頼、主人之方を僞、請狀爲致候積りニ而、侍中間致同道、途中ニ而酒調給させ、右侍懐中之取替金壹兩奪取、土支田村六郎兵衞羽織も剝取、下赤塚村内ニ而、町人體之もの腰錢を取り、上練馬村又六江傘損候よし申懸、錢三百八拾文ゆすり取、川崎宿五郎右衞門方ニ、竿ニ懸ヶ有之候絹小紋單羽織、其餘錢七拾文程盗取、其上酒屋五郎兵衞方ニ而、度々代錢不相拂酒給候上、同人女房いさ、酒代勘定いたし候樣申候迚、茶碗幷商道具打毀シ、いさ左之脛江打疵付候段、重々不屆至極ニ付、獄門可申付哉、

右御仕置附

右者品々不屆御座候得共、重キ方ニ付、追剝之御定ニ而、獄門と御仕置附仕候、

〔政談秘書 二〕寛政元酉年六月小田切土佐守江相伺

一幼少之者、追剝いたし候一件、御仕置之儀評議、

酉三月十四日　牧野備後守殿御渡し

無宿 彌吉

一右之者儀、町家又は御靈宮座摩宮社内等ニ遊ひ居候者を、往來人無之所江連行、衣類剝取候段、不屆至極ニ付、獄門可申付哉之段、可相伺者ニ御座候得共、惡事仕候節は、未拾五歳以下之儀ニ付、一等輕、死罪と申上候處、一座評議之上、伺之通死罪可申付旨申上、其通濟、

追落

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

從前々之例

一追落いたし候もの　　死罪

〔慶長日記 七〕慶長十六年八月廿四日、下野常陸兩國に、盗人大勢蜂起して所々夜討仕、又は晝ノ間も鐵炮にて旅人を打落、荷物を取申事數不知、江戸より足輕頭衆細井金兵衞、久永源兵衞、服部仲、

三人に被仰付候間、同心共召連參候て能々致穿鑿、盜人九十三人召捕候て成敗仕、小山ノ芋柄新田と申所に頸をかけ、高札を立罷歸候、

〔御仕置例類集一ノ十二〕寛政六寅年

去月廿六日、御渡被成候、御書取一覽仕候處、追落追剝御仕置之儀、途中ニおいて、往來人を捕江打擲致し候歟、又は突倒候而も捕江居りながら、懷中物等奪取候類は、二三人申合候歟、亦壹人立候而致し候とも無差別、手を放さずして懷中物等奪取候上は、衣類はぎとらざるも追剝之方たるべき哉、追落之儀は、往來人を威し候而、取落候品奪取、或は突倒し又は追かけ、取落候品等を取候類、追落と可申哉、私共心得之趣、評議仕可申上旨、御尋ニ御座候、

此儀御書取之通、往來人を途中ニ待請、或は行懸り等ニ而捕候而衣類剝取候ものは、人を誘ひ申合、又は壹人立致し候共無差別、追剝ニ而往來人を追落、物を取候者は勿論之儀、假令物不得取候共、右類は追落と相心得罷在候得共、猶又元例をも見合、再應評議仕候處、人を捕、或は突倒し、又は打擲等致し、威し候而物を取候類も、追落之方江附可申哉ニ付、捕居ながら懷中物等を奪取候而已ニ而は、手を放さずして奪取候とも、追落之方ニ可有之哉ニ奉存候、追落追剝之元例、幷近年之例、別紙之通御座候、

寅八月〇中略

例

追落之元例

酒井伯耆守組加藤主膳方ニ居候浪人

享保十九寅年　加藤吉三郎

右之者儀、武井善八郎江參居候而博弈致し、其上小日向馬場近所ニ而、町人體之者を追ひ、金子等

を取之、近邊ニ而も人を追ひ、重々不屆ニ付、伺之上死罪、

中野監物相伺候

薩州無宿

茂助

右之者儀、無宿藤助馴合、伊勢參體之もの江錢を無心申懸、承引不致候迚、兩人ニ而寺之内片陰江連行突倒し、藤助打擲致し、腰ニ附居候錢貳貫文無體ニ奪取兩人ニ而配分致し、幷無宿喜代藏所持之錢四百文、同樣申合奪取、是又配分致し、右錢不殘遣ひ捨候段、重々不屆至極ニ付、獄門可申付哉と相伺、一座評議之上、追落より品不宜候得共、衣類剝取候ニは無之間、死罪相當之ものニ候處、溜類燒之節放遣、無相違立歸候ニ付、一等輕く、入墨敲と申上、其通相濟、此例品不宜樣ニ候得共、素素持合錢をねだり候迄之仕形ニ而、最初ゟ深く巧候儀も無之候、乍併追落よりハ品不宜と有之、

安永四未年評議ニ御下ゲ被成候

松田善右衞門相伺候

靈岸島銀町又三郎店忠三郎方ニ居候

安五郎

右之者儀、商人之荷籠之内ニ有之候賣溜錢、度々盜取、柳原ニ而田舍もの之巾着を切取、或は通り町ニ而、暮合頃拾五歳計と相見候もの持居候錢、參懸り突當りころび候處奪取候段、重々不屆ニ付、入墨重敲と相伺、一座評議の上、追落ニも似寄候致し方ニ付、追落致し候もの之御定ニ見合、死罪と申上、其通り相濟候、

寬政五丑年評議ニ御下ゲ被成候

長谷川平藏相伺候

御書院番戸川山城守組稻葉喜三郎方ニ當時中間相勤罷在候

掏摸

仁助

右之者儀、同類馴合、又は壹人立往來之女、行違ニ顏を打、驚候紛ニかんざしを奪取、或は拔取、又は突倒、持居候風呂敷包袋入脇差奪取拔取、右品々賣拂、又は質入致し貰ひ、右代金銀錢馴合候節は配分致し、不殘酒食ニ遣捨、追落同樣之致し方不屆ニ付、死罪と相伺、一座評議之上、伺之通死罪と申上、其通相濟候、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政九巳年六月

戸田采女正殿御差圖

御勘定奉行
根岸肥前守掛り

一武州井沼村ゟ宿村繼を以差出候無宿七五郎一件

無宿
七五郎

右之もの儀、武州幸手宿高崎屋忠藏方ニ而買請、仕立誂置候衣類、同人手代佐兵衛、此もの約束致置候通、同國井沼村半左衛門方江持參候途中ニ而行逢候處、代金ニ差支、右衣類致質入、相拂候積、半左衛門女房ちよ江質入之儀相賴候故、同人儀、佐兵衛ゟ衣類請取、質屋持參り候を跡ゟ追駈參、理不盡ニ奪取逃去、其上半左衛門ニ出逢候節、被差押間敷と同人を川江突落し、又者有合候庖丁を以疵付候始末、不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右御定書ニ、追落致候もの死罪と有之、此もの儀、半左衛門女房江質入之儀相賴候品、跡より追駈罷越奪取、外江質入候始末者、追落ニも准じ可申哉、然ル處總而催促ニ逢、或は預物等屆來候人を疵付、又者打擲いたし候もの中追放、但刃物ニ而疵付候はゞ死罪之御定ニ御座候間、右御定ニ引當候而も、半左衛門を川江突込、又者被捕候節、少分ニ候共庖丁ニ而疵付、刃物ニ無之とも難申間、兩樣之御定を見合、死罪、

〔天保集成絲綸錄百四〕享和元酉年七月

巾着切體、途中之盗いたし候わるもの申合、往來人江突當、喧嘩抔仕懸、羽織或は懐中之品、又は女之櫛笄等奪取候類、あらかせぎと唱候者共、近頃徘徊いたす由相聞候、町方は町奉行手先ニ而嚴敷申付、是迄餘程召捕候儀も有之、漸々靜ニ成候趣ニ候得共、屋敷々々打續候場所之儀は、未右樣不屆成始末ニ及候儀、不相止樣ニも相聞候間、辻番所組合廻り、幷辻番所ニおゐて、此節格別心を附、召捕屆ニ不及、町奉行幷火附盗賊改江引渡可申事、

右之趣伺相濟候ニ付申達候、以上、

七月　　小長谷和泉守

　　　　松平田宮

〔科條類典下四〕盗人御仕置之事

下谷山崎町善兵衛店勘助方ニ居候もの　六之助

享保二十卯年八月廿四日入牢

右之もの、先達而入牢申付置候金五郎差口ニ而、同心遣し召捕、今日召出穿鑿之内牢舍、右六之助儀、同類申合、所々廣小路ニ而巾着切、又は下緒を拔、腰錢等盗取候ニ付、前方盗賊方懸ニ而、入牢敲御仕置ニ成候處、其後惡事不相止、巾着を切、腰錢盗取、不屆ニ付、入墨門前拂申付、

〔科條類典下四〕盗人御仕置之事

南鍛冶町壹町目町人共召連來候もの　新七

享保二十卯年六月十一日入牢

此もの儀、今日九ッ時、南鍛冶町壹町目九八店甚五郎出居衆藤七と申もの、木挽町廣小路ニ而、鼻紙袋被盗取候ニ付、早速捕置、鼻紙袋は取返申候、然處當月七日、芝愛宕下ニ而、懐中之金子四兩餘被盗候ニ付、若此もの盗取候哉吟味可仕と、宿元江召連歸候處、何方之ものニ候哉、町人體

取逃

之もの大勢附參り、右盜人を打擲候ニ付、捕可申と存候處不殘逃申候、然共此ものは捕置候由にて召連來ニ付、召出し令吟味候處、申口不分明ニ付、猶又穿鑿之內、牢舍、

右新七儀、去ル十一日、木挽町廣小路ニ而、鍛冶町壹町目九八店甚五郎出居衆藤七と申もの之鼻紙袋を盜取、其上前々より所々ニ而、袂さがし又は腰錢はづし盜取候段、重々不屆ニ付、同月十八日、敲放申付ル、

〔后教錄三十九〕手限 享和元酉年八月九日

淺草新旅籠町代地清六店
幸次郎方ニ元居候　万次郎

一 敲候上人足寄場江差遣候もの

右之者、小遣錢に差支候迚、當五月下旬以來、所々人立場ニ而、往來人懷中之鼻紙袋拔取、內に有之南鐐銀壹片取出、又は町人體之者懷中致し居候、單羽織二拔取、往來之古着買江代錢八百文に賣拂、或は往來之女差居候銀流簪拔取、其外腰錢袂錢度々ニ、凡壹貫文程拔取候分共、都合南鐐銀壹片、錢壹貫八百文程、不殘酒食に遣捨、右簪は所持致し罷在候段、不屆ニ付、敲候上、人足寄場江差遣、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保元年極
一 取逃之雜物を預置致ニ配分、又は禮金等取、當人を隱置候請人人主、　死罪

〔御定書百箇條〕欠落奉公人御仕置之事

享保五年
寛保元年極
一 手元に有之候品を、風と取逃いたし候もの、
金子は拾兩方以上、雜物は代金に積拾兩位方以上は　死罪
金子は拾兩方以下、雜物は代金に積拾兩位方以下は　入墨敲

延享二年極追加
但先入牢申付、取逃之品於償候には、拾兩以上以下共、主人願之通助命申付、江戶に不罷在樣

に可申渡事、

寛保三年極
延享元年極
一使に爲持遣候品、取逃いたし候者、　金子は壹兩ゟ以上、雜物は代金に積壹兩位ゟ以上は、　死罪
　金子は壹兩ゟ以下、雜物は代金に積壹兩位ゟ以下は、　入墨敲

延享元年極追加
但先入牢申付、取逃之品於償候には、壹兩以上以下共、主人願之通助命申付、江戸に不罷在樣に可申渡事、

從前々之例
一巧候儀も無之、輕キ致取逃候者、　敲

〔科條類典上三〕享保四亥年

諸奉公人出入之儀ニ付町觸○中略

一取逃引負等之欠落もの、主人斷次第、請人三十日限之尋申付、不尋出ニおゐては過料可申付、若及數度候はゞ曲事ニ可申付候、欠落者尋出候はゞ、取逃もの賣拂候共、買主より爲戾可申候、金子など遣捨候事分明ニ候はゞ、すたりに可致候、尤請人過料は差免、給金計濟方可申付候事、

但請人、奉公人之下請人取置候而、請人相辨候金子、下請人江懸り度旨願出候共、相對者格別、御役所よりは申付間敷事、

一總而取逃引負之儀、若請人兼々存候樣子ニ候はゞ、急度遂詮議、其上之落着次第、請人御仕置可申付事、

一町人之召仕、欠落取逃引負等之儀も、右之通可相心得事、

一右之類、若請人致欠落候而も、請人欠落以前ニ家主江預ケ置、其品御役所江も斷於有之は、請人之可濟金過料共ニ、家主江可申付候事、

但家主、欠落もの之店請人江懸り度旨願出候共、相對は格別、御役所ゟは申付間敷候事、○中略

一取逃引負之欠落もの之請人、自然欠落いたし候はゞ、主人見合に本人召連可ㇾ來候、本人を尋出差出候はゞ、取逃物は前條に有ㇾ之通申付、右欠落もの當宿有ㇾ之、店請人取置候はゞ、不慥成もの之請ニ立、差置候品を以、其店請人江過料可申付候、若亦當宿之もの、店請人も取置不ㇾ申差置候はゞ、尤當宿江過料可申付候、右取逃引負いたし候ものは、勿論御仕置可申付候、〇中略

右之趣、急度相心得可ㇾ申旨、町中江可觸知者也、

八月

〔德川禁令考後聚二十行刑條例〕取逃金償方之事 寛政十一未年

金子取逃いたし候もの、右金子を以、衣類其外品買取所持いたし罷在、被捕吟味ニ相成候處、取逃金は請人より主人江相償、主人助命相願候ニ付、以來江戸ニ罷在間敷旨申渡候者右所持致し候品取上候上、主人江相渡遣し、受人償金之内、右品代金程は、主人より受人江償金可相返事、

右十一月廿七日、小田切土佐守内寄合ニ而、根岸肥前守立合極ル、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政元酉年六月

松平伊豆守殿御差圖

町奉行 山村信濃守掛

一尾州上社村忠右衞門致取逃候一件

尾張殿領分尾州愛知郡上社村　忠右衞門

右之もの儀、通旅籠町半兵衞店糸問屋清兵衞方相勤候内、同人弟藤兵衞、糸代賣掛金集ニ罷越候致供、途中ゟ金九拾兩貳朱、錢四百六拾六文、財布ニ入致取逃、四拾兩は、兄条八、同村百姓藤右衞門後家とめ江差遣、三分貳朱は、同村百姓藤吉方江返金いたし、拾八兩貳朱、錢五百文餘は、衣類脇差調代、幷道中入用ニ遣捨、殘金三拾壹兩と錢六百六拾四文致所持居候段、不届ニ付、死罪、〇中略

右御仕置附

右主人之弟藤兵衞、賣懸金取集ニ罷越候供致し參、途中ゟ取逃致し候儀ニ而、使先ゟ者趣意少し不宜候得共、差重り候儀ニも無御座候間、手元ニ有之品、不斗致取逃候もの幷使ニ爲持遣し候品致取逃候もの之御定江引當死罪、

〔御仕置例類集三ノ五〕寬政十午年四月

松平伊豆守殿御差圖

町奉行
小田切土佐守掛り

一岡野肥前守家來牧原林右衞門致取逃候一件

御留守居岡野肥前守家來ニ而出奔致し候
牧原林右衞門

右之もの儀、主人札差ゟ請取候金子四百六拾八兩餘之內、三百拾八兩餘、風呂敷ニ包、胴江卷、百五拾兩は首ニ掛ケ、同家來家老堀江清大夫同道ニ而立歸候途中、胴江卷候金子、角立肌江障り候間、懷中ニ而右包を解、拾八兩壹分は袂江入、三百兩は其儘ニ致置罷越候處、首ニ掛ケ候金子も重く相成候故、是又手ニ卷、主人屋敷迄立戾り、淸大夫長屋江罷越、手ニ卷候金子は差出候得共、致懷中候三百兩は、金子取落迚も難相立存、袂ニ入候拾八兩壹步は、其儘致取逃、右之內ニ而調物、又は大山與市江用立、五郞右衞門江は呉遣し、殘金拾五兩餘、致所持罷在候始末、不屆至極ニ付、死罪、

右御仕置附

右使ニ爲持遣候品、致取逃候者、壹兩以上之御定、幷手元ニ有之品を不斗致取逃候もの、拾兩以上之御定兩樣ニ見合、死罪、

〔御仕置例類集三ノ五〕寬政十午年十二月

太田備中守殿御差圖

町奉行
根岸肥前守掛り

一三田壹町目清八取逃いたし候一件

三田壹町目又右衞門店致欠落候

清八

右之もの儀、損料之品幷損料錢出入有之、不如意ニ而、濟方可致手段無之、同商賣三四郎方ゟ商物借受、賣德を以、右出入相片付立歸可申と致欠落、三四郎方ゟ鼈甲幷簪借受、賣口深川邊江同道いたし參、同人は茶屋ニ爲待置、笄壹本代金壹兩壹分貳朱ニ賣拂、其節知ル人同商賣住所不存喜兵衞ニ出會候處、賣口有之旨ニ而、笄簪四本取逃ニ逢、迚も三四郎江申譯無之、惡心出、右金子幷笄拾壹本、簪拾八本入候荷箱とも致取逃、右之內貳拾五本は、所々江賣拂又は預ヶ置、都合代金拾貳兩貳朱餘、不殘酒食雜用ニ遣捨、殘り四本所持いたし居候始末、不屆ニ付、死罪、

右御仕置附

右惡事之始末、取逃いたし候もの之御定江も可相當哉ニ御座候得共、此もの儀は、是まで三四郎ゟ商物兼々借受取引も致し來候儀ニ而、本文品々茂三四郎と對談およひ候品ニ候上は、御定書ニ、諸商物代金請取其品不渡、外江二重賣いたし、又は取次可遣品質ニ置幷賣拂、或は金銀橫取致候者、金子雜物共、拾兩以上は死罪と有之御定之方江似寄り可申ものニ而、金高拾兩以上御座候間、右御定ニ見合、死罪、

〔德川禁令考後聚二十行刑條例〕文政元寅年取逃之品取立之儀、主人より申出候處、代金積難相成ニ付、尋方計申付候一件、

覺

一取逃欠落　丑九月十八日　揖斐造酒助中間　德兵衞

南八町堀一町目善兵衞店　受人　彌兵衞

右は先達而御屆申上候通、御勘定平岩次郎兵衞方より、同苗右膳方江遣候盜紙包壹、御普請役見

押借

習足立長藏より、同苗織右衞門方江之書狀一通、去丑八月中、相屆吳候樣相賴、西國私元御代官所より、江戸屋敷迄差越候ニ付、同九月十八日、中間前書德兵衞爲持遣候處、使先より取逃いたし候ニ付、一通相糺候上、請人彌兵衞儀、家主善兵衞江預置、日限尋申付置候得共、今以德兵衞行衞相知不申候ニ付、當人尋出、取逃之品々、辨差出候樣申渡候處、不如意もの、何分勘辨相願候旨申立候間、此上之儀、於御奉行所御糺之上、御取立被仰付被下置候樣仕度奉存候、依之取逃之品書付一通、幷請狀一通相添、右之段申上候、以上、

寅　月

寄合
揖斐造酒助○中略

書面取逃之品々、町觸申付置候、然處請人彌兵衞より取立之儀被御申聞候ニ付、則申付候得共、代金積り難相知上は、辨納難申付候、依之彌兵衞江德兵衞日限尋申付候、則受狀一通、別紙一通、致返却候、

寅五月

小田切土佐守

町奉行
池田筑後守掛

（御仕置例類集三ノ五）寛政四子年三月

戶田釆女正殿御差圖

一四谷天龍寺門前源助召仕次郎八外壹人追剝ニ似寄候儀いたし候一件

四ッ谷天龍寺門前家主源助召仕　次郎八

野田文藏御代官所四ッ谷內藤新宿德右衞門店　源　藏

右之もの共儀、新家市藏、石川八十郎、四人申合、知人ニも無之出家快徹を申勸、旅籠屋龜太郎方江罷越、飯賣女を酒之相手ニいたし、一同持合錢無之候迚、快徹衣類を押借いたし、同人不承知ニ候處、無體ニ爲脫裸ニいたし、右衣類を旅籠代ニ預置候段、不屆之至ニ付、兩人共死罪、

右御仕置附

右御定書ニ、追剝致候もの獄門と有之候處、快徹不承知ニ候を、無體ニ衣類爲脫候段、追剝ニ似寄候得共、同人儀、最初一旦斷、猶又申勸メ候迚、旅籠屋江罷越候上之儀ニ付、全之追剝共難申候間、右御定を見おろし、死罪、

〔德川禁令考後聚二十七行刑條例〕〔寬政十一未年五月〕久離受候者、親之方江罷越、合力等ねだり候御咎之事、

一久離を受、其後親之方江參り、合力等ねだり候者、外ニ子細無之候得ば、唯今迄急度叱リ置候處、以來は江戶拂申付候積リ、

右、寬政十一未年五月、內寄合ニ而評議極ル、

○按ズルニ、是ハ押借ノ類ニハアラザレドモ、姑ク此ニ附載ス、

〔德川禁令考後聚二十七行刑條例〕〔文久四子年二月〕市在おゐて亂妨致候者御仕置之儀、相伺候書付、

評定所一座

書面、伺之通可二相心得一旨被二仰聞一承知仕候、

子二月廿六日

近來浮浪之徒跋扈いたし、品々及亂妨候ニ付、酒井左衛門尉外十七家江取鎭方之儀、一時嚴制之御沙汰も有之、追々捕差出候者共、此上吟味詰、夫々可奉伺候得共、迚も尋常之儀ニ而は、急度鎭靜之場合ニは相至り申間敷候、依之勘辨仕候處、一體浮浪之徒跋扈いたし候基本は、去春英國軍艦渡來、人氣驅立候砌より、新徵組、又は浪人之趣ニ而、侍體相連、百姓町人共之內、身柄相應之者方江罷越、攘夷之儀等相唱、手强ク無心申掛、中ニは刃威を含候所業等有之、其餘天誅可及旨之張札、或は現在殺傷ニ逢候者等を見聞いたし、市在之もの共、恐縮相增候折柄ニ付、斷を遂べく氣力も無之、强談ニ隨ひ夫々金子差出候故、彌以惡黨共增長致し、是迄外惡事および候ものも、右を得易キ所業と心得、見眞似いたし、其外諸藩等江も風俗押移り、酒狂之上、瑣細之儀を相咎、刀を拔亂妨お

よび候もの不レ少樣成行候儀ニ付、右之もの共、御仕置御咎之儀、一際重ク、凡ケ條を立候趣、左之通御座候、

無宿又は百姓町人之身として帶刀いたし、新徵組、或は浪人抔と僞、町家江能越、彼是强談及び、金子貰取候者、　金高不レ依ニ多少一　死罪

　强談罷在候內被ニ捕候分は、不レ得ニ物取一候共、　同罪

　但身分を僞候上、無代酒食、其外不レ依ニ何事一、手强之所業候分は、死罪、

朱書是は文政九戌年、關東在々ニ而、長脇差を帶候ものゝ御書付ニ、長脇差を帶、又は所持いたし歩行、惡事致候ものは死罪、長脇差を帶、又は所持致候而已ニ而、外ニ惡事無レ之分は遠島之積り、當分御仕置可ニ相伺一と有レ之ニ見合、本文之通、身分を僞、惡事いたし候ものは、一般ニ死罪、身分を僞候迄ニ而、外ニ子細無レ之分は遠島と取調候儀ニ御座候、

　身分を僞候迄ニ而、外ニ子細無レ之分は、　遠島

一帶刀人ニ而、右同斷之及ニ所業一もの、　不レ得ニ物取一候共　死罪

朱書是は士分以上ニ而、盜賊等致候得ば、其始末ニ不レ拘、死刑難レ遁は勿論之儀ニ付、金子可レ貪とは取巧候上は、事を不レ遂候共、可レ施筋は有レ之間敷候間、死罪と取調候儀ニ御座候、

一同無代ニ而酒食いたし候もの　遠島

朱書是は天保元寅年、榊原主計頭町奉行之節相伺、評議ニ御下ケ被レ成候、奧六尺平吉初一件之內、御先手新庄勝三郎組同心塚田小十郎、身持不レ宜、無刀ニ而立廻り、吉右衛門方江罷越、酒壹升爲ニ差出一、代錢受取度旨申候を不ニ聞入一持歸り、其上當時行衛不レ知太郎吉連立、惣吉方江參り、無代ニ而蕎麥切給候段、輕くも御扶持被レ下候ものゝ身分ニ有レ之間敷儀、右始末不屆ニ付、重追放申付候例ニ見合、一等重く遠島と取調候儀ニ御座候、

帶刀人酒狂之上、途中等ニ　疵付又は諸道具爲レ損候はゞ　江戶十里四方追放

一而刀を拔、人を爲レ騷候もの、　品輕きは　百日押込

　但所々ニ而、同樣之及ニ所業一候はゞ遠島、

朱書是は文政九戌年、前書主計頭伺之上御仕置申付候、御留守居柳生主膳正中小性松冢吉太郎儀、當六月二日夜、酒ニ給醉、心面白相成、下谷邊水茶屋ニ而涼可レ申と存候得共、此節夜中往來之もの江燒付、物取いたし候類之もの有レ之、物騷敷候旨之御觸も有レ之候ニ付、兼而主人より夜中他行等致間敷旨申付有レ之候ニ付、不ニ目立一樣脇差計帶立出、本郷邊往還ニ、裸ニ而小用いたし候もの江刻限承し候處、挨拶之いたし方不レ宜候故、心外ニ相成、威候而擅りな可レ晴と存、帶居候脇差を拔、振廻し候得ば、驚町屋江逃込戸を〆候間、右拔刀を戸之透間江

計贓

突込、可固辭放と致し候得共、明キ不申候故立去、本郷元町自身番屋江罷越し、挑燈之火を附可貫と致し候處、町役人共怪ミ候樣子ニ付、被捕間敷と脇差を拔、振廻し立、騷候始末、不屆ニ付、中追放申付候、例、并酒狂ニ而人に爲手負候武家之家來、疵之不依多少、江戸拂之御定をも見合、酒狂之儀は、全與風之心得違ニ付、御定書ニは、人を殺候ものは下手人、其外あばれ候もの等ニ至り候而は、別段之御所置ニも御座候間、右例と御定と之中央を取、疵付又は諸道具爲損候ものどもは、江戸十里四方追放、刀を拔候迄ニ而、品輕キ分は、天保七申年、前書主計頭伺之上、御仕置申付候、細川能登守徒士河村要藏儀、當六月十八日夜四時頃、酒狂之上、永代橋際ニ而、町人體之男突當、却而先方より突當候旨、事六ヶ敷申聞、彼是申爭、心外ニ相成候迄可殺心底ニは無之、威之爲メ刀拔候得ば逃出し候ニ付、拔刀を振廻し、追騷候節ニ被捕押、疵付候儀は無之候共、此節所々ニ而往來人江疵付候もの有之時節、右體之及所業候段、右始末不屆ニ付、武家奉公構、暇差出候樣、主人江申達候例ニ見合、相當ニ候得共、右御仕置申付候而は、其罪を被罰候ためニ、浮浪之もの相增候樣相成、今般古主江歸參之儀ニ付、被仰出候御趣意ニも悖り可申候間、此分は百日押込申付候はゞ、又改心之期も可有之哉、其外所々ニ而、刀を拔立、騷候ものは、文政九戌年、前書主計頭伺之上、御仕置申付候、田安近習番佐々木內記儀、此節夜中往來之もの江疵付、物取いたし候類之ものも有之、物騷敷候旨之御觸有之候ニ付、兼而重役之ものより夜中他行等致間敷旨申渡有之候處、去月十三日、中條伊織方江用向有之、小もの五助を召連罷越、同夜立歸り候途中、麹町平河町往還ニ人集居候中江立突、大勢を威し可申と存、刀を半分程引拔、鍔音いたし候處、透散候ニ付、面白相成、猶又同所畢町ニ而、挑燈を持參候往來人江、此ものより突當、刀を拔、挑燈を切落、又は四谷傳馬町往還ニ而、和助儀行當候ニ付、拳を以敲突倒、行過候處、跡より罷越、屋敷迄附參り候旨申聞候迄、威し之ため刀を拔、同人額江疵爲負候、始末不屆ニ付、遠島申付候例ニ見合、遠島と取調候儀ニ御座候、

右之通、當分取極置、此外異同有之候共、大底は前書ケ條江基キ、輕重見込を附候得ば、おのづから吟味捗取、格別入混候もの之外は、不日伺書差上候樣能成、世上おゐても、被捕候もの之風說不相止、內刑罰之次第相辨、且又放刑之分は、先達而評議仕申上候通り、箱館表江被差遣候得ば、再犯之ものも無之、一旦押移り候風俗も相復、良民安堵之場合ニ至り可申、左候得ば一時嚴ニ過候樣ニ而も、詰り御仁惠之筋ニ可有御座候間、當分之內、前書之通、相伺候樣可仕哉と奉存候、依之此段相伺申候、以上、

子正月

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和七寅年正月

三奉行江

御仕置御定書之内、手元ニ有之品、盗取候箇條ニは、十兩以上は死罪と有之、途中之盗ニは、右之譯無之候、向後途中之盗も、十兩以上は死罪と相定、可被致候、○又見ニ張紙留

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和七寅年六月

三奉行江

御仕置御定之內、手元ニ有之品、盗取候箇條ニは、拾兩以上死罪ト有之、度々ニ盗取、拾兩以上ニ相成候譯無之候、追々小盗いたし、其後盗等不致旨申候得共、又候小盗いたし候上は、盗相止候儀吟味之上、證據於無之は、度々ニ盗取候共、金高拾兩以上ニ相成候はゞ、是又死罪ト相定置候樣可被致候、

六月○又見ニ張紙留

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

享保六年極 一都て盗物之品は、被盗候ものニ相返可申候、金子遣捨候はゞ可爲損失、勿論盗物取戻候共、無差別、左之通御仕置可申付事、○中略

寛保元年極 一盗人を召捕、吟味之上、他所にて盗候雜物金子等所持致にをゐては、遠國に候共、其所之奉行御代官、或は領主江申達、被盗候當人召呼、其品可渡遣事、

但少分之品にて、當人請取參候儀、遠國等にて難儀に候間、すたりに致度由申候はゞ、其分に可致候、若亦右雜物取上置候土地に、親類か由緒之者有之間、彼之もの名代にて請取度旨相願候はゞ、願之通可申付、

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕安永二巳年四月八日 被盗物取計之儀ニ付申上候書付

書面伺之通可仕旨被仰渡奉畏候

巳四月十二日　安藤彈正少弼

先達而伺之上、上總下野筋江、伊奈半左衛門家來差遣、盗賊召捕候節、於村々も盗賊致徘徊候はゝ差押置訴出候樣、半左衛門方ニ而、御代官村々江申渡置候處、右半左衛門、御代官所、日光道中千住宿搗右衛門店、常吉、勝右衛門、利八方江去月廿六日夜盗賊這入、常吉其外、衣類蒲團蚊屋小切等四拾品、利八は衣類貳品被盗取候を追駈、途中ニ而盗賊兩人差押候段訴出候ニ付、半左衛門家來差遣、兩人共召捕、入牢申付、被盗候品々は、定例之通取上置候處、右之内夏衣類等、差掛入用有之、迷惑致し候由、被盗主共申立、吟味之上、右之もの共所持之品ニ相違も無之候間、右品相渡遣候樣可仕哉之段、半左衛門申聞候、是迄之仕來は、被盗候品相知候分は、吟味中取上置、盗賊御仕置伺書朱書黄紙抔ニ取上置候品は、被盗主江相渡可申旨相認、落着之節相渡候得共、輕キ身上ニ餘慶も無之もの之衣類、其外差掛り入用之品、被盗候を吟味中取上置候而は、被盗主難儀仕候儀ニ御座候間、以來差支無之分は、是迄之通取計、在方農人之農具、職人之細工道具、或は右體差掛候衣類雜物抔、盗賊申口も符合仕、相違も無之、被盗主相願候はゝ渡遣し、其旨吟味書朱書ニ相認、差上候樣可仕候哉、左候はゝ右半左衛門申聞候千住宿之もの共、被盗候品も、常吉利八江相渡遣候樣可申渡候哉、此段奉伺候、以上、

巳　四月

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政七卯年八月

三奉行江

向後盗物之品代金、被盗主江渡方之儀、手を越し候節は、末々買取候ものより、賣德之分とも取上、被盗主江相渡候樣可被致候、〇又見三奉行取計書

〔天保集成絲綸錄百一〕文化五辰年二月

大林彌左衛門江書取

水野和泉守元家來間宮録之進、盜いたし候一件吟味書之内、盜取候金子取上候分、幷右金子にて調候品不₂相用₁分は、和泉守家來江相渡、相用候分は取上置可₂申旨被₁申聞₁候得共、盜金にて買取候品は、不₂殘相拂代金ニいたし、取上候金子共、一同相渡候樣可₂被₁致候、尤以來右之趣ニ相心得、委細之儀は、三奉行江承合置候樣可₂被₁致候事、

〔御仕置例類集二ノ三〕文化十一戌年御渡

火附盜賊改松下河内守伺

一在方盜物渡方之儀ニ付評議

書面伺之通糺方行屆、紛敷義無₂之候はゞ、時分之品、或は穀物生物之類は、於₂場所₁假渡置、追而落着之節、其儘渡遣候樣仕、尤以來新規加役被₂仰付₁候節は、其時々取計方可₂奉₁伺旨被₂仰渡₁、奉₂承知₁候、

亥四月廿三日　松下河内守

在方ニ而盜取候品、盜賊所持いたし、又は先々江捌置取上候分、落着之節、被₂盜主江可₁₂相渡₁處、里數隔候場所等、少分之品ニ而、請取ニ罷出候儀難義存、取捨相願候分は其儘ニ取扱、代金錢を以取上候分は、少分ニ而も村方呼出し相渡候仕來ニ御座候、右は聊之品ニ而も、實ニ請取度存候ものも、差添人其外路用相懸候ニ付、御當地江出候儀を厭ひ、無₂據取捨候ものも有₂之候ニ付、岡部内記勤役中伺之上、私領之義は領主地頭江渡置、便之節被₂盜主江相屆候樣申達、御料之義も右ニ准じ、御代官江相渡置候處、左候而も、其向ニ寄、都度々々被₂盜主呼出し相渡し、是又難義之趣相聞申候、然ル處、關東爲₂取締₁、御代官手附手代等出役之節、盜賊召捕候砌、糺之上所持致、又は盜物質ニ取候質屋、其外買取候ものより、右品取上候節、少分之品、或は穀物生物等之類は、於₂場所₁被₂盜主江渡遣候由ニ御座候、私方ニ而も、組之もの廻₂村先₁、幷盜爲₂先糺₁在方江差遣候組之もの、盜賊召捕候節、前書

之通、盜物取上候分は、被盜主江爲見候上、相違無之少分之品、或は穀物生物等之類は、證文取之、於場所相渡候はゝ、手數も相掛不申、且在方貧窮之者、難儀ニも不相成哉ニ奉存候間、右之通取計可申哉、勿論遠國之儀は、內記伺濟之通、取計候樣可仕候、依之此段奉伺候、

此儀御定書ニ、盜人を召捕、吟味之上、他所ニ而盜候、雜物金子等致所持ニおゐては、遠國ニ候共、其所之奉行御代官、或は領主江申達、被盜候當人呼出、其節渡可遣、但少分之品ニ而、當人請取ニ參り候儀、遠國等ニ而難儀ニ候間、すたりニ致度由申候はゝ、其分ニ可致候、若又右雜物取上置候土地ニ、親類か由緒之者有之ば、彼もの名代ニ而請取度旨相願候はゝ、願之通り可申付と有之、御代官手附手代共、關東在々廻村爲致、盜賊召捕候節、盜物之品、奉行所迄爲差出候而は、遠路之義、吟味中日間も相掛り難儀ニ付、於場所夫々相糺、相違無御座候得ば、其時宜次第、假ニ渡置、落着次第、其儘渡遣候旨申渡來候義ニ御座候間、河內守義も、右之振合を以相伺候義と相聞、右之通之取扱ニ相成候而も、御定書御趣意ニ、強而振候程之義も有御座間敷候得ども、御勘定奉行之義は、轉役等有之候而も、評定所ニ而之取計は、仕來狂候儀も有之間敷候處、加役之義は、限月ニ而被仰付、勤續被仰付候共、壹人勤、組之もの迚も頭江附、勤續之もの無數義ニ可有御座候間、前書取計方、當時辨利之姿ニは御座候得ども、後弊如何可有御座哉、年來濟來候義ニも御座候間、是迄之通ニ相心得候樣被仰渡候方、可然哉ニ奉存候、

戌十二月

〔天保集成絲綸錄百一〕文政十三寅年閏三月

覺

寅閏三月七日

一覽仕候、評定所一座御書面之通被仰渡、奉承知候、

寅閏三月五日

永田與左衞門
矢部彦五郎

越後無宿榮藏初筆御仕置伺朱書之内、被盜候方ニ而は、數多取扱候品故、難相分旨申立候とも、盜賊申口ニ而治定いたし候上は、盜物幷代を以取上候分、夫々被盜主江相渡可申候、尤以來共、右之趣ニ可被心得候事、

〔諸例類纂 六〕天保十亥年四月四日、町與力仁杉八右衞門へ問合、附札ニ而答、

食物等盜取賣拂候處、盜物と不存、食物之儀故、喰仕廻候節、食物盜取候者は、品柄ニ寄、代積ニ而相當之咎申付、盜物と不存、買取食物ニいたし候者、拂候上ニ而も取上、再被盜候者ニ爲返候筋ニ可有御座哉、夫も常々商賣之品ニも候ば、買取候者構無之候哉、常々商賣も不致品ニ候ば、不吟味ニ相當、右之通申付候筋ニ可有御座哉、盜取候者代料家財等所持ニ候はゞ、盜主ニ代料相渡、買取食候者は、叱位ニ而、宜筋ニ候哉、在所ゟ問合申越候間、乍御面倒、御附札可被下候、以上、

但夫ゟ夫へ賣渡候節は、如何相成候哉、

四月四日　小笠原佐渡守内　林右狩

付札

御書面、先例取調候處、食物盜取候者は、其代金高ニ應じ候而之御仕置ニ候、右食物買取候者、段々手を越賣渡候へば、所持致候者ゟ其品取上、もし買取候もの食用ニ致候はゞ買前之節之代金を取上、被盜候ものゟ代金は順々に爲償、尤盜賊之手ゟ直ニ買取候ものは、損金ニ相成、且亦食物商賣之品ニ而も、御咎差別無之候、勿論盜物と不存買取、外ニ不念之廉も無之候はゞ、代金取上迄ニ有之候、右盜物賣拂代、盜賊所持ニ候はゞ、是又被盜主へ渡遣、買取候者より、取上候代金も一同ニ渡遣候間、若二重之渡方ニ相成候はゞ、一方は被盜主へ不相渡、取上

贓物牙保

切ニ相成候筋ニ有之候、右は凡之振合ニ御座候、委細之儀、始末御書留ニ無之候而は、㡳と之
御挨拶難仕候事、

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

寛保元年極

一盗物と乍存世話いたし、配分は不取もの、　敲

〔徳川禁令考後聚二十五行刑條例〕明和四亥十二月 盗物出所も不糺、致世話賣拂遣候もの御咎之儀、評議仕候趣、申上候書付、

書面伺之儀、朱書之通相心得、伺可申旨被仰聞、承知仕候、

子二月五日

評定所一座

盗物出所も不糺、致世話賣拂遣候者咎之儀、盗物賣遣候證人ニ准じ、代金買主江為相渡候方ニ而可有之哉之旨申上候處、世話人之儀は、口入人同様之儀ニ而、證人とは差別も可有之候間、右之趣を以、猶又評議仕、可申上旨被仰聞候、

此儀盗物賣遣候世話人之儀は、口入人同様之儀ニ而、證人とは差別も可有之旨、今般御尋ニ付心附候得ば、右品調候もの江、一通り口入致し候迄之儀ニ而、深く拘合候筋ニは無之、證人之儀は、賣主同様引受候心得ニ而罷在候事ニ候得ば、世話人とは趣意も違申候、左候得ば先達而申上候、證人ニ准じ候御咎ニ而は不相當ニ而、尤強過申候間、急度叱りニ而相當も可仕候得共、右世話致し候始末ニ寄、叱りニ而は弱キ趣ニ相見候品も可有之候、乍然右體之所は、兼而箇條を立置候程之境も難致儀ニ有之候間、一同過料ニ罷成可然哉ニ奉存候、

朱書 但過料ニ而は強過、叱りニ而は弱キ科も有之候得共、其段は其もの取計方之始末ニ寄候儀ニ而、拾両以上、拾両以下、壹両以下抔と申品とは違ひ、一體取計方之摸様ニ而有之候間、兼而箇條々定置候儀は難仕儀に御座候、右之通ニ候得ば、過料ニも相成、叱りとも相成、一同ニ無之方、却而御咎之相當ニ而可有之哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通ニ御座候、以上、

亥十二月

〔德川禁令考後聚二十五 行刑條例〕文政二卯年十月 怪敷品と乍心附世話いたし候もの、御仕置當之儀評議仕候趣、申上候書付、

書面評議仕申上候通、相心得可申旨被仰聞、承知仕候、

寅十一月廿八日

評定所一座

當三月十四日御渡被成候、渡邊孫左衞門相伺候、上總無宿久兵衞初筆盜いたし候一件、御仕置評議仕候處、振候儀も相見不申候間、其段右伺書下ゲ札を以申上候、其通御下知相濟申候、然處右一件之內、下總國湊村百姓傳右衞門儀、久兵衞持參相賴候品、盜物にも可有之と乍心附、酒食ニ泥み賣拂遣、配分は取不申候得ども、右代金錢之內ニ而酒食被振舞、爲禮物錢貰受候不屆ニ有之、右體之罪狀御仕置當り、前々より至而紛敷、文化二丑年、評議ニ御下ゲ被成候、戶川大學、火附盜賊改、勤役之節相伺候、川越無宿助五郎儀、熊八出會候砌、同人儀金子所持いたし居候と見込、止宿可致段申勸止宿いたし、旅籠幷酒食代錢等拂貰、又は不相應之品故、盜物ニも可有之と乍心附、酒食代錢拂吳候迚、右ニ泥み質入いたし遣し、右代金錢、兩人ニ而不殘遣ひ捨候段、不屆ニ付、敲之上輕追放と相伺、根岸肥前守、町奉行勤役之節、右伺書御下ゲ被成、伺之上、伺之通と申上候處、同人取調申上、相當之例御座候上は、伺之通敲之上輕追放ニ而可然哉ニ候得共、熊八盜之始末を存知候而、質入等いたし遣候ニも無之候得ば、家藏江忍入候盜人ニ被賴、盜物持運候もの之御定的當ニは無之、ケ樣之罪狀は、入墨敲等ニ相成候盜人之引合ニも可有之處、夫をも右御定江引當候樣ニ而は、本人より御仕置重り候筋ニ有之、又本人之所業ニ寄候而輕重有之候も如何ニ付、肥前守申上候趣、打合評議仕可申上旨、御書取を以被仰聞、評議之上、重敲と申上、其通相濟候處、去ル巳年、評議ニ御下ゲ被成候、大林彌左衞門、火附盜賊改、勤役之節相伺候、下總國取手宿番非人五郎兵衞儀、民藏持

參候品は、盜物と乍心附世話いたし遣し候はゞ、德用も可有之と、賣拂又は質入いたし遣、右盜取候反物之內、爲禮物貰受候段、不屆ニ付、重敲可申付處、非人之儀ニ付、相當之仕置可申付旨申渡、穢多頭彈左衞門江引渡と相伺、評議之上、敲之上江戶拂可申付處、非人之儀ニ付、相當之仕置可申付處、病死いたし候段、追而申上候ニ付、其段彈左衞門、幷一件之もの共江申渡と申上、右は死罪ニ相當候盜人之引合ニ有之、猶又去ル午年、評議ニ御下ゲ被成候、大林彌左衞門、右同斷之節相伺候、淺草寺地中妙德院地借傳兵衞店平藏方ニ居候松五郎儀、宇之助相賴候髮差、不正之品ニも可有之と乍心附、證人ニ相立賣拂遣、配分は取不申候得共、右代金之內、禮物として南鐐銀一片、貰受候段、不屆ニ付、敲之上、江戶拂と相伺、評議之上、重敲と申上、其通相濟、右は入墨敲ニ相當り候盜人之引合ニ有之、然處去丑年、評議ニ御下ゲ被成候、火附盜賊改安藤彈正少弼相伺候、四ッ谷鹽町壹町目宇八店佐兵衞儀、長助直藏より被賴候品、盜物ニも可有之と乍心附、德用ニ泥み、米生蠟等賣拂遣し、配分は取不申候得共、右代金錢之內、世話料貰受候段、不屆ニ付、伺之通と申上、幷渡邊孫左衞門相伺候、武州横濱村百姓忠七方ニ居候龜次郎儀、岩吉外二人より被賴候品、不正之品と乍心附、利德ニ泥ミ、買取又は賣捌遣し、配分は取不申候得共、右品之內、世話料貰受候段、不屆ニ付、買取貰ひ受候品共取上、敲之上所拂と相伺、評議之上、敲之上江戶拂と申上、右兩樣とも入墨敲、又は入墨之上重敲ニ相當候盜人之引合ニ有之、右之通、度々之先例區々ニ付、得と取調候處、右體紛敷罪狀を、此上先例而已を追ひ、御仕置附候樣ニ而は、往々猶又混雜も可仕儀ニ付、以來は本人之罪狀ニ寄、御仕置不紛樣極置申度、先達而評議之上、夫々御仕置當り取調申上候處、怪敷品と乍心附、世話いたし候もの、御仕置當之儀、盜賊本人之所業ニ不拘、評議仕可申上旨、今般御書取を以被仰聞候ニ付、猶又再應評議仕候處、前書去ル巳年之番非人五郎兵衞は、死罪ニ相當候盜人之引合ニ而、敲之上江戶拂と申上、同年之松五郎は、入墨敲ニ相當り候盜人之引合ニ而、重敲と申上、其通相濟候以

來は、多分右之振合を以、御仕置申付候儀ニは御座候得共、今般御書取之御趣意は、前書文化二丑年之無宿助五郎御仕置ニ付、御渡被成候御書取同樣之御趣意ニ而、御尤ニ奉存候間、別紙先例書拔之內、其節評議仕申上候趣を以、以來は左之通、

一家藏江忍入候盜人任賴、盜之始末乍存、盜物世話いたし、盜金錢之內、貰受借受候ものは、家藏江忍入候盜人ニ被賴、盜物持運配分取候もの之御定ニ准じ敲之上輕追放、

一盜之始末は不存、怪敷品と乍心附世話いたし、盜金錢之內、貰受借受候ものは、盜賊本人之所業ニ不拘、文化二丑年之無宿助五郎例ニ見合、重敲、

但右之內、酒食被振舞候迄ニ而、金錢貰受借受候儀も無之品輕ものは、別紙先例書拔之內、深川富吉町理三郎店太兵衞外二例ニ見合敲、

一盜之所業、敲ニ當候盜人之引合ニ而、盜物と乍存世話いたし、禮物等貰受、又は酒食被振舞候もの、是は盜賊本人敲ニ相當り候上は、本人より御仕置重り候而は不相當ニ付、敲又は品輕ものニ至候而は、手鎖ニ而も可然品と可有御座候得共、差當先例も相見不申、其節々之始末ニも寄可申哉ニ付、御仕置當り、此節取極候而は難申上候、

一盜賊之所業幷行衞、又は被盜主も不相知候とも、怪敷品と乍心附世話いたし候もの、

是は盜人之所業治定不致候方穩ニ付、前書同樣之趣意ニも可有御座候得共、是又差當り先例相見不申、右御仕置當り、此節差極候而は難申上候、

右之趣ニ極置、以來御仕置不紛樣仕度奉存候、區々之先例相改候儀ニ付、先例書拔相添相伺申候、

以上、

寅十月

〔御仕置例類集三ノ六〕天明八申年十一月

御勘定奉行　根岸肥前守掛

松平伊豆守殿御差圖

一相州小田原ニ而召捕候盗賊無宿傳藏外五人一件

大久保加賀守領分相州足柄郡松田領　百姓　庄三郎

右之もの儀、傳藏粂助共、古着商人と存罷在、盗賊とは不ㇾ心附ㇾ候得共、止宿爲ㇾ致候節、宿賃之代、衣類與候はゞ如何と可ㇾ心附ㇾ處、其儘貰請、其上所持之品之由申旨ニ任セ、清藏江致ㇾ世話ㇾ品々賣拂遣し、又は買取候段、不埓ニ付、買取候品、貰請候品とも取上、代錢損失申付、清藏江賣拂遣し候品は、同人江代錢爲ㇾ相渡ㇾ三十日手鎖、

右御答附

右盗物と不ㇾ存、傳藏粂助持參候品々、清藏江賣拂遣、又は買取候不埓は、御定書ニ、盗物と不ㇾ存、反物其外買取候もの、其色品取返し、被ㇾ盗候もの江相返し、代金は買主不念候間、可ㇾ爲ㇾ致ㇾ損金ㇾ候、證人取候而買取候はゞ、證人ニ代金買主方江爲ㇾ相渡ㇾ可ㇾ申事と有ㇾ之候ニ相當り、且又傳藏粂助を爲ㇾ致ㇾ止宿ㇾ宿賃之代、衣類貰請候は、別紙例ニ見合、品不ㇾ宜候間、此もの買取候品貰請候品共取上、代錢損失申付、清藏江賣拂遣し候品者、此もの證人ニ准し、清藏江代錢爲ㇾ相渡ㇾ三十日手鎖、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政元酉年十二月

御勘定奉行　根岸肥前守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一野州道場宿村勘右衛門忰文右衛門、同村半左衛門外壹人方ニ而、ねだり事致候一件、

大久保山城守領分野州那須郡小木澤村　百姓　源兵衛

右之もの儀、盗物と乍ㇾ存、賣拂遣候はゞ德用可ㇾ有ㇾ之と存、反物類、盗賊文右衛門ゟ預り置、其後文右衛門外貳人罷越候節、逃し遣、右預り置品も追々着用致候段、配分取候ニ相當、不届ニ付、敲之上、輕追放、

右御仕置附

右御定書ニ家藏江忍入候盗人ニ被頼、盗物持運配分取候もの、敲之上、輕追放と有之、持運候も預り置候も、同様之趣意御座候間、右御定ニ引當、敲之上輕追放、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政二戌年十月

松平伊豆守殿御差圖　　評定公事　町奉行 根岸肥前守掛

一神田塗師町代地忠兵衛相手越後國酒屋村五藏外壹人取逃出入一件

佐久間町壹町目　勘七店　與左衛門

右之もの儀、盗物とは不存候得共、出所不相糺、岩波順榮を置主ニいたし、此もの證人ニ而致質入、殊ニ質代金之内壹分、德用ニ致、其上次右衛門ニ被頼、八丈織貳反賣拂候砌、代金之内壹分、致德用ニ、其後取迯之品と乍存、品々賣拂遣、爲世話料帶地等貰請、又者衣類預り置候段、不屆ニ付、入墨之上敲、

但し德用幷もらひ受、又は預り置候品取上ゲ、右品々は被盗主江相渡ス、

右御仕置附

右安永六酉年七月、牧野大隅守町奉行之節、手限伺之上、御仕置申付候、小石川大塚仲町傳左衛門店次兵衛儀、元鮫ヶ橋南町淺右衛門店彌兵衛衣類帶等拾六品持參り、下直成品ニ付、賣拂呉候様申之、尤少々譯合有之候品ニ候間、質入等者致し難キ旨申聞、盗物ニ可有之と存、淺草日輪寺門前金右衛門店七兵衛方江代金壹兩三分ニ賣拂、右之内壹兩貳分、暮方入用等ニ遣捨候段、不屆之至ニ付、入墨之上敲、家主傳左衛門江引渡し遣し候例ニ見合、入墨之上敲申付、家主勘七江引渡

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政三亥年七月

松平伊豆守殿御差圖　町奉行 池田筑後守掛

贓物寄蔵

一仙臺無宿繁七致盗候一件

谷中感應寺門前淺草山川町利兵衞店大次郎方ニ居候

同人祖父　加藤不存

右之もの義、繁七は仕所も不知ものニ而、過分之金子呉候間、怪敷と乍存付、勝手ニ相成候間貰請、猶又心易致候はゝ、徳用可有之と度々旅籠屋江被連罷越、其上繁七相馴染候遊女、致身受可遣旨申ニ付、娘ニ貰候對談致し、且同人盗取候古金、兩替之世話相頼候迚、過分之金子ニ付、怪敷義と存候上、所々持歩行兩替致遣、右之節外々江遣候禮金之内、壹兩殘置、徳用致候段、最初ゟ無宿もの不相應之儀ニ候上者、盗人と存致世話候も同様之義、不屆ニ付、敲之上輕追放、

右御仕置附

右御定書ニ、家藏江忍入候盗人ニ被頼、盗物持運配分取候もの、敲之上、輕追放と有之、此もの儀、繁七ニ被頼、盗金を、知ル人方江持參、兩替致遣、謝禮金取、其上金子等借受候始末、盗物持運配分取候も同様之儀ニ付、右御定ニ准じ、敲之上輕追放、

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

一盗物ものと乍存預り候もの　敲

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和九辰年四月

三奉行江

盗物等、出所不相糺預り置候者咎之儀、身分不相應之者預候歟、又は預り方不埒有之者、過料申付、出所不相糺預り置候迄之者は、急度叱り、

右之通相心得、向後區々不相成様可被心得候、

四月　〇又見御仕置筋御書付留

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政六寅年閏十一月

戸田釆女正殿御差圖

一小石川下富坂町正左衛門盗物取扱候一件

町奉行　池田筑後守掛

小石川下富坂町専右衛門店　正左衛門

右正左衛門妻　かう

右正左衛門儀、當十月十日留守之節、相店道心者了海儀、風呂敷包持參、妻かう江預ケ置、夜ニ入立歸、樣子承り、怪敷儀と存候はゞ、了海行衛相糺、早速可訴出處無其儀、右品手掛有之候迚、被盗候主小林東市方江罷越、折節田安殿家來細工方江番代養子相談取極罷在候故、幸ニ存、武家方家來と申込候はゞ、東市も早速逢與可申と、田安殿家來平井正左衛門と申達、右品持參、内々ニ而請取、事濟候樣申談、東市儀内證ニ而難請取旨申候節ニ至訴延引致候段、不埒ニ付、所拂、

一かう儀、相店了海任申旨、夫留守中ニも有之處、右體紛失物預り置候段、不埒ニ付、急度叱、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政七卯年十二月

戸田釆女正殿御差圖

町奉行　坂部能登守掛

神田鍛冶町貳町目藤兵衛店　卜者　左門

右之もの儀、茂八ゟ預り置候、衣類其外共四拾四品者盗物ニ有之處、其儀者不存預り置候旨申立、茂八儀者、最初ゟ盗取候品と打明ケ預ケ置、追々ニ金子三分貳朱、錢三貫百文借受候旨、申口不致符合候得共、當九月中ゟ知ル人相成、身元も不承置、身分不相應多分之品預り置、金錢貸遣し候上は、怪敷品と不心付との申口は難取用、右始末不届ニ付、敲、

右御仕置附

右御定書ニ、盗物と乍存世話致、配分は不取もの敲、盗物と存預り候もの敲と有之、盗物とは不心

贓物賣買

付旨申張候得共、身分不相應成品預り置、金錢追々に貸遣候上は、不心付との申口は難取用、右御定書ニ准、敲、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政九巳年十二月

太田備中守殿御差圖　町奉行 小田切土佐守掛

一中川修理大夫家來廣瀬玄仙致盗候一件　宇田川町忠藏店 太兵衛

右之もの義、廣瀬玄仙、主人之金子盗取候趣申聞、世話相頼候ニ致同意、盗取候金子追々ニ五百兩預り置、右之內百貳拾五兩は、此もの名前ニ而米春株買取、米春十兵衛江預ケ置、三十兩程は右入用ニ遣、十兵衛ゟ請取候揚金五兩之內貳兩、玄仙江差遣、百四拾五兩は同人江相渡し、卯八名前ニ而、湯屋株爲買取候處、右修復金入用多相懸候旨、同人申聞候間、湯屋株揚金を此もの德用ニ可致と存、玄仙江者不申聞、此もの名前米春株を卯兵衛方江書入ニ致、七拾五兩借受、七拾兩者、壹ケ月貳拾兩ニ付壹分之利足にて卯八江貸渡、湯屋株揚金年々拾五兩づゝ、此もの方江請取候積り相極、殘金五兩者德用致預り金之內、貳拾五兩者玄仙江差戾し、拾兩程者、同人方江酒肴等小買物致遣し、拾六兩は知ル人江預置、八兩三分貳朱者衣類等買取、其餘之金子者、品川宿家名も不存旅籠屋ニ而食賣女を酒之相手ニ致し、其外酒食雜用等ニ遣捨候段、不屆ニ付、入墨之上、重追放、

右御仕置附

右差當相當之例相見不申候得共、家藏江忍入候盗人ニ被頼、盗もの持運配分取候もの、敲之上輕追放之御定書ニ見合、格別品不宜候間、入墨之上重追放、

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

寛保元年極
一陰物買　入墨之上 敲

但年來此事にかゝり居候者は、死罪、

從ニ前々之例

一陰物と乍存、又買いたし候者、　入墨之上敲

寛保三年追加

一盜物と乍存、下直に買取候者、　所拂

○中略

〔御定書百箇條〕盜物質に取亦は買取候者御仕置之事、

享保六年
元文五年極

一盜物と不存、反物其外買取候者、其色品取返被盜候もの江相返、代金は買主不念候間、可爲致損金候、證人を取候て買取候はゝ、證人に代金買主方江爲相渡可申事、

但被盜取候色品、有所不相知代金盜人致所持候はゝ取上ヶ、被盜候者江相渡可申付、盜もの買主ゟ取返候上、代金盜人所持致候はゝ、公儀江取上ヶ可申事、

一同
盜物と不存買取賣拂候節は、賣先段々相糺、代金を以爲買戻、被盜候もの江爲相返、盜人ゟ初發買取候者之損金に可申付事、

但賣先不相知候はゝ、初發買取候ものゟ被盜候者江代金にて爲償可申付事、

〔御仕置例類集三〕寛政元酉年御渡

堺奉行伺

一無宿次兵衞一件之內、盜物と乍存、下直ニ買取候もの、右品取上之儀ニ付評議、

一盜物と乍存、下直ニ買取候もの、所拂之御定ニ御座候處、右買取候品、取上ニ相成候哉之旨御尋ニ御座候、

此儀都而盜物之品は、被盜主江相返可申、金子遣捨候はゝ、可爲損失旨之御定ニ准じ、買取候品致所持居候得ば取上、被盜主江相渡、被盜主相知不申候得ば、奉行所江取上申候、右買取候もの、外江賣渡、賣先相知不申節は、右買取候ものは御仕置ニ相成候間、被盜主損失ニ相成申候、且右買取候ものより、又外江賣渡、盜物と不存買取候得ば、其ものより取上、被盜主江相渡、

買取候代金は損失ニ申付、又々外江賣渡候はゝ、段々爲買戻、所拂ニ成候當人より、盜物と不存、直ニ買取候もの江代金損失ニ申付、賣先不相知候得ば、代金ニ而爲償候儀と相心得罷在候、

酉十二月

〔御仕置例類集三〕寛政三亥年御渡

甲府勤番支配伺

一陰物買と盜物と乍存買取候もの差別之儀ニ付評議

去亥十二月廿三日、評議仕申上候、甲府勤番支配相伺候、盜賊無宿金藏初筆吟味書之內、甲州都留郡上吉田村西念寺門前借屋伊兵衞事、丈左衞門、幷同郡西島村百姓甚兵衞、同郡小笠原村百姓源右衞門、同國下吉田村百姓織右衞門儀、陰物買ニは相當り申間敷哉之段、御尋ニ御座候、

此儀御定書ニ、陰物買、入墨之上敲、但年來此事ニかゝり居候ものは、死罪、陰物と乍存、又買致し候もの、入墨之上敲と有之、右は盜物其外怪敷品と乍存、兼而賣候ものと相對致し置買取、右品商賣を渡世同樣ニ致し候ものを、陰物買之御定江引當、盜賊と存、又は怪敷品と心付候而買取賣拂候而も、當座之利德而已ニ拘リ、渡世同樣ニも不致類は、盜物と乍存下直ニ買取候もの、所拂之御定江引當可申儀と奉存候、然處上吉田村西念寺門前借屋伊兵衞事、丈左衞門は、吟味書之趣ニ而も、無宿體之もの、怪敷古着類等度々持參り、盜之品ニ而も可有之哉と心付候得共、下直之品々賣買ニ致し候はゝ、德用ニ可相成と存、後ニは盜賊之由申聞候得共、度々買取置商賣ニ致し候趣ニ付、陰物買ニ相當り可申候得共、年來かゝり居候ニは無御座、然處右盜賊共を度度爲致止宿候不屆も有之、右は惡黨ものと乍存宿致し、又は五七日ツゝ逗留爲仕候もの、重キ追放之御定ニ見合、重キ方江附、伺之通重追放相當可仕哉と評議仕候儀ニ御座候、

一同國西島村百姓甚兵衛、小笠原村同源右衛門、兩人吟味書之趣は、盗物と乍存買取置、甚兵衛は、往來之もの江賣拂候得共、兩人共右を商賣ニ可致存寄ニ而買取候儀とも相聞不申間、陰物買ニは相當り申間敷、盗物と乍存、下直ニ買取候もの之御定ニ引當、伺之通所拂相當可仕哉と評議仕候儀ニ御座候、

一同國下吉田村織右衛門は、前書丈左衛門買取候盗物之内を藤八より買取、尤盗物と乍存買取候得共、丈左衛門より直ニ買取候ニも無御座候間、陰物之又買ニは相當申間敷、買取候趣意は、甚兵衛源右衛門同樣ニ御座候間、是又盗物と乍存、下直ニ買取候もの之御定ニ引當伺之通所拂相當可仕哉と評議仕候儀ニ御座候、

子閏二月

〔張紙留〕嘉永二酉年九月二日

盗物と不存買取共後買戻させ候者之事

盗物と不存買取、其後爲買戻候もの、右品之代不及取上、急度叱り之積り、

右之通一座評決

〔御仕置裁許帳十一〕盗取候御用木を買取候者

貞享三年寅十月五日

是は三河町三丁目三郎兵衛店之者
八右衛門歳三十二

是は同所貳丁目甚兵衛店之者
安兵衛歳三十一

貳人

此者共、御破損小屋ゟ盗出し候榑木買取申候由、訴人有之に付、召寄遂僉議候處、終に買取候儀無之由申候間、穿鑿之内牢舍、

右之者共、盗物と存買候は、重き御仕置にも可被仰付儀に候得共、御普請小屋に而貰候木切と存、

相調候樣に相聞、其上御尋之儀段々申上候に付、命御助江戸追放、

〔科條類典下四〕

橘町四町目八郎兵衛店

市兵衛

享保十九寅年三月朔日入牢

右市兵衛儀、住吉町三郎兵衛事、市兵衛方ゟ、度々衣類品々脇指等、陰物と乍ㇾ存買取、所々遠國之旅人江賣渡し、陰物商賣致候段、不屆候得共、住吉町市兵衛方ゟ又買に有ㇾ之ニ付伺之上御差圖依而、入墨之上、於ㇾ牢屋門前五十敲、家主江渡遣ス、

〔御仕置例類集三ノ六〕寬政元酉年十月

松平越中守殿御差圖

町奉行

初鹿野河内守掛

一三河町三町目寅右衛門致ㇾ盗候一件

神田永富町壹町目佐兵衛店

紙屑賣買

彥兵衛

右之もの、寅右衛門持來、同人主人所持之由申聞候帳面類者、寅右衛門御城內ニ而盗取候品ニ有ㇾ之處、其儀は不ㇾ存候得共、右帳面ニ者、御場所柄御用之品々記有ㇾ之、不ㇾ常成ㇾ品ニ候上は、容易ニ買取申間敷儀ニ候處、其筋取扱候御用達町人抔之扣帳ニ而、不用ニ相成候品ニも可ㇾ有ㇾ之哉と存、出所も不ㇾ相糺、寅右衛門住所も不ㇾ承買取、同商賣之もの江賣渡し遣し候段、不埒ニ付、所拂、

〔御仕置例類集三ノ六〕寬政四子年四月

松平和泉守殿御差圖

町奉行

池田筑後守掛

一新御番伊丹利右衛門中小姓野口文藏盗いたし候一件

新御番末吉肥後守組伊丹利右衛門中小姓

野口文藏

右之もの儀、甚兵衛江賣拂、又は所持致し候品は、紛失物ニ有ㇾ之、此もの盗取り候儀ニ者無ㇾ之旨申

候得共、源助身分不相應ニ而、怪敷儀ニ有之處、得と出所も不相糺買取、殊ニ源助行衞不相知、賣上書付も不取置上は、全同人より買取候と之申口難取用、不埒ニ付、江戸拂、

右御仕置附

右御定書ニ、盗物とは不存候得共、出所不相糺質ニ置遣候もの、武家之家來ニ候はゞ、江戸拂と有之、此もの儀質ニ置遣候儀ニは無之候得共、賣上書付も不取置、買取方怪敷相聞、當時源助行衞も不相知上は、一通盗物と不存買取候ものとは譯違、始末者不宜候處、差當例も相見不申候間、右御定ニ見合、江戸拂、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政十午年十二月

松平伊豆守殿御差圖　町奉行　小田切土佐守掛

一神田松枝町德兵衞銅取捌候一件○中略　日光西町　長兵衞

右之もの義、眞藏ゟ預り候、古銅瓦同鋲等は、日光御修復所之品を取隱候義と乍心付、追而賣拂德用可取と預り置、金子貸遣し、其後小屋場江盗賊ニ入、銅類紛失致候ニ付、若盗賊盗取候品ニ候得ば、別而不屆之儀と怖敷存、致後悔候得共、有體ニ申立候而は、御仕置可相成と、無何心銅預置候趣ニ訴出、吟味之上、盗賊盗取候銅ニ者無之候得共、右之始末不屆ニ付、入墨之上敲、

御差圖

敲

右御仕置附

右一件之內、藤兵衞同樣之ものニ付、有體ニ自訴仕候はゞ、御仕置弛ミ可申ものニ候處、有體申立候而は、御仕置ニ可相成と取拵訴出候始末、不埒ニ御座候間、藤兵衞同樣、入墨之上敲、○中略

日光鉢石宿松野屋茂兵衞方ニ居候

以贓物爲抵當

藤兵衛

右之もの義、鋳師彦七手先之職人共ゟ度々買取候新銅類は、日光御修復所之品ニ而、職人共取隱賣拂候儀と乍心付、德用ニ泥ミ、買取賣拂賣德取候段、不屆ニ付、入墨之上敲、

右御仕置附

右安永六酉年四月、曲淵甲斐守伺之上御仕置申付候、神田松下町三町目次兵衛店長五郎義、次郎吉ゟ追々買取候銅延板者、上野中堂御修復所ニ而、次郎吉盜取候に有之處、其儀者不存候共、怪敷品と乍心付、町觸を相背、證人者勿論、賣主判も取不申、住所も不承、直段下直ニ買取、右之内拾壹枚者致所持、其外は過分之賣德を取賣拂候段、不屆ニ付、入墨申付候例ニ見合、此もの義者、御修復所之銅を取隱候と乍存買取候段、陰物買ニ准じ、例ゟは品不宜候間、入墨之上敲、

〔御仕置例類集一ノ十五〕文政元寅年御渡

駿府町奉行伺

一駿州無宿平左衛門盜いたし候一件

駿州兩替町六町目　家持　六兵衛

右之もの儀、平左衛門より買取候炭ハ、盜物ニ候之處、其儀ハ不存候とも、盜物買取候段不念ニ付、買取候炭代錢取上、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、買取候炭ハ遣捨候趣ニ付、盜物と不存、買取賣拂候節之御定但書ニ准じ、代錢被盜主江爲償可申儀ニ候得共、取上相渡候共、趣意ハ同樣ニ付、伺之通買取候炭代錢取上、

〔張紙留〕盜物と不存、酒食代錢之代り品物預り置候もの、其品取上、御咎は無之積り、伺之通ニ而、振候儀も無之段申上候得共、品物預置、錢貨遣候ものハ、其品取上、急度叱り置候例も有之、右類之御咎、區々ニ候由之事、

此儀是迄之先例等相糺候處、區々成も相見候得共、御定書ニ、盜物と不存、反物其外買取候もの、其品取上、代錢損失と有之、盜物と不存預り候もの明和九辰年之御書付ニ見合取扱來候得共、酒食代錢等之代り、品物預り置候もの、一通りニ盜物と不存買取候より、却而品不宜候間、以來明和九辰年之御書付ニ准し、其品取上、預り方之始末ニ寄、急度叱り、又は過料をも申付候積り相心得候樣可仕候、依之別紙評議書付札認直し進達致し候事、

〔張紙留〕盜物と不存、預り金錢貸遣候もの、預り置候品取上之上、過料ニも成、急度叱りニも成、區々ニ候處、以來は預置候品取上、過料錢三貫文、

右之通、文化三寅年十一月二日、荒尾但馬守伺、矢向村無宿榮藏一件、評議之節極、

〔御仕置例類集一ノ四〕文政八酉年、大久保加賀守殿御書取御渡、

一盜物預方之儀ニ付、御答之儀評議、

當月十二日、壹人旅人を止宿爲致、其上旅籠酒食之代り、盜物預候もの、其外夫々ヶ條御書取御渡被成、一同ニ致評議、可申上旨被仰聞候ニ付、則ヶ條限評議仕候趣、左之通御座候、

一壹人旅人を止宿爲致、其上旅籠酒食之代り、盜もの預り候もの、

此儀壹人旅人を宿役人江も不相屆止宿爲致、其上旅籠酒食之代り、盜物と不存預候ものは、當九月長井五右衞門相伺候川島村無宿藤九郎、致盜ミ候一件之內、武州神奈川宿旅籠屋淸八後家みつ、評議申上候通、一筋之不埒ニ而、二ヶ條之科ニ付、盜物と不存預置候而已之もの同樣ニ而は、相當ニ無之候間、預置候品取上、過料錢三貫文、尤も壹人旅人止宿之儀、宿役人江相屆ヶ、右ニ不念無之、盜物と不存、身分不相應ニも無之品預候迄之ものは、明和九辰年御書付之通、右品取上、急度叱り、且預り候品之內、無沙汰ニ質入、又は賣拂抔いたし候は、品不宜、過料之先例ニ付、右は品もの、又は賣拂代等取上、過料錢三貫文、

一旅籠酒食之代り、盗物預り候迄之もの、

此儀前書清八後家みつ評議ニ申上候通、明和九辰年之御書付ニ基キ、預リ候身分不相應之物歟、又は預り方不埒ニ有之分は、過料錢三貫文、左も無之預り置候迄之ものは、預り置候品取上、急度叱り、

一遊女揚代、幷酒食之代、盗物預り候もの、

此儀前同斷、明和九辰年之御書付ニ基キ、預方之始末ニ寄、過料、又は急度叱り、

一酒食代幷賣懸之代り、盗物預り候者、

此儀酒食之代ニ預り候ものは前同斷、賣懸之代りニ預候ものも、去申十二月評議ニ御下ゲ被成候、長井五右衛門相伺候、騎西町無宿由兵衛、盗又はかたり事いたし候一件之內、野州赤塚村百姓清五郎方ニ居候、同人叔母ちよ儀、兼而貸置候錢之代り預置候品は、盗ミ物ニ有之處、其儀は不存候共、由兵衛任申旨、得と出所も不相糺、右體之品、兼而貸置候錢之代り預置候段、不埒ニ付、預置候品取上、急度叱と相伺、評議之上、伺之通と申上候ニ見合、身分不相應之品等ニ無之分は、預り候品取上、急度叱り、

一貸金銀幷貸物之代、盗物預り候者、

此儀兼而貸金銀幷貸物致置候代り、追而預り候ものは、前書賣掛之代り預置候ものと同斷、

但盗もの預り金銀錢等貸遣候者は、去ル卯年評議ニ御下ゲ被成候、長井五右衛門相伺候、奥州無宿庄兵衛、盗いたし候一件之內、野州宇都宮宿百姓喜兵衛儀、錢貸し預置候品は、盗物ニ有之處、其儀ハ不存候共、庄兵衛任申旨、得と出所も不相糺、右體之品預置、錢貸遣候段不埒ニ付、預り置候品取上、過料三貫文と相伺、評議之上、伺之通と申上候ニ見合セ、身分不相應之品等ニ無之分も、右品取上、過料錢三貫文、

右之通、已來共極置、御咎不紛樣可仕奉存候、

酉十二月

朱書
本文致評議申上候趣、得と御取調無之候而は、御治定難被成廉も有之候間、先ヅ是迄之御咎當
ヲ以御差圖可有之、其旨相心得候樣被仰聞候事、

〔德川禁令考後聚二十五刑律條例〕天保十三寅年六月不正之品と不存、預金錢貸遣候もの、御咎當之儀ニ付相談書、

御相談書

鳥居甲斐守

不正之品と不存預り置、金錢貸遣候もの御咎之儀、是迄預置候品取上、過料三貫文と相伺濟來候處、右は素人ニ而質渡世ニ拘候儀ニは無之候間、質屋組合停止被仰出候而も、御咎當相替候儀は有之間敷哉之段、火附盗賊改大屋圖書より問合來候處、一體右御咎之儀は、組合之定有之、商物組合ニ不入致商賣候者、商物取上、過料と有之御定ニ准じ、申付候趣之評議濟有之候處、今般組合相止候ニ付而は、右引當御咎申付候者は無之儀故、評議之上、右御定江當分掛紙致し候上は、向後右體之もの有之候共、組合江不入段之不埒は無之候間、出所不糺之處を以、御咎申付相當可致哉、併質屋共儀は、改而町觸も有之、名主押切いたし候帳面相渡置、觸ニ背候節は、一判無判之差別を以御咎當、是迄之通居置候儀ニ而、右體仲間組合は無之候共、渡世筋之もの共は、夫々取締方有之候處、全質渡世ニも無之、當座之相對を以、猥ニ盗品預り、金錢貸遣し候者を、前書之趣意を以、出所不糺迄之御咎申付候ては、自然相弛、取締ニ拘、且紛失物取調方ニも差支候儀ニ付、預り方不埒有之者、過料と有之、明和九辰年之御書付ニ基キ、是迄之通、預り置候品取上、過料三貫文申付可然旨、圖書方江可及挨拶と存候、依之及御相談候、

寅六月

御書面、不正之品と不存預り置、金子貸遣候者、御咎當之儀、御見込之通、明和九辰年之御書付ニ

基キ、別ニ議論も有之間敷と奉存候、以上、

寅六月　　佐々木脩輔

〔徳川禁令考後聚二十五 行刑條例〕嘉永三戌年二月廿五日 盗物と不存品物を預り、揚代金立替候遊女之類、咎當り評決之事、

盗物と不存品物預り、遊女揚代金立替置候遊女之類是迄急度叱り、又は三十日押込等、區々ニ相成居候間、以來預り置候品取上、急度叱リ之積り、右之通一座評決、

賊物質入

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

從前々之例
一盗物とは不存候得共、出所不相糺、質に置遣候者、　過料

但武家之家來に候はゞ、江戸拂、

〔御定書百箇條〕盗物質に取、亦は買取候者御仕置之事、

享保六年 元文五年 極

一盗物と不存、證人取之、如通例之質に取、吟味之上、盗物之儀不存譯に決候はゞ、證人に元金爲償質物は取返し、被盗候もの江相渡可申事、

但證人も御仕置に成、金子可差出掛り無之候はゞ、質屋可爲致損金に候、尤證人無之、或は不念之質取方に候はゞ、質屋損金爲致、其上咎可申付事、

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶暦十一巳年五月

三奉行江

盗物と不存、出所不相糺、置主證人ニ相成、質物置遣候節、質屋ニ不念之儀無之候得ば、只今迄質代員數ニ不構、置主證人江償申付候得共、以來質代少分之節は、置主江過料證人江償可申付候、質代過分之節は、只今迄之通、置主證人江償可申付候、

右之通可被得其意候、

五月

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶曆十三未年七月

三奉行江

武家之家來、質通印形等借遣し、質物之出所も不糺、質置主證人ニ相成候處、右質物紛失物之時、咎之儀、是迄區々有之候、向後此類、盜人ゟ直頼、又頼無差別、御定之通、江戸拂ニ可被申付候、

但質通帳印形預ケ置を、當人江者不申聞、右印形等ヲ以證文判等ニ用ひ、質入いたし候類は、印形麁末ニいたし置候不埒迄ニ而、質入之儀は、一向不存儀ニ付、此類は只今迄之通、急度叱り置可被申候、

右之通、可被心得候、

七月

〔評議書〕寛政三年九月十七日、御尋之趣辨兼候間、先一覽いたし呉候樣、尾嶋鍋三郎を頼、萩原金十郎江遣ス、同月廿二日、伊豆守殿承付候樣御下ゲ承付いたし、深澤伊兵衞を以返上、

盜物と不存、置主證人ニ成候もの、質代償方之儀、評議仕候趣申上候書付、

書面評議仕申上候通相濟候間、以來右之通相心得可申旨被仰聞、承知仕候、

亥九月廿二日　評定所一座

盜物之品、盜物とは不存、質入之置主證人ニ成候、深川熊井町彌吉、同所中島町平六儀、證人平六は訴出、置主彌吉は不訴出、右質代償方之儀、先達而評議ニ御下ゲ被成候ニ付、證人訴出、置主不訴出分は、質代之多少ニ不拘、證人償ば差免、置主江償申付、過料は不申付方相當可仕哉と申上、且置主は盜賊ニ而、質屋ニ不念無之、盜物と不存、證人訴出候節は、質代償方之儀、猶又御尋御座候ニ付、何れ質屋損失ニ者不申付方ニ可有御座間、置主盜賊ニ無之、證人計訴出候はゞ、證人之償者差免、置

主江償可申付處、置主盜賊ニ候上は、償難申付候間、訴出候共、證人江償申付可然哉之段申上候處、右両度之評議、其一件ニ取候而は相當ニ可有之候得共、質代之儀は、追々申上候品も有之、區々ニも可相成哉ニ付、以來之極方、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀先達而申上候通、盜物と不存、出所不相糺、置主證人ニ成、質物置遣候節、質屋不念之儀無之候得共、只今迄之通、質代員數ニ無構、置主證人江償申付候得共、以來質代少分之節者、置主江過料、證人江償可申付候、質代過分之節者、只今迄之通、置主證人江償可申付旨、寶暦十一巳年御書付を以被仰渡候處、安永二巳年ニ至り、盜物と不存候得共、出所不相糺、質ニ置遣候者、置主證人御咎之儀ニ付、松平右近將監殿を以御尋有之、一座評議仕、申上候ヶ條之内、

一質屋ニ不念無之節

置主訴出候はゞ　置主過料差免證人江償

證人訴出候はゞ　置主證人江半分宛償

置主證人共訴出候はゞ　置主證人江半分宛償

右之通ニ而は、吟味ニ相成訴出候節、置主ゟ證人之方、宥免少く相聞候得共、證人も御仕置ニ成、金子可差出懸り無之候はゞ、質屋可爲損金旨之御定有之、既證人御仕置ニ成候節は、不念無之、質屋江損金申付候間、償者過料等之御咎とは品も違可申哉ニ付、前書之通ニ而も可然哉、其段申上置、其後何れ共御沙汰無御座候、右評議之趣ニ而は、證人計訴出候得ば、置主證人江半分宛、償申付候積りニ御座候得共、深川熊井町平六證人ニ而訴出候節、評議仕候趣は、置主證人共不訴出節、質代少分ニ候得者、置主江過料、證人江償申付、質代過分之砌者、置主請人江償申付、置主之過料者不申付間、償も刑ニ無之とは強而難申との故を以、證人訴出、置主不訴出分は、質代之多少ニ不拘、證人償者差免、置主江償申付、過料者不申付方、相當可仕旨申上候儀ニ而、質屋者渡世之儀ニ付、置主證

人之両印取之定法之質取方ニ候得者、不念は無御座候間、置主證人訴出候とも、右両人之償差免候而者不念無之、質屋之損失ニ相成候ニ付、置主證人者、何れニも出所不糺之不念御座候間、置主證人江半分宛償申付、置主請人之内、一方訴出候はゞ、不訴出方江償申付、訴出候方は償差免候積を以、左之通極置候方ニ可有御座候哉、

一置主證人共不訴出、質屋ニ不念之節、質代三貫文迄ニ候はゞ、

證人江償申付　置主江過料申付候積り

朱書
此證人江償申付、置主江過料申付候者、御定之通りニ御座候、

質代三貫文以上ニ候はゞ

置主證人江半分宛償申付　置主之過料は不申付積り

朱書
是は寶暦十一巳年、御書付之通りニ御座候、

一置主不訴出、證人計訴出候節、質代多少ニ不拘、證人償者差免、

置主償申付、過料者不申付積り、

一證人不訴出、置主計訴出候節、質代多少ニ不拘、置主償并過料共差免、

證人江償申付候積り

一置主證人共訴出候節、質代多少ニ不拘、

置主證人江半分宛償申付　置主之過料者不申付積り

一置主盗賊ニ而、盗物と不存證人ニ成、跡ニ而盗物と承り訴出候節、質代多少ニ不拘、

證人江償申付候積り

朱書
是者訴出候故を以、償差免可申ものニ御座候得共、置主盗賊ニ而御仕置ニ成、償難申付、質屋之損失ニも難成候間、證人江爲償候ゟ外無御座候間、本文之通申上候、

一置主盗賊ニ而、盗物と存、證人ニ相立候得者、證人も御仕置ニ相成候節、

質屋不念無之候共、質代損失申付候積り

朱書
是者御定之通り、金子可差出懸り無之間、本文之通ニ御座候、

右之通可有御座候哉、勿論訴出候節之始末ニ寄り、置主ゟ證人之方宥免少く、又者證人ゟ置主之方宥免少ク相聞候儀も有之候得共、右者無據始末ニ御座候間、雙方之宥免、聢と不同無之様ニは相成不申、尤質代之多少ニ随ひ割合候はゝ、先者不同無之様ニも相成可申候得共、左候而者、巨細過其度ニ泥雜も仕、却而區々之儀も出來可仕間、宥免不同之巨細ニ不拘、前書之通、極置候方ニも可有御座哉ニ奉存候、

朱書
本文之通ニ而も、吟味之始末ニ寄、ヶ條之通ニも難申付品も出來可仕哉、其節は本文之趣を本ニ居、猶又勘辨仕候様相心得罷在、其上ニも難決儀も有之候はゝ、其節評議之上、相伺候様可仕候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御下ゲ被成候帳面壹冊、書付貳通、返上仕候、以上、

亥九月〇又見御仕置例類集

〔徳川禁令考後聚七制禁布令〕質屋共諸器具取扱、并古衣類等賣買取締觸書、寛政十午年四月

質屋共儀、不埒之質取方致間敷旨、先年より度々相觸候處、近年等閑ニ相心得、毎度盗もの質ニ取、其上武士方看板物等、或は合印等有之品迄も、數多質ニ取、并武具之類をも、身分不相應之ものより、得と出元も不相糺、猥ニ質ニ取候類有之、不埒之至ニ候、以來武具之類、其外格別手重成品、并合印有之看板物、與印取之候上、質物ニ取可申候、且又合印無之看板物ニ而も、質置主身輕き奉公人體ニ候はゝ、證人之與印を取候而、質ニ取可申候、

一古着屋古着買古鐵屋古鐵買共も、前書之品々者、同様之取計を以買取可申候、

右之趣、急度相守可申候、若相背き、不埒之質取方、幷買取方致、於相顯者、嚴重之咎可申付者也、

四月

〔德川禁令考後聚二十六行刑條例〕寛政十一未年質屋手代幷主人咎之事

一紛失物と不存候得共、仲間定法相背、無印ニ而質物取候質屋手代五十日手鎖、主人は右品取上ゲ、過料錢五貫文、

右之通、南御役所ニ而は、前々より仕來候處、北御役所ニては、手代は同樣五十日手鎖、主人は品取上ゲ過料錢三貫文ニ而、御役所は一體ニ有之處、右體取計方不同有之候而は、如何之由ニ而、土佐守肥前守評議之上、以來北御役所之通、手代は唯今迄之通、主人は品取上ゲ、過料錢三貫文、尤主人直取は、是又只今迄之通、過料五貫文、

但本文兩樣共訴出節は、寛政九巳年九月七日一座伺濟之通、咎は差免候事、

右寛政十一未年五月十八日、北御役所、內寄合に評議極、

〔諸例類纂五〕文化七午年七月七日長崎奉行より町奉行江問合幷答

盜之品々は不存、請人取之、質ニ取置候處致紛失、奉行所へ屆置候以後吟味ニ成、盜之品ニ無相違間、右は可取上處、前書之通品物無之上は、右品は不及沙汰、盜れ主へ申聞候迄ニ而、質屋は長崎仕來之通申付、振候義も無御座候哉、右御問合申度旨、長崎奉行より申越候間、及御問合候、以上、

午七月　曲淵甲斐守

御書面質ニ取置候品物、質屋ニ而紛失いたし候處、右は盜物之品ニ無相違上は、右質ニ取候節之代金、受人より質屋へ爲償、右質代金質屋より取上、被盜主へ相渡候方と存候、

午七月　町奉行

〔新張紙留〕

朱書 文政九戌年十二月二日一座評決

但伊賀守欠席

御相談書　　石川主水正

盗物と不レ存、無判ニ而質ニ取、期月未レ至以前右品焼失いたし候質屋御咎之儀、再應先例相糺候得共、相當之例無レ之、右體質品焼失いたし、質代金損失に相成候上は、猶又代金取上之上、御咎ニ相成候而は、質代二重之損失ニ相成候筋ニ付、不レ及二取上一、御咎而已申付可レ然哉と奉レ存候、然處今般拙者掛りニ、右同樣之もの有レ之、尤右は舊惡ニ付、代金を以取上ニ不レ及、御咎之不レ及二沙汰一段可レ申渡哉と存候、例も無レ之新規之儀ニ付、及二御相談一候、以上、

〔德川禁令考後聚二十五 行刑條例〕 文政十亥年八月 銀具類質ニ取候もの、其外咎當之儀、評議仕申上候書付、

書面評議仕申上候通、當分之内、御咎可二申付一旨被二仰聞一、承知仕候、

亥八月廿九日

評定所一座

去戌十二月十日、銀具類質ニ取、又は質ニ置遣し候もの等、御觸有レ之候廉を以、過料其外御咎重り候儀、評議之趣も有レ之候得共、質ニ取候もの、置遣候もの、又は買取り預り置、或は世話いたし候類、其外箇條書ニ致し、評議之上可二申上一旨被二仰聞一候ニ付、取調候處、銀具類幷銀櫛笄髪差等、盗物と不レ存質ニ取、又は置遣し、其外買取預り置、世話致し候類、一通り之品を取扱候ものより、御觸有レ之廉を以、一段重ニ相成候先例ニ御座候處、右之内買取賣拂候もの等之先例、おのづから區々ニ相成居候儀も御座候ニ付、此度得と評議之上、別段之意味無レ之分は、以來區々不二相成一樣、左之通極置、御咎相伺候樣可レ仕奉レ存候、

一盗物と不レ存、銀具類質ニ取候もの、江戸幷在方共過料錢三貫文ニ相當り候は、質品取上、同五貫

文、又五貫文ニ當り候は、右同斷同拾貫文、
但古着古鐵買等、仲間定法を背買取候も、本文質屋ニ准じ申付候樣、尤仲間定法は無之候共、小間物屋、喜勢留屋、袋物屋、錺屋、彫物師、蒔繪師之類は、素より誂人有之候得ば、銀箸類拵、猶品不宜は、銀相用候品拵置賣渡候も有之、右は利徳ニ泥ミ、御觸を背候儀ニ而、商物ニ不致、風と買取候もの共と差別附不申候而は、於事實相當仕間敷、勿論右體之ものは、別紙之通、是迄過料錢五貫文ニ相成候例も御座候間、前書小間物屋等之類、其外ニ而も商物ニ致し候もの共は、都而一通り御觸を背候ものより重く、江戶幷在方共、其品取上、過料錢五貫文、右體之商賣不致、全之素人は、御觸背之廉を以、買取候品取上、過料錢三貫文、
一同質ニ置遣候ものは、過料三貫文之御定ニ付、右より重く、同五貫文、〇中略
右評議仕候趣、書面之通御座候、別紙先例書相添、此段申上候、以上、
亥八月
〔諸例類纂五〕一天保二辛卯年八月九日、大目付石谷備後守殿江差出、同十二日御附札、〇中略
一質屋共請人爲立、取質仕候處、追而盜人捕へ、吟味仕候處、右置質之品は、何之何某かたに而盜取候分、白狀仕候付、右取質仕候質屋手代吟味仕、彌其品ニ紛無御座候上は、取質之品取上、被盜主へ返し遣し、質屋手代は、吟味不行屆故を以、輕き叱り可申付筋ニ御座候哉、
一質屋手代、兼而知人ニ而、證人不爲相立、取質仕候處、盜之品ニ付取上、被盜主へ差返し、證文不取置之不埒を以、質屋手代、急度叱り可申筋ニ可有御座候哉、
質取方不念之質屋御咎之義、一判或は兩判之質物取候質屋、質物取上、過料三貫文、無判ニ而質物取候質屋、質物は取上、過料五貫文、町觸之節、吟味之義承、訴出ニおゐては、一判無判之無差別、質物取上、過料は差免、且在方質屋は、一判壹人兩判、或は無判ニ而も質物取上、過料三貫

文、但訴出るニおゐては過料差免、在方ニ而も質屋組合へ入候分は、江戸質屋同斷申付候義ニ有之、假令手代取扱候共、其主人之不念不遂ニ而、輕き御咎筋之義ニ付、取扱候もの巨細ニ吟味ニ不及、質屋當人御咎ニ相成申候、しかし身分不相應之品質ニ取候類、吟味相成候節、主人病氣ニ而、全手代之取計ニ相決候類は、事實相糺、其仕義ニ應じ、主人幷手代をも御仕置御咎ニ相成候義も有之候間、一範ニ手代へ御咎附候義無之とは難申、右之吟味之次第ニもより候義ニ付、兼而差極難申上候、

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕天保十四卯年四月 盗物と不存質置主ニ成、盗物之趣承、内々ニ而取戻候後、猶又質入致し候もの、御咎當之儀ニ付相談書、

御相談書　　　鳥居甲斐守

知人より被相頼、盗物と不存、出所も不糺質入いたし遣、其後右品不正ニも可有之哉之旨、風聞及承、其向江訴出候心付も無之、質屋江罷越、右之趣申聞受戻、右知人江可相返と所持いたし候處、行衞相知不申、折節小遣錢ニ差支、右品德用可致心底ニは無之候得ども、右體不正之品と乍心付、猶又質入いたし、代錢遣捨候もの、何程ニ見込御仕置相伺可然哉之旨、火附盗賊改太田運八郎より問合來候付、先例取調候處、相當之例相見不申、依之勘辨致し候處、質置主ニ相成候廉は、御定之通、過料ニ相當候得共、不正品之趣承候後受戻、持主江可相返と存候内、小遣錢ニ差支、質入いたし候儀も有之候ニ付、例相糺候處、享和元酉年評定所一座評議ニ被成御下候、火附盗賊改池田雅次郎相伺候、野州安蘇郡黒袴村百姓平藏儀、組合彥六欠落いたし候後、同人質入いたし置候品は、無宿武兵衞より被頼候品之趣、風聞有之候付、不正之品ニも有之候而は如何と心付候はゞ、其向江も訴出、取計方も可有之處、無其儀、武兵衞江相返候はゞ、宜可有之と相心得、質屋共方江罷越、質代元利差出し、右品々受戻、武兵衞江可相返と所持いたし候段、不埒ニ付、受戻し所持いたし候品取上、

過料錢三貫文と相伺、評議之上受戻し所持致し候品取上、被盗主江相渡、質屋共より質代元利とも可受取旨申渡相當ニ有之、且組合彥六質入之品は、不正と心附候を不訴出、其身損失いたし、右品受返候段は、盗人を召捕、雜物取返、內證ニ而逃し遣候もの、當人名主叱、但死罪ニ可成盗人を內證ニ而逃し遣し候はゞ、名主當人輕き過料と有之御定ニ准じ、右盗賊は死罪可成者ニ候得共、召捕逃し遣し候ニは無之、手掛之儀を不訴出者ニ付、急度叱置、所持いたし候品取上被盗主江相渡、仁左衞門、猪右衞門より償之金銀錢受取候樣可申渡旨申上、其通相濟候類例有之、今般之儀も、利欲ニ拘候儀は無之、全他人之品を不沙汰ニ質入いたし候とは譯違候間、右例ニ見合別段御咎重り候儀も有之間敷候付、前書之御定江付、遣捨候質代取上、過料三貫文申付、以前爲受戻候質屋より、元利取上相渡可申旨挨拶可及哉と存候、依之及御相談候、

卯四月

下ゲ札

此書面先例相糺候處、相當之例相見不申、且例之野州渠袴村平藏は、組合之者質入いたし置候品、無宿ものより被頼候趣及承、不正之品ニ有之候而は如何と心附、內證ニ而取計可遣と存、受戻し所持いたし居候迄之者ニ而、如今般自分と質入いたし候とは差別も可有之哉と倚例相糺候處、去ル亥年評議ニ御下被成候、甲府勤番支配相伺候、甲府光澤寺地內町太五兵衞店十吉儀、質入いたし遣候衣類は、盗物ニ候處、其儀は不存候共、茂十郎任申旨、得と出所も不相糺、質入いたし遣、同人儀被捕候趣承り、受戻訴出候心得ニ而罷在候とは乍申、右始末不埒ニ付、品物取上、急度叱りと相伺、評議之上、過料錢三貫文と申上、其通相濟候例も有之、尤右評議之趣ニ而は、自訴可致心底之段は、申口迄之儀、難取用趣ニ候間、受戻し候迄ニ候はゞ、右例ニ見合、御見込通、過料錢三貫文ニ而相當可致處、假令代錢持出し、受戻置候品ニ而、利欲之筋は無之候とも、追而

不正之品ニも可有之哉と乍心付、猶又質入いたし候段、品不宜、併盗物と乍存世話いたし、配分は不取者敵と有之、御定江は難見合間、前書新藏より重く、遣捨候質代取上、過料錢五貫文申付、以前受戻し候質屋より、元利取上相渡可申哉之段相伺可然旨、御挨拶有之候方と存候、依之及御挨拶候、以上、

六月

寺社奉行

阿部遠江守○町奉行

御勘定奉行、

〔張紙留〕天明八申年四月廿六日、備後守殿江評議書上ル、同七月三日、評議之上相濟候旨、御書取御渡し、

堀帯刀相伺候、無宿源藏外四人之内、質屋咎之儀評議、

四谷鹽町三町目助七店質屋伊兵衛煩ニ付

代　左七

右之もの儀、當時無宿源藏盗物之衣類、市兵衛と申もの相頼、質入ニ差越候儀、其段不存候とも、衣類出所も不糺、其上置主請人同道ニ而も不罷越、印形計使ニ爲持差越候處、兩度ニ、衣類七品ニ而、金三兩之質物ニ取置候段、定法を忘却いたし候質之取方、旁不埒ニ付、過料錢五貫文可申付哉之旨相伺申候、

此儀吟味書之趣ニ而は、主人伊兵衛病氣ニ付、見世之儀は、此もの引受罷在、彥七より兼而質物取引いたし候由ニ候得共、置主彥七、證人八兵衛印形共、彥七方ニ居候市兵衛持參いたし、置主證人も不罷越候處、得と出所も不糺、衣類品々質ニ取候始末、盗物と不存、質ニ取候ヶ條但書ニ、不念之質取方ニ候はゞ質屋損金爲致、其上咎可申付と有之候御定ニ而、質代金損失之上、過料

錢三貫文可申付旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

右是迄江戸之質屋質取方不念ニ候得ば、都而質代金損金之上、過料錢五貫文之積り申上候處、壹人兩判等之不念は、同三貫文、無印ニ而質に取候は、別而不埒ニ付、同五貫文申付候、町奉行仕來ニ付、前書之左七は、壹人兩判ニ而質ニ取候ものニ付、質代金損失之上、三貫文之積り、

右天明八申年六月十三日評議極ル

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政六寅年三月

太田備中守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一作州樫村長左衛門猪鹿番小屋ニ而鐵炮盗取候非人無宿八藏一件

三浦志摩守領分作州眞島郡垂水村　宗左衛門

右之もの義、盗物とは不存候得ども、鐵炮之義者、尋常之品とも違候處、領主役所江も不申立、出所をも不相糺、殊證人も無之質物ニ取候段、不埒ニ付、右鐵炮取上、過料錢三貫文、

右御咎附

右盗物と者不存、證人無之質物取候者、過料之御定ニ見合、鐵炮之儀者、尋常之品ニも無御座候間、尚又例をも相糺候處、安永八亥年、一座江評議ニ御下被成候、甲府勤番支配相伺候、甲州東光寺村善兵衛儀、非人荒七、鐵炮質入之義頼候共、非人之儀、承知致間敷處、預り置致世話候段、不埒ニ付、叱りと相伺、一座評議之上、過料錢三貫文可申付旨被仰渡、可然哉と申上、其通り相濟候例も御座候間、質ニ取候鐵炮取上、過料錢三貫文、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政七卯年六月

戸田采女正殿御差圖　町奉行　池田筑後守掛

一長谷川町忠兵衛召仕傳助外壹人致取逃候一件

小船町三町目七左衛門店質屋次右衛門手代　傳次郎
右主人　次右衛門

右傳次郎儀、質屋定法相背、得と出所も不相糺、置主勇助一判ニ而、質物ニ取候反物衣類諸道具者、忠兵衛召仕傳助父文藏勇助申合、所々ゟ取込、又者主人之品取出候儀ニ有之、其儀者不存候共、勇助義者、多葉粉屋ニ而身分不相應ニ有之、其上無程請出候間、別紙證文ニ致、質帳面消與候樣申候はゞ、猶以怪敷儀ニ有之間、早速可訴出處無其儀、證文ニ仕立、帳面不埒ニ致、質物預り置、組同心罷越相糺候後訴出候段、不埒ニ付、江戸拂、

一次右衛門儀、商賣向、手代傳次郎ニ爲取計、質屋定法相背、一判之質物取、其上勇助任申ニ證文受取、質帳面消置、右體不埒之質取方致候段、兼々申付方未熟故之儀、不埒ニ付、右品取上、過料三貫文、

右御仕置附

右御定書ニ、壹人兩判之質物を取置、吟味ニ可成品之由承り、質物相返し、預り金證文ニ仕直し、其上質帳不埒ニいたし候質屋、家財取上、江戸拂と有之、此もの共儀は、主人病身ニ付、手代ニ爲取計候間、明和二戌年九月、土屋越前守伺之上申付候、新吉原江戸町壹町目甚三郎店、質屋孫市手代吉兵衛義、當五月廿一日、箕輪町平七店佐七方ニ居候十助義、木綿袷壹持參いたし質ニ入候節、十助名前質帳江記置迄ニ而、印形も不記置、證人も無之、無印ニ而質物ニ取、質代錢七百文貸遣し、其已後十助儀、品受戻候處、右は盜物ニ而吟味ニ相成、質帳番所江持參致し候樣申付候處、無印之質物ニ而は咎可受と、證人同町家持半四郎召仕仁兵衛と質帳江書加、有合之印形を置主證人之名前江押、番所江質帳差出候段、主人商賣向引受取計候身分ニ而、取捹候仕方、不屆之至ニ付、江戸拂申付、主人孫市幼年ニ付、店支配人摠兵衛儀は、主人孫市幼年ニ付、店致支配、質物商賣は、手代吉兵衛ニ爲取計候由申候得共、吉兵衛儀、質屋定法相背、無印之質物取之、其上番所江質帳持參いたし候

樣申付候處、吉兵衛義、無印ニ而は咎可ㇾ請と存、證人名前質帳江書加、有合之印形を置主證人名前江押、番所江質帳差出候段、取拵候仕方ニ有ㇾ之處、主人幼年ニ付、店致ㇾ支配ㇾ候身分ニ而、平日申付方未熟ニ付、右體之儀も有ㇾ之、不埒之至ニ付、過料三貫文申付候ニ見合、傳次郎は江戸拂、次右衛門は右品取上、過料三貫文、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政七卯年十月

安藤對馬守殿御差圖

町奉行 小田切土佐守掛

一脇坂淡路守家來深山與　致盗候一件

御勘定奉行曲淵甲斐守家來

中小姓 小川丹治

右之もの義、深山與七持來、質入相賴候品ハ盗物ニ候處、其儀ハ不ㇾ存候共、得と出所も不ㇾ相糺、盗物之質置主ニ相立候段、不屆ニ付、江戸拂と相伺可ㇾ申候得共、右ハ盗物と承、早速主人曲淵甲斐守江申立候間、主人方ニ而暇差出、

右御咎附

右去寅十一月、伺之上御仕置申付候、西丸御留守居中野藤十郎家來船井武右衛門儀、谷野舍人質入相賴候色品ハ、同人取逃致候品ニ有ㇾ之處、其儀ハ不ㇾ存候共、得と出所も不ㇾ相糺、殊ニ傍輩塚田要藏江も不ㇾ引合、同人ゟ預り置候印判、幷質屋七右衛門方江口上書相添、此もの置主要藏を證人ニ致し、右兩判質遣致ㇾ質入ㇾ遣し候段、不屆ニ付、江戸拂可ㇾ申付處、右ハ取逃之品と承、早速主人藤十郎江申立候間、主人方ニ而暇差出候樣申付候例ニ見合、主人方ニ而暇差出、

〔法曹後鑑〕寛政十二申年三月廿二日、備中守殿江上ル、同四月朔日承付ニ御下ケ、卽刻承付いたし返上、

盗物と不存、質置主證人等ニ相成候もの御咎之儀ニ付、評議仕候趣申上候書付、

書面伺之通可仕旨被仰聞、承知仕候、

評定所一座

申四月四日

質物一件自訴之儀ニ付、再應評議之趣、去月十二日申上候處、右之趣ニ而は、武家之家來は盗賊被召捕、或は吟味ニ相成候段及承、其向江訴出候とも、御仕置弛ミ可然との趣ニ候得共、質置主證人之儀は、百姓町人とても、町觸等不承所は同樣ニ而、百姓町人之訴は不取上、却而御咎重き武家之方をば可取上と有之候而は、不同ニ可相成候、假令ば質屋古着屋古鐵買之類は、盗賊被召捕候歟、吟味ニ相成訴出候分は不取上、其餘置主證人、或は預り候もの等は、是迄之通居置可申と歟、又は置主證人預置候もの等も、都而一統ニ取上間敷との儀ニ候はゞ、不同無之、紛敷事も無之可然間、今一應評議之趣可申上旨、御書取を以被仰聞候、

此儀盗物と不存、質置主證人等ニ相成候武家之儀は、百姓町人とは、御咎之品も格別之差別御座候間、別段之儀と見込、先達而評議仕申上候得共、此度御書取之趣、御尤ニ奉存候、依之猶又再應評議仕候處、百姓町人之儀も、置主證人等ニ相成候ものは、仲間定法有之、質屋古着屋古鐵買抔とも違ひ、其上御書取之通、町觸等も不承所は、武家之儀も同樣ニ付、置主證人或は預り置候もの等は、百姓町人ニ而も無差別、盗賊被召捕、又は吟味ニ相成候儀及承訴出候とも、咎は不申付積り、是迄之通ニ居置可然哉ニ奉存候、

右再應評議仕候趣、書面之通ニ御座候、御渡被成候、帳面壹冊、御書取壹通、返上仕候、以上

申三月

〔御仕置例類集一ノ四〕文政三辰年御渡

町奉行荒尾但馬守伺

受贓物

一盜ものと不存、世話致し候、武家之家來、御咎之儀等評議、

書面評議仕申上候通、相心得可申旨被仰聞、承知仕候、

辰十二月十四日　評定所一座

去月廿三日、致評議可申上旨被仰聞候、荒尾但馬守相伺候、西丸御小性組堀田伊勢組諏訪新之丞家來小松市右衞門、幷同中間藤藏儀、盜物とは不存候共、得と出所も不相糺、市右衞門は藤藏任頼、質通帳貸遣、質置主ニ相成、藤藏は茂兵衞任頼、市右衞門ゟ質通帳借受、質入いたし遣候段、不埒ニ候得ども、茂兵衞被捕候趣及承、早速兩人とも主人方江申立候儀ニ付、市右衞門は百日押込、藤藏は急度叱りと相伺申候、

〔評定所張紙留〕一盜物と不存、金錢品物等預り置候、遊女、飯賣女、水汲下女、茶屋渡世いたし候類のもの、是は明和九辰年一座江御渡被成候御書付之通、出所不相糺、身分不相應之品預り候積り、又は預り方不埒有之ば過料、出所不糺預置候迄之儀は、急度叱り等之御咎、夫々申付候積り、

但御書付ニ、其品取上と申儀は無之候得共、其品取上可申事、

一盜物と不存、金錢又は品物等貰請候、遊女、飯賣女、水汲下女之類之もの、

是は先例之通、其品取上候迄ニ而、御咎ニ不及積り、

但格別子細有之ば、其時々評議之事、

一盜物と不存、金錢又は品物等貰受候、人之妻など之類、

是は去々未年、池田雅次郎相伺候、佐間村無宿佐太郎、初筆盜いたし候一件之内、高輪仲町水茶屋渡世いたし候摠吉妻るい御咎之儀ニ付、御尋御咎評議之趣を以、貰受候品取上、夫々御咎附候積り、

右之通、以來區々ニ不相成樣、享和元酉年三月廿一日、一座評議極ル、

盗犯者容止

〔御當家令條二十一〕盗人宿之事

一從前規本人同罪也、縱請人有之といふとも、穿鑿之上有不念之儀ば、不可遁其科、但輕重は依其時之品可申付事、

一五人組之事、穿鑿之上牢舍、又は爲過怠牢扶持を可申付事、

一借屋之者宿借之事、五日三日當座之宿は、借屋之者可爲曲事、但盗人久敷於住宅は、宿主も可爲同罪事、○中略

右之趣可被相心得候、穿鑿之刻、若此旨失念有之、申渡樣子相違有之ば、其時之役人、無遠慮覺書之通可被申聞候、爲其宿主罪科之輕重書出者也、

年號月日　隼人

丹波

兩與力中江

〔御定書百箇條〕盗人御仕置之事

元文五年極
一惡黨者と乍存宿いたし、盗もの賣拂遣、亦は質に置遣し配分取候もの、　死罪

寛保二年極
一惡黨者と乍存宿いたし、亦は五七日宛逗留爲仕候者、　重追放

從前々之例
一輕盗人之宿いたし候もの　所拂

但惡黨もの、礫に被行候はゞ、宿いたし候もの死罪、○中略

〔御定書百箇條〕科人爲立退并住所を隱候者之事

一火附

一盗賊之上にて人を殺候もの

一致徒黨人家江押込候類

一追剝之類

右之類、科人同類には無之候とも、其ものに被賴住所を隱し、或は爲立退候者、死罪、元文五年極

一喧嘩口論、當座之義にて人を殺候もの、元文五年

右科人之同類には無之、義理を以被賴、住所を隱し、或は爲立退候分は、急度叱り可申事、

〔德川禁令考後聚二十五行刑條例〕延享四卯年二月十一日德山五兵衞掛

無宿十右衞門事濱島庄兵衞強盜一件○中略

遠州見付宿　中島順助

此もの儀、濱島庄兵衞強盜致し候儀乍存、自分勝手ニ任せ、宿致し候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻し之上、遠州見付宿おゐて獄門、

〔的例黃紙之寫〕輕追放

安永四未十月主殿頭殿御下知　安藤彈正少弼懸

一備中國柏嶋村ニ而、無宿小四郞外壹人と甚次郞及刃傷、小四郞相果候一件之內、

元万年七郞右衞門、當時花木傳次郞御代官所、備中國淺口郡勇崎村百姓　彌次兵衞

此彌次兵衞儀、盜賊と乍存、度々甚次郞ニ出合、殊ニ小四郞、三五郞と甚次郞及刃傷、小四郞江深手を爲負、甚次郞も疵受ケ罷越候處、四平方江遣し爲忍置、食事等迄持運び、其上四平を賴、船爲借、甚次郞夫婦を逃し遣候段、不屆ニ付、輕追放、

同村百姓　四平

此四平儀、盜賊甚次郞と小四郞三五郞及刃傷、小四郞江深手爲負、甚次郞も疵受罷越候段乍承、甚次郞夫婦を一旦差置、翌日爲立去候得共、猶又彌次兵衞相賴候迚、右夫婦を同道いたし、船借

請候世話致、逃し遣候段、不屆ニ付、輕追放、

〔御仕置例類集三ノ六〕天明八申年十二月

松平伊豆守殿御差圖　町奉行 初鹿野河內守掛

一非人安五郎盜いたし候一件　巢鴨町 伊右衛門店 權右衛門

右之もの儀、無宿安五郎相賴候品は、身分不相應ニ而、全く盜物と察し候得共、世話料可二貰請一と賣遣、右代錢之內、世話料貰請、其上當二月已來、安五郎を手前ニ差置、又者同人相賴候菊五郎は、同類と相察候得共、差置遣候はゝ、猶又德用ニ相成候品可二有一ㇾ之と存、是又差置遣し、右兩之もの共盜來候品、盜ものと察ながら、世話料可二貰請一と追々賣拂遣し、右代金錢之內ニ而、貳分貳朱除、世話料幷飯料代ニ請取、其外盜取候釜壹、貰請候儀共、盜もの配分取候も同樣之義、不屆ニ付、遠嶋、

右仕置附

右安永三午年四月、曲淵甲斐守伺之上、御仕置申付候、本郷新町家平兵衛店與兵衛儀、神田無宿小三郎、幷住所不ㇾ知吉兵衛、追々相賴候ニ任セ差置、其後助成ニ相成候ニ付、無宿ども追々止宿爲ㇾ致、其上本所無宿入墨平助義は、中追放ニ相成候ものニ有ㇾ之處、神田餌鳥屋敷半兵衛店林藏方ニ罷在、欠落いたし罷越候長五郎一同差置、剩銚子無宿與助義は、金子盜取手疵負罷越候儀と乍ㇾ察、留置養生いたし遣し、右與助盜金、雜用ニ受取、其外無宿共より食物雜用錢等貰請候段、惡黨共之致宿、盜物配分取候も同樣之儀、重々不屆ニ付、遠嶋申付候例ニ見合、此者義、德用ニ可二相成一と無宿兩人迄差置、殊ニ右之もの共盜取候品と察ながら賣拂遣、代金之內、世話料幷雜用等ニ請取、又は盜物之品貰請候儀共、惡黨もの宿致し、盜物配分取候も同樣之儀御座候間、遠嶋、

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政二戌年三月　町奉行 池田筑後守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一當時無宿新助取逃いたし候一件　　深川富吉町傳七店　與兵衛事　庄兵衛

右之もの儀、松屋町忠七店ニ罷在候節、同居次兵衛方ニ居候新兵衛相頼候ニ付、新助請人ニ相立、小網町傳七方江奉公ニ差出候新助儀は、主人方ニ而金子致二取逃一候處、行衛不二相知一候迚、忰ニも無レ之ものを忰之趣家主江申聞、手前ニ差置、致二欠落一行衛不二相知一趣訴狀認、番所帳付願致し候段不埒ニ付、所拂、

右御仕置附

右御定書

當人井差置候もの　所拂

名主　重キ過料

組頭　過料

一人別帳ニ不レ載、不レ加江他之者差置候もの、

右之通御座候、且明和三亥年七月、依田豐前守新庄伊織、立合伺之上、御仕置申付候、深川森下町家主忠八儀、小普請組遠藤甚四郎屋敷ニ居候こと儀は、親類ニも無レ之、其上貸金等致置候間、催促又は出訴等之爲ニ候由ニ而相賴候間、娘分ニ致し、當時武士屋敷ニ居候ものを、町内人別帳江書出置候段、不埒ニ付、所拂申付候例と前書御定とを見合、庄兵衛儀は、忰ニも無レ之ものを忰と申立、相違之帳付致し候ものニ付、所拂、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政三亥年十二月

鳥居丹波守殿御差圖　　松平右京亮掛

一信州大草村百姓宇右衛門方江這入候無宿富八外貳人盜賊一件

水谷祖右衛門御代官所信州伊奈郡部奈村　百姓　礒之丞

右之もの儀、無宿長藏、木綿衣類五品、白木綿壹反持參致、右は大草村百姓彌忠方ニ而、盜取候品之

由申聞、預呉候樣相賴候、尤衣類賣拂候はゞ、相應之謝禮可致旨申聞候迚、盗物と乍存、品々預り置、殊ニ長藏を盗賊と乍存、止宿迄爲致、宿賃貰請候段、旁不屆ニ付、重追放、

右御仕置附

右悪黨ものと乍存致宿、又は五七日づゝ逗留爲仕候もの、重追放之御定ニ見合、盗賊を止宿爲致候は兩夜ニ付、品輕相聞候處、盗物と乍存、衣類預り候不屆も御座候間、右御定ニ引當、重追放、

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政十午年十二月

太田備中守殿御差圖　町奉行 根岸肥前守掛

一本所無宿入墨五郎吉致盗候一件　靈巖嶋長崎町吉太郎店 定吉母 かん

右之もの儀、五郎吉は不屆有之被捕候ものに候處、幼年之節ゟ存候者に候迚、同人賴に任せ、襟を解くけ込候金壹兩貳朱取出、小刀を懐中致し、密に繩を切、逃し遣候段、不屆に付中追放、

右御仕置附

右差當り例相見不申候得共、御定書に、手鎖を外し遣候もの過料、但手鎖外し候もの欠落致し候はゞ、輕追放と有之、趣意は違候得共、此もの儀、五郎吉任相賴、逃し可遣と手段いたし、繩切遣候段、右但書に見合候得ば、格別始末不宜候間、一等重く中追放、

〔御仕置例類集一ノ十九〕文政五午年御渡

佐渡奉行伺

一越後無宿要藏盗いたし候一件　佐州羽茂郡小木町 九郎兵衞

右之もの儀、要藏を盗賊とは不存候共、身元も不相知ものゝ宿いたし、渡世とは乍申、旅人留置候上は、諸事心附可申處、夜中忍出、多分之金子盗取隱置候儀をも不存段不屆に付、旅籠代取上可申處、渡世に而請取候儀に付、不及取上、五十日手鎖、

被盜而不覺

此儀文化五辰年、評議に御下ヶ被成候、長崎奉行相伺候、長崎新大工町豐次郎儀、都而無帳面之ものは、一夜たりとも差置間敷旨、兼而申渡有之處、無宿平右衛門を數日差置、其上同人旅人を殺、盜取候錢、床下に入置、遣捨候儀も不存罷在候段、不埒に付、過料錢三貫文と相伺、評議之上伺之通と申上、其通相濟候例に見合、一件之內、要藏吟味書之趣に而は、同人儀、五郎右衛門方に而、旅人之金子盜取持歸、九郎兵衛宅裏通、明キ地萱屋之內江隱置候と有之、此もの居宅內江隱置候儀にも無之、數日止宿爲致候にも無御座、例ゟ品輕く御座候間、旅籠代取上に不及、急度叱、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ十九〕文化九申年御渡

火附盜賊改松浦大膳伺

一武州中荒井村新兵衛初筆御修覆所ニ而盜いたし候一件

水道橋外神田上水掛樋見守番人　伊兵衛

右之もの儀、神田上水掛樋屋根銅瓦、度々紛失いたし候上は、畢竟平日見廻り等不行屆、番人之詮の無之、等閑之儀不念ニ付急度叱、

〔御仕置例類集一ノ二十〕文政九戌年御渡

長崎奉行伺

一長崎銅座跡伊之助外三人盜致候一件

元俵物掛長崎新橋丁乙名　岩瀨谷宗五郎

右之もの儀、都而諸役場取締之儀は、嚴敷申渡有之上は、俵物役所當番いたし候はゝ、諸事無油斷可心付處、日雇共煎海鼠取隱候儀不存、其上少分ながら、破損所等有之儀、不心付段、常々取締方不行屆故之儀、不念ニ付三十日押込、

〔泰平年表大御所〕天保六年十月二日、蓮池御金藏盜賊御咎、當三月廿六日夜忍入、御藏切破、一朱金二百五十兩盜取、行方不相知、然所四月

雜載

三四日頃、內櫻田御門向坂下御門へ寄御堀へ浮死體有レ之、取上相改候處、右死體背に金子二百五十兩、風呂敷に包貫有レ之、然共面體大疵にて、一向不レ分、紺腹掛致、人足體の由、尤金子は包紙等、全御金藏にて紛失の品に相違無レ之、右に付御金藏番御暇九人御咎に相成、

〔慶長見聞集七〕關八州盜人狩の事

見しは昔、關東に盜人多く有て、諸國に横行し、人の財產をうばひとり、土民をなやまし、旅人のいしやうをはぎとる、かれを在々所々にてとらへ、首をきり、はたもの、火あぶりになし給へどつきず、然所に下總の國、向崎といふ在所のかたはらに、甚內といふ大盜人有しが、訴人に出て申けるは、關東に頭をする大盜人も二千人も有べし、是皆いにしへ名を得しいたづら者、風魔が一類、らつはの子孫共なり、此者どもの有所、殘りなく存知たり、案內申べし、盜人かり給ふべしといふ、江戶御奉行衆聞し召、願に幸の事哉と仰有て、誅伐追討の爲人數を催し、向崎甚內を先に立、關東國中の盜人を狩給ふ、〇中略關東の盜人殘なくたやし給へば、世の中靜なる所に、向崎甚內は、盜人がりの大將うけたまはりたるとて、いたづら者を多く扶持する、香餌のもとに、せんぎよのあつまるごとくなれば、たゞ大名の爲レ體にて國々をめぐる、〇中略爰かしこよりさいげんなく盜人をとらへ引て江戶へ來る、いかなる者ぞと問給へば、是は向崎被官、かれは甚內がけんぞく也と云、御奉行衆聞召、とかくにきやつは大盜人、諸人のみせしめとて、向崎をとらへ、首につなさし、馬にのせはたをさゝせ、江戶町を引めぐり、淺草原にて、はりつけにし給ふ事、慶長十八丑ノ年也、

〔利常卿御夜話〕御長柄の者に四郞兵衞と申もの、盜賊に入候ゆへ被二召捕一、籠舍仕候、此旨御聞に達候處、彼者の儀は、常々親に孝行成ものにて、其上盜など致し候、心立の者にては無レ之由、かねて御聞被レ成候、近所のもの、其外へも相尋いよ〳〵盜賊に無レ紛候哉、吟味可レ仕の旨被二仰付一、穿鑿有レ之處、近所又は知音の者も、皆々御意の通りと申候、然ども其身は盜に入候と申候間、再三相糺し候處、彼者老母一人養ひ申候處、貧窮にて、朝夕もたへ致し方も無レ之、母も餓死致させ可レ申よりは、一端

之しのぎに盗みいたり、其上自害可仕と覺悟致し候事之由申候、此段申上候處されぱこそ最初より子細可有之と被思召、度々吟味被仰付候、さて〳〵不便成事に候、老母の養育致し候樣に可申付旨御意にて、母に御扶持方被下、當人も免し候へと被仰出、元のごとくに御奉公仕候、誠に前代未聞の儀と皆落涙仕候、

〔折たく柴の記〕下三月〇享保元年四日の朝、相模川の邊にてすなはち馬入川也强盗一人きり殺せしわか侍あるを、其ほとりなる中島の者共、出合ひおしとゞめて、御代官所へ送來れり、事の由を問ふに、彼侍は坂井といふものにて、名は定八といふ、廿ばかりの者也、駿河國におもむくに、戸塚藤澤の間より、大の男一人附來り、川の邊になりし程に、彼者がふところに手さし入て、ふところの物どもおしとるを、刀を拔てたゞ一打にきりころしつ、所の者共に、きられしものゝ事を問ふに、見知りしものにもあらず、海道に徘徊せる盗人にやと申す、又彼若侍は、本多遠江守正武がもとにつかへしに、此程彼家をにげさりしもの也といふ也、强盗きり殺せしは高名なれど、本主のもとにけうせし上は其罪のがるべからずと、まづ獄に下されたりと聞ゆ、もし此もの罪せらるゝ事あらむには、盗の餘黨ども流言して、盗殺せしもの罪に行はれしなどいはむには、これよりして後、海道往還の人、盗の患に堪ふべからず、はからふべきやうあり、その程御沙汰またせ給ふべしと詮房部〇間朝臣に申て、朝倉與一景隆が許に使して、申すべき事ありといひやる、やがて來たれり、此程御身の主人の家をにげうせしものやあると問ふに、されば候、坂井といふものにげ去りて、相模川のほとりにて、强盗きりし事の侍りといふ、來り給ふべしといひしは其者の事なり、年若からむものゝ、さる强盗きり殺せしを、本主の家出しによりて、其罪に行はれん、不便の事也、いかにもはからひ申さるべしといひしかば、承りぬといひて、明の日來りて、主にて候ものに申て候へば、かの者の事、今は追咎むる事もなくこそ候と申侍れといふ、いしくもはからひ申されたりといひて、其由を詮房

朝臣に申ければ、盜きり殺せし上は、沙汰に及ばずとてゆるされてけり、

古事類苑

法律部四十四

下編上

人勾引

放火 失火併入

闌遺物 埋藏物併入

古事類苑

法律部四十四

下編上

人勾引

人勾引ノ解ハ、上編ノ略人篇ニ於テ既ニ之ヲ言ヘリ、德川氏ノ制、此罪ヲ犯ス者ハ死刑ニ處ス、幇助シテ賣買シタル者モ亦罪アリ、

〔御當家令條二十九〕一人をかどはかし賣候者死罪事、

一人を買取、夫々先江賣候者は、百日之籠舍、其上過料錢、其分限に越て可申懸之、若於不出は死罪事、

一人賣買御制禁之上は、或は譜代、或は我子たりといふとも、賣候あたひ程、賣人買人從雙方可出之、則賣れ候ものは、取はなし可任其身覺悟事、

一かどはかされ賣れ候者は、其本主へ返すべし、若主人なきものは、是も其身存分次第事、

一人商賣宿之儀、久敷仕候ものは、可被行死罪、但一夜之宿は、糺明之上、依其過可爲曲事事、

一人之賣買口入之儀、かどはかし賣候時之口入は可爲死罪、若又譜代家子以下之口入は、其品をわかち、籠舍、又は可爲過錢事、○中略

右條々堅可相守者也、仍如件、

元和五年未十二月廿二日

〔御定書百箇條〕人勾引御仕置之事

人勾引例

從前々之例
一人を勾引候もの　　死罪

寛保二年極
一勾引候者と馴合賣遣、分ヶ前取候者、　重追放、

〔御仕置裁許帳 七〕人を勾引、奉公に出す者之類、幷人之娘、同妹或姪、或は下女と致密通、誘引出す者之類、

寛文九年酉二月十二日

壹人庄兵衛　是は赤坂傳馬町壹町目、淸左衛門店古眞出居衆之由、宿不定、此者小日向水道町三四郎店長助と申者之娘、すてと申、拾一歲ニ成候者をかどひ出し、新吉原貳町目、摠左衛門と申者之所江年季ニ賣候約束仕候由、穿鑿之內籠舍、

右之者、同月廿五日於淺草礫、

寛文十三年丑五月朔日

壹人次右衛門　是は吳服町貳町目、八左衛門店之者、此者新御番木村彌五兵衛召仕ゑげと申小女を勾引、其身手前ニ指置候處、如何存候哉、先月十三日、武州稻毛川江召連參、沈め申候得共、死不申候、近所之百姓引揚ケ、樣子相尋候へば、甲府宰相殿御家來、櫻井與左衛門內、彥四郎と申者ゑげ姉聟之由申候間、其者方江爲知候得ば、彥四郎儀、ゑげ主人彌五兵衛方江相達候付、彌五兵衛方ゟ斷ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、宮崎若狹守方ニ而、同丑十一月廿一日死罪、

〔御仕置裁許帳 七〕人を勾引、奉公に出す者之類、幷人之娘、同妹或姪、或は下女と致密通、誘引出ス者之類、

延寶四年辰七月八日

壹人茂大夫　是は小日向臺町、太郎兵衛所ニ居申候者、此者牛込肴町、辻番六郎兵衛下女かねと

申者を盗出し、淺草田町長右衞門店善次郎方江賣申候處、右之六郎兵衞見出シ訴訟申ニ付、評定所ゟ籠舍、

右之者、同辰十二月廿一日、江戸中引廻シ、於淺草獄門、

〔御仕置裁許帳　七〕人を勾引奉公に出す者之類、幷人之娘同妹或姪或は下女と致密通、誘引出ス類之者、

元祿五年申九月十四日

壹人市右衞門　是は五番町山寺甚左衞門、伊勢兵左衞門、寄合辻番人、此者儀、穢多長左衞門娘せんと申、十七歳に罷成候者を誘引出シ、辻番所ニ差置、爲致遊女候處、親長左衞門見出シ訴訟申ニ付、今日召寄、僉議之上、無紛ニ付、評定所より牢舍、

右之者、同申十一月二十七日死罪、

〔折たく柴の記　下〕紀州牟婁郡船津村の者（名は九助）の女子等勾引せられし事、奉行の人々申す事有、これは今より六年の前、正德元年辛卯の冬、當國品川の驛なる、旅籠する扇屋といふ者（名は道壽）その召つかふものに（喜兵衞といひ、手代といふもの也）金二十兩をもたせて、下部の女買來るべき由をいひしかば、其者こゝかしこ馳廻りて、終に紀伊國牟婁郡船津村に至て、貧しきもの夫婦、女子二人もちしを見て、此子共、我主なる人にまゐらすれば、父母の身のためにもよかるべしなどいひすゝめて、十月の頃ほひ、父母ともに勾引出したれど、遠江今切の關を越ゆべきやうなければ、やがて見附の驛の人頼みしに、（九郎右衞門といひしもの）とすべき樣ありとて、中刑部村といふ所の者を（おかち利兵衞といひしもの）頼みて、山中の道を經て、見附の驛にぞ至りたりける、此所にて彼姉妹二人のものを、金二十五兩に賣るべしといふ事有しに、父なるもの其言葉にたがはずして、（是は旅籠屋の召つかふものに賣べしといひしに、我子それらのものになすべしと思はずといひし也、）十一月に至て、品川に來り着きぬ、主人也といふもの、其姉妹成者を見て、いかにか

く幼き者ども買得て來りぬらむといひて、其召つかふ者共に、家を追出してける、彼下人我身だにあるを、父母姉妹四人のものゝ事、いかにともせんすべなければ、主なるものゝ方に歎きて申す事共有しかば、さらば其姉妹のもの、傾城にや賣べきといふ、其父母も今はいかにとも身をよすべきかたも、なく、其はからひに任すべきより外の事もあらず、やがて彼主なるもの、かゝる媒するものと相議して、市右衛門といひて、淺草に住せしもの也、世に女衒とかいふ業也、新吉原なるものゝ許に、巴屋治右衛門といひて、世にくつわと云もの也姉妹二人を、姉の名はゆき、妹の名はしめ、駿河の國のもの也といひて、身代金百五十兩に賣渡して、其中三十四兩二分をば、彼媒のものにわかち、おのが下人と、父なるものとには、七兩づゝの金をあたへて、其餘をば悉く皆主なるものゝ得分となしけり、其後かの父母のもの、身をよすべきかたもなく成て、娘共の事、媒せし者の許に來り訴へしかば、其者のはからひにて、娘の主の許に身をよせし程に、壬辰のはる三月に至て其母は死しぬ、かくて其事の由聞し者共、父も子もかゝる身と成りぬる、いと惜しけれど、これよりも猶今切の關越え來りし事のあらはれたらむには、いかなる罪にやはあふべきなどいふを聞驚きて、其事告訴ふべしと聞えて、此事にあづかりし程の者共、かの父をさまざまにすかしければ、とかくすぎつるに、年經て甲午の夏四月におよび、紀伊殿に告訴へたれば、其事の由をもて、奉行の人々にのたまひて、かの父なるものを送り致さる、これよりして此事にあづかれるもの共、評定所に召問ふに、例の長詮議に程へしうちに、彼父なるものも、去年乙未の年四月、獄中に死しぬ、然るを此事に至て、人々擬し申せし、彼父始越關の事をしらずといへども、既に其事をさとりたらむには、すみやかに告訴ふべきに、其程經し事、罪犯輕からず、其屍の首をきりて、紀伊殿に渡され、その鄕土に梟られ、二人の娘をば、今の主人に下し給るか、又は沒して婢となさるべし、次に越關の事にあづかれる者共、或は磔し、或は斬べく、品川の旅籠屋の事に至ては、或は追放、或は流罪にや行はるべきなどしるし出たり、かの父なる者の越關

の事をしらざらむには、多くの年所を經て、告訴ふる事なかりし、其罪にはあらず、既に其事をさとりて、一年が程を經て、告訴ふるに及ばざりしも、元より夫婦父子ともに、人に勾引せられしほどの下愚のものゝ、人のためにすかされて年月を經し事、深く咎むべきにもあらず、凡勾引せられしものをば、其本主に還し附らるべき由、元和五年十二月の制條、分明也、いかむぞ彼女子、今の主人に下し給る事やあるべき、越關の事にあづかるものゝ事は、論ずるに及ばず、品川の旅籠屋の事、死刑をまぬかるべきものにあらず、是又御代々御制條に、人賣買ふものゝ、法をたてられしは、是等の事のため也、己が下人の勾引し來りて關越しものを、駿河の國のもの也といひて、身の代金百五十兩に賣て、其中四十八兩二分をもて人にわかち、殘る所は悉く得分とせし者、いかむぞ其罪の輕かるべき、況や最初此ものゝ、召つかふ者して、下部の女買求ざらむには、いかでかゝる大獄は起りぬべき、さらば此事の張本、かの者にこそあれなど議し申ければ、悉く皆某が議の如に事決して、其姉妹二人共に紀伊殿に還し附せられたりける、此時の議草、なほ今もあるなり、近世以來、かゝる事共、皆々評定所留役人といひて、其日の事共しるし置もの共の申所のまゝに事を決せし也、此事の如きも、品川のもの、新吉原の者共の彼役人等にまひなひの事共ありけるほどに、いかにもしてそれらが罪なからんやうをはからひ申せしを、評定の人々、例の如く夫等が申所にまかせて、かゝる事共申されしなり、天下の刑法は、それらの役人などいふものゝ心のまゝに事決しぬる事、いかなる事にやあるべき、

〔科條類典 下 五〕人勾引之例

享保二十一年辰二月

一武州所澤村新右衛門妹もん儀、米津出羽守奥方ニ相勤居候處、致欠落、在所江可參と、小石川富坂邊通り候を、本郷菊坂町權八勾引、谷中西光寺門前新助方ニ差置、菊坂町小平次方江權八妹之由僞之、親類證文遣し、食賣奉公可出と巧候處、もん儀、右之子細小平次江申聞候付、小平次方らもん兄新右衛門江爲知候故、及出訴、遂吟味、伺之上、左之通申付、

往來之女を勾引、妹之由僞り、食賣奉公ニ出、給金可取巧致し、不屆ニ付、獄門ニ伺候處、

死罪　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　權八

もん儀、欠落者にて、權八ニ被勾引候趣、もん物語ニ而乍承、手前江差置、權八と馴合、食賣奉公ニ可出と巧候段、不屆ニ付、遠嶋ニ伺候處、

追放　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　新助

人宿ニ而、奉公人肝煎候もの故、權八方ゟ證文不致口入、殊ニもん兄之方江も爲知候ニ付、

無構　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小平次

主人方構無之、事濟候上之儀故、兄江可渡哉之旨伺候處、

主人江引渡　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　もん

〔科條類典下五〕人の娘を勾引、禮金取候者、幷世話いたし禮金取候者、

享保十六亥年六月

一武州寺分村九郎右衛門女房相手、相州菊名村文大夫下人八助、娘勾引出入、

品川宿に罷在候神職文大夫方に元居候

引廻之上死罪　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　八助

此者九郎右衛門娘を勾引、比丘尼之弟子に遣し、禮金を取候に付如斯、

家財取上所拂　　　　　　　　　　　　下谷山伏町源藏店　清右衛門

此者九郎右衛門娘を比丘尼之弟子に遣候節、人主等も不取、剩實子と僞、其上禮金分ヶ取候に付如斯、

下谷山崎町　太郎兵衛

比丘尼永長方ゟ弟子に取候節、禮金壹兩貳朱差遣候に付、此金立替させ可申候、此もの清右衛

門類を以口入致し、分前をも取之候に付、爲過怠如斯、

小網町久兵衛店欠落本妙院店請　久五郎
本妙院家主　庄左衛門

右兩人儀、右之出入に携候、本妙院欠落致候に付、尋申付候處、不尋出に付、過料可申付旨相伺候處、過料は先差扣、彌尋申付候、

（御仕置例類集三ノ四）寛政元酉年十二月
鳥居丹波守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一野州上府所村辨藏不埒之致取計候一件

山中太郎右衛門御代官所野州都賀郡上府所村　元百姓　辨藏

右之もの儀、無宿重藏任申旨ニ、袖乞致し歩行候、藤原村太右衛門妹とみを勾引、其上重藏倶ニ、とみを申威、間々田宿旅籠屋藤右衛門方江食賣女ニ差出、身代金配分いたし、殊右とみ儀ニ付、奉行所ニ而吟味有之趣及承、身分難立と存、致欠落候始末、重々不屆ニ付、死罪、

右御仕置附

右御定書ニ、人を勾引候もの死罪、并勾引候者と馴合賣遣、分ケ前取候もの、重追放と有之、此もの儀は、無宿重藏發意致し候ニ致同意候段之申口ニ而は、二ケ條目ニ引當可申處、最初とみを連出し候節も重藏は途中ニ相待、此もの罷越連出し、間々田宿藤右衛門方食賣奉公ニ差出候節も、此もの人主ニ相成候儀、其上奉行所吟味ニ相成候儀を承り、欠落致し候始末、不屆ニ付、初ケ條人を勾引候もの之御定ニ而、死罪、

（御仕置例類集三ノ四）寛政七卯年十月
太田備中守殿御差圖　評定公事　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一武州江面村吉右衛門後家そよ相手、下谷御數寄屋町長吉外壹人、娘取戻出入一件

下谷御數寄屋町　忠次郎店　長吉

右之もの儀、五三郎相頼候共、同人妹きん、得心不致上は、親元等江も得と懸合、可相糺處無其儀、五三郎倶ニ申勸、きんを遊女奉公ニ差出候世話いたし、剰受人ニ罷成、身代金之內、貰受候始末、不屆ニ付、重追放、

右御仕置附

右明和八卯年、一座掛評議之上、御仕置申付候、武州豐島郡內藤新宿仲町、平左衛門元店借源太郎儀、きわ娘いちを、平左衛門方江奉公ニ差出候、出入一件之內、鮫ヶ橋北町孫兵衛店女衒中次市兵衛儀、藤左衛門相頼候ニ任、親元をも不相糺、藤左衛門源太郎と馴合、牢助江いちを賣渡候節之致世話、請人ニ成、證文江致印形、世話料金貳分配分取之候段、不屆ニ付、重追放申付候例ニ見合、重追放、

放火 失火 併入

德川氏ノ制、火ヲ放チタル者ハ、火罪ニ處ス、但シ幼者、此罪ヲ犯シタル時ハ、親戚ニ預ケ置キテ其成長ヲ待チテ本刑ニ處ス、瘋狂人ノ犯罪セル時モ亦親戚ニ預クルナリ、

火札トハ、火ヲ放ツベキ由ヲ記シテ、人ノ門戸ニ貼シ、或ハ戸外等ニ棄テ置クヲ謂フ、此罪ヲ犯シタル者ハ、死刑ニ處スル制ナリシガ、後ニハ追放ニ處セリ、

過失ニテ出火シタル者ハ、押込ニ處ス、但シ類燒ノ多少ニ由リテ、日數ニ差アリ、將軍出行ノ日、江戸府內ニ火ヲ失シタル者ハ、五十日手鎖ニ處ス、但シ其地主家主五人組等ハ、押込ニ處ス、而シテ府外ニハ、火元入寺ノ罰アリ、寺院ニ入リテ謹愼シ居ルヲ謂フ、

〔御定書百箇條〕火附御仕置之事

従前々之例追加
一火を附候者　　火罪

但もへ立不申候はゞ、引廻之上、死罪、

寬保二年極
一人に被賴、火を附候もの、　　死罪

従前々之例
但賴候もの、火罪、

享保八年極
一物取にて火附候者、引廻之義、

日本橋　兩國橋　四ツ谷御門外　赤坂御門外　昌平橋外、

右之分引廻し通候節、人數不依多少、科書之捨札建置可申候、尤火を附候所、居所町中引廻之上、火罪可申付事、

但捨札は、三十日建置可申候、

同五年極
一物取にて無之火附は、不及捨札、火を附候所、居所町中、引廻し之上、火罪可申付事、

放火例

享保八年極
右火罪御仕置、都て不ㇾ及ㇾ晒に事、〇中略

延享二年極追加
一火を附候もの、年を越於ㇾ顯は、　死罪

〔御仕置裁許帳〕六火を付る者之類、并投火仕者之類、

萬治二年亥正月廿七日

壹人才藏　是は川瀬石町、次郎兵衛店大工佐兵衛弟子、當廿五日之夜、次郎兵衛家江何者か火付候處、只今迄知不ㇾ申候處、右之才藏、懷ゟ付火之道具落シ申候處を、南鍛冶町壹町目、與惣左衛門店飾屋八左衛門弟子與惣拾申、出入爭申ニ付、双方捕申來ル間、穿鑿之上、才藏白狀申ニ付、籠舍、

右之者同亥三月廿一日火罪、

〔御仕置裁許帳〕六火を付る者之類、并投火仕者之類、

寛文十二年子正月廿五日

壹人惣兵衛　是は芝金杉中通五町目、長左衛門店之者、火付候由、同所中通四町目、庄右衛門店又兵衛訴人申出ルニ付、穿鑿之內、籠舍、

右之者、同月晦日於ㇾ品川ㇾ火罪、

〔近世江都著聞集〕二松竹梅天和政要

吉三郎は盗賊改の中山勘解由手へ召捕れ、其後拷問せられけるに、今度〇天和元年の火事は、汝なるべしと、例の通り銅馬に乘せて、拷問強ければ、吉三郎白狀申けるは、全く拙者は付火不ㇾ仕候、駒込の火付は、八百屋太郎兵衛と申者の娘お七と申者の所為にてこそ候へと、言上しけるに依て、糺明に不ㇾ及、頓てお七を召出されて、御詮議有べしとて、八百屋一家の者共、并町所の長共不ㇾ殘呼出し詮議有て、吉三郎お七對決を仰付らる處に、一言の申譯に不ㇾ及して、たちまち白狀に及び、いかにも火を付候子細は、ケ樣〳〵と申上る、因て公法のがるべきやうもなく、お七は入牢被ㇾ仰付け

る、○中略中山殿○中略御老中へ被申上、御詮議の上、お七は火あぶりに究り、鈴が森にて天和二年春二月、御仕置に成りにける、

〔御仕置裁許帳 六〕火を付る者之類、幷投火仕者之類、

天和三年亥正月廿二日

壹人女はる　是は赤坂田町三丁目、次兵衛店新右衛門下女、此者去ル十八日火を付申候を、致穿鑿候處、一昨廿日、右之段致白状候由、次兵衛新右衛門召連來ル付、致僉議候處ニ、眞木之燃杭を持、雪隱江火を付申候、同類も無之、主江遺恨有之候而付候にても無之、物取候ニ付候にても無之、不斗火付申度存付候由申ニ付、籠舍、

右之者、亥二月九日於淺草火罪、

〔御仕置裁許帳 六〕火を付る者之類、幷投火仕者之類、

貞享二年丑三月廿七日

壹人利助　是は上槇町玉置良元店宗元召仕候者、此者主人宗元店之屋根之上に、夜前六半過ニ投火仕、ふすぼり候ニ付、內々ニ而僉議仕候へば、此者付候由申候、召連れ來ルニ付、遂穿鑿候處、無何心不斗付候由白状申ニ付、籠舍、

右之者同丑八月十二日於淺草火罪、

〔御仕置裁許帳 六〕火を付る者之類、幷投火仕者之類、

貞享四年卯二月四日

貳人　傳吉　是は新吉原角町五郎兵衛店與左衛門召仕

長兵衛　是は淺草田町市郎兵衛店之者、右傳吉請人、○中略

右之傳吉儀、段々穿鑿之上、主人見世ニ有之錢引負候ニ付、右錢をつぐのい可申と存、主人之蒲團

を盗出し、此儀顕れ可申と存、主人相店江火付候由申候、其上脇々ニ而羽織脇指を語取、質物ニ入置候由白状申ニ付、同卯三月四日、於浅草火罪、

〔憲教類典五ノ十七江戸町觸〕享保七壬寅年三月

戸田山城守殿御渡

町奉行江

松右衛門手下非人
非人長右衛門小屋江火を挟候者　万之助

引廻し死罪可被申付候、向後火を附候而、燃立不申候は、右之趣ニ可被心得候、燃立候はゞ火罪ニ可被伺候、

〔科條類典下五〕人に被頼火を附候者、并頼候而火を附させ候もの、

同断

享保八卯年五月七日入牢　堀江町貳丁目善四郎店、清兵衛召仕　治兵衛

右同人店平七召仕　庄助

此者共儀、先月廿二日之夜、堀江町貳丁目出火ニ付、尋ル儀有之ニ付、今日召出穿鑿之内、兩人共牢舍、

右庄助儀段々吟味之上、主人平七元召仕、富澤町勘兵衛店平四郎、致密通罷在候、主人相店久兵衛娘くめを、火事紛に連退候巧ゟ、火を附呉候様平四郎に被頼、當四月廿二日之夜、堀江町貳丁目、くめ親久兵衛居宅裏、權右衛門小屋後江火を附候、不屆至極ニ付、依御差圖、同五月町中引廻之上、於浅草火罪、

但治兵衛は赦免

享保八卯年五月十日入牢　富澤町勘兵衛店　平四郎

此もの儀、先月廿二日之夜、堀江町貳丁目出火ニ付、尋ル儀有之、今日召寄牢舍、
右之者段々吟味之上、堀江町貳丁目、善四郎店平七相店五兵衛娘と致密通、罷在、火事之紛に、くめを連退候巧に而、火を附呉候樣に、元傍輩庄助を相賴、火迄拵、庄助江相渡、當四月廿二日之夜、堀江町貳丁目くめ親久兵衛居宅裏、權右衛門小屋後江、庄助江爲致投火候段、火を附候同前に而、不屆至極ニ付、依御差圖、町中引廻之上、於淺草火罪、

〔科條類典下ノ五〕延享二丑年四月、小濱平右衛門火附盜賊改之節、伺之內、

駒込無宿
ちい〱三之助

此もの儀、鍛冶町九兵衛と馴合、去十二月廿四日、板橋宿江火を附、衣類配分取、其外先達而も追落致し、金子盜取、重々不屆至極に御座候得共、年を越候火附にて御座候間、町中引廻死罪に可申付候哉、併舊冬ゟ打續、所々に附火多、其上附火仕候節より、年を越候日數間も無御座候間、通例之通、町中引廻、五ヶ所に科書捨札建、於品川火罪可申付候哉、
右之通伺候處、死罪可申付旨被仰渡候、

〔的例黃紙之寫〕火罪

安永二巳二月、佐渡守殿御下知、　手限　安藤彈正少弼懸り

一相州栗原村百姓六左衛門弟、當時無宿藤八附火致候一件吟味之內、

太田三之丞知行相州高座郡栗原村百姓六左衛門弟
當時無宿　藤八

此藤八儀、當四月、村方致欠落、無宿ニ成候以後、爲可致盜、栗原村組頭利右衛門居宅、道を隔積懸ヶ置候稻むら江火を附、殊ニ兄六左衛門居宅椽之下江投火いたし、同村半左衛門、庄兵衛、甚兵衛、仁

右衛門居宅共、都合六度附火いたし、剩壹軒燒ニ而、面白く無之候間、風並見合、家數多燒候而見度旨、又は栗原村を不殘燒拂度抔、雜言を申候段、重々不屆至極ニ付、御定之通、町中引廻之上、火罪可被仰付哉、

〔御仕置例類集二ノ七〕文化元子年御渡

火附盜賊改戸川大學伺

一上州松井田宿郡藏附火いたし候一件

上州碓氷郡松井田宿北橫町不動寺店　郡藏

右之もの儀、不動寺江出入いたし候處、源藏儀、彼是惡敷申候故、出入被差留候儀と右を遺恨に存、源藏居宅裏之方、物置入口戸明キ有之處江這入、內に積有之候杉之葉江附火いたし、右物置は燒拂候得共、未恨みも晴不申候迚、源兵衛彌兵衛居宅表柱江、火札を張候始末、重々不屆至極御座候得共、年を越顯候に付、死罪、

此儀火を附候もの、年を越於顯は死罪、遺恨を以火を可附旨、張札又は捨文いたし候もの、死罪と有之、兩樣之御定に見合、伺之通死罪、

但黃紙科書之內、年を越顯候と申文言相除可申渡、

朱書評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ六〕文政五午年御渡

奈良奉行伺

一和州御所町新七借屋留吉致附火候一件

植村駿河守御預所和州葛上郡御所町新七借屋　留吉

右之もの儀、弟音藏江附火之儀は不申聞、盜に罷越候間、盜物持運に參り吳候樣申聞、音藏同道罷

越、同人儀は、附火之儀心付不ㇾ申様、途中に爲ㇾ待置、留吉壹人、人家五ヶ所江火を附、爲ㇾ及ㇾ燒失、出火場所に取出有ㇾ之候、錢貳貫文著類其外物數とも六拾三品盜取、途中迄持退、夫より吾藏と兩人に而持歸り、內壹品は落、拾壹品は用ひ仕舞、四品は所持、其餘質入又は賣拂候代南鐐銀札錢、且盜錢共、都合南鐐壹片、銀札三匁、錢三拾貫五百文、遣仕廻候始末、重々不屆至極に付、奈良町引廻し之上、火罪、

〔御定書百箇條〕拾五歲以下之もの御仕置之事

寛保元年極
一子心にて、無ㇾ辨火を附候もの、　拾五歲迄親類江預置　遠島

〔御定書百箇條〕亂氣にて人殺之事

享保六年極
元文八年極
一亂心にて火を附候もの、亂氣之證據於ㇾ不分明には死罪、亂心に於ㇾ無ㇾ紛は、押込置候様、親類共江可ㇾ申付事、

〔御仕置例類集一ノ四〕文政五午年御渡

火附盜賊改長井五右衛門伺

一拾五歲以下ニ而、附火いたし候もの、預ヶ方之儀評議、

去月七日、拾五歲以下ニ而、附火いたし候もの、親類共江預ヶと、溜預ヶニ相成候との差別、評議いたし可ㇾ申上旨被ㇾ仰聞、御渡被ㇾ成候、長井五右衛門相伺候、拾五歲以下ニ而、附火いたし候、上州原市村勝五郎召仕安五郎御仕置伺書、幷御書拔とも一覽仕候處、右安五郎儀、水車家ニ働罷在候節、主人勝五郎、外より金子受取、革財布江入、寐間夜具之下江仕廻置候を見請候迚、本宅江食事ニ參り候砌、雪隱江立入隱レ居、勝五郎立出候跡、右水車家入口、建寄有ㇾ之戶を明ヶ這入、金銀入候右財布盜取候得共、露顯之程も難ㇾ計、燒失之體ニ可ㇾ致と、水車家之內、入口脇羽目際明キ俵等積有ㇾ之場所

江附火いたし、右水車家幷物置所雪隱共不殘燒拂、右金銀之内ニ而反物帶等買取、衣類ニ仕立所持いたし、又は兼而質入いたし置候品受戻し、其餘之金銀は、不殘遣捨候段、幼年ニ而辨無之とは乍申、不屆至極ニ付、火罪御仕置ニも可奉伺候處、拾五歳以下ニ付、遠島申付、請人次兵衞江預置、拾五歳ニ相成候はゞ、火附盜賊改江訴出候樣可申渡段、相伺候趣ニ御座候、

此儀御定書ニ、子心ニ而無辨、火を附候もの、拾五歳迄親類江預ヶ置、遠島と有之候ニ付、火消人足等之出候を面白存、附火いたし候ものは勿論之儀、假令盜可致ため附火いたし候とも、於事實子心ニ而仕成候類は、右御定之通、親類預ヶニ相成可然哉、御書拔之例之内、親類預ヶニ相成候、火附盜賊改掛り之分は、いづれも評議ニ御下ゲ無御座、溜預ヶニ相成候方之兩例は、大人同樣之所業ニ付、預ヶ置候而は、逃走又は如何樣之惡事仕出候も難計候間、溜預と申上、其通相濟候儀ニ付、其罪科之次第ニ寄可申儀、今般之安五郎は、金銀盜取其上露顯可致を厭ひ、附火いたし、剩右金銀を以、衣類を調、或は質入置候品等を請戻し候段は、子心ニ而無辨いたし候儀とは難申、大人も同樣之所業ニ付、御書拔之內、元隨幷三次郎御仕置之兩例を見合、遠島申渡、拾五歳迄溜預、

午四月

朱書 評議之通濟

火札

〔御定書百箇條〕寛保二年極 火札張札捨文致候もの御仕置之事。

一 意恨を以、火を可附旨、張札又は捨文いたし候もの、　死罪

〔御當家令條二十一〕條々〇中略

一 火之札制止之事

右私之遺恨有之時、無實を申掛、剩當隣町に至迄、可及類火族、重科之至、嚴制先畢、火札被立たる

者有之ば、其身壹人、内證申來るべし、兼又無故して金銀をもらい可申ため、火之札立る族有之ば、雖為少分、一切與ふべからず、若金銀をとらせたる者有之ば、可為曲事、或は火之札立たる者を捕來、又は雖為同類、訴人に出に於は其科をゆるし、犯人之財寶をとらせ申べし、札を立たる本人は、放火人に准據して可處重科、若又其趣を存知之輩、奉行所江不申來は、可行罪科者也、

右條々京中可令觸知者也

明暦元年未十一月廿六日　牧野佐渡守

〔公裁秘錄〕火札之事

町方ニ、火札其外張札等在之候得ば、其所ゟ申出、吟味在之候共、畢竟右は先江難義を懸可申ため、事を僞候所ニ候間、自今は張札在之候共、不寄何事申出ニ不及候條、其所ニ而名主ども火中可仕候、然共張札致候者を見屆候はゞ、召捕差出可申候、且又張札仕候ニ付、右言立られ候者を宿等替させ候事、一切致間敷候、右風聞之義ニ付、宿たてさせ可申由申者候はゞ、當人直ニ奉行所江罷出、其段相達候樣為致可申候、以上、

八月

〔御仕置裁許帳四〕張文仕者之類

萬治三年子三月四日

壹人吉兵衞　是は本八町堀武町目拋四郎下人、傍輩之女と、心御座候ニ付、主人穿鑿仕候得ば、火を付可申と張文仕、其上主人材木を盜賣申ニ付、請人靈岸島文右衞門と申者に預ヶ置候へば、請人手前ゟ欠落仕候付、西久保ニ而請人捕來、訴訟申ニ付入、牢○入

右之者、火罪ニ相極り、同月十日江戸中引廻シ、同四月晦日火罪、

〔御仕置裁許帳四〕張文仕者之類

延寶七年未五月十日

壹人善次郎　是は竹川町喜兵衞店八兵衞出居衆、何者仕候哉室町壹町目新右衞門店五兵衞と申者方江火を付可申由にて、度々張文仕候付、人を付置候處、夜前五ッ時分、此者張文致候付捕へ召連來ル付、穿鑿之內、籠舍、

右之者、同未七月二日、江戸日本橋ゟ拾里四方追放、

（御仕置例類集二ノ七）享和三亥年御渡

火附盗賊改德永小膳伺

一下總無宿善心初筆火札張候一件

下總無宿
善心

右之もの儀、市五郎妻はん江、衣類洗濯相頼置候處、出來不致候間、催促いたし候得共、夫市五郎儀、質入いたし置候間、才覺いたし可相返間、待呉候樣申候ニ付、待居候得共差越不申、又候催促およ び候砌、彼是申募候內、市五郎ニ打擲致され、頭足等江疵付られ候を遺恨に存、火札張候はゞ所江も置申間敷と存付、吉田町市五郎差置候はゞ、大火ニ成候とも不輕儀相認、自身番屋表庇柱江火札を張置候段、不屆ニ付、重追放、

此儀御定書ニ、遺恨を以、火を可附旨張札又は捨文いたし候もの、死罪と有之、科條類典相糺候處、元祿八亥年、眞杉紋大夫と申もの座頭之娘と致密通候處、外ニ又密通之もの有之、ねたましく存、娘之親同町ニ置候はゞ火を付可申由、金剛寺坂町中三ヶ所江、去年十二月落し文致候付、江戸中引廻し、於淺草獄門之例ニ而相極候と有之、此度之善心は、洗濯ニ遣置候品を催促に參り、市五郎に被疵附、右を遺恨に存、火札張候ものニ而、素々市五郎理不盡より事起候儀ニ有之、右御定江は難引當、德永小膳別紙例ニ申上候、上州藤岡町吉兵衞儀も、元例同樣、其身之不屆有之候儀ニ而趣意不宜候間、右吉兵衞御仕置より輕く、中追放、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ六〕文政四巳年御渡

火附盗賊改長井五右衛門伺

一本芝四丁目七右衛門悴金次郎外壹人出火之節縱火いたし候一件

本芝四丁目宗兵衛店七右衛門悴　金次郎

右之もの儀、芝車町出火ニ付駈付參り、寺門内ニ相詰罷在候砌、追々下火ニ相成候處、未消口も取不申、消防ニ出候詮も無之、少々場所成共燒候而消留可申迚、金之助と申合、燃居候杭板を同所向側町家土藏續、物置所えたみ下之方江、兩人ニ而建かけ、呼火いたし、右火燃上り、既町家燒失いたし、剩呼出致候砌、及口論ニ、疵付、内分ニ而相濟候へ共、右始末、火消人足之身分ニ而、旁不屆至極ニ付、獄門、

○

〔御定書百箇條〕出火に付て之咎之事

一平日出火之節

小間拾間ゟ以上燒失に候はゞ　類燒之多少に寄、三十日、二十日、十日、

享保六年極　火元　押込

寛保三年極　但小間拾間以下、燒失に候はゞ不及咎、尤寺社ゟ出火にて、類燒有之候はゞ、其寺社は七日遠慮、

一御成日、朝ゟ還御迄之間、并小宮御殿御成還御之日、并御逗留中、小間拾間以上燒失、且平日三町ゟ以上燒失之節

享保四年極　火元　五十日手鎖

寛保三年極
但寺社ゟ出火に候はゞ、其寺社十日遠慮、

寛保二年極
火元之
地主　三十日押込

同
火元之
家主　三十日押込

同
火元之
月行事　三十日押込

同
火元之
五人組　二十日押込

同
風上貳町風脇左右貳町ツヽ
六町之月行事　三十日押込

但風上風脇之者共、不精之樣子次第、相應之咎に可申付、格別出精候はゞ譽可申候、

寛保三年極
一御成還御之節、且小菅御殿御逗留中、類燒有之候共、小間拾間ゟ以下之燒失に候はゞ不及咎、

同二年極
一寺社門前ゟ出火之節、平日小間拾間以上燒失に候はゞ、其寺社は不及咎、
御成日、朝ゟ還御迄之間、且小菅御殿御成還御之日、并御逗留中、小間拾間以上燒失、平日三町ゟ以上之燒失に候はゞ、其寺社十日遠慮、門前之もの共咎は町方同斷、

〔德川禁令考後聚二十八行刑條例〕文政二卯年十月 寺社出火御咎并私領入會類燒等之事

古山谷吉信州支配之節伺濟

私支配所內、出火有之節、手附手代差遣、見分爲仕、火元入寺相愼罷在、自火無相違、怪敷儀も不相聞、類燒無之分者勿論、小間拾間以下之類燒ニ候はゞ、早速入寺差免、拾間より貳拾間內は、日數

十日、貳拾間より六拾間は廿日、六拾間より百八拾間迄三十日相立候はゞ、不及伺入寺差免、若入寺不致分は、右日數押込申付、且寺院より出火ニ而類燒有之候はゞ、類燒多少之無差別、其寺社七日遠慮申付、其段御届申上候樣可仕哉、尤御咎申付候程之出火は御届申上、御咎不申付分は、御届申上間敷候、

但在方家作之儀は、壹軒ニ而も、小間拾間以上之分も有之候間、火元壹軒限之燒失ニ候はゞ、小間拾間以上ニ候共、早速入寺差免候樣可仕哉、

一私支配所、他支配私領入會之村方、私支配所之者火元ニ而、他支配私領之者、致類燒候節、其支配領主地頭江掛合、私手附手代差出爲立會、他支配私領家數致見分、右類燒人共、一ト通相糺、火元江對し申分無之候はゞ、其段書付取之、類燒家數は一同取調、火元御咎之儀は本文之趣を以取計、其段御届申上候樣可仕候哉、且他支配私領之者、火元ニ而、私支配所之者、致類燒候節は、私支配所之分計、見分吟味爲致、火元江對し申分無之候はゞ、其趣口書取之、其段火元之領主支配江申達、右類燒之趣取調、御届申上候樣可仕哉、尤御三家御三卿方、幷御老中方所司代、御側御用人、大坂御城代、若年寄衆、御側衆、評定所御一座、領分知行入會之分も、伺之上取計候而は、火元之者、可及難儀候間、出火之儀ニ付而は、外私領同樣、取計候樣可仕哉、

一高札場、撿地帳、割付皆濟目錄、御年貢米、御圍穀貯穀等、類燒致し候歟、人馬怪我等有之候歟、又は火元ニ而子細有之分は、類燒多少之無差別、吟味仕相伺、且又小間三町以上之類燒ニ候はゞ、火元幷組合村役、若店借ニ候はゞ、地主家主等迄吟味仕、御咎之儀、相伺可申奉存候、以上、

書面寺社より出火ニ而、小間拾間以上之類燒ニ候はゞ、其寺社七日遠慮、三町以上之類燒は、十日遠慮被申付、其餘は本文但書共、伺之通可被相心得候、

「諸例類纂」五」文政六年十月四日、石川主水正殿へ伺、六日御附札、

私領百姓家より出火いたし、類燒有之候節は、右類燒之多少ニ隨、仕置申付候、萬一他領、又は御料之百姓、類燒有之節は、私領計、類燒之節とは、仕置申付方違可申哉、矢張公私之論無之、類燒之軒數ニ准、仕置申付、宜御座候哉、此段心得罷在度奉伺候、以上、

十月四日　　松平志摩守家來　吉田源吾

御付札

書面他領亦は御料之百姓迄、類燒有之候共、別ニ咎當り相違可致義無之候得共、いづれ他領、亦は御料迄類燒有之候節は、出火見分之儀、御料は御代官手附手代、私領は領主地頭家來立合、可相糺義ニ付、咎之儀も、御見込之處、一應立合候面々江懸合、存寄有無承糺之候上、御申渡有之可然義と存候、以上、

未十月

〔德川禁令考後聚二十八行刑條例〕文政六未年出火之儀ニ付、取計方御達之事、

在府御代官江、石川主水正、松浦伊勢守より達、

在府御代官支配所出火之節、火元咎之儀、届不申聞、又は不相伺候も有之、區々ニ付、右は享和二戌年、其節關東內支配之總中より伺候ニ付、及差圖候趣、別紙之通候條、在府之分、一統同樣ニ被相心得、支配替之節は、跡支配申送、以來區々不相成樣可被取計候、依之別紙書拔相添申達候、

別紙

下知書拔

一出火之節、手附手代廻村先、最寄之儀ニ候はゞ、御料私頭ニ不拘、早速爲駈付、防方爲取計候樣仕度、支配所內ニ候はゞ、類燒之多少によらず、居懸之儀ニ付、見分爲仕、御届之儀は、是迄之通、御殿御勘定所江御届申上、且又手附手代廻村先ニ無之候節は、類燒拾間以上之分は、見分之者差遣、

類燒拾間以下ニ候はゞ、見分之者差遣不申樣仕度奉存候、

書面伺之通たるべく候

一出火之節、火元相糺、自火ニ無紛、怪敷儀も不相聞候はゞ、火元入寺之儀、類燒貳拾間以上は日數廿日、貳拾間以下拾間以上之類燒ニ候はゞ、日數十日、拾間以下之類燒は、日數七日相立、入寺差免可申、若入寺不仕分は、右日數押込可申付、類燒之者無之候はゞ、入寺不及段可申渡哉、

書面類燒無之幷小間拾間以下之燒失ニ候はゞ、早速入寺差免、小間拾間以上燒失ニ候はゞ、類燒多少ニ寄、三十日、廿日、又は十日程之内を限、不及伺入寺差免、追而相屆可被申候、尤入寺不致ものは、右日數押込可被申付候、三町より以上之燒失ニ候はゞ、火元之者、手鎖申付置、早早可被申聞候、

一類燒家數ニ不寄、怪我人馬等有之歟、又は他支配他領入會之者、致類燒候歟、拜借願等申出候類、其外別段子細有之分は、拾間以下之類燒ニ而も、其時々見分差遣、取計方相伺候樣可仕奉存候、

一宿場ニ候はゞ、類燒拾間以上以下共、見分之者遣可申、類燒無之候はゞ、見分差遣申間敷哉ニ奉存候、尤御屆之儀は、御殿御勘定所、幷道中奉行江御屆可申上候、

書面二ヶ條共、書面之通可被心得候、

〔政談秘書 三〕一出火有之節、火元入寺いたし、相愼罷在、吟味之上、自火ニ無紛、怪敷儀も不相聞類燒有之候共、拾軒以下之類燒ニ候はゞ、入寺差免、拾軒以上之類燒ニ有之候はゞ、類燒之多少ニ寄、十日廿日三十日を限り、不及伺入寺差免、御屆申上、且寺社ゟ出火ニ而類燒有之候はゞ、類燒多少之差別なく、其寺社七日遠慮申付、其段御屆申上候樣可仕哉、

但し撿地帳、高札場、御圍穀、御貯穀、御廻米等燒失仕候はゞ、吟味詰相伺可申奉存候、且右之類燒失無之候共、三町以上、其餘百姓家飛々有之村方之分は、一村不殘類燒同樣之儀ニ候はゞ、夫々

吟味詰、相伺候樣可レ仕候、

御附札

書面本文但書共、可レ爲二伺之通一、〇年月不詳

〔類例秘錄九〕松平紀伊守

一同年〇寬政二年十一月、水野出羽守より、寺院出火之儀ニ付咎之儀、

書面寺社咎之儀、小間十間以上ニ而も、類燒無レ之候はゞ、咎御申付ニ不レ及、十間以下ニ而も、類燒有レ之候はゞ、遠慮押込等ニ而、日限七日程ニ而相當可レ致候、尤遠慮押込等之儀は、譬御朱印地ニ候共、領主ニ而咎申付不レ苦、右之趣、本寺觸頭等へ御通達にも不レ及方と存候、

〔類例秘錄一〕土屋紀伊守掛　文化十四丑年正月　鈴木傳市郎出

一甲州若神子村出火見分吟味伺

書面幸藏儀、火之元之儀は、精々可レ入レ念處、灰小屋より出火におよび、多分之家數類燒いたす段、不埒ニ付、手鎖申付、村役人共、火元五人組之もの共義も、平日心付方不行屆、不埒に付、村役人共は、一同急度叱り置、五人組之ものは、押込申付、證文取候はゞ差出置、幸藏は日數五十日、五人組之ものは、二十日相立候はゞ、不レ及レ伺可レ被二差免一候、以上、

丑正月

〔類例秘錄一〕道中方　文政二丑年　早川八郎右衛門出

一甲州道中內藤新宿出火見分吟味伺

書面藤七儀、火之元之儀は、精々可レ入レ念處、居宅ゟ及二出火一、多分之家數致二類燒一段、不埒ニ付、手鎖申付、且火元之地主、家主、月行事、五人組之もの共儀は、平日心付方不行屆、不埒ニ付、一同押込申付、證文取レ之差出、且藤七は、日數五十日、地主、家主、月行事は、同三十日、五人組之もの共は、同二十日、

右日數相立候はゞ不及伺手鎖押込とも可被差免候、以上、

丑八月

〔御仕置例類集一ノ三十〕文政三辰年御渡

奈良奉行伺

一和州岩坂村儀助離縁之女房いの儀、不束之取計いたし候一件、

多羅尾靭負御代官所和州山邊郡吐山村　兵藏同居　いの

右之もの儀、離縁請候共、元夫儀助心底より之事とは心得不申間、密ニ儀助江面會致し、樣子相尋、再縁も可頼、目立不申樣、夜分可參と存、儀助方迄は、道法三里餘之山道ニ付、猪狼等近寄不申樣、火縄ニ火を移、所持致し、暮前より罷出、儀助方表迄罷越候得共、離縁之身分、直ニ内江も這入兼、家内相考候處、儀助留守之樣子ニ付、裏手灰小屋内江這入、火縄も其所ニ差置、密ニ待合居候得共、儀助歸不申、追々夜も更候付、又々翌日にても參り可申、其夜は先可歸と存候折柄、儀助母きん、裏手江罷出候ニ付、自然見咎、怪敷存候はゞ、再縁之障ニ可相成と、急ニ逃退、火縄失念いたし候旨申之、儀助儀、同日竈之灰を取、前書灰小屋江入置候間、右灰ニ火氣殘有之、夫より及出火候儀と相心得居候付、其段訴出置候儀ニ而、火縄より及出火候とは曾而不心得、いの江對し、少も申分無之旨申立候趣ニ而は、全右灰火より及出火候儀ニも相聞候得共、火縄失念之所も、同灰小屋内之儀ニ付、彌灰火より出火共難取極、何れに而も火縄失念いたし置、灰小屋内より其夜及出火、居宅燒失いたし候上は、火元紛敷、不輕儀不屆ニ候得共、附火いたし候所存とも不相聞、殊に右體火元不相決上は、旁中追放、

此儀吟味書之趣ニ而は、最初は奉公人之積、壹ヶ年銀百目之給銀ニ而、儀助方江罷越、其後女房ニ相成、離縁ニも相成候節は、儀助方ニ罷在候内之給銀、受取候對談之處、衣類幷銀札五匁差越

候迄ニ而、給銀は不差越と有之候得共、離縁請候儀、又は給銀不差越候を遺恨ニ存候趣ニ而は無之儀助申口之趣も、灰小屋江入置候灰ニ火氣殘、夫より及出火候趣ニ可有之と、其段御預り役所江訴出、此もの差置候火縄より及出火候とは不相心得、此もの江對し、少も申分無之旨申立、火縄より及出火候儀とも不相聞候上は、火元不分明ニ候迚御仕置申付候も不穩筋ニ有之、尤きんニ被見咎候而は、再縁之障ニ可相成と存候とも、火縄差置逃去、火を麁末ニいたし候段は、不埒ニ付、先例相糺候處、差當り相當之例相見不申、寛政六寅年、評議ニ御下ゲ被成候、長谷川平藏、火附盗賊改勤役之節相伺候、新吉原京町貳町目、善八店いわ後見新八召仕八五郎、評議之例ニ申上候、明和元申年、依田豊前守、町奉行勤役之節、手限ニ而御仕置申付候、本郷竹町人宿藤兵衞寄子三之助儀、水戸殿屋敷江日雇ニ罷越歸候節、小石川春日町湯屋源右衞門方江入湯いたし、上り口にて煙草を給、火を吸附候儘、きせるを持候而往還江罷出、風烈ニ有之、踏消可申と存候間、火移り有之候たばこを、はたき捨候ニ付、火散り候處被咎候間、水戸殿鳶之由申候はゞ用捨も可有之と存、其節酒ニ給醉罷在、被縛候譯は無之由、彼是雜言申候段、不埒ニ付、所拂申付候例ニ見合、火を麁末ニいたし候趣意は同樣之處、今般之いのは、雜言等申候儀無之、旁輕女之儀ニ付、五十日押込ニ相當り可申處、六十日以上入牢之ものニ付、咎之不及沙汰、

但科書之內、火元不相決上はと申文段は相省、附火いたし候所存とも不相聞候間、押込可申付處、日數入牢ニ付令宥免、咎之不及沙汰、

朱書
評議之通濟

〔類例秘錄〕一　松浦伊勢守掛　文政五午年四月　江川太郎左衞門出

一相州青山村出火見分吟味伺

書面出火、全自火ニ無相違、怪敷儀不相聞候共、まつ儀、夫安左衞門、氣分不揃ニ而打擲いたし候

迯、組合惣五郎方江逃參、夜更候迄臥居、眠候內、怪敷物音ニ驚立出候處、居宅ゟ及出火、駈付候節は、一圓ニ燃上り、家內江立入候儀も難相成段、無余儀次第ニ候得共、既安左衞門及燒死候始末ニ相成、不埒ニ付、押込申付、右之外、吟味ニ付呼出候もの共は、無構旨申渡、安左衞門死骸は、勝手次第爲取置、證文取之差出、押込日數三十日相立候ば、不及伺可被差免候、以上、

〔岩淵夜話別集六〕一駿府にて御鷹野に御出の時、道の傍に年至極したる姥一人、稚き子の手を引て啼居たり、家康公御覽被成、あれは何ものにて、何故に泣ぞ、急ぎ尋參れと被仰付、御供衆立寄て、其子細を尋らる、姥申けるは、某はあの見えたる在所のものにて御座候、夜前手あやまちにて火事を出し、家を燒申候所に、所の御代官樣より、火の元不沙汰にいたし、火を出す事曲事と被仰、三年の內、在所を立退、歸候事無用の事とて、所を御拂被成、夜の內に散々に成、在所を立退申候、何方へ可參心當もなくて、ヶ樣に致居申候由を語るに付、其通に致言上せば、家康公聞召、其姥に在所の名を尋、其所の代官方へ連て行可申は、誰も家を燒度とて燒事はなき物ぞ、火事を出したる者に、他國をさする作法ならば、家康も近年兩度まで城中より火を出したるが、身共は何處へもまからずと慥に云聞せよ、此姥は仕合ものにて、我等目にあたり、不便におもふ間、元のやうに家を作りあたへよと、此段も能々云へと上意有けると也、

〔當時珍說要秘錄十〕松平助之丞屋敷出火遠慮之事

一牛込若宮前松平助之丞、御本丸御徒頭にて布衣以上の人也、去る頃自火を出されたり、尤類燒は壹軒も無之候、屋敷の內燒失せり、類燒無之時は遠慮にも不及、御屆一通にて相濟候事也、依之松平助之丞、手前屋敷計り燒失仕候段御月番若年寄衆へ相屆被申候、其同夜、右助之丞組下の平御徒阿久澤某の屋敷よりも手あやまち、是又類燒はなしといへども、世上へはつと顯れ候間、御屆を同申上たり、若年寄衆聞召、組の阿久澤は遠慮にも不及、御奉公出勤候樣にと、何事もなく被

仰渡けり、其頭の助之丞は、遠慮三日被仰付たり、是はいか成故ぞと、人々大きに不審を立たり、能内證を聞ば助之丞方より出火して、其火の子烟先事の外番町御堀端へ來り、此節今の堀田出羽守屋敷は、彼御出頭第一の大岡出雲守屋敷たり、雲州の母堂甚だ驚き給ふ故、夫へ御挨拶に、若年寄板倉佐渡守殿、松平助之丞へ遠慮申付られしとかや、公邊の式法、私の權威を以て破らるゝ事いか成事ぞや、あゝなげくべしなげくべし、

闌遺物 埋藏物 併入

徳川氏ノ制、闌遺物ハ、三日間、其所ニ晒シ置キ、或ハ其品ヲ辻番所等ニ置キテ、其品目等ヲ記シタル札ヲ建テ、本主識認スル時ハ金錢ハ本主ト拾主トニ分與シ、物品ハ本主ニ還付シ、本主ヨリ別ニ拾主ニ謝セシム、但シ六ケ月ヲ經テ本主出デザル時ハ、總テ拾主ニ下付ス、拾主訴ヘ出デザル時ハ過料ニ處ス、船筏或ハ竹木等ノ類、浦湊ニ流レ來ル時モ、六ケ月ヲ經テ、其本主出デザル時ハ、官ニ收メテ公賣ニ付ス、埋藏物ノ制モ大方同ジ、

〔御定書百箇條〕拾ひもの取計之事

享保六年極
一拾物之儀、訴出候はゞ、三日晒、主出候はゞ、金子は落主と拾ひ候もの江半分宛爲取可申候、反物之類に候はゞ、不殘主江相返、拾ひ候者江は、落し候ものより相應に禮爲仕可申事、

元文三年極
一落候もの之主相知不申候はゞ、六ケ月見合、彌主無之候はゞ、拾ひ候もの江不殘爲取可申事、

從前々之例
一拾ひ物いたし、不訴出儀於顯には、　過料

〔張紙留〕都而浦附江船或は荷物竹木之類、流寄候取計、浦附之御代官所、幷御預所役人より奉行衆江相伺候節、六ケ月見合、尋來候もの無之候はゞ、御拂之積、御勘定所江可相伺旨、御下知附札取調候も有之候得共、浦高札之内江自然寄船、幷荷物於流來は可揚置之、半年迄荷主於無之は、揚置候輩可取之、若右之日數過、荷主雖出來不可返之、其所之地頭代官可受差圖事と有之間、流寄候品委細ニ認、往還場江建札いたし、六ケ月見合、尋來候もの無之候はゞ、取揚候村方江爲取可申旨、區々ニ不相成樣、下知御附札相認可申旨、天明四辰年六月廿七日伊豫守殿方内寄合ニ而被仰聞候事、

〔政談秘書三〕寛政十二申年
一捨物有之時は、其所江印付置、品は辻番所江入置、辻番遠く有之候はゞ、屋鋪內江入、番人附置、御

目附江相屆可申候、
但し箱桶葛籠、又は差物等、內を見候事不致心得之事、
下ゲ札
捨物、場所ニ寄、往來之差支ニ相成候はゞ、其所江印付置、辻番所江取入置可申哉、辻番所遠ぐ候はゞ、病人と違、屋敷內江入候儀ニは不及候、往來之差支等無之候はゞ、捨置候場所江其儘差置、番人附置可申候、
〔政談秘書三〕一捨物有之候はゞ、村預申付、品數委細相認、往還端ニ建札いたし置、其段御屆申上、六ケ月見合、尋來候もの無之、御拂ニも可成品は、御拂之儀、御勘定所江相伺、且尋來候者有之候はゞ得と吟味之上、全取落候由ニ而、怪鋪義も無之、申口無相違相聞候はゞ、其品引渡遣、御屆申上、若紛失物之由申立、手懸も無之、外怪敷儀も不相聞候はゞ、追而手懸相知次第可訴出旨申渡、其品引渡遣、早速御屆申上候樣可仕哉、
但し尋來候者、他支配私領之者ニ而も、先方役人添簡有之候はゞ、糺之上、本文同樣取計、尤紛失もの之由申立候分は、是又本文之通、外怪敷も不相聞、手懸も無之候はゞ、追而手懸り相知次第、支配領主地頭江可訴出旨申渡、其品引渡遣、其段先方支配領主地頭江懸合置、御屆申上候樣可仕哉、
御附札
書面捨物取計方ニおいては、本文但書共、可爲伺之通候、然ル處、取落候由ニ而有之文段相見え、左候而は、拾ひ物と相聞候、金銀は、外往還ニ而、全取落候品と相見候を拾ひ訴出候節は、三日さらし候、主出候歟、主出不申候共、不差急筋ニ付、取計方可被相伺候、且捨物之儀、先ヅ其盜人之仕業ニ而も、盜主有之事故、建札等いたし候事ニ候、捨物拾ひ物差別有之條、混雜不致候樣可被心

得候、〇年月不詳

〔新張紙留〕御相談書

一奥州飯野村逸三郎代周助相手、同國渡利村榮助外壹人、難澁出入、

右は逸三郎所持之金三百五拾五兩、同人召仕善藏外壹人、馬ニ附置、及紛失候處、相手榮助拾取候趣及承、受取度段爲懸合、同人宅江善藏罷越候處、榮助は名主半六方へ罷越候由ニ付、直ニ同人方江罷越候處、大金之儀ニ付、領主役場江相屆候間、相對ニ而は難渡旨申聞、尙又其後榮助江惡名附申觸候抔、同人申張、彼是差滯候由、訴訟方申立、相手方ニ而は、逸三郎方ニ而、召仕善藏外壹人無念故、取落候金子ニ付、相渡呉候樣懸合候はゞ、子細無之可相返儀勿論ニ候得共、及紛失段申聞候上、如何敷子細も有之樣申觸候段、難心得候間、取落ニ無相違、榮助取計ニ疑敷儀無之次第ニ相決不申內は、難相返段申張罷在、吟味中之處、懸合之上、全訴訟方心違を以、掛合方不行屆、召仕共不念ニ而、取落候儀ニ無相違段、相手方江一札差入候上は、相手方ニ而も憤り相晴、右金子は領主役場ゟ請取、訴訟方江相渡候筈ニ而、雙方無申分、熟談相整候旨申立候、然ル處、右金子渡方之儀、相手方ゟ領主役場江差出置候儀ニ付、可相成は拙者方江取寄、訴訟方江相渡候樣致し度旨、相手方申立候儀も有之、全拾ひ物ニ相決候上は、渡方定法も可有之哉と之內合も可有之哉、右は吟味中、領主役場ゟ爲差出、拙者共方江請取置候儀ニ候はゞ、直ニ訴訟方江相濟筋ニ候得共、金高之儀、遠路取寄候も、無益之手數相懸り候間、是迄領主役場ニ差置候儀ニ付、領主家來呼寄、其段申聞、雙方幷村役人共立會、於彼地請取渡可致旨申渡候ニ付而は、訴訟方ゟ相手方江、相應之禮金可差遣段、可申渡筋ニ可有之哉、御定書ニ、拾物之儀、訴出候はゞ、三日晒、主出候はゞ、金子は落主拾ひ候ものと、半分づゝ爲取可申と有之候得共、右は落主不相知、拾ひ取候ものも、拾ひ人不相知、全御威光を以、拾ひ相分候節之儀ニて可有之、今般之儀は、拾ひ人ゟ訴候同日、落主ゟ懸合有之、落主之方ニ而も、不移

時日、拾ひ人名前も相分り、及懸合候儀ニ付、三日晒等之手續ニも不及、無子細相對ニ而取引相濟候得ば、吟味ニも不及程之儀ニ候處、掛合方不相屆、拾ひ人方ニ而も、差返方相滯候儀ニ付、右御定法同樣とは難申、併前書之通、對談いたし候上、相應之挨拶金差遣候趣、濟口證文ニ書載有之候はば格別、左も無之候はゞ、訴訟方存意相糺候上、相應之禮金可相渡旨申渡、若員數等難決伺出候はば、凡金高之壹割五分可相渡旨可及差圖哉、差當先例も無之儀ニ付、御相談および候、

巳六月

右文政四巳年六月二日評儀決

〔類例秘錄二〕道中筋宿々捨物之儀ニ付評議

大井勘左衛門樣
吉見儀助樣　　　　中野又兵衛

道中筋宿々旅籠屋等ニおいて、旅人取落し候品、又は捨物等有之節は、支配御代官ニ而吟味之上、六ヶ月相立候而も、尋來候もの無之、主不相知由を以、右品取計方之儀、奉行衆江相伺節は御拂之積り、御勘定所江可被相伺旨、御差圖有之候定例ニ候處、其後御勘定所へ相伺候得共、道中方除金ニ組入候哉、又は伺方ニ而御取扱、御勘定組ニ相成候哉、取極等承知いたし度、右は主水正殿御沙汰も有之間、此段及御懸合候、以上、

申六月（文政七年）

御書面、道中筋宿々旅籠屋等ニ而、旅人取落之品、又は捨物等御拂之積、支配御代官ゟ御勘定所へ相伺候節、道中方除金ニ組入候哉、又は伺方ニ而取扱候哉、取極御承知被成度、尤主水殿御沙汰も有之候ニ付、御掛合之趣承知いたし候、右は道中筋ニ候得ば、御金藏道中方欠所金之內へ相納、道中方ニ而御勘定所取計、脇往還ニ候はゞ、伺方ニ而御勘定組取扱ニ有之候、此段御挨拶におよび候、以上、

申七月

大井勘左衛門

吉見儀助

山田茂左衛門出

〔類例秘錄三〕曾我豐後守懸 文政八酉年三月

一武州小梅村江流寄候材木主不知ニ付取計伺

書面荒川通小梅村地內へ流寄筏壹組、木數杉丸太百六拾壹本之儀、建札申付被置、六ヶ月相立候而も、尋來もの無之上は、其方役所江取上、御拂之積、御勘定所江可被相伺候、以上、

酉四月

朱書本文筏は、壹貳本宛、流寄候品とは違ひ、何れ主可有之品之處、右體尋來候もの無之上は、全拾盗物ニ可有之、先格を以、書面之通令下知事、

〔諸例類纂六〕〇天保亥十年四月八日、公事方御勘定奉行深谷遠江守殿へ差出、同十五日御附札、

領分百姓某之妻宅へ、近所之婦人罷越、懷中ゟ金貳兩程取落候を、右之婦人隱置候處、落し候者早速心付、其場を尋候得共無之、外ニ居合候者も無之、全く側ニ罷居候女房取隱候義と察し、若拾候はゞ戻し呉候樣申聞候得共、一向不存候旨申紛し、其後一ヶ月程も相立候而、右金子取隱ニ無相違、追々日用ニ遣捨候段、明白ニ相決候得ば、何程之咎申付、相當可仕哉、兼而心得罷在度旨、在所役人共ゟ申越候間、此段御問合申上候、以上、

土岐山城守家來

四月八日

三橋代之進

御附札

書面取落候金子、盗取候女之儀、五十日過怠牢程ニ而、相當可致哉と存候、以上、

〔御仕置裁許帳十二〕拾物を拾取隱シ居候者

天和三年亥十一月十二日

壹人利左衞門 歳四拾壹 是は馬喰町三町目次郎兵衞店之者、此者穿鑿之儀有之、召寄手鎖を懸、家主ニ預ヶ遣、即刻同心を遣、揚屋ニ遣候處、此者之姉聟、神田佐久間町壹町目太郎衞門店作兵衞方江、此者召仕伊兵衞、幷倅源兵衞ニ金子七包、着類色々風呂敷に包爲持、今暮合時離置申ニ付、不審存、右之作兵衞夫婦、幷此者兄淺草猿屋町小揚八兵衞、五人組名主持參申候ニ付、又々此者召寄、手鎖を外シ牢舍、

右之者、大分之金子を拾隱居、其上仕形惡敷候ニ付、天和四年子五月十八日死罪、

〔御仕置裁許帳 十二〕拾物を拾取隱シ居候者

貞享元年子十月四日

壹人仁左衞門 歳三拾六 是は松平讃岐守知行所、讃州池延村之者、此者去々年戌十二月廿六日、地頭江人夫ニ參候處、同月廿八日之暮合に、芝金杉三町目ニ而、金百貳拾貳兩、紙に包捨有之候を拾取候而、去年亥七月國元江罷歸、右之金子、澤山に遣申候ニ付、所之者致吟味、地頭江申達候由、讃岐守方ゟ差越候ニ付、穿鑿之內、評定所ゟ牢舍、

右之者、同十二月二日、御法事ニ付於上野赦免、

〔科條類典 下 五〕拾ひ物取斗之事

享保十三申年七月四日入牢　小梅代地町 久右衞門

此もの儀、新御番榊原安藝守組、牛奧七大夫紛失物吟味之義に付、再三遂詮議候處、盜に携候ものにては無之候得共、去年七月、娘さん往還に而、錺壹枚拾ひ候處、番所江も不訴出、賣拂候段、不埒に付、過料三貫文申付、同七月廿六日赦免、

〔諸例類纂 六〕子 天保十一年 五月廿二日、深谷遠江守殿へ差出、同廿九日御付札、

覺

一刀中身壹本　　備前長船横山上野大掾
　長二尺三寸、但上ゲ物、鋼銀まぜ、櫻摸樣、
一脇差中身壹本　兼光
　長二尺　はゞきえんちう
一刀柄壹本
　鮫古く親粒なし、目貫赤銅色、繪馬もやう、縁赤銅無地、頭なし、黒糸卷懸、
一脇差柄壹本
　鮫古く、目貫えんちう龍摸樣、縁頭鐵銀、牡丹もやう、
一鐵鍔　二枚
　もやう少く有

右は水野日向守城下、下總國結城町、去月朔日、旅人體ニ而、年齢廿五六才位之男、丸顏、色白く、中丈中肉ニ而、木綿紺みぢん綿入を着、羅背板黒帶をメ、前書無鞘之中身二本、結切ニ包、市中指歩行、怪敷體ニ見受候ニ付、同所見廻リ爲八と申者、見咎相尋候處、申口不都合候事共御座候間、差押可申と存候內、迯去候ニ付、直ニ跡追懸候得ども、間ニ合不申、終ニ見失申候、然處右之者、逃行候途中、書面之品々取落候間、拾取置、町役人を以訴出候ニ付、掛リ役人差出相改、最寄村々、心當之儀相尋候得共、心當之者無之ニ付、同所役人江預置申候、此上右之品ども、如何取計可然義ニ御座候哉、在所表役人共より申越候ニ付、此段御問合申上候、以上、

　　　　水野日向守家來
五月廿二日　　鈴木平內

御付札

書面怪敷體ニ見受候もの、逃去候跡ニ捨有之候刀脇差等、盗物ニも可有之哉難計義ニ付、品柄幷月日等巨細認、村外之往還端抔へ建札いたし置、六ヶ月過、尋來候者無之候はゝ、建札取除、右品は、御領主役場へ差上置候儀と存候、以上、

子五月

拾物質入

一無宿庄七郎拾ひ取候品質入亦は賣拂候一件

町奉行榊原主計頭伺

〔御仕置例類集一ノ二十四〕文政七申年御渡

無宿
庄七郎

右之もの儀、武家方足輕奉公致候砌、麹町ゟ出火之節、主人上屋敷致類燒候ニ付、同所江罷越候途中、赤坂御門外御堀端ニ、大小小道具類二十八品、風呂敷ニ包取落有之候を拾取持歸り、兼々暮方ニ差支候迚、小柄、笄、目貫等六品は、代金六兩貳分貳朱ニ致質入、壹品は賣拂、目貫壹具は預ケ置、其餘は致所持罷在候始末、不屆ニ付、敲之上、江戸拂、

○

埋藏物

〔御仕置例類集一ノ三〕文化十二亥年御渡

火附盗賊改松下河内守伺

一土藏床下より見出候金子引渡方之儀評議、

一取上候品金銀共、市郎右衛門江相渡候樣可仕旨、吟味書朱書ニ申上候、

此儀吟味書、市郎右衛門居屋敷、先祖ゟ所持ニ候哉、幷場所替致候由之土藏は、誰相建候儀ニ候哉、右廉分兼候間、松下河内守江懸合、相糺候處、市郎右衛門先祖より所持之屋敷ニ而、土藏は同

人祖父市郎右衛門代ニ相建、其後親市郎右衛門、致修復候事之由挨拶申越、取留候儀は無之候得共、何れ父祖市郎右衛門之内、貯置候儀と相聞、尤取上候衣類等も、平吉取出候金子之内ニ而、同人買受候品之由、吟味書之内、平吉申口ニ有之、市郎右衛門江相渡候而も、不相當之品柄ニも無之候間、申上候通、取上候金銀幷品ものも共、同人江可渡遣、

岸本武大夫〇夫下恐脱二出字

〔類例秘錄三〕曾我豊後守懸 文政八酉年

一攝州難波村喜兵衛母いわ、金子堀出候儀ニ付伺、

書面いわ堀出候、金百三拾四兩貳分貳朱之儀、建札申付被置候處、六ヶ月相立候而も、尋來もの無之上は、右金不殘いわ江為取候樣申渡、一同證文取之、可被差出候、以上、

酉七月

〔諸例類纂六〕天保十一子年二月十九日、御用番土井大炊頭殿へさし出、四月七日、御付札濟、

私領分信州安曇郡杏村庄屋源右衛門と申者、去亥八月十六日、居宅庭内ニ而、古錢堀出候段訴出候ニ付、相糺候處、別ニ子細も無御座候間、取上置候旨、在所表家來共ゟ申越候、右古錢之儀、如何取計可申哉、別紙員數書付相添、此段奉伺候、以上、

二月十九日

松平丹波守

御付札

書面錢、堀出候者ニ為取候樣可被致候、

〔諸例類纂六〕天保十一子年八月、御勘定奉行深谷遠江守殿へ差出、廿八日御付札、

英之助領分、美作國英田郡上山村百姓、當時醫業罷在候、大道と申者、勝手之筋有之、役場へ申立之上、當分他領へ出職仕居候處、近年世柄ニ而困窮ニ迫り候ニ付、為取續村方ニ住居候節之土

藏一ヶ所、松平伊豫守樣御領分、備前國邑久郡服部村忠次郎と申者へ無據賣渡同人義買受候土藏を取崩候節、床下ニ判金三百廿兩有之候を取出候由ニ而、大道方へ其旨申來候處、同人義、所持仕候覺は無御座候得共、大道亡父熊次郎と申者代迄は領主用向も相辨、相應之身元之者ニ而、大道幼少之頃、熊次郎申居候は、御領主用向は、何時被申付候ヤも難計ニ付、心懸置候ず而は不相成抔申候を耳挾居候迄之儀ニ而、其後熊次郎急病ニ而死去仕、何等之申置も無御座、記錄等も無之、始末難相分候得共、右等を考合候得ば、亡父熊次郎所持之金子を、深く仕廻置候義ニも可有之哉と存、右之趣及返答、其後追々對談之上、右金子不殘、忠次郎ゟ大道方へ受取、雙方申分無之事濟ニ相成候間、聞屆之義、役場江願出候得ども、他領懸り合ニ而、尤大道申口之通、熊次郎代迄は、身元相應之者ニ相違も無御座候へ共、聢と仕候證據も無御座義ニ付、右金三百廿兩は、一先ヅ役場へ取上置、一件懸合之者共呼出、再應吟味仕候處、雙方村役人共立入取扱、下方は無申分相濟候ニ相違無御座候間、伊豫守樣衆へ懸合、取計方之儀及相談候處、御同人樣役場江も、忠次郎同樣屆出、吟味も有之候由之處、申口符合仕候ニ付、存寄も無之、下方雙方申立之通、內濟申聞候積、內合之挨拶も御座候、右之通熟談下濟相成候事ニ付、右金子は大道爲取候而、宜御座候哉、勿論一旦忠次郎へ賣渡候土藏之內ニ有之候金子之義ニ候へば、忠次郎へも大道ゟ相當之分金挨拶爲致候上、願之通承屆置候而可然義可有御座候哉、且亦金子之義は、文金之通ニ付、御觸御座候最寄引替所へ差出、通用之金子ニ引替候而、當人江相渡候樣可仕と奉存候、此段奉伺候、以上、

八月

土岐英之助家來

中村槌之助

書面御領分作州上山村大道ゟ、松平伊豫守領分、備前國服部村忠次郎へ賣拂候土藏買取候

後、取崩候節、床下より取出候由之金子は、大道亡父熊次郎仕廻置候趣、無相違相聞候上は、役場へ被取上置候金子、御觸之趣を以引替、不殘大道へ相渡、見出候忠次郎へ相應之挨拶金可差遣旨申渡有之、尤右之趣、伊豫守家來へも通達之上、取計有之候方と存候、

子八月

古事類苑

法律部四十五

下編上

殺傷 檢使附

囮檢使

鬭毆

古事類苑

法律部四十五

下編上

殺傷 檢使附

德川幕府ノ制、其親屬ニ於ケルヤ父母ヲ弑シタル者ハ、引廻ノ上、磔ニ處シ、舅、伯父、伯母、及ビ兄、姉ヲ殺シタル者ハ、引廻ノ上、獄門ニ　又他人ヲ殺シタル者ハ、下手人ニ行フ法ナレドモ、其主ヲ弑シタルハ、鋸挽ノ上、磔ニ處シ、其師ヲ殺シタルハ磔ニ處ス、皆倫理ヲ重ジテ、殊ニ其刑ヲ重クスルナリ、故ニ犯罪者ニシテ自殺スルモ、猶ホ其屍ヲ刑シ、其親屬モ緣坐ヲ免ルルコト能ハズ、顚狂者、醉狂者ト雖モ、此罪ヲ犯シタル時ハ、大抵死罪ニ行フヲ例トス、對手不法ニシテ、止ムコトヲ得ズ人ヲ殺シタル時、對手人ノ親族、名主等、加害者ノ罪ヲ宥メンコトヲ請フ時ハ、中追放ニ處ス、然レドモ武家ノ家僕ニ害ヲ加ヘタル時ハ、假令其親族等ノ請求アリトモ其主人ニ於テ許サヾル時ハ、其罪ヲ減等セズ、蓋シ德川氏ノ時ハ、殊ニ武士ヲ貴ビテ、其用刑ノ法、庶人ト異ナルコト往々アリ、平民ノ士卒ノ輩ニ對シテ、法外ノ無禮ヲ加フル時ハ、直チニ之ヲ斬リ棄ツルコトヲ許シ、武家ノ家僕ノ、平民ニ傷ケテ立退ク時モ、其罪ヲ問ハズシテ、其親屬ニ療治料ヲ出サシムルニ止マリシガ如キ是ナリ、

囑託シテ人ヲ殺サシムル者ハ、下手人ノ刑ニ處シ、囑託ヲ受ケテ人ヲ殺シ、或ハ殺人ノ補助ヲ爲セル者ハ、其ニ遠島ニ處ス、又過失ニテ人ヲ殺シタルハ死罪トスレドモ、其罪ノ輕キハ遠島、或ハ追放ニ處ス、又誤殺ハ下手人ニ處シ、幼者ノ犯罪ハ其罪ヲ問ハズ、

殺傷制度

墮胎ハ、孕婦藥ヲ服シテ、胎內ノ子ヲ殺スヲ云フ、是ニ自ラ爲スト、他人ニ爲サシムルトノ別アリ、醫師ノ之ヲ行フ時ハ、其罪ノ輕重ニ由リテ、閉門或ハ追放ニ處ス、孕婦ノ子ヲ產ムニ臨ミ、直チニ之ヲ縊リ殺スアリ、是ニモ自ラ爲スト、產婆等ニ囑シテ爲サシムルトノ二アリ、棄兒ハ、幼兒ヲ路頭ニ遺棄スルナリ、是モ亦其實子ヲ棄ツルト、他人ノ兒ヲ養ヒテ後ニ之ヲ棄ツルトノ二アリ、他人ノ兒ヲ棄ツルハ、初メ金錢ヲ受ケテ其兒ヲ養育セン事ヲ約セシモノナレバ、其罪最モ重キヲ以テ、引廻ノ上、獄門ニ處ス、其他老者、病者ヲ遺棄スルモノモ、皆極刑ニ處セリ、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

従前々之例
一人を殺候もの　下手人

寛保二年極
一人殺之手引いたし候もの　遠島

但殺候當人致次落不出におゐてハ下手人

寛保二年極
一自分之惡事可顯を厭ひ、其人を殺害可致として疵付、或は證據にしたる人に遺恨を含、手疵爲負候もの、　死罪

延享元年極追加
但切殺候はゞ獄門

従前々之例
一人殺に手傳いたし候もの　遠島

寛保二年極追加
但兼て人を殺べくと申合候義も無之、同輩之もの鬪諍難見捨助力いたし候もの、中追放、

同
一同手傳ハ不致候得共、荷擔いたし候もの、　中追放

寛保元年極
一口論之上、人に疵付、片輪にいたし候者、　中追放

但渡世之難成程之片輪にいたし候ハゞ、遠島、

延享三年極追加
一人に疵付候もの、療治代疵之不依多少、町人百姓は、　銀壹枚

誤殺

寛保三年極
一當座之口論之上、人殺之荷擔いたし候もの、　重過料

〔御定書百箇條〕疵被附候者、外之病にて相果、疵付候者之事、

元文三年極
一手疵負候もの、元ゟ及死に候疵にて無之處、平愈之內、餘病差發、死候はゞ、彌遂吟味、餘病にて死
候に紛無之においては、相手下手人に不及事、

〔官中秘策二十八〕武家之かゝり

武家方家來、町人を切害立退候者は、同家中江尋申付、疵平愈候得バ、親類江療治代申付ル、

〔御定書例書〕人ニ疵付候武家之家來御仕置之事

天明三卯年六月
一人ニ疵付候もの、武家之家來ニ候はゞ、　江戶拂

〔德川禁令考後聚三十 行刑條例〕天明三卯年六月 疵付ケ條之內、武家之家來御仕置名目可認入事、
大和守殿御渡
御定書、人ニ疵付候もの御仕置ケ條ニ、武家之家來之名目無之、酒狂之ケ條にハ、武家之名目有之、
以來共見合紛敷、不審も起リ候付、疵付ケ條之內も、武家之家來江戶拂之名目認入置候樣可被致
候、

○按ズルニ、此他ノ殺傷ニ關スル制度ハ、各其條下ニ分チ載セタリ、

〔御仕置裁許帳四〕女房を怪我にて切殺者之類

万治三年子六月廿七日
壹人太兵衞　是ハ湯島四丁目之者、夜前盜人忍入候を、女房目を覺シ、太兵衞を起シ候て、爲知申
候ニ付、起合候へば、盜人ハ表江逃申候、然處ニ、裏之戶口ニ女房罷在候を、盜人かと存、切殺候由
申ニ付、穿鑿之內籠舍、
右之者、同子十月晦日死罪、

〔評議書〕寛政元年閏六月七日

伊豆守殿江御直（紀伊守・丹後守・甲斐守）立會下リ物相添上ル

同七月八日、御同人一座評議之通相濟候旨被仰聞候、

評定所一座

當四月廿六日、御渡被成候、大坂町奉行相伺候、人違ニ而池江突はめ候死骸不訴出致火葬候一件、御仕置之儀、評議仕候趣、左之通御座候、

牧野備後守殿領分河州石川郡山田村百姓　源助

右之者儀、ぬいと密通致候後、其以前密通之男太右衛門と、又々出會候趣ハ、取留候儀ニも無之處、深相疑、九月十日夜ぬいを送參候ものは、太右衛門と相心得候共、推量迄之儀ニ付、得と面體をも見屆候上、譯立之いたし方可有之處無其儀、太右衛門と存追駈參、言葉をも不懸、池江突はめ逃歸、既右之ものハ、太右衛門ニハ無之、源七ニ而、同人儀、其儘溺死いたし候段、不屆至極ニ付、下手人可申付哉之段相伺申候、

此儀ぬいと密通致居候處、ぬい儀、太右衛門とも密通致居候儀と深く相疑、ぬいを送參候ものハ、太右衛門と相心得、面體も不見屆、源七を池江突はめ逃歸、既右之ものハ、太右衛門ニハ無之、源七ニ候處、同親町兵衛、同人親類與右衛門儀、全人違ニ而、怪我死同前之儀ニ付、源助ニ被殺候事とハ不存候間、御仕置宥恕之儀相願候旨、書付差出候之處、不及沙汰段申渡、書付差返候旨、吟味書朱書ニ申上候、然ル處源七を太右衛門と相心得、池江突はめ候ハ、人違ニ候得共、ぬいと太右衛門密通致居候儀と深く相疑、ぬいを送參候ものハ、太右衛門と相心得、池江突はめ候ハ、怪我ニハ無之、太右衛門を可殺心底にて、源七を突はめ候ニ相違無御座候間、人を殺候もの、下手人之御定ニ而、伺之通下手人可申付ものニ御座候處、病死仕候旨追而申上候間、其旨可存段、一

過失殺

件之者共江可申渡旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、（中略）

右評議仕候趣、書面之通御座候、

〔公裁錄三〕卒爾人

一榊原虎之助領分、越後國大友村市之丞女房幷忰次郎吉、九月十二日之夜、溝口信濃守領分、同國上新保村通り候處、同村仁右衛門理不盡ニ鎗ニ而突、其上切殺、稲盗人之由申成候旨訴、仁右衛門は、苅置候稲取候ニ付討留候旨雖申之、九月十二日は月夜ニ而在之所、女童之者見分もなく鎗ニ而突、剩切殺候段、卒爾之仕形ニ付、仁右衛門牢舍申付置候處、前方苅置候稲之邊ニ而たゝずみ被殺候事、無是非候、依之各評議之上、御老中江相伺、寅五月上野就御法事、仁右衛門御赦免、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

一渡船乘沈、溺死有之バ、其船之水主、（享保元年極）　遠島

一車を引掛人を殺候時、殺候方を引候もの、（同十三年極）　死罪

但人に不當方を引候者ハ遠島、車之荷主重過料、車引之家主過料、（享保十三年 寛保三年極）

一同怪我等爲致候もの（享保七年極）　遠島

但人に不當方を引候者ハ中追放、車之荷主重過料、車引之家主ハ過料、（寛保元年極）

一牛馬を牽懸人を殺候もの（寛保元年極）　死罪

一同怪我爲致候もの（同）　中追放

〔御定書百箇條〕怪我にて相果候もの相手御仕置之事

一弓鐵砲を放し、あやまちにて人を殺候もの、（寛保元年極）（吟味之上あやまちに無紛、幷怪我人之親類存念相尋候上、）　遠島

但相果候もの存命之內、相手御仕置御免之願於申置ては、一等輕く可申付事、

延享二年極

一定たる矢場鐵砲場にて外ゟ不意に人參り掛、若矢玉に當り、縱令其人死候とも咎不及、三十日
遠慮可申付事、

同

一怪我にて風と疵付、其疵にて相手死候もの、　吟味之上あやまち無紛、并怪我人之親類存念相尋候上、中追放

但吟味之上、不念之義於有之は、一等重く可申付事、

〔刑名副律〕山稼に出候節、脊負候松木拔落、中腹に居候もの江當り相果候者相手之事、

寶曆十一巳年五月御仕置之例　但州生野銀山内新町勘兵衛下人　惣兵衛

此惣兵衛儀、松木を脊負峯下通り候節蹶倒、負繩切松木拔落候處、山之中腹薪取罷在候白口町仁兵衛女房さん江、右松木不慮にあたり、外に不念之筋ハ不相聞候得共、さん相果候上ハ、惣兵衛儀所拂可申付哉と相伺、

御差圖

右之もの儀、松木を脊負峯を通り候節蹶倒、負繩切れ松木拔落、中腹に罷在候仁兵衛女房さん江當相果候得共、山之中腹にさん可罷在とハ曾而不存儀、其上蹶倒負繩切、殊に峯ゟさん相果候處までは二町程有之、一向に不念之筋無之ニ付、無構旨可申段、被仰渡候事、

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永七戌五月佐渡守殿御下知　桑原能登守掛

一上州生利村馬之助變死一件之内

遠藤兵右衛門御代官所上州甘樂郡黑田村年寄又左衛門下男　喜助

此喜助儀、四季打鐵砲ニ而鹿を打候、赤物玉馬之助ニ中リ相果候處、馬之助存命之内、相手御仕置御免之儀申置候之間、御定之通中追放、

〔公裁秘錄〕鐵炮あだ落ニ而人殺之事

後藤庄左衛門御代官所武州秩父郡上吉田村百姓　万右衛門

右猪狩ニ罷出、畑へ猪追懸候處、万右衛門持候鐵炮あだ落、近所之岩ニあたり、玉それ候而、三之丞と申者ニ中り、其疵ニ而三之丞相果候由ニ候得ば、万右衛門可レ爲二解死人一候得ども、三之丞存命之内、親族吟味之所、常々意趣等も無レ之、不慮之怪我ニ候間、相果候共、解死人之御仕置御免被二成下一候樣、三之丞親類兄弟迄も同樣之願ニ候、三之丞親兄弟右之通相願候條、御構無レ之候得共、鐵炮を打ニ出候へば、筒先心を付、念入可レ取扱候義極たる事ニ候處、畢竟麁末ゟあだ落致候、依レ之追放申付候、以上、

六月

〔公裁秘錄〕子供怪我ニ而相果、解死人ニ不レ及事、

伊奈半左衛門御代官所武州東葛西領鎌田村　半助十三歲

右半助義、同村百姓藤右衛門子十三歲ニ成候與助と申者と狂ひ遊び候上ニ而、いさかいなどにても無レ之、半助持候小刀ニ與助あたり、怪我ニ而疵付相果候、親藤右衛門も解死人御免之義願出候、依レ之不レ及二解死人一、親市郎右衛門方ニ而百日押込候樣伺之上申渡候事、

〔評議書〕天明八年十月七日

備後守殿江（左近將監 [illegible]衛門 伊[illegible]守）立會御直ニ上ル

同十月廿六日

御同人（紀伊守 右[illegible]門 前[illegible]守）一座評議之通相濟候之旨、一座江御書付出ル、

根岸肥前守相伺候

武州横根村傳右衛門下女るい水死之儀ニ付、評議仕候趣申上候書付、　評定所一座

去月十六日御渡被成候、武州横根村傳右衛門下女るい水死之儀ニ付、同國浮谷村組頭善右衛門悴清右衛門儀傳右衛門下女るいと密通致居候上、横根沼ニ而乘居候船江罷越、密會申懸ヶ戲レ候故、兩人共入水之上、怪我とハ乍申、るい水死致候始末不屆ニ付、中追放可被仰付哉之段相伺候處、御仕置附之趣相當可致哉、似寄之例も可有之哉、得と評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀吟味之趣ニ而は、るい人違等ニ而入水可爲致と存仕成候儀と者不相聞、戲レ候ヨリ事發り、るい水死致候者、與風爲致怪我候ヨリハ品不宜候得共、其身も致入水、女之儀故水中不任心溺死致候者、全怪我ニ而刃物等ニ而與風疵付、其疵ニ而相果候も同樣ニ可有之哉、延享元子年、能勢肥後守懸り伺之上御仕置申付候、元數奇屋町清三郎店茂右衛門寄子万右衛門儀、本芝入横町半兵衛寄子傳八知ル人ニも無之、同八月三日夜立場ニ而口論等致候儀も無之、繩を持、闇ミ江欠參候節、傳八石突ニ當、怪我致相果候儀、吟味之上相違無之、其上傳八人主勘兵衛幷請人半兵衛入口長右衛門其外組合之者共、傳八怪我致相果候段無相違申分無之旨、一同度々出牢之儀相願候間、中追放申付候例ニ見合、尤るい親七兵衛親類等吟味下相願候上者、旁伺之通中追放可申付旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、

（御仕置例類集三ノ八）寛政十午年九月

御勘定奉行　根岸肥前守掛

安藤對馬守殿御差圖

一和州南佐味村留吉致入水相果候一件

植村駿河守御預所和州葛上郡南佐味村　百姓　太七

右之もの儀、下市村江罷越候途中にて、弟留吉儀、我儘不法申候付、叱候處、摑付候故、突放候處、留吉

儀不踏留、吉野川江轉落候間、忠助倶々可助所存にて、立廻候得共、兩人共水心無之、其上人離之場所ニ而、助力可乞手段も無之、致當惑罷在、且留吉相果候はゞ、右之始末有體可訴出處、無其儀、母妙智其外之もの江對し申譯無之候迚、忠助と申合、留吉行衛不相知抔、一旦相違之儀を申立候段、不埒ニ付、三十日手鎖可申付處、數日入牢ニ付、御咎之不及沙汰、

同村百姓 忠助

右之もの儀、留吉ハ我儘不法之儀申之、兄太七江搦付候故、同人突放候節、留吉儀不踏留、吉野川江轉落候間、太七倶々可相助と立廻罷在、殊留吉相果候はゞ、其段有體可訴出處、無其儀、太七任申、留吉行衛不相知抔、申口を合、一旦相違之儀をも申立候段、不埒ニ付、急度叱り置可申處、數日入牢ニ付、御咎之不及沙汰、

右御咎附

右御定書ニ、弟妹甥姪を殺候もの、短慮ニ而不斗殺候はゞ遠島と有之候得共、右御定ハ弟之方非分無之、留吉儀ハ、我儘之不法を申候ニ付、叱置候處、搦付候故、突放候節、川口江轉落相果候儀ニ而、可殺心底ニ而、右始末及び候儀ニも無之、留吉儀不法我儘之儀を申、兄江搦付候始末ハ、同道いたし候忠助も見届罷在、母幷親類村役人共も、留吉儀平日不行屆生質ニ而、親幷兄弟共申聞候儀不相用、我儘もの之段、一同申之候間、留吉相果候儀ニ付、不埒ハ有御座間敷、右始末有體不申立段之不埒ニ有之、去ル亥年伺之上申渡候、武州上摺田村政右衛門儀、女房すめを殺候段ハ、すめ儀親彌三郎江仕向惡政右衛門江對候而も、及惡口雜言、不埒之段、一件申口符合致し候間、右ニ付、不埒之筋ハ無之候得共、すめ死體を、上長房村地內字辻河原江埋置、すめ家出致し、行衛不相知旨、五人組之もの江も申達、一旦申僞り候段不埒ニ付、五十日手鎖申付候例ニ見合セ候處、此ものハ死骸取隱し候儀も無之、一體之趣意輕御座候間、三十日手鎖、忠助儀ハ太七任申口を合候儀、倘又品輕御

毒殺

座候間急度叱リ置可レ申處、兩人共六十日已上入牢之ものニ付、御咎之不レ及二沙汰一、

〔公裁錄二〕車ニ而怪我之事

牛車、大八車、地車、幷荷附之馬牽通リ候儀、往來之障リ不レ罷レ成樣ニ、前々も度々相觸候所、頃日猥ニ成、馬車を引つゞけ、剩馬子牛遣ひも口をはなし追ひ、往來之人をもよけ不レ申、我儘成候體ニ相聞、不屆ニ候、然ル所頃日も神田多町清左衞門召仕之車引共、幼年之者怪我致させ候、畢竟愼無レ之故ニ候、怪我人死し候ハヾ、死罪ニ可レ被レ行候得共、死不レ申候故、右車引六人、不レ殘遠島ニ被レ行、主人ハ過料出させ候、自今車引馬子共、往來我儘仕、怪我人等も於レ有レ之ハ、其科之依二輕重一ニ、急度可レ行二曲事一候、此段町中江可レ被二相觸一候、以上、

　寅八月 ○年號不レ詳

〔御定書百箇條〕寛保二年極 人殺幷疵付御仕置之事

一毒飼致人を殺候もの　　獄門

　但毒飼いたし候へ共、不レ死においては、遠島、

〔板倉政要二〕諸作法掟

一毒害之事、從二往古一禁遏候條、當時者猶以准二先例一畢、毒味と云、賣人と云、買人共、以令二露顯一、別而毒害無レ紛段證據分明者、任二先規一可レ處二嚴科一、然者令レ喰禁或雖レ爲二連々好物一、令二飽食一歟、又雖レ爲二尋常之喰物一、於レ于レ時腹中不二相應一、如二毒害一令二頓死一儀可レ有レ之、全隨二證據一實否之裁判可レ有レ之歟、若毒害之由風聞計ニ而於二證據なきにハ一、非二沙汰之限一候、無二證據一事申懸、其身不レ致二死去一バ、申懸方可レ爲二曲事一事、

〔御仕置裁許帳一〕主人に毒を飼致巧者之類

元祿七年戌五月十九日

壹人女ふき歲十三　是ハ柳澤出羽守家來永井茂左衞門下女此者御僉議之儀有レ之、出羽守家來

吉村五郎左衛門召連來ルニ付揚屋入、

右之者、毒飼之所存ニ而、主人之食物に鼠糞を入給させ候段、僉議之上白狀申付ニ、御老中江相伺

戌閏五月廿二日牢屋ニ而死罪、於品川獄門、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

元文五年極
一差圖いたし人を爲殺候もの　下手人

一差圖を請、人を殺候もの、　遠島

〔御仕置裁許帳　五〕被賴て人を殺者之類、同致打擲殺者、幷賴者之類、

證文之事

一私儀南大工町壹丁目野田宗伴ニ被賴、宗伴弟子井村宗順と申者を、當月二日之夜、船ニ而殺申候、此段不屆ニ付、私儀切腹をも可被仰付候得共、彼宗順不屆者之段被聞召分候故、命御助被遊、江戸追放被仰付、難有奉存候、尤江戸近邊ニ罷在間敷候、若以來御當地江立歸候はゞ、私儀ハ不及申、請負人迄如何樣之曲事ニも可被仰付候、爲後日仍如件、

延寶三年卯十月十六日　芝新錢座市右衛門店
浪人
山崎新六

證文之事

一私弟子井村宗順と申者、不屆者ニ御座候故、當月二日之夜、牢人小屋甚兵衛、山崎新六と申者兩人を賴、内々ニ而切殺申候、此段不屆ニ被思召候ニ付、私儀切腹をも可被仰付候得共、宗順不屆者之段被聞召分候故、命御助被遊、江戸追放被仰付、難有奉存候、尤江戸近邊ニ罷在間敷候、若以來御當地江立歸候はゞ、私儀ハ不及申、請負人迄、如何樣之曲事ニも可被仰付候、爲後日仍如件、

延寶三年卯十月十六日　南大工町壹丁目

野田宗伴

〔御仕置裁許帳 五〕被頼て人を殺者之類、同致打擲殺者、幷頼者之類、

元祿三年午二月廿三日

壹人作兵衛　是ハ相州圓藏村之非人、十一年以前に、同國萩曾根村に罷在候非人佐次兵衛と、此者兩人ニ而、往還之山伏を致打擲候而打殺候由、籠内に罷在候非人ちよつほり五兵衛訴候ニ付、當月九日五兵衛を相州江遣候處、兩人之者共を捕江今日召連來ル付、令僉議候處、此者申候ハ、佐次兵衛方江用事有之參候處、子細ハ不存、盜人之由にて、山伏體之者を佐次兵衛致打擲候、手傳くれ候樣にと頼申候ニ付、同意に打擲仕候、山伏相果候ニ付、兩人ニ而死骸を持參リ川江捨候由申候、樣子不存候ハヽ、捕江召連可申出處、致打擲打殺候段不屆成ル故籠舍、

右之者、申三月廿二日死罪、

〔御仕置裁許帳 四〕人を頼、女房を切殺者、幷同下人を切付る者、

元祿七年戌十二月廿七日

壹人藤沼又八　是ハ堀田權右衛門組同心、當月廿二日、伊丹左兵衛知行所代々木村ニ而、女之手負有之由ニ而樣子相尋候處、御納戸佐野喜左衛門若黨中村万右衛門女房之由ニ而、左京方ゟ御支配方江被相達、土屋相模守殿御斷ニ付、右之万右衛門召寄、遂僉議候處、前方此者肝煎ニ而、彼女を万右衛門女房に仕置候、方々奉公爲致候得共、奉公仕屆不申候ニ付、堀田權右衛門組屋敷木戸番仁兵衛を頼、笹塚と申所に預ケ置候得共、居付不申、其上彼地ニ而盜など仕候由仁兵衛承候由爲申聞候付、切殺可申と存、代々木村江參切付候由申候得共、申口不分明候付、右万右衛門仁兵衛牢舍申付、今日此者召出し遂僉議候處、前方肝煎候由緒ニ而、右女房ふちを切殺くれ候樣ニ万右衛門度々頼候得共、承引不仕候處に、達而万右衛門相頼、其上仁兵衛も左樣に仕

候得と申候間、仁兵衛に女差添代々木村江遣し、私も跡ゟ付參り切付候處、倒候付死候と存罷歸候、最前右之譯相知候共、此者切候段ハ隱、万右衛門切候と可申由、万右衛門と申合候而僞申上候、万右衛門ハ其身切候と可申候得共、右之通無紛候由白状申候、前方肝煎候はゞ、右之女不屆有之候共、此者仕樣も可有之候處ニ、右之仕形重々不屆ニ付揚り屋ニ入、

右之万右衛門女房を切候處、手疵養生不相叶、相果候付、御老中江相窺、爲解死人亥二月十二日死罪、

〔刑名副律〕火を附候者を不訴出、内證ニ而爲殺候もの御仕置之事、

延享元子年六月御仕置之例　　下總國新石下村　孫左衛門

此孫左衛門、村内に居候道心者直心火を附、度々盜いたし候惡黨者ニ相決候得共、村方にて捕候節、孫左衛門名主乍勤、地頭江不申立、川江打込殺候樣致差圖候段、不行屆仕形ニ御座候間、所拂可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

一 從前々之例 大勢にて人を打殺候時、初に打かけ候もの、　下手人

〔諸例類纂五〕天保二辛卯年八月九日、大目付石谷備後守殿江差出、同十二日御附札、〇中略

人を殺し候者ハ、必死刑ニ被行候義ハ、天下之御通法ニ而可有御座と相心得申候、然處或ハ兩人ニ而人を殺し、或ハ三人ニ而人を殺し、其次第前後甲乙少しも無之候はゞ兩人ニ而も三人ニ而も同樣死罪ニ可被行筋之義ニ御座候哉、

答

寶暦二申年九月　　奧州佛濱村百姓長作養子

甚兵衛

百姓　利三郎

此者共義、甚兵衛養子長作かたへ、下櫻井村理左衛門度々參り博弈打候樣長作へ勸メ、甚不屆ニ存、重而參る間敷旨申候より及口論候處、理左衛門義中直リ酒給可申旨申出、其節同村利三郎參り合候間、三人連立同樣酒屋江罷越、酒を給、三人共醉候而、同村濱邊罷越候節も、理左衛門へ最初之義を申出抓合、甚兵衛、利三郎、石を理左衛門へ打付候處、中り所あしく、理左衛門相果申候間、兩人ニ而死骸を埋メ、石を投付候砌、闇夜之義故、いづれの石中り相果候哉之旨、兩人共申候之ニ付、兩人とも遠島、

殺傷出於不得已

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從前々之例

一相手ゟ不法之儀を仕掛、無是非及刃傷人を殺候もの、　遠島

〔御定書百箇條〕相手理不盡之仕方にて、下手人に不成御仕置之事、

享保二十年極追加

一相手理不盡之仕方にて、不得止事於切殺候は、相手方親類名主等、被殺候もの平日不法ものにて、中分無之、下手人御免申出無紛候はゞ　中追放

但武士方奉公人ハ、被切殺候もの之其主人ゟ願無之候ハヾ、縦令親類等願出候共、差免申間敷候、

〔刑名副律〕非人法外之慮外致し打殺候者之事

延享元子年十月御仕置之例　上州青梨子村百姓　十左衛門

此十左衛門方江同國金古村非人長助、長八、物貰に參候處、施物不足之由申ねだり候上、十手を以女房を打擲いたし、十左衛門江も打掛候處、有合候棒ニ而打拂候處、長助頭に當相果候、打殺候心底に者無之候得共、當リ所惡敷卽死仕候と存候由申之、長助儀不屆之いたし方ニ付打殺候間、十左衛門御構御座有間敷と相伺、其通被仰渡候事、

〔刑名副律〕師匠に手疵爲負候ものを敲候處、其後相果候ニ付、出家御仕置之事、

寛延二巳年三月御仕置之例　　下總國古河横村本成寺弟子　惠量

此惠量儀、師匠本成寺江本多中務大輔足輕瀨賀兵助罷越候處、酒狂之上本成寺江疵付、押臥罷在候ニ付、可引分と存、惠量半鐘之撞木ニ而敲候處、其後役人共罷越召連罷歸候後、兵助相果候、然ル處本成寺疵被付候故、一命を懸可引分と敲候處、無餘儀事ニ候得共、兵助相果候ニ付、所拂可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔刑名副律〕主人之悴江、他之もの脇差を以及理不盡候故、無據鍬にて拔身を打落し候迚、其者江疵付殺候者之事、

寶曆八寅年三月御仕置之例　　中之鄕町家主吉兵衛召仕　源六

此源六儀、主人吉兵衛悴佐助一所に瓦小屋に細工いたし居候節、佐助儀手拭をかぶり罷在候處、住居不存傳八罷越、淺黄手拭氣にくはぬ由申、帶參り候脇差拔、理不盡に佐助をむね打致し候を、此もの見候而、佐助被切付候と存驚入、前後之無辨、側に有之候鍬ニ而拔身を打落候迚、傳八頭江鍬當り疵付、右疵にて相果、其上傳八儀、伯父深川扇橋町家主十兵衛、久離可致と存候程之不行跡ものニ而、理不盡なる儀いたし、疵受相果候儀に有之候間、此もの江對し申分無之旨十兵衛申之、右之通主人之ためにいたし候儀に候間、無據旨可申渡哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔的例黃紙之寫〕中追放

安永二巳十二月右近將監殿御下知　　松平對馬守懸

一下總國萩原村百姓久兵衛悴與市儀、同村伊右衛門悴傳七を及殺害候一件之內、

宮村孫左衛門御代官所下總國印旛郡萩原村百姓久兵衛悴　與市

此與市儀、傳七ニ被連中根村野道を通り候節、同人金子無心申懸ヶ斷をも不聞入、理不盡ニ懷中江手を入候間、振放シ候處、打懸り候故、逃候を追欠ヶ打擲いたし候迚、脇差を拔切拂手爲負、右疵

ニ而傳七相果候始末ニ及候段、不屆ニ付中追放、

御仕置附

右御定書ニ

一人を殺候もの　　下手人

一相手不法之儀を仕懸ケ、無ニ是非ニ及ニ刃傷ニ、人を殺候もの、　　遠島

一相手理不盡之仕方に而、不ㇾ得ㇾ止切事殺候においては、　　相手方親類村役人等、被ㇾ殺候もの平日不法ものに而申分無ㇾ之下手人御免申出無ㇾ紛候はゞ、　中追放

右之通有ㇾ之、一通りニ而ハ人殺之御定ニ而下手人相當ニ御座候得共、申口之趣無ニ相違ニ相聞、全く傳七儀無體ニ金子借懸ケ不得心ニ候迚、及ニ理不盡ニ致方無ㇾ之故、脇差を拔切拂候處疵爲ㇾ負、右疵ニ而傳七相果候儀ニ候得者、相手ゟ不法之儀をいたし懸候ものニ付、前書二ケ條目ニ認候御定ニ而遠島ニ而も可ㇾ有ニ御座ニ哉、然ル處吟味書ニ申上候通、被ㇾ殺候者之親類ども、此者申口之趣を承り候而者、申分無ㇾ之候間、助命之儀、村役人一同ニ而相願申候、御定書ニ、酒狂ニ而人を殺候もの御仕置之但書ニ、被ㇾ殺候もの之主人、并親類等下手人御免願申出候とも取上申間敷と有ㇾ之候間、助命願之儀容易ニ難ニ承屆ニ筋ニ御座候得共、前書三ケ條目ニ認候、相手理不盡之御定も有ㇾ之、尤平日傳七不法ものニハ無ㇾ之趣ニ候得共、此もの申口ニ而ハ、其節之致方理不盡ニ及候故之儀と相聞へ、見留候ものハ無ㇾ之候得共、吟味之上無ニ相違ニ相聞候、殊ニ別紙兩例も御座候間、猶亦相考候得バ、此ものハ早速右始末不ニ申立ニ段ハ、例之方ゟ趣意不ㇾ宜候間、前書相手理不盡之御定ニ見合、中追放と御仕置附仕候、

〔御定書百箇條〕人殺并疵付御仕置之事

從ニ前々ニ之例
一主殺　　二日晒一日引廻　鋸挽之上、磔、

同
一主人に爲ニ手負ニ候もの　　晒之上磔

一寛保元年極同切かゝり打かゝり候もの、　死罪
一同古主を殺候もの　晒之上磔
一同同爲手負候もの　引廻之上磔
一同同切かゝり打かゝり候もの、　死罪
一寛保元年極主人之親類を殺候もの　引廻之上獄門
一從前々之例同手爲負候もの　引廻之上死罪
一寛保元年極同切かゝり打かゝり候者、　兼て巧事候はゞ死罪
　但當座之義に候はゞ遠島、品により重追放、

〔御仕置伺下知留〕寶暦四戌年六月廿二日
　主人之妻悴江爲手負候もの御仕置之事
　相模守殿御渡御書取　　三奉行江
向後主人之妻、或ハ主人之悴江爲手負候もの有之候はゞ、主人江爲手負候もの、御仕置之御定同樣、晒之上、磔可被申付候、
右之趣、御定書江も書入候樣可被致候、
　六月

〔天明集成絲綸錄四十八〕天明五巳年九月
　評定所一座江
主人江爲手負候もの、親江爲手負、幷打擲いたし候者相果候節、主親之疵平愈いたし候とも、以來鹽詰之上、死體御仕置可被申付候、

〔公裁錄三〕主人に手負

貞享二丑年十二月、阿部豐後守御出座、式日跡、

一神田旅籠町檜物屋甚五兵衞弟子に召抱候下人傳助義、甚五兵衞寢所へ忍入、甚五兵衞に數ヶ所手負せ候、甚五兵衞雖不相果、主人を切候へ者、主殺依同斷、傳助儀、於日本橋三日さらし、磔に懸り、傳助母并兄傳兵衞、姉壹人從弟壹人、此四人者不及縣、於獄屋令斬罪、是者獄門に懸ル、傳助伯父利右衞門儀者、令牢舍ニ付、不及梟首、

〔御仕置裁許帳 一〕主人弑者并從類

貞享三年寅十一月九日

壹人主計　是ハ江州三井寺圓滿院寺中善見坊居候小姓、此者儀當九月十七日ニ善見坊を切殺し立退候、其節甚兵衞、主計と一所に立退候處、武州蕨町ニ而捕來ル付、穿鑿之內牢舍、

右之者、日本橋ニ而三日晒、鋸挽、卯八月十三日、於品川磔、

一木戶自休　是ハ右主計父、西陣一色町之者、〇中略其者之親成故、於在所獄門、

一母　是ハ右主計母、父木戶自休方を致離別、其以後兩所江緣付仕候、依之右之罪科赦免、

一繼母　是ハ右主計親、自休召仕を妻に仕置候故、繼母とハ依難申、御構無之、

一妹三人、りん、とく、あい、　是ハ右自休娘、主計妹、

右三人之者、他江養子に參候故、御構無之、

一叔父木戶與兵衞入道シテ玄賀ト改、是ハ右主計父方之叔父、江州大津高見了德町之者、

右之者於在所獄門

一從弟長藏　是は右玄賀悴、主計父方之從弟、

右之者於在所獄門

一母方伯父本福寺　是ハ主計母方之伯父、一向宗本願寺之末寺、

右之者、主計母を差免候付、御構無之、

一從弟式部　是ハ右本福寺悴、主計母方之從弟、

右之者御構無之

右之外、主計從弟女、名ハ不知、三人在之候處、御構無之、

〔公裁錄三〕主殺

一貞享三寅三井寺圓滿院寺中善見坊召仕之嶋崎主計、寅九月廿七日、善見坊臥居候處を、主計切殺、〇中略

右主殺親類罪科之義、此一件ニ付御老中江相伺候處、父母、兄弟、甥、父方之伯父、從弟迄、可及罪科、姉妹、父方之伯母、母方之叔父叔母等、女之從弟之儀者、罪科ニおこなはざる旨被仰渡候、

〔公裁錄三〕主殺

一元祿二巳四月十三日、長崎外浦町森山庄右衛門召仕ふり、主人庄右衛門を切殺、其身即時に致自害相果候、〇中略罪科輕重、一々令僉議候樣、御老中就被仰付、各僉議之上、ふり義、主人殺候仍重科、死骸於其所磔に掛て、種替之兄草袖現順義、日頃通路仕に付遠島、母幷ふり娘、其外親類も、主殺御大法之可為御仕置所、兼而不通仕罷在候ニ付、御構無御座候、〇下略

〔公裁錄三〕主殺

一御廊下番森權之丞若黨、門屋源七義、戌四月十四日、主人權之丞妻子を切殺し、源七も致自害相果申候、主殺之御仕置たるに付、源七死骸、於淺草沙汰所磔に懸ル、〇下略

〔御仕置裁許帳一〕主人弑者幷從類

元祿六年酉三月廿七日

三人（源四郎、武左衛門、治吉）　是は皆川左京知行所常陸國小貫村之百姓、右之者御僉議之儀有之、宿次之御證文を以千壽町之百姓名主四郎右衛門年寄善右衛門召連來ル付、揚り屋ニ入、源四郎主人六右

衞門を切殺候依科同酉八月廿五日於淺草磔武左衞門は右源四郎主人殺候節致手傳候依科右同日同所ニ而獄門淸吉者右源四郎主人を殺候節其場江立合金子貰候依科右同日同所ニ而獄門

〔窻の須佐美追加上〕京木屋町の商家病死して九歲の子有しを老夫乳母二人して養育し居けるが近所の寺詣んとて或人とともに出ける際に幼少より抱おける長藏と云ふ奴十八歲かねて不行跡なりしがこの兒子を菜刀にて切殺し金を盜取出奔せり町奉行よりとらへて禁獄し刑に行るべきに及てかれが父母兄弟法令の如く斷らるべくと議定して篠山侍從（京都所司代〇松平信庸）に告られしに侍從是を聞て其者は論なし父母兄弟の事はいかゞ有んと有し故町奉行も今一應論談して可申とて退つゝ日をへて又此事を申出されしにも猶も思慮候へとて程へぬやゝ有て又うかゞはれしに朝臣の云下部のならひ緒券有べし右は取よせて見られしにやと有しかば幼少よりよびおき候故券なく候と申されけるに商家などは緒券を以奴僕のゑるしとする事なれば券なくては一定の弑殺にも定がたし其奴は法の如くの刑にして族類の刑には及まじくと有し故一人刑せられてやみけり

〔御仕置例類集一ノ四〕文政九戌年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一重科人死骸備具不致節之取計方評議

當二月廿四日致評議可申上旨被仰聞御渡被成候石川主水正相伺候戶田采女正御預所濃州不破郡表佐村醫師玄敬下男早助儀致大酒深更ニ相成罷歸候間右玄敬悴玄洲嚴敷叱り候處却而口答等致し刃物を以頭又ハ額江疵爲負逃去候ニ付取計方之儀采女正御預所役人相伺候間人相書御觸之儀申上候積取調中右表佐村地內藪之中ニ人骨幷衣類體之品有之餘程日柄も相立

幷山寄人家隔候場所故、獸類食候哉、皮肉とも無之、骨ハ嚙碎、所々引散置、齒幷頭骨ハ有之候得共、誰死骸共難相分候處、木綿綿入、單物、襦袢、帶、股引等食裂有之、右品々ハ、早助衣類ニ候間、玄敬幷早助身寄之もの共、倶々見屆候處、早助所持之衣類ニ相違なく、尤齒並之體も、同人人相之趣ニ致符合居、殊ニ骨有之候脇松木ニ、帶之端結付候儘引切有之、全早助身分差詰、縊死いたし候儀と相見候旨申立、御預所役人見分之趣ニも、衣類等前書人相書之趣ニ致符合、右申立之通無相違相聞、玄敬玄洲儀も、早助縊死いたし候上ハ、此上吟味可相願心底決而無之段、申立候由ヲ以、取計方之儀、猶釆女正御預所役人相伺、右ハ主人之忰江疵付候者故、死骸備具致し居候はゞ、鹽詰之上、御仕置可相伺者ニ候處、骨迄も所々江紛亂致候程ニ付、死骸御仕置ニハ難相成候得共、逆罪之もの、鹽詰之死骸、御仕置被仰付候ハ、畢竟以後其罪科を存、倫理を不背ため之御趣意ニ可有之、尤着類之外ニ、聢と早助死體と之見居ハ無之事故、万一同人儀、其身之罪科を可遁と縊死之獸類ニ被食候を見受、巧之所業いたし成候儀有之間敷共難申哉ニ候得共、右體之懸念を以、人相書御觸出候筋ニも有之間敷、然上ハ、捨札ニ不及樣ニ而ハ、懲惡之御仕置筋相弛ミ候姿ニ罷成、如何ニ付、右御趣意相立候樣、骨ハ取捨申付、科書捨札相建候樣可然哉之段相伺申候、

此儀先例相糺候處、相見不申、依之勘辨評議仕候處、表佐村地内ニ而、見當候人骨齒並之樣子、早助人相之趣ニ符合いたし、喰裂有之候品も、同人着類ニ無相違、右骨有之候脇松木ニ、帶之端結付候儘引切有之、全早助身分差詰、縊死いたし候儀と相見候旨、玄敬其外之もの共申立、戸田釆女正御預所役人見分之趣ニ而も、右申立之通、無相違相聞候趣ニ候上ハ、伺之通、骨ハ取捨申付、科書捨札相建候樣被仰渡、併万一早助儀、其身之罪科を可遁と、縊死之獸類ニ被喰候を見受、巧之所業致し成候哉も難計候處、捨札をも相建候上ハ、此後若同人存在之段相聞候而も、最前之申立等麁忽ニ可相成抔心得違、不訴出樣成行候而も、如何ニ付、其節ハ無懸念訴出候樣、玄敬其

外之もの共江示置候方ニ可有御座候間、右之趣を以、采女正御預所役人江可及差圖旨、被仰渡
可然哉ニ奉存候、
戌三月
朱書 評議之通濟

〔御仕置裁許帳 一〕古主を弑者

寛文二年寅七月六日

壹人加左衛門　是ハ北條右近殿組之同心信利右衛門所に此以前罷在、其後利右衛門所を罷出、
當五月十二日、主人利右衛門所江忍入、利右衛門幷召仕下女兩人共に切殺候付、穿鑿之上右近
殿より搦來り入、

右之者、江戸中引廻し、淺草ニ而七月廿二日磔、

〔刑名副律〕懷胎之女磔に不被行事、

寛保二戌年十二月御仕置之例　駿州竹原村七右衛門妹　なつ

此なつ儀、前方同國中土狩村伴七方に勤居候內、伴七悴七郎兵衛と密通之上、懷胎いたし候處、其
後暇被出候以後、懷胎之儀七郎兵衛江申聞候而も不相構候間、殺呉候樣可申聞と存詰、伴七方江
參り、同人甥仁平次江右之趣咄候得者、壹人相果候ハ犬死ニ候間、七郎兵衛を一大刀恨相果候樣
仁平次申敎候故、七郎兵衛江疵付候儀、元主人之儀ニ御座候間、重々不屆至極ニ付、引廻し之上、其
所におゐて磔可申付哉と相伺、

御差圖

重罪之ものニ候得共、懷胎之事ニ候間、其所におゐて、獄門、

〔御仕置裁許帳 一〕主人弑者幷從類

元祿二年巳八月四日

壹人女こり　是は稻垣數馬母召仕、此者悴鈴木金兵衞と申者、主人數馬方を當七月十八日致二欠落一、當月二日之夜忍入、數馬母を刺殺シ候、右金兵衞母成ル故、牢舍可二申付一旨、松平安房守殿被二仰渡一候付、稻垣和泉守殿家來門野源左衞門、同數馬家來野々村新八召連來ル付牢舍、

右之こり、悴金兵衞儀、主人母を殺候ニ付、同性之一類同十月十日於二淺草一獄門、但金兵衞儀其節致二自害一候付、死骸牢屋江遣シ、鹽ニ詰置、於二品川一磔ニ行、○下略

〔御仕置裁許帳〕一主人之妻を殺者之類

寬文五年巳二月朔日

壹人市兵衞　是は南鍋町五左衞門店長右衞門召仕、主人女房を昨夜切殺候ニ付捕、江來牢舍、

右之者、同巳四月廿九日、稻葉美濃守殿江渡り、死罪、

〔御仕置裁許帳〕一主人之子を殺者之類

延寶二年寅三月十一日

壹人五兵衞　是は神田佐久間町新丁藤兵衞召仕之者、此者之主人悴次郎吉儀、當月八日之夜、佐久間町三丁目裏ニ而被二切殺一候出入ニ付、穿鑿之內、揚り屋ニ入、

右之者穿鑿之上、次郎吉を切殺候儀無紛付、江戶中引廻シ、竹鋸ニ而首挽、同四月四日於二淺草一磔ニ行、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從二前々一之例
一親殺　引廻之上磔

同
一同爲二手負一候者、幷打擲いたし候者、　磔

寬保元年極
一同切かゝり打かゝり候もの、　死罪

同
延享元年極
一舅、伯父、伯母、兄、姉を殺候もの、　引廻之上 獄門

同
從二前々一之例
一同爲二手負一候もの　死罪

同
寛保二年極
一非分も無レ之實子、養子を殺候親、　短慮にて風と殺候はゝ 遠島

但親方之もの、利得を以殺候はゝ、死罪、

同
一弟、妹、甥、姪を殺候もの、　右同斷 遠島

但右同斷

寛保四年極
一家燒失之時、親燒死候を捨置、逃出候もの、　死罪

但兄、姉、伯父、伯母を燒死候においては、中追放、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從二前々一之例
一離別之妻に疵付候もの　入墨之上 遠國非人手下

〔政談秘書 三〕天保七申年二月朔日、御勘定奉行内藤隼人正樣江差出、同五日、御付札御渡、

夫を及二殺害一候百姓町人之妻仕置當り、幷夫を可レ殺所存ニ而、手疵爲レ負候仕置當り、何程ニ申付而可レ然哉、此段御問合申上候、以上、

松平右近將監内

二月朔日　石井傳次郎

御付札

書面夫を及二殺害一候ものハ磔、可レ殺所存ニ而手疵爲レ負候ものハ死罪ニ而、凡相當ニ而候得共、其節之始末ニ而、輕重有レ之候事ニ付、兼而差定候儀ハ難二申事一候、

〔御仕置裁許帳 一〕父を弑者之類、同疵付る者之類、幷亂心之者、

元祿二年巳七月二日

壹人竹林佐五兵衞　是ハ蒔田權之助組與力竹林左兵衞悴、此者儀、親左兵衞を切殺し候ニ付、阿部豐後守殿御斷ニ而、權之助家來瀧九郎兵衞幷與力山岡太郎左衞門、山中次左衞門召連來ル付牢舍、

右之者、同月十一日於淺草礫、

〔御仕置裁許帳 一〕母を殺者之類、同打擲仕者、附夫母を可殺と仕者之妻幷亂心之者、

萬治三年子五月廿四日

壹人金三郎　是ハ新兩替町貳丁目宗好店金十郎悴、此者母親を切殺申候ニ付召連來ル間、牢舍、

右之者、子十月十一日死罪、

〔御仕置裁許帳 二〕養父を殺者、同手向仕者、幷致打擲者、

天和三年亥五月廿六日

壹人甚三郎　是ハ下總國下妻領原村之者、此者養父を切殺候付、御勘定奉行所ニ而僉議極り牢舍

右之者、五月廿八日礫ニ行、

〔御仕置裁許帳 二〕繼父を殺者、同爲手負者

寛文七年未五月廿五日

壹人十三郎　是ハ上總國さかし岡村之者、繼父彥右衞門を殺候出入ニ而、評定所ゟ入、

右之者、未六月廿二日、於牢屋斬罪、

〔御仕置裁許帳 四〕舅姑に爲手負者之類、姑を切殺者、同しめ殺者、捨る者、

天和二年戌六月十一日

壹人望月兵右衛門　是ハ浪人南小田原町壹丁目、源右衛門店之者、女房之母手前ニ差置候處、行衛不ニ相知一候付、姑之弟芝車町七兵衛店八郎右衛門訴訟申出ル付、今日雙方召出シ、段々穿鑿之上、此者申候ハ、姑段々不屆成儀有レ之候付、同所壹丁目仁左衛門店、牢人奥千兵衛召連、太左衛門を頼、乘物舁を雇、權田原迄參、夫ゟ乘物舁ハ返し、代々木村迄召連參、道筋ゟ少脇ニて切殺申候段無ニ紛由、白狀申ニ付籠舍、

右之者、江戸中引廻し、同月廿六日於ニ品川一獄門、

〔評議書〕寛政元年閏六月三日

備後守殿江（右京亮 河内守 甲斐守）立會、萩原金十郎を以上ル、小田切土佐守例ニ申上候

元舅江疵付候もの御仕置之儀ニ付、評議仕候趣、申上候書付、

評定所一座

小田切土佐守相伺候離緣之妻幷元姑（姑恐舅○字誤）江疵付候一件、御仕置之例ニ差上候、吉田町辰巳屋善右衛門家主、畑屋吉兵衛支配借屋、大和屋伊兵衛同家悴德兵衛、死罪ニ而ハ重くは無レ之哉以來之例ニハ不ニ相成一段、御差圖有レ之候間評議仕可ニ申上一旨被ニ仰聞一候、

此儀先達而評議仕申上候通、元舅平兵衛江德兵衛手疵爲ニ負候趣意ハ離緣狀相渡、直ニ途中ニ而、離別不レ致以前之儀を存出し疵付候儀ニ而、離緣致間も無レ之、左候得バ舅、伯父、伯母、兄、姉、江手疵爲ニ負候もの、死罪之御定ニ見合、御仕置ゆるみ候品ニハ無レ之候間、死罪可ニ申付一旨被ニ仰渡一可レ然哉之段申上、其通相濟候儀ニハ御座候得共、尚又御尋ニ付、得と相考候處、縱令離緣狀相渡、直ニ途中ニ而不レ致ニ離別一以前之儀を存出し、疵爲ニ負候共離緣狀相渡候上ハ、他人ニ相成候儀ニ御座候得共、離緣以前之儀を存出し、或ハ間も無レ之候迚、前書之御定を見合候而ハ相當仕間敷哉、併

其始末ニ寄、都而御仕置軽重有ㇾ之候儀ニ御座候間、右評議書ニ認候外、吟味書之内、趣意不ㇾ宜儀も有ㇾ之候故も可ㇾ有御座哉、然ル処、右吟味書写、明和九辰年、評定所類焼之節、焼失仕候ニ付、今般見合可ㇾ申書物無ㇾ御座、評議書留而已を以、評議仕候儀ニハ御座候得共、死罪ニ而ハ重キ方ト奉ㇾ存候間、右徳兵衛御仕置之儀、以来之例ニハ仕間敷旨、被ㇾ仰渡ㇾ可ㇾ然哉ニ奉ㇾ存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、以上、

酉閏六月

〔折たく柴の記〕下これも此年の冬〇正徳五年の事也、奉行所より伯父殺せし者有とて、此年の夏、信庸朝臣〇松平の伯父殺せしものを断ぜられし議をしるして進らす、詮房朝臣心得ぬ事に思ひて、其時の事の由を問はれしに、前代の御はじめに、伯父殺せし者、下手人の法に行はれし例ありと申せしかば、彼朝臣聞て、さらば其例によるべしと答ふ、此事いかにやあるべきと問はれたりけり、人を殺せし者の死すべき事は、よのつねの律においても、伯父、父母を犯せしものゝ、罪例もあるなり、ましてや前代の御時に、伯父殺せし者を、よのつねの人殺せしものゝ如く、下手人の例をもて断ぜられしといふ事の、これより後の例とならむ事こそうたてけれ、いかに是等の御沙汰は候ひしやらんと答へたりき、後に聞に、前代の御時に、稲葉丹後守正知の家人の、伯父殺せしありしを、此者逆罪を犯したり、私に事を断ずべからずと申して、御旨を窺しを、律に見えし所によられて、断じ給ひし事のありしを思ひ出して、老中の人々に、其時の事をたづねしに、丹後守の申状も仰下されし案もありしをもて、其例によりて、彼罪を断じたりとぞ語られたりける、近例、主人、父母を殺せし者の事は、鋸引といふものに行はれ、その妻子等も死刑に行はる、かの伯父殺せしものも鋸引になされて、その妻子は死刑一等を宥めて、断ぜられし御事なりとぞ、奉行所より信庸朝臣に申せし例、前代の御時の事とはきこえず、

〔御仕置裁許帳〕二兄を切殺者之類同為ㇾ手負ㇾ者之類、手向者之類附打擲仕者并乱心之者、

寛文二年寅五月廿七日
壹人權兵衛　是ハ神田鍋町横町長兵衛店之者、兄勘左衛門ニ懸り罷在候處、勘左衛門異見仕候得者、即時に切殺候ニ付牢舍、
右之者寅六月十八日、大岡忠四郎殿江渡り死罪、
〔御仕置裁許帳　二〕弟を切殺者之類、同爲手負者之類、附胤替り之弟を切付る者、幷亂心者、
寛文八年申十二月廿日
壹人孫兵衛　是ハ宿なし、大隅守同心加藤兵左衛門地借八兵衛と申者之兄、右之八兵衛所江參、理不盡に鑓鉋ニ而八兵衛を突殺候ニ付牢舍、
右之者、翌廿一日死罪、○中略
〔御仕置裁許帳　二〕繼子を切殺者、同川江突落ス者、
寛文十三年丑六月廿五日
壹人松田三左衛門　是ハ松平但馬守足輕、此者之まゝ娘ゑちと申七歳に罷成候盲目を、當月十六日に小塚原江召連參切殺候處、當座にハ相果不申、翌日相果申由、右之盲目相果不申內ニ、此者切申由申候旨、所之者共訴申ニ付、評定所江召連僉議申候處、切殺申段無紛牢舍、
右之者、同月廿九日於籠屋死罪、
〔御仕置裁許帳　四〕夫を殺妻之類幷亂心ニ而夫に疵付る者、爲手負者、
萬治二年亥十一月廿二日
壹人女ねい　是ハ武州幸手領嶋村喜右衛門娘、新潟領びんご村庄右衛門悴勘十郎女房、此者夫之吭を掻候由ニ而、伊奈半左衛門方ゟ捕來、評定所ゟ牢舍、
右之女、同亥十二月廿五日、其所江遣し死罪、

元祿四年未四月六日

壹人女はつ　是ハ出羽國上北山村彌兵衛女房、此者同國中江村六兵衛と申者と、三年以前ゟ致密通、當月廿七日之夜、相談之上、本夫彌兵衛を鉞ニ而切殺、其上居宅江火を付候由、彌兵衛兄弟彌藏、彌十郎、訴訟申ニ付、今日召寄遂僉議候處、右之段無紛ニ付、評定所ゟ牢舍、

右之女はつ、同未七月廿五日、其所江遣し火罪、密夫六兵衛儀右同罪、

〔御仕置裁許帳、四〕女房を切殺者之類、同突殺者之類、爲手負者之類、并しめ殺者、附亂心之者、

萬治四年丑四月二日

壹人長兵衛　是ハ柳原三丁目彌次右衛門店之者、女房を理不盡に切申ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、同丑五月十九日死罪、

〔刑名副律〕女房法外有之ニ付切殺候者之事

寬延二巳年六月御仕置之例　　下總國西親野井村　藤兵衛

此藤兵衛儀、女房いら短慮者ニ而、藤兵衛江對し度々惡口いたし候事も有之候、藤兵衛儀稻苅に出、中食給に歸候處、不埒之由いら惡口いたし候ニ付、藤兵衛叱り候處、口惜候ハヽ切候樣いら申之、居直り候間、殘念ニ存、脇差取出し、いらを切殺し、藤兵衛ハ自害仕損候、然ル處いら母并親類共藤兵衛助命之儀相願候得共、いら口答いたし候とも、いたし方も可有之處、切殺候段不屆ニ付、下手人可申付哉と相伺、

御差圖

いら夫江對し法外之事共ニ而、被切殺候儀ニ候間、下手人ニ及ハす、構無之旨被仰渡候事、

〔御仕置裁許帳、四〕離別之女房を切殺者、同爲手負者類、

天和三年亥六月二日

殺傷師匠

壹人喜三郎　是ハ彌左衞門町小兵衞店佐兵衞出居衆、此者女房かつと申者、當三月廿八日暇を出し其以後左内町小兵衞店長四郎請ニ立、平松町彌惣兵衞方江奉公ニ出し置候處、右之かつ、當四月十一日之夜、通貳丁目七左衞門と申者之表椽際にて、何者ニ歟被㆓切殺㆒候ニ付、〇中略遂㆓僉議㆒候處、前方女房密通之儀有㆑之、暇を申候を不㆑存、暇遣候以後承候付、突殺候由白狀付候得共、密通之儀慥成證據も無㆑之段、不屆ニ付籠舍、

右之者、同亥七月晦日、於㆓牢屋㆒死罪、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從㆓前々㆒之例
一師匠を殺候もの　磔

同
一同爲㆓手負㆒候もの　死罪

〔御仕置裁許帳 一〕師匠を切殺者幷爲㆓手負㆒者、

延寶五年巳八月廿一日

壹人甚右衞門　是ハ南大工町源左衞門店さし物屋甚四郎弟子、此者前方勘定合之儀ニ付、被㆑追出㆒候處、無念ニ存、當月十一日之夜忍入、甚四郎を切殺立退申處ニ、此者之親分麴町貳丁目三郎右衞門店八兵衞ニ尋出し候樣にと、日切手形申付候得バ、甚右衞門葛西筋に罷在候を、右八兵衞、今日本所龜戸天神茶屋迄誘出し候由、八兵衞家主申來ル付、雙方ゟ同心遣捕來ル付、穿鑿之內牢舍、

右之者、同九月晦日、於㆓淺草㆒令㆓斬罪㆒、首ハ獄門、

〔公裁錄 三〕師匠ニ爲㆓手負㆒

万治四丑六月六日
一高家四郎左衞門御代官所、武州黒津村門修院弟子荒鐵儀、師匠門修院呵候處、致㆓立腹㆒脇指ヲ以、門修院ニ深手負せ候由、重科ニ付、荒鐵其所ニ遣し死罪申付る、

〔御仕置裁許帳三〕出家師匠を殺者之類、幷可ㇾ致ㇾ殺害ㇾと仕者、

一道心坊主道玄〇中略

右者、永井伊賀守方ニ而僉議有之、丑六月十九日入牢、同八月八日牢死、〇中略元祿十年丑十月廿二日磔ニ行、

札文言

此者儀、師匠を切殺し可ㇾ申と、數ヶ所手疵をおほせ候、重罪たるによつて、令ㇾ牢死ㇾ候へ共、死骸如ㇾ此はりつけにおこなふ者也、

十月廿二日

殺傷弟子

〔公裁秘錄〕弟子を折檻致相果候を隱置候者之御仕置之例

小石川餌指町智恩院末源光寺　懷圓子六十歲

右懷圓義、圓岩圓連と申弟子、旦那方江相廻り候之處、芝居致ㇾ見物ㇾ候由、夜ニ入歸り候故、兩人とも折檻致候上に、裸にいたし、食をもあたへず土藏江入置候へバ、翌日圓連相果候處、密々下人ニ申付、死體埋させ、欠落分ニ致し候科によつて、遠島申付候、

右者、伺之通相濟申候、

殺傷地主名主

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寛保二年
一地主を殺候家守　引廻之上獄門

同
一同可ㇾ殺所存にて手疵爲ㇾ負候家守　引廻之上死罪

同
一元地主を殺候家守　引廻之上死罪

同
一同可ㇾ殺所存にて手疵爲ㇾ負候家守　遠島

寛保二年極
一支配を請候名主を殺候もの　引廻之上獄門

殺傷召仕

但可殺所存にて手疵爲負候もの、死罪、

〔徳川禁令考後聚二十九行刑條例〕人殺并疵付等御仕置之事

地主江疵付候家守

湯島棟梁屋敷喜兵衛地借

利兵衛

寶永六年丑五月十八日

此もの儀、地主喜兵衛を脇差ニ而肩先壹ヶ所、後腰下壹ヶ所切付候由、町人共訴來候ニ付、撿使遣し口書申付、召寄令詮議候處、此もの申候は、親太兵衛儀、喜兵衛家守仕罷在候處、去亥五月相果、其後少内此もの家守仕候得ども、右喜兵衛氣ニ入不申、家守并居宅共ニ取上ゲ、此ものハ出居衆ニ成罷在、居宅を崩取候樣ニ申候得共、左候而ハ、母壹所ニ有之故、養育難仕候故、不斗右之段無念ニ存、喜兵衛を切付申候由申之、右仕方不屆ニ付牢舍、

右之もの同十二月牢死いたし候ニ付、鹽詰ニ申付置候處、品川松右衛門ニ預遣ス、翌正月廿六日、死骸引捨候樣ニ品川松右衛門ニ申渡之、

〔御仕置裁許帳十〕出居衆を縛殺者、并亂氣體之店子を縛殺者、附下人を縛殺者之類、

元祿八年亥三月十三日

壹人權兵衛　是ハ淺草旡町次郎兵衛店之者、此者下人三太郎と申者、十六歲ニ罷成候者、昨夜致頓死候由家主方江爲知候故、早々參見申候へバ、死骸怪敷存候由訴來候ニ付、撿使遣爲相改候處、○中略酒に給醉惡口申ニ付、以來之仕置と存、昨夜四ッ時あら繩ニ而縛、酒樽に結附、半時程差置候へバ、絕入仕候體ニ相見江候、○中略右之通縛殺候段白狀申ニ付、女房ハ家主五人組ニ穿鑿之内預ケ、此者ハ籠舍、

右之者、御老中江相伺、亥八月八日赦免、

墮胎

元祿十年丑八月二日

壹人長兵衛　是ハ馬喰町壹丁目十兵衛店、此者儀、召仕權助と申十三歳に罷成候者を、當五月八日之朝六ッ半時分梯に縛付、其上致打擲候故、間もなく右之權助相果候由、家主五人組訴出候ニ付、撿使遣召寄遂僉議候處、此者申候ハ、權助儀相州廣川村甚左衛門忰に而、此者女房之遠親類を請人に取、去年八月ゟ十年季に給金壹兩爲取召仕候處に、不屆者ニ而、折々小路がくれ仕候ニ付、腹立ニ存、たすきニ而梯江縛付置、致折檻候へば、相果候由申之、死人身之內打候跡廿壹ヶ所有之由、折檻之致樣も可有之處、無慈悲成ル仕形不屆ニ付、當五月九日牢舍申付候處、相煩候ニ付、養生之內、同六月廿二日、家主十兵衛ニ預ヶ遣候處、氣色本腹ニ付、召連來候間再牢、

右之者、御老中江相伺、丑八月廿四日赦免、

〔公裁秘錄〕召仕を折檻ニ而殺候者之事

増上寺領巢鴨村善左衛門借地才兵衛店請酒屋市兵衛女房

なつ

右なつ義、召仕候權八と申、十四歳ニ成候もの、酒代井見世に置候賣物盜候ニ付、折檻致候處、中リ所惡敷候や、翌朝相果候、權八義常々不屆者と相聞へ候間、折檻仕間敷義も無之候得共、夫留守之義、其上若輩者ニ候得バ、仕方も可有之處、折檻甚敷候故相果、不埒之仕方ニ付、なつ儀手鎖をかけ夫市兵衛江百日預ヶ、右之通伺之上相濟候、

〔德川禁令考四十九文武藝術〕天保十三寅年十一月晦日

女醫師之儀ニ付御觸

市中女醫師と唱候者、血道之療治、正敷致候ハ不苦候處、其中ニハ妊娠之者を賴に應じ預リ置、墮胎致させ候類も有之哉に相聞、不屆之至候、向後右樣之儀於相聞ハ、賴人迄も逐一遂穿鑿、急度咎

可ㇾ申付候間、兼而此旨可ㇾ存候、

〔御仕置裁許帳十二〕子下シ候療治にて懐體女を殺ス醫者

一淺草森田町勘兵衛店玄意、同所天王町十兵衛召仕九兵衛と申者ニ被ㇾ頼、同所森田町六右衛門店久三郎所にて、九兵衛傍輩下女玉と申懐妊女之子をおろし候とて、彼之女相果申候ニ付、玄意不屆ニ付、閉門、家主五人組江御預ケ被ㇾ遊、慥率預候、爲ㇾ後日ㇾ如ㇾ件、

延寶八年酉八月六日

右之者、同月廿四日赦免、

〔御仕置裁許帳六〕傍輩女を懐胎爲ㇾ致、賣藥を用殺者之類、

貞享三年寅六月八日

壹人吉兵衛　是ハ馬喰町貳丁目伊兵衛下人、此者兄本石町壹丁目長兵衛店次兵衛請ニ立、奉公ニ出シ置候處、傍輩はつと申者と致ㇾ密通、爲ㇾ致ㇾ懐胎、○中略此者申候ハ、懐胎仕候段主人江相知レ候儀迷惑ニ存、此者知ル人同所三丁め市左衛門店次兵衛と申者を頼、金子壹歩相渡シ、子下シ藥を相調給させ候得バ、今月四日傷産仕、○中略氣分重リ相果候由申候、右藥を相調給させ候次兵衛儀ハ、手鎖を懸ケ家主ニ預ケ遣、此者儀ハ、奉公人之身として傍輩女と密通いたし、殊に賣藥を用致ㇾ傷産ㇾ候段、重々不屆成ル故籠舍、

右之者、同寅八月九日死罪、

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永六酉六月、主殿頭殿御下知、　太田播磨守掛

一武州芝村友右衛門養娘相果候儀ニ付吟味

蔭山外記御代官所武州足立郡芝村百姓佐次郎悴　宇右衛門

此宇右衛門儀、離縁之女房たつと密通之上、爲レ致二懷胎一可レ爲レ致二流產一とはゝづき之根を黒燒にいたし相用、右藥に中り、たつ相果候始末、不屆ニ付、中追放、

御仕置附

右人を殺候もの下手人之御定ニ御座候、此ものハ相對之上、たつ流產之藥を呑、右藥ニ中り相果候上は怪我あやまちニ而人を殺候も同樣之儀ニ可レ有レ之哉、御定ニ怪我ニ而風と疵付、其疵ニ而相手死候はゞ、吟味之上あやまちニ無紛幷怪我人之親類存念相尋候上、中追放と有レ之、殊ニたつ親ども申分無レ之、助命も相願候ニ付、右御定ニ引當、中追放と御仕置附仕候、

〔天明集成絲綸錄五十一〕明和四亥年十月

百姓共大勢子共有レ之候得ハ、出生之子を產所ニ而直ニ殺候、國柄も有レ之段相聞、不仁之至ニ候、以來右體之儀無レ之樣、村役人ハ勿論、百姓共も相互ニ心を附可レ申候、常陸下總邊ニ而ハ、別而右之取沙汰有レ之由、若外ゟ相顯ニおいては、可レ爲二曲事一者也、

十月

右之通可レ被二相觸一候

〔羽林源公傳〕天明四年〇中略村々動もすれば疾疫流行して、男女死失し生口も減ず、是は畢竟出生の子を親として害する等の惡風俗不仁の事より邪氣を感じ致す譯を敎誡し、又市女を請ひ、彼の死たる小兒をよせ、村婦等に聞せ、恐懼して後來を謹ん事を欲し、〇中略町在の貧民子を害する事止ざるは、畢竟貧苦より出たる所業なればとて、寬政二年より、初產を除き、二人めより、赤子養育の爲とて、七夜過ぎに金二分、十二ヶ月めに又二分、都合一兩づゝ下され、此事を試みに五ヶ年の間爲し給はんとなりしが、同九年に至ては、又增て七夜過に一兩、十二ヶ月めに一兩、都合二兩づゝ賜はりたり、

棄兒

〔視聽草六集三〕敷敎條約　白川立敎館敎授廣瀨典奉命撰

儆殺子

爾等衆民、生子過二三兒、必殺而不育、此俗遵行已久、恬不爲怪、是以難改也、然其事殘忍極至、背天地之道、不惟於理固不當然、而於利害亦不宜殺也、○中略人之所以害生意者、莫甚於不育子也、今夫牛之爲獸痴、而鳥之爲鳥賤、猶舐犢哺子、不失慈愛之天性、人而違之、以萬物之靈、而禽獸之不若、是其於理固不當然也明矣、爾等於子豈全不愛乎、利害之心、或有驅迫、恐子孫衆多、衣食不給、與其至貧困、不若殺之就安、於是乎、敢爲逆天悖地之事、而不顧也、今我往々見之、壯而殺子、衰老無托、衣不掩體、食不充腹、遂爲僧尼、乞人餘而不足、轉于溝壑、多子則初雖貧約、後各執業、以至富足、老而多賴、疾病足養、然則其至貧困、不在多子、惰業自取、是之不戒、而歸罪於多子、不亦誤乎、且爾之有子、天之所與、而爾殺之、豈不犯天怒、終身陷於貧困乎、是其於利害亦不宜殺也明矣、爾等生子、官必賜金、以贍、爾等反欲爲利害而殺之、夫嬰兒呱々、官與爾孰親孰疎、官實不若爾骨肉之親也、然則爾等殺子、不獨於上二者有背且犯、又慮公家莫大之仁惠、爾等可不之思哉、爾等亦人也、當其殺之時、不忍之心惻然而生、吾聞之、其將戾首加之膝、不能正視、閉目背面、乃敢爲之、而兒也胞血淋漓、有口不能語其苦、咿嚶良久乃死、言之他人傷心、其親而忍爲之、其去禽獸者能幾何、然其一線不忍之心、卽進善之端、爾何不擴之、野奧諸州、此習爲最熾、他州人語及此事、輙蹙爲不近於人類、今人呼爾爲禽爲獸、爾不憤然發怒乎、若身不免於其實、則有何言以解之、是官之所以告諭丁寧、數々不已、今又曉以理、申之以利害者、欲爾等養其不忍之心、而爲良善之民、仰體諄々之敎、而免于禽獸之歸、

〔御定書百箇條〕捨子之儀に付御仕置之事

從前々之例

一金子を添、捨子を貰、其子を捨候もの、

但切殺、ゟ殺候においては引廻し之上礫、

引廻之上

獄門

寛保二年極

一捨子有レ之を、内證にて隣町等江又候捨候儀於二顯一には、

當人	所拂
家主	過料
五人組	過料
名主	江戸拂

但吟味之上、名主、五人組、家主等不レ存儀無レ紛候はゞ、無構、

〔憲教類典四ノ二十三捨子〕元祿三庚午年十月廿六日

覺

捨子致し候事、彌御制禁ニ候、養育難レ成わけ有レ之候はゞ、奉公人ハ其主人、御料ハ御代官手代、私領ハ其村々名主五人組、町方ハ其所之名主五人組江其品可レ申出、はごくみ難レ成においては、於二其所一養育可レ仕候、此上捨子仕候はゞ、急度可レ爲二曲事一事、

午十月廿六日

〔德川禁令考後聚六制令布令〕享保十一年午年正月晦日捨子取扱方町奉行尋ニ付町役人申立書

一町中江捨子有レ之節、只今迄ハ早速御番所江御訴申上、養育之上、貰人有レ之候ハヽ可レ申上旨被二仰付一、其上相煩候歟、又ハ相果候得者、貰申候町内江爲二相知一、此節も御訴申上候付、彼是六ケ敷奉レ存候哉、貰人無レ之、養育間久敷乳持付置町内物入等多、難儀仕候、向後名主共承屆置、養育入念申付、其内ニ貰人承合、慥成者ニ而養育も可レ仕旨願申者方より證文を取差遣申候上ニ而、何町誰と申者、養子ニ貰申度由申候ニ付、差遣候段御屆申上候樣ニ仕、尤貰人方ニ而相果候共、何方江も屆不レ申候樣仕候ハヽ、能貰人も早速有レ之、養育之間も少々ニ而、町中御救ニ罷成候、

一捨子町中ニ而養育仕候内ニ相果候ハヽ、此儀前々之通、其町々より御訴可レ申上候、

一右之通ニ被二仰付一候而も、捨子減可レ申樣ニハ不レ奉レ存候得共、町々難儀薄く罷成申候、減可レ申儀者、

去年中御尋之節申上候通、非人共方江少々宛添金仕相渡申候樣被仰付候ハヽ、捨子殊之外減可申樣奉存候、

右御尋ニ付、存寄申上候、以上、

正月晦日　　年番 名主共

〔憲教類典四ノ二十三 捨子〕享保十九甲寅年九月十五日

備中守殿御渡

捨子を貰、又外之者江遣候義、彌停止ニ候、併無據子細有之、外之者江遣候はヽ、十歲迄之內ハ、先達而貰候奉行所、又ハ貰候屋敷江相屆候上、差圖次第可遣候、

九月

右之通町奉行ゟ相觸候間、可被通置候、

〔憲教類典四ノ二十三 捨子〕寶永元甲申年九月

捨子仕間敷旨、度々相觸候得共、今以所々捨子有之由、不屆ニ候、先達而觸書之通、出生之子相改之、家主ぎりに書付、名主江申屆、名主方ニ而帳面ニ附置可申候、養子ニ遣候歟、又ハ相果候はヽ、其譯名主方江申屆、右帳面ニ其段書加可申候、此以後捨子いたし候者有之候はヽ、僉議之上捨子候者ハ不及申、家主五人組迄、可爲曲事候、以上、

九月

〔張紙留〕捨子取計之儀ニ付、天明六午年根岸肥前守下知、

御請書

永井日向守御預リ所、攝州東成郡小平村町壹丁目、帯屋德兵衛借屋みの屋半藏門先ニ捨有之候、當歲男子之儀、右家主德兵衛女房乳有之候ニ付、貰請度段相願候ニ付、差遣候、御屆書之內、又候外

江差遣度仔細有ㇾ之候節ハ、貰請人と一同願出可ㇾ請二差圖一段申渡し候者、勿論之儀ニ御座候得共、拾歳以上ニ相成候ハヽ不ㇾ及二屆一旨申渡置候由之儀、享保十九年之御觸ニ、無ㇾ據子細有ㇾ之、外之ものニ遣候ハヽ、拾歳迄之內ハ、先達而貰受候奉行所、又者貰ひ候其屋敷江相屆候上、差圖次第ニ可ㇾ遣旨有ㇾ之候得共、拾歳以上ニ相成候ハヽ屆ニ不ㇾ及とハ無ㇾ之間、以來捨子貰請候もの江之申渡者、右御觸之通申渡、拾歳以上ニ相成候ハヽ屆ニ不ㇾ及と者不二申渡一樣相心得可ㇾ申段、被二仰渡一奉ㇾ畏候、以上、

未二月二日　町役人一統

〔政談秘書三〕一捨子有ㇾ之節ハ、糺之上、村養育申付、其段御屆申上、若病死いたし候ハヽ、手附手代差遣爲二見屆一候、怪敷儀も不二相聞一候ハヽ、死骸取片付、申付、其段御屆申上候樣可ㇾ仕哉、

但シ貰人有ㇾ之候ハヽ、是又糺之上差遣し、又外江遣候儀不ㇾ致、若無ㇾ據譯有ㇾ之、外江遣候ハヽ、拾才迄之內ハ、支配役所之差圖可ㇾ請旨申渡し、證文取ㇾ之、差遣候樣可ㇾ仕哉、

御附札

書面本文但書共可ㇾ爲二伺之通一候、〇年月不ㇾ詳

〔類例秘錄三〕一捨子之儀、引請人而已ニ而、貰請人無ㇾ之、又ハ村養育等之類、主水正殿御談も有ㇾ之候ニ付、以來左之通、

引請人有ㇾ之分

一書面捨子誰引請、養育いたし置候上ハ、養育中、異變之儀も有ㇾ之候はヽ、其段可二訴出一旨申渡、證文取ㇾ之可ㇾ被二差出一候、以上、

何ノ何月

村養育之分

一書面之捨子、村方ニ而養育いたし置候上ハ、養育中異變之儀も有ㇾ之候はヽ、其段可二訴出一旨申渡、

證文取之、可被差出候、以上、

何ノ何月

前々ゟ貰請人有之節之振合

一書面之捨子誰貰請、養育いたし度旨申立候上ハ、願之通差遣、又外江遣候儀不致、若無據子細有之遣し候歟、異變之儀も有之候はゝ、拾歳迄之内ハ、差圖可請旨申渡、證文取之、可被差出候、以上、

何ノ何月

右之振合を以、夫々相認、區々不相成樣下知振取調可申事、

文政十亥年六月

〔御仕置裁許帳 二〕賣子を捨る者之類

壹人平右衛門　是は左兵衛町總兵衛店之者、此者娘當歲之かめと申者、二三日相見へ不申候付、家主總兵衛致僉議候得者、人にくれ申候由申候間、取返シ可參候、手前ニ養候事成不申候ハヽ、家主方にて養爲取可申由申、昨日取返シニ遣候處、芝金杉四丁目安閑寺門前江、當月十九日捨置候、安閑寺ゟ寺社奉行所江屆申置候故、昨日は平右衛門に右之娘相渡シ不申候、今日平右衛門を召連、安閑寺戸田能登守方へ罷出候得者安房守番所迄、安閑寺に平右衛門を召連可罷出旨差圖ニ而、右之者共罷出候間、遂僉議候處、進退不罷成、女房も奉公に出し、養育難仕捨置候由申之、穿鑿之上牢舍、

右之者序而次第流罪可申付處ニ、未〇元祿四年十二月十三日牢死、

〔御仕置裁許帳 二〕養子を捨る者之類、并切殺捨る者、

貞享五年辰七月十一日

壹人五郎兵衛　是ハ元誓願寺前淸兵衛店覺左衛門出居衆、此者儀本銀町壹丁目庄三郎下人五

兵衞と申者之悴、當歲之男子勘太郎と申者を、金壹歩貳朱附、去々年寅六月三日養子ニ貰、里子ニ遣候由申候得共、勘太郎行衞知レ不ㇾ申候由にて、五兵衞訴訟申ニ付、召寄令㆓僉議㆒候處、此五郎兵衞申候ハ、去年〇此間恐有㆓脫字㆒朔日養子之悴勘太郎を捨候由申候、金子を取致㆓養子㆒捨候段、重々不屆ニ付、去ル卯十月三日、牢舍申付候處、相煩候付、先月十日養生之內宿角右衞門、幷家主五人組ニ預ケ遣候處、氣分快氣仕候由ニ而、今日召連來ル付、牢舍、

右之者、辰十二月廿五日死罪、翌廿六日首ハ於㆓淺草㆒獄門、

〔德川禁令考後聚二十行刑條例〕捨子之儀ニ付御仕置之事

享保十五戌年十二月廿六日入牢　室町貳丁目木戸番人　十助

此もの儀、先月十九日之夜、町內鳥屋七左衞門家之前に捨子有ㇾ之候處、同夜右捨子水谷町江持參、又々捨置候ニ付、今日召出、所拂申㆓付之㆒、

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政五丑年九月

松平伊豆守殿御差圖　町奉行　小田切土佐守掛

一巢鴨原町源七捨子いたし候一件　巢鴨原町壹丁目半六店　源七

右之もの儀、貧窮ニ而暮兼候迚、奉公人肝煎吉兵衞、喜八を相賴、妻かつ儀、先達而女子出生致候處、無ㇾ間も相果、乳有ㇾ之候ニ付、外ゟ里子被ㇾ置候へ共、小兒江金子を付、養子ニ呉候もの有ㇾ之候はゞ貰請、里子者相返度旨彼是僞申聞相賴、吉兵衞世話ニ而、高柳安兵衞孫當才之男子平五郎江、金壹兩壹步相添、養子ニ貰受候上、妻江ハ外江養子ニ呉遣候旨僞申聞、駒込千駄木町町方家脇江捨、金子致㆓德用㆒、猶又喜八世話ニ而、市右衞門悴貳歲ニ相成候豐吉江、金子壹兩貳步附貰請候上、是又同樣之手續ニ而、牛込榎町武士方下屋敷外江致㆓捨子㆒、金子德用致候、始末、巧成致方、其上家主江得と不ㇾ遂㆓對談㆒、店江引移罷在候段、重々不屆至極ニ付、引廻之上、獄門、

〔御仕置裁許帳 四〕舅姑に爲手負者之類、姑を切殺者、同しめ殺者、捨る者、

貞享元年子二月十二日

壹人角藏　是ハ麹町貳丁目、五左衞門店、太兵衞出居衆、此者女房わかな、母を此者召連、牛込若宮八幡前御中間屋敷、家主ハ不知、八左衞門方江預ケ置候由申候得共、八左衞門致欠落、行衞知レ不申候由申、當月五日ニハ、母之儀ハ捨候由、此者申聞候間、行衞相知レ候樣仕度旨、昨十一日訴訟申出ルニ付、今日雙方召寄、遂僉議候處、わかな申通、此者八左衞門ニ預ケ置候處、八左衞門國違仕候故、行衞知レ不申候由、此者も申候、然者此者其節訴訟をも可申儀を、其通ニ仕、其上母弔をも仕候樣ニ、頃日此者女房ニ申聞候由、左候得バ、此者手前疑敷相聞え候間、穿鑿之內、揚リ屋ニ入、

右之者、八左衞門召出シ對決之上、女房之母捨申ニ無紛候由、白狀申、不屆ニ付、同月晦日死罪、

〔御仕置裁許帳 五〕被頼て人を捨る者之類

寬文二年寅二月三日

壹人八左衞門　是ハ雉子町吉兵衞店之者、所左衞門と申者、久々相煩候之處ニ、相對長谷川藤右衞門內、彌五左衞門、何方江も捨候得と賴候故、相出居衆之者共、幷三河町三丁目權右衞門店彌兵衞出居衆長兵衞と、右之所左衞門を菰ニ包、兩國橋江捨申ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者、同月十九日、井上河內守方江渡リ死罪、

〔御仕置裁許帳 五〕病身之兄を橋之上ゟ川江捨る者、同甥を路道に捨る者、同緣者を橋之上に捨る者、

寬文二年寅二月十九日

壹人所左衞門　是ハ雉子町吉兵衞店、八左衞門出居衆、相煩罷在候を、相對彌五左衞門と申者、宿

八左衞門と致二相談一貳ヶ所切付、兩國橋へ捨置候ニ付、宿八左衞門者死罪被二仰付一候故、宿無レ之ニ付、家主訴訟申ニ付、揚リ屋ニ入、

右之者、同寅六月十二日、評定所御相談之上、同日赦免、

〔御仕置裁許帳五〕病身之兄を橋之上ゟ川江捨る者、同甥を路道ニ捨る者、同緣者を橋之上に捨る者、

寬文四年辰七月廿八日

壹人彌兵衞　是ハ桶町壹丁目孫兵衞店之者、其身兄半左衞門と申者、吳服町壹丁目道琢店七郎右衞門出居衆ニ而、久々相煩罷在候を、此者夜前五ッ時分召連參、兩國橋ゟ川江落シ候處、獵師見付取上申ニ付、伊奈半左衞門方ゟ召連來ル故、穿鑿之內籠舍、

右之者橋々ニ而五日晒、同辰九月十一日於二淺草一獄門、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寬保三年極追加
一同宿體之僧、人を殺、或ハ疵付候科、俗人に替無レ之、

但寺持ハ、一等重く可二申付一、

〔德川禁令考後聚二十九行刑條例〕人殺幷疵付等御仕置之事

一出家之身として人を殺候もの　　獄門

但刃物ニ而疵付におゐては死罪

本文例

朱書
是ハ元文二巳年十二月、甲州上條東割村小兵衞妻ひめ儀、同村彌一右衞門と致二密通一、同村道心者本受坊宅を中宿ニいたし出會候處、ひめ儀、密夫彌一右衞門と申合、夫を爲二切殺一候得共、不二死切一ニ付、本受坊を頼、ひめ脇差を渡し切、とゞめさゝせ候段及二白狀一ニ付、伺之上本受坊獄門、密夫彌一右衞門獄門ひめ引廻之上磔ニ申付、

但書例

非人犯罪

〔刑名副律〕非人虛無僧を打殺候御仕置之事

朱書 是ハ、元文二巳年、當陸國鷺島村妙光院儀、地頭拂山ニ伐置候板貫、度々致紛失ニ付、百姓兩人夜廻り出候節、盜人見掛候ニ付、追欠候處、右妙光院立戻り、長刀體之刃物を以、追欠候佐助と申ものニ手疵爲負候ニ付、吟味之上、盜之儀ハ不致白狀候得共、出家不似合刃物致所持、手疵爲負候段不屆ニ付、脫衣追放ニ伺候處、御下知有之、死罪申付、

下總國下高井村
非人 三助
同 五兵衞

延享三寅年十月御仕置之例

此三助、同國臺宿村江物貰ニ參候處、虛無僧霞隨修行に參掛、名主五郎兵衞方ニ而及口論、霞隨儀尺八を以三助頭を敲疵付候處、五郎兵衞ハ留守故、父文右衞門罷出、霞隨不埒之旨申、三助をも叱り候處、傍輩非人五兵衞參り、宿下高井村江參可申譯立旨申之、霞隨を連行候迚、臺宿村はづれニ而、三助五兵衞兩人、木刀にて霞隨を打殺、死骸川江捨候段、非人之身、別而不屆ニ付、三助口論之相手故死罪五兵衞儀ハ手傳之儀ニ付、遠島可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、○中略

〔刑名副律〕當座之口論之上、百姓を打殺候穢多御仕置之事、

備中國吉田村穢多三郎兵衞倅
龜太郎

延享三寅年十一月御仕置之例

此龜太郎儀、同國關戶村百姓吉右衞門と、糸代井質物取引之儀ニ付及口論、庭に有之候石を吉右衞門江打付候處、當り所惡敷相果不屆ニ候間、下手人可相伺ものニ候得共、穢多之儀ニ候間、死罪可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

幼者犯罪

〔御定書百箇條〕拾五歲以下之もの御仕置之事

寬保元年極 一子心にて無辨人を殺候もの 拾五歲迄親類江預置 遠島

〔翁草五〕子供喧嘩解死人之事幷大岡越前守事

近年の事成が、淺草竹町にて、五才の子と七才の子一所に遊び居、五才の子竹を持居たりしを、七

才の子是を奪ひ取んとて、あふのけに倒れ、竹の先尖たる所咽吭を突て即死す、兩親大に歎き、彼五才の子と爭ひたるゟ事起れば、渠を解死人にとらんとて、雙方申募、奉行所へ訴出、時の奉行大岡越前守也、越州さま〴〵理害を申聞せ宥らるゝと雖聞ず、然る上はとて被申聞けるは、進而下手人を願ふ上は、願之通申付べし、但十五才未滿の者に係る例なし、因茲十五才に成迄八左衞門島へ遣し置べし、未幼稚の者なれば、介抱人無くては難叶、願人の方ゟ乳母一人召抱て付置べし、扶持方は被下べし、月々一度宛右の子を奉行所へ連來て、改を受べし、尤病氣ならば早速訴よ、右之趣急度相守、所之者心を付て生立せ、十五にも成らば其節可訴出、いか樣共沙汰に及んと有ければ、願人幷其所の者大に迷惑して右願を相止、事濟ぬとなり、

〔御定書百箇條〕亂氣にて人殺之事

享保六年極
元文三年極

一亂心にて人を殺候共、可爲下手人候、然共亂心之證據慥に有之上、被殺候ものゝ主人、幷親類等、下手人御免之願於申出ハ、遂詮議可相伺事、

享保六年極
但主殺親殺たりといふ共、亂氣に於無紛ハ、死罪、自滅いたし候はゞ死骸取捨可申事、

享保十九年極
一亂心にて其人ゟ至て輕きものを致殺害候はゞ、不及下手人事、

寛保二年極
但慮外者を切殺候時、切捨に成候程之高下と心得べき事、

〔公裁錄二〕亂氣御仕置之事 ○中略

右御定書ハ、大概其人之格合似寄候程之者殺害候節之儀ニ候、此度於三州岡崎宿、尾張殿足輕致亂心、駕籠舁人足切殺候、是ハ至而輕キ者候故、不及下手人、御構無之候、自今其心得可有之候事、

寅三月

〔諸例類纂 六〕天保十亥年九月廿二日、町奉行筒井紀伊守殿へ差出、同廿六日御付札、

與風致亂心、實兄姉へ爲手負、右疵ニ而相果候節、右亂心者何程之仕置申付可然筋ニ御座候哉、

但及亂心致殺害候もの、又殺害いたし候上及亂心候もの、差別之儀御座候哉、

右之趣兼而心得罷在度、御問合申上候、以上、

内藤能登守家來

九月廿二日　千早三郎助

御付札

書面亂心ニ而兄姉を殺害いたし候者、死罪程ニ而可然候事、

但殺害ニおよび候而亂心いたし候者引廻之上獄門ニ而可然候事、

〔御仕置裁許帳 一〕亂心之者

貞享三年寅閏三月朔日

壹人彌五助　是ハ竹川町次郎左衛門店儒者味木道軒召仕、昨夜九ッ時分、其身寢所二階ゟ刀脇指持下り候而あだけ申候、道軒起合見申候所、其儘脇指を拔、道軒額壹ヶ所切付候付、組留脇指をもぎ取候とて、左之頰先壹ヶ所、鼻之上壹ヶ所、右之手之甲壹ヶ所、左之小指壹ヶ所手負候、當座に差殺可申と存候得共、亂心仕候者と存押へ置、家主に樣子見せ、召仕共に搦させ置、番所江撿使請候處、繩をとき脇指を拔、下女はる腕少、右之小指少、左之方手之甲少、左之肩先少、延壽院方に罷在候道軒兄味木道印、右之臑壹ヶ所切申候、撿使遣し呼寄令僉議候處、右之通無紛相聞候、亂氣と申候得共、主人幷道印、下女はるに手負せ候付牢舍、

右之彌五助、寅七月十一日死罪、○中略

〔御仕置裁許帳 一〕亂心之者

元祿四年未九月十四日

壹人女ろく　是ハ神田佐久間町四丁目長左衛門店次兵衛女房、此者之儀致亂氣、其身母幷當歲之娘みつと申者、兩人今朝六ッ時切殺候由訴來ル付、撿使遣召寄遂僉議候處、此者申候前後仕、亂氣ニ無紛ニ付、穿鑿之內上り屋に入、

右之者、同未十一月十日於淺草礫、

〔刑名副律〕亂心ニ而親江疵付候もの御仕置之事

延享二丑年六月御仕置之例　　神田同朋町　又右衛門

此又右衛門儀、兩親之顏馬に相見おそろしく存、疵付候旨申之、亂心無紛候得共、兩親江疵付候段不屆ニ付、死罪可申付哉、然共親幷親類、其外所之者共、又右衛門亂心ニ而無相違、兩親手疵も輕く平癒仕候ニ付、又右衛門助命之儀度々相願候故、押込置候樣可申付哉と相伺、

御差圖

死罪

〔御仕置裁許帳 二〕亂心之者

明曆三年酉十一月晦日

壹人五郎助　是ハ小傳馬町長八店之者、氣違候而、弟源兵衛、相店七兵衛夫婦、同六兵衛、以上四人切申ニ付牢舍、

右之者、同十二月十日、松平伊勢守殿江渡り、死罪、

〔御仕置裁許帳 四〕亂心之者

萬治三年子五月九日

壹人三郎兵衛　是ハ本鄉六丁目之者、氣違候而、其身女房を切殺、幷召仕之六兵衛市兵衛と申兩

人之者ニ手を爲負申ニ付、捕來り入、
右之者氣も直り候由ニ而、女房親太郎左衞門當人三郎兵衞親甚兵衞訴訟申ニ付、同子七月二日赦免、

〔公裁錄三〕亂氣人師匠ニ爲手負

貞享三子正月廿五日

一平松町遊倉店鍛冶五兵衞店弟子八兵衞儀、脇指ニ而師匠五兵衞髮先壹ヶ所切付候處、捕之訴出候ニ付、八兵衞牢舍申付、爲詮議水戸領米津村父彥右衞門幷母兄金兵衞弟龜之助召寄、令牢舍所、八兵衞亂氣候へども、師匠五兵衞ニ爲手負候、爲重科八兵衞壹人於獄屋令斬罪、父母兄弟は不及死罪、在所江相返ス、

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政元寅年御渡

京都町奉行伺

一非藏人松室陸奧癇症ニ而拔身を持御所江立入候一件

非藏人松室駿河倅非藏人　松室陸奧

右之もの儀、癇症相煩引籠中、明暮身分之儀を相考、無跡形判斷を附ヶ、何事も此もの立身之吉瑞と相心得、或何方ともなく罷越候樣、誰レ申ともなく相聞候樣相覺候故、宮中江參可申事と不斗心ニ相浮ミ、當正月十一日、宿元を出、暮時後御所江向罷越、宮中江入込、若相支候もの有之候ハヾ、振廻し可申と刀を拔、奧之方江向ヶ參候樣ニ者、幽ニ相覺、其後之儀ハ、彌取亂、一向不相覺段、申口不取留儀ニ候得共、御場所柄江拔身を持入込、宮中を爲騷、其上捕押ニ懸り候もの江手疵爲負、狼藉およひ候段、亂心とは乍申、右始末重々不屆至極ニ付、死罪、

〔御定書百箇條〕酒狂人御仕置之事

享保十六年極
一酒狂にて人を殺候もの　下手人
　但被殺候者之主人幷親類等、下手人御免願申出候共、取上間敷事、

同七年極
一酒狂にて人に爲手負候もの
　享保二年極
　但疵付候者奉公人ハ主人江預け、其外ハ牢舍、手疵かろく候はゝ、預可申候、被疵付候者、平愈次第、療治代爲差出可申事、

同
療治代
一疵之多少によらず
　中小性體に候はゝ　銀貳枚
　徒士は　金壹兩
　足輕中間は　銀壹枚
　武家之家來　江戸拂

享保七年極
一療治代難出もの、刀脇指相渡させ可申事、
　從前々之例
　但町人百姓ハ、銀壹枚、輕キ町人百姓ハ右に准じ、療治代爲相渡可申事

同
延享二年極
一酒狂にて人を致打擲候もの　療治代雖差出ものは、諸道具取上、逢打擲候もの江可爲取、諸道具も無之償不成身上之ものは、所拂、

同同
一酒狂にて諸道具を損さし候者ハ　損失之道具償可申付、不成償身上之ものは所拂、主人其外可相渡方江可引渡、

享保五年極
一酒狂にて相手無之あばれ、自身と疵付候もの、
　但公儀御仕置に可成筋之ものは格別、左も無之ものは御構無之旨申聞、早速引渡可申事、

元文五年極
一同あばれ候までにて、疵付候義、幷諸道具等損さし候事も無之ものは、立歸度由申候はゝ、留置申間敷候、
　但奉行所江訴出候以後にても、右之通可爲致事、

〔諸例類纂　五〕一申七〇　文政七年　正月廿七日、御目付神尾市左衛門殿江差出、二月九日御附札、

酒狂之上、主人之屋敷へ及狼藉候者有之候得共、全酒狂之事故、宥候得共、聞入無之、手ニ餘り候故、無據ぐる〳〵巻ニいたし、主人江申聞、右及狼藉候もの、主人ハ兼而存候ものニ有之、家來ハ一向不存ものゝ故、搦取候次第ニ到、若酒狂人輕き身柄ニも無之候得ハ、搦取候儀無念ニ相成候義も可有御座候哉、乍去及不法怪我人等も出來可仕程之始末ニ御座候得ハ、身柄之差別難相辨奉存候、一體如何相心得可然哉、兼而爲心得奉伺候、以上、

榊原越中守家來

正月廿七日　藤本又左衛門

御附札

書面酒狂人及不法、怪我人も出來可致程之始末ニ到候節、搦取候義不得止事ニ候、乍去其節之時宜ニ寄候事ニ付、差定難及挨拶候、

〔德川禁令考後聚行刑三十二條例〕酒狂ニ而兄江切掛、其身相果候儀ニ付問合、

私知行所武州埼玉郡堺村、百姓幸右衛門忰幸藏儀、弟幸吉と口論之上、幸吉儀手負候間、相果候段申出候ニ付、家來爲見分差遣相糺候處、去月十六日、親幸右衛門夫婦、熊谷宿江相越、留守ニ而兄幸藏儀居山ニ而涼罷在候處、弟幸吉儀、酒給足元も立兼候體ニ而罷歸候間、親共留守之儀ニ候間、大酒致候儀不宜旨申聞候處、幸吉儀挨拶も不仕、家内江立入、脇差を持來、理不盡ニ幸藏江切掛候ニ付、幸藏儀脇差之柄ニ手を掛、無體ニもぎ取候得共、幸吉儀甚だ憤り、右拔身江兩手ニ而たくり付引合申候處、給酔居候事故、足元も立兼、轉掛り、自分之腹江拔身突立、右疵ニ而相果申候旨、幸藏申聞候、依之親幸右衛門夫婦、幷親類組合村役人等段々相糺候處、平日兄弟中惡敷儀も無之候得共、幸吉儀兼而大酒仕、酔狂之上ハ不宜儀も御座候ニ付、親共毎度異見差加候得共、取用不申由、全右體之儀ニ而之始末ニ可有御座旨、外ニ一向心當之儀も無之、勿論右之儀ニ付願ケ間敷儀も無御

座候段、兩親始親類共組合村役人共一同申聞候ニ付、則銘々口書懸御目申上候、幸藏儀何程之咎可申付哉、此段御伺申上候、以上、

八月　　寄合　藤堂駒五郎

下ゲ札

御書面幸吉儀、常々酒狂候者之段ハ、兩親幷村役人組合等申口も符合致候上ハ、今般之始末見留候者ハ無之候共、幸藏申口相違も有之間敷、兄江切掛候者ニ候ハヾ、直ニ打留候而も無子細儀ニ候得共、酒狂人之儀、殊ニ拔身もぎ取候ハヾ、取計方も可有之處、幸吉自身轉掛り、拔身腹ニ突立、右疵ニ而相果候及仕儀候段は、幸藏不行屆不念ニ付、急度叱り被置、相當と存候、以上、

丑八月〇闕年號　石川左近將監

〔御仕置裁許帳 二〕實子を怪我ニ而殺者

元祿五年申三月七日

壹人久右衞門　是ハ平松町九兵衞店之者、此者昨夜酒に給醉、同夜九ツ時分、其身娘五歳に罷成候はつと申者を突倒候處、桶ニ當致絕入候付、氣付抔用候得共、間もなく相果候由訴來ル付、撿使遣召寄、遂穿鑿候處、〇中略前後覺不申程酒ニ給醉、右之仕形不屆成ル故、穿鑿之上牢舍、

右之者、大久保加賀守殿御差圖にて、申三月晦日追放、

〔的例黃紙之寫〕下手人

安永三午十二月、周防守殿御下知、　手限　太田播磨守掛

一武州西新井村金藏變死之儀ニ付、無宿吉五郎外壹人吟味一件、　無宿　吉五郎　同　傳次郎

此吉五郎、傳次郎儀、戶塚村氷川明神祭禮見物罷越、傳次郎任申旨、酒狂之上、最初吉五郎口論いた

しかけ、掴懸り、傳次郎徳利を以、金藏天窓を敲疵付、金藏、相果候始末、傳次郎者勿論、吉五郎とも不屆ニ付、傳次郎者下手人、吉五郎者遠島可ㇾ申付哉、

〔諸例類纂 六〕天保元年寅閏三月、町奉行榊原主計頭樣江差出、內濟相成、

先月十四日、元數寄屋町壹丁目、太右衞門店、居酒屋久兵衞へ、土佐守中間久藏、甚九郎、伴吾、卯吉、熊藏、金次、義七、佐平罷越酒給、代錢拂方之義ニ付、不ㇾ取留儀互ニ申爭立噪、久兵衞方家財打損じ、大混雜之紛、同人召仕幸吉、并山下町喜八店久兵衞召仕岩吉儀、疵受候ニ付、其段町內ゟ申立、御吟味相成、前條久藏外七人儀入牢被ㇾ仰付候處、右前條之通、酒代錢拂方申談、行違之儀より事起り、不ㇾ取留雜言聲高く申爭立噪候段、全酒狂之儀ニ而、外ニ子細無ㇾ御座候、幸吉、岩吉疵所も當時常體平愈、町方之者共ニおゐても、一同申分無ㇾ之候上ハ、土佐守迚も、存寄無ㇾ御座候、和談之上致ㇾ內濟度奉ㇾ存候間、此段御聞濟御座候樣仕度奉ㇾ願候、以上、

松平土佐守家來

閏三月

同四月朔日、町奉行御掛榊原主計頭樣へさし出、內濟相成、

去月十三日、京極壹岐守中間共、途中ニ而酒給、麻布宮村町水茶屋石藏七右衞門店へ罷越、酒狂之上、茶汲女と不ㇾ取留儀色々申爭候ゟ事起り、其場ニ出合候熊吉、其外之者共と及ㇾ口論、混雜之紛ニ、兼而朽損之竹矢來押倒し、石藏、七右衞門家財打損所出來いたし、壹岐守中間常藏、歌次、新助、久右衞門ハ、相手不ㇾ知疵受候處、前條之通、損所も有ㇾ之、今日町內より申立、御吟味ニ相成、追々足輕中間ども御呼出之上、入牢手鎖御預ケ、又ハ病氣ニ付出牢御預ケ等被ㇾ仰付、右體中間共之內、疵人も有ㇾ之候ニ付、其段御屆申上候得ハ、疵養生中御預ケニ相成申候、然處右ハ全酒狂之上之儀ニ而、遺恨等有致來候儀ハ勿論、家財等相壞候申合等致候儀ニハ曾而無ㇾ之、全立噪混雜之

紛、損所等出來いたし候儀ニ而、町方も申分無之、前書疵人等致出來候始末、幷最初町方より御奉行所江御届申上候儀ハ、壹岐守役人共迄爲知も無之、彼是不束之儀共段々相詫相談之儀申出、常藏、歌次、新助、文右衞門義、疵所之處、當時平愈いたし候上ハ、和談內濟仕度奉存候、此段御聞濟被下候樣仕度奉存候、以上、

京極壹岐守家來

四月朔日

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寛保元年極
一辻切いたし候もの　　引廻之上　死罪

〔德川禁令考後聚二十九行刑條例〕人殺幷疵付等御仕置之事

辻切いたし候もの

貞享五辰年六月十四日　　林藤五郎組御徒　町野十郎兵衞

去頃淺草旅籠町ニ而、中間體之者丸腰ニ而罷在候を切殺申候仕形不屆ニ付、江戶追拂被仰付、

〔雪夜閑談〕家光公御上洛幷酒井空印發明の事

慶安元子のとし、將軍家光公御上洛有し時、酒井讃岐守入道空印〇忠勝も御供被仰付けるが、御上洛ノ跡にて、番町小川町邊にて、御旗本の衆中、夜な〳〵出て往來の町人職人を斬殺する事、其數を知らず、依之町奉行所より與力同心を出し、吟味に及ぶといへ共、中々防ぐべき樣もなし、殊に其頃は亂世に間のなき事なれば、何樣打捨置んには、天下の災ともならんと、御留守居の老中より早馬を立て、日々京都へ告る事櫛の齒を引が如し、將軍家酒井空印を召て、如何致し此騷動を鎭めんやと御相談有しに、空印ははや此事は必旗本中の仕業ならんと推量せられし故、此騷動を鎭め候半事いと易き義に御座候、必御心を痛ましめ玉ふ事なかれと御返答申上、板倉內膳正

新案

を以て關東の御旗本中へ被₂申渡₁しは、將軍家御上洛の跡にて、江戸表に於て夜な〳〵辻切等有₂之よし、殊更番町小川町邊は、夜々數十人に及ぶ段達₂上聽₁けるに、將軍家の上意には、世治ていまだ間もなきに、御城近所に於て、殊には旗本やしきの中にして辻切等數多有₂之義、これ旗本中武道の心掛疎き故也、然ば互に吟味すべし、若重てヶ樣ノ事あらば、惣旗本中の越度たるべしと被₂申渡₁ければ、其夜より辻切は止けるとぞ、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從₂前々₁之例

一 足輕體に候とも、輕き町人百姓之身として、法外之雜言等不屆之仕形不₂得₁止事切殺候もの、　吟味之上於₂無₁紛ハ　無構

〔德川禁令考後聚三十行刑條例〕年號闕帶刀人江、町人百姓慮外之儀有₂之、討捨候節取計問合、

式部大輔領分於₂宿場₁公儀御目見以下御家人衆、或ハ御三家樣御家來、又ハ諸家樣御家來等往還旅人又ハ宿場之者、萬一慮外之儀有₂之、不₂得₁止事、打捨御座候節、打捨致候者、其場所ニ差留置、江戸表江相伺、御差圖之上、其所出立致させ候儀ニ御座候哉、又ハ其主人幷當人姓名等承置候得バ江戸表御差圖をも不₂相待₁出立爲₂致候而も不₂苦儀ニ御座候哉、且又討捨ニ相成候者、死骸身元不₂相分₁者御座候はゞ、假埋仕置、取片付之儀、江戸表江相伺可₂申候、領分中ニ而身元相知候者ニ御座候はゞ、御差圖不₂相待₁引取候而も不₂苦候哉、他領之者ニ御座候はゞ、其所江掛合、假埋致置、江戸表江相伺、御差圖之上、死骸相渡可₂申候哉、若相手方輕相見候共、致₂帶刀₁候者ニ御座候はゞ、雙方如何可₂仕哉、此段爲₂心得₁奉₂伺候、以上、

八月　榊原式部大輔家來

姓名闕

下ヶ札

書面御領分內往還ニ而、帶刀人江對し、町人百姓慮外之儀有之、討捨候節、彌慮外者ニ紛なく帶刀人之姓名等被聞糺、怪敷身分ニ無之上ハ、其所江不及留候、死骸之儀、御領分者ハ勿論、他領之者ニ而も、身寄れ爲引取、右始末御用番江御屆而已ニ而可然、住所不相知者ニ候はゞ、其所江死骸取置御申付候方と存候、且又帶刀人之儀、足輕體ニ候共、輕き町人百姓之身分を以、法外之雜言等不屆之仕形ニ而不得止事討捨、右慮外之次第見屆候者も有之於無紛ハ、無構筋ニ付、其心得を以、御取計候樣存候、以上、

戊八月

〔公私雜用集〕一御直參之衆、路次ニ而慮外もの打捨之事
上番之者壹人徒目付一人出向、御直參之由被申候はゞ、家名又ハ組頭之名承屆、左候ハゞ御家來中壹人御殘置、御通可被成由可申候、若御聞屆なく急被申候とも、御門前ニ候得者、番人之不念ニ罷成候、不私儀候由御斷可申候、夫共理不盡成仁ニ而、理非不聞入、欠ぬけ候とも、徒目付一人足輕二人何方迄もえたひ行、屋敷見屆可申事、

〔公私雜用集〕一關播磨守樣御家來給人格之仁、宇田川ニ而月行事水打居候所へ通懸り、水打懸候所、咎メ候得者、返答も不申候付、打捨ニいたし、其分にて大屋五人組江も不屆通候所、所之もの見附、追走捕候而、御奉行所江御訴申候所、早速揚やへ參候、いたし方不宜候付、下死人被仰付候由、
一長澤壹岐守樣馬取、下馬ニ而茶買を切り候、元文四年三月、右仲間ハ下死人相成候例、中間體之者ハ、人討候へバ下死人、徒以上ハ、依品下死人也、

〔機務要覽二〕萬石以下家來、慮外者伐捨候例、
一寄合澁谷勘九郎家來口之者、知行者ニ而候處、勘九郎致外出返之節、途中ニ而侍ト致慮外、足ニ而蹴踏候程之儀ニ候處、侍到而心妙ニいたし置、致供罷歸候處、扱人等這入、彼是申候處、其節ハ

私和

侍何分承知無之、翌朝右口之者中間、右侍伐捨候而自分部屋江罷歸リ愼罷在、同役を以屆候ニ付、一家中之儀ニハ候得共、見分ニ而も可申上哉之趣、内々安藤大和守方問合有之候處、大和守ニも、御屆ニも不及と存候得共、碇と例も無之ニ付、町奉行小田切土佐守江承合候處、屆ニも不及、處外者之儀、死骸知行請ニ而も江戸宿ニ而も爲引取宜旨ニ付、其趣及挨拶、知行所江モ委細申遣、請人村役人呼出候處、一言之儀可申樣無之、早速出府難仕、直ニ取片付之儀相願候ニ付、相濟候由、享和元酉年五月日、右委細之儀大和守方有之、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寛保四年極追加
一 忰人に被殺候を、任扱内證にて事濟候親　所拂

從前々之例追加
一 邪曲を以親類縁者人を殺候義、內證にて取扱事濟候もの、　過料
　但被殺候方之親類も同斷

同追加
一 人殺を取扱之もの有之、内證にて事濟、殺候者を爲立退候義迄に不存、不訴出においては、
　名主　中追放
　組頭　所拂

同追加
一 親被殺候死骸見屆候得共、物入を厭ひ、村役人等相談之上不訴出押隱候義顯おゐては、
　當人　遠島
　名主　輕追放
　組頭　所拂

〔御定書例書〕人を殺候時、金子を以取扱、事濟候者御仕置の事、

延享元子年十月御仕置の例

上州青梨子村十左衛門五人組
次郎
礒右衛門
幸八

新右衛門

右の者共、同村十左衛門儀、金古村非人を打殺候に付、十左衛門妻子迄も可致難儀段、氣の毒に存、金古村役人共へ及内談、右の者共金子才覺致し取扱候段、非人の儀候共、人殺を金子を以可取扱筋無之、不埒に御座候間、壹人に付過料三貫文ツヽ可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶暦十二午年六月

評定所一座江

上總國殿臺村兵左衛門ト同國富田村惣五郎人殺出入一件、此度御仕置伺書被差出候、右吟味書之趣ニ而ハ、雙方共人殺之當人ニ而ハ無之、兵左衛門ハ惣五郎江村方ゟ金子を遣取扱候由申之候、惣五郎ハ金子取候儀ハ無之旨申之、此所雙方申張不相決由ニ而、數年吟味相掛候、右一件ハいづれ江相決候共、重御仕置ニ相成候ものニハ無之、過料手鎖等可申付者ニ候、勿論雙方申張不相決候はバ、得ト相糺候儀勿論之事ニ候得共、其内ニも吟味不相決候得バ、重御仕置ニ相成候者ニ而、生死ニも拘リ候程之義ニ候バ、年數懸リ候共、得と決著可致儀、夫迄も程合も可有之事ニ候得バ、輕重之ものハ、猶又差略も可有之事ニ候條、以來右之趣可被相心得候、

六月

〔御仕置例類集一ノ二〕文化六巳年御渡

火附盜賊改大林彌左衛門伺

一盜賊御仕置一件之內、親之變死を內證ニ而取置候もの、吟味之儀ニ付評議、〇中略

書面忠右衛門江引合候もの共は、大林彌左衛門方ゟ請取、吟味いたし可申上旨被仰渡、奉承知候、

巳五月七日　小野若狹守

鮨

附

書面申上候通被仰渡候旨被仰聞承知仕候、

巳五月七日　評定所一座

當三月九日評議いたし可申上旨被仰聞御渡被成候、大林彌左衛門相伺候、下落合村無宿直次郎初筆、盗いたし候一件御仕置當之儀ハ、振候儀相見不申候、然ル處武州小村田村忠右衛門儀、親伊八他村ニおゐて疵請變死いたし候を、酒狂之上行倒相果候間、死骸引取度段、地頭江申立、先方村役人江再應掛合引取候趣ニ有之、御定書ニ親被殺候を、物入等を厭ひ、不訴出もの、當人遠島、其外村役人共も夫々御仕置ニ相成、右體不輕儀を疎ニ相心得、撿使も不請、死骸引取候始末ハ、全物入等を厭ひ取計候哉ニ相聞、尤地頭ニ而も其儘聞屆置候ハ、是又取計方不行屆、其上伊八を葬ル寺院之糺も不相見、吟味不行屆儀も御座候得共、右吟味之儀ハ、彌左衛門方ニ而吟味難成筋ニ付、盗賊ニ拘り候者共ハ、彌左衛門方ニ而御仕置申渡、忠右衛門江引合候もの共ハ、公事方御勘定奉行江引渡し可申旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、

巳四月

〔翁草五〕密夫非密夫論之事

享保年中、總州の内妻木何某の領分、百姓誰とかや云者、他へ聟養子に行、夫婦合は宜敷と雖、養父と不和なるに仍て、止事を不得家を出る、然れども妻とは未縁切れずして、折節は養父の目を忍び行通ひけるに、いつの程よりか餘の男に契睦ぶと聞、或時忍び行て樣子を窺ふに、案の如く彼男來て睦敷體を見屆ケ、密夫に紛れなしと思ひ、飛込んで只一ト打に斬る、女驚き逃る所を、後ロより斬付る、去れ共是は淺手なり、此騷に家内近所より下り合て捕之、此義支配所江訴ふ、切られたる方よりは解死人を願切たる者は、密夫を殺せしは切捨勿論なりと云、評定所に於て決せず、式日に出て雙方對決に及ぶ、列座の評議に、聟一度其家を出ると雖、女の方へ離別狀を送ざる內

は、夫婦の縁切ず、然れば密夫と云事勿論也と多分被申、又其内に異議も有て、猶再吟味有べき由にて、其日御聞懸ヶニ成、時之御勘定吟味役杉岡彌太郎云く、惣て女、男の家へ嫁して離別の時は、縁切の狀を取る事勿論なり、男は聟養子に行て不縁なる時、其家を立退處離縁の證據也、奚ぞ其男ゟ證狀を求めん、其所以は、家女に家相續させんが爲に壻を取し主意なれば、其家を離るゝ所が則相續せざるの證と成れば、是離別狀に不及物歟、殊に其男遠國抔へ立退、行衞知がたき時は、一生其女やもめたらん、旁以其夫立出る日より他人たるべし、然れば常の解死人の罪に當らん歟と被申しかば、其儀に評決して、件の男成敗に被行しとかや、

〔評議書〕寛政元年閏六月十七日

伊豆守殿江下り物一冊壹通相添紀伊守信濃守甲斐守立會

御直ニ上ル、酉七月九日御同人承付候樣、近藤吉左衞門ヨリ受取返上、〇中略

當四月廿三日、御渡被成候、長谷川平藏相伺候、下總國沓懸村百姓平五郎外六人、御仕置之儀評議仕候趣、左之通御座候、

下總國猿島郡沓懸村百姓　平五郎

右之者儀、浪人里見九郎兵衞ニ意恨有之、打殺候心懸ヶニ候得共、壹人ニ而難叶、金次郎ニ手引致貰、外無宿三人相頼、四人ニ而園治方ニ罷在候九郎兵衞を引出し縛り、がけ迄連來候砌、金次郎ハ不罷在、右無宿三人と申合、四人ニ而竹木を持て致打擲、息絶候ニ付、死骸ハ川江突流し、又者市場ニ而賣溜錢盗取、其外在々市場ニ而、腰錢袂錢拔取候分共、都合錢高貳貫三百文程、途中之盗致候段不屆ニ付、死罪可申付哉之旨相伺申候、〇中略

一前書平五郎金次郎召捕候砌及承候由ニ而、浪人里見九郎兵衞後家むめと申もの申出候ハ、右平五郎金次郎外ニ三人申合、夫九郎兵衞打殺候もの之由申立、訴狀を以、右之もの立合致勝負度

旨相願候、女之身分ニ而、奇特成願ニハ存候得共、火附盗賊改江願出候ハ、筋違之儀故難取上、其向江可相願旨爲申聞、願書ハ差戻申候、尤むめ儀輕キものゝ儀、殊ニ女之身分ニ而願出候、奇特成儀ニも御座候間、如何取計可申哉之旨相伺候段、平藏申上候儀、重て評議仕可申上旨被仰聞候、此儀むめ者、平五郎外壹人被捕候砌、夫九郎兵衛を打殺候ものゝよし承、願出候迄ニ而、兼而夫之敵付ねらひ候とも不相聞、親夫等被殺候を、妻子抔願出候ハ、尋常之儀ニ御座候間、稱し候程之儀ニハ有御座間敷、去ル寅年、桑原伊豫守御勘定奉行之節、手限伺之上、御仕置申付候、下總國神崎本宿ニ而捕候、兵十一件之内、水戸殿領分、常州岩船祝町一向宗願入寺足輕ト申立候、願入寺門前百姓與三郎養子小助吟味中願出候、同郡箕輪村善五郎弟清五郎儀、去戌四月廿八日夜、善五郎臥罷在候節、怪敷もの立入、善五郎江深手爲負逃去り、右ハ善五郎及口論候岩槻宿欠落致候小助ニ無紛旨、善五郎申置相果候ニ付、其後小助を付ねらひ候得とも、見當不申候處、奉行所江被捕候段及承、兄之敵を討、鬱憤晴度旨申出候得共、公儀御仕置ニ成候上ハ、敵を爲打候筋ハ無之旨、申渡候例も御座候間、公儀御仕置ニ成候ものを、夫之敵ニ候迚爲討候筋ハ有御座間鋪哉ニ奉存候、然ル處平藏方江願候ハ筋違と存候間、其向江可相願旨申聞、願書差戻候段申上、尚又如何取計可申哉之段相伺、趣意兩端ニ奉存候處、平藏方ニ而願不取上段者、相當之儀ニ御座候間、平藏方江ハ可被及御沙汰筋ニ無之、追而むめ願出候節、其向々江御沙汰可有御座旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、

附　檢使

徳川氏ノ時ハ、殺傷ノ事アル毎ニ、檢使ヲ遣ハシテ、其死屍及ビ負傷者ノ狀ヲ按檢スル制ニシテ、其自殺、行倒ニ係レルモ亦之ヲ檢ス、其或ハ他殺ニ出デンコトヲ恐ルヽナリ、

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保四亥年八月

一檢使指遣候事首縊、自害人、行倒もの相果候分、夜ニ入候ハヽ、翌朝訴出可申候、自害人、口論手負、相手相知レ不申候共、未相果候ハヽ、夜中ニ而も早速可訴出候事、

〔檢使階梯〕檢使之儀ニ付、御達書幷伺濟等之事、

一私領幷他支配之人殺疵付訴出候ハヽ、向方江立會之儀掛合、手代家來見屆ニ遣、村方ニ著いたし候ハヽ、夜ニ入候共、早々雙方村役人爲見屆、疵所見屆書付取之、疵人は醫師之書付茂取、始末一ト通リ承、口書取之、相濟候ハヽ、早々引拂歸府いたし候樣可被申付置候、私領引合は、評定所公事、他支配引合は內寄合公事ニ成候間、察當拆申吟味詰候ニは不及候、右之通取計候得バ、翌日ゟ出立も相成、致逗留候共一日ニ而可相濟候、勿論遠村之親類、或ハ引合之者は、場所江呼出候ニも不及候、

朱書 私曰、本文遠村之親類或ハ引合呼出ニ不及候と有之候は、檢使限ニ而事落著可致候一件之事と相聞、其餘手掛り無之、追而可訴出旨可申渡分、又は相手自殺いたし、雙方落命之類ハ、檢使限ニ而落著可致候ニ付、一兩日位手間取候共、成丈ケ引合之もの迄相糺、歸府可致候、夫ゟ手間取リ候分は、時宜に應じ取計可申事、

一殺候もの、疵付候もの、欠落いたし候共、手懸知候ハヽ、品ニ寄、二三日又は四五日懸り候事も可有之候得共、夫ゟ日數掛候儀は無之筈ニ候、無據日數逗留いたし候ハヽ、其場所ゟ爲致注進、猶又歸府之上承、書付を以可被申聞候、

一殺候もの疵付候もの、或は手傳ひ候もの、私領之者ニ候ハヽ、不取逃樣手當申付置候樣、立會之家來江申談置、御代官所之ものゟ、早々出訴爲致可被申候、勿論親類共ニ村役人壹人差添出候得ば、相濟候間、追而奉行所ゟ呼出候事も可有之候得共、先出訴之節ハ人數多差出候事は無用

ニ候、

一殺候もの、疵付候もの、御代官所之ものニ候ハヽ私領之方訴訟方ニ候間、早々公事方御勘定奉行月番江添使者を以出訴為致候様、立會之家來江申談、右殺候もの幷手傳候もの、疵付候もの不取逃様手當いたし、村役人差添、手代召連歸府いたし、其旨可被相屆候、

但本文致手當候疵付者、疵人致平愈候共、片輪ニ可成歟と醫師申候もの之事ニ候、片輪ニ不相成農業渡世之障無之相見候疵付は、其親類村役人江預候許ニ而手當ニハ不及候、

右両ヶ條、御料私領何れ之出訴ニ而も、公事方月番ニ而請取候間、伺は立會之家來江申談、手當呼出ニ而は、又候場所江手代家來罷越、二重之入用も懸候間、場所江罷越候手代家來申合、疵人平愈不致候ハヽ、養生申付置、其外出訴可致もの幷相手之者ども、夫々手代家來召連候方、手廻しも宜候、倂私領は家來之存寄次第ニ候間、强而申勸メ候事ニは無之候、此旨呑込取計候様可被申付候、

一人殺は勿論、片輪ニ可成疵付は、決而内濟は難成候、少分之疵ニ而平愈之上、片輪ニ不相成農業渡世之障無之候ハヽ、内濟承屆候、倂其類於場所取扱人有之内濟為致度旨申候共、疵平愈いたし候上ならでは難決候間、先吟味日延願書為差出、手代歸府次第可被相伺候、

一前々關八州之内、村方之疵付出入内濟は、雙方幷扱人等奉行所江呼出、疵之様子見屆、濟口承屆候處、其後區々ニ相成、別而近來は多分伺書江致付札相渡候、尤右下知相濟候ハヽ、雙方御代官宅江呼出、疵見屆候上聞濟可被申候得共、迚も一件江戸江呼出候事ニ付、以來ハ急度奉行所ニおゐて濟口可承屆候間、兼而可被得其意候、

朱書　私曰、本文疵所見屆手限ニ可致旨、再御達ニ相成候、

一御代官一支配之儀は、手限ニ而被相糺候事ニ候得共、都而右ニ准じ不手間取様精々手代江可

被申付候、

右之通相心得、手代共江も無間違様、可被申付置候、以上、

天明元丑五月十三日

山　信濃守

桑　伊豫守

〔袖珍民事秘書　檢使〕初心之もの出役心得之覺

一其村江著直ニ見出人幷組合、親類、村役人呼出、名前書留、場所江案内爲致、一同見屆可申旨申渡、死骸總身下部迄一々相改メ、年齡人相等書留、少々たりとも疵有之バ、何方に長何寸之深切疵歟淺切疵歟、摺疵か、何ヶ所と書留、自他之樣子見極候事肝要ニ候、聊ニ而も怪敷樣ニ相見候ハバ、再應遂吟味、雖もつ一々改書留、村役人江預ケ、死骸ハ其儘差置キ、急度番人可付旨、且村內壹人別近村役人早速見屆候樣可申遣旨、他支配他領も同樣、若見知候もの丶由申候ハヾ、尙更心當無之旨申候とも、早々可申出旨村役人江可申渡置、他支配他領之者と治定之上は、立會撿使ニ成候間、其段役所江急御用狀差出、其向江立會之儀及達、先方出役可致見分、他支配他領江出役のものより呼出、書付は勿論、口達も致間敷、右見屆濟候ハヾ、最寄寺院江假埋可致旨申渡、其上ニ而一件之もの可遂吟味、則手續左ニ記ス、

吟味之手續覺

最初吟味　見出人一名、二歲、　三持高　四家內人數　五農業之外稼　六見出之始末

縱令

當月幾日何時頃何方江參候途中、村內字何と申處往還ニ何歲位ニ相見候男女物主歟、行倒口論自害歟相果罷在候ニ付驚入、直ニ名主誰方江爲相知、早速村役人一同罷越御訴申上、爲御見分

御越被成、私共見屆被仰付、死骸御改別紙御見分書之通相違無御座候、右變死人兼而見知候ものニも無之、何時何方ゟ罷越相果候哉、曾而不存儀、餘人之仕業とは不相見、夜中通掛り持病差起、行倒歟、貧窮ニ迫り、其身と首縊歟自害歟相果候儀ニも有之哉、外何ニ而も心當無之、怪敷風聞承及不申候段申上候處、被仰聞候は、怪敷儀有之候を隱居申紛候儀ニは無之哉、有體可申上旨再應御吟味ニ御座候得共、前段之外可申儀無御座、若隱置、後日露顯仕候ハヽ、何樣之御咎被仰付候共違背仕間敷候、

二度目　組合
親類　之者

一銘々名　二歲　三變死人之始末　四心當　五怪敷風聞　六見知候ものニ無之哉

三度目　村役人

一銘々名　二歲　三村高家數人別　四變死人始末　五村内一人別糺　六怪敷風聞心當之有無　七見出人誰、平日之行跡、家内取〆等、

右銘々申口符合不致候ハヽ、再應相尋、符合之上口書仕立、申口ニ寄、夫々致吟味候事、

〔地方落穗集九〕手負死人見分心得之事

一手負疵改之事、總て人間眞向キ幅を壹尺貳寸ニ取ル、横之三増倍也、横之身を四寸に取也、

一打込疵は、長之四分一を深みに取る也、

一疵之幅を取ざるもの也、是知ざる故也、疵口ははぜ返り、兩方へむくれるもの也、尤元來疵に幅はなきもの也、口傳、

一横疵は横身を四寸と取故一倍に切候ても四寸也、向腹へ廻りたる疵は深し、又切下と唱べし、向前同じ樣に横切たるは切込深きなり、手前下り向ふ上りたるは切下ケ也、併横疵は横疵に

立る也、何程切下方多く候とも、本體は横疵を以て體に取るなり、

一右手疵之樣子、撿使之者、委細容體を書付、口書を取添て上る也、口書の取樣末に出す、

一右手負死人見分致樣之儀は、衣服等を脱せ改候こと決して無之事ニ候、隨分手負の者身體痛まざる樣、隨分心附見分すべし、衣服之上より切候疵ニ候はゞ、其所衣服を切ほどき、まくり上置見分すべし、帶など解せ候こと是亦宜しからず、氣弛みて絶入ことあるもの也、

一腸抔切口より出て、疵口見分成難き時は、平皿の蓋へ眞綿か吉野紙を敷き、其綿を下よりそッとすくひ上ゲ候得ば、腸も分り、疵口も知るゝ也、但し此の如き時は、切口何寸、腸何寸出ると書付べし、深は記さゞるなり、

一都て手負の者見分致候はゞ、其道の醫師を呼び寄せ、手負人の容體等をも尋ね、右體取扱は醫師に致させ、見分計り致すべし、尤も手負の助と成なり、不案内にて取扱ひ、何ぞ失出來候へば、役人の不調法になるなり、最初療治に掛り候醫者成ば勿論醫師の口上書を取べきなり、

一疵口寸法改之こと、曲規を以て寸を取るべし、丸ミの形に寸を取ば、疵口格別長くなるもの也、曲規を左右に立一文字にかねを當て寸を取るべし、

一總而撿使ニ罷越候節ハ、渾發寸を持參すべし、手負等疵口見分抔に渾發寸を以て取扱候へば、體も能く理方多し、

一手負には百足付ことも有もの也、山鳥の尾の羽を上に指ておけば、決して付かざるもの也、

一手負之口上書を取候はゞ、隨分念入、よく聞糺し取べし、總て手負は、疵の輕重と其人の氣性に由て口亂るゝことあり、今迄正氣に物言ふ内に、心氣の疲れに依て、ふらりと本心を取失ふものなり、箇樣の節は、叱り勵して氣を付べし、されば肝要の事を聞くには、肝要の事計りを直に押返して聞取べし、先ッ第一切候相手を承るべし、幷に如何樣の意趣にて切られ候哉の旨熟と

可承也、外之儀は氣亂れ申口不都合になるとも、相手之儀慥にいふものなり、所の者も右の趣承り傳へ候はゞ、奧書に所の者の申す趣をも書加へ取べし、又一向申口亂れ、前後正體なきこと申候はゞ、取用ひ難き趣、立會の親類所の者ゟ役人共ゟ其趣の書付を取べし、其上は其節居合候者歟、切られ候場所近所之者、野邊なれば、其邊に作いたし居候者歟、其外少しにても手掛り有之候者を僉議を遂べし、吟味の致方手荒なれば、却て言はざるものなり、心得あるべきことなり、

一手負人之口上書には、其者印形致候儀、當人は身體不自由にて自由に不成ニ付、印形致し難き時は、所の名主又は親類の內重立候者へ受取らせ、手負人誰申口相違無之に付、右の者印形拙者受取代として口書へ印形仕候との旨文言の末に書加へ取べし、

一手負人の口書は、其者の名の脇へ當何の何拾歲と書べし、

一右親類、村役人、或ハ斬られ候場所の近所の者、或は家の內の手負ならば、其宿家內之者、隣家向家等吟味の上口書を取るべし、其外其節の時宜により、口書取べき類多くあるべし、兎角吟味の趣種々にならぬ樣に約めて取べし、

一手負見分の節、添撿使參候はゞ、口書は兩人相別れ間を隔て、相口を取こともあり、是は手負と妻子又は親類家來等其外立會候者の申口を引分て聞き吟味致し、申口の合か合ざるかを見る爲なり、一人見分のときは、手負の口上を取り濟し上にて、座敷を隔て、他の者の口を問ふべし、尤も手負の口書には、親類村役人承知の印形を取べし、其外の者の口書は村役人計り立合せ印形取べし、○中略

一死人は疵の深さを書に及ばず、長さ計りを記すべし、

一手負見分に罷越候節は、先ッ名主の宅に著し、委細の樣子を尋ね承り、食事等を致し、隨分心を落

著、始終の工夫を致し、靜に罷越ス義第一なり、口傳

一右手負人に付、大勢科人等も出來候様に候はゞ、隨分勘辨を致し、事を小く濟候様心得勘辨致事肝要なり、但しかく云へばとて、肝要の儀を見遁すは惡し、○中略

一都て吟味の致方は、扇子を開きたる如くなすべし、扇子は末廣けれども、元にて束ね、要を以て〆たるものなり、吟味も此の如く廣がりたる事を、次第に縮める様に取計ひ、束ねて〆まりよき様にする心得第一なり、

一見分吟味相濟、口書殘らず取揃候はゞ、留メ證文と云を取ことなり、是は當人の親、妻、子、幷に親類、村役人、百姓共の印形にて取べし、其文は、此度何々の儀に付、御見分として御越被成候處、御見分御吟味被成方、少しも御非分なる儀御座なく、毛頭申分御座なく候、尤も御見分を請、殘り候場所も無御座、幷に御吟味に付、申上殘し候儀無之、御願申上べき筋決して御座なく候と申文言にて、猶其節之品に依て書加え、然るべき儀は書添、右の者共の印形を取べし、但し村役人は奥書に立會、文言にて右の趣を書加へ、印形を取るべし、

一右の外御定の木錢證文を取べし、尤是亦御逗留中御非分なる儀、又御馳走がましき儀一切仕らざる趣書加へ取るべきなり、

〔檢使心得帳〕水死見分之事

一死體を水中江〆づめば水を不呑故、總身腫れ不申候、いきかよふものを水中江〆づめ候得者、總身はれ申候、

燒死見分

一死體を火中江入、燒死に紛申候而も、死體故燒ケあしく、いきかよふ者を火中江入候而ハ、口鼻目ゟ血〆る出、くすぶり燒がたし、依之死ニ無相違、

檢使願書

首縊見分

一自縊は首筋延び、經目くびれ込、鼻よだれをたらし、兩足江血下り太くなり、餘人の仕業には無之、死體をかけ候は、前文之次第に無之、自縊に無之故、隣家幷親類糺合不申及、又はう〳〵等近村々相糺、

右三ヶ條者、得と吟味可仕事、

〔地方落穗集十四〕口論撿使願書認方

乍恐以書付奉願上候（以下四ヶ條端書皆之に倣ふ）

一何國何郡何村誰親類誰申上奉り候、右誰儀用事有之、幾日何時罷出候途中、何村誰と口論に及び、何所々々へ何程の疵を蒙り候に付、早速醫師相掛手當仕候得共、苦痛強く、存命計り難く存じ奉り候に付、此段御訴へ申上奉り候、何卒御慈悲を以て、早速御撿使下し置れ候樣奉願上候、以上、

年號月日

何國何郡何村
當人誰親類　誰印
組合　誰印
村役人　誰印

宛所

行倒れ死人有之節撿使願書認方（端書上に同じ）

一何國何郡何村名主年寄百姓代申上奉り候、當村字何と申所に、年齡幾歲位に相見へ候、（百姓體非人體）か（男女）か行倒れ相果罷在候、當月幾日誰見付相知せ候に付、早速罷越見屆候處、衣類何品を著し、所持の品何々有之、全く自分と行倒相果候と相見へ候間、此段御訴へ奉申上候、何卒御慈悲を

以て早速御撿使下し置れ候様奉₂願上₁候、以上、

何州何郡何村
見付人　誰印
百姓代　誰印
年寄　誰印
名主　誰印

年號月日

宛所

見分書

〔吉岡公裁例證 乾〕上州花輪村粂藏殺害ニ逢候儀ニ付申上候書付

當月日、水野若狹守殿江御屆申上候、私御代官所上州勢多郡花輪村百姓幸八悴粂藏儀、隣村同郡小中村百姓久次郎ニ殺害ニ逢候旨訴出候ニ付、撿使として手代差遣、見分吟味爲₂仕候處、粂藏死骸疵所、月代ゟ額江掛長二寸五分程、深切疵壹ヶ所、左眉之上長三寸五分程、同斷壹ヶ所頭頂左鬢江寄長三寸程、同斷壹ヶ所左鬢之中後江寄長貳寸五分程、同斷壹ヶ所同所ニ長一寸五分程、同斷壹ヶ所左耳之上長五寸五分程、同斷一ヶ所同所ニ長二寸五分程、同斷一ヶ所同所ゟ首筋江掛長五寸五分程、同斷一ヶ所左肩首根江掛長二寸程、淺疵壹ヶ所左肩中程長一寸五分程、かすり疵一ヶ所左之手首長三寸三分程、深疵一ヶ所同所長一寸程、かすり疵一ヶ所右膝頭長二寸八分程、深疵一ヶ所都合拾三ヶ所疵請、花輪村百姓三郎右衛門居宅中之間椽側敷居之上江横ニ倒相果罷在、右三郎右衛門幷變死人粂藏親幸八其外一同吟味仕候處、當月朔日夕七ッ半時、三郎右衛門儀者、畑ゟ取來多葉粉を臺所ニ而縄ニ挾罷在、尤風烈ニ付、這入口者戸を建寄、中之間椽側付之所障子を壹枚明置候處、周章々敷驅來候もの有之、右障子明置候場所江驅込及₂見候處、百姓幸八悴粂藏ニ而引續小中村百姓久次郎、拔身を提追掛ヶ來、粂藏江切掛候之間、打驚可₂差留₁といたし候處、

三郎右衛門迄江切掛ヶ候様子ニ付、棒を以可取支と存候内、數ヶ處榮藏江爲疵負、相手久次郎逃去候節、隣家迄三郎右衛門も驅付、一同追掛候得ども、行衛見失ひ榮藏儀ハ深疵ニ而息絶、何程之義ニ而事起り、榮藏を追欠來及殺害候哉、何ニ而も子細不存旨三郎右衛門申候、榮藏親幸八幷親類組合村役人共儀者、何程之子細ニ而榮藏を及殺害候哉、何ニ而も久次郎ゟ意趣遺恨を請候風聞も不承、三郎右衛門江對し願筋申分者無之間、相手久次郎行衛吟味相願候旨、一同申候、久次郎母くら幷親類組合、村役人とも吟味仕候之處、久次郎儀心願有之、常州鹿島江參詣いたし候旨申し、當月朔日朝四ッ時頃宅を罷出不相歸候間、何樣之儀ニ而榮藏を及殺害逃去候哉、行衛幷子細不相辨旨申立候間、榮藏死骸者、親幸八親類組合村役人ども江假埋申付置、久次郎行衛手掛不相知候間、親類組合村役人ども江嚴鋪日限尋申付置、撿使手代場所引拂申候、委細之儀者追而可申上候得共、此段御届申上候、以上、

午九月〇文化七年

吉川榮左衛門

〔袖珍民事秘書撿使〕御見分書

兩御代官所和州吉野郡川股村高持百姓

長右衛門 酉三十一歳

一變死人

但額長壹寸程打窪み有之、外疵所無之、口鼻ゟ出血いたし、同人居宅座敷ニ相果罷在候、

右は當月四日、右長右衛門儀、隣村平尾村百姓權十郎方江日雇ニ被相雇罷越、材木山出しいたし候砌、右材木ニ被打相果候段御訴申上候處、爲御撿使被成御越、私共一同爲御立會死骸御見分御座候處、書面之通相違無御座候、依之連印一札差上申候、

右長右衛門親類 源七 印

同人弟 新三郎 印

醫師口上書

酉十一月五日

組合總代　太十郎印
百姓代　半次郎印
年寄　安右衛門印
庄屋　太一郎印

〔寨政秘錄坤〕御檢使之節醫師口上之事

口上覺

一何町何屋何右衛門借屋何屋何助方父母誰儀、同借屋井戸江はまり候由ニ而、今幾日朝何時頃、私へ療治之儀頼來り候ニ付、早速罷越見受候處、絶脈仕候得共、心下温り御座候ニ付、神闕ニ灸治仕、其上何々湯相用候處、藥汁少々相通シ候得共、急變差發、今何時頃養生不叶相果申候、

右之通相違無御座候、已上、

何町醫師

年號月日　本道外科　何ノ何庵

御所

變死人檢使

〔記事條例六〕寛政十二申年四月五日、中西千左衛門を以上ル、同年十月八日、雨宮雲九郎を以御下ケ、

御勘定奉行衆御掛に而、江戸宿に罷在候者、異變之節、檢使之儀、其外品々奉伺候書付、

中嶋三郎右衛門
藤田六郎右衛門
廣田清六郎
由比彌八郎

中村八郎左衛門

御勘定奉行衆御掛御吟味筋、又は公事出入有之在方之者、江戸宿に罷在候内、變死致候節、撿使被遣方、幷立合之有無、朱書に認候通、區々に御座候、右は御吟味筋等之始末にも寄、其節々不同に相成候儀に可有御座候哉、訴方を見合候得ば、江戸宿共、兩御役所江願出候分は、撿使被遣、御勘定奉行衆江願出候得ば、被方ゟ撿使被遣候哉にも相見、何故に御座候哉、譯は相分不申候得共、何レにも他之御掛りものに御座候上は、御吟味筋等之輕重、幷訴方に不拘、以來は其御掛より撿使被遣、兩御役所ゟは立合之者御差出被成候積相成候はゞ、一定仕可然哉奉存候、尤寺社奉行衆御懸り之分は、別紙之通相極居候に付、則奉入御覽候、

朱書 寶暦十一巳年十月十四日

一駿州駿東郡菅沼村名主六郎兵衛貸金出入ニ而、江戸宿ニ止宿中、自害仕損候處、北御役所江撿使願出、町方より撿使被遣、尤御遞り安藤彈正少弼殿ゟ立合之者出候哉、其段者相知不申候、

天明四辰年七月八日

一常州眞壁郡川澄村百姓三郎右衛門儀、桑原伊豫守殿ゟ、江戸宿江御預ケニ相成居候處、井戸江入相果候處、其節御掛りゟ撿使御差出有之、町方ゟ立合之者被遣候、

寛政元酉年五月十三日

一野州都賀郡合戰場宿問屋平右衛門儀、宿掛り諸入用割合之儀ニ付、肥前守様御先役中出訴仕、江戸宿ニ罷在候處、自害致し相果、其節御掛ゟ撿使被遣、町方ゟ立合之者出不申候、

同十年年三月廿五日

一武州橘樹郡川崎宿百姓又右衛門同居彌右衛門儀、女出入ニ付、御代官大貫次右衛門掛ニ而、

江戸宿ニ罷在候處、大川內ニ而水死致し、其節次右衛門ゟ撿使參り、町方ゟ立合出不申候、

御付札

寺社奉行掛リ取計之通可被相心得候、御勘定奉行江も申談置候、

一自害致シ相果候類、古來者夜中訴出候而も、翌日撿使罷遣候處、いつとなく夜中も撿使被遣候樣ニ相成來申候、右は享保年中、名主共相願候趣、幷翌日撿使被遣候舊例數多御座候處、近來之通、夜中撿使被遣候得者、町入用も餘慶相懸リ可申候間、以來口論等ニ而相手有之儀抔は格別、自分と相果候類ハ、古來之通、夜分訴出候とも、翌日撿使罷遣候ハヽ、町人共勝手ニ相成難有可奉存儀ニ付、右名主共差出候書付奉入御覽候、

御付札

口論等ニ而相手有之分、或子細有之致自害候分、且手負候者相手不相知候共未相果分者格別、其外ハ夜分訴出候共、翌日撿使遣シ候樣可被相心得候、

一亂心致候者、檻入之儀願出候節、見分被遣方、前々區々ニ付、以來ハ最初見分之者被遣候上、願之通被仰付、其後快氣致し、檻取拂之儀願出候得者、又候見分被遣候筈ニ、去ル酉年被仰渡候處、筑後守殿御勤役中、檻取拂之節、見分不被遣儀も御座候得共、以後も右被仰渡を相用、前後共見分被遣候方ニ相心得可申候哉、

御付札

可爲伺之通候、

一武家方江年寄同心撿使ニ被遣候內、御三家方、御連枝方、御老中方、若年寄衆は勿論、北御役所ニ而者、拾萬石以上之大名衆江は、與力差添被遣、南御役所ニ而は、萬石以上江は差添之與力被遣候、元來御先柄又は大家抔ニ而、同心共計被遣候も如何ニ付、與力差添被遣來候趣ニ及承罷在

候間、以來ハ十萬石以上江計可被遣候哉、又者萬石以上江者都而可被遣候哉、何れにも御雙方御同樣ニ相成候樣仕度奉存候、

御付札

萬石以下ニ候共、侍以上者與力罷越候儀ニ候哉、一體之仕來をも可被書出候事、

御付札

以來者、十萬石以上江計與力差遣、萬石以下たり共、徒以上は是又與力差遣候積り可被相心得候、

〔檢使階梯〕自滅人一件

武州折原村市兵衞父藤兵衞自滅見分吟味伺書

去月廿七日、先御屆申上候私御代官所、武州男衾郡折原村百姓市兵衞親藤兵衞、致自滅候段訴出候ニ付、早速手代差遣見分吟味仕候趣、左ニ申上候、

私御代官所武州男衾郡折原村百姓市兵衞親

一自滅人　藤兵衞 巳八拾貳歲

但臍之上竪貳寸程突疵壹ヶ所

右之外疵所無之

右藤兵衞悴市兵衞、同人女房とよ、藤兵衞女房ゑか、一同吟味仕候處、市兵衞儀、高二石餘所持いたし、家内五人暮、農業渡世いたし、藤兵衞は先達而隱居いたし、極老候處、折節取昇候持病有之、既ニ三ヶ年已來再發、氣分不揃ニ成、亂心體ニ付、癇病症相募候上は、圈入等之手當願立も可致旨親類、組合、村役人相談も有之候得共、餘命も無之身分、不自由爲及候而は不本意之至、且は老衰之上ニも有之身分ニ付、追々見合心付罷在候内、次第ニ快方ニ相成、近頃ハ最早全快體ニ相

成候間、去月廿二日、市兵衛は所持之畑江麥之肥ニ罷出、とよは晝飯支度可致と、小兒を連居、廻りニ干立置候薪取ニ立出、左かは俄に腹痛ニ付便所江參り候處、納戸之方ニ而怪敷聲いたし候を承り、驚入駈付、とよも物音に驚駈入候砌、市兵衛も晝飯に立戻り、是又右ニ驚駈入見受候得ば、藤兵衛儀、膳箱ニ隱置候鰹節小刀を取出し、最早自身と腹江突立、苦痛之中ニも、腹を切候間、差縮間敷抔申、殊之外取昇居候樣子ニ付、早々小刀を取上ゲ、致介抱、泣立候ニ付、隣家組合之もの駈付、夫々親類、組合村役人江も爲相知、醫師呼寄、早速療養手を盡候得共、養生不相叶、翌廿二日晝九ツ時頃相果候儀ニ而、全取昇之上、自身と右及始末候儀ニ付、何方江對し候而も、聊無申分旨申之、右ノ內親類、組合、村役人一同吟味仕候處、市兵衛宅物音ニ驚、又は右始末爲知越候ニ付、早速駈付見屆候處、全取昇自身と小刀を突立、苦痛いたし罷在候ニ付、種々療養差加候得共、養生不相叶、翌廿二日晝九ツ時頃相果候儀ニ而、餘人之仕業とは曾以無之、其餘は市兵衛申口之通、聊無相違、同人夫婦之もの共、至而實體、平日兩親江孝道を盡し、惡事等ニ携候者ニは無之、右ニ付怪敷風聞無之段、一同申之候、

右一件吟味仕候處、書面之通申立、一同申口符合仕、手代見分之趣も、全自滅ニ無相違相見、右ニ付近村々糺書付可取之（請書）怪敷風聞も不相聞候間、藤兵衛死骸は假埋申付置候、此上如何可申渡候哉、吟味書面四通相添、御下知奉伺候、以上、

文政四巳年十二月　川崎平右衛門印

御附紙　伊勢印

書面藤兵衛儀取昇、全自殺ニ無相違、一同申口符合いたし、外怪敷儀も不相聞上は、死骸勝手次第可取置旨申渡、證文取之、可被差出候、以上、

〔檢使階梯〕野州八條村地內行倒死人見分吟味伺書

當月二日御屆申上候、私御代官所、野州芳賀郡八條村地内、奥州江之往來端ニ行倒死人有之候段訴出候ニ付、手代差出、見分吟味爲仕候趣、左ニ申上候、

私御代官所野州芳賀郡
八條村地内

見分書
一行倒相果候醫者體坊主壹人

但總身疵所無之、剃髪ニ而、年齢四十八九歳位、中丈、面長、上前齒一枚、下同一枚拔、眼耳鼻口眉毛常體、上ニ木綿千草染桔梗紋付、裏花色木綿綿入、間ニ黒棧留裏花色木綿綿入、下ニ木綿紺黄竪縞單物を著し、淺黄綿呂織帶を〆、左袂ニ墨塗草花蒔繪印籠緒〆琥珀根付埋れ木にて、中ニ丸藥少々入、紫縮緬服紗壹ッ、花色絹同壹ッ有之、右袂ニ木綿更紗小風呂敷壹ッ、紙煙草入壹ッ有之、下帶無之、紺木綿股引、白足袋、草鞋をはき、八條村地内奥州江之往來端ニ仰向ニ倒れ相果罷在候、

所持之雜物

脇差壹腰

但身長八寸、無銘、鮫白、目貫銅金燒付花菱、縁赤銅菊之彫、頭角卷掛、柄糸黒、切羽鎺銅金燒付、鍔鐵、丁字透し彫、鞘黒塗、鵐目無之、提緒黒、

木綿更紗風呂敷包壹ッ

内

木綿藍天鵞絨染胴裏麻小紋袷羽織壹ッ、錢二百五十六文、

厚板織裏黒琥珀鼻紙袋壹ッ

内

朽木耕庵老森田剛次郎と上書いたし候書狀一通、厚板裏黒繻子守袋中ニ札守入、藥方書付類幷紙少々有之

眞鍮きせる壹本

但黒な、こきせる筒に入有之

竹之子笠壹蓋

〆

右之品々死骸傍ニ有之、其外雜物無之、

村役人口書

右八條村名主吉之助、組頭作右衛門、百姓代太兵衛一同吟味仕候處、村高百八十五石餘、家數拾九軒有之、此者共村役相勤罷在、去月十二日朝居村辰巳之方原地之内往來端、行倒死人有之候趣、往來之旅人噺し通候由之風聞有之候ニ付、一同罷越見受候處、居村ゟ五町程相隔候、野州谷田貝町筋ゟ同國烏山、夫ゟ奥州邊江之通路往來端松之木下ニ醫師體之坊主行倒相果罷在、最早絶命後一兩日も相立候體にて、總身堅く相成居候間、番人附置訴出候義ニ而、雪中足跡之様子ニ而は、去巳十二月廿三日之大雪ニ而、右往來通路留り居候を、一兩日以前、押而谷田貝町筋ゟ罷越、寒氣ニ中り、持病等ニ而も差發、苦痛ニ堪兼居村迄難參、前書松の木下雪解之場所江打倒、其儘相果候儀ニも可有之、右ニ付怪敷風聞等無之、且見分之節、雜物之中ニ名前相記候書狀も有之候へ共、何方之ものニ候哉、見知候ものは勿論、心當り等一切無之旨、一同申之候、

右吟味仕候處、書面之通申立、手代見分之趣も、全病死ニ無相違相見、外怪敷風聞等無之、且近村々（近村々札書付）をも爲相糺候處、心當之儀無之旨申立候間、死骸（受書）は最寄寺院江假埋申付、死骸之様子所持之品等巨細相認、村外往來端江建札申付置候、此上六ヶ月見合、尋來候もの無之候はゝ、札取除、死骸は假埋之儘土葬ニ取置、所持之雜物之内、脇差は本所牢屋入用之積、中村八大夫江引渡、其餘之品々は葬候寺院江爲取、證文取之差出候様可仕候哉、吟味書物貳通相添、御下知奉伺候、以上、

天保五午年二月　　川崎平右衛門印

〔公裁筆記五附録〕一死罪鹽詰仕形之事

公儀より御預之大名旗本等於其國々病死之節、撿使請候迄、死骸鹽漬にいたし置候節、蒸籠漬に可致置、右仕形は、三重か四重五重にも大蒸籠を拵、下之重に簀を敷、其上に莚三四枚程敷、其上に鹽を敷、扨其上に死骸を置、手足其外共江腐江不附樣、間々詰々江能々鹽を詰上げ、段々二三四五の重も右同斷、右の通にいたし置、撿使見分之節、上一重取候得ば、手を不附してばらばらと落、ひとりでに死骸乳通り迄も顯れ見る、大概夫にて見分可相濟、撿使に寄、猶下之方迄も見分可致旨申候はゞ、又一重取べし、最初の如く手不附して形顯れ見る、段々下迄右同斷、

右の譯ハ、箱等江鹽詰いたし置、見分之節、手を附、死骸を動し、鹽を除、旁萬一死骸に少しにても疵等附候得ば、見分不相濟故、死骸不損不疵附仕形也、

朱書右は御勘定奉行大橋近江守金森一件取計方間違之儀有之、相馬彈正大弼江永御預に成、若病死之節は附居候役人江、右の蒸籠詰の仕形、手傳有之由、牢屋敷にて逆罪之もの病死いたし、鹽詰の仕形は、右樣大造には無之、腹を抜、成丈ヶ水氣を取、腹江鹽を詰、度々詰替候由及承申候、

鬪毆

徳川幕府ノ鬪毆ニ關スル制度ハ、其罪ノ輕重ニ依リテ所拂、追放、死罪等ノ別アリ、又武人ノ鬪毆ト町人ノ鬪毆トハ、自ラ其刑ヲ異ニシ、武人ノ殿中ニ於テ鬪毆殺傷スル者ハ、所領ヲ沒收シ、切腹セシムルヲ例トス、

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重キねだり事致候もの御仕置之事、

享保十七年極
一 巧を以人を打擲いたし、同類之内より取扱物ねだり取候もの、　人に疵付候はゞ　獄門

不レ得ニ物取一候とも、疵付候はゞ、　死罪

寛保三年極
但同類ハ中追放

享保三年極
延享二年極
一 總て逢ニ催促に一、或は預ヶもの等届來候人を疵付、亦は打擲いたし候もの、　中追放

但刃物にて疵付候はゞ、死罪、

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

元文五年極
一 御城内にて口論之上、拾人以上敲合つかみ合候もの、　雙方當人　重追放

同荷擔いたし候もの敲之上　江戸拂

從ニ前々一之例
一 あばれ候て、所をさわがし候もの、　敲之上所拂

寛保二年極
但所々にてあばれ候におゐては、敲之上、中追放、

寛保三年極追加
一 遺恨等を以、拾人以上結ニ徒黨を一、猥に致ニ之上、人を殺候におゐては、　頭取　獄門

但人に疵付におゐては、頭取死罪、尤人殺疵付ともに荷擔人中追放、

同追加
一 同狼藉いたし、諸道具等於ニ爲レ損一には、　頭取　重追放

闘毆例

但荷擔人所拂

〔御仕置裁許帳 五〕口論之上、相手を殺者之類、

寛文八年申六月八日

壹人市兵衛　是ハ靈岸嶋銀町四丁目庄三郎店之者、此者從弟彌左衛門と申者、相店ニ而罷在候を、今月朔日彌左衛門と致口論、其上彌左衛門頭を槌にて打、其痛故相果候付籠舍、

右之者死人之兄弟幷伯父免シ申度由訴訟申候、但勢州ニ死人之兄有之由申ニ付、此者儀勢州之兄方江申遣シ、返答次第に可申出旨申付候得ハ、御當地ニ罷在候親類方ゟ書狀遣候處、兄儀も免申度旨返事遣候由に而、名主持參訴訟申候ニ付、同申七月十一日赦免、

貞享二年丑四月十七日

壹人六兵衛　是ハ小傳馬町壹丁目屋ねや庄右衛門弟子、此者主人之養子庄三郎、當月十五日致祝言候付、昨晚店之者共に酒振舞候處に、店之者不殘歸候跡ニ而、夜九ツ過、仲人馬喰町貳丁目市兵衛店五兵衛と致口論、組合候處、五兵衛儀致絶入相果候由、所之者訴來ル付、撿使遣召寄遂僉議候處、此者申候ハ、私共久敷酒盛致面倒成由、仲人五兵衛申ニ付、互に聲高に申合、組合申候、其時分之儀、酒に給醉前後覺不申候由申候、死人五兵衛女房も其座に罷在、此者五兵衛と組合申候間、强痛られ相果候樣に存候由申候、庄右衛門弟子半右衛門其座に居申候間、令僉議候處、六兵衛五兵衛と致口論組合申候段、慥に見屆ヶ候旨申候、雙方押分候刻、六兵衛申候ハ、三年以前致口論候意趣覺候哉と申候、五兵衛面に、物に强當り候跡有之候、五兵衛と此者組合、きうひへ當り果候に無紛相聞江候ニ付籠舍、

右之六兵衛、寅五月十日、相手死人五兵衛弟馬喰町貳丁目市兵衛店屋根や三郎兵衛幷五兵衛女房、爲致出牢度由訴訟申候、度々令僉議候處、意趣有之而打候樣にも無之候、互に酒に給醉候上之

儀と相聞江候、右之通相手幷雙方町人共訴訟申ニ付、願之通赦免、○下略

〔的例黃紙之寫〕獄門

安永六酉十月、右近將監殿御下知、　手限 太田播磨守掛

一万年七郎右衛門申聞候、丹後國新庄村江罷越、押而合力を乞、右村藤兵衛を及殺害候、無宿庭道吟味一件、

無宿 庭道

此庭道儀、無宿ニ成、虛無僧體ニいたし成し、新庄村江罷越、押而止宿合力を乞、申募摑合、所持之小刀を以、藤兵衛を及殺害候段、不屆至極ニ付、獄門可申付哉、

右御仕置附

右人を殺し候もの下手人之御定ニ御座候得共、此者ハ押而合力を乞候間、ねだり事を申懸、人を殺候ニ而御座候、人を殺盜いたし候もの者引廻之上獄門と、御定ヨリハ品輕く、盜可致と存、疵付候者死罪之御定ゟハ品重く御座候間、獄門と御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕下手人

安永七戌六月、右近將監殿御下知、　手限 太田播磨守掛

一奥州糠塚村惣右衛門を打殺候、無宿甚作自訴いたし候一件、

榊原式部大輔領分奥州田村郷川田村

元百姓當時無宿　甚作

此甚作儀、惣右衛門江借置候質物不相返候はゞ、取計方も可有之處、申爭ひ候上、眞氣丸太ニ而敲合、惣右衛門を打殺候段、不屆ニ付、御定之通下手人可申付哉、

〔刑名副律〕荷擔いたし、出家を打擲いたし候得共、出家不相果、相手御仕置之事、

武州久我山村

三郎兵衛

久之丞

半六

延享三寅年十一月御仕置之例

此もの儀、同村光明寺方ゟ、同國大宮前新田彌五兵衛借受候金子、返濟滯候儀に付、彌五兵衛幷同村新六及口論、光明寺を打擲いたし候節、荷擔いたし、倶々光明寺を及打擲候段、不埒ニ候得共、光明寺存命ニ罷在候間、三人共所拂可申付哉と相伺、其通被仰付候事、

〔御仕置裁許帳五〕喧嘩之與人を切殺者之類、同爲手負者之類、幷致打擲者、

明暦三年酉十二月十九日

壹人四郎兵衛　是ハ糸屋與四郎召仕、傍輩彌五兵衛と申者と口論仕候處、新兵衛と申者與人に入候を切殺申候付籠舍、

右之者、戌正月廿四日赦免、〇下略

〔御仕置裁許帳五〕喧嘩之與人ニ入、當人を切殺者之類、同爲手負者幷疵付る者、

寛文六年午六月十九日

壹人又兵衛　是ハ龍閑町太左衛門店庄兵衛出居衆揔兵衛と申者と杢左衛門と申者と致口論、脇差を拔く處を、此又兵衛取支申候とて、右之脇指に而揔兵衛左之手に手を負申候而相果候故籠舍、

右之者、同月廿日赦免、〇下略

〔御仕置裁許帳五〕助太刀仕者之類、附父喧嘩仕處、親ト一所ニ相手を討立退、親病死以後訴出る者、

手鎖帳

天和四年子十一月廿日

貳人勤長三郎 兵衛 是ハ新石町壹丁目傳右衛門店研屋長八弟子、此者共、師匠長八と新銀町次郎助店研屋新八と、昨廿七日之晩致口論、切結罷在候處、此者共兩人ニ而致助大刀を、新八を切付候由、○中略支人に入、兩人ニ而引分候儀、何分にも可成儀を、致助大刀切付候段、危相之仕形成故、穿鑿之内兩人之者共手鎖を懸、師匠長八家主五人組に預ケ遣ス、

右兩人之者共を切候間、其節牢舍可申付處、師匠助大刀仕儀ニ候間、先手鎖を懸ケ置候處に、新八手疵大形致平癒候由、相手家主次郎助今日訴訟申出候間、子十二月廿三日手鎖赦免、

〔武家諸法度〕殿中に於て急變出來せバ、同席之輩是をとりはかるべし、其餘ハ各其所を守りて妄に動くべからず、若其同席に人なきに至ては、其所に近き者とも取はからふべきハ制限にあらざる事、

享保二丁酉年三月十四日

〔萬治制法〕一喧嘩口論捕籠者、幷走り者の事、

右喧嘩口論雖爲停止、若出來の時は、依其時宜、先其所に於有之は、早く取收、其場の前後の次第見屆、後日相窮時、堅固に證跡可申出、尤荷擔の者ハ、先條に所相誡なり、自然番所役所等にて、喧嘩口論於有之は、其役所番所の者として可相計、聊他番の者不可交加、若其所に居合、又ハ談合評定のため出合の者二三人は可爲格別、其外の者ハ其番所其役所を相護り、妄に不可出合、

〔營中刃傷記〕有德院樣御代

享保十年乙巳七月廿八日、於殿中帝鑑之間信州松本城主、高七万石、水野隼人正忠恒、柳之間長州府中城主、高五万石、毛利讃岐守匡廣嫡子毛利主水正就○師御禮過、於大廊下隼人正亂心隼人正嫡婚御禮、主水正參勤御禮、主水江手負せ候ニ付、隼人正を菊之間詰戸田右近將監御目付長田三左衛門取鎭、秋元伊賀守江御預被仰渡、主水儀ハ、罷歸疵養生可仕之

武士鬪毆

旨、成田寂安、栗崎道有差添退出、右兩人江、大目付北條安房守、御目付三宅大學立會申渡候、隼人正居屋鋪江ハ、北條安房守、御目付三宅大學罷越、家來共江申渡候、太田備中守被遣、家來取鎭候樣被仰渡候、隼人正家來、翌廿九日晝時迄ニ引拂候樣被仰渡、備中守右屋敷江可被達旨、廿九日於評定所ニ申渡、

御目付　酒井賴母

其方儀、昨廿八日、於廊下水野隼人正亂心、毛利主水江手疵負せ申候節、物騷敷候ニ付相鎭可申と存罷越候所、誰共見分り不申脇差を拔有之候者を、戸田右近將監押へ有之候ニ付、亂心と存爲取鎭可申御徒目付を呼に罷越、夫ゟ直に御勝手江罷越候、右亂心と存候ハヽ、御徒目付を呼候にも不及、於其場共々取鎭可申儀ニ候所、其場を罷立、剰立歸樣子見屆不申、彼是御役義を乍相勤不調法之仕形ニ思召候依之改易被仰付候者也、

右大目附松平藤九郎申渡之○下略

〔營中刃傷記〕寛永四丁卯年十一月六日、西丸御小性組檜村孫九郎當番之夜、相番木造三郎右衛門、鈴木久右衛門と及口論、二人江手疵爲負候處、兩人共逃出シ、孫九郎ハ追行、此騷に而御行灯消闇に相成、口論之相手鈴木久右衛門事後疵平愈、追て家斷絕ス、木造三郎右衛門儀ハ手疵深、生死之譯不相知、是も家斷絕、其せつ居合候相番曾我又左衛門、倉橋宗三郎兩人ニ而、孫九郎を押に罷出候處、闇夜故少々ツヽ手疵負候得共、兩人の働ニ而孫九郎を組留、宗三郎ハ二拾ヶ所之手疵ニ付、歸宅之上御醫師被遣、療治仕候得共不癒死去、依之實子江跡式無相違被下、又左衛門ハ、手疵も負ながら早速狼藉取鎭候段達御聽、御感之上二百石御加增被下之、孫九郎ハ十三日頭永井信濃守於宅ニ切腹被仰付之、

〔翁草二〕高島左近赤井彌兵衛喧嘩の事

正保三年四月八日、本所筋御成、未刻還御也、御供の面々段々引返る處に、小從人赤井彌兵衛義、供

奉之內より病氣差發、漸供奉を相勤め、右相濟て相組に先達て早々宿所に歸るに、下人も間に合す、唯壹人歸る處に、松平伊豆守屋敷近所にて、跡より御小性高島左近、馬にて立歸りけるが、先供の者共、彌兵衞が壹人先へ行を、御直衆と云事は不ㇾ知、先を拂ふて彌兵衞を突倒す、彌兵衞怒て、無禮狼藉者推參也と咎む、左近も彌兵衞が面を見知らざれば、大に怒て、あれ切て捨よと罵ければ、若黨共拔連て蒐る、彌兵衞も拔合て、忽壹人を切捨、壹人を手を負せ働に仍、左近馬より飛下り、十文字の鎗を取て、後ロより橫さまに駒寄へ鎗付たり、赤井猶ひるまず鎗を切折らんとするを、大勢立懸り、竟に赤井を切殺す、左近は先松平伊豆守屋敷へ入る處に、跡より小從人衆追々引來り、斯と見るより廿人計伊豆守の玄關に詰かゝり、只今相組赤井彌兵衞を討て是へ駈込たる者を出さるべしとひしめく、伊豆守家人立出て、未伊豆守退出不ㇾ仕候、只今是へ御入候は、御小性高島左近殿にて候、慥に奉ㇾ預上は、各御歸可ㇾ被ㇾ成由申に仍而、何も得心して立歸る、尤銘々が姓名を記し殘置、斯て豆州は家來より右の爲ㇾ知を聞て立歸、先左近に對面して樣子を尋るに、左近云、拙者通り懸り候先にて狼藉の擧動を仕り、其體供をも不ㇾ具、唯壹人にて候故、陪臣牢人の類と存打捨候よし申ㇾ之、再び登城して、老臣中評諚之上、上聞に達る處に、左近義は先伊豆守ニ被ㇾ預、追々御詮議可ㇾ被ㇾ遂由被ㇾ仰出、其夜亥刻に至て、老中各退出す、去れば此左近事は、奥方の出頭人壽林比丘尼の孫たる故、大奥に於ていろ〳〵御佗の願ひあり、然れども兎角の御沙汰もなきに仍、素心尼於梅の方を始として、重立候女中より樣々執しける程に、上にも取々に思召處に、同九日小從人頭幷組中一統して御訴訟申上けるは、今度高島左近赤井彌兵衞喧嘩の事、奥と外樣の差別有といへども、御家人に於て替る義なし、若し陪臣の例に准せらるゝ時は、頗る小從人の輩本意を失ふ處也と頻に相ㇾ願之、孰れにも追て御沙汰有べしとて右之輩を差返し、此段上聞に達る處に、右願ひ尤其理有り、左近事幼少ゟ御近習に召仕れ、不便に思召といへども、法には替がたし、切腹可ㇾ申

付旨を老臣へ被仰付ける、

〔森雨會談〕酒井作右衛門家來之事

酒井飛彈守嫡子作右衛門ハ、三千石ノ襲家督、御番相勤ム、久世大和守之〇廣場ニテ、姉ノ子也、矢倉ノ邊ニ屋敷アリ、家來兩人一人ハ小性、一人ハ中小性、近邊ノ浴室へ往時、屋敷近所ニテ、御馬方御直參ノ衆へツキアタリテ諍論ニ及ブ、上下八九人ニテ、馬上ニテ通ラレケル處ニ、主人馬ヨリ飛下リ、鎗取テ、慮外者討捨ニセヨトテ、主從立向ケル、作右衛門家來甲斐々々敷働キ、主人ヲ殺害シ、下々ニ手ヲ負セ、兩人共ニ屋敷へ立歸ケル、親戚中寄合相談ノ上、右ノ次第如何可仕ト、作右衛門方ヨリ內意有之、大和守返答ニハ、天下一統人ヲ殺害セシムル輩ハ誅伐セラルヽ大法也、早々番頭へ申達候テ、蒙官裁、死刑ニ可處旨、嚴ニ申含遣シケル、翌日作右衛門方へ撿使遣サレ、兩人切腹致サセケル、大和守右落着以後家老共へ申サレケルハ、兩人ノ者不便千萬成事、我等方へ案內セズ、イカ樣ニモ助命ノ手立ハ可有之儀也トテ、哀情不淺シナリ、

〔廢絕錄〕常憲院殿御代

延寶八年

七万三千六百石　丹後國宮津城　永井信濃守尙長

六月廿六日、增上寺におゐて御法會の時、尙長其奉行たりしが、內藤忠勝亂心して尙長を切害せるにより、城地を收られ、八月七日、弟万之丞直圓に、大和國葛城にて一万石を賜ふ、〇中略

三万五千石　志州鳥羽城　內藤和泉守忠勝

六月廿六日、增上寺におゐて御法會行はせ給ふ時、其警衛たりしが、亂心して永井尙長を切害せしにより死を給ふ、二十七歲、

〔一話一言三十七〕岡八郞兵衛事

元祿十二年己卯九月廿六日記

御小性組小笠原長門守組岡八郎兵衛○常孝事、去九日七時、當番より罷返り候節、芝土器町四辻にて、伊達美作守○和村通り懸り候、八郎兵衛供をわり候由にて、先供之家來、理不盡に組付候故、拔打に切候得バ、家來五六人組付、大小をもぎ取候、其內美作守乘物は通り過候、右被切付候家來かけぬけ參候故、八郎兵衛鑓を持、跡より追懸參、美作守玄關迄參候、依之右美作守方より案內有之て、御目付水谷彌之助、天野傳十郎罷越、其後番頭小田切土佐守、北條右近大夫、仁木周防守、並組頭近藤源兵衛、能勢市十郎、美作守宅へ罷越、八郎兵衛儀ハ、宿所へ罷歸候、

右之旨趣に付て、被仰出之次第、

申渡之覺

伊達美作守

先頃於途中岡八郎兵衛と出入之節、不埒成仕形不調法に被思召候、逼塞仕可罷在旨被仰出之候、以上、

右之通田村右京大夫、同助大夫召之、於御黑書院溜、以書付老中列座、土屋相模守申渡之、兩人美作守宅へ罷越申渡之、

申渡之覺

岡八郎兵衛

先頃於途中伊達美作守罷通り候節供をわり候段、理不盡仕形、不調法に被思召候、依之小普請入被仰付候、逼塞仕可罷在候、以上、

右之通長門守へ以書付土屋相模守申渡、稻垣對馬守侍座、永井美濃守も罷在、長門守宅へ八郎兵衛召寄之、美濃守も列座にて、長門守申渡、御目付近藤平八郎罷越、

庶人鬪毆

岡八郎兵衛へ慮外仕候伊達美作守家來三人、從美作守伺之通、美作守方にて死罪申付之候也、

〔廢絶錄〕文昭院殿御代

寶永六年

一万石　　加賀内新田　前田采女利昌

二月十六日、東叡山において御法會行はれ、利昌大准后使の饗應人をつとむる時、宿坊吉祥院にて、織田監物秀親を殺害せしにより、石川主殿頭義孝に召預られ、十八日死を賜ふ、

〔窻の須佐美二〕寛延二年七月、紀州の臣渡邊數馬霞關を通りしに、松平志摩守直員（新庄主殿直詮二男）の子賴母通行かゝり、先に立たる挾箱持し僕、數馬の引馬を押退て通らんとす、口とりこれを押留ければ、口取を打擲す、口取脇差をぬきければ、供頭のもの立歸り制しけるゆへ、刀を納めけるに、挾箱の男又來りて、合羽箱の蓋を取、さんざんにたゝきける、そこにて口取拔打に切殺しぬ、則辻番出て押留ける、町奉行へ出けるに、能勢肥後守一類吟味ありしが、口取のもの分明に云述、餘義なき趣奉行所にも感悅して、彼を刑せん事を惜れけるとぞ、かくして、志摩守父子とも、供のもの不作法なる趣を咎められ、引込罷在べき旨にて、口取中間は數馬へ返されける、數馬も其時の取扱ひよろしからざる趣にて、紀州にて咎めらるべきなど沙汰せり、

〔町奉行所書留〕文化元子年十一月廿八日

町々ニ而聊之口論ニ事寄せ、及狼藉候もの共之儀ニ付申上候書付、

書面伺之通可仕旨、尤寄場江差遣候年限之儀ハ、手鎖押込等之通不申渡積相心得可申旨被仰渡、奉承知候、

子十一月晦日　　小田切土佐守

根岸肥前守

新両替町貳丁目彌助店清次外三人御仕置先例相糺候處、右類之もの、多分敲之上江戸拂、又ハ江戸拾里四方追放程ニ、両御役所共手限ニ申付來候、然處一體町方輕きもの共、風俗不宜職分等之儀、又ハ聊之申爭等之儀を遺恨に含、荷擔人を催、人家江踏込、諸道具等を理不盡ニ打壞及狼藉、町役人共より訴出、其度々両組同心共爲撿使差遣、一件呼出、當人共ハ入牢手鎖等申付、吟味仕候内、多分ハ酒狂故之儀ニ而、後悔いたし相咜、右損さし候品々ハ相償、相手方申分無之旨ニ而、一同吟味下ゲ之儀、慈悲相願、外子細も不相聞ハ承屆候儀も有之、又ハ拾人以上申合候類ハ勿論、其始末次第、手限ニ而前書之通御仕置申付來候得共、近頃町方輕キもの人氣不宜儀共、既入御聽、先達而御書取をも御渡被成候間、勘辨仕候處、右類之者追放等申付候而も、猶又御構之地徘徊致し候もの多人數有之、輕キ者ニ至リ候而ハ、追放江戸拂ニ成候儀、敢而難儀共不存類可有之哉、去ル申年南飯田町彌太郎店藤五郎外五人儀、兼而質ニ入置候品無代ニて押而借受、右品外江質入致し、其外所々町方知人共方江參り、金錢無心申掛、及斷候得バ、事六ケ敷申、口論仕懸、一體人氣不宜ものニ付、先例ニ見合、入墨之上敲ニも可申付候得共、左候而ハ落着後、猶又居町等江立戻り徘徊いたし候而も仇を可致哉と、右町方より訴出候儀も取計兼候趣ニも相聞候ニ付、寛政三亥年供先ニ而不埒いたし候諸家手廻之ものは敲、又ハ手鎖之上年期を定、人足寄場江可差遣旨之御書付ニ准じ、入墨之上三ケ年之内、人足寄場江可差遣哉と、肥前守申上、其通被仰渡候儀御座候間、此度之清次吉五郎儀ハ、敲之上、平七千太郎儀ハ、三十日手鎖申付、三ケ年人足寄場江差遣、同所ニ而身持不相改候ハヽ、其始末ニ寄、佐州水替人足ニも差遣候樣仕候ハヾ、一體之取締ニも相成可申奉存候、尤伺之通被仰渡候ハヾ、以來右類之格別及不法候者共ハ不及伺、右之取計候樣可仕候哉、此段奉伺候、以上、

子十一月　　小田切土佐守

〔天保集成絲綸錄百四〕文化十三子年六月

町觸　根岸肥前守

近來町方之もの共、聊之喧嘩口論に而も、猥ニ荷擔いたし、長鳶口、竹鎗等を持居宅打こわし、家財打碎き、狼藉及び、所を騷がせ候儀、度々有之、就中當三月箱崎町卯兵衛、龜嶋町龜次郎、靈岸嶋川口町留次郎、右三人之ものども、深川小松代町之ものと、僅なる事ニ而打擲ニ逢候を仕返し可致と、大勢申合、本所四ツ目橋際迄押掛、支人江疵付、剰花町利右衛門宅打こわし候ゆへ、其邊之者遺恨ニ存、是又大勢ニ而新大橋迄押掛候ニ付、箱崎町靈岸嶋邊々も、猶又大勢にて永代橋迄出會候儀、雙方とも不恐公儀仕形不屆至極ニ付、此度夫々御仕置申付候、以來右體多勢申合候は不及申、小人數たりとも、家作家財を打こわし、あばれ候においては、早速召捕、重キ御仕置可申付條、此旨町中可觸知者也、

子六月

〔御仕置裁許帳五〕喧嘩之與人、人違にて打擲ニ逢、外之者に爲手負者、

天和二年戌五月十四日

壹人　惣兵衛　是ハ增上寺知行所、武州衾村之者、當月七日、此者近鄕奧澤村を蕘附馬を牽罷通候節、麴町拾三丁目與次兵衛店牢之丞、同町與五右衛門店、牢人水島貞右衛門兩人通り違ニ、此者蕘附馬牢之丞ニ當り候由ニ而致口論候ニ付、右之貞右衛門與人ニ入候得バ、此者狼藉者之由、聲を立候得バ、一村之者大勢出合、彼貞右衛門頭五ヶ所疵付申候、內鍵疵四ヶ所同村助右衛門と申者、鍬ニ而切付申候疵壹ヶ所、以上五ヶ所手負候故、貞右衛門も刀を拔、衾村角左衛門、奧澤村權四郞兩人ニ手負セ候、貞右衛門儀ハ所江預ヶ置、穿鑿之上評定所ゟ籠舍、

右之者、戌六月六日赦免、

〔一話一言 四十二〕草履打の實說

三月〇享保九年廿七日、松平周防守殿奥方に被召仕候、御局澤野と申候者、中老に瀧野と申者、少無調法在之候に付、御前にて瀧野事、毎度無調法不屆者抔と、殊之外に叱候故、瀧野ハあやまり居申候て、何事もだまり居申候處に、御前御申被成候ハ、澤野しかり樣あまりつよし、兩人共に先づ下り候樣に御申被成候、瀧野事淚ぐみ、兩人共に直に部屋へさがり候て、瀧野召仕申候下女、山路と申者に、瀧野申付候ハ、此文を母樣へ持て參り候樣に迚相渡申候、山路受取、御門外迄出申候得ば、いつも御文ハ、文箱に入被遣候に、何とも內之樣子不心得候故、其儘御文を御門外にてひらき見申候得バ、件之樣子書立、一ぶんたちがたき間、御前樣にも被申上候故、自害を致し可申候、御いとまごひの文のよし書しるし在之候故、山路ぞんじ候ハ、此體ならば、もはや自害可被致ぞんじ候とて、先きへハゆかず、其儘まへの部屋へ返り見申候へば、屛風を立て、其內に自害をいたし死して居被申候故、其前に壹尺貳寸計之脇指在之、其儘血をもぬぐひ、鞘へおさめ、死骸をばふとんにて包み、扨澤野殿へ參り、瀧野事ちと御目にかゝり度事御座候間、御出被下候樣被申候、參上可申筈に候へ共、ちと氣にても惡敷臥居申候と、何心なく申候故、直につれたち參候處を、山路ふところゟ前の脇指取出し、主のかたきをのがさじと、澤野が腹へ押立、胸先へさし、背まで通し殺申候、周防守殿、右之段御聞被遊、女にはめづらしき事と御稱美被遊、瀧野の母へ被仰付、山路をば娘に致し可申候、向後何方へも奉公には出し申間敷候、かたづき申候時は可申出候、望之通りに支度をも被成可被下樣に被仰付候、澤野年三十八、瀧野年廿三、山路年十四歲、右之趣あまり珍しき事故、書付見せ申候、以上、月堂見聞錄

古事類苑

法律部四十六

下編上

詐僞 贋造貨幣附

雜載

古事類苑

法律部四十六

下編上

詐僞　贋造貨幣附

徳川幕府ノ制、僞書、僞印ヲ以テ、他人ノ財ヲ詐取シタルモノハ、首ハ、引廻ノ上獄門ニ處シ、從ハ、死罪ニ、筆者ハ、追放ニ處シ、官名ヲ詐稱シテ、他人ノ財ヲ掠メ取リシ者ハ、死罪ニ、猥リニ他人ノ氏名ヲ詐稱シタル者ハ、追放或ハ所拂ニ處シ、度量權衡ヲ僞造シタル者ハ、引廻ノ上獄門ニ處シ、妖書、妖言ノ罪ヲ犯セルモノハ、首ハ、江戸拂、從ハ、所拂ニ處ス、

〔御定書百箇條〕謀書謀判致候もの御仕置之事

寛保二年極
一謀書又は謀判いたし候もの　引廻之上獄門

但加判人死罪

同
一謀書と乍存任頼認遣候もの　重追放

〔科條類典　下五〕寛保元酉年十一月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

朱書
同謀書謀判致候者御仕置之事

極
一謀書、又は謀判いたし候者、　引廻之上獄門

但加判人死罪

朱書
是は元文四未年、高砂町林玄勝儀、武州廣田村百姓共江、去卯年金子貸候處、元利共ニ不相濟由訴出、段々吟味之處、荒川村喜平次と馴合、右村古連判之もの江謀書繼合候段、無紛ニ

付獄門、

掛紙
是は唯今迄之取計を以相認引廻之儀幷但書、此度評儀之上相認申候、

死罪

掛紙 極
重放追
▲

極
一謀書と乍存、賴に任せ認候者

掛紙
遣候もの

御下ヶ札
謀書と乍存、賴に任せ認遣候もの不及死罪、重き追放に而可然候、
▲

是は右玄勝一件之内、室町平左衞門謀書認候ニ付、死罪ニ成候例を以、相認申候、

〔御當家令條二十二〕江戸町中定〇中略

一謀書謀判之輩、兼日如申出可處嚴科、執筆之者、勿論可爲同罪事、〇中略

明曆元年十月十三日

〔武家嚴制錄二十〕京都諸司代板倉氏父子公事扱掟條々

掟〇中略

一謀判出入之儀、判形を似せやすきと可申歟之間、手跡を令穿鑿、自分依無筆賴筆者申由候はゞ、其筆者を令穿鑿、僞申方可及殺害事、

附筆者之事、書物作候者と於知音は、可爲同罪、若互に未聞未見之者、雇書初心之者、堅糺明候者明白可申付事、

〔御定書百箇條〕追加名目重く相聞候共、事實においては强て人之害にならざるは、罪科輕重格別之事、

〇中略

一總て制禁を犯し候もの有之時、證據を以爲可訴之謀書を認、或は人之作り名に判を押候類は、

欲心を以人を欺候とは格別之事、

（延享元年極）右之類名目に不泥、其主意を糺、可致詐議事、

〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類

寛文九年酉五月廿一日

壹人五郎兵衛　是は四ヶ市町七兵衛店佐次兵衛手代、此者、主人之金銀横取仕候由訴訟申候間、當正月廿五日、手鎖ニ而預ヶ置候處、手代仕候時分、主人之謀判仕候而金銀を語り取候由承出シ、訴訟申ニ付籠舍、

右之者、戌四月朔日、薩摩江流罪、

〔御當家令條 三十五〕今度勢州外宮師職、三日市帶刀、配檀方祓之表ニ、兩大神宮と依書出候、內宮師職輩、新規非例之由、奉行桑山丹後守江訴之、委細穿鑿之上、雙方江戸ニ召下、於評定所遂對決候處、兩之字書來證據不分明、新規無紛、就中外宮師職之內、中西丹波義、兩之字書加候一帳、稱證文雖出之、墨色新敷不慥義申之、掠奉行之條、不屆至極也、右之趣達上聞、丹波義者、神領中追放、帶刀幷一味之輩、閉門被仰付之訖、自今以後、如斯之新規於申出者、速可被處嚴科、仍而爲後鑑遣下知、可相守於雙方者也、

寛文十一年辛亥十一月廿二日

丹後

長門〇寺社奉行本多忠利

伊賀〇寺社奉行戸田忠昌

山城〇寺社奉行小笠原長賴

內膳〇老中板倉重矩

但馬〇老中土屋數直

大和〇老中久世廣之
美濃〇老中稻葉正則

兩宮
師職中

〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類
天和三年亥十月二日
壹人武兵衞　是は淺草東中町、庄右衞門店三左衞門方ニ罷在候者、此者儀、宿三左衞門と契約仕候ニ付、今度土御門兵部少輔殿御下りニ付、飯縄似せ免狀ニ謀判仕、陰陽師頭幸松勘大夫と申者兩人ニ遣候故、右兩人、兵部少輔殿江懸御目ニ度由武兵衞ニ度々申候へ共、日限相違仕候ニ付不思儀ニ存、三左衞門勘大夫兩人連ニ而、兵部少輔殿旅宿江參、右之段々申候へば、兵部殿家來白井右京と申者出合、左樣之儀無之由ニ而免狀を取上げ、武兵衞行衞尋出シ候得と被申候ニ付、則通三丁目、家主は不存、玄入と申者之方ニ而、武兵衞を見付、三左衞門召連來訴訟申候ニ付、致僉議候處、兵部少輔殿ゟ免狀之由ニ而似せ狀謀判仕候段無紛ニ付、揚り屋ニ入、
右之者卯十二月二日、薩州江流罪、
〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類
貞享二年丑六月十日
壹人吉田平右衞門　是は浪人、湯嶋天神前平田紹庵店之者、曾根平兵衞ニ被賴、謀書認候ニ付、評定所ゟ揚り屋ニ入、
右之者、同月廿六日、江戸追放、
〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類

元祿七年戌六月朔日

壹人小林彈右衛門　是は中根九郎兵衛家來、此者儀主人之名語り致謀判金子を借り候由、松平彈正殿被仰渡候ニ付、御老中江相伺候處、牢舍可申付旨御差圖ニ付、九郎兵衛家來田村權平、小池武左衛門、召連來ルニ付、上り屋に入、

右之彈右衛門儀、首ヲ刎、戌十一月十二日於淺草獄門、

元祿七年戌十一月六日

壹人女くら　是は守山町市助店久右衛門方ニ預ケ置く者、此者夫中根九郎兵衛家來小林彈右衛門と申者、主人之名を語り、致謀判金子を借り候由、松平彈正殿被仰渡候ニ付、御老中江相伺候處、牢舍可申付由御差圖ニ付、九郎兵衛家來田村權平、小池武左衛門、召連來ルニ付、當六月朔日入牢申付候、此者儀ハ、右彈右衛門女房成故、召寄せ上り屋に入、

右之女くら、牢內ニ而强ク相煩候ニ付、養生之內、守山町市助店久右衛門、幷家主五人組ニ、娘ろく共ニ、戌十二月五日預ケ、

右之くら氣分快氣ニ付、亥二月十一日歸牢、

右之くら、御老中江相伺、加茂宮庄右衛門方江亥五月十八日婢ニ渡ル、

同日

千之助 歳九ツ

三人　次郎 歳五ツ　此三人、彈右衛門悴娘成ル故、上り屋ニ入、

女ろく 當歳

右之千之助、次郎、戌十二月十二日、於牢屋死罪、

右之ろく、御老中相伺、亥五月十八日、加茂宮庄右衛門方江婢ニ渡ル、

〔御仕置裁許帳 八〕謀書謀判仕者之類

元祿十一年寅十一月晦日

浪人寺尾善右衛門　是は細井九左衛門御代官所、小石川音羽町九丁目半兵衛店三大夫方ニ罷在候者、
貳人
浪人服部新五兵衛　是は牛込天龍寺門前、角左衛門店之者、

此者共、大久保豐前守組、萬年佐左衛門方ニ奉公相勉罷在候處、不屆之儀有之、兩人共ニ暇出候處、佐左衛門方江數年出入候町人共方ゟ、金貳百三拾六兩貳歩、度々ニ此者共、主人佐左衛門裏判手形ニ而、右之金子町人共度々ニ用立候由ニ而、頃日町人共、佐左衛門方江罷越相斷候ニ付、佐左衛門方ゟ、家來加藤數右衛門、竹村甚大夫と申者、兩人、右善右衛門方江差遣シ致吟味候處、新五兵衛申合、右之通佐左衛門致裏判、右之金子此者共方江借り候由、善右衛門自筆ニ而致口書、兩人ニ相渡シ候ニ付、豐前守方ゟ御支配方江被相達、九左衛門手代山口千右衛門召連來ル付、詮議之內牢舍、

右之新五兵衛、牢內ニ而相煩候ニ付、養生之內、家主角左衛門ニ卯正月十六日預ケ、　右之者、卯二月十六日歸牢、

右之者、牢內ニ而相煩候ニ付、養生之內、此者家主角左衛門幷五人組ニ卯三月廿三日預ケ、

右之寺尾善右衛門致病死候由訴來ニ付、撿使參改見申候、右之萬年佐左衛門家來寺尾善右衛門、牢內ニ而相煩候ニ付、預ケ成、致病死候由、死骸鹽漬ニ成居候を、撿使牢屋ニ而死骸を請取、淺草江召連、首を刎獄門、

札文言

此者、古主に相勤候內、主人之印判ニ而、私用ニ金子を借り候科によつて、於淺草ごくもんに

かくる者也、

四月廿七日

元祿十一年寅十一月晦日ニ預ケ

一寺尾喜藏 十歳 是は寺尾善右衛門悴、此者父謀判仕候出入ニ付入牢仕候ニ付川口攝津守方

ゟ此者を小石川音羽町九丁目、半兵衛店三大夫、幷家主五人組ニ預ケ、

右之者、父ノ依レ科ニ、翌年卯七月廿六日、於二牢屋一死罪、

元祿十二年卯六月二日

一壹人海嚴 十九歳 是は出家、眞言宗ニ而、光德寺弟子、右善右衛門悴、父謀判仕候出入ニ而、此者

儀、寺社御奉行井上大和守方ゟ牢舍、

右之者、父善右衛門御僉議之内ニ、此者を出家ニ仕候由、父之依レ科ニ同卯七月廿六日、於二牢屋一死罪、

死骸は光德寺ゟ春淨と申出家參貰候付、牢屋ニ而爲二取遣一候、

〔御仕置例類集三ノ十四〕天明八申年八月

御勘定奉行 根岸肥前守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一下總國川井村ニ而捕候似せ勸化致し候一件

深川靈巖寺寮ニ罷在候

所化 泰音

右之もの儀、江戸表江罷越候途中より、六孫王御免勸化巡行僧之旨、潮哲僞候に同意いたし、伴僧ニ成、附添歩行、其上潮哲申旨ニ任セ、勸化狀を謀書と存ながら相認、かたり取候金子之内、三分配分受、其後潮哲ニ別レ候而も、友右衛門兩人申合、村々相廻り候段不屆ニ付、敲之上重追放、

御差圖

獄門

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政三亥年六月

鳥居丹波守殿御差圖　板倉周防守掛

一越後國柏﨑嶋町幸四郎不正之致取計候一件

深川靈巖寺地中松林院弟子　靈哲

右之もの儀、致隨身居候、超海所持之葵御紋附繪符を、幸四郎借受度旨申聞候節、超海相斷候をも乍存、其後超海留守之節、幸四郎右繪符取出候を其分ニ致、殊幸四郎商ひ荷物江差込候札、三州大樹寺と認呉候樣任賴、取扱之儀も乍辨認遣候段、旁不屆ニ付輕追放、

右御仕置附

右御定書ニ、謀書と乍存任賴認遣候もの重追放と有之候處、右之御定ハ、引廻之上、獄門ニも相成候程之謀書致候ものニ被賴、相認候ものニ可有御座哉、此ものは、相賴候幸四郎も、前書之通類例を以、遠嶋と相伺候儀ニ付、前書之御定より一等輕く輕追放、

〔御仕置例類集三ノ十四〕寛政六寅年十二月

太田備中守殿御差圖　御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

一豐前國正覺寺村久右衛門謀書いたし候一件

羽倉權九郎御代官所豐前國宇佐郡正覺寺村　百姓　久右衛門

右之もの儀、法鏡寺村伊右衛門方江可濟馬代、銀貳百八拾目之内百八十五匁、返濟致間敷所存ニ而、馬代銀滯之方江所持之馬を引取候趣にいたし成、九拾五匁之外、滯銀無之段申張、右書面上田村伊右衛門を賴認貰、有合之印形を押置、右を證據ニ申立、馬代銀返濟致間敷ト相巧候段、利欲を以謀書謀判いたし候も同樣之儀、不屆至極ニ付死罪、

〔御仕置例類集三ノ十四〕寛政十午年十二月

松平伊豆守殿御差圖

一有馬備後守家來菊地一郎兵衞謀書謀判いたし候一件

町奉行
小田切土佐守掛

有馬備後守家來
菊地一郎兵衞

右之もの儀、借金多難取續候と而、高橋權平、湯川藤左衞門申合、此もの藤左衞門連印、權平儀、奥印いたし、主人入用と僞、所々より金子借受、富岡佐五兵衞、小林伊八郎、小林仲右衞門江者不申聞、證文江名前書入、有合判を押用ひ、又者山村甚藏ゟ金子借受候節、同人と對談之上、町人三谷勘四郎名前之爲替證文認、有合判を押相渡、殊に主人裏書印形等者、取拵候間敷旨、權平、藤左衞門申聞候處、增上寺輪番金借受候節、裏書印形無之候而者難相成候迚、權平、藤左衞門印形致し候後、主人名前之裏書認、勘四郎名前江押用候印形を押、右體謀書謀判ニ而、借受候金高千貳百兩之内、利足內渡禮金、或者金主世話人振廻入用附屆等之諸入用差引、殘金割三百五拾兩程受取、他借金返濟雜用等ニ遣捨、其上甚藏方證文兩度書替之節、禮金貳拾兩ツヽ相渡候積ニ而、權平、藤左衞門此もの一同、割合出金致し候處、兩人江者押隱、右之內拾兩取逃、甚藏江者、兩度ニ三拾兩禮金相渡、猶又右之內拾兩、甚藏より貰受、又者禮金之內をも三兩貰受、是又雜用ニ遣捨候段、不屆至極に付獄門、

右御仕置附

右謀書又者謀判いたし候もの御定者引廻之上、獄門に御座候得共、侍以上之もの御定は無之、天明八申年十二月、山村信濃守伺之上御仕置申付候、三浦彌五左衞門組御使之もの高橋富八郎儀、御奉公相勤候身分ニ而願も不致、相州藤澤宿遊行寺江參、其上重御役人之奥ニ內緣有之、御小人目附役被仰付候御沙汰承候間、仲ケ間之もの共も取持、名前書上可遣旨、松崎新右衞門組御中間

詐欺取財

小泉長市外拾六人江僞取拵申聞、下り物其外召狀等謀書認、拾三人之もの共ゟ金子取集御中間頭御小人頭迄も欺、十月廿四日、右拾七人之もの御城江爲ニ差出ㇾ、骨折料、長市江金貳兩壹分差出、其餘者貪取、出奔致し候段、重〻巧成儀、輕くも御扶持被ㇾ下候身分ニ而、不ㇾ恐ニ公儀ㇾ仕方、剩右之始末ニ迫リ候哉、父母并弟共、自滅いたし候仕儀ニ相成候段、不屆至極ニ付、獄門申付候類例ニ見合獄門、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保元年極
一自分之名を替、奉公人之請に立候もの、　江戶十里四方追放

但奉公人と馴合、判賃之外、給金之內をも配分取、爲ㇾ致ニ欠落ㇾ候はゞ死罪、

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重ねだり事致候もの御仕置之事、

享保八年延享二年極
一かたり事之品對ニ公儀江ㇾ候事歟、又は謀て巧候事歟、或は人を誘引申合候もの、　贓物一兩以上ハ死罪

延享二年極
但當座之かたりハ、手元に有ㇾ之品を盜取もの御仕置同斷、

享保二十年極
一巧成儀を申掛、度〻金子等かたり取候もの、　金高雜物之多少不ㇾ依獄門

寛保三年極
但不ㇾ得ニ物取ㇾ候共、前〻度〻物をかたり取、或巧之品重きは死罪、

同十七年極
一巧を以人を打擲いたし、同類之內より、取扱物ねだり取候もの、　人に疵付候はゞ獄門　不ㇾ得ニ物取ㇾ候とも疵付候はゞ死罪

寛保三年極
但同類ハ中追放

寛保二年極
一重御役人之家來と僞、かたり致候者、　死罪

〔科條類典下五〕寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

朱書
㊀巧事、かたり事、重キねだり事致候者御仕置之事、

一かたり事之品對ニ公儀江ㇾ候事歟、又ハ重きかたり、巧事いたし候もの、　死罪

但輕キかたり事、巧事に候ハヾ、入墨又ハ敲、

朱書
是ハ享保八卯年、御書付之趣を以、振合相改認申候、

一極
巧成儀申掛、度々金子等かたり取候者、　金子雜物之不レ依ニ多少ニ 獄門

但不レ得ニ物取ニ候共、巧之品により、死罪、獄門之内、相當之御仕置可ニ相伺ニ事、

朱書
是は享保二十卯年、御書付之趣を以、振合改、先達而ハ別ヶ條ニ相認候得共、同様之儀ニ御座候間、此ヶ條之内江書加申候、

一巧を以人を打擲致し、同類之内より、取扱物ねだり取候もの、　其品重キハ 獄門　不レ得ニ物取ニ候共品により 死罪

但同類は、仕形により、其節御仕置可ニ相伺ニ事、

朱書
是は享保十七子年、御書付之趣を以、振合相改、先達テハ別ヶ條ニ相認候得共、同様之儀ニ御座候間、此ヶ條之内江書加申候、

一極
重キ御役人之家來と僞、かたり致し候者、　死罪

朱書
是は享保十七子年、酒井讃岐守元家來市村權之助儀、暇出浪人致し、鈴木平四郎と改、安藤對馬守家來之由僞所々ゟ金子語り取、不届ニ付、獄門ニ罷成候、

掛紙
朱書
是は唯今迄之取計ニ准じ、相認申候、

〔公裁秘錄〕巧事を以、度々金子語り取候は、盜ゟ品重き旨之御書付、

今度下谷長者町、藤兵衛店勘助儀、在々江罷越、巧成儀申懸、所々ニ而金子等語取候ニ付、死罪之上、於ニ其所ニ獄門ニ申付候、向後風斗、出來心ニ而、輕き語り之儀は格別、巧を以て度々金子等語り取候は、盜人ゟ却而品重キ事ニ候間、勘助通之類は、語り取候雜物金高多少によらず、或は物を不ニ得取ニ

候とも、其節之様子次第、死罪獄門之内、相當之御仕置相考、伺候様可ニ相心得一候、

卯八月〇享保八年

〔御仕置裁許帳十〕似セ目明シ仕者之類

寛文十一年亥七月八日

壹人　次兵衛　是ハ小塚原彦左衛門店、三左衛門兄、夜前本町三郎兵衛店下ニ、田所町四郎兵衛店五郎兵衛出居衆、七兵衛臥り罷在候を、此者目明シ之由偽を申、脇指を奪取候ニ付、町之者共出合、捕來ニ付籠舍、

右之者、丑十一月十四日赦免、江戸日本橋ゟ廿里近邊追放、

〔的例黄紙之寫〕獄門

安永二巳十月、佐渡守殿御下知、　　手限道中物　安藤彈正少弼懸

一奥州桑折宿ニ而召捕候、浪人田林忠右衛門外壹人吟味一件、

神田仲町壹丁目新右衛門店源七方ニ罷在候　浪人　田林忠右衛門

北本所番場町家主伊三郎方ニ罷在候　浪人　松野甚兵衛

此田林忠右衛門、松野甚兵衛儀、兩人申合、金子可レ取ため、築地本願寺地中善久寺所持之金三千五百兩、領分村役人加印之證文ニ而可レ致ニ口入一旨、戸田因幡守家來江申偽、善久寺江も金主分に成呉候樣達而相賴、右家來を善久寺江引合、挨拶柄不都合故、手段相整間敷と存、善久寺ゟ之似せ手紙迄認遣、路用金拾三兩ツヽ、右家來ゟ請取、其上川井越前守家來と偽御用ニ付、羽州沼木村迄罷越候趣之先觸差出、旅行致候段、重々不屆ニ付、兩人共引廻之上獄門可レ被ニ申付一哉、

右御仕置附

右重キ御役人之家來と僞、かたりいたし候者ハ死罪之御定ニ而、人を誘引かたり事いたし候もの、壹兩已上は、是亦死罪之御定ニ御座候得共、巧事之品、格別不宜、善久寺ゟ之似セ手紙を認遣候始末ハ、謀書ニも相當り候間、謀書いたし候者之御定を見合、兩人とも引廻之上獄門と御仕置附仕候、

牧野備後守殿御差圖　松平紀伊守掛

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政元酉年六月

一深川眞光寺ニ居候、楚石と名乘候泰榮、衒致し候一件、

深川黄蘗派眞光寺ニ居候楚石と名乘候
泰榮

右之もの儀、關口水道町洞雲寺仕持之身持不埒之段、同宿玄徹咄候を承、洞雲寺江參り、重キ御役人之家來、齋藤次郎兵衛方ニ居候楚石抔と無跡形名前を取拵、隱密方役人之由申僞、御紋附切れを裏ニいたし、兼而所持之頭巾を差出、隱密方役人合印之由品々申威、金六兩ゆすり取、猶又所々江差遣目錄之由、金拾四兩可差越旨手紙に認、深川海邊大工町傳兵衛を雇、重キ御役人屋敷ゟ之使之由申遣候段、旁不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右御紋附之品等所持致し候不屆も御座候得共、かたり致し候科、重も之不屆ニ付、重キ御役人之家來と僞かたり致し候もの死罪之御定に見合、死罪、

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政五丑年十二月

松平伊豆守殿御差圖　御勘定奉行 曲淵甲斐守掛

一但州檜尾村七郎左衞門銀子欺取候一件

野村權九郎御代官所但州二方郡濱坂村百姓文左衞門弟六郎右衞門雇荷持

彌右衞門

右之もの儀、濱坂村六郎右衞門ニ被雇罷在、同人買置候古着代銀四百目預り、使ニ參候途中、檜尾村七郎左衞門方江立寄候節、右銀欺取可致配分旨、七郎左衞門申候ニ致同意、銀子雜物共密ニ七郎左衞門江預置、同人敎ニ任、途中ニ而盜賊ニ被奪取候體ニ取拵、六郎右衞門を欺候仕方、不屆ニ付、死罪、

右御仕置附

右使先之取逃共品違、六郎右衞門を欺候ハ、銜事ニも似寄候間、兼而巧候歟、人を誘引申合候もの、金壹兩已上之御定をも見合、死罪。〇中略

京極加賀守領分同郡檜尾村

庄屋 七郎左衞門

右之もの儀、濱坂村六郎右衞門、湯村ニ而買置候古着取ニ遣候代銀、同人雇荷持彌右衞門持參立寄候ニ付、右銀四百目欺取、可致配分と存付、銀子雜物共預置、途中ニ而盜賊ニ被奪取候由僞、身內ニ泥を付立歸り候はゝ、其上ハ如何樣ニも取計可遣段申敎、六郎右衞門を欺、雜物は取捨剩右銀子彌右衞門江配分も不致遣捨候段、不屆至極ニ付、引廻之上、死罪、

右御仕置附

右六郎右衞門を欺候ハ、かたり事にも似寄可申、右之御定ニ而ハ死罪ニ御座候得共、庄屋役之身分ニも有之、巧之趣意、品不宜候間、安永七戌年、桑原伊豫守御勘定奉行之節、手限伺之上御仕置申付候但州伊田市場村、傳右衞門儀、可致盜と申勸、同類とも計遣、所々に而盜取候內、配分取候段、盜

人之手引致候ニ相當、旁不屆ニ付死罪と相伺、引廻之上、死罪可二申付一旨、御下知有レ之候類例をも見合、引廻之上、死罪、

〔御仕置例類集三ノ三〕寛政九巳年七月

松平伊豆守殿御差圖　　道中奉行掛

無宿　彌助

一道中筋所々ニ而、かたり致候無宿彌助一件、

右之もの儀、無宿善藏と申合、同人を供體ニ致、尾張殿家來田中安五郎と名乘、尾州御用と認候會府、幷葵御紋附之挑灯等取拵、中山道上尾宿外壹ヶ宿旅籠屋江泊り候節、夜中盜賊ニ逢候體ニ致成し、路金等ニ差支候旨申懸、都合金貳兩衒取、又者往來人之鼻紙袋、兩度拔取、內ニ有レ之候金三兩三分、善藏と分配いたし、村名名前不レ存商人家鄽有レ之候、木綿拾反、錢三貫文、盜取候始末、不屆ニ付死罪、

〔享保集成絲綸錄四十八〕享保三戌年閏十月

今度西村喜之助と申者、公儀餌差之由を所々にてかたり仕、人馬差出させ、其上鳥目を借り取、不屆ニ付獄門ニ被レ行候、改出候品川名主ハ、御褒美被レ下、所々ニ而不二相改一者は、過料申付候、且又當夏中、公儀役人之由申候て、舟遊山等ニ出候者を改候由風聞ニ付、總テ何事ニ而も、前廉ニ御法度之御觸無レ之して、役人被二差遣一相改候儀者無レ之事候條、向後右體之うたがはしき者有レ之候はゞ、其所ニ留置、早速頭支配江可二申出一候、若見のがしニ致候はゞ可レ爲二越度一候、以上、

閏十月

右之趣より〳〵可レ被二相達一候

〔明和撰要集三〕明和七年寅六月

町奉行江

越中國射水郡高岡河原二番新町、立野屋九左衛門方ニ居候佐源太と申者、鑄物師綸旨取次役ニ可成と巧成儀致、殊眞繼宮内内政所中務少輔と謀書を認、自分と飛脚ニなり、月番之老中江、右書狀持參差出候段不屆ニ付、町中引廻之上獄門行べき處病死候、右類之巧事いたすもの者、重科ニ可被行候條、此旨不洩樣可觸知者也、

右之通可被相觸候

六月

〔明和撰要集二〕安永三午年八月廿二日、安藤彈正少弼江達、同廿六日下札致同人ゟ受取、

安藤彈正少弼殿江　　曲淵甲斐守

先達而御掛合有之候、武州八王子本宿ニ而、貴樣組同心中村友八と申僞り、本郷竹町、平七寄子太郎事權助を召捕繩を掛、貴樣役人と僞り、宿々ゟ駕籠人足爲差出、宿次ニ而、拙者御役所迄召連來候、右申僞候もの者、赤坂裏傳馬町貳町目、友右衛門と申ものニ而、貴樣役人と僞候とも、刀も帶し不申罷在候者を、宿々ニ而容易ニ承知致間敷處、無錢ニ而駕籠人足差出候由ニ有之、右體之儀ニ付、兼而被仰渡も有之候哉、右宿々之者共、拙者方ニ而吟味可致哉、左候ハヾ宿々江被仰渡之趣承知致し度候、依之及御懸合候、

午八月

下ケ札　御書面、拙者家來と僞、宿々駕籠人足爲指出候引合ニ而、宿々之者共、貴樣方江御呼出御吟味被成候方と存候、且右ニ付、前々御觸等は、相見不申候得共、御朱印御證文之外、無賃之人馬ハ、決而不相成儀ニ而、五人組帳前書之內、在々江役人之由申僞致徘徊ねだりケ間敷義申者有之候ハヾ押置、早速御注進可申候、若隱置候ハヾ、名主年寄、曲事可被仰付とのケ條有之、其外先達而、右體之儀度々有之候節、怪敷者と乍心付、繼送り等致し候段、

心得違ニ而、右類之心得違、間々有之趣相聞候間、以來違亂成者ハ、其前留置、早速可訴出
旨、明和元申年、五海道江道中奉行ゟ相觸候儀も有之候、

午八月　　安藤彈正少弼

〔御仕置裁許帳十〕似せ餌指仕者幷奉行所之者之由僞申者、

天和三年亥四月十二日

壹人　市兵衛　是ハ小石川源覺寺門前、安右衛門店之者、此者義、似せ餌指仕、一昨十日、一ッ橋之内
ニ罷在候を見出シ相改候處、小野吉兵衛組下之由申候へ共、御黒印も所持不仕候間、遂吟味、似
せ餌差仕候段無紛由ニ而、秋元攝津守殿御斷、間宮左衛門組内田市右衛門、海保新助、召連來ル
ニ付籠舍、

右之者、亥十二月十二日、隱岐島江流罪、

同年亥五月八日

壹人　元兵衛　是ハ西之久保、家主ハ不知、浪人生駒十大夫召仕候之由、此者義、今暮合ニ備前町辻
番所江參、たばこ之火くれ候樣ニと申候へ共、御法度之由、辻番喜兵衛挨拶仕候へバ、北條安房
守召仕ニ而候處、火をくれ不申候由にて、理不盡ニ脇差を拔あたけ候ニ付、町内之者共出合、捕
召連來ルニ付、遂穿鑿候處、町内に而あたけ候段無紛、其上此方屋敷之者ニ而無之處、僞を申、重
重不屆成ル故籠舍、

右之者、亥十二月十二日、隱岐島江流罪、

〔御仕置例類集三ノ三〕天明八申年八月

鳥居丹波守殿御差圖　　町奉行　山村信濃守掛

一岡崎町萬吉方ニ居候粂次郎似セ役一件

岡崎町忠兵衞店萬吉方ニ居候
粂次郎

右之もの儀、當七月廿一日、忠七方江罷越、商ひ元手錢差支候由申、南鐐壹片借受、酒食調給、酔出候紛、似セ役致、金錢可貪取と存付、本所林町、其外町々自身番屋江參り、公儀役人、或者重キ御役人家來之由名乘、隱密御用ニ而、尋候もの有之旨爲申聞、月行事名前書爲差出候段、不屆ニ付、遠島、

右御仕置附

右明和三戌年、土屋越前守伺之上申付候、豐島町清五郎店、六番組人宿十右衞門寄子關口丹次儀、雑用錢差支、似せ役致、金錢可盗取と存付、當七月十三日、馬喰町ニ而、本町四丁目、六左衞門店孫左衞門召仕兵四郎儀、鼻紙袋幷鳥目致懷中候體ニ見受候ニ付、役人體ニ取拵、兵四郎を捕、腰縄ニ致、馬喰町貳丁目自身番屋江召連參り、加役細井金右衞門組之由僞申聞、月行事四郎兵衞に懷中物爲改候處、金壹兩壹分、錢六百文餘有之、右金錢途中にて盗取可申と、兵四郎は、自分に役所江召連參候間、金錢も丹次致持參候由申聞候處怪敷心付候哉、四郎兵衞儀、委敷樣子相尋候間、可答樣無之、心得違ニ而、兵四郎を召捕候間、致了簡相返呉候樣、四郎兵衞江申聞逃出候處、被捕候旨申候へ共、加役細井金右衞門組之由僞、金錢可盗取と似せ役致、右仕方及候段不屆ニ付、遠島申付候例ニ引當、遠島、

〔御仕置例類集三ノ三〕寛政元酉年三月

鳥居丹波守殿御差圖　町奉行　初鹿野河內守掛

一戸田大炊頭家來中村助右衞門悴中村貢、似せ役いたし候一件、

戸田大炊頭家來
中村助右衞門悴

中村貢

右之もの儀、酒狂之上、役人體に致成し、相咎候はゞ面白可ㇾ有ㇾ之と存付、山村信濃守組同心之旨申歩行、料理茶屋新七方ニ客有ㇾ之、物噪候迚相咎候處、居合候もの共致ㇾ信用ㇾ候様子ニ付、酒食相望振廻を請ヶ、又は湯屋藤兵衛方ニ而、湯仕廻方遲候間相咎、藤兵衛相詫候ニ付、尚又迷惑可ㇾ爲ㇾ致と存、町役人を呼寄、彼是事六ヶ敷申懸候儀共、物取は不ㇾ致候得共、右體似せ役致候段不屆ニ付、中追放、

右御仕置附

右明和八卯年四月、曲淵甲斐守伺之上、御仕置申付候、新御番本多釆女組與頭小笠原彥九郎家來中小性淺子幸助儀、親之方致ㇾ欠落、武士方奉公乍ㇾ致、足輕日雇ニ罷出、又は途中ニ而空腹ニ相成、持合錢無ㇾ之候故、不ㇾ斗存付、不快之由申、北新堀町自身番屋江上り湯を乞、剩町方組同心之旨申僞、食事を乞給候段不屆ニ付、中追放申付候例ニ見合、中追放、

〔御仕置例類集三ノ七〕寛政元酉年五月

松平越中守殿御差圖　　寺社奉行掛

一甲州府中神主今澤大進相手、同國條新居村社人上條志摩外六拾貳人、申渡難澁出入一件、

大久保遠江守
安藤出雲守　支配所甲州山梨郡府中城屋町

八幡神主
今澤大進幼年ニ付後見

同國巨摩郡村山村
八幡神主
植松筑前

同郡廿利村
同
正木主税之助

右之もの共儀、御祈禱御用ニも無ㇾ之廻狀之箱江、御本丸御祈禱御用と書、相廻し候段、不束之至り

詐稱役名

不埒ニ付、兩人共三十日逼塞、

右御咎附

右不束迄ニ御座候得ども、一通之不束ゟ品不宜候間、兩人とも三十日逼塞、

〔御定書百箇條〕巧事かたり事、重ねだり事致候もの御仕置之事、

一家主幷五人組を拵、訴訟に出候者、（從前々之例）（寛保二年極）　敲

但似せ家主、五人組に成候もの、同罪、

〔科條類典下五〕寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

（伺）巧事、かたり事、重ねだり事致候者、御仕置之事、

（極）一家主幷五人組を拵、訴訟に出候もの、　敲

（極）但似せ家主、五人組に成候もの、同罪、

（朱書）是は享保二十卯年、日比谷町善次郎儀、平八と申者を似せ家主ニ拵出し候段不屆ニ付、五十敲之例、

（掛紙）（朱書）是は唯今迄之取計を以認、但書は此度評議之上相認申候、

〔御仕置裁許帳八〕似せ五人組、似せ名主仕者之類、幷金子肝煎仕者、

寛文七年未五月十八日

壹人又兵衛　是は赤坂裏傳馬町貳丁目、長七店之者、同町喜左衛門五間口之家を質物ニ入、金子を借申候時分、爲似五人組ニ罷成、手形ニ致判を候ニ付籠舍、

右之者、未八月十八日、町奉行支配を追放、

同日

詐稱寺名

壹人孫大夫　是は赤坂裏傳馬町貳丁目、孫右衛門店之者、同町喜左衛門、五間口之家を質物ニ入、此者を喜左衛門罷在候町之名主四郎兵衛之由ニ而、手形ニ致判を、金六拾兩、元大坂町七郎兵衛所ニ而、去年十二月十八日ニ借り候而、先月廿三日ニ喜左衛門致欠落候、然處ニ右之喜左衛門、本五人組、彦左衛門、喜大夫、四郎右衛門、右之趣を承出シ、訴訟申ニ付籠舍、

右之者、未八月十八日、町奉行支配を追放、

〔的例黄紙之寫〕中追放　　桑原能登守懸

安永八亥十月、主殿頭御下知、

一下總國元豊田村江縄附を預ヶ置候一件之内

元小林孫太郎當時辻六郎左衛門御代官所下總國豊田郡東野原村

百姓次郎兵衛元養子

次右衛門

此次右衛門儀、宇都宮鍋吉譜代百姓ニ成候、百姓之身分ニ而、免しも不致苗字を名乘、帶刀致、其上鍋吉家來抔と申、九十郎可償筈之金錢可取戻ため、他領之九十郎江縄を懸ヶ御料分郷村方江預ヶ候段、旁不届ニ付、刀脇差取上、中追放、

〔的例黄紙之寫〕重追放

安永三午十一月、周防守殿御下知、　　安藤彈正少弼懸

一武州東方村伊兵衛悴喜平次を打擲いたし候、無宿儀仙、外壹人吟味一件、

無宿　儀仙

同　覺鐔

此儀仙、覺鐔儀、旅宿無差支ため、菊之紋所を附、圓福寺と認候繪符を荷物ニ差、所々徘徊いたし、東

田村於寺內、東方村伊兵衞忰喜平次馬より下り不申を、理不盡ニ打擲いたし、疵爲負、其上同人乘參り候馬を奪取、兩人ニ而代り〳〵乘參り候始末、旁不屆ニ付、兩人とも敲之上、脫衣重追放、

右御仕置附

右馬を盜取所存ニ候はヾ、追落ニも似寄候間、死罪ニ而可有之候得共、盜取所存ニハ無之、理不盡法外之者ニ御座候、然共紛敷致方ニ御座候間、差當り例ハ相見へ不申候得共、兩人共敲之上、脫衣重追放と御仕置附仕候、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政七卯年七月

松平伊豆守殿御差圖　　松平右京亮掛

一信州駄科村縫殿左衞門親、禮左衞門不正之儀取計候一件、

堀大和守領分信州伊那郡駄科村長百姓縫殿左衞門養父　禮左衞門

右之もの儀、京都清凉山靈源寺貸附金支配役爲勤候儀難成候間、三津岡白翁ゟ受取候會符挑灯差戾、宿々江配置候印鑑名前も可相除旨、領主ゟ申渡有之候儀を、上京之上、退役相願、聞濟無之内ハ、領主領分外ハ帶刀いたし不苦、白翁申聞候迚、其旨領主役所江も不申立、信州松本江湯治ニ罷越候度々、清凉山之會符相用、帶刀旅行いたし、殊ニ病氣ニ候迚、上京も延引およひ、其身之商ひ荷物をも駄賃錢餘慶ニ不相懸爲、清凉山用荷物之趣ニ取拵、先觸差出、宿々爲繼立、上飯田村之內、箕瀨町甚右衞門請負、江戶表江差出候商荷物をも、右山內荷物之趣ニ先觸駄賃帳差札等認遣候段不屆ニ付、刀脇差とも取上、中追放、

右御仕置附

右御定書ニ、自分と帶刀いたし、百姓町人共、刀脇差共取上、輕追放と有之、此ものは、一旦清凉山ゟ苗字帶刀差免候共、其後清凉山貸附金支配役爲勤候儀難成旨、領主ゟ申渡有之、受乍致、退役之儀、

詐稱人名

清凉山ニ而、聞濟無之内ハ、領主領分外ハ帶刀いたし不苦段、三津岡白翁申聞候迚、其旨領主江も不申立上ハ、自分と帶刀致候も同樣ニ而、殊ニ其身商ひ荷物、幷甚右衛門請負、江戸表江差出候商ひ荷物をも、右山内用荷物之趣先觸差出、其上一體領主之申渡を等閑ニ相心得候不屆も御座候間、右御定ゟ一等重く、刀脇差共ニ取上、中追放、

同人領分同郡上飯田村之内箕瀨町　百姓　甚右衛門

右之もの儀、毛賀村清次郎ゟ請負、江戸表江差出候紙、道中遲滯無之、駄賃錢餘慶ニ不相懸爲メ、駄科村禮左衛門江賴、清凉山靈源寺用荷物之趣ニ先觸、駄賃帳差札等認貰、苗字相名乘、帶刀致旅行、其上其身之商ひ荷物をも、右山内用荷物ニ取拵、先觸差出、宿々爲繼立候始末、旁不屆ニ付、刀脇差共取上、輕追放、

右御仕置附

右其身請負、江戸表江差出候商荷物其外共、清凉山用荷物之趣ニ取拵候不屆も御座候得共、前書禮左衛門ニ見合、品輕く、帶刀致旅行候不屆重く御座候間、前書御定ニ見合、刀脇差共ニ取上、輕追放、

〔御仕置裁許帳　七〕追放立歸之者之類、幷追放之者、請負仕者之類、附追放之出家致還俗、遠國ニ而、主人之名を僞通る者、

延寶九年酉五月廿四日

壹人山田七右衛門　是は増上寺に而、曆應と申出家ニ而有之候處、此前知傳と申出家と一所に追放ニ成候者、此者只今致還俗、常陸國羽黑村ゟ枋岡領大増村江堀田筑前守家來之由、僞申罷通候を、大増村之名主不審に存、樣々問懸候處、皆僞ニ而語り言申候由、稻葉美濃守殿ゟ御斷ニ付籠舍、

右之者、天和三年亥四月五日、薩州江流罪、

〔御仕置例類集三ノ七〕天明八申年十二月

鳥居丹波守殿御差圖

一無宿浪人石川善五郎あばれ候一件

町奉行
山村信濃守掛

御普請奉行石野遠江守家來
用役　黒野源助

右之もの儀、石川善五郎を徒士部屋ニ差置、吉川林大夫外壹人病氣之節、代リ供ニ差出候を、請人方ゟ人代り出張候儀と心得罷在、其段不存候得共、貸羽織着伊右衛門方江參、及口論被捕押候旨承り、家來ニ無之候而者不相濟儀と存、七郎右衛門を請人、重八を人主ニ賴、於奉行所見屆之節も、遠江守徒士ニ無相違段申答、剩主人江も其旨申聞、相違之御屆爲致、右體部屋子差置候段、常々申付方等閑故之儀、旁不埒ニ付百日押込、

右御咎附

右去ル午年伺之上、御咎申付候、仙洞附三枝豐前守家來用役平野次兵衛と申立候、平野彌大夫儀、三枝式部佛參致候はゝ、三枝豐前守格式相應之供ニ而罷越候樣、取計可申處、無其儀、其上平野彌大夫と申もの、自分名前ニ有之候迚、奉行所江罷出候節、平野次兵衛と變名致、剩見屆之節も、式部と申儀押隱、豐前守家來平野彌大夫ニ候旨、主人之爲を存候故之儀と者乍申、相違之儀申立候段不埒ニ付、百日押込申付候ニ見合、此者も石川善五郎貸羽織を着罷越、致口論候儀ニ付、家來ニ無之候而者、不相濟事と存、請人人主を拵、於奉行所見屆之節、相違之答および候段、其上主人江も右之趣申聞、相違之御屆爲申上候ものニ而、主人之爲を存候もの例も同樣ニ付、百日押込、

〔御仕置例類集三ノ三〕寛政二戌年二月

松平越中守殿御差圖　　松平紀伊守掛

一常州筑波山麓六所大神宮社家長岡伊豫身分之儀ニ付一件、

市谷七軒町家主勘右衛門店ニ罷在候常州筑波山麓六所大神宮社家

長岡伊豫

右之もの儀、一ツ橋扶持人隱居之身分に乍罷在、常州筑波山麓六所大神宮社家ニ相成リ、別姓名相名乘、殊ニ葵御紋附候儀者、猥ニ不相成儀ニ候處、許狀箱江右御紋附所持致、其上忰木村今次郎者、一ツ橋扶持人ニ候處、加持祈禱等致執行候節、萬事手傳爲致、剩今次郎を長岡源五郎と兩名を爲名乘、神職之儀ニ付、他所江之文通等爲致候段、旁不屆ニ付輕追放、

町奉行 村上肥後守掛

〔御仕置例類集三ノ三〕寛政十午年二月

松平伊豆守殿御差圖

一水野左近將監家來杉本傳次、兩名相名乘候一件、

水野左近將監家來

杉本傳次

右之もの儀、身持放埒ニ而、三味線指南致候、たに身分致世話遣、女名前ニ而者、店貸不申候迚、自分名前を三味線彈キ傳次郎、同人妻たにと、町方人別帳江書出、印形いたし置候段、壹人兩名ニ相當、武家方致奉公居候身分ニ而、旁不屆ニ付江戸拂、

賣遣

〔御定書百箇條〕似秤、似升、似朱墨、拵候もの御仕置之事、

寛保二年極
一似秤拵候もの　引廻之上獄門

但掛目違無之においてハ中追放

同
一似升拵候もの　獄門

但入目違無之においては中追放

一（同）似朱墨拵候もの　　家財取上　所拂

〔御定書百箇條〕名目重く相聞候共、事實においては、強て人之害にならざるは、罪科輕重格別之事、（追加）

一似せ藥種商賣致候ものは死罪、其外の似せ物、人命に不懸候儀は咎輕き事、

一枡秤、私に造り候共、輕重大小、本樣に無相違は、他之損失無之故、其咎輕き事、（中略）

右之類名目に不泥、其主意を糺、可致評議事、（延享元年極）

〔科條類典下五〕寛保元酉年十一月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

（朱）伺似せ秤、似せ枡、拵候もの御仕置之事、

一（極）似セ秤拵候もの　　引廻之上　獄門

（朱書）是者此度評議之上相認申候

懸紙
（極）但掛目違無之においては中追放

一（極）似せ枡拵候もの　　引廻之上　獄門

（朱書）是は貞享二丑年、馬喰町二町目、揔兵衛と申者、御定より細き似せ枡ニ而、油商賣仕候由、淺草森田町、茂兵衛訴出候ニ付、吟味之上、無紛不屆ニ付、獄門ニ成候例を以相認申候、

懸紙
▲（朱書）是は唯今迄之取計を以相認、引廻之義は、此度評議之上相認申候、

懸紙
（極）但入目違無之においては中追放
（朱書）右二ヶ條、御附紙之趣奉承知、懸目入目無相違候ハヾ中追放と申儀、但書ニ相認申候

御附紙
右両條、掛目入目無相違候ハヽ死罪及間敷候
追放歟

右寛保二戌年二月廿九日伺之通御下知本文極、
寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、
無宿片付箇條之内
一極 似セ朱墨拵候もの　家財取上 所拂
朱書 是は此度評議之上相認申候、御下知相濟次第、似セ秤、似セ枡、御仕置之内江書加可申候、
右寛保二戌年三月廿二日伺之通御下知本文極、
〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重ねだり事致候もの御仕置之事、
従前々之例 一賣人買人を拵、似せ物商ひ候もの、　入墨之上 中追放
〔科條類典下五〕寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、
朱書 伺 巧事かたり事、重きねだり事致候者御仕置之事、
一極 賣人買人を拵、似せ物商候もの、　入墨之上 中追放
朱書 是は元文五申年、淺草田原町金平、同所花川戸町喜右衛門、同所駒形町源六、同所今戸町七兵衛、下谷山崎町新六儀、五人申合、眞鍮之目貫を調、所々往還江持出、賣手買手を拵、金目貫と申成し、往來之者を僞り、反物衣類と摺りかへ、又は高直に賣遣之段不届ニ付、五人共ニ入墨之上中追放、
掛紙
朱書 是は唯今迄之取計を以相認申候

右之内四ヶ條、寛保二戌年三月廿一日伺之通御下知本文極ル、

〔御仕置裁許帳 九〕似せ升仕者之類、幷風袋に重りを入、秤目を盗者、

貞享二年丑十月十二日

壹人總兵衛　是は馬喰町貳丁目、又四郎店之者、此者、御定ゟ細キ似せ升に而、油商賣仕候由、淺草森田町、權助たな角兵衛預之茂兵衛訴來ルニ付、今日召寄、遂穿鑿候之處、右之段無紛候、此者申候ハ、四年以前ニ召仕候、六兵衛と申者、右之升致所持候處、六兵衛儀、同年暇出シ、只今は行衛知レ不申候由申候、六兵衛暇出シ候上ハ、右之升、此者方ニ差置申間敷候處、差置候而、于今仕候段不屆ニ付牢舍、

右之者、同丑十月廿五日、於牢屋首を刎、四ッ谷笹塚村にて、獄門、

同日

壹人長太郎　是ハ右總兵衛忰

右之者、親之依科、同丑十二月三日死罪、

〔德川禁令考後聚 二十八 行刑條例〕寛政二戌年御渡 京都町奉行伺

一二條御藏納宿之者、不埒之取計致し候一件、

神泉苑町御池下ル町 内藤重三郎 小堀縫殿 殿御代官所納宿

久下屋 権右衛門

外七人

右之もの共儀、千木秤幷枡之儀ハ、毎々觸書差出置候處、祖父代、親代、又ハ先代之ものより仕來とは乍申、千木秤鉛之紐、皮紐ニ而長く附、又ハ込箱と唱、壹升枡五合枡ニ似寄候品を拵置、内拵之節相用、既ニ此度村垣左大夫見改候處、千木枡込箱共、品々不同有之候處、御藏構内之事ニ候得バ、假

令仕來ニ候迚、納宿株ニ而、納米端引請取計いたし候上ハ、右體之儀致間敷候處無其儀、等閑成致方、甚不埒ニ付、千木秤幷込箱とも取上、納宿株取放候上、日數三十日宛手鎖、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、二條御藏納之五斗入壹俵ニ、壹升餘宛込米いたし、村々より爲差登候處、納宿共內拵之節、本米五斗ハ枡ニ而計立、込米之分ハ、箱ニ而目積いたし、俵詰之上、千木秤ニ而樣し候處、右箱ハ込箱と書付いたし、千木秤錘之紐ハ、內拵之分、數多掛ケ候節、働いたし能ため、皮紐ニ而長く附、兩品共內拵之外ニ用ひ候儀ハ無之、手廻シ之ため拵候由、いづれも祖父親代、又ハ先代より申傳ニ用ひ來候由、尤込箱は、前書之通、壹升餘之込米を入候目積之品ニ而、込箱と書付有之上ハ、枡之趣意ニハ無之、別段之品と相聞申候間、咎之沙汰ニ及申間敷候得共、枡外之品ニ付、以來爲相用候儀ハ不致、千木秤ハ、紐取替間敷旨御觸之趣ハ、兼而承知可致儀ニ候處、仕來ニ候迚、皮紐ニ而長クいたし、附替候を其儘にて用ひ候段ハ、去ル未年、青山但馬守御勘定奉行之節、手限伺之上御咎申付候、鐵炮町、宇右衞門店藥種屋武右衞門儀、朱座之外、朱賣買難相成候御觸も有之候處、忠兵衞任相賴、德用を見込、琉球朱賣買致し候段不埒ニ付、朱座より預り置候朱、口錢共取上之上、過料錢三貫文申付候例ニ見合、此もの共ハ、祖父親代、又ハ先代より之仕來ニ而相用ひ候もの共ニ御座候間、右より輕く、千木秤取上、急度叱り置、以來込箱ハ相用ひ申間敷旨可申渡、

御差圖

千木秤、幷込箱とも取上、納宿株取放候上、三十日ヅヽ手鎖、

〔御定書百箇條〕寛保二年極 新規之神事、佛事、幷奇怪異說御仕置之事、

一奇怪異說申觸、人集致におゐては、
　發起いたし申觸候頭取　江戶拂
　同世話いたし候ものは　所拂

延享元年極
但町方在方共、人集いたし候宿之名主、重過料組頭、五人組、過料、三十日以上捨置不訴出候はば、町方在方共、名主役儀取上、

〔御當家令條三十一〕覺

頃日馬のもの言候由申觸候、先年も灸針之義申ふらし、又候ヶ樣之義申出し不屆候、何者申出候哉、一町切に順々咄候者、先々だん／＼可書上之候、初而申出し候者有之候ハヾ、何方の馬もの申候哉、書付早々可申出候、殊藥之法組迄申ふらし候由、何之頃何國に有之候哉、一町切人別に、だんだん書付可出之候、隱置候ハヾ可爲曲事候間、有體可申出者也、

元祿六年酉六月日

〔御仕置裁許帳四〕虛說申觸者之類

元祿六年酉九月廿九日

壹人筑紫薗右衛門　是は近藤登之助組與力筑紫新助弟

此者儀、惡事有之由訴人有之ニ付牢舍、孫助、三左衛門、與四郎、吉右衛門、捕ニ遣候處、赤坂裏傳馬町貳丁目五郎兵衛前ニ而捕來ルニ付、穿鑿之內揚リ屋ニ入、

右之者、去年夏中、馬物申候由虛說申出し、其上はやり煩よけの札、幷藥の法組を作り、實なき事を書付流風いたし、重々不屆ニ付、江戶中引渡シ、戌三月十一日、於淺草斬罪、

〔科條類典下四〕奇怪異說申觸し、人集いたし候もの、

赤坂鈴振稻荷向橫町森川彌三郎地借、　古義眞言宗

忍照

享保十七子年二月十二日揚リ屋入

右忍照儀、紛敷儀申觸し、不憚公儀、御成之御場所江罷越、修法等仕、其上先年不埒之儀ニ而、御咎も有之處、此度又同樣之儀申立、重々不屆ニ付、依御差圖、子七月十八日、八丈島江流罪、

右忍照儀、眞言宗ニ而、黑衣を着し總髮ニ結び、爪紅さし、御鷹野初より折々御成跡江罷越、何方ニ而も還御以後、御跡清メ之祓御祈禱いたし候、さんじやうと申物之由、木を貳本、枝之ごとくいたし、金入之切ニ而卷、眞紅之綱を附、持あるき、御狩ニ而被殺候禽獸を梵天江達、御祈禱仕候由、不動之呪を唱へ、諸人を謀り候、還御御跡清メ之儀、淨圓院樣より、田澤と申御年寄を以、御賴之由申候得共、無跡形僞ニ而候、人皇百十二代後西院第三之王子之由、證據無之僞を以、諸人ニ思ひ付かせ候、平生說法講釋いたし、助成ニ致し、弟子も大勢有之候、子二月三日、淨光院江大納言樣御成之節も、右之通祈禱仕候處、御徒目付兒玉喜兵衞、見出し候而申上候ニ付、御詮議ニ成ル、

〔御仕置例類集三ノ九〕寬政三亥年五月

戸田采女正殿御差圖　　松平右京亮掛

一下谷金杉安樂寺ニ而奇怪之致取計候一件

下谷金杉淨土宗安樂寺元住持當時隱居　祐松

右之もの儀、西丸表火之番犬塚吉太郎厄介ニ致置候尼回稱、死期覺悟致し候趣ニ兼而申聞、二月十二日、倶々念佛相唱居候內、回稱致絕命候と存候とも、其後も度々致言語同十五日未明ニ、回稱死骸を吉太郎宅ゟ寺江引取置候內も、右死骸呼吸有之、戒名卽生と申女、託し候段申之、彼是及問答、未死候とも難決儀ニ候處、施主吉太郎江も申聞、醫療之手當等爲致候儀も無之、其後引導葬式執行ひ、諸人之任望、於本堂ニ度々棺を開、死骸を爲拜、殊ニ土葬ニ可致抔、棺中ニ而も品々言語有之ものを、死靈之所爲と而已相心得、尤翌朝ニ到り、死骸相改、致絕命候ニ相違無之儀も、吉太郎兩人而已ニ而相極、土葬ニ致し候始末、一寺之住職をも乍致、不法之至、且棺之作り方等、態々死骸を諸人江拜セ候積相設候をも、致其分ニ候段、新規之佛事、奇怪之說等、御制禁之御觸ニも背き、諸人を誑惑シ候ニ相當り、重々不屆ニ付遠島、

〔御仕置例類集一ノ三十〕文化十二亥年御渡

長崎奉行伺

一肥後國高濱村勇助〔〇勇助下恐脱二女房二字〕たま奇怪異說申觸候一件

高木作右衞門當分御領所肥後國天草郡高濱村勇助女房　たま

右之もの儀、預置候村内忠平悴、永く養育致遣度候得共、差返候之樣申越、其上困窮ニ而、其儀難相成候迚、夫勇助留守中、名住所不存旅僧ゟ、木綿糸管貰受、外ニ大麥貰受候旨、勇助歸宅之上僞申聞、其後同人申合、右糸管ニ而織立候木綿江、佛體現候抔と無跡形儀申觸、殊同郡大江村江月院、右木綿見改、差留候後も、參詣人任有之、人々拜せ、賽錢之由ニ而、追々錢九貫貳百文貰受、後而不宜儀と心付、勇助ゟ江月院江、木綿致供養呉候樣相賴、斷および候迚、先祖致供養貰候始末、心得違之至、不埒ニ付、居村を構、長崎拂可申付哉之段、可奉伺處、此度御祝儀之御赦ニ御免、

此儀奇怪異說申觸、致人集候ニおゐて者、致人集候宿、江戸拂、發起いたし申觸候頭取、右同斷と有之御定ニ而、發言人之儀ニ付、居村を構、長崎拂相當ニ候處、伺之通御免、

朱書
評議之通濟

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重ねだり事致候もの御仕置之事、

延享元年極
一願不濟儀を叶ひ候體に申成、會所を建、掛札等出候もの、　家財取上　所拂

但當人居町居村において會所を建、於致懸札ニハ、名主、過料五貫文、家主五人組、過料三貫文、

尤他所にて會所建、掛札等出候はゞ、居所之名主五人組、其事を不存においては無構、

〔科條類典下五〕寬保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

朱書
(同)巧事、かたり事、重きねだり事致候者御仕置之事、

一願不請儀を叶候體に申成し、會所建、懸札等出し候もの、　家財取上　江戸拂

但當人居町におゐて會所を建、懸札致におゐては、名主は押込、家主、五人組過料、
朱書
是は此度評議之上相認申候

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政九巳年六月　評定所一座掛

松平伊豆守殿御差圖

一武州南秋津村醫師運朝、醫業之儀ニ付二條殿家來と申立、不埒之致取計候一件、

武州品川宿稲荷門前家持町醫師　君山

右之もの共儀、私欲致候儀ハ無之候共、運朝任頼、醫師取締之儀引受、世話可致旨申合、殊願受候儀ニも無之處、無祿之醫師共、二條殿配下ニ相成候上ハ、以來世上之取用も重く、所々江神農講を立、諸事申合候得共、勵之爲ニも相成候抔相認、醫事用辨と記候帳面を拵、近郷之もの共江連入之儀申勸、又ハ讀書講釋等會合之席ニ而も、右之趣相弘候始末不屆ニ付、家財取上、所拂、

右御仕置附

右不願受儀も相辨乍罷在、運朝願之通、二條殿ニ而聞濟有之、神農講と唱候、所々ニ而會合いたし候類之儀認候帳面を取拵又ハ講釋素讀等之席ニ而も、右之趣申弘候ものニ付、願不受儀を叶候體ニ申成し、會所を建、掛ヶ札等出候もの之御定ニ見合、家財取上、所拂、

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

從前々之例
延享元年極
一主人、親、重き惡事有之由僞を申懸、訴人に出候もの、　磔

前々ゟ之例
一御褒美可取巧にて、僞之致訴人候者、　敲之上　中追放

寛保元年極
一人を殺候旨、申掛いたし候もの、　一通之申懸に候は　重追放

但深き巧事有之は遠島、猶品重きは死罪、

〔科條類典下五〕寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

㊞僞之訴人致し候者御仕置之事○中略

極

一御褒美可取巧にて、僞之訴人致候者、　敲之上中追放

朱書

是は元文四未年、道心者無宿西入儀、松島町七右衞門方に、當分出居衆ニ而罷在候處、請人無之ニ付、被追出、其後又々罷越、當分差置呉候樣にと賴候得共、家内江入不申儀を遺恨ニ存、似せ秤拵候段訴人仕候はゞ、金子を貰可申と巧僞成、訴人致し候段不屆ニ付、敲之上追放ニ成候例、

懸紙

○朱書 是は只今迄之取計を以相認申候

右之内七ヶ條、寛保二戌年三月廿二日、伺之通御下知本文極、

〔科條類典下五〕寛保元酉年六月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

極

一人を殺候旨、申掛致候者、　●遠島

懸紙

●一通り之申懸に候はゞ 重キ追放

■朱書

是は享保十八丑年、勢州山田一之木町、淸八兄新八を、神田松枝町總八、〆殺候旨、岩本町長兵衞申懸致候ニ付、長兵衞遠島之例を以相認申候、

懸紙

×■朱書 是は唯今迄之取計を以相認申候

懸紙

×極 但深き巧事有之は遠島猶品之重キハ死罪、

〔御仕置裁許帳七〕伯父に無筋儀を申懸、屋舗方之門前に木札を立る者、

貞享三年寅十二月廿二日

壹人六郎左衛門　是は淺草田町彌右衛門店之者、此者伯父本所中之郷岡部祐德と申者と、金子之出入ニ付、德山五兵衛門江、當十月木札を立置候、依之右祐德訴訟申ニ付、去ル十四日、此者召寄、僉議之內、手鎖を懸、家主預ケ置、今日雙方召出シ樣子相尋候處、右之段無紛候、此者儀、身之惡事を押隱し、還而對伯父ニ無筋事を申懸候段不屆ニ候、其上理不盡ニ屋敷之門江木札を立候段、重々不屆成ル故穿鑿之上評定所ゟ籠舍、

右之者、未三月廿六日死罪、

〔御仕置裁許帳 七〕繼母繼子に致毒飼由虛言申者

元祿四年未八月廿五日

壹人福島平藏　是は牛込御簞笥町、與兵衛店之者、此者再從弟北日ケ窪妙正寺、當五月廿一日相果候處、此者申候は、繼母毒飼致候由申ニ付、今日雙方召出シ遂僉議候處、證據も無之段々不屆ニ付、評定所ゟ籠舍、

右之者亥七月廿七日、隱岐江流罪、

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永八亥十二月、主殿頭殿御下知、

一下總國上山川村八左衛門外貳人、申懸いたし候一件

桑原伊豫守懸

辻六郎左衛門御代官所下總國結城郡上山川村川岸田屋

八左衛門

右八左衛門親類

組頭 市左衛門

百姓 六郎右衛門

此八左衛門、市左衛門、六郎右衛門儀、荷物附送之儀ニ付同村彥兵衛外拾壹人を相手取、支配役所江八左衛門及出訴候之節、相手名前之外ニ、元右衛門總代ニ出府いたし候を遺恨ニ存、八左衛門居宅、自火ニ而燒失致候を、元右衛門幷出入之者共江難儀を可懸と取拵、八左衛門宅を灰ニ可致由、又ハ可燒拂旨、元右衛門申觸し候間、右出火ハ元右衛門幷彥兵衛外十壹人之仕業之趣、無跡形儀三人申合、申懸いたし候始末不屆ニ付、三人とも重追放、

御仕置附

右火を附候旨、申懸候はゞ、遠島ニ而可有御座候處、灰ニ可致由、又は可燒拂旨申觸し候間、附火致候と存候由申立候趣意ニ御座候間、火附之申懸ニハ相當り申間敷哉、火を可附旨張札いたし候と申懸ケ候程ニ可有御座候、御定書ニ、人を殺候旨申懸いたし候もの、一通り之申懸ニ候はゞ重追放、但深巧事有之ハ遠島、猶品重キ者死罪、人を殺候ものは、下手人之御定ニ御座候間、何れにも死刑之申懸ケニ御座候、然共深巧事有之ニハ無御座候間、一通り之申懸ケ致候もの之御定ニ見合、三人共重追放と御仕置附仕候、

〔享保集成絲綸錄 四十八〕慶安元子年三月

一於去頃平川口、喜濟と申者、直ニ目定差上之、渡唐仕、竹並（○並疑田誤）法印ニ鐵炮早打相傳之由書載之、色々御穿鑿之處、目安之表申上候處、一々僞也、直ニ捧目安之間（○間恐旨誤）申立、鐵炮之秘事、雖爲輕薄之旨、其身愚ニ而申上儀ハ、可被成御赦免之處、重々御僉議之上、彌僞依無紛、死罪ニ被仰付之也、

右之通、御旗本之面々江可洩聞云々、

附 贋造貨幣

德川幕府ノ制、貨幣ノ贋造ヲ嚴禁シ、若シ之ヲ犯スモノアルトキハ、引廻ノ上、磔ニ處ス、紙幣ハ幕府ニ於テ發行セザルヲ以テ、隨ヒテ之ニ對スル律文ナカリシガ、諸藩ニ於テハ、幕府ノ許可ヲ得テ、紙幣ヲ發行セシカバ、其諸藩ニ於テ、皆適宜ノ刑ヲ設ケタリ、猶ホ貨幣ニ關スルコトハ、泉貨部ニ詳ナルヲ以テ、宜シク參考スベシ、

〔御定書百箇條〕似せ金銀拵候もの御仕置之事

從前々之例
一似金銀拵候もの　引廻之上磔

〔科條類典下五〕寛保元酉年十一月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、
朱書
㊞似セ金銀幷銀札拵候者御仕置之事

此前御好ニ付張消

極
一似セ金銀拵候者　引廻之上磔
朱書
是は享保六丑年、根津門前古かね屋武兵衞と申者、酉年より亥年迄、似セ金銀拵候處、亥四月、相手仕候宇右衞門と申もの被召捕候ニ付、越後江參り隱レ居、其後御當地江參り、又々似金銀拵申候、勿論似セ金拵候諸道具所持仕候科によつて引廻之上磔ニ成候例を以相認申候、

●一似せ銀札拵候者　獄門

懸紙朱書
●此ヶ條御附紙之趣奉承知張消申候

○
朱書
是者享保十九寅年、備中國西濱村兵助、笠岡鍛之助と申者、備前國岡山領ニ而似セ銀札遣候ニ付捕、領主より先年似銀札遣候もの獄門申付候、兩人之内鍛之助は似セ銀札拵候義ハ無之、遣ひ候迄ニ候間、御仕置輕重之義伺候處、何も於領内獄門可申付旨被仰出候ニ付、於領内

獄門、

懸紙朱書

○是ハ右同斷

御附紙

×銀札之事、私領ハ御免之所も有之候得共、公儀より不被仰付事ニ候得者、此ケ條可除、

右寛保二戌年二月廿九日、伺之通御下知本文極、

〔教令類纂初集錢六十六〕寛永二十癸未年二月二日

覺

一諸國在々所々におゐて、新錢鑄候事、堅御制禁也、若相隱鑄出候族有之ば可申出、縱雖爲同類、其科をゆるし御褒美可被下之、自然脇より訴人於有之は、本人は不及申、五人組可行死罪幷其所之者迄、可爲曲事もの也、

寛永二十年二月二日

〔嚴有院殿御實紀十一〕明曆元年八月二日、新錢の事、いづちにても免許なきは、一切鑄造すべからず、もしそむくものは、とがめらるべし、

〔嚴有院殿御實紀四十三〕寛文十一年十一月朔日、けふ令せらるゝは、各國に於て、○中略僞造の金銀賣かふこと停禁たるべし、兌銀舖に携へ來らば、舖にてこれを破裂しその主にかへすべし、調度のかなかひとりはなち、僞贋せし金銀は、その座につきて問議るべし、すべて兌銀舖の外販賣すべからず、○中略そむくものは、あるは死刑、あるは流刑たるべし、

〔嚴有院殿御實紀四十八〕延寶二年二月、この月○中略又令せらるゝは、○中略いづれの地にても、御ゆるしなくして新錢を鑄造すべからず、もし違犯せば曲事たるべし、○中略僞造の金銀販賣の事一

切停禁たり、もしもち來るとも、兌銀舗にてうちやぶり、其主に返しやるべし、並に器用の金かひはなち、金銀はその座につかはし相はかるべし、兌銀舗の外はかたく賣買すべからずとこの條件の旨を守るべしとぞ、

〔武家嚴制錄二十七〕一雜事高札

條々〇中略

一似せ金銀賣買一切停止たるべし、自然持來においては、兩替屋にて打つぶし、其主より可返之、幷はづし金銀、似せ金銀は、金座銀座へつかはし可相改之事、〇中略

天和二年五月日　奉行

〔常憲院殿御實紀三十四〕元祿九年七月九日、けふ令せらるゝは、〇中略本鄉改鑄所の外にて、一切金銀造るべからず、もし他所にて改造するか、又は僞贋して造るものあらば、すみやかにうたへ出べし、たとへ黨與たりとも、其罪をゆるし、褒賜あるべし、もしかくして他よりあらはれば、本人はいふまでもなし、親族ならびに土人等までも曲事たるべしとなり、

〔天明集成絲綸錄四十八〕安永三午年六月

三奉行江

深川永代寺門前、家主彌七、同所同人方ニ居候金藏、淺草田原町壹丁目、源六店源助方ニ居候万三郎、馬喰町壹丁目吉兵衛店甚兵衛、右四人之者共儀、去七八月以來、似せ金小粒、同二朱判、五匁銀、小玉銀、揥遣ひ候段、重々不屆至極ニ付、此度四人之者共、引廻之上、磔ニ被行候、右之通有之ニ付、此以後似せ金銀等揥遣候族ハ勿論、右體ニ紛敷事致シ候者有之バ、早速召捕、月番之番所江可訴出候、其筋々ゟ御褒美可被下候、訴違候段ハ不苦候、若見遁シ聞遁ニ致シ、追而相知レ候はば、咎可申付候、

前書之通、此度町觸申付候間、武家屋敷々々にても、右ニ准シ相心得可申候、若不審成者も有之候はゞ遂吟味、早速可被相伺候、此旨向々江可被相達候、

六月

右之通相觸候間、可被得其意候、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化九申年御渡

火附盗賊改松浦大膳伺

一似せ貳朱判拵候もの吟味之儀ニ付評議

附箋

書面評議仕申上候通、松浦大膳江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

申五月廿日　評定所一座

書面似貳朱判拵候者召捕候節ハ、其度々相伺候樣被仰渡、奉承知候、

申五月十八日　松浦大膳

盗賊ニ見込召捕、盗筋ハ無之、似せ貳朱判を拵、衒いたし候ものは、是迄之通町奉行江引渡、其外鉛ゑやり之類盗取、右鐵物を以、貳朱判を似せ、或は盗取候金銀幷盗之品賣拂代銀を以、其道具等買調、似せ貳朱判を拵候類、右樣盗賊筋ニからまり候儀ハ、以來手限ニ而吟味詰、御仕置相伺候樣可仕哉、尤町奉行江も懸合候處、彼方ニ而も差支無之旨申聞候、依之盗賊幷博奕筋ニからまり候儀、加役方ニ而御仕置相伺候類例も相添、此段奉伺候、

〔御仕置裁許帳九〕金銀錢之爲似仕者之類

萬治元年戌閏十二月廿四日

貳人　五郎左衛門　是は水戸御領分靑柳村之者

權　三　郎　是は右之五郎左衞門悴

右之者、似せ錢仕候同類之由、訴人有之旨、中納言殿ゟ捕來ルニ付籠舍、

五郎左衞門儀ハ、亥七月廿五日、所江遣、磔、

權三郎儀ハ、亥十月朔日、堀丹後守方江渡り、死罪、

右兩人之者

〔百一條〕正德三年十一月廿六日引渡者三人有之、貳人者、銀僞作者、壹人者荷物盜者、刎首獄門、此外斷罪少々有之云々、

〔御仕置例類集二ノ九〕文化元子年御渡

甲府勤番支配伺

一無宿幸左衞門似せ銀拵候一件

無宿入墨太七事
幸左衞門

右之もの儀、江戶表ニ而、入墨敲之上、人足寄場江遣候處、同所逃去、御仕置ニ可相成處、御法事之御赦ニ相成、甲府ニ而、又候敲ニ相成、其後駿府におゐて、支配所拂ニ相成候以後も惡事不相止、町家店先ニ有之手拭切地盜取、剩無宿傳五兵衞同意いたし、似せ南鐐銀同人拵手傳致シ、道具幷似せ南鐐銀三片貰受、其後傳五兵衞拵候通、南鐐銀八片拵、右之內一片ハ取落、商先持步行所々ニ而拂等ニ遣候得共、請取候もの無之候迚、都合拾片、所持致し罷在候段、重々不屆至極ニ付引廻之上磔、

此儀、吟味書之趣ニ而ハ、無宿傳五兵衞申ニ同意いたし、似銀拵候節手傳、似南鐐銀三片、又ハ細工道具貰請、立別レ候後、猶又其身と似銀拵、所々持步行、拂等ニ遣候得共、見苦敷由ニ而、請取候もの無之故、所持いたし居候と有之、寬政十一未年、松平周防守寺社奉行之節、手限伺之上、御仕置申付候、無宿助七儀、諸國銅山等、堀出し方いたし、奧州山方ニ而相稼候節、一同堀方いたし居候、住所不存喜藏儀、外山方江罷越候由ニ而、立出候跡ニ殘し置候品之內、貳朱判拵候打形有之、喜藏江可相返と、心懸候內、同人相果候由及承候間、此もの所持致し、似せ貳朱判を拵、利德ニ可

致と存付、住所不存清左衞門外貳人申合、諸道具を調達いたし銅江銀箔を燒付、員三拾程、山中ニ而拵候得共、受取候もの無之、右ハ取捨、猶又似せ貳朱判拵候積り、右諸道具を持所々立廻リ候段、重々不屆至極ニ付、引廻之上、磔申付候例ニ見合伺之通、引廻之上磔、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ二〕文化七午年御渡

火附盜賊改大林彌左衞門伺

一贋貳朱判拵候もの吟味懸り場之儀ニ付評議、

附箋

書面之勘藏、源助儀、町奉行江引渡候樣、大林彌左衞門江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

午三月廿三日　評定所一座

湯島三組町伊兵衞店九番組人宿峯助寄子

勘藏
外壹人

右之もの共儀、贋銀取拵候趣、組之者及承、召捕來候ニ付、吟味仕候處、武家方中間奉公いたし罷在、勘藏儀、小遣錢ニ差支候間、銜事可致と存、兼而南鐐銀を拵候仕方覺居候ニ付、當二月下旬、贋銀拵可申段、傍輩中間大助、幷書面之源助江申勸候處、同意いたし候ニ付、兩人ニ爲手傳、鉛半田石灰等を調、南鐐之正銀ニ而鑄形を拵、贋銀八ツ鑄上ゲ、同月廿二日暮六ツ時頃、右之内貳片、源助ニ爲持、同道いたし立出候途中、小日向金剛寺門前、藤兵衞店酒屋市右衞門召仕、兼而勘藏見知罷在候幼年之者ニ而、松五郎と申もの、途中ニ而參り懸り候間、源助ニ差圖いたし候處、呼懸酒五合、同所中之橋武家屋敷江致持參候樣、尤金壹分可遣間、釣り錢とも持參り候樣申欺候得バ、承知いたし立歸り候間、途中ニ待居候處、無程酒五合、幷酒代百貳拾四文、差引釣リ錢壹貫五

百七拾貳文持參り候間、外ニ調物致し候ニ付、釣り錢相渡候樣申、所持いたし候、贋南鐐銀貳片相渡、右錢衒取、酒ハ屋敷江持參り候樣申欺逃去、其外下谷常樂院門前、太十郎店、足袋屋喜兵衛、根津宮永町、甚兵衛店、紙屋太兵衛方ニ而、釣錢衒取、

朱書 此儀書面之市右衛門、喜兵衛、太兵衛、相糺候處、相違無御座候、尤贋銀拵候道具、取上置申候、

三人ニ而、遣捨候由申立候、

右之通白狀仕候、尤是迄贋銀拵候而已ニ而、盗惡事無之ものハ、町奉行江引渡候儀ニ御座候得共、此もの共儀ハ、金衒事可致ため、贋銀拵候儀に而、別紙之幸助、初發ハ意恨而已ニ而主人之妻を切害いたし、夫ゟ盗心出來、內々金子等盗取、死骸ハ燒死之體にいたし候始末ニ候處、火附幷盗之惡事有之候ものニ付、其節手限ニ而相伺候處、伺之通御下知有之候、且又巧成衒事致シ、死刑ニ相成候もの、是迄手限ニ而、御仕置調伺候儀ニ御座候間、此度贋銀拵候一件も、一體初發ゟ衒事可致ため、贋銀拵候始末ニ候上ハ、吟味詰御仕置相伺候樣仕度、依之例書相添此段奉伺候、

此儀別紙例ニ申上候幸助ハ、主人之妻子等を殺候得共、盗又ハ附火致し候儀も有之候間、大林彌左衛門懸りニ被成置可然哉と、其砌評議ニ御下被成候節申上、其通相濟候得共、今般之勘藏外壹人ハ、全贋銀を拵、遣拂候ものニ付、別紙例江ハ難引當、贋銀之儀、人を欺、かたり事之ため拵不申ものハ無之、然ル上ハ、初發ゟ衒事可致ため、贋銀拵候始末ニ候迚、火附盗賊改懸リニ而、吟味詰候筋ニハ有御座間敷、是迄町奉行江引渡來候儀ニ付、先格之通、勘藏外壹人も町奉行江引渡可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

午三月

〔備藩典刑 四〕一似せ札仕候樣之者於有之は、其身は不及申、一類迄罪科に被仰付、幷五人組共、曲事可被仰付候事、

一若他所ゟ似せ札を以持參仕候者於有之は、其もの押置、早々奉行所へ注進可仕事、○中略

七月○寛文十年朔日

〔河方記〕元祿十七年甲申○寶永元年二月朔日、水戸御達、

公儀へ御願被仰達、御領內賣買之諸品、金銀札にて通用之儀、此度被仰出候、○中略似せ札、其外謀書之輩有之ば、御糺明之上、可被處嚴科者也、

〔東武實錄十一〕寛永元年三月六日、勢州山田三方年寄ノ輩ニ仰出サル、趣、

覺○中略

一山田に於て、にせはがきをいだし、其上町中へ火をも付候はんとたくみを仕候惡人出來候て、籠舍之由尤候、成敗之儀は、其元御代官可被仰付候間、其節御代官と相談之上、可及沙汰事、○中略

寛永元年三月六日　山田三方年寄

〔類聚名物考調度十五〕羽書　はがき　紙鈔

伊勢一國にてつかふ紙札なり、銀遣の札にて、禰宜神主組合て、この羽書を出す、札の表に細密の繪有て、銀目をもかきて有、昔より此制を私に取行ふなり、

〔的例黃紙之寫〕獄門

安永三午二月、右京大夫殿御下知、　評定所一座懸り

一作州奥山手村幸助外二人、贋銀札拵候吟味一件、

大久保七郎右衞門領分作州久米郡奥山手村百姓三郎右衞門忰　幸助

內藤山城守領分同國同郡西垪和村百姓　多助

同人領分同國同郡中山手里村同　喜助

此幸助、多助、喜助儀、大久保七郎右衞門領分、作州久米北條郡、西條郡勝北郡之內、銀札通用有之候

處、利欲を以三人申合、贋銀札取扱候段、一同不屆至極ニ付、獄門可申付哉、

〔御仕置例類集 三ノ十三〕寬政五丑年四月

戶田釆女正殿御差圖

御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

一讃州五條村龍松寺快眞贋銀札取拵候一件

野口辰之助御代官所讃州那珂郡五條村眞言宗龍松寺　快眞

右之もの儀、弟子善休幷喜兵衛江申付候張物板、又者祈禱札ニ用候趣申聞、板幷紙等買貰、丸龜領通用之贋銀札取拵遣候段、不屆至極ニ付、存命ニ候ハヽ獄門、

右御仕置附

右贋金銀拵候もの之御定者御座候へ共、贋銀札拵候御定者無御座、安永三午年評定所一座江吟味伺之上、御仕置申付候、作州奥山手村百姓三郎右衛門悴幸助外貳人儀、大久保七郞右衛門領分、作州三郡之內、銀札通用有之處、利欲を以、三人申合、贋銀札取拵候段、一同不屆至極ニ付、獄門申付候例ニ見合、獄門、

〔御仕置例類集一ノ九〕文化十三子年御渡

奈良奉行伺

一和州田原本村之內味間町甚助贋銀札取拵候一件

平野權平知行和州十市郡田原本村之內味間町　甚助

右之もの儀、重太郎申合、甚助彫候板木を以、兩人ニ而贋銀札四拾目計摺立、買物代ニ壹貳分宛差遣候處、何れも銀札不宜旨ニ而不請取、其上兩人共如何敷銀札取扱候旨、風聞有之ニ付、甚致後悔、銀札幷板木共燒捨、通用爲致候儀無之候共、一旦贋拵候段、不屆ニ候得共、全く困窮ゟ不斗存付候儀と相聞候間、入墨之上重追放、

死後處刑

此儀困窮ゟ不斗存付、贋銀札取拵候迚、右ニ付御仕置駈可申樣無之、幷贋銀札等燒捨事者、不遂趣ニ御座候得共、安永三午年一座掛伺之上、御仕置申付候、作州奥山手村百姓三郎右衛門悴幸助外二人儀、大久保七郎右衛門領分、作州久米北條郡、西條郡、勝北郡之內、銀札通用有之候處、利欲ヲ以、三人申合、贋銀札取拵候段、一同不屆ニ付、三人共獄門可申付處、不殘病死致候ニ付其旨一件之もの共江申渡候例有之、右例之幸助外二人も、吟味書之趣ニ而者、銀札引替所江贋銀札致持參候處、怪敷札之由ニ而、彼是六ケ敷可相成樣子ニ付、右贋銀札を持歸、貳拾枚之內拾七枚、幷似板行、似印肉者、露顯不致樣燒捨、其餘三枚も燒捨可申ト存候內、吟味相成候と有之、不事遂段も例同樣ニ御座候間、右例ニ見合獄門、

但科書之內、全く困窮ゟ不斗存付候儀と相聞候間と申文段者、相省可申渡、

朱書
評議之通濟

〔三〕奉行取計書〕文政四巳年正月廿三日

似金銀拵遣捌候者、死骸御仕置之儀ニ付申上候書付、

書面伺之通可仕旨被仰渡、奉承知候、

巳二月廿九日　榊原主計頭

似金銀拵遣捌候もの、申口相決、病死致し候節之御役所先例相糺候處、文化四卯年五月、右死骸鹽詰、引廻し之上、磔と相伺候處、其通御下知相濟、猶又其後相伺候處、度々同樣之先例有之候、然處御定書ニ、主殺、親殺、關所破、重キ謀計之ものハ、死骸鹽詰、引廻し之上、磔と有之、似金銀拵遣捌候もの、死骸鹽詰之ケ條ハ無御座候處、前書之通、度々伺濟有之候得共、右ハ全ク風と先例ニ泥ミ、相伺候儀ニも可有御座候哉、既ニ寶曆十一巳年之御書付ニ、御定ニ相當候御仕置ニも、其內少し品有之候得バ、御定より御仕置作略いたし、類例を以相伺候も有之候而ハ、いつとなく御定消候樣相成

候間、右之所心を附、不紛樣可致と有之候ニ付、猶又似金銀拵遣捌候もの病死致候節、是迄取計之儀、評定所をも相糺候處、寛政三亥年、日光奉行相伺、評定所一座江評議ニ御下ゲ被成候、日光御門跡領、野州都賀郡上久我村、求馬儀、源吾江似金細工申勸候儀無之段、品々申陳候ニ付、再應嚴敷吟味之上、源吾方江遣置候刀を同人質入いたし、及催促候得共不返、似金細工いたし受戻可相返旨申候ニ付、風と欲心ニ迷ひ、住宅貸遣候外、假令吟味ニ而相果候とも可申立品無之旨申之候得共、無目秤、南鐐銀江打候定之字之極印、鉛ニ而拵候似せ小玉銀をも所持致し、殊ニ定之字之極印ハ、三四年以前、浪人體之もの止宿爲致候節、右之もの差置候を所持いたし、鉛小玉銀も、其節細工いたし爲見候を所持いたし候段申立、以前も細工人差置、似金細工爲致、此度源吾江似金之儀申勸候段も同人白狀之趣と申、引合之もの共申口、旁無相違處、申陳候段不屆至極ニ付引廻し之上磔と相伺、評議之上、伺之通引廻之上磔可申付ものニ御座候處、病死仕候段、追而申上候間、存命ニ候はゞ引廻し之上、磔可申付ものニ候段、一件之もの共江可申渡と申上、其通相濟候例御座候間、旁以今般之辰五郎外壹人儀も、存命ニ候はゞ、其段一件之もの共江可申渡と奉存候、右ハ御役所之先例ニ似金銀拵遣捌候もの、病死いたし候節、鹽詰ニ致し置、死骸引廻し之上、磔と相伺候、度々之先例江も振候ニ付、此段別紙を以申上候、以上、

巳正月　　榊原主計頭

〔嘉永明治年間錄四〕安政二年三月廿七日

贋金製造ノ罪人明吉、獄中謹愼ニ依テ罪一等ヲ減ズ、

越中國堀岡新村百姓傳吉忰明吉卯三十二御仕置、右明吉儀、贋金致し候に付、弘化三年入牢、二十四箇度拷問、一昨年終に白狀、不屆ニ付死罪可申付處、於牢内四人をいたはり、病人介抱行屆、死人も少く、且牢内取締も行屆候に付、宥免を以て遠島に行はる、

雜載

〔甲子夜話 二〕昔ノコトニテヤ有ケン、或曰、文政四年、重職ノ人建言シテ通貨ヲ改鑄アリシトキ、金銀ノ位、元貨ヨリ劣リタルナド、サマ〴〵世ニ浮言アリシガ、ツヒニ贋貨ヲ造リシモノ出來テ追捕セラレキ、鞫問ノ後、罪極リ、ソノ者ヲ馬ニノセ法場ニ赴キ刑行ハルベキ路次ニテ、高聲ニ似セ金ヲ作リ出セシ御仕置アラバ、我々ヨリモ屹トシタル、二本道具ノ御役人コソ罪ハ重カルベシト罵リシニ、滿路ノ行人、一哄ニ笑ヒケリ、付從ヘル町與力同心共、忌諱ニ觸ルヲ恐レテ、叱レドモ更ニ用ヒズシテ、我等ハ、モハヤ死ヌルナレバ、何デウ世ニ憚ルコトアルベキヤトテ、幾度トモナク罵リシニ、與力等モ、セン方ナク默セリトゾ、

古事類苑

法律部四十七

下編上

犯姦

古事類苑

法律部四十七

下編上

犯姦

德川氏ノ制、犯姦ノ罪ハ、前代ニ比スルニ頗ル嚴ヲ加ヘ、有夫ノ婦ニシテ私通スルトキハ、其姦夫ト倶ニ死罪ニ處シ、本夫、其妻及ビ姦夫ヲ殺スト雖モ、其罪ヲ問ハザルノミナラズ、之ヲ挑ム者アリ、密ニ其家ニ入ル者アルトキハ、其事未ダ成ラザルモ、本夫ハ猶ホ之ヲ殺スコトヲ得ルナリ、而シテ婦ノ拒絶セシコト明白ナレバ、婦ハ則チ罪ナシ、其媒合者ハ、之ヲ中追放ニ處ス、事若シ強姦ニ係レバ、姦夫ヲ死ニ處シ、若シ輪姦ナレバ、首ハ獄門ニ處シ、從ハ重追放ニ處ス、其結婚ノ約既ニ成リタル女ト私通スルトキハ、其女ノ父、男女ヲ殺ストモ罪トナラザルガ如キハ尤モ特例ナリ、而シテ強姦ノ無夫ノ婦ニ於ケルヲ重追放トシ、幼女ヲ傷クルヲ遠島トセリ、特ニ主從ノ關係、親戚ノ關係ヲ重ンジケレバ、若シ主人ノ妻ニ通ズル者アレバ、姦夫ヲ引廻ノ上獄門トシ、姦婦及ビ媒合者ヲ死罪トシテ、普通ノ有夫姦ヨリ重クシ、主人ノ女ト私通スル者ハ中追放トシ、其女ハ手鎖ノ上父ニ下付ス、又親戚ニ於ケルハ、養母、養女、家婦ト相通ジタル者ハ、男女共ニ獄門ニ處シ、姑、姉、妹、姪等ト相通ジタル者ハ、男女倶ニ遠國非人手下ニ處シ、又僧徒ノ事ニ關シテハ尤モ紀律ヲ嚴ニセリ、故ニ住持ノ犯姦ハ遠島ニ處シ、所化僧ハ晒ニ處セシ後、本寺觸頭ニ下付シテ、寺法ニ處セシメタリ、其有夫姦ノ如キハ、住持所化ノ別ナク、總テ獄門ニ處ス、

又痛ク密賣婬ヲ禁ジ、其請人、及ビ家主、地主、五人組、名主等マデモ、各、連累ノ刑ヲ受ケ、其女ハ新吉原町ノ娼家ニ下付スルコト、ス、

男女相通ジテ、共ニ死スルヲ相對死ト謂フ、此罪ヲ犯シタル者ハ、男女トモ其死體ヲ埋葬スルコトヲ聽サズ、但一人生存スレバ下手人ト看做シテ處刑シ、二人倶ニ存スレバ、三日晒ノ上、非人手下ト爲ス、

強姦

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保三年極追加
一女得心無之に、押て不義いたし候者、　重追放

〔御仕置例類集二ノ二十五〕文化九申年御渡

御勘定奉行松平兵庫頭伺

一甲州大垈村林右衛門外貳人、同村清藏後家いわを押而不義いたし候一件、

中村八大夫御代官所甲州巨摩郡大垈村　百姓　林右衛門

右之もの儀、同村清藏後家いわ儀、兼而執心ニ存候得共、密通申掛候とも、承引致間敷と心得、村内吉右衛門と酒給合候上申勸、夜中いわ方江罷越、理不盡ニ同人を差押、兩人ニ而押而不義いたし、其後も執心不相止、又候吉右衛門幷同村與兵衛江申勸、いわ方江罷越、手足を押、三人ニ而、押而不義いたし、剩立歸候節、嘲哢いたし候故、いわ立腹いたし、雜言申聞候を、却而拳を以打擲いたし候始末不屆ニ付、敲之上重追放、

此儀兵庫頭先役中、御仕置附ニ申上候、女得心無之ニ、押而不義いたし候もの、重追放と有之御定、幷夫有之女、得心ニ無之を、押而不義いたし候ものは御定但書をも見合、重追放より一等重く、伺之通、敲之上重追放、

朱書
評議之通濟

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

一（従前々之例）夫無之女と致密通、誘引出候もの、　女は為相帰、男は手鎖、

〔御定書百箇條〕縁談極候娘と不義致候者之事

元文五年極
一縁談極置候娘と致不義候男、并娘共に切殺候親、　見届候段於無紛は　無構

寛保三年極
一縁談極候娘と致不義候男　輕追放

但女は髪を剃、親元江相渡、

〔科條類典下四〕寛保元酉年十一月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

㊐縁談極候娘と不義いたし候を切殺候もの之事

極
一縁談極置候娘と不義いたし候男、并娘共に切殺候親、　見届候段無紛においては　無構

朱書
是ハ元文五申年、下總國上山川村八右衛門娘と同村四五右衛門不義いたし、兩人共親八右衛門切殺候處、御構無之例を以、相認申候、

懸紙

○朱書
是者只今迄之取計を以相認申候

右寛保二戌年二月廿九日、伺之通御下知本文極、

〔科條類典下四〕寛保二戌年十一月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

極
一縁談極候娘と不義いたし候男　輕追放

但女ハ髪を剃、親元江相渡、

朱書
是ハ此度評議之上相認申候、御下知相濟次第、縁談極候娘と不義いたし候を切殺候もの箇條之内江書加可申候、

右寛保三亥年五月三日、伺之通御下知本文極、

〔科條類典下四〕寛保三亥年八月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守、御届書之内、

一縁談極候娘と不義致し候もの之事

此題號之儀、去戌三月差上候帳面ニハ、縁談極候娘と不義いたし候を切殺候もの之事と相認候得共、猶又當亥五月伺相濟候通、此度二ヶ條目ニ追加相認候ニ付、題號も書面之通書改申候、

〔科條類典下四〕夫無之女と密通いたし、誘引出候もの、

元文四未年八月

一武州大間野村作右衛門外壹人、相手神田松下町壹町目吉右衛門欠落女出入、

右作右衛門娘さわを、同村四郎左衛門方江奉公ニ出候處、吉右衛門馴合欠落爲致、淺草田原町二町目、喜兵衛店太平次方江預置、吟味之節、四郎左衛門差圖ニ而、夫婦之致契約段雖申、無證據ニ而、全馴合誘引出候段無紛不届ニ付、

手鎖懸、家主預、　吉右衛門

さわ儀、親作右衛門ニ引渡遣、太平次儀、吉右衛門申旨ニ任せ、實否も不糺囲置段不埒ニ付、

過料三貫文　大平次

〔御仕置例類集二ノ二十四〕文化元子年御渡

京都町奉行伺

一水野伯耆守召仕、せを、密通いたし候一件、

水野伯耆守召仕下女　せを

右之もの儀、廣瀨織右衛門事、村上藤藏と密通いたし居、其後伯耆守方江奉公ニ罷出、藤藏と通路はいたし候得共、密通いたし候儀無之、去亥年、主人供いたし上京致し候以後ハ、藤藏方江書通も不致候處、當正月、藤藏儀、上京いたし候旨爲知越、途中ニ而出會候節、上京之始末咄合等いたし、其

後藤藏儀、主人御役屋敷江罷越、此もの江金子貸置候旨申候由ニ而、用役川島幸七相尋候ニ付、右體之儀無之旨申答、其餘引合方之儀ハ不存候處、當五月、此もの存寄有之、江戸屋敷江差下候旨ニ而、同十日當地出立、大津驛ニ而藤藏ニ出會、面會之儀ハ、同役之もの制止候儀乍承面會いたし、藤藏任申、追而逢候節迄迚、懷劒預り置相別、右之次第差添候同家來中村納右衞門江申聞候處、同人江藤藏引合方も不穩候由ニ而京都屋敷江申遣、翌十一日京都屋敷江立戻候旨申候得共、御家人之娘之儀、密通いたし候儀有之間敷儀、年經候儀とハ乍申、不身持より事起候儀、其上藤藏江面會之儀、用役之もの共制止候儀乍承、後難を恐候迚、旅中ニ而面會および、追而面會迄預り置候懷劒之儀ハ、藤藏儀、盜取候品ニ候處、其儀ハ不存候とも、猥ニ預り候儀、女之儀とハ乍申、右始末不埒ニ付預り置候懷劒取上、主人江引渡、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

一 從前々之例 密通いたし候妻　死罪

一 同 密通之男　死罪

一 寛保二年追加 密通之男女共に、夫殺候はゞ、　於無紛は 無構

一 同追加 密夫を殺し、妻存命に候はゞ其妻、　死罪

但若密夫逃去候はゞ、妻は夫之心次第可申付、

一 同追加 女同心無之に密通を申掛、或は家内江忍入候男を夫殺候時、不義を申懸候證據於分明には、　男女共 無構 ○中略

一 從前々之例 密夫いたし、實之夫を殺候女、　引廻之上 磔

但實之夫を殺候樣に勸候歟、又手傳いたし殺候男、獄門、

一 寛保元年極 密夫いたし、實之夫に疵付候者、　引廻之上 獄門 ○中略

寛保二年極追加
一夫有之女、得心無之に押て致不義候もの、　死罪
　但大勢にて致不義候はゞ、頭取獄門、同類重追放、
同追加
一密通御仕置、妻妾都て差別なし、○中略
延享二年極追加
一夫有之女、艶書は度々爲取替候共、密會不致儀無紛においては、　男女とも　中追放

〔科條類典下四〕寛保元酉年六月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守、伺之内、
　(伺)密通御仕置之事
一極　密通致し候妻　死罪
一極　密通之男　死罪
　但實之夫を殺し候様ニ勸候歟、又ハ手傳殺候においては獄門、
　朱書　右二ヶ條定例を以相認、但書ハ只今迄之取計を以書加申候、
一極　密夫いたし、實之夫を殺し候もの、　引廻し之上　磔
　朱書　是者元文二巳年、甲州上條東割村小兵衞妻、同村彌一右衞門と密通之上、夫小兵衞を殺候様に勸メ、手引いたし殺させ候ニ付、引廻之上、磔之例を以相認申候、
一極　密夫いたし、實之夫に疵付候もの、　引廻し之上　獄門
　此朱書、かけ紙を以張消、
　朱書　右二ヶ條、夫を殺候御仕置之儀、只今迄之取計を以相認、疵付候御仕置之儀ハ、右ニ准じ書加申候、

〔科條類典下四〕寛保二戌年十一月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守、伺之内、
一極　夫有之女、得心無之に押而不義致し候もの、　死罪
　但大勢にて不義いたし候はゞ、頭取獄門、同類、〓死罪、○中略

遠島

懸紙 極

重キ追放

朱書
是者此度御下知之趣、御尤ニ奉存候、此懸紙之通相改申候、

〔科條類典下四〕寛保二戌年十二月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺、

御定書伺帳之内、御好之儀ニ付、申上候書付之内、

(八)御箇條之内

極
一密通御仕置、妻妾都而無差別、

朱書
右御書面之趣奉承知候、右御文言ハ、先達而差上置候帳面、密通御仕置箇條之内、夫有之女、密通いたし候御仕置之次江、右ハ更ニ相認可申候、

(九)但大勢にて不義いたし候ハヽ、頭取、　獄門

朱書
右同様之儀、死罪ニハ及間敷旨、御書面之趣奉承知、御尤ニ奉存、猶又評議仕候處、畢竟頭取之もの勸候故、其餘之もの共も不義いたし候得ハ、頭取よりハ品輕ク御座候得共、不法之仕形ニ御座候條、遠島ニも被仰付可然哉奉存候間、猶又奉伺候、●

御附札

頭取之もの、重キ御仕置ニ成リ候得バ、其同類ハ重キ追放ニ而可然候、尤同類之内には、別而不届成ものハ、遠島ニも死罪ニも可申付者も可有之候得共、夫ハ其時之仕方次第之儀ニ候、平日之定メハ、申分を以認置可然事、且又時ニ臨、御仕置可伺と申儀、此外ニも有之候間、別紙之通可相改哉、

●

右寛保三亥年五月三日伺之通御下知本文極、

〔御仕置裁許帳十二〕密通之出入ニ而家主店被追拂候以後、番所門前江參、自害仕候者、

延寶八年申十月十八日

壹人市郎兵衛坊主歳廿九　是ハ本皮屋町、忠左衛門店縫薄屋七左衛門出居衆、此者七左衛門女房と致密通罷在候を、今月九日之夜、七左衛門見付候得共、双方命を介、兩人共ニ剃致坊主、御當地立廻リ申間敷之由、手形いたさせ追拂候へば、同十一日之夜、番所之前ニ而、小刀を持候而、腹少宛五ヶ所自害仕候得共、相果不申候間、當分之宿本銀町貳町目、次郎右衛門店傳右衛門ニ預ケ、今日女房之親湯島天神門前半右衛門、其外一巻之者召出、穿鑿之上、彌不屆者故牢舍、

右之者、延寶九年酉三月十一日、日本橋ヨリ五里四方追放、

〔科條類典下四〕夫有之女、得心無之ニ押而密會致候もの、

元文五申年七月

一武州八甫村孫四郎相手同國東大輪村十右衛門外壹人、押而不義いたし候出入、

孫四郎妻けん儀、五月五日、舅方江罷越、翌六日罷歸候節、途中にて、何ものとも不知兩人ニ出會候處ニ、彼是と戲懸り之上、麥畑江おし籠、兩人代ル〳〵理不盡に致密會候、産後間も無之故、血暈いたし、前後不覺倒居候を、夫孫四郎迎ひに出見付、兩人之儀相尋候得ハ、名前ハ不存候得共、大概面を見覺候由申候故、心懸ヶ居候內、五月十二日、十右衛門馬を牽通り候を見付、召捕留置候得ハ、壹人ハ角助ニ而候旨申ニ付、詮議相願候旨訴之、遂吟味處無相違に付、伺之上御下知よつて御仕置左之通、

松平三七郎知行武州東大輪村勘兵衛弟　十右衛門

同國同村喜右衛門弟　角助

重キ追放

此もの共儀、事を催し候儀にハ無之候得共、酒ニ醉候儀とハ乍申、小兒を[illegible]キ、人之妻と相見候もの理不盡ニ段々會合いたし、不屆ニ付、右之通申付ル、

〔御仕置例類集三ノ十〕寛政三亥年七月

松平和泉守殿御差圖　牧野備前守掛

一遠州昆澤村久藏外壹人致變死候一件

大關伊豫守領分野州那須郡須崎村三次郎事　當時無宿　梅流

右之もの儀、遠州昆澤村久藏女房ちゑと致密會、誘引出、三州千田村修驗智泉方ニ致止宿候節、久藏儀、悴久次郎を召連尋參、ちゑ可立戻と申聞候を承、久藏を途中ニ而可及殺害旨ちゑと申合、久藏申聞候趣、ちゑ得心之體ニ欺、一同智泉方立出候を跡より附參、同國明川村地內字石神坂ニ而、久藏持參り候棒を奪取打倒候上、脇差ニ而突殺、久次郎をも及殺害候段、不屆至極ニ付引廻し之上獄門、

右御仕置付

右御定書ニ、密夫致し、實之夫を殺候女引廻し之上磔、但實之夫を殺候樣ニ勸候歟、又ハ手傳いたし殺候男、獄門と有之、此ものハ、久藏忰久次郎をも及殺害候不屆も御座候間、引廻し之上獄門、

井上武三郎領分遠州鋪知郡昆澤村百姓久藏女房　ちゑ

右之もの儀、夫有之身分ニ而、無宿梅流と密通之上致欠落、附添歩行、三州千田村修驗智泉方ニ致止宿候節、夫久藏儀、忰久次郎を召連尋參、立歸候樣申聞候をも不相用、却而梅流と同意致し、久藏を途中ニ而可及殺害旨申合、久藏を欺、智泉方立出、往來も無之山道之方江致同道、同國明川村地內字石神坂ニ而、久藏脊負居候箇裏之荷繩を引留、働不相成候樣ニ致し、梅流儀、久藏肩を突、剩久次郎をも梅流切殺候を乍見留、其場を立退、又候梅流ニ附添歩行候段、重々不屆至極ニ付引廻し之上磔、

右御仕置附

右梅流申勸ニ同意致し、品々取計候始末、全實之夫を殺候ものニ相當り候間、前書密夫致、實之夫を殺候女、引廻之上、磔之御定ニ而引廻し之上磔、

〔御仕置例類集三ノ十四〕寛政九巳年六月

戸田采女正殿御差圖　御勘定奉行　間宮筑前守掛

一常州中野村兵十女房みん儀、野州洞島村要藏宅ニ而、修驗幽存を殺害いたし候一件、

水戸殿領分常州久慈郡中野村百姓兵十女房　みん

右之もの儀、夫兵十留守之節、幽存任申ニ、村方立出、女房同樣ニ相成致密會、所々連立歩行候內、要藏方ニ罷仕候內、幽存儀、無筋之儀を申懸、足蹴等ニいたし候故、殘念ニ存候迚、同人を殺害いたし候始末、旁不屆ニ付死罪、

右御仕置附

右夫兵十留守之節、幽存と申合家出いたし、度々密通之上、幽存を及殺害候ものニ御座候間、人を殺候もの下手人、密通致し候妻、死罪之御定ニ見合、重キ方江附、死罪、

〔徳川禁令考後聚二十二行刑條例〕天保十三寅年三月七日押而密通申掛候男を致切害候一件

天保十二丑年七月、甲州八代郡唐柏村市左衛門女房まさ江、同村新兵衛弟茂助儀、途中ニ而密通申掛候ニ付、及断立歸、夫市左衛門幷母まき江も、右之段申聞置候處、尚又其後まさ一人罷在候を見込、茂助罷越、尚執心難止旨ニ而、押而密通申掛候折柄、市左衛門立歸、右始末見請、出刃庖丁を以切付、右疵ニ而相果候一件、篠本彥十郎伺書、左之通御下知、

其方御代官所甲州八代郡唐柏村百姓　市左衛門

右之もの儀、留守宅ニおゐて、女房まさと村内新兵衛弟茂助、押而密通申掛、難捨置場合を表之方ニ而聞取立入、出刃庖丁を以、茂助江疵負せ、右疵にて同人相果候儀ニ付而ハ、不埒之儀無之候得共、兼而まさ江茂助不義申掛候不容易儀、穩之取計も可有之と存候迚、其儘等閑置候段、不行屆致方不念ニ付急度叱、

一右之外、吟味ニ付被呼出候ものハ、一同無構、右之通申渡、且茂助死骸ハ身寄之もの江引渡、勝手次第可取置旨申渡、一同證文取之、右證文相添御咎申渡相濟候月日、早々可申聞候、以上、

寅三月七日

跡部能登守

篠本彥次郎殿

〔紀州政事鏡下〕一領內密夫之女有之、實之夫を切害毒害ニ而も致候ハヽ、詮義之上、相違無之候ハバ、右密通の男女、其村方、馬ニ乘セ引廻シ、晒し候上、其村方ニ而磔ニ上ゲ可申候、城下の者勿論、城下町中引廻晒可申候、右密夫之者、家主ニ候ハヽ、田地取上、家屋敷家財、妻子ニ與可申候、又實の夫、

親屬相姦

平日由斷ニ家の掟惡敷候〻出候事故、是は追放に可申付候、田地家財、妻子ニ相償可爲致候、夫及死命ニ程無之候はゞ追放、田地闕所ニ可申付候、女ハ坊主ニいたし追放可致候、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保二年極
一養母、養娘并娘と密通いたし候もの、　男女共獄門

同
一姉、妹、伯母、姪と密通いたし候もの、　男女共遠國　非人手下

〔御仕置裁許帳三〕養母と密通之者

貞享二年丑十月三日

壹人三左衛門　是ハ檜物町壹町目、源兵衛店仁右衛門方江、四年以前出居衆差置、其以後仁右衛門請人ニ立、通四町目、庄左衛門店長兵衛方江奉公ニ出シ置候處、當三月暇取候付、仁右衛門方ニかくまひ置、末々ハ子分ニも可致由申聞せ差置候處、昨夜九ツ時分、右之仁右衛門女房と致密通候處、夫仁右衛門見付、女房を捕候へば、此者脇指を拔仁右衛門を數ヶ所切付候處を、相店九兵衛、半兵衛聞付參、雙方捕置訴來ル付、撿使遣、召寄令僉議候處、當五月ヨリ致密通候段無紛候、昨夜二階ヨリ下リ、女房臥候處江忍入候處、夫仁右衛門ニ被見付候故、無是非脇指を拔切付候由此者申候、段々不屆ニ付牢舍、

右之者、同丑十月十八日、於淺草獄門、

札文言

一此三左衛門と申者、養母と密通いたし、養父を切殺候科により、籠舍にて首を刎、淺草にて獄門にかくる者也、

丑十月十八日

〔科條類典下四〕養娘と密通いたし候もの

元祿九年子四月四日入牢

青山五拾人町十助出居衆　四郎兵衞

右四郎兵衞儀、養娘よしと密通いたし、子共出生いたし候を、他之ものと密通いたし、出生之由僞申不屆ニ付牢舍、

右之もの子六月死罪

右四郎兵衞養娘　よし

右之もの同月死罪、

〔德川禁令考後聚二十二 行刑條例〕文化元子年十一月 根岸肥前守掛 土井大炊頭殿御差圖

伯父と密通いたし候一件

有馬中務大輔家來 伊藤源吾娘 もよ

右之者儀、佐吉ハ伯父ニ候處、度々不義申掛候迚、其意ニ隨ひ、密通之上懷妊致し、身分難立可相果と存候得共、佐吉申勸候迚、家出致し、同人妻ニ成、所々ニ而店持罷在、親源吾入牢之儀を承り、自分と驅込願致し候とハ乍申、右始末不屆ニ付、髮を剃、江戸拾里四方追放、

右御仕置附

右御定書ニ、姉、妹、伯母、姪と密通致し候もの、男女共、遠國非人手下と有之候得共、武家之娘ニ御座候間、非人手下ニ申付候儀も相當仕間敷、先例相糺候處、右ニ可見合例無御座候、寛政六寅年、池田筑後守、伺之上御仕置申付候、表小間遣梅主長五郎儀、兼而不如意之上、身持不宜、妻いよ儀、十兵衞取次を以、賃摘綿致し、當三月中、いよ受取置候綿五把同人江無沙汰ニ質入致し、金子遣拾候故、いよ儀、十兵衞江無申譯、奉公ニ出、給金を以相償候間、離緣致し與候樣申ニ付、離緣狀相渡候後、子供相歎、其上相煩候迚、十兵衞方江罷越、再緣之儀申入、及斷候を、いよ見限候儀と心外

ニ存、行燈を投倒、いよを捕、數ヶ處疵付、其身ハ自害仕損候處、疵も平癒いたしいよ儀も、不殘疵平癒致し候得共、左大指、食指、屈伸不自由ニ相成候段、不埒之至ニ付、大小取上、中追放申付候例有之、右御仕置附をも相糺候處、右長五郎ハ、入墨之上非人手下ニ可申付惡事、人ニ疵付、片輪ニ致し候惡事、兩樣有之、心底之臆弱を以、世人之交りを斷候處ニ而、非人手下之御定も可有之哉之趣意ニ而、大小取上、中追放と申上、其通被仰付候儀ニ有之、然處もよ儀ハ、親之難儀を存、自訴致し候儀も有之間、中追放より一等輕く、江戶拾里四方追放ニ而も可然處、女之儀ニ付、大小取上可申渡廉も無之ニ付、離別狀を不取、他江嫁候女、髮を剃、親元江相返候御定之箇條も有之候間、右をも見合、髮を剃、江戶拾里四方追放、

〔諸例類纂六〕天保十一子年四月十五日、寺社奉行松平伊賀守殿江差出、同七月廿四日、御呼出ニ而御付札、

內藏頭領分信州高井郡灰野村百姓嘉平次女房、右ハ同村伊左衞門と申者之娘ニ而、先年他之村方へ嫁參り、女子壹人出生之處、不熟ニ付離緣、出生之女子義ハ、其節雙方申談之上、母方へ引取、里方へ連歸、其後右嘉平次方へ再緣、女子義ハ、親伊左衞門へ預置候由之處、嘉平次方ニ而も、女子等出生仕、去戌年中、右女房義ハ、同村殊ニ母子之事故、再緣後、相果候後も、通路仕候由之處、嘉平次と及密通、村內江ハおし隱罷在候得ども、伊左衞門義ハ、同腹ニ候哉、親類共抔へハ內々申聞、既ニ昨年中、男子出生も有之旨、右ハ素より嘉平次血筋ハ無御座候へども、同人女房之實子ニ而、母の夫と密通、出產も有之段、人倫ニ背候所業ニ付、兩人共非人手下ニ申付可然筋ニ御座候哉、○中略

右之者共、仕置當之儀、相當之例も無御座候間、如何申付可然義ニ御座候哉奉伺候、在所役人どもヨリ申越候付、此段奉伺候、以上、

堀内藏頭家來

清須雅太郎

四月十五日

御付札

書面仕置當之儀、嘉平次幷密通之女子兩人とも、非人手下、伊左衞門ハ過料錢五貫文、其外之親類共ハ、雙方共同三貫文ツヽ、右村役人之內、名主ハ同三貫文申付、組頭ハ、急度叱り置、尤嘉平次本妻ニ出生いたし候子供ハ、其儘村役人共へ引渡、密通之上致出生候子供ハ、親共非人手下ニ相成候上ハ、右隨從致し候者各別、別段不及沙汰方と存候、

子七月

主從相姦

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寬保三年極追加

一主人之妻と致密通候者

男は引廻之上獄門

女は死罪〇中略

寬保元年極

一主人之娘と密通いたし候者

中追放

但娘は手鎖懸、親元江相渡す、

〔科條類典下四〕寬保二戌年十一月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

極

一主人之妻と密通いたし候もの

男ハ引廻之上獄門

女ハ張消〔引廻之上〕死罪

但妾と密通いたし候においてハ、男ハ引廻之上死罪、女者死罪、

此所張紙

朱書
享保十二未年
引廻之上獄門

新材木町
白子屋庄三郎手代
忠八

引廻之上死罪

白子屋庄三郎聟養子
又四郎妻
くま

懸紙
朱書
▲是ハ此度評議之上相認申候

〔科條類典 下 四〕寛保元酉年六月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

㊞密通御仕置之事

極
一主人之娘と密通いたし候もの　中追放

朱書
○但娘者叱之上、親江相渡ス、

是者、享保十二未年、上州今泉村半左衛門下人三郎兵衛儀、主人娘を誘引出し不屆ニ付、所拂、娘ハ親江相渡、叱置候樣申渡、

懸紙
朱書
■是者此度評議之上相認申候

懸紙
第二〇
極
但娘者手鎖かけ、親元江相渡、

〔御仕置裁許帳 三〕主人之女房、幷師匠之妻と密通仕者類、

寛文四年辰七月二十七日

壹人伊兵衛　是ハ薄屋町、久左衛門店髮結長兵衛手間取、主人長兵衛女房と密通仕、一所ニ臥り罷在候を、長兵衛見付、剃刀ニ而疵を拵、其上御訴訟申ニ付、入、

右之者、辰八月四日、森川小左衛門殿江渡り死罪、

同日

壹人女たま　是ハ右長兵衛女房、右之伊兵衛と臥り罷在候を夫見付剃刀ニ而疵を拵候ニ付、入、

右之者、同辰八月二日死罪、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

從二前々一之例
一下女下男之密通　主人江引渡遣す

寛保四年極追加
一他之家來、又は町人等、下女と致二密通一忍入候もの、　男は　江戸拂　女は　主人之可レ為レ致二心次第に一

〔科條類典下四〕寛保三亥年、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守、伺之內、

極
一他之家來、又ハ町人等、下女と密通いたし忍入候もの、　男は　江戸拂　女は　主人心次第可レ為レ致

密通御仕置之事

是ハ此度評議之上相認申候

右寛保四子年二月十七日、伺之通御下知本文極、

〔科條類典下四〕暇出候後、元傍輩女と密通致し、古主之屋敷江忍入候もの、

御代官日野小左衛門元召仕神田新銀町長兵衛寄子

享保十八年丑八月四日入牢　國助

右之もの、傍輩女、柳と密通いたし、暇出候後も、屋敷江兩度迄忍入、密通いたし不屆ニ付、一旦主人

姦幼女

方暇出候ものニ候得共、元召仕之儀ニ候間、勝手次第、主人方ニ而仕置申付候樣ニ申達し、右主日野小左衛門方江可渡遣旨御差圖ニ付、小左衛門手代小澤常右衛門、池田要大夫江渡遣ス、

日野小左衛門下女
やなぎ

享保十八年丑八月十一日揚り屋江入

右之もの、傍輩國助と密通いたし、國助暇出候以後も、屋敷江兩度忍入、密通いたし不屆ニ付、主人方ニ而、相應之仕置申付候樣ニ申達、日野小左衛門方江可相渡旨御差圖ニ付、小左衛門手代小澤常右衛門、池田要大夫ニ渡遣ス、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保三年極追加
一幼女江不義いたし、怪我爲致候もの、　遠島

〔御仕置裁許帳三〕幼稚之女子と無體に密通仕者

寛文十二年子二月廿九日

壹人甚左衛門　是ハ神田鍋町、玄味店之者、家主玄味娘九歳ニ罷成候を、手習をしへ申とて、昨廿八日之晝、右之女子、年ニも不足處ニ、無體ニ無作法仕、彼女子致破開大血を引、十死一生之由玄味訴訟申候、人外成仕形ニ付、穿鑿之上籠舍、

右之者、同子三月十四日死罪、

〔科條類典下四〕享保三年戌三月

幼女江不義致し怪我爲致候もの

八官町木戸番人　久助

此ものを南鍋町二町目、七郎右衛門店佐次兵衛請ニ立、番人ニ出置候處、同町八右衛門店三郎兵衛方に、武州尾久村九兵衛娘きちと申、九歳ニ罷成候もの預置候處、當月七日、此もの、きちに

無體之密通いたし、病氣附候故、引取養育いたし候樣ニ申候得共、合點不ㇾ致候由、三郎兵衞訴訟申に付、當月十六日、雙方召出し、吟味之上、相違無ㇾ之誤候由久助申ㇾ之、右娘儀ハ、此もの請人佐次兵衞、幷家主七郎右衞門方より急度養生いたし、毎日樣子訴出候樣申付、此もの車善七に預ケ遣し、今日內寄合江召出し列座江令ㇾ聞、先達而申付候通、右娘ハ三郎兵衞方差置、養生之儀ハ、此もの宿幷家主方より急度養生致候樣ニ申付、南鍋町名主文藏儀ハ、先達而召出候節、當人共延口願候刻、罷出可ㇾ伺處ニ打捨置、腰懸より罷歸候段不屆ニ付、今日召出、外之公事合とは違候儀を麁末之仕形に付、押込に申付、此ものハ、右之通法外成仕形ニ付牢舍、

右之もの依ㇾ御差圖、同閏十月廿九日遠島申渡ス、

〔德川禁令考後聚二十二行刑條例〕寛政三亥年八月廿日 幼女と不義致し候一件

下谷新町家主馬持金右衞門雇馬士　沖右衞門

右之もの儀、親之元致ㇾ欠落、御當地江出、宿金右衞門方日雇ニ相成罷在、酒給醉、凉居候節、當十一歲ニ相成候、同町吉右衞門店三四郎娘ちよ、遊ニ罷越候を明店江連參、聲立候ニ付、手拭を口江割込、押而不義いたし、陰門を五分程破、其上撿使之節、品能相開候樣、相違之儀共申立候段不屆ニ付、遠島可ㇾ申付處、此度於ㇾ東叡山、心觀院樣二十一回御忌御法事之御赦ニ門前拂、

〔御定書百箇條〕女犯之僧御仕置之事

一 元文四年極 寺持之僧　遠島

一 享保六年極 所化僧之類　晒之上、本寺觸頭江相渡、寺法之通可ㇾ爲ㇾ致、

一 寛保二年極 密夫之僧　寺持所化僧之無ㇾ差別 獄門

〔科條類典下四〕寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

(伺)女犯之僧御仕置之事

一寺持之僧（極）　遠島

一所化僧之類（極）　晒之上、本寺觸頭江相渡、寺法之通可爲致、

（朱書）初ヶ條

是は元文四未年、淺草万隆寺儀、遊所狂ひいたし、住職不埒故、堂及大破候ニ付、本寺より出寺申付候得共違背いたし、其上關三ヶ寺にても、吟味之上申付候趣も致違背ニ付、三ヶ寺及出訴詮議之上無紛ニ付、遠島之例、

二ヶ條目、享保六丑年、長延儀、賣女に出合、其上遊女と申合、一所ニ身を投候處、不相果ニ付、三日晒之上、本寺觸頭江相渡、寺法之通可申付旨申渡、

此朱書懸紙を以張消

一密夫之僧（極）　寺持所化僧之無差別　獄門

（朱書）是者享保十四酉年、武州栗原村道心者西岸儀、同村與四郎女房と押而密會いたし候ニ付、死罪罷成候、

右寛保二戌年三月廿二日伺之通御下知本文極、

〔法曹後鑑〕文政十三寅年六月

山名主殿問合、女犯僧之儀ニ付伺書、

書面伺之通相心得可申旨被仰渡承知仕候、

寅六月十五日　脇坂中務大輔

山名主殿領分、但馬國七味郡村岡町、淨土宗嚴淨寺知辨儀、不如法之趣相聞、領主家來、内々穿鑿之上、當四月十一日夜、同町百姓松藏姉かるを院内江呼寄、及密會候を召捕、吟味之上、及女犯候段白狀いたし、かるも密通いたし候旨申立候由ニ而、口書寫相添、仕置當リ之儀問合申候、右ハ御定之

通、遠島ニ相當り候ものニ而、御定書上卷、元祿十丑年、私領仕置之儀ニ付、壹万石以上計り江御觸書之內、遠島可申付科ハ、領內ニ島於無之者永牢、或ハ親類緣者等江急度預可置と有之候得共、主殿ハ万石以下之事ゆゑ、先例等取調候處、私領住僧女犯之段、吟味之上白狀いたし、仕置當り問合候節之儀、万石以上之向にて、他之引合も無之分ハ、自分仕置之積、島無之候はゞ、永牢ニ而可然旨挨拶いたし、万石以下之向ハ、他領引合無之候とも、奉行所吟味申立、可然段及挨拶候積、寛政九巳年、同役共評議之上申合候趣も有之候得共、右申合之趣を以、及挨拶候例も相見不申候間、町奉行、御勘定奉行も承合候得共、是又右樣之先例相見不申由ニ付勘辨仕候處、万石以下にても、死罪下手人等申付候例ハ有之、死刑之仕置申付候上ハ、其以下之仕置ハ、猶更申付不苦筋ニハ御座候得共、女犯僧ハ、假令年數相立候而も赦には難相成、万石以下ニ而ハ、不絕入牢人等有之候筋には有之間敷、生涯永牢申付置候樣ニ而ハ、雜費も相懸り候儀、且ハ末々之家來共等、迷惑いたし候ニ付而ハ、以後寺持之僧、不如法之聞有之候とも、其儘差置候樣成行可申哉、左候而ハ、おのづから諸寺院取締にも拘り候筋ニ付、以來万石以下之向より、遠島に當り候罪狀之もの、仕置當り問合候節ハ、前書寛政之度、同役共申合之趣を以、寺院之分ハ勿論、俗人ニ候とも、末々之家來共迷惑いたし候次第ハ同樣之儀ニ付、他之引合無之候とも、奉行所吟味之儀申立候樣及挨拶候積極置、今般之儀も、右之心得を以挨拶可仕候哉、先年申合之趣も有之候得共、差當り右樣及挨拶候先例相見不申候間、此段相伺申候、

寅六月

〔御仕置裁許帳　三〕出家密通仕者之類

壹人正山　是ハ館林之者、善光寺之所化清雲と申比丘尼と心有之、清雲弟子清慈と申比丘尼、訴人申故、評定所ゟ穿鑿之內、入、

右之者、江戸中引廻シ、亥霜月〇寛文十一年廿一日、淺草ニ而磔、

〔百一錄〕享保三年十一月廿六日、引渡者有レ之、播州カコ川眞言坊主、女犯引渡梟首、此外十餘輩誡云云、

〔板倉政要七〕京師寺町淨土坊主誑二人之娘一之事

一洛寺町の僧、近隣の商人の娘と密通しけるが、已事を不レ得彼娘を盜出し、京師を立退、堺江行て醫者と號し渡世を送りける、十ヶ月程經て、近所之者見付て、父の元告けるに依て、所司代江訴へける、早速京師へ捕來、板倉殿江申上ければ、伊賀守殿彼僧を呼出し仰には、其方は髮みゆる、還俗シタルカト問給ふ、彼僧答テ曰、還俗は不レ仕候、此女、養父不義之心有レ之、依而母之おもわく、他人之嘲りを思ひ候故、拙僧を強く賴に寄、無二是非一召連堺へ立退き申候、還俗は不レ致由固辭す、其時彼女ニ尋ね給ひけるは、還俗はゑたりと見えたり、眞直に申あげよ、出家とは難レ申と仰ければ、娘申けるは、此僧之申さるゝ通、養父執心を掛ケ朝暮被レ惱、迷惑之餘りに、此僧を賴み、堺へ立退忍び居候故に、此出家も難二默止一、如レ此といへども、還俗キ而者無レ之由陳ける、去程に所之者に子細を尋させ給ふに、密通無レ紛に依て、沙門法を背之條、乍二不便一斬罪ニ可レ行旨にて、粟田口に梟ス、扨又養父は、娘に執心を掛ること無レ紛ニより、所を追放し、彼娘の母、家屋敷を被レ下ける、母之連て來る娘故に、繼子なり、

〔續視聽草三集六〕延命院御咎

谷中日蓮宗延命院　日道亥四十

一說幼名牛之助、後道曉、又日道

其方儀、一寺之住職たる身を不レ顧、淫欲をおかし、源太郎妹きん、又者大奥部屋下女ころと密通ニ及び、其外屋形向相勤し女兩三人江艶書を送り、右之女、參詣之節者逐二密會一、或は通夜などゝ申なし、寺內江止宿爲レ致、殊ニころ懷妊之由を承り、墮胎之藥を遣し、總而破戒無慙之所行ニ候、其上寺

內作事之儀、奉行所へ申立之趣と引違ひ、勝手之儘、建直候事共、重々不屆之至ニ付、死罪申付もの也、

延命院納所
柳全 六十六

或說ニ、初豆藏ニて元次郞と云、

其方儀、延命院所化ニ而、女狂不二相成一身分にて乍二罷在一、新吉原五十軒道、淸次郞母りせと密通いたし、及二女狂一候段不屆ニ付、晒之上觸頭へ相渡、寺法之通可二取計一旨申渡、〇中略

享和三癸亥年五月廿六日朝、寺社奉行脇坂淡路守組子長田傳藏、高橋又八郞、其外數十人、延命院ニ而召捕、同年七月廿九日、御仕置濟、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寬保二年追加
一夫有之女江密通之手引いたし候もの　中追放〇中略

從二前々一之例
一主人之妻江密通之手引いたし候もの　死罪〇中略

寬保元年極
一主人之娘江密通之手引いたし候もの　所拂

〔科條類典下四〕寬保元酉年六月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守、伺之內、

㊞密通御仕置之事

極
一主人之妻江密通之手引いたし候もの　死罪

朱書
是ハ元祿八亥年、上總國幸田村武右衞門妻江、同村佐五右衞門任レ賴、武右衞門下人八藏、密通之使、三度まで申通候、然ども不義之儀ハ不分明に候得ども、右妻同心に候はゞ、密通爲レ致候覺悟之上ハ、右科難レ遁ニ付、死罪に成候例を以相認申候、

〇

懸紙
〇朱書
是者只今迄之取計を以相認申候

密賣婬

一極主人之娘江密通之手引いたし候もの　所拂

朱書是ハ右同斷〇是は此度評議之上相認申候

〔御仕置裁許帳三〕主人女房之方江密通之使仕者

元祿八年亥十一月七日

武右衛門　是ハ能勢出雲守組與力知行、上總國幸田村庄右衛門悴、

三人　女とら　是ハ武右衛門女房

八藏　是ハ武右衛門下人

右武右衛門儀同村左五右衛門と申者を、先月廿五日夜、十二ヶ所手を負せ候付、翌廿六日、相果候由、百姓共訴來ル付、令僉議候處、武右衛門申候ハ、女房とらと右左五右衛門、兩度密通仕候付、とらニも相斷、左五右衛門を切付候由、とら申候ハ、八藏を賴、左五右衛門、三度迄密通之儀申懸候得共、承引不致、尤武右衛門相斷候段も、不慥成事を申候由申之、八藏申候ハ、左五右衛門、達而賴候ニ付、主人女房ニ密通之儀使仕、三度迄爲申聞候得共、承引不致候付、其通之事をも、左五右衛門に爲申聞候由申之、密通之わけ、慥成證據も無之、不分明故、とら儀ハ、上り屋ニ入、兩人ハ穿鑿之内牢舍、

右之武右衛門、とら、兩人之者共、御老中江相窺、子八月廿七日赦免、右之八藏儀、主人之妻ニ密通之使いたし、三度迄申通候段、とら同心候はゞ、密通爲致候覺悟之上は、右之科難遁ニ付、丑閏二月十日死罪、

〔御定書百箇條〕隱賣女御仕置之事

享保七年　延享二年極

一隱賣女いたし候もの　身上に應じ過料之上、百日手鎖にて所江預、隔日封印改、

元文五年
同
一踊子を抱置、爲致賣女候もの、　右同斷

享保八年極
一隱賣女共　三箇年之内、新吉原町へ爲取遣す、

元文五年極
一踊子共　同斷

享保六年
延享二年極
一請人主　身上に應じ、家財三分二取上候程之過料、

延享七年
享保七年極
一家主　身上に應じ、過料之上、百日手鎖、隔日封印改、

但家主建置候、家藏有之候はゞ、五年之內、店賃爲相納可申候、

享保五年極
一五人組　過料

同
一名主　重過料

延享元年極
一地主　五ヶ年之內、家屋敷取上、地代店賃共爲相納、五ヶ年過候はゞ元地主へ返可被下、

但外に罷在候共、右同斷に取計、又候賣女置候はゞ、幾度も同樣申付、明き地には申付間敷候、

同
一御扶持人、又は御用達町人拜領屋敷、　右同斷

元文五年極
但右同斷

同
一寺社門前町屋　右同斷

享保十四年
但寺院神主は、寺社奉行にて叱置、自分にて遠慮いたし候樣可申付候、

同
一同地借町屋之分は　右同斷

寛保二年
但寺院、神主等咎、右同斷、

同二年極
一商物をも出し置致渡世候者、妻同心せざるに賣女に出し候もの、　死罪

追加　但飢渴之者、夫婦申合、賣女爲致候迄にて、盜等之惡事無之候はゞ、不及糺明事、

寛保三年極追加
一踊子呼寄、賣女爲致候料理茶屋等、　所拂

同追加
一家主　過料

同
一地主は　重過料

但地主ハ其所に不罷在、他に罷在候はゞ叱り、

名主
一五人組　無構

享保六年極追加
一隱賣女を誘引出においては　男女とも無構

但女は誘引出候者方へ成共、外へ參候共、心次第可申付、

〔科條類典下三〕延享元子年二月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

賣女御仕置之事○中略

從前々之例
一妻を隱賣女之類に出し候もの　家財取上重ク敲

右之内八箇條、延享元子年九月四日伺之通御下知本文極、

〔正寶事錄一〕覺

一吉原町之外、けいせい遊女之類、抱置申間敷候、勿論一時之宿も仕間敷事、

一町中ニ、ばいた女壹人も置申間敷事、○中略

子二月　正保五年

右者二月廿八日御觸、町中連判、

○按ズルニ、ばいたトハ、隱賣女ヲイヘル當時ノ俗言ナリ、下文引ク所ノ享保集成絲綸錄ニ、摘トイヘルモ亦然リ、

〔享保集成絲綸錄四十六〕元祿十五午年六月

一前々より令禁制候處、町中端々に、奉公人となぞらへ、又は綿摘抔と名付、遊女差置候者有之由相聞候、依之與力同心相廻し、可遂詮議候間、名主家主五人組、急度致吟味、左樣之族於有之は、早々可申出之、若隱置、外より相知候はゝ、其者は不及申、家主五人組迄令罪科、家屋敷取上之、名主は牢舍之上追放可申付候條、右之趣可觸知者也、

六月

〔寶暦集成絲綸錄三十一〕延享三寅年正月

只今迄、寺社方支配町屋、幷寺社門前等茶屋々々ニ、隱賣女體之者、若差置商賣致候者も有之哉、寺社方支配場、此度町方支配ニ相成候上ハ、嚴敷可致吟味候間、是迄心得違候而、隱賣女等差置候所ニハ、其所之名主五人組、嚴敷相改、向後相止させ可申候、此以後組之者度々相廻、如此觸差出シ候上ニも隱賣女差置、又ハ茶屋々々へ外ゟ隱賣女體之者呼寄、致商賣候者於有之者爲召捕、吟味之上、名主五人組迄、急度相咎ニ而可有之間、此旨相心得、急度可相守者也、

正月

〔天保集成絲綸錄九十九〕天明八申年十月

寺社奉行江

此度本鄉新町屋、隱賣女差置候付、是迄之通、町奉行ニ而、當人咎申付、猶又以來外ニ御定法之通、五ヶ年之間、建家店賃地代共ニ取上申事ニ候、先年より納戸入用ニ差支候由を以、右體之不埒有之候而も、建家地代等ハ取上不申候得共、一體御制法ニ背ケ候處ハ同樣ニ而、上野御持地ニ限り被除候も如何之儀、殊ニ聊御得失之譯を以、重キ御定法を被闕候段、別而如何敷、右體利を先といたし候筋、可爲御本意樣無之候得ハ、旁以來、前文之通被仰出候儀ニ有之候、依之猶又夫々得と申付方有之樣可致旨、上野執當江可被達候、

〔天保集成絲綸錄九十九〕寛政元酉年七月

[illegible]三奉行江[illegible]

都而在方ニ有之賣女、古來ゟ御免、又ハ年久敷、領主承屆置候ハ格別、隱賣女ハ堅く差置申間敷處、近來猥ニ相成、所々ニ賣女體之もの差置候段相聞候、右ニ付おのづから村方風俗も不宜、農事ニ怠り候間、近鄕迄衰微に及び、離散之者も出來致し、且不宜ものも立入候儀ニ候間、自今隱賣女、一切差置申間敷候、若隱置、外より相顯候はゞ、其所役人共迄、詮議之上、急度御仕置可被仰付候、此旨御料ハ其所之奉行御代官、私領ハ領主地頭より、寺社領迄、不洩樣嚴敷可被申付候、領主御代官にても無油斷心附、此上若隱置候者有之候はゞ、早速召捕可被申候、尤新規ニ賣女商賣體之儀承屆不申、古來より有來候分も、成丈減候樣可被取計候、

右之趣可被相觸候

七月

〔張紙留〕御相談書　初鹿野河內守

此度拙者掛隱賣女吟味之內、賣女渡世之ものニ無之、地面之內ニ獨身ニ而、切商ひいたし候もの、兼而貰置候女、相對之上、他所ニ而、賣女渡世いたし候者江預ケ置、身賣爲致候、右切商ひ致し候もの之地主、家主、賣女預ケ置候儀ハ、一向存不申候旨申之候間、全同所之地面店內ニ而、賣女渡世致し候もの有之を不存、不遂吟味も罷在候とは趣意違可申候ニ付、右地主、家主、定例之咎ハ難引當可有之候得共、右體之もの、店ニ罷在候を不存罷在候段ハ、申付方行屆不申筋ニ付、地主、家主とも、輕キ咎附候儀ニも可有之候哉、差當例も相見不申候間、此段及御相談候、

右之通及御相談候處、輕くも咎附候方ニ御評議相極候ニ付、右切商ひいたし候もの之地主ハ叱り置、右家主ハ急度叱り置候方ニ可有之哉と存候間、尙又及御相談候、

戊九月
右之通地主家主咎之儀、寛政二戌年九月二十六日、於御殿一座評議極、
〔天保集成絲綸錄九十九〕寛政四子年四月

御勘定奉行江

御代官所村々ニ而隱賣女體之儀有之節、御代官吟味致し、別段之惡事無之賣女一件計之事ニ候ハ、抱置候者共ハ、田畑、家屋敷ハ五ケ年之內取上、年限中、小作に申付、作德餘分有之候ハ、其村方又ハ向寄村方之內、身元宜者江預置、小兒養育料、又ハ困窮之者、御救手當ニ備置可申候、携候ものハ、過料手鎖等、相應之咎可有之候、
右賣女ハ、村役人江相渡シ、其村內ニ不限、他鄉他村ニ而も、荒地起返し場所等、其外女少き所々江、糺之上御代官了簡を以、嫁候樣ニ可申付候、尤賣女之親元等、存寄相尋ニ不及申付候上、通り可申聞候、
右之趣ハ、兼而御代官江も心得申含置、書付を以爲相伺候樣、別紙之通可被申渡候、尤召捕相糺候上、御代官ニ而、何方江嫁候樣ニ申付候者と、又誘引出し候もの心次第と申付候とハ、意味不混樣ニ取調可有之事ニ候、前條之趣、御勘定所江書付を以伺有之候節、無子細別ニ被申聞ニ不及、前條之趣可被致差圖事、
〔天保集成絲綸錄百〕寛政五丑年二月
隱賣女之儀、御定も有ニ付、夫々御仕置申付候處、近來猥ニ相成、間もなく右商賣致し候者も有之由、如何成儀ニ候、右體之者、何ヶ度も同樣之咎申付候而ハ、再犯之者不相止候ニ付、
一隱賣女抱主
身上不殘、建家共取上、百日手鎖ニ而、所江預、隔日封印改、再犯之節ハ、身上不殘、建家共取上、江

戸拂、

一隱賣女

親元江成共何方江成共、當人勝手次第申付、且吉原町ゟ改出候分、幷片付方無之分共三ヶ年之內、吉原町江とらせ遣可申候、

一請人人主

身上不殘、建家共取上、再犯之節ハ、身上不殘、建家共取上、江戸拂、

但親元人主請人等至困窮故賣遣し候ニ相違無之候はゞ、得と糺之上、女ハ引渡遣し、請人人主之咎ハ、御定之通可申付候、

一家主

御定之通申付、再犯之節ハ、身上ニ應じ過料之上、家主取放、

一五人組

御定之通申付、再犯之節ハ家主、○家主二字恐誤取放、

一名主

御定之通申付、再犯之節ハ、名主役取放、

一地主

御定之通申付、再犯之節ハ、十ヶ年之內、家屋敷取上、地代店賃爲相納、十ヶ年過候はゞ、元地主江可被返下、家作取拂ひ、火除地ニ可相成場所之儀ハ、其度々伺之上可取計候、

一取上地面請負人

請負取放、過料拾貫文、再犯之節ハ、家財取上、江戸拂、

右之通可被得其意候、御定書ニ有之趣、相改候事ニハ無之、先當分書面之通、御仕置可被申付候、

二月〇又見ニ御仕置筋御書付留

〔評定所格例〕寛政六寅年二月八日、戸田釆女正殿評定所一座江御渡之御書取、

五海道宿々旅籠屋食賣女之儀ニ付、先達而道中奉行相伺候趣、爲心得爲見置候、尤吟味之次第ニも寄べき儀ニ候間、此趣をも相含置候樣可被致事、

右御書取江相添御渡有之候、寛政二戌年十月、松平越中守殿江、根岸肥前守伺濟之書面左之通、

五海道宿々旅籠屋ニ有之食盛女之儀ハ、旅人之酒食給仕等可致ものニ而、賣女ニハ無之候得共、往來之旅人、其旅籠屋ニ止宿いたし候節、寢食之給仕いたし候故、其夜限之情欲ニ任せ、小遣錢等貰請、尤身なり之儀も見苦敷候而ハ、旅人も厭ひ嫌ひ候間、自然ニ奇麗ニいたし候趣相聞、至而賣女ニ紛敷ものニ御座候、依之度々誘引出し、又ハ欠落等之儀ニ付及出入候節も、食盛女を誘引出し、又は召連欠落いたしながら、右旅籠屋ニ而ハ、隱賣女致候樣申立、或ハ右食盛女も、賣女爲致候故、欠落致し候樣申候類も間々有之、

朱書此儀隱賣女を誘引出候得バ、咎も無之儀を粗及承、甚敷ニ至り候而ハ、卑賤之もの娘、又ハ妹之類を食盛奉公ニ差出し、高給を受取、誘引出候ものと馴合、右給金を損失ニ爲致、取戻候手段いたし候類も相見、或ハ幼年之節、仕切奉公ニ差出、主人方ニ而成人いたし、最早用事も相辨候節ニ至、食盛と名付、隱賣女いたし候樣申立、元給金等ニ而、取戻候類も御座候、尤女衒中繼渡世いたし候もの共之證文、幷右食賣女仕切り請狀等之儀ハ、都而年季を限り、新吉原遊女奉公、其外端々茶屋酌取女、道中食賣女等ニ差出候共、無申分旨之文言ニ而、取引いたし候儀、通例ニ御座候、

又ハ何宿旅籠屋ニ而、食賣女大勢抱置、旅人ハ勿論、近隣之客を引請候故、百姓之風儀を損じ候樣、御箱訴等いたし候類も間々有之候、

朱書、此儀宿々旅籠屋ニ食賣女兩人宛ハ可有之筋候得共、小暮之旅籠屋ハ壹人も無之、相應にもいたし候ものは、五人十人抱置候も有之、仲間內旅籠屋ニ而、旅人多キ節ハ、互ニ貸借いたし候由ニ相聞申候、右ハ過人數等之吟味有之節は、假令バ旅籠屋三拾軒有之宿ハ、人數六拾人食賣女有之候而も、過人數ニハ不相成儀と可申披ため之趣意と相聞申候、

然處東海道、中山道共、宿柄も相應ニ而、格別之御世話も有之、宿々之分ハ、食賣女も多有之候、畢竟旅行いたし候遊客、又ハ諸商人等も、旅籠屋奇麗ニ而、食盛女多、大暮之所を尋、止宿いたし候間、自然と食盛女等、餘計ニ有之宿方ハ泊旅人も多く、繁昌仕候哉ニ相聞申候、依之右食盛女等之儀、嚴敷相制、穿鑿仕候而ハ、宿方衰微之基にも可罷成哉ニ付、押晴候而賣女いたし候趣に無之分は、勘辨之吟味も可有御座哉と奉存候處、其場所ニ寄候而ハ、旅人之外、近村等之ものを引請、或ハ三味線等之鳴物を用ひ、酒食等も好ニ隨ひ、花美を盡し、衣類之儀も大造ニ仕、全遊女屋同樣之類も間可有之、左候而ハ、在方放埒之元ニも成、農家之怠を生じ、風俗ニも障候儀故、聊も制禁を寛候儀ハ難仕筋ニ而、勿論旅人之外、止宿致させ間敷候儀ハ勿論之事ニ候得共、利德ニ拘リ候、內々之取計ニ付、此上何程相制候而も、行屆候儀ハ無覺束、依之品々勘辨仕候處、迚も不行屆儀を巨細ニ相制候而ハ、却而費も出來可仕哉ニ御座候間、左之通相心得、取計候樣可仕候哉、

一食盛女過人數抱置、賣女體之儀ハ勿論、衣服等花美之儀爲致間敷旨、前以申渡置候事ニ御座候得共、右之趣等ゆるかせに不成樣、每年一兩度宛、嚴重之御沙汰および候積、宿々江申渡置、過人數召抱、賣女爲致候樣訴出候もの有之歟、又ハ御箱訴等致し候もの有之節も、證據慥成儀ハ格別、手掛不慥之類ハ、最寄御代官手代差遣、密ニ爲見屆、相違無之分ハ召捕、吟味之上、隱賣女同樣之御咎申付、其餘微末之儀ハ、一體賣女ニ紛敷食盛女之儀ニ付巨細之吟味ニ不及積相心得、取計可然哉ニ奉存候、勿論宿方江ハ嚴重之及沙汰候積、時々申聞、內實糺方之心得ハ、右之趣相含、取計可申哉、

時々取計ニも差支候儀御座候間私ども心得之趣御内々奉伺候、

但品川宿其外出口宿場之儀ハ、先年安藤中務少輔道中奉行勤役之節取極候趣も御座候得共、右ハ御府内續キ之場所故、別段之儀ニ有之本文申上候ハ、右出口宿方を除、外宿々之儀ニ御座候、以上、

戌十月○中略

御書取

一統談じ候處、見込之ほど尤に候、每年觸可出儀ハ見合可然候、（ゆるみ候節、とりしらべ被伺候かた可然候、）發覺之上ハ、嚴重ニ吟味取計はれ可然候、其外見込通りニ而可然と存候、

十月廿三日

格別屋作り大造ニいたし、着服等もかくべつにて、多人數など申如く增長候も又如何ニ付、左樣之向ハ、御代官よりも心付可申事と存候、

〔御仕置例類集一〕寬政十三酉年御渡

御勘定奉行石川左近將監伺

一上州湯宿村ニ而、隱賣女いたし候女ども、蝦夷地江可被差遣哉之儀ニ付評議、

去申十二月廿八日、御渡被成候、石川左近將監申上候、上州湯宿村ニ而隱賣女いたし候女ども、蝦夷地江可被差遣哉之儀ニ付伺書、幷御尋之御書取御答共、一覽之上評議仕候處、御定書ニ、隱賣女、三ヶ年之間、新吉原町江爲取可申と有之、寬政五丑年、右御定を被改候事ニハ無之候得共當分之內、隱賣女いたし候もの、再犯之節は、夫々御仕置重り、賣女共之儀ハ、親元江成共、何方江成共、當人勝手次第申付、且吉原町より改出候分幷片付方無之分ハ、三ヶ年之内吉原町江爲取可申旨御書付も有之、寬政四子年、御代官所村々ニ而、隱賣女體之儀有之節、右賣女ハ、村役人江相渡、其村內ニ

不限他郷他村ニ而も、荒地起返之場所等、其外女少き所江、糺之上御代官了簡を以嫁候様可申付旨之御勘定奉行江被仰渡も有之候間、右等を以勘辨仕候處、其村ニ不限他郷他村江嫁遣候迚も格別之遠國江被遣候ニハ無之、蝦夷地江被差遣候ハヽ、始終ハ格別之御仁惠を蒙り安佚ニも至り可申候得共、海外夷俗之地、是迄婦人等被差遣候儀無御座候得バ、往々御趣意相辨不申内ハ、當人ハ不及申、親族之身分よりは、重刑被行候樣ニも心得違候而ハ、却而御仁惠も行屆間敷、無罪無宿之もの、佐州江被遣候儀ハ御座候得共、右ハ全無宿ニ而引請候もの無之、追拂候而も、無宿ニ而徘徊いたし、惡事いたし候趣意も有之候得共、飯賣女等ニ而隱賣女いたし候類は、困窮ニ迫り、身賣等いたし候ものニ付、親元請人等も有之、右體之奉公いたし候儀ニも御座候得バ、無宿者之取計ニも難相成、隱賣女一件之儀ハ、於奉行所吟味も有之候儀ニ付、蝦夷地江被差遣候得バ、自ラ新規之刑ニも相當り可申、此以後共隱賣女いたし候ものハ、不殘蝦夷地江被差遣候儀ニも御座候哉、當時彼表女少ニ付、先此度之賣女共計り被差遣候儀ニ而ハ、以後隱賣女之もの取扱區々ニも相成可申、左候而ハ人氣ニも拘り、不穩義も可有御座候間、隱賣女之者、蝦夷地江被差遣候儀ハ、先御見合被置、彼地江被差遣候御家人等、下女無之候而ハ、格別差支之譯も有之候はヽ、別段仕法を以相伺候樣、左近將監江被仰渡候方ニ可有御座哉ニ奉存候、

酉正月

朱書 先ツ此度ハ不被及御沙汰、定例之通可取計旨、被仰渡候段被仰聞、

〔天保集成絲綸錄九十九〕文政七申年六月

町觸

町々ニ而、娘又ハ女を抱置、料理茶屋、其外茶見世等ニ客有之候節ハ差遣し、賣女同様之稼爲致候由相聞、不屆之至ニ候、以來右體賣女ニ紛敷渡世爲致申間敷候、若左樣之もの有之ニおいて

は召捕、當人ハ不及申、町役人共迄咎申付、地面取上候間、地主町役人共、無油斷遂吟味、急度可申付旨、天明七未年相觸、去ル巳年、猶又相觸候處、今以女藝者と唱、娘又ハ女を抱置、髮之かざり衣類等美々敷致シ、殊ニ料理茶屋、其外被雇先ニおいて、客と及密通、且土弓場、水茶屋等渡世之もの共、娘幷女を抱置、右之外ニも娘等、身賣同樣之始末致し候もの有之趣相聞候ニ付、召捕吟味および候處、全相對ニ而密通致し、衣類金錢等貰請、尤親、抱主、雇候料理茶屋等ニ而、右之始末ハ不存由ニ而、賣女致し候儀ハ無之候得共、猥ニ及密通、衣類金錢等貰請候段ハ、賣女ニも紛敷致し方、不愼之至、不埒之事ニ候、然ども此度ハ格別之宥免を以、其次第ニ寄、咎申付候、以來右咎申付候者ハ勿論、其外之者たりとも、前書同樣之始末ニ及び候ニおいては、當人ハ素より、地主、町役人等ニ至迄、隱賣女致し候者ニ准じ、一同嚴敷可申付、

一親兄之ため、無據娘妹抔之內藝一ト通ニ而、銘々同樣之稼致させ申間敷、髮之かざり衣類等、美美敷目立候品相用候ニおいては、是又急度可申付候、

一女を召抱、藝者ニ致し候儀ハ、一切不相成候、若是迄心得違之者も候はゞ、早々暇遣し可申候、

一料理茶屋、水茶屋土弓場之もの共、働一ト通之下女、是以髮之かざり衣類等、身分不相應、美々敷目立候儀、決而致し申間敷候、

右之趣、以來急度相守可申候、若心得違之もの相聞候ニおいては、早速召捕可遂吟味候、

一町役人共之儀も、觸之趣、能々相心得娘妹壹人を限可申候間人別其外、入念心付、紛敷もの無之樣可致候、万一不相用もの有之候はゞ、名主ニ不限、地主又ハ町役人成とも、壹人立奉行所江可申立候、外より於相聞候ハ、名主を始、猶更可為越度候、

申六月

（德川禁令考後聚二十一 行刑條列）天保十一子年十二月十五日

此度召捕候隱賣女紛敷所業之もの共落着申渡之儀御內慮奉伺候書付

越前守殿江御直上ル

遠山左衛門尉

去ル九日名前書差上置候隱賣女ニ紛敷及所業候新乘物町半兵衛店新兵衛外六拾人之もの共入牢申付追々吟味仕候處大傳馬町壹町目半助店儀兵衛妹かめ外五拾人餘之女子とも銘々親兄弟等困窮ニ付取續之ため前書新兵衛外拾三人方幷名前不存料理茶屋水茶屋等江罷越し客又ハ知人共と及密會金子貰受候旨申立新兵衛其外之もの共儀も及匡窮右女子共呼寄酒食等出客と爲及密會酒食代之外金錢貰請候旨申立候且右召捕候女子共申口ニ而外ニ宿致し候ものの共名前申立候分ハ是又爲召捕不日ニ口書申付候積ニ御座候依之先例取調候處榊原主計頭勤役中文政七申年如今般風聞之趣を以伺濟ニ而右類之もの大勢召捕候節ハ主計頭手限ニ而女子共ハ何レも押込申付親元江引渡宿致し候ものハ所拂又ハ手鎖等申付候處其後天保四巳年同役紀伊守掛ニ而賣女吟味仕候節同人より申上候趣ハ隱賣女之儀ニ付夫々御仕置之御定も有之候處寛政五丑年中兎角再犯之もの不相止候ニ付當分御仕置可相改旨被仰渡候御書付之內隱賣女親元江成共何方江成とも當人勝手次第申付且吉原町より改出候分幷片付方無之分とも三ヶ年之內吉原町江爲取可申旨被仰渡其以來初度ハ親元江引渡再犯之節ハ吉原町江爲取遣候振合ニ相成來候儀ニ而右ハ抱主宿等之不埒重モより當人共當分右樣ニ被成置候儀ニ可有御座右御書付之趣を以先例ニ寄押込等申付親元江引渡候而已ニ而ハ市中一體之響も薄無程相弛ミ可申候ニ付先例ニ離レ一應之取計を以一同吉原町江爲取遣其外ハ尙勘辨之上御仕置可申付哉之旨前以相伺候處伺之通被仰渡其砌女子ども三拾人吉原町江爲取遣候儀ニ有之寛政之度御書付ハ御仁恤之御主意ニハ候得共右時勢寬急ニも寄候儀今般之女子共も押

込申付親元江引渡候樣ニ而ハ紀伊守掛ニ而申付候近例より相弛候儀ニ付、取締ニも相成不申候間、右近例ニ隨、且ハ隱賣女踊子共、三ケ年之內吉原町江爲取遣と有之御定江見合、一同吉原町江とらせ候積ニ相心得且宿致し候もの共ハ、前書紀伊守掛一件之內、神田新銀町代地、卯兵衞店料理茶屋孫八外拾貳人之もの共宿家主地主共儀、踊子呼寄、賣女爲致候料理茶屋等所拂、家主過料、地主重過料、但地主他ニ罷在候ハゞ叱と有之御定ニ立戾、右當を以、申付候近例をも見合、此度之もの共、右同樣可申付哉と奉存候、然ル處、右女子ども、吉原町江とらせ遣候年季之儀ハ、前書紀伊守掛ニ而、去ル巳年十一月中、吉原町江差出し候もの、其年を壹ケ年と仕、翌々未年十二月迄、遊女爲相勤、尙翌申年正月、年季明之儀申立候儀ニ而、今年落着申渡候得バ、たとひ聊之日數ニ而も、壹ケ年分之年季內江加り候處、來丑年ニ至り、落着申付候而ハ、來ル辰年正月ならでは、年季明之期ニ相成不申、女子共身分ニ取候而ハ、凡丸一ケ年之間、憂苦之勤を增候儀ニ有之、僅之吟味手心ニ而、格別之年季ニ長短有之候ハ、何共不便之儀、畢竟其日稼之もの共、親兄弟等の長病又ハ不慮之災難ニ逢、渡世營兼、飢渴ニも可及類不得止事、右體之稼致し候ものも可有之、右故寬政之度、賣女共ニ限り、御咎相弛候御主意被仰出候儀ニも可有御座哉、右等を考辨仕候得バ、旁以此節より早々取調、去ル申年、主計頭掛之節ハ、伺ニ不及、切々ニ落着申度、書面落着之後、入御覽候振合ニ付、今般之一件も、右同樣相心得、前書御仕置御咎當を以、口書取調出來次第、月迫および候共、當年中、落着申渡候樣相成候得バ、無心之女子共、蒙御仁惠候意味も御座候間、別紙御見合之ため、先例寫壹冊相添、此段御內慮奉伺候、以上、

遠山左衞門尉

子十二月

十二月廿一日　越前守殿御直御渡

覺

書面之通相心得、早速落着有之候樣可被取計事、

〔徳川禁令考後聚 行刑條例 二十一〕隱賣女之儀ニ付觸書 天保十三寅年三月十七日

端々料理茶屋水茶屋渡世致候もの之内、酌取女、茶汲女等、年古く抱置候もの共、近來猥ニ相成候趣ニ相聞候、一體新吉原町之外ハ、深川永代寺門前町を始、都而隱賣女ニ候ハ勿論之儀ニ付、此度諸事御改革之折柄、風俗ニ拘候間、右場所々々、此節速ニ不殘取拂可被仰付處、格外之御宥恕を以、一統御仕置御咎等之不被及御沙汰、先商賣替之儀御免被成候間、難有奉存、當八月迄之内、追々商賣替致、正路之渡世可致候、併抱女致し候、料理茶屋水茶屋之分、端々ニ數多可有之候間、相對を以、右女子共、新吉原町江奉公住替差遣候儀、幷右渡世之ものども、吉原町人別ニ加り、遊女屋商賣いたし候儀ハ勝手次第之事ニ候、尤吉原町之ものも、奉公人住替之儀申來候ハヾ、給金等ニ付、不相當之取計いたす間敷、幷引越來候もの江及對談、遊女屋相始候を無謂差障候儀ハ無之樣可致候、此上商賣替不致有來候場所ニ而、隱賣女渡世いたし候もの、且於他場所も、右同樣之儀於有之ハ、夫々嚴格ニ御仕置申付、地主ハ、武士地寺社門前地町地之無差別、其地面永代被召上、家主名主も可被處嚴科候間、兼而其旨を存じ、右被仰出候趣、嚴重ニ可相守候、

右之趣、町中不洩樣可觸知もの也、

寅三月

〔徳川禁令考後聚 行刑條例 二十一〕天保十四卯年御渡

町奉行申上候 隱賣女階級之儀ニ付評議

當二月十四日、評議いたし可申上旨被仰聞御渡被成候、町奉行申上候、隱賣女、幷右ニ紛敷及所業候もの階級相立、當分御仕置之儀、再應談判之上、一體之人情事情之樣子をも勘辨評議仕候處、隱賣女之儀ハ、前々より度々嚴重之御觸も有之候處、いつとなく追々相弛ミ、近年別而超過いたし

候樣成行候ニ付、今般右渡世之もの商賣替被仰付、其砌別ニ御咎等無之ハ、實ニ寛大之御所置候處、右を不顧、其上嚴重之御觸をも相背違犯之もの出來いたし候樣ニ而自然御威光ニ拘リ、何分難捨置場合候間強而法則ニ寄、右を聊斟酌難成樣相心得候も、其情實を取失ひ、如何ニも偏固之論ニ而、時世寛急之御趣意ニも相當いたす間敷候間彼是之論議を離れ、一過懲惡之御趣意相貫、其情實ニ徹し、以後之御取締ハ彌行屆候樣、今般限リ夫々取調別紙伺出候ケ條限リ、評議之趣下ゲ札を以申上候、以上、

卯五月

寺社奉行
御勘定奉行

書面御附札之通、町奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

卯七月八日

寺社奉行
御勘定奉行

書面御附札之通、相心得可申旨被仰渡、奉承知候、

卯七月五日

鳥居甲斐守
阿部遠江守

女子共抱置、宅ニ而賣女爲致候もの右賣女、又ハ隱賣女ニ紛敷稼いたし候者、宿幷手引致し候者、且家主、五人組、名主、其外御仕置段取之儀、私共申談、相當之階級、得と取調可申上旨被仰渡候、此儀當三月、端々料理茶屋幷茶屋等、町觸後、期月ニ至御觸ニ背、正業ニ不相改、有來候場所、且外場所ニ而も隱賣女同樣之稼いたし候ハヾ、本人共ハ、寛政五丑年被仰出候御書付之通申付、地主之儀ハ、地面永代被召上、家主ハ遠島、名主ハ重過料之上、役儀取放と相伺、其通被仰渡候處、右ハ深川永代寺門前を始端々隱賣女屋共、御觸期日後ニ至正業ニ不相改、又ハ外場所ニ而も是

迄之賣女屋共同樣、賣女を抱置、右同樣之渡世致し候者之御仕置當を申上候儀ニ而、親兄弟等困窮致し暮方難成故を以、妾奉公囲妾等、目見抔之名目ニ而、奉公人口入渡世之もの方ニ而、客ニ身を任せ、又ハ客と相對之上、宅又ハ中宿等ニ而、密々身賣同樣之稼いたし、幷料理屋、茶屋召仕女等、祝儀貰受、客と席上之密通いたし候類、總而賣女ニ紛敷所行ニ有之候得共、全ク隱賣女屋にハ難引當候處、當十月、音羽町七町目、專右衛門店庄藏妻たけ儀、隱賣女同樣之稼いたし候、一件左衛門尉方ニ而、吟味之上御仕置伺候處、伺之通被仰付候得共、猶又改而勘辨仕候處、是迄端々ニ有來候賣女屋同樣居宅等手廣ニ補理、高給を以、人別外之女子共大勢抱置、價を定、大業ニ賣女渡世致し候類ハ、町役人共おゐて、不存筋ハ素無之、畢竟過分之役給𪜈取候助成ニ泥ミ、其儘差置候儀ニ付、右等之類ハ、今般御改正之所置ニ至候而ハ、何樣之嚴科被仰付候共、少も御宥恕可有之筋ハ無御座候得共、前書隱賣女ニ紛敷所業之ものハ、町役人ハ勿論、近隣之もの目を忍び極隱密ニ致し成候儀ニ付、度々及び候上ハ格別、纔一兩度位、右所業及び候共、心付不申段ハ、實ニ無餘儀場合も有之、殊家主どもハ、夫々之渡世も有之、町用幷公事出入ニ付、諸奉行所江附添出、又ハ時々自身番屋江相詰候虛隙も有之、別而名主共之儀ハ御改革筋、物價引下等之御用辨、組之もの、捕もの等ニ付、申付候筋、又ハ風聞承糺等、晝夜寸暇も無之勤方ニ有之候處、支配内之もの、纔壹兩度不屆之所行及候落度ニより、役儀取放ニ相成候而ハ、何程外勤筋出精致し、身分嚴重相愼候而も、右一事ニ而、年來之勤功も空敷相成、且ハ何程御用立候ものニ而も、右廉を以相宥候筋ニハ難相成候間、万一追々右體之もの、役儀取放ニ相成、不馴之もの而已ニ罷成候而ハ、自然御用辨ニ相拘候儀も可有之、併是迄端々所々ニ、賣女屋共、數多有之候砌も、賣女ニ紛敷所業及候もの不絕候處、不殘引拂被仰付候儀𪜈ニ付、何れニも嚴法相立不申候而ハ、御取締ハ相立申間敷と奉存候間、以後御仕置段取、評議仕候階級、左之通ニ御座候、

△一御觸以前、端々賣女屋共同樣之受狀取、高給を以、女子共多人數抱置、宅ニテ賣女爲致候もの、右三笠附點者金元、博奕打筒取之御定江引付遠島、○評議書略

△印ハ御附札

△此通可被心得候

一賣女

△右者多分親夫之爲ニ右奉公ニ出候もの之儀ニ付、強而不屆とも難申候間、御定之通、三ヶ年之內、新吉原町江爲取遣ス、

再犯ハ、年季無限、同所江とらせ遣ス、○評議書略

△此通たるべく候、尤再犯之節、何ヶ度ニ而も、三ヶ年之間、吉原町江爲取可遣候、

一請人人主

△右隱賣女抱主御仕置段取ニ見合、一等輕く、中追放、○評議書略

△身上不殘建家共取上、江戶拂可申付候、

一家主

△右當三月伺濟之通、遠島、○評議書略

△中追放可申付候

一五人組

△右家主より一等輕く、中追放、

△江戸十里四方追放可申付候

一名主

△右五人組より一等輕く、江戸拾里四方追放、○評議書略

△所拂可申付候

一地主

△右當三月中伺濟之通、他所住居之無差別、永代地面取上、○評議書略

△此通可申付候

一賣女ニ紛敷所業之もの

△右前書隱賣女と無差別、三ヶ年之內、新吉原町江とらせ遣ス、
再犯者、五ヶ年、同所江とらせ遣ス、○評議書略

△此通可申付候、尤再犯之節、何ヶ度ニ而も、三ヶ年之間、新吉原町江爲取可遣候、

一宿いたし候もの

△右利欲ニ泥ミ、嚴重之町觸を背候廉を以、敲之上所拂、

一手引いたし候もの

右宿いたし候ものより品輕く候ニ付、敲、

但三度以上、廻筒ニ而、博弈いたし候もの、中追放と有之御定度數ニ准じ、宿いたし、又ハ手

引いたし候儀、度數三度ニ及び候ハヽ、右宿いたし候ものハ、寛政五丑年之御書付、隱賣女抱主再犯之御ヶ條ニ見合、建家等有之ものハ、身上不殘、建家とも取上、江戸拂、建家等無之身薄之もの等ハ、身上取上ニ而ハ、却而御仕置之詮薄く候間、敲之上江戸拂、手引いたし候ものハ、敲之上所拂、

再犯ハ一等重可申付候、〇評議書略

△

宿致し候もの、身上不殘、建家共取上所拂、手引いたし候もの、五十日手鎖可申付候、

但度數ニ不拘、本文之通申付、再犯之節ハ、一等宛重可申付候、

△一他江罷越、賣女ニ紛敷所業爲及候、親兄弟、

右隱賣女受人人主ニ准じ候ものニ而、貧窮ニ迫候とハ乍申、利欲ニ泥ミ、嚴重之町觸を背候廉を以、敲之上所拂、

但度數三度以上ニ及び候はヽ、前書再犯之御ヶ條ニ見合、身上不殘、建家共取上、江戸拂可申付處、前書同樣之趣意ニ付、敲之上江戸拂、〇評議書略

△

身上不殘、建家共取上、所拂可申付候、

但三度以上以下之無差別、本文之通申付、再犯之節ハ、一等重く可申付候、

一家主

△右寛政五丑年之御書付、再犯之御ヶ條ニ見合、身上ニ應じ過料之上、家主役取放、

但度數三度以上ニ及候ハヽ、當十月、左衛門尉掛ニ而伺之上御仕置申付候、音羽町七町目、家主專右衛門例ニ見合、中追放、

伺之通、身上ニ應じ過料之上、家主取放可申付候、

△ 但度數ニ不拘、本文之通可申付、再犯之節ハ、一等重ク家財取上申付、

一家主ニ而宿致し候ものハ、身上不殘、建家共取上、江戸拂、手引いたし候もの、同斷所拂可申付候、○評議書略

一五人組

△右家主よりハ格別品輕、過料五貫文、

但三度以上ニ及び候ハヾ、家主役取放、○評議書略

伺之通、過料五貫文可申付候、

△ 但度數ニ不拘、本文之通申付、再犯之節ハ、家主取放可申付候、

一名主

△右前條ニ申上候通、家主とハ違ひ、支配も多く、且掛隔候場所支配いたし候ものも有之、格別御用多相勤候ものゝ儀ニ付、全く之落度ニ而、不心付段無相違ニおゐてハ、三笠附、博弈打、取退無盡宿之名主、過料五貫文と有之御定ニ見合、御改革之御趣意、申付方等閑之廉を以、過料拾貫文、

但度數三度以上ニ及び候ハヾ、前書御書付、再犯之御ヶ條之通、名主役取放、○評議書略

伺之通、過料拾貫文可申付候、

△ 但度數ニ不拘、本文之通申付、再犯之節ハ、名主役取放可申付候、

一地主

右前書御書付、再犯之御ヶ條ニ見合、拾ヶ年之內、地面取上、

但他所住所ニ候ハヽ、五ヶ年取上、

△一前書度數、三度及以上ニ候ハヽ、永代地面取上、他所住居ニ候ハヽ、拾ヶ年取上、

一再犯ニ候ハヽ、他所住居之無差別、永代地面取上、○評議書略

△

他所住所之無差別、五ヶ年之內、地面取上可申付候、

但度數ニ不拘、本文之通可申付、再犯之節も、何ヶ度ニ而も同樣可申付候、

一隱賣女有之趣、訴出候名主五人組、

△右三笠附、博弈打、取退無盡、御定之名主五人組ニ見合、當人幷家主之御仕置申付、地主地面取上不及、急度叱り、五人組名主不及咎、○評議書略

△

伺之通可申付候

右之通、夫々階級相立、嚴重ニ遂吟味、逸々不移時日、急速ニ御仕置等申付、且三笠附、博弈宿訴出候もの、御褒美可被下御定ニ基、以來女子共

△抱置、賣女爲致候もの有之を訴出候ハヽ、縱令同類たりとも其科を被免、御褒美銀貳拾枚、但女子共呼寄、隱賣女ニ紛敷稼爲致候もの訴出、其手筋ニ右之もの捕候ハヽ、金五兩、又ハ三兩、御褒美可被下段、市中江觸示候ハヽ、御取締ニも宜、一統安心仕可然哉ニ奉存候、

△

伺之通極置、兼而市中江も觸示置可申候、

此儀三笠附點者、同金元幷宿、博弈打筒取幷宿、取退無盡頭取宿、訴出候類とハ譯違可申候間

前書名主、五人組評議ニ申上候御書付ニ見合、縦令同類たりとも其科を被免候迄ニ而、別ニ御褒美之御沙汰ニハ不被及方可然哉ニ奉存候、

寅十二月

〔德川禁令考後聚二十一行刑條例〕弘化三年御渡 隱賣女御仕置之儀ニ付、再應御書取之趣、評議幷御仕置復古之事、

去月八日、再應評議いたし可申上旨被仰聞候、隱賣女御仕置等、先達而評議いたし申上候內、御書取之廉々、猶得と評議仕候趣、左之通御座候、

一隱賣女御仕置之儀ハ、向後都而寬政之度御達之趣ニ復候方、相當ニ可有之候、左候ハヾ先達而、跡部能登守町奉行之節相伺候、深川海邊大工町裏町、喜太郎女房たい一件、幷赤坂新町三町目、勘五郎養女とみ一件、御仕置之儀も、當人共幷右所業ニ爲及候者ハ、素々不埒之者ニ付、評議之通御仕置當不弛方可然哉ニ候得共、家主地主等ハ、全心附方不行屆迄ニ而、出格之咎申付候ハ、今更ニ至、相當も致間敷、殊ニ追々時日を移候儀ニ付、此節御仕置申付候上ハ、矢張總體寬政度之趣ニ調直候上、申付候方ニハ有之間敷哉之旨被仰聞候、

此儀隱賣女之儀ハ、一體御嚴禁ニ而、前々度々御觸之趣御座候處、兎角相止不申候故を以、去ル寅年、一ト際嚴格之被仰出有之、既ニ深川永代寺門前を始、所々引拂被仰付、世上一統恐縮いたし候折柄をも不顧、右及所業候段ハ、實不恐公儀心底ニ而、重々不屆ニ有之、右家主地主等之儀も、一と通不行屆迄とハ難申、等閑之趣意ニ而、本人共ニ准候心得方ニ付、先達而評議いたし申上候通、御仕置被仰付可然ものニ候得共、御沙汰之趣も御座候間、猶勘考仕候處、追追時日も押移、且一體之御取締行屆、以後寬政度之御仕置ニ可被爲復程之御時節ニ至候上ハ、出格之御仕置ニ不被仰付候とも、敢而後弊相成候儀も有之間敷候間、前書たい外一件之儀、右寬政度御書付之趣を以、御仕置被仰付候而も可然哉ニ奉存候、

十月十九日

阿部伊勢守殿御直遠山左衛門尉江御渡、

町奉行江

隱賣女御仕置之儀、去ル卯年、一過懲惡之爲、夫々嚴酷之御仕置申付候積相達候處、向後都而寛政五丑年、相達候趣ニ申付候樣可被致候事、

> 御書面之通町奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、
> 午十月十九日
> 寺社奉行
> 御勘定奉行

寺社奉行

御勘定奉行江

隱賣女御仕置之儀、去ル卯年、一過懲惡之爲、夫々嚴酷之御仕置申付候積相達候處、向後都而寛政五丑年、相達候趣ニ申付候樣、町奉行江相達候間、可被得其意候事、

> 御書面之通、被仰聞、承知仕候、
> 午十月十九日
> 評定所一座

〔德川禁令考後聚二十一行刑條例〕隱賣女御仕置一件 文久二戌年

戌正月十八日

大和守殿御直因幡守備中守江御渡

町奉行江

覺

隱賣女ニ紛敷及所業候もの、幷右ニ引合候もの共御咎當之儀、御定先例ニ見合取調候趣、的當にハ可有之候得共、一體隱賣女、踊子共、三ヶ年之內、新吉原町江とらせ遣と有之御定ハ、全ク隱

賣女之儀ニ可有之、今般及吟味候もの共ハ、何れも隱賣女ニ紛敷所業いたし候者共ニ而、例も有之候儀ニハ候得共、今般御下向御入輿無御滯被爲濟、近々御婚禮も可被爲整、稀成恐悅之御時節ニ付、此度限、何れも先例より御咎當一等輕く相成、以後改正、正路之渡世も出來候樣ニ吟味詰、猶其上如何之及所業候ハヽ、同罪再犯之類ニ付、重而ハ急度御咎被仰付候積、强而先例ニ而已不泥、時勢ニ應じ、活用之取計ニ相成候而ハ如何可有之哉、左候ハヽ引合之もの共も、同樣御咎當一等輕く不相成候而ハ不都合ニ付、右之趣厚く勘辨致し、今一應取調可被申聞候事、

右同斷
町奉行江　可咄趣

吉原町江爲取遣候部類ハ、五十日手鎖と見据、其餘ハ右ニ准じ取調可申、一體本人よりハ宿致し候もの、或ハ手引いたし候もの、名主、家主、五人組等之方、却而不埒ニ付、前文之見御ニ而ハ、輕過候處ニ可至ニ付、右之釣合よりハ重キ方江付、取調之事、

戌二月十日
大和守殿江御直立合上ル

隱賣女ニ紛敷及所業候一件御咎之儀、再應勘辨仕候趣申上候書付、

書面宿致し候もの、過料之上、五十日手鎖申付候積相心得、其外書面之趣を以、御告可申付旨被仰渡奉承知候、

二月十五日

石谷因幡守
黑川備中守

隱賣女ニ紛敷所業、（注略）今一應取調可申上旨、御書取を以被仰渡候、此儀御書取之趣を以、再應勘辨仕候處、今般稀成御祝儀ニも被爲在候御時節、且ハ全之隱賣女ニも無御座、元來右類之所業、時勢ニ應じ、寬急之御沙汰御座候ハ御尤之儀ニ付、此度限、夫々被宥候ハ、則活用之御所置ニ候得共、都而一等を被宥候而ハ、宿又ハ手引等ニ至り、自然取締ニも

拘り可申哉ニ付、新吉原町江爲取可遣と見込候部類ハ、五十日手鎖と据、其餘之もの共ハ、一等又ハ一段輕く、此上見下し方無之分ハ据置、箇條を立候趣、左之通御座候、

一隱賣女ニ紛敷及所業候女子共、大人幼年之無差別、
新吉原町江爲取可遣處　五十日手鎖
身上ニ應じ過料之上、百日手鎖之處、身上ニ應じ過料之上　三十日手鎖

一右所業爲致候もの　百日手鎖之處　三十日手鎖

一同無身上之類　身上ニ應じ過料之上三十日手鎖押込之處　三十日手鎖押込

一同半身不隨等之類　五十日押込之處　三十日押込

一同夫倶々取計候類　過料三貫文之處　急度叱り

一同不存罷在候親共等　所拂之處　五十日手鎖

一同宿致し候もの　過料三貫文之處　急度叱り

一船中ニ而右所業および候を不存罷在候水主、　急度叱り之處　叱り

一右船宿　百日押込逼塞過料十貫文之處　五十日押込逼塞　過料五貫文

一地面內おゐて右及所業候を不存罷在候居付地主、　五十日押込　過料五貫文

見下し方無之据置候分

一右手引致し候もの　家主役取放　過料五貫文

一母妻等手引致し候を不存罷在候もの、　急度叱り

一隱賣女ニ紛敷及所業候女子共之內、親共半身不隨等之類、　三十日押込

一夫留守中、如何之儀と乍心附宅貸遣し候もの、　三十日押込

一右夫　急度叱り

一店子之もの於宅右及所業候を不存罷在候家主、　過料三貫文

一同他所住居之地主　叱り
一囲妾相成候節、名住所も不突留、受狀も不取極もの、　三十日手鎖
一同不束之請狀致し候類　急度叱り
一右親共等　急度叱り
右勘辨仕候趣、書面之通御座候、依之被成御渡候御書取、并書類返上仕、此段申上候、以上、
戌正月　石谷因幡守
黒川備中守

覺

戌二月十五日
大和守殿御直御渡

宿致し候もの、過料之上、五十日手鎖申付候積相心得、其外書面之趣を以、御咎可被申付候事、

〔御仕置裁許帳六〕遊女を抱置者之類、并自己に遊女仕者之類、附遊女を盗出す者、
天和二年戌十月三日
壹人八兵衛　是ハ本所袋町太郎兵衛店てつへん長助召仕、此者主人抱之はつと申遊女、并同所柳原六町目、家主名ハ不知、權右衛門抱之はなと申遊女兩人を預ケ、船ニ乘せ候て、小網町貳町目河岸江上り候を、前髪八郎兵衛、出來星三之丞、大腹太兵衛三人ニ而見出シ、捕へ來ル付籠舍、
右之者、日本橋ニ三日晒、同戌十二月十三日、於品川獄門、
十月四日
壹人てつへん長助　是ハ本所袋町、太郎兵衛店之者、此者はつ、よしと申女を抱置、船ニ而遊女爲致候付、はつを捕出來星三之丞、伊勢參り八郎兵衛、大腹太兵衛召連訴人申ニ付、今日評定所江召寄、穿鑿之內籠舍、

右之者日本橋ニ三日晒、同戊十二月十三日、於品川礫、

〔御仕置例類集 七〕寛政四子年御渡

京都町奉行菅沼下野守伺

一當時無宿佐藤斧八、盗いたし候一件、

七條新地下三之宮町越前屋吉兵衞借屋丹波屋　嘉兵衞

右之もの儀、遊女商賣之儀、一場所ニ貳拾軒之外難相成候處、餘商賣いたし候身分ニ而、右商賣人加賀屋平助江相對を以、同人方遊女きん預り置、度々遊女宿いたし、又ハ大和屋吉兵衞方江きん差遣、遊女働爲致候儀共、不埒ニ付所拂、

此儀一件之内、大和屋吉兵衞ニ見合、此ものハ外不埒も無之、遊女商賣人加賀屋平助江相對いたし、遊女を預り、宿致し、又ハ外江も差遣候不埒迄ニ付、五十日手鎖、

朱書
評議之通濟

同所家持遊女商買人升屋　幸之助

右之もの儀、遊女商賣差免候節、同商賣人之外江ハ遊女共、決而差遣間敷旨申渡置候處、普請中、居宅間狹ニ候迚、同商賣人ニ而も無之、大和屋吉兵衞宅を借受、契情町ゟ割渡ニ相成候、そのつる度度差遣、遊女働爲致候儀共不埒ニ付、そのつる儀、契情町江差戻、身上ニ應じ過料之上、百日手鎖、所江預、隔日封印改、

此儀同商買人之外江ハ、遊女遣間敷旨申渡置候處、普請中居宅間狹ニ候迚、吉兵衞宅を借受、遊女そのつるを遣し置、客爲取、右申渡も有之處、餘商賣いたし候、吉兵衞方江遊女差遣し候不埒ニ而、一體差免置遊女ニ候得バ、隱賣女商賣いたし候よりハ、品輕く可有御座候間、隱賣女いたし候もの之御定より輕く、そのつるハ、契情町江差戻し、百日手鎖、

朱書
評議之通濟

〔徳川禁令考後聚二十一行刑條例〕天保十三寅年御渡 町奉行遠山左衛門尉伺

一音羽町七町目庄藏女房たけ、隱賣女いたし候一件、

音羽町七町目専右衛門店たけ夫　庄藏

右之もの儀、隱賣女ハ、前々御制禁、殊當三月中、嚴重之御觸有之、役人共より精々申付、相辨罷在候得共、及困窮候迚、妻たけ相對之上、此もの儀ハ、日雇ニ出候跡ニ而、名住所も不存ものより金錢貰受、身賣稼為致候始末不届ニ付、身上不殘取上、江戸拂、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、女房たけを吉藏方ニ而、賣女、奉公ニ差遣置候處、同人渡世替いたし候ニ付、引取置候得共、及困窮候迚、御觸之趣をも乍辨、猶又宅おゐて隱賣女為致候と有之、且遠山左衛門尉御答書之趣ニ而も、此もの長病ニ而も相煩ひ、可及飢渇仕宜ニ至、夫婦相談之上、他ニ而身賣同樣之稼いたし候儀ニ候ハヽ、乍不届も困窮之場合も可有之候得共、其節相煩候儀も無之、全夫婦とも欲情ニ迷、嚴重之觸を背賣女稼いたし候由ニ付、右者如何ニも人情ニ有之間敷所業、殊ニ聊も御改革之御趣意不取用ものニ有之、一體隱賣女之儀、從來御制禁ハ勿論之處、深川永代寺門前、音羽町、其外とも、連々及超過、何分難差置場合より、右之類、悉商賣替等被仰出候得共、別ニ御咎等無之段ハ、畢竟寛大之御所置、斯迄厚御沙汰之上ハ、格別恐愼可致儀之處、右體即今之觸申渡を背候次第、以後之御取締ニも可相拘儀ニ付、如斯之類、忽せ之御仕置ニ而ハ、追々違犯之もの出來、時勢寛急之御趣意にも相當いたす間敷、然ル處、當三月中、隱賣女いたし候もの之家主等御仕置當之儀ニ付、町奉行伺濟之趣ニ而ハ、家主ハ遠島、名主ハ重過料之上、役儀取上と有之、右者則一時嚴重之御仕置ニ而、尤可然哉ニ候得共、家主名主ハ素より引合之儀、既三笠附、取退無盡、博弈宿等之御定も、本人ハ遠島、右引合之家主ハ、身上ニ應じ過料之上、百日

手鎖、其外段階有ㇾ之、隱賣女之儀ニ付、寛政五丑年御書付之趣ニ而も、賣女抱主と家主等ハ、是又輕重格別之差別有ㇾ之候間、何れニも本人之御仕置當より見おろし、夫々階級相立可ㇾ然筋ニ付、一過懲惡之御趣意を以之儀ニ候ハヽ、前書町奉行より申上候、弟附と唱候、賭事之會主いたし候もの、幷町火消人足共及ㇾ增長ㇾ候節、遠島申付候例有ㇾ之、其節之儀も、全一時之取計を以右御仕置ニ相成候もの有ㇾ之候、以來取締付候由ニ候上ハ、右ニ基、元來此もの本人之儀、此度限遠島、

(朱書)懸り伺之通濟

〔嘉永明治年間錄十一〕文久元年九月廿四日、隱賣女九十人入獄巷說、

去月廿八日頃より、追々兩國邊、並淺草八町堀、今春新道最寄、隱し賣女に紛敷き及ㇾ所ㇾ業候女子共九十七人程、兩町奉行組の者、吟味の上入牢に成候由、

〔御定書百箇條〕男女申合相果候もの之事

(享保七年極)
一不義にて相對死いたし候もの　死骸取捨、爲ㇾ弔申間敷候、

但一方存命に候はヾ、下手人、

(同)
一雙方存命に候はヾ　三日晒　非人手下

(同)
一主人と下女と相對死いたし、仕損、主人存命に候はゞ、　非人手下

〔牧民金鑑二十〕享保八卯年三月

覺

男女申合、相果候もの之儀、自今死骸ハ取捨、一方存命ニ候はヾ、下手人申付、尤死骸弔候事、停止可ㇾ申付、且又双方存命ニ候はヾ、三日晒之上、非人手下可ㇾ申付事、

一總而此類繪草紙、幷歌舞妓狂言等ニ作候事、堅仕間敷、若相背候はヾ、急度可ㇾ申付事、

右之通被ㇾ仰出ㇾ候間、町中可ㇾ觸知者也、

卯三月

〔德川禁令考後聚二十二行刑條例〕相對死申合、兩人共相果、死骸取捨、幷片付方評議、寛政十二申年六月二日

一淺草御藏前片町、源兵衛店安兵衛召仕伊三郎儀、新吉原京町壹町目、半兵衛店文三郎方江折々罷越、同人抱遊女いくよを買揚遊候處、去月廿五日罷越、いくよを及切害候體ニ而、伊三郎儀も致自害、兩人共相果候旨、所より訴出候間、檢使之者差遣し爲見改候處、いくよは、左耳之下、横ニ壹寸五分程之突疵壹ヶ所、口之脇ニ同壹ヶ所疵付、疊之上ニ仰向ニ相成相果罷在、伊三郎ハ、腹ニ三ヶ所引疵有之、いくよ兩足之上江俯ニ相成、是又相果罷在、相對死申合候儀にも可有之哉ニ候得共、書置等も無之、全ク相對死いたし候儀とも難見極旨、檢使之者申聞候、右體之者、是迄死骸取捨ニ相成候も有之、區々ニ有之候、然ル處、明和九辰年六月、一座申合ニ而、御仕置相決、牢死溜死致候者死骸之事と有之ヶ條之内、下手人重追放以下ハ、取片付と有之候ニ見合候得バ、縱令相對死ニ無之、人を殺候ものにても、御仕置申付候以前相果候得バ、死骸片付ニ相成候上ハ、此度之いくよ、伊三郎儀ハ、卽座ニ相果候儀ニ付、御仕置不決儀ハ勿論之儀、一體相對死と難見極上ハ、猶更死骸取捨ニ可相成筋ニハ有之間敷候間、伊三郎、いくよ共、死骸片付申付、以來とも、此類ハ右之通取計可申と存候、依之及御相談候、

申六月

右小田切土佐守、評定所一座江評議之上相極、

〔類例秘錄二〕土屋紀伊守懸り 丑三月〇文政十年 野田松三郎出

一甲州東向村地內ニ而、成地新田惣左衛門養女きく、下山村喜助、弟幸助、相對死いたし候一件吟味伺、

書面幸助きく、全相對死ニ無相違、外怪敷義も無之上ハ、死骸ハ取捨、爲弔申間敷旨申渡、脇差剃

刀ハ、忠左衛門へ渡遣し、一同證文取之可差出候、以上、

丑三月

當時脇差剃刀ハ、御拂ニ相成候間、此例不用、

〔新張紙留〕申渡

松平伊豫守小人
千代吉

數寄屋町醫師宗順娘
れい

其方共儀、密通之上、武州寺島村地内において、相對死仕損ル始末不屆ニ付、兩人共三日晒、非人手下申付ル、

右宗順代同人女房
まち

武州寺島村役人總代年寄
喜三郎

其方共儀、不埒之筋も不相聞間、無構、

右申渡ス趣、一同證文申付ル、

穢多彈左衛門代
文七

右之通申渡、千代吉外壹人、晒相濟候上、追而引渡遣、

但證文江與書申付ル

山田茂左衛門手代
木村森助
松平伊豫守家來
熊澤來次

右之通申渡間、得其意、森助ハ御代官、來次ハ主人江申聞べし、
申〇天保七年四月六日

〔歌俳百人撰〕吉原西田屋九重
さる屋敷に、乳母奉公せし女なりしが、主人のをさな子、他人の子に怪我させて、さきの子相果たりしを、みづから深くかたらふ男ありて、かゝる事をも知らでありし故、大岡公の捌にて、乳母ハ五ヶ年の間、吉原町江身をしづめさせ、をさな子は出家させて、乳母が身のしろ金にて見繼せしとなり、

〔東湖隨筆上〕永山十兵衛口、奸婬ノ刑ハ、天下皆死刑ナリ、佐賀ニテモ同ジ樣ナリ、サレドモ實ニ其科ニ處スルコト無之、刑ノミ嚴ニシテ不行、隣國ノ熊本ニテハ、堀平太左衛門以來、奸婬ノ刑ヲ引下ゲテ笞刑トセリ、法ヲ犯ス者アレバ、男女共ニ裸ニシ、下帶ノミニテ之ヲ笞ツ、但女子ハ大抵下帶ナキ由ヲ申立、繻半ノマヽニテ笞ヲ受ル法ナリ、法ハ遙ニ寛ナレドモ、却テ死罪ノ法ヲ立オク國々ヨリモ奸婬少シト云、

明治三十五年十月十日印刷
明治三十五年十月十五日發行



神宮司廳

（白石製本所　製本）

昭和八年六月一日印刷
昭和八年六月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
三二六九番

單式印刷株式會社印刷


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03058 7844